
デビルバスター日記

黒雨みつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デビルバスター日記

【Nコード】

N4042W

【作者名】

黒雨みつき

【あらすじ】

【デビルバスター】とは“魔”を退治できる力を有していると認定された人々の総称であり、半月に及ぶ選抜試験に通ったものだけが名乗ることを許される“傭兵”の上級職である。……これは少々頼りない性格の上、『女性アレルギー』という特異体質を持つ青年がデビルバスターを目指して奮闘する長編王道ファンタジーです。

※個人サイトとの重複投稿になります。

プロローグ

——大陸。

ここに住む者は、自分たちのいるこの大地に特別な名前をつけることもなく、ただ“大陸”と呼ぶ。だが、他の大陸とどうやって区別をつけるのか、などという心配は、ここに住む者たちにとっては意味のないものだった。

何故ならば、彼らにとっての大陸とは、自分たちが住む場所以外に存在しない……いや、存在していたとしても、それを彼らが目にすることはないから。

絶対領海——“シルベスク”

大陸人は、大陸の外側を囲む海のことをそう呼ぶ。

シルベスクとは大陸に言い伝えられる神話上の生き物で、自分の領域に進入した船を片っ端から呑み込んでいく海の怪物だ。……その名を冠した海は常に大嵐にさらされている領域であり、その海はまるで神話上の怪物さながらに大陸から離れようとする船を呑み込んでしまうのである。

この嵐の領域を抜けた者は——正確には、抜けて戻ってきた者は——未だどこにも存在していなかった。

そのため、大陸人にとっては、この大陸が世界の全て。だから当然“大陸”といえば、彼らの住むこの大地のことを指すわけである。さて、その大陸には数十にも及ぶ大小様々な都市国家が乱立している。過去には数百という数の勢力が存在していたこともあり、そのためこの大地は古くから争いの絶えない場所であった。

だが、約三百年ほど前、国家間の争いを禁じた“ヴォルテスト条約”に、大陸の約八割ほどの国が同意してからは、この大陸は平穏そのものだ。国家間の往来は身分の証明さえ出来れば基本的に自由

であり、一般的な法律は統一され、その中で生じる都市国家間の問題には、盟主である“帝都ヴォルテスト”が間に入って調停を行う。最初のうちは小さいざこざが絶えなかったものの、それでもここ百数十年、ちよつとした小競り合い程度のことはあるにせよ、少なくともこの同盟国間での大きな問題はほとんど発生していなかった。

——さて。

大陸のほぼ中央に位置する“帝都ヴォルテスト”から北に移動すると、帝都に負けずとも劣らぬ大規模な都市がある。

大陸でも有数の歴史を誇り、古くは“北の雄”とまで呼ばれた実力を持つ“学園都市ネービス”である。

ここはその“学園都市”の名が示すように、学問の都として栄えた都市だ。他国の重鎮の中にもこの街の学園出身という者が多く、まさに大陸における学問の中心地。また、街の治安の良さも大陸随一といっても過言ではなく、知識人から旅の商人までもが集まる交易都市。

そして物語はここ、ネービスで始まる——

「ウガアアアアアアッ！！！」

「ひいっ！！」

夕日に染まるネービスの街——その入り口から約一キロほど離れた街道。

その場所には、一台の馬車が止まっていた。

……いや、“止まっていた”という言い方はおかしいだろうか。

「たっ、助けて……っ」

その馬車を引いていたはずの馬はすでに動かぬ骸となって地面に

横たわり。その手綱を握っていた男は、たった今、地面に尻餅をついて上空を見上げている。

上空？

いいや、違う。

彼が見上げているのは上空ではなかった。

彼が見上げていたのは――

「ぼっ、化け物……！！」

そう。

化け物だ。

体長約四メートル。体重は……見た目で四百キロ以上はあるだろうか。

それほどの巨漢が、まさに男に襲いかからんとしていた。

――それは、日常茶飯事。

彼が言うところの化け物――“魔”と呼ばれる異世界の生き物たちに脅かされ、そして日に何人も人間が命を落としている、ここはそんな世界。

そして人々が化け物たちに抗う術は少ない。何故なら、彼らは普通の武器では容易に傷つけられないのだ。

ある化け物は体に触れる前に刃を溶かし。

ある化け物は外皮でそれを破壊してしまう。

そしてまた、ある化け物はあまりにも素早く、普通の人間では姿を追いつけることも難しい。

ほとんどの人々は無抵抗のまま彼らに殺されていった。あたかも、それが自然界の摂理であるかのように。

――だがもちろん、人間たちもただやられっぱなしだったわけではない。

特殊な資質を身に備え。

特殊な武器を手に携え。

特殊な知識を駆使して彼らを撃滅する者たちがいた。

「化け物——か」

「！」

突然、風に乗って届いた声は、この場にはそぐわない、あまりにも緊迫感のないものだった。

自然では考えられないような、異質な力によって空気が歪む。

直後——化け物の動きが止まった。

「正確には違うな。こいつは」

毛皮に包まれた胸の辺りがモゾモゾと動いた。

——いや。

「ひいっ！——！」

まるで破裂するように、化け物の胴体が弾けた。

どす黒い血飛沫が辺りに飛び散る。

「こいつは地の四十八族。人に似た姿を取ってるわりにオツムの弱い、体だけ異様に丈夫な、いわゆる筋肉バカってヤツさ」

オレンジ色の夕日を反射したのは二本の剣。半楕円型という奇妙な形、刀身に奇妙な文様の描かれた二本の刃。

生々しい音を伴って、化け物の体が真っ二つに裂ける。

「っ……っ……！！！」

屍餅をついた男は驚きに声が出ず、ただ黙って、化け物の大量の血を浴びるだけだった。

「……ふん」

二つに分かれた化け物の体が地面に落ちる。いくら化け物とはいえ、その状態ではもはや動くはずもなく——

「被害が出る前で良かった、というところか」

血に汚れた半楕円型の剣を拭い、化け物の背後から姿を現したのは、額に灰色の布を巻き付けた眼光鋭い一人の青年。

そしてその背後には、さらに三人の人物がいた。

「ええ。間一髪でしたねえ」

黒縁眼鏡の中心に中指を添えた、目の細い学者風の男性。

「ふん……」

面白くもなさそうにただ鼻を鳴らすだけの、ずんぐりした体軀で無愛想な三十過ぎの男。

「ちえっ。隊長、今回は俺に任せてくれるって言ったじゃないっすかあ」

そしておそらくは十代半ば、まだあどけない色を残した不満顔の少年。

「あ、あ……」

そこまで来て、尻餅をついた男はようやく悟ることができた。自分が助かったこと。

そして――

「あんたたちは……」

自分を助けてくれた、化け物をいとも容易く葬ったこの青年の正体を。

「デビル、バスター――」

男がそう呟くのと、青年が薄い笑みを浮かべて背を向けるのはほぼ同時だった。

魔を狩る者――デビルバスター。

これは、その称号を受けた者たちによる、熾烈な戦いの記録である――

その1『ティーサイトⅡアマルナ』

学園都市ネービス。そこは盟主ヴォルテストに次ぐ大陸第二の都市との呼び声も高い、学問と交易の街。

この街の構成は非常にわかりやすくなっている。北高南低とも言おうか。

中央には一本の大きな通りが走り。

その最北端に領主である“ネービス公の屋敷”

その周辺には貴族たちの屋敷がある“高級住宅街”

少し南に下ると、そこにはこのネービスの象徴ともいえる“学園群”

そこをもう少し南に下ると、今度は普通の市民が住む“一般住宅街”

という構成だ。

あとはその周囲、街外れともいべき場所に一種のスラム街のようなものもあるが、他の街に比べずっと規模が小さい。それは、この街がそれだけ裕福であるということの証明でもあるが――さて、春の麗らかな陽気。

たくさんの人が訪れ、たくさんの人が交流する、ここネービスの昼下がり。活気に溢れ、威勢の良いかけ声や元気な子供たちの声が響き渡る中央大通り。まるでお祭りのような賑わいのそこから……ほんのちよつとだけ、静かな路地裏の方に視線を移してみることにしよう。

あれだけ騒がしかった街の喧噪が微かに遠くなり。同じだけ降り注ぐはずの太陽の光も心なしか遠慮しているような、そんな路地裏。

「フウーッ!!」

「おー、よしよし。いい子だから大人しくしててくれよー……」
そこに二つの影があった。

もっと正確に言くと、一人と一匹の影。

——もう少しじっくり観察してみることにしよう。

片方は白と黒の斑模様の服……ではなく、毛皮に身を包んだ、まん丸の目とちょっと長い尻尾と鋭い牙を持つ獣。それは俗に“ネコ”と呼ばれる、愛玩動物として飼われることもある類の獣だった。

黙っていればなかなか愛らしいのだが、残念なことに彼（彼女？）は現在ご機嫌斜めのように、毛を一杯に逆立て、まるで威嚇するようにツメとキバを剥き出しにしている。

「そーっと、そーっと……」

そしてもう片方。完全に敵視モードのネコに対して手を伸ばすという“無謀”としか思えない行為に及んでいる男。

いや、少年。

……いや、男か。

その人物は何とも年齢の断言し難い外見をしていた。

——さらに細かく見ていくことにしよう。

まずは特に描写する必要も感じない“ごく普通”で“ごく平凡”な服装。センスの善し悪しを五段階で評価するならギリギリ及第点の二といったところか。背は相当高く、成人男性の平均を十センチ以上は上回っていた……が、若干猫背気味で体型はひよろつとしており、上背の割に威圧感というものを感じない。

髪は中途半端な長さでそこそこキレイに整えられてはいた。

——と、まあ、とりあえずここまでの説明だと、中身はどうであれとりあえず成人した男性を思い浮かべるかもしれない。

が、視点を彼の顔面に向けたとき、再び首を傾げざるを得ないだろう。

まず最初に断っておくが、そこに乗っかっている顔は特別ハンサムではない。優しそうな目が多少の好印象を与えるかもしれないが、それ以外はごく平凡——決して悪いという意味ではない——であり、少なくとも婦女子がキャーキャー騒ぐような容姿ではなかった。

ただ……そう。

一言で済ますならば“童顔”だったのである。

「そーつと、そーつと……」

と、説明している間に、彼の手がネコの警戒領域までに迫っているようだ。

ひとまずはこの成り行きを見守ることにしよう。

とはいえ——結末はそれなりに想像がつくであろうが——

「ふにゃああああああつ！！！！！」

「……ぎゃああああああつ！！！！！」

——合掌。

「はい、こちらがお探しの子猫です……」
数分後。

先ほどの彼の姿は、とある一軒家の玄関先にあった。

「あー！ ベテルギウスっ！！」

「にゃあああ……」

とりあえず休戦協定でも結んだのか、彼の腕に抱かれていた先ほどのネコは、幼い少女の声とともにそこから飛び下り、家の中へと入っていく。

状況から察するに、ベテルギウスという——奇妙な——名前のネコは、この家の飼い猫であつたらしい。

そして、

「あらあら、すいませんねえ」

その場にはもう一人、どうやら少女の母親らしき人物がいた。

「大変でしたでしょう？ あの子、家族以外には懐かないものだから……」

「あ、いえ。ははは、それほどでも……」

照れたように頭を掻く彼の顔は、誤魔化しようもないほどのひっかき傷で一杯だ。母親の方もそれは承知しているようだったが、そ

ここには敢えて突っ込まなかった。

「それじゃあ、これがお約束の報酬です。大した額ではないですけど」

「あ、いえ、そんなことは——あ、それと、また何かございましたら……」

「ええ。そのときはまたあなたにお願いしますね」

母親はニツコリと微笑んで頷いた。

「はい。よろしく願います」

嬉しそうにしながら大袈裟に頭を下げて……そして彼は再び街の中へと戻っていくのだった。

——さて。

彼の仕事もどうやら一段落ついたようなので、ここいらで正式に彼——このお話の主人公であるところの——ティースという人物について説明しておくでしょう。

“ティース”

たった今そう呼んだばかりだが、それは彼の本名ではなくペットネームだ。

正式な彼の名はティーサイト。ティーサイトⅡアマルナというのがフルネームであり、ティーサイトを略して“ティース”なのである。

年齢に関しては先ほど色々と説明したが、正確なところは一ヶ月ほど前に誕生日を迎えた十八歳。まあ、なんとも中途半端な年齢であるが、この世界の常識に当てはめるなら充分に大人であるといえるだろう。

つまり彼は、妙に背の高い少年などではなく、単に童顔な青年だというわけである。

「今月も不作だなあ」

さて、先ほどの家を出たティースは、未だにチクチクヒリヒリと痛む腕と顔面の傷を何度も撫でながら昼下がりの大通りを歩いていた。

手にしていたのは先ほどのお宅で入手した“お札”。そこにあったのは小さな銀色の硬貨が三枚。

「生活、ヤバいかもなあ……」

それがどのぐらいの価値かというと――十歳を越えた程度の子供が月にもらう小遣いと同じぐらい――といえば大体想像できるだろうか。飼い主の家を飛び出した子猫を探して街中を駆けずり回り、腕と顔にひっかき傷を作って……それに見合った報酬であるかどうかはまた微妙なところであった。

しかしまあ、彼がぼやいているのは今回の報酬が少ないということに対してではない。“迷子の子猫探し”なんて仕事までこなさなくては生活していけないという、仕事そのものが不作な状態を嘆いているのだ。

「傭兵つっても、俺みたいに知名度が低いとこんなもんだよなあ……」

傭兵。

それが彼の職業だ。

ここで頭に“？”マークが浮かんだなら、それはこの世界における知識が若干不足しているということなので、補足しておく必要があるだろう。

この世界でいうところの“傭兵”。それはわかりやすく言うと“何でも屋”のことである。依頼主との間で取り交わした契約に基づき、報酬と引き換えに様々な仕事をこなしていく者。

それがこの世界でいうところの傭兵。

彼のように、子供の小遣い程度の報酬をもらって迷子の子猫探しをするような者でも、それはこの世界でいう傭兵なのである。

……とはいえ。決して彼がそういう仕事しかできない人物だというわけではない。こう見えても彼は剣の腕にはそれなりに長けているし、警備とかそういう方面の仕事にだって適正があるのだ。

ただ――先ほど彼が自分でぼやいていたように――知名度の低い傭兵にはそれなりの小さな仕事しか入ってこないというだけの話。

気楽そうに見えて、これでなかなか競争の激しい業界なのだ。

「ふう……」

子猫の家を出てから何度目になるかわからないため息をついたティース。とりあえず傭兵専門の仕事斡旋所に顔を出し、当然のように空振った彼は、太陽が若干西に傾きかけていた頃、ようやく自宅に戻ってきていた。

ネービスの中域の大半を占める一般住宅街。

その中でも大通りから大きく離れ、比較的貧しい人々の住む閑散とした地域。そこにある若干みすばらしい、古ぼけた平屋。

そこが彼の家だ。

見た目からして貧しそうだが、実際に貧しいのだから是非もない。そのドアに手を伸ばしかけて……ティースはふと思い出したようにふと呟いた。

「ああ……あいつ今日は休みだっけ。家にいるかな……」

彼には親はなく、兄弟もない。もちろん結婚もしていないため、家族なんてものは一人もいない。

ただ、このボロ家に一人暮らしなのかといえば、そういうわけでもなく……家族という言葉には決して当てはまらないが、一緒に暮らしている人物なら、一人だけ存在していた。

「ただいま——」

そして彼がくたびれた様子でドアの取っ手に手をかけようとした、そのとき。

ガチャ。

「え……?」

いつも以上にボーっとしていたティース。

そして内側から勢いよく開かれた“外開きの”ドア。

——訪れた結末は、周囲の期待を寸分たりとも裏切らなかった。

ガンッ!!

「ぶっ!!!」

「……あら?」

同時に聞こえたのは怪訝そうな声。

透き通るような――凜とした印象のその声は――顔を確認するまでもなく女性。それも、おそらくは彼よりも年下であろう少女のものだった。

「ててて……」

尻餅をついて鼻面を押さえるティース。

ドアはゆっくりと開き、そして中から声の印象に違わぬ一人の少女が姿を現した。

「ティース？」

その少女は長い髪を後ろでまとめた、いわゆるポニーテールと呼ばれる髪型であり、その髪は、まるで水飴で出来ているかのように透き通った綺麗なブロンドだ。背はそれほど高いわけではなく、女性としてはだいたい平均ぐらい。ただ、この先も成長するのであれば、若干平均を超えることになるだろう。

年齢は……どうだろうか。

ポニーテールという少々子供っぽい髪型からは“少女”という表現が似合う――おそらくは十三、四歳ぐらいであろうと予想できるが、ティースとは逆の意味で、彼女もまた、年齢を断言し難い容姿をしていた。

それは――そう。その、顔立ちだ。

それを一言で表現しようとするなら、文句なしに“美少女”という言葉がピッタリと当てはまるだろう。そしてさらに一言付け加えることが許されるとするなら、おそらくは“完璧な”としか表現のしようがない。

それはまるで凄腕の職人が、持てる技術の粋を集めて作り上げた芸術品のような、冷たさすら感じさせるほどのものだった。それが、おそらくは実際の年齢よりも彼女を大人びて見せている。

「ティース、お前……一体、なにをやってるの？」

凜とした少女の声。

口調も思った以上に大人びている……というより、少々高圧的な

色がある。その容姿の印象と合わせて、どうにも冷たい響きを持っているように聞こえてしまうのも仕方のないところか。

それに、彼女の言い様は客観的に見てもあんまりな物言いだった。「な、何をもって――」

状況を見れば、何がどうなって彼が地面に尻餅をついているのかなど、容易に想像できそうなもので。

「いきなりドアを開けるから、顔をぶつけちゃったんじゃないか……」

それを、身振り手振りを加えてわざわざ説明するティース。だが、

「そんなことを聞いてるんじゃないわ」

少女は当然のようにそう言うのと、呆れ顔で腰に手を当てた。

「どうしてドアの前でぼーっと突っ立ったのかを聞いているのよ」

「だ、だからそれは、ぼーっとしてたんじゃなくてドアを開けようとして――」

しかしまあ、彼が少々……いや、“かなり”ぼーっとしていたこともまた確かだ。強くは反論できない。

「あら」

少女は特に興味もなさそうに言って、

「もう少し周囲に気を付けた方がいいわね」

そのまま彼の横を素通りしていく。

「あ、あのなあ」

そんな彼女の態度に、当然のように彼は不満の声を上げた。

「そりゃ多少はぼーっとしてたかもしれないけど、少しは謝るとか――」

「――謝る？」

彼の言は特に常識を逸したものではなかったはずだが、少女は振り返った途端に形の良い眉をひそめた。

「私が？ お前に？ 何故？」

「……い、いや、いいよ」

そんな彼女の前では、ティースはあっさりと引き下がる以外の術を持っていなかった。……そういう関係だった。

「で、一体どこ行くんだ？」

気を取り直したようにそう尋ねるティース。

よく見ると、少女は外出用の服を着ているようだ。平々凡々なティースに比べ、彼女の服装はなかなか洗練されており、完璧な容姿と相まってかどこか高貴な——いやむしろ神秘的な印象さえ見る者に与えている。

「どこって」

少女は面白くもなさそうにティースを見ると、風で少々乱れた前髪を直しながら、

「決まってるわ。デートよ」

「……デート？」

ティースは怪訝そうに返したものの、特に珍しいわけではなく。特にここ一年ほど、彼女は恋人——ティースはまだ見たこともないのだが——とのデートによく出掛けている。

ただ、

「それはいいが……勉強の方は大丈夫なのか？ 最近遊んでばかりでちっとも——」

「……なに？」

彼が心配して言いかけたところへ、少し不機嫌そうな声が重なる。

「落第だっしてないし、ちゃんと進級してるじゃないの」

「そ、そりゃそうだけどさ……」

ティースが言い淀むと、彼女はさらに不機嫌になった。

髪を押さえていた右手がそのまま、ポニーテールの根元についた質素な髪飾りへと移動する。

「お前に言われなくてもやることはきちんとやってるわ。余計な口出しはしないで」

「そ、そんな言い方しなくたっていいじゃないか」

その剣幕に少ししたじろぎながらも、やっとの思いで反論するティ

ース。だが、少女は彼の言葉をまるで無視すると、不機嫌そうに鼻を鳴らして、

「とにかく。留守番は任せたわよ。あと、今日は少し遅くなるから」
「……。わかった」

情けないことに、彼はただ黙って頷くしかなく。

口喧嘩になったとしても勝てる見込みはなかったし……確かに彼女はきちんと進級している。最低限のことをこなしている以上、遊んでいるからといって——心配はするにしても——喧嘩をする理由にはならなかった。

「……」

そんな彼に少女はもう一度、眉をひそめた。右手はまだ髪飾りに添えられたまま。……それを弄るのは彼女の機嫌が悪いときのクセだった。

「他に言うことは？」

「ああ——行ってらっしゃい。気を付けて」

「ええ」

少女は一つ頷くと、透き通るようなブロンドのポニーテールを揺らして、その後は一度も振り返ることなく街の中へと消えていった。

「……やれやれ。シーラの奴、デートだなんて呑気なもんだよ」

先ほど手にした幾ばくかの硬貨を秘密の金庫——というより貯金箱に近い——にしまって、ゴロンと無人の部屋で横になったティース。

そして一人、愚痴の続きを漏らしていた。

「そろそろ貯金も心許なくなってきたなあ……」

外から想像できる通り、この家の中はそれほど広くない。リビングとキッチンが一緒になったこの部屋と、他には個室が一つあるのみ。

ここの住人はティースと先ほどの少女だけなので、決して手狭というわけではないが、夫婦ならざる彼らのこと、たった一つの部屋は少女に完全占拠されており、当然のごとく進入不可のお達しがでている。だから実質、彼にとつての空間はこのリビンググー—というには少々狭すぎる——この空間だけであり、プライバシーなんてあって無きような生活を強いられているわけなのだ。

……そうそう。話を先に進めるにおいては、一応先ほどの少女のことをもう少し説明しておいた方がいいだろうか。

ティースが先ほどこちよこつと口にしたように、彼女の名はシーラという。フルネームはシーラスノーフォール。このネービスでももっとも伝統のある学園、“サンタニア”の薬草学科に通う学徒である彼女は現在十四歳。いや、約一ヶ月後に誕生日を控えているのでほぼ十五歳と言ってもいいだろうか。

つまり彼女は、ティースより三歳と二ヶ月ほど年下の、多少大人びた外見を持つ、こちらは大人というにはまだ若干早い気のある少女だった。

さて……そうなるともう一つ疑問が出てくるかと思う。

つまり、ファミリーネームからも明らかのように、家族というわけでも夫婦というわけでもない彼らが、こうして一つ屋根の下で暮らしている“理由”だ。

が、それはここではひとまず置いておこう。

もちろん本来ならばきちんと説明すべきことなのかもしれない……が、今は“幼き頃からの浅からぬ因縁ゆえ”という程度で記憶の片隅に片付けておいてもらいたい。

とにかくそんな因縁故にティースは彼女と共に暮らしており、ついでに彼女の学費や生活費までその全てを稼ぎ出しているという、勤労青年なのである。

で、そんな彼女に対し、一方の彼女はといえば。

「昔は結構真面目に勉強してたのになあ……」

とまあ、そんなボヤキを聞けば大体想像はつくだろう。

彼女は現在、薬草学科の三回生になったばかり。ここまでは落第することもなく順調に来てはいる。が、話を聞くとところによると、いずれもギリギリでの進級らしい。

“らしい”というのは、ティース自身、彼女の学校での生活にはまるで関与していない——させてもらえない——からであり、結局は彼女の話を鵜呑みにするしかないというわけなのだ。

まあ、サンタニア学園というところは、本来なら帰宅してからも懸命に勉強するぐらいでなければまるでついていけない、そのぐらいハイレベルな学舎である。今日みたいに遊び回っている彼女のことを考えれば、進級できているだけで奇跡ともいえるだろう。

それに彼女には薬師としての天性の才能もあるのか、時折作る特製の風邪薬や強壮薬といったものが、そこら市販の薬よりずっと効果があったりすることをティースは身を以て知らされている。

そこから考えても学業について心配するようなことはないのかもしれない。

「……にしても、遅くなる、か」

ゴロンと寝返りを打ったティース。少しだけ心配そうな様子がその声色から見て取れる。

いくら遊び回っているとはいえ、彼女は夜遊びは全くしないタイプだった。だから、今日のように遅くなると断っていくことは珍しい、というかおそらくは初めてののこと。

「どれぐらい遅くなるのかな……晩飯はどうすんだろ」

呟いたところで答えが返ってくるはずもない。

デートなんだから食べてくると考えるのが普通だ。が、そう思っで用意しないでいると食べてこないで帰ってきたりして、結局は彼が怒られるのである。

聞かなかった彼を責めるべきか、あるいは断っていかない彼女を責めるべきか。

難しいところだ。

まあ……万人の意見がどうであれ、現実には彼が責められると決ま

っているのだが。

「ふう……」

そして、どことなく気怠い空気の中。意味もなく本日何度目かの寝返りを打つティース。うつらうつらとしているうちに、外はいつの間にか赤く染まりはじめていた。

と。

「……ん？」

突然、跳ね起きたティース。

「なんの——音だ？」

その眩きは、彼の耳が何らかの異音を捕らえたことを示していた。強めの風にガタガタ、ガタガタと揺れる窓。

夕暮れを告げるカラスの鳴き声。

未だ、遙か遠くで響き渡る大通りの喧噪。

——それとは違う、ごく近くで聞こえる異音。

「！」

それに気付いたティースはすぐに周囲を見渡した。

視線の止まった先は……毎日寝起きしているベッドの脇にある一振りの剣。

一応、護衛というような仕事も請け負うタイプの傭兵である彼は、外見に似合わず小さい頃からその道を嗜んでおり、そこそ腕に覚えがあった。だからこそ、自らの耳に届いた異音が何であるかもすぐに察したのだ。

（——金属音……！ 刃の擦り合う音だ……！）

剣を手に取り、素早く留め具を外していつでも引き抜ける状態にすると、ティースはすぐさま家を飛び出して行った。

外に出た途端、少々冷たさを増した強めの風が彼の体に吹きつける。

……異音の発生源はすぐ近く。

閑散とした辺りはこの時間になると人通りも少なく、しんと静まり返っている。

喧嘩か、あるいは事件か。

(どっちにしても……放っておくわけにはいかない!)

彼の思考が一瞬でその結論に達したのは、彼の人格に因るところが大きい。

一言で言うところの“お人好し”

彼はそういう人物だ。

それに——それがすぐ近くで起こっている以上、万が一にでも、彼の同居人である少女が巻き込まれていないとも言切れない。

彼が家を飛び出したのは、いわば必然のことだった。

(……近い……っ!!)

角を何度か曲がり、殺伐とした空気が近づいてくるのをティースは全身で感じていた。

左手を鞘に。右手を柄に添え、いつでも引き抜ける状態。

——そして。

(……!!)

そこに展開していた光景は予想に違わぬものだった。

夕日にきらめく刃の輝きが五つ。

大勢は……どうやら四対一。

全身に黒いフードをかぶった、いかにもな風体の人物が四人。

それと刃を合わせるのは、黒い髪を持つ細身の男。

「……やめろおっ!!」

彼の頭は瞬時に判断した。——数の多い方が悪! と。いや、たとえそれが間違っていたにしても一向に構わなかった。彼の目的はとにかく争いを止めさせることであり、そのためには劣勢にある方を助ける必要があったのだから。

「!」

争っていた五人はいずれも突然の闖入者に驚いた。

確かにここは住宅街であり、誰かが目撃していても全くおかしくはない。だが、ほとんどの住人は自分の身を守るために関与すまいとするはずだし、大半の人間にとってはそれが完璧に正しい判断。

それに、通報で憲兵が駆けつけるにしてもあまりに早すぎるタイミングだった。

「っ……危ない！ 君！ 逃げるんだっ！！」

叫んだのは、一人で四人を相手にしていた黒髪の男。

そして、それに反応したかのように、集団の方——四人のうちの一人がティースの方へと刃の切っ先を向けてくる。

彼が判断するまでもなく、戦うべき相手は定められてしまったようだった。

（くっ……！）

考える間もなくティースは抜刀した。

刃先が鞘を擦る。

手入れ以外では数ヶ月ぶりに日の光を浴びた彼の剣は、まるで水に濡れたかのような瑞々しい刀身を煌めかせ、空気を切り裂くような小気味よい音を立ててその姿を現した。

それは彼に似合わない——という可哀想だが、一目見るだけで名剣とわかるほどのものだった。

「さあ……来い！」

その場に足を止め、相手を迎え撃つ体勢を整える。
が、

「……えっ！？」

その直後の展開に、ティースはいきなり度肝を抜かれた。

「はっ、はや……っ！？」

まだ五メートル以上も先にいるはずの——常識から相手の速度を計算した上ではそのはずだった——敵が、早くも剣の届く範囲にまで迫っていたのだ。

「っ……！！」

ほとんど反射的に、両手で握った剣を相手の剣筋に合わせる。

キイイイン……………

「くうううう……っ！！！！」

久々に感じる衝撃。予想を遙かに超える剣圧がティースの両腕を

襲う。

続けて、二撃、三撃。

「っ……！　くそっ……！」

想像を遙かに超越した敵の動きに、ティースはアツという間に、身を守るのが精一杯の状況に追い込まれていた。

（こいつ……ハンパじゃなく強い……！）

背筋を冷たいものが走り抜けた。

と同時に、早くも後悔する。

——安っぽい正義感なんかで考えなしに飛び出して来るんじゃないのかった！　と。

もちろん冗談なんかではなく。

それは——紛れもなく、本当の殺し合いだった。

「くっ——！」

黒髪の男も三人を相手に見事に戦っていたが、ティースの方を気に掛けるほどの余裕はなさそうだった。

チッ……キインッ……！

刀身が擦れ合い、弾き合い……ティースの足は徐々に後方へ。

嫌な汗が止まらなかった。

恐怖が全身を駆け抜ける。

（——殺されるっ！）

相手の技量……というより、ズバ抜けた身体能力は、彼がこれまで剣を合わせてきた数少ない相手の誰よりも圧倒的に優れていた。

ここまでの強さは未だかつて一度も感じたことがない。

——いや。

ただ、一人を除いて。

「……！」

剣が大きく弾かれる。

敵の視界の中、ティースの胴体が全くのガラ空きとなった。

（っ……！）

思考が停止する。

と同時に、彼の体中は燃えるように熱くなった。
スローモーションのように。

敵の切っ先が胴体に迫る。

（斬られる——っ！！？）

そして。

脳裏の奥がチカチカとフラッシュバックした——

——それは勝利を確信していた。

相手は多少剣の腕に覚えがあるようだったが、所詮はただの人間。
敵うはずがない、と。

視界に大きく広がった、無防備な相手の胴体。そこに一撃を加え、
自分は早く向こうに加勢しなければならなかった。

向こうは三人がかり。おそらくそれでも楽にはいかないはずだった。
た。

あいつを早く始末して。そしてその後ろで守られている——彼女
を殺さなければ、彼らの目的は達せられなかった。

鋭い一撃が目の前の胴体に吸い込まれる。

そして……手首に感じる僅かな手応え。

剣が敵の胴体を切り裂く感触。

——捕らえた！

そいつは口元に微かな笑みを浮かべ、そのまま肉を裂き、骨を砕
き、確実に致命傷となる一撃を相手に与えたのだ。

——いや。

そのはず、だった。

「っ……？」

驚愕したのは、一瞬。

剣は確実に相手を捕らえたはずだ。

実際、切っ先には今も敵の姿が——なかった。

「！！？」

消えた。

その状況を、そいつの脳はそうとしか判断できなかった。

いや……たとえば第三者がその場面を見ていたとしても、おそらく同じ判定を下しただろう。

消えた——と。

一瞬の出来事。

そして、まるで止まったかのように思えた世界は。

——風を切り裂く音。

——続く金属音。

——剣を持つ腕を襲う振動。

そして、鳩尾を突き抜けるような衝撃を最後に……途絶えた。

「はぁ……っ！ はぁ……っ！！」

ガタガタ。

ガタガタと。

その体は両腕も両足も、言うことをきかないほどに震えていた。嫌な汗で衣服がベッタリと背中に張り付いている。

耳の奥がキンキン鳴って痛む。

明らかに過剰な血液が頭の中に集まっていた。

「はぁっ……はぁっ……！」

そんな彼……ティースの視線の先にあるのは——地面に伏す黒いフードの人物。

剣の柄で鳩尾に加えた一撃は、普通の人間なら血ヘドを吐くほどに強烈な一撃だ。手加減をする余裕など、彼にはなかった。

とにかく夢中だったのだ。

どうやって“敵の攻撃をかわし”どうやって“敵の剣を弾き飛ばし”そしてどうやって“懐に入り込んだ”のかも記憶にない。

混乱の極み。これほどまでに“死”を意識した戦いは彼にとって初めての経験だったのだ。

「はぁっ……ふうっ……」

少し息が落ち着いてから、胸のチクチクした痛みに気付いた彼は、

衣服が少し切り裂かれ、軽く血が滲んでいるのによりやく気付く。

(斬られた……のか)

だが、それはごく軽傷。衣服と薄皮を切り裂いたに過ぎないようだった。

「ふう……」

ようやく一息ついて、

「――そういえば……!？」

色と音を取り戻し始めた五感が、現在の状況を再び彼に思い出させた。ハッとして振り返ると、当然のように戦いはまだ終わっていない。

(……どうする!?)

僅かに落ち着きを取り戻した頭に、再び血が上り始める。

状況の再確認。

向こうは三対一。

――いや。

今まで気付かなかったが、戦っている四人の他に、そこにはもう一人の人物がいた。

(あれは……女の……子?)

黒髪の男の背後――それに守られるように佇む、一人の少女。

あまり目にする機会もないような上質な洋服に身を包み、手には豪華な装飾を施された八十センチほどのステッキを手に使っていた。

……それ以上の観察は後に回して。

ティースはすぐに判断した。

あの少女はどうやら高貴な家の娘であり。

狙われているのは間違いなく彼女であり。

そしてそれを守るように戦う黒髪の男は、三人を相手にしながらその場からほとんど動くこともなく――それでいて“互角以上に”戦っていること。

(――ならっ!)

ティースは駆け付けた。

向こうで剣を交えている四人は、こちらがすでに戦いを終えたことに気付いていない様子だった。

「……君！ こっちにっ！！」

「！」

「！？」

少女の視線がティースに向いた。

同時に黒髪の男と、黒いフードの人物もそれに気付く。

「……」

どうやらティースの意図を察したらしく、少女は迷うことなく地面を蹴った。

黒髪の男の背後から抜け出し、ティースのいる方向へ。

「！」

当然のように、敵の一人がそれを狙う。

だが――少女に向かって伸びた剣は、直前で遮られることになった。

「こ……のおっ！！！」

ティースが渾身の力を込めて、敵の剣を弾く。

慌てていたのか、敵の一撃にはそれほど力はなく……そして続く第二撃。

――いや。それが襲い来ることはなかった。

ブシャァッ！！！！

まるで弾けたように、敵の背中から赤黒い血が吹き出したのだ。

「え……」

剣を構えたままのティースの視界に映ったのは、流れるようにその背後を通り過ぎた、黒髪の男の影。

その口元は、戦いの最中にありながら微かな笑みをティースに向けていた。

そして、驚いたのも束の間。

状況はさらにめまぐるしく展開して。

「あ……」

残った二人の敵は敗北を悟ったのか、すでに彼らに背を見せていたのである――。

その2『ミューティレイクとアレルギー』

件の戦いからまだそれほど経たない——十数分後のこと。

場面は再びティースの家へと戻っていた。

家——貧乏な一軒家といえ、その中はそれなりに清潔だ。ティース自身はそれほどでもないのだが、同居人のシーラが比較的キレイ好きなので、頻繁に掃除するのである。

いや。

掃除を“やらせる”のである。

誰に——という問いはあまりに残酷なのでやめておこう。

とにかくそんなこんなで家の中は非常に清潔だ。もちろん脱ぎっぱなしの衣類——特に下着とか——が散らばってるといふようなこともない。そういうことをすると、ありとあらゆる罵詈雑言が飛んでくるのだ。

誰から誰に向けて、どんな類の——なんてことも断る必要はなからう。

だから、家の中は清潔であり、かつ整然としているのだ。

そして……ティースも、このときばかりは彼女のキレイ好きに心から感謝していた。

「先ほどは本当に助かりましたわ」

というのも。

「私、ファナと申します」

感謝の言葉を述べた後に、あからさまに高貴な家の者とわかる少女は名乗ったのである。

「ファナⅡミューティレイクです」

「……ファナ？」

オウム返しのようにティースは繰り返した。

その状況を見れば、彼が少なからず驚いていることは想像できるだろうが……実をいうと彼が繰り返したかったのはそっちではない。

その後、つまりはファミリーネームだ。

「ミューティレイク……ミューティレイクだってえっ!!?」

彼が驚きの叫びを発したのは、彼女が名乗ってから軽く十数秒が経過してからのことだった。

「はい」

にこやかに頷く少女——ファナ||ミューティレイク。

ちなみに彼女は今、ティースがいつも寝起きしているベッドに腰掛けており（ソファなどという贅沢なものはないので）、彼女に付き添っていた黒髪の男がそのすぐ横に立ち、ティース自身は床に直に座っている。

それはもちろん、相手がおそらく貴族の娘であることを氣遣ったためであり、それが彼にできる最高のもてなしでもあったのだ。が。

彼女の名を——正確にいうとファミリーネームを——耳にした瞬間、彼は自らの浅はかさを悟っていた。

（あ……後で怒られてもいいから、隣の部屋からまともなクッションの一つでも持ってきておくべきだったあっ!!）

そう思ってみても後の祭り。

というか実際は、それを持ってきたところでおそらく大して変わりはしないだろう。

“ミューティレイク”

ネービスにいる貴族の家名など、ティースはほとんど把握していない。もちろん領主であるネービス公は知っているが、いわゆる貴族の枠に入る家ってのは結構数があって、それもピンからキリまである。そんなものの名前をいちいち覚えられるはずがないし、また覚えていなくとも支障はないし、ついでに言うところのネービスに住む一般市民のほとんどは彼と同じだ。

だが、そんな彼であっても……そして、彼と同類項で括られる一般市民であっても、ミューティレイクの名はそのほとんどが知っているはずだった。

簡潔に言うと、かの家はこのネービスのナンバー二だ。

領主であるネービス公とも緊密な親戚関係にあるミューティレイク公は、政治的なことにこそほとんど関与しないものの、このネービスのシンボルともいえる学園群の“総元締め”ともいべき存在なのである。

「って……てことは、君——じゃなくて、あなたはミューティレイク公のご息女様ってわけですかッ!？」

混乱しているのか、ティースの敬語はかなり微妙だった。

「？」

対するファナは不思議そうな顔をする。

といっても、彼の言葉が理解できなかったわけではなさそうで、

「私、まだ独身ですけど？」

「——は？」

その瞬間——微妙な空気が流れた。

(……どういう意味だ?)

その言葉の意味を、ティースの頭は全く理解できなかった。

いや、彼ならずとも理解するのは難しいだろう。会話が食い違っているらしいことは容易に想像がつく。

だが、そんな彼の心中にも気付かず、ファナは言葉を続けていった。

「私ぐらいの年齢でご結婚なさってる方もたくさんいらっしゃいますけど、私はまだ独身ですわ」

ニッコリと答えるファナ。

「……あの」

聞くのは失礼にあたるかもしれないとは思ったが、結局理解できなかったティースは尋ねることにした。

「私は、その……ですから、あなたがミューティレイク公の——」

「ティースさん」

その言葉を遮って、ファナが少しだけ目を細める。

(……ヤバ!)

どうやら気分を害してしまったらしい、とティースは一瞬恐れたが。

「ティースさんはおいくつですか？」

「――は？」

またわけがわからなかった。

全く理解できない展開を見せる流れに、彼の頭の中は完全に混乱モードである。

「ご年齢の話ですわ」

律儀に付け加えるファナ。

「いや、それはわかってる……ですが」

「おいくつですか？」

さらに追求してくる。

ティースは答えるしかない、そう判断し、

「えっと、先月、十八歳になったばかりです」

「そうですか」

すると、彼女は再び先ほどの穏やかな微笑みを取り戻した。

「私は今年の一月で十七歳になりました。ですから、ティースさんは私よりも年上ですわ」

「……はあ」

やはり何が言いたいのかわからない……が、その先に続いた彼女の言葉で、彼はようやく理解することができた。

「ティースさんは私を助けてくださいました。それに、私より年上でもありますのに……どうして私に敬語を使うのですか？」

「……え」

それは彼にしてみれば唐突過ぎる質問だ。

……確かにこのネービスでは結構前に明確な身分制度というのはなくなっている。いわゆる貴族という言葉も、そのほとんどは古くから続いている金持ちという意味でしかなく、そういう意味で本当の特権階級というのは領主であるネービス公のみなのだ。

だがそうはいっても、人々の心には古くからの身分格差みたいな

ものが染み付いているのも確かなことであり、特にミューティレイクのような“ほぼ特権階級”というのが暗黙の了解と化している大貴族には、ほとんどの人間が自然と畏まるものなのである。

向こうもそれを当然だと思う者が多い。

もちろんティースもご多分に漏れずという感じだったのだが……こうして面と向かって質問されると返答に困るところではあった。

「そりゃまあ、あなたはミューティレイク公のご息女様ですし、私は一般市民なわけでして……」

少し考えた末、結局ティースは正直に答えることにした。

「？」

再び、ファナは不思議そうな顔をする。

「その、ご息女様というのは、どなたのことですか？」

「え？」

また話が噛み合わなくなっている。

と、そこへ見かねたのか、

「ティースさん。……どうも勘違いなさっているようですね」

それまで黙っていた黒髪の男が口を挟んでくる。

「え？」

見ると、男は穏やかに微笑んでいた。

戦いの最中は進むばかりの殺気を放っていた男だったが、こうして改めて見てみると、全体的に線の細いお坊ちゃん風の雰囲気で、黒い正装姿は僅かに戦いの痕跡を残して汚れていたが、それさえなければ完全に良家のご子息といった雰囲気だった。縁なしの眼鏡がなおさらそのイメージを増幅させている。

口調もまた、それに似合った優しいげなもので、

「こちらの、姫——ファナ様はミューティレイク公のご息女様ではありません」

「え？　でも、ミューティレイクって……」

ティースは当然のように戸惑った。

もちろんかの家は古くから存在しているから、枝分かれしていっ

た分家がいくつも存在してはいる。が、ミューティレイク家は領主であるネービス公家と同じく、その姓を名乗るのは本家の人間だけ……というのは、ネービスに住む人間にとって周知の事実。

ミューティレイクを名乗った以上は、少なくとも現在はミューティレイク本家の人間であるはずなのだ。

……と、そんなティースに向かって、黒髪の男は相変わらずの笑みを浮かべたままに付け加えたのである。

「何故なら、ファナ様はすでにミューティレイク家の御当主なのですから」

「……え？」

男の言葉にティースの思考が一瞬停止する。

(……そういえば)

それからティースはすぐに思い出した。

(俺たちがここに来る一年ぐらい前にミューティレイク公が暗殺されたって事件があったっけ……)

もちろん忘れていたわけではない。が、彼にはあまり関わりのない世界の話だったので、ついつい頭から抜け落ちていたのだ。

そしてもう一つ彼が思い出したこと。……ミューティレイク公は子供に恵まれず、その後継ぎは歳の離れた娘一人しかないという、人伝いに聞いた話。

(ってことは、つまり……)

「？」

驚愕の視線で見つめたティースに、ファナは相変わらずの穏和な笑顔で応える。

(この子が……現在のミューティレイク公!?)

決して大袈裟ではなく、それは大事件だった。

——そりゃ彼とて、貴族という人種に接する機会が全くなかったわけではない。過去にはその元で仕事したこともあるし、ごく普通の一般人に比べれば接する機会が多い方だったと言ってもいいだろう。

が……今回ばかりは少しレベルが違っていた。

大陸第二と言われるこのネービス。その中でネービス公に次ぐ実力者ということは、つまり大陸全土を合わせても有数の力を持っているということでもある。ティースのごとき一般市民など、その存在ごと抹消してしまえるほどの――何故か思考がネガティブ方面に傾いているが――力を持っている存在なのだ。

と。

そんな彼の心情を知ってか知らずか。

「ところでティースさん？」

ファナはまるで旧知の友人であるかのように、ごく自然に彼に話しかけてきた。

当然、この状況で彼がまともな反応などできようはずもなく、

「は……はい！　なんででしょうッ！？」

敬礼でもしそうな勢いで畏まったティース。

「……」

その返答にファナは少しだけ首をかしげる。

そして、

「は……？」

それから少し思案げな顔を見ると、怪訝そうなティースの眼前で、ゆっくりとベッドから立ち上がった。

「あ、あの――」

ふわりと、微かな花のような香りが鼻孔をくすぐる。

当初、ティースはその行動を怪訝そうに見つめていたが、彼女が向かい合うように床に直接腰を下ろしたのを見て、大いに慌てた。

「……え、えっと、その！　な、何かお気に召しませんでしたか！？」

「はい」

ファナは即答した。

表情は柔和なままでそれほど怒っている感じはしないが、それがかえってティースにとっては恐ろしい。

（な……なんだ！ 何が気に入らなかったんだ！？）

考えてみても、すぐに思い当たる要因はない。

ベッドはキレイだったし……いや、そうは言っても彼が毎朝寝起きしているベッドであり、毎日洗っているわけではないから汗も染み込んでいる。

あるいはそれが気に触ったのだろうか――と。

彼が混乱した頭であらゆる可能性を探っているところへ、

「先ほども申しましたけれど」

正座で向かい合ったまま、それでもやはり上品さを感じさせる佇まいでファナは言った。

「ティースさんは私よりも年上です。私の侍従というわけでもありません。……できればもっと自然に話していただきたいですわ」

「……え？」

先ほどの言葉を思い出す。

（そういや……そんなようなこと言ってたけど……）

「……」

失礼だとは思いつつも、ティースは少々呆気にとられてマジマジと見つめてしまった。

「それとも」

ファナは少し不思議そうな顔をして、

「それがティースさんの普段の話し方なのですか？ もしそうであれば仕方ありませんけれど……」

「あ……いや」

（……どうやら、この人……）

ティースもそこでようやく納得いった。

この、目の前にいる少女――ファナという名のミューティレイク家当主が、“少々変わった性格”の持ち主である、ということに。

そう認識して改めて彼女を見てみると、なるほどと思う。

ほんの僅かに垂れ目がちな穏やかな瞳。体全体に纏うおっとりした雰囲気と、育ちの良さを覗かせる仕草。そしてよくよく聞いてみ

れば、非常にのんびりとした柔らかな口調。

高貴さを失わずにいながら、とても親しみやすい。

「じゃあ……」

さすがにその瞬間は緊張したが、ティースは決意して口に出した。

「……ファナさん、って呼んでもいいのかな？」

「はい。そう呼び下さい」

ニッコリと。本当に何の裏もない、眩いばかりの笑顔で頷いた。

その様はまるで満開に咲いた可憐な花のようだ。

（……う）

それを見た彼の頭に、瞬間的に血が上る。

（ダメ……ダメだダメだ！　しっかりしろ！）

真っ白になりかけた自らを、ティースは心の中で思いっきり叱咤した。

——そうそう。

どうやら彼について、最も大事なことを説明し忘れていたようだ。

（こんなところで例のアレが出たら……目も当てられないぞ！！）

実を言うと——彼は病気なのだ。

いや、病気というより、悪いクセとでも言おうか。

こういう若い女性……ことに魅力的な女性を間近にすると、どうしてもそのクセが顔を出し始めてしまうのである。

それは、まともな日常生活を送ろうとする上では結構大きな障害となる病気だった。原因は不明で治し方も不明であり、彼もほとんど困っているところなのだ。

「……ところで」

満足したのか、ファナは会話を元に戻した。

「ティースさん？　もしよろしかったら、その剣を見せていただけないでしょうか？」

「え？　あ、剣？」

突然の申し出に、ティースは自分がまだ腰に剣を帯びたままだったことを思い出す。

「もちろんいいけど……」

刃物を握らせても大丈夫なものか、と思い、黒髪の男の顔を窺うと、

「お願いします。私も少々興味がありますので」

「わかった」

男の答えに頷いて、腰から鞘ごと外す。

「失礼します」

手を伸ばしたのは黒髪の男の方だった。

両手で丁寧を受け取ると、縁なし眼鏡の奥からじっと鞘を見つめ――それからその視線は柄へと移動する。

「……この宝石は？」

その動きが、柄の先にはめ込まれたエメラルドブルーにきらめく宝石のところで止まった。

「ああ、それは……昔、知り合いにもらったんだ。身を守る道具につけるお守りだっていうから、そこに詰め込んでもらったんだ」

「お守り、ですか」

納得したように頷いて、

「刀身を見てもいいですか？」

「ああ、構わないよ」

微かな摩擦音を立てて、剣が引き抜かれる。

「なるほど」

現れた刀身を眺めつつ、

「なかなかいいものですね」

男は特別な反応を示すことはなく、明らかにお世辞とわかる程度の言葉を添えてそれを再び鞘に納めた。

「ところで、ご職業は？」

それをティースに戻して、男はさらに質問をしてくる。

「一応、傭兵ってのをやってる。……仕事はあんまりないけどね」

自分で言っていて空しくなりつつ、特に隠すことでもないのので正直に答えた。

ファナは不思議そうに首をかしげながら、

「ティースさんほどの腕前でしたら、仕事はたくさんありそうですわ」

「そ、そんなことないよ」

真顔で言われ、ティースは照れながら頭を掻く。

「実際には剣なんて小さい頃に少し習ってたぐらいでさ。さっきのだって無我夢中で、自分でもよくわからないうちに……ほとんどまぐれだよ」

「まぐれ……ですか」

黒髪の男はそう言って、少し苦笑する。

「まぐれでどうにかなる相手ではなかったんですけどね」

「？」

その呟きはティースの耳にまでは届かなかった。

会話が一瞬途切れる。

(……そういや)

そこでようやく、一番聞いておかなきゃならないことを確認してないことにティースは気付いた。

一瞬だけ迷ったが、結局それを口にする。

「ところで……あの、ファナさんを襲った連中って？」

「……」

「……」

その問いに、二人は一瞬だけ視線を合わせた。

話すべきか否か……それがそんな感じの仕草であったのは、いくらティースでもすぐに理解できた。

「あ、いや、俺なんかが聞いていい話じゃないなら、もちろん話さなくても——」

「いいえ」

ファナは首を横に振って、

「ただ、お話することでティースさんにご迷惑がかかるかもしれませんが」

「迷惑……か」

言葉の意味は充分に理解できた。

ミューティレイク家の当主を狙うほどの相手。……その情報を耳にするということはすなわち、ティースもまたそいつらの標的になるかもしれないということを意味する。

気軽に関わることじゃないのは明らかだった。

「アオイさん」

「はい」

ファナの呼びかけに、黒髪の男が答えた。

ここで初めて、彼がアオイという名の人物らしいことが判明する。

「屋敷に戻ることは叶いますでしょうか？」

その問いにアオイは難色を示した。

「今は——危険かもしれません。敵の規模もわかりませんし、ひとまずは身を隠して機会を待つのが最善かと。明日になればレイさんやアクアさんが屋敷に戻る予定ですし、一日二日もすれば発見してくれるでしょう」

「ですが、この辺りでは身を隠す場所の心当たりがありませんわ」

「とは言いますが、今の状況で屋敷に戻ろうとするのは危険です。もちろん敵がこの奇襲の失敗ですでに諦めた可能性も高いですが……」

……

「……あの」

「？」

「はい？」

口を挟んだティースに、二人の視線が一斉にティースを向く。

「いや、もしよかったら」

二人の会話の細かい部分までは彼には理解できなかった。が、どうやら彼らが身を隠す場所に困っているらしいことはわかる。

そう認識した瞬間、特に深く考えることもなく彼は口に出していた。

「ここでよければ、とりあえず使ってくれてもいいけど」

「……え？」

驚く顔をしたのはアオイだった。

「よろしいのですか？」

一方のファナの方は素直に感謝の色を表しながら、それほど意外な顔はしない。

あるいは彼女はティースという人間の性格を、ある程度見抜いていたのかもしれない。

「それは助かりますけど……本当にいいんですか？」

そう問いかけたのはアオイだ。

「確かにこうした一般家屋に隠れてしまえば、敵もそう易々とは見つけられないと思いますが……万が一、危険があるかもしれないですよ？」

「……あ、いや、それは困るなあ」

途端に弱気になるティース。

考えてみれば、ここに住んでいるのは彼一人ではない。一人だったとしても多少は躊躇うところだが、一緒に住んでいる彼女まで危険に晒されとなれば、やはり考え直す必要があった。

（でも、困ってるみたいだしなあ……）

と、ここが根っからのお人好しであるティースという人物である。厄介事が嫌いでありながら、困っている人間を放っておくことができない。だからこそトータル的にはいつも厄介事を引き寄せる。

今回、この二人と関わることになったのも、元はといえばその性癖が原因であり。

……それにここで二人とサヨナラした後、明日になって“ミューティレイク公、再び暗殺さる！”なんてニュースが流れていたら、彼はおそらく本気で首を吊るほど落ち込むに違いなかった。

こうして少しでも相見え、言葉をかわしてしまった以上、単なる“赤の他人の不幸な事故”で処理することは、彼には到底不可能なことなのだ。

それに……彼はこの、ファナという大貴族の少女に、常人よりも

若干上向きの好印象を抱いてしまっている。

「じゃあ、とりあえず」

そこで、ティースは妥協案を出すことにした。

「一緒に住んでる——えっと、妹——が帰ってきてから相談ということでしょうか？」

とっさに妹だということにしたのは、もちろんあらぬ誤解を避けるためだった。

まあ、向こうはそんなことに興味などないだろうし、誤解されたところでどうということもないのだろうが、そういう意味のないところに気を遣うのもこのティースという人物なのである。

「一緒に暮らしてる方、妹様だったのですね」

二人とも特に意外そうな顔はしなかった。

おそらくもう一つの部屋が存在から、同居人がいることには気付いていたのだろう。

「奥様かと思ってましたわ」

「まだ独身だよ」

本気で意外そうなファナの言葉にティースは苦笑し、

「とにかくあいつが帰ってきたら話してみて……それから決めよう」
そう結論づけた。

（とは言ったものの……）

その“あいつ”——つまりシーラがどんな返事をするのか、ティースにはいまいち想像できない。

（最近のあいつはちよつと……わからないからなあ）

以前のことならともかく、今の彼女の心を予測するのは彼女にとって難しいことだった。

「では、それまで待たせていただいてもよろしいのですか？」

「うん。大したもてなしはできないけど。……えっと、そっちの……」

ティースが少し困った様子で見ると、アオイはハツとした顔を
して、

「あ、す、すみません！　そういえば私、自己紹介がまだでしたね！」

初めて気付いた、と言わんばかりの顔をして慌てた。

……そんな様子が、どうも最初のイメージとだいぶ違っている。ティースはそんな風感じたが、アオイはそれには気付かない様子で自己紹介を始めた。

「私、姫の執事兼ボディガードで、イングヴェイ・イグレシウスと申します。以後、よろしくお願いします」

「執事兼ボディガード？」

思わず繰り返したが、それよりももっと疑問なところがあった。

「イングヴェイ……？　でもさっき、ファナさんが“アオイ”って

……」

「あ、そ、それは」

アオイはやはり慌てた様子でファナを見る。

一方のファナは特に慌てた様子もなく、ずっと保ち続けているのんびりとした口調で答えた。

「愛称ですわ。ティースさんもどうかそう呼びください」

ニッコリと。

「あ、愛称……？」

“イングヴェイ・イグレシウス”なんていかつい名前が、どうやったら“アオイ”になるのかティースにはまるで理解できなかったが……さすがにそこまで突っ込む気にはなれなかった。

「それと……“姫”ってのは？」

よく考えてみると、彼の自己紹介はツッコミ所満載であった。

「あ、いえ、それは……私のクセで、つつい主のことを姫と呼んでしまうのです」

「はあ」

これまた理解に苦しむクセであったが、これも突っ込まないことにした。

どうやらミューティレイク家の当主と執事ってのは、相当に変わ

ったコンビらしい。

「……では」

そんな“？”マークが五個ぐらい付きそうな自己紹介を終え、気を取り直したアオイ——ここではこれで統一することにしよう——は軽く会釈して、

「私は一応この周辺を探ることにします。地形も把握しなければなりませんし……おそらく十分ほどで戻ると思います」

そう言うと、今度は懐から笛のようなものを取り出した。

「ティースさん。もしも私がない間に何かありましたらこの笛を吹いてください。すぐに駆けつけますので」

「ああ、うん。わかった……」

「とは言っても」

ちよつと緊張した面持ちで受け取ったティースを安心させるように、

「何かあれば吹く前に私の方が気付くはずです。あまり歩き回ると敵に見つかる可能性もありますし、近くをチェックして歩くだけですから」

「あ、なるほど」

ティースは安心した。

(けど、何か……おかしいような?)

ホッとしつつも何か釈然としないものを感じながら、

「では、行ってまいります」

アオイの後ろ姿が玄関の方へと消えていくのを見送るのだった。

「……あれ？」

パタン、とドアが閉まる音を聞いて、ティースはようやくその疑問に気付いた。

「いいのかな？ ボディガードの人が離れちゃったりして……」

「？」

不思議そうな顔のファナに、ティースは彼女の方に向き直って、
「だって……その、俺ってのは、ファナさんたちにとっちゃ、ほと

んど初対面なわけだよね」

「ええ、そうですわ」

「だからつまり……そんな俺と二人っきりにしちゃってもいいのかな、って」

それは彼でなくとも当然の疑問だった。

確かに彼は先ほどこの二人を助けはしたが……それだけで信じるというのも少し浅はかすぎる。助けたことだって、邪推しようと思えばいくらでも理由付けができるはずで。

彼女のような身分の人間であればもっと慎重であってしかるべきだろう。

「それは大丈夫ですわ」

が、ファナは事も無げに答えた。

「ティースさんは信用できる方ですから」

「……なんで？」

意表を突かれた様子のティースに、ファナはちよつとだけ首をかしげ、

「と言われましても」

それでもあまり考えた様子もなしに、

「なんとなく、ですわ」

「……なんとなく？」

「はい」

ファナはニツコリと微笑んだ。

やはり何の邪気もない、心が和むような笑顔だった。

「なんとなく、ティースさんは信用できる方だと思いました」

「……」

無言のティース。

そのときの彼の心情をどう表現すればいいだろう。

(な、なんて純真な人なんだ……！)

とりあえず感動すると同時に、当初、色眼鏡で彼女を見ていた自分を恥じるのだった。

……普段、シーラに色々なひどい仕打ちを受けているためか、少々感動のラインが低くなっていたのかもしれない。
と、そんなわけで。

（よし！ シーラの奴がなんと言おうと、俺は絶対にこの人たちを匿ってみせるぞ！）

それは、彼にとってはかなりこの“一大決心”であった。それほどまでにこのファナという少女の言葉は彼の心を動かしたわけなのだが。

ただ……だからこそ。

彼が普段、最も“気を付けて”いること。

そして今の“この状況”であれば尚更、気を付けていなければならぬこと。

——それが頭からスッポリと抜けていたのである。

「あ、ティースさん？」

予兆は、何事かに気付いたらしいファナの声。

「お怪我をなさってるみたいですね。胸の——」

「……え？」

感動の世界に浸っていたティースが、ようやく気付いたとき。

“それ”は彼の第一次防衛ライン及び第二次防衛ラインをとつた昔に突破し、警戒領域をも越えて危険領域へと到達しつつあった。

すなわち。

「——！？」

ファナの手が、彼の胸に触れようとしていたのだ。

……ドクンッ！！

心臓が一際大きな鼓動を打つ。

避ける術はなかった。

「ちよっ……！！」

制止も間に合わず。

まるで陶磁器のような可憐な指先が、そっとティースの胸に触れる。

その瞬間、脊髄を貫いていくような衝撃。

（う……！）

全身の血が頭に集中した。

両手、両足の先の感覚がすう——つと薄くなって。

「ティース、さん？」

不思議そうなファナの声。

……彼が覚えているのはそこまでだった。

何故なら——彼の意識はそのときすでに闇の淵へと落ちていたのだから。

その3『支配者の帰宅』

“女性アレルギー”

もちろん名称は彼と周りが勝手に命名したもので、それを実際にアレルギーと言っているものかどうかは甚だ疑問だが……とにかくティースは、女性、特に歳の近い女性に触れると、途端に全身の血が頭に上って前後不覚、ひどいときには気絶してしまうという特殊体質(?)だった。

発症した……というより、その事実気付いたのはほんの数年前のこと。原因は不明でありもちろん治療法もわからない、ひどく厄介なものなのだ。

「……アレルギーですか？」

幸いなことに、ティースが気を失っていたのはほんの五分ほどのことだったらしい。

気が付くと彼はベッドの上に寝かされ、額に濡れタオルまで乗せられていた。

「あはは……恥ずかしいところを見せちゃったな」

そしてティースは苦笑いしつつ、自らの“病氣”についてファナに説明するハメとなっていたのだった。

もちろん彼としては隠しておきたかったことである。

だって……情けないにもほどがあるだろう。一体どこの世界に、女性に触れられただけで気絶してしまう男がいるというのだ。

「気を張っていれば大丈夫なことが多いんだけどね。突然触れられたりすると、さっきみたいになるんだ」

「そうでしたの」

笑われることも覚悟していたティースだったが、彼女は笑わなかった。

それどころか、律儀に頭を下げて、

「そうとは知らず、申し訳ありませんでした」

「いや！」

ティースは逆に慌てて、手を振った。

「そんなのわかるわけないって！　言わなかった俺がいけないんだし！」

「ですけど……」

ファナは少し心配そうな顔になって、

「それですと妹様と生活なさるのも大変ではありません？」

「あ、あいつは……大丈夫なんだ」

「？」

「例外ってこと」

ティースはそう答えてゆっくりと体を起こした。

「起き上がっても平気ですよ？」

「ああ。別に気分が悪くなったりするわけじゃないから」

特に強がったわけでもなく、彼はそう答える。

それにまあ……いくら彼女がこういう性格だったとしても、かのミューティレイク公に看病してもらおうというのは、考えてみればなかなか心臓によろしくない状態であった。

「無理なさらないでくださいね」

ファナは素直に引き下がると、その視線はゆっくりと動いて部屋の隅にあった時計の上で止まる。

「ところで、妹様は何時頃お戻りになられるのでしょうか？」

「ああ……遅くなるって言ってたから」

額に乗っていた濡れたタオルを手にとって、同じように時計を見た。時刻はすでに五時を回ろうとしている。

いつもならすでに帰ってきて晩御飯、というところだが……

「もう少しかかるんじゃないかなあ。日が完全に隠れるまでには帰ってくると思うけど」

と、ティースがそう口にした時である。

玄関からドアの開く音がした。

「……あ。アオイさんが戻ってきたかな？」

そんなティースの反応に対し、ファナが少し首をかしげる。

「アオイさんではありません」

「え？」

物音が気配か……そんなものを察したのだろうか。彼女は自信ありげにそう断言した。

（アオイさんじゃない……？）

それを理解した瞬間、ティースは反射的に笛を手にし、もう片方の手を愛剣に向かって伸ばしかける。

脳裏を過ぎったのはもちろん、先ほど彼女らを襲っていた連中のこと。

（まさかこんなに早く……？）

確かにあの戦いの場所からそれほど離れてはいない。が、その距離で描く円の中には当然他にも無数の家屋が建ち並んでいるわけで、よほど大胆に動かない限りそう簡単に突き止められるはずもない……というのは、ティースもまた同じ意見だった。

それが突き止められたのだとすれば——見通しが甘かったのか。緊張に手の平が汗を掻く。

……が、その緊張は次に続いた声で消えた。

「女の方ですわ」

ファナの相変わらず緊張感のない声。おそらく彼女はそれが敵ではないとわかっていたのだろう。

「妹様ではありませんの？」

「え？」

ファナがそう言った直後、

「……ただいま」

聞こえてきたのは彼女が言うとおりの女性の声……しかも、その透き通るような凜とした声には嫌というほどに聞き覚えがあった。

「シーラ？」

間違いなかったが、ティースはもう一度時計の時刻を見て、

「おかえり。随分……早かったな」

玄関に向かって声を掛けると、

「ええ。思ってたよりも早く終わってくれて——」

返ってきた声は途中で途切れた。

そして、

「……だれ？」

玄関から姿を現したシーラはそこで足を止めていた。視線もまた、怪訝そうな色を込めて止まっている。

それはもちろん……ファナの顔の上で。

「ティース？」

問いかける言葉だけがようやく彼に向けられた。

「ああ……」

彼女が怪訝に思うのも当たり前のことだった。ただでさえこの家は客人が来ることなど滅多にない。というより、ティースとシーラ以外でこの場所に立ち入ったものなど、ここ一年では大家——ここは一応借家だ——ぐらいのものである。

そんな場所に、彼女にとっては見知らぬ女性、しかもどう見ても一般人とは思えない服装に身を包んだ人物がいて。しかも同居人はベッドの上、見知らぬ人物はそれを看病するかのように寄り添っている。

……いや、それについては、

「また悪い病気が出たらしいのは見ればわかるけど」

さすが長い付き合いだけあって完璧に見抜いていた。

「ま、まあ、その通りなんだけどさ……」

“情けない”と言わんばかりの彼女の表情に、ティースはほんの少しだけ落ち込みながら、

「えっと、だな。この人は——」

早速事情を説明しようかと思ったところ、その前にファナが自ら口を開いた。

「お初にお目に掛かります」

相変わらずのゆったりとした動作ながら、どこか気品の漂う動きでシーラに向き直り、

「ファナⅡミューティレイクと申します。先ほど、こちらのティースさんに危ないところを助けていただいた者ですわ」

「助けた？ ……ミューティレイク？」

シーラは事態を理解しようとするかのように、宝石のような輝きを放つ利発そうな瞳を少しだけ泳がせて、

「ミューティレイクって……もしかすると、あのミューティレイクかしら？」

それに対し、不思議そうな顔をしたファナ。

「どのミューティレイクかは存じませんが、この街にはおそらく一つしかないミューティレイクの者ですわ」

「そう。なら、私が想像してるのと同じね」

そう言って、シーラはようやく止まっていた歩みを再開した。

隣の部屋——つまりは自分の部屋に向かって。

「わかった。とりあえず着替えるわ。話はその後で聞くから。……それと」

その途中、彼女はベッド上のティースに少し苛立たしげな視線を送って、

「お前はいつまでそこに寝てるつもりなの？ みっともない」

叱咤の声が飛ぶ。

「あ、ああ」

ティースは慌てて布団をはね除け、ベッドから身を下ろしつつ、

（……相変わらず度胸がいいというか）

と、そんなことを思う。

ミューティレイクと聞いて物怖じした彼とは対照的に、彼女の態度は全くのいつも通りである。男であるティースとしては、その強心臓を自分のと交換してもらいたいぐらいであった。

……とはいえ、もしもそんなことを口にしようものなら、

『お前のノミの心臓なんていらないわよ』
とか言われるのは目に見えているのだが。

外はそろそろ夜の闇が支配しそうな時間になっている。

カタカタという窓の震える音が、若干風が強まってきたことを伝えていた。

「ふうん、そういうことね」

家の中では数分後に戻ってきたアオイも交え、たった今、シーラへの事情説明が終わったところだった。

ベッドの上にはファナが。シーラは自分の部屋から持ってきたクッションに腰を下ろし、ティースはさっきまでと同じように床の上、アオイは相変わらずファナの横に立っている。

「そりゃま、ティースが普通に女の子を家に連れ込むなんて思いもしないけど」

「って、そりゃどういう意味——」

「なにか間違ってる？」

そう言って冷たい視線を向けてきたシーラに対し、

「いや、間違っていないけどさ……」

反論できないのはあまりに情けないが、実際にそうなのだから仕方なかった。ただ、彼にも言い分があるとすれば、生活が苦しくてそんなことをしている余裕などないのだとも言える。

（その割に、向こうは彼氏を作ったりして遊んでるんだよねあ）

なんとなく理不尽な匂いがしなくもないが……それが彼の選んだ道なのだから仕方なかった。

それに彼の場合は、他に先ほどの“病氣”だとか色々な要因がある。

「で、どうだろ？」

とりあえずいつものように反論はしないまま、ティースは彼女の意志を問う。

「……」

「……」

ファナとアオイの二人も彼女を見ていた。

「そうね」

シーラはアオイの顔を一瞥し、それからベッド上のファナへ。

相変わらずの穏やかなファナの笑顔と、少し探るような色を込めたシーラの瞳が交錯する。

二人とも動かない。

（……こわ）

ティースは思わずそんなことを考えてしまったが、とはいえ別に火花を散らしているわけではない。

ファナの方は単純のシーラの答えを待っているだけだろうし、逆にシーラの方はファナという人物のことを見抜こうとしているだけだろう。

その証拠に数瞬後、シーラの表情がふっ……と緩んだ。

「……いいわ」

「え……いいのか!？」

その彼女の言葉に真っ先に反応したのはファナでもアオイでもない。驚きに目を見開いたティースである。

逆にその反応に目を細めたシーラは、

「何よ、その意外そうな顔は。それに――随分と嬉しそうね」

「え、いや……」

当然のように突っ込まれて、ティースはしどろもどろになりながら、

「なんとか、俺としてはこんなに困ってる人を放っておけない
というか……」

「そう」

シーラは嘲るように鼻で笑って、

「素直に可愛い子だから放っておけないって言えばいいのに」

「え……!？」

「?」

「……」

不思議そうなファナや苦笑するアオイの視線を受けて、ティースの顔が赤くなった。

「そ、それは誤解だ!!」

そのまま反論する。

「俺は別に……その、そういう基準で物事を判断したりはしないぞ！ 大体、いくら可愛くたって性格が悪けりゃ……いや、ファナさんは性格もいいんだけどー!」

そこまで口にした途端、彼の背中を強烈な悪寒が走った。

「つまり、性格が悪いのは私の方って言いたいわけ？」

「えゝ!」

彼はどうやらムキになりすぎて自ら泥沼にハマってしまったようだ。

「そつ、そんなことは一言も言っ……」

「ま、そんなことはどうでもいいわ」

それを口にしたシーラの方は本気なのか冗談なのか区別のつかない顔だった。

彼女はゆつくりとクッションから腰を上げると、

「とにかく、これからどうするにしても今日は遅すぎるわね。――ティース。早速、お前のベッドを私の部屋に運んでちょうだい」

「……え？」

「なにを意外そうな顔してるの？」

見上げたティースを見つめる彼女の視線は――どうやら先ほどの言葉が冗談でなかったらしいと推測するに充分なほどの――冷たさを帯びていた。

「彼女には私の部屋で寝てもらうわ。ベッドは二つ。だったら、このベッドがここにあるとまずいでしょ？」

「そ、そりゃそうか……」

ティースはそこまで考えてなかったが、彼女の言葉は至極まともであった。ベッドは女性陣に譲るのが、まあ男として当然の義務で

ある。

が、問題だったのは、

「……あれ？ 予備の布団ってあったっけ……？」

「毛布が一枚だけあるわね。でも」

そんなティースにシーラは相変わらずの冷たい声で答えた。

「それはもちろん、お客の彼に使ってもらおうわ」

「え？」

彼女が何を言っているのかティースには理解できなかった。

いや、理解はできていたが、彼の頭は容易にその現実を受け止められなかったのだ。

「お、俺は……？」

恐る恐る尋ねるティース。

……平然と返ってきた答えは、まさに彼が恐れていた通りのものだった。

「平気よ、もう凍死する季節でもないわ。場所は……そうね。台所にでも転がっててちょうだい」

「……」

それは確かにその通りではあったが。

四月初頭。

ポカポカした陽気とはほど遠い、朝方には布団が恋しくなる季節。今はまだそんな季節なのである。

（お、鬼だ……）

しかし……残念ながら彼に抵抗する術はなかった。

そして、翌日の朝。

ティースは——彼にとっては本当に意外なことに——この朝を、心地よい空気の中で迎えることができていた。

遠くに聞こえるスズメの声。窓から射し込む暖かい日射し。

この日は晴天だった。

「ん……ん——っ」

毛布の中で大きく伸びをするティース。

体温で暖まっているとはいえ、堅い床の上で一晩を過ごしたために体中が若干痛んだ。が、意外にも寝付いてからは一度も目が覚めることはなく、それがこの心地よい目覚めにも繋がったのだろう。

（思ったより寒くなかったし——って）

起き上がろうとして、彼はその原因に気付く。

「……毛布？」

見覚えのあるそれは、本来は彼のベッドで使用されている、少々年季の入った毛布だ。

……とまあ、そう考えれば誰がかけてくれたのかも大体想像はつくというもので。

（ああ……やっぱ優しい子なんだなあ、ファナさんは）

朝っぱらから微かな感動を感じていると、微睡んでいた視界が突然暗くなった。

「おはようございます、ティースさん」

同時に頭上から響く柔らかな声。

「……え、あっ、お、おはよう、ファナさん」

暗くなったのは彼女の影が太陽の光を遮っていたためだったと気付く。

そして、彼が返事をするのに一瞬戸惑った理由は、

「その服……シーラのかい？」

「はい。シーラさんが——」

「あの服じゃ目立つし動きにくいでしょ」

「——と、おっしゃいまして」

視線をキッチン側に移動させると、朝日を受けて輝くブロンドの髪が揺れている。

いきなり息がピッタリな二人に、ティースは少々呆気に取られた。
「どうでもいいけど」

とはいえ、シーラから彼に向けられた視線は相変わらず。

「お前はいつまでそこに転がってるつもり？ 邪魔なんだけど」

「あ、そ、そうか」

自分の寝ていた場所を思い出し、ノロノロと体を起こす準備をするティース。

幸い彼は就寝時にはそれなりの格好で寝ている。だから布団から起きたら下着だけとか素っ裸とかそういう心配はない。まあ、今日に限って言えば寝た時点だと何もかぶっていなかったわけだから当たり前なのだが。

「それと……ファナ？」

「はい？」

驚いたことに、シーラはファナのことを呼び捨てた。

しかもそれはティースに向けたものとは違い、親しみのこもったもので……先ほどの息の合った様子から考えると、昨晚のうちに友人の契りでも交わしたのかもしれない。

「そんなところに立ってたら、ティースにスカートの中を覗かれるわよ」

「なっ……！」

ティースは跳ね起きた。

そして当然のごとく猛抗議する。

「ば、馬鹿言うなって！ お、俺がそんなことするわけないだろ！」
「どうかしら」

だがシーラの方は相変わらず、まるで気に入らないことでもあったかのようだ。

いつものクセでティースは一瞬怯んだが、もちろん彼とてそんな不名誉な冤罪を着せられたままにするわけにはいかなかった。

無謀を承知の上で反論する。

「だっ、だいたい、俺は今までそんなこと、一度たりとしたことないぞ！」

「それはそうよ。今までなんて女の子自体が一人もそばにいなかった

たんだから」

「そ、そりゃ……！ まあ、そうだけど……」

呆気なく折れたティース。

だが、

「ちなみに」

シーラの眉が僅かに動いて、さらに鋭さを増す言葉が重なった。

「こう見えても、私はその“女の子”よ」

「……あ」

さあっ……とティースの顔が青くなる。

かと思ったら、すぐに赤みを帯びて、

「ま、待て！ 今のは汚いぞ！ 誘導尋問みたいなもんじゃないかっ……！」

「別に悪いなんて言っていないじゃない」

背を向けたシーラは、まるで犬を追い払うかのように手を振って、

「とにかく邪魔よ。さっさと退けなさい」

そう言うのと、その後は一瞥もせずキッチンへと向かっていってしまっただけだ。

反論を考えたティースだったが、結局何も思い浮かぶことはなく。

「……」

結局、無言で肩を落とすだけだった。

いや、おそらく何か思いついたところで、到底彼女を言い負かせるほどのものではないだろう。

（ちえっ……）

理不尽さに納得できないながらも、反論を諦めて毛布を手に取り上がる。

と、

「ふふっ……」

「ファナさん？ ……何かおかしかった？」

ファナは微笑んでいた。彼の情けない様子を笑っているのかといえど、おそらくそうではない。彼女の笑みは圧倒的に好意的な響き

を持っていて、それはティースにもすぐに理解できた。

ファナは答える。

「羨ましいですわ」

「……え。なにが？」

きょとんとして尋ねると、

「なんとなく、です」

「はあ」

彼女の言葉は相変わらず難解だった。

ティースは首を捻りつつも、手にした毛布の感触を思い出して、

「……あ、そうだ。毛布、どうもありがとう。おかげで凍えずに済んだよ」

「毛布、ですか？」

だが、ファナは首をかしげた。

「私は存じませんわ？」

「あれ？」

予想外の返答に、ティースはもう一度手にした毛布を見る。

それは確かに昨日まで彼のベッドにあった毛布で、彼女が使っていたはずのもの。まさか彼女が寝てるところを誰かが剥ぎ取ったわけでもないだろう。

（じゃあ、ファナさんが起きてから誰かが……？）

一瞬だけシーラを見たものの、彼女の態度を見る限りは考えにくい。

「じゃあアオイさんかな？　そういやアオイさんは――」

ふと思いついて尋ねかけたティースに、ファナがニッコリと微笑んで答えた。

「アオイさんでしたら、まだお休み中ですわ」

「……は？」

振り返ったティースの視界。

そこに映ったのは――部屋の壁に背中を預け、首をだらしなく曲げて眠りこける――ミューティレイク家執事の姿。

「……」

寝返りを打とうとして壁に擦ったのか、髪はところどころが乱れて跳ね、かけたままの眼鏡は僅かにずり落ち、少し開いたままの口元には微かなヨダレの跡。服装こそ昨日から変わらぬままだったが、そこに昨日の戦いで見せた凜とした雰囲気は微塵も存在していない。本当に同一人物なのかと疑うほどである。

「って……執事が主人より遅く起きてても大丈夫なものなの？」

ティースの質問に、ファナは口元に手を当てて少し考えると、

「どうなのでしょう？」

「どうなのでしょう、って……」

「ですけど」

ファナはすぐに柔らかな笑顔に戻って言った。

「昨日は負担をかけてしまいましたから。ゆっくり休んでいただきたいですわ」

「……」

その言葉はまたもやティースの心の琴線に触れた。

（や……優しい……）

まるで女神のような笑顔（ティース視点による）でそう言い切ったファナに、彼は再び感動を覚えるのだった。

……とはいっても、

「——ちよっとティース！ 起きたなら、ぼさっとしてないで早く手伝いなさい！」

「あ！ わ、悪いっ！」

人生、そういうことばかりではないようだ。

——さて、そんなこんなで数十分後。

「ま、また寝坊をつ！ もっ、申し訳ございませんでしたっ！！」
アオイが跳ね起きて壁に後頭部を痛打し、我を取り戻した後で平身低頭してみせた頃、他の三人はすでに朝食を終えており——口に

合うかどうかということを心配したティースだったが、心の中ではどうであれ、ファナは特に文句を言うこともなかった。

「気になさらないください」

よく聞くと彼女は使用人のアオイに対しても敬語だ。これは相手がどうこうというものではなく、もともとこういう喋り方なのだろう。

「昨日はあんなことがありましたし、アオイさんもお疲れだったでしょう？ もっと休んでらしても構いませんでしたのに」

「きよっ、恐縮です……！」

アオイはますます畏まってしまった。

（……彼女みたいな人の下で働けるのって、結構羨ましいかも）

そんな光景をぼーっと眺めながらティースはそんなことを考えていた。

もちろん、アオイがただの寝坊助でないことはティースにもわかってる。昨日、目にしたあの光景——超人的な男数人を相手に互角以上に渡り合っていた姿——は容易に網膜から離れるものではなかった。

その実力故に彼はこうしてミューテイレイク家当主のそばに仕え、実際にあやって彼女を危険から守っているのだ。実際、苦労も相当あるのだろう。

（俺の場合は望んでも到底無理だなあ……）

「？」

ぼーっとしていると、不思議そうなファナと視線が合った。

「あ……」

ティースは無意識のうちに彼女を見つめていたらしい。

「どうかなさいました？」

「あ、いや、なんでもないよ」

ブンブンと手を振って誤魔化すと、その横から、

「——バカじゃない」

「う……」

隣のシーラはしっかりとその様子を捕らえていたらしい。

食後の紅茶を口に運びながら、

「変なこと考えてる前に、お前にはやることがあるんじゃないの？」

「へ、変なことなんて考えて——」

「言い訳なんて、見苦しい」

「く……」

反論を試みたいティースではあったが、余計なことを考えていたのは確かなことであり、言い返したときの猛反撃を想像すると、やはりいつものように口を閉ざすしかなかった。

そんな二人の様子を見て、ファナは相変わらずニコニコしている。端から見れば意地の悪いようにも思えるが、もちろん彼女にはそんなつもりもないらしく、どうやらこのやり取りが二人の“じゃれ合い”と映っているらしい。

実際のところは——少なくとも当人であるティースが感じているところでは——それはじゃれ合いでもなんでもなく、一方的な“虐待”みたいなものだったのだが。

「あの……それではいただきます」

一方の客人アオイはといえば、なんともいえない表情を浮かべて少々遠慮がちだ。彼の方は、ティースに対するシーラの態度に若干の萎縮を覚えているらしい。

——確かに。シーラの言葉遣いは年上の男に向ける言葉とは到底思えないところがあり、彼が少々困惑しているのも無理からぬところか。

「それで——」

（それにしても……）

言葉を聞き流しながら、ティースは考え、

（シーラも……昔はこんなじゃなかったのにな）

そして密かにため息を吐いた。

（いつからこんな風になったんだっけ……）

彼女が彼に対して言葉を向けると、その整った眉はいつでも微

かに皺を寄せる。

まるで話すこと自体が不快だとしても……いや、そこまでは言わないまでも、できれば会話せずに済ませたいという意志は明らかだった。

このティースとて“普通”からそれほど逸脱していない感性の持ち主だ。彼女の態度に全く何も感じていないわけじゃない。が、彼が真っ先に感じるのは、彼女の言葉に対する“怒り”よりも“困惑”の方だった。

（それでも、俺なりによかれと思って色々やってきたんだけどなあ……）

彼は自分が大して取り柄のない人間だということも、人から特別に慕われる人間じゃないこともよくわかっている。だが、彼女と付き合ってきた十数年間、少なくともそのうちの半分以上はそれなりに上手くやってきていたはずだった。

おかしくなったのは……とある事情から二年前にこのネービスで生活を始め、それから一年ほどが経過した頃だったろうか。その頃から彼女は休日や放課後に外を遊び回るようになり、ティースに対する態度も露骨に冷たくなり始めたのだ。

……丁度その頃に出来たらしい彼氏が原因か、と考えなくもなかった。が、そんなことは怖くてとても口に出せない。

「――どうするつもり？」

「え……あ、なんだっけ？」

「……」

聞き返したティースに、シーラはこめかみに指を当てた。そして大きく、まるで不機嫌さを隠さないため息を吐くと、

「ただでさえ頼りないのが、色ボケしてますます役に立たなくなっただけね」

「んなっ……そんなんじゃないぞ！」

先ほどと同じように反論するティース。ただし今回は胸を張って、だ。

何しろ、今回は本当にファナのことを考えていたわけじゃない。

「なにがどう違うのよ」

「今のは——ちょっと思い出していただけたよ」

「なにをよ？」

ますますシーラの表情が険しくなる。いや……これはただ怪訝そうにしているだけだろうか。

「いや、だから……その」

言いかけて、ティースは思わず口を噤む。

本当のこと——“昔はこんなじゃなかった”なんて、そんなことを口にしようものなら、かえって彼女を怒らせてしまうのは目に見えていた。

一瞬の間にそう考えて、

「……ゴメン」

結局、いつものようにただ謝ったティース。

もちろんそれを見るシーラの表情はますます厳しくなった。そして彼女の視線はすぐ、まるで興味を失ったかのように移動して、

「ま、どうでもいいわ。それより今後のことよ」

正面のファナへと向かう。

「あなたたちをここに置くのは構わないんだけど……結局、迎えが来るまでじっとしてるつもりなの？」

それに対してはアオイが答えた。

「へえひへふあ——」

「飲み込んでからでいいわよ」

即座にシーラが突っ込む。

……当初の彼に対するイメージが見る見るうちに音を立てて崩れていくようだった。

「むぐっ……そ、その、できれば屋敷と連絡を取りたいところなのですが」

胸を叩きながらようやくアオイが答える。

「屋敷の方でも姫——ファナ様がお帰りにならないことで騒ぎには

なっているはず。おそらく憲兵隊とも協力して探し出してくれることだと思います」

「こっちから連絡を取ることはできないのかしら」

「敵がこの周辺を監視している可能性がありますから。――残念なことに、昨日のことは通報者がいなかったのか騒ぎになってないようですし、死体も敵が片づけてしまったようです」

「だったら、ティースを通達役にすればいいんじゃないの？」

「いえ、ティースさんも敵に顔を知られている可能性が高いです。

……危険すぎます」

「そう。だったら私が行けばいいのね？」

「え？」

「あ……」

「……」

驚いた顔のアオイ。意表を突かれたという顔のティース。小首をかしげるファナ。

そこに三者三様の表情が並ぶ。

……一瞬の沈黙の後、ようやくアオイが口を開いた。

「そ、そういえば――ですが、敵が万が一あなたに照準を定めてきたら――」

「それは本当に“万が一”ね」

そんな心配を、シーラは苦笑で返した。

「その敵とやらが私のことを知っているはずないもの。大体、私は今日だって普通に学園に行く予定だわ。その途中で憲兵の詰め所に寄ってあげばいいだけの話じゃないの？ ……そうね。ファナの知り合いだったことを証明できる何かを持ってあげば」

「そ、それは確かに……」

アオイは納得して頷いた。

いくらなんでも、敵がこの近辺の住人全ての動きを見張ることができるわけでもない。……もしそれほどのことができるのであれば、身を隠しているファナのことなど昨日のうちに見つけているはずだ。

だからアオイが言うような“万が一”は、本当に“万が一”だった。それこそ、路上を歩いていて通り魔に会うほどの確率だろう。「ですが」

しかし意外にも反論したのは、穏やかな様子で何も考えてないような顔（と言っては失礼だが）をしていたファナだった。

「この近辺の住人に無差別に接触している可能性はありますわ。シーラさんにも接触して情報を引き出そうとするかもしれません」

「それは私が知らないフリをすれば問題ないことよ。……そりゃ、無差別に刺されたりさらわれたりするのなら話は別だけど」

「いえ、それは――この状況で無用な騒ぎを起こすことは、敵にとっても本意ではないはずですから」

少し弾んだ表情で語るアオイは、どうやらシーラの提案に傾きかけているようだった。

ファナも納得したのか黙って頷く。

もちろんティースにも反論らしい反論は思い浮かばなかった。

ただ、

「シーラ……お前、大丈夫なのか？」

「なにがよ？」

向けられた視線に、少しだけ遠慮がちにティースは答える。

「いや……なんとなくだけどさ」

明確な理由のないことだったから、そうとしか答えようがなかった。もちろんそれは彼女の身を心配したために出てきた言葉だったのだが、

「だったら余計な口は挟まないで」

彼女は迷惑だと言わんばかりに、いつものように不快そうな顔をするだけだった。

「……」

そう言われてしまうと返す言葉はない。

「……で、昨日は聞き忘れたんだけど」

シーラは一呼吸と紅茶のカップを置いて、再びアオイたちに向き

直った。

「その敵って言うのは、一体何者？ ファナを狙うぐらいだから、よほどなんでしょうけど。政敵みたいなもの？」

「あ、いえ、そういうものとは少し違うのですが……」

アオイの返す言葉は昨日と同じように歯切れが悪く、それ以上は口を閉ざして隣のファナを窺った。

それを受けて、ファナは少し考えるように首を傾けてみせる。

……それはティースに対して見せた反応と同じだった。彼らはやはりそのことをあまり話したくないようだ。

「どうしたの？」

だが、シーラは彼と違ってすぐに引き下がろうとはせず、アオイには期待できないと悟ったのか、すぐにファナへと視線を移動させて、

「ファナ？ 何か話せない理由でもあるの？」

「いいえ。ただ、お二人にご迷惑がかかるかもしれませんわ」

彼女の回答はティースが昨日聞いたものと同じだった。だからこそ彼は、それ以上の追求を避けたのである。

しかし——ティースが驚いたのは、迷った様子もないシーラの返答だった。

「だったら構わないわ。話してちょうだい」

「まっ……待て待て！ シーラ、ちょっと！」

ビックリしたティースはその肩を掴み、シーラを促して部屋の隅へと移動する。

「……なに？ ちょっと、離して」

シーラはうるさそうな顔で自分の肩を掴んだ手を払う。その表情には躊躇いなど微塵も感じられない。が、ティースは気にせず、ヒソヒソ声ながら強い調子で言った。

「何を考えてるんだよ！ そこまで首を突っ込んで……ファナさなんだって迷惑がかかるって言ってるじゃないか！」

「……お前こそ何を言っているの？」

シーラは逆に眉をひそめると、相変わらずの強い調子で言い返した。

「ファナを助けると決めたのはお前の方じゃなかったかしら？」

「そ、そりゃそうさ！　でも、だからって敢えて危険に飛び込むようなこと——」

「バカね」

反論を、シーラはその一言で一蹴した。

「敵のこともロクに知らずに手助けするつもりなの？　お前は男でしょ。自分が決めたことなら、徹底的にやり遂げなさい」

「け、けど——」

シーラの言葉はもったもたではある。そりゃティースだってできれば敵のことを知っておきたいし、多少なりとも首を突っ込んだ以上は、状況や事情を把握しておきたいとも思っている。

だが、それがさらなる危険を招く可能性があるというなら、話は別だった。

それが自分一人のことならいいが、彼が関わるということはつまり——

「まさかとは思うけど……お前、私のことを気にしてるんじゃないでしょうね」

まるで心を読んだかのように、シーラが絶妙のタイミングで口を開いた。

それは彼の正直な心を引き出すには充分すぎる“不意打ち”で。

「つ……いや……」

咄嗟にそう答えたティースだったが、一瞬の空白が彼の心情を如実に物語っていた。

「……」

その瞬間、シーラ表情が見る見るうちに不快そうに歪む。僅かに視線が斜め下に動くと、その右手が苛立たしそうに髪に触れ、無意識の動きで髪飾りへと移動する。

「——ふざけないで」

視線が再びティースに向けられたとき、その瞳には色が灯っていた。……今までの興味のない冷たい瞳とは違う。明らかな“怒り”の色だ。

「今以上にお前の世話になるつもりなんてないわ。やりたいことがあるなら、好きにやればいいでしょう？」

「好きなようにったって……」

口ごもるティースに、彼女の口調はさらに苛烈さを増した。

指先がその眼前に突きつけられる。

「お前、何か勘違いをしてるんじゃないの？ 私とお前は“つがい”でも何でもないのよ。……いざとなったら私はここを離れればいい。もうお前の助けがなくなっても、ただ生きていくことぐらいならできるわ」

「……シーラ」

彼女の言葉に、ティースは何も返すことができなかった。

——当たり前だ。彼女の言葉はつまり、彼の心配など自分にとって不必要なものだと切り捨てる発言だったのだから。

（勘違い……か……）

僅かに項垂れるティースを睨み付けるようにして、シーラは何も言わず、不機嫌そうにそのままテーブルへと戻っていった。

「——お話は、まとまりましたか？」

彼らの陰悪な空気を読めなかったのか、あるいはそれさえも彼女の中では“じゃれ合い”に変換されていたのか。

ファナが変わらぬ微笑みでそう尋ねると、

「……あの一応、断っておきますと」

一方のアオイはやはり空気を察したのか、やはり遠慮したような口調で付け加えた。

「聞いたから急にどうこうというものではありませんよ。ご迷惑というのは、ただ万が一の話をしているに過ぎませんから」

「ああ……」

遅れてテーブルに戻ってきたティースは、彼の言葉にただ頷いた。

「……話してくれ」

確かに本心では事実を知りたい。それを躊躇ったのはシーラの存在が少なからず影響していた。その彼女にあそこまで言われてしまったのでは、他に選択肢はなかったのだ。

「では……」

そんな彼に、アオイはもう一度ファナを見、彼女が頷いたのを確認するなり口を開いた。

「彼らは――“魔”なのです」

「“魔”？」

聞き返したティースに、シーラの怪訝そうな声が重なった。

「“魔”というと……つまり化け物のことかしら？」

「ええ、そうですわ」

頷くファナ。

「けど……ちよつと待って。俺が戦ったのは確かに人間だったぞ」
ティースの疑問は当然だった。

“魔”といえば普通、狼や牛の変化したようなモンスターや、人間に似ていても体長が四メートルあったりするようなもののばかりなのである。少なくとも、一般の人々が想像するのは大抵そんなものだ。だが、アオイは首を横に振って、

「“魔”の中にも人型の者が数多く存在するのはご存じでしょう？」

「そりゃ――」

言いかけて途中で口を噤んだティース。そう言われてみれば確かに思い当たるフシもあった。あの人間離れた動き、それが“魔”の者であつたとするなら充分に納得がいく。

だが、

（俺はそんなのを相手に戦っていたのか……？）

知らなかったこととはいえ、それが事実だとするなら驚くべきことだった。

それほど、一般的に“魔”と人間の力量差は大きいとされている。「でも、どうしてそいつらにファナが狙われたのかしら？」

続いたシーラの疑問もまた至極当然のことだった。

人間世界の政治や経済というものにそれほど興味を持ってないはずの“魔”が、わざわざ守りの堅いネービスの要人を狙う理由などなかなか考えにくい。

たまに人間と結びついてそういうことを行う“魔”の者もいないではないが、それはごく少数である。

「それは――」

だが、アオイの返答はそれとは違うものだった。

少しだけ居住まいを正すような仕草を見せ、そして言ったのである。

「姫――ファナ様がミューティレイク家当主であると同時に、デビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”の総帥でもあるからです――」

その4『夕日の中の犯意』

学園都市ネービス。その中央を走る大通りを北に真っ直ぐ歩き、普通の市民が住む一般住宅街と貴族や大金持ちの住む高級住宅街のちょうど境目を西の方角に向かって進むと、そこに高い壁に囲まれた大きな敷地がある。

一般住宅はもちろん、高級住宅街の敷地と比べてもまるで勝負にならないぐらいの大規模な、一辺がキロメートル単位であろうかという広大な敷地。

それこそがこのネービスで……いや大陸でも有数と言われる大貴族ミューティレイク家の敷地であった。

門をくぐり、そこから数百メートルを歩いてようやく到達する二つの大きな建物。左側が本館、右側が別館。この二つは内部通路で繋がっている。

右側——別館の玄関を抜けると、そこには少々奇妙な光景がある。天井を飾るシャンデリア。正面に位置する大階段。その他、豪華に屋敷内を飾り付ける装飾類。……そしてそんな玄関ホールには、それと全く対照的とも思える質素な丸テーブル群が設置されていた。まるで一般住宅街に見える屋外カフェテラスさながらに。

そのミスマッチ具合からして、丸テーブル群が後から設置されたものであることは疑う余地もない。

と、それはともかくとして。

今、その丸テーブル群の一つに二人の人物が腰掛けていた。

「……やれやれ。ようやく仕事を終えて帰ってきたと思ったら」

本来ならば平穏な朝食時を迎えているはずの屋敷は今、普段では滅多に見られないほどの騒動に見舞われているところだった。

なにしろ——

「いきなり総大将様の御姿が見えなくなってるとは、な」

呟いたのは額に灰色の布を巻いた青年。屋敷の雰囲気には到底そ

ぐわない、どちらかといえばワイルドな風貌の男だった。若干無造作に伸ばされた濃い金髪が微かに揺れている。

「キミらはまだ一仕事終えてきたんだからいいじゃない。……あたしたちなんて敵のアジトの見当つけて、さあこれからつてときよお？」

それに答えたのは頭に大きなお団子を二つ結った女性。女性……そう、少々子供っぽすぎる髪型だが、それ以外は——少なくとも見た目は——大人の女性だった。

「で？ どうすんだい、総隊長殿？」

男が少々からかいの混じった口調で問いかける。が、女の方は大して気に掛けた様子もなく、

「アオイくんがついてるんだし、滅多なことはないんじゃない？ きっと」

「どうだかな。相手にもよるんじゃないのか」

「ま、大丈夫でしょ」

女はパタパタと手を振って答えた。

「この世には、美形の男は死なないって法則があるのよ。知らなかった？」

「そんなもんがあつたら、世の中とつくに美形だらけになってるだろうよ。……ま、その理論だと俺も大丈夫なわけだが」

鼻だけで笑って、男は椅子から立ち上がる。

「とはいえ、手掛かりもなにもないこの状況だ。とりあえず俺たちも搜索に参加するしかない、か」

「そりゃいいんだけど、こうなった以上は屋敷の方も少し警戒した方がいいんでない？」

「そこまでは知らんよ。……ま、カノンの天才少年様にでも任しときゃいいんじゃないの？」

「大いに不安だけど。——あ、フィリスちゃん！ ちょっとこつち！」

「あ、はい！」

女の声と手招きに反応して、食堂に続く通路を歩いていた使用人が駆けてくる。

若干ながらクセのある髪が子羊を思わせる、生真面目で純朴そうな少女だった。歳は明らかに女よりも下、十代半ばだろう。

「なんでしようか、アクア様」

両手を前で重ねて畏まるフィリスに、女――アクアは頷いてみせて、

「んとね。あたしとレイくんは、これからファナちゃんを迎えに行くことになったから」

「え――お嬢様の居所がわかったのですか!？」

身を乗り出したフィリスだったが、アクアはすぐに手を振る。

「あ、ゴメンゴメン。迎えに行くってゆーか、探しに行く？」

「あ……そういうことですか」

フィリスは視線を落とし、見るからに落胆した。

「泣かしたな」

「泣かしてないっつーの」

横からの茶々をアクアは軽く流して、

「で、悪いんだけど、みんなに準備するように伝えて。あとついでに、レアスくんに留守番よろしくって頼んどいてくれない？」

「あ、はい。それは構いませんけど」

言ってから、フィリスは自信なさげに目を伏せて、

「レアス様、私などの言うことを聞いてくださるでしょうか」

「そりゃ大丈夫だろ」

笑いながら答えたのは、アクアの隣で二本の剣を背負った男――レイだった。

「あの天才様は、年上の女にゃ滅法弱いからな」

「はあ」

「心配するな、フィリス」

レイの表情は突然真剣な色を帯び、ゆっくりと伸びた手がそっとフィリスの両頬に重なった。元々の精悍なイメージがさらに際だつ。

「あ、あの、レインハルト様……?」

戸惑った様子の彼女と、視線が真っ直ぐに交差して、

「キミがいつものように微笑んでくれさえすれば、どんな男もその願いを断ったりはできな——」

「こら」

パコン! と、レイの後頭部が派手な音を立てる。

「って……!」

「ウチのフィリスちゃんを誑かすなんて、このおねーさんが許さないわよ」

音の主はアクアの手にいつの間にか握られていたスリッパだ。

「……人聞き悪いな」

と、レイは後頭部を軽くさすりながら舌打ちして、

「俺はただ、感じたことをそのまま口にしたつもりだが?」

「誰彼構わずそういうこと言ってなきや、信じてあげなくもないけどさ。——ああ、フィリスちゃんは気にしないでね」

「は、はあ……」

どうしたらいいかわからないという様子で佇むフィリスに、アクアは軽くウインクしてみせると、

「大丈夫大丈夫。心配しなくても、あ・た・し・の・フィリスちゃんにはぜえったいに手出しさせないんだか——」

パコン! !

「つた~~~~~!」

「お前もな」

スリッパはいつの間にやら持ち主を変えていた。

よほどクリーンヒットしたのか、後頭部を押さえたアクアは涙目で振り返って、

「……あ、あのねえ! あたしのはレイくんとは違うの! ただ可愛いものを愛でようという純真な、言うなれば芸術性に満ちた愛なのよっ!!」

「何が芸術だ。独占欲で満ち溢れてただろ」

「あ、あの――……」

そんな二人のやり取りに一人置き去りにされたフィリスは、どうしていいかわからずにオロオロするばかりだった。

アクア――アクアールビナート、二十三歳。

レイ――レインハルトⅡシュナイダー、二十歳。

公の決定事項ではないとはいえ、事実上、彼らこそがミューティレイク家の誇るデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”の総隊長及び総副隊長というべき存在であった。

その先行きに不安を感じたならば……その感性はおそらく正しい。

“魔”を狩る者、デビルバスター。

普通の人間、普通の武器では到底太刀打ちできない“魔”に対し、唯一対等に渡り合うことを許された者たち。それは“魔”に脅かされる人々にとっては尊敬と憧憬の的であり、その称号があるだけで何もせずとも一生を食べていくのに困らないと言われるほどのものだった。

さて……治安が良いとはいえ、やはり“魔”の驚異にさらされることのあるここネービスにおいて、デビルバスターといえばまず二つの有名な部隊が挙げられる。

一つはネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”

もう一つは、一般的には所属不明とされるデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”

前者はこのネービスに危機をもたらす大いなる“魔”を打ち払うために結成された部隊であり、後者は人々を脅かす“魔”を討つために結成された部隊とされる。わかりやすく言うと、前者は軍隊であり、後者は治安部隊といった感じであろうか。

ただし、前者が公的部隊であるのに対し、後者はあくまで私的部隊であり、だからこそその所属や素性は明らかにされていないので

ある。

——ティース宅へと話を戻すことにしよう。

「……」

「……」

シーラが家を出てからすでに十数分が経過している。

時折外の様子を伺ってもみるのだが、今のところは普段とそれほど大きな変化もない。ファナやアオイはもちろんのこと、顔を知られているかもしれないティースもなるべく窓から離れたところに待機していた。

そして何となく沈黙が訪れていたその場を破ったのは、相変わらずファナのそばに控えるアオイだった。

「……いくら“魔”の者とはいえ、この街のただ中でそれほど大っぴらに動くわけにはいかないはず。心配することはないと思います。あるとすれば、我々のことを目撃した付近住民が、敵に情報を与えてしまった場合ですが——」

少し心配そうなティースに、アオイは少し微笑んで言葉を続ける。「昨日、ここに案内される途中も少し周りに気を配ってましたから。暗くなりかけていましたし、目撃者はいたとしても少数。確率は低い、少なくともこの家を特定されるようなことはないと思います」

「……俺なんか、そんなの全然気にしてなかったよ」

そう答えて、ティースは改めてこのアオイという人物を見直した。……いや、正確に言うところ“見直し直した”とでもいうのだろうか。

「正直、あの奇襲の様子からすると、敵はすでに諦めて姿を眩ませているのではないかと、個人的にはそう思いますし……万が一、これから敵に発見されたとしても、私が何とかしますから」

そう言いきる彼は、朝の失態など帳消しにするほど頼もしかった。「……そういや、ディバーナ・ロウのことだけど」

ホッと胸を撫で下ろしつつ、先ほどの話を再び引っぱり出してく

ることにしたティース。

順調であれば、迎えがここにやってくるまでにせいぜい一時間弱。せっかくの機会だったので、今のうちに話を聞いておくことにしたのだ。

「アオイさんもやっぱりデビルバスターなのか？」

「……いえ」

ちよつと間があつて、アオイは答えた。

「正式なデビルバスターの称号は持ってません。私はあくまで姫のボディガード……いえ、ボディーガード兼執事ですのぞ」

「へえ……アオイさんぐらい強ければ、それでもおかしくないのにな」

そんなティースの感想に、アオイは胸に片手を置いて、

「私は姫に一生を捧げることがを心に決めてます。ですからそのような称号は必要ないんです」

「……へえ」

ティースは感心した。

どうやら彼は典型的な忠義に厚い人物らしい。

（これで朝に強かったら完璧超人なんだけどなあ）

つついそんなことを考えてしまったティースだったが、まあそれも愛嬌（？）というものだろうか。

ティースは話を続ける。

「でも考えてみれば、無償で動くデビルバスターを何人も抱えるなんて、ファナさんところぐらいの財力がなきゃできないよな」

その言葉は確かに正しい。自ら報酬を得て働く場合はもちろんのこと、誰かに雇われた場合でも彼らはかなりの高給取りだ。並の金持ちじゃ一人を抱えるのにも一杯一杯であろう。

だが、

「何故ですか？」

「え？」

ひどく不思議そうな顔をするファナに、ティースは一瞬呆氣に取

られて、

(……一般人とはやっぱり感覚が違うのかな)

素直にそう考え、やはり素直に答える。

「だってほら。デビルバスターってやっぱりものすごく高いお金を払って雇ってるんだろ？」

「……あ、そういうことでしたの」

ファナは納得したようにポンと手を叩いて、

「確かにそうですね。危険なお仕事ですし、他の使用人の方々よりは少しだけ多くお給金をお支払いしております」

「だろ——って」

ティースはその言葉を聞き咎めて、

「……少し、だけ？」

「はい」

眉をひそめた彼とは対照的に、ファナは手を合わせたままで朗らかに答えた。

「他の方々の五割増しぐらいお支払いしてますわ」

「……あ。あ、そうか、なるほどなるほど」

一瞬、啞然としたティースだが、すぐに思いついて、

「そっか。ミューティレイク家の使用人だもんな。俺が想像してるよりたくさんもらってるはずだし、その五割増しだから——」

「はあ」

ファナは怪訝そうに首をかしげた。

「厳密に比べたことはないですけど、他とそれほど大きく違うというのは耳にしたことないですわ」

「……そ、そうなの？」

辻褄が合わなかった。

無理矢理合わせることは可能だったが、それだとディバーナ・ロウのデビルバスターたちは、常識ではちょっと考えられないような報酬しかもらっていないということになりそうなのだ。

「あ」

複雑な表情の彼に、ファナは再びポンと手を叩いて、

「それ以外にも他の方と違うところがありますわ。……デビルバスターの方々にはお客様用の個室を使っていたいただきますの。それと朝昼晩の食事もちちらで用意させていただいてます。暇なときにはお昼寝の時間までついてますわ」

「……」

冗談なのか本気なのか、満面の笑顔でそう言い切ったファナに、ティースは何も言葉を返すことができなかった。

（普通の使用人の五割増し程度ってことは、えっと、多分——）
彼の頭の中でそろばんが弾かれる。

かなり曖昧な計算ながら、はじき出された答えはおそらく間違っ
てはいまい。

（……本当なのか？）

それは一般的にデビルバスターに支払われるといわれる金額の、
およそ五分の一以下だ。まあそれだって、来月の生活すら危ぶま
れている彼なんかにしてみれば夢のような収入であるが、しかしデビ
ルバスターという称号に見合うものとは到底思えない金額である。

彼女流の冗談なのか。あるいは真実なのか。

その答えは、彼女の隣にいる執事が明らかにした。

「その疑問はもっともだと思いますが」

主人とは違い、ティースの困惑を承知しているらしい様子でアオ
イは答えた。

「ティースさんが思っているほど資金が余っているわけでもない
ですよ。ディバーナ・ロウは私設部隊ですから公的援助が得られる
わけでもありませんし——」

「でも……そのデビルバスターたちはそれで納得してるの？」

アオイは苦笑した。

「ほとんどの方はやはり個人でやるか、ネスティースの方に行って
しまいますね。向こうは見合うだけのお給金がもらえますから」

「そりゃそうだろうなあ……」

というより、それでもなおディバーナ・ロウに所属している人間がいるということの方が驚きだ。

と、それが表情に出ていたのか、アオイはフォローするかのよう続ける。

「ただ、悪いことばかりではありませんよ。我々はサポートの方に力を入れてますから、働く環境は向こうよりいいはずですし、それに……」

ちよっただけ口調が曖昧になる。

「色々と——」

「みなさん、楽しい方ばかりですわ」

「……」

満面の笑顔で微妙にピントのズレた発言のファナに、ティースは一瞬だけきょとんとして、

「……はは」

そして思わず笑ってしまった。

（確かに……楽しそうではあるかな）

その総帥であるところの彼女を見る限り、ディバーナ・ロウという部隊は相当に働きやすい場所なのかもしれない。もちろん、実際に所属しているデビルバスターたちにはそれ以上の何らかの理由——アオイが言いかけたような何か——があるのだろうが……もしティースの前に同じ選択肢があったとしたら、あるいは彼もまたディバーナ・ロウを選ぶかもしれないかった。

（ま、俺なんかには全く縁のない話だけど……）

「……あ、そうそう。それについて昨日から言おうと思っていたんですよ」

アオイが急に名案を思いついたかのような顔をした。

「？」

不思議そうなティースの視線に、微笑みながら、

「私たちはデビルバスターの育成も行っているんですよ。もしよければ」

そう前置きし、あながち冗談でもないような表情で言ったのである。

「ティースさんも、挑戦してみませんか？」

「……え？」

戸惑うティースに、アオイは少しだけ身を乗り出して言葉を続けた。

「あれほどの実力があるのなら、ティースさんにも充分にその資格があると思いますよ」

「……？」

（“あれほどの実力” って――）

それが一体何を指して言ったのか一瞬だけわからなかった。が、すぐに気付いてティースは苦笑する。

「……あ、ああ。えっと……ほら。だからあれはまぐれみたいなものだって。大体、どうやって勝ったのかすら覚えていないよ」

だが、アオイはすぐに首を横に振った。

「夢中だったにせよ、あなたが“魔”の者に勝利したのは確か。――あなたの中にある素養が発揮されたからこそ勝てたんです。そうでなければ、まぐれやラッキーだけでどうにかなる相手ではありませんよ」

どうやらからかっている雰囲気は微塵も見られなかった。

「……」

啞然としたままでティースは黙り込んでしまう。

（俺が……デビルバスターに……？）

そんな大それた事、彼は考えたこともなかった。

確かに彼も人並みに剣の腕に自信を持っではいる。が、それはあくまで普通の剣使いとしてのレベルの話だ。人外のものを相手にするデビルバスターともなれば、また話が変わってくるだろう。

「訓練次第では、そのときの力をいつでも発揮できるようになると
思います」

「……」

アオイの口調はほんの僅かに熱を帯び始めていた。

「もしティースさんがその気になってくださるのなら、その訓練からデビルバスター試験まで全て私たちが面倒を――」

「アオイさん。困ってらっしゃいますよ」

それを止めたのはファナだった。

「は……」

わからない顔をするアオイだが、考え込むティースの様子を見て自分が熱くなっていたことを悟ったようだ。

「あ、す、すみません。勝手なことばかり喋って……」

「あ、いや、別に構わないよ」

恐縮するアオイにティースは手を振ってそう答えたが、

「ただ――うん。どっちにしても俺には無理だと思う。そんな根性ないし」

笑いながら、少し冗談に紛らせた。

「大して大きな志も持っていないしね。アオイさんみたいに、立派な信念みたいなものがないから」

「……そうですか」

残念そうなアオイ。

どうやら彼は本気でティースを引き込みたかったらしく……先ほどの賃金条件などから邪推するなら、ディバーナ・ロウは慢性的な人材不足なのかもしれない。

「誘ってくれるのは嬉しいけど……」

「ティースさんには他に目標があるのですわ」

「……え？」

横からの言葉にティースがファナを見ると、彼女はニッコリと微笑んで言った。

「シーラさん、サンタニアで薬草学を学んでいらっしゃるそうですね」

「あ、ああ、そうだよ」

「サンタニアで？」

アオイは驚いた顔をした。高名な学園だけあって彼にとっても意外な事実だったのだろう。

「そういえば昨日いただいた傷薬も……もう痛みもほとんどないですし、市販の薬よりよほどよい出来だったので不思議だったんですけど――」

そんなアオイに、ティースは頭を掻いてちよつとだけ誇らしげに答えた。

「あれはあいつの作った薬だよ。勉強してない割に色々な薬を作るのは得意みたいで……って、ファナさん、それはシーラから聞いたの？」

「はい。昨晚、色々お話ししていただきましたわ。シーラさんのこと……もちろんティースさんのことも」

「色々……？」

「詳しい事情はお尋ねしませんでしたけれど、ティースさんはシーラさんの学費を稼ぐために頑張ってらっしゃるそうですね」

「あ、まあ……」

その言葉を聞いて、一体どこまで喋ったのかと少し不安になる。彼女――シーラは気に入らない相手に対しては素っ気ないし当たりもきつい。それは彼を見ていればよくわかるだろう……が、決して根っから気難しいわけではなかった。少々高圧的なところは性格だが、普通に接していれば決して人当たりは悪くない人間だ。

特に……今朝の様子から予測するに、ファナは彼女にとって“好印象”に分類された模様であり、それならば本当に“色々なこと”を喋っていてもおかしくないのである。

（まさか、俺の恥ずかしい過去の話とか喋ってないだろうな……）それが彼の不安の正体だった。

心当たりはありすぎるぐらいだ。何しろ古すぎる付き合い。お互いにお互いの恥をいくつも所有している関係だ。

……もちろん彼が抱えている彼女の秘密に関しては、その先端でも匂わせようものならとんでもない仕打ちが返ってくるのが目に見

えている。だから彼がそれを他人に話すことはまかり間違ってもありえないのだが……その逆がどうなのかはわからない。

「シーラ、俺について何か言ってた？」

結局、ティースは我慢できずにそう問いかけてしまっていた。

「はい。……シーラさんをお願いして、たくさんお話ししていただきました」

あっさり頷いたファナに、おずおずと尋ねるティース。

「そ、それで……どんな悪口を言ってた？」

「悪口？」

「だらしないとか要領悪いとか頼りないとか？」

言っていてあまりに情けないが、それは彼自身が自覚している弱点である。それに普段から正面切って言われまくっていることだから、彼にとってはダメージが少ない。

恐ろしいのは、その具体的事例を挙げられている場合だった。

だが、

「はあ。そういう類のことはおっしゃってませんでしたわ」

「じゃあどんな悪口を――」

「……」

ファナは何か不思議なものを見るかのような目でティースを見た。それから少し考えるように視線を泳がせて、

「ティースさんは……シーラさんのことがお嫌いなんですか？」

「……え？」

一見、前後の繋がりがないように思える問いに、ティースは一瞬だけ言葉に詰まった。

「いや、俺がどうこうじゃなくて――っていうかむしろ、あいつが俺のことを嫌ってるっていうか……」

「はあ」

「ほら、見ればわかるだろ？　なんだかわかんないけど、最近はおとんど邪魔者扱いでさ。……ああ、これって娘に疎まれる父親と同じなのかな」

最後は少し冗談に紛らせた。ティースも別に、ファナに対して愚痴るつもりはなかったのだ。

「……」

ファナは再び思いを巡らせるように首を傾け、それから少し……ほんの少しだけティースの真意を探るかのように上目遣いになって、「お二人の事情はわかりませんので、私には何とも言えませんが……それはティースさんの思い違いだと思いますわ」

「……はは、ファナさんって変わった見方するよなあ」

気を遣われているのかと思って、ティースは笑いながらそう言った。

だがそれは決して自虐的になっているわけではない。確かに普通の人が彼らの会話を聞けば、決して仲の良いやり取りだとは思わないはずだった。

もちろん彼の方は、彼女に対しての悪意などこれっぽっちも持っていない。が、その逆がどうなのかは——少なくとも彼女の態度を素直に受け止めるなら——おそらくティースの言葉が正しいと言えるだろう。

しかしそれでもファナは言葉を続けた。

「昨晩は、私がシーラさんのベッドをお借りしましたの」

「え？ ……ああ」

急に話が変わって戸惑うティースだったが、そんな彼女の反応にも少しは慣れたようですぐに苦笑を返す。

「あいつならやりそうだなあ。客を俺のベッドになんて寝かせられない、だろ？」

「はい。そうおっしゃってました」

ファナは素直に頷いて、それからニコリと微笑んだ。

「ですから——ティースさんはきつと愛されておりますわ」

「は？」

今度はまるで理解できなかった。隣のアオイでさえもわからない顔をしているぐらいだから、ティースにわかるはずもない。

(……やっぱお金持ちって変わった人が多いのかなあ)

そんなことを心で呟くティースだったが、彼女のそれは金持ち云々とはおそらく関係ないだろう。

「ティースさんはもちろん、シーラさんのことを愛していらっしゃるんですね？」

続いたファナの言葉に、ティースは先ほどの意味を理解することを諦め、すぐに気持ちを切り替えて答えた。

「……そういう言い方をすると何だかな」

照れたように頭を掻く。

もちろん彼女の言う“愛してる”に特別な意味など何も含まれていないことは、その前後の会話から理解している。何しろ、彼女はまだ二人のことを兄妹だと思っているはずなのだ。

だからティースははっきりと答えた。

「そりゃあ、そうでなきゃこんなことしてないよ。——とにかく、あいつを無事に卒業させることが今の俺の一番の目標だからね」

「ご立派ですわ」

「はは……—ありがとうございます」

心からの応援の意を込めて向けられたその言葉に、ティースの気分は少しだけ明るくなった。

——実を言うと、彼はシーラに言われたことで少しだけ落ち込んでいた。先ほどの言葉通り、彼女の卒業に全てを尽くしているというのが彼の現状なのだ。そんな彼女にあんなことを言われたのでは、落ち込むという方が無理な話だった。

「ありがとう、ファナさん」

もう一度礼を言って、そしてティースは大きく息を吐く。

(そう……なんだよな)

そして再確認する。

それ以外のことなんて考える余裕はない。ましてデビルバスターになるなんてこと、どう間違っても有り得るはずがなかった。そう。

少なくとも……今回の、この出来事がなかったならば。

日が西に傾き始める。

ネービス大通りの喧噪は最高潮を越え、ここからは淋しくなる一方。頻繁に行き来していた馬車、学園群から戻ってくる学徒たち、買い物に現れた主婦、あるいは元気に周囲を走り回る子供たち。

美しいブロンドの髪の少女――シーラは、その喧噪の中、通い慣れた大通りのとある角を左に曲がっていった。

そこは大通りの綺麗に舗装された道と違い、少しだけデコボコになっている。歩きにくいというほどでもないが、ハシャギ回る子供が足を引っかけて転ぶ光景を良く見掛ける場所だ。

「危ないわよ――」

鬼ごっこでもしていたのか、前方不注意で自らにぶつかりそうになった子供に軽く注意を与え、再び前方に長く伸びる自らの影を辿っていく。

「……」

立ち止まってふと背後を振り返ったシーラ。

特に変わった光景は見られない。

朝も結局特に変わった出来事は発生しなかった。

（ファナはこの付近が監視されてるかもしれないと言っていたけれど……）

もちろんこういうことに関しては素人以外の何者でもない彼女だ。たとえいつもと違う“何か”があったにせよ、それを察することはできないかもしれない。

それに、彼女が憲兵隊の詰め所に立ち寄ってからすでに六時間ほどが経過している。いくらなんでも全て解決している頃だろう。

（もう少し、あの子と話してみたかったけれど……）

シーラが、二度と会う機会はないであろうファナという名の少女

の顔を思い浮かべ、そして……再び正面を振り返った刹那だった。

「――！」

「お嬢さん」

赤色の光を全身に受け、壁に背を預けるように一人の男がそこに立っていた。

先ほどまでそこは無人だった。少なくとも彼女の視界には入っていなかった。……それが、知らぬうちに三メートルほどまで接近していたのだ。

頭に巻かれたバンダナのような布。身に纏った雰囲気は旅人風といえはいいのか、ならず者風といえはいいのか。少なくとも堅気の人間には見えない。

「悪いな。怖がらないでくれ。少し聞きたいことがあるだけだ」

男は自らの格好に自覚があるのか、少し口調を緩めてそう言った。
「……いきなりそこに立っていたからビックリしただけよ」

だが、すぐに我を取り戻しいつもの強気でそう返答するシーラ。もちろん一人歩きの女が彼のような身なりの男に止められれば、少々警戒して当然のところだ。が、今はまだそれほど日が沈んでもいないし、数分置きとはいえこの辺りにはまだ人通りもある。声を上げれば少なくとも数人には声が届くだろう。

「そうか、失礼した。で、ちょっと聞きたいんだが……この辺りで変わった格好の女性を見なかったか？」

「変わった格好の女性？」

すぐにそう切り返したシーラだったが、男の言葉が何を意味するのかは理解していた。

（……ファナのこと、ね）

確かにあれだけお金のかかった服装なら、この辺りでは充分に“変わった格好”である。

その次にシーラの頭に過ぎった疑問は、目の前のこの人物が敵なのか味方なのかということだった。

「……曖昧すぎてわからないわね」

即座にそれを判断して自然に返答した彼女の言葉は、少なくとも男に不信感を与えることはなかっただろう。

（でも……まだ解決してなかったのかしら……）

あれから時間は充分に経っており、常識的にはすでにファナは発見され全てが解決した後だと考えるべきだ。が、例えばシーラが家を出た後で“何か”が起こり、そのために憲兵隊がファナを発見することができなかった……それは全く考えられないことではない。

（それとも、敵がまだ気付いていないだけ……？）

言いしれぬ不安が彼女の胸を襲った。

早く家に戻って事実を確かめたい衝動に駆られる。が、目の前の人物が何者であるかわからない以上、軽はずみな行動は取れない。

シーラは細心の注意を払って言葉を続けていくことにした。

「誰か捜しているの？ ……格好からすると、あなた傭兵かしら？」

「ま、そんなところか」

「どんな人を捜しているの？」

「とある貴族のお嬢さんだ」

「家出か何か？」

「ああ——そんなところか」

男は細かいところまで語りたくないようだ。

「……残念だけど」

少し考えたフリをして、結局シーラはそう答えることにした。

「わからないわね。他を当たって」

「そうか」

頷いた男とすれ違い、シーラは振り返ることなく進んでいった。

……彼女の判断は至極当然だ。今の会話だけでは相手が何者なのか判別できない。無理に探ろうとすればボロが出る。ファナを探している味方という可能性もあったが、敵がフリをしているという可能性も捨てきれないのだから。

（でも——）

すっかり全て解決したものだと思っただけに、これは彼女に

とっても予想外の出来事だった。

角を曲がり、男の視界から消えたことを確認してその足は自然と速くなる。

（何があったのかしら……）

ほんの少しだけ彼女の鼓動が速くなる。

遠くに聞こえる街の喧噪。

長く伸びる影。

オレンジ色に染まる地面。

見慣れた景色。見慣れた通学路。帰路の奥に映り始めた、見慣れた自宅……それを視界に捕らえ。

そして——路地から飛び出してきた“何か”に気付いたときは、すでに遅かった。

「……!？」

突然彼女を襲った凶器は、彼女に声を出すことさえも許さなかった。

（な……に……!？）

それが痛みであることさえも認識できないまま。彼女を貫いた衝撃は、一瞬にしてその感覚全てを奪った。

——訪れたのは、闇。

（あ……）

最後の一瞬に彼女の脳裏に映ったものは何だったのか。

それを認識することすら許されることはなく……そして、彼女の全ては闇に包まれた。

その5『二人の協力者』

「ふうっ……」

ため息をともなつて勢いよく落ちてきた大人一人分の体重に、ベッドが僅かに軋む音を立てた。

窓から射し込む陽光はオレンジ色を纏い、狭い部屋の中を哀愁の色に染め上げている。

「疲れたあ……」

安堵の息を吐いたティースは自宅のベッドにその身を預けていた。まるでクッションのないベッドであっても、精神的に疲れて帰った彼の体を休ませるには充分すぎる機能を持っているようだ。

（……なんか、夢みたいない出来事だったな）

結局、彼を襲った一連の出来事は、予想していた障害など何一つなく落着した。あの後、すぐにこの家を訪れた者はミューティレイク家のデビルバスターを名乗り、ファナとアオイは扉越しのその人物の言葉を肯定した。

それで終わりだった。

まるで平穩、予想外の出来事など起きることもなく、拍子抜けするほど呆気ない幕切れ。

……いや、彼にとって予想外だった点が一つだけ。

（まさか女性のデビルバスターだなんて思わなかったけど……なんて言ったっけ、あの人）

しかし結局はその程度のこと。その後、ティースは屋敷へと招かれ、お礼代わりという豪勢な昼食を振る舞われ、そこで少しだけファナと話をした後、今、こうして馬車で送られて帰ってきたのだった。

（でも、いくら見た目が可愛い女の子でも、やっぱり世界が違うんだよねあ）

彼の頭に焼き付いていたのは、少し前まで彼の目前に広がってい

た屋敷の光景。アオイの存在と高価な服装だけではいまいち現実味がなかった“ミューティレイク公”という存在だった。

屋敷、食事、周りを固める使用人の群れと、予想していたとはいえあまりの大貴族ぶりに、彼が少なからず萎縮してしまったのは言うまでもない。

しかしそれもすでに過去の話。

「うっ……ん——っ——……って、あれ？」

大きく伸びをしたティースは、太股に微かな違和感を感じて身を起こす。そしてその原因を探るまでもなく、彼は思い出していた。

「ああ、そっか。ファナさんにもらったんだっけ」

彼がポケットの中から取り出したのは、二つのアクセサリーらしき物体。片方は十字架の模様が入ったブローチ……というかバッジのようなもの。そしてもう片方は綺麗な薄緑の石がはめられた、こっちは紛うことなきブローチ。

もちろん彼の関心を引いたのは、そのブローチの方だ。

（無造作に入れてたけど……まさか本物じゃないよな）

改めて眺めたティースは、今更不安になっていた。

（大したものじゃないとは言ってたけど……でも、相手が相手だしなあ）

本物であれば、それがエメラルドという名の宝石であることは、いくら彼でも知っていた。バッジの方は彼自身に、ブローチの方はシーラにということと特に何も考えずに受け取ってきたのだが、本物だとしたら——彼の価値基準から言って——気軽に受け取るようなものではない。

「ま、シーラに見せてみりゃ、本物か偽物かすぐわかるか」

立ち上がったティースはバッジを自らのポケットに、ブローチはテーブルに置いて、もう一度ベッドに横たわる。

——目を閉じた彼の周囲を、途端に静寂が襲った。遠くに聞こえる喧噪。どこから流れ込んでくる肌寒い空気。

（ファナさん……もう会うことはないだろうけど、でも、変わった

人だったなあ)

ティースの日常に飛び込んできた非日常。あっさり解決したとはいえ、それは彼にとってなかなか体験できない貴重な経験だった。こうして微睡みながら回想していても、ちょっとした高揚感が体を包むのがわかる。

(怖い思いをするのはゴメンだけど、また会って話をしてみたい……シーラとも気が合いそうだったし……)
ふと。

「あれ……？」

我に返って、唐突に感じた違和感。

「……シーラ？」

体を起こしたティースの耳には、もちろん返事など聞こえなかった。返ってきたのは相変わらずの静寂。聞こえなくなりつつある喧噪。

時計を見る。

それが指し示している時刻を見て、ティースの胸が一つ大きな鼓動を打った。

「おい……シーラ？」

微かな残光が部屋を照らしている。

静まり返ったそこにはもちろん誰もいない。

……この辺りは決して裕福な地域ではない。夜になればその大半を暗闇が支配してしまうし、もちろんそこを一人で歩くことにはそれなりの危険が伴う。

浮かれていてティースは気付かなかった。この時間であれば当然、“彼女が帰ってきていてしかるべき”だということに。

(なんで……帰ってきてないんだ……?)

シーラという少女は頭の良い少女だった。たとえ帰りに恋人に会って寄り道をしていたとしても、決して危険な時間帯にまで遅くすることはない。遅くなると言って出掛けた昨日ですら、もう少し早い時間に帰ってきていたぐらいで。

まして……今日はいつもとは違う状況だ。いくら彼女の肝が据わっているとしても、寄り道をしてくることは考えにくい。

(今日の……状況……?)

ざわっと。

何かがティースの背中を駆け上がった。

「……っ!」

ティースは反射的にベッド脇の剣を手にとって家を飛び出した。

強く吹きすさぶ風。

薄い闇に染まりつつある街並み。

浮かれていたその気分が一気に冷めきっていく。

悪い予感……いや、それは予感などという曖昧なものではなかった。状況を分析した結果による、充分に起こりうる現実の予測だ。

(だって……あいつが危険に晒される理由なんてないじゃないか……)

胸が締め付けられるような感覚に、彼の鼓動は徐々にその速さを増していった。

太陽は今、まさにその姿を完全に隠そうとしている。

足取りは徐々に速く。

(報復? 通報したことへの……いや、まさか……)

彼の心はすぐにその可能性を否定した。

それは決して希望的観測というわけではない。何百人もの人間が行き交うこの地で、学園に行く途中の彼女が憲兵隊の詰め所に寄り、そしてファナの居場所を伝えたなどということが、敵に知られるはずはないのだ。

(なら——)

だが、その結論が出ることはなかった。

何故なら、

「——!」?

彼の結論が導き出される前に、状況が結果を示してしまったからだ。

「これ……は……」

自宅からそれほど遠く離れていないその場所。ティースの目に映ったのは路上に落ちていた小さな髪飾りだった。

「あいつの……髪飾り……」

背筋から脳天に向かって、突き抜けるような震えが走る。

小刻みに震える手を伸ばした先——僅かな残光を浴びた髪飾りは、その年季を示すかのように鈍い光を反射して——そして。

「なんで……っ！」

点々と、路上に乾いてこびりついた血の色が、ティースの中から冷静さを奪い去った。

「なんだよ……どうなってんだっ!!」

辺りを見回しても、血の跡はそれ以上発見できない。その姿を探そうにも辺りはすでに人気もなく、なんの気配も残されていないかった。

それが何の故に起きた出来事なのか、彼にはわからない。

だが、彼の目の前に突きつけられた事実はただ一つだった。

——失踪。

この世界において、一度失踪した人間を見つけることがどれだけ困難であるかということ。まして——“五体満足で”という条件付きであれば、それがどれだけ至難の技であるかということ。

早いうちに発見できれば、命は助かるかもしれない。だが、それは個人の力では絶対に無理だった。

(どうする……どうすりゃいいっ!!?)

拾った髪飾りを握り締め、ティースは頭を掻きむしった。

頭を過ぎる最悪の可能性を懸命に押し流し——憲兵隊、傭兵仲間への依頼——それらの対策が一通り頭を巡った後、

(……!?)

最後に脳裏に留まったのは、天啓とも思えるひらめきだった。

少なくとも、絶望的な気分にあった彼に、ほんの僅かな希望を持たせるに足る名案。

（それしか……ない！）

後先のこととか、それが可能であるかどうかとか、そういったものは今の彼の頭になかった。

そして、完全に日が落ちた街の中。

僅かな希望に縋り付くように、ティースは駆け出した――

「――賭けはあたしの勝ちかな？」

「なんの賭けだ？」

ミューティレイク邸。一時は騒然としていたこの屋敷も、その主が無事戻ってきたことでいつもの平穏を取り戻していた。

夕食を終えた邸内、玄関ホールの丸テーブル群には朝の二人の姿がある。

「美形の男は死なないって言ったでしょ？」

頭に二つのお団子を結った女性――アクアがそう言って微笑むと、対する灰色の布を頭に巻いた男――レイが苦笑して反論する。

「死んだなんて俺は一言も言っていないと思うが」

頭の後ろで腕を組み、足をテーブルに乗せて椅子を傾け、そこで微妙なバランスを取っている。どうにもだらしない格好だったが、誰一人としてそれを注意するものはいなかった。

「そうだった？」

「しかもなにも賭けちゃいない」

「あら。フィリスちゃんの所有権を賭けたんじゃないっけ？」

「……それが本当なら、あの二人には改めて失踪してもらわなきゃならんな」

「こらこら……お二人でなんて物騒な話をしてるんですか」

眼鏡の奥で苦笑しながら現れたのは、血で汚れた正装から綺麗な正装姿に着替えたアオイだった。

「あらあら、アオイくん。今回はご苦労さんだったね」

アクアは手招きしてアオイに席を勧め、アオイはその座席に腰を下ろして真面目に返答する。

「それが私の使命ですから」

「んで。アオイくん、なんか飲む？」

「あ、いえ」

アオイは手を振って断ると、少し姿勢を正し改まって口を開く。

「それと、今回のことではお二人に迷惑をかけてしまったようで、申し訳ありませんでした。私が不甲斐ないばかりに……」

だが、アクアは笑いながら手を振って、

「しょうがないっしょ？ 下位族とはいえ、まさか人型の“魔”が四匹も紛れ込んでるなんて思わないしさ」

「ですが……」

慰めとも取れるアクアの言葉に、アオイが少し視線を伏せる。

と、その瞬間。

「……うわわっ！」

突然アクアが身を乗り出した。

「ちよつとアオイくん！ 今の！ ……今の顔、もう一回！」

アオイはビックリした様子で、

「……え？」

「ちよつとレイくん、見た今の！？ 自分の不甲斐なさを責めるアオイくんの図！ ……もう、おねーさん、胸がキュンときちゃったわっ！！」

「あ……あの、アクアさん……」

アクアは勢い良くアオイの両手を掴むと、キラキラと目を輝かせて言った。

「結婚して、アオイくん！ 今すぐ！ ここで！！」

「い、いや、アクアさん……その、ですね」

「ああん！ その困った顔も可愛い……っ！！」

「あ、アクアさん！ ちよつと待ってください——」

今にも抱きしめて頬ずりでもしそうな勢いのアクアに、何とか逃

れようとするアオイだったが、椅子の背もたれが邪魔で下がることすら出来ない。

……と。そんな彼のピンチを救ったのは、ボソッと呟いたレイの一言だった。

「やれやれ。適齢期を過ぎた女はがつついててみっともないな」

「……」

ピタッとアクアの動きが止まる。

そしてゆっくりと視線がレイの方へ。

「……ちよつと、レイくん？ 世の中には言っていることと悪いことがあるのよ？」

「本当のことだからな」

途端に、アクアはテーブルを叩いて反論した。

「過ぎてないってば！ お肌はまだ十代の輝きを保っているし、屋敷のみんなだって若い若いって言うてくれるもんっ！！」

「それは単なるお世辞か、お前の妄想だ」

「そ、そんなことないわよお……ね、アオイくん！ あたしってまだまだイケるわよね！？」

再びアオイに迫るアクア。

「は、はあ……」

常識的には否定できないところだったが、肯定すればまた先ほどの光景が繰り返されるかもしれない。アオイにとっては板挟みで非常に辛いところだった。

結局、彼は誤魔化すように軽く咳払いをして、

「そ、それよりも、できれば経過の報告をお願いしたいのですが……」

「……そうだな」

「ちよつ、ちよつとレイくん！ なに、その含み笑いはっ！」

「特に意味はないさ。……街道の“魔”はひとまず片付いた。なかなか姿を現さないんで苦労したかな」

「そうですか。ご苦労様です。……それで、アクアさんの方は？」

「うゝ……」

まだ何か言いたそうなアクアだったが、話題が移ってしまったことで仕方なさそうに答えた。

「……あたしの方は一応まだ調査中。だけど、敵の隠れ家らしきところの見当はついたわ」

「やはり……例の失踪は“魔”の仕業ですか？」

「そうらしいわね。いなくなったのは近所でも可愛いって評判の女の子ばかりだから、もしかしたらどっかの変質者か人買い連中の仕業かと思ったけど……どうも常識じゃ考えられない芸当もやってのけてるみたいだし」

真面目な顔に戻ったアクアは、紅茶を口に運びながらため息をつく。

“魔”の中にもいるのよね。可愛い女の子好きってのが」

「ああ、いるな」

鼻を鳴らしたレイが皮肉っぽい笑みを浮かべる。

「可愛い娘の、苦痛にのたうち回る姿が好きな奴とか、な」

「……」

僅かに眉をひそめたアオイに、アクアはさらに言葉を付け足した。
「それと、もしかしたらその犯人、ファナちゃんを襲った連中と関係あるかもね」

「？ なにかそう思える要素があったんですか？」

アクアは首を振って、

「ううん、ただの勘だけど。根拠といえば……そうねえ。同時期に別の、しかも人型の“魔”が事件を起こすなんて珍しいってことかな」

「ウチの主人を襲う計画の傍ら、自分の趣味にも時間を割いていた、とかな」

と、レイが補足する。

「それは確かに考えられますが……とすると、敵はそれほど統率が取れた集団ではないということですかね」

「そうだとしたら、ね。“例の奴ら”とは別じゃないかな、とあたしは思う。……とにかくウチのチームは明日、明るくなってからそのアジトらしき地下通路を当たってみるつもり」

「わかりました。……ファントムだけで平気ですか？ 幸い、今なら第四隊以外は待機中ですし——あ、カノンは明日出立の予定でしたから——その」

アオイはチラッとレイを見て、

「ナイトは——お疲れでしょうが、もしどうしても危険そうであれば……」

「ああ、いいってば、そんなの」

アクアは笑いながらヒラヒラと手を振って、

「ウチのチームって信用ない？ そりゃ見た目はあんま強そうじゃないけど、それでも結構骨のあるメンバーなのよ？」

「いえ、そういうわけでは——」

「なんてったって、隊長がこんなに可憐な乙女なんだから！」
胸を張って断言したアクア。

強いこととはまるで関係なかったが、本人は気付いているのかいないのか。

「は、はあ」

「……」

今度はレイも無言でため息をつくだけだった。

そのまま目を閉じ、背もたれに身を預けて——

「ん？」

閉じかけた目が開いた。同時にもたれかけていた上半身がゆっくりと起き上がると、その視線は玄関の方へと向いて、

「外が騒がしいな」

「え？」

不思議そうな顔のアオイに、少し耳を澄ませた様子のアクアが付け加えた。

「ホントね。門の方が少し騒がしいみたい」

「……お二人とも耳がいいですね」

アオイが感心したのも当然のこと。この屋敷本館から正門までは数百メートルの距離がある。もちろん玄関の扉が閉じていることから考えても、よほどの騒ぎでなければ聞こえないはずだった。

「一体なんでしょうか……あ、フィリス！」

「はい！」

やはりタイミング良く近くを通りかかったフィリスがアオイに呼び止められ、クセのある髪を僅かに揺らせてやってくる。

「アオイ様、なにか御用でしょうか？」

アオイは頷いて、

「門の方が騒がしいみたいですけど、何か知りませんか」

「え？ ……あ、じゃあ私ちょっと見てきますね」

「頼みます」

「はい」

小走りにフィリスが玄関へと駆けていく。玄関の大きな扉を開けて外へ。夜とはいえ、敷地内は明かりが灯っていてそれほど暗くはない。

「……また酔っぱらいがくだを巻いているのかもな」

レイが言ったのは過去実際にあった出来事だった。一般住宅街と近いことから、再び起きても不思議ないことではある。

「あー、だとしたらフィリスちゃんを行かせたのはマズかったかもねえ。あの子、絡まれやすい体質だし」

「まさか」

アオイが笑って返したところで……結局、二分も経たないうちにフィリスが戻ってきた。

「あの……アオイ様」

戻ってきたフィリスは急いで来たようで、ほんの僅かに息を弾ませている。その様子を怪訝に思ったアオイは、

「どうしました？ なにか問題が？」

「はい。あの……」

フィリスは胸の前で軽く拳を握り、少し戸惑ったように答えた。
「若い男の方が、しきりにお嬢様に会わせてくれ、と騒いでいるんです」

「姫に？」

当然、アオイは眉をひそめる。その表情の中には、もちろん非常識な来訪者に対する不審と、加えてわざわざ伺いを立てに来たフィリスへの戸惑いが入り混じっていた。

「……どこの誰ともわからない方に会わせるわけにはいかない、そう言って断ってください。どうしてもというなら、後日、明るい時間に改めて連絡して――」

「あ、そう言ったんです。でもどうしても今、時間がないんだって……その……」

フィリスは少しだけ目を伏せた。

「本当に必死で、それで私、執事様に取り次いでみますって……」
「やれやれ」

呆れたように呟いたのはレイだった。

「お前は人が良すぎるな。いくら必死だろうが、無茶なものは無茶だと言ってやれ」

「そ、そうなんですけど……」

その言葉に、フィリスはしょぼんと落ち込んで俯いてしまった。

「で、でもその方、目に涙まで浮かべて……私、男の人があいう風に泣くのってあまり見たことないからビックリしちゃって……」
「……ふう」

アオイは少しだけ好意的な意味合いのため息を吐いて、それからゆっくりと立ち上がった。

「その方のお名前はお聞きしましたか？」

「あ、はい」

その動きを見てフィリスは少しだけ表情を明るくする。

……が、その次に続いた言葉は、逆にアオイの表情を陰しくさせる結果となった。

「ティーサイトⅡアマルナ様とおっしゃってました」

「……え!？」

過剰すぎるその反応に、フィリスはビックリした顔をし、その場にいた他の二人も怪訝そうに彼を見つめる。

「どうしたの、アオイくん？」

「なんだ？ お前の知ってる奴か？」

「いえ、それが……」

すぐには答えず、アオイは少しだけアタフタした様子を見せると、
「フィリス！ その方、すぐにここにお通しして……あ、いえ、やはり私が直接行きます！」

「あっ……アオイ様！」

「アオイくん!？」

疑問を投げ掛ける面々にアオイは途中で振り返り、言った。

「ティースさんは……彼は昨日、私と姫を匿ってくれた方なんです！」

「……なんだって？」

「え、じゃあ……昼間のあの男の子？」

「ほ、ホントですか!？」

「何かあったのかもしれませんが……レイさんたちもそこにいてください！」

そう言って……驚く三人を後目にアオイは屋敷の外へと飛び出していったのだった。

——ティースが門番と押し問答をしていたのはどれぐらいの間だっただろうか。

途中、無理矢理押し通ろうとしたティースと門番の間で剣呑な空気が流れたが、直後に登場した使用人らしき少女、そしてすぐ後にやってきたアオイによって、その状況はなんとか打破されていた。

そして屋敷へと連れられたティースが事情説明に要した時間がだいたい七、八分。

「……なるほど。だいたいの事情はわかりました」

焦りと緊張によって上手く説明できたかどうかティース自身もあり自信がなかったが、それでも頷きながら彼の言葉を聞いていたアオイは、どうやら全ての事情を把握したらしい。

その場にはあと二人の人物がいる。

ティースとアオイが座るテーブルのもう一座席。

「ティースくん、だったわよね。……キミが住んでいるのはどの辺り？」

そう質問してきたお団子頭の女性。ティースにも見覚えのあるその女性は、昼間、ファナを迎えに来たデビルバスターを名乗るアクアという女性だった。

「東地区の十一ブロック……十八の七です」

ここに通されて少しはティースの気持ちも落ち着いていた。が、その反動からか、質問に答える口調は若干弱々しい。

「東の十一ブロックか……」

考え込むアクア。

その横から、一人だけ隣のテーブルに座った男が口を挟んだ。

「そりゃ多分、アオイやファナを匿ったこととは関係ねえな」

レイと名乗ったその男は額に灰色の布を巻き、無造作に伸ばされた髪も、どこかワイルドな服装も、到底屋敷にそぐわなかった。ただ、アオイやファナのことを呼び捨てにすることから考えて、彼もやはりデビルバスターなのかもしれない、とティースは思った。

「別に責任逃れをするつもりはねえが、ウチには一切責任のない事件だ。……ま、運が悪かったと思うことだな」

「なっ……!!」

「……レイさん!」

激昂したティースが食ってかかる前に、アオイから叱咤の声が飛んだ。そしてアオイはすぐにティースに向き直ると頭を下げて、

「すみません。彼はどうしてもああいう言い方をしてしまうもので……」

「責任の所在は明らかにしとくべきだと思うがな」
だが、レイは黙らなかつた。

「あとでその女が死んだのは俺たちのせいだとか言われちゃ、たまつたもんじゃー」

「……んなことはどうでもいいだろうっ!!」

「……」

激昂して立ち上がったティースを、レイは横目で鋭く見据えた。
その瞬間、彼の体を強烈な威圧感が襲う。

「っ……」

一瞬だけ怯んだティースだったが、直後、胸に溢れ出した炎がすぐさまそれを打ち消した。

そして拳を握り締めたまま、

「俺はただ、あいつを助けて欲しいだけなんだっ！ 責任なんてどうでもいいっ!!」

「……」

無言のまま、レイはティースから視線を外して目を閉じる。……
一瞬、その口元に微かな笑みが浮かんだ。

アクアが間に割って入る。

「レイくん……今のはキミが悪いんじゃない？ ティースくんも、落ち着いて」

「……っ」

奥歯を震わせてレイを睨み付けるティースだったが、アクアの宥める声に唇を噛みしめながら再び腰を下ろす。

「っ……」

途端、その顔が意識せずに歪むと、ティースは俯き、祈るように両手を組んだ。

「責任なんてどうでもいいから……だから……頼むからあいつを助けてくれよ……」

「ティースさん……」

そんなティースの姿にアオイは目を細め、それから無言で隣に座るアクアへと視線を向けた。

「ええ」

アクアは頷いて、

「十一ブロックだとしたら、例の事件に巻き込まれた可能性が高いわね。……ティースくん」

「……」

その言葉にティースはいつの間にか目に溜まっていた雫を拭い、赤くなった瞳をアクアへと向ける。

アクアは言った。

「あたしもレイくんが言うように、キミがアオイくんたちを匿ったことには直接関係ないと思う。……キミは知ってた？ キミが住んでいる十一ブロック近辺で、最近、若い女の子が頻繁に行方知れずになっている事件のこと」

ティースはハツとして、

「それは聞いたことが……じゃあまさか……」

「わからないけど、冷静に考えればその可能性が最も高いんじゃないかな。……大体、アオイくんたちを襲った連中がその彼女をさらったって、何も良いことなんてないし……その彼女って、もしかして美人じゃない？」

「……たぶん」

おずおずと頷いたティースに、アオイが付け加えた。

「多分なんてもんじゃないですよ。怖くなるくらいに整った顔立ちの子です」

「それなら、尚更可能性は高いわね」

ティースは身を乗り出した。

「そ、それで！ もしそうだとしたら助ける方法はっ！？」

「……」

一瞬黙ったアクアに、ティースはテーブルに擦りそうなほど頭を

下げて、

「頼む！ あとでなんでもするから、助ける方法を教えてくれっ！
」

「ちよつ、ちよつと。だから落ち着いて、ティースくん」

あまりの勢いに、アクアは両手を前に出して制止する。

「別に出し惜しみするつもりはないから。キミはアオイくんやフアナちゃんの恩人だし、出来る限りの協力はするつもり。……ただ、ね」

「……ただ？」

顔を上げたティースに対し、アクアは手を下ろしてゆっくりと息を吐いた。

「難しい、と思う。……一応、前からこの事件については調査してて、犯人の隠れ家らしき場所の見当はついてるの」

「じゃあすぐに……！」

「それがダメなの。……地下通路だから」

「地下通路……？」

その単語に、ティースは哑然とした。

「ええ。……わかるでしょ？ こんなに暗くなってからじゃ危険すぎて行けないの。まして、相手が“魔”である可能性が高いたら、尚更」

「……」

ティースは絶句した。

——このネービスの地下には大規模な通路が存在している。それは過去、大陸がまだ戦乱の最中にあった頃に造られたもので、ネービス公ですらその全貌を掴んでいないとされている。そのため、大多数の入り口が封鎖された今でも地下通路への入り口は数多く存在しているというのが実際のところだ。

しかもそこは“とある理由”から昼間だけしか明かりがなく——逆にいえば昼間は明かりがあるということだが——夜にそこに入るとなれば自ら照明になるものを持っていかなければならない。

それはつまり敵の標的になりやすいということを意味し、アクアの言う“危険”というのは至極もつともな意見なのである。

だが……ティースがそれで納得できるはずもなかった。

「そんな！　じゃあシーラは……あいつは……！？」

「……」

アクアの沈黙が何を意味するか……それは鈍いと言われるティースであってもすぐに理解できた。

少し沈痛な面持ちでアクアは答える。

「あたしもチームの隊長として、部下の子たちをそんな危険な目に合わせるわけにいかないの。……助けてあげたいのは山々だけど……明日の朝、日が昇るまで待って」

「っ……そんなこと言ってたら、あいつが！」

「わかるけど、そのために犠牲者を増やすわけには――」

「っ！」

ティースは唇を噛みしめて、椅子を蹴飛ばすように立ち上がった。「なら、その場所を教えてくれるだけでもいい！　あんたたちに迷惑はかけない！　俺が……一人で行く！！」

「ちよっ……それこそ無茶！　死に行くようなものじゃない！」

「それでもいい！　それでも――っ！！」

暴走気味のティースに、アクアの口調も熱を帯び始める。

「よくないってばっ！　それに――こんなことは言いたくないけど、その子が生きてる可能性は限りなく低いんだから！」

「！！」

アクアの言葉は、まるで鈍器のような衝撃でティースの頭を打った。

「……アクアさん」

アオイの呼びかけに、アクアはしまったという顔をしたが、自らの言葉を引っ込めることはしなかった。

少し口調を落ち着かせて、言葉が続ける。

「考えてみて、ティースくん。この事件、二日に一人ぐらいの割合

で人が消えてるの。……それがどういふことかわかるでしょ？ まさか犯人が地下通路で十数人もの子たちを養っているはずはないんだから」

「っ……」

「犯人はおそらく“魔”よ。おそらくは……若い女の子を嬲り殺すことを楽しんでる。彼女が消えたのが夕方以前なら、もう……」

「そんな……」

足が震え、ティースは崩れ落ちるように膝をついた。

「そんな！ そんな馬鹿なっ！！」

振り下ろされた拳に、木製のテーブルが派手な音を立てる。が、そこから流れた痛みは、麻痺しかけた彼の脳にまでは到達しなかった。

「嘘だ……嘘だ……っ！！」

そのままティースは泣き崩れた。無情に突きつけられた現実、頭の中が真っ白になって何も考えられなくなる。

「……」

沈痛な表情でそれを見つめるアオイにも掛ける言葉はなく、同じような表情で視線を伏せたアクアも軽い慰めを言うのが精一杯だった。

「……可能性がないとは言わない。明日になったら私たちがそこに向かうから……でも、過度の期待はしない方がいいわ」

「っ……うっ……！！」

祈るように組んだティースの両腕の震えがテーブルに伝わって、紅茶のカップが耳障りな音を立てた。

「……アオイくん。今日は……彼、ここに泊まっていってもらったら？」

アクアの提案にアオイは頷いて、

「そうですね……フィリス？」

いつの間にかその状況を遠巻きに眺めていた数名の人物——その中にいたフィリスが、今にも泣き出しそうな顔でやってきた。

「客室の準備をお願いします」

「は、はいっ!」

そう答えたフィリスは泣き崩れるティースを視界に捕らえ、まるでそれに触発されたかのように目に涙を溢れさせると、逃げるように中央の階段を駆け上がっていった。

「……」

「さ、ティースさん……それに、可能性はゼロではありませんから……」

アオイが支えるようにティースの両肩に手を添え、慰めの言葉をかける。アクアもそれを手伝うように手を伸ばしかけた。

……と、そのとき。

「慰めはやメろよ。可能性なんてゼロに決まってる」
「っ!」

視線を上げたティースは声の主……レイを睨み付けた。

顔は怒りに歪み、その視線には殺気すらこもっているようだったが、レイは動じた様子もなくテーブルから足を下ろし、今度は正面からティースに向き合うと、

「二日に一人はさらっていつてるような奴だぞ? ……原型もわからんようなバラバラ死体になって発見されるのがオチだ。間違いないね。賭けてもいい」

「っ!」

「レイさん! ……ティースさんっ!」

「……貴様あああっ!」

今度こそティースは怒りを抑えることができなかった。地面を蹴った体はレイに向かって真っ直ぐに突進する。

そして、握り締めた右拳がレイの顔面を捕らえ——いや。

「そんなに怒るほど大事か? ……そいつは恋人か? 親よりも大事な人間か?」

まるで平然としたまま、首を僅かに傾けるだけでレイはその拳を避け、その手首を捕らえていた。

続いて振り上げられた左の拳は、宙で止まっている。

……お互いに素手であっても、二人の間の力量差は明らかだった。左拳を振り下ろしたところで、それがレイの体を捕らえることはないだろう。

「お前みたいなの……お前みたいなの……なにがわかるっ!!」

ティースは声を振り絞るように叫んだ。

頭が熱くなって何もかもわからなくなっていた。

絶望、憤り、無力感……あらゆるものがない交ぜになって正常な思考を遮ってしまう。

ただ、頭に浮かんだ言葉だけが口をついて出た。

「あいつは宝なんだ！ 他に変えようのない大事な……俺の全てだったんだっ!!」

レイは手首を掴んだまま、怒りに震えるティースの顔を無表情に見つめていた。

「それを……それをお前は……っ！」

「……勘違いするな。俺がそいつをさらったわけじゃない」

振り上げたままの左拳をチラッと見て、レイはほんの僅かに口元を緩めた。

それが微笑んだものなのか、あるいは嘲笑したものなのか、その状況ではいまいち判断できなかった。

「……っ!! くそっ!! ちくしょおおおっ!!」

振り下ろされた左拳は力なく垂れ落ちた。その双眸からは再び涙が溢れ、レイの膝に点々と染みを作っていく。

「なるほどな」

笑みを浮かべたままそれを見つめていたレイは、泣き崩れるティースを振り払うように椅子から立ち上がった。

そのまま崩れた彼を横目で見ると、すぐさまアクアへと視線を移動させる。

そして言った。

「アクア。その隠れ家ってのはどこだ？」

「……レイくん？」

怪訝そうなアクアの声。レイはそれには答えずに背を向け、遠巻きに眺めていた使用人の少年に向かって言った。

「パース、俺の剣を持ってこい。それとカンテラもだ」

「……!？」

「レイくん!？」

怪訝そうに顔を上げたティースに、アクアの驚きの声が重なった。

レイは二人の疑問には何も答えないままだったが、

「アオイ、今晚は特に何もないと思うが、一応あんなことがあった後だ。俺がいない間も警戒を怠るなよ」

その言葉から、彼の意志は明白だった。

アクアはレイに詰め寄って、

「まさか行くつもりなの!？ ……無茶よ! いくらあなたたちの

チームでも、この暗闇の中じゃ何があるかわからないでしょ!！」

「誰がナイトを連れていくと言った？」

額の布を巻き直し、少年が持ってきた二本の半楕円型の剣を背負ってレイはようやく振り返った。

「行くのは俺と、お前だ」

「え、あたし!？」

ビックリした顔で自分を指し示すアクア。

「チームを危険な目に合わせたくないんだろ？ だったら俺たちだけで行けばいい。何の問題がある？」

「そりゃ、でも……ううん、確かに……あたしとレイくんなら可能かも……」

アクアは得心が行ったという顔で頷いた。

……その流れに口を挟んだのは、意外な人物だ。

「ちよっ……ちよっと待ってくれ!」

「……なんだ？ まだ何か文句があるのか？」

あまりに予想外の展開に戸惑っていたティースは、まだ状況を理解できていないようだった。

フラフラと立ち上がり、涙に濡れた顔を拭おうともせずに、

「な、なんで……あんだ、さっきまでは……」

レイは鼻を鳴らした。

「誰も助けに行くのに反対だとは言っていない。俺はただ、責任の所在をはっきりさせろと言っただけだ」

「で、でも、助けに行っても無駄だって言っただじゃないか……」

「明日になれば、な。……二日に一人ってことは、逆に言えば半日ぐらいは生きてる可能性もあるってことだ。そうだろ、アクア？」

「……可能性は低いけど、明日よりは、ね」

アクアは正直に答えた。

「だ、そうだ。……どうする？ 別にお前が望まないなら、俺だって無茶なことをするつもりはないぞ」

「っ——」

「もちろんお前には照明を持って先頭を歩いてもらう。一番危険な役だが、少しの可能性にでも命を賭けられる……それぐらい大事なんだろう？」

「あ……」

ティースの口から咄嗟に言葉が出てこなかったのは、決意が鈍ったからじゃない。

胸がいっぱいになったからだだった。

「当たり前だ！！ 何でも……何でもやってやるっ！！」

「よし。……言っておくが期待はするなよ。……アクア。準備はいいか？」

「全然オッケー！」

どうやら使用人が持ってきたらしい手甲を両腕に詰め、それを軽く打ち鳴らしてアクアは答えた。

「アオイ。ファナには後で事情を説明しといてくれ」

「はい。……本当にお二人で大丈夫ですか？」

「狭い地下通路なら少ない方がかえっていい。……アクア、お前は大丈夫なのか？」

「大丈夫に決まってるっしょ！」

からかうようなレイの口調にアクアは明るい声を出した。

「あたしを誰だと思ってるの！ 泣く子も黙る神風チーム、ディバーナ・ファントムの隊長よ！！」

「……」

ティースは彼女の真剣な様子しか見てなかったのも、そのテンションに少し驚いたが――先ほどまでとはまるで違うその吹っ切れた様子から、どうやら助けに行けないことが彼女にとっても本意だったらしいことが充分に伺えた。

「よし」

再び、レイは口元に笑みを浮かべる。

今度こそは、間違いなく好意的に解釈できる笑みだった。

「俺もアオイが褒め称えるほどの美人ってヤツを見てみたいからな……お前、ティースとかいったか？」

「あ……ああ！」

カンテラを受け取ったティースは、預けていた自らの剣を腰に纏い、乾きかけていた涙を拭って力強く頷いた。

「言つとくが、自分の身は自分で守れ。相手次第じゃ、俺たちにも余裕があるとは限らないからな」

「ああ……わかってる……わかってるさ！」

二度、三度と頷いたティースに、レイは満足そうに言った。

「よし、行くぞ」

そのまま先頭を切って歩き出す。その後を、強く拳を握り締めたティースが続く。最後にアクアが振り返って、状況を見守っていた面々に軽い口調で言った。

「じゃ、行ってくるから。あとよろしく」

「はい。……三人とも、気をつけてください」

そしてアオイ、フィリス……それにティースには名前もわからない数人の使用人たちに見送られ、三人は屋敷を出発したのだった。

その6『惨劇の地下通路』

——薄暗い石造りの部屋。

壁に据えられた照明は僅か一つで、十メートル四方ほどの部屋を照らすにはあまりに弱々しい光だった。四方は全て壁。扉らしきものは見当たらず、一見出口のない部屋のように思える、そんな場所。“そいつ”は待ち続けていた。——いや、待ち焦がれていた。

“そのとき”が訪れる瞬間を。

冷たい石の床に腰を下ろし……果たして何時間待っただろうか。時間の感覚は薄かったが、半日は経っていないだろう。

「っ……ここ……は……？」

女が目を覚ましたのを知って、“そいつ”は歓喜に打ち震えた。照明が暗すぎて、女の動きはその大半が薄暗い闇の中に隠されている。が、“そいつ”にとってはそれで充分だった。“そいつ”はただ、近付いたときに女の表情さえ確認できればそれで良かった。

——数名の仲間たちはすでにその場を去っている。作戦の失敗からここにはもう用はないと踏んだようだったが、“そいつ”に言わせればそれは実にナンセンスな行動だった。

せっかくこれほど大規模な人間の街に侵入し、これほど便利な隠れ家を見つけたというのに、作戦が失敗したからといってすくすくと引き下がるうなどは。

そもそもが、“そいつ”には本命の作戦などどうでも良かったのだ。“そいつ”にとっては、自らの欲求を満たしてくれる“こっち”の方が大事だったから。

ゆっくりと立ち上がり、手にした剣で石の床を擦る。

「っ!？」

その音に、女はようやく“そいつ”の存在に気付いた。透き通るほどに美しいブロンドの髪が揺れる。

「お目覚めか」

「お前……は……っ」

女は“そいつ”の顔を知っているかのような反応を見せた。当然だった。今まで意識を失っていた女にしてみれば、つい先ほど出会ったばかりという感覚だろう。

「なんのつもり……こんな……」

まだ鳩尾に痛みが残っているのか、女は時折顔をしかめる仕草を見せた。が、目には強い輝きが宿ったまま。微かな恐怖を浮かべてはいても、屈服しようという意志は微塵も感じられない。

「いいな、その表情……」

“そいつ”は舌なめずりした。

空腹にも似た感覚。目の前のご馳走にすぐさま手を伸ばしそうになるが、“そいつ”はすんでのところでその欲求を堪えた。

——まだ。まだ早い。もう少し——もう少しの味付けが必要だ。

「ああ、先に言っておくが……」

女が懐を探ったのを見て、“そいつ”は口を開いた。

「懐に忍ばせていた護身用のナイフラしきものだけは捨てさせてもらった。ま、あってもどうにもならんとは思うが一応、物騒だからな」

「……」

女は意外に慌てた様子もなかった。右手を懐に入れたまま、壁に寄りかかるようにして立ち上がる。左手は近くに落ちていた木の棒を拾った。

そのまま視線は油断なく辺りを窺う。が、どこにも出口がないことを悟ったのか、形の良い眉が少しだけ曇った。

——女の心の動きは、“そいつ”には手に取るようにわかる。これまで何人もの女が同じ状況で色々なアクションをしてきた。が、個人差こそあれ、基本的に思考の辿る道はそう大差ない。

最初に状況に戸惑い、“そいつ”の存在に恐怖を覚え……あとは絶望に全てを諦めるか、少しでも突破口を探るか、二つに分かれる。この女は明らかに後者だった。しかも、その中でも圧倒的に強い

意志の輝きを放っている。

“そいつ”の背筋は言いしれぬ期待感にぞくぞくと震えた。

「さあ……二人きりのショーの始まりだ……」

カリカリと剣先が石に擦れて心地よい響きを奏でる。

「っ……」

その距離が五メートルを切った辺りで、女が動く。

女が手に取った木の棒は、“そいつ”が自ら用意したものだ。抵抗する相手を追いつめていく方が楽しいから、という単純な理由によって。

今までの女どもは二通りだった。木の棒の存在にも気付かず——あるいは気付いても拾わずに——そのまま殺されるか、あるいは木の棒を手にして無謀にも殴りかかってくるか。

……だが、今回は少し違った。

「なに……？」

女の手を離れ、正確に顔面向けて飛んできた木の棒を、“そいつ”は少し驚きながらも右手の剣で叩き落とす。

何の躊躇もなく、唯一の武器を手放した女は初めてだった。

「!？」

直後、その向こう側からこぶし大の塊が飛んでくる。

——石か。

驚愕から一瞬体が固まったものの、“人”よりも遙かに強靱な肉体を持つ“そいつ”の体は即座に反応し、返した刃でその塊を叩き切った。

だが、

「っ……!!」

その瞬間、“そいつ”は自らの失敗を悟った。

こぶし大の塊——小さな小袋のようなもの——そこに入っていた粉末が、ともに“そいつ”の顔に降りかかったのだ。

「っ……ゲホッ、ゴホッ!!」

コシヨウだろうか。目から鼻から喉の奥にまで侵入した刺激物が、

“そいつ”の視界を奪う。

だが、

——小賢しい。

一瞬の混乱から、“そいつ”はすぐに冷静な思考を取り戻した。視界が見えなくとも、女の動きは気配ですぐに読みとれる。逃げ場がないことを悟っていたのか、女は攪乱するように大きく弧を描く動きで突進してきている。

途中、微かに石床を擦る音がしたところをみると、先ほど叩き落とした木の棒を再び拾ったようだ。

——面白い。

背筋が震えた。今までに感じたことのない感覚だ。

かつて、ここまでの抵抗を見せた相手はいなかった。大抵は最初から絶望しているか、あるいは木の棒を叩き落とされて戦意を喪失するかのどちらかだった。

抵抗すればするほど、追いつめ甲斐がある——

女のささやかな抵抗など“そいつ”にとってなんの危険もない。だから女が知恵の限りを尽くして反撃してくるこの状況は、“そいつ”にとって喜び以外の何物でもなかった。

女は躊躇うことなく殴りかかってきた。微かに光を戻し始めた“そいつ”の視界に、女の美しいブロンドの髪、意志の強い瞳……これ以上ないほどに整った美しい容貌が映る。

「ははっ……はははははっ！！！」

「っ!？」

女の顔が歪んだ。

甲高い音。

その手に握られた木の棒が大きく宙を舞い、壁に備え付けられた照明の下に落ちる。

一瞬、女の顔に浮かんだ怯えの表情。

——それがまた、心地よい。

「ぐっ!!！」

振り上げた足が女の脇腹を捕らえ、女は苦痛に顔を歪ませて石床の上に転がった。

「げほっ……げほっ……!!」

脇腹を押さえ、痛みに耐える表情の女。

“そいつ”は抑えきれなくなって、愉悦の笑みをそこに浮かべた。

剣先が再び石床を擦って綺麗な音色を奏でる。

今までにないほど――視界がグラグラと揺れるほどに――“そいつ”は興奮した。

「最高だよ、お前……今までで最高に強い。今までで最高に美しい……もっと! もっと抵抗してみせろよ……はは……ははは……ははははあっ!!」

“そいつ”は大笑いした。

「っ……」

すでに女に武器はなく、おそらくこの場から逃れる術は一つもない。

だが、女はそれでも変わらぬ瞳で“そいつ”を睨み付けていた。

「お前……異常だわ……」

女に残された抵抗は“言葉”しかなかった。

「何を言う。お前たちだって同じだろ？」

――愉快。

女の侮蔑の言葉でさえも、今は“そいつ”を愉快にさせるだけだった。

「お前たちだって子供の頃、逃げまどうトンボを網で捕らえ、その羽をむしって遊んだだろう? ……それが俺たちと共通の本能ってやつだ。標本になったトンボの羽など、誰が面白がってむしるものか」

「……それは違うわ」

女はさらに反論してきた。

「それはまだ命というものを理解していないから。……でもお前は違う。お前は命というものを理解しながら、それを弄ぼうとしている。」

生きるためでもなしに、楽しみのためだけにそれを奪おうとしてる。それは本能でもなんでもない」

薄暗い部屋の中には似つかわしくない、太陽のような瞳が“そいつ”を見据えた。

「お前は——ただの異常者よ」

「ふっ……ふふっ……」

興奮が“そいつ”の体を突き抜ける。

——この状況にあってさえ、強さを失わない女の美しい瞳。そしてそれとは対照的に、隠しようもなく恐怖に震えているその華奢な体。

何もかもが“そいつ”を興奮させていた。

またとない美しい獲物。それは長いこと追い求めていた、至上の快楽だった。

一瞬、意識が遠くなるほど、産まれてこの方感じたこともないような異常な興奮。

——それをこれ以上抑えておくことは、“そいつ”にとってもはや不可能だった。

背筋をゾクゾク震わせながら、“そいつ”の右手がゆっくりと動く。

そして、口元を大きく歪ませながら死の宣告をした。

「ほんの数分間だけ長らえた、キミの命とその瞳に乾杯——」

「!!」

鈍色のきらめきが女の肩口に吸い込まれた瞬間、一瞬だけ時が止まった。

“そいつ”は少なくともそう感じていた。

「————ああああっ!!」

女の口から溢れた絶叫は、言葉では言い表せない叫び。

その声に、“そいつ”の頭の中は真っ白に染まった。

断続的な快感。

緊張を失った頬はだらしなく歪み、引きつった笑みが止まらない。

——狂宴は続いた。

“そいつ”の耳に、女の絶叫が聞こえなくなるそのときまで——

ヒタ、ヒタ。

ヒタ、ヒタ。

足音を立てないように、ティースは真っ暗な通路を慎重に歩いていた。

古ぼけた石の通路は、大きな地震でもあれば崩れてしまうのではないかというほど、あちこちがヒビ割れている。

天井のどこどこに生えている白っぽいカビは、“陽カビ”と呼ばれる特殊なカビ——一説によれば“魔”たちが自らの住む世界から持ち込んだものらしい——で、その名の通り、日中にはほんの微かに発光する性質を持っている。ネービスの地下道にはほとんどの場所にこのカビが生えているらしいが、もちろん夜の今はまるで発光していない。

斜めに長く伸びた影は壁から天井にまで及び、歩くたびに前方の通路が徐々に迫ってくるかのような感覚だった。

「ティースくん。そんなに足音を潜めなくてもいいから」

ティースの斜め後ろを歩くアクアがそう言った。

「この真っ暗な中でカンテラ持って歩いてるんだから。近くまで行ったらどうせ気付かれるんだし。……そりゃ大声をあげるとかってのは論外だね」

「え、ええ……」

とはいえ、ティースの声は緊張に強張っていた。

当然だ。カンテラの明かりは所詮十数メートル先を照らしているに過ぎない。暗闇の先からいきなり何が飛んでくるかもわからない状況で、緊張するなという方が無理だった。

既に鞘から抜きはなった剣を握るティースの手は、汗でベトベト

に湿っている。

それでも彼の歩みが緩まないのは、もちろんシーラを助けたいという一心によってのものだった。

「特に気配はないが……息を潜めてる可能性もあるからな」

逆の斜め後ろを歩くレイは、ティースとは対照的に剣も鞘に収めたまま。さすがに慣れているのか気を張っている様子も――おそらくはそう見えるだけだろうが――それほどは感じない。

それから再びしばらく歩いて……アクアが首をかしげて呟いた。

「おつかしいな……確かもうそろそろのはずなんだけど」

レイが頷いて答える。

「逃げたか？ ……もしファナを狙った連中と同じなら、すでに姿を眩ませてもおかしくないな」

「でもそうすると、ティースくんの奥さんをさらってつたのは別の奴ってことになるんじゃない？」

「さあな。そうなら……いいやら悪いやら。ま、人買いにでもさらわれたんなら、命だけは無事の可能性があるか」

「……」

後ろで繰り広げられる会話――しかもアクアの言葉の一部には多大な誤解が含まれていた――にも、ティースは何も答えなかった。

答えられる余裕がなかったのと、事実が何であれ、今はただ彼女の無事を願って足を進めるしかないのだと、そう理解しているからだった。

「……？」

ティースは立ち止まって後ろを振り返る。

「右。そこに通路があるから」

「あ……」

てっきり行き止まりだと思ったティースは、右手の一メートルぐらい上がったところに通路が続いてることに気付く。

「気をつける。……気配はないが、登った瞬間、ドン！ って可能性もあるからな」

「ああ……わかった」

レイの言葉に頷いて、その通路の先を慎重に窺ったあと、素早く登って体勢を整える。

……が、特に変わったことは起こらなかった。

「いよいよおかしいな」

後ろから登ってきたレイが首をひねる。

「え？」

不思議そうな顔で振り返ったティースに、微かに潜めた声でアクアが言った。

「すぐそこ……右に曲がったところに部屋があるはず。……そこよ」

「……」

カンテラで照らすと、通路の先はすぐ行き止まりになっていて、確かに右手に入り口のようなものがある。が、扉があるわけでもなく、もしそこに誰がいるならこちらの明かりにはとつくに気が付いているはずだった。

もちろん息を潜めているという可能性がないでもない。

ゴクリと喉を鳴らし、ティースはゆっくりとその部屋へと――

「待て」

「え？」

怪訝そうなティースに、レイはアクアに目配せして、

「その先は、俺が行く。予備のカンテラに明かりを灯せ」

「え……？」

突然の言葉にティースが理解できない顔を見ると、アクアは少しだけ視線を泳がせながら答えた。

「……おそらく、その部屋には誰もいないわ。気配を消しているにしても……多分、間違いない」

「じゃあなんで……」

「死臭がする」

「……！」

レイの言葉に、ティースは初めて自らの鼻を襲う異常な匂いに気

付いた。

視覚と聴覚に意識を集中する余り、嗅覚の方がその機能を麻痺させていたのだ。

「……たぶん、キミは行かない方がいい」

「それって……」

アクアの言葉の意味は、ティースにも理解することができた。

人の気配がない……その理由が、否応なしに彼の頭の中で形を結び始める。

「……」

口元を震わせて見つめたティースに、アクアは無言を返した。

その間に、もう一つのカンテラを手にしたレイが無造作に部屋の中へと入っていく。

さすがに片手は背中中の剣に添えていたが、どうやら彼はそこに誰もいないことを確信しているようだった。

「ティースくん……」

レイの姿を放心したように見送るティースの肩に、アクアはそっと手を添えた。

「いい？ もしどうしても我慢できなかったら、あたしの胸を貸してあげる。思いつき泣いてもいいから……だから、落ち着いて現実を受け容れるのよ？」

「……」

ティースはただ黙って頷いた。

半分、放心したような状態だった。

——漂ってくる死臭は強烈な腐敗臭だ。しかも明らかに大量の。

（……こんな……）

深い絶望感……ティースの胸に芽生えていたその奥から、言いしれぬ怒りが沸き上がってくる。

（こんな……馬鹿なことがあるかよ……）

レイが部屋に入っただけから数秒。

中からは何の反応もない。

ティースのいる場所から見限り、それほど広い部屋だとは思えなかった。そこに少しでも動くものがあつたなら、すでに反応があつてもいいはずだった。

それはつまり――

（……こんな……っ！）

ティースの握り締めた拳から、僅かに血が伝った。

「……ティースくん」

肩を掴むアクアの手に入力が入る。

（……許せない……許せない……っ！！）

手が震えて、抑えきれない怒りが込み上げる。

「レイくん？ どう？」

二分ほど経ってレイが部屋から顔を覗かせた。その表情は明らかに嫌悪感に染まっている。

「ひどいな。まるでハイエナが食い散らかした後だ」

一瞬だけティースを気遣うような仕草も見せたが、レイは結局言葉が続ける。

「あちこちに色んなパーツが飛び散っている。あれじゃ犠牲者が何人いるのか数えるのも大変だ。……それと」

レイがそっと手を差し出す。

そこに握られたモノは、カンテラの光に照らされて微かに金と鈍色の輝きを放った。

「！？」

それを見たティースの目が大きく見開かれ、顔が見る見るうちに青くなる。

……その反応でレイはすぐに察したようだった。

「そうか。……落ちてたものの中じゃ、一番新しかったんでな」

「それは……あいつの……」

「……」

無言でそれを差し出すレイ。

震える手で受け取ったティースは絶望感を表情に滲ませながら、

それでももう一度カンテラの明かりに照らした。

——金色の装飾が施された小さなナイフ。だが豪華な装飾を見ればわかるようにそれは実用品ではない。刃もついていないし、思いつきり力を込めれば突き刺すぐらいはできるだろうが、実際のところは護身用にも役不足の代物だ。

「……あいつの……持ってたヤツだ……！」

間違えようもなかった。

ティースは良く知っている。それはシーラが昔から持っている……彼らの故郷にいた頃から持っていたものだから。

「っ……！」

溢れてくる涙に全身の力が抜け、ティースはその場に崩れ落ちた。

「……っ……うっ……！」

間違いなく彼女はここにいたのだ。

それがどういふことかなんて、考えなくともわかることだった。

「レイくん。……やっぱり生存者はいないの？」

耐えきれないという様子でアクアがそう問いかけたが、レイは鼻を鳴らした。

「あれで生きてるヤツがいるなら、あまりお近づきにはなりたくないな。……アクア、そいつを頼む。俺はもう少し状況を把握してる」

そう言って、レイは再び部屋の中へと入っていった。

「……」

掛ける言葉もなく立ち尽くしたアクアは、黙ってティースを見つめる。

「……なんで……！」

「うん……」

頭を振って、泣き叫ぶようにティースは言った。

「なんで……なんでこんなことが！　なんでこんなことが起きるんだよっ！　どうして……っ……！」

「……それが、この世界の現状だから」

アクアは淡々と答えた。……いや、その表情を見れば彼女もまた辛い気持ちなのは明らかだった。ただ、感情を爆発させようとしているティースの前で、彼女が先に感情を露わにするわけにはいかなだけのことだ。

「だからあたしたちみたいな存在がいる。……全部を防ぐことは無理だけど、でも出来るだけこういうことをなくそうと努力してるわ」
「でもこんなの……こんなのひどすぎる……っ!!」

ティースの拳は、力もなく冷たい石床にうち下ろされた。

アクアはそれでも淡々と答える。

「あたしも……何度もこういう状況に接してきた。正直、何度も挫けそうになったわ。……でも、目を背けちゃダメだと思ったから。背けたらヤツらの思うつぼだと思ったから」

「……」

「キミも……お願いだから自暴自棄にならないで。辛いのはわかるけど――」

「でも……俺は……どうすればいいんだよ……」

「……」

アクアを見上げたティースは、もう何がなんだかわからないといった様子だった。

焦点が合っていない。

錯乱したような、放心したような、そんな状態だ。

「大袈裟なんかじゃない……あいつは本当に俺の全てだった。疎まれたり、邪魔者扱いされたりもしたけど……でも！ それでも俺は……っ!!」

「……ティースくん」

そっと、アクアの体温がティースを包み込んだ。

「っ……!!」

同時に、行き場を見つけた悲しみが彼の中から溢れ出す。

「何もなくなったんだ……夢も、目標も……俺が……俺が目指してきたものが、何もかもなくなっちゃったんだよ……!!」

「……」

「なあ……アクアさん……俺はどうすればいい？　どうやって……どうやって生きていけばいい？　俺は……俺はどうすれば……この先、生きていける……っ！？」

「……キミが……もし望むなら」

抱く腕に力を込めて、アクアは答える。

「あたしたちの後を……追いなさい。……それがキミの傷を癒してくれるかはわからないけど、でも」

ティースの首筋に、生ぬるい液体が一粒、二粒と落ちてきた。

「……」

確認しなくとも、アクアが泣いているのはすぐにわかった。

「そうすれば、キミのような思いをする人はきつと減る。彼女のよ
うな犠牲者が必ず減るから……だから」

「……」

それは安っぽい同情の涙なんかじゃない。

……漠然と、朦朧とした頭の隅でティースはそんなことを感じていた。

多分、彼女もこれまでにいくつもの辛い経験をして、真にティースの気持ちを理解できている。だからこそうして泣いているのだと。

そしてティースはようやく、彼女の言葉の意味を考え始めた。

（……アクアさんの……この人たちの後を追う……）

後を追う——それはつまり、デビルバスターになるということ。

……ティースが失ったものはあまりにも大きい。これまでの全ても、この先の目標も、その全てを失ってしまったのだから。

そしてアクアに示されたその新しい目標は、彼が失ってしまったものを埋めるには、あまりにも小さすぎた。犠牲者を減らすということも、自分のような思いをする人を減らすということも、全てを埋めるにはあまりにも物足りない動機だった。

だが……それでも。あるいはそれは、彼が“かろうじて”この先

を生きていくための目標にはなるかもしれないかった。

少なくともティースはそう思った。

アクアの言うように、傷を癒すことは不可能かもしれない。

（俺が、デビルバスターに……）

「……ティースくん？」

ティースの両足に力がこもったのを感じて、アクアは怪訝そうにしながらもゆっくりとその体を離れた。

が、

「……ちよつと！ ティースくん！ どうするつもり！？」

ティースがレイのいる部屋へ向かって歩き出そうとしたのを見ると、驚いてそれを制止した。

「見ない方がいいわ！ それこそ——！」

「大丈夫……」

グッと拳を握り締めて、ティースは真っ直ぐにアクアを見つめ返す。

「……！」

そこに灯っていた瞳の色——それはまだ複雑な感情の色を示していたが——それを見て、アクアは息を呑んだ。

それは悲壮な、決意の色——

「見なきゃ、俺は先に進めない。……アクアさんも言っただろ。目を背けたら思うツボだって」

「そりゃ……でもそれは——！」

「……それに」

ティースは小さく微笑みを浮かべた。

「どんな風になってもシーラは……あいつはあいつだから。俺は、あいつを連れて帰ってやらなきゃならない。……でしょ？」

「……！」

アクアは再び息を呑んだ。

「……ティースくん……」

「ちゃんとお墓を作って……ちゃんと謝らなきゃ。守ってやれなく

てゴメンって……」

「……」

アクアは唇をギュツと結んで天井を見上げた。

——制止の声はもうなかった。

「だから俺は……行く」

そうすることしか、今のティースには残されていなかった。

——多分、現実には彼に壮絶な傷を植え付けるだろう。

それは彼にも良くわかっていた……が、今の彼はそうすることでしか次の目標に向かって進めなかった。刻みつけられた痛みを動力にしなければ、先に進むことができない状態だった。

アクアもそれを理解している。……だからこそ、それ以上彼を止めることができなかった。

ティースは歩みを進める。

過去と訣別するために。

そして——未来へと進むために。

「……ん？」

途中、ティースは再び部屋から出てきたレイと鉢合わせた。

「なんだ？ ……おい、アクア？」

ティースの手首を掴んでその動きを止め、レイは状況が理解できない表情でアクアに問いかけた。

「……行かせてあげて、レイくん」

「なに？ ……おい、どういうことだ」

今度はティース本人に問いかける。

そんなレイをティースは真っ直ぐに見つめ返して、

「俺、あいつの遺体を持って帰りますから。だって、俺が行かなきゃわかんないでしょ……？」

「……そりゃまた、随分な決心だな」

レイは納得したようだったが、それでも経過が理解できない故かティースの手首を離そうとはせず、付け加えるように言った。

「けど、お前が行ったところでそいつの死体を探すのは無理だ」

ティースは反論した。

「そんなことはない。どんな姿になったって、あいつのことぐらいわか——」

「無理だ」

「……無理じゃない！」

決め付けるレイの言葉に、ティースが僅かに声を荒げる。

「レイくん！」

そこにアクアの声が飛んだ。

「いいから行かせてあげなさい！ 彼だって、それなりの決意をしてるんだから！！」

「……」

レイはアクアを見て、それからため息を吐いた。

「そりゃ行かせてやる分には構わねえが……さっきも言ったように、お前の大事な人間の死体を探すのは不可能だ」

「なんで……そんなの……」

ティースはそこで言葉に詰まった。

それは確かに、本当に原型を留めないほどにひどい状態であればわからないかもしれない。が、まさかそこまでは……という想いもある。だからこそ、最後まで言葉にすることはできなかった。

その様子を見てレイはもう一度息を吐くと、

「……いいか、よく聞け」

「うっ……！！」

ぐいっと、まるで気合を入れるかのようにティースの胸元を引き寄せ、レイはその鋭い瞳を近付けた。

「調べた結果、この部屋には新しくとも“数日前の”死体しかない」
「……え？」

ティースは驚愕の表情で顔を上げた。

「え、なにそれ？ ……ちょっとレイくん、どういうこと？」

駆け寄ってきたアクアの問いに、レイは視線を動かしてパッとティースを離すと、

「そのままの意味だ。……お前の大事な彼女とやらは、朝までは生きてたんだろ。だったらここにそいつの死体はない。そういうことだ」

「じゃ……じゃあ探すのが無理ってのは……」

ティースの問いに、レイは馬鹿馬鹿しいといった表情で答えた。

「無理に決まってるだろ。……お前は無い物を作り出す超能力でも持ってるのか？」

「で、でも、その彼女がここにいたのは間違いないんじゃないの？」

アクアが納得できない顔をする。

「ああ。……勘違いするなよ。別にそいつが生きてるって言ってんじゃない。ただ、万が一があるかもしれないってことだ。……アクア、来てくれ。お前も……バラバラ死体が怖くないならついてこい」
そう言って、レイは再び部屋の中へ姿を消す。

呆然としたままのティースは、後ろからやってきたアクアに肩を叩かれてようやく正気を取り戻した。

「……」

頷いて、そのまま部屋に足を踏み入れる。

その途端、

「……うっ」

想像していたとはいえ、その光景はティースに目を背けさせるに充分すぎるものだった。

まず、外にいたときの何倍にも濃縮された死臭。まるで空気の密度が違うかのように、一瞬だけ息が出来なくなった。

カンテラの明かりに照らされた室内は、壁際に赤黒いものがひしめいている。すぐに視線を逸らしたために詳細は把握できなかったが、それが人の成れの果てであることは想像に難くない。

「ひどい………うわっ!」

グニユツという感触に、ティースは慌てて足を退ける。

……足下を見る気にはなれなかった。

「壁際には死体が山になってるだろ。……けど」

言って、レイは四方の壁の一角……入り口から見て左手、一番奥の隅を指し示す。

「ここだけ妙に綺麗だと思わないか？」

「……隠し部屋、か」

すぐにアクアが答える。

「ああ。お前、こういうの得意だろ？」

「ええ、任せてといて。……ティースくん。カンテラを貸して」

「あ、ああ……」

まるで人形のような返事をして、ティースはカンテラを手渡した。

（……）

実際、彼の心は複雑なままだった。

完全に死んだと思っていたのに死体が見つからない。かといって生きているのかといえはその可能性は限りなく低い。

一体どうすればいいのかわからない、宙ぶらりんな状態だ。

だからただ、まるで他人事のようにアクアの背中を見つめていた。

「……」

最初は慎重に動き回っていたアクアだが、どうやら罠がないと確信したのか壁を探り始めた。

「……これね」

スイッチか取っ手のようなものを見つけたらしい。

振り返って、ティースとレイを見た。

「中に潜んでるかもしれない。気を付けて」

「ああ。……おい、ティース。大丈夫か」

「あ、ああ……」

放心状態にあったティースも、ようやく我に返って剣に手をかける。

「行くわよ」

ガコンという音がして、どういう仕掛けかその一角の石壁が自動的に横にスライドしていった。

「……」

剣にかけたティースの手が汗を掻く。

扉が開くまでの時間はほんの一瞬。

一瞬の沈黙。

一瞬の――

「あ……」

まず最初、ティースの視界に入ったのは壁の照明だった。

たった一つだけ備えられた照明が、十メートル四方ほどの部屋を薄暗く照らしている。

次に視界に入ったのはその照明の下に転がる木の棒だった。

まるで刃物で真つ二つにしたかのような折れ方をしている。

次に視界に入ったのは……見覚えのある美しいブロンドの髪。

いつものポニーテールではなく、少し乱れて広がっている、美しい髪。

そしてそれを持つ、美しい少女の姿――

「シーラ……？」

それが――太陽のような強い輝きを持つ瞳が――驚いたように振り返って彼を見つめていた。

「……ティース？」

その人物は紛れもなく、彼の同居人――シーラ・スノーフォールだった。

顔も、声も、何もかもが間違いない。

間違えるはずがない。

「……」

見つめあった時間はほんの二秒ほどだったはずだが、ティースにとってその時間は異様に長かった。

長い……あまりに長く感じられた沈黙の後。

「……ちよつ、ちよつと……ティース！ なに……っ！！」

気が付いたとき、ティースは無言のまま彼女に駆け寄って、その体を思いつき抱きしめていた。

周りのことなどまるで目に入らない。ただ、彼女が生きてそこに立っているという事実だけで、頭の中が真っ白になってしまった。

「シーラ……！」

「ちよっ……ティース！」

ティースは華奢な彼女の体を掻き抱き、まるでその存在を確かめるように背中を撫で、それから髪に触れる。

全てに質感がある。

その全てが、それが現実であることをティースに知らせていた。

「はっ、離しなさい……」

「シーラ……ああ……夢じゃない……夢じゃない……！！！」

「な……お前、泣いて——」

その瞬間、ほんの一瞬だけ彼に身を預けるような仕草を見せたシーラだったが、

「——じゃなくてっ！ は、離しなさい！ ティースっ！！」

すぐに我を取り戻す。

「良かった……良かったああああ……！！！」

だが、その声はティースの耳にはこれっぽっちも届いていなかった。

涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、何度も何度も美しいブロンドの髪を撫で、しつこいくらいに感激の声を口にする。

——それは彼の気持ちを考えれば決して大袈裟ではなかった。だが、

「っ……！！」

シーラは顔を真っ赤にして、叫んだ。

「離しなさいって……言ってるでしょっ！！」

「……ぐええっ！！」

ティースの鳩尾辺りから鈍い音が響いた。

……どうやら彼女の膝が彼の腹部にキマったらしい。

「な……なんで……」

お腹を押さえてうずくまるティースに、シーラは腰に手を当てて

言い放つ。

「なんでじゃないわ、この馬鹿！ 状況を考えなさいっ！！」
その叱咤の声に、ティースはようやく少しだけ我に返った。

「え……状況……？」

「……どうやら、その王女様の言うことが正しいな」

後からやってきたレイが皮肉っぽい口調ながら、険しい表情で部屋
の中央に視線を投げていた。両手にはすでに半楕円型の二刀が握
られている。

アクアも手甲を鳴らして、流れるような動きで半身の姿勢を取っ
た。

「そいつが犯人、ってことで間違いなさそうじゃない」

「……」

無言で視線を追ったティースは、そこに膝をついた一人の男がい
るのを見た。

「……なんだ……？」

そう呟いた男は少し虚ろな視線だった。片手に剣を携えてはいた
が、状況を把握していないように見える。

「どうなっている……どうして……お前が生きている……？」

男の視線は、そこに立つシーラの姿に疑問を投げかけていた。

「お前は確か、俺がこの手でバラバラに解体してやったはず……」

「……冗談でしょ」

シーラは脇腹を押さえ、ほんの僅かに苦痛の表情を見せながら、
男に向かって侮蔑の視線を向けた。

「お前は途中から幻を見てたのよ。……私が特別に調合した、幻覚
作用のある薬でね」

「幻……？」

一瞬、理解できない顔をした男だったが、どうやら思い当たるフ
シがあったらしく、

「なっ……まさか、あの小袋……」

驚愕の表情でシーラを睨み付ける。

「ふん……」

が、シーラはまるで怯むことなく、ありとあらゆる侮蔑の意志を込めた瞳で、真っ直ぐに男を見つめ返し、答えた。

「お前が考えもなしに思いっきり吸い込んでくれたおかげで、命拾いしたわ」

「くっ……!」

屈辱からか、男は顔を歪ませる。

「ならば、今からでも!」

「そうは——」

「いくわけないでしょ——」

そう言ってレイとアクアが同時に前に出ようとした……そのとき。

「なっ……!」

「えっ……ティースくん?!」

二人が驚愕の声をあげた。

その間を駆け抜けるようにして、ティースが男に向かって突進していったのだ。

「人間ごときが……この俺に……っ!」

男は口元に笑みを浮かべ、右手にした剣を振り下ろす。

人外の体から繰り出された剣筋は、あまりに単純な軌道ながらも、達人なみの強さと速さを秘めてティースに迫った。

「……ティースっ!」

その声は、おそらくシーラのものだろう。
だが、

「なっ……!」

驚愕の声を上げたのは……男の方だった。

……人としては達人の域に迫る剣筋よりも圧倒的に速く。常人としては限界に迫るほどの速さで、ティースの剣は男の胸元に吸い込まれていた。

「かっ……!」

「意識が途切れる前に……懺悔しろ……」

ティースの口からこぼれた声は、押さえきれないほどの怒りに充ち満ちていた。

「お前が殺した人たちに！ お前が悲しませた人たちに！！ 懺悔して、償ええええええっ！！」

「ばっ……こんなっ……！！」

男は微かな抵抗の意志を見せたが、勝負はこの場にいる誰の目から見ても明らかだった。

稲妻のような速さで貫いたティースの剣は、すでに男から確実に致命傷となる一撃を奪っていたのだ。

「がっ……！！」

男の口から赤黒い液が溢れ出して……そして、男の首はガクリと項垂れた。

「……」

剣を引き抜くと、支えを失った男の体は新たな血を吹き出して地面に崩れ落ちる。

それで終わりだった。

あまりにも呆気のない幕切れ。男はもう二度と動くことはない。

「はぁ……はぁっ……」

そしてしばらく――その部屋には、ティースの荒い息だけが木霊していた。

「……」

「……」

レイとアクアは、予想だになかったティースの動きに意識を奪われて。

そしてシーラは……今までに見たこともない彼の姿に、驚愕して。

――剣が乾いた音を立てて、石床に落ちる。

沈黙が、重苦しい空気を纏っていた。

「ティ……ス……？」

意を決した様子で、シーラが一步彼に歩み寄る。

脇腹に怪我をしているのか、そこを庇うようにして一步、また一

歩と近付いていく。

……と。

「すうううっ……」

「？」

「はああああっ……」

そしてシーラが立ち止まった瞬間、

「っ……ちよっ……！！」

彼女の体は、振り返ったティースによって改めて拘束されていた。

「シーラああああ……ホントに良かった……無事で……無事で良かったああああ……！！」

無言のまま、しばらく驚いたような表情で固まっていたシーラだったが、

「……」

今度こそは彼を振りほどくこともなく、されるがままだった。

その体が微かに震えていたことは、おそらくティースにも容易に感じ取れたことだろう。

「……」

その様を黙って眺めていたレイの肩を、アクアが叩く。

「……良かったじゃない」

振り返ったレイは、微かに皮肉っぽい苦笑いを口元に浮かべて、

「あいつらは良かっただろうが、な」

「いいの。……あたしたちの仕事は、一人でも多くの人を救うことでしょ。そりゃ犠牲になった子たちは可哀想だけど、ここは素直に喜んでもいいんじゃないの？」

「……ま、そうかも、な」

そんな二人の会話は、再会を喜んで抱きあう——というより片側が一方的に抱きしめているだけだが——二人の耳には届いていない様子だった。

その7『デビルバスターへの道』

それから二ヶ月後――

「ヤバいなあ……」

夏を思わせる日射しが照らす大通りを、ティースはトボトボと歩いていた。

昼下がり。大通りの商店街は活気に溢れている。

……が、対照的にティースの気分はどん底に近い状態だった。

「どうしよう……」

進行方向は北から南。それはつまり、彼が高級住宅街……いや、その先にある学園群から戻ってきたことを意味する。

もちろん生徒ではない彼が学園に赴く理由などそう多くはない。

シーラには学園生活に極力関わるなど釘を刺されており、そんな彼がそこへ行って来た理由はただ一つ。

「そりゃ今年度も二ヶ月過ぎてるし……二ヶ月も滞納すりゃ文句も言われるよな」

というわけなのである。

つまり彼は今年度の授業をまだ、シーラの通うサンタニア学園に払っていないかったのだ。

といっても別に忘れていたわけじゃない。理由はごくごく単純。金がないのだ。

加えて――

「……今日も空振り、と」

仕事幹旋所に行ったところで、仕事の“し”の字も見つかるとはなかった。

どうにも最近、この業界における不況が蔓延しているらしく、業界の“底辺”の一角を担っているティースに回ってくる仕事など、あっても最下級の仕事のみ。

何とか生活費程度は稼ぎ出すことが出来ているが……安定した収入を持つわけでもないティースにとって、サンタニアの授業料は決して安くはない。

「はぁ……」

このことがシーラに知れたなら、一体何を言われるかわかったものではない——おそらくは“役立たず”だろうと思うが——ので、今のところは秘密にしている。

が、いつまでも隠し通しておける問題でもなかった。

「あいつ、もう帰ってるかな……あ、今日もまたデートだって言ってたか……いい加減、その彼氏、紹介してくれてもいいのにな」肩を落とし、一人呟きながら家路を辿るティース。

昨日の雨で湿度の高い暑さが憂鬱な気分を増幅させた。

「でも、こうなったらもう、やるしかないかぁ……」

家の前まで来てそう呟いたティース。

——金欠なこの状況を打破する秘策は、実をいうとずっと彼の胸の中にあった。

ただ、今まで決心がつかなかっただけのこと。

だが、こうなった以上は“それ”を実行に移すしかないのかもしれないなかった。

「ただいま……」

誰もいない室内に声をかけ——いや。

「あ……どうも、ティースさん」

「……へ？」

「お久しぶりです、ティースさん。……お逢いしたかったですわ」

「あら、ティース？ 随分早かったわね」

家の中に入るなり、ティースは思いも寄らぬ三人の出迎えを受けることになった。

一人はもちろんこの家の同居人、シーラ。

そして後の二人は——

「ファナさん……アオイさん？」

いつかのようにベッドに座り穏やかな微笑みを浮かべる少女。
その横に直立する正装の青年。

それは紛れもなく、二ヶ月前にこの家にやってきたミューティレイク家の当主と執事の姿だった。

「え？ な、なんで……？」

あまりに非現実的な光景にティースがうろたえていると、ファナが相変わらずの笑みで言った。

「今日は時間が取れましたので遊びに来ましたの。……もしかしてお邪魔でしたか？」

「え！ あ、いや！ 全然そんなことはないです……けど」

だがこの場合はティースの戸惑いが正しい。いくら面識があるとはいえ、ミューティレイク家の当主が、こんな貧しい区画の貧しい家に遊びに来るなどと……常識では到底考えられないことなのだから。

「……で？」

シーラから飛んだ声も、相変わらずだった。

「お前はいつまでそこでファナに見とれてるつもり？」

「は！？ い、いや、別に見とれてたわけじゃ……」

「だったらとっと中へ入ってお茶でも煎れなさいな」

「……わ、わかったよ」

ティースが彼女に反論できないのも、もちろん相変わらずのこと
で。

おずおずと家の中に入る途中、苦笑を浮かべるアオイと視線が合
ってティースも思わず苦笑を返してしまった。

……本当なら情けなく思う状況なのかもしれないが、ティースは
彼女に命令されることに慣れて——というより染み付いてしまっ
て——いまいちそういう気持ちで沸き上がってこないのだ。

「そういやシーラ……今日ってデートの約束があったんじゃないの
か？」

「……そうだった？」

とぼけたように返すシーラに、ティースは怪訝な顔を向ける。

「そうだった、って……朝に言ってたじゃないか」

「別にいいわ、そんなの」

あまりにもあっさりとシーラは答えた。

「どうせ大した男でもないし。……なによ」

「いや……だってお前、そいつと毎日のようにデートしてたじゃない」

「誰も毎日同じ相手だなんて言っていないじゃない」

「え……あち——っ!？」

「……なにやってるのよ」

お湯を指に零したティースを見て、呆れ顔をするシーラ。
もちろんティースも反論する。

「だ、だって……お前、そんな二股みたいなことするなんて……」

「うるさいわね。そんなことお前には関係ないでしょ」

「そ、そりゃそうだけどさ……」

「シーラさん」

そんな二人のやり取りに、ファナが微笑みながら言った。

「あまりそういうことを言っでは、ティースさんが無駄に心配なさ
つてしまいますわ」

「……え？」

その言葉の意味がわからずにティースが怪訝な顔を見ると、ファ
ナはその微笑みを彼の方にも向けて、

「ティースさん。シーラさんは本当は——」

「ちよっ、ちよっと、ファナ。余計なことは言わないで」

シーラが珍しく慌てたようにそれを制止する。

「? なに？」

ティースにはまるで理解できなかった。

……わかったことといえば、どうやら彼女がシーラから、ティ
ースの知らない“何か”を聞いているらしいということだ。

だが、

「ほら、ティース。お茶、早くなさい」

「あ、ああ……」

シーラに急かされて、結局その話題はうやむやのうちに終わってしまう。

まあ、彼女がその話題をどことなく嫌がっている以上、彼の“身の安全”を考えるならこの辺で切り上げるのが賢い選択でもあった。お茶を配り終え、テーブルについたところでティースは次の話を切り出すことにする。

……それは先の金策についてのこと。

予想だにしていなかったことだが、正直、ファナがここにやってきたことは最高に都合が良かった。

「ファナさん……だいぶ前の話になるんだけど」

「はい」

一呼吸置いて、ティースは切り出した。

「俺……ファナさんのところで働かせて欲しいんだ」

「はい」

「……」

「……」

「……え？」

「？」

呆氣に取られたティースは、思わずファナと見つめ合ってしまった。

今度は幸いなことにシーラの突っ込みはなく。

「えっと……え？ はいって？」

「？ 私たちのところで働いていただけるのですよね？」

「いや、でもそんなアツサリと……」

「……戸惑うお気持ちはわかりますが」

アオイが苦笑しながら、ティースにその理由を教えた。

「実を言うと、今日私たちがここへ来たのは、ティースさんをもう一度お誘いするためでもあったのですよ」

「え？」

それにファナも相づちを打った。

「そのことについて、先ほどまでシーラさんとお話ししておりましたの」

「あ……そうなんだ」

そういえばシーラも、ティースの決心について口を挟む気配がない。

だが、それにしても随分見事なタイミングだなとティースは思った。

（いや……でも、それって偶然っていうか……）

そしてふと、ミューティレイク家があの子園群の総元締めという立場であったことを思い出す。

「あの……もしかして、ウチの事情とか知ってて？」

「……」

問いかけられたアオイは突然口を噤んで視線を泳がせてしまった。それだけでもある程度の答えになっていたのだが、ティースは一応ファナの方にも視線を移動させると、

「その通りですわ」

ファナはあっさりとそれを肯定した。

「ですから、この先の選択肢の一つとして考えていただこうかと思ひまして」

「……ってことは」

ティースは恐る恐るシーラの表情を窺った。

それはつまり、ティースがひたすらに隠していたこと——つまりはこの家の経済状況について——を喋ってしまったかもしれないと、そう考えて。

「……そんな大事なこと、私に隠していたなんてね」

結果は案の定、だった。

「馬鹿じゃないの。隠したってどうなるものでもないじゃないの」
シーラの鋭い視線を受けて、ティースは思いつきたじろいだ。

「そ、そりゃそうだけど……その、なんていうか」

「なによ」

「い、いや……」

まるで針の筵にいるかのような気分だった。

ちよつとだけファナたちのことを恨めしく思ったが、彼女たちとしては当然に知っているものだと思って話したのだろう。仕方がない。

「余計な心配させると、学業にも支障が出るかと思ったし……お金の心配なんてさせなくなかったし……」

「で？ その挙げ句に二ヶ月も授業料を滞納させてたってわけ？」

「う……」

返す言葉もなかった。

「まったく。半人前のくせに言うことだけは一人前ね」

「うう……」

「……ですけど、丁度良かったのではないですか」

そこへ、まるで助け船を出すかのようにファナが口を挟んだ。

表情は相変わらず……だが、そこにはどこことなく、シーラに対する悪戯っぽい調子が含まれていた。

「シーラさんも隠し事をしていたのですから、お互い様ということ
で」

「……」

「隠し事？」

ティースは不思議に思っただけファナを見る。先ほどの話の続きかとも思ったが、彼女の言い方からして少し違っているようだった。

ファナは頷いて、

「ティースさんはご存じないようですけど……シーラさんの学費、実は半額免除になっているのですよ」

「え？」

ティースにとっては初めて聞くことで、まさに寝耳に水の話だった。

「え、いや、だって半額免除だったって、最初からずっと授業料は変わってな——」

「それはそうですわ」

ファナはゆったりとした動きでお茶を口元に運ぶと、一呼吸置いて、

「シーラさんは入学試験から常に成績トップで、ずっと半額免除を受けていらっしやるのですから。……半額免除は、定期試験ごとに成績上位者三名に与えられる特権ですよ」

「……ええっ!？」

ティースは驚愕に目を見開いた。

それはそうだ。彼はずっと彼女から違うことを聞かされていたのだから。

「だ、だってお前、ずっとギリギリだって……」

「……別にいいでしょ。悪いものを良いって言ってたわけじゃないんだから」

シーラは相変わらずの突き放す言い方をした。

が、どこことなくバツが悪そうだった。

(……けど、言われてみれば)

ティースにも思い当たるフシはある。

例えば今日、学園の事務と授業料の話をしているときも、“二ヶ月も待ったのは彼女が特別だから”みたいな言い方をされて、そのときはまるで意味がわからなかったのだが——トップの成績を取っていたのだとすれば、確かにその意味も理解できた。

「だ、だけど、そんな嘘なんてつかなくても……」

うろたえたようなティースの言葉に、ファナはニツコリとして、「きつと照れくさかったのではないですか? ティースさんになるべく負担を掛けないために頑張っているなんて——」

「……ちよつと、ファナ。あることないこと吹き込もうとしないで」「あら? 違いましたの?」

シーラは眉間に皺を寄せ、不機嫌そうな顔を形作ると、

「違うに決まってるでしょ。それは私がもともと頭がいいからで、別に頑張ってるわけじゃないし……私が男と遊び回ってることだってティースが良く知ってるわ」

ファナはクスクスと笑って言った。

「あまりムードのないデートコースばかりだと、男の方も退屈なさいますわ？」

「……」

シーラは肩を落とし、諦めたようにため息を吐く。

と、

「……あ、でも、すごいよ」

そんな二人の会話の意味がいまいち理解できなかったティースだったが、それでも一つだけはっきりわかったことがあった。

素直にそれを口に出す。

「ホント、ぜんっぜん勉強してないのにあのサンタニアで成績トップだなんて……お前って本当に頭良かったんだなあ」

「……」

「……あら」

どこか呆れたような表情で黙り込むシーラに、ファナはますますおかしそうに微笑むのだった。

「あの、話が戻りますけど……ティースさん」

そこへ、その成り行きを見守っていたアオイが、タイミングを見計らって口を開く。

「正式に我々ディバーナ・ロウに参加してくださいさるということではないですか？」

まるで待ち望んだかのような口調だった。

そういや彼は二ヶ月前も熱心にティースを誘ったことがあり、ティースの気が変わらないうちに、という気持ちがあったのかもしれない。

「ああ……シーラ。構わないか？」

「そんなのはお前の勝手よ。いちいち私に聞かないでちょうだい」

シーラは相変わらずの返答だったが、ふとファナに視線を向けて、
「でも……本当にこいつに務まることなの？ 見た目からしてそう
だけど、はっきり言って情けない奴よ？ 高所恐怖症だし、すぐ風
邪ひくし、馬車に乗ればすぐに酔うし……」

「お、おい、そこまで暴露しなくたって……」

だが、ティースの反論はまるで意に介されることもなく一言で叩
き伏せられた。

「すべて本当のことでしょ。……それで、どうなの？」

「……」

ファナは少し考えるように視線を泳がせる。

そして今度は少し真剣な顔で、シーラ……ティースの二人へと視
線を注ぐ。

「もちろん危険なお仕事ですわ。……二ヶ月前のこともございます
し、シーラさんもおそらく理解してらっしゃるからこうして心配な
さっているのだと思いますけれど……」

「……」

「ただ、それなりの代価はお支払いするつもりです。それに、極力
安全であるように配慮もしております。ですから……あとはティ
ースさんのお気持ち一つですわ」

ファナの返答はシーラが問いかけた質問からは少しズレているよ
うに思えたが、シーラは何も言わなかった。

そしてファナは真っ直ぐにティースを見つめる。

「どうなさいますか、ティースさん？」

「……」

（俺の気持ち、か……）

それはすでに決まっていた。

そしてティースはすぐに答える。

「……役に立てるかどうかはわからないし、多分、俺の動機って他
の人と比べたらものすごく不純なものかもしれないけど……」

彼の夢——シーラを無事に卒業させるという夢。

それを叶えるためにもっとも近い道であるというのなら――

「それでも認めてくれるのなら、やらせて欲しい。……俺なりに頑張るつもりだから」

「そうですか」

ファナは正面からティースの視線を受け、全て理解しているという顔で頷くと、付け足すように答えた。

「不純などではありません。前にも言いましたけれど、ご立派だと思いますわ」

厳しい表情が崩れて、そこから再びいつもの柔和な笑顔が現れる。

「ホント……お二人は本当のご兄妹みたいで、羨ましいです」

「あ、はは……って」

照れくさそうに頭を掻いたティースだったが、すぐにその違和感に気付く。

「……ファナさん、いつから俺たちが兄妹じゃないって――」

「最初から、ですわ」

ファナは再びおかしそうにクスクスと笑って、

「ティースさんは、あまり嘘をつけない方ですわね」

「……」

ティースが啞然としていると、横からシーラが呆れ顔で言った。

「ホント間が抜けてるわ、お前は」

「あ、でも……その……ほら、ファナさんだって本当の兄妹みたいだって……」

「召使いならともかく、お前みたいのが兄だなんて冗談じゃないわよ」

「……」

「どうやら……というかやはりというか、彼女にとってのティースは結局のところ召使いらしい。」

（ま、召使いでもなんでもいいんだけどさ……）

そう思ってしまう辺り、やはり彼にも使用人根性が染み付いてしまっているのだろうか。

そして――数日後の昼下がり。

ティースとシーラは二年間暮らしてきた家を引き払い、ミューテイレイクの屋敷へとやってきた。主要な荷物は屋敷の馬車がすでに運び込んでおり、体一つの非常に楽な引っ越しである。

馬車に揺られてやってきたミューテイレイク家の屋敷。そして迎えて来たアオイから、さっそく屋敷の中を把握するように言われた。「この敷地には本館、別館、迎賓館と三つの館があります。その他、ディバーナ・ロウ各隊の詰め所や色々な施設があって、全部で十の建物があります」

広大な敷地内を歩きながらティースとシーラの案内をしているのは、十五歳ぐらいの少女だった。

そしてティースはその少女をほんの少しだけ見たことがある。

「あ、そうだ。紹介が遅れてしまいました」

一通り建物の案内を終えた少女は、ようやく自らを名乗った。

「私、フィリスといいます。フィリスⅡディクターです。この屋敷では一応お嬢様……当主様の侍女をやらせていただいています。よろしくお願いします」

「フィリスさん、ね。うん、よろしく」

ティースの言葉に、フィリスはちよつとビックリした顔をして、「あ、あの、私のことはどうかフィリスと呼び捨ててください。ティース様はデビルバスター候補生ですし、その身内のシーラ様はお客様という扱いですから……」

「え、でも、初対面の人を呼び捨てるなんて……」

ティースが戸惑っていると、その横からシーラがアッサリと口を挟んだ。

「じゃあフィリスね。よろしく、フィリス」

「はい。よろしくお願いします、シーラ様」

「お、おい、シーラ……」

シーラはうるさそうにティースを見て、

「……こういう人たちにはそれなりのルールがあるのよ。お前だつて知らないわけじゃないでしょう？」

「そ、そうか……あ、でも、俺はちょっと慣れないし、しばらくはフィリスさんでもいいかな？」

「え……あ、その、ティース様がどうしてもそうしたいとおっしゃるのでしたら」

フィリスは少々困惑した様子だったが、拒否する素振りはなかった。

「ティース様とシーラ様の部屋は別館の二階にあります。……こちらです」

別館というのは正面の門から見て右側の館……以前ティースがレイやアクアと出会った方の館だ。

「基本的にデビルバスターの方々も、私たち使用人も外部からいらっしゃる方以外は全てこちらの館で暮らしています。本館はお嬢様が……ただ、実はお嬢様もこちらにいらっしゃることが多いので、本館の方はちょっとしたお客様をお迎えするぐらいにしか使われていないんですよ」

玄関を抜けると、例の丸テーブル群が広がっている。

「……なに、これ？」

初めて見るシーラは案の定、驚いたような呆れたような微妙な表情で眉をひそめた。

「ファナの趣味なの？」

「あ、その……みなさまが気楽に過ごすことができるようにと……」

「へえ……ま、らしいといえばらしいけど」

それ以上は特に言うこともなく。

……しかしそれにしても、改めてその光景は異質だった。

「こうして見ると、この屋敷って色んな人がいるよなあ」

「はい」

ティースの感想に対しては、フィリスは満面の笑顔で答えた。

……そのホールには現在、四人ほどの人間がいる。

まず目に付いた玄関から一番離れた隅っこのテーブル。妙に分厚い本に読みふけるショートカットとセミロングの中間ぐらいの少女。ただ少女といってもシーラのような年齢ではなく、もっと下……おそらくは十か十一歳ぐらいだろう。この年頃の少女にしては珍しくスカートではなくパンツルックで、例えるなら“舞台上で少年役を演じる少女”といった感じか。

そして同じテーブルにいるのは――後ろ姿しか見えないが――おそらく同席の少女より少し年上ぐらいの、やはり女の子。彼女は少し髪が長く栗色でさらさらのセミロング。こちらは少女らしい可愛いらしい服装で、他にあまり例えようもないが言うなれば“中流階級のごく普通の女の子”だろうか。

そこからだいぶ離れた席。白衣に黒縁眼鏡の男性がコーヒーを飲んでい。歳はティースよりもだいぶ上、二十代半ばといったところか。見ただけで頭の良さそうな風貌、その格好から想像するに“医者か研究者”で間違いなからう。

……これに“真面目そうな執事さん”のアオイや“見るからに旅人風”なレイの姿を同居させてみると、まるでごった煮の集団だった。

さて……そしてその場にいた最後の一人。

例えるなら“孤児院で子供に好かれてそうな気のいいお姉さん”というところだろうか。

「あら？ フィリスちゃんに……あ、キミたち！」

それはティースはもちろんシーラにも見覚えがあるはずの、頭に二つのお団子を結った女性だった。二人の顔を見るなり、椅子から勢い良く立ち上がって駆け寄ってくる。

それに気付いたフィリスが軽く頭を下げた。

「アクア様。……こちら、ティース様とシーラ様です」

「知ってる知ってる！ へえ、二人ともひっさしぶりねー！」

「や……あの、ちょっとアクアさん……」

今にも抱き付かんばかりの勢いで迫るアクアに、ティースはほんの少し後ずさった。

……例の地下道で彼女に抱きしめられたことは、今も彼の記憶の中に新しい。改めて思い出すと恥ずかしいということもあったし、何よりも違う理由で今はまずい。

（こんなところで例の病気を出すわけにはいかないぞ……）

あのときは気を張っていた、というより、意識する余裕すらなかったから良かったが、今、この場で同じことをやられたらどうなるか——それは想像するまでもない。初日から、屋敷の面々にとんでもない醜態を晒してしまうことになるだろう。

だが、そのティースの態度をどう勘違いしたのか、

「あら？　どーしたのティースくん？　……あ、わかった！　また、あのときみたいにおねーさんに抱きしめて欲しいのね!？」

「い、いえ！　それは結構です!!」

慌てて手を振るティース。

もちろん逆だ。それだけにご勘弁願いたいところなのだ。

「あのときみたいになって？」

シーラが怪訝そうな顔をする。

「なに？　お前、この人にも不意打ちを受けたの？」

「ふ、不意打ちって……」

だが、その表現はあまりにも的を射すぎている。基本的に“女性アレルギー”であるティースが自分からそれを受け容れるはずはなく、抱きしめられるとしたら“不意打ち”しかありえないのだ。

（まあ……あのときはちょっと特殊な状況だったから、別に不意打ちだったわけじゃないけど……）

「あれ？　……あ、そっか。ごめんごめん、ティースくん」

奇妙な沈黙に、ふと思いついたようにアクアが謝る。

が、ティースにしてみればその後こそ余計な一言だった。

「こんなこと、奥さんの前で言うことじゃなかったか」

「!？」

「……奥さん？」

「あ、あの、アクアさん!!」

ティースは大声を張り上げ、慌てて弁解した。

……言葉はアクアに向けていたが、もちろん弁解した相手は別の人物である。

「そ、それ、前に言いそびれたんですけど! それって全然これっぽっちの根も葉もない真っ赤な誤解で――」

「……」

後ろに目のないティースに、そのときのシーラの表情を窺うことはできなかった。

が、

（ヤバイ! めっちゃめっちゃ怒ってる!!）

雰囲気で察することは可能だった。彼は周囲の空気がまるで凍りついているように感じた。

が、アクアはそれを察した様子もなく、明るく笑って、

「あ、わかってるってば。まだ籍は入れてないんでしょ? そりゃ二人とも若いしね。でもほら、同棲してたわけだからやっぱラブラブでメロメロだったわけでしょ?」

（……火に油!!）

言ってる意味はよくわからなかったが、とにかく彼女の暴走を止めなければ新天地におけるティースの未来がいきなり地獄のような状態になること請け合いだった。

「ま、まさか! 一緒に暮らしてたって言っても、俺なんて召使い同然ですから! 全然、奥さんとか恋人とかそんなもとはほど遠い関係なんですよ!!」

「召使い? ……ああ、ティースくん」

察したと言わんばかりの表情で、アクアは小さくため息をついた。「結婚する前から尻に敷かれてるのね……可哀想に」

（だ……だめだ……全然伝わってない……）

「ティース」

「は、はいっ！」

「……なによ、その返事」

確認するまでもない。これ以上もなく不機嫌な声が、ティースの背中に降りかかってきていた。

「いや……あ、な、なんだい、シーラ」

「……」

勇気を振り絞って振り返った――振り返らなければ良かったと、後にティースは思ったが――その瞬間。

「……ぐえええっ！！！！ シ、シーラ！！ 足！ あしいいっ！

！！」

「アクアさん、だったわよね？」

そのまま、シーラは一步前に出る。……もちろんティースの足は踏みつけたまま。

「え？ ええ、そうだけど……っていうか、ティースくん、ものすごく痛がつてるみたいなんだけど……」

「そんなのはどうでもいいわ。……ひどい誤解があるようだけど、私とティースはそうだった類の関係じゃないの。そういう表現をされるものすごく不愉快だから、やめてもらえないかしら？」

「……」

アクアは無言でティースを見た。

「ぎ、ぎぶ、ギブ……！！」

「……そ、そうみたいね」

答えなければティースの命が危ないとうやうく察したのか、アクアは少々引きつった笑みでうやうく言った。……後ろでその様子を見守っていたフィリスは、脅えてちよつと泣きそうになっている。

「お願いするわ。……ああ、ティース。いたの」

「い、いたのって……あ、あのな……」

「悪かったわ。踏みつけてることに気付かなくて」

「……」

アクアは呆然、フィリスは固まってしまい、もはや一言も言葉を発することはなく。

「それじゃフィリス。部屋までの案内、お願いできる？」

「は……は、はい」

「あ、おい、ちよつ、ちよつと待て……」

そうしてシーラは、まるで下僕を従えるかのように先頭を歩き出したのだった。

——ちなみにこの出来事は後に瞬く間に屋敷中に広まり、新入りである彼らに対しての印象は初日にして決定づけられてしまった。

以下、その状態を克明に表した、その晩のアクアとレイの会話である。

「さすがのあたしも思わずうろたえちゃったもんねー。あれは大物だわー……」

「ま、綺麗な花には棘があるもんだ。……あれだけの花だ。棘も相当鋭いんだろ」

「いやー、それにしてもまさかあそこまでとはねー……こないだテイスくんのおんな姿を見た後だけに、なーんか報われない感じしちゃうねえ」

「……意外に愛情の裏返しってやつじゃないのか？」

「おねーさんにはそれ以前の問題に思えて仕方ないわー……っついていか、その前に……テイスくんって、もしかするとマゾなのかしら……」

「……そうかもな」

——合掌。

その翌日。

「ティースさんにはひとまずカノンに所属していただくことになります」

朝一番で――慣れない環境で少々寝不足気味だったが――本館の執務室に呼ばれたティースは、アオイから今後の説明を受けていた。ファナの姿はない。

「カノンってのは……第三隊だったっけ？」

「はい」

簡単に説明すると、ディバーナ・ロウは現在四つの隊に分かれている。

第一隊がティースにも馴染みの深い女性デビルバスター、アクアⅡルビナートを隊長とする“ディバーナ・ファントム”

第二隊が二ヶ月前、シーラを助ける際に世話になった少々ワイルドな風貌の男、レインハルトⅡシュナイダーを隊長とする“ディバーナ・ナイト”

そして第三隊。

ティースが今回所属することになったチーム、“ディバーナ・カノン”

「レアス……ヴォルクスさん、か」

隊長の名は当然ティースには聞き覚えのないものだった。

「はい。レアスさんにはすでに通達してありますので、とりあえずティースさんはカノンの詰め所に行っていたただけで結構です。あとは向こうで色々聞いて下さい」

「わかった」

念のためカノンの詰め所の位置を記したメモを受け取って、

「……そういや第四隊ってのは？」

部屋を出ようとしたところでふと振り返って尋ねる。

確かに第四隊まであると言った割に、アオイの口から説明されたのは第三隊までだった。

「あ、いえ」

だが別に隠し事というわけではなかったらしい。それに隠したいのなら最初から第四隊まであるなんて言うはずもなく、

「第四隊は少々特殊で……チーム名ありませんし、チームといっても現在所属しているのは一名なんです」

「ふうん？」

ティースには良くわからなかったが、つまりまだメンバーが揃ってないということだろうか。

（もしかして、俺は将来的にそこに配属されるのかな……）

そんなことを考えながらティースは執務室を出た。

いや、出ようとしたところで、

「うわっ……と」

丁度部屋に入ろうとしていた人物と鉢合わせしそうになる。

「わっ……危ないな、もう。気を付けてよ」

そう言って一歩下がった場所からティースを見上げていたのは、

（って……子供？）

長身の彼に比べると三十センチ以上も背の低い女の子だった。少々長めのショートヘアに、若干つり目ながらも幼さを残した瞳が真っ直ぐにティースを捕らえている。

特徴的なのは、この年頃の女の子にしては珍しくパンツルックで

（あ、この子は確か、昨日見た……）

その手に握られていた分厚い——“経済と流通”という少女には似合わないタイトルの本を見て、ティースは思いだした。

「ん？ どうしたの？ ……あ、もしかして」

せいぜい十か十一ぐらいと思える少女はティースを見上げ、真面目な顔のままと言った。

「あたしが愛らしすぎてムラムラきちゃった？」

「……ぶっ！！」

「うわ、汚いな、もう」

少女はさらに一步身を引いて、少し眉をひそめる。……が、その表情には嫌悪感というより、悪戯が成功して喜んでるような色が見受けられた。

「そ、そんなはずないだろ。大体、君……」

言いかけたティースの言葉を遮って、少女は言った。

「リディアだよ。……歳はティースさんのご想像通り、まだ十一歳。あと二ヶ月ぐらいで十二歳だけどね」

「リディア？　なんで俺の名前――」

「新入りの名前ぐらい、もうほとんどの人の耳に入ってるよ」

「そ、そうなのか……ていうか、なんで歳、俺の想像通りだって――」

「だってティースさんの目、いかにも『なんだこのガキ』と言わんばかりだもんね。……でもよかったよ。期待の新人さんがロリコンだったしなくて」

「……」

淡々と言葉を続ける少女――リディアに、ティースは目を丸くしてしまった。

「とにかく今後ともよろしくね」

「え？　あ……」

ティースは差し出された右手を凝視する。

（えっと……）

情けない話だが、差し出された手を握ることは――このぐらいの年齢ならさすがに大丈夫かもしれないが――できれば避けたいところだった。

と、そんなところへ、閉じたばかりの執務室のドアが開いて、

「リディア？　なにをしているんです？」

「あ、アオイさん。新人さんへ挨拶してたんだけど」

パツと手を引っ込めたリディアはアオイに向き直って、すぐにチラッとティースを見る。

「幸い“まともな”人みたいだね」

「……」

アオイは何も答えずに苦笑した。

「まともな、って？」

その言葉に引っ掛かったティースがそう質問すると、リディアは腰に手を当てて大人のような仕草で答える。

「ほら。ウチは上流階級と野蛮人が一緒に暮らしてるようなものだし。ファナさんの“人を見る目”は確かだけど、中にはやっぱり変なものもいるんだ」

「変なの？」

問いかけるティースに、リディアはケロッとした顔で言った。

「ちょっと前、夜中に某侍女さんの部屋に忍び込もうとしたデビルバスター志望のお兄さんは、半殺しの目にあって屋敷から叩き出されたよ」

「は、半殺し……って誰に……？」

侍女と言われてティースの頭に真っ先に思い浮かんだのは、昨日のフィリスという少女だったが、まさかあの少女がやったわけではあるまい。

……と思っていたのだが、そんな彼にリディアは少し悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「ティースさんも試してみたら？ ……あ、ほら。ウチって恋愛は自由みたいだし、ティースさんって優しそうだからフィリスさんが受け容れてくれるという可能性もなくはないし」

「……え、遠慮しとくよ」

怖いというより、彼の性格的にそんなことができるはずもなかった。

「なーんだ。つまんない」

頭の後ろで手を組んで、リディアは本当につまらなさそうだった。……大人びた態度を取ってみたい急に子供っぽかったりと、忙しい。

で、結局、誰が半殺しにしたのかはうやむやのままだったが、
(まさか、なあ)

「……そうだアオイさん。先月の月末の支出、用途不明になってるのがあったんだけど、あれってなんに使ったの？」

「あ、はい。それについては……あ、ティースさん。それではそろそろ……」

「あ、うん」

頷いてティースが立ち去ると、アオイとリディアは再び執務室の中に入っていつてしまった。

(……あれ？ ていうか……)

途中、ふと振り返ってティースは思った。

(あのリディアって子、結局なんなんだ……?)

どうもこの屋敷の面々は、見た目だけでなく中身も少々変わった構成になっているようだった。

ディバーナ・カノンの詰め所は敷地の東側、外周の近く、まるでそこからの侵入者を監視するかのような位置に建てられていた。小型の別館とでも言おうか、この敷地内にあっても決して浮いていることはない。一階建てながら外観から想像するに広さは結構あるだろう。

(ここか……)

さすがにドキドキしながらティースは建物の入り口に立っていた。

(どうすればいいんだろう……呼び鈴みたいなものはないし……ノックするのかな)

だがノックしても反応はない。

(そのまま……入っていいのかな)

どうやらそうらしいと判断し、ティースはそっと入り口のドアを開けた。

「お邪魔しま——」

その瞬間、ティースは絶句した。

視線の先……そこに見た光景に。

(……な、なんだあれ……)

そこは武道場のような広い空間になっていた。壁際には木刀や長刀、防具や様々な器具らしきものが並んでおり、詰め所というよりは鍛錬所といった雰囲気だ。

だが、ティースの目を引いたのはそこではない。

その広い空間の中央。

そこにいる一人の人物だ。

「ラーラー……ラララー……」

歌っている。

いや歌っているだけではない。歌いながら華麗なステップを踏んでいる。

……それはいい。ティースだって踊り子ぐらいは見たことがあるし、それが例えこの場にそぐわない存在であってもここまで呆氣に取られることはなかっただろう。

問題は、その踊り子らしき仕草をしている人物がウェーブがかった長髪だということ。

……いや、違う。

踊り子のように踊るその人物が、ウェーブがかった長髪に、全身真っ白な軍服らしきものを着た――明らかに“大人の男”だったということだ。

「ルールー……ルルルル……」

くるくると華麗なステップを踏み、男はティースの存在に気付くこともなく踊り続けていた。

時折、悩ましかっため息を漏らしながら、

「ああ……この回る世界のなんと美しいことか……これこそまさにこの世の真理、輪廻転生を表している！」

残念ながら高尚ならぬティースには、意味が全く理解できなかった。

（も……もしかしてあれがここの隊長……なのか……？）

周りを見ても人はいない。奥の方に他の部屋へ続く入り口らしきものも見えたが、人の気配はない。

隊長がここで待っているというアオイの言葉が本当なら、どうやら“アレ”が隊長で間違いないらしい。

(……な、なんかもものすごく不安になってきた……)

ティースがそう思って天を仰いでしまったのも、無理からぬことであつた――

その1『ディバーナ・カノン』

大陸第二の規模を持つ学問都市ネービス。

その中央通りを北に向かって歩き、一般住宅街と高級住宅街の境目辺りを西に歩けば、やがて広大な敷地が見えてくる。

ミューティレイク家。

ネービスのシンボルともいえる学園群、その総元締めともいえるネービスきつての大貴族が所有する土地だ。

同時にそこは、このネービス近郊を襲う異形の者たち——“魔”から人々を救うべく結成されたデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”の本拠地でもあった。

——ティーサイトIIアマルナ。男。十八歳と三ヶ月。

成人男性の平均を十五センチほど上回るひょうつとした長身と、年の割に幼い顔立ちが特徴的な青年だ。

彼はつい先日、ちょっとした出来事からその素質をイングヴェイIIイグreshiusという——何故か“アオイ”という奇妙なニックネームがついている——ミューティレイク家の執事に見込まれ、デビルバスター候補生ということでこのディバーナ・ロウに参加することになったばかりである。そんな彼が所属することになったのは、ディバーナ・ロウの第三隊“ディバーナ・カノン”と呼ばれるチームだった。

そしてその日の朝、執事のアオイから説明を受けたティースは、早速敷地内にあるディバーナ・カノンの詰め所に向かったのだが……そこで待っていたのは思いも寄らぬ光景だったのである。

（な……なんなんだ、あの人……）

詰め所に入っつてすぐ、まるで鍛錬所のような広いスペースの中央。

「ルルル……ルラララー……」

そこにいた人物を見て、ティースは絶句したまま立ち尽くしていた。

ウェーブがかった長髪。身長は少々高めだが長身のティースよりは若干低いだろうか。真っ白い軍服のような衣服に身を包み、まるで踊り子のようにクルクルと周っている。

その人物は――どうやら薄く化粧をしているようだが――どこからどう見ても明らかに男だった。

しかも、

「ああ！ 来た来た、来たぞっ！ 今まさに、私の中に美の女神が下りてこようとしているではないかっ！！」

(……)

何を言ってるのかティースにはまるで理解できない。

(あ、あれが……デイバーナ・カノンの隊長……?)

ティースはここにその――レアスⅡヴォルクスという名の隊長が待っている、と聞いてやってきたのである。周りを見るに他に人影はない。とすると、アオイが嘘をついているか、あるいはその隊長が約束をすっぱかしたのでない限り、あの踊っている男が隊長で間違いないさそうだ。

が。

「素晴らしい！ ブラーボ！ ブラーボッ！！」

男はくるくる回りながら手を叩き始めた。

……別にティースの感想を待つまでもないだろう。

明らかに“キテ”る。それもかなりぶっとんだ方向に、である。

(ど、どうしようか……)

隊長らしき男は踊りに夢中なのかティースの存在に気付いた様子もない。いや、気付いているのかもしれないが、少なくとも彼に向けてアクションを起こそうとはしなかった。

(止めて気分を壊されると後が怖いからなあ……)

そうティースは考えた。

たとえばあんなのでも、これから先しばらくは上司となる人物であ

る。出来る限り波風は立てたくない……というのが人として当たり前の感情であり、ましてティースという人物の性格を考えれば自ずと結論は出る。

結局、ティースは待つことにした。

あれだけ派手に回っているのだから、それほど長くは保たないだろうと……そう考えて。

――そして十分後。

(……ど、どうなってるんだ、あの人！)

クルクルという円運動を中心に踊り続けている男は、未だにその動きを止めていなかった。さすが隊長というだけあって素晴らしい体力だとはティースも思うが、これではさすがにラチがあかない。

(あと三分待つて止まらなかつたら声をかけよう……)

……すぐに、じゃない辺りが実にティースらしい考え方だった。

まあ、結局、最終的には声をかけずに終わることになったわけだが。

「おい、邪魔だ」

「え？」

突然背後から聞こえた声にティースは驚き、

「……あ、ご、ごめん」

誰かが入ってきたらしいことをようやく悟ると、慌てて通り道を開ける。

「ったく、でかい図体してばーっと突っ立ってんじゃねーよ」

「……え？」

振り返り、現れた人物を見てティースは困惑した。

……いや、正確には違う。

そこにいるはずの人物の姿が“見えなかった”から困惑したのだ。だが、その原因はすぐに判明する。

「おい。……どこ見てんだ、てめえは」

「？」

聞こえた声はすぐ近く。

……妙に低い位置から。

「え……こ、子供？」

視線を落とした先にいたのは、ツンツンした赤毛短髪の少年だった。

ティースとの身長差は三十センチ以上ある。これだけ接近していれば、一瞬彼の視界に入らなかったのも無理からぬところだ。

「君は……？」

この街では珍しい長羽織のようなものを上に纏い、子供ながらつり上がった目の下からティースを見据えている。

そして背中には、

（……剣？）

少年の身長……あるいはそれ以上あるかという長剣を斜めに背負っていた。

それを見てティースは目を見開く。

「え、あ……君もこの隊員なのか……？」

その赤毛少年はどう見ても十代前半。どれだけひいき目に見ても十五歳には達していない風貌だった。

（まさか――）

確かに真に剣の道を目指すものは小さい頃から鍛錬し、このぐらゐの歳からすでにかなりの技術を身につけている場合が多い。が、このデイバーナ・ロウが相手にするのは人ではなく“魔”である。このような子供がその一角を担っているなどということは、常識的に言えばあまり考えられないことだった。

だが、赤毛少年はただでさえ吊り気味の目に、さらに睨み付けるような色を纏って、

「なんだ？ 俺みたいなガキがやってちゃおかしいってか？」

「あ、いや……」

喧嘩を売るかのような赤毛少年の態度に、ティースは弁解する。

「別にそういうわけじゃないけどさ。ただ君みたいな子供が“魔”と戦うなんて……」

「なら戦えるかどうか、確かめてみるか？」

「え？」

その言葉に、ティースは困惑の表情を浮かべた——その瞬間。

「……なっ!？」

ぞわっとした感触がティースの背中を貫く。

そして直後、驚愕に目を見開いた。

(え……!?)

——赤毛少年の姿は、いつの間にか彼の視界の中から消えていた。自らを襲った強烈な威圧感に、彼が視覚から意識を離れたのはほんの僅かな時間、おそらくはコンマ数秒のことだろう。

「俺にてめえを殺す意志があったなら——」

赤毛少年の声が“背中に”聞こえた。

驚きにティースの体が凍り付く。

「三回は死んでるぜ。間違いなく、な」

「……」

冷や汗が、首筋から背中に向けて流れ落ちる。

——ティースは動けなかった。

一瞬感じた圧倒的な威圧感。直後に起きた、まるで時間を飛び越えたかのような動き。

あまりにも子供——いや、人間離れしすぎている。

「おい、ビビ! てめえはいつまで踊ってやがる!」

「ちがああああう!!」

踊っていた男は赤毛少年の言葉にピタリと動きを止め、人差し指を突きつけると、

「ビではない! ヴィだっ!! 私の名はヴィヴィアン!! ミットフ

オードだっ!!」

「聞いてねーよ! いいからとっとその目障りな踊りを止めやがれ!」

「……え？」

ティースはようやく我に返って振り返った。

「ヴィヴィアンって……あんたがレアスって隊長なんじゃ……」
「む？」

ヴィヴィアンと名乗った男はティースを見て怪訝そうに眉をひそめたが、やがてチツチツと目の前で人差し指を振ると、

「誰かは知らんが、違うな。……私は美の伝道師、ヴィヴィアンⅡミットフォードだー!!」

「二度も名乗ってんじゃねーよ、タコが。いいから、てめえは変な踊りを踊ってねえで他の二人を呼んできやがれ」

「変な踊り!？」

命令口調で追い払う仕草をした赤毛少年に、ヴィヴィアンは手で顔を覆って、

「ああ、これだから美しさに対しての造詣がない凡人は!!」

「……で？ てめえがティーサイトⅡアマルナだな？」

赤毛少年はヴィヴィアンのセリフを全く無視し、入り口で立ち尽くすティースを肩越しに振り返った。

……驚くべき事実がそこから明かされる。

「俺がレアスだよ。……俺がディバーナ・カノンの隊長、レアスⅡヴォルクスだ」

「……え？」

ティースの動きが数秒間、完全に停止した。

少年がただ者でないことを見せられた後だけに、それは決して受け容れ難いというほどのものではない。

が、

「き、君が……隊長……？」

とはいえ、かなり常識外れな出来事であることに変わりはない
た――

「ファナさん。あの新人さん、結局カノンに行かせたんだ」

ミューティレイクの屋敷は内部で繋がった本館と別館に分かれている。本館の方は当主であるファナⅡミューティレイクの生活空間、執務室、応接室や蔵書庫などがあり、別館の方は主に使用人が生活する場所だ。

だが、実際のところ当主であるファナもまた、別館の執務室や、その玄関ホール―カフェテラスさながらの丸テーブルが並んだ場所―を好む傾向にあるため、このミューティレイク邸は結局のところ、別館が主となっていた。

さて、その別館の方にある、本館のものに比べると少々小さめの執務室。

そこには今、二つの人影がある。

「本気で期待してるんなら、素直にナイトに加えてあげれば良かったのに」

部屋の正面にあるファナ専用の机。その隣に直角に配された机に座っていたのは、十代前半の少女だった。

リディアⅡシュナイダー。それが彼女のフルネームだ。

若干長めのショートカット、ほんの僅かにきつめの瞳は、まだ幼さを残している……が、右手にはミューティレイク家の先月の決算報告を示す紙束が握られており、左手で手元の紙にペンを走らせる姿は、まるでキャリアウーマンさながらだった。

だが、それもそのはず。彼女は十一歳にしてこのミューティレイク家のスチュワード……つまり当主であるファナを補佐する、アオイと並ぶもう一人の執事としての役割を果たしている少女なのだ。

「カノンではいけませんでしたか？」

顔を上げたファナは、まるで春の日射しのような穏やかな微笑みを湛えている。

「ダメってことはないけど」

そう答えるリディアなどは、“この人の笑顔と家の肩書きがあれ

ば大抵の男は落ちるだろうな”などと、十一歳の少女には似つかわしくないことをいつも考えるのだが……それはひとまずおいておこう。

「間違ってコメディアンにならないことを祈るよ」

「まあ」

しれっとしたリディアの言葉に、ファナはクスクスとおかしそうに笑った。

「ティースさんは真面目な方ですから。それは大丈夫だと思いますわ」

「カノンの連中はみんな真面目だよ。ただ、その真面目さがあさつての方向を向いているだけでさ。ビビさんとかはその典型だよね」

「ヴィヴィアンさんは面白い方ですわ」

「……そりゃファナさんにかかればね」

リディアの言うとおり、ファナの人物評には“面白い方”という言葉が頻繁に出てくる。

ヴィヴィアンの場合は確かにそう表現できなくもないとリディアも思うのだが、例えば誰が見ても“面白い”とは言えない無愛想な人物でさえそう評してしまうほどで、とある人物曰く『彼女の中では“悪人”の逆は“善人”ではなく“面白い人”らしい』と言われるほどであった。

つまり、根の善い人間は彼女にかかれば全て“面白い”のである。

「でも、本当にカノンでいいの？　あまり教育に適した場所じゃないと思うんだけどなあ」

リディアは話を戻した。

“ファントム”

“ナイト”

“カノン”

ディバーナ・ロウという部隊を支えているのは基本的にこの三チームだ。

第一隊の“ディバーナ・ファントム”はこの屋敷で（おそらく）

唯一の女性デビルバスター、アクアールビナートを隊長とするチーム。ただしこの部隊は機動性、隠密性、諜報力を重視した部隊であるため、入ったばかりのティースには少し荷が重い。それはリディアも理解できた。

第二隊、レインハルトⅡシュナイダーを隊長とする“デイバーナ・ナイト”は、総合的な見方をすればデイバーナ・ロウの最強チームと言って間違いはない。世間がデイバーナ・ロウに対して持つイメージ——あらゆる“魔”を蹴散らす正義の味方——を、そのまま体現しているようなチームであり、デイバーナ・ロウを理解するためにも、あらゆるノウハウを学ぶためにも最も適していると言える。

そして“デイバーナ・カノン”

ここは——正直なところ“イロモノ”チームだ。まず隊長のレアスからして普通じゃない。

なにしろ彼はリディアより四ヶ月程度年上の、誕生日を迎えてまだ二ヶ月ほどしか経たない十二歳の子供なのである。それだけでも普通のチームとはひと味違うことが窺えるが、チームとしてその隊長をサポートする三人も少々クセのある面子が揃っている。

新人教育という点でいえば、あまりにもアクの強すぎるチームだった。

「ティースさんにはカノンだけでなく、将来的にはファントムやナイトにも行っていたかどうかと思ってますの」

ファナの言葉にリディアは目を丸くした。

「え？ そうなの？」

それもそのはず。彼女も今までに数人のデビルバスター候補生を目にしてきたが、複数の部隊に所属させられた人間は未だかつて見たことがなかったのだ。

リディアは怪訝そうに眉をひそめて、

「それって、期待してるから？ それともそうでもない——」

「両方ですわ」

躊躇うことなく、ファナはにこやかに答えた。

「ティースさんには色々なことを学んで欲しいのです。ディバーナ・ロウの将来のためにも、彼の未来のためにも」

「……ま、見るからに今のままじゃ役に立ちそうになかったけど」
皮肉っぽいその言葉に対しては、ファナは何も答えなかったが、
「カノンにはサイラスさんがいらっしやいますでしょう？　なんとなくティースさんに良い影響を与えてくれそうな気がしますの」

「あ、なるほど」

リディアはようやく納得顔をした。

「つまりけしかけるってことかあ。……ファナさんって、何も考えてないような顔して結構計画的だね」

「？　そうですか？」

ファナはとぼけた風でもなく首をかしげてみせた。

あるいは彼女にしてみればその采配は計画的でもなんでもなく、単なる直感じみたものだったのかもしれない。

「こいつらがウチのメンバーだ」

鍛錬場のようなディバーナ・カノンの詰め所には今、ティースと向かい合うように四人の人間が集まっていた。

まず、集まって早々に口を開いた赤毛の少年。ティースも他の三人も座っていたが、何故か少年だけは立ったまま、

「一応アオイのヤツに言われてるし、改めて紹介しておくぜ。……」

俺が隊長のレアスⅡヴォルクスだ」

「あ、えっと……早速質問いいかな」

ティースは手を上げた。

「なんだ？」

「そのレアス君——」

「馴れ馴れしく“君”とか呼ぶんじゃねえよ」

子供らしからぬつり目がティースを見据えた。

「い、いやそれじゃ……レアス隊長？」

「なんだ？」

「隊長はやっぱりデビルバスター……なんですか？」

レアスは小馬鹿にしたような呆れ顔をして、

「お前、何にも知らないんだな。——まあいい。そのことは後でこいつらにでも聞けよ」

親指でその他の三人を示し、

「お前らも今のうちに適当に紹介しておけ。……俺はリディアのヤツと呼ばれているから、ちよつと屋敷の方に行ってくる」

そう言うなり、レアスは長剣を負った背中を向けてさっさと詰め所を出ていってしまった。

（な……なんか無愛想な子だなあ……）

と、呆然とした表情を隠そうともせず見送ったティースに、メンバーの一人が口を開いた。

「では……ティースくんでしたかしらあ？」

それはメンバー中唯一の女性。

黒縁の眼鏡、ボブカットの優しそうな印象の女性だ。白衣を纏っている辺りが場の雰囲気から少々浮いてはいたが……歳はティースよりも二、三歳上、二十歳過ぎぐらいだろうか。

外見的には大人しそうな感じだったが——

（……なんだろ）

ティースはその女性にどことなく不自然な印象を受けた。

どこが、と言われれば“全体的に”だろうか。一見上品そうな笑顔、物静かな佇まい——それがどことなく“作られたもの”のような、そんな感じがした。

……鈍感な彼がそう感じるぐらいである。実際、彼女の仕草はかなり不自然だった。

綺麗に正座した足は見るからにムズムズしていたし、ピンと伸ばした背筋もたまにフラフラと揺れており、少なくともその上品な佇まいが元来のものでないことは明らかだったのである。

だが、それでも女性はあくまでそのままで言葉を続けた。

「私、医事担当のフロローラカンバースと申しますの」

「医事？」

ティースの疑問に、フロローラは頷いて答えた。

「各チームはそれぞれ、医療に通じたメンバーを一人入れることになってるんですよ。ここを離れて活動することも多いですからあ」

「え、でもそれって――」

危険じゃないのかと問いかけようとしたティースに、その機先を制してフロローラは言葉を続けた。

「ええ。もちろんご覧になってわかる通り、戦うことは“とても”苦手なのですが、皆さんがきちんと守ってくださいますからあ」

ニツコリと。

「はあ」

その瞬間、何故かティースの目には、黒縁眼鏡の奥がキラリと光ったように感じられた。

が、それは見なかったことにして、一応社交辞令を述べておく。

「そ、そうだよなあ。フロローラさんて見た感じ育ちも良さそうだし

――」

「……！」

「……」

「……え？」

一瞬表情の固まったフロローラと、ハツとした他の二人に気付いて、ティースは言葉を止めた。

「あ、え？ 俺、なんか悪いことを――」

「そ……そう見えますかあ！？」

「え？」

いきなり満面の笑みを浮かべたフロローラに、ティースは呆気にとられてそれを見つめてしまう。

黒縁眼鏡の奥は……明らかな喜色を浮かべていた。

「いえ、“わたくし”別に育ちがいいとかそんなことはないんです

のよお！　で、でも、ティースくんにそう見えたのは、もしかすると、“わたくし”の内面の上品さが自然と滲み出てしまったせいかもしれませんわねえ！」

「……」

（な……なんなんだ……）

ホホホホ、と不気味な笑い声をあげるフローラにティースが呆気にと取られていると、

「ティースくん」

少し離れた場所からヴィヴィアンが手招きしていた。

ティースはフローラが“トランス”してしまっていることを悟り、こそこそと彼に近付いていく。

ヴィヴィアンはそっと耳打ちした。

「彼女は“育ちが良い”とか“上品”とかいう言葉に過剰に反応する。今後は気を付けた方がいいだろう」

「……過剰に反応？」

「ま、つまり実際はそうではないということだよ。……ふ。自らを偽ろうなどは、私には到底理解できない行動だ。まあ、美しすぎてパーフェクトな私には自らを偽る理由などどこにもないのだがね！」

「……」

無言で振り返ると、フローラはまだ高笑いを続けていた。

（あ、あの人“も”普通じゃないのか……）

ティースの心に広がった不安は、決して杞憂などではないだろう。

「では私の番だな」

まだ“こっち”に戻ってこないフローラを蚊帳の外に置いて、自己紹介は続いた。

ヴィヴィアンは大袈裟な仕草で目に掛かっていた前髪を払うと、

「ヴィヴィアンⅡミットフォードだ。……ま、それ以上の説明は必要あるまい」

ティースを真っ直ぐに見て口元に笑みを浮かべると、指先をティ

ースに突きつけた。

「この私の美しい姿さえ見てもらえれば、それだけで全てが理解できるであろう！」

「……はあ」

その言葉でティースに理解出来たことといえば、やはり彼がフローラ以上に“アレ”な人物だということぐらいだった。

（五十歩百歩ってやつだなあ……）

とはいえ、フローラが医事担当だというのだから、おそらく他の二人は純粹に戦闘用のメンバーだろう。とすると、彼もそれなりの剣技に長けた人間のはずだった。

「じゃ、あとは俺かな」

最後にそう言ったのは、フローラやヴィヴィアンの自己紹介を苦笑いで見守っていた——おそらくはティースと同じ年齢ぐらいの青年だ。

どうやら彼が一番まともそうである。

外見は“優男風”と表現するのがもっともわかりやすいだろうか。はつきりいってティースの目から見てもかなりのハンサムで、身長はティースより若干低い、彼よりはしつかりとした体つき。それでいてスラッとしており、なんとも無駄のない体型だった。

身につけているものも特に着飾ったものではなく、実用的で動きやすい服装。胸にロケットのようなものをつけている以外は特に飾り気もない。が、それでいてそれなりに洗練されたイメージがあるのは、やはり質素であつてもモノを選んでいるからだろうか。

（なんかいかにも女の子にモテそうだなあ）

羨望でも妬みでもなく、ティースは素直にそう思った。

というのも、その青年の爽やかなイメージは、他ならぬティースにも充分な好印象を与えていたからである。

「俺はサイラスⅡレヴァイン。カノンでは唯一のデビルバスター候補生だ」

「え？」

ティースは怪訝に思っ

「唯一の？ ヴィヴィアンさんとかは――」

「ノンノン！」

ヴィヴィアンが人差し指を振った。

「他人行儀な呼び方は止めたまえ。これから私たちは生死を分かち合う戦友となるのだから。私のことはヴィヴィアンと呼び捨てにしてくれたまえ」

そこへサイラスが口を挟んだ。

「呼びづらかったらビビでもいいんだぞ」

「ノウツ！ ビではない！ ヴィだ！！ 私はヴィヴィアンだっ！
！」

ヴィヴィアンがサイラスに指を突きつける。どうやら彼はそこに異常なこだわりがあるようだった。

「は、はあ……」

ティースはそのテンションに少々置いてかれつつあったが、
「じゃあ……えっと、ヴィヴィアンはデビルバスター候補生じゃないのか？ あ、っていうかすでにデビルバスターなのか？」

「ティース……だったっけ？ お前、ホント何も知らないで来たんだな」

サイラスは馬鹿にした風でもなく明るく笑いながら答えた。

「まず前提として、このデイバーナ・ロウにデビルバスターは四人しかいないんだ。つまり各チームの隊長、アクア隊長、レイ隊長、レアス隊長、それに第四隊……って言っているかわかんないけど、そのアルファさんって人」

「あ、そうなのか」

ティースにとってはもちろん初耳だったが、考えてみればそれはもつともな話である。

だいたい一つのチームが四人で構成されるとして、全員がデビルバスターだとすると――第四隊の所属者が一人であることを考えても――十三人。いくらミューティレイクとはいえ、個人の力でそこ

までのデビルバスターを雇う……いや金銭的に可能でも、それを探して集めることはそう容易なことではないと考えられる。

「じゃあヴィヴィアンとかは一体……？」

サイラスは頷いて、

「俺たちみたいなサポーターの中でも、最初からサポーターに徹する人間と、将来的にデビルバスターを目指す人間と、二種類いるんだ。ビビは前者。俺やお前は後者」

「私の夢は別にデビルバスターになることではないのでね」
前髪をふわさつと掻き上げてヴィヴィアンはそう言った。

サイラスが付け加える。

「っていうか、デビルバスターを目指す人間の方が圧倒的に少ないんだよ。今のデビルバスター候補生は俺とお前と、あと半々で揺れてるパーシヴァルって子がいるだけさ。……ま、正直、努力の他にある程度の資質も必要な職業だからな」

「……」

その言葉がティースの不安を煽ったのは言うまでもない。

（それなのに、俺みたいのがデビルバスターになんてなれるんだろうか……）

「ま、ともかく」

そう言って、サイラスは改めてティースに手を差し出してきた。

「同志として、ライバルとして一緒に頑張っていこうぜ。よろしくな、ティース」

「あ、ああ……」

そんなサイラスの真っ直ぐな視線に、ティースは思わず引け目を感じてしまうのだった。

夕方。

ミューティレイクの門をくぐった美しいブロンドの髪の少女は、

ポニーテールを微かに揺らし、別館へと足を向けながら小さく辺りを見回していた。

綺麗に刈り揃えられた芝生。遠くに見える花壇には季節の花が綺麗に咲き乱れている。その世話をしていた使用人の少女が頭を下げた。

それに軽く応え、逆方向に視線を向けると三十代ぐらいの男が立派な庭木の手入れをしている。

「シーラ様。お帰りなさいませ」

「ええ」

シーラⅡスノーフォールは特に戸惑った様子もなく、ミューティレイク家の使用人と言葉を交わし、別館の中へと入っていった。

入った途端、目の前に広がる丸テーブル群にシーラの足が一瞬だけ止まる。さすがの彼女もこのミスマッチな光景にだけは慣れるのに少々時間がかかりそうだった。

「おや。王女様のお帰りか」

そこに座っていた、旅人風の精悍な青年。

昨日ここにやってきたばかりのシーラでも、その青年のことは知っている。

「レイさん、だったかしら」

「ああ。……ヒマならそこに座ったらどうだ？ 一人で飲むのも淋しいもんでな」

第二隊ディバーナ・ナイトの隊長、レインハルトⅡシュナイダーだ。シーラにとっては命の恩人の一人でもあり、この屋敷においては先輩でもある。

が、シーラはきっぱりと答えた。

「遠慮するわ。この時間からお酒を飲む気にはなれないもの」

「別に酒に付き合ってくれなくてもいいんだがな」

レイは笑った。

片手に握られたコップに入っているのは、麦酒だろうか。

「美人の顔なら、見ているだけで随分と違うもんだ」

その言葉に、シーラは嫌悪感を隠そうともせず眉をひそめた。

「そういう理由なら、なおさらご免被るわ。私は男に鑑賞されるために産まれてきたわけじゃないの」

「……ほう」

レイは特に気分を害した様子もなかった。それどころか、少し興味深げにシーラのことを見つめている。

そしてわざとらしく話題を変えた。

「ティースなら今頃、カノンの詰め所でしごかれてるんじゃないのか？」

「……だから？」

階段の手前でシーラは振り返った。

「様子、見に行かないのか？」

「私が？ 何故？」

「……なるほど」

クックツと喉を鳴らすようにレイは笑った。

「お前らはホントに面白いコンビだな。……いまいちどういう関係なのか見えてこない」

「そうかしら」

「ああ。最初は駆け落ちしてきたどつかのお嬢さんと使用人かとも思ったが……それにしちゃ、お嬢さんは他に男がいるらしいし、使用人の方はそれを気にしている様子もない」

「……何が言いたいなの？」

シーラは不機嫌を隠さずにレイへ向けた。人形のように整った顔立ちが感情を露わにしてようやく人間味を帯びる。

それを見たレイは口元を緩めた。

「いや。ただ、あいつがお前のためにあそこまで一生懸命なのはどうしてかと、純粹に疑問だっただけさ。……その美しさの虜になったといえば簡単に説明できそうなんだが、それでもなさそうなんですね」

「理由なんて知らないし、どうでもいいわ」

それに対してのシーラの返答は、あまりにも素っ気ないものだった。

「あいつが尽くしてくれるというから、私はそれを利用してただよ。……何か文句でもあるの？」

「そう突っ掛かるなよ」

レイは愉快そうにコップを口元に運ぶ。

一呼吸。

空になったそれをテーブルに置いて、戯けと鋭感を纏った目がシーラに向けられる。

「そういう態度、逆にお前自身が納得してないように見えちゃう」

「……」

口を噤んだシーラに、レイは再び口元を緩めた。

「無理に詮索する気はない。……けど、半端な決意で進むにゃキツすぎる道だからな。あいつの決意の源がどこにあるのか、それがどれほどのものなのか。少し気になっただけのことだ」

「……知らないわ」

「いつ死んでもおかしくない仕事だからな」

「知らないって言うてるでしょう。……だいたい」

シーラの表情から、突然苛立ちが消えた。

「……？」

怪訝そうに眉をひそめたレイに、シーラはそのまま言葉を続ける。

「私が強制したわけじゃない。あいつが選んだ道よ。あいつがどうなろうとあいつの勝手。死んだら死んだで——それこそ」

一転、怖いほどに整った顔に微笑が浮かぶ。

「私の美貌を持ってすれば、貢いでくれるだけの男なんていくらでも見つかるもの」

「……なるほど」

レイは否定しなかった。……いや、否定する理由などありはしない。それは彼女の自信過剰でもなんでもなく、おそらくは事実だ。

「わかったなら、これ以上余計な詮索はしないで欲しいわね」

微笑のまま、シーラは背を向けて階段を上がっていく。

「……」

レイもまた無言で、冷たく美しいブロンドの少女を見送ると、もう一度、口元に笑みが浮かんで呟いた。

「……可愛い娘だ」

「あら、レイくん。それは聞き捨てならないわね」

「……」

レイが口を噤んで振り返った先。

三メートルと離れていない――先ほどまで何の気配もなかった――その場所に立っていた人物に、レイは特に驚いた様子もなく首を横に振った。

「ま、いきなりそこまで近付けるのはお前ぐらいのものか」

「他人の奥さんに手を出そうだなんて、おねーさん見逃せないなあ」
第一隊ディバーナ・ファントムの隊長、アクアールビナートは、

からかうような色をそこに浮かべ、ゆっくりと歩み寄ってレイの向かいへと腰を下ろした。

「ありゃ本当に奥さんって感じでもなさそうだがな」

レイは頭の後ろで手を組んで背もたれに体を預け、テーブルに足を乗せて椅子を傾ける。

アクアは階段の方を見ながら頷いて、

「確かに彼女の方は意外に冷たいのよねえ。死んだら死んだで――なんて、あれじゃ旦那も浮かばれないなあ」

「ま、それはさすがに本心じゃないだろうが」

「でもねえ。旦那があれだけ一生懸命やってるんだから、少しぐらい素直に応えてあげてもいいと思わない？」

「……そんなもんかね」

「なに？」

「いや」

レイは体を伸ばすようにして、豪華なシャンデリアの揺れる天井を見上げながら、

「もっと色々複雑そうだなと思ってね」

「あら？ 昨日は『どうせ愛情の裏返しじゃないのか』とか言っていなかった？」

「それは撤回させてもらう。……ま、複雑になっただけで結局のところは同じことなのかもしれんが」

「？」

まるで理解した様子もない、怪訝そうな顔のアクア。レイは横目でそれを見ると、小馬鹿にしたように鼻で笑って、

「お前はそんなだからいつも男に逃げられるんだ」

「なっ……ちよつとレイくん！ それは聞き捨てならないなあ！」

アクアは思いつきり身を乗り出すと、胸に右手を当てて、

「言っとくけど、これでもあたしに言い寄ってくる男なんてごまんといるんだぞ！」

「しかしまあ、いざとなると誰も彼もが後込みして逃げ出しちまうと」

「うっ……！」

どうやらかなり身に覚えがあるらしく、アクアは言葉に詰まった。

「い……いいのよ。いつかきつとあたしのことを理解してくれる王様が現れるんだから……」

「何十年先の話やら」

「何十年！？」

「三十路まであと七年を切った女にや厳しい話だな」

「あああああつ！ それ以上歳のことは言わないでえええええっ

！！」

アクアは耳を塞ぎ、崩れるようにテーブルに突っ伏してしまった。こういった反応といい、この歳でお団子頭にするところといい、彼女はどうも大人っぽい部分と子供っぽい部分とのギャップが激しい人物だった。……とはいえ、そういう部分がまた、屋敷内での彼女の人望にも繋がっているのかもしれない。

レイはゆっくりと身を起こして、

「で？ その旦那の方はどうなんだ？ どうせ様子でも見に行ってたんだろ？」

だがその視線の先で、アクアは頭を抱えたままだった。

「し、仕方ないわ……こうなったら力尽くでもアオイくんをモノに――」

「おい」

ゴン！

「……ったゝゝゝゝっ！ ちょっと、今……もしかしてコップの底！？」

「夜這いの計画なら後で立ててくれ。……で？」

コップを置いて平然と先を促すレイ。

「新入りは役に立ちそうなのか？」

アクアは恨みがましい目で後頭部を撫でながら、

「あ、えつと……あー、もう。レイくんが頭を打つから旦那の名前忘れちゃったじゃない」

「お前が顔と名前を覚えないのは元からだろ。……ティースだ」

「ああ、ティースくんね。……なんかねー。とりあえずダメっぽい」

「全然か？」

その問いに、アクアは頷いて、

「まあサイラスくんは歯が立たないのは今は仕方ないけど、ビビくんにまで軽くあしらわれちゃってるんだもの。レアスくんなんか『役立たずが来た』って機嫌悪くしちゃって」

「そうか」

レイは特に意外に感じた風でもなかったが、アクアは納得できない顔で首を捻る。

「アオイくんの言うように、あのときの彼の動きはあたしも結構見所あると思ったんだけど。……レイくん、どう？」

「ああいうタイプにはよくあることさ」

悟ったようにレイは答えた。

「人間、限界に近付けば近付くほど精神面の占める割合は高くなる。

おそらく、能力を全て引き出すだけの精神的体力が全く足りてないんだろ」

「見込み、あると思う？」

「さあな。この仕事を甘く見ているうちは絶対に無理だと思うが」
バツサリと切り捨てたレイに、アクアは首をかしげて、

「甘く見てるってことはないと思うけど。実際、一度は現場を見て
るわけだし、その上で彼には彼の目的があってここに来たわけじゃない？」

その言葉をレイは特に否定しなかった。

「ま、超実戦タイプってことも考えられなくもない。としたらカノンにはピッタリの人材かもしれん。……にしても」

そう言って、空になったコップを持って立ち上がる。

「もしピンチにならなきゃ力を発揮できない……ってんなら、保ってせいぜい三ヶ月だろうな」

「彼、そんな根性なしかな？」

アクアの疑問に振り返って、レイは鼻で笑うと短く言い放った。

「いや……命の話、さ」

鍛錬場を思わせるディバーナ・カノンの詰め所では、この日、昼前から夕方まで休みなく、激しく甲高い打撃音が響いていた。

「くはあっ……はあっ……！」

「……」

堅い木刀を正眼に構えたティースと向かい合うのは、ウェーブがかった長髪の青年、ヴィヴィアンⅡミットフォードだ。

ティースの全身には滝のような汗が流れ、疲労を色濃く映した瞳は虚ろ。対するヴィヴィアンは片手に木刀を構え、まるで構えらしきものを見せていない。

「おい、ティース！ てめえ、いつまで休んでるつもりだ！」

対峙する二人を見ていた三人の人物——その中の一人、このディバーナ・カノンの隊長である少年から苛立たしげな声が飛んだ。

「くっ……！」

子供とはいえ、充分な威圧感のある怒声にティースの体は押し出されるように動いた。が、まるで宙に浮いたような浅い踏み込み、力強さの欠片もない打ち込みはヴィヴィアンの手元に届く間もなく弾かれた。

「っ！」

甲高い音を立てて、ティースの木刀が宙を舞う。

「……隊長」

ヴィヴィアンが息を吐く。

「今日はこの辺にしておこうではないか」

丸腰になったティースに木刀の先を突きつけて言った。

「初日からこれでは、ティースくんも厳しかろう。それに……これ以上やったところで良い結果が出るとは思えんよ」

「ちっ……」

ガクリと膝をつき肩で息をするティースを、レアスは苛々した目で一瞥すると、

「やる気も実力もねえヤローがこんなとこに来るんじゃないよ！」

役立たずはとっとと消えちまえっ！！」

「はあっ……くっ……！」

反論する余裕もなく、ティースの視線は床を見つめたままだ。

……いや、余裕があったところで反論などできようはずもなかった。

（こんなに……力差があるなんて……）

力試しにと挑んだサイラスとの試合。お互いが本気で打ち合ったその結果は……僅か一撃、ほんの五秒ほどの決着。決着というのもおこがましいほど、ティースは何もできないままだった。いつ打ち込まれたのかもわからない。ただ、気が付けば手に痺れるような衝撃が走り、木刀が宙を飛んでいたのだ。

続くヴィヴィアンとの試合。……あくまでサポート役、デビルバスターを目指してすらいない彼との試合もまた、結果は同じ。

“次元が違う”とさえ言える内容だったのだ。

彼が落胆するのも当然だった。

「……ま、そう落ち込むな、ティース」

タオルをかぶり壁際に移動して項垂れたティースに、隣のサイラスが軽くその肩を叩いて励ました。

「お前はまだ来たばかりだ。勝手がわからなくて当然さ」

「……」

ティースにはそれに答える気力もなかった。

（……遠すぎる……）

アオイにスカウトされたことで、ティースの中にも多少の自惚れらしきものがあった。自分には少しぐらい見込みがあるのだと思っていたのだ。

だが……ここで起きた一連の出来事は、その甘い考えを跡形もなく打ち砕くのに充分すぎる内容だった。

“勝手がわからない”とかそういうレベルの問題ではない。

歴然とした力の差だ。

「おい、ビビ。体力が残ってるなら少し肩慣らしに付き合え。……つまんねえ試合を見てストレスが溜まっちゃった」

レアスが長羽織を軽くはためかせ、木刀を片手に立ち上がる。

「ふむ。別に構わないが、今日の私は絶好調だ。怪我をしても知らないよ」

「アホか。てめえがどうやって俺に怪我させるってんだよ」

数言のやり取りがあって、沈黙。

ぼんやりとしたティースの耳に、それはまるで幻聴のようにしか聞こえていなかったが、

「おい、ティース。見てみろ」

「……？」

サイラスの言葉にティースが顔を上げると、ちょうどレアスとヴ

イヴィアンの試合が始まるところだった。

ヴィヴィアンはティースのときと同じように、片手の無造作な構え。どうやらティースを見下していたわけではなく、これが元々の彼の構えらしかった。

対するレアスは剣先が床に擦りそうなほど下段に構え。両者の視線がぶつかり合うところに、渦のような熱量が発生している……かのようにティースには感じられた。ヴィヴィアンの視線もさっきまでとは比べものにならない真剣さがある。

（ああ……俺とやってるときはやっぱり本気じゃなかったのか……）
それに気付いて、ティースは再び愕然とした。

（……これ以上は——）

「項垂れるな、ティース。良く見ろ」

「っ……」

サイラスに首根っこを掴まれ、ティースは仕方なく顔を上げた。

——動く。

打ち込んだのはヴィヴィアンだ。

まるで、何かに突き動かされたかのように。

（あっ……そんなのじゃ——）

ティースがそう思った瞬間だった。

ヴィヴィアンの長めの腕から繰り出された剣筋は極端に加速度を増し、まるで伸びるようにレアスの体に迫る。

（当たる……いや！）

レアスが動いた。

引いたのではない。無謀とも思える突進だ。

（なっ……！？）

その動きは驚愕に値するものだった。

小柄な体躯が地を這うように移動したかと思うと、変則的な軌道を描くヴィヴィアンの太刀筋を難なく避け、その懐に入り込んだのだ。

カッ……！

レアスの手にした木刀が床と軽く擦れ合う。風を起こしながら跳ね上がった太刀はヴィヴィアンの顎へと吸い込まれるように伸びた。
「く……」

だがヴィヴィアンも黙ってはいない。
バックステップを踏み、その剣筋からかうじて逃れる。

「――！！」

ティースは再び息を呑んだ。

……剣筋にばかり集中していたティースの視線がレアスの方へ――その体がある“はず”の場所へ移動したとき、そこに彼の姿はすでになかった。

同時に、ヴィヴィアンの顎を狙っていた剣筋が、まるで残像のよう消える。

「あっ……」

ティースが次にレアスの体を“見つけた”のは……バックステップを踏んだヴィヴィアンの、そのさらに背後。

「くっ――！」

気付いたヴィヴィアンが体勢を立て直そうとしたときにはすでに遅い。

「っ……」

勝負は決していた。

レアスの木刀は斜めにヴィヴィアンの体を袈裟切ろうという刃りで止まり、ヴィヴィアンは額に微かな汗を滲ませながら両手を挙げて降参のポーズ。

少し離れたところでそれを見ていたフローラは、パチパチと手を叩いて喜んでいる。

「隊長！ お見事ですわあ！」

「すっ……すごい……」

その光景に目を見開いたティースは、思わず正直な気持ちを声に乗せていた。

「これが……デビルバスター……」

「たいしたものだろ、ウチの隊長も」

サイラスの言葉に、ティースはそのままの表情で、ただただ頷く。

「ああ……あんな……あんな動きができるなんて……」

口をつくのは、何の変哲もない感嘆の言葉のみ。

……本来ならばそれを見て、さらに自信喪失するはずだったかもしれない。が、今のティースは驚きの方がそれを遙かに上回っていた。

「……」

そんなティースの反応を満足そうに見つめ、サイラスは笑顔でもう一度その肩を叩く。

「けどな」

そして立ち上がった。

「お前も……やっぱり大したものだよ」

「……え？」

ヴィヴィアンが“やれやれ”というように両手を広げて戻ってくる。

立ち上がったサイラスは木刀を片手にしていた。どうやら次は彼の番らしい。

「普通なら今の試合、目で追うことも難しい。……けど、お前の目、隊長の動き、太刀筋の動きをほぼ正確に追ってたじゃないか」

「……あ」

自分でも気付かなかったその事実、ティースは少し戸惑って、

「いや、でもそれはたまたま……」

「たまたま、か。……んじゃ、それが本当にたまたまだったかどうか、確かめてみるといい」

笑顔でそう言ったサイラスの瞳に、瞬間的に炎が灯った。

「俺と隊長の試合でな」

「あ……」

背を向けたサイラスは、すでに声をかける雰囲気になかった。無駄のない体つきが一回り大きく見えるような、そんな錯覚をテ

イースは覚える。

「……ティースくん。見ているといい」

戻ってきたヴィヴィアンが、チラッとサイラスの背中を振り返って言った。

「彼が今、おそらくはこのネービスで“もつともデビルバスターに近い一般人”だ」

「え……？」

「実力は折り紙付き。おそらく来年のデビルバスター試験、彼は確実に受かるだろう」

対峙したレアスとサイラス。

先ほどと同じ構えのレアスからは、先ほど以上の緊張感が迸っている。

対するサイラスもまた。

まるで本気の殺し合い——そんな雰囲気はティースは感じていた。そうして始まった試合。

——ティースにとってそれは、一瞬のようにも永遠のようにも感じられた不思議な時間。

超人同士が互角に打ち合ったその内容は、彼にさらなる劣等感と、それを遙かに上回る憧憬を植え付けたのだった。

その2『穏やかな風に波立つ海』

数日後。

ティースが自信喪失したとかやる気を出したとか、そういったことは一切関係なく、鍛錬と勉強の日々は淡々と続いていた。

再びカノンの面々と何度か打ち合ったティースは、初日ほどひどい内容ではなかったものの、ヴィヴィアンとの対戦成績は結局のところ十回やって二回勝てるかどうかというところ。しかもそれだけの差をつけられながらヴィヴィアンはもともとが剣使いではないらしく、それがまたティースの自信を喪失させることになったわけだが――まあそれはともかく。

「本日のテーマですが」

デビルバスターには実力だけでなく、魔に関するあらゆる知識も必要とされる。

というわけでこの日の午前中、ティースは別館の執務室にてアオイの講習を受けることになっていた。

「そろそろ話しておいた方がいいですね」

「？」

いつもは玄関ホールの丸テーブルで向かい合って学習していたが、今日は執務室だった。いくら鈍いティースでも、いつもと違う雰囲気を感じたのは当然のことである。

アオイは話を始めた。

「ティースさん。我々“人”が基本的に“魔”に対抗するのが難しいと言われるのは、何故だかわかりますか？」

縁なし眼鏡の奥から向けられたアオイの視線と口調は、まるで本物の教師のようだ。

それを少しだけ可笑しく思いながらも、ティースは真面目に答える。

「そりゃ……普通の武器じゃ、魔を傷つけることが難しいから、か

な？」

アオイは満足そうに頷いて、

「そうです。全ての魔は“魔力”を持ち、その魔力は普通の人間の攻撃ならば何の苦もなくはね除けてしまうのです」

そこまではティースも、おそらくは一般人でも大抵の人間が知っていることだった。

「そこで我々が魔に対抗する手段として活用するのが、そういった魔力を打ち破るための、“破魔具”と呼ばれるアイテム。……ではティースさん。あなたはこの破魔具と呼ばれるアイテムの本来の効能をご存じですか？」

ティースは怪訝そうに眉をひそめて、

「本来の効能……って、魔力を打ち破る効果じゃないの？」

「もちろんその通りですが、それは結果的にそうなるだけのこと。

……破魔具そのものが魔力を打ち破る力を持っているわけではないのです」

「？」

怪訝そうなティースにアオイは微笑んでみせて、

「実際に魔力を打ち破るのは破魔具ではなく、人が先天的に持つ“聖力”と呼ばれる力です。破魔具は身につけることによって、その聖力を高める効能があるのです」

「聖力？」

ティースには初耳……いや、どこかで耳にしたような気もしていたが、少なくとも詳しい説明を聞くのは初めてだった。

「え？　じゃあ例えば、破魔具は別に武器じゃなくてもいいってこと？」

「その通りです。……実は」

アオイは頷いて、それから襟元のバッジをティースに示してみせた。それはミューティレイク家の紋章の入ったバッジで、レイやアクア、それにディバーナ・カノンの面々も似たようなバッジを身につけている。

「これも破魔具なのですよ」

「……そのバッジが？」

「ええ。ただし破魔の力を宿すのに適した素材というのは、少なくとも人の技術で作れる範囲ではだいたい決まってましてね。破魔の力がほぼその“質量”に左右されることもあって、結局武器などに宿するのがもっとも効率的なのです」

ティースは納得した。

「ああ……つまり、武器の他に重たい金属を背負うよりは、武器そのものを破魔具にした方がいいってことか……」

「ええ。ですからこのバッジも、有事の際にもしも破魔具が手元になかったときのための保険でしかありません。……とはいえ、実はこのバッジ、かなり貴重な素材で作られてまして、大ききの割にかのりの力があるのですよ。もちろん武器型の破魔具に比べればせいぜい半分程度ではありますが……」

「へえ……でも確かに、大ききから考えるとすごいなあ」

ティースが素直に感心すると、アオイはまるで自分が誉められたかのように嬉しそうな顔をして、

「そうでしょう？ ……これを創るためだけに、姫は各地にある先祖代々受け継いできた避暑地や別荘を十三も手放して資金を作られたのですよ」

「じゅ、十三……」

ティースは正直、ファナの心遣いよりもその途方もない資産の方に目を丸くしてしまった。

（きつと、一つ一つがとんでもない広さなんだろうなあ……）

しかしそう考えてみると、ティースにもそれがどれだけすごいことかというのが理解できてくる。いくらミューティレイクとはいえ、それは決して無視できない財産だろう。

と、アオイはティースの驚いた顔に、満足そうな微笑みを浮かべて、

「で……まあ、破魔具と聖力、魔力との関係については後日改めて。

今回は破魔具について、もう少し深いところまでご説明します。…
…これを見て下さい」

そう言ってアオイは近くに立てかけてある剣を手に取り、鞘から抜き放った。

「これが私の破魔具、光の力が込められた剣、“閃”^{ひらめき}です」

「へえ……」

初めて間近で見たその剣に、ティースは感嘆の声を漏らす。

“光の力が込められた”とアオイは言ったが、それが十分に納得できるものだ。僅かに反った珍しい形の片刃の剣。太陽の光が直接当たっていないにも関わらず、それは僅かな輝きを放っているかのように見えた。

「では、ティースさん」

魅入られたように見つめるティースに、アオイは微笑みながらその柄の部分差し出した。

「持ってみてください」

「え？ あ、ああ」

少しドキドキしながら受け取ったティース。

だが、

「――あれ？」

直後、その口から疑問の声が漏れた。

「わかりますか？」

「輝きが……消えた？」

そう。ティースがそれを掴んだ瞬間……いや、正確にはアオイがそれを手放した瞬間、“閃”は突然にその輝きを失い、まるで普通の武器のようになってしまったのであった。

「これが破魔具の中でもさらに特殊な“神具”と呼ばれる武具です」
それがアオイの手に戻ると、それは再び微かな輝きのオーラを放ち始める。

「破魔具と違い、神具はこの世でただ一人の持ち主にのみ、その力を貸し与えます。つまり、少なくとも現時点においては、この“閃

”を扱えるのは私だけということです。私が死ぬか、特殊な儀式によってそれを誰かに譲るまで」

「へえ……なるほど」

ティースは破魔具の存在こそ知ってはいたが、その特殊な破魔具——神具の話は初耳だった。

「制約がある分、破魔具よりも神具の方が強い力を持っており、さらに多くの神具は聖力を高める以上の効能をもたらす場合が多いのです。……神具以外にも特殊な破魔具は存在しますが、滅多に見られるものではないので説明は後日に回しましょう。ちなみに——」さらにアオイはあらかじめ用意し、机に置いてあったいくつもの武器をティースに示してみせて、

「みなさんからお借りしてきました。この半楕円型の二刀がレイさんの神具“夜叉”で、こちらの手甲がアクアさんの神具“氷雨”。これがドロシーさん愛用の破魔具で——これがヴィヴィアンさんの——……さんの……」

「はあ、はあ……」

あまりに数が多い上、聞いたこともない人物の名前まで登場して、ティースにはまるで覚えきることができなかったが、その種類はナイフだとか鞭だとかトンファーだとか、とにかく様々だった。が、

「えっとこれが確か……えっと、誰が使っていましたっけ……」

長引きそうだと思ったティースは、途中でそれを止めて尋ねることにする。

「アオイさん。その……神具ってのはレイさんとアクアさんだけなのか？」

「あ、そうですね」

自らも途中で飽きていたのか、ティースの言葉にアオイはすぐさま説明を放棄して頷くと、

「神具はレアスさんも第四隊のアルファさんも持ってます。つまりウチのデビルバスターは全員が持っていることになりますね」

「え……ってことはそれって、デビルバスターになったらもらえるとかそういうものなのか？」

「いえ」

アオイは首を横に振った。

「もともと神具というのは数も少なく特殊なもので……おそらく大陸にいるデビルバスターでも、普通に破魔具を使っている方が多いと思います」

「？　じゃあ、みんなはどうして……」

アオイは少しだけ考えて、

「たまたま……としか言い様がありませんね。私に関していえば、家に代々伝わっていたものです」

「……ふうん」

別に秘密にするようなことでもないようにティースは感じたが、あるいはそれぞれに何か深い事情や思い出したくない過去があるのか。

ティースはそれ以上詮索しないことにした。

「ですが」

アオイは気を取り直したようにティースを見た。少しだけズレていた眼鏡を直し、それから微かに笑みを浮かべる。

「その言い方を見ると、ティースさんはやはり気付いていないようですね」

「？　なにが？」

「覚えていますか？」

そう言ってアオイはゆっくりとティースに歩み寄った。

「二ヶ月前、あなたに助けていただいたあの日……姫があなたに武器を見せてくれとおっしゃられたこと。そして私があなたの武器を実際に見せていただいたこと」

「え？　あ、ああ、そういや……」

それほど遠い昔の話ではないし、ティースもちろん覚えていた。「私たちが何故、あんなことを言ったかわかりませんか？」

「え……？」

戸惑うティースの脇をすり抜け、アオイはその背後にあったティース愛用、中型サイズの剣を鞘ごと手に取った。

そして、

「――細波」

「？」

呟いたアオイにティースが振り返ると、

「神剣……というよりは、神石……というべきでしょうか」

そう言って、アオイは柄の先の部分――そこにはめ込まれた少々大きめのエメラルドブルーの宝石をティースに指し示した。

「この宝石の中を覗いてみたことはありますか？」

「え？ ああ」

ティースは頷いて、

「中に変な模様みたいのが浮かんでいるんだろ？ 最初は傷かと思っただけ――」

「ええ、もちろん傷などではありません。これは古代語――古代語で“穏やかな風に波立つ海”という意味の言葉が書かれています」

「穏やかな風に……波立つ海……？」

「わかりやすく言えば“細波”^{さいなみ}というような意味でしょうね」

言いながら、アオイはその剣を鞘から抜き放った。

そこから現れた何の変哲もない刀身……それを見て、アオイは納得したように頷く。

「なにか変だとは思いませんか？」

「え？ なにかって……」

眼前に出されたその刀身をマジマジと眺めたティース。

「……？」

だが、刀身を見ても刃が欠けているということはないし、特になんの変哲もないもので、ティースにはアオイの言いたいことがまるで理解できなかった。

仕方なくティースは少し冗談っぽく笑いながら、

「そうだなあ……汚れてきてるからちゃんと手入れしなきゃならない、ってこと？」

「汚れ……ですか」

その言葉にアオイは笑い返して、

「当たらずとも遠からずですね」

「え？」

「どうぞ」

意外な言葉で驚いたティースに、アオイは先ほどの“閃”と同じようにその柄を差し出してきた。

「気にしなければ気付かないほど……ですが、これはあまりに素晴らしいものです」

「……!？」

その“変化”はティースにもすぐに理解できた。

「これは……!」

ティースが握った瞬間、刀身は確かに“変化”した。

汚れている——そう感じた彼の感覚は確かに“当たらずとも遠からず”だ。

汚れていたのではない。

ティースが手にした瞬間そこに現れたのは、吸い込まれそうなほどに美しい刀身——

「汚れていたわけではありません。あなたがこの美しい刀身に見慣れてしまっていたからこそ、普通の状態の刀身が汚れているかのよう to 思えてしまったのです」

「じゃあ、これって……」

今までその剣をティース以外が握ったことはない。だから彼が今まで気付かなかったのも無理はなかった。

アオイは頷いて、

「それは紛れもない破魔具……いえ、あなたにしか反応しない力を秘めた“神具”です」

「で、でもこの剣はごく普通の店で——」

「先ほども言ったように、剣ではありません。“穏やかな風に波立つ海”——つまり“細波”と刻印されたその宝石。それが剣に特殊な力を与え、なおかつあなた自身の聖力を大きく高めています。…しかも」

アオイはそこで言葉を止め、唾を呑み込む。

「……？」

そこでティースは初めて気付いた。

——冷静なように見えて、彼が少し緊張しているらしいことに。

「それは普通では考えられないものです。その宝石には、二つの力が同時に込められています」

「二つの力……？」

「穏やかな風と波立つ海——つまり“風”と“水”の二種類の力がその宝石には込められているのです。そのためその力は、私の“閃”をも完全に上回っている……」

「……」

改めてティースは“細波”の刀身を見つめる。

確かに彼もおかしく思わないでもなかった。普通の鋼で出来ているにしてはあまりに軽すぎる重量、そしていくら使おうとも決して美しさを失わず、全く刃こぼれすることのない刀身。

「それって……」

アオイの態度を見ればそれがどれだけすごいことなのか想像はつくが、それでもティースは尋ねずにはいられなかった。

「それって……そんなにすごいことなのか？」

「……少なくとも」

空になった鞘をティースに手渡し、アオイは再びその脇を抜けて元の位置に戻っていった。

そしていつもの直立で真っ直ぐにティースを振り返る。

「実物はおろか、誰かが実際にそれを持っているという話も聞いたことがありません。そういうものが存在するということは歴史や文献などで目にしますが……」

「……歴史や文献」

ティースは啞然とした。それは彼の想像以上だった。つまり……アオイが知っている限りでは、それは歴史書にしか存在していない代物ということなのだから。

「ティースさん。……もう少しお話させていただきませんが――」

アオイは自らを落ち着かせるように天井を見上げ、小さく息を吐いた。

「破魔具というのは人の手で作ることが可能です。それは人が、魔と戦ってきた歴史において、その知識を総動員して作り上げた武具。実際、現存する破魔具の大半は人が作ったものです。……でもそれじゃあ」

アオイは壁に立てかけてあった“閃”を探り、そしてそれを軽く握り締める。

「このような神具は……誰が作ったものかわかりますか？」

「……」

もちろんティースは知らなかった。

だが、それを想像することは容易だった。しかも断言に近いレベルで。

「魔が……作ったもの」

「ええ。その通りです」

アオイもまるでティースがそう答えることを確信していたかのような態度だった。

「これらの神具は過去、“人”が“魔”と戦い奪い取った成果。……あるいは」

眼鏡の奥の瞳が、ほんの僅かに真剣味を増す。

「歴史上でも数少ない“人”と“魔”の友好の証……」

「……」

「人を選ぶほどの力を込めた神具は、やはりそれなりの力を持つ魔によって作られたものです。私の“閃”はもちろん、あなたの“細波”も。だからこそ、人の作った破魔具とは違って質量と性能が必

ずしも比例しないし、破魔具ではありえない効能も持っている」

「……」

「しかもあなたの“細波”は風と水、その両方の力を持っています。魔というのは基本的に種族間の対立が強い生物。つまりそれが、複数の力を持つ神具の存在を希少なものに行っているのです。……ティースさん」

「……なに？」

顔を上げたティースに、アオイはゆっくりと大きく息を吐く。

そして改めてその目を見つめ、言った。

「あなたは以前言いましたね。その宝石は“知り合い”に“お守り”としてもらったものだ」と

「……ああ」

アオイが何を言わんとしているのか、ティースにもようやく理解できていた。

彼自身があのとき、常識的に考えて、どれだけ“ギリギリ”なことを口走ってしまったのかということ。

「それがどうやってあなたの手に渡ったのか、事実がどうであるかは確認しません」

アオイは“閃”を再び壁に立てかけ、それから少し疲れたような顔で近くの椅子に腰を下ろした。

「ただ、今後は決して“知り合いにももらった”などと他の方に軽々しく口走らないよう気を付けてください。家に伝わっている、どこかから見つけた、あるいは魔から奪い取ったということにした方が無難です」

「でも、これは――」

ティースの反論を遮って、アオイはきっぱりと言い切った。

「でなければ、あなたが魔に通じていると勘ぐる人も出てくるでしょう」

「……」

ティースは二の句が継げなかった。

(……魔に通じている、か)

アオイの言うことはこの世界の常識から言えば概ね正しい。世の人々は大半が“魔”イコール“化け物”と認識しているし、人と同じような知能を持った魔の存在を知ってはいても、彼らと友好関係が築けるなんて思っている者は少ない。

だが。

「アオイさんも、やっぱりそう思うのか？」

ティースは知っていた。――彼の過去には、決してそうではないと思わせる出来事があったから。

もっと具体的に言うなら……彼は過去、魔の者と出会い、話し、そして友人としての契りを結んだことがあったから。

(やっぱり、普通の人は信じないんだろうな……)

だが、アオイはあっさりと答える。

「いいえ、思いません」

「……え？」

「言ったじゃないですか。“他の方に”口走らないように気を付けてください、と」

呆氣に取られて顔を上げたティースに、アオイは少しおかしそうに微笑んで、

「こんな部隊を抱えている我々が言うのも難ですが……私も姫も、魔との友好には僅かながらも可能性を感じているのですよ」

「じゃあ……」

少し明るい気持ちになって問いかけたティースに、アオイは含みのある口調で続けた。

「それにこのディバーナ・ロウには……大きな声で言えない秘密が色々とありましてね」

「……？」

「さ、それではその話はこの辺りにして。……勉強の続きを頑張りましたどうか、ティースさん？」

結局、それについては曖昧なまま、アオイの授業は続くのだった。

ミューティレイク邸の本館には巨大な書庫が存在している。

もちろん歴史も財力もある家系のこと、そのこと自体は決して驚くべきことでもないのだが、ただ、大小様々なものを合わせて“七桁”を超える蔵書量は、個人としてはあまりに度を超しているといってもいいだろう。

もちろん書庫自体も簡単に迷子になってしまうほどの膨大な広さで、中に入るときはよほど慣れた人間でない限り、常駐している二人の司書の一人が必ず付き添うことになっていた。

さて……大部分が薄暗いその書庫の中、入り口付近には読書ができるように採光され、椅子やテーブルの設置されている場所がある。

「あれれ？」

「？」

そこで本を読んでいたシーラは、背後で聞こえた素っ頓狂な声に顔を上げた。

「シーラさん、だよね？」

「あなたは……？」

開いていた本とノートを閉じ、椅子を引いて振り返ったシーラ。その視線の先にいたのは、分厚い本がトレードマークのパンツルの少女――あまりにも若すぎるミューティレイク家の執事、リディアⅡシュナイダーだった。

「リディアだよ。こうして直接話すのは初めてだよね。……そこ、座っても？」

「ええ。構わないわよ」

シーラにはリディアとの面識がない。ただ、リディアの方はシーラという人物のことを知識として知っていた。

「よいしょと」

向かいに腰を下ろしたりディアは、たった今、書庫の奥から持っ

てきた二冊の本をテーブルに置く。

「……」

それを見てシーラは再び怪訝な顔をした。

ドスツという重そうな音から、その本がどれだけの厚さを持っているかが伺える。が、それ以上に……どうやらこのリディアという少女、司書の付き添いなしで書庫に入っていたようなのだ。

と、リディアはシーラが読書を再開しないのを見て取ると、チラッとシーラの手元に目をやって、

「珍しい本読んでるね。……それにしても意外だなあ、こんなところで会うなんて」

「なに？」

「あたしが聞いたところじゃ、シーラさんって人はとっても美人で、とっても気が強くて――」

「ええ」

「とんでもない遊び人で、とんでもない尻軽女だって。話だけ聞くと、少なくともこんなところで黙々と勉強するような人とは思えなかったけど」

「……」

あまりにストレートなリディアの物言いに、シーラは一瞬だけ呆気にとられたように目を見開き……それからすぐに口元に微かな笑みを浮かべた。

「そうね。私はその噂通りの人間よ」

「うっそだあ」

ケラケラと笑うリディアを、シーラは興味深げに見つめて、

「どうして嘘だと思ふのかしら？」

「んー、そうだね。……さっきの笑った顔が、ものすごく優しかったから、かな」

「……」

もう一度、シーラは呆気にとられた顔をして、

「ぷっ……あはは」

「なんで笑うかなあ。ホントのことなのに」

口を膨らませたリディアだが、それはもちろん演技だ。

「だって……それじゃまるでナンパされてるみたいだわ」

「それはきつと血の持つ業というやつだね。ウチの兄がそれ系だから」

「お兄さん？」

「そう。シーラさんも知ってるでしょ？」

「……」

シーラは美しい形の眉を怪訝そうに動かし、リディアの顔を見つめる。

そして、

「もしかして、レインハルトⅡシュナイダー——」
閃いたようだ。

……似ているというほどのものではないが、確かに目元には少々面影があるし、髪の色が全く同じだということにもすぐに気付く。

「あれ。すぐわかんなかったってことは、まだナンパされてない？
珍しいなあ」

「……」

無邪気にそう言ったリディアに対し、シーラは少し考えるような表情をする。

リディアは怪訝そうに、

「どしたの？ あ、もしかしてあの人、なんかとんでもない失礼なことした？」

「いえ。でも——確かに兄妹っぽいわ、あなたたち」

そう答えたシーラの表情には、特に嫌悪感らしきものは浮かんでいない。実際、先日程度のやり取りでレイに悪印象を持つほど彼女は単純ではなかった。

「うーん。あたしとしては、あの人に似てるって言われて良いことなんか何もないんだけどなあ」

「そんなこと言ったら、彼が悲しむのじゃないかしら？」

「あはは、まさか。そんな可愛い性格してないって。……そういや何気ない仕草でリディアが話題を変える。」

「シーラさんってティースさんと一緒に来たんだったよね？」

「ええ、そうよ」

「あたしね。それでもファナさんのサポート役をやってるんだ」

「……あなたが？」

シーラは驚きの表情を浮かべたが、すぐにその視線を、彼女が持ってきた分厚い本に移動させて、

「ああ、ここにいただけあって見た目通りじゃないのね。……それで？」

尋ねたシーラにリディアは真顔で、

「で、色々と参考までに聞きたいんだけど……ぶっちゃけ、ティースさんってシーラさんのなんなの？」

遠回しなのかストレートなのか微妙な問いかけだった。

「なについて、どういうことかしら？」

「家族？ 恋人？ それとも下僕？」

あっけらかんとした物言いに、シーラは再び笑った。

「ふふっ……そうね。その中で強いて言うなら下僕かしら」

「うわ。今、ものすごく本気の匂いが漂ってたんだけど」

リディアの言葉に、シーラはテーブルの上で自らの手を重ね合わせる。

「実際そうでしょう？ 彼は自分の収入を私のために使ってるし、私は彼に何の見返りも与えていないわ」

「へえ……健気なんだね、ティースさんって」

「健気？ あれはただ単に馬鹿なだけよ」

少しだけ眉をひそめてシーラはそう言った。

「……」

そんな言葉に、リディアはちよつとだけ考えるように視線を泳がせて、

「でもその馬鹿のおかげでシーラさんは学園に通えてるんでしょ？」

「ええ、まあそうね」

「あはは」

リディアは笑いながら頭の後ろで手を組んだ。

「じゃあ馬鹿で良かったじゃない。……やっぱしアレ？ 尽くしていれば振り向いてくれるかもしれないとか、そういう幻想抱いちゃってるのかな？ 男ってホントに馬鹿だよね」

「……随分スレたようなこと言うのね」

シーラが少しでも目を細めたが、リディアはそれに気付かない様子で言葉を続けた。

「そんなことないけどね。でもほら、ティースさんって見た目も特別ハンサムじゃないしさ。あれでシーラさんと釣り合うと思ってるならやっぱ笑えるもん」

「別に……私は顔がどうか言うつもりはないわ」

「あ、そっか」

リディアはポンと手を叩いた。

「じゃあ性格かな？ 確かにああいう一見誠実そうな人って、裏で何考えてるかわかんないもんね。きつと女の人とすれ違うたびに頭の中で裸にして――」

瞬間、その場の空気が冷える。

「……やめなさい」

鋭く、シーラの一言が場に響き渡った。

それは決して大きいわけでもドスの利いた声でもなかったが、年下の少女を一言で黙らせるには充分すぎるほどの重みがあった。

「……」

黙り込んで真っ直ぐに見つめ返してくるリディアを、シーラは人形のように整ったその顔から、細めた目で射抜くように見据えた。

「あなた、どういふつもりか知らないけど、単なる想像で他人のことを悪く言わないでちょうだい。……気分が悪いわ」

「なんで？」

だがそんな視線に、リディアは驚いた様子も怯んだ様子もなく言

い返す。

「だってシーラさんだってティースさんの悪口言ってたじゃない。いきなり否定するなんて変だよ」

「悪口？ 違うわ」

シーラは相変わらずの冷たい表情——だが、その中には確実な怒りが潜んでいる。

「私は想像で言ってるわけじゃない。彼が馬鹿だと思うのは長く彼を見てきた経験。下僕だと言ったのは彼が私に無償で尽くしているという事実。……あなたみたいに無根の中傷をしているわけじゃないわ」

「へえ……それって重要なこと？」

「少なくとも私が見てきた彼は、馬鹿だけどあなたの言うような男じゃない」

「……」

睨み合う形で沈黙が下りた。いや、リディアの方はあくまで普通だったから、“睨み合う”と言ったら語弊があるだろうか。

ただでさえ静かな場所が、これ以上ないほどに静まり返る。

そして……十数秒。

「取り消しなさい、リディア」

シーラは凜と透き通る声に、まるで氷の刃のような鋭さを乗せて言い放った。

溢れる緊張感。

——だが。

「うん。じゃあ、取り消すよ」

返ってきたリディアの言葉はその場にそぐわない、あまりにもあつさりとした口調だった。

「……？」

シーラは怪訝そうに眉をひそめ、全身に溢れていた緊張を僅かに緩める。

すると、

「ごめんね。実を言うとあたし、ティースさんの第一印象はすごく良かったんだ」

「……なに？」

その言葉はさっきまで言っていたこととあまりにもアベコベで、シーラには容易に理解できないものだった。

リディアはさらに続ける。

「でね。それなのにシーラさんって人がひどいやツだって聞いたから、ホントにそうだったらちょっとからかってやろうと思ったの。……でも、なんか違ったみたい。ホント、ごめんね」

「……」

しおらしく謝罪するリディアを見て、ようやくシーラは自分が“試されていた”のだと悟った。

「怒った？」

「……」

普通なら怒って当然のところである。シーラにしてみれば相手はいくつか年下の少女であり、初対面でもある。いきなり性格を試すようなことをされて、気持ち良いはずもない。

だが意外なことに、彼女の胸に込み上げてきたのは、怒りではなく――

「ふふっ……あなたって……本当にお兄さんと似てるわ」

「あれ。怒ってない？」

笑いながらそう言ったシーラを、リディアは意外そうな顔で見た。「っていかホントは怒ってる？ 似てるっていうのは実は嫌味？」

「さあ、どうかしら」

真顔のリディアに再び笑いながら、シーラは目を細める。今度は突き刺すような視線ではなく、逆にそこに穏やかな色を帯びて。

「うっわ……」

そんな彼女を見て、リディアは一瞬言葉を失った。

……どこか世間を斜めに見つめているこの少女をして、素直に“綺麗”だと思わせるほど――シーラの微笑みは、男であろうと女で

あろうと関係なく虜にしてしまう“魔性”の美しさを秘めていた。

「……やっぱティースさんって変人かも」

「？なに？」

怪訝な顔をしたシーラに、リディアはあっけらかんとした口調で答える。

「だってシーラさんみたいな人と一緒に暮らしてたのに、ぜんぜん手を出さずにいられるなんて絶対おかしいって。絶対変。“物理的”にあり得ないよ」

「……」

シーラはさすがに苦笑するしかなかったが、リディアは真顔のまま眉間に皺を寄せ、まるでオバケでも見たかのような表情を作り、ことさらに声を潜めた。

「ティースさんってもしかして……男の人じゃないとダメなんじゃ」

「……」

一瞬、微妙な沈黙。

「ぷっ……あははははっ」

「あ、今のは無根の中傷じゃないよ。シーラさんに手を出さなかったっていう“信じ難い事実”に基づいた推測だかんね」

「ふふっ……いえ、確かにそうだわ。私みたいな美人と一緒に暮らしてて——」

「うわ。自分で言っちゃったよ」

「あら。本当のことよ？」

「遠慮のない人だなあ」

だが、そう言ったリディアの言葉にはひどく好意的な響きが含まれていた。

「でも、想像よりずっと話しやすいね、シーラさんって。……なのに、なんでティースさんには冷たいのかな？」

「……」

シーラは一瞬だけ言葉を躊躇った。

……が、リディアの質問のタイミングが巧妙だったのか、あるい

はそれが年下の少女だったからか。

レイのときのようにそれをはねつけるようなことはなく、

「別に冷たくしてるつもりはないのよ。ただ……そうね」

あるいは——否応なしに広がる勝手な想像や風評をこの辺りで堰き止めたかったのかもしれない。

「あいつとはできるだけ口を利きたくない。だから自然と冷たくなるのかもしれない」

「……」

リディアは啞然としてシーラを見つめた。

「口を利きたくない？ ティースさん、あんなにシーラさんのために頑張ってるのに？」

シーラは頷いて、そして——少なくともリディアには本心としか思えない、淡々とした口調で言い切った。

「別にあいつが悪いわけじゃないわ。でも、あいつを見ていると胸が苛ついて仕方ないの。……それでも夢を捨てられずに今まで一緒にいたけれど」

「それって照れ隠し……とかじゃないよね。うん、違う」

シーラの顔を見て、リディアは自らの疑問をすぐに撤回する。

首をひねって、

「……わっかんないなあ。ホント、わかんない。なんでそんな関係が成り立ってるんだろ」

「わからなくてもいいことよ」

トン、とテーブルに置いた本とノートを揃え、シーラはゆっくりと立ち上がった。

だが、リディアは食い下がって、

「だって、デビルバスターになるための決意って、言うほど簡単じゃないんだよ。ほとんどは戦闘狂だとか欲に目が眩んだ人だとかそんなのばっか。“人々のため”って言う人たちだって、大抵は過去に酷い目に合わされたことへの復讐だもん」

真っ直ぐにシーラを見つめる。

「それが、ただ、シーラさんのためだって言うんなら、ティースさんは馬鹿みたいなお人好しだよ」

「だから馬鹿なんだって言ってるじゃないの」

シーラは苦笑した。

「でも私はここに来て良かったと思っているわ。ティースとは滅多に顔を合わせなくて済むし……それにほら。図書館に行かなくても調べ物ができる環境が整ってる」

「それも本気なんだ、やっぱ。……つかみ所ないなあ」

「そうね。あなたも大人になればわかるかもしれないわ」

「うっそだあ、そんなの。……ね、シーラさん」

微笑みながら背中を見せたシーラに、リディアは椅子から腰を浮かせてもう一度だけ言葉を投げ掛ける。

「何があるかわからないんだからね。縁起でもないって怒るかもしれないけど、ここは実際に何人もの人が死んでる場所だよ。もし何か理由があるんだったら、今のうちに何とかした方がいいよ」

「……見掛けに寄らずおせっかいなのね」

「そんなんじゃないよ」

リディアは真顔で答えた。

「単なる好奇心。納得いかないから」

「そう。……だったら」

シーラはチラッと振り返って、それから皮肉な笑みをそこに浮かべた。

「私とティースは本当はお互いに好き合ってるけど、つまらない意地を張り合ってたなかなか素直になれないだけの関係よ。……それなら辻褃が合うかしら？」

リディアは口を尖らせて、

「合うかもしれないけど、絶対事実じゃないし。少なくとも、シーラさんがティースさんを避けてるのはホントっぽいもん」

「ならやっぱりティースが単なる馬鹿で、私がそれを誑かして利用してるっていうのでもいいんじゃない？」

「……あーあ」

リディアはストンと椅子に腰を下ろし、背もたれに身を預け頭の後ろで腕を組む。

「振り出しに戻っちゃったよ。……それもシーラさんの性格を考えるとなさそうなんだけどなあ」

「人のことなんて見掛けじゃわからないものよ」

書庫の扉を開けて、立ち去り際にシーラは言った。

「あなたが私のことを過大評価してるだけだわ。多分、私はあなたが思っているより自分勝手に悪い女よ」

「……」

扉が閉まる。

それを見送ったりリディアはやはり納得できない様子でため息を吐き、

「本当に悪い人って、自分が悪いって自覚もないものなんだけどもあ……」

そうしてしばらく考えた末、独り言を呟いた。

「……ま、いっか。これ以上考えてもお金にはならないし、ね」

夕日がその姿を山間に隠そうとしていたころ、ディバーナ・カノンの詰め所では、本日一番長引いた試合がようやく佳境を迎えていた。

「――やあっ!!」

「まだまだ! 甘いよ、ティースくん!」

ティースの打ち込みを払ったヴィヴィアンの長い木刀。それを持つフリーチの長い腕がまるで鞭のようにになって、横からティースに迫る。

「くっ!」

色白で細身の体からは信じられないことだが、その持つ威力は

相当だ。まともに受けては体勢を崩されかねない。

(……どうする!?)

一瞬の思考停止。

結論が出るより先に、体が動く。

「!」

ヴィヴィアンの顔が驚きに染まった。

——突進。

いつか見たレアスの動きがティースの頭に残っていたのだ。だが、もちろん彼のような超人的な動きができるわけではない。

木刀の重なる音が高らかに響いた。

「うおおおおっ!!」

横から迫った木刀を自らの木刀で受け、その威力に体勢を崩しながらもティースは床を蹴ってヴィヴィアンに肩から突撃する。

「おおおっ!?!」

全くの不意打ちにヴィヴィアンが驚きの声を上げよろめく。——いや、支えきれずに腰から床に倒れ込んだ。

木刀が双方の手から離れる。

体勢はマウントポジションを取ったティースの方に有利だった。

……だが。

「——」

「隙アリっ!」

「ぐえっ!!」

一瞬固まったティースの脇にヴィヴィアンの膝蹴りが決まって、ティースは横に転がった。

怒声が飛ぶ。

「ティース! てめえ、なにボサツとしてやがるっ!!」

声の主はもちろんこのデイバーナ・カノンの隊長、弱冠十二歳の赤毛少年、レアスだった。

「その体勢になったなら関節を極めるなり何なりして動きを封じ込めろよ!! この阿呆がっ!!」

「っ……」

「ふうっ……まあまあ、隊長。そう目くじらを立てることもないではないか」

ゆっくり体を起こしたヴィヴィアンがそれを宥める。

その額には僅かながらに汗が光っていた。

「今まで剣を合わせる訓練しかしてなかったのだからな。どこまでやればいいのか、彼もわからなかったのであろう」

「ふん……“実戦形式”の意味がそいつにはわかってねえようだな」「すみません……」

ゆっくり立ち上がってティースは素直に謝った。

ヴィヴィアンの言った通り、あの瞬間、どうすればいいのかわからなかったのは事実だった。ただ、実戦形式ということを考慮したなら、どうすべきだったのかは一目瞭然。

気を抜いたことを咎められるのは当然だった。

……それに、そうでなくともどっちみち、口答えできるほどの体力は残っていない。

「でも、なかなか良い奇襲でしたわぁ」

レアスの隣のフローラがニッコリと笑顔でティースに笑いかける。

「ね、隊長もそう思いますわよねえ？」

「……悪くはねえが、そう何度も通用するもんじゃねえぞ」

「え？」

その言葉は、またボロボロにこき下ろされと思っていたティースには意外な言葉だった。

が、レアスはすぐに視線を移動させて、

「ビビ、てめえも油断しすぎだ。なんてザマだよ」

「いやいや。どうにもこの木刀というやつは美しさがなくてダメだな。やはり私には少々合わない気がするよ。……隊長。やるかい？」

レアスはチラッと夕日が沈み始めたのを見て、

「時間もねえな。最後に俺が直々に全員稽古をつけてやる。……ティース。てめえは少し休んで息を整えておけ」

「はい……」

「お疲れさん」

壁際に戻ったティースをサイラスが労いの言葉で出迎える。

「日増しに動きが良くなってきたんじゃないか」

「……そんなもんなあ」

肩で息をしながらティースは疑問を返した。彼自身はそれほど変わった気がしていないのだから当然だ。

が、サイラスは顎で中央に立つレアスを示して、

「隊長も最初ほど言葉に刺がないだろう？　少しはお前の素質を認めてきてるってことさ」

「……うーん」

（棘がない、ねえ……）

それこそ疑問だった。そりゃ確かに、先ほどの言葉は意外だったものの。

「……ふと思ったんだけど、あのフローラさんって隊長と何か関係あるのか？」

「ん？　どういうことだ？」

サイラスの怪訝な顔に、ティースはますます声を潜めて、

「なんか隊長ってあの人の言うことだと、いつもより素直だったりしないか？」

その視線の先ではフローラが手を叩きながらレアスとヴィヴィアの双方を応援している。

あくまでこの数日を見た印象だったが、レアスもフローラに対してはほとんど厳しい言葉を使わないのだ。……まあ医事担当ということで稽古にも参加しないし、特に叱咤される場面がないということもあるのだろうか。

「ああ、そんなことか。それは単に隊長が――」

納得した様子で頷いたサイラスの言葉に、甲高い木刀の音が重なった。

「サイラス！　次はてめえだ！！」

「おっと。今日はやけに早いな」

こっちの会話が聞こえたはずもないが、サイラスは首を竦めて立ち上がると、

「ま、大した理由じゃない。……隊長もあれで、結局はまだまだ子供だってことさ」

「？」

いまいちティースには理解できなかったが、サイラスはそのままレアスとの試合へ向かっていった。

（まだまだ子供、ねえ……）

サイラスとレアスの試合が始まった。

どちらかといえば隊長のレアスが攻め、サイラスは相手の動きに合わせて柔軟に対処する。

身長以上の剣を無茶な動きから鋭く振り回すレアスはもちろんだったが、それを最小限の動きで受け、払いのけるサイラスもまたとてつもないセンスの持ち主だ。

ほぼ互角に見える打ち合いだったが、やはり地力の差が徐々にサイラスの動きに余裕がなくなってくる。

（……子供、ね）

攻撃性の高い自分本位の打ち込みは、確かに微かな幼さを連想させないでもない。

が――

（あそこまで強烈にやられちゃ、可愛さの欠片もないなあ……）

「へっ！ どうした、サイラス！ そんなもんかよっ！！」

少しずつ下がりはじめたサイラスに、薄笑いを浮かべたレアスの挑発が飛ぶ。

「……」

対するサイラスは何も言わずにただ受けるまま。

だが、

（あっ……！）

一瞬、何かに気を取られるかのようにサイラスの視線が右を向い

た。

「どこ見てやがるっ!!」

その瞬間をレアスは逃さない。

集中の途切れたサイラスの左側、死角から唸りをあげてレアスの木刀が迫る。

だが、次の瞬間、

「なっ——!？」

驚愕の声を上げたのはレアスだった。

サイラスの肩口に迫っていたレアスの剣筋が突然に乱れ、軌道を変える。

——それもそのはず。

「油断大敵ですよ、隊長」

なんと、視線を逸らすと同時に伸ばしていたサイラスの左足が、死角からレアスの足を払っていたのだ。

どうやら“誘った”らしい。

「ちっ……!」

それでも転ぶまでには至らず、すぐに体勢を立て直したレアスだったが、

「今日は俺の勝ちですね」

「……」

サイラスの木刀を突きつけられ、レアスは一瞬呆然とした顔だったが、それはすぐに無然としたものに変わる。

「サイラスさん、お見事ですわぁ!」

「うむ。見事!」

フローラとヴィヴィアンから喝采の声が飛んで、サイラスはそれに笑顔で応え。

そして一方のレアスはいえば——

「……くそっ」

見るからに不満そうな顔だった。が、それでも自らの油断を自覚していたのか文句を言うでもなく、自分自身に腹を立てているかの

ように床を叩いている。

サイラスの言葉があったからではないが、ティースにはその仕草がまるで癩癩を起こした子供のように映った。

(……確かにサイラスの言うとおりかも)

思わず失笑を漏らしたティースの視線が、ふと振り返ったレアスのものと重なった。

(――ヤバ！)

慌てて表情を取り繕ってはみたものの、時既に遅し。

「……」

レアスは無言のまま、ふらりと立ち上がると、

「ティース。次はてめえの番だ……」

「――いいっ!!」

「？」

悲鳴を上げたティースに、他の三人は不思議そうな表情を浮かべ。結局、それから一時間以上も続いた“しごき”に、ティースは本日もボロボロになって帰宅(?)するハメになったのだった――

その3『遺書』

それはティースがディバーナ・カノンに配属されてから約半月後の夜のこと。

使用人達はその半数以上が本日の仕事を終え、自宅、あるいはこの別館の自室へと戻っており……そしてこの時間、別館に住む幾人かは決まって玄関ホールへと出てくる。

ある者は誰かと酒を飲み語り合うために。

ある者は自室の孤独な空気を嫌って。

そしてその中の一人、シーラⅡスノーフォールはこの日、初めて自らの玄関ホールの丸テーブルに腰を下ろしていた。

彼女が今までここに来なかった理由は簡単だ。……ただ、偶然にでもティースと鉢合わせる事が嫌だったからである。

では、そんな彼女が、どうして今日に限りやってきたのかというと、

「こうしてシーラさんとお話するのはいつ以来でしょうか？」

シーラの目の前には、紺色の落ち着いた上質な衣服に身を包み、手にした白い陶磁器のティーポットから紅茶を注ぐファナがいる。相変わらずの和やかな笑顔と育ちの良さを感じさせる雰囲気は、この質素な丸テーブルにあってもまるで損なわれていない。

「ここに來てからは初めてじゃないかしら？　――ありがと。いただくわ」

受け取ったティーカップにミルクを少量注ぎ、スプーンで軽くかき混ぜる。紅茶の香ばしい薫りがその周囲に漂う。

笑顔のまま、ファナも自らのカップに紅茶を注ぎ始めた。

彼女はもちろんのこと、シーラもまたその容姿故かどこか貴族然とした雰囲気があるため、そのテーブルだけは周りともまるで違う世界に包まれているように思える。

……いや、本来ならば彼女たちの作り出す世界こそが、本来のこ

の屋敷に相応しいものであったが――まあそれはともかく。

「ここでの生活は如何です？」

「文句ないわ」

シーラはすぐにそう答えた。

普通の人間なら萎縮してしまいそうな屋敷の生活も、彼女にとっては別段どうということもないようだ。

「サンタニアに通うにも近いし、食事の準備も洗濯の心配もいらないもの」

「そうですか。……慣れたようでしたら、たまに部屋ではなく食堂の方で食事を摂ってみてはいかがですか？」

「食堂？」

「ええ。給仕の方にあらかじめ言っていただければ、食堂のテーブルに席を用意させていただきますわ」

「そうなの。あなたもいつもそこで？」

シーラの疑問にファナは少し考えて、

「いつもではありませんけれど、時間が合ったときにはよく」

「なるほどね。……それも楽しそうだけど、でもとりあえず遠慮しておくわ」

「どうしてですか？」

不思議そうなファナに、シーラはそっと口に運んだティーカップを下ろす。

「もちろん、この屋敷の人がたくさん来るでしょう？」

「ええ。毎日食堂でお召し上がりになる方も、時々気が向いたときにいらっしゃる方も……様々ですけど」

シーラは苦笑して、

「この屋敷の人って、どうも人を質問責めにするのが好きみたいなよ」

「あ」

納得したようにファナはニッコリと微笑んだ。

「如何でしたか？ みなさん、面白い方ばかりでしたでしょう？」

「私が挨拶とか用事以外で話したのはレイさんとリディアって子だけよ」

「レイさんとリディアさんだけ、ですか？」

「ええ。……だって私、この屋敷にいるときは部屋にいるか書庫にいるかのどちらかだもの。そんなに話す機会なんてないわ」

「それは勿体ないですわ。シーラさんでしたら、必ず仲良くなれますのに」

「そうかしら。……まあ、あのリディアって子はなかなか面白い子だったけれど」

「リディアさんはとても頭の良い方ですよ」

「ええ、わかるわ」

シーラの脳裏に書庫でリディアと話したときの記憶が蘇る。

年相応の好奇心と悪戯心を剥き出しにしながらも、言葉の端々には子供離れした“したたかさ”がある――というのが、彼女の正直な感想だ。

「それと、レイさんは第二隊の隊長を務めていただいている方ですの」

「ああ、よくは知らないけど……彼がティースの隊長なのかしら？」

「いいえ。ティースさんは第三隊の方へ行っていたいております。その隊長はレアスさんとおっしゃる方ですわ」

「そうなの」

素っ気なく言ったシーラに、ファナは少しだけ首を傾けて、

「気になります？」

「……すぐそういうことを言う」

シーラは嫌な顔をしたが、それは少し演技っぽいものだった。

どうにもこのファナという人物の言葉、まるで邪気のない口調の故か、何を言われてもなかなか嫌な気持ちにはならないのである。それはシーラも例外ではなかったのだ。

「別にティースがどこにしよう、私には大して関係ないわよ」

「ですが、ティースさんは淋しそうにおっしゃってましたわ。ここ

に来てからシーラさんと一度も顔を合わせてないと」

「合わせる理由がないもの」

ファナが不思議そうな顔をする。

「理由がなければいけませんの？」

「少なくとも私の方には、ね」

「でしたら」

ファナは悪戯っぽい笑みを浮かべた。

それを見たシーラの胸に嫌な予感が走ったが、時既に遅し。

「私が理由をお作りいたしますわ。――あ、ドロシーさん。申し訳ありませんが、ティースさんをここに呼んでいただけますか？」

近くを歩いていて呼び止められたのは、男の子のような短い髪で使用人の服を着た女性だった。女性と言っても歳はシーラよりも若干上程度、おそらくファナと同じぐらい……十七、八歳だろう。

「ティースというと、新入りの人ですね……」

「ええ、そうです。お願いしますね」

「了解……」

言葉遣いは丁寧ながら、どこか無愛想に女性は二階への階段を上っていった。

「ファナ。私は部屋に戻るわよ」

「いけません」

ファナは穏やかな微笑みできっぱりと言い切った。

「どうしても戻るおつもりでしたら、ティースさんを即刻解雇いたしますわ」

「……公私混同もいいところね」

立ち上がりかけたシーラはため息とともに腰を下ろした。ティースの解雇はすなわち彼女の居場所の消失、及び学園に通う資金の断絶を意味する。

「ふふ、冗談ですわ」

そんなファナにシーラは呆れ顔で、

「でも、私がここを離れるのは許さないんでしょ？」

「ええ。——それと、ティースさんが来るまでに少しお話ししておきますわ」

「……なに？」

和やかなままでありながらそこに混ざった真剣な色に、シーラは怪訝そうに眉をひそめた。

ファナは頷いて封筒のようなものを取りだす。

「これは……なに？」

「ティースさんの遺書ですわ」

その封筒の裏には確かに、ティーサイトⅡアマルナと署名されていた。

「……？」

シーラの眉間に皺が寄る。

彼女の疑問は当然だ。ティースはまだ死んでなど——いや、しばらく会っていないシーラには断言できないが——まさかファナが死人を呼びに行かせたはずはなからう。

それを見て取ったファナが答えた。

「ディバーナ・ロウでは、任務が決定すると必ず全員に遺書を書いていただくことになってますの。これは私自身が保管し、無事に戻られた場合にはこのまま全て焼却します。ですが、もし戻られなかった場合は——」

ファナはそれをテーブルに置いた。

表情が真剣になる。

「この封を切り、出来る限り、その方の最後の望みを叶えて差し上げようと思っております」

一瞬、視線を泳がせたシーラだったが、すぐに変わらぬ調子で答えた。

「つまり、ティースの初陣が決まったのね？」

「ええ。その通りですわ」

「そう。役に立てばいいんだけど」

視線を横に向けて大して興味なさそうに言ったシーラを、ファナ

は真っ直ぐに見つめて続けた。

「二日後の朝、カノンはここを発ちます。移動も含めて戻られるのは早くても一週間後になるはずですわ」

「……」

シーラの視線がファナのものと重なる。

その口からため息が漏れた。

「私、やっぱり部屋に戻るわ」

「シーラさん」

席を立ったシーラは首を振りながら背を向けて、

「なんなら、あいつを解雇してくれても構わないわよ」

「いいえ。ティースさんはディバーナ・ロウに必要な方ですもの」

「だったら、私が部屋に戻っても問題はないわね？」

「ええ。そういうことになりますわ」

「……」

シーラは無言でファナを振り返り、呆れた表情を浮かべて、もう一度首を振った。

「この屋敷に詮索好きが揃ってるのは、もしかしてあなたの影響かしらね？」

「？」

「……そのティースの遺書は、必要のないものよ」

「何故ですか？」

当然のように疑問の声を向けるファナに、シーラはどこか薄い笑みを浮かべて答えた。

「何を書いてあるかわかるもの。……それが“遺書”である以上、あいつの願いはきっと、あなたにも決して叶えられないものだわ」

「はあ」

一見、わかったようなわからないような微妙な返事だったが、ファナはすぐに続けた。

「シーラさんに関することですね？」

何も答えず、シーラはテーブルから離れて階段に向かっていく。

「……」

しばしの沈黙がテーブルの周囲を支配した。先ほどまで彼女の座っていた場所では、僅かに残った紅茶がシャンデリアの明かりを反射している。

「もし……とすると」

それをじっと眺めていたファナはそつと独り言を呟くと、ゆっくり目を閉じて、

「……責任重大ですわ、ティースさん」

「——え？」

突然呼びかけられたティースは、怪訝な顔をファナに向けたままで固まっていた。

彼が驚いたのも当然。ファナは目を閉じていたし、つい先ほどまではティースがやってきたことに気付いていなかったはずだったのだ。

（も、もしかしてこの人も達人なのかなあ……）

などと、ティースは現実味のないことを考えながら、

「な、何のこと、ファナさん？」

「ようこそ、ティースさん」

顔を上げたファナは、ちよつと夢見がちな男なら“勘違い”してしまいそうな微笑みでティースを迎えた。

まあ幸いなことにティースはそれとは全く逆の性質——たとえば実際にそうだとしても、それに気付かないぐらいの性格であったが。

「どうぞ。今、紅茶をお入れしますわ」

ティースに席を勧め、茶葉を新しくしてポットにお湯を注ぐファナ。テーブルにはもう一組のティーセットがあり、誰かがそこにいたらしいことはティースにも理解できた。

「もしかして、シーラかい？」

「ええ。その通りですわ」

「そっか」

ここに来る途中、ティースは階段でシーラとすれ違っていた。

実を言うと顔を見るのも約半月ぶりのことで、ティースは喜びの色を隠すこともできずに声をかけてしまったのだが、彼女はチラリとも視線を向けることはなく、あっさりと無視されてしまったのである。

彼が少々――いや、かなりヘコんだのは言うまでもない。

（やっぱ避けられてるんだよなあ……）

ここに来てからのすれ違いを、ティース自身は“忙しさ故”ということで内面処理してきたのだが、ここに来て決定的な一撃を喰らわされてしまったわけである。

と、そんな回想をしながら再び落胆していたティースを見て、フアナが好意的な口調で言った。

「ティースさん、なんだか淋しそうですわ」

「え？ あ……」

考えがまともに顔に出ていたと気付いて、ティースはすぐさま取り繕う。

「い、いや、シーラにああいう風に扱われるのはもう慣れっこだから。別に淋しいとかそういうことは一切――」

「では、やはりシーラさんのことですね？」

「あ……」

クスクスとおかしそうに笑うフアナに、ティースの顔は真っ赤になる。

「……いや、うん。淋しいよ、実際」

仕方なく顔を赤くしたまま席に腰を下ろし、ティースは正直に告白した。

「やっぱりさ。どう扱われてもあいつは……ほら、俺にとって家族みたいなものだって、俺は勝手にそう思ってるから」

差し出された紅茶を受け取り、それに砂糖を二杯入れてかき混ぜる。

「質問してもよろしいですか？」

「え？」

スプーンを動かす手を止めファナを見ると、

「ティースさんは何故デビルバスターになってまで、シーラさんを養育しようとなさるのです？」

「……」

ティースはいきなり言葉に詰まった。

だがその質問自体は、端からティースたちを見ている者にとっては当たり前すぎる疑問だった。

親子でもない。夫婦でもない。恋人ですらない。だが、ティースがシーラに対してやっていることは、確かに親が子に対してするそれと全く同等のものだ。それは決して、単なる友人や知人相手に軽々しく行えるものではない。

「それは――」

「もしおっしゃりたくないのであれば、無理にとは言いませんけれど」

言い訳を考えかけたティースに、ファナはすぐにそう付け加えた。
「ティースさんの決意は本物だと思います。それを疑うわけではありませんもの」

「じゃあ……どうして？」

ファナはニツコリと微笑んだ。

「単なる好奇心ですわ」

「……はは」

ティースの胸に渦巻いていた焦りが、徐々に暖かいものへと変わっていく。

そして、

「そうだな……ファナさんが知りたいのなら」

自然と、そんな言葉がティースの口をついていた。

……このネービスに来てから、ティースはそのことを誰にも喋ったことはない。それは万が一起こりうる“弊害”を考えてのことだった。

が、大した理由もなく自分の人格、その決意を信じてくれた少女になれば、話しても問題ないだろう、と、ティースはそう思ったのである。

「シーラはね……俺の大恩人の娘なんだ」

「恩人の娘さん、ですか？」

ファナは怪訝そうな顔をした。

ティースとシーラの年齢、そこから導き出される関係を想像したのだろう。

そして彼女が最初に想像したのは、“家族”という彼の発言から考えて、おそらくもっともわかりやすい関係だった。

「もしかしてティースさんは孤児だったのですか？」

「いや。養親とかそういうんじゃない」

ティースはすぐにそれを否定したが、

「でも、それに近いものはあったかな。俺に色々なことを教えてくれた人でね……本当の両親より好きだったな。……あれ？ どうしたの？」

「いいえ。ただ、意外だったものですから」

その言葉通り、確かにファナは少し意外そうな顔をしていた。

「私、ティースさんはてっきりシーラさんを愛してらっしゃるものだと思ってましたの」

「あ、もちろんシーラのことは好きだし大事だよ。……いや変な意味じゃなくてさ」

慌てて手を振ったティースだが、もちろん彼の言わんとしているところはファナにもわかっていた。

そしてティースの目が不意に遠くを見る。

「でもやっぱり、その人の存在が大きいかな。……小さい頃、その人に言われたんだ。シーラのこと助けてやってってくれて。守ってやってってくれて。その言葉が、ずっと耳から離れなくて——」

「……」

それを見つめるファナの瞳は少しだけ思案するような色を秘めて

いた。

「シーラさんは、そのことをご存じなのですか？」

「え？ ……いや、知らないんじゃないかなあ」

ティースは笑って答えた。

「大昔の話だし、そういうこと言うのって何だか恥ずかしいだろう？」

「……」

再びファナは沈黙した。

「どうしたの？」

「いいえ。ただ、シーラさんがティースさんを避けるのには、何か理由があるのだろうと思ひまして」

「？」

ティースにとっては少々不可解な会話の流れだった。

「それはただ、シーラが俺のことを嫌いだから——」

「いいえ、まさか」

ファナはおかしそうに笑ってその言葉を否定した。

「それはないと思いますわ」

「……？」

ファナは紅茶を口に運びながら一呼吸置く。

つられてカップに手を伸ばしたティースに、ファナは言葉を続けた。

「もしかするとシーラさん、負い目を感じてらっしゃるのではないですか？」

「負い目？ 何に対して？」

怪訝そうに聞き返したティースに、ファナは一瞬呆気に取られたような顔をして、

「……本当に面白い方ですわ、ティースさんって」

やはりおかしようにクスクスと笑った。

「え？」

どうして笑われたのか理解できないティースに、ファナは答える。
「ティースさんのなさっていることは、大変なことですよ。たとえ

親子であっても、それを放棄してしまう方がいくらでもいるのですから」

「あ……ああ、なるほど。……でも負い目って言われてもなあ。俺は別に無理してるわけじゃないし、それだって元々あいつの方から言い出したことなんだ。それで負い目なんて感じられても……」

「私には詳しい事情はわかりませんが、何か納得できないものがシーラさんの中にあるのではないですか？」

「うーん」

ファナの言葉には説得力がある。が、当事者であるティースとしては納得できなかった。

『ネービスへ行きたい』

そう言ったのはシーラの方だった。薬師になりたいという彼女の夢はティースも昔から知っていて、それを叶えるために請われて彼女をネービスへ連れてきた――少し大事な部分もいくつか省いてしまったが、それが彼ら二人がここへやってきた大まかな事情である。もしファナの言うように負い目を感じていたのだとしても、それは最初からわかっていたはずのことであり、それで一方的に避けられ、まるで嫌うかのような素振りを見せられたのだとしたら、ティースが納得できないのも当然だ。

それならまだ、一緒に暮らすようになって自分のだらしないところが嫌われたのだと考えた方がよほど納得できた。

と、そこへ、

「おおーい、ティース！」

玄関の入り口辺りからティースを呼ぶ声が聞こえた。

振り返ると、そこにいたのはサイラス、ヴィヴィアン、フローラといった隊長のレアスを除くディバーナ・カノンの面々。

（……あ、そういや今日はみんなで街に繰り出すって言ってたんだっけ……）

忘れていたわけではなかったが、ファナとの話に夢中になっていて時間の感覚がなくなっていたようだ。

「ごめん。ファナさん、俺――」

「ええ、お気をつけて」

ファナはどうやら事前に知っていたらしく、事情も聞かずに頷いて変わらぬ笑顔でそう言うのと、すぐに付け足した。

「それとサイラスさんに伝えておいていただけますか？　今回は遺書に冗談を書かないようになさってくださいね、と」

「？」

いまいち意味がわからないままに頷いて、ティースはサイラスたちの後を追うのだった。

「――ああ、そのことか」

ミューティレイク邸から若干南、一般住宅街でも大通りからほんの少し中に入った目立たない場所にある酒場“櫂の木亭”。

煌々と明かりの灯った店内には合計十ほどの四人掛け丸テーブルと、カウンターに数席。広さでいうなら中程度の酒場だった。

ただ、今はそのほとんどの座席が埋まっており、騒然とした空気が流れている。

そんな中、ティース、サイラス、ヴィヴィアン、フローラの四人はもつとも隅っこにある丸テーブルを囲んでいた。

「ファナさんへのラブレターさ」

サイラスは言った。

「ラブレター？」

「彼は遺書の封筒にいつでも彼女への愛の告白を書くのだよ」

ヴィヴィアンはこの酒場の雰囲気似合わない、透明なグラスに注いだワインをくゆらせながら答えた。

「え、サイラスってもしかしてファナさんのことを――」

「まさか」

驚愕したティースにサイラスは笑って答えた。

「俺だってそこまで身の程知らずじゃない。単なる冗談だよ」

「まったく。常識外れの不謹慎な男だよ」

「ははは……まさかお前に常識を説かれるとは思わなかったな」

そんな二人のやり取りに、ティースは少し眉をひそめて、

「……でも。俺もヴィヴィアンの言うとおり、遺書にそういう冗談を書くのはどうかと思うぞ。——ねえ、フローラさん？」

そうやって水を向けると、

「そうですわねえ」

どこか浮ついた様子の方ローラは、テーブルに並んだツマミの一つを口に運びながら、

「どうすればあの子みたいに自然で気品溢れる仕草ができるのか、それが問題ですわねえ……」

どうやらかなり酔いが回っているらしく、話の流れを全く理解していないようだった。

「気にするな、ティース。フローラさんはいつもこうなんだよ」

「こんな酒場でくだを巻いているようでは、ファナくんのようになるなど一生無理だろうがね」

ヴィヴィアンの言葉には、ティースもちょっとだけ同意してしまっただ。

「で、遺書の話だけど、お前はもう書いたのか、ティース？」

「え？ あ、ああ」

「そうか、早いな。——あ、麦酒を一つ……いや、二つ頼む！」

「はい」

注文を終えたサイラスは飲み干したコップを寄せ、テーブルに肘を乗せると、

「遺書ったってな。死んだ後のことなんて俺にはあまり考えられないよ」

ふうっと息を吐いた。

「フローラさんと違って連れ合いがいるわけでもないし、ビビのように銅像を造ってくれなんて馬鹿な希望があるわけでもない」

「なにを言うか！ 私のこの美しい姿を後生に残すことこそ、歴史の語り部たる全人類にとって当然の義務であろう！」

「はいはい」

「銅像って……えっ!？」

ティースは苦笑してヴィヴィアンを見たが、直後、その前にすんなり流しそうになった言葉に気付く。

「フローラさんって旦那さんがいるのか!？」

「なんだ。知らなかったのか」

「知らなかったんですのお……?」

身を乗り出したフローラに据わった目で見つめられ、ティースは思わず怯んでしまった。

「うふふ……とても素敵な旦那様なんですのよお……」

そんなフローラにヴィヴィアンが一言、

「フローラくんは旦那フェチなのだよ」

「え、それはフェチっていうのか……?」

ティースの疑問にはサイラスが答えた。

「崇拜するほどに心酔しているという意味なら、まあ」

「あれは私がサーカスの一員として大陸中を旅している頃のことでしたわ……」

フローラの昔話が始まったが、どこまでが本当なのか判断できないほど現実味のない内容だったのと、ろれつが上手く回っていないので、三分もするとティースを含めた誰もがすでに聞いていなかった。

「そーいやティース。お前って連れがいるんだっけ？」

「連れって、まあ……」

「なんでも、とっくに尻に敷かれてるらしいって耳にしたが」

「いや、そういう言い方は語弊が――」

「ほほう、ティースくん。君はいわゆるマゾヒストなのかね？」

「なっ、ごっ、誤解だ!!」

ヴィヴィアンのストレートな言葉をティースは思いっきり否定し

た。そんな風評は彼としても黙って見過ごすわけにいなかった。

だが、ヴィヴィアンは人差し指を振って、

「いやいや、別に隠すことではないよ。人の性質というのは千差万別だ。たとえば痛めつけられることによって満足感を得るとしても、それは別に恥ずべきことでは――」

「だ、だから違うって!」

顔を真っ赤にして懸命に否定するティースに、サイラスが笑いながらフォローを入れる。

「ま、つまり虐げられても離れられないほどイイ女だってことなんだろう?」

それもありフォローになっていなかった。

「だから違――」

「それとも、二人きりになったら攻守が逆転するのか?」

「……」

ティースはため息を吐いた。

そもそも根本から勘違いしている上に、アルコールが入って面白い方向へと話を動かそうとする二人には、ティースが何を言っても無駄なようだ。

（まったく。こんな話をシーラに聞かれたら、それこそどんな目に合うかわかったもんじゃないよ……）

「でも、ま」

追加した麦酒を一気に呷ってサイラスがポツリと呟いた。

「何にしる遺言を残せる相手がいるってのはいいことだな」

ティースは少し怪訝に思って、

「お前は? 家族とか恋人はいないのか?」

「ああ、いないな」

サイラスはあっさりと答えると、少し冗談っぽく笑って、

「敢えて言うなら、いつも色々と世話になってる使用人の子ぐらいか」

「じゃあそのロケットは?」

「あ。――ああ」

彼の胸元に光るロケットは記念の品などを収めておくためのものだった。大抵は恋人から送られた品や小さな肖像画を収めておく場合が多い。

「こいつは友達さ」

躊躇いもなく開いたその中には、やはり小さな肖像画が収められていた。年の頃は十代半ばだろうか。それほど精巧な肖像ではないが、少し細身で人の良さそうな男性だ。

「……」

それについてさらに問いかけるべきかどうかティースは少し迷ったが、その前にサイラスの方から口を開いた。

「俺がデビルバスターを目指すことになったキツカケだ。イイ奴だったんだがな」

「……そうか」

事情を察するにはそれだけで充分だった。

サイラスはすぐにそのロケットを閉じて、

「ティース。お前は どうしてデビルバスターになろうと思ったんだ？」

「俺は……」

ティースは答えることを躊躇った。何気なく語ったサイラスの言葉の中に潜む、強い決意と悲しみに気後れたためだ。

だが、嘘を言うわけにもいかず、ティースは結局正直に答える。

「シーラを……連れを学園に通わせる金が欲しかったんだ」

「そうか」

だが、サイラスはティースが予想していたような反応はしなかった。

それどころか、

「すごいな、お前は」

「え？」

「すごいよ」

もう一度、サイラスはそう言った。

「俺なんか大事な友達を殺されて、踏みにじられて……復讐のためにデビルバスターを目指してるんだぜ？」

「え……でも、俺は——」

「お前みたいに自分以外の人間のためにデビルバスターになろうなんて、そんなことを考えるヤツ、滅多にいるもんじゃない」

口調からして、どうやらそれは偽らざる言葉のようだった。

（……そういう考え方もあるのか）

いつだったか、ファナがティースに言った“立派”という言葉も、どうやらサイラスが言ったのと同じ意味だったのだと気付く。

だが、ふと気付いて、

「でも……お前だってその友達のためにデビルバスターを目指してるんだろ？」

サイラスは首を横に振った。

「違うな、ティース。……復讐ってのは結局、エゴの産物だよ。死んだヤツが復讐しろって遺言を残したならともかくな」

「……」

それはそうなのかもしれない、と、ティースは正直にそう思った。「でもま、今更こんなことを言うのもアレだけど」

言いながら、サイラスは空になった五本目のコップをテーブルの端に寄せた。

「そういう理由なら、デビルバスターになるのはちょっと考え直した方がいいかもしれないぞ」

「？ どういうことだ？」

「お前みたいなヤツなら、デビルバスターなんかにならなくても好きな女の一人ぐらい幸せにできるんじゃないかってことさ」

「……」

ティースは黙った。

（デビルバスターにならなくても、か……）

確かにデビルバスターになる以外の選択肢も彼にはあった。シー

ラが卒業するまでおそらくはあと一年。たとえば高利貸しに金を借りたとしたって、どうにかこうにか返していくことはできたはずだろう。

ただ、それでもティースがこの道を選んだのは――

（……なんでだろう）

わからなかった。

厳しい道なのはティースにもわかっていた。実際、厳しい。

「連れにもしょっちゅう心配かけることになるぞ？」

「あ、いやそれはどうかなあ」

思考を中断してティースは苦笑した。

本当にそこまで心配してくれるなら、ティースとしても非常に嬉しいのだが。

「……」

テーブルに肘をついて、サイラスは人差し指で皿の上の串を弄び始めた。少し酔いが回って来ているようで、

「……ホント、お前みたいなヤツは普通にやった方がいいよ」

「サイラス？」

いつの間にか目元がおぼつかなくなってきていた。

「ふむ。そろそろ頃合いのようだ」

ヴィヴィアンを見ると、テーブルに突っ伏したフローラに上着をかけているところだった。

「あ、フローラさん、いつの間に……」

「ウチのメンバーはそれほど酒に強くないのでね。飲みに来るといってもこうなるのだよ」

「すう……すう……」

直後、寝息が聞こえてくる。

ヴィヴィアンが言い終わるか終わらないかのうちに、サイラスもまた夢の世界に旅立ってしまったようだ。

「って、ヴィヴィアン、あんたは……」

よく見てみるとヴィヴィアンの前にはサイラス以上に酒を呑んだ

形跡がある。ティースこそは結果的に一杯しか呑んでないからいいにしても、ヴィヴィアンが平気な顔をしてるのは明らかに不自然だった。

ヴィヴィアンはいつものように人差し指を振ると、

「ふ……美しい私には“酔っぱらう”などという下品な単語は似合わないのだよ」

「……」

（つまり“ザル”なのか……）

顔色を見ると、呑んだのかどうかもわからないのだからよほどである。

「しかし今日はティースくんがいて助かった。サイラスくんが潰れると、いつもは私が二人を運ばねばならなかったのですね」

「あ、そっか。じゃあ俺がサイラスを運ぶから……」

素早くそう主張したティースに、ヴィヴィアンは怪訝そうな顔をして、

「ふむ？ フローラくんの方が軽いし、君のような凡庸な男にとっては色々と役得があっているのではないのか？」

「え、遠慮させてくれ！」

「？ まあ、私はどっちでも構わないが？」

ティースの慌てぶりにヴィヴィアンは首を捻ったがそれ以上追求してくることはなく、そのままウェイトレスを呼んで勘定を支払った。

「あ、俺も——」

「いや。今日は君の歓迎会も兼ねているからね」

ティースはその好意に甘え、突っ伏したサイラスを背負うことにした。

（うわっ……結構重いな……）

スリムな体から想像する以上に、サイラスの体は引き締まって重みがあった。

ヴィヴィアンも同じようにフローラを抱えて、

「では、行くとするか」

「……ってか、ヴィヴィアン。それってお姫様抱っこ——」

「女性を運ぶときはこれが基本であろう」

「……」

ティースは突っ込む気にもなれずにそのまま帰路を辿ったが……
屋敷に着く頃、さすがにヴィヴィアンの腕は辛そうだった。

——屋敷に戻り、サイラスを部屋まで送り届けた後、ヴィヴィアンと別れたティースは酔いを醒ます意味もあって少し屋敷の中を散歩していた。

ホールや各部屋にはまだ明かりが灯っていたが、屋敷の奥に通ずる辺りの廊下は薄暗くなつて窓から射し込む月が良く見える。

（ふう——さすがにちよつときつかつたな）

肩を軽く回しながら歩いていて……ふと、

「あれ？」

庭の方に見覚えのある後ろ姿を見つけた。

「シーラじゃないか」

何をしているのか——よく見ると一人ではない。その前をもう一つの影が歩いていた。

「誰だ？」

遠目には男か女か分かりづらいが、スカートでないことと背の高さからいってどうやら男のようだ。

（こんな時間に……）

もちろんミューティレイクの敷地内だ。どれだけ夜が更けようと危険なんてものは滅多にないのだが、さすがに少し気になった。

シーラは屋敷内のティースになど気付いた様子もなく、男の後をついていく。

（ここにいるんだから屋敷の人なんだろうけどなあ）

心配することもないとは思ったのだが、ふとここ数ヶ月のシーラの様子が脳裏に浮かぶ。

(……いやいや！ あいつはそんな男遊びをするようなヤツじゃないぞ！)

彼女の後ろ姿から目を離し、気にしないように再び歩き出す。

そして廊下を抜け、明かりの灯る玄関ホール、そして外へと散歩コースを移していった。

「……いない、よな」

月明かりの下、まるで人影のなくなった庭は寂寥とした空気を残していた。

辺りを見回しても、動くものの気配は見当たらない。

「……」

ティースは数秒間そこで立ち尽くした後、結局すぐに諦め、背を向けて館へと戻っていくのだった。

その4『遺志を継ぐ者』

“ネービス”という言葉には二つの意味がある。

一つには高い外壁に囲まれたネービスの街そのものを指す場合。

そしてもう一つは、それ以外も全て——つまり“都市国家ネービス”の領土全体を指す場合だ。

ティースを含めたディバーナ・カノンの面々は、ネービスの街を馬車で出発して二日目の夜遅く、ようやく目的地であるネービス領内の外れにある小さな村へと到着すると、その日は村人たちの歓迎を受けた後、そのまま体を休めていた。

そして、次の日の朝。

空は快晴だった。

「んう——っ」

布団から上半身を起こし、大きく伸びをするティースを出迎えたのは、ネービスの街よりも遙かに元気の良い小鳥の囀り。麗らかな日射しと食欲をそそる朝食の匂い。

そして、

「よっ、目が覚めたか」

昨晚、布団を並べて寝ることになったサイラスの声。どうやら彼の方はティースよりだいぶ先に目覚めていたらしい。

ティースは軽く首を鳴らしながら言葉を返す。

「おはよう。……随分といい天気だなあ」

「まったく。最近は暑くなってきたし、少しは太陽さんにも遠慮してもらいたいもんだよ」

そんな愚痴を零すサイラスに、ティースは苦笑して身支度を整え始めた。

レラス、ヴィヴィアン、フローラの三人は別の家に宿を借りてお

り、この家にいるのはティースとサイラス、それに家主の初老夫婦だけだった。

「今日はこれからどうするんだっけ？」

肌着に手を通しながら問いかけたティースに、サイラスは頷いて、「朝飯が終わったら村長さんに話を聞きに行く。で、色々調べ物をして対策を立て、実際討伐に行くのは明日以降だろうな」

「そっか」

その話を聞いて、ティースは少しだけホッとした。

そんな表情を見て取ったサイラスは笑う。

「ま、お前は初めてだし、今回はどんなもんか体験するだけさ。隊長も言ってたが、お前に剣を抜かせるようなことはないよ」

「けど、何があるかわからないし……」

ティースは着替え終わると、枕元に置いた荷物を手にして何度目になるかわからない点検をする。

（いざというときの水筒、非常食……剣はぴかぴかに磨いてあるし、それに――）

「ん？ ……ティース。その包みはなんだ？」

「え、ああ」

サイラスが指さしたのは、腰にぶら下げる大きめの巾着袋だ。

「これは出発前、フアナさんにもらったんだ」

「フアナさんに？ 中身は？」

「それが――」

ティースは困惑した顔で、袋を開ける。

「なんだ、これ？」

覗いたサイラスも怪訝な顔をした。

中に入っていたのはさらに小さな袋が五つ。そのそれぞれに何か書いてある。

「なんだ、葉袋じゃないか。――鎮痛薬、止血薬、解毒薬、あとの二つはなんだ？ 痺れ薬に……煙玉？」

「一応説明書きもあったんだけど……痺れ薬は無味無臭だから食べ

物に混ぜろとか、煙玉は水を染み込ませて五秒後に派手な音と煙が出るとか」

サイラスは苦笑しながら巾着の口を閉じた。

「あの人の考えることはたまにわからなくなるな。しかも解毒薬って、何の解毒薬かわからないじゃないか」

「何にでも効くとかじゃないのか？」

「まさか。古代の超薬学でもあるまいし」

「そ、そういうものなのか」

ティースはそういった方面に関しては、現時点で全く無知なのである。もちろん、デビルバスターになるためにはいずれ覚えなければならぬことでもあったが。

「でも……ってことは、やっぱみんなはもらってないのか？」

「ああ。俺も昔、お守りみたいなものをもらったことはあるけどな。……ん？ でも出発の日って確か、ファナさんは屋敷にいなかっただろ？」

「あ、いや。持ってきてくれたのはフィリスさんだったんだけどさ。それが何かちよっと変な話で——」

そしてティースは出発の日のことを思い出していた。

——三日前、出発の朝。

「頑張って来いよ」

「気を付けてね」

「ムリしないようにな」

屋敷の門の前には一台の馬車が留まっている。そしてそこには今、二十人以上もの人間が集まっていた。ディバーナ・カノンの面々。そしてそれを見送りに来た屋敷の使用人や、それぞれの関係者たちである。

「……」

ティースは馬車のそばでそれを眺めている。

門から少し離れたところでは、隊長のレアスが十五、六歳ぐらいの少女に何やら声をかけられている。屋敷では見たことのない顔だから、もしかすると彼の個人的な関係者だろうか。恋人だとしたら随分とマせているが……いや、すでにデビルバスターの称号を持つ少年に対してそんなことを言うのもナンセンスだろうか。

門の前ではフローラが白衣を着た黒縁眼鏡の長身男性と話し込んでいる。その男性はティースも屋敷で何度か見掛けたことがあり、あるいは彼がフローラの旦那なのかもしれない。そういや黒縁眼鏡も密かにお揃いだ。

サイラスは屋敷の使用人——特に年齢に関わらず女性に多く声を掛けられている。あの甘いマスクに気取らない爽やかな性格だ。おそらく屋敷内でも普通に人気者なのだろう。肩を叩いて励ます年輩の女性もいるし、不安そうにしながらお守りのようなものを手渡した少女もいる。

そしてヴィヴィアン。意外といえいいのか当然といえいいのか、彼の元には最も多くの人間が集まっていた。老若男女、屋敷の関係者からそれ以外まで。いまいち統一性のない面々が見送りに来っていた。

さて、そしてそれを眺めているティースであるが。

「ふう……」

このため息を聞けばわかるだろう。

それは別にティースにとって予想外の出来事ではない。何しろ彼は屋敷にやってきて日も浅い、修行やら何やらで忙しく屋敷の人間と交流を持つことも少ない、加えて、彼はそれほど積極的に交流の場を求めるタイプの人間でもなかった。

（でも、実際にこういう光景を見ると淋しいもんだなあ）

ティースにとっては間の悪いことに、屋敷でも数少ない知り合い——と言っていいかどうかはわからないが、ファナとアオイは早朝から用事で不在。他、見送りに来そうな知り合いなど心当たりもなく。

——いや。

「ティース？ 連れはどうした？ 来てないのか？」

やってきたのはサイラスだ。ティースが一人で見ているのを見て怪訝そうな顔をしている。

「……」

ティースは黙って首を振った。

シーラが見送りに来るか来ないか、実を言うとティースの中では半々だった。最近の様子からすると望み薄だとは思っていたが、それでもこうして危険な場所に赴くのだから、来てくれるかもしれないとも考えた。

だが、現実はそういうものでもないようだ。

「今日は平日だし、まだ早いから寝てるんじゃないかな」

「寝てるって……そんな馬鹿な」

サイラスは眉をひそめた。

「これから、魔と戦いに行くんだぞ？ ヘタすりゃそれこそ今生の別れになるかもしれないんだ。……誰かに言って、起こしてきてもらった方がいい」

「いや、いいよ。あいつの機嫌が悪くなるから」

「機嫌が悪くなるって……」

どうやらティースたちの関係を勘違いしているサイラスにはそれが理解できなかったらしい。

気にしていないことを示すように笑いながら、ティースは説明した。

「前も言っただろ？ 俺たちはそういうんじゃないだって………あれ？」

「？」

途中で言葉を止めたティースに、サイラスは怪訝な顔でその視線を追う。

その先には、

「……ごめんなさい。ちょっと通してもらおうわ」

門の前に出来た人垣から顔を出した、美しい金髪ポニーテールの少女の姿があった。

(シーラ……?)

ティースは目を見開き、それから二度、三度とまばたきする。が、その人物はどこからどう見ても、彼女に間違いない。消えることも別の人物に姿を変えることももちろんなかった。

「へえ、これは、また……」

サイラスは察したらしく、少し口元に笑みを浮かべた。

「噂には聞いてたけど……なるほど。お前が手離せない気持ちもわからないでもないな」

そう言って、ポンツとティースの背中を押す。

「いや、だからそういうんじゃない……」

誤解をさらに深めることになったようだったが、ティースはそれ以上は反論せずにシーラの元へと向かった。

もちろん、期待していなかったこの思わぬ出来事に少しだけ胸を弾ませながら。

「シーラ」

「ああ、そこにいたのね」

声をかけるとシーラは不機嫌そうにティースを見た。

不機嫌? ……いや、違う。

ティースはすぐにその原因に気付いた。

「シーラ? お前……どうしたんだ、その顔」

「……顔?」

一瞬わからない表情のシーラだったが、直後、見る見るうちにその目が陰しさを帯びていく。

ティースは慌てて、

「いや! じゃなくて、ほら! 顔色が良くないっていうか、眠たそうっていうか!」

「ああ、そういう意味」

まるで風船がしぼむようにシーラの怒りゲージが収まっていく。

そして少しだけ眩しそうに目を細めながら、

「眠いのよ。わかってるなら聞かないでちょうだい」

「……なんで？」

「なによ」

「いや、なんで眠いのかなって……」

一瞬、ティースの頭に二日前の夜の光景――屋敷の敷地を誰かと歩いていた彼女の姿が過ぎった。

何だかんだと言って古くからの付き合い、しかもティースにとっての彼女はかなり特別な存在なのである。結局は気にするなという方が無理な話だった。

だがそんな彼の問いにシーラは眉をひそめ、

「お前にそれを説明しなきゃならない義務でもあるの？」

「……」

黙ったティース。

いつもならそのまま引き下がるところだったが、この日のティースは珍しくさらに一步踏み込んだ。

「いや、ほら……一昨日の夜さ。お前が外を歩いているのを見たから」

「……それで？」

一瞬の空白は、シーラが微かに動揺した証だったようにティースには思えた。

（……まさか）

そう思っただけティースは少し不安になる。

ただ、もちろん想像通りだったとしても、それはティースが口を出すことではない。シーラも先月の誕生日で十五歳になっていたし、恋愛だのなんだのは本人の自由だ。それを咎める権利などティースにはない。

ただティースが心配するのは、あんな夜更けにわざわざ屋敷を出てコソコソと会うような相手が、一体どんなものかということころなのである。

そんな心配が——止めておけばいいものを——ティースの口からさらに踏み込んだ言葉を吐き出させる。

「なんか、男と逢い引きでもしてるみたいに見えたから——」

「……だから？」

瞬間、ティースは自分の言葉を後悔した。

シーラの目が明らかな厳しさを纏い、口調はまるで刃物のような険を帯びたのだ。

（しまった……）

だが、時既に遅し。続くシーラの言葉は苛烈にティースを責め立てた。

「だったらなに？ お前に何の関係があるの？」

「いや……ダメとかそういうことじゃなくて、ただちょっと心配だっただけで——」

「心配？ お前が？ 何を心配する必要があるの？ お前に操を立てた記憶などないけれど？」

「そ、そういう意味じゃなくて」

疑問系を必要以上に含んだシーラの言葉は、ティースの焦りを増幅させ、後悔を募らせる。慌てて言い訳しても、出てくるのは気の利かない言葉ばかりだった。

「ただ、なんとなく気になっただけで……」

そんなティースはシーラはそっぽを向いて、

「お前には関係ないことでしょう」

「あ……」

引き留める間もなく、彼女は機嫌を損ねた様子でその場から去っていった。しまった。

そんな後ろ姿を少し呆然と眺めながら、ティースは自らの頭を軽く叩き、大きなため息をつく。

（……馬鹿だ、俺。せっかく来てくれたのに、怒らせちゃうなんて……）

その様子を見ていたサイラスは首をかしげながら近付いてくると、

「どうしたんだ？ ……怒って帰ったみたいに見えたけど」

「怒って帰ったんだよ」

肩を落とすティースにはそれ以外に答えようもなかった。

サイラスはいまいち状況を理解できないようだったが、やがて仕方なさそうに首を振ると、

「お前なあ……あれだけの美人なら大事にしてやらないとそのうち逃げられるぞ。あれなら引く手数多ってやつじゃないのか」

「大事にしてるつもりなだけだなあ」

彼女が詮索されることが嫌いだったのはティースだって知ってはいる。

（心配なんだから仕方ないじゃないか……）

だが、心配すればするほどに嫌われるのだ。ティースにとってはどうしようもないジレンマである。

「なあ、サイラス」

ティースはシーラの後ろ姿が消えた先を眺めながらポツリと呟いた。

「詮索されるのが嫌いな人ってのは、他人に心配されることも嫌なのかなあ」

「はあ？ ……いや、それは人それぞれだし、状況次第だろう？」

けど、赤の他人に詮索されるのは嫌だったにしても、親しいヤツが真剣に心配してくれるのは嬉しいものじゃないのか？」

サイラスの言葉はティースにも充分納得できた。

（つてことは、あいつにとっての俺ってのは結局、その程度の存在なんだよなあ）

考えれば考えるほどに、ティースの胸を寂しさが襲う。

（ま、仕方ないか……）

ただ、それも今に始まったことではないので、ティースはすぐに立ち直って考えることを放棄していた。すでに落ち込むほど、彼女との関係に希望を持っていない——半分諦めている状態なのである。そうこうしているうちに出発の時間が近付いてきた。

集まっていた人々の半数以上はすでに去り、最後まで残っていたのはメンバーと特に親しい人間たちだろう。

「じゃ、出発しますよ」

御者が顔を覗かせた。

それを合図にディバーナ・カノンの面々は一人ずつ馬車に乗り込んでいく。

まずレアスとヴィヴィアンが乗り込み、フローラは最後まで残っていた男——おそらく旦那だと思われる人物——といくつか言葉を交わしてから。そしてサイラス。

最後にティースが乗ろうとしたところで、

「あっ！ ちょっと待ってくださいーいっ！！」

「？」

振り返ったティースの視界に入ったのは、屋敷の方から駆けてくる使用人の姿。羊を思わせるクセのある髪少女は、ティースにも見覚えのある人物だった。

（えっと、確かフィリス——）

「ティース様！ 忘れ物です！」

「忘れ物？ ……なにそれ？ 巾着？」

はあはあと息を切らせ、フィリスは大事そうに抱えていたものをティースに差し出した。

「あの、ファナ様からです。ティースさんに渡してくれとおっしゃっていたそうです」

「？ ファナさんから？」

怪訝に思いながらひとまず受け取ってみると軽い。中を覗いてみるといくつかの小袋が入っていた。

「これは？」

「あ、いえ、私もファナ様から直接お預かりしたわけではないので、中身に関しては全然わからないんです」

「？」

どうしてそんなものが人伝いに渡ってきたのかティースは不思議

に思ったが、それでも中身を見てみると、どうやら戦いにそれなりに必要になりそうな薬類らしい。

とはいえ若干、変なものも混ざっていて、ティースは再び首を傾げずにいらなかったのだが――

「……ああ、あのときにフィリスが持ってきてたのがそれか」

サイラスもどうやらその状況を目に止めてはいたらしい。

「しかし確かに妙だな。最初から直接、侍女のフィリスに持たせておきそうなものだけだな」

「だろ？ いや、だからどうだというわけじゃないんだけどさ」

もちろんそれはティースにとって重大な問題というわけではない。フィリスだってまさか見知らぬ人間から受け取ったわけではないだろう。

「ま、何か事情があったんだろうな」

サイラスもそれ以上は何を言うこともなく。

「ティース様、サイラス様。朝食の準備が出来ましたよ」

二人は老夫婦の声に、朝食を採るべく部屋を出たのだった。

村長の家。

しかし村長といっても、この村長は非常に若い人物だった。おそらくは三十代後半、ヘタをすれば三十代前半にも見える。少し幅のいい人の良さそうな好人物――それがティースの第一印象だった。

「昨日は大したおもてなしもできませんで、失礼いたしました」

村長の家は周りの家と比べて特別大きいわけではない。いや、むしろ小さい――背の高いティースなどは入り口で何度も頭をぶつけそうになったぐらいで、なるほど、ティースたちを別の家に泊ませたのもわからないではない。小さな村とはいえ、その長であれ

ば多少は裕福な家庭を想像するものだが、この村に関してはそういうわけでもなさそうだった。

ちなみにカノンの面々は勧められたソファに腰掛けており、そして村長の言葉に答えたのは、相変わらず上品そうに微笑んだフロラだった。

「いえいえ、私は充分楽しませていただきましたわあ」

「それで？ 早速だけど、話を聞かせてくれよ」

「え、ええ」

フロラに続いたレアスの言葉に、村長は僅かに困惑の色を浮かべた。

——彼がこのチームの隊長だということは昨晚のうちに明かしてあったが、それでも村長の戸惑いは消えていないらしい。

もちろん、その気持ちはティースにも充分に理解できた。

（そりゃ、なあ）

レアスは常人離れた闘気と目つきの悪さを別にすると、外見は全く普通のヤンチャ坊主だった。そんな彼が隊長で、しかも態度が尊大だと来たら戸惑わない方がおかしい。

「その前にお茶をどうぞ」

お茶を運んできたのは、やはり三十代前半の線の細い綺麗な女性だった。村長とはタイプが全くの逆だが、おそらく彼の妻なのだろう。

「む、申し訳ない」

ヴィヴィアン、レアス、フロラの順でお茶を置き、奥さんは一度キッチンの方へと下がっていった。

さて、この家にいるのはあと二人。

「……どうぞお」

「え？」

ティースとサイラスへお茶を持ってきたのは別の人物だった。

ソファに座るティースたちと丁度目線が合うぐらいの身長……左右についた二つの赤いリボンが印象的な少女だ。

年は九歳か十歳ぐらいだろうか。

「ありがとう」

言葉を探っていたティースの横から、サイラスがにこやかに少女に挨拶をする。

「君はこの家の子かい？ 名前は？」

「え、あ」

少女は少し困惑した様子だったが、それでも人見知りしない子なのかすぐに答えた。

「リズだよ」

「リズか。利発そうな良い名前だ」

「……えへへ」

照れたのか、リズははにかむようにしてサイラスに笑いかけた。

「お兄ちゃんたちは余所の人でしょ？ どうして来たの？ 旅の人？」

どうやらリズは事情を知らないらしい。いや、歳を考えれば当たり前だろうか。

もちろんサイラスもそれを察していて、

「ああ、そうだよ。お兄ちゃんたちは大陸の色々なところを旅しているんだ」

「じゃあじゃあ、何か面白い話とかできる？」

どうやら彼女はその活発そうな外見の通り、好奇心の旺盛な性格らしい。

サイラスは頷く。

「そうだな。……もしゆっくりお話できる時間があったら、色々と話してあげるよ」

その言葉にリズは目を輝かせた。

「ホント!？」

「ああ、約束だ」

優しい笑顔で、サイラスは少女と小指を交わした。

……それを見て、ティースは妙に暖かい気分になる。

そんな姿だけを見ていると、いつか彼の言った“復讐”だなんて言葉が、とても似合わないように思えて仕方なかった。

そこへ、村長がリズへ声をかける。

「リズ。お前はそろそろ外へ行って遊んできなさい。パパはこのお客さん方と大事なお話があるからね」

「はい」

リズは元気良く答え、それからねだるようにして、

「できるだけ早く終わらせてね。私、このお兄ちゃんにいっぱいっぱいお話してもらうんだからっ」

「ああ、わかったわかった。……森へ行っちゃダメだぞ」

「はい」

手を振って、少女はアツという間に外へ飛び出していってしまっ
た。

村長はリズを送り出してから、サイラスに向かって頭を下げる。

「……どうもすみません」

「元気で素直そうなお子さんですね」

見送ったサイラスの言葉に、村長は頭の後ろを掻きながら照れたように答える。

「いえいえ。見ての通りお転婆な子でして……」

「いいえ、元気なのはいいことですよ。僕がもう少し若かったら、お嫁さんに欲しいぐらいです」

「……」

村長は目をぱちくりさせていたが、その後ろに控えていた奥さんがクスクスと笑い出す。

「はは……」

ようやく冗談だと気付いて村長も苦笑いした。

そこへヴィヴィアンが、腕を組んで何やら納得顔をする。

「そうか、サイラスくん。君がなかなか女性に興味を示さないのは、成熟した赤い果実よりも未熟な青い果実を好むからなのだね？」

「ご両親の前じゃ問題発言になりかねないな、それは。——とまあ、

冗談はこのぐらいでしよかね、隊長」

「……」

レアスは相変わらざるのツンとした表情のまま、サイラスの言葉にゆっくりと頷いて、

「じゃ、事情を詳しく説明してもらおうか」

「……ええ」

サイラスが演出した場の和やかな空気は、すぐに緊張感溢れるものへと変わった。

そして……この家にいる残りの一人。

村長の隣に座っていた男。

「彼が“魔”に襲われて命からがら逃げてきた村の者です」

顔の半分に巻かれた包帯が生々しい。年の頃は二十代後半だろうか。骨折もしているのか腕を吊っており、その他にも爪で引っかかれたような細かい無数の傷が痛々しかった。

「なるほど」

早速レアスが男へと問いかける。

「まず、その魔の特徴を出来る限り話してくれ」

「ええ」

男はそのときのことを思い出しているのか、微かに顔を歪めながら答えた。

「最初は猿かなにかだと思ったんです。でも、私が知っているものとは微妙に耳の形とか目の色とかが違って……なにより普通の猿に比べてかなり大きかったです。私より一回り小さいぐらいでしょうか——それが三匹、狩りをしていた私と私の知人四人に突然襲いかかってきたんです」

「体毛の色は？」

「全体的には茶色で……でも、ところどころに黒い斑点がありました」

「知能は高そうだったか？ 言葉は？」

「少なくとも意味のありそうな言葉は喋ってませんでした、変な鳴

き声みたいなのは上げてましたけど……」

「そうか」

頷いてレアスは村長の方を見ると、言った。

「それで生き残ったのはこいつだけか？」

「……はい」

村長は沈痛な表情で答える。

隣の男も顔を歪めてうつむき、唇を震わせていた。

村長が言葉を続ける。

「実は……昔からこの辺には同じ種類の魔が出没していたんです。ただ被害は決まった時期、年にせいぜい一、二回。それで今まではその時期に注意を呼びかける程度で済んでいたんです。でも、ここ最近では急に活動が頻繁になり……それに、今まで安全だった村に近い森でも被害がでるようになって……彼も村に近い場所で襲われたのです」

「それで俺たちに頼ったってわけだな」

レアスは腕を組んで頷いた。

が、それは彼らもすでに知っている情報だった。

——ディバーナ・ロウには“影裏”^{かげうら}と呼ばれる情報収集部隊がある。

大抵の場合、彼らが依頼について様々な情報を集め、実際に部隊が派遣されてくるのはその後。だから彼らディバーナ・カノンのメンバーは、あらかじめその辺の事情は承知済みなのである。

村長と男に尋ねたのは、あくまで確認のためだ。

「今は森を立入禁止にはしているのですが、森にはこの地の特産物が群生してまして、それがなければ私たちの生活もままなりません。それに、奴らがいつこの村にまで押し入ってくるか心配で心配で……」

村長はまるで祈るように手を組み、そして深々と頭を下げた。

「お願いします。私たちの村を救ってください」

「……言われるまでもない」

そんな村長に対し、レアスは相変わらず尊大な態度ながら、きっぱりと答えた。

「俺たちはそのために来たんだからな。任せておけ」

「――地の七十三族だな」

ディバーナ・カノンが借りている家のうち、レアス、フローラ、ヴィヴィアンが泊まっている家。そこはこの村でも裕福な家らしく、ざっと見たところ村では一番大きい。家主は村長の兄夫婦だった。

村長から状況説明をうけたメンバー五人は、大きな部屋の床に村周辺の地図を広げ、先ほど運ばれてきた昼食のサンドイッチを食べながら、その対策を練るべくこうして集まっていた。

とはいえ――

「地の七十三族か……なら、多少群れてても大丈夫でしょうかね、隊長」

「どうだかな。確かに、話を聞く限りじゃ数もそれほど多くなさそうだったけどよ」

「何か心配でも？」

「ちよつとな。最近になって急に被害が増えたってのが――」

（……うーん）

正直なところ、ティースを含めた他の三人はいなくても同じようなものだった。レアスとサイラスの会話は少々専門的な知識も入っているのか、ティースには理解できないところが多かったし、その証拠と言っては難だが、フローラとヴィヴィアンの二人は会話に参加する気もなさそうである。

ティースは一応、将来のために彼らの話を聞き逃さず、彼なりに理解しようと努力してはいたのだが……

（地の七十三族ってなんなんだ？ 魔の種族名らしいけど……）

ただ、二人の会話の内容から、さほど手強い相手ではないらしい

ことは、かろうじてティースにも理解できていた。

「とりあえず地図だけじゃわからねえこともある。明るいうちに少し周りを歩いて――」

「村の人たちのことを考えると、できれば明日には解決――」

(……ん?)

いい加減痺れを切らし、二人の会話を半分聞き流しながらティースがふと窓の外に目を向けると、そこに丁度見覚えのある人影が見えた。

(あ、リズって言ったっけ、あの子)

日射しの溢れる中、同じ年ぐらいの子供数人を引き連れて歩く少女。

(村長はお転婆なんて言ってたけど、本当みたいだな)

そんなリズの姿に、ティースは思わず苦笑してしまった。

中にはどうやら男の子も混じっているようで、その先頭を歩いているのだからよほどのものだ。

……そしてふと、リズの後ろを従者のようについていく男の子に、自分の姿がダブってしまった。

(シーラはあんな子供じゃなかったけどなあ)

それに気付いて再び苦笑する。ただ、まあどうにも逆らえそうにないという部分に関してはやはり一緒かもしれない、と、ティースはそんな風に思ったのだった。

――さて。

結局、それから数十分ほどの時間をかけて結論が出た。すなわち今日は周辺の地形を含めた下見に徹し、翌日、日の高いうちに掃討作戦を実行するということである。

そしてその決定通り、昼から夕方までの三時間ほど、ティースを含めたディバーナ・カノンのメンバーは全員が固まって村周辺の森を浅い位置まで調べ、被害者の男に同行してもらって彼が襲われた

場所も調べることにした。

そこは村長が“村に近い場所”と言ったのも頷ける、村から十分ほど歩いた程度の浅い場所。話によると昔は子供たちですらその辺りにまで入り込んで遊ぶことがあったという。

彼と一緒に襲われた村人たちの遺体は、どうやら村の者が総出で回収し葬ったらしく、その場にはなかった。が、その痕跡は僅かにティースの目にも止まった。どす黒い血と泥に汚れ引き裂かれた洋服の破片、そしておそらく必死の抵抗をしたのであろう、切り傷のようなものが周囲の樹木に残っていたのだ。

そうしてその周辺を少し探り——といってもティースはほとんど何もできなかったが——今日の作業が全て終わる頃、太陽は西に向かってゆっくりと沈み始めていた。

「はぁ……」

そして今、ティースは沈みかけた太陽と同じような気分で、部屋の片隅に座り込んでいる。

「緊張してるのか、ティース？」

逆側の壁に背を預け、念入りに獲物——ティースと似たタイプの中剣——の手入れをしているサイラスは、ティースと違って平然とした表情だった。

「緊張っていうか……まあ、ね。俺が役に立つのかわかっていうのもあるし——」

サイラスは笑って答える。

「朝にも言っただろ。今回のお前は研修みたいなもんさ、深く考えることはない。……それに隊長は色々と言っていたが、今回の相手は地の七十三族ってやつで、こいつは魔の中でも取るに足らない部類だ」

「それでも“魔”は“魔”だろ？」

「ピンキリさ。凶暴で大型の猿だと思えばいい。……それより今回は思ったより早く帰れそうだ。帰ったら出掛けに喧嘩した彼女に早めに謝っておいた方がいいぞ」

サイラスは緊張している様子もないし、早くも終わった後のことを考えている。その辺は経験の差か、あるいは性格の違いか。どちらにしろ今のティースには彼のように楽観的になることなどできなかった。

いくら大したことはないと言ったところで、その魔は実際に何人もの人を殺害している邪悪な存在なのだ。

（ああ……なんか胃が痛くなってきた）

「……」

そんなティースを見つめ、サイラスは少しだけ目を細めた。

「……ん？」

それに気付いてティースが疑問を向けると、

「いや……なんでもない」

再び、サイラスは視線を手元の剣へ落とす。

そうしてしばらく続いた沈黙。

窓から射し込む光は徐々に赤みを帯び始め、あと一時間ちよつともすればその姿を山間へ隠してしまうことだろう。

外から聞こえる声は子供たちが友達に別れを告げる声だろうか。

明日の再会を約束し、家へと戻っていく。

（……また明日、か）

ティースはそんな子供たちの言葉を、少し懐かしく思いながら耳にしていた。

……少年時代、ティースはこの村の子供たちのように、友達と遊んだりはしなかった。というのも彼の少年時代は彼らのように自由に遊べる環境になく、そして同年代の友達というのもほとんどいなかったからだ。

ただ、そんなティースにも、おそらく唯一と言っていいだろう、同年代の——正確には少々年下だったが、周りから比べればずっと歳が近い友達が出来たことがある。

いや、正確には“唯一”ではなかったが。

（今頃どうしてるんだろうな……）

“また明日”

確かにティースも毎日そんな約束をしていた。おそらくはあの日――別れが訪れた日の前日も。

それは彼がまだ子供だった頃の、懐かしい思い出――

「また明日、か」

「？」

ふと、そう呟いたのはティースではなかった。

「いい言葉だな」

「……サイラス？」

いつしか剣を磨くサイラスの手は止まり、その視線は窓から外へと向けられていた。

二つの瞳が赤みを帯びた光を受け寂色に染まる。

そして、眩しそうに目を細めた。

「……俺も昔は信じていた。“また明日”ってな。そう伝えれば、明日には必ず会えるものだど、何の疑いもなくそう信じていたよ」
パチン、と剣が鞘に収まった。それを脇に置いてサイラスは軽くため息をつき、ゆっくりと天井を見上げる。

その指先は、無意識の動きで胸元のロケットを弄んでいた。

（あ……そうか。サイラスは――）

その視線に気付いたのか、サイラスは少し躊躇ってから口を開いた。

「こいつとは親同士が仲良しだったんだ……ああ、ウチは街から街へ頻繁に移動する商人の家でな。安全のために他の家族と一緒に集団で移動することが多くて、こいつの家族とも事ある毎に一緒に旅してたんだよ」

「……」

ティースは黙って耳を傾けた。

どうしてサイラスが急にそんなことを話す気になったのかはわからない。が、おそらくそれは彼がデビルバスターを目指すことになるきっかけとなる話だ。おそらく、金のためでも名誉のためでもな

い。そんな彼がデビルバスターを目指すことになったきつかけ。

ティースはそれを聞いてみたかった。

「俺が確か十二歳だったから……七年ぐらい前か。いつものように街から街に移動する途中、急に魔に襲われてな。一応、護衛みたいのも何人かいたんだが、敵わないと知るとほとんどが逃げていった。俺たちも必死でな。取る物も取り敢えずに逃げ出したよ。両親ともはぐれて、一緒にいたのはこいつと、どこかの家族の小さい女の子が一人だった」

弄んでいたロケットの蓋が開く。

現れたのは以前ティースも目にした、細身で人の良さそうな青年の肖像画。

「いかにもお人好しっぽいだろ？」

ティースの心を読んだわけでもないだろうが、サイラスは笑いなから、

「十歳にも満たないような子を連れて逃げるなんてムリだったんだよ。案の定、俺たちは一匹の魔に追いつかれた。こいつは見ての通りお人好し……っていうか、馬鹿みたいなヤツでな。ほとんど顔も知らないその女の子を助けるために、勝てるはずもない魔に立ち向かっていったんだよ」

「……」

サイラスのその笑みが、途中から自嘲的な色を帯びていたことにティースは気付いていた。

「でも俺は逃げた。だってそうだろ？ 勝てるはずなんてないさ。」

俺は子供だったし、だいたい丸腰だ。死ぬのは怖かったし、顔も知らない子を命がけで助ける——いや、そんなことで犬死にするなんて真っ平ゴメンだったからな」

「それは……正しいと思う」

ティースがごく正直にそう言うと、
「だろうな」

サイラスは喉の奥で笑った。

「けど、俺は納得できなかったんだ。そのときは目の前の恐怖から一目散に逃げ出したけど、後になって何度も頭を過ぎった。……あのとき、俺にも何か出来たんじゃないかって。結局あいつも女の子も殺されちゃったけど、あのとき俺が背を向けなければ、もしかしたら二人を助けられたんじゃないかって」

「……」

「過去には戻れないからな。その答えは出ないが……」

パチン、とロケットの蓋が閉じる。

寂色に染まっていたサイラスの瞳は、真っ直ぐティースに向けられていた。

まるで……そこに何かを重ね合わせるかのように。

「あいつは無念だったと思うんだ。女の子を助けることができなくてさ。だから、俺がもしデビルバスターになってたくさんの人を助けられたら……そしたらあいつの無念も少しは晴れるんじゃないかってな」

「……そっか」

サイラスの気持ちはティースにもなんとなくわかるような気がした。

親友が果たせなかったことを代わりに果たしてやりたい。厳密に言えば意味が異なるだろうが、それは“無念を晴らす”というよりは“遺志を継いだ”と言った方が近いかもしれない。

「ま、もちろん、単純に俺から家族や親友を奪った魔が憎いつてもある。……むしろそっちのがデカいかもな」

最後にサイラスは明るく笑った。

今度は自嘲的ではなく、自虐的でもなかった。

「ああ、こんな話、ビビや隊長たちには秘密だぞ？」

「……どうして俺に？」

素朴な疑問を口にしたティースに、サイラスは自分でもその理由を探すかのように視線を泳がせて、そして答えた。

「さあ、なんでだろうな」

曖昧だった。

本人も理解していないのか。あるいはその理由を口にすることが躊躇われたのか。

「……悪い。なんかしんみりしちまったな」

「いや……聞けて良かったよ」

それはティースの偽らざる気持ちだった。

「そうか」

サイラスは頷いて、少しだけ微笑んだ。

彼もまた、どこかすっきりしたような、そんな表情で。

——異変が訪れたのはそれから数分後のこと。

「みなさん！」

「？」

「村長？」

真っ青な顔で突然家に飛び込んできた村長は、自らの動揺を隠そうともせずに言ったのである。

「娘が……娘が森に向かったまま帰ってこないんです——！」

その5『憧憬と共感と』

夕日はまだ山間からかろうじて顔を覗かせており、ちょうど本日の最後の任を全うしようとしているところだ。淋しげな鳥の鳴き声と地面に長く落ちた家々の影が、一日の終わりを告げ始めている。

「とうわけだ、村長」

薄暗い家の中、レアスの言葉が殊更に冷たく響き渡った。

青ざめた村長夫妻、レアスたちが家を借りている村長の兄夫婦、そして村長たちの母親らしき老婆は、絶望の色を隠そうとしていない。

「可哀想だが、その娘のことは諦めてくれ」

「ちよっ……ちよつと待ってくれよ、隊長！」

そんなレアスの宣言に真っ先に異論を唱えたのは、村長夫妻でもその関係者でもない。

ティースだった。

「……なんだ？」

向けられた鋭い視線に、ティースは食ってかかる。

「なんでだよ！ あの子が森に入ったのだってまだ二時間ぐらい前だろ！？ 魔に襲われたとは限らないし、今ならまだ助かるかもしれないじゃないか！」

だが、そんなティースの言葉に、レアスは鋭い視線と冷たい言葉で返した。

「ティース。てめえは人の話を聞いてなかったのか？」

「そりゃ聞いてたけど……暗くなって危険だったのもわかるけど……でも、敵だってそんなに手強い相手じゃないんだろ！ 隊長やサイラスぐらいの実力があればどうにか出来るんじゃないのか！？」

「……」

レアスは無言でティースを見ていた。……いや、“見ていた”というよりは“睨みつけていた”という方が正しい。

それは相変わらずの子供らしからぬ威圧感。

だが、ティースはひるまずに言葉が続けた。その脳裏には、いつかのシーラのこと——今回と似た状況だった——が頭に浮かんでいたのだ。

「そんな簡単に諦めろとか言うなよ！ 助かる可能性があるなら、そのために精一杯努力すべきじゃ——！」

「……黙れよ、てめえ」

「！」

迸った怒気に、ティースは思わず口を噤んだ。

「勝手な憶測で適当なことばかり喋ってんじゃねえ。何もわかってねえんなら黙ってろ」

「なっ……！」

ティースはカッとなって反論した。

「そ、そりゃ俺は入ったばかりだし何もわからないけど、でも間違ったことは言っていない！」

「間違ったことは言っていない？　じゃあなにか？　てめえは“どうにかなるかもしれない”とか、そんな曖昧なこのために、ここにいる全員の命を差し出せって言うのか？」

「なっ……そんなこと言って——！」

「言ってると同じなんだよ。何を根拠にどうにかなると思うてんのか知らねえが、てめえは魔を甘く見てるんじゃないかねえのか？」

「……！」

「ティースくん」

そこへ口を挟んだのはヴィヴィアンだ。

ティースは助け船を少し期待したが、彼の口から出たのは想像とは違う言葉だった。

「ここは隊長の言うことが正しい。気持ちはわかるが、そのぐらいにしておきたまえ」

「ヴィヴィアン——」

「残念ですけど。私もその通りだと思いますわ……」

「フローラさんまで……」

ティースには返す言葉がなかった。

だが、もちろん納得したわけじゃない。

（だって……こういうときに助けてやれるのがディバーナ・ロウじやないのかよ……）

実際、“あのとき”だってそうだったのだ。常識的には危険だと言われて、それでも助けにいったからこそ救うことができた。

（あの子だって、今頃、森の中で……怖い想いをしているに違いない）

それを想像すると、ティースの胸は締め付けられるように痛んだ。それと同時に、レアスやヴィヴィアン、フローラたちに対する不満が胸に広がってくる。

（これがレイさんやアクアさんなら、きっと助けてくれるのに……）

「……それはそうと」

そこへ、それまで無言だったサイラスが少し話題を逸らした。

「どうしてあの子は今日に限って森に入って行ったんです？　今までは言いつけを守っていたんじゃないんですか？」

「それが……」

村長は落胆を隠し切れない顔で答えた。

「途中まで一緒だった子の話ですと、硝子花を採りに行くと言っていたらしくて……」

「硝子花というと、例の特産品の？」

「ええ……」

「それはもしかすると――」

サイラスは言いかけて、途中で止めた。

村長も何も答えない。その場にいる誰もが無言になった。

（……そうか）

それを怪訝に思ったティースだったが、やがてその理由に気付く。

……硝子花というのはその名の通り、ガラスのように半分透き通った美しい花で、ネービスの街では贈り物などによく用いられる。

その生産地では、客を迎えるときにその花を贈ったり客室に飾ったりすることが多いとティースも聞いたことがあった。

ただ、ティースたちはこの村でその硝子花を直接見てはいない。何故なら硝子花は非常にデリケートで人の多く住む場所では育たず、生産地では“集落から離れた森の中”などで自然栽培している場合がほとんどなのだ。

（あの子、きっと俺たちのために採りに行ったんだ……）

ティースの胸の締め付けはさらに強くなった。

なんとかしたい——なんとかできないものか——

……だが、

「とにかく」

その場の沈んだ空気を裂くように、レアスはもう一度断言する。

「話はここまでだ。……明日、日が昇ったらすぐに行動に移る。全員、今日はゆっくり体を休めておけ」

すでにそれ以上、ティースが口を挟む余地はなかったのだった。

レアス、ヴィヴィアン、フローラの三人が滞在する村長の兄夫婦の家では、夕日がその姿を半分以上隠し始めた頃、ようやく夕食の準備をする音が漂い始めていた。

もちろんリズという名の少女は彼ら夫婦にとっても姪であり、彼らが村長夫妻と同様にショックを受けているのは当然のことだったのである。

「ちっ、ティースのやつ……」

そんな中、小さな舌打ちが部屋に響き渡った。

その主……ディバーナ・カノンの隊長、レアスⅡヴォルクスとて人の子である。彼らの気持ちが理解できないわけではないし、本来の激しい彼の気性から言えば、むしろ自分を抑えることに苦労しているぐらいであった。

ただ、だからこそ自分勝手に気持ちをぶつけてきたティースの態度は、彼にとって非常に腹立たしく、同時に羨ましいことでもあったのだ。

——その手に握られている長剣。刃渡りは百五十センチ近くもあるだろうか。柄を入れれば——あるいは入れなくとも——彼の身長より長く、ひどくミスマッチだ。その割に刀身は細長く、僅かに赤銅色の光沢を放っていた。

それを念入りに手入れしながら、レアスの愚痴は続く。

「あの野郎、なにもわかってねえくせに、余計な口を挟みやがつ——」

「ああ、かの夫婦の胸は今、張り裂けんばかりに悲鳴をあげている。しかし、しかし非力な我々にはこの定めをどうすることもできないのだ。ああ、この世のなんと無情なことよ……」

「……」

「せめて私がこの悲しみを詩にしてみせようではないか。それが彼らにとってせめてもの慰めとな——」

「……あああつ！　うるせえぞ、ビビ！！　てめえは少しだあってろ！！」

「ビではなあいつ！　ヴィだと何度も言っているではないかあああつ！」

「んなことはどーでもいいんだよ、この、タコが！　てめえも猿芝居してるヒマがあったら武器の手入れでもしてやがれっ！！」

「……猿芝居？　ふっ……これだから凡人は」

「ああっ！？」

レアスの鋭い視線が突き刺さっても、ヴィヴィアンはまるで平然と手を広げるだけだった。

「私に言わせれば、そうやって気を紛らわせるためだけに何度も武器の手入れをすることこそ時間の無駄というもの。それならば余った時間を自らの修練に費やした方が何倍も有益ではないか」

「はっ……てめえの狂った独り言のどこか自己修練だってんだ！？」

「ああ、天才はいつの世も孤独なものだ」

「てめえが天才？ 笑わせるんじゃない！」

「……隊長！」

そこへ、それまで黙っていたフローラが、やはり苛々した様子で口を挟んだ。

「ビビさんも、こんなときにそんなくだらないことで口論しなくてもいいでしょう！？」

「っ……」

「私は別に、口論する気はなかったのだがね」

口を噤んだレアスに、ヴィヴィアンは平然と受け流す。

フローラは少し眉間に皺を寄せ、少しズリ落ちていた眼鏡を直し、それから自らを落ち着かせるようにコホンと咳払いすると、

「と、とにかく、お二人が苛々するのはわかりますけれど、ここは落ち着いて対処するべきですわ」

そう言った彼女自身もそれほど冷静だとは思えないが、その言葉は至極もつともあった。

「隊長が責任ある立場としてああいった判断を下したのは、間違っていないと思いますし……」

「……んなことは当たり前だ」

そっぽを向いてそう答えたレアスに、フローラはチラッと夫妻がいる居間の方を見る。

どうやら客が来たらしく、それを出迎える夫妻の声が聞こえた。

フローラも少々胸につかえるものがあるようで、言葉には切れがなかったが、

「……今晚は夕飯を戴いたら早めに休みましょう。いくら相手が雑魚とはいえ、体調が万全でなければ万が一ということもありますわ」

「雑魚、か」

夕日を反射した赤銅色の刀身が、細めたレアスの瞳を赤く染めた。そこには思案げな色が灯っている。

「もし本当に雑魚ばかりなら、多少無茶しても構わねえんだろうが

……」

「やはりなにか気になることでもあるのかね、隊長？」

「……」

レアスは尋ねたヴィヴィアンの方を見ようとせず、ただ刀身を見つめるだけだった。

と、そこへ、

「あの――……」

「……あ、はい。なにかございましたかあ？」

いつもの調子を取り繕って返答したフローラに、部屋に入ってきた家の主人――村長の兄である男性が、少し怪訝そうな色を表情に浮かべて答えた。

「他のお二方は、なにか用を足してらっしゃるのでしょうか？」

「……どういうことだ？」

パチン、と甲高い音を立てて、赤銅色の刀身が鞘に納まる。

見上げたレアスの目は厳しさを纏っていた。

「い、いえ、それが……」

子供とはいえ圧倒的な威圧感を秘めるその瞳に、主人はほんのわずかにたじろぎながら答える。

「他のお二方がまだ戻ってこないと、家の者がやってきましたので……」

「……！」

瞬間、その場にいたカノンのメンバーたちに同様の緊張が走った。

「まさか……隊長」

フローラの言葉に、全く同じことを考えていたレアスは唇を軽く噛んだ。

「ちっ……だが、サイラスの野郎に見張りを命じたはずだぞ？ あいつはバカじゃねえ。たとえティースの奴が俺の命令を無視してそのかしたとしても、それに安易に協力するなんてこと絶対にねえはずだ」

だが、そこへヴィヴィアンが、他の二人に比べれば冷静な様子で

口を挟む。

「……あるいはサイラスくんが率先して救出に向かったのかもしれないな」

「なんだと？」

その言葉にレアスは苛立ちを隠しきれない様子で、ヴィヴィアンに食ってかかった。

「けど、あいつ、さっきは何も言ってなかったじゃねえか！」

「彼はティースくん違って隊長の立場を理解していた。だから反対されるのがわかっていて敢えて口にしなかったのかもしれないよ」

「じゃあ……二人は……森に――？」

不安げなフローラの言葉に、一同は沈黙した。

それは、その彼女の不安がおそらく事実であると、全員が認識していることの証明でもあったのである。

太陽の残光がほぼ見えなくなりかけていた頃、村の近くに繁る広大な森、その村にごく近い付近――おそらく村からは歩いて十五分ほどだろう。

その場所には今、おびただしい血の臭いが充満していた。

「キィィィィィッ！！」

まるで猿のような雄叫びをあげて、そして猿とは思えない、成人男性ほどの体格を持つ獣が太い木の枝から飛んだ。

めがけた先は、血にまみれた剣を携える一人の男。

スタイリッシュな服装に身を包んだ男は、しかし返り血にその姿を汚し、髪にも、顔にも殺戮を繰り返した跡がこびりついていた。

足下、そして周囲に伏すのは数匹――いや、十数匹もの獣たちの死骸。

“地の七十三族”……知識のある者たちからはその名で呼ばれる、最下級の魔に分類されるものたちの大量の死骸だった。

飛びかかった魔に、男の鋭い視線が走った。

同時に煌めいたのは、まるで一陣の風のように研ぎ澄まされた太刀筋。

獣の爪もまた男の体を狙って振り下ろされた。

人の世界に住む獣たちとはまるで異質の頑丈で鋭い爪は、人の体など易々と引き裂いてしまう威力を秘めている。

だが――

「キィイツ!!?」

おそらく驚きの意志を込めたのであろう鳴き声が、森に木霊する。一瞬の間も持たずに、鮮血が飛び散って森を汚した。衣服に、地面に、同族たちの遺骸に、汚れた血が染み込んでいく。

(すっ……すごい……)

それほど深くはない木々の隙間から、太陽に代わって月の光が顔を覗かせ始めている。

鬼気迫るその姿を、ティースは荒い息を吐きながら見つめていた。彼の足下にも、先程苦勞して倒した二匹目の“地の七十三族”が横たわっている。その剣は微かに血に汚れていたが、水のような煌めきを放つ刀身はまるでそれを拒否するかのように自らその血を弾き、すぐさま元の美しい姿を取り戻し始めていた。

「キィィィィィーッ!!」

僅かに残っていた獣たちは、自分たちが決して敵わない相手だと悟るや否や、蜘蛛の子を散らすように逃げていく。が、現れた大半は、サイラスの足下に動かぬ骸となって横たわっていた。

――圧倒的だ。

「サイラス――……」

目を細め、獣たちの死骸を見つめるサイラス。

鬼気迫る。

怒りに燃える。

いや……そのどちらも正しくはない。

――冷酷に。そう冷酷に、サイラスの瞳は獣たちの死骸を射抜い

ていた。

ピッ……と、新たに微かな血が森に飛び散る。

サイラスが剣の血を払い、それを地面に突き刺したためだ。

その瞳は徐々にいつもの彼の姿を取り戻し始めてはいたが、まだ声を掛けるのが躊躇われる雰囲気だった。

そして——サイラスは足を向ける。

傍らで意識をなくしている少女の元へ。

……いや。

「可哀想に……」

少女は動かない。

いや……動くはずもない。

泥に汚れた洋服。サイラスの腕の中で安らかに目を閉じた姿。

それだけなら、まるで遊び疲れた子供のようにも見える。

背中に——その背中に、骨が見えるほどに引き裂かれた無惨な傷さえなければ。

必死に逃げたのだろう。赤い靴は片方が脱げ、膝や脛は擦りむけていた。

そばに散っているのは、おそらく彼女が摘んできたのであろう、血に汚れた美しい一輪の花——

「っ……」

胸に熱いものがこみ上げ、ティースは思わず目を背けそうになる。だが、そんな自分を叱咤し、サイラスの一挙一同を、そして無惨な姿で見つけた少女を見つめ続けた。

見つめ続ける必要があると、そう思った。

「ごめんな、リズ」

そっと、サイラスは泥に汚れたリズの額に口づける。肩を優しく抱き寄せ、まるで愛おしい者を気遣うかのように、その髪を撫でた。「いつか、もっともっと強くなって、きっと君たちを守るようになってみせる。……だから今は、君を助けてあげられなかった俺を、どうか許してやってくれ……」

「……」

ティースはそんなサイラスの姿に、涙をこらえきれなくなった。
怒り？ 悲しみ？ 哀れみ？

（……違う）

そのどれとも違っている。

（俺も——）

それは“共感”とも“憧憬”とも取れる感情。

彼のようにになりたい。いや、彼の目指す道を同じように目指したい。

ティースの胸に溢れていたのはそんな想いだ。

……サイラス自身は“復讐”とか“罪滅ぼし”とか言ったが、たとえきっかけがそうであったとしても。今の彼は違う。今の彼は確かに、魔に襲われる人々を助けるために、そんな人々のために戦う存在だった。

そんな彼の姿にティースは共感し、触発されたのだ。

「俺も——」

剣を握る手に力を込め、サイラスに向かってティースは口を開いた。

サイラスがゆっくりと彼を振り返る。

それに向かって、ティースは思いの丈を口にした。

「俺も、いつか——」

そのときだ。

ティースを振り返ったサイラスの表情が険しさに染まったのは。

「え……？」

同じように視線を背後に向けたティースの視界にも、彼の捕らえていたものが映った。

数メートル先に姿を現していたのは、一振りの剣を携えた一人の男。

一人の男？

ティースはそう思ったが、その認識には付け足すべき言葉がある。

「なるほどー……お前たちが噂に聞くディバーナ・ロウってやつか」
男の声にはどこか楽しそうに響きがある。

頬が痩けて顎が尖った輪郭。目は細く少しくぼんだ感じで全体的に病的な印象を受ける。

そして、どこかが違う。

目、鼻、口……いやー耳だ。

「どうやら黒幕がいたらしいな」

リズをゆっくりと地面に横たえ、サイラスは立ち上がった。

「人型の魔が関わっていたか……しかもどうやら上位族だな。なるほど、隊長はこれを懸念していたわけだ」

（耳の形が……違う）

そう。ティースも知っていた。

その奇妙に先の尖った耳こそが、魔であることの証だと。

「ティース、下がってる。人型はまだお前には荷が重すぎる」

「サイラスー」

「はっきり言くと、邪魔だ」

「っ……」

そう言われてティースは引き下がるしかなかった。

……サイラスの実力はこれまでに何度目にして承知していたし、二人がかりというのは有利そうに思えてその実、仲間に切りつける危険があるため、よほど息が合っていないと難しい。ティースとサイラスの実力差を考えるなら、サイラス一人の方がやりやすいに違いないのだ。

「……」

無言で前に出たサイラスの瞳に、先ほどの冷酷の炎が再び灯っていたのをティースは見た。

いや、もしかしたら先ほどよりも強いかもしれない。

……人の想いを踏みにじる魔に対する、冷たい怒りの炎。

それはきつと、友人を見捨てた自分を責め、魔に踏みにじられた人々を見つめ続け、そして辿り着いた彼の生きる道。

ティースの胸に言い知れぬ熱いものがこみ上げてきた。

——この人のようにになりたい。

サイラスの背中を見つめるティースの中は、そんな想いで一杯だった。

「ほっほう」

現れた魔は、相変わらず楽しそうに戯けている。

「ディバーナ・ロウってのは自信過剰な奴らが集まっているのかなあ。キミがボクに勝てるんでも？ ムリだね。ムリムリ」

「そう思うのなら、やってみるといい」

サイラスは剣を抜き放ち、稽古でなんども見せた構えを取る。

ティースをまるで寄せ付けず、隊長のレアスですらも何度か退けたその剣技。それが決して自信過剰などではないことをティースは知っていた。

そしておそらく、彼が勝つであろうことも。

（こいつが……こんな人が……あんな卑劣な魔に負けるはずがない……）

「償わせてやる。この子の痛みを、思い知れ——」

そして全身から静かな闘気を迸らせ、サイラスは地面を蹴った。

「……どうするもこうするもねえだろ。ほっとけよ」

「隊長……本気ですか」

レアスの発言に、フローラは眉をひそめた。

残光の微かに残る部屋の中を、重苦しい空気が支配している。

レアスは先ほどよりも苛々した様子を隠しきれないまま、吐き捨てる口調で言った。

「ティースの野郎だけならともかく、サイラスと一緒になら雑魚程度どうにかしやがるだろ。たとえ何かあったって、そんなもん奴らの自業自得だ」

「さっきも言ってたが、隊長。その“何か”ってのに心当たりがあるのかね？」

「……」

ヴィヴィアンの問いに、レアスは腕を組んだまま壁に身を預け、それから微かに唇を噛むと、

「……今まで大人しかった奴らの活動が急に頻繁になったってのがな。偶然ってことも考えられるが、奴らを統率する知能を持った魔——人型の魔が出てきたって可能性がある」

その言葉にヴィヴィアンは納得顔をした。

「人型の……なるほど。隊長が慎重だったのはそのためなのだな」

「それが下位族ならまだいいけどよ。上位族や、まして将族だったりすれば、こっちも万全の体勢で挑まないとなんねえ」

ヴィヴィアンは少し考え、それからチラッと窓の外へと視線を伸ばして、

「もし隊長のその心配が現実だったとするならば、サイラスくんたちの命運はどうなると思うね？」

「……下位族なら問題ねえ。上位族なら相手次第。将族なら——」

「今のサイラスくんでは歯が立たない、と？」

「剣技は申し分ねえ。けど、あいつは——」

「……そうか。彼は今年もそれで合格に一步届かなかったのであつたな」

そんな二人のやり取りに、フローラはますます不安の色を濃くした。

「本当に……二人を追いかけないつもりなのですか、隊長……」

「知るかよ。それに将族が姿を見せることなんてそんなにあるもんじゃねえ」

「ま、本当に人型の魔が関わってるかどうかかも定かではないのだしね」

「……」

再び、重苦しい空気が部屋の中に充満する。

太陽はその姿を完全に山間の中へと隠そうとしていた――

一閃。

刃の輝きが月の光を反射し、宙に踊る。

戦いはティースの予想通り、サイラスが圧倒的だった。彼の冷徹に研ぎ澄まされた剣技の前に、魔は防戦一方でしかなかった。

「なるほど……キミは人間にしてはいい動きをする……」

魔は肩で大きく息をしながら、呟く。

「……けど、それではダメだなあ」

その瞬間。

薄暗い森の中に、血が飛び散った。

(な――!?)

スローモーションのように訪れたその光景を、ティースは信じられない想いで見つめていた。

「くっ――」

サイラスの膝が折れる。

左肩から流れる血が、服を汚し、さらに獣の血に汚れた地面へと吸い込まれていった。

「サイラスっ!？」

ティースには信じられなかった。

戦いは、間違いなくサイラスが優勢に進めていたのだ。動きも、剣技も、そしておそらくは戦いに込めた意志も、その全てがサイラスの勝利を示していた。

実際、魔は彼の攻撃に為す術もなく、防戦一方だったのだ。

それが――崩れたのは一瞬。

それは甲高い音とともに訪れた。

宙を舞い……サイラスの“折れた”剣先が地面へと突き刺さって。魔は口元に嫌らしい笑みを浮かべ、そして言ったのだ。

「人間は学習能力が低いねえ。剣技だけではボクたちに勝てないと、過去に何度も学んでいるはずじゃ——」

その瞬間、サイラスの懷から、一陣の煌めきが放たれる。

「っ!？」

それがバックステップを踏んだ魔の頬をかすめ、そこから一筋の血が流れ落ちる。

サイラスは左腕をだらりと垂らしたまま、素早く踏み込んで右手のナイフを繰り出していく。

だが、魔が驚愕の表情を浮かべていたのは一瞬のこと。

「頭が悪いな、キミは」

魔の瞳が輝いたように見えた。

その瞬間、その体に伸びていたナイフの刃先が甲高い音を立てて砕け散る。

「その程度の破魔具とキミ程度の聖力じゃ、ボクの魔力の壁を突き破ることはできないよ」

同時に、サイラスの太股から新たな血が飛び散った。

「……あああああっ!!!!」

ついにその口から悲鳴が漏れる。

「サイラスっ!!」

——信じたくはなかった。

だが、ティースの眼前に広がったのは紛れもない現実。サイラスの敗北は、誰の目にも明らかだった。

技術の差でもなく。気持ちの差でもなく。——ごくごく単純な、力の差によって。

それは絶望的な、現実だった。

「貴様あああああっ!!」

ティースが弾かれるように地面を蹴った。抜き身の剣を両手で強く握りしめる。

——水のように美しく、風のように鋭い刀身を持つ神剣“細波”
彼自身も自覚していない、彼の持つ秘めた強い聖力によって、そ

れは圧倒的な力を秘め、圧倒的な破壊力を込めて、一直線に魔の体へと向かっていった。

だが――

「キミの方は、それ以前の技術が足りてないな」

魔の姿はティースの眼前で消えた。

「!？」

感じた悪寒に、ほぼ無意識に地面を蹴って後ろに飛ぶ。

直後、ティースの胸の辺りに熱い感触が走った。

「っ!!」

かがんだ体勢から伸び上がるように滑った魔の剣先が、ティースの胸を薄く切り裂いたのだ。

「ティース……!!」

血塗れの左肩を押さえ、サイラスが何とか立ち上がろうともがいていた。

だが、その出血はかなりの量だ。下手をすれば――いや、そのまま長時間放っておけば、間違いなく死に至る出血だった。

「サイラス! ……くそおおっ!!」

ティースは再び剣を握りしめ、魔の動きに集中する。

(見える……はずだっ!!)

完全にティースに照準を絞った魔は、畳みかけるように攻撃を仕掛けてくる。

刃の長さはほぼ互角。だが、決して洗練されたとはいえない難い剣筋は、それでも常人の枠から逸した鋭さでティースに迫った。

「――く……あっ!!」

まるで風を相手にしているかのようなだった。

ただ空気を切り裂く音を頼りに、ほぼ無意識に反応する体の動きだけで受け、払い、そして避ける。

避けきれなかった攻撃が、彼の体に無数の傷を植え付けていった。徐々に思うように動かなくなってくる体、全身を襲う痛み……そして、

（これじゃ……どうしようもない——）
精神的な疲労。

ティースにはもはや為す術がなかった。
魔に対する怒りも。

サイラスを助けたいと願う気持ちも。

その全てが、この力量差の前では完全に無力だった。

（どうすれば——）

そして一瞬の気の緩み。

「!？」

ピッ、と顔に血が飛んだ。

同時に焼け付くような痛みが右肩を襲う。

「っ……あああっ!!」

まるで焼けた石を肩にあてられたかのよう。……そこが切られたのだと認識するまでには、またもう少しの時間が必要だった。

そのまま、地面を埋め尽くした獣の死体に足を取られ、もつれて後ろに倒れ込む。

「っ……!!」

背中に当たった冷たい幹の感触に、ほんの一瞬だけ息が詰まった。ティースの腰にぶら下げていた水筒の蓋が外れ、肩から流れた血と混ざって地面に吸い込まれていく。

剣は転んだ際に手から離れていた。

「ふふ、もう終わりかぁ」

勝利を確信したのか、嵐のような攻撃は止んでいた。そのまま、魔はゆっくりとティースに近付いてくる。

「くっ……」

「では……身の程を思い知りながら死ぬんだね……」

魔が剣を振り上げた。

「っ!!」

ティースは咄嗟の判断で、腰にぶら下げていた小袋を水に浸し、投げつけた。

「……？」

魔がそれに気を取られた一瞬。

「なっ、これは——！？」

その袋から突然煙と派手な破裂音が飛び出す。

——それはティースが出発間際、ファナから受け取った煙玉だった。

（今だっ——！）

ティースは下半身に力を込めて立ち上がると、そばにあった剣を拾い上げ、真っ白に染まった視界の中、サイラスのいた場所まで駆けていく。

「ティース……」

「しっかりしろ、サイラスっ——！」

自ら止血しようとしたのか、左の肩口と両太股は布のようなもので縛ってあったが、それでも血が止まっている気配はない。近くで見ると、どうやら傷口はかなり深い。

意識も朦朧としてきているようだ。

（ああ……）

それを見て、ティースは激しく後悔した。

……あのとき、どうしてレアスの言葉にもっと耳を傾けなかったのか。自分が冷静になっていたら、自分をもっとその言葉の意味を深く考えていたなら、あるいは命令を無視して森に向かおうとしたサイラスを引き留めることができたのかもしれない、と。

だが……それは今更考えても詮無きことだった。

「ティース……俺はいいから——」

その言葉には耳を貸さず、ティースは剣を腰の鞘に収め、左腕一本だけでサイラスの体を背負う。

（悔しい……悔しいけど、でも今は逃げるしか——）

だが、

「くっ……」

背中为重みにティースの膝が折れる。ズキズキと右肩が痛み、そ

これから新たな血が溢れ出した。

「くそっ……こんなことで——！」

「ティース！ その怪我じゃ無理だ……だから……」

「……っ！」

ティースは耳を貸さない。

もちろん、彼を見捨てて自分だけが逃げるなんてこと、できるはずもなかった。

（絶対に、死なせない……っ！！）

震える両足に力を込め、そして地面を蹴る。崩しそうになるバランスを必死に制御し、デコボコの土に足を取られそうになりながらも、ティースは懸命に走った。

「ティース……ス……」

背中のサイラスは半分意識をなくしているようだった。が、彼はそれでも、まるでうわごとのように繰り返す。

その目から、悔し涙を流しながら。

「……くそっ……もつと……もつと強くなきゃ……！」

「……」

——もつと強く。

（そうだ……もつと強くなきゃ……）

その言葉は深くティースの胸にも刻まれていた。

（強くななきゃ——）

「——逃がさないよお」

「!?」

背後から聞こえたのは、絶望の声。

振り返って剣を抜く暇もない。

（——殺される……）

ティースは感覚でそれを悟っていた。

すぐ背後に、凶刃が迫っている。

一瞬の間に、さまざまな光景が走馬燈のように脳裏に走った。

（俺は……死ぬわけには——！！）

それもまた咄嗟の判断だった。

腰にぶら下げていた残りの袋を全て、振り向かずに放り投げる。

「ちっ、また——!?」

背後の気配が動きを止めた。

距離が離れる。

……もちろんティースが投げたのは煙玉などではなく、ただの薬草が詰まった袋だ。

おそらくはそれもほんの僅かな時間稼ぎにしかないだろう。

（どうすれば……どうすれば——!!）

ズキズキと右肩が痛む。足が地面につくたびに膝が折れそうになる。右肩は真っ赤に染まり、左肩はサイラスから伝った血でやはり真っ赤だ。それが手の方にまで伝ってきて、支える左手が何度も滑りそうになった。

（どうすれば……）

「小賢しい真似を……!」

再び背後に迫る凶刃。

（どうすれば——）

——どうしようもない。

今度こそ、逃れる術はなかった。

（ああ……）

足がもつれる。

ティースの体力もまた、すでに限界だった。

闇色に染まった木々。

体を包み込む生ぬるい風。

見上げた空に、不気味な姿を浮かべる月。

そして——迫り来る風切り音。

……ヒュッ!!

それは絶望の音を立ててティースに迫り、そして——

「……?」

それはティースの前方——森の暗闇の奥から迫ってくると、その

脇をすり抜け、地面に甲高い音を立てて着弾した。

「ちっ……」

背後で、魔が足を止めた気配がする。

（え……？）

魔の足を止めた“鞭”のようなものは、再びティースの脇をすり抜けて持ち主の元へと戻っていった。

「……ティースくん！　しっかりしたまえっ！！」

朦朧とする意識と眼前に迫り来る地面。

その中で、ティースは確かに仲間たちの声を聞いていた。

「二人ともひどい怪我だわ……隊長！」

「フローラ！　ビビ！　てめえらは二人を連れて村へ戻れ。――急げ！！」

（ああ……）

幻覚か、現実か。

それすらも今のティースには判断できなかった。

「仲間が来たかぁ……ほほう。今度のは随分とちびっこいが、少しは骨がありそうだ」

「隊長……」

ティース自身、それが言葉になっているかどうかはわからなかった。

「気を付けて……そいつはサイラスでも歯が立たなかった――」

「行け！！」

燃えるような赤髪。背負った身長よりも長い剣に手をかける後ろ姿。

――そこから迸る、目に見えるほどの闘気。

（レアス……隊長……）

その光景を最後に、ティースの意識は闇へと落ちていった――

――静まり返った森の中で、二人は対峙している。

「ふふっ……さっきの二人はキミの部下かい？　ダメだねえ、あの程度の実力でボクたちに喧嘩を売らせたりしちゃ」

「……」

剣の柄に手をかけたまま、レアスは鋭い瞳で魔を睨み付けていた。

「おお、こわ」

そんなレアスに、魔は戯けてみせた。

「ま、それぐらいじゃないとボクも張り合いがない。ようやく本気も出せそうだ」

にやりと口元に笑みを浮かべ、血に濡れた刃をぺろりと舐める。

ジリッ……と、レアスの足指に力がこもった。

「てめえは……地の上位族だな」

「ほう、よくわかったねえ。ボクは地の上位、アベイ族のグリフィル・アベイ・ウッドワードだ。……キミの名前も聞いておこうか？」

「レアス・ヴォルクス」

レアスは答え、すぐに付け足した。

「名の由来は、“てめえを地獄に叩き落とす者”の意だ」

「ほう？　それは一体どこの言葉——」

魔……いや、グリフィルの言葉は最後まで続かなかった。

代わりにその口から溢れたのは、

「かっ——！」

「灰になって、土に還れ。てめえには——」

まるで世界を縮めたかのように、レアスの体はグリフィルの足下にまで移動していた。

そして、その手に握られた赤銅色の刃が、グリフィルの胸を貫いている。

——常識を越えた、瞬発力。特訓で見せていたそれをも、遙かに凌駕するほどの——

「てめえには……地獄の炎が相応しい……！」

赤銅色の刃が一際赤く輝いた。

“終末の炎”と刻まれた神剣“終炎”が、その力を解放する。

「――」

そしてそれはほんの一瞬。まるで稲光が輝くほどの一瞬の間。

断末魔の悲鳴が聞こえることさえもなく……グリフィルの体はレ
アスの言葉通り、跡形もなくその姿を消していたのだった。

その6『意志を継ぐ者』

ミューティレイク邸はその日の朝、いつもと少しだけ違う雰囲気だった。

「なにかしら……？」

その日、いつものように自室で朝食を終えたシーラは、学園が休みだったこともあり、書庫へ向かおうと階段を下りていた。

微かな違和感を感じたのはそのときである。

そして彼女はその要因——見知った使用人の少女、フィリスが、玄関ホールでほんの少しだけ青ざめて、目の前にいる一人の少女に問いかけている光景を目にした。

「それは……間違いないんですか？」

「まだ情報が混乱してるからわかんないけど、ほぼ間違いないみたい」

そこにいたのもやはりシーラが知っている少女。いつものラフな格好ではなく、まるでアオイのような正装を身につけたリディアだった。

「……」

その近くを通るときに少しだけ耳を傾けたが、シーラはすぐに自分には関係のないことだと判断して通り過ぎる。

……と、そのとき。

「どうも、ティースさんの方もひどいみたいで——」

「……」

「——あ」

振り返ったシーラと、リディアの視線が交錯した。

「……シーラさん」

どうやら彼女はシーラの存在に全く気付いていなかったらしい。

「なに？ ティースがどうかしたの？」

「あ、えっと……待った、シーラさん。まだ確実な情報じゃないか

ら——」

手を振ったりリディアは慌てているというほどではなかったが、その態度は確かに不自然だった。

シーラは眉をひそめて視線を鋭くすると彼女に向き直り、有無を言わさぬ口調で言った。

「いいから答えなさい、リディア」

「あ、あの……」

その後ろでフィリスが遠慮がちに口を挟んでくる。

「シーラ様。それについては後で、正確な情報を——」

「黙りなさい。私はリディアに尋ねているのよ」

「は……はい……」

その剣幕にフィリスは怯えたように口を噤んだ。

これでもフィリスはシーラと同じ年——産まれた日付で言えば若干年上なぐらいだったが、どうやら性格上、彼女に太刀打ちするのは不可能なようである。

「……うん」

やがて、リディアは観念したような表情をすると、

「わかったよ。あ、フィリスさんは仕事に戻って。あたしが説明するから」

「は、はい……」

フィリスが去って、リディアは改めてシーラに向き直る。

「まず先に言っておくけど、これはまだ正確な情報じゃないかね」

「ええ、構わないわ」

頷いて即答したシーラにリディアは頷いて、それから言葉を続けた。

殊更に淡々と。

「少し聞こえたかもしれないけど……あたしが聞いた限りだと、どうもティースさんとサイラスさんが、魔と戦って大怪我をしたらしくて」

シーラの眉が少しだけ動く。

「大怪我というのは、どの程度？」

「詳しいことはわかんない。でも、大怪我ってことはヘタしたら生死を彷徨うぐらいだと思う」

「……」

そのときシーラの表情を過ぎったのは、紛れもない不安の色だ。それがティースの生死に関しての不安だったのか、それとも全く別のものだったのか、リディアには判断できなかった。

そしてすぐに付け加える。

「あくまで未確認情報だかね。……あ、あたしが話したってことは内緒だよ。本当ならディバーナ・ロウに深く関わってる人しかまだ聞いちゃダメな話だから……ちよつとシーラさん？ 聞こえてる？」

「え……ああ」

床の一点を見つめて考え込むようにしていたシーラだが、その呼びかけにすぐ我に返ると、

「ええ、わかったわ。悪かったわね、リディア。無理に聞いたりして」

「うん。ま、シーラさんは関係者みたいなものだしね。……ね、何度も言うけど未確認情報だかね」

「気を遣わなくても大丈夫よ」

口調はいつものまま、シーラはその端正な顔を僅かに緩め、静かに微笑んだ。

「別にショックを受けているわけじゃないわ。こうなる可能性があるのは、最初からわかっていたことだもの」

「……」

無言のリディアに背を向けて、シーラは階段を上っていく。

背筋を伸ばして凜とした姿はまるでいつもと変わらないように見えたが……そんな後ろ姿にリディアはため息を吐くと、呟いた。

「……笑い方、前と全然違うじゃん」

そのまま彼女は執務室の方へと足を向けていく。

そして、

「ああ、フィリスさん。……ちょうど良かった」

途中、遠くから様子を窺っていたフィリスと鉢合わせたリディアは、彼女を呼び止めると、

「さっきの言葉撤回。悪いんだけど、今日一日、それとなくシーラさんの様子を見ててくれないかな？」

「え？」

きょとんとした顔のフィリスに、リディアは詳しい説明をするのではなく、

「あたしの思い過ごしだとは思っただけだね。あの人、もしかしたらとんでもない“旋毛曲がり”かも」

「？ あの……それはどういうことですか？」

「いいからいいから。今日はどうせあたしがファナさんにずっとついてることになるし、仕事ほっぽるといいから、お願い」

「はあ……」

それでも文句を言うことなく、フィリスは頷いた。

満足してリディアは再び歩みを再開する。

新しい情報が入っていないかを確認するために。

(二人とも無事なのが一番だけど……)

この、屋敷に漂う重苦しい雰囲気には、さすがのリディアも未だに慣れることができなかった。

ティースが目を覚ましたとき、最初にその視界に入っただのは薄明かりに照らされた天井だった。

「う……」

口から自然とうめき声が漏れ、そばにいたフローラがそれに気付く。

「ティースくん？ 大丈夫？」

「こ……こは……？」

ティースの頭の中はまだ混濁としており、状況を把握できていない。

「フローラさん……？」

ベッドの横にいたフローラに気づき、そしてティースはゆっくりと室内を見渡した。

そこは見覚えのある……彼がこの村にやってきて一日の宿を借りた家である。外は雲に覆われて時間がわかりにくかったが、早朝というには遅く、昼というには少々早いぐらいの時間だろうか。

そしてティースは、自らの肩に巻かれた包帯、そしてそこを襲う断続的な痛み zu 自分の状況を思い出していた。

「つっ……フローラさん……あれからどうなったんですか……？」
体を起こそうとするティースを押しとどめ、フローラは静かに答えた。

「心配ないですわよ……例の魔は隊長が退治してくださいましたから」

「そう……ですか……」

その事実 zu 安心し、ティースは再び体を布団に預ける。

（さすが……隊長だ）

サイラスですら太刀打ちできなかったあの魔を倒してしまったのだ。やはりデビルバスターの名は伊達ではない……と、ティースは改めて感心した。

（俺も、もっと強くなきゃな……）

カタカタという音は、フローラが手元で何かをかき混ぜている音だった。微かに草の匂いがするところから、どうもティースのために薬を作っているらしい。肩の痛みは決して軽くはなかったが、ひとまず全てが落ち着いたということ zu ティースは安堵の息を吐いて、それから改めてフローラ zu 質問する。

「そういやサイラスの奴は？　もう目覚めてるんですか？」

「……」

フローラは無言のまま、ティースではなく後ろを振り返った。ちやうど玄関から聞こえた音は、どうやら誰かがこの家に入ってきた音らしい。

「フローラさん？」

「ええ……そうですわね」

フローラは改めてティースの方に向き直ると、膝の上に手を重ね、背筋を伸ばし、眼鏡の位置を軽く直して、そして言った。

あまりにも、あっさりとした口調で。

「サイラスくんは今朝方、亡くなられましたわ」

「……………え？」

その一瞬、ティースの思考は停止した。

——言葉が耳の奥で止まり、そこで燻っているような感覚——だが、それには構わずにフローラの言葉は続く。

「手は尽くしましたが、肩の傷も太股の傷もあまりに深く、出血が多すぎてどうにもできない状態——」

「ちよっ……ちよっと待ってよ、フローラさん！」

淡々と続いたフローラの言葉は、まるで冗談のようにティースには聞こえていた。

「やめてくれよ、そんな縁起でもない冗談——」

「冗談？ ……冗談ですって？」

空気が止まった。

そして一瞬の後……それが突然に弾ける。

「冗談で……冗談でこんなこと言えるわけないでしょっ！！！」

「っ!？」

叫んだフローラの語尾が、微かに歪んで乱れた。

そして、それまで淡々としていたのが錯覚ではないかと思うほどに、その目から涙が溢れ始める。

「……私にはどうにもできなかった！ だって仕方ないでしょう！？ どうにもできない状態だったの！ 見ているしか……彼の命が手の平からこぼれ落ちていくのを見ているしかなかったんだからっ

「……！」

「――」

「どうしようも……なかったんだから……！」

ティースは呆然とした。

震えるフローラの手から木製のすりこぎが落ちて、床に乾いた音を立てる。

「っ……うっ……！」

口に手を当て、そして糸が切れるようにフローラは泣き崩れた。

「……フローラ……さん」

「……」

その向こう……部屋の入り口にいつの間にかレアスの姿があった。その表情はいつも通り――いや、いつもにも増して厳しく、そしてフローラを見つめる目には微かな哀しみの感情が浮かんでいる。

それは――もはや疑う必要のないことではあったが――フローラの言葉が真実であることを嫌というほどティースに実感させていた。

「隊長……」

「今、サイラスの遺体を埋葬してきたところだ。てめえもあとで行ってやりやいい。……フローラ。あんたはそろそろ体を休めた方がいいんじゃないかねえか？」

「っ……！」

フローラは泣き顔を伏せたまま、レアスに背中を叩かれ、足取りも頼りなく部屋を出ていく。

だがその泣き声は、いつまでもティースの耳の中に残ったままだった。

「……サイラスが……死んだ……？」

それはティースには到底信じられないことだった。だが……この重苦しい沈黙。そしてレアスの表情も、フローラの涙も、その全てが疑いようもない真実だった。

そして歩み寄ったレアスが、トドメの一言を発する。

「冗談でも夢でもねえ。あいつが死んだのは紛れもない事実だ」

「そんな……だってあいつが死ぬはずが——」

自然と声が震え、肩を打ち振るわせ、そして直後、

「死ぬはず……ない……」

ティースの目にも熱いものがこみ上げて、頬を流れた。

同時に彼を襲ったのは、限らない後悔だ。

「……俺だ。俺があいつを助けられなかったから……俺が考えもなしに森になんて入り込んだから——！」

パァン！！！

「っ！」

直後、甲高い音が部屋に響いた。

ティースは自らの頬を襲う痛みを覚え、そしてようやく自分がレアスの平手打ちを喰らったのだと認識する。

「……隊長……？」

レアスは彼を思いっきり睨み付けた。

「寝ぼけたこと言ってるじゃねえぞ、ティース。てめえに責任なんかあるもんかよ」

「隊長……だって、俺——」

涙目のまま呆然とするティースに、レアスは吐き捨てるように言い放った。

「ああ？　だったら何か？　サイラスはてめえごときにそそのかされて、てめえの意志に流されて、それで命を落としたって言いていいのか？　……違うだろうがっ！！」

「！」

「あいつはそんな意志の弱え奴じゃねえ！　あいつはあいつの意志で助けに行った！　あいつの信念で助けに行った！　……違うのかよ！！」

「……」

確かに事実レアスの言うとおりだった。

だが——

「けど……俺はあいつなら大丈夫だって……止めることもしないで、

それどころか喜んでついて行ったんだ……だから——！」

「……はっ。てめえが止めたところで、あいつが立ち止まるかよ。……あいつにはものすげえ信念があった。てめえごときに止められるもんかよ。……力づくでもあいつを止められたのは……この俺だけだ」

「……」

一瞬、レアスの表情が歪んだように、ティースには思えた。

だが、それはほんの一瞬の間。

レアスは唇を噛みしめ、そして続けた。

「……ティース。てめえが自分を責めるだけなら、んなもんはてめえの勝手だがな。それは同時にあいつの行動を、あいつの信念を、あいつの意志を侮辱する行為だ。……それは絶対に許さねえ」

「あいつの……意志……」

「命令違反は命令違反だ。それはてめえに償ってもらう。けど、サイラスのことはあいつ自身と、そして隊長である俺だけの責任だ。……繰り返すぞ、ティース」

最後に、レアスの指先がティースの眼前に突きつけられた。

「以後、てめえがあいつのことで自分を責めるのは、あいつの意志を侮辱する行為だ」

「……」

（あいつの……意志——）

背中を見せ、遠ざかっていくレアスの姿を眺めながら、ティースはその言葉を頭の中で繰り返していた。

彼の持っていた意志。

魔に脅かされる人を一人でも多く救いたい——

（……サイラス）

目の奥からは新しい涙が溢れてきていたが、それは先ほどまでは少しだけ意味が異なっていた。

後悔ではなく、純粹な悲しみの涙。

……ほんの短い間。それでもティースにとっては懂れ、そして共

に同じ道を目指したいと思った友人の死。それは彼にとって、涙を流さずにはいられない出来事だったから。

（サイラス……俺——）

痛む体を押して、フラつきそうになる足を壁に手を当てることで支え、初老夫妻の協力を丁重に断って、ティースは外へと出ていく。今にも泣き出しそうな空の下、サイラスの墓は、彼が助けようとした少女のものと並ぶように作られていた。

「身寄りがない方とのことだったので……娘のものと一緒に、私たちが守っていかうと思うのです。……よろしかったでしょうか？」

そこに佇んでいた村長夫妻も、同じように目を赤く腫らしている。ティースは彼らを見て、そして頷いた。

「ええ……彼も喜ぶと思います」

墓を飾っていたのは、数本の硝子花。決して墓に添えるような種類の花ではなかったが——それでも、それを飾った村長たちの気持ちはティースにも充分に想像できる。

目を閉じて、ティースは二つの墓の前に膝をついた。

瞼の奥から、再び涙がこみ上げてくる。

ゆつくりとその口が開いた。

「サイラス、俺は——」

そして冷たく吹きすさぶ風が、彼の決意を乗せて運んでいく。

空の向こう側へと——

ディバーナ・カノンがミューティレイク邸へ戻ったのは、それから二日後のことだった。

サイラスの訃報は一足先に屋敷に伝わっており、悲しむ者はすでに涙を流し終え、ひとまず——表面上は——重苦しい空気が収まりかけている……そんなミューティレイク邸、別館の執務室。

そこには四つの人影がある。

「報告ご苦労様です、レアス君。この後はゆっくり体を休めてください」

「ああ」

ディバーナ・カノンの隊長、レアスⅡヴォルクスはたった今、その総帥であるファナⅡミューティレイクに報告を終えたところだ。アオイの承認の言葉を受けて、レアスは退室していく。

それでこの件に関しては全て終わる……そのはずだったが、

「さて、ティースさん」

その部屋にはファナとアオイの他に、もう一人いた。

「……」

少し強ばった顔で立っていたのは、いわずとしたティースである。肩には包帯を巻いたまま、体中には治療の跡がしつこいほど残っているが、ひとまず歩くのに支障ない状態までは回復していた。

彼はレアスとともにここに呼び出された理由を聞いていない。命令違反についての解雇通告があるのかと思っていたのだが、どうも二人の態度はそんな雰囲気でもなかった。

「ティースさんと呼んだのは他でも――」

言いかけたアオイを、ファナの言葉が遮った。

「アオイさん。それについては私の方からお伝えしますわ。……ティースさん？」

「……」

直立のまま、ティースは机の向こうのファナを見た。

そんな態度に、ファナはそっと微笑んで、

「もっとリラックスなさってください。それではまるで、これから処罰を受ける方みたいですわ」

「？」

その言葉に、ティースは少しだけ驚きに目を開いて、

「……違うの？」

逆にファナが不思議そうな顔をする。

「？　どうして私がティースさんを処罰しなければならないのですか？」

「え……だって隊長がさっき言っていたように、俺は命令無視をして……その罰があるのかなって」

「それはレアスさんがお決めになることですわ」

微笑んだまま、ファナは机の上に載っていた一枚の紙切れを手に取った。

「今回お呼びしたのは、ティースさんにお渡ししなくてはならないものがあるからです」

「？」

「その前に、お話しなくてはなりませんね。……ティースさんは、出発前に遺書を書かれたことを覚えております？」

「あ、うん。そりゃ……」

ティースの答えに頷いて、ファナは手にした紙切れに視線を落としました。

いつもの暖かな声色が、ほんの僅かに陰を帯びる。

「……残念なことに、今回はサイラスさんが命を落とされてしまいました。ですから、私は彼の遺書を開きこうして手にしています」

「……あ」

サイラスの遺書。

それをティースは少し複雑な表情で見つめていた。

……遺書を残す相手がいない、と、そう口にしていた彼の姿が浮かぶ。

そして、ファナは言った。

「ティースさん。……サイラスさんの遺書には、あなたとシーラさんに関することが書かれておりました。ですからこうしてお呼びしたのです」

「……え？　俺と……シーラ？」

まるで彼と接点のないシーラの名前が出てきてティースは困惑する。

「要点だけお伝えしますわ」

そう言ってファナは遺書を広げると、ゆっくりと続けた。

「願いは二つ。一つ目には、シーラスノーフォールが卒業するまでの学費の面倒を見て欲しいということ」

「……？」

だが、ティースの疑問は、続いたファナの言葉で全て立ち消えた。

「二つ目には、ティーサイトⅡアマルナを解雇し、別の仕事を世話して欲しいということ……です」

「あ……」

その言葉の意味は、ティースには容易に理解できた。

「……あいつ——」

それは本気の願いだったのか、あるいは冗談混じりに書いたことだったのか。ただ、どちらにしても、彼がそれを書いて遺した事だけは紛れもない事実だった。

（……けど……サイラス。俺は——）

「私はこの願いを叶えて差し上げたいと思っています」

その言葉に、ティースは少し慌てて、

「ま、待ってくれ、ファナさ——」

「ですが」

すぐにファナは付け加えた。

真剣に、ティースの顔を真っ直ぐに見つめて、

「もちろん、こういうことに関しては本人の意思が一番大切です。」

ですから、あとはティースさんのお気持ち次第ですわ」

二組の視線がティースの返答を待っていた。

「……」

——確かにティースがここに来たのは、シーラの学費を稼ぐためだった。そしてサイラスがああいった遺言を残した以上、彼がここにいる理由はなくなっただけと言える。今まで通り、細々とした傭兵の仕事でこなしていれば、少なくともシーラを卒業させることはできるのだから。

だが、

「それは――」

それでも、ティースの答えはとっくに決まっていた。

「……ティース」

ティースが執務室を出ていくと、シーラがまるで彼が出てくるのを待ち伏せていたかのように――いや、実際に待ち伏せていたのだろう。扉の前に立っていた。

「シーラ？」

ティースは戸惑った。

何故なら、ここに来てからというものの、彼女が自ら会いに来たことなど……出発のあの日を除いて他になかったのだから。

「どうしたんだ、一体……」

そう尋ねたティースに、シーラは少しだけ躊躇って視線を泳がせた。

が、すぐに決心したように再び彼を見て、そして驚くべき言葉を口にする。

「ティース。……私、サンタニアを辞めるわ」

「……え？」

あまりにも唐突、あまりにも予測外の言葉に、ティースは呆気にと取られてまじまじとシーラを見つめてしまう。

その意味をようやく理解して、彼が口にしたのはもちろん疑問の声。

「学園を辞める？ どうして急にそんな――」

「半年以上前から思っていたのよ。……考えてみたら私は女だもの。必死になって勉強なんかしなくとも、どっかで金持ちの男を見つければそれで済むわけじゃない？」

シーラは事も無げにそう答えたが、ティースは首をかしげずにいられなかった。

彼女が薬師になるという夢に対してどれだけの真剣で、どれだけ

情熱を注いでいたかティースは良く知っている。

——じゃあ、何故突然？

ティースの頭をそんな疑問が過ぎったのは当然のこと。

だが……それを考えるより先に口が反射的に開いていた。

「ダメだ」

「え？」

「急に辞めるなんてこと、俺は認めないぞ」

断言したティースの言葉がよほど意外だったのか、シーラは驚いたように目を丸くした。

彼女が彼女にこうして反論すること自体が珍しい。その上、ここまで強硬な態度を取るのはさらに珍しいことなのだ。

シーラはすぐに我を取り戻し、目を細めた。

「お前は何を言っているの？ 私が辞めるって言っているのよ。お前なんかそんなことを言われる筋合いなんて——」

「……じゃあ言い直すよ」

ティースは少しだけ視線を落とした。彼女の剣幕に、いつものように屈したのかと思えばそうでもない。

「頼むから、辞めないでくれ」

「……」

頭を下げたティースに、シーラは困惑の表情を浮かべた。

ティースは続ける。

「気持ち悪いって言われるかもしれないけど……お前が自分の夢に向かって歩いてくれることが、今の俺にとっては唯一の励みなんだ。お前がそうしていてくれなきゃ、俺は自分の道を歩いていくのが辛くなっちまう」

「……なんなの、それは」

シーラは眉をひそめ、そして彼の発言を気味悪がる——かと思いきや、そうではなかった。

「お前の道？ ……何のこと？」

ティースはゆっくりと顔を上げる。

「俺は……デビルバスターになりたい」

シーラはさらに困惑の表情を浮かべた。

「どうして？　だってお前は——」

「お金のこととか、お前のこととか、それとは別なんだ。……罪のない人を苦しませる魔が、どうしても許せないと思うようになった。傷つけられる人の苦しみも、残された人の悲しみも、どっちも理解できるようになったから」

「……」

「いや……本当はお前が魔にさらわれたあのときから、そうだったのかも」

シーラは視線を横に逸らした。

それがどんな心境だったのかティースにはわからない。苛々しているようにも見えたし、困っているようにも見えた。

そんな彼女に向かって、ティースはもう一度頭を下げる。

「……悪い。俺、本当はお前のことを一番に考えてやるつもりだった。お前の望みを叶えてやるのが俺の使命だと思ってた。でも……今回だけは、俺のわがままを許してくれ。その代わり……それ以外だったら、俺に出来る限りお前の望みを叶えてやるから」

「……」

「頼む」

シーラは何も答えなかった。視線もティースに向けようとはせず、眉を曇らせたまま。

……沈黙が下りた。

すぐそばの執務室からも物音一つ聞こえない。あるいはこの会話は、中のファナやアオイにも聞こえているのかもしれない。

「……ティース」

ようやくシーラが口を開いた。

頭を下げたままのティースに、その表情を見ることはできない。だが、その声色から大体想像はできた。

きつとここ最近、彼が見たこともないような表情だ。

「聞いたわ。仲間が……死んだのでしょうか？」

「……ああ」

「辛くはないの？ お前だって、そんな怪我をして……」

眉をひそめ、シーラはティースの右肩へと視線を止める。そこはまだがっちり固定されていて、全く動かすことのできない状態だった。

「そりゃ辛いけど、でも……それ以上に、なんていうか……」

ティースはそう答えながら、ようやくゆっくりと顔を上げる。

ようやく目の当たりにしたシーラの表情は、やはり戸惑いの色に染まっていた。

「……理由はきちんと言葉にできないけど、でも今回のことがあって、それでどうしてもやり遂げたいと感じたんだ」

「私が学園を辞めても？」

「それは……多分……」

「多分？」

不審そうな顔のシーラに、ティースは慌てて付け加えた。

「そ、そんなの実際にそうなってみないとわかんないだろ。お前が学園を辞めてどうするかにもよるしさあ……」

「……ふう」

シーラは呆れ顔でため息を吐いた。

「つまりお前は私を学園に通わせたいとか、お前がデビルバスターになるとかだけじゃなく……どうしても私を学園に通わせて、その上でお前がデビルバスターを目指すって形にしたいわけね？」

「そ、そうなるかな……」

確かにその言葉が、ティースの気持ちを簡潔にそして正確に表していた。

ティース自身、自分の中に産まれた決意を大事にしたいという想いは強い。が、それと同じぐらいシーラに対する情熱も今まで同様に強かったのだ。

そして……再び沈黙が訪れた。

シーラは何事か考えるように再び視線を横に逸らし、ティースは黙って彼女の答えを待っている。

時間が止まったようにも思える、長い長い沈黙だった。そして、ようやくシーラが口を開く。

「……そうね」

何事かを決心したような顔で、だけど口調だけはいつものように素っ気ないまま。

「そこまで言うのなら、好きにすればいいわ」

ティースの表情が輝いた。

「じゃ、じゃあ、学園を辞めないでくれる——」

「なにを言っているの？」

「……え？」

ドキッとして表情を硬くしたティースだったが、シーラの口から出た言葉は彼の不安とは全く逆のものだった。

「当たり前でしょう。理由もないのに、どうして辞めなきゃならないのよ」

「えっ？」

ティースは当然のごとく戸惑う。

「い、いやだってお前さっき——」

「それと……さっき、お前に出来ることなら、何でも私の願いを叶えてくれると言っていたわね、確か」

「……」

（な……なんなんだ……？）

ひどく理不尽な——彼女にとって都合のいい態度にティースは啞然とした。

（からかわれたのか？ それとも仕組まれたのか……？）

シーラはそんな彼の心境を悟ったのか、小さく鼻を鳴らして、

「心配しなくても、お前に過度の期待はしていないわ。私の願いはたったの三つよ」

「三つ……」

それが多いか少ないかは微妙なところだったが、少なくともそれでティースの望みが叶うのであれば安いものだ——理不尽ではあったが——少なくとも彼はそう思った。

「わかったよ……じゃあ三つだ」

「一つ目」

ティースの返事に、シーラは即座に言った。

「お前のその怪我が治ってからでいいから、ここでの食事はなるべく食堂を利用するようにしなさい」

「食堂？」

ティースは早速首をかしげた。

もちろん彼も、ファナからここの食事のシステムについては聞いたことがある。が、今までは特訓でヘロヘロだったこともあり、わざわざ食堂に行って食事をするようなことはなかったのだ。

とはいえ、意図はわからないまでも、その程度のことなら彼にとって何の困難でもない。

「ああ、わかった。そうするよ」

シーラは頷いて

「じゃあ二つ目。……私は良く知らないけど、ディバーナ・ロウには情報部隊のようなものが存在してるはずね？」

「え……ああ。“影裏”って部隊なんだけど……」

「じゃあそいつらに言うておくこと。……情報はもっと迅速、かつ正確に伝えるようになさいと」

「はあ……」

またシーラには直接関係がなさそうな要求で、これにもティースは首をかしげざるを得なかった。

「伝わるかどうかはわからないけど……一応、言うておくよ」

「三つ目」

最後の願いのところで、シーラが初めて言葉を切った。

「どうやらこれが本命らしいと気付き、ティースもゴクリと喉を鳴らす。」

（無茶な要求じゃなきゃいいけど……）

内心は不安でいっぱいだったが、それを表に出さないように彼は尋ねた。

「最後に……なんだい？」

「一年以内——」

もう一度言葉を切って、それからシーラは続ける。

「一年以内に私がお前にある要求をするわ。……お前は決して、それを断ってはいけない」

「……ま、待った！」

これにはさすがのティースも無条件に頷けなかった。

シーラはあからさまに不満そうに眉をひそめて、

「なによ」

「それって……つまり願いを先延ばしにするってことか？」

「ええ、簡単に言えばそういうことになるわね。……ただ、それは今すぐに実現できないことだからよ。内容はもう決まってる。変わることはないわ」

ティースは彼女の表情を窺うようにして、

「……それは俺に実現可能な願い事なんだよな？」

「おそらく可能ね。だってお前は何もしなくてもいいのだから。ただ、拒否することさえしなければ」

「……」

ティースにとって、その内容を予測することはあまりにも難解だった。

「な、なんかものすごく怖いんだけど……」

「心配しなくても、一生独身で過ごせとか呼吸をするとか、そういう理不尽な願いじゃないわ」

「でもわざわざ約束させるってことは、俺が嫌がりそうな願いなんだろう？」

シーラははっきりと答える。

「ええ。嫌がるでしょうね」

「せめてヒントとか……」

さらに後込みする素振りのティースに、シーラは目を細め、有無を言わせぬ口調で言い放った。

「約束なさい、ティース」

「う……」

一応、躊躇ってはみたものの……どっちにしろ、彼の希望を通すためには、結局頷くしかないわけで。

（いくらなんでも、そんなひどいことは言い出さない……よな）
そんなひどく曖昧な希望的観測のもと、ティースは決心した。

「……わかった。約束する」

シーラは満足そうに頷くと、

「ええ。間違いなく約束したわよ、ティース。……それと」
ゆつくりとティースに背を向けた。

「当たり前だけれど、約束を果たす前に死ぬのは絶対に許さないから」

「そ、そんなの許さないって言われても――」

その言葉を遮るように、彼女は肩越しに彼を振り返ると、

「地獄まで追いかけてでも、必ずひどい目に合わせるわ。覚えておきなさい」

「……」

本気の目だ、とティースは思った。

思わず怯んでしまった彼は何も言い返せず……いや。

「でも、もしかしたら天国だったりするかも……」

「……」

「……なんでもない」

そしてティースの引きつった笑みは、すぐさまため息へと変わるのだった。

（妙な約束させられちゃったなあ……）

遠ざかっていくシーラの後ろ姿に心の中でぼやきながら、それでもひとまずのところ、自らの希望が満たされたことに安堵して。

（さて、頑張らなきゃ、な——）

その誓いは、彼が本当の意味でデビルバスターへの道を一歩踏み出した証でもあった。

その7『そして、更なる試練』

ネービスの街は八月に入って猛暑が続いていた。大陸でも比較的北側に位置するネービスですらこの状態なのだから、南方ではおそらく記録的な暑さになっているに違いない。

街行く人々も薄手の服が目立ち、外で仕事をする者たちの中には上半身裸で働く者たちも少なくはない。

その暑さはミューティレイク邸の食堂もまた、例外ではなく――「……ごちそうさま」

カタンとティースの隣りで席を立った少女は、早くも首筋にうっすらと汗を浮かばせ、頭のとっぺん近くで縛った長い髪を邪魔くさそうに揺らせていた。

「シーラ？　もういいのか？」

「食欲なんてないわよ……」

手を振って食堂から立ち去っていくシーラ。

（ま、そりゃあなあ……）

彼女の気持ちはティースにも充分に理解できた。というより彼自身、体力を維持するために無理矢理詰め込んでいるという状態であり、少なくとも食が進む状態とは言い難いのである。

「シーラさん、相当参っておられるようですね」

「……みたいだね」

食堂の長テーブル、その短い辺のところに座っているのは屋敷の主人、ファナllミューティレイクだ。今日は珍しくアオイの姿はなく、彼女が一番近くは空席となっている。

屋敷に来てから約二ヶ月。

ティースは相変わらず屋敷の人間とはあまり交流が――その余裕が――なかったが、一ヶ月前、シーラとの約束に従って毎朝の食事をここで採るようになってから、同じようにここで食事を採る面々とは知り合うことができていた。

（でも考えてみりゃ、最初からこうしていればシーラとだってもつと話ができたんだよなあ）

主を無くした隣の席を眺めながら、ティースはそんな風に考えていた。

実際のところ彼のその認識には根本的な間違いがあるのだが、とにかく、こうすることによってシーラとの関係も以前より良くなっているように思えたし、彼にとっては良いことづくめだったのである。

さて、シーラが立ち去ったその場にはファナ以外にもう一人、ティースが新たに知り合った――毎日、毎朝、この食堂で食事を採っている人物がいた。

「でも確かにこの暑さは殺人級です……はあ、食欲もなくなりますし、干物になってしまいそうです」

そんな言葉に、ティースはちよつと眉をひそめて、

「セシル……君、言ってることとやってることが違わくないか……?」

「?」

不思議そうな少女――セシルに、ティースはその手元を指さして、「いや、俺の目にはとてつもなく食欲旺盛に見えるんだけど……」

「――二十点」

「え?」

「ティースさん、赤点です」

「いや、だからなにが……」

フォークとスプーンを置いたセシルが顔を上げると、綺麗な栗色のセミロングが揺れた。

その顔立ちはまだ幼いが、かなりの見目麗しい少女である。とはいえシーラのように“美しい”というよりはむしろ“可愛らしい”と言った方が正確だろうか。

彼女は人差し指を立て、そしてまるで生徒に言い聞かせる教師のような口調で言った。

「女の子に対して、食欲旺盛とか食べ過ぎとか太ってきたとか言っ
てはいけないのです。特に年頃の女の子はそういうことを非常に良
く気にするものなのですよ——……くすん」

最後は何の前触れもなく急にテンションが下がって、セシルはガ
ツクリと項垂れた。

そんな彼女の言葉にティースは苦笑しながら手を振って、

「いや、太ってきたなんて一言も言っていないって……それどころか、
君の場合はもう少し食べ——いや食べてはいるけど——じゃなくて、
もっと肉を付けた方が……」

「そ、そうですね……」

その言葉にセシルは顔をちょっとだけ赤くして、自分の体を見下
ろす仕草をした。

「やっぱりティースさんもそう思いますよね……」

一瞬、彼女が顔を赤くした理由に気付かなかったティースだった
が、

(……って、そういう意味かっ!?)

ようやく気付いて、思いつき首を横に振る。

「い、いやいやいや! そんな話はしてな——」

「で、でも、年齢的にまだまだ成長の余地はあるんじゃないかと思
ったりしてるのですけど……アクアさんとまでは言わなくても、シ
ーラさんぐらいには——」

「だからしてないって、そんな話!」

そんな二人の会話に、ファナがクスクスと笑い始める。

と、同時に、セシルもティースの慌てぶりを見て少しおかしそ
うにしながら、

「あはは、本気にしないでください。途中から冗談です」

「あ、あのなあ……ったく、大人をからかうもんじゃないぞ」

ちよっと慚然とした顔をしながら、それでもホッと安堵のため息
をついたティース。

……幸か不幸か、どうやら彼は“途中までは冗談じゃなかった”

という事実気付かなかったらしい。

セシルはニツコリと可愛らしい笑顔を浮かべて、

「ごめんなさい。ティースさんってとても話しやすいので、つい」

セシル——本名セシリア・レイルーンは、この屋敷に住む十二歳……一月後の誕生日を迎えて十三歳になる少女で、この住人曰く“屋敷のアイドル”だ。先ほども言ったように、いかにも“女の子”という感じの可愛らしい顔の作りに、パツチリとした大きく穏やかな瞳。栗色でセミロングの髪はシーラほどの美しさはないが、触れてもまるで抵抗感を感じないほどにサラサラだった。

性格はたった今見てもらったように基本的には明るい。が、普通の人と比べると少々ベクトルのズレた反応を返してくることがあり、ティースも会話をしていた戸惑うことばかりであった。

（ファナさんという勝負だよな……）

「？」

注目されて不思議そうな顔をするファナにティースは苦笑しながら、これがいわゆる“類友”というものか、などと思うのだった。さて。

彼がそんな彼女とこうして仲良くなった理由には、実はここで毎日朝食を採っているという以外に、もう一つある。

「セシル。そろそろ行くわ」

「あ、はい。……ごちそうさまです」

どうやら学園に行く準備を整えてきたらしいシーラが食堂に顔を出すと、ちょうど食事を終えたセシルが空の食器に向かって手を合わせた。そして彼女はすでに用意してあった鞆を片手にシーラの元へ駆けていく。

……そう。実はこのセシルという少女、シーラと同じサンタニア学園に通う学徒であり、しかも同じ薬草学科の一回生……つまりシーラにとっては二学年後輩ということになるのである。つまり、非常にシーラとの繋がりが深い少女なのだ。

（なんだか、ああいうシーラを見るのは新鮮だよな……）

見ようによつては姉妹のようにも思える二人をそのまま見送ろうとしたティース。

だが、ふと思いついて、

「ああ、そうだ。せっかくだから途中まで見送るよ。……ごちそうさま」

「なに？」

怪訝そうなシーラの声。だが、特に嫌がっている素振りはなかった。

……決してティースの妄想ではなく、以前では考えられないほど彼女との関係は改善されつつあった。今では、廊下で話しかけても無視されることはなかったし、向こうから声をかけてくることも珍しくはない。

彼はこうして一緒に食事を採るようになったおかげだと信じていたが、実際のところ彼女の中でどういう心境の変化があったのかは謎のままである。

「俺もどうせ外に出るんだ。せっかくだから途中まで……いいかな？」

「私は別に構わないけれど」

シーラがチラッとセシルを見ると、セシルは何故か手を合わせてティースの方を拝んでいた。

「感謝感激雨霰です」

「そ、そこまでされると逆に気が引けるなあ」

「ううん、お見送りはとても嬉しいことです。一日の元気の源です」

「そんな大げさな……」

ティースは照れの入り交じった表情を浮かべ、シーラはそれを見てため息をつく。

「どうせ“ついで”なのだから、そいつに感謝する必要などないわ、セシル」

そんな冷たい物言いはあくまで元来のもので、これはもちろん以前と変わらない。

さて……そんなこんなでティースたち三人が外へ出ると、そこには、ほぼ毎朝繰り広げられる不思議な光景がある。

「おはよう、マルスっ」

外に出るなりセシルはピタリと足を止め、それからニツコリと微笑んだ。

端から見てる者は一瞬不思議に思うだろう。何故なら、彼女の周囲には人の姿などなく、もちろん彼女に挨拶を返す人物もいなかったからだ。

ただその代わり、そこ——その足下にいたのは、無言で彼女を見上げる二つの瞳と、銀色の体毛に包まれた体。

一瞬、犬かとも思うのだが、違う。鋭い牙の存在を否応なしに想像させる、大きくせり出した口……それは犬ではなく、紛れもなく“狼”だ。

ティースなどは敷地内で飼われている(?)この“マルス”という名の狼に最初はビックリしたもののだが、どうやら彼は——オスらしい——このセシルによく懐いているらしく、彼女の周りで見かけることが多かった。

「今日も元氣そうだね、マルス」

セシルがそう言って軽く頭を撫でてやると、マルスと呼ばれた銀色の狼は呼応したかのように、ゆっくりと目を閉じて体を彼女の足に擦り付ける。

そんな彼女たちを取り巻くように、黒い体毛の犬たち——こちらは正真正銘の犬だ——が徐々に集まってきていた。

その数、およそ十数匹。

「おはよう。みんなも元氣そう——あれ? イオタは元氣なさそうだね。夜更かしでもしたのかな?」

セシルは一匹一匹を見つめながら首をかしげたり笑いかけてみせたりしている。

——見るからに獰猛そうな番犬たちが、集団で彼女に尻尾を振る姿はかなり異様だった。

そしてそれを少し離れた場所から眺めているティースとシーラ。

「……今日も盛大な見送りね」

「なにしろアイドルだからなあ……」

感心とも呆れともつかない感想を漏らすティースの視線の先で、“屋敷の（番犬たちの）アイドル”セシリア・レイルーンはそうしていつものお見送りの儀式を済ませるのだった。

シーラたちを見送った後、ティースが足を向けたのはミューティレイクの敷地内、その西側だった。相変わらずの広大な敷地では庭師が手入れをしていたり、使用人たちが花の世話をしていたり……微かに遠くで聞こえる気合の入ったかけ声は、ディバーナ・カノンの面々が早速稽古を始めた音だろうか。

（そうだよな……朝食後、いつもああやって軽い稽古をやってたんだよな）

——と、そんな他人顔をしているティースを不思議に思うかもしれないが、実をいうと彼は、昨日をもってディバーナ・カノンを除隊となった。

もちろん悪さをしたわけではなく、あくまで予定通りのことである。

（あれから一ヶ月か……）

あの出来事以来、ティースは二度の任務をこなした。どちらも低級な魔の退治ばかりで、それでも隊長のレアスは最後までティースに剣を抜かせなかった。

曰く、『てめえはまだそのレベルじゃねえ』とのことである。

（……一ヶ月かそこで認められようっていうのも確かに無理だけどさあ）

とはいえティース自身は、この一ヶ月に多少の手応えを感じていた。事実、ヴィヴィアンとの稽古では星をほぼ五分近くにまで持ってきていたし——もちろん彼が不得手な剣を使っているというハンデはあるにせよ——間違いなく、確実に成長していたのである。

(でもホント、変わった部隊だったよなあ……)
思い返す。

子供のくせに妙に偉そうでしかも鬼のように強い隊長のレアス。相変わらず淑女のように振る舞いながら時折“地”が顔を出してしまふフローラ。語るまでもなく相変わらずあんな調子のヴィヴィアン。

それと一ヶ月前、新たに入隊したガードナー||ロドリゲスという名の寡黙な巨漢が、実は寡黙なのではなく重度の吃音だと判明したのはつい最近のことだった。

そして――

(……よし!)

肩に力を入れ直し、ティースは目的地へと足を進めていく。

向かった先は今日から彼がお世話になる第一隊“ディバーナ・フアントム”の詰め所。かの女性デビルバスター、アクア||ルビナートが統率する部隊である。

(アクアさんかぁ……レアス隊長――じゃなくて、レアスくんよりは色々と話しやすそうだけど……)

一ヶ月前、カノンの詰め所を訪れたときと同じように期待と不安感をその胸に同居させながら、ティースはミューティレイクの敷地を横切っていく。

その先に、とんでもない光景が待ち受けているとも知らずに――

「ティースさん、今日からファントムだってね」

別館の執務室には朝食を終えたファナトリディアの姿があった。相変わらぬ分厚い本を手にしたリディアは専用の席に腰を下ろし、持っていた本を机の端に置くと、早速、目の前に積まれた紙の山を一つずつ手に取っていく。

そうしながら、彼女の言葉は休まることもなかった。

「ファントムの面々と並んできると想像すると、なんか笑えるなあ」
「何故ですか？」

ファナの手元にもいくつかの書類が存在していたが、こちらはリディアと違って手際よく、という感じではなく、彼女らしく非常にのんびりとした手付きだった。が、それでも仕事の速さでいえばリディアとそう大差なく、それは見た目にそぐわない彼女の頭の回転の速さを証明するものである。

「だってあの図体だよ。アクアさんと比べたって二十センチ以上デカイんじゃない？」

「なかなかお似合いだと思いますわ」

「……何がお似合いなのかわかんないけど」

とはいえ、さすがにリディアは彼女のこの程度の言動で戸惑ったりはしない。

「そういやファナさん聞いた？ ……あのアベイ族とか名乗った地の上位魔、やっぱり“例のヤツら”の一味だったみたいだって」

その言葉に、穏やかだったファナの表情がほんの一瞬だけ強ばった。そしてすぐに、ゆっくりと息を吐くようにして、

「やはりそうでしたか……」

「本格的に動いた気配はないけど、少し警戒した方がいいかもね。この前のアレだって、今考えてみたらウチを挑発するのが目的だったのかもしれないし。ここも少し警戒を強めた方がいいかも」

ファナは手の動きを止めてゆっくりと頷いた。

「わかりましたわ。ネスティアスの方々にも警戒を強化するようにお願いしておくことにします」

「あと二部隊以上は絶対にここに残すようにした方がいいよ。いつ襲撃があるかわかったものじゃないから。いつかみたいに——あ」
リディアは珍しくちよつと慌てたような顔をして、それから視線を落とした。

「……ゴメン、ファナさん」

だが、ファナはニツコリと微笑んで、

「構いませんわ。それは忘れてはいけないことですもの」

「……」

「同じことを繰り返さないために、みなさん頑張ってくださいませわ」

まるで陰を感じさせない笑顔と口調に、リディアは少しだけ横に視線を逸らしたが、すぐに表情を変え明るい言葉を出す。

「……ファナさんって見かけによらず強いよね」

リディアの言葉にファナは少しだけおかしそうに微笑んで、それから視線をゆっくりと自らの机に移動させると、小さく首を振った。その瞳に強い光を湛えながら。

「そんなことはありませんわ。私はただ、お父様の意志を継いだけですよ――」

アクアールビナートという人物に対し、ティースが抱いていた印象というのはかなり両極端な二つのイメージだった。

まるで無邪気な大きな子供のようなイメージと。

そして他人を包み込む母親のようなイメージと。

ただまあ、どちらにしても彼の抱くそれは間違いなく“好印象”だ。シーラを助けてもらったということを別にしても。

「……だからこそ。」

「え？」

その扉を開いたとき、目の前に広がった光景を見たティースは、心臓が止まるほどの衝撃を受けたのだ。

ディバーナ・ファントムの詰め所は、鍛錬場のような作りのものとは根本から違っており、まるで一つの一軒家のような作りだった。

玄関の扉をノックしても反応はなく――呼び鈴があったのだがティースは気付かなかった――中に入ると正面と右手に廊下が続いて

いる。内装はおそらくアクアの趣味なのだろう、少々女性っぽい雰囲気にも包まれていた。

そしてティースが向かったのは、正面の廊下、その先にあった扉。構造からしても、おそらくその先がこの建物を中心……普通の家で言うところの“居間”だろうと考えたからだ。

そして扉を開けたティースが目にしたものは――

「な――っ!？」

やはり一軒家の居間を彷彿とさせるその空間。簡素なソファらしきものが一つ、テーブルがあって中央には絨毯が敷かれている。

そして……絨毯が敷かれていない部屋の隅。

そこに人が倒れていた。

――倒れていた？

いや、違う。

床に撒き散らされた赤い液体。

うつ伏せになったその人物の背中に生えた、普通では絶対にあり得ないもの。

剣の、柄。

しかも、倒れているその人物は――

「アクア……さん……?」

ティースの言葉は掠れて声になっていなかった。

（なんだ……これ――）

あまりのことに、脳が考えることを拒否する。だがそこにいるのは紛れもなく、ディバーナ・ファントムの隊長、アクアールビナートだった。

（そんな……馬鹿な……）

そしてようやくティースの脳が僅かに思考能力を取り戻す。

争ったような痕跡は見当たらない。辺りには誰も見当たらない。

――彼が考えたのはそこまでだった。

「アクアさんっ!!」

床を蹴る。

おびただしい血にまみれ、ピクリとも動かないアクアの元へ向かって――

「待ちな」

「!？」

だが、ティースの体はすんでのところで何者かに引き留められた。その人物はいつの間近付いていたのか……ティースの背後に立ち、その肩を掴んだままアクアの遺体を見つめている。

「君は――」

ティースがそれほど焦らなかったのは、その人物――その女性を、これまでに屋敷で何度か見かけたことがあるからだ。

まるで男の子のような短い髪に、我の強そうな吊り気味の目。見た目、十七、八歳だろうが、背はリディアと同じぐらいしかなかった。肌はネービスの人間にしては珍しく少々浅黒い。

「……あんた、アレだろ？ 今日からこの部隊に入ることになる奴だよな？」

「ああ……けど、今はそれどころじゃ！」

「待ってって言ってんだろ」

それでも女性はティースの肩を離さない。

「どうして――」

そしてその後の展開に、ティースはさらに驚いて言葉を止めた。

「……え？」

その後ろからもう一人、女性が姿を現したのだ。いや――それだけなら大して驚くべきことではない。

（目の……錯覚？）

問題は新たに現れた女性が、ティースの肩を掴んだ女性と“全く同じ顔”をしていたということである。

ティースが一瞬、夢でも見ているのかと思ったのは無理もない。

「……」

新たに現れた女性は無言のまま、無造作にアクアの遺体へと近付いていく。

そして――

(な……?)

突然、そばにあったスリッパを手にとると、それを振りかぶった。

「な……なにを――!」

ティースが驚く暇もなく。

パコオオオオオンッ!!!!

「……いったあああああゝゝゝゝゝっ!!!!」

「へ?」

それが後頭部に振り下ろされるなり、アクアの遺体は痛みに苦しみながら床を転がっ……いや、もう言い換えた方がいいだろう。

遺体の“フリ”をしていたアクアは、スリッパの一撃を喰らって悶え苦しんでいた。

ポツリと眩きが聞こえる。

「つたく、相変わらずガキみてえだな、アクア姉は……」

「??」

ティースにはいまいち状況が飲み込めていなかった。

「ってなわけで、あたしはダリア。ダリア〓キャロルだ。で、そっちのが――」

「ドロシー〓キャロル……」

もう一人がボソリと答える。

「見りゃわかると思うけど、双子だ。一応そっちが姉貴……って、なんだよ、そんなに珍しいのか?」

「いや、っていうか……」

ティースはそんな二人の顔を交互に見て――よく見ると姉のドロシーと名乗った方は右目の下に小さな傷跡があり、肌の浅黒さもダリアより少々薄い。なんとか見分けることは出来そうだった。

「その、つまり、君たちはこのファントムの……?」

「ああ。あたしもドロシーもファントムの一員さ。戦闘要員ってやつ」

「な、なるほど……」

ティースが以前見たときとは違い、ドロシーもダリアも使用人の服ではなく薄手で袖のないシャツにホットパンツ姿だ。この暑さだから……とはいえ、このネービスではここまで肌を露出させる女性はいくつかない。ティースが少々目のやり場に困ったのも仕方ないところだった。

（でもまさか、女の人があくアさんだけじゃないとは……）

「で、あたしが隊長の――」

「自己紹介はいいから、あんたは黙って掃除してろよ」

「……なんか損した気分。せつかくみんなを驚かそうと思ったのに、全然驚かないんだもの」

ごしごしと床に付いた血糊を拭きながら、あくアは口を尖らせている。

そんな彼女もまた、背中に血糊がついたままのシャツの袖を肩口までまくり上げ、下はやはり他の二人と同じホットパンツだ。

（いや、俺はかなり驚いたけど……）

なんとなしに視線を上の方に逸らしながら、ティースは彼女らの会話を聞いていた。

「あんたの悪戯はワンパターンすぎんだよ。まったく、いい歳こいてなに考えてんだか」

「あ、ちよつと聞き捨てならないなあ、それ。あたしはまだ若――」

「つい先日、二十四歳になったばかりだと思ったけどな？」

「……なっていない！ なっていないってば――！」

現実逃避をするあくアに、ドロシーがボソツと呟いた。

「最近、肌がカサカサしてきた……」

「いやあああああつ！ 言わないでえええええつ――！」

まるで断末魔の叫びのようだ。

（……やっぱり不安になってきたぞ）

何故か既視感のようなものを感じつつ、それでも一応ティースは社交辞令替わりにフォローすることにした。

「あの、俺はアクアさんってすぐキレイだし、別にそんなに歳なんて気にしなくてもいいと思いますけど……」

途端、視界の隅で、ダリアの顔に“あちゃあ……”という表情が浮かぶのが見えた。

その意味を考える間もなく、

「そう思う？ ティースくん、ホントにそう思う!？」

「うわあっ!」

いきなりドアップで迫ってきたアクアに、ティースはのけぞった。その距離、僅か数センチ。彼の頭の中で警報が鳴り響いたが、ソファに座っていたのが仇となり、そこから身動きが取れない。

仕方なくティースは目一杯逃げ腰になりながら、

「そ、そう思います。思いますから……その、少し離れてくださー」

だが、アクアはその距離を保ったまま——いや、さらにティースに迫ってくると、まるで祈るように両手を組み、目をキラキラ輝かせながら言った。

「なら、結婚して!!」

「な、なんでいきなりそういう話になるんですかっ!」

あまりにも唐突だった。

「年上は嫌!？」 でもあたし、これでもかなりお肌の手入れには気を遣ってるし、心はまだまだ純真無垢な少女のつもりだし!」

後者はある意味——純真無垢かどうかはともかく——その通りかなど、ティースは密かにそう思いつつ、

「と、とにかく! いきなりそういう無茶な話はヤメてくださいって!」

「……うう……わかったわよ」

渋々、といった様子でアクアがやっと引き下がり、ティースはホッと胸をなで下ろした。

と、そこへ、一人掛けの椅子で脚を組んだダリアが呆れ顔で口を挟む。

「なんだ、アクア姉。こないだのなんとかつー優男にはもうフラれたのかよ？」

ティースから離れたアクアは、ペタリと床に腰を下ろした体勢で振り返ると、

「……だってあの人、あたしがデビルバスターだってわかったら、急に態度がよそよそしくなるんだもの」

「引かれるに決まってるだろ、女だてらにデビルバスターだなんて。娼婦だって告白する方がまだなんぼかマシだぜ」

「実際そうなんだから、しょうがないじゃない」

「だからそういうことはもっと仲良くなってから告白すりゃいいんだよ。付き合うか付き合わないかのうちに言や、そりゃ上手くいくなわけねえじゃんか」

そんなダリアの言葉に反論できず、アクアはちよつとすねたような顔をして、

「いいの。そのうちきつと、私のことを本当に理解してくれる王子様が現れるんだから」

「……俺の方を見て言わないでください」

ティースが思わず突っ込んだのは言うまでもない。

（しかし……なあ）

このアクアという人物、ティースが見てもかなり女性としての魅力に溢れている。デビルバスターとはいっても背は女性の平均を若干上回る程度でデカすぎないし、ルックスだって普通に美人の部類に入るだろう。スタイルだってかなりいい。見た目だけならイイ男を何人も従えて歩いててもおかしくないぐらいである。

そんな彼女が、どうやら彼氏ができなくて困っているというのだから、世の中というのはわからないものだ、とティースはそう思った。

（性格だって悪くないと思うんだけど……何か俺の知らない欠点で

もあるのかなあ)

そんなことを考えつつ、ひとまず話題を変えることにした。

「そういやドロシーさんとダリアさんの他に――」

「いい!？」

「え？」

ティースの発言に、ダリアはいきなり肩を竦めて両腕を押さえる
と、

「おいおい、やめてくれってのオ。明らかに年下ならともかく、あんたみたいな男に“さん”付けて呼ばれちゃ寒気がして仕方ねえよ」

「あ、な、なるほど……」

そういう人もいてもおかしくないか、と考え、ティースは言い直すことにした。

「じゃあ、ドロシーさんにダリア？」

「つーか、なんであたしだけ呼び捨てにすんだよ」

「いや、だってドロシーさんは何も言っていないし……」

それにティースが見たところ、このちょっと蓮っ葉な感じのダリアと違って、姉のドロシーは少々大人しいような印象があって――

「オレも呼び捨てにしてい……」

「……」

(……オレ?)

どうやらそうでもないようだった。

「はあ、やっと終わったわ。……で、ティースくん? なにか質問があつたみたいね?」

ようやく掃除を終えて腰をトントンと叩きながら体を起こしたアクアが――その仕草を年寄り臭いと思ったことは絶対に秘密だが――ティースの言葉を促す。

「ええ。あの、このファントムにはフローラさんみたいな人はいないのかなって」

ディバーナ・カノンには医事担当のフローラがいた。が、このメンツを見回したところ、どうやらそういった役割の人物はいないよ

うに思えたのである。

だが、

「まさか。ちゃんというわよ。ただ、今日は“仕事”の関係でちょっと遅れて来るの。……ああ、その子、ティースくんも良く知ってる子よ」

「え？」

「ま、それについてはあとのお・た・の・し・み。まずは改めて自己紹介しましょっか。……まずそっちの二人は聞いたと思うけど戦闘補助の二人で、ドロシーとダリア。カノンで言うところのヴィヴィアンくんとサイラ……ガードナーくんね。歳はティースくんよりちょうど一つ下かな？」

「あ、年下だったのか」

ティースより一つ下ということは十七歳だ。

（やっぱ二人ともヴィヴィアンぐらい強いのかなあ……）

一瞬、そんな彼女らにこてんぱんにされる自分の姿が脳裏に浮かび、彼の心は少々複雑だった。

「で、あたしが隊長のアクアールビナート。……通称、男の心を盗む“怪盗デビルバスター”よ」

「はあ」

何とも言い難い表情のティース。そこへダリアとドロシーの突っ込みが入る。

「アクア姉のそれは通称じゃなくて自称だろ」

「しかも恥ずかしい……」

「なんで！？ 恥ずかしくないってば！」

「……」

ティースも恥ずかしいと思ったが、それは一応口にしないことにした。

アクアも気を取り直した様子で咳払いすると、

「……で、うちのチームについてはアオイくんからある程度聞いていると思うんだけど」

「ええ。なんだかちよつと特殊な任務に就くことがあるって……」
アクアは頷く。

「そ。まあ特殊って言っても、本当に専門的なことはやらないんだけどね。……あたしたちがデビルバスターだと知られない方がいい、そんな状況での任務がたまにあるの」

「つまり、隠密っぽい感じですか？」

「そう、そんな感じ。……ティースくん。先入観を捨ててあたしたちを見て？」

「？」

「“魔”を追いかけているように見える？」

「……」

ティースは改めて三人を見つめた。

腰に手を当てて妖艶な笑みのアクア、興味のなさそうな顔でそっぽを向いているドロシー、そしていかにも私の強そうなダリア……正直、女性にしては少々“手強そう”なイメージは感じるものの、確かに“戦う者たち”という雰囲気ではない。穿った見方をしたところでせいぜい、少々育ちの悪い不良少女という程度だ。

……いや、それはどっちかというとアクアではなく、他の二人のイメージそのままだったりもするのだが。

(ミューティレイクの服を着てるときは、それなりに見えたんだけどなあ)

イメージの力は偉大だ、などとティースは思いつつ、

「見えないですね、確かに」

「でしょ？ どう見ても麗しい乙女のトリオにしか見えないでしょ？」

「……それは無理が——いや」

思わず本音が出そうになった自らの口を塞ぎ、ティースは言い直す。

「見える……かも」

「無理しなくていいんだぜ、ティース」

やれやれと手を振ってダリアが言った。

「あたしだって恥ずかしいっつーの。あたしたちのどが“乙女”だってんだ」

ボソツとドロシーが付け足す。

「オレたちは外見的に無理。姐さんは年齢的に無理……」

「……ちよつとドロシー！ 諦めたら人生そこで終わりなんだから！ 一念岩をも通すって言うじゃない！」

「岩どころか分厚い鉄板だと思う……」

「……」

ドロシーの突っ込みはいちいち厳しかった。

「と、とにかく。大事なのはあたしたちがとてもデビルバスター部隊なんかには見えないってことなの。そうよね、ティースくん？」

「はぁ……」

しかしそれは確かにその通りで、

（それで“ファントム”か……）

ティースはなるほどと思った。最初は特に意味も考えなかったこのチーム名だが、よくよく考えてみれば、戦闘力に特化した“カノン（大砲）”、隠密性に特化した“ファントム（幻影）”、そしてどうやら総合力に特化しているらしい“ナイト（騎士）”と、それぞれにちゃんとした意味があったのだ。

しかし、ティースはふと考えた。

「でも……なんでそんなチームに俺が？」

「……」

「……」

「……」

三人とも黙ってしまった。どうやら答えられる人間は一人もいないらしい。

（なんだよ、そりゃ……）

だが、無理もない。ティースは背だって高いし、まあ童顔でイメージそのものは確かに“戦う者”っぽくはないが、そこそ目立つ

ので少なくとも隠密行動に向いているとは思えなかった。

「それは……アレだわ。心優しいファナちゃんが、何故か男に恵まれない乙女たちに愛の募金をしてくれたのよ！」

「はぁ」

適当に取り繕うアクアの言葉の意味はティースにはよくわからなかったが、それはつまり猛獣の檻に投げ込まれたエサと同義なのだろうか。

と、そこへダリアが口を挟む。

「つーか、恵まれてないのはアクア姉だけだろ」

途端、アクアは目を見開いて詰め寄った。

「ちよつとあなたいつの間に！？ おねーさんに報告もしないで――！」

「じゃなくて。あたしとドロシーはあんたみたいに飢えちゃいないってことだよ」

「……飢えてるだなんて、人聞き悪いわねえ」

と、そんな会話が延々と繰り返されていたところへ、詰め所の玄関から来訪者を告げる足音が聞こえてきた。

何の断りもなしに入ってきたことからして、どうやら残るもう一人のメンバーらしい。

「来たみたいね」

アクアも当然気付いたようだ、少し小走り気味に近付いてくる足音を振り返る。

もちろんティースも注目した。

（でも俺の知ってる人で、医療に通じていそうな人っていうと――）

「……あ、もしかしてマイルズさんじゃ？」

思いついて、ティースはそう言ってみた。

マイルズ……マイルズⅡカンバースは屋敷の主治医的存在だ。そのファミリーネームからもわかるように、フローラⅡカンバースの旦那である。お揃いの黒縁眼鏡がトレードマークで、後から知ったところによるとフローラの眼鏡は伊達眼鏡らしい。

だが、アクアは微笑んで、

「残念」

それと同時に扉が開いた。

「すみません！ 遅くなりましたっ！！」

「……え？」

その人物を見て、ティースの口はポカンと開いたままになった。

……それは確かに彼の知っている人物だ。

「フィ……フィリスっ!？」

そんなティースの反応に、アクアは思惑通りという顔で楽しそうだった。

「あ、ティース様。そういえば今日からでしたね」

子羊を思わせるクセっ毛を揺らし、ニコニコしながら深々と頭を下げたフィリス。

「ディバーナ・ファントムの医事担当、フィリスⅡディクターです。改めて、よろしく願います」

当然のごとくティースは困惑して、

「で、でも待ってくれよ。フィリスって、確かファナさんの侍女じゃ——」

「あら、知らなかったの、ティースくん？」

それにアクアが答える。

「デビルバスターとその候補生以外はみんな、屋敷での他の仕事を持っているの。ティースくんもドロシーやダリアが屋敷で働いてるのを見たことがあったでしょ？」

「そ……そういえば確かに……」

「あのビビくんだって普段はコックをやってるんだから」
「ヴィヴィアンがコックっ!？」

それがティースにとっては一番衝撃的な事実だった。

「……ていうか」

そしてさらに彼は、改めてメンバー全員を眺め、そして重大な問題に気付く。

「もしかして俺以外はみんな――」

うろたえるティースに、アクアはちよっとお茶目にウィンクしてみせると、

「ええ、良かったわね、ティースくん。まさにハーレム状態よ」

「……アクア姉以外はあんま色気のないメンツだけだな」

ダリアがそう付け加えたが、そのこと自体は彼女が言うほど問題ではなかった。

ティースにとってもっとも重大だったのは、

（……ハーレムどころか、針のむしろじゃないか……）
そう。忘れてはいけない。

彼は“女性アレルギー”なのである――

その1『“出逢い”は王道にて』

ティーサイトⅡアマルナは十八歳の健康的な男性だ。そりゃ少々痩せ形だったり若干猫背だったりというところはあるが、内面的には何の問題もない。

一部ではマゾヒストだとかホモセクシャルだとかいう風評も微かに流れていたが（その原因はどちらも一人の女性の存在故である）、少なくとも本人にはそういうケは一切なかった。

ちなみにそれはいわゆる女性の好みに関しても同じことである。将来、結婚するなら優しくて面倒見のいい女性がいいな、とか、できれば歳が近くて気の合う人がいいな、とか。まあ、彼の理想というのは総じてごく普通のものなのだ。

そしてもちろん健康的な男性であるから、綺麗な女性や可愛い女の子を見るのは――決して変な意味じゃなく――嫌いじゃなかったし、女性に囲まれることだって嫌なはずはない。

――そのはずなのだが。

学園都市ネービスの大貴族、ミューティレイク。大陸でも第二の実力を持つとされるこのネービスにおいてナンバー二の実力者であるこの家は、大陸全土で見ても有数の力を持つ名家だ。

ネービスの街の中央から少し西に存在するその屋敷は、敷地の一辺がキロ単位であろうかという広大な敷地を誇り、敷地内に存在する建物は細かいものを省いて十にも及ぶ。

使用人の数はこの敷地内で働く者だけで三桁、書庫の蔵書は七桁。その他、その力を示す数字は枚挙にいとまがない。

そしてそんなミューティレイク家だから、もちろん屋敷内に主治医を雇っていた。

「ほほう。なるほどねえ……」

マイルズⅡカンバースというのが彼の名前だ。年齢は二十五歳。十四歳でここネービスの学園に入学し、十七歳で正式な医師としての資格を取った後、紆余曲折あってここミューティレイクに籍を置くことになった。

いつも白衣を纏っており、黒縁眼鏡を中指でくいとやるのがクセだ。百八十センチ程度の長身。屋敷で彼と親しい人々からは“根の良い悪乗りマッドサイエンティスト”という、何とも本質のわかりにくい称号を得ている。

そして……八月も下旬を迎えようとしていたこの日、マイルズは彼の自室ともいえるべき医務室に一人の奇妙な患者を迎えていた。

「これは面白そうな被験体だ」

「全然面白くないですよ……」

その患者とは、言わずとしたティーサイトⅡアマルナー―ティースである。

……彼がこのミューティレイクの抱えるデビルバスター部隊“デイバーナ・ロウ”に所属するようになって約二ヶ月半。その第一隊“デイバーナ・ファントム”に新たに配属されて一週間が経とうとしている。

これまで医務室とは何の縁もなかったティースが、この一週間でここに“運び込まれる”ことになったのはこれで三度目のことであった。

そのいずれもマイルズの診断は貧血。だが、その原因が違ったりにあるのは明らかで。

というのも……このティースという人物、実に不思議な体質――“女性アレルギー”の持ち主なのである。

「しかし、それならそうと前のときに言えば良かったじゃないか」
そう言いながらも、マイルズの声はひどく弾んでいる。どうやら彼はこの奇病(?)についての興味が津々らしかった。

そんな医者の様子に、ベッドに横たわったティースはどことなく不安になりながら、

「できれば秘密にしときたかったです。だって、なんだか情けないでしょ」

「とはいえ、ファントムにいたんじゃないわけにもいかない、か」

「……」

そうなのだ。

彼の女性アレルギーというのはあくまで“触れられること”が発作の原因となっている。だから彼自身が気を付けていれば良かったし、実際、今までは病気について打ち明ける必要もなく、上手くやってきていたのだ。

だが、問題は彼が新たに所属することになったディバーナ・ファントムという部隊である。

（よりにもよって、俺以外のメンバーが全員女性だなんて……）
と、いうことなのだ。

「そろそろファントムの面々も気付いたんじゃないのかい？ どうやら君が気絶するのは、誰かが君に触れたときらしいって」

「いい加減気付いたでしょうね。……まあ“誰か”と言ったところで、俺が触れられるのはいつも同じ人ですけど……」

ティースはそう答えて、憂鬱な気分とため息を一緒に吐き出した。
「ああ、なるほど」

マイルズは得心がいったという顔で笑う。

「アクアくんのアレも病気みたいなもんだからなあ」

ディバーナ・ファントムの隊長——アクアールビナート。

外面は大人の女性としての魅力に溢れ、そのくせ内面は多分に子供っぽいという彼女は、現在恋人熱烈募集中の二十四歳だ。頭には二つのお団子を結び、比較的、肌の露出が多い服を好むが決して露骨なほどではなく、むしろ彼女の性格と相まって逆に健康的な感じさえするタイプだった。

そして彼女はファントム——幻影——の隊長だけあって、いつもまるで気配を感じさせない人物である。

それはいい。

それはいいのだが――

（あの人のスキンシップ好きはホントになんとかして欲しいよ……）
そうなのだ。このアクアという人物、相手が男だろうと女だろうと、子供だろうと大人だろうと関係なく、とにかく体に触れたがるのだ。それが肩を叩いたり頭に触れたりする程度ならともかく、ひどいときには何の前触れもなく抱きしめたりするのである。

もちろんそれが同性だったり子供だったりするならそれほど問題はない。が……それなりの年齢に達した男性だった場合はそうもいかない。

何しろ彼女は先ほども言ったように、外面は非常に女性的な魅力に溢れた人物だ。それを役得と感ぜられる人物なら――そばで恋人が見てたりしない限り――いいのだろうが、ティースはそういうタイプでは決してなく、ましてこういう病気持ちとなればなおさらのことである。

（一瞬触れるぐらいなら大丈夫なこともあるけど……抱きつかれたら百パーセントアウトだもんなあ……）

しかも気配もなく忍び寄ってくるのだから、ティースとしては対処のしようもなく……そして三度目の“奇襲”を受けたこの日、ついに耐えきれずに病氣のことを話す決意をしたのだった。

「でも、アクアくんも特別に大柄なわけじゃないし、これだけ長身の君に抱き付くのは大変だろうなあ」

マイルズはその光景を想像したのか、ティースの頭からつま先までを眺めながら苦笑する。

「それで……原因はわかりますか？」

だが、ティースの問いかけに、期待の色はまるで込められていない。

実際、彼は今まで何度もこの病氣について診察を受けたことがあった。……が、そのことごとくが“原因不明”、結論としては“精神的なものだろう”という、どうにも対処しようのない結果ばかり

だったからである。

「ふむ」

そしてコーヒーを啜ったマイルズの口から出たのも、やはり同じ言葉だった。

「ま、精神的なものじゃないかな、と」

「……そうですか」

項垂れかけたティースに、マイルズの言葉は続く。

「――そう思うのが普通だろうけどねえ」

「え？」

驚きに顔を上げたティースに、マイルズは口元に小さな笑みを浮かべながら、

「そんな結論は聞き飽きたって顔してるなあ。……そりゃま、そんな結論は医者じゃなくなたって出せる。君が聞きたいのはそんなことじゃないんだろう？」

「え……ええ」

「可能性としては考えられるものもある」

くいつと黒縁眼鏡を中指で持ち上げ、そしてマイルズはコーヒーカップを机の上に置いた。

一転、期待に染まったティースの視線を受けて、続ける。

「ティースくん。君は過去、女性にとってもなくひどいことをした記憶はないかい？」

「……え？ ひどいこと？」

「例えば貢ぐだけ貢がせという何股もかけた挙げ句に手酷く振ったとか」

「ま、まさか！」

ティースはブンブンと首と振って、

「俺がまさかそんなこと……だ、だいたい俺は二股どころか女の子とキスしたことだって――」

「いや、そこまで暴露しろとは言っていないよ」

「……！」

真っ赤になったティースに、マイルズは苦笑して、

「まあまあ、それは仕方ないよ。そんな病気を抱えていたんじゃない、ねえ。……ちなみに、その病気が発症した——それに気付いたのはいつのことだい？」

「え、えっと……そうだな。初めて気絶したのが……だから——」
ティースは過去の記憶を辿り、指折り数えながら答えた。

「三年半ぐらい前かなあ……ちょうど十五歳の誕生日ぐらいから、そんな感じになった気がする」

「思ったより最近だね。じゃあそれ以前は大丈夫だったわけか。……ふむ」

「それで……さっき言った、考えられることってのは……？」

身を乗り出しかけたティースに、マイルズは少しだけ声を潜めて、
“呪い”だよ、ティースくん

「の……呪い？」

あまりに縁起の悪い言葉にティースは頬を引きつらせた。

マイルズは頷くと、

「古代王国にはそういった類のものが実在していたんだ。口が利けなくなる呪い、丸い物や尖ったものに急に恐怖を感じるようになる呪い……その中に異性に触れられなくなる呪いもあった。まあ呪いと言っても文献によると、性犯罪や姦通などの罪を犯した者への刑罰に主に用いられたそうだがね」

「だ、だって俺はそんなこと全然——」

少し青ざめたティースだったが、マイルズは笑いながら、

「だから聞いたんだよ。女性に対してとてつもなくひどいことをした記憶はないかって。……ま、あったとしたって、今の時代にその呪いを行使できる人物がいるとは到底思えないけどさ」

「じゃあその可能性ってのは……」

「無きに等しい。……結局のところは精神的なものだろうというのが、常識的な結論だと思うよ。さっきとは逆になるけど、君、女性にひどい目に合わされたことがあるんじゃないのかい？ それも常

習的に」

「……いえ」

「その“間”はかなり怪しいな」

そう言ってマイルズは笑ったが、それ以上追求しようとはしなかった。

（ひどい目というか、こき使われたりすることは多かったけどなあ）

——そうしてティースの頭に浮かんだのは、とある少女の顔。

シーラースノーフォールという名のその人物は、冒頭に書いたいくつかの誤解の主な原因となった人物であり、彼より三歳ほど年下で、透き通るようなブロンドのポニーテールと、精巧な人形のように整った冷たく美しい容姿を持つ美少女だ。

確かにもし原因となる可能性があるとするれば、彼女しかありえない。なにしろこのティースという人物、産まれてこの方、女性というものにはほとんど縁のない人生を歩んでおり、トラウマになるほどひどい目に合わされるなんてことはあり得ないのだ。

（でも、まさかなあ）

とはいえ彼女にだって、所詮は理不尽な要求を突きつけられ、それを無理矢理実行させられたり、ちよつとしたミスで必要以上にこき下ろされたりする程度——それが客観的に見てどうなのかはまた微妙なところであろうが——少なくとも彼自身がそう感じている以上、それが原因でアレルギーになったというのも考えにくいことはあった。

「でも、どっちにしても、すぐに治すとかそういう方法は——」

「ないねえ」

キッパリと言い切ったマイルズに、ティースは深いため息をつくのだった。

「うわ。お前、変な病氣持ってやがんなあ」

医務室から戻ったティースは結局、詰め所の奥にてファントムの面々に事情を話すことになった。

そして真っ先に、まるで遠慮のない反応をしたのは、ファントムの戦闘補助、双子の姉妹の妹、ダリアⅡキャロルだった。

「それってなんだ？ あたしが触ってもダメなのか？」

少々蓮っ葉な口調から想像できる通り、まるで男の子のようなシヨートカット、日に焼けているのか元々なのか肌は少々浅黒く、目はいかにも我の強そうな光を纏っている。年齢はティースより一つ下の十七歳だ。

そして彼女の顔は、何故かティースから見ても“逆さ”の位置にあった。

「俺も基準はよくわかんないけど、君は間違いなくアウトだな……もちろんドロシーもだけど」

「オレは別に触る気もないけどな……」

答えた別の少女の手の中では、六本のナイフがくるくると回転しながらお手玉のように宙を舞っていた。

右目の下の微かな傷跡と肌の色が若干薄い以外はダリアとまるで同じ、双子の姉、ドロシーⅡキャロルは妹と比べて口数も少なく大人しい印象がある……が、実のところ口調は妹よりも……少なくともティースに対してはさらに汚かった。

「へえ。ってことは、あんたの中じゃあたしやドロシーみたいのも女のウチに入るのか。——よっと」

かけ声とともに、逆さになっていたダリアが“地上”に降り立った。彼女がいたのは地上から二メートルぐらいの高さに張られたロープだ。

とはいえ、彼女はそこにぶら下がっていたわけではない。

ロープ上に“倒立”していたのだ。

「いや……っていうか君たちは普通に女の子だろ？」

「そうかあ？」

めくれ上がったシャツの裾を直しながら自分の格好を見下ろすダ

リアは、確かに仕草こそは少々乱雑だが、ティースにしてみれば男だと思いきむのが難しい程度には女性だった。

まして――

「じゃあ、アクア姉みたいに無駄にフェロモン撒き散らしてるようなのは、当然問題外だな」

「……まあ」

ティースが答えにくそうに苦笑すると、ダリアはニッと笑って、

「無駄に、の辺りがポイントな」

「なんで無駄なのよ!」

口を尖らせて反論するのは、このファントムの隊長アクアールビナートである。

髪型は相変わらずトレードマークともいえる子供っぽいお団子頭だったが、着ているのはまるでステージ衣装のような派手な服で、両方の裾には横にかなり大きなスリットがあり太股が半分露出している。中は下着の上に一枚穿いているようだったが、大半の男性はそこに思わず視線を集めてしまうことだろう。

「みんないつもあたしの魅力にメロメロになるんだから!」

だが、ダリアはうるさそうに手を振って、

「大事なのは経過じゃなくて結果だろ?」

「うっ……」

確かに、先ほども書いたようにこのアクアは二十四歳にして恋人募集中の身であった。

客観的に見るならば、男など選り取りみどりとも思える外見の彼女だったが、それが現実であったから反論のしようもない。

「それはいいんだけど……アクアさん?」

アクアはガツクリと肩を落として、

「はああ……いい加減、無理矢理にでもなんとかするしかないかなあ……」

「……」

とてつもなく不穏な独り言だったが、ティースはとりあえず聞か

なかったことにして、

「……あの、アクアさん？」

「なにい？ あたし今、ものすごくテンション下がってるんだけどなあ……」

やる気なさそうに振り返ったアクアは、まるで機嫌を損ねた子供のようだ。

だが、ティースはそれにも構わず——というより、構っていたらキリがないので——数日前から抱えていた“疑問”について質問することにした。

「あの……俺、なんで毎日一輪車なんかに乗らされてるんでしょうか……？」

「勉強、勉強」

「はあ」

そう。この五日間、彼に課されたものは“一輪車に乗ること”だった。

カノンのときのような特訓を想像していた彼としては拍子抜けというか、物足りないというか、首をひねるしかない状況である。

とはいえ。

（うーむ）

辺りを見ると、違和感はない。

ダリアは先ほどのようにロープ上で曲芸のようなことをやっているし、ドロシーは手にしたナイフでまるでダーツのようなことを延々と繰り返ししている。アクアにしてもリングやバトンなどを使って、まるで一人アクロバットのようなことをやっているのだ。

（これって、なんか大道芸の一団みたいだよな……）

「遅くなりましたっ！」

そこへやってきたのはこのファントムの最後のメンバー、医事担当フィリス・ディクターである。

「ああ、フィリスちゃん！ 待ってたわっ！」

「きゃっ！？ ア、アクア様！ く、苦しいです……！！」

どこか子羊を連想させる容貌のフィリスは、メンバー中もつとも若い十五歳だ。医事担当といっても実は正式な資格を持っていたりするわけではなく、そっちの道に造詣があるというだけのことである。そして何より、彼女はアクアの“お気に入り”だった。

「はあー。すべすべー。気持ちイイー」

「あっ……あははははっ！ アクア様っ！ くっ、くすぐったいですってばっ！！」

「……」

フィリスと頬をこすり合わせて陶醉しているアクアの様子は、傍目に見ているとかなり微妙だった。

（この人、結局何でもいいんじゃない……）

そしてその後、何故か楽器の練習を始めたフィリスを見て、ティースは別の意味でもますます不安になるのだった……

ネービス領内、北方の街クレイドウルはネービスの街から馬車で約一日強の場所にある。背後には大陸でも有数の山脈“ヴァルキュリス”が横たわり、冬には大量の雪が降ることでも有名な街だ。

街の一部が山にかかっているため起伏の激しい構造となっており、昔の都市国家時代にはネービスの最後の砦とされていた場所である。その名残は今も高くそびえ立つ外壁に残っていたが、その門は昔ほど堅く閉ざされることはなく、簡単な身分証明だけで中に入ることができた。

今年の猛暑の中でも、この街は山から吹き下ろす風が比較的涼しく、体感温度はそれほどでもない。

そんな昼下がりの陽光の中、ザヴィア・レスターという名の男がそのクレイドウルの街を歩いていた。

見た目、年齢は二十代前半だろうか。背に負った剣、砂埃に薄汚れた衣服、そして頭に深く巻いたターバンのようなものは、彼がどうやら旅の者らしいことを物語っていたが、それにしても眼光は比較的穏やか、街行く人々を見つめる視線もどこか楽しそうである。

しかし、辺りが平穏だったのはその瞬間までだった。

――悲鳴がその周辺の空気を切り裂く。

「！」

明らかに女性の、それもこんな昼下がりの陽気な街にはまるで似合わない、絶望と恐怖に満ちた叫び声だった。

「ぼっ……化け物だあっ！！」

今度は野太い男の声。

その声が聞こえるか聞こえないかといううちに、ザヴィアは地面を蹴っていた。

向かった先は悲鳴が聞こえた方向。恐怖に怯える人々が逃げまどう流れに逆らい、緩い傾斜の坂を駆け上がって……そして辿り着いたその場所。

「あ……ああ……」

そこにいたのは翼の生えた三匹の“魔”。成人男性と同じかそれよりも一回り大きいぐらいで、カギ爪のついた二本の脚で地面に立ち、くちばしはまるで刃物のように研ぎ澄まされ、人間で言えば手の部分に生えた翼にはやはり鋭く大きな爪がついていた。

そばに倒れていたのは黒い服を着た二人の男。抵抗したのか、近くには無惨に折れた剣が転がっている。一人は肩の辺りから体が千切れかけていて即死、もう一人は背中を真っ赤に染めて虫の息だった。

そして、誰もが逃げ出したその場で、唯一息をしている人間がいる。

もはや言うことを聞かない体で地面に尻餅をつき、恐怖に見開かれた瞳で三匹の魔を見つめている一人の女性。

間一髪と言っているだろうか。ザヴィアが駆けつけたのはちょうど

そのときだった。

「……お前たち、その子から離れるんだ！」

鞘擦りの音を立てて背中 of 剣が煌めきを放つ。

「ケエエエッ！！」

奇妙な鳴き声を上げた魔がザヴィアの存在に気付いてその視線を移動させた。

その鳴き声からは、せつかくの“食事”を邪魔されたことで機嫌を損ねた様子が容易に見て取れる。

だが、その直後、

「大人しく離れないと、痛い目を見るぞ……」

ザヴィアの体から放たれたのは強烈な威圧感。

先ほどまで穏やかだった瞳が突然冷たい光を帯び、突き刺すような視線が三匹の魔を射抜いた。

その切っ先が向けられる。

「離れろ。そして帰るんだ」

一步、ザヴィアが足を踏み出すと、魔は見るからに怯えた様子を見せ始めた。だが、動物としての本能故か、なかなか目の前の“食事”を諦めようとはしない。

「帰れと言っているのが、聞こえないのか……？」

ザヴィアの声は穏やかだった。……いや、大声を出す必要はなかった。

彼らの間での優劣はとっくに決していたのだ。

そしてただ、彼はその手に握った剣を一振りする。風を卷くようにして、その剣筋が唸りを上げる。

それで、完全に勝負は決した。

「ケエエエ……」

そんなザヴィアに、完全に戦意を喪失した様子の魔は翼を大きく羽ばたかせ、人間ほどもある体を宙に浮かべると、山の方へ向かって飛び去っていったのである。

「……」

それを見送ったザヴィアは背中へと剣を収めると、女性に近付いていった。

「大丈夫ですか……？」

「あ……」

「……こっちの男の人もダメか」

先ほどまで息があった男も、彼が脈を取ろうとしたときにはすでに事切れていた。

「ああ……！」

「落ち着いて。もう大丈夫」

まだ錯乱している様子の女性はよく見るとまだ十代半ばぐらいの少女だ。着ているものや近くに転がった日傘の装飾から見ると、高貴な家の者であるのは間違いない。とすると、死んだ二人の男は護衛だろう。

少女の震える肩に触れようとして、ザヴィアは思い直したようにふと自分の手を見つめた。

——その手の甲には涙型のアザのようなものが三つ。周りには徐々に人が集まってきている。

「……大丈夫ですね？」

それに気付いたザヴィアはすぐにその場に背を向け、

「あ……」

少女の声にも立ち止まることはなく。

そして彼の姿はざわめく人混みの中へと消えていったのだった。

ティースは現在、アオイ——この屋敷の執事かつ当主の護衛役である男から、デビルバスターになるための教養を教わっている。彼の都合によって午前だったり午後だったりするが、それはほぼ毎日

のように続けられていた。

そして今日の午後もちろん、一階ホールの丸テーブルには二人の姿がある。

「今日は魔の分類について学んでいただきます」

縁なし眼鏡の奥から向けられた瞳は穏やかで、口調もまるで優しい教師のようだ。彼はティースよりも三つほど年上の二十一歳だったが、その職業故にか彼に対してもいつも敬語だった。

「分類ってのは、例のなんとかの何族ってやつ？」

それはティースもこれまでの実戦で何度か耳にしたことがある話だった。

アオイは頷いて続ける。

「魔は大きく十に分類されます。すなわち、炎族、水族、風族、地族、氷族、雷族、空族、幻族、光族、闇族です」

「えっと……？」

「対で覚えてください。炎と水、風と地、氷と雷、空と幻、光と闇というように。……これらは基本的にお互いの仲が悪く、それぞれが持つ力の性質に加えて、性格や体格的にも相反するところが多いのです」

「……？」

わからない顔のティースに、アオイはまるで本物の教師がそうするようにわかりやすい例を挙げた。

「例えば……炎族というのは基本的に気が荒く攻撃的で、小柄な男性上位の種族が多いのですが、逆に水族は穏やかで保守的、大柄で女性上位の種族が多いのです」

「あ、なるほど……」

「地族は頑固で義理堅く、大柄で男性上位。風族はおおらかで奔放、小柄で女性上位など……もちろん個体差はありますので一概にそうだとは言えませんが、そういう傾向が強いということですね」

「それってやっぱり覚えておいた方がいいのか？」

「そうですね。覚えておいて損はないと思います。ただし、先ほど

も言ったように、個体差が当然にあるということは忘れないでください。人がそれぞれ性格が違うように、彼らもちろん個々の性格を持っていますから」

「ああ、わかったよ」

頷いたティースに、満足そうにアオイは先を続ける。

と、その前に一人の使用人が紅茶を運んできた。

「どうぞ、執事様」

「あ、ご苦労様です、パメラ」

アオイにパメラと呼ばれた使用人の少女は若干長めの髪を左右でお下げにしていた。

年齢は十四、五歳ぐらいだろうか。

考えてみればこの屋敷、妙にこの年代の少女が多いが、これはあるいは当主のファナミューティレイクが十七歳という若さであるが故、かもしれない。

ティースもその少女には見覚えがあり、声をかける。

「どうも、パメラ——」

「……」

が、パメラはティースを一瞥することもなく。彼が声をかける間も与えずに、冷たく踵を返してそのまま去っていつてしまった。

「？」

それを不思議に思ったのだろう。アオイがその後ろ姿を追いながら、

「どうしました？ パメラは確か……」

「ええ。俺の部屋の掃除をしてくれる子なんですけど」

ティースもまた、納得できない表情で去っていく少女を見ている。

「なんだろう？ 気難しい子なのかな？ いつもあんな感じで。……まあ、俺もあんまり気の利く人間じゃないから仕方ないかもしれないけど」

「いえ、それはおかしいですね。彼女は元から明るい子だったと記憶していますが……」

「単に俺が嫌われてるのかなあ。何も嫌われるようなことをした覚えはないんだけど」

落ち込んでそう呟く。

——彼女がティースの部屋の担当になったのはつい最近のことだ。が、それにしても、顔を合わせる回数は比較的多いの、未だ言葉を交わしたことがないというのは確かに異常だった。

そして言葉を交わしたことがないのだから、ティースに嫌われる心当たりがあるはずもなく。

（部屋には変なものの置いたりしてないし、そんなに散らかしてもいいんじゃないけどなあ）

アオイもまたしばらく首をひねっていたが、やがて気を取り直したように、

「では、授業を続けましょうか。……えっと、どこまでお話ししましたっけ？」

ティースもすぐに気持ちを切り替えた。

「ああ……魔が大きく十種類に分かれるってところかな」

「そうでしたね。……さて、魔にはさらに大きく二種類のタイプがあります」

そう言ってアオイは指を二本立てて見せた。

「それはすなわち、獣型と人型。これは見た目がどうこうではなく、知的に人間レベルか否かで判断されます。ですから人に似ていても知能が低いものは獣型に分類されます。……ちなみにその逆はありません。知能が高いタイプの魔はほぼ人型をしていますので」

その言葉にティースは疑問の表情を浮かべて、

「あれ。でも俺、獣魔で人より高い知能を持つタイプがいるって聞いたことあるけど」

アオイは頷いて、

「それは“契約者”と呼ばれる特殊な魔のことで、別名“獣人型”とも言われる者たちですね。それについてはまた別の機会にお話しします。……さて」

納得したティースに、アオイは一呼吸置いた。

その手元、テーブルの上に置いた紙には二つのピラミッドが描かれていた。そのピラミッドの上にはそれぞれ“人魔”“獣魔”とある。

そのうちの“獣魔”の方のピラミッド内部に、アオイは七つの横線を引いた。

「獣魔はその強さに応じて八段階に分けられ、数字で表されます。

例えば――ティースさんがここに来て初めての任務で戦った獣魔は“地の七十三族”」

そう言って、ピラミッドの一番下を指し示す。ティースの視線も自然とそこに注がれた。

「彼らはこの最下層。獣魔の七十番台はもっとも与し易いと言われるタイプです」

「なるほど……」

確かに、ティースが以前戦った“地の七十三族”は未熟な彼でも充分に対応できる程度だったし、本職のデビルバスターなら造作もない相手だろう。

「そして通常、デビルバスター……いえ、人が相手できるのは十番台、つまりこの上から二層目までと言われています」

「その上は？」

「一番から九番までは完全に別格です。神話に出てくる空飛ぶ竜や、全身が炎に包まれた巨大な鳥を思い浮かべてください。……実際、番号が割り当てられているだけで、存在すらも怪しい者たちです」

そう言って、アオイはチラッと視線を横に向けた。

その先……ホールの壁の一角にはこの大陸の地図が掛けられている。

「この大陸の外海に名付けられた“シルベスク”も、デビルバスター的に言えば“水の二族”。北方の山脈に名付けられた“ヴァルキユリス”も“地の四族”という言い方ができる……そういう存在です」

「じゃあ、そいつらが姿を見せるってのは……」

「少なくとも、正確な記録が残っている歴史から推察するに、ほぼあり得ないことです。ですから覚えるべきなのは十番台以降ですね」

「ふうん……ちなみにその十番台ってのはどんなもんなんだ？」

「デビルバスターでも単体で相手できるのはほんの一握り、というところですかね」

そう言って、アオイは上から二番目と三番目の二つの線……つまり十番台と二十番台、二十番台と三十番台の境に太い線を引いた。

「ここにも少々力の開きがあります。もちろん出現率にも大きな開きがあつて、三十番台は私たちも良く相手にしますが、二十番台となると滅多になく、あつたとしても必ず二隊で向かってもらうことにしています。十番台となれば私たちよりむしろネービス公の抱える“ネスティアス”の出番かもしれませんね」

アオイのその言い方からは、十番台や二十番台の出現率の低さ、それに比例する手強さが充分に窺えた。

「……ところで、気になったんだけど」

注視していた紙から顔を上げて問いかける。

「例えば七十番台とかって言うけど、七十から七十九まで十種類ピツタリいるのか？」

「ああ、いえ。正確には炎や水などでも分類されますので、七十番台は百種類いることになりますね。……ただ、実際にはわかりやすくするためにこういう分類をしているだけで欠番も多々ありますし、逆に例えば“○○族の亜種”というのも無数に存在します」

その答えにティースはちよつとため息を吐いて、

「全部の特徴を覚えるの、大変そうだなあ……」

アオイは苦笑して頷きながらも、

「ですが、これはデビルバスターとしては非常に大切な知識ですよ」

「わかつてはいるけどさ……それに加えて人型もあるんだろ？」

「そうですね。ですが、こちらは比較的楽です」

そう言って、アオイは隣のピラミッドに四つの線を引いていく。

「人魔も強さで五つに分類されます。こちらは番号ではなく、上から“神族”“王族”“将族”“上位族”“下位族”と呼びます。こちらもさらに細かい種族の分類はありますが、これらは覚える必要がほとんどありません」

「どうして？」

不思議そうなティースに、アオイは笑って答えた。

「人間だって住む場所が違っていても二本の足で歩き、両手で道具を使うでしょう？ 人魔に関しては、細かい種族の違いとはつまりその程度のことなのです。なので、強さによる五つの分類だけ覚えてしまえば、あとは特に学習の必要はありません」

「あ、そっか……人型の種族名って、つまり部族みたいなものか」

「そうですね。それにこちららも“神族”に関してはその名の通り神のごとき存在で、姿を見せるなんてことはまずありません。王族というのもほぼ……ですから実際、私たちが相手をするのは将族以下ということになりますね」

「でも人型は下位族でも手強いはずだったよなあ……」

アオイは頷いて、

「人魔は獣魔よりもさらに個体差が激しいので一概には言えませんが、少なくともこの世界にやってくるような魔は戦いに優れたものが多く、下位族といえども並の人間では太刀打ちできません」

その言葉はティースも実感として備わっている。

以前、彼が第三隊“ディバーナ・カノン”にいた頃、戦うことになった“上位族”の魔は、彼にはまるで太刀打ちできない存在だった。そのときは隊長のレアスⅡヴォルクスが助けに来てくれたが、もしそうでなければ彼は今、この世にはいなかっただろう。

そこから考えてもおそらく今の彼は、下位族が相手であろうやぐとうにかなるかならないかという程度のレベルに違いなかった。

「さて、それでは早速、よくこの世界に現れるタイプの獣魔について、細かく学習していきましょうか」

そう言ってアオイがにこやかに取り出したのは、とんでもなく分

厚い資料の束。

「うへえ……」

それは元来、学業というものにあまり縁のない人生を送ってきた
ティースには、あまりにも酷な量であった……

その2『“再会”は突然に訪れ』

三日後。

「わっ……わっわっ……!!」

ガシャーン!!

「あちゃあ……」

ファントムの詰め所、その奥にある広めの一室にてティースの“特訓”は続いていた。

「ティースくん、不器用ねえ」

一輪車とともに床に転がったティースを見て、アクアが顔を覆って苦笑する。

それに追い打ちをかけるように、

「そいつのは不器用の次元を越えてる気がすっけどな」

「猿でももうちょっと上手い……」

「あたた……」

ダリアとドロシーの容赦のない酷評を受けながら、ティースは腰を押さえて立ち上がりつつ、

「俺には君たちが超人に思えて仕方ないよ、ホント」

そう言った。

その視線の先では、ダリアが相変わらずロープ上を片足でピクリとも動かずにバランスを保っていたし、ドロシーはティースの方によそ見しながらも、数メートル先の小さな目標に次々と投げナイフを突き立てている。

「だ、大丈夫ですよ、ティース様!」

そんな彼をフォローしたのはフィリスだ。手にしているのは俗に“アコーデイオン”と呼ばれるものに似た楽器である。

「私だってティース様と同じぐらい不器用ですから!」

「つまり、あんたはフィリスと同レベルってわけだ」

「……」

意地の悪いダリアの発言に、ティースは肯定も否定もできず反応に困ってしまった。

アクアはおかしそうに笑いながら、
「そうねえ。私が触れてもいいのなら、もっと手取り足取り教えてあげられるんだけど」

その言葉に、ダリアがパタパタと手を振る。

「ああ、ダメダメ。アクア姉が触れると、別のことを教えちまいそうだ」

「……ちよつと、ダリア。あなたねえ、あたしのことを何だと思つて――」

「恋人募集中の二十四歳だろ？」

「わざわざ歳を付けて言わないでってば！」

「……あの」

女性アレルギーということをも別にしても、ティースは女性が苦手――いや、アレルギーだからこそ接する機会が少なくて苦手になったのかもしれないが――それはともかく、そんな彼女が、彼女らのノリについていくことはなかなか困難だった。

「とにかく俺、練習続けますので……」

「……あ。そうそう」

「はい？」

背中を向けたところへアクアが近付いてくる。思わず反射的に身構えてしまうティースだったが、アクアはすぐに立ち止まると、眼前でピツと人差し指を立てた。

「大事なのは“集中”よ、ティースくん」

「え？ 集中？」

「たぶんティースくんは、なんでこんなことをさせられてるのか……なんて考えてるんでしょ？」

「……はい」

まったくの図星だったので、ティースは正直に答える。

「やっぱりね。でも」

正直なのがよかったのかアクアは満足そうに頷いて、そして妙に艶っぽい微笑みを浮かべると、人差し指をティースの口元に近付けた。

二つの意味でドキツとしたティースだったが、幸い、彼女の指はその目前で止まると、

「それじゃダ・メ・よ。……キミは一輪車に乗ることに“集中”しなきゃ。色々なことを同時に考えるのも大切だけど、ここぞというときには“一点集中”。それが大事よ」

「はあ」

確かに。彼女の言いたいことはティースにもわからないでもなかった。

が、

（一輪車に集中しろって言われてもなあ……）

ガシャーン！！

「あたた……」

「……こりゃ相当時間かかるな」

呆れたようなダリアの言葉に、ティース自身も思いっきり頷きたい気分だったのである。

クレイドルの街の昼下がりには、今日も強い日差しとそれを緩和する心地よい風が吹いている。

「……」

ザヴィア・レスターはその時間、安宿から外を眺めていた。

室内にあっても彼はターバンを深く頭に巻いたまま、その手には細長い管楽器……フルートのようなものが握られている。時折、その楽器を口にして何らかのメロディを奏で、そしてすぐに思い直し

たようにそれを口元から下ろす。そんなことを繰り返していた。

そこへ、

「うん？」

ザヴィアは下が妙に騒がしいことに気付いた。窓から軽く身乗り出し、宿の入り口の方に視線を向けると、そこには一台の馬車が止まっている。しかも普通の馬車ではない。装飾も豪華なそれは、見るからに街でも最上位の資産家が所有するようなものである。

「……」

窓から離れザヴィアはフルートを古ぼけたリュックの中にしまい込んだ。

宿の階段を上がってくる複数の足音が聞こえてくる。

コン、コン。

ドアは穏やかにノックされた。

「はい」

ターバンを深くかぶりなおし、少し身なりを整えてザヴィアは答えた。

「失礼します」

入ってきたのは予想通り。身なりからしても、表の馬車に乗っていたに違いないであろう正装の男。歳はザヴィアより少し上……二十代後半だろうか。あと二人。こちらはそれより少々年上か。三十過ぎだろう。

「ザヴィアⅡレスターさん？」

「ええ、そうですよ」

男たちはザヴィアにとって顔見知りではない。名を知っているのはおそらく、宿の主人から聞いたからだ。

「やはり……」

「ん？」

男たちの後ろから聞こえた呟きは、女性のものだった。

一番若い男が振り返って、

「間違いありませんか？」

「ええ、コン。この方です。……ザヴィア様、覚えていらっしゃるでしょうか？」

道を開いた男たちの間から出てきたのは、やはり高貴な出で立ちの少女だ。

「君は確か……」

それはもちろんザヴィアにも見覚えがあった。

「三日前は危ないところを助けていただきました。見るからに旅の方でしたから、もう街におられないかと思いましたが、良かったです」

「……」

ザヴィアはどう反応すべきか迷っていたが、それを見た少女が名乗る。

「私、ノエルⅡオルファネールと申します。……ザヴィア様、どうしても先日のお礼がしたいので、どうか屋敷の方へ来ていただけないでしょうか？」

「……」

「お願いします。どうか」

懇願するノエルを見て、ザヴィアは少し視線を伏せると、

「……私は見ての通り薄汚い格好の男だけれど、それでも？」

「それはもう！ 格好など何も関係ありません！」

まるで考える様子もなく言い切ったノエルの言葉に、

「そうですか」

ザヴィアはようやく笑顔を見せた。

「私も事情あってしばらくはこの街に逗留するつもりでした。ですから、もし迷惑でなければ——」

こうして、ザヴィアⅡレスターとノエルⅡオルファネールは二度目の出逢いを果たしたのである。

シーラⅡスノーフォールは前章で述べたように、ティーサイトⅡアマルナのあらぬ風評の原因となった人物であり、そして彼の“女性アレルギー”の原因考察について、唯一その名が挙げられた少女である。

さて、伝統あるネービスのサンタニア学園で薬草学を学ぶ彼女は、今日もその本分である学園での授業を終え、そして毎日の日課ともいえる“恋人とのデート”を終えて、ようやく自室へ戻ろうとしているところだった。

「あら……？」

そんなシーラの目に止まったのは、廊下に立ちつくす使用人の姿である。

彼女の部屋は別館の二階にあり、ティースの部屋と隣り合っていた。玄関の方向から見るとティースの部屋が手前にあるため、大階段を通して自室に戻るときは当然にその部屋の前を通ることになる。使用人の少女が立っていたのは、そのティースの部屋の前だ。扉に掛けられたネームプレートをじっと見つめており、シーラが存在に気付いた様子はない。

（……なにかしら？）

お下げを二つぶら下げたその少女は、シーラも顔を見たことはあったが名前までは知らなかった。

「ティースに何か用？」

「！」

驚いたように少女が振り返る。

「あいつならまだ戻ってないはずだけど？」

「……いえ……」

「？」

蚊の鳴くような声で少女はボソツと何事か答え、そして慌てて走り去ってってしまった。

その背中を見つめながらシーラは首をかしげたが、結局それほど気にすることもなく自室へ――そして、ドアノブに手をかけたところで呼び止められる。

「シーラさん」

「……あら、リディア」

大階段の方からやってきたのは、リディアⅡシュナイダーだ。デイバーナ・ロウの第二隊“デイバーナ・ナイト”隊長レインハルトⅡシュナイダーの妹であり、当主であるファナのサポート役としての職も持つ彼女は、数日後に誕生日を控えた弱冠十一歳の女の子である。

相変わらず、この年頃の少女としては珍しいパンツルックで、一見少年のようにも見えてしまう。

「ダメだよ、シーラさん。メイドの子を怯えさせたりしちゃ」

「見てたの」

真顔で言ったりリディアに、シーラは答えて、

「何もしてないわ。ただ声をかけただけよ」

「またまたあ。ティースさんの部屋を熱い視線で見つめてたから、軽く宣戦布告しちゃったんでしょ？」

シーラは苦笑して、

「それは面白い冗談だわ」

「うわ。歯牙にも掛けない発言。……最近はティースさんと仲直りしたみたいなのに」

探るようなリディアの言葉。

彼女は相変わらず、ティースとシーラの奇妙な関係について興味津々のようだった……が、シーラはそれに平然と返して、

「変なこと言うわね。最初から仲違いなんてしてないわよ」

「そっか。じゃあ言い方を変えるよ。……ティースさんと話すことには抵抗なくなったの？」

そこで初めて、シーラの視線が少しだけ横に逸れる。

「なくなっただけじゃないわ。……今も、あいつの顔を見ると苛々

するもの」

リディアは首をかしげて、

「うーん。それが、いまいちわかんないんだけどなあ。……優柔不断だからとか、はつきりしない人だからとか、そういうこと？」

「いいえ。……前にも言っただけど、あいつが悪いわけじゃないわ」

少し言葉を躊躇ってから、仕方なさそうに答える。

「とにかく。それとは別に、あいつのやっていることを考えたら、私自身の苛々なんて些細なことなのかもしれないと、そう思ったの。我慢することにした。ただ、それだけのことよ」

「ふーん。……ってことは、やっぱりシーラさんも少しはティースさんに感謝してるんだ？」

「……してないことはないわね」

そんな反応にリディアはおかしそうに笑って、

「あはは。シーラさんって、クールなイメージの割にはものすごく意地っ張りだよ」

「……」

シーラは何とも言えない表情で、そして仕方なさそうに首を振る。

「そういうあなたは、第一印象そのままに意地が悪いわね」

「うわ。こんな幼気な少女を捕まえてなんてことを」

「よく言うわ。――あら」

「あ」

シーラとリディアが向けた視線の先。そこに、大階段を上ってきたひよろっとした背の高い青年がいた。

「あ、シーラ」

たった今、話題に上っていたティースである。

半袖から除く肘にはいくつかの擦り傷を作り、少し疲れた表情を見せていたが、シーラの姿を見るなり表情を明るくして、

「今、帰りか？ あ、この時間ってことは、今日もデートだったのか？」

「え、デート？」

その言葉に怪訝そうな顔をしたのはリディアだ。

「え、シーラさんって恋人いたの？ でもシーラさん、今日はずっと書——」

「そんなことより」

疑問の声を遮り、シーラは言った。

「ティース。……お前、この使用人でお下げを二つ下げた私と同じ年ぐらいの女の子を知っているかしら？」

「お下げ？ ……ああ」

当然、ティースには心当たりがあった。

「それってパメラのことかな？」

「パメラ？」

確認するように、シーラはリディアを振り返った。

「あ、うん。パメラさんだよ、あの人」

「そう。……お前はどしてその子を知っているの？」

「どうしてって……その子、俺の部屋の掃除をしてくれる子だから」
「そう」

考えながら呟いたシーラに、リディアはそっと小声で、

「気になるの？」

「ええ。気になるわね」

「？」

あっさりとした答えに、リディアは怪訝な顔をする。

だが、そんな彼女にその理由を答えることもなく、シーラはドアノブを掴むと、

「夕食までまだ時間があるようだし、少し休むわ」

ドアはそのまま閉じてしまった。

「……ねえ、ティースさん」

「ん？」

“シーラリスノーフォール”と書かれたプレートを見上げながら、リディアはティースに疑問を向けた。

「シーラさんに恋人がいるって、本当？」

「え？ ああ、結構前からね。……あ、君もそういうのに興味のある年頃かい？」

相手はかなり年下だからか、ティースは珍しくからかうような言葉の口にしたが、リディアは平然と子供らしくもない言葉で答える。「恋愛って他人のを眺めてるのは楽しいけど、自分でするのはグメンだよ。色々ややこしいみたいだから」

「そ、それまた達観した意見だなあ……」

ティースは思わずたじろいだが、すぐに思いついたように、

「あ、でも俺はどっちかという君とは逆かな」

「逆？」

「他人のを眺めるのはあまり好きじゃないよ。……だって、そういうのってついつい応援したくなっちゃうし、もし上手く行かなかつたらこっちまでガックリしちゃうだろ？」

「……それ、人が良すぎるよ、ティースさん」

馬鹿にしてるとも感心してるとも取れる口調で、リディアはゆっくりと部屋のドアから離れた。

そして頭の後ろで手を組むと、

「でもあたし、ティースさんみたいな人なら応援してもいいかもなあ」

「はは……そりやどうも。けど、今のところはその必要もないようだよ」

リディアはそんなティースを覗き込むように見て、

「ふーん。やっぱり見当違いだったか」

「？」

「あ、気にしないで。こっちの話。……ちなみにティースさんの好きな女性のタイプって？」

「え？ ……いや、急にそんなこと言われてもなあ」

戸惑った顔のティースに、リディアは手をヒラヒラと振って、

「考えなくてもいいよ。パツと思いついたことを言ってくれれば」

「そ、そうだなあ。えっと、まず優しくて――」

「可愛くてよく気の付くい奥さんタイプ？」

「……そ、そうかな」

リディアは“やっぱり”と言わんばかりの顔で頷いた。

「ティースさんってホントわかりやすいなあ。……でもそれだと、シーラさんはこれっぽっちも当てはまってないね。あの人、とんでもなく綺麗だけど、可愛いってのとは違うし」

「……って、君もなかなか言うなあ」

（部屋の中に聞こえてなければいいけど……）

ティースは苦笑しつつ、

「まあ、あくまで俺の好みだから。あいつはあいつでいいところもたくさんあるよ」

「でも結局、シーラさんはティースさんの好みじゃないってことだよね」

「というか……あいつの場合は好みとか好みじゃないとか、そういう問題じゃないなあ」

リディアは難しい顔で首をかしげて、

「よくわかんないけど」

「ほら。たとえば君だって、お兄さんのレイさんのことを好みとか好みじゃないとか考えたりしないだろ？ それと同じ——」

「いや、あの人あたしの好みじゃないよ。彼氏としては最低じゃないかな、きっと」

リディアはきっぱりと答えた。

「そ、そうか」

どうやらティースと彼女の間では感性にかなりの違いがあるらしい。

それでも何とか言葉を続けて、

「で、でもほら。たとえそうだとしても、別に嫌ったり仲が悪かったりしないだろ？」

「そりゃ兄だし、最初からそういう対象じゃな——……あ、そういうことか」

自分で言っ、て、リディアはようやく納得顔をした。

「でも変なの、別に兄妹じゃないのに。……そんなようなものだから？」

「ん……兄妹だなんて言うと、あいつが嫌がるからなあ」

別に自嘲的でもなく笑いながらティースが答える。

「だから、ほら。やっぱ、召使いとお嬢様でいいんじゃないかな」

「それはあまり理由にならないと思うけど。そういう関係だって、絶対にあり得ないことじゃない」

「でも、それは上の立場の人にその気がなければ絶対に成立しないよ」

リディアは少し視線を泳がせて、

「……あー、確かにシーラさん、見た目にはまるでなさそうだもんね」

「召使いの方も同じさ。実際、よほどのことがない限り、そういうこと考えもしないよ」

「ふーん」

納得したのかしないのか、よくわからない表情でリディアは少し考えていたが、やがてポツリと呟く。

「召使いかぁ。でも考えてみたら、シーラさんの態度って確かにそのものだなあ」

「だろ？」

自分の言葉が通じたことにティースは満足そうな顔をした……が、リディアはそれでも何事か考えていた。

「？」

首をかしげるティースに、リディアはやがて口元に当てていた手を下ろして、

「ま、いいや。……あ、ところでティースさん。シーラさんって、古い歴史について興味あるのかな？」

「え？ いや、どうだろ、聞いたことないけど。どうして？」

「ふーん。別に何でもないんだけど、ちょっと気になって」

「……？」

「じゃ、ティースさん。ゴメンね、引き留めちゃって」

「あ、いや、別にいいけど」

「……でも、そっかあ。シーラさん、他に恋人がいるのかあ。ふーん」

リディアはそんなことを呟きながら去っていった。

それを見送り、ティースは一人首をかしげながら、

「やっぱそういうことに興味のある年頃なのかなあ。……でも、俺とシーラなんか見ててもなんの参考にもならな——」

そんな独り言を呟いたところへ、

「え……？」

突然、シーラの部屋のドアが勢い良く開いた。

もちろん避ける間もなく。

ガンッ！

「てっ！！」

「……うるさいわよ、ティース」

ティースが見事に尻餅をついたところで、その向こうからシーラが顔を出した。

いつものポニーテールをほどいて髪を下ろしており、その眉根には不機嫌そうに皺が寄っている。

「お前には私が“休む”って言ったのが聞こえなかったのかしら？ そんなにくだらないうおしゃべりがしたいのなら余所で思う存分やればいいでしょう？」

「い……いてて……」

したたかに打ち付けた腰を押さえながら、ティースは顔をしかめて立ち上がる。一輪車の特訓で何度か打ち付けた箇所だったこともあり、あまりの痛みに彼はちよつとだけ涙目だった。

「あ、あのなあ、だからってわざとそんなことしなくたって……」
途端、シーラはさらに不機嫌そうになって、

「口答えするつもり？」

「……ゴメン」

きつい口調にすごすご引き下がるティースの様は、確かに“召使い”そのものであった。

（やっぱ聞こえてたのかなあ……）

そしてやはり不機嫌そうに閉じたドアを見てそんなことを思いつつ、ティースは痛みに顔をしかめ、腰を何度も何度もさすりながら自室へと戻っていくのだった。

夕食を終え、再び自室に戻ったティースにもやることはたくさんある。

「炎の五十六族——体長は五十センチから一メートル程度、四本の脚で地面を這うように動く“は虫類”系の姿で、体長とほぼ同じ長さの炎の尾を鞭のように使って敵を攻撃する……と」

明かりを灯し、机の上にアオイから借りた膨大な資料とメモ用紙を置いて、懸命に勉強する彼の姿がそこにはあった。

時刻は午後の十一時を回っている。この時間、屋敷は人が圧倒的に少なくなり、外部から通っている使用人はもちろん大半が自宅へと戻っているし、ここに住み込んでいる者もほとんどが自室へ。あとは幾人かの気の向いたものたちがホールなどに出て静かに歓談したり酒を楽しんだりしている程度である。

「風の五十四族——体長は二メートル前後。鋭いくちばしを持ち、鋭い爪のついた大きな翼で空を飛び、大きな足爪で人を抱えて易々と飛び去っていくほどの力を持つ……ふう」

気が付けば、夕食を終えてから五時間近くもひたすら机に向かっていた。

「喉が乾いたな……」

残念なことに、彼が頑張っているからといって気を利かせて飲み物を持ってきてくれるような人物はおらず。

ティースは大きく伸びをして、そして席を立った。

「ふうっ……」

腰を叩きながら、ドアへと向かう……と、彼が手を掛けようとしたところで、ノックの音がした。

「？」

こんな時間に部屋を訪れる人物の心当たりはなく、ティースは一瞬躊躇してしまったが、

「どうぞ？」

カチャ……

そっと、ドアが向こうから開く。

そこから顔を出したのは、

「え？ アクアさ——」

「しっ」

アクアは口元に人差し指を立て、それから廊下の左右を確認してから部屋の中に滑り込むように入ってきた。

パタン、とドアが後ろ手に閉じられる。

一歩下がってその様子を見ていたティースは少々呆気に取られて、

「な……なにやってるんですか？」

「え？ ああ、気にしない気にしない」

ニッコリ笑顔を浮かべたアクアはすでにワンピース風の寝巻——ネグリジェというのか——で、頭のお団子はまだそのままだったが、どう見てもこれから寝ようとしている者の格好だった。

そしてその両手に握られていたのは、

「さて。……じゃあ飲もうか、ティースくん」

再びニッコリと。

「は？」

未だ状況を理解できていないティースを後目に、アクアはズンズンと部屋の中央に進んでいって、サイドテーブルの上にワインのビンと手にしてきた二つのグラスを置き、そして自らはベッドの上に腰掛けた。

「……」

ただ呆然と、それを眺めていたティースだったが、

「ちよっ……ちよっと待ってくださいよ、アクアさん！」

「しいーっ」

アクアは眉をひそめ、再び人差し指を口元に当てて、

「静かに。この時間にそんな大声を出したら隣の部屋から苦情が来るでしょ」

隣はもちろんシーラの部屋である。

「そ、それは確かに怖——じゃなくて！ 一体どういうつもりですか!？」

それでもしつかり声を潜めている辺り、彼の立場の弱さが存分に窺えた。

だが、アクアは平然とした様子で、

「どういうつもりもなにも、ただ単にティースくんとお酒を飲もうと思っただけよ？ ほら、やっぱり隊長としては隊員との交流も大切にしなきゃ」

「だったら何も部屋で飲まなくても、ホールか何かで——」

「ダメダメ。あそこは色々と邪魔が入るから」

「邪魔って……」

その言葉に不穏なものを感じてティースの顔色が少し悪くなったが、それに気付いたアクアは拗ねたように口を尖らせた。

「ちよっと……もう。そんなお化けを見るような目をしなくてもいいじゃない。……もしかして何か変なことされるとでも思ってる？」

「い、いえ……」

だがしかし、この格好でいきなり部屋に来られたのでは、彼が怯んでしまうのも無理からぬことである。

はつきりしないティースの返答に、アクアはますます機嫌を損ねた様子で、

「もう、あの二人が変なことばかり言うから。……あのね、ティースくん。そりゃ確かにあたしはもう二十四よ。どーせ行き遅れで

焦ってるし、未だに恋人だっていないし、ティースくんから見れば立派なオバサンよ」

「いや、そこまでは……」

いきなり卑屈なアクアに、ティースは困った顔で一応フォローしようとする。

……というかティースにしてみれば、決してオバサンだなど思っていないからこそ、触れられたら気絶するし、今もこうして困っているのであるが。

アクアは続けた。

「でもね、あたしだって別に誰でもいいとか思ってるわけじゃないんだから。そりゃ、もうそんなに高望みはしてないけど、やっぱりちゃんとあたしを愛してくれる人じゃなきゃダメなわけじゃない？」

「それは……そうですね」

「でしょ？ あたしだって、その気がない人を無理矢理、なんてことはこれっぽっちも考えてないんだから。冗談では口にするけどさ」

「あ、はい。そうですね」

至極まともな意見に、ティースは少しだけホッと胸をなで下ろす。
(そうだよな……考えてみたら、アクアさんってたまに暴走するけど、それ以外は結構まともな人だもんな)

確かに、ダリアやドロシーの言葉で惑わされていた部分もあったのかもしれない、と、ティースはちょっとだけ反省するのだった。

「わかってくれた？」

言いながら、サイドテーブルのグラスにワインを注ぎ始める。

「ええ。……いえ、すみません。確かにちょっと誤解してたかも」

アクアは満足そうに微笑んで、

「わかってもらえれば万事オッケーよ。……じゃ、飲みましようか」「ええ、そうですね」

意を決したティースは机から椅子を持ってきて、ベッドのアクアとサイドテーブルを挟んで向かい合う。

「じゃ、乾杯」

「乾杯」

チン、とグラスが音を立てた。

ガーネット色の液体を口元に運ぶと、芳醇な香りが漂う。口当たりはマイルドで比較的飲みやすいし、それでいて味わい豊か。相当高価なワインなのかもしれない。

「あ、おいしいですね、これ」

二口、三口と運んでいくティース。こう見えて彼は、アルコールに関してだけは“常人並”だった。

「そう？」

アクアの方はといえばちよこつと口をつけただけで、あとはティースの飲みっぷりを眺めている。そのグラスが空になったのを見ると、すぐにワインの瓶を手にとって、

「はい、ティースくん」

「……あ、すみません。って、あれ？ アクアさんは飲まないんですか？」

怪訝そうなティースの問いに、アクアはちよつと苦笑して、

「あー、あのね。誘っというて難だけど、あたしって実はそんなに強くないの。あまり飛ばすとすぐ寝ちゃうから……ああ、ティースくんは気にせず飲んで飲んで」

「あ、はい。じゃあ遠慮なく」

産まれて初めて飲んだといってもいい素晴らしいワインの味に引かれて、遠慮なく二杯目に口をつけるティース。

アクアも自身の言葉通り、少しずつ飲みながら、

「どう、ティースくん？ 屋敷にはだいぶ馴染んだ？」

「そうですね……ええ、まだ顔見知りもそんなに多くはないですけど、あまり不自由はないです」

「そっか。結構面白い人多いし、きつと色々勉強になるから、もっと積極的に話しかけてみたらいいと思うけどねえ」

「うーん、あまりきっかけがないんで。仕事と関係ないところで知り合ったのって、まだセシルぐらいです。……あ、もちろん知って

ますよね？」

問うと、アクアは口元に笑みを浮かべて、

「あったりまえでしょ。あれだけ可愛い子、このあたしが知らないわけじゃないじゃない」

「……あはは」

乾いた笑いで返したティース。

確かに。セシル——セシリアルレイルーンは“屋敷のアイドル”と呼ばれるほど見目麗しい少女だ。……いや、アイドルといっても実は“屋敷の（番犬たちの）アイドル”なので、容姿は全然関係なかったりするのだが、可愛い少女であることは間違いない。
「セシルちゃんはいいわよお。ちょーっと変なところもある子だけど」

ティースは笑って、

「あー、わかりますわかります。普通に話していたら、いきなり“二十点!”とか言われるんですよ」

「あたしってば、まだあの子から最高でも七十二点しかもらってないのよねー。何が悪いのかなぁ……」

「……それって、いきなり頬ずりしたりするからじゃ」

その光景が容易に想像できてしまう。……とはいえ、彼女の場合はそれほど嫌がらないのかもしれない。

「と言いつつ、俺はまだ赤点しかもらったことないんですけど……」

「あ。あたしの研究によるとそれは逆にいいのよ、ティースくん。日常の平均点が高いからこそ、たまの失敗を指摘されるんだから」

「……なるほど。研究ですか」

確かにティース自身、セシルに嫌われているなどはさすがに思っていない。

——そうやって話を弾ませているうちに酒もすすみ、ティースの頭にも少し酔いが回ってきた。アクアの方も手にしているグラスの中身で三杯目。自らが言ったようにどうやら相当弱いらしく、顔はすでに赤く上気していたし、目も少し眠そうになってきている。

そろそろ潮時だと感じ、ティースは提案した。

「あの、アクアさん。そろそろ……」

「……うん？」

「時間も遅くなってきましたし、お開きにしませんか？」

「あー、そうねえ。そろそろ寝ないと明日に響くし」

幸い、まだまともな判断力は残っているようで、時間を見たアクアは納得して頷いた。

「じゃ、お開きにして寝よっか」

「ええ」

ティースは頷いてグラスの中身を飲み干し、中身のほとんどなくなった瓶とともにサイドテーブルに置く。

アクアもティース以上におぼつかない感じだったが、それでも少し残ったグラスをサイドテーブルに置いて寝る準備をしている。

（……あれ？）

そしてティースは気付いた。

「……ちよっ、ちよっとアクアさん！ なに、当たり前みたいに布団の中に潜り込もうとしてるんですかっ!？」

「んー……部屋に戻るのめんどくさい」

「め、めんどくさいって……」

アクアはヒラヒラと手を振って、

「大丈夫大丈夫。ここのベッド広いから、並んで寝ても全然大丈夫」

「そりゃ大丈夫ですけど……いや、そういう問題じゃなくて！ 常識的というか倫理的というか……道徳的に!!」

「んー……?」

すでに下半身までを布団の中に埋め、頭のお団子をほどいて髪を下ろしたアクアは、怪訝そうな顔をティースの方へと向けて、

「ティースくん、あたしのこと愛してたんだっけ？」

その視線が妙に色っぽくて、ティースはとんでもなく焦った顔になる。

「ど、ど……どっからそういう話になるんですかっ!？」

「違うならいいじゃない」

「……は？」

ティースはその意味をいまいち理解できなかったが……その後のアクアの言葉でようやく理解することができた。

「愛していないなら、一緒に寝ても間違いが起きることはないですよ？ ……あ、大丈夫よ。あたしの方はお酒飲むと何もできないもの」

「……」

黙り込んだティースに、アクアは軽く投げキッスをして、

「じゃ、おやすみなさい、ティースくん」

「……」

ティースはそれを呆然と眺めていた。

一体どこまでが本気でどこまでが冗談なのか——いや。

（……本気だ……この人……）

確かに。外見や言動とその中身が随分とアンバランスな人物だ、とはティースも以前から感じていたが……どうやら実態はそれ以上だったようである。

少なくとも、こういう方面に関しては。

「……どういう子供時代を過ごしたんだろ、この人……」

だが、これだけ大人っぽくて魅力的な彼女にどうして全く恋人ができないのか、ティースにもなんとなく理解できていた。

確かに。彼女は変なところだけ、彼女自身が言うように“純真無垢な少女”なのだ。

（これじゃあ、なあ……）

ただそれは決して、ティースにとって彼女の印象を悪くするものではない。それどころかすでに寝息を立て始めた彼女に、どこことなく今まで以上の親しみすら感じていた。

「……さて」

息を吐いて、ティースは自分の寢床を一人掛けソファの上に定めた。

ベッドは確かに広い。が、彼とて健康的な成人男性だ。こんなに魅力的な女性とベッドを共にすれば、間違っ——気絶してしまうかもしれない。いや、どうせこれから寝るんだろと言ってしまえばそれまでだと思うが、寝るのと気絶するのではやはり彼にとっても全然違うわけだ。

一人掛けソファだと少々体勢がきついし、朝には体が痛くなるだろうが、それも止むを得なかった。

(でも……この人、悪い男に騙されたりしなきゃいいけどなあ……)
と、思わずそんなことを考えてしまったが……それが無用な心配だということは、微妙にはだけた彼女の布団を直しに行ったとき、その身をもって嫌というほど思い知らされることになるのだった——

翌日。

「……昨日は随分と遅くまでお楽しみだったみたいね」

部屋を出てぱったりと出くわしたシーラは、心なしか少々寝不足の様子で、そしてそれ以上に不機嫌な顔だった。

彼の目前に指を突きつけて、

「ただ言っておくわ、ティース。別にここで何をしようとお前の勝手だけれど、私の眠りを妨げるようなことは——」

言いかけた彼女の眉間に、突然怪訝そうに皺が寄る。

「——なに？ お前……どうしたの、そのアザ」

「あ……はは……」

押さえた左手の隙間から覗くティースの頬には、くっきりと紫色のアザがあった。

「いや……寝ぼけてベッドから落ちたんだよ」

だが、シーラはさすがにその嘘を見抜いたらしく、

「殴られた跡にしか見えないわね」

「……」

「昨日、お前の部屋から聞こえたのってアクアさんの声だったわ」

「……もしうるさくて寝付けなかったのなら、謝るよ」

だが、どうやら彼女の興味はすでに彼のアザの方に移っていたらしく、少し眉をひそめてじっとそれを見つめながら、

「何かイヤらしいことでもしようとして——ってのは、お前のことだからあり得ないと思うのだけれど」

「……それ以上は、追求しないでくれ……」

「……」

ガツクリと肩を落としたティースに、シーラは相変わらず怪訝そうな顔をしていたが、やがて何か納得できるものでもあったのか、ため息を吐きながら頷いて、

「……来なさい。手当するわ」

そう言って自室のドアを開いた。

「え？」

その意外な言葉にティースは困惑して、

「あ、でもそんなに大した——」

「来なさいと言っているのよ」

シーラは肩越しに彼を振り返り、有無を言わせぬ調子で言った。

「……あ、ああ」

相変わらずの口調だったが、どうやら彼女の機嫌は直っているようだ。それなら、ティースとしてもせっかくの申し出を無理に断る理由はなく。

——ちなみにこの日、頬にガーゼを当てて詰め所に行ったティースを、アクアは当然のように不思議そうな顔で出迎えたのだった。

その3『恋に“障害”は付き物で』

ティーサイトⅡアマルナがデイバーナ・ファントムに配属されてから初めての任務。

それは配属から三週間ほど経った頃、うだるような暑さによりやぐ微かな翳りが見え始めた時期に訪れた。

「クレイドルの街って……どんなところなんだろう？」

ネービスを発ってから二日目の朝。宿を出発した馬車はガタガタと揺れながら、ティースを含めたファントムの面々を乗せ、目的地である北の街、クレイドルへ向かっていた。

彼らを乗せた馬車はサイズこそそこそこ大きめだったが、見た目はミューティレイクの持ち物であることが信じられないほどに質素だ。しっかりとした座席があるわけでもなく、ティースたちは積まれた荷物とともに揺られている状況である。

ティースの疑問に答えたのは、頭の後ろで手を組み、仰向けに寝転がった体勢のダリアⅡキャロルだった。

「冬にはたくさん雪が降ることで知られてるけどな。あと、お偉いさん方の避暑地としても結構有名……ってかお前、クレイドルを知らないってことは、元々ネービスの人間じゃないのか？」

「あ……まあね」

「ふーん」

ダリアは特に追求してくることはなかった。

その隣では、隊長のアクアⅡルビナートが手鏡を見て化粧を直しながら、

「でも、この時期に行くには一番いいところよねえ。仕事じゃなければもつといいんだけど」

と、そんな彼女に、

「姐さん、今日はいつもより化粧厚いな……」

片膝を立ててそこに頬を乗せる、という、ダルそうな体勢で、ダ

リアの双子の姉、ドロシー&キャロルがボソツと呟いた。

「そ、そんなことないってば」

たじろいだアクアに、ドロシーはさらに突っ込む。

「あわよくばオルファネールの御曹司をオトして玉の輿……」

「ぎくっ」

どうやら凶星だったようだ。

（……この人は）

「あの、それ以前に……」

そこにいるのはあと一人。このファントムの医事担当であり、同時にイジられ役でもあるフィリス&ディクターだった。

隅っこにちょこんと正座したフィリスは怖ず怖ずと、

「オルファネール家のご子息様はすでにご結婚なさっていたと思うんですけど……」

「ええっ、ホントにいい!？」

「……」

ガツクリと肩を落としたアクアは放っておいて、ティースたちの話は続いた。

「ところで……詳しい事情がわからなかったんだけど、どうして俺たちは正体を隠して、その……オルファネールとかいう家に行かないやらないんだ？」

「ん？ ……アクア姉。ほら、こういうときこそ隊長の出番だろ」

ダリアが水を向けると、

「はああ……急にやる気なくなっちゃったなあ……」

「ちよっとちよっと、アクアさん……」

苦笑するティースに、アクアは子供のように口を尖らせながらも答えた。

「なんかねー。クレイドウルに現れた獣魔が、何故かオルファネール家の関係者ばかり襲うんだって」

「……それとこれとどういう関係が？」

「獣魔がそんな器用な真似をするわけがないでしょ？ 何者かの意

図がそこにあるということ。それと敵が何故か、オルファネール関係者たちの行動をあらかじめ知っているということ。でなきゃ、大型の獣魔にピンポイントで襲わせることは難しいもの。それに大型の魔の割に、最初の事件以外“死人がほとんど出てない”っていうのも意図的なものを感じない？」

「……つまり？」

理解していない様子のティースに代わり、ダリアが推測を口にした。「要するに、今回の敵は“デビルサイダー”かもしれないってことだろ？」

「その可能性があるらしいんだけど」

その言葉にティースは驚いて、

「……魔に通じている人間がいるってことか？」

“デビルサイダー”……“魔の側の人間”という意のそれは、人でありながら魔に通じ、人魔と意志を交わしたり獣魔を意のままに操ったりする者をいう。魔は基本的に人間を自分たちより格下に見ているため、その数は決して多くないが、存在そのものは何度か確認されている。

ドロシーも納得したように頷いて、

「しかもオルファネールの内部に、ということだな……」

「……」

ガタガタと揺れながら、彼らを乗せた馬車は——途中、ティースが酔って一休みするというアクシデントに見舞われながらも——ほぼ順調にクレイドルの街へと到着したのだった。

オルファネール家は傾斜のついたクレイドルの街でも高台の方にあつた。基本的には二階建ての屋敷だが、その西側には屋敷と一体化したかなりの高さの塔が備わっており、表側からは街並みが大きく見渡せ、山を背にした裏側にはすぐに背の高い木々が生い茂っ

ている。

さて、“客人”という名目で迎えられたファントムの面々だが、その正体を知っているのはオルファネール家の主人、オーダス・オルファネールだけであった。

そうなるのもちろん、ファントムの面々には客人として迎えられだけの“理由”がなければならぬわけだが――

（な……なるほど……）

ティースはそのときになってようやく、一輪車の練習をさせられていたわけを理解するのだった。

テンポのよいアコーディオンのリズムに合わせて、ドロシーがクルクルと器用にナイフを回している。言葉で書くと簡単に聞こえてしまうが、ドロシーが手にしているのは合計六本ものナイフだ。それを宙に投げたり手の中で回転させたりと、それぞれに別の動きをさせながら、しかも自らも小さくゆっくりとした動きで踊っているのである。

当然、それだけで観客――と言っても数人だが――から拍手が聞こえていた。

だが、本番はこれからである。

……それを、数メートル離れた場所で見つめているティースは、正直、生きた心地がしていない。

『ティースくんはまだ“実用”には耐えられないだろうから、大道具係を任せるわね』

アクアの言葉に快く頷いたティースは、もちろん大道具を作ったり運んだりする役のことを思い浮かべていたのである。

（けど、まさか――）

ティースはその考えが甘かったことを悟っていた。

（“俺自身が大道具”だったなんて！）

両肩の上にはキャベツがヒモで軽く固定され、広げた両腕にリング、そして頭の上にはレモン。

……ドロシーが狙う順番は容易に想像できた。

（でも……なんかナイフの数の割に的が一個足りないような……）

ティースの体は動かないように背後の板にしっかりと固定されている。ちなみにこの直前には、嫌がるティースをダリア以外のみんなで無理矢理板に張り付けるというコメディタッチの演技——いや、彼は本気で嫌がっていたのだが——が行われており、今回のナイフ投げはその流れで繋がっている。

フィリスが少し顔を紅潮させ、演奏のリズムが速くなる。ゆつくりとした動きで踊っていたドロシーの視線が徐々にティースの方を向いてきた。踊り子のような衣装の彼女はうっすらを化粧を施しており、いつもとは違う印象になっている。

——と、その刹那。

「ひっ！」

何の前触れもなく、二本のナイフが踊っているドロシーの手から飛んだ。それはティースが声を挙げるより先に、両肩のキャベツを射抜く。

どうやら観客たちもそのタイミングは予想してなかったらしく、息を呑む音が聞こえてきた。

（……う、打ち合わせも目配せもしてくれないんだもん……）

ティースはナイフを投げるタイミングについて、全く聞かされていない。だから当然彼も驚いた。——ちよっと心臓が止まりそうなほどに。

ピタ。

ドロシーの動きが止まる。と同時に、演奏も止んだ。

右手には二本のナイフ。左手にも二本のナイフ。

……一瞬、その場にいる誰もが呼吸を止めた。

そして。

ヒュッ、ヒュッ！！

立て続けに二つの風切り音。ティースの手の平に微かな衝撃を残し、ナイフはリングをさらって背後の板に突き刺さった。

拍手は起こらない。——誰もがまだ、最後の一つ……頭の上のレ

モンが残っていることを知っている。

クルッ……と、とてつもなく緩慢な仕草で、ドロシーがその場で回転した。

（え……）

同時に、その左手からナイフが離れる。それは今までのような直線的な動きではなく、山なりに放物線を描きながら、ティースの頭に乗せられたレモンに向かって飛んでいった。

（お……おい……それって……）

ティースが焦ったのは当然である。

山なりに放物線を描きながらレモンに命中するということはつまり、レモンの真下にあるティースの頭にも——レモンがとてつもない強度を持っていない限り——突き刺さるということであるから。

「な——」

だが、ティースが叫びを発しようとしたその刹那。

ドロシーの目が瞬時に細められ、そしてその手から最後のナイフが飛んだ。

「——」

その場にいる観客——ティースも含む——は、おそらくその全員が驚愕に息を呑んだだろう。

五本目のナイフがレモンに突き刺さるその瞬間、六本目のナイフは凄まじい速さで先にレモンを捕らえ、さらに五本目のナイフを弾き飛ばして背後の板に突き刺さったのだ。

冷や汗が、ティースの背中を流れた。

彼の頭は幸い無事だ。

「……」

クルリ、ともう一度優雅に回転して、そしてドロシーは観客に向かって恭しく一礼する。

——一瞬の静寂。

直後、数は少ないながらも盛大な拍手が彼女に向かって送られたのであった。

「いや、素晴らしい！」

催し物が終わった後、ティースたちファントムの面々は夕食の席に招待され、オルファネール家の当主オーダスⅡオルファネールからねぎらいの言葉をかけられていた。

口ひげとかなり太めの眉毛がなかなかたくましいオーダスは、ティースたちが事前に調べた情報によると五十一歳。低音の聞いた声色でなかなか魅力的なナイスミドルだった。

もちろん彼はファントムの正体を知っているはずであったが、それでもその賞賛の言葉はまるで嘘偽りのない言葉である。

「恐れ入ります」

恭しく礼を述べたのは、この“大道芸の一団”の団長、アクアⅡルビナートだ。

「お気に召していただけたようで、なによりです」

アクアはさすが、敬語の方もなかなか自然だった。それに比べてここに来てから屋敷の住人の前ではほとんど口を開こうとしないのがダリア。彼女はおそらく――ティースの勝手な想像だが、敬語そのものが苦手なのだろう。

「いや、でも確かにすごかったね」

横から口を挟んだのは、二十代前半、体型はややスリムでスラッとした体型ながら、少々太めの眉が父親の印象を色濃く残しているオルファネール家の長男、いかにも好青年といった印象のエルトンⅡオルファネールだ。

「僕も長いこと大道芸やサーカスを見てるけど、技術だけならその中でも一番かもしれないよ」

「そ、そう？ ……ですか？」

一瞬、敬語が崩れかけたアクアに、テーブルの下でダリアの肘打ちが炸裂するのを、ティースはしっかりと目撃した。

さて、他の一同。

縦に長いテーブルの上座に当主のオーダスが座っている。その右

手の長い辺にファントムの面々、オーダスに近い方からアクア、ダリア、フィリス、ティースの順。ドロシーの姿が見えないのは、アクア曰く“仕様”らしい。先ほどの出し物の中には双子であることを生かしたトリックも使用していたため、彼女の存在自体がネタバレになってしまうようだ。

そう言われてみると、ドロシーの見世物のときにダリアの姿が見えなかったことも納得できる。

お腹は空かないのかとか、一体どこに隠れているんだろうとか、ティースは余計な心配をしてしまうのだが、どうやら“いつもなんとかなっている”らしいので口は挟まなかった。それに当主のオーダスだけは存在を知っているもので、そう大きな問題はないだろう。と、それはともかく。

ファントムの面々が座る席の正面側、オーダスから見て左手の長い辺には屋敷の人々が座っている。オーダスに一番近いのが長男のエルトン、その隣りにいるのが彼女の妻――資料によると、カティナ・オルファネル、年齢は夫より三つ年下の二十歳。それほど良い家の出ではないが、こうしてオルファネル家長男の嫁に収まっているということは、家同士ではなく恋愛結婚だったのだろうか。もちろんなかなかの美人だ。どちらかといえば大人しめの印象か。そしてカティナの隣りにいるのがオーダスの娘、ノエル・オルファネル。少々ウェーブがかった長い髪でこちらも大人しい印象はあるが、表情を見ると意外に勝ち気そうな部分が覗いている。ファントムの演技に一番はしゃいでいたのもどうやら彼女だったようだった。年齢は十六歳。

最後に……そのノエルの隣りに、少々違和感のある青年がいた。食事中にも関わらず頭には深くターバンを巻き、先ほどから一言も発しようとはしない。ただ温厚そうな印象から察するに、無口なのではなく遠慮しているというところだろうか。

「ところで……」

アクアもその人物についての情報は持っておらず、失礼にならな

いようにと注意しながら、オーダスに問いかけようとする。

が、それを先に察したのか、オーダスの方から答えた。

「ああ、彼はザヴィアくんか。……以前、魔に襲われた娘を助けてくれた恩人でね。それ以来、この屋敷の客として居てもらっているんだよ」

「ザヴィアさん？」

アクアの声に反応したのか、ザヴィアが初めて口を開く。

「ザヴィアⅡレスターです。……このターバンが気になっているのでしょうが、どうかご容赦ください」

異様な格好の割に口調は丁寧で穏やかだった。そこに隣のノエルが、まるで彼を援護するかのように口を開く。

「ザヴィア様は昔、頭にひどい怪我をなさってその傷が大きく残ってらっしゃるのです。ですから――」

「あ、いや、私たちは別に気にしません」

アクアは慌ててそう答え、それからニツコリと笑顔で冗談交じりに言った。

「私たちも元々、それほど上等な家の出ではありませんから。……ねえ、みんな？」

その言葉に頷いた一同。

それはおそらく、誰もが嘘偽りのない本心からの同意だったに違いない。

「この並びがみなさまのお部屋になります」

夕食を終え、ファントムの面々はそれぞれの部屋へ案内されていた。割り当てられた部屋は一階の奥にある客室、四部屋。ダリアとドロシーが同室で、他は当然一人一部屋という計算だが、まあ予想に違わず一人で過ごすには少々広すぎる個室だった。

「私は執事補佐のコンラッドⅡフランスと申します。皆様のお世話も言い遣ってますので、何か不都合がございましたら遠慮なく」

二十代後半と思われるその人物はなかなか体格の良い男だった。

長身のティースよりは若干低いが、正装の上からでも鍛えられた筋肉質の体が窺える。顔は少々角張った感じで眉毛も太く、見るからに実直で頑固そうだ。

「お屋敷の中は自由に歩かれて結構ですが、あまり夜遅くに出歩くのはお控えください。それと鍵がかかった場所への進入もご遠慮ください」

その他にも色々細かい注意事項を事務的に述べて、そしてコンラッドという使用人は去っていった。

そしてアクアがすぐさま号令を下す。

「じゃ、みんな早速情報収集お願いね」

勝手を知る面々はすぐさま、それぞれに行動を取り始めたのだが、
「あの……俺は？」

唯一勝手のわからないティースは立ちつくしたままだった。

それを見たアクアは、まるで“初めて気付いた”と言わんばかりの顔で、

「ん、ティースくん？ ……そうねえ」

考えて、そして少し意味ありげな微笑を浮かべた。

その表情に、ティースの背中に一瞬痺れのようなものが走る。…
魅了されたのか、あるいは単なる怯えだったのか微妙なラインだ。
そしてアクアは言った。

「それじゃティースくんは私と一緒に、楽しい一時を過ごしましょうか？」

「え？」

意味のわからなかったティースだが、アクアが向けた視線の先―
廊下の向こうを見て納得した。

そこに見えたのは、こちらに向かって歩いてくるオルファネール家の長女ノエル・オルファネールと、それに手を引かれて遠慮がちについてくる青年、ザヴィア・レスターの姿だったのである。

約二時間後。

外はすっかり日も落ちて暗くなっていた。

「……ふーん。魔から助け出して、それで、つてのは面白いぐらい出来過ぎた話だなあ」

ノエルとザヴィアの関係について、二人掛けソファで身を逸らしたダリアが真っ先に述べたのはそんな感想である。

「でもどうなんだ、そういうのって？ うまく行くもんなのか？」

ダリアの疑問に、机に備え付けられた椅子の上でフィリスがうーん、と考えながら、

「それってファナお嬢様とティース様が恋愛関係になるようなものですよね？」

そう言った。

ちょこんと椅子に腰掛けた様は、まるでお人形さんのようである。引き合いに出されたティースはベッドの端で苦笑して、

「楽じゃないと思うよ」

ちなみに彼らが現在話題にしているのは当然、ノエルⅡオルファネールとザヴィアⅡレスターがどうやら恋仲らしいということについて、である。

彼らが集合しているのは隊長であるアクアの部屋だ。窓の外はすでに真っ暗。屋敷の中も必要最低限の場所を除いてすでに暗闇に包まれている。

「でも俺が見た限りだと、どっちかというとなエルさんの方が積極的だったし、エルトンさんとカティナさんの前例もあるだろうから、もしかしたら……どうかな、アクアさん？」

振り返ってティースが尋ねる。

「それは確かねえ」

答えたアクアはベッドの上にうつ伏せになって話に参加していた。膝を曲げて足をブラブラさせて落ち着かないところが、まるで子供のようなのである。

「あたしやティースくんと話しているときも、ノエルちゃんの方からずっと手を握ってたし」

「へえ。ああいうお嬢様ってのはそういうことに消極的なもんだと思ってたけどな」

「ダリア。それはお前の偏見だ……」

中庭での出し物が終わってから今まで、一体どこに隠れていたというのか。数時間ぶりに一同の前に姿を現したドロシーはダリアの隣で膝を曲げ、その膝を両手で抱えるようにして座っている。

どうも彼女は、こうして縮こまる体勢が好きらしい。

「ああいう箱入りってのは、一度沸騰すると見境なしにどこまでもいっちまうもんだ……」

「ドロシーは随分と否定的だなあ」

ティースが笑うと、ドロシーはチラッと彼を見て、

「別に。オレには関係ないからな……」

「そ、そうか」

そこへダリアが頷いて、

「でもま、それが原因なのか知らんけど、お嬢さん以外、屋敷の住人たちのウケは良くないな、そのザヴィアって男」

どうやら早速仕入れてきた情報らしい。

「良くない？」

「ああ。得体が知れないとか、不気味で気持ち悪いとか」

ティースは首をかしげる。

「そっかなあ。言葉遣いとか物腰とか意外と丁寧だし、俺なんかは結構好印象だったけど……」

「ま、やっかみ半分かもしれないけどな。……あたしらを案内したコンラッドって男とか、使用人を束ねるアーバンって男とか、露骨に嫌ってるみたいだけど」

「アーバン？」

初めて聞く名前にティースが怪訝そうな顔を見ると、それにドロシーが答えた。

「アーバンⅡマクブライド……屋敷の執事で、話によるとあのオーダスって当主の腹違いの弟らしいな……」

「弟!？」

「別に珍しくない話だろうよ……」

そのドロシーの言葉にダリアが補足する。

「それは当主さんも半分認めていて、それでいながら重用しているみたいだな。その仲が悪いって話は全く聞かない」

そこへフィリスが口を挟んだ。

「あ、あの、それと私が聞いた話だと、コンラッドⅡフランシスさんは元々ノエルⅡオルファネールさんのボディガードだったらしいです。ノエルさんは小さい頃から彼を愛称で呼ぶほど慕っていたんですけど、最近はザヴィアさんのことがあって少々疎遠だとか」

「なんか混乱してくるなあ……」

「そうねえ」

アクアはベッドの上に肘を立て手を組み、その上に顎を乗せて考えるようなポーズを取った。

「オルファネールの人ばかり襲われることに何らかの理由があるとするれば、その理由を持つてる人がデビルサイダーってことなんだけど……きつとそう単純でもないだろうし、頭が痛いわねえ」

その言葉にダリアは笑いながら、

「いっそ、魔がとつと現れてくれりゃ楽だよな」

冗談交じりにそう言った。

……そのときクレイドウルの街に、まさにその“魔”が現れていたことなど、彼らは知る由もなかった。

オルファネール家の一室からは、聞き慣れないメロディが聞こえ

てくる。

その発生源は明らかに管楽器、その形状や音色からするとフルートのようなものだったが、そのものとは微妙に異なり、音がかなりこもっていて音量自体も小さめの不思議な音色。

それを発する人物は、オルファネール家の客室——ティースたちのものとは少し離れた部屋にいた。

薄暗い部屋の中、窓を開け、枠に腰掛けてその楽器を演奏するのはザヴィア・レスターだ。目を閉じ、まるで遠い場所に想いを馳せるように、彼はゆっくりとそのメロディを奏でていた。ターバンから微かにはみ出た髪がそよ風に揺れる。外からは犬の吠える声が聞こえていた。

その部屋にはもう一人いる。

言わずと知れたオルファネール家の長女、ノエル・オルファネールである。部屋の一人掛けソファに腰を下ろし、やはり目を閉じてその音色に聞き入っていた。

「……ノエルさん」

「ザヴィア様？」

メロディが止み、そして楽器を離れたザヴィアの口から漏れたのは、少々憂いを帯びた言葉だった。

「私は……あなたに相応しい人間ではありませんよ」

「……」

そつと楽器を脇に置くザヴィア。月明かりの下、その手の甲に三つの涙型のアザが浮かび上がる。

「あなたが私に好意を寄せてくれるのは嬉しい。でも私はすでに業を背負ってしまったっている男だ。まして……あなたはこのオルファネールという高貴な家の方。私と釣り合うとはとてもじゃないが思えない」

その言葉にノエルは少し視線を斜めに落として、

「その、ザヴィア様の背負った“業”については、やはり話してくださらないのですね」

「それは……」

ザヴィアの視線が泳ぐ。……それが辿り着いた先は窓の外。そこにある“見えない何か”を見ようとするかのように、彼はほんの僅かに目を細めた。

そんな彼に、ノエルは顔を上げて答える。

「……私は確かに世間のことをそれほど知っているわけではありません。ですが、私なりに考えることぐらいはできます。私には、ザヴィア様が自分で卑下なさるほどの方だとはどうしても思えません」
「……」

ザヴィアは何も答えなかった。

ただ黙って、もう一度手元の楽器を口にする。

再び流れ出したメロディに、ノエルは心地よさそうに目を閉じて身を委ねた。

「私……ザヴィア様の故郷の曲、優しくてとても好きです」

ゆっくりと窓の外へと流れ出していく不思議な音色。

……そして部屋の外でその様子を伺っていた長身の男は、苦々しい表情を隠そうともせず、じっとそこに佇んでいた……

翌日。

「……えっ!? 魔が現れたって!?!」

まだ太陽が昇り始めて間もない早朝にティースを襲ったのは、ダリアがもたらした驚きの情報だった。

「そ、そんな馬鹿な! い、いくら眠りこけてたからって気付かないはず——」

ちなみに彼は寝巻から普段着に着替えているところで当然半裸状態だったが、ダリアはそんなこと気にした様子もなく苦い表情で答

えた。

「それがこの周りじゃなくて街の方に現れたらしい。……詳しいことはアクア姉が話すだろうから、とにかく急いで来てくれ」

「あ、ああ」

急かされ、ズボンを踏みつけて転びそうになりながらも、ティースは着替えも半端にアクアの部屋へと向かった。

途中、屋敷がどことなく忙しない様子にも気付く。

「……襲われたのはカティナさんの実家よ」

フィリス以外の全員がそこに集まるなり、ベッドの上に腰掛けたアクアは眉間に皺を寄せて口を開いた。

「今までは襲われるのが屋敷の人間だけに限定されていたんだけど。……今回も関係者ではあるけど、厳密に言えば屋敷の人間じゃない。これまででは初めてのケースだわ」

「そ、それで……襲われた家の人は!？」

「もう少し静かに喋れ……」

昨日と同じソファの上で、昨日と全く同じ体勢のドロシーがたしなめる。

「オレたちが表向きは芸人の一団だったのを忘れるな……」

「す、すまない、ドロシー。……それで。アクアさん……」

素直に謝って質問を続けたティースに、アクアは小さく首を振って答えた。

「両親と弟、三人とも亡くなったそうよ。……今までの被害に比べて遙かに容赦なく、徹底的にやられたらしいわ」

「……」

グッと拳を握りしめたティースを横目で見て、ダリアが重い息を吐きながら、

「どうなってんだ、アクア姉? 今までと違う、が二つも並んだんじゃない、“たまたま”じゃ片づけられねーぞ」

アクアは厳しい顔で頷く。

「そうね……あたしたちが来たから、という可能性もなくはないわ

ね」

ティースはその言葉に否定的な表情を浮かべて、

「まさか。バレルようなことなんて……」

「ええ、だからどっちとも取れるんじゃない？ 私たちの正体を疑って挑発しているのか、あるいは全く気付いていないからこそ、大胆な行動が取れたのか」

「後者だとしたら、今までと違うのは単なる偶然ってことになるがな」

ダリアはどうやら前者の意見に傾いているらしいが、アクアは彼女を見て言った。

「その可能性も決して否定できないでしょう？ 敵の目的だってわからないんだから」

「それで、姐さん。これからどうする……？」

ドロシーの問いに、アクアは今までにない厳しい表情で、

「昨日、屋敷から外に出た人間について調べてもらっているわ。……いくら魔と言っても、手下を思い通りに動かすには何らかの形で彼らと意志を交わす必要があるはずよ。屋敷のすぐ近くに魔が潜んでいた痕跡はないし、それである程度は絞り込めるかもしれないわ」
そこへティースが口を挟む。

「外部の人間って可能性は？ それならいくら屋敷の人間を調べても……」

「まあ、ないとは言わないけど。ただ、前にも言ったように犯人はオルファネールの人たちの行動をある程度把握しているフシがあるのよ。だからおそろく――」

コンコン、とドアがノックされ、外からフィリスの声がした。

「アクア様。フィリスです」

「ああ、フィリスちゃん。……ご苦勞様」

入ってきたフィリスは数枚の紙切れを手にしていた。ドアの外を確認し、後ろ手にしっかりと閉じてから、部屋の中に入ってくる。

「外、どう？ あたしたちの部屋を窺ってたりする人はいなかった

？」

「はい、いないと思います。屋敷の中はそれどころじゃないって感じですよ……」

「そりゃま、長男の嫁の実家が皆殺しの目に合ったんだからさ。当然だろ」

ダリアの遠慮のない物言いに、フィリスの顔が少しだけ嫌悪感に歪む。それはもちろん彼女のセリフ自体ではなく、その言葉が示した事実に対しての嫌悪だ。

「……それでフィリスちゃん？」

「あ、はい。これが昨晚、夕食後に外出した使用人の方々のリストです。一応、その方々については雇った時期や役職などの細かい資料も戴いてきました。……それとエルトン様とカティナ様も昨晚は歌劇を見にお出かけになっっているようです。ノエル様は昨日は一步も御屋敷から出ておられません」

紙を受け取って、それに目を通しながらアクアはさらに尋ねた。

「あの子は何？ ほら……あれよ。あの……なんていったっけ、あのターバンの子」

「ザヴィア、だろ」

ダリアの言葉に、アクアはポンと手を叩いて、

「あ、そうそう。そのザヴィアって子」

（……アクアさん、昨日あれだけ話したのに、名前も覚えてなかったのか）

が、それはどうやら日常茶飯事のように、ティース以外の面々は特にツツコミを入れることもなかった。

フィリスが答える。

「ザヴィアさんも外には出てないようです」

「そう」

そうしてアクアが目を通す間、しばらく無言が続いた。

「……こないだ名前の出た二人の使用人さんはどっちも夜に外出してるじゃない？」

「あ、はい。ただアーバンさんとコンラッドさんはオーダス様の言いつけで一緒に外出してるんです」

「一緒についてことは、可能性は低いかな。……でも、その他はどうも、関係者の動向を把握できるほど高い地位にないわねえ。自分で調べたにしても……」

「で、でも普通に働いていたらなかなかそんな余裕はないと思いますよ。ある程度そういう情報が入りやすい立場でない」と

「よねえ。……その二人みたいな偽メイドじゃない限りは」

アクアの言葉に、その二人が反論する。

「間違っちゃいけないけどよ。“偽”って言い方はなんか納得いかなーな」

「姐さんみたいな偽乙女よりはよっぽどいい……」

「……偽じゃないってば！」

いつもの調子で脱線しかけたところを、ティースが方向修正する。

「それはともかく……そのコンラッドさんかアーバンさんが犯人……デビルサイダーである可能性が高いってこと？」

だが、アクアの返答はいまいちはつきりしないものだった。

「どうかなあ。それ以外でもオルファネール家の一員ならそういう情報は簡単にわかるだろうし、それはノエルちゃんと懇意にしてるザヴィアくんだって同様なわけでしょ。ま、昨晚外出してないとか色々材料はあるけど、断定できるほどのものじゃないし。……何にしろまだまだ情報も足りないし、今の段階じゃ何とも言えないわね」

「そ、そんな悠長な……」

その言葉に食ってかかろうとしたティースだったが、アクアの指で制止される。

「焦ってもいいことはないわよ、ティースくん。犠牲者が出て気が逸るのはわかるけど、今回のことはあたしたちにはどうやっても阻止できなかったわ。それはわかるでしょ？」

「でも……」

確かに、今回に関しては今までの傾向からは予測できないことだ

った。

しかし、それでも納得できない顔のティースに、アクアは目を細め、頬を引き締めて続ける。

「この先起こりうる、あたしたちに阻止できるはずの悲劇。それを阻止するために最善の努力をすることが、あたしと、あたしたちと、そしてキミの役目よ」

「……」

真っ直ぐ見つめるアクアの視線に、ティースは思わずゴクリと息を吞んで、そして……力強く頷いた。

（阻止できるはずの悲劇……か）

その彼の頭を過ぎったのは……過去、彼に助けることができた人と、そして助けることができなかった人、その両方の顔だ。

グツと、その拳にもう一度力がこもった。

「……ふうん」

そんなティースをちよつと感心したような表情で見ていたダリアだったが、やがて視線をアクアへと戻しつつ、

「それで、どうするアクア姉？ 今回みたいなパターンも想定して……つつても、それだと、とんでもない数の人間を守らなきゃならなくなるが」

「それはひとまず考えないことにしましょ」

あっさりとアクアは答えた。

「たぶん、屋敷以外の人々が襲われるのは今回だけよ」

「え。アクアさん、それは……」

尋ねたティースに答えるアクアの言葉は、ほぼ大半の想像通りだった。

「お・と・め・の勘、よ」

「そ、そんな無茶苦茶な……」

うろたえるティースにアクアは小さく微笑んで、

「どっちにしろ、あたしたちの人数じゃ今以上のことは不可能ですよ？ ピンポイントで目星がついてるなら別だけどさ。……何にし

でも今は、ここで犯人の尻尾を掴むことが先決。わかるわよね？」

「あ、なるほど……」

納得したティースに、ダリアが意地の悪い笑みを浮かべて言った。

「アクア姉は何も考えてないようで、少しは考えてるんだぜ？」

「……なんでよ！ あたしってば、見た目からして思慮深いでしょ！？」

「姐さん。——辞書、引いてきた方がいい……」

「ちょっ……もう！ そこまで言わなくてもいいじゃない！」

相変わらずドロシーの突っ込みは苛烈を極めていた。

朝食の席にエルトンとカティナの姿はない。昨日あったはずのザヴィアの姿もなく、いたのはオーダスとノエルの二人だけだった。

その場において、ティースたちがすでに知っている事件についてオーダスから改めて説明があり、そしてファントムの面々（ドロシーは相変わらずいなかったが）は表面上驚いた反応を示して、そして心から犠牲者の冥福を祈った。

朝食後、ファントムの面々は思い思いの場所へ……表面上は散歩だったり屋敷の見物だったりだが、その実は昨日に引き続いての情報収集だ。

そんな中、そういった任務についてのノウハウを全く持っていないティースはといえば。

「ふう……」

アクアの指示によって自室にこもった状態で、荷物の中にカムフラージュして持ってきた剣を密かに磨きながら、ティースは深いため息をつく。

（……なんか俺、役立たずだよなあ）

とはいえ彼自身、自分が基本的に単純で迂闊な人間であることを知っており、もちろんこういう活動に不向きであることは自覚し

ている。だからこそ、極力足を引っ張らないようにと大人しく指示に従ったわけであるが――

（でも、何か出来ることがないかなあ……）

昨晚起きた事件に憤りを感じていたティースに大人しくしているというのが、どだい無理な話だったのだろう。

磨き終えた剣を同じように荷物の中に隠すと、ティースは早速居ても立ってもいられなくなって、ウロウロと部屋の中を歩き始めるのだった。

（コンラッドさんとかアーバンさんとかの話を知っていたらいいんだろうけど、それを自然にやるのって難しいだろうしなあ）

ウロウロ、ウロウロ。

（……あー、くそ！ 俺にもうちよつと機転つてのがあったらなあ！）

落ち着かない様子で部屋を歩き回るティースは、さながら出産を間近に控えた父親のようであった。

と、そんな彼の元へ、ノックの音が聞こえてくる。

「？ アクアさん？」

反射的にそう返してしまったティースだったが、そこから返ってきたのはそれと全く違う、男の声だった。

「ティースさん。よろしいですか？」

「え？」

一瞬、声だけでは判断できなかったティースだったが、

「えっと……ザヴィアさん？」

「ええ」

「……どうぞ」

予期しなかった来訪者に戸惑ってしまったティースだが、一応、彼も“容疑者”の一人であることを思い出し、そして思わず訪れた機会に感謝しつつも緊張した。

「昨日はどうも。色々楽しい話を聞かせてもらいました」

入ってきたザヴィアは相変わらずのターバン姿で、片手には見慣

れないフルートのような楽器を持っていた。

ティースはできるだけ自然にするよう心がけつつ――その実、表情は少々焦りと緊張に強ばっていたが、とにかく一人掛けのソファをザヴィアに勧める。

「いや、まあ話したのは僕じゃなくてアクアさ――団長だし」

そして自身はクッションの利いたベッドの上に腰を下ろした。

ザヴィアはティースの言葉に苦笑して、

「昨日はその団長さんとノエルさんばかり話してましたからね。：私もどちらかといえば話し下手ですが、この屋敷にいると同性と話すことがほとんどないもので、この機会に色々ティースさんとお話したいと思ったんです」

そう言った。

確かに、使用人たちには避けられているという話だったし、オードスやエルトンとは直接話す機会などほとんどないのだろう。その状況はティースにも充分に理解できた。

が、

「どうして？」

もちろん知らないフリでティースは尋ねていた。

「結構男の人とか多いでしょう？ ほら……えっと、昨日僕らを案内してくれたコンラッドさんとか」

これはティースにしてはなかなか気の利いた返答だ。言葉も決して不自然ではない。

それに対するザヴィアの反応は、微かに寂しそうな笑みを伴った。

「コンラッドさんですか。私はどうも、あの人には特別に嫌われてるらしいですよ」

それは自嘲的と言おうか、諦観していると言おうか、そんな笑みだ。

「嫌われている？ それは何故？」

「実際のところは私にもわかりませんが、私がノエルさんと親しくするのが気に入らないのでしょうか。……ただ、当然といえば当然

でしょうね。だって私は、あの人たちにとってはどこの誰とも知れない男でしょう？」

それから冗談っぽく苦笑して、

「笑えることに、私は屋敷の番犬にまで嫌われてしまっているようです。何故か執拗に威嚇されるのですよ」

「で、でも、ザヴィアさんはノエルさんを助けたんじゃない？」

「ですからあの人たちにしてみれば、お金でも受け取ってさっさいなくなって欲しいのだと思います。……もちろん、私はお金が欲しくて彼女を助けたわけではないので、そうするぐらいなら黙ってここから去りますけどね」

「……あなたは旅を？」

「ええ。この街にも私の探し求めているものがなかったの、これ以上長居する理由はなくなったのですが……」

ザヴィアは膝の上で手を組んで視線を下に向けた。手の甲の奇妙なアザがティースの視界に入ってくる。

（なんだろ、水滴みたいな模様……）

「ところでティースさん」

顔を上げたザヴィアは急に話題を変えた。

「お聞きになりましたか？ 昨日も魔が現れたという話を」

「……昨日“も”？」

慎重に受け答えたティースに、ザヴィアは特に不審を感じた様子もなく頷いて、

「知りませんでしたか？ 私がノエルさんを助けたとき、それと昨日……それ以外にも、最近この町では魔が頻出しているのです」

「それは初耳だなあ」

そんなティースに、ザヴィアは少し怪訝な顔をして、

「……意外に冷静ですね。もっと驚くかと思いましたが」

「え？ あ、いや……」

ティースはしまった、と思ったが、そこへ思い出したように続けたザヴィアの言葉によって、幸いなことに傷口は広がらずに済んだ。

「ああ、そういえば昨日、団長さんが話してましたよね。……移動中に魔に出会ったことが何度かあるんですけどか？ 中には人型の魔もいたとか」

「あ……うん、そうなんだ。だから慣れてるってわけじゃないけど……」

ホッと胸を撫で下ろしたティース。もちろん昨晚アクアが話したのは完全な作り話であったが、それが思わぬところで功を奏したらしい。

「……」

そんな彼を、ザヴィアは急に無言になってじっと見つめた。

「……え？」

（な……なんだろ。また何か失敗したかな……）

ティースの背中を冷や汗が流れた。……こういうやり取りはやはり心底苦手なのである。

だがその後、ザヴィアから彼に向けられた問いは、彼の心配とはまるで無縁の、まるで想像だにしないものだった。

「ではティースさん。……人型の魔は、人と同じように話したり、人と同じように泣いたり笑ったりするということを、ご存じですか？」

「……え？」

意表を突かれた顔のティースに、ザヴィアは続ける。

「魔が、人と同じような感情を持ち、時には他人を愛し、時には自分を犠牲にしても愛する人を守ることがある……などと言ったら、ティースさんは笑いますか？」

「……」

あまりに唐突な問いに、ティースは言葉を失っていた。だが、冗談だと片づけるにしては、ザヴィアの視線は彼を真っ直ぐに見つめるまま。少なくとも彼には、それが冗談だとは思えなかったのである。

だからティースは答えた。

彼が思うままの言葉を、ほんの僅かに控えめにして。

「笑わない……かな。あり得ることだと思う」

ザヴィアは一瞬驚いた顔をした後、ふっ……と表情を緩めて微かな笑みを浮かべた。

「……変わった人ですね、ティースさんは」

「それは……よく言われるかも」

頭を掻くティースを横目に見て、ザヴィアはゆっくりとソファを立った。

「今日は良い天気ですね。昨晚、悪いことがあったなんて嘘のようです」

フルートのような楽器を手に窓際に歩み寄ると、

「窓、開けてもいいですか？」

「あ、うん。それはもちろん」

緩やかな風が流れ込む。カーテンが微かに踊り、花のような香りが室内に漂った。

ザヴィアは窓の縁に腰掛け、梓に背中を預けると、ティースを振り返って、

「ティースさんは何か楽器を演奏しますか？」

「え？ あ、いや、僕はそういう方面は全然……」

「そうですか。私もあまり取り柄の少ない男ですが、“これ”は少し自信があるんです」

言って、ザヴィアはその楽器にそっと口づけた。そこから流れ出したのは不思議な音色。曲は……ティースにも聞き覚えのあるものだった。

（これって有名な曲だったな……なんだっけ……）

それはネービスの街角でもよく耳にする曲だったが、“こういう方面は全然”なだけあって、ティースの頭にその曲名が思い浮かぶことはなく。

（不思議な音色の楽器だけど……うん。演奏は多分上手い……）

ザヴィアの演奏はティースが素直にそう思えるレベルだった。指

の動きも息の入り方にもまるで淀みがない。

「……これは最近、ノエルさんに教わった曲です」

演奏を終えてザヴィアは微笑して言った。

「私の故郷は辺境で、大陸で有名な曲とかはあまり教わらなかったもので」

「へえ……いや、でも最近覚えた割にすごく上手いよ」

「どうも。……もし退屈でなければ、私の故郷の曲も聴いていただけますか？」

途中から彼の演奏に聴き入っていたティースとしては、当然退屈だなどということはなく、

「ああ、もちろん」

頷いたティースにもう一度微笑んで、ザヴィアは再び楽器に口を付けた。目を閉じ、そして先ほどよりも集中した様子がティースにも伝わってくる。

そして楽器が音を奏で始めた。

（……不思議なメロディだな）

ティースの感想はそれが最初だ。耳慣れないメロディ。どんな音楽にも大抵は法則というか聞き慣れたリズムというか、そういうものがあるはずだが、ティースの中のその常識とは少々毛色の異なる音楽だった。

だが、

（でも……うん。この楽器の音色には不思議としつくり来るメロディだ……）

一分ほども経つと、ティースはすぐにそのメロディに馴染んだ。まるで語りかけてくるようなメロディが、先ほどの聞き慣れた曲よりもよほど心地よく感じる。

……長い曲だった。五分以上経っても終わらない。似たようなメロディを繰り返しながら、まるで物語を辿っているかのよう、曲調はやがて速く、急かすようなリズムに変わっていく。

（こりゃ……もしかして“上手い”なんてレベルじゃないのかも…

…)

結局、十五分以上もの時間をかけて曲は終わりを告げた。

「ふう……」

息をついたザヴィアの額にはうっすらと汗が浮かんでいる。

「……」

その頃には、ティースは完全に聴き入っていて、曲が終わってからもしばらくそれに気付かないほどだった。

「ティースさん」

ザヴィアの呼びかけ。風がカーテンを揺らす音。外から聞こえる犬の吠え声。

ようやくティースは我に返った。

「……え？ あ……」

「やはり退屈でしたか？」

「あ、いや、そんなこと！」

ティースは手を振ってそれを否定すると、

「思わず聴き入っちゃったぐらいだから！ いや……ホント、お世辞抜きで素晴らしかったよ」

「そう言ってもらえると安心します」

ザヴィアは額の汗を拭って、そしてやはり微笑んだ。その表情には達成感というか満足感というか、そんな類の色が見える。

「でも……ホントにすごいよ。耳慣れない曲なのに、聴いてるうちにそれがすごく心地よくなっちゃって」

「ノエルさんにも同じことを言っていたきました。……嬉しいものですね、故郷の文化を誉めてもらえるというのは」

そしてザヴィアはゆっくりと窓を閉じ、そして室内へと戻ってくるとソファへ腰を下ろす。

それを見て、ティースは思った。

（さっきからノエルさんの名前をよく出すけど……この人も……なのかなあ）

昨日の様子から、ノエルのザヴィアに対する気持ちは間違いない

と思っていたティースだったが、その逆はいまいち半信半疑だったのである。

(……じゃあ、目的がなくなったのにここに居続ける理由って、やつぱり——)

そんなことを考えた直後のことだった。

——甲高い悲鳴が響き渡る。

「！」

「っ……」

ティースとザヴィアは同時に腰を浮かせた。

「……化け物——っ!!」

響いたのは硝子の破裂音。そして重なった複数の悲鳴。近い。

「この方向は……っ!!」

ザヴィアが弾かれたように部屋を飛び出していく。

「……っ!!」

もちろんティースもすぐさま、その後に……少し迷いながらも荷物の中から剣を掴み、それから部屋を飛び出した。

「ザヴィアさん! 待ってくれ!」

すでに遠くなっていたザヴィアの背中を懸命に追いかける。だが、その足はティースよりよほど速かった。

「ノエルさんっ!!」

そしてザヴィアの背中中は迷わずに廊下を突き進み、とある一室へと飛び込んでいく。

……ティースが数秒遅れて辿り着いたとき、部屋には四つの影があった。

(こいつらは——っ)

部屋の奥にはノエル。一見したところ怪我はない。そして飛び散ったガラス窓……そこに成人男性より大きめの二匹の魔がいた。鋭く大きな足爪、そして大きな翼。

ティースにとって見るのは初めてだったが、頭の中にそいつらの

知識はあった。

（風の五十四族！）

ザヴィアは部屋の入り口で、彼らの動きを牽制するように睨み付けている。丸腰だが、その威圧感はティースにも伝わるほどに強烈だった。魔もそれを感じてか、割れたガラス窓の位置から先に進もうとはしていない。

「性懲りもなく……」

ザヴィアの声色に、先ほどまでの穏やかな雰囲気は微塵もない。まるで突き刺さるような迫力があった。

「……帰れ。ここはお前たちの来る場所じゃない」

二匹の魔はザヴィアの眼光に見据えられたまま、動かない。

「ザヴィアさん、丸腰じゃー！」

「ティースさん。……あなたは危険だから下がって」

振り返らずにザヴィアは鋭く答え、そして一歩、部屋の中へ踏み出した。

「ザヴィア様……」

部屋の隅で、ノエルが弱々しい声を発する。が、その表情に絶望の色は全く見えない。それだけ彼を信頼しているということなのだろう。

「ノエルさん。動かないでください」

そしてもう一歩、魔を見据えたままザヴィアが部屋の中に踏み込んでいく。

「ケエエエ……」

魔が不思議な鳴き声を発した。

ザヴィアがさらに一歩進んでいく。

（……無茶だ……）

ティースは剣を携えたまま、どうすべきか迷っていた。

……ザヴィアの発する威圧感は、どう考えてもただ者ではない。おそらく二匹の魔もそれを感じて襲いかかるのを躊躇しているのだろう。が……いくら彼がただ者でなくとも、丸腰ではどうしようも

ないのもまた確かだった。魔力の壁を打ち破るための破魔具も身に付けているようには見えない。

（俺じゃ力不足かもしれないけど……ここはやるしか——）

そう言って鞘から剣を抜こうとする。

——だが、その前に状況が動いた。

「……ザヴィアさん!!」

片方の魔がノエルに向かって飛びかかったのだ。と同時に、ザヴィアも床を蹴った。……もちろんティースも同時に。

「ケエエエエツ!!」

「っ——!!」

魔の鳴き声と、ノエルの声にならない叫びが重なる。

その瞬間、ザヴィアは人とは思えない瞬発力でその間に割って入っていた。だが、彼は丸腰だ。襲いかかる魔の鋭い爪を防ぐ手段はない。

「ザヴィアさんっ!!」

ティースの叫びとともに、ザヴィアの体が魔と向かい合う。鋭い爪が襲いかかる。

（……間に合わないっ!!）

数歩遅れたティースにはそれを助ける手段がなかった。

そして彼の目の前で、ザヴィアの体は無惨にも引き裂かれ——ようとした、そのとき。

（——えっ!?!）

ざわっ……と。

まるで衝撃波のように、部屋の中に何とも言えない感覚が広がった。……それは決して物理的なものではない。圧迫感というか、威圧感というか、そういった類のものだろう。

（なんだ……これ……!?!）

だがティースは確かに感じた。全身を襲う、思わず総毛立ってしまいそうな力の迸り。

……それが彼の気のせいなどでないことは、その後の展開を見れば

ば明らかだった。

「ケエエエエツ……」

二匹の魔は情けない鳴き声を上げ、ザヴィアの眼前まで迫って爪を収め、そしてゆっくりと後ずさっていったのだ。

（まさか……魔が怯えてる！？）

「帰れ」

ザヴィアの声は、まるでそこに何らかの力を帯びているかのような、奇妙な重圧感がある。

「帰らなければ——」

言い終わるまで待つ必要はなかった。

「ケエエエエ……」

二匹の魔は再び情けない鳴き声を上げると、そのまま、まるで慌てたように窓から飛び去ってしまったのである。

その4『キューピッド』はアレルギー』

昼間に起こった騒ぎもひとまず落ち着いた頃、オルファネール家には夜が訪れていた。

「どうもあの獣魔は山の方から飛んできているみたいね。……もう少し長居してくれば、あたしも間に合ったんだけど」

ティースを含むファントムの面々は、前日と同じように本日の成果について報告し合っている。

そして今日、その焦点になっていたのはもちろん、昼間にノエルの部屋に現れた二匹の獣魔について、であった。

「風の五十四族。あたしも飛び去っていくところを見たけど、おそろくティースくんの言うとおりだわ」

アクアは昨日と同じようにベッドにうつ伏せに転がっていた。が、昨日のように足をブラブラさせたりはせず、組んだ両手の上に顎を乗せて、その視線は比較的真剣だ。

「五十四族ねえ。それじゃあ」

他の面々も陣取っている位置は昨日と全く同じ。そしてソファに座った片方、双子の妹のダリアが少し首をひねりながら言った。

「本当にデビルサイダーが紛れ込んだとしたら、そいつは結構な“大物”かもしれないな」

「え？　どういうことだ？」

疑問を向けたティースに、

「お前、本当に何にも知らねー……って、ま。まだ二ヶ月ぐらいじゃ当たり前か」

ダリアは言い直して、それから丁寧に答えた。

「五十番台ともなると、主に上位族か将族の使い魔クラスだ。言い換えりゃ、下位族じゃちょっと制御が難しいぐらいのクラスってことさ。わかんדר？」

もちろんティースは理解した。そして今日現れた二匹の獣魔の姿

をもう一度思い出す。

「……ってことは、あの鳥みたいなの、やっぱ手強い相手なのか」
ダリアは頷いて、

「お前ぐらいだと二匹を相手にするのはちょっと難しいんじゃないか？ あたしだってできれば遠慮したいさ。ヘタすりゃ命を落とすからな」

そこへ、その隣で相変わらず体を丸めた体勢のドロシーが鼻を鳴らす。

「本当に恐ろしいのは風の五十四族なんかじゃない……」

「？　　どういうことだ？」

疑問の目を向けると、ドロシーは何も答えずにアクアを見た。それにつられて、ティースの視線も自然と彼女の方へ移動する。

アクアは答えた。

「簡単なことよ、ティースくん。ノエルちゃんを襲った魔はそれなりの力を持つ獣魔だったわけ。……それじゃあ」

一瞬、アクアの目が鋭い光を放った……ように、ティースには思えた。

「その風の五十四族を眼光だけで追い払ったザヴィアって子は……一体何者なのかしら、ってこと」

「……まさか」

その言葉が意味するところは、ティースにも理解できた。そしてそれは、彼としては少々受け入れがたいものだった。

思わず声が大きくなる。

「アクアさん！　彼が……その、敵だって——！」

「声がデカイ。何度言わせるつもりだ……」

「ご、ごめん……」

ドロシーに睨まれて、ティースは咄嗟に手で口を塞ぐ。

そして改めて声を潜め問いかけた。

「アクアさん。彼が……その、デビルサイダーだって言うんですか？」

だが、アクアはすぐに否定の意を示す。

「別にそうだと言ってるわけじゃなくて。ただ、彼は“ごく普通の旅人”なんかじゃない。それだけは間違いない気がしない？」

「……そりゃあ」

いくらティースでもそのぐらいはわかる。威圧だけで魔を……それもそこそこ強い獣魔を追い払ったのだ。とんでもない“腕利き”らしいということは感じていた。

「でも、あの人は騒ぎが起こってすぐにノエルさんを助けに行って、それで実際に魔を追い払ってるし……」

納得できずに言いかけたティースに、思わぬところから援護が入った。

「ま、確かにそいつの言うことにも一理あるぜ、アクア姉」

「……ダリア？」

ティースにとって彼女の援護は少々意外だった。

ダリアはチラッと彼を見てからソファに背中を預け、頭の後ろで腕を組むと、

「あたしが聞いた話だけだな。朝食後、ノエルはそのザヴィアの部屋に行ってしばらく一緒にいたらしいんだ。で、別れて部屋に戻ったのが十一時頃。……ティース。お前確か、ザヴィアが部屋に来たのはやっぱり十一時ぐらいだって言ってたよな？」

「あ、ああ……」

「ってことは、ザヴィアはノエルと別れてすぐ、お前の部屋に行ってたってことだろ？」

「つまり？ ザヴィアくんには獣魔と接触する時間がなかったってこと？」

「そう考えられないか？」

アクアは少し思案する顔になって、

「でも、たとえば最初から無差別に屋敷の人を襲うように指示してあったかもしれないじゃない？」

「いや、だって考えてみるよ、アクア姉。昨日の事件、それに今日

の騒ぎ。どっちも今までにはなかったパターンじゃないか？ ザヴィアはあたしたちが屋敷に来てから一步も外に出ていないんだぜ？」
「……ああ、そっか。獣魔が屋敷の中にまで押し入ったのは初めてかあ」

アクアは納得して頷くと、

「今までと違う行動を取っている以上、そこにはやっぱり何らかの指示が必要ってわけね。……ドロシー？ どう思う？」

「ああ。オレもそれについては間違っちゃいないと思う……」

「そっか。ドロシーもそう思うのねえ……」
ティースはホツとする。

どうやら場の意見は、彼の心配を否定する方向へ向かっているようだった。

「うーん……あ」

そこへ、アクアがふと思いついたようにティースを見て、

「そういやティースくん？ “剣”については、何も追求されなかった？」

「……え？ あ」

剣……ティースが騒ぎのときに持ち出した“細波”のことである。もちろん騒ぎの後、彼が剣を持つ姿は何人もの人に目撃されていたのだ。

「いや。もちろんザヴィアさんとか、その後に駆けつけたコンラッドさんとかに聞かれましたけど……その、旅の危険から身を守るために持っているって説明したら納得してくれました」

「そっか。上出来上出来」

アクアはまるで子供を誉めるような笑顔だったが、そこへ、ダリアが意地の悪い笑みで口を挟む。

「ま、お前は芸の方じゃ“役立たず”だったし、あたしたちの護衛役だってことにすりゃ、かえって自然かもしれないねーな」

「……」

笑いながら言ったダリアの言い様に、ティースは少々納得できない

いながらも、事実なだけに何も言い返すことができなかった。

その翌日も晴天で、オルファネールの屋敷には朝から鳥の鳴き声が聞こえている。

「あれ……ノエルさん？」

そんな中、昨日、獣魔と相對した興奮が残っていたのか、いつもより早めに目が覚めたティースは、部屋を出たところでノエルとばったり出くわしていた。

「おはようございます、ティースさん」

ノエルはにこやかにそう言うと、貴族の娘らしく上品な仕草で挨拶した。

その様子を見る限り、彼女は昨日の出来事を引きずっていないようだ。襲われたのが初めてではないということもあったし、おそらくはザヴィアが必ず助けてくれると信じているからだろう。

だが、ティースが怪訝に思ったのはそのことではない。

「あの。ノエルさんって……部屋、こっちの方でしたっけ？」

そう。彼女はたった今、ティースたちのいる客室と同じ並びから出てきたのである。

ノエルは笑って、

「いえ。私の部屋は昨日、窓が壊れてしまったものですから」

「……あ、そういうやつか」

「昨日はどうもありがとうございました」

「え？ ……ええっ？」

ペコリと頭を下げたノエルに、ティースは慌てて、

「い、いや、やめてくださいよ。僕は全然何も……ほら。ザヴィアさんが追い払うのを見てただけで……」

だが、ノエルはゆっくりと顔を上げると、

「いいえ。恐ろしい魔が相手ですから。駆けつけてくださっただけ

でも大変なことではないですか」

「あ、いや……」

ニッコリと微笑まれて、ティースは少し赤面してしまった。

そして、

（い、いい子なんだなあ、ノエルさんって……）

単純と言おうかお人好しと言おうか。彼はその言葉だけでノエルの印象を一気に良くしてしまったようで、

（貴族のお嬢さんってわがままな子が多いと思ってたんだけど……違うみたいだ）

などと思ってしまう。

ティースの周りにはファナという例外もあるのだが、それでもなお、彼の中では“お嬢様Ⅱわがまま”というイメージが定着していたのであった。

「で、でも」

赤くなった顔を隠すように、ティースは話題を変える。

「ザヴィアさんってすごいですね。あんな恐ろしい魔を相手に……

その、丸腰で」

「ええ」

ノエルは嬉しそうに目を細め、そして少し頬を染めて答えた。

「ザヴィア様は素晴らしい方です。確かに、見た目は少々変わっているかもしれませんが、とても優しい目を持っておられます」

「……」

ティースの誉めた内容とはあまり関係のないことだったが、あまりに嬉しそうに語るノエルに、そのことを突っ込む気にもなれなかった。

「それなのに……」

と、そのうち、弾んでいたその声がほんの少し影を帯びる。

「みんなわかってくれません。得体が知れないとか、何を考えてるのかわからないとか」

「……」

それが徐々に憤りを帯びてくるのがティースにも感じられた。そして直後、強い視線がティースの方へ向けられる。

「コンなどはひどいんですよ！ ザヴィア様が何か企んで来たのかもしれないって、そんなことを言うんです！」

「……あ、いや」

その剣幕に、ティースは少々たじろぎながらも、

「コン、って？」

「あ……す、すみません」

ノエルは我に返った様子で口をおさえ、それから少し恥ずかしそうに俯くと、

「えっと、コンというのは執事補佐のコンラッドのことです。私、小さい頃から世話になってきたものですから、つい」

「あ」

ティースは思い出す。

（そういやフィリスがそんなことを言ってたっけ）

もちろんティースは最初から疑ってなかったが、その情報が正しかったことがどうやら立証されたようである。

（コンラッドさんはそれでノエルさんのことを心配してるのかな……？）

「だから私、コンが謝ってくるまでは絶対に口を利かないことにしたんです。……ティースさんもひどいとは思いませんか？」

「そ、そうですね」

なんとも答えにくい問いかけだったが、ここで否定することなどできるはずもなく。もちろんティース自身もどちらかといえばノエルの意見に賛成だったわけだが。

「前はあんなこと言う人じゃなかったんですけど……ザヴィアさんに対してだけは、本当にひどいんです」

ノエルが最後に少し淋しそうな顔をするのが、ティースの視界にも入った。

（コンラッドさん……か。ノエルさんを心配する余りのことなのか

なあ……)

それはわからなかったが、それとは別に、ティースの中ではつきりしたこともある。

「あの、こういうこと聞いたら失礼なのかもしれませんけど……」

「はい？」

躊躇ってから、切り出す。

「ノエルさんって、ザヴィアさんのこと……その、つまり……」

「あ」

聞きづらくてしどろもどろになったティースに、ノエルは逆に恥ずかしがる様子もなくきっぱりと答えた。

「ええ、お慕いしてます。……別に隠すつもりはないですから、気になさらないでください」

そして満面の笑顔を見せる。

「そ、そうですか」

そんな彼女の態度に、ティースはドロシーの言葉を思い出した。

(こういう子は一度沸騰すると見境なし……か)

しかしまあ、ティースとしてはドロシーのように否定的になれない。それどころか、この“身分違いの恋”を応援してあげたいとも思った。

「それってやっぱり、何度も助けてもらったからですか？」

「それもありますけれど……少しお恥ずかしい話なのですが」

ノエルは言葉通りに少し恥ずかしそうな表情をすると、

「ごらんになってわかると思いますけど、私、あまり世間のこととか知らなくて。何もしなければずっとこのまま、何も知らないままで終わってしまいそうで、それは嫌だな、って以前からずっと思っていたんです」

「……」

「でもザヴィア様は私と違って、色々なことを知っていて、色々なことができて、それでいてとても優しい。それが、私みたいな人間にはとても素敵に思えて……」

「……そうですか」

ティースは彼女のような状況に陥ったことがないので、その気持ちが理解できるとは言い難い。が、言いたいことは何となくわかる気がしていた。

（これだけ素直に想っていて……多分、ザヴィアさんの方も……それなら、なんとかしてあげたいよなあ）

「ティースさん？」

「あ、いえ……」

ノエルの不思議そうな視線に、ティースは視線を泳がせて誤魔化しかけたが、

（……そうだよな。味方がいないんじゃ可哀想だよ……）

思い直し、そして視線を戻して言ったのだった。

「僕は……応援しますから。二人のこと。だから……その、頑張ってください」

「……」

驚いたようなノエルの顔。

「……ティースさん」

だが、その困惑はやがて、素直な喜びの感情となって表れた。

「……ありがとうございます」

それは心からの言葉のようだった。

やはり心細かったのだろう。何しろ彼女は大貴族の娘。相手はこの誰とも知れない旅人の男。……それは想像以上に高い壁だ。たとえ相思相愛であっても、その恋が成就するにはたくさん障害を乗り越えなければならない。

世間知らずな彼女でも、そのぐらいのことは理解していたのだろう。

だから、彼女は喜んだのだ。少しだけ泣き出しそうな顔で。

「え？ あ、あの、ノエルさん……」

何が悪かったのかとオロオロするティースに、ノエルはゆっくりと笑みを浮かべて、

「そう言ってくれる人なんて、今までいなかったから……」

「……」

「本当に、ありがとうございます」

そして自然な流れの中、感謝の意を示すために、呆然としたティースの手を取って。

手を取って。

——手を。

（あ）

そう。油断してすっかり忘れていたようだが——

「え……ティ、ティースさんっ!？」

彼は、“女性アレルギー”なのである。

——全治、一時間——

（変だな……どう考えても、獣魔とコンタクトを取ってそうなヤツが浮かばねえ）

ティースがノエルに触れられて気絶している間、朝食を終えたフロントムの面々はいつも通り、それぞれに情報を集めていた。

その中の一人、ダリアⅡキャロルは、ミューティレイクにいる頃よりはずっと大人しい服装——着慣れない長袖のワンピース姿でオルファネールの屋敷を歩いている。アクアなどはそんな彼女を見るたびに笑ったりするが、ダリア自身、それが自分に似合っているとはこれっぽっちも思っていないので気にはならなかった。

と、そんなことより、今の彼女の頭は今回の件でいっぱいなのである。

（あれだけ大型の獣魔だ。街の方に下りてくしゃ目撃者がいないはずはねえ。けど、事件のとき以外で獣魔を目撃したヤツは皆無。……ってことは、やっぱ“犯人”がコンタクトを取りに山の方に行っ

てるはずなんだけどな)

玄関から外へ出る。外は今日も夏の日差しが射していた。

(屋敷の外に共犯者がいて、そいつが獣魔に命令を下している可能性もあるか? ……にしても、そいつと連絡を取るのだって屋敷の中からじゃ難しいはずだ)

少し歩いて視線を右に向けると、そこには屋敷と繋がった高い塔があり、さらに視線を斜めに移動させるとそこには街の背後にそびえ立つ山、山脈“ヴァルキュリス”の一部が視界に入ってくる。

(塔か。……ん?)

そのときダリアの目には、一瞬、何かが光ったように見えた。

塔の最上階……その窓から。

(……なんだ?)

もう一度。

(塔? 光? ……まさか)

彼女の思考が、その“可能性”に辿り着くまでそれほど時間はかからなかった。

(そうか……接触しなくても意志を伝達する方法はある……)

急いで屋敷に引き返す。

塔は屋敷の中から繋がっており、そこ以外からは入れない。

ダリアは頭に叩き込んだ屋敷の断面図を思い浮かべながら、塔の入り口へと向かった。

(光……アレが何かの信号を送っているのだとしたら――)

だが、

「……当然、鍵、か」

塔へ続く入り口には鍵がかかっていた。

「……」

ダリアは辺りを見回した。幸い、近くに人の気配はない。

(鍵がかかっている場所への進入はご遠慮下さい……か)

コンラッドの言葉を思い出したダリアは、もう一度辺りを見回し、そしてポケットを探った。

（鍵がかかっている部屋なんてほとんどない……ってことは、ここにはどうしても入って欲しくないってことだよな）

彼女がポケットから取り出したのは細い針金のような工具だ。

（結構頑丈な鍵を使ってやがるな……まさか罠はないと思うが）

それでも慎重に、何度も辺りの様子を窺いながら鍵の構造を調べ
る。

（罠はねえな……けど、ちょっと時間がかかりそうだ）

塔への入り口は当然屋敷の端っこにある。だから人通りもそれほど多くはない。が、もしこじ開けているところを見られたら一大事
だった。

（……どうする？ アクア姉に相談してからにするか……）

と、そのとき。

「！」

ダリアは素早く扉から離れた。そして一番近い——といっても十
メートルほど離れた曲がり角に隠れる。

（誰か下りてきたな……誰だ……？）

鍵の外れる音、続いてドアの開く音。

ダリアがそっと覗いてみると、ちょうど、出てきた人物がそこに
鍵をかけているところだ。

（ありゃ……コンラッドか）

ティースに迫るぐらいの長身、がっしりとした体格に正装。遠目
でも間違えるはずはない。

「……」

ダリアは少し考えてから一つ頷くと、曲がり角から出ていった。

「……あなたは」

「や、あんた、コンラッドさんだっけ？」

「……こんなところで何をなさっているのですか？」

怪訝そうなコンラッドに、ダリアは笑いながら、

「いや、あたしってこういうお偉いさんの住むとこってどうも馴染
めなくてな。じっとしていると息苦しいから散歩してんだよ」

まるで男のような言葉遣いにコンラッドは少し困惑したようだったが、すぐにいつもの仏頂面に戻る。

「この先は鍵のかかった部屋があるだけです。散歩なさるのでしたら別の場所へ行かれるべきでしょう」

「ああ、そうなのか。そりゃ悪かった。なんせこんな広い屋敷、滅多に来ないんでね」

「では、私が仕事がありますので」

コンラッドはそう言ってダリアの横を通り過ぎていった。

(……動揺してたのかどうかもわかんないな、あれじゃ)

それでもダリアは満足そうな顔でそれを見送ると、そしてもう一度ポケットを探る。

(ま、でも……おかげでこじ開ける必要もなくなったわけだ)

そっと笑みを浮かべた。

(……さて、鬼が出るか蛇が出るか)

その手にコンラッドがポケットにしまったはずの鍵を握り、辺りの様子をもう一度窺ってから、ダリアは塔の入り口へ向かったのだった。

(うう、油断していた……)

ティースが目を覚ましたとき、そばにはノエルとザヴィアがいた。その話によると、彼が気絶したところにザヴィアがやってきて、そのまま部屋に運んだとのことだ。屋敷の医師も来ていたようだが、すでにその姿はなかった。

「ちょっと貧血気味なもので……たまにああいうことがあるんです。体は全然大丈夫なので、その、ご心配なく」

「びっくりしました」

ホッとした様子で、ノエルは答えた。

「急にお倒れになられたものですから……てっきり、心臓の病でも

抱えておられたのかと……」

そこへザヴィアが続ける。

「私も驚きましたよ。廊下を歩いていたら急にノエルさんの叫びが聞こえたもので、またヤツらが現れたのかと」

「騒がせてしまったみたいで、本当にすみません……」

二人の言葉にも、ティースは恐縮するばかりだった。

（ホント、情けないよな……俺……）

自身ではどうにもできないとはいえ、気絶するたびにティースはそう思うのだ。もちろん本当の事情など恥ずかしすぎて目の前に二人に話すわけにもいかなかった。

だが、ノエルは逆に頭を下げると、

「こちらこそ。お加減が優れないことにも気付かず、舞い上がってしまっ」

「あ、いや、そんなこと……」

そんな二人の会話に、ザヴィアは怪訝そうな顔をして、

「何の話ですか？」

ノエルがようやく少しだけ微笑みを浮かべて、そして正直に答える。

「ティースさんが私たちのことを応援すると、そう言って下さったのです。それで」

「え？」

一瞬、わからない顔をしたザヴィアだったが、やがてその意味を悟ったのか、

「……ノエルさん。私は――」

少しだけ眉をひそめた。

が、そんなザヴィアに構わず、ノエルは急に何事か思いついた顔をする、

「そうだ、ザヴィア様。せっかくの機会です。この場ではっきりさせましょう」

「え？」

「ノエルさん？」

戸惑うティースとザヴィアを余所に、ノエルは視線を真っ直ぐにザヴィアへと向けた。

「私はザヴィア様のことをお慕いしております。……ザヴィア様は、私のことがお嫌いですか？」

「……」

ザヴィアがチラッとティースを見た。

ティースもあまりに大胆な彼女の言動に少し呆氣にとられて、
（……この子、俺の目があるのに……これが“若さ”ってやつなのかなあ）

せいぜい二つぐらいしか変わらないはずだが、“精神的に枯れている（シーラ談）” ティースとしては、そんな彼女の態度が信じられなくもあり、また感心でもあった。

だが、当事者であるザヴィアとしてはそうも言ってられないように、
で、

「ノエルさん。そんなこと、ここで――」

「いいえ」

だがノエルは頑なだった。

「ザヴィア様は二人きりだと必ずはぐらかしてしまいますから。……ティースさん。証人になってもえませんか？」

「え、証人……ですか？」

ノエルは頷いて、そして再びザヴィアを見る。

「嫌いなら嫌いとはつきりおっしゃってください。それなら私は諦めますから。……ただし、下手な言い訳はなしにしてください」

それに対しては、ザヴィアははつきりと答えた。

「いえ。……嫌いなどということは決してありません」

「では、どうして私の気持ちに応えてくれないのです？」

「それは……」

たじろぐザヴィアに、詰め寄るノエル。

……それを間近で見ているティースは、少々息の詰まる思いだっ

た。

（しゅ、修羅場……っていうのかな、こういうのも……）

しかし、ティースは気絶する前にも言ったように、ノエルのことを応援したい気持ちだ。もちろんザヴィアが躊躇う理由はわからないし、もしもそういう関係になったなら彼の方がよほど苦労するに違いないが、それでも。

（ノエルさん、真剣だもんな……）

純粹と言おうか一途と言おうか。応援すると言ったときの嬉しそうな顔といい……その全てが、ティースにとっては思わず応援したくなるようなものだったのである。

だが、それに答えるザヴィアは、やはり煮え切らない態度だった。

「……ノエルさん。あなたは高貴な家の方です。私は――」

「そんな言葉は聞き飽きました！」

ノエルはまるで彼の言葉を振り払うように首を振って、そしてキツと彼を見つめる。

「もしそれが理由だと言うのなら、わかりました！ 私、この家を出ます！」

「……無茶を言わないでください。そんなこと、できるはずがない」

「無茶なんかじゃありません！ ザヴィア様が、どうしてもそれが気になるというのでしたら、私――！」

「……待って下さい。それだけが理由ではないのです。私は決して、あなたと結ばれることのない男なのですよ」

「だったら、その理由をおっしゃってください！」

「それは――」

再び、ザヴィアは言葉に詰まった。視線を泳がせ、言葉を探しているようだ。

ノエルはそれを厳しい目で見つめている。空白が続くほどに、その視線は険しさを増していくようだった。

「……」

ティースももちろん口を挟む余地などなく、ただ黙ってそれを眺

めている。

そして……一分近くも沈黙が続いただろうか。

ようやくザヴィアが答えた。

その視線は、部屋の時計を捕らえて、

「……ノエルさん。そろそろお出かけの時間ではありませんか？」

「っ……！」

「今日はお父様方と一緒に街へ行かれるとか。遅れてはまずいのではないですか？」

「……」

ノエルは顔を赤くして立ち上がった。少し、唇が震えているように見える。

（……ノエルさん）

何も言わずに部屋を出ていったノエルを見送って、ティースは少し胸が締め付けられる想いだった。

「……」

ザヴィアもまたそれを無言で見送っていた。

——部屋の中に、なんとなく気まずい雰囲気流れる。

言葉を探し、結局何も思いつかず、それでもティースは言葉を整理できないままに呼びかけることにした。

「あの……ザヴィアさん」

「……」

ザヴィアの口から一つ、息が漏れる。そして言葉が続いた。

「どうも、エルトンさんやカティナさんが先日見に行った歌劇を見に行くそうですね」

「……歌劇？ この状況で？」

もちろんティースも眉をひそめた。

（な、何を考えてるんだ……襲ってくれて言ってるようなものじゃ——）

だが、ザヴィアは怪訝そうな顔をして、

「ティースさんはご存じなかったのですか？ 団長さんがそれに同

行すると聞きましたけれど」

「え？ あ……」

（なるほど、そういうことか……）

それならティースにも納得できる。

（アクアさんが一緒に行くなら大丈夫か。オーダスさんもその辺はちゃんと考えてのことなんだろうな）

安心したところで、ティースの頭には再び先ほどのノエルの顔が思い浮かんでくる。

（ノエルさん、歌劇どころじゃないだろうな、きつと……）

「とはいえ、昨日のようなこともありましたが、屋敷の中でも絶対に安全とは言えませんが――」

「……ザヴィアさん」

どうやら彼は、さっきの話題から離れたがっているようだ……と、そう感じ、ティースは無理矢理言葉を割り込ませた。

そして、思ったままに口を開く。

「ノエルさん、あれじゃ少し可哀想じゃないかな……？」

「……」

ティースの言葉にザヴィアは急に口を噤む。

「俺が口を挟むことじゃないのかもしれないけど……」

「……」

ザヴィアは無言でゆっくりと立ち上がった。

そして窓際へと歩いていく。

気を悪くしたのかとも思ったが、それでもティースは続けた。

「でも、少なくともノエルさんは真剣なんだろうし――」

「ティースさん」

窓を開け、そしてザヴィアはいつかのようにそこに腰を下ろして振り返った。

その表情から察するに、どうやら気分を害したわけではないらしい。

そしてザヴィアは言った。

「わかっています。ノエルさんが真剣であることも、私がそれにどう応えなければならぬのかも」

「それじゃあ——」

ザヴィアは首を横に振って、

「ただ、それでもできることでないことがあります。ノエルさんがいくら慕ってくれても、たとえば私がいくら彼女を愛していたとしても……」

「それはわかるよ。相手があんなお金持ちじゃ腰が引けるだろうけど——」

「それだけではないですよ」

「え？」

窓の枠の上で外に目を向け、ザヴィアは何事か迷っているようだった。その視線の先で、屋敷の馬車が敷地の外へと出ていく。

そつと、ザヴィアは手にした楽器に口をつけた。

——流れ出したのは、ティースにも聞き覚えのある、“別れ”を題材にした曲。

（それだけじゃない？　じゃあ一体……）

どこか物悲しいメロディは、五分ほどで終わりを告げた。

「これも……ノエルさんと出会ってから覚えた曲です」

「……ザヴィアさん」

ゆっくりと、ザヴィアの視線がティースの方へ向けられる。

微笑んでいた。

「ティースさん。あなたはノエルさんに親切にしてくれたし、私のことも気に掛けてくれる。……だから、あなたを信用してお話します」

「……？」

「覚えていますか？　私が昨日、あなたに尋ねたことを」

「え？」

「魔が、人を愛し、その愛のために生きることがあると。魔が、人と同じような感情を持っていると」

「……」

「ティースさんはそれを肯定してくれましたね」

その瞬間、ティースの頭に過ぎったのは、

（……—まさか）

とある可能性。

それは容易には信じがたい、だが、昨日の魔を追い払った異常なまでの威圧感、そしてアクアの言った“ただ者じゃない”という言葉。そして今、彼が口にした言葉。

そこから導き出されるものは、自然とそこに収束していくしかなかった。

「まさかザヴィアさん、あなたは……」

ザヴィアは外から見えない角度でターバンをズラした。

「たぶん、今、あなたが思った通りです」

その下から現れたもの……最初に目についたのは、右の額辺りから後頭部にかけての大きな傷跡。どうやら刃物傷のようだった。

そしてもう一つ。

「その耳は……」

実際にティース自身も見たことがある、長く尖った耳。

それは、彼が“魔”であることを示すもの——

「ティースさん、もしあなたが私の本当の姿を受け入れてくれるなら、という前提ですが——」

ザヴィアはすぐにそれを隠し、いつも通りにターバンを深くかぶった。

「このことは誰にも秘密にしてもらえませんか？ もちろん、あなたのお仲間にも」

「……」

あまりのことに、ティースは返す言葉が出なかった。

（ザヴィアさんが……魔だって……？）

そう認識した瞬間、普通の人間ならパニックになったかもしれない。

あるいは人を呼び、彼を捕らえようとしたかもしれない。

だが、ティースはそういう点で言えば、普通ではなかった。

おそらく彼は、大陸中でも珍しい、魔と意志を交わしたことのあ
る人間だったから。彼がもし悪い意志を持っていたなら、人々から
“デビルサイダー”と呼ばれていてもおかしくないような、そんな
人間だったから。

だからティースは、ほんの僅かに深呼吸して気持ちを落ち着かせ
ると、そのまま言葉を返した。

「……で、でも……ザヴィアさん。ノエルさんたちは頭の傷のこと
知っていて——ってことは、そのターバンを外してみせたんでしょ
う？」

「……」

ティースが比較的落ち着いていることが意外だったのか、ザヴィ
アは少しの間、疑問の視線をしていたが、やがて答えた。

「……ええ。ティースさんはご存じないでしょうね。……デビルバ
スターなど、魔に詳しい方なら知っているはずだと思いますが、最
近では“人に姿を変える方法”というのが発見されているのです」

「人に姿を変える？ ……魔が？」

「いくつかの方法があります。とてつもない制約を課して半永久的
に人の姿でいる方法、あるいはリスクは伴わないものの、ほんの短
時間しか人の姿でいられないもの。……ノエルさんたちに見せたと
きは、その方法で一瞬だけ人の姿になったのです」

「……そんな方法があるのか」

やはりティースには初耳だった。

「ええ。といっても、私たちが人と違うのは耳と、あとは魔力を行
使するときに若干変わる程度。幸い……と言っているかわかりませ
んが、私にはターバンを深くかぶる理由が他にもあった。だから、
今まで気付かれずにいられました」

ザヴィアはもう一度窓の外に視線を移した。

そして少しの無言。

開いた窓から流れ込む風が、カーテンを微かに揺らした。

再び、視線がティースの方を向いたとき、そこには先ほどまでも真剣な光が宿っていた。

「ティースさん。……私を捕らえ、そして引き渡しますか？」

「……」

だが、その問いに対しては、ティースは少しも迷うことなく答えた。

「いいや。だって……あなたは何も悪いことはしてない」

「そうですか？」

ティースの言葉にザヴィアは微笑んで、

「最近の事件、私が引き起こしたものだとは考えないのですか？」

「……あ」

それは確かに、真っ先に考えてしかるべきことだった。……いや、ティース以外の誰かなら——たとえば昨日、彼の犯行に否定的な意見を口にしたダリアであっても、おそらくそう考えたことだろう。

だが、ティースは首を振って、

「でも……そんなの、証拠がない」

ザヴィアはおかしそうに笑った。

「面白い人ですね。私が魔であることは、証拠にならないと？」

ティースはそれに真正面から答えて、

「だって、それはさっきも言ったじゃないか。……魔だから悪だとは限らない。そりゃ、そういうのが圧倒的に多いのも確かだけど、でも……そう。魔だって人を愛したり、人と友達になったりするはずだから」

「……」

ザヴィアの表情から笑みが消えた。

……一瞬、何とも言えない表情がそこに浮かぶ。

「変わっていますね」

そして再び、そこには笑みが戻った。

「本当に変わった人だ、あなたは」

ザヴィアは言いながら口元に楽器を運ぶ。

そこから流れたのは、昨日も聞いた彼の故郷の曲……昨日のものと若干違うメロディ。

そこにどんな意味があったのか。ティースにはもちろんわかるはずもなく。

(……大変な話、聞いちゃったな)

演奏に身を委ねながら、ティースは考えていた。

(でも……そう。この人が獣魔を動かしていたなんて証拠、一つもない……でも)

そしてそつとため息を吐く。

(確かに……これって、身分差以上に高い壁だよなあ……)

応援すると決めた矢先の出来事で、ティースの落胆はかなりのものであり――

――ちなみにこの日は、彼が聞いた“告白”以外にも、事件の進展を促す出来事が二つ、同時に起こっていた。

「みんな、今日は色々大変だったみたいね。……じゃ、まとめるとしましょうか」

夜、ファントムの面々がいつも通りに集まったのは、昨日や一昨日までよりも少々遅い時間だった。

「まずはあたしだけど……みんなもすでに聞いた通り、オーダスさんやノエルさんと一緒に歌劇に向かう途中、獣魔に襲われたわ」

その場にいたファントムの面々は全員が同時に頷いた。

……そう。ティースがザヴィアとちょうど話していたその頃、ノエルたちも同行したアクアは獣魔の襲撃を受けていたのである。

「何度も目撃されているのと同じ、風の五十四族。幸い相手は一匹で、もちろんあたしが始末したけれど」

アクアは事も無げに言った。……いや、デビルバスターである彼

女にしてみれば、この程度は実際それほど苦でもなかったのだろう。
そこへダリアが質問する。

「それって、オーダス氏はともかく、一緒にいた他の連中には怪しまれなかったのか？」

「そりゃ怪しまれたけど、まさかあの状況で黙っているわけにもいかないじゃない？　ちゃんと口止めしておいたわ。……ノエルさんにしろ御者にしろ、護衛についていた二人にしろ、最初から容疑者の枠から外れてる人たちを選んでもらったの。だから、おそらく大丈夫よ」

「それで？　何か収穫はあったのか？」

「ええ。もしかしたらあるかもしれないわね」

「？」

そこへ、ドロシーが続ける。

「今回の外出の件、あらかじめ知っていたのは二人だけだ……」

「二人だけ？」

怪訝そうなダリアにアクアは頷いて、

「そうよ。オーダスさんの計らいで、屋敷の人たちの行動については極力漏らさないようにしてもらったの。今回の外出、あらかじめ知っていたのはオーダスさんとノエルちゃんの二人だけ。ノエルちゃんにしても聞かされたのは昨晚のことで、それ以外の人は外出直前まで知らなかったわ」

そこでティースは初めて、今日の外出の意図を悟るのだった。

（……今回の外出自体“罠”だったのか）

「そりゃまあ、アクア姉はあたしらにも言わなかったぐらいだからな」

ダリアは少し憮然とした顔だったが、アクアは笑って、

「ほら、敵を知り己を知れば百戦危うからずって言うじゃない」

「姐さん、それを言うなら“敵を騙すにはまず味方から”……」

「わ、わかってるってば！」

「……」

どうしてわざわざ難しい方の言葉と取り違えるのか、ティースにはほとんど理解できなかった。

「……と、とにかく。今回に関して言えば、外出前からオーダスさんの行き先を知るの是一部を除いて完全に不可能だったわけ。にも関わらず襲われたってことは……」

「外出後に指示を出したか、あるいはその前に知り得た誰かが犯人か……の二通りしかない。かなり絞り込める、ってことか」

「そういうことよ、ダリア」

アクアはそう言ってお茶目にウィンクしてみせた。

「へえ……」

その説明に聴き入っていたティースが感心の声を挙げると、アクアは苦笑して、

「と言っても、考えたのはドロシーなんだけど」

「……あ、なるほど」

妙に納得したティースに、アクアは不満そうに口を尖らせた。

「ちよっと、なあに、ティースくんのその反応。それってつまり、ドロシーは頭いいけど、あたしはお馬鹿ってことお？」

「え？ あ、い、いや、そんなことは全然……」

ティースは慌てて否定したが、言ったも同然である。

そこへ、ダリアもニヤニヤしながら付け加えた。

「ま、アクア姉は昔っから細かいことを考えるのが得意じゃなかったからな。なにかつーとすぐに“乙女の勘”だしよ」

「う、うるさいわねえ」

だが、どうやら反論はできないようである。

「あたしの勘はよく当たるからいいじゃない。……で、フィリスちゃん。資料はもらってきたんでしょ？」

視線をフィリスに向ける。

フィリスは相変わずお人形さんのようにちよこんと椅子に座り、その手にはアクアが言ったように数枚の紙が握られていた。
が、

「はい……でも……その、アクア様たちが出発なさってから魔に襲われるまでの間、屋敷の敷地から出た方は全部で六名なのですから……」

フィリスのトーンは低めだった。

それで悟ったのか、ダリアが尋ねる。

「それほど長時間外出したヤツはいない、か？」

「少なくとも……山へ向かって戻ってくるほどの時間は……」

「そっか」

アクアは特に意外な様子もなかった。

「つまり？」

ティースは自身の頭の中で整理しながら、アクアに向かって尋ねる。

「犯人は“あらかじめ知っていた人”に限られるってこと？ ……

あれ？ でもそれってオーダスさんとノエルさんだけじゃ……」

「もう一人いる……」

ドロシーは答えて、そして膝を抱えた腕から鋭い視線をティースの方へ覗かせた。

「たった一人だけ、ノエルが今日の外出のことを話した男が……」

「……あ」

もちろんティースにもすぐに思い当たる。

……そう。確かにその人物は今日、ティースの目の前でそれを口にしていたのだ。

「ザヴィアさん……？」

「ああ……」

「まさか——」

「ただ、ねえ」

ティースが反論する前に、アクアが首を横に振ってため息を吐いた。

「そのザヴィアくんは、最近ずっと外に出ていないわけ。だから少なくとも、そういう意味での容疑者の枠からは外れるのよ」

「……あ、そっか」

ホッと息を吐いて、ティースは納得する。

ダリアも頷くと、

「いくら事前に知っていても、その事前に魔とコンタクトを取って
いなきや何の意味もない、ってわけか」

「……つまり？」

尋ねたティースに、アクアはちよつとだけ疲れた笑みを浮かべて
答える。

「どうやら骨折り損……ってことかな？　ま、魔を一匹退治できた
のは収穫だけど」

「……そうなのか」

ティースはアクアよりもよっぽど落胆してしまった。

そんな彼に、アクアは笑って、

「ま、そう上手く行くとは思ってなかったけどねえ……最近の状況
を見ても、犯人がわざわざ山まで魔とコンタクトを取りに行ってい
るとは思えなかったし」

と、そこへダリアが手を挙げる。

「もしかしたらそれと関わることもかもしれないんだけど、ちよつと
いいか？」

「ええ。……なんか変わったことがあったみたいね？」

「ああ。実は――」

そしてダリアは自分が見た塔の光のことを話した。

「……光？　それって何時頃のこと？」

「外にいたから、残念ながら正確な時間はわからねーんだ。けど多
分、アクア姉が出掛ける直前か直後か、そんなもんだ」

「……なるほど」

アクアは興味津々だった。

「それで？　塔の方には行ってみたの？」

その言葉にドロシーが補足して、

「確か、塔は鍵がかかってたはずだな……」

「ま、そこんところはきとーにな」

ダリアが笑いながら曖昧に濁すと、アクアはわざとらしいため息と吐いて、

「……またやったのねえ」

「いいだろ。任務のためなんだからよ」

「小さい頃のクセってのはなかなか抜けないもんだからな……」
「？」

三人の会話の意味はティースにはわからなかったが、とにかくダリアの話は続いた。

「まず、あたしが入る前に塔から出てきたヤツがいる。……コンラッドさ」

アクアは頷いて、

「コンラッドさん、ね。じゃあその光は彼が？」

「いや、どーもはっきりしねーんだ」

首を振って、ダリアは続ける。

「塔のてっぺんには部屋があつてさ。つっても立派な部屋さ。ベッドがあつて、子供が遊ぶおもちゃがあつて」

「おもちゃ？」

「ああ。ベッドの上には女の子がいた。七つか八つぐらいだろうな」

「……それって、どういうこと？」

「わかんねーけど、多分……」

ダリアの言葉に、ドロシーが鼻を鳴らして続けた。

「オレも少し噂を耳にした……どうやらこの一族には、少々クセの悪い血が流れてるようだな……」

「あ……ああ、なるほどね」

アクアはそれで納得したようだったが、

「クセの悪い血？」

まるで理解できなかったティースが怪訝な顔で問いかけると、ダリアは少し呆れた感じで両手を広げてみせた。

「アーバンって執事がオーダス氏の腹違いの弟だって話はしただろ

？ ……つまり、そういうことさ」

「……え？ どういうことだ？」

それでも理解できないティースに対し、ダリアは呆れ顔をそのまま彼に向けて、

「お前、ほんつとに鈍いな。……要するに、塔の女の子は誰かの隠し子だってことさ」

「かつ、隠し——！？」

ティースは思わず叫びそうになって、ドロシーの視線に気付きすぐにそのトーンを落とす。

「か、隠し子って、それは……」

「ま、年齢からするとあの長男じゃなくてオーダス氏の子供だろうな。親が親なら子も子、ってことだろ」

「で、でもそれって、邪魔だから塔に閉じこめ——」

そんなティースの意見をダリアはすぐに否定する。

「いや、違うと思うぜ。……見た感じ、病気っぽかった。環境も悪くはなかったし……このクレイドウルでは“ヴァルキュリス”のことを“神の山”って呼んでてな。山に近付くほどにその加護が得られるって言い伝えがあるんだよ。だから、この屋敷もこうやって高台にあるだろ？」

アクアもそれに同意した。

「実際、オーダスさんは腹違いの弟であるアーバンさんを重用しているしね。まして自分の子供なら公にすることはなくても、邪魔者扱いして閉じこめるなんてことはないはずよ」

「そ、そっか……」

とりあえずティースはホッとした。

……事件に関係ないこととはいえ、もしそんな状況が目前にあったとしたら、彼の性格上、とても黙ってはいられないのである。

「……で、話が少しズレたな。別に隠し子だとかそんなのはどうでもいいんだ」

「その光、結局なんだったわけ？」

アクアの問いに、ダリアは再び首をかしげた。

「わかんねーんだ。多分、その女の子の手鏡が太陽に反射したんだろう、と思った。けど、確信はない」

「……」

考え込んだアクアに、

「その……光って、そんなに重要なことなんですか？」

「ええ、かなり重要ね」

アクアは答えた。

「つまり、犯人はここを出なくても指示を出せたかもしれない……
ってことでしょ？」

「……あ」

ティースにもようやく理解できた。

「信号……」

アクアは頷いた。

「その光がたとえ違っていたとしても、そういう方法を使って指示を出している可能性は確かに考えられるわ。風の五十四族は決して知能が高くはないけど、しっかり睥られているとすれば、ありえない話じゃない」

「ああ、あたしもそう思う。……今日のドロシーの計画で犯人の影が浮かび上がらなかっただけに、なおさら、な」

ダリアがそう言って、ドロシーもそれに頷いて相づちを打つ。

——どうやら、ようやく手がかりらしきものが掴めたようだった。

「その塔については、明日、直接オーダスさんに聞いてみるわ。塔に出入りしている人のことも。……もちろん、ダリアの“おいた”
については、ひ・み・つ、でね」

「……おい、アクア姉。あたしはあくまで任務のためにやったんだからな」

アクアは笑って、

「わかってるわよ。……さてと。他に報告は？」

と、その言葉に、それまで何故か仏頂面で話を聞いていたフィリ

すが、

「あ、えっと、大したことではないんですけど……」

ふと我に返った様子でおずおずと手を挙げた。

「なに、フィリスちゃん？」

「アクア様たちがお出かけになった後……昼過ぎなんですけど、アーバンさんとコンラッドさんが執事室の前でちょっと気になるお話をしていたんです」

「気になる話？」

「はい。……その、どうやらノエル様とザヴィアさんのお話をしていたみたいでした」

「ああ、あの執事さんと執事補佐さん、あまり快く思っていないみたいだったものねえ。……それで、どんな話だったかわかるの？」

フィリスは頷いて、

「そばで聞いていたわけではないので、はっきりとはしないんですけど……その、ザヴィアさんがどうこう——きちんと聞かなくて——でも、あの方を早く屋敷から追い出したいとか、そういう話だったみたいです」

「ああ、そういうこと話してそうだもんねえ、あの二人」

ダリアは少し首をひねって、

「あたしは別に、そんなに嫌なヤツだとも思わねーけどな。ま、貴族だとかその周りの連中だとかの考えることはあたしにゃわかんねーけどさ」

そこへドロシーが付け加える。

「あるいは、それ以外の意味があるのかもしれないが、な……」

「ザヴィアくん、か。……確かに、彼がここに來たのと、獣魔がオルファネールの人を襲うようになったのは同時期なのよねえ」

「で、でも！」

何気なく呟いたアクアの言葉に、ティースはすぐさま反論した。

「それって逆じゃないんですか？ 魔がオルファネールの人を襲うようになったからこそ、ザヴィアさんがたまたまノエルさんを助け

ることになって、それで屋敷に招かれたんでしょう？」

アクアはそれについては反論せずに、

「まあね。実際、ザヴィアくんは何度もノエルちゃんを助けているわけだし……彼が犯人だとするとその辺の説明が難しくなるわけだけど。……まさか、ノエルちゃんと仲良くなるために恩を売りたかったってことはないでしょうし」

「だな。あのザヴィアってヤツ、疑わしいっちゃ疑わしいけど、そうだとしたら目的がいまいちわかんねーんだよな」

「理由……理由、ねえ……」

アクアは口元に手を当てて考えていたが、やがて、思い出したように視線がティースへと向けられる。

「そういやティースくんはどう？ 今日は何もなかった？」

「あ……いえ。特になにも」

一瞬だけ、ザヴィアの“正体”が脳裏に過ぎったが、もちろんそのことは口に出さなかった。

ザヴィアが明らかに疑わしい行動を取っているのならともかく、行動自体はどこにも怪しいところはなく、彼が疑われているのはただ、この屋敷に現れたタイミングと、そして姿や格好が妙だということだけなのである。

（でも……それでも、話したらきっと犯人扱いされる）

ティースはそれを絶対に避けたかったのだ。

「じゃあ――」

そんな彼を疑った様子もなくアクアは頷くと、会合の終了を宣言した。

「みんなご苦労様。また明日、頑張りましょ」

「ああ」

「了解……」

「はい、アクア様」

「……」

一瞬だけほんの僅かな後ろめたさを感じたが、それでも自分の判

断に間違いはないことを信じて、ティースは他の面々とともに部屋を出た。

「潮時かな……」

ザヴィアールレスターは自室のベッドに仰向けで寝転がり、一人、そう呟いていた。

左手には肌身離さずに持っているフルートのような管楽器を握り、右手は顔の前にかざす。その甲には三つのアザ。

「何も言わずにいくか……いや——」

視線が泳ぐ。

しばし考えて、そしてザヴィアは呟いた。

「出ていく前に、全て話してみるのでもいいか。……受け入れられなければ、そのときは仕方ない、か——」

その5『“ハッピーエンド”は目前に』

翌日もクレイドウルの街は晴天だった。特有の、山から吹き下ろす風も今日は比較的穏やかで、街からは少しずつにぎやかな声が聞こえ始めている。

少々不穏な情勢も、未だ街の人々の生活にはそれほど大きな影響を与えていない。

そしてそんな街の高台にあるオルファネール邸。

「ロゼッタⅡマクブライド。七歳。表向きはアーバンさんの娘ということになってるみたいだけど、実際はやっぱりオーダスさんの娘だそうよ」

その日の朝食後、アクアはオーダスから直接聞き出したらしい“塔の女の子”の正体をファントムの面々に明かしていた。

その内容は、ドロシーが予測した通りのもの。

「その事実を知っているのは屋敷でもアーバンさんやコンラッドさんを含めて数人。あと、コンラッドさんは自ら申し出てその子の世話をしてるみたいね」

アクアは例によってベッドに横になっている、かと思いきや、今回は行儀良くベッドの上に正座していた。……どうやら先ほどドロシーがボソッと口にした、“食べてすぐ横になったら牛になる”の格言を気にしているらしい。

「へえ。あのコンラッドって男、見かけによらず随分と世話好きだな」

ダリアが意外そうな顔で言うと、隣に座っていたドロシーが呟く。「ノエルとロゼッタ……どっちもオーダスの娘に限定されているがな……」

アクアは冗談っぽく笑って、

「もしかしたら手懷けて玉の輿なんてことを考えてるのかな」
すると、ダリアが待ってました、とばかりに意地の悪い笑みを浮

かべた。

「アクア姉じゃあるまいし」

「ちよっ……聞き捨てならないな、もう！ あたしのどこが——！」
だが、反論は言い終わる前にアッサリと流されて、

「ま、ロゼッタの方は表向きはオルファネールの人間じゃねえんだし、まずあり得ないだろうけどな」

ダリアの言葉に、頷いたドロシーが続ける。

「大事なものは、塔に出入りしているのがほぼコンラッド一人……たまに医者やオーダスが様子を見に行くぐらい、ってこと……病気の子供一人誤魔化すのは別段難しくないし、信号を送るのは無理じゃない……」

「……でも、待ってくれよ」

そこでふとティースは疑問に思って、

「たとえば、その光とかで手下の獣魔に信号を送っているとしても、それって別に塔からじゃなくてもいいんじゃないのか？」

「この屋敷の場所を考えてみる……」

「え？」

ドロシーの言葉に屋敷の周りの地形を考えて、そしてティースはようやく気付いた。

「あ、そっか。この屋敷、山側の方はすぐ背の高い木が生い茂って——」

「山から見えるのはせいぜい屋根ぐらいだろ……例の、あの塔以外はな……」

「そうね。だからもし光で信号を送っているのだとしたら、あの塔か、あるいは屋敷から離れた場所かどちらかよ」

そこにダリアが補足して、

「けどま、犯人が屋敷の誰かだとすると、街の方だとよほど目立つ場所じゃねーと無理だと思うけどな。それに、ここより低い場所から山に向かって信号送ってりゃ、目撃される危険も多いだろうし」

「それも含めて、フィリスちゃんが情報を集めてくれてるわ。……」

だからひとまず、今のところはいつも通りにいきましょ。みんな、よろしくね」

と、そのアクアの号令によって、いつも通りにファントムの面々は解散した。

――が。

「あの、アクアさん」

「ん、なーに？」

ダリアとドロシーが部屋を出ていった後、ティースはそれまで腰を下ろしていたベッドから立ち上がった、

「俺にも何かできることないですか？」

そうなのだ。

“いつも通り” だったから、彼もまた“いつも通り” やることがなかったのである。

「ん、そうねえ。……あ、そうそう。その前に聞いておきたいことがあるんだった」

「え？」

不思議そうな顔を見ると、アクアはその顔を下から覗き込むように見て言った。

「ティースくん。キミ、ザヴィアくんと何か話したの？」

心拍数が一瞬にして跳ね上がる。

「……え？ なにかって……？」

しかし、アクアの言葉は彼が心配したような意味ではなかったらしく、

「ほら。昨日もそうだったんだけど、どうもザヴィアくんのことをかばっているように思えたから」

「あ……ああ、そういうことですか……」

「？ 他にどういことだと思ったわけ？」

「あ、いえ！ 今のは言葉のアヤというやつで……」

「ふーん。……それで？」

「……別にかばってるとかそういうんじゃないんですけど」

その問いかけに対しては、ティースはごく正直に答えた。
ただ、一つの真実だけを省いて。

「ザヴィアさん、そんな悪い人みたいに思えないって、ただそれだけのことです」

「そう」

アクアは納得した様子で、

「それならいいんだけどね。……でも忘れちゃダメよ。ザヴィアくんも容疑者の一人なんだったこと」

「ええ、わかってます」

「それと、ね」

アクアはゆっくりとベッドから下りて、鏡台の前に移動した。どうも結ったお団子が気に入らないらしく、それをほどいて直し始める。

目だけでその動きを追ったティースに、背を向けたまま、

「これはザヴィアくんがそうだって言うんじゃない、他の誰にも言えることなんだけど……自分と仲良くなれる人全員が善人だとは思わないことよ。仲良くなれることと、相手が善人であるということは、似ているようで全然違うことなの」

「……」

「善人と悪人は簡単に友達になれるわ。悪人が悪人であると発覚するその日までは、ね」

ティースは意を決して尋ねた。

「……アクアさんは、ザヴィアさんが怪しいと思ってるんですか？」
アクアは一瞬だけ手の動きを止め、少し考えてから曖昧な言葉で答える。

「怪しすぎるんだけど、残念なことに行動がまともなのよねえ」

ティースは少し眉をひそめて、

「残念なことによって……それじゃまるで、彼をどうしても悪人にしたいみたい——」

「あ、ゴメンゴメン。別にそういうつもりはなくて。ただ……どう

も違和感があるのよね、彼」

「……」

アクアは何か感じているようだった。そしておそらく、彼女にとって得体の知れないその“違和感”こそが、ザヴィアに対しての疑いとなっているのだろう。

（アクアさん、もしかして感付いているのかな……）

ティースが知っている事実。彼が“魔”であるということ。

だが、それをアクアに説明するわけにもいかなかった。彼女がティースのような考えを持つ人間ならば、その正体を説明することでは納得し、逆に疑いが薄れるのかもしれないが、そんな保証はどこにもない……いや、彼女もデビルバスターである以上、その可能性は低いと言わざるを得ないだろう。

「あ、そうそう。ティースくん」

難しい顔をして黙り込んだティースに、アクアが明るい声で振り返って、

「やることないんだったら、ほら。アレ、やってきたらどう？」

「アレ、ですか？」

ティースには思い当たるフシがなかった……が、そんな怪訝な顔をするティースに、アクアは言った。

「一輪車、よ」

「い、一輪車あ!？」

固まったティースに対し、アクアは少し笑った。が、その直後、人差し指を立てて、それをゆっくりとティースの眼前に向ける。

「……ティースくん、この指先をじっと見つめて」

「……？」

「何が見える？」

「……アクアさんの指、ですけど」

「それ以外は？」

「それ以外？ ……アクアさんの顔とか、その後ろの鏡台とか……」

「じゃあ、あたしが今、どんな表情をしているかわかる？ ……あ、ほら！ 指先から視線を離しちゃダメ！」

「す、すみません」

「もう一度、指先をじっと見つめて。あたしの指先だけを見つめて。あたしの指先だけ……」

「は、はい……」

意味がわからないまま、素直に従うティース。

そして数秒。

「……はい。それじゃそのまま、あたしがどんな顔をしているか言ってみて」

「顔、ですか？ ……えっと、その」

もちろんティースの視界にはアクアの顔が映っている。しかし、どう表現したらいいものと迷って、そして迷った末にティースは言った。

「あの……キレイだと思います」

「……」

一瞬、アクアはきよとした顔になり……そしてすぐに吹き出す。

「そ、そういうことじゃなかったんだけどなあ……ま、いっかあ」

「……え？ え？」

困惑するティースを見て、アクアは急に悪戯っ子のような表情になると、

「こうして見ると、ティースくんってホント可愛いわー。……ねえねえ。ちょっとだけギュってしてもいい？」

「そ、それは無理ですっ！」

ティースは手をブンブンと振りつつ、頬を赤くしながらそれ以外の部分で青ざめるといふ人間離れした技を披露してみせた。

「むー……残念ねえ」

アクアは口を尖らせて本当に残念そうだ。

「あの、それで、結局……」

「あ、うん。つまりね。キミはどれだけ集中できるのかなって」

「……集中？」

「前にも言ったでしょ？ 一輪車に集中すること、って」

「そういや……でも俺、結局乗れるようになってませんけど」

「それはまだ集中してないからよ。……ティースくん」

そう言って、アクアは微笑みながらも少しだけ真面目な口調になった。

「はい？」

「常に全てのものに対して集中するなんてこと、人には絶対に不可能なことよ。だからこそ、大事なときに一点集中なの。何かを為すとき、何かを為さなければならぬとき。そういうときこそ、集中しなければならぬの。……わかる？」

「は、はあ……」

もちろんティースにも理解はできる。が、何故それが一輪車なのかがわからなかった。

「覚えておいて損はないわ。これから“人”よりもよっぽど強い存在——“魔”を相手にしていく以上は、ね」

「……わかりました」

ひとまず頷いては見たものの。

（で、結局、俺は……？）

アクアはすでにお団子を結び終え、部屋から出ようとしている。

「あ、あの、アクアさん！ 俺、もしかして本当に一輪車——」

「じゃあ、頑張っつてねっ。……ちゅっ」

茶目っ気たっぷりに投げキッスをしてみせて、アクアは出ていってしまった。

「あの——……」

手を伸ばしかけて固まったままのティースの背後を、何故か一陣の風が吹き抜ける。

——どうやら、そういうことらしい。

ファントムの面々は情報収集にもそれぞれの特徴がある。

幼気で邪気のなさそうな外見を武器（？）に、会話を中心に情報を引き出すフィリス。とにかく行動力を武器に広範囲の様々な情報や怪しい場所を見つけだすダリア。そして普段からどこに隠れているのか、ほとんど姿を見せることなく何故か重要な情報を発見してくるドロシー。

そんな三人の中で“誰が一番優秀か”と言えば甲乙付けがたいが、“誰が一番危険な目に合いやすいか”といえば、それは比較的簡単に答えが出る。

フィリスⅡディクターは実のところ盗賊の娘である。もちろん彼女が盗賊だという意味ではなく、彼女の父親が盗賊だったという意味だ。

その父は三年ほど前に捕まり、今はネービスの監獄所で刑に服している。

そんな彼女が――常識的にはとても考えられない――ミューティレイクで働けるようになったのは、もちろんファナと、そして“とある人物”のおかげだった。彼女はその二人にとっても感謝しているし、自分が働くことで間接的にでもその二人の役に立てるなら、いつもそう考えて行動している。

生い立ちがどうであれ、彼女はそんな、見た目通りの健気な少女なのである。

「……うーん」

そしてこの日の昼過ぎ、様々な情報を集め、一度自室に戻ったフィリスは一つの結論に達していた。

（塔以外から信号を送るのは無理みたい……）

それについてはダリアが言った通りなのである。人のたくさんいる場所から、おそらく山に潜んでいるであろう魔に対して光の信号

を送ることは非常に困難だ。

鳥型である風の五十四族は視力自体は良いが色を判別することはできない。知能ももちろん高くはないから、例えば光の信号を送るにしても、やはりよほど目立つ場所からでなければ難しい。

そして次にフィリスが考えたのは、本当に塔から信号が送られているのか、あるいは別の方法が使われているのか、ということであった。

と、そのとき、開きっぱなしになっている窓から流れてきた微かなメロディに、現実へと引き戻される。

「あ……」

それでフィリスはふと思いついた。

（音、ならどうか……？）

その不思議な音色を発しているのがザヴィアだということはフィリスも人伝いに聞いて知っていた。とはいえ、彼女はザヴィアを疑ったわけではない。どこか聞き覚えのあるそのメロディは、とても山まで届くほどに大きくはなく、窓を閉めるか屋敷の敷地外に出るかすれば確実に聞こえなくなる程度の音量だったからだ。

ただ、“音”という可能性はフィリスの頭の中に留まった。

問題は、山まで届くほどの音量ならば、当然に屋敷の誰もが確実に聞こえるぐらいの音だということである。風の五十四族と呼ばれる今回の魔は、人以上の聴覚は持っているものの、それほど極端に優れているわけでもない。

「……あれ？」

次に聞こえたのは犬の吠え声だ。

フィリスは窓の外に視線を移動させる。

「あれは、コンラッドさん？」

コンラッドと一緒にいるのは屋敷の番犬数匹。遊んでいるのか、エサでもやっているのか。遠目でフィリスには判別できなかったが、番犬たちはまるで合唱するかのようにしきりに吠えていた。

（随分吠えるなあ、あの子たち……一日に一、二回はああやって吠

えてるもの……)

こんな光景を見るのはフィリスも初めてではない。この家の番犬は馴られているにしては珍しいぐらいに吠えるのである。

もちろんミューティレイクの番犬たちは、絶対にこんなことはない。

(やっぱりご主人様がいいと、犬たちも行儀良くなるんだ、きっと。……お嬢様はこの当主様と違ってとても立派な方だもの)

フィリスはこのオルファネールの当主、オーダスⅡオルファネールにはあまり良いイメージを持っていない。

いや、元々はそうでもなかったが、今は悪い印象を持っている。理由は簡単だ。

彼女はまだ、幻想であれ何であれ、結婚とか恋愛とかいうものに夢を持っている年頃であり……早い話が、“隠し子”云々の話で幻滅したというわけなのである。

そのことを思い出し、フィリスは再び気分を害して一人で口を尖らせていた。

(お父さんは悪いことしてたけど、でもお父さんは死んだお母さんだけだったんだから……)

思考が脱線しかけたことに気づき、フィリスは頭を振る。

“子羊”を連想させるクセのある髪が微かに揺れた。

「よいしょっ……」

休憩を終了してベッドから下りると、部屋を出ていく。

(次は、やっぱりあの塔を調べなきゃ)

そんな彼女のポケットには、今朝、アクアがオーダスから借りてきた塔の鍵があった。ロゼッタという子に直接話を聞くに当たって、一番歳の近い彼女に白羽の矢が立ったのである。

(塔から何か信号が出ているのなら、そのロゼッタっていう子が知ってるかもしれないもんね……)

そしてフィリスは部屋を出た。

——先ほど見ていた庭から、逆にその後ろ姿を見つめる視線があることには気付かずに。

その頃、ティースはといえば——

（集中……集中——）

ガシャン！！

「いたた……」

律儀にも、アクアに言われたとおりに中庭で一輪車の練習をしているところであつた。

（おっかしいなあ……）

腰をさすりながら立ち上がり、どうしても納得できずに首をかしげる。

（ちゃんとアクアさんに言われた通り、集中してるんだけどな）

再び一輪車にまたがった彼の視線は、じっと“足下に”集中していた。

——どうやら、誰も基本的な乗り方を彼に教えなかったらしい。

（集中……集中——）

ガシャン！！

「いててて……」

とまあ、そんな彼がまともに乗れるようになるのはずっと先の話であろうから、そこからほんの少しだけ時間を進めるとしよう。

「……あれ？」

しばらく経ったあと、ティースは微かに聞こえるメロディを耳にした。

（これは、ザヴィアさんの……？）

特徴のある音色は間違いなく彼の楽器だ。ティースたちの部屋の方角から聞こえてくる。

一瞬不思議に思ったが、すぐに思い出して、

（あ、そっか。ノエルさんの部屋、移動したんだっけ……）

物悲しげなメロディは、街角でもよく耳にするごく一般的な曲。

彼が昨日、ティースの前で演奏したものと同じで、確かノエルに教えてもらったという“別れの曲”だった。

ふと“予感”が胸を過ぎる。

（……まさか）

思い出す。

——彼は昨日、その曲を演奏した後でティースに自らの正体を打ち明けたのだ。

音楽が止んだ。

「……」

ティースは少し考えた後、屋敷の中へ足向けるところにした。到着するまで約五、六分といったところだろうか。ちょうど、一人の人物がノエルの部屋から出てくるところだった。

「ザヴィアさん」

そこから現れたザヴィアは、ターバンを直しながら現れた。

部屋の中は、不気味なぐらいに静まっている。

ティースは確信した。

（……打ち明けたのか）

そしてザヴィアの方もまた、ティースの問いかけを待つまでもなく答えた。

「ティースさん。……ええ、そろそろ潮時かと思ひましてね」

「……じゃあ、やっぱり」

頷いて肯定し、ザヴィアは苦笑した。

「黙って出ていっても良かったのですが……そうですね。どうせ出ていくのなら、最後に少しでも彼女の要求に応えてあげようかと思ひまして」

ノエルが一体どんな反応を示したのか……それはティースにはわからない。ただ、少なくとも“彼の正体”を全面的に受け入れるものではなかったのだろう。

そしてそれは普通の人間としては、ごく当たり前の反応だ。

「……」

何とも答えられずに視線を泳がせたティースに、ザヴィアは右手を差し出した。

「あなたには色々感謝しています。ただ……あなたのような考え方の人がそれほど多くないのは経験からわかっていましたから。だから、別にどうということはありませんよ」

そう言った彼の顔は、それほどショックを受けている様子はない。“慣れ”ている。彼のそんな姿が、ティースの目には逆に少し淋しく映った。

「……ノエルさんは？」

「彼女には酷な話だったかもしれませんが。やはり黙って出て行った方が良かったのかもしれませんが」

そこで初めて、ザヴィアは視線を泳がせる。

「とにかく、私は準備を終えたらすぐにここを出ることにします。この事件が落ち着くまで滞在しようかと思っていましたが、これ以上は旅立つ決心がつかなくなりそうでしたから……ちょうどいい機会です。私も、通報されて縛り首になるのはさすがに嫌ですからね。ティースはすぐに反論する。」

「そんな……ノエルさんはきっとそんなこと——」

「だと、いいですね」

どこか淡々と答えるザヴィアの言葉には、ひどく重みがあった。単なる慰めや、根拠のない感情論など、まるで歯が立たないほどに。

もちろんティースはそれ以上の言葉をかけることはできず、

「とにかく、これでお別れです。……お互い、旅を続ける身、あるいはどこかで出会うことがあるかもしれませんね」

「……ああ。そうかも、ね」

どこかすっきりしない気持ちのまま、それでも他に適当な言葉も見当たらず。ようやく差し出されたままのザヴィアの右手を握り返して、そしてゆっくりと頷いた。

「……本当に面白い人だ」

「え？」

手を離して、ザヴィアは口元に笑みを浮かべた。

「あなたの方が、私よりもよほど悲しそうな顔をしていますよ」

「あ、いや」

それは客観的に見ても確かにその通りである。そしてティース自身、そうかもしれないと思った。

実際、彼はこの結末に対してどこか納得できないものを感じていたのだから。

（……そうだな。こうなるのが嫌だから、俺は他人の恋愛に首を突っ込むのは嫌だったんだ……）

後悔先に立たずとはこのことだった。
が、

（でも――）

「それでは、ティースさん。旅の無事をお祈りします」

「あ、ああ……ザヴィアさんも」

最後にもう一度微笑んで、そしてザヴィアはティースの前から去っていった。これから旅立ちの準備をして、そしておそらくは一時間もしないうちに旅立つことになるのだろう。

「……」

そんな彼の後ろ姿が廊下の向こうに消えた後、ティースは大きく深呼吸して、そしてグッと拳を握りしめた。

（でも……ここまで見たんだから、最後まで見届けなきゃ！）

踵を返し、ノエルの部屋の前に立つ。

中から物音は聞こえない。

そつと、ノックをした。

返事はなかった……が、人の気配は確実にある。

「ノエルさん？」

「……ティースさん、ですか？ ……どうぞ」

ティースが声を掛けると、かろうじて返事が聞こえた。平然を装

おうとはしていたが、声色はショックをまるで隠し切れていない。

「あの……」

部屋に入ると、ベッドの端に腰掛けたノエルの姿があった。

窓は開け放たれたままでカーテンが揺れている。おそらく、先ほどまでザヴィアがそこに腰掛けていたのだろう。

「どうか、なさいました？」

あくまで平然を装おうとするノエルは、隠し通せない困惑の表情を浮かべてはいても、ザヴィアの正体について自ら口に出そうとはしなかった。

どうやら彼女は、少なくとも今の段階では、正体を明かした彼のことをどうしようということは全く考えていないようだ。

その事実にも、ティースはひとまずホッとし、それに後押しされて口を開く。

「ザヴィアさんのことですけど……」

ノエルはハッとした顔をする。

「……まさか……先ほどの話、聞かれていたのですか？」

「あ、いや！」

険しくなったノエルの表情に、ティースは慌てて弁解した。

「違います！　そうじゃなくて……その、僕も昨日、彼から聞かされていたので」

「え？」

ノエルはひどく意外そうな顔をする。が、ティースの表情を見て、それが嘘ではないことを悟ったのか、視線を斜め下に泳がせた。

「そうですか。……ザヴィア様は、ティースさんとよほど気が合われたんですね。でも……」

怪訝そうな瞳が向けられる。

「ティースさんはどうしてそんなに平然としていられるのです？」

彼は……恐ろしい魔なのですよ？」

「僕は……その」

少しだけ言い淀む。

ティースには彼女を説得しようなんて気持ちはいらなかった。ただ、自分の感じたことや自分の経験を彼女に教えようと思ったただけだ。

それをどう判断するかはもちろん彼女次第で――

「……昔、僕には魔の友達がいたんです」

切り出したティースに、ノエルはもちろん呆気に取られた顔をする。

「とも……だち？」

「ええ。友達です」

それはティースにとっても、勇気が必要とする言葉だった。

にわかには信じがたい、あるいは相手が疑り深い人間であれば、魔の側の人間――デビルサイダーとしてのレッテルを貼られてもおかしくない告白だ。

「……」

だが、ノエルは驚いたような顔のまま、やがてその表情が真剣味を帯びて、言葉の先を促すように向けられた。

ティースはそれに応えて、

「信じられないかもしれませんが……その僕の友達は、面白い話をして笑ってくれたし、悩みを打ち明けたら真剣に相談に乗ってくれました。……それに、最後のときには、泣いて別れを惜しんでくれたんです」

ノエルは半信半疑の表情だ。

当たり前の反応だった。

「それは……本当の話なんですか？ 作り話ではなくて？」

「全て、本当のことです」

それは確かに、全てティースの記憶の中に実在する話だった。それが事実であることを証言してくれる人物もいる。

ティースはさらに決意を強くして言葉を続けた。

「魔って、確かに悪いことをするのがほとんどで。だけど、全部が全部そうじゃないって、僕はそう信じてます」

「……」

目を見開いたノエルは、やがて視線を落として、そしてポツリと口にした。

「ザヴィア様は……？」

ティースは少し視線を泳がせて、

「彼は確かに魔で、もしかしたら恐ろしい存在なのかもしれない。だから僕はあなたに対して無責任なことは言えません。……ただ、僕は彼を見送りに行くつもりです」

「……」

ノエルは視線を泳がせて、そしてティースの言葉に何事か考えているようだった。

「……それだけです」

それ以上は何も言わず、ティースは無言で一礼して部屋を出る。

……それは一般常識から言えば決して正論ではなかった。確かに魔は大半が危険で恐ろしい存在なのだ。だから他人に押しつけられる考えではなかったし、ティースにもそんなつもりはない。

だから、後は彼女の判断に委ねるしかなかったのだ。

「あら？」

神妙な顔で部屋を出たティースの前に、突然使用人の格好をした女の子が現れた。

一瞬ドキッとしたが、よく見ると少女はいつもこの時間に部屋の掃除をしている人物だった。もちろん聞き耳を立てていた様子もない。

「ノエル様は、部屋におられます？」

「え……あ、うん」

そう答えると、少女は少しあどけなさの残る笑顔を浮かべて、

「そうですか。では、掃除はもう少し後にしますね」

他の部屋に向かった。

鼻歌混じりのその後ろ姿を見送りながら、ティースは額の僅かな

冷や汗を拭いつつ、

（そうだ。急がないとザヴィアさんが行っちゃうな）

少し早足にザヴィアの部屋へと。

その途中、

（……あれ？ コンラッドさん？）

コンラッドの後ろ姿を見かけて、ティースはふと立ち止まった。

（塔の方へ向かっていく……？ 昼ご飯には少し遅いと思うけど…

…）

とはいえ、ロゼッタという子の世話をしている彼のこと。それ自体は決しておかしなことでもなく。

結局ティースは気に留めることなく先を急いだのだった。

「姐さん……」

「ドロシー？」

アクアが部屋に戻ると、いつから待っていたのかドロシーがベツドの上に座っていた。相変わらず膝を抱えた体勢で背中を丸め――それは見ようによつては少し病的にも思える。が、もちろん長い付き合いのアクアはそれを気に留めることもなかった。

時計が十六時近くを差しているのを確認して、アクアは早速尋ねる。

「何かあった？」

「ああ……ちよつと気になる情報だ……」

「……」

アクアは表情を引き締めた。

そのドロシーの口調から、いつも以上の“手応え”を感じたからだ。

「話して」

アクアがソファに座るのを見て、ドロシーは話し始めた。

「魔が頻繁に現れるようになってから、屋敷じゃもう一つの異変があったらしい……」

「もう一つの異変？」

「ああ……オレも少しおかしいとは思っていた……けど、オレたちにはなかなか気付けなかったことだ……」

「どういうこと？」

「犬……」

「犬？」

アクアは怪訝そうに眉をひそめた。

「犬って、今も外で吠えている、あの？」

「ああ……」

ドロシーは膝の間で小さく頷いて、

「ヤツらがよく……といっても一日に二回程度だが……吠えるようになったのは、つい最近のことらしい……」

「……なんですって？」

その言葉で、アクアはようやく悟った。

「最近って……まさか」

「ああ……魔が現れ出した時期だ……屋敷の連中は暑さでストレスが溜まっているとか、勝手にそういう解釈をして、そんなに気にしてなかったらしいがな……」

確かに、犬が吠えることを魔が現れることを単純に結びつけるのは、そう簡単なことではない。

「……」

アクアは無言で口元に手を当てた。

もちろん彼女にもすぐには答えが出ず、それがどういう意味なのかを考えているらしい。

「……あの犬、四六時中吠えているわけじゃないわね？」

ドロシーは満足そうに頷いて、そして答える。

「屋敷の面々も注目していたわけじゃないから記憶は曖昧だ。もちろん吠えたから必ず現れるってわけじゃないが、魔が現れる前には

必ず吠えているようだな……」

だが、アクアはすぐに難しい顔をして、

「じゃあ犬の鳴き声が引き金に……？　でも、そんなことが可能なのかしら？　犬だったら屋敷以外にもいくらでもいるし、山まで届く遠吠えだってかなりの数があるはず……」

「姐さん……」

ドロシーは口元に、彼女にしては珍しい笑みを浮かべていた。

……それは彼女が何らかの答えに達したときに浮かべるものだ。

「よく睨られた犬が、命令もされず、何ものなしに吠えるはずはないだろ……？」

「……あ！」

閃いたようだ。

「そっか……じゃあ魔を操っていたのは——！」

「おそろくな……確証はないが、可能性は高い……」

アクアは立ち上がって、すぐに荷物の中を漁ると、そこから目的のものを取り出した。

手甲型の破魔具“氷雨”

それを軽く打ち鳴らすと、氷の粒が宙を舞った。アクアの表情からはいつもの明るさが消え、視線が鋭さを増す。

「……ドロシー！　すぐに確認しに行くわ！」

「了解……」

そして——二人がそう言葉を交わした直後のことだった。

——突然、屋敷中に派手な破裂音が響き渡る。

発生源はかなり近い。

「ドロシー——！」

「……ああ」

声を掛け合う前に、二人の体は部屋を飛び出していた——

そこから時間は少し遡る。

「それにしても変な話ですね。先ほどお別れを言ったばかりだというのに」

言いながら、ザヴィアはゆっくりと楽器から口を離した。

別れの記念にと最後に彼が演奏したのは、やはり彼の故郷の曲だった。その印象的なメロディは、しっかりとティースの耳の奥に焼き付いて、いつまでも離れそうにない。

「あのヒステリックな犬の鳴き声も、これが最後かと思うと惜しいものですね」

そう言って苦笑するザヴィア。

二人は人気のない裏口から屋敷の外へ出ていた。どうやら彼は、当主のオーダーにも感謝の置き手紙を残すだけで、黙って出ていくつもりらしい。

もちろん途中、幾人かの使用人たちに出ていく姿を目撃されていた。が、誰もザヴィアを引き留めたり理由を問い質したりするものはいない。今、彼らがこの場にいることも、屋敷の中や外で仕事をしている使用人たちの目に留まっているはずだったが、やはり誰一人として声をかける者はいなかった。

確かに彼は、屋敷の人々に歓迎されていなかったのだ。

「それでも、一人でも見送りがいるというのは嬉しいことですね。

……ティースさん」

裏門の前まで歩いていって振り返り、そしてザヴィアは微笑みを浮かべた。門の先はもちろん山で、すぐに高い木々が生い茂っている。

「こうして立ち去る私が言えた義理ではありませんが……あなたがここにいて間だけでも、ノエルさんのこと、お願いできませんか？」

「え……?」

「この前、ノエルさんが襲われたとき、ティースさんはあの鳥型の獣魔を相手にも、恐れずに剣を握りしめていましたね。相当腕も立つとお見受けしました」

「……いや」

ティースは正直に答えた。

「俺はただ、あそこに立っていただけだ。多分、俺だけじゃノエルさんを助けられなかったと思う」

ザヴィアは首を横に振って、

「それでも、あなたにはノエルさんを助けようとする気持ちがあった。気持ちちが人を動かす。その気持ちちが人を強くするのですよ」

「……」

「あなたにはその気持ちがある。あなたはきっと、この先も多くの人を助けることになるのでしょうね」

「……そんな大げさな」

少しだけ照れて、そしてティースは頭を掻いた。

「俺はただの……芸人一座の下っ端だから」

「……そうでしたね」

ザヴィアは笑った。そして空を見上げる。

「日も少し傾いてきましたね。そろそろ……十六時になる頃でしょうか」

「あ、ああ。俺が部屋を出たのが四十分頃だったから、そうかもしれない」

「では、私はそろそろ行きます。……最後に」

ザヴィアがゆっくりと背を向け、そして呟くように言った。

「ティースさん。ノエルさんに“楽しかった”と伝えておいていただけますか？」

「……」

ティースは黙って頷いてそれを見送った。

これ以上かける言葉はない。

ザヴィアもまた、ティースの反応を確認することなく歩みを進めていく。空では太陽が、あと数分で十六時を刻もうとしていた。

そしてザヴィアの姿は木々の間へと消えていく。

——と、そのときだった。

「……ザヴィア様!!」

「!」

響き渡った声は、その場にいた二人を同時に振り向かせた。足を止めて振り返ったザヴィアも、そして裏口の前のティースも、一様に驚いた顔で。

「……ノエル、さん？」

最初に言葉を発したのはティースだった。少しだけ、信じられない思いで。

「……」

ノエルは無言のまま、真剣な表情で足を進め、そしてティースに向かつて小さく頭を下げると、そのままザヴィアの方へと歩み寄っていく。

「ノエルさん……」

ザヴィアもやはり意外そうな顔をしていた。背負った荷物を支える右手が微かに力を失い、少しだけ背中を滑り落ちる。

そんな彼の目前まで行って、そしてノエルは言った。

「ザヴィア様。私、決めました!」

「……なにを、ですか？」

戸惑うザヴィアに対し、ノエルの声は明らかな熱を帯びていた。後ろで聞いているティースが思わずたじろいでしまうほどに。

そしてノエルは言った。

「ザヴィア様が何者であろうと、気にしないことにしました! ……だって、私にとって大事なことは、ザヴィア様がザヴィア様であるということなんですもの!」

「……」

ザヴィアは目を見開いてノエルを見つめていたが……やがて、その視線がティースの方へ向けられた。

それでもやはり驚きは消えないままで。

「……ティースさん。あなたがノエルさんを説得したのですか？」

「あ、いや……」

だが、そんなノエルの姿に一番驚いていたのは、もしかしたらティースだったかもしれない。

「俺はただ……ちよつと自分の考えを……」

ノエルが強い口調できっぱりと答える。

「ティースさんがきっかけを下さいました。……ただ、決めたのは私自身です！」

「……」

ザヴィアは僅かに視線を泳がせた。どう答えればいいのか迷っているのか。

……ただ、それは一瞬のこと。

やがてザヴィアは、苦笑を浮かべた。

「あなたといい、ティースさんといい……本当に変わった人たちだ」「変わっていても構いません！ ザヴィア様……どうか、もうしばらく屋敷に留まっていただけませんか！？」

「……」

ザヴィアは目を閉じ、そして深く息を吸って……吐く。

目が開いて、

「残念ですが、それはできません」

きっぱりとそう言い放ったザヴィアに、ノエルの肩が一瞬だけ震える。

「……どうしてですか……？ 私はザヴィア様のことを誰にも言いません。今まで通りにしていただければ——」

「お気持ちは嬉しいのですが、それは無理な相談なのです」

ザヴィアは空を見上げる。そして自らの右手を口元に運ぶと、涙型のアザにそつと口づけた。

まるで、何かの儀式のように。

そして、

「だって、私は——」

彼がそう言いかけた瞬間だ。

「なっ……!!」

「えっ……!？」

——屋敷から、派手な破裂音が響き渡った。

微かな爆発音と、それに重なったガラスの割れる音。

「まさか……また魔が——!!」

ティースは即座に状況を理解した。

だが、屋敷の中へ飛び込もうとしたティースを、ザヴィアの鋭い声が制する。

「ティースさん！」

「！」

怪訝そうに振り返ったティースの頭上。

そこを照らしていた太陽の光が突如途切れる。

「え……？」

反射的に頭上を見上げたティースの視界に入ったのは——

「こっ……こいつらっ!!」

空から降下してくる二つの人影。

……いや、それはもちろん“人”などではない。

「風の五十四族——!!」

「ノエルさん！　こちらへ!!」

「は、はいっ！」

ザヴィアがノエルをかばうように立つ。ティースも即座に間合いを取った。

（くっ……武器がない——!）

それに気付いたのか、ザヴィアは叫んだ。

「……ティースさん、ここは私がなんとかします！　あなたはすぐに屋敷に戻って武器を!!」

「だ、だけど——!」

「心配は無用です……!」

地面に降り立った二匹の獣魔は、すぐに威嚇の声を発した。

だが、ザヴィアが怯むことはない。

「私がこの程度の相手に遅れを取るはずがありませんから……」
背中の荷物から剣を引き抜く。

その切っ先を魔に向けると、ザヴィアの体からとてつもない威圧感が放たれた。

——いつかと同じように……いや、それ以上に、二匹の魔が怯える仕草を見せる。

「さあ、ティースさん！今のうちです！」

「……」

迷っている暇はなかった。

確かに武器を持たない今のティースは、ここにいってもなんの役にも立たない。

「すぐ、戻る！死ぬなよっ！！」

ティースは駆け出した。

気付いた獣魔が飛びかかろうとしたが、それはザヴィアの牽制に止められた。

それを確認し、ティースはそれ以上振り返らず、一目散に駆ける。

（急がなきゃ——！）

屋敷の中もまた、例の破裂音のために騒然としていた。おそらく裏口に現れた獣魔に気付いている者は少ないだろう。

「……ティース——！」

「ダリア!?」

部屋に向かう途中の分岐路で、同じように駆けるダリアと鉢合わせた。横に並んで、ダリアは興奮した様子を隠さずに、

「お前、今までどこでなにやってやがっ——！」

「裏口に獣魔が現れたんだっ——！」

「……なんだって!?!」

言葉を交わす間も、二人の脚色は衰えない。

「今はザヴィアさんが一人で食い止めてる！ノエルさんも一緒だ——！！」

「ちっ……ってことは、二カ所に同時に現れやがったのかっ!？」

「……あの破裂音は!？」

「あたしにも詳しいことはわかんねえ!　けど、若い女の子が一人犠牲になったらしい!」

「女の子……!？」

一瞬、ダリアの顔が大きく歪んだ。

「……フィリスのヤツの姿が、ここ二時間ぐらいずっと見えねえんだ!」

「な——っ!」

目を見開いたティースに、ダリアはギリツと奥歯を噛みしめて、
「とにかく……あんたは裏口へ行ってくれ!　アクア姉もドロシーも騒ぎを聞きつけているはずだから、すぐに誰かを助けに向かわせる!！」

「あ……ああ!」

ダリアの言葉はティースの胸に不安を植え付けたが、それを気にしている暇すらなかった。

部屋の前でダリアはそのまま直進し、ティースは部屋へと飛び込む。荷物の中から愛用の剣“細波”を手にとると、すぐに来た廊下を戻り始める。

途中、どうやら騒ぎが起こっている部屋が、すぐ近くだと気付いた。

（……フィリス……!）

今の彼にはただその無事を祈ることしかできず……そして、事件はようやく“終幕”を迎えようとしていた――

その6『そして“フィナーレ”へ』

部屋の中は窓ガラスが内側から派手に吹き飛び、部屋の中はまるでミキサーでかき回したかのようなひどい惨状だった。

「……っ」

部屋に入ったアクアは嫌悪感に眉をひそめる。

――ベッドの上。そこには、まさにミキサーに巻き込まれたかのようにボロボロになった少女の遺体があった。血がペンキを撒き散らしたかのように壁まで飛び散っている。その手に微かに見えるのは赤く染まったシーツの切れ端だろうか。

「どうやら、部屋の掃除をしていたらしいな……」

いくらか冷静に、ドロシーは部屋の状態を把握し始めていた。

ギリッと、歯ぎしりの音がする。

アクアの拳は、怒りで微かに震えていた。

「風の“トラップ”だわ……ドロシー……」

「時限式だな……最初からこの子を狙ったものか、あるいはノエルを狙ったものか……おそらく後者だろうが、敵は“デビルサイダー”なんかじゃないな……」

彼女たちが話している間にも、そばでは屋敷の人々が大騒ぎしている。屋敷の中で人が死んだのは初めてのことだったから無理もない。

「どうする、姐さん……詳しく調べるなら、いい加減正体を明かす必要があると思うが……」

「……その必要はないわ」

騒ぎがどんどん大きくなる中、アクアはきっぱりとそう言い切った。

「姐さん……?」

「犯人の目星はついているのよ。もう間違いない」
踵を返し、もう一度、歯ぎしりする。

「あとはあいつを……捕まえるだけだわ！」

「……アクア姉！ ドロシー！！」

そこへ駆けつけたのは、息を切らせたダリアだった。

「どうなってやがんだ！ 魔は！？ 誰か犠牲になったってのは本当かつ！？」

「こっちはトラップよ。……使用人の子が一人、亡くなったわ」

「使用人の子が……？ そ、そうか……」

ダリアは複雑な表情をした。

そしてすぐに思い出したように叫ぶ。

「だったらこっちは後回しにしてくれ！ 裏口の方に魔が現れたらしくて、今、ティースの野郎が向かってる！ ザヴィアとノエルも一緒にしろ！ ……とにかく、急いでくれ！！」

「……なんですって？」

「姐さん……」

ドロシーの言葉に、アクアは深く頷いた。

「……ええ！ とにかく行きましょう！！」

「ザヴィアさん！！」

ティースが駆けつけたとき、場の状況は変わらないままだった。

「……ティースさん！」

相変わらず二匹の獣魔と睨み合うザヴィアは、ノエルが後ろにいるためか、そこから一步も動かずにいた。対する獣魔の方も、相変わらずのザヴィアの威圧感に動くに動けない。

だが、ティースが来たことで状況は変化した。

「片方は、俺に任せてくれ！」

「ええ、わかりました！」

「さあ、こい！」

ティースの鞘から剣が抜き放たれる。

正眼に構えた美しい刀身が、太陽の光に照らされて輝いた。

「ケエエエエツ!!」

それに反応したかのように、片方の獣魔がティースに向かってくる。

その動きは体軀に似合わず、素早い。

「くっ……!!」

羽ばたきとともに巻き起こった風圧が、わずかにティースの視界を奪う。が、襲いかかる足爪の動きはかろうじて捕らえることができた。

剣と爪が交錯する。

「っ……!!」

両腕が痺れた。

ティースを襲った衝撃は想像以上だ。人よりも大きい体で、ほぼ全身の体重を乗せた攻撃。いくら見た目ほどひ弱ではないとはいえ、ティースには少々酷な圧力だった。

ぐらりと体勢を崩したところへ、手爪が斜め上から襲いかかる。

(まずいっ!)

咄嗟の判断で、足の力を抜いた。尻餅をついたところへ、頭上を鋭い爪が通り過ぎる。

「ケエエツ!」

そのまま横に転がり、なんとか体勢を立て直したところへ、すぐさま獣魔の巨体と足爪が襲いかかってくる。

(まともに受けたら、さっきの二の舞だ……どうす——!?)

そのとき、ティースの背中に堅い幹の感触が触れた。

そして咄嗟に思いつく。

(……いちかばちか!)

背筋を緊張が駆け上った。

(……今だっ!!)

紙一重のところで、思いつき右に飛ぶ。

「っう!!」

爪が左腕を掠めて微かに肉を抉った。激痛が走ったが、その後に響いた“ミシッ”という音は、ティースの思惑が上手くいったことを示していた。

体勢を立て直し振り返ると、獣魔の足爪は見事に木の幹に突き刺さり、身動きが取れなくなっている。

ティースの視界にあったのは、まるで無防備な獣魔の背中。

(……チャンス！)

剣を握り直し、ティースは地面を蹴った。

気合が思わず口をつく。

「やあああああっ!!」

「……ケエエエエッ!!」

ミシッ……メキメキメキメキ。

(……え?)

だが、ティースの剣が届く前に、木の方が呆気なく悲鳴を挙げた。太い幹に亀裂が入り、枝葉がガサガサと音を立てて揺れる。

(な……なんて馬鹿力……でも!)

ティースとしてもここは最大のチャンスだった。ここで止まるわけにはいかない。

「あああああっ!!」

「ケエエエエッ!!」

ティースの気合の叫びと、獣魔の鳴き声が交錯する。

メキメキメキメキ……バキッ!!

「!？」

紙一重の差。

ティースの剣が届く前に木の幹は真っ二つに裂け、そしてティースの剣は強い衝撃とともに、獣魔の足爪に押さえつけられた。

グラリと、体が前につんのめる。

(……しまった——っ!!)

直後、手爪が迫った。

もう体勢を立て直す暇はない。避けるには一か八か剣を手放すし

かなかった。……が、剣を手放すことはすなわち、戦う手段を手放すことでもある。

「くっ……!!」

「ケエエエエツ!!」

それはまるで勝利を確信した雄叫びのようだった。

——だが、その直後、

「えっ……?」

「……ケエエエエツ!!」

黒い影が獣魔の背後を横切ると、同時にその鳴き声は、驚きと、そして痛みの悲鳴へと変わった。

「だらしねえぞ、ティース!」

「……ダリア!!」

魔の背中を裂いたナイフの持ち主はダリアだ。宙からティースの隣へ降り立つと、二本のナイフを構える。

「さあ! あの鳥の化け物にトドメを刺してやんな!!」

「……ああっ!!」

ティースは両手で剣を構えた。

迷うことはない。あとはただ、痛みに我を忘れた獣魔に、その剣を真っ直ぐに打ち込むだけだった。

「やあああああッ!!」

今度こそ、遮るものはなく。

ドスッ……という鈍い感触が、微かに汗ばんだティースの両手に伝わってくる。

「ゲエツ!! ケエエエエツ……!!!!」

それは間違えようもない、致命的な一撃の感触だった。

剣を抜くと、そこから血が吹き出してティースの体を汚す。そのまま、獣魔の巨体は地面に崩れ落ちて痙攣を始め……そして、やがて動かなくなった。

「はあッ……!」

確実に動かなくなったのを確認し、そしてティースの視線はすぐ

さま移動する。

(ザヴィアさんは——！)

だが、そちらもまるで心配する必要はなかった。

「パワー全開っ！！」

宙に踊るのは、トレードマークのお団子頭。その周囲はキラキラと、細かい粒がまるでダイヤモンドダストのように輝いていた。

「ケエエエツ！！」

獣魔の爪がそれを捕らえようと宙を裂く。が、それは彼女に命中するどころか、掠ることさえも叶わなかった。

残像を残し、それほど大柄でもないアクアの体は呆気なく獣魔の懷へと進入していく。

「あなたには、氷の柩をプレゼントしてあげるわっ！！」

「ケエツ！！？」

最初の一撃が撃ち込まれると、あとは一瞬だった。体の制御を失った獣魔に対し、目にも止まらない速さでアクアの拳が叩き込まれていく。

“氷雨”の力によって、見る見るうちにその全身が凍り付いていく。

「はあああっ！！」

そして最後の一撃が、完全に凍り付いた獣魔の体を破壊して、勝負は決した。……いや、“勝負”ということであれば、戦う前から決していたといってもいいだろう。

それほどに圧倒的だった。

(すごいや……あの化け物が、まるで相手になってない……)

「……ふうっ」

まるで軽いジョギングを終えた後のように短い息を吐いて、アクアはチラッとザヴィアとノエルを見る。

そしてすぐにティースの方に振り返った。

「ご苦労様、ティースくん。……よくやってくれたわ」

「あ……」

その誉め言葉を素直に喜んだティースだったが、状況を思い出し

て、

「そ、そうだアクアさん！ 屋敷の方は――！？」

アクアはすぐに厳しい表情をして、

「一人、使用人の子が犠牲になったわ。でも、それも今回が最後よ」

「え……それじゃあ！？」

「ええ、敵の見当はついたわ。あとは捕まえるだけ」

頷いたアクアに、その向こうで疑問の声が上がった。

「あ、あなたたちは、一体……」

ザヴィアだ。

アクアは振り返り、そして笑顔を浮かべて、

「その話はひとまず後よ、ザヴィアくん。……ノエルちゃん？」

「は……はい」

ノエルは昨日、出掛け先でアクアが獣魔を撃退するところを見て
いるはずだ。が、それでもやはり戸惑いは隠せないようだった。

そんな彼女に、アクアはすぐに表情を引き締めて答える。

「今回の件、犯人はコンラッドさんよ」

「……え！？」

ノエルが驚きに目を見開く。

それはティースも同じだった。

「コ、コンラッドさんが……？ アクアさん、それは――」

「ええ、間違いないわ。色々な状況を照らし合わせても、それしか
考えられない」

「……」

ザヴィアもまた信じられないのか、怪訝そうな顔だった。

「ノエルちゃん。あなたがまた襲われる可能性は高いわ。……あた
したちと一緒に来て。安全は必ず保障するから」

「で、でも……まさか、コンが……」

だが、アクアは厳しい表情を崩さずに言った。

「急いで、ノエルちゃん。急がないと、次の犠牲者が出るかもしれ
ないわ」

「は……はい」

ノエルはまだ信じられない様子だったが、この状況ではアクアの言葉に従うしかなかったのだろう。ザヴィアの後ろから一步、彼女の方へ向かって踏み出す。

だが、

「……待って、ノエルさん」

「え？」

ザヴィアがそれを制止した。

怪訝そうに振り返るノエル。

「あなたはここにいてください。私がこの手で守って——」

「いいえ、それはダメよ」

アクアは厳しい表情でその提案を却下した。

「まだ、敵がどれだけの力を持っているかわからない。……ザヴィアくん。あなたの腕が立つのは認めるけど、でもあたしたちはそれに関してはプロよ。あなたよりもずっと確実だわ」

「あ、でもアクアさん……」

そこへ、ティースが口を挟む。

「それなら、ザヴィアさんにも協力してもらったらどうかな？ そりゃアクアさんほどじゃないかもしれないけど、彼だって俺なんかよりはずっと役に立つだろうし」

「……それもいいかもしれないけど」

アクアは腰に手を当て、ティースを振り返る。

（……え？）

その表情に、ティースは少し違和感を覚えた。

（なんだ……？ アクアさん、何を——）

訴えかけるような視線。

だが、それが一体何を意味するのか、ティースにはすぐにわからなかった。

そのまま、アクアが続ける。

「だけどティースくん。あたしたちにとっては、ザヴィアくんもま

た一般の人と同じよ。あまり危険な目に合わせるのは――」
言いかけた、そのとき。

――悪意は、突然に牙を向いた。

「えっ……?」

一陣の風。

風……いや、突風だった。

何の前触れもなく発生したそれは、地面の土を舞い上げ――いや、土の表面を抉るようにしながら――

「アクア姉っ!!」

「!？」

ダリアが叫び、そしてアクアも驚愕の表情を浮かべたが、彼女が反応したときにはすでに遅かった。

「っ!!!!」

鈍い衝撃音を残し、まるで木枯らしが落ち葉を舞い上げるように、アクアの体が宙に舞う。

「アクア姉ええっ!!!!」

「え……?」

ティースがその事態をようやく把握したのは、ダリアの二度目の叫びが聞こえてからだった。

アクアの体は山なりに弧を描き、そしてティースの背後、二メートルの辺りに落下する。

「な……アクア……さん……?」

振り返ると、うつ伏せに倒れたアクアはピクリとも動かなかった。じわり、と、赤いものが地面に流れ出す。

――あまりにも、呆気なく。

（一体、なにが――）

「……てめえっ!」

ティースのすぐ隣で、ダリアが地面を蹴る気配。

その声が向かった先は――

「動かないでください」

「……！」

視線を戻したティース。

その視界に映ったのは、足を止めたダリアと、驚きの表情を浮かべるノエルと、そして――

「……ザヴィアさん」

ノエルの体を拘束し、その喉元に刃を当てたザヴィアの姿、だった。

その口元には、見慣れた微笑みが浮かんでいる。

――信じがたい、光景。

「……どうして……」

「どうして？」

ザヴィアは小さく首を振った。

「どういう意味ですか？ 何故彼女を攻撃したのかと？ それとも、どうして裏切ったのかと聞きたいのですか？」

「……」

あまりのことに、ティースは言葉を返すことができなかった。それほど、今の状況は彼にとって信じがたいことだったのだ。

そんな彼に、ザヴィアは淡々と答える。

「前者の質問に対しては、最初からそのつもりだったとお答えしましょう。後者については言うまでもないことですよね……ティースさん？」

そしてもう一度……笑みが口元を支配した。

今度は今までに見たことない、本当に嬉しそうな“愉悦”の笑み。

「私は最初から最後まで、あなたたちの味方になったつもりはありませんよ。だって、私は――」

そしてザヴィアはゆっくりとターバンを外す。

そこから現れたのは、彼が人ならざる者であることを示す、尖った耳――

「魔の者、なのですから」

「そんな……」

目の前が一瞬真っ暗になって、膝が震えた。

——それは、常識や、周りの意見に反発してまで彼を信じた、その結果。それは、想像を絶するほどの衝撃だった。

もちろんそれは、もう一人、その魔を信じようとした人物にとっても同様である。

「ザヴィア様……何故……」

刃を当てられたまま弱々しく問いかけたノエルに、ザヴィアはチラッと彼女を見下ろして、

「楽しかったのは事実ですよ、ノエルさん。色々と面白い体験をさせてもらいましたからね。……まさか、正体を明かしてなお、騙されてくれるとは思いませんでしたけれど。お人好しと言おうか世間知らずと言おうか、表現に困るところですね」

「――」

ノエルの瞳は、まるで光を失ったように見えた。

“絶望”

もう、どう好意的に解釈しても疑いようがない。

彼は――二人を欺いていた。

それは、どうやっても動かしようのない事実だった。

「……アクア姉。おい、しっかりしろよ……」

いつもからは信じられないほどに弱々しいダリアの声が、ティースの耳に届いてくる。

アクアのもとへ移動したダリアが、軽く肩を揺すりその脈を取っていた。

「っ……!!」

途端、ハッとした顔で、そしてダリアはゆっくりと自分の両手を見つめる。

——真っ赤だった。

「ダリア……アクアさんは……」

「……」

ダリアは唇を噛みしめて——そして、首を横に振る。

「！」

ドクン、と、ティースの心臓の鼓動が跳ね上がった。

「そんな……アクアさん——！」

「ふふ、呆気ないものですね」

その様子を見て、ザヴィアは相変わらず楽しそうだった。

「少し不意を突かれただけで、こうもあっさり死んでしまうとは。

……ここまでの芝居を打つ必要もなかったですかね」

「貴様……！」

ティースはザヴィアを睨み付け、剣を握る手に力を込める。

シヨックが喉元を過ぎて、あとに残ったのは煮えたぎる怒り——

「貴様は——っ！！」

「ああ、そうそう。でもティースさん。信じる心つてのも、捨てたものじゃないんですよ」

ザヴィアは彼を牽制するように、ノエルの喉元の刃を小さく動かして見せながら、

「ノエルさんが私を信じて追いかけてこなければ、今頃、私の仕掛けたトラップでボロ雑巾になっていたでしょうから。その点でいえば、あなたたちの信じる心がノエルさんの命を救ったことになる。

……もつとも」

喉で笑う。

「代わりに、少々運の悪い子が犠牲になったみたいですけどね。ははは」

直後、押さえきれない怒りの声がティースの口をついた。

「貴様は……許さないっ！ 絶対に、許せない——っ！！」

「では、どうするつもりです？」

ティースはギリッと歯を鳴らして、

「……ノエルさんを離すんだ！」

「何故？ ……ああ、確かに。私は人質など取らなくとも、あなた

たちを楽に倒すぐらいの力は持ってますね。怖い怖い隊長さんは、あの世へ旅立たれてしまわれたようですし」

怒りの声を発したのはダリアだった。

アクアの手を離し、ゆっくりと立ち上がってザヴィアを睨み付ける。

「……だったら、とっととその子を離しやがれっ！ あたしが、この手でてめえをぶっ殺してやるっ！！」

だが、ザヴィアは平然と、まるでからかうような笑みを浮かべて、「なるほど。……では、どうやら私にとっては特に必要もないみたいだし、この子にはとっとと死んでもらうことにしましょうか」

剣を握る左手に力がこもり、刃がノエルの喉元に近付いていく。

ティースの顔が青ざめた。

「——っ！！ やめろおっ！！」

捕らえられたままのノエルは、それほど反応を示さなかった。……あまりのショックに、状況を把握できていないのかもしれない。

「……冗談ですよ」

ザヴィアはおかしそうにクスクスと笑って、剣をノエルの喉元から少し遠ざけた。

「どうやらノエルさんはショックのあまり放心しておられるようですし……私にはあまり、無抵抗のものを痛めつける趣味はないのです。……私が好きなのは、誰かの大切なものとか、誰かが信じてるものとか、愛とか絆とか友情とか……それが壊れたときの、壊されたときの、顔。悶え苦しむ、顔——」

そして、人差し指をティースの方に向ける。

「ほら。ちようど、今のあなたがしている、その顔です」

「貴……様……！！」

ティースはあまりの怒りに全身が震え、煮えくり返って頭の中がどうにかなりそうだった。

——彼が少なからず親しみを感じ、そして信じようとしたその男は、単なる悪人ではなかった。どうしようもない、これ以上救いよ

うのない、他に表現しようのない、紛れもない“悪”だった。

「さて。では、ティースさんの怒りが頂点に達したところで“ゲーム”でもしましょうか。……ちようど、観客も集まってきたようですし」

涼しい顔で、ザヴィアが裏口に視線を向ける。

「お嬢様！」

ちようど、そこから姿を見せたのは、屋敷の執事補佐、コンラッドだった。

ザヴィアは恭しく礼をして、

「どうも、コンラッドさん。あなたの大事なお嬢様はお預かりしていますよ」

「貴様は……やはり——！」

「ふふ、あなたは最初から私のことを疑っていましたね。なかなか良い判断でしたよ」

「コン……」

そこで初めて、ノエルが微かな反応を見せる。ゆっくりと顔を上げ、涙が浮かんだままの視界に、その、幼い頃から面倒を見てくれた男の姿を映すと、そこから涙の筋がこぼれ落ちた。

そんなノエルの姿を見て、コンラッドは普段無愛想なその顔に、明らかな怒りを浮かべて叫んだ。

「貴様……お嬢様を離すんだ！ さもなくば——！！」

「ああ、そうそう」

ザヴィアはまるでそれが聞こえていないように、ふと思いついたような顔を見ると、独り言のように呟いた。

「……ちようどよかった。“賭け”は商品が多い方が盛り上がりますね」

剣を握ってない方——右手の甲に口づける。

——途端、突風が吹いた。

「っ——！！」

一瞬、誰もが視界を奪われる。

そして直後。

耳に届いたのは、“何か”が“何か”に叩きつけられる鈍い音――
「……いやああああっ!!」

真っ先に叫んだのは、ザヴィアの腕の中のノエルだった。

そしてティースも気付く。

「……コンラッドさんっ!!」

コンラッドの体は、屋敷の壁に叩きつけられていた。ガツクリと
項垂れ、やがれその首筋に赤いものが伝い始める。

ノエルが狂ったように叫んだ。

「コン！ コンッ！ しっかりしてえええっ!!」

「ノエルさん。動いてはいけませんよ」

悲痛な叫びの満ちる中、ザヴィアの声だけがまるで浮いたように
落ち着き払っていた。

「ほら。あなたが動くと、私の手元が狂って――」

パン、パアンッ!!

前触れもなく屋敷の窓ガラスが破裂し、それが意識を失ったコン
ラッドのすぐそばに降り注いだ。

「……せつかく“まだ”生きているコンラッドさんが、今度こそ命
を落としてしまうかもしれませんから」

「――あなたはっ!!」

ノエルは逆上して、すでに冷静な判断ができないようだった。剣
を突きつけられていることも忘れ、ザヴィアを睨み付ける。

「あなたは悪魔ですっ！ あなたは――っ!!」

「そうですか……」

ザヴィアはわざとらしい――今となってはわざとらしいと確信で
きる――悲しい表情をそこに浮かべて、そして答えた。

「悲しいことですね。女心と秋の空、とはよく言ったものです」

「っ――!!」

その場にいる誰もが、押さえきれない怒りをその一人の男に向け
ていた。

だが……誰も動けない。今は、誰にもどうすることもできなかった。

「さて、ティースさん」

ノエルを捕らえ、そして同時に強大な力を所有しているその“悪”が、その場の支配権を完全に握っていた。ティースたちは今、ただ一人で楽しそうに戯ける彼の言うなりになるしかなかったのだ。

「私を信じてくれたあなたに、チャンスを上げることにしましょう。……なに、簡単なゲームです。あなたが勝てばノエルさんを解放します。コンラッドさんもおそらく、すぐに治療すれば助かるはずですよ」

「ゲーム……？」

「簡単なことです。……ほら、ティースさん」

ゆつくりと、ザヴィアは足下にあった長い木の枝を拾い上げた。右腕を伸ばし、その先をティースの方へ向ける。

「あなたのその自慢の武器で、この木の枝を叩き折ってください。チャンスは三回。折れたらあなたの勝ち。三回で折れなければ私の勝ちです」

「……？」

ティースにはその言葉の意味が理解できなかった。

ザヴィアが手にしたのは、なんの変哲もないただの木の枝だ。先ほどの突風で折れたばかりのもので、もちろん中に金属の棒が仕込まれてることなどありえない。

（なにを……言っているんだ……？）

鋼鉄製の剣で折れないはずがなかった。太さも直径にしてせいぜい二、三センチ。素手でだって容易く折れるに違い……と、ティースはそう考えた。

だが、

「待て、ティース――！」

「……ダリア？」

「お前じゃ、たぶん無理だ！　あたしが代わりに――！！」

ザヴィアはすぐにそれを拒絶した。

「それはダメです。ティースさんだからこそ、チャンスを与えるのですよ。……ほら、ティースさん。私の気が変わらないうちに、早くチャレンジしてみてはどうですか？」

「……」

ダリアの言葉は気になったが、ティースにはもとより選択肢がない。何より……彼の中には、“折れないはずがない”という気持ちがあった。

「……本当に、ノエルさんを解放するんだな？」

「ええ。信じてもらえないとは思いますが、せつかくのゲームをつまらなくするような無粋な真似はしないつもりですよ」

「……」

ティースが近付いても、ザヴィアは何も妨害しようとしなかった。右腕も伸ばしたまま、ピクリとも動かさない。

（ただの木の枝……邪魔する気配もない……なら——）
剣を振りかぶる。

（折れないはずが——っ!!）

それでも渾身の力を込めて振り下ろした。

振り下ろした剣は、木の枝を真っ二つに——いや。

「な……っ！」

木の枝は、折れていなかった。

ティースの手に残ったのは、まるで柔らかい壁に剣を叩きつけたような奇妙な感触。

“折れなかった”という表現は、あるいは正しくないかもしれない。

「なんだ……これ——!!」

刃は、木の枝まで到達していなかった。まるで、木の枝に透明な膜……剣ですら切り裂くことのできない特殊な膜をかぶせているかのように。

「ほら、ティースさん。あと二回です」

ザヴィアは笑みを浮かべたまま、余裕の表情だ。

「生半な気合では破れませんよ……私の、“魔力の壁”は」

「魔力の……壁——！」

ハッと気付いた。

（これが……魔力の壁……）

それはティースにとつて初めての体験だった。

彼がこれまで魔と相対したのは、ほんの数度のこと。そしてその中で、たとえば能力的に歯が立たない相手はいくつもいたが、“魔力の壁”というものに阻まれたことは一度もなかった。それは彼が元々高い聖力を持っていたのと、彼の持っている神剣“細波”が、圧倒的に高度な増幅力を備えていたからである。

だが、今度ばかりは明らかに勝手が違っていた。

「ティース！ そいつは！」

ダリアが絶望的な叫びを発する。

「そいつは並の魔じゃねえっ！ そいつはおそらく——！」

その言葉に、ザヴィアが続けた。

「では、改めて自己紹介でもしましょうか？ ……私は風の将、フエレイラ族のザヴィアⅡフェレイラⅡレスターといいます。年齢は二十一歳。趣味は……先ほども言ったので省略させていただきますよ」

「風の……将——？」

アオイから教わったものがティースの脳裏に蘇った。

——神族、王族、将族、上位族、下位族。

神族と王族は滅多に姿を見せることはない。つまり将族とは実質、この世界における人魔でもっとも手強い存在のことだった。

「じゃあ、こいつは……」

「お前じゃ……どう足掻いたって勝てっこねえっ！ あたしでも……っ！」

「っ——」

「では、足掻くのをやめますか？」

ザヴィアはつまらなさそうに言った。

「なら私は、この場にいるあなたたちを皆殺しにして帰るだけです
が」

「……ふざけるなっ!! 誰が——っ!!」

ティースは再び両腕に力を込めた。

(こんなヤツに……こんなヤツに負けるわけには……!!)

全身全霊の力を両腕に集める。

怒りが全身に炎を灯す。

「……」

ザヴィアは黙ってティースの様子を見つめていた。

「負けて……たまるかああああっ!!!!」

そして、“細波”が振り下ろされる——!

「……あと、一回です」

「っ! ……どうして……っ!!」

切っ先はやはり枝に届く前に止まっていた。力を込めすぎたせいか、肩の関節がズキズキと痛む。

「ティースさん……」

ノエルが絶望的な表情でティースを見つめていた。

(どうして……どうして破れないっ!!)

「日が暮れるまでなら、悩んでも構いませんよ。……ただし、あまり時間をかけるとコンラッドさんが死んでしまうかもしれませんね」

「っ!!」

「……ああ、その方々。外には出てこないでくださいね。出てきた瞬間、頭と胴体が永遠にお別れすることになりますよ」

ザヴィアは屋敷の裏口に視線を向け、冷たく言い放った。が、言われずとも、そこから身を乗り出そうとする者はいない。

「くっ!!」

「ほら。ティースさん。どうします?」

ティースは今の一撃に渾身の力を込めていた。今、再び最後の一撃を放ったとしても、結果は間違いなく同じだろう。

(なら……どうすれば……)

ティースの視線が虚ろに周囲を彷徨う。

ザヴィア、ノエル、ダリア、コンラッド――

(……アクアさん)

そして最後に行き着いたのは、血を流して倒れたままのアクアだった。

(……どうしたらいい？　ダリアの言うように……俺には……無理なのか……っ！？)

ティースの心の中での問いかけに、もちろん答えが返ってくることはない。……いや、たとえ声に出していたとしても、すでに事切れた彼女がそれに答えることができるはずもなかった。

(……こんなときにも、何もできないなんて……！)

手が……いや、全身が震える。

(……どうにかできないのかっ！？　俺はやっぱり役立たずなのかっ！？　俺に何かできることは――っ！！)

だが、その瞬間――

(……あ……)

手の震えが止まった。

暗く、沈みかけていたティースの胸に、微かに言葉が聞こえてくる。

(……俺に……できること……？)

それは、記憶の中に沈んでいた、言葉。

こういう状況がなければ、特に思い出すこともなかったであろう、言葉たち。

それが、彼の胸の中に広がっていく。

「決心はつきましたか？」

「……」

その問いかけに、ティースはゆっくりと顔を上げた。

「……？」

ザヴィアが怪訝な顔をする。

――先ほどまでティースを支配していた弱気の色は、完全に姿を

隠していた。

（俺にできること……それは……）

アクアの言葉が、ティースの中に蘇る。

（……アクアさん……俺、やってみる——！）

熱いものが胸を満たす。

決意が、折れかけた心に炎を灯す。

そして、叫んだ。

「……俺の役目はっ！」

まるで、自らに言い聞かせるかのように、声を振り絞って叫んだ。

「この先起こりうる、俺に阻止できるはずの悲劇を！ それを阻止するために最善の努力を尽くすことだ！！」

「……？」

ザヴィアは怪訝そうな顔をした。……が、遠くでそれを聞いたダリアは、彼の言葉の意味を理解していた。

「ティース……お前——」

「大事なことは……！」

両腕に力がこもる。

「何かを為すとき、何かを為さなければならないとき……そういうときにこそ、“集中”すること——！」

全身の力が集中していく。

ティースの視界は狭まり、その色を濃くする。その視界に映るのはただ一つ。

彼が打ち砕くべき、悪——

そして“細波”は彼の決意に応える。

「集中——為すべき事を、為すために——っ！！」

刀身は艶やかさを増し、刃先は触れただけで大気を切り裂き、その全身に圧倒的な破壊力を備える。

——魔力を打ち破る、圧倒的な質量の聖力を。

あとは何も考える必要はなかった。ただ、決意のこもった刃を振り下ろす——それだけでよかったのだ。

「あああああつ!!!!」

空気が、悲鳴を上げる。

「っ!？」

その瞬間、正体を現してから初めて、ザヴィアの顔が驚きの色を見せた。

「まさか……!」

空を引き裂いた“細波”の一撃は、いとも容易く木の枝を――いや、ザヴィアの魔力の壁を断ち切っていたのだ。

「さあ……ザヴィア!」

そして、その切っ先が真っ直ぐに彼の方へと向けられた。

「約束だ! ノエルさんを離せっ!!」

「……」

ザヴィアは目を見開いて、ティースを見つめていた。

折れた枝の先が地面に落ちてても、一瞬だけ強く吹いた風が彼のそばを吹き抜けても、まだ、驚きは消えない。

ティースはさらに言葉を強める。

「もし離さないというのなら――!」

「……ええ」

だが直後、ようやく我を取り戻したザヴィアは、いとも容易くノエルから手を離れた。

「約束です、ティースさん……ノエルさんは解放しましょう」

そうして一歩、後ろに下がる。

「……」

「……」

ティースも、そしてノエル自身も、最初は半信半疑の表情だったが、やがてザヴィアが何もしないのを見て、

「……さあ、ノエルさん」

「は……はい」

ノエルは足を進め……途中、よろけながらも真っ直ぐにコンラツドの元へ向かっていった。

「……」

そんな彼女の後ろ姿を興味をなくした目で見送って、そしてザヴィアはティースに視線を戻しながら言った。

「……正直、驚きましたよ、ティースさん。まさかこの土壇場でよもやのレベルアップを果たすとは、ね」

「ザヴィア……お前は……」

“細波”の切っ先を向けたまま、ティースは吐き捨てるように答えた。

「お前は決して許されないことをした！俺は、お前を絶対に許さない！！」

ザヴィアは口元を歪める。

「だったらどうします？その剣で、私を切りますか？」

「当然——！」

「どうやって？」

「！？」

突如、背筋を悪寒が襲う。

「なっ……！！」

その瞬間、視界からザヴィアの姿は消えていた。

「どうやって、あなたが私を切るのですか？」

首筋に、冷たい手の平の感触。

「っ！！」

すぐさま振り返って剣を振るうと、そこにもザヴィアの姿はない。

「魔力の壁を打ち破るということは——」

「！？」

声が出したのは頭上。

咄嗟に見上げると、ザヴィアは木の枝からティースを見下ろしながら、

「それは私たちと戦うにおいて、最低限の条件。いわば、あなたは私と戦う権利をようやく得たに過ぎない。——まして」

手の甲に口づけた。

風が卷く。

「くっ……!!」

押されて後ずさると、ザヴィアは木の枝からふわりと飛び降りて、「あなたはおそらく、極限にまで集中しなければ私の壁を破れない。そして私の動きについてくる技術も経験もない。……逆に」

少しだけ視線を鋭くし、手にしていた剣を背中の鞘に収めた。

一見戦う気がないようにも見えるが、それは違う。彼にとって、手にした剣などオモチャのようなものなのだ。それ以上の殺傷力を、彼はその体から作り出す事ができるのだから。

「私にはあなたを容易に殺すことができる。……そして私は考える。あなたは危険だと。その未熟な状態で私の壁を破るのは、おそらく常人離れた聖力と、そして驚異的な成長力を備えている証だと」
右手が、そっと口元に移動した。

「……っ」

ティースは咄嗟に正眼に構える。

……かつて、風の五十四族たちが味わったであろう威圧感を、今、ティースがその身に感じていた。

それは本能の部分で感じる、生命の危機――

「そして私が達する結論は、今、あなたをこの場で殺してしまうべきだということ。ですが……さて、どうしましょうかね。すぐに殺してしまうのも惜しい気がします」

「っ……」

圧力は容易くティースを押しつぶそうとしていた。

それは、先ほどティースが“克服”したものはまるで次元が違う。決意や気持ちではどうにもできない、圧倒的なまでの力量差――
(くそお……っ)

だが、後ずさろうとしたティースを、背後の声がすんでのところで押しとどめた。

「そんなことさせるかよ」

「……ダリア」

いつの間にかティースの背後まで近付いていたダリアは、その一瞬だけ微笑みを浮かべると、

「ティース。お前、さっきはちょっとカッコ良かったぜ」

「……」

だが、ティースは表情を歪ませた。

「あれは、アクアさんが俺に何度も話してくれたから……」

「ああ。……アクア姉が今のお前の姿を見ていたら、きっと感謝して抱きついていただろうな」

「――」

一瞬、目の奥に熱いものがこみ上げるところだったが、グツとこらえた。

今はまだ、そのときじゃなかった。

そして再び、決意に炎を灯す。

（アクアさん……俺が仇を――っ！）

そんな二人を見て、ザヴィアは小さく首を振ると、
「後ろのあなたも、まるで問題外ですね。たぶん、私の壁を破るところでできない」

「ああ、そうかもな」

ダリアはあっさりとそう答えた。

「けど、てめえにはもう、ティースを殺すことはできないぜ」

「何故――？」

言いかけたザヴィアの表情が、一瞬だけ固まった。

――風を切る音。

飛び退いたザヴィアの腕を浅く切り裂いて、“それ”は地面に突き刺さった。

「な……」

ザヴィアは微かに血の流れ出した腕を押さえ、そして視線を移動させる。

その、ナイフの持ち主へと。

「……ドロシー!？」

屋敷の屋根の上……そこに、ドロシーの姿があった。そこに立っ
たまま、相変わらず無表情にクルクルとナイフを回している。

どうやら彼女のナイフは、ザヴィアの魔力の壁を破ったようだ。

「同じ顔がもう一人……？」

ザヴィアは信じられない顔をしながら、だが、それでも余裕の表
情を崩さないままに笑みを浮かべた。

「なるほど、双子だったとは……私としたことが……でも、今の一
撃で決められなかったのは致命的——」

「てめえが見落としたのはそれだけじゃねえ」

ダリアは静かにそう宣告すると、直後、ゆっくりと彼に指を突き
つけて、吐き捨てる。

「……覚悟しな。この変態サド野郎っ！」

「——っ!？」

その瞬間、今度こそ確かに、ザヴィアの表情から“余裕”が消え
た。

——背中に影が走る。

それはあたかも、ファントム——幻影——のように、誰にもま
もには捕らえきれない速度で。

「な——っ!」

「あなたには……極上の棺を用意してあげるわっ!」

「……まさか——っ!？」

身を翻し、ザヴィアは地面を蹴った。

砂埃が舞い、そして風が卷く。

……それは、ティースにとっても信じられない光景だった。

「ア……アクアさんっ!？」

全員がドロシーに気を取られたその一瞬。“死んだはず”のアク
アが、いつの間にかザヴィアの背後に接近していたのだ。

「ちっ……!」

アクアの一撃がザヴィアの胸を浅く抉る。が、ザヴィアはすぐに
体勢を立て直すと、離れながら右手を口元に移動させた。

「生きていたのなら……それなら、今度こそ死ぬといい……!!」
途端に突風が吹き荒れて、アクアを襲った。

「あたしを、甘く見ないことねっ!!」

だが、アクアは意に介することなく、“重たい風”を全て素手でうち払う。そのたびに“氷雨”が氷の粒を撒き散らして輝いた。

「風の将——ザヴィア||フェレイラ||レスター!　ここがあなたの墓場よ!　このあたしが、あなたに引導を渡してあげるわっ!!」

「く……っ!」

ザヴィアの表情には、見紛うことなき焦りが浮かんでいる。疾風のように迫るアクアの攻撃は、確実に彼を追いつめていた。

「っ——」

そして——響いたのは、笛の音。ザヴィアが懐から取り出したのは、彼がいつも吹いていたフルートのような楽器だった。

「っ……!?!」

途端、辺りの木々がざわめく。

……いや。

「っ!?!　こいつら——っ!!」

枝葉を揺らしそこから現れたのは、風の五十四族たちだった。

その数は六匹。

「ちっ……待機させてやがったかつ!　……アクア姉!　そっちにも行ったぞっ!!」

そのうちの二匹が屋敷の方へ。二匹はアクアの元へ。

「くっ……」

アクアもさすがに追撃の手を緩めざるを得ない。

そして残りの二匹は——

「ザヴィア……逃げるつもりっ!?!」

アクアが空を見上げる。

二匹の獣魔は、その足にザヴィアをぶら下げ、そして飛び立とうとしていた。

「ええ、ここは少し分が悪そうなのでね……それより、急がないと

屋敷の方が大変なことになりますよ。……ティースさん。機会があったら、またお会い——」

その瞬間、空気を裂いて閃光が飛ぶ。

だが、ザヴィアはそれを左手の剣で弾いた。

「……訂正します。他のみなさんも、機会があれば、また」

もう一撃、ナイフが飛んだ。……が、結果は同じだった。そのま
ま、ザヴィアの体はとも届かない高さにまで上っていく。

「くっ……ザヴィア……！」

「ティース！ 仕方ねえ、屋敷に戻るぞっ！！ ……アクア姉っ！
！」

「ええっ！ そっちは任せたわ！ ……ドロシー！ あなたもそっ
ちをお願いっ！！」

「……」

屋根の上のドロシーは何事か呟いたが、少し遠かったので言葉は
届いてこなかった。

そして、ザヴィアの姿は空の向こうへ消えていく。

「っ……！」

（ザヴィア……レスター……っ！！）

ティースは唇を噛みしめた。

今はただ、それを見送ることしかできない。

が、その名は間違いなく、彼の胸の中に刻まれた。

（いつか……俺自身の手で……今日のことを後悔させてやる！ 必
ず……必ずっ！！）

その7『エンド・ロール』

「ひ、ひどすぎますっ!!」

その日の夜更け、まだ事件の余韻も冷めないオルファネール家に、響いたのはどこか拗ねたような少女の声だった。

場所はもちろん、ファントムの面々が集合したアクアの部屋。

その発端はというと……屋敷の人々が全ての事情を大体把握して、怪我人の治療を終え、そして犠牲となった少女の冥福を祈り終わった、午後九時頃のこと。

ドロシーがポツリと発した一言。

「今、気付いたが、フィリスの姿が見えないような……ん、気のせいかな……?」

「「「あ」「」」」

もちろん気のせいなはずはなく。

そして、口を塞がれ縄で縛られたフィリスが、塔の内部にある物置から発見されたのは、それから一時間後のこと。

「そ、そりゃアクア様たちが大変だったのもわかりますけど、でも、私だってすごく怖かったんですよ! そ、それなのに、みなさん揃って“忘れてた”だなんて、ひどすぎますぅっ!!」

「ま、落ち着けよ、フィリス。いいじゃねえか、怪我らしい怪我もなかったんだからよ」

「ダ、ダリアさぁん……!」

慰めなのかそうでないのか微妙すぎるダリアの言葉に、フィリスは今にも泣き出しそうだった。

「よしよし、泣かない泣かない。……でも不思議ねえ。一体、誰がフィリスちゃんを気絶させて縛ってったのかしら」

「そりゃ、やっぱコンラッドじゃないのか?」

「コンラッドさんが？ どうして？」

「塔に不法侵入した輩……とても思われたんだろ……昨日、ダリアがヤツの鍵をスったことも、後で気付いただろうしな……」

ドロシーの言葉に、アクアはポンと手を叩いて、

「あ、なるほどねえ」

「わ、私、ちゃんとアクア様からいただいた鍵を使って……使ってえええ……」

「ああ、ほらほら、フィリスちゃん。泣かない泣かない」

手を伸ばしかけたアクアだったが、ふと思い直したような顔をしながら、

「……でも、泣いてるフィリスちゃんも可愛いっ!!」

「むぎゅっ!？ ア、アクア様っ……く、くるしいっ……!」

「……ったく」

呆れ顔のダリア。

そこへ、ティースがようやく抱いていた疑問を口に出す。

「ところで……アクアさん。あの、そろそろ色々と説明して欲しいんですけど……」

「ん？」

アクアの腕の中では、フィリスがぐったりとしていた。

そういえば彼女は晩飯も食べていない。その上にこの“仕打ち”では、グロッキーになるのも致し方ないところであろう。

「俺……てつきりアクアさんが死んだものだと思って——」

アクアはおかしそうに笑って、

「まさか。あたしがそう簡単に死ぬわけないでしょ」

「そりゃ、一度も結婚せずに死ねないわな」

「……イヤミねえ」

「で、でも」

早くも脱線しそうな会話を、なんとか方向修正しつつ、

「アクアさん、完全に不意を突かれてたし、まさか演技をする余裕があるようには思えなかったし……」

「ああ、ティースくん。まず、そこからして間違ってるわね」

「え？」

「あたしが不意を突かれたなんてこと、絶対にありえないのよ」

「？」

怪訝そうな顔のティース。

アクアは人差し指を立てて、得意そうに答えた。

「だってあの時点で、あたしは彼が犯人だって確信してたもの。敵の目前で油断するはずがないでしょ？」

「で……でも、あのときアクアさん、犯人はコンラッドさんだ、って——」

「それは、ノエルちゃんが彼と一緒にいたから。芝居を打ってでも、あの子を引き離さなきゃならなかったのよ。……ま、それは見破られたのか、見事に失敗したわけだけど」

ダリアが頭の後ろに手を回して、

「つか、あたしだって最初は、アクア姉が素でやられたもんだと思っただけだな」

「だ・か・ら。よく言うでしょ。敵を知り——」

「敵を欺くにはまず味方から……」

言い終わる前から突っ込んだドロシーに、アクアは少し口を尖らせて、

「わ、わかってるってば！ 今、そう言おうとしてたでしょ！」

「……」

「コホン。そういうわけで」

全員の冷たい視線に耐えきれず、アクアは咳払いをして続けた。

「あたしが死んだことにすれば油断してノエルちゃんを離すかもしれないと思ったの。幸いダリアも血糊に気付いて、すぐにあたしの意図を察してくれたしね」

「……」

やや納得できない顔のティース。つまり、彼女たちの演技にすっかり騙されていたということになる。

（そ、そりゃ、あの状況じゃ仕方なかったかもしれないけど……）
演技だなどとは夢にも思わず、しかも涙まで流しそうだった彼としては、非常に複雑な気分であった。

そして、次の疑問を口にする。

「でも……どうしてあいつが犯人だって？　だって――」

言いかけて、ティースは口を噤んだ。

あのザヴィアが魔だと知っていたのは、彼だけのはずだった。直前にノエルも告げられていたが、アクアたちがそれを知る時間はなかったはずである。

「どうしてって？　……ふふ、それじゃあ」

アクアは少し悪戯っぽい笑みを浮かべて、

「逆にクイズよ。……どうしてあたしたちがそれに気付いたか当ててみて？」

「え……」

わかるはずがなかった。

もちろんアクアもそれは承知済みだったようで、

「ヒントは、“笛”と“犬”よ」

「笛と犬……？」

笛と言われて、ティースの頭に浮かんだのはザヴィアの持っていた楽器だ。確かに去り際、彼はあの笛で魔を操っていたようだったが、それがおそらくあり得ないことにすぐ気付く。

「だ、だって、あんな小さな音だと、屋敷の中からじゃ、とても――」

「だから、犬、なのよ」

「？」

「……じゃあ、はい。一番最初に気付いたドロシー先生から説明してもらいましょう」

アクアが水を向けると、ドロシーはあからさまに迷惑そうな顔をしたが、やがて仕方なく答えた。

「“犬笛” ってのは知ってるだろ……」

「あ……ああ。人間には聞こえないけど、犬には聞こえる音を出す
笛……だっけ？　でも、あいつの笛は普通に俺たちにも聞こえて――」

「だから……あの笛は二つの音を同時に出す代物だったのさ。表は
オレたちにも聞こえる、ごく普通で物静かなメロディ。その裏で、
オレたちには聞こえない、山まで届くような別の音……」

「……あ」

それではようやくティースにも理解できた。

「屋敷の犬が吠えていたのは、その“裏の音”が聞こえていたから
よ。そっちは彼らにとって不快な音だったのね、きつと」

ダリアがふうつとため息をついて、

「犬どもの様子がいつもと違うってわかってりゃ、もっと早く気付
けたのにな」

「そうね。あたしたちは最初からうるさいものだと思いこんじゃっ
てたから。……それさえなければ、もっと早く――少なくとも今日
の女の子は助けられたかもしれないわね」

「……」

ティースは視線を逸らした。

――罪悪感。

（俺は……わかってたんだ。あいつが魔だって……）

昨日の時点でそのことを打ち明けていたなら、その少女を助けら
れたかもしれない……そう考えて、ティースは胸が締め付けられる
思いだった。

（俺の勝手な思いこみで――）

「いや、でもすごかったわ、ティースくん！」

「……？」

自己嫌悪を中断して顔を上げると、

「魔力の壁、よ。……あたしも死んだフリしながら、どうなること
かとハラハラしてたけど、まさか本当に破っちゃうなんて！」

「あ……ああ……」

ティースはどこか上の空で、視線を逸らしたまま答えた。

「それは……アクアさんが何度も“集中”の話をしてくれたから――」

「それでも、あの土壇場で思い出してくれるなんて思わなかったものの！」

「……」

明るい気持ちにはなれなかった。

（だって、俺は……）

「ティースくんがあたしの言葉を叫んだときなんて、おねーさん、思わず――！」

そのときのアクアの目はキラキラと輝いていて。

……上の空だったティースは、そんな彼女の変化に気付くことができなかった。

「思わずこうやって――！」

「あっ……アクア姉っ！……待てえっ！！」

「……」

「……え？」

ダリアの叫びと、ドロシーの無言の視線に、ティースが“それに気付いたときは、すでに遅かった。”

「ティースくんっ！」

「――！！」

そのときティースが感じたのは。

一瞬だけ、暖かいものに包まれた感触と、そして直後、その温もりがアツという間に消え失せていく感覚だった――

次にティースの目が覚めたとき、時計はすでに夜中の一時を回っていた。薄暗い中を見渡すと、どうやらアクアの部屋のベッド。気絶する前には明かりが灯っていたこの部屋もすでに真っ暗で、もちろんダリアもドロシーも、フィリスの姿もなく。

「……アクアさん」

「なあに？」

隣には、当たり前のようにアクアがいて、広いベッドの上、触れないように少し離れた場所から彼を見つめていた。

「俺はあいつが“魔”だって、知ってたんだ——」

「……」

その告白にも、アクアは黙ったまま。時を刻む時計の音が、まるで小さな楔を打ち込むように静かな空間に響く。

「昨日、本人から聞かされてた。……あいつ、俺の反応を見て楽しんでたんだ。きっと、俺のことを馬鹿にして見てたんだろうな……」

「……」

アクアはまだ、なにも言わない。

ティースはさらに続けた。

「俺……信じたかったんだ。魔だからって、全部が悪いヤツじゃないって。……みんながそうやって言うから、なおさら信じたかった……！」

今になって、彼の胸の中に悔しさが溢れていた。

部屋を照らすのは月の光。……どこか寂しさを触発するその雰囲気、なおさら彼を惨めな気持ちにさせる。

情けなくて、その目に涙が浮かんた。

「俺が昨日、みんなに打ち明けていれば……そうしたら——！」

「ティースくん」

薄暗闇の中、ようやく口を開いたアクアの表情は、いつもの明るいものではなく、かといってティースを責めるものでもなかった。

「あたしも、感付いていたわ」

「……え？」

「あたしも彼が魔じゃないかって、そう思っていた。ターバンで耳を隠していたこともそうだし……そう。彼が眼光だけで獣魔を追い払ったって話を聞いたときに、ね。だから、キミが話そうと話すまいと、結果はそれほど変わらなかったわ」

「……」

最初は庇ってくれているのかと思った。が、彼女の表情を見ると、どうやらそうではないらしいことがすぐに窺えた。

そしてわき上がるのは当然の疑問。

「じゃあ、どうしてアクアさんは、すぐにあいつを捕まえようとしなかったんですか……？」

アクアは答える。

「それはティースくんと同じよ。……魔の者だからって、悪いとは限らない。実際、彼はそれ以外に疑わしい行動を取っていないから。だからティースくんにも言ったでしょ？ 怪しすぎるけど、行動がまともなんだ、って」

「……」

「今回の事件はデビルサイダー……つまり“人”の仕業である可能性が高いと言われていたわ。だから、私にはあの時点で、彼を捕まえる理由がなかったの。もちろん、ある程度行動を注意して見てはいたんだけど」

「で、でも、アクアさんはデビルバスターなのに――」

布団の中からそとアクアの手が伸びて、ティースは緊張する。

が、意外なほどにほっそりとした人差し指は、彼の言葉を制止するように口のすぐそばで止まった。

「デビルバスターだからこそ、よ、ティースくん。色々な魔と関わるから、彼らが本当はどんな存在なのかも見えてくる。……まあ、これはあたしの師匠の受け売りなんだけど、ね」

「……」

意外な言葉だった。

（デビルバスター、だから……？）

ティースにとって、デビルバスターというのはあくまで“魔を退治する者”というイメージしかなかった。当然、彼らにとって魔は敵であり、敵でしかない。そういうものだと思いきんでいた。「でもアクアさん……俺、そのせいでノエルさんを深く傷付けて――」

「それは結果論だわ。それに、仮に結果論で話したとしても、キミはノエルちゃんの命を救っているじゃないの」

「だけど……代わりに使用人の子が犠牲になったじゃないですか……」

沈んでいく言葉に、アクアは初めて厳しい表情を見せた。

「代わり？ どうして“代わり”なの？ ノエルちゃんがいてもいなくても、あの子は部屋に行ったわ。だってそれが彼女の仕事だったんだもの」

「え……あ、そ、それはそうかもしれないですけど……」
アクアはますます厳しい目をして、

「あの男の言ったことなんて気にしちゃダメよ。……あいつは紛れもなく、人が苦しむのを見て楽しんでるわ。口車に乗せられてあいつを楽しませる必要なんてこれっぽっちもない。でしょ？」

「……」

ティースの中のやり切れない気持ち、ほんの僅かにではあるが緩和されていく。

……そして、ふと胸に沸き上がったのは、押さえきれない感情。前触れもなく涙が溢れて、ティースは少し目を伏せた。

「アクアさん」

「ん？」

「……アクアさんが生きていて、本当に良かった……」
心からそう感じていた。

もしこの人物が死んでいたなら、自分は二度と立ち直れなかったかもしれない、と、そう思った。

「ありがとう、ティースくん」

そんな彼の言葉に、アクアは少しだけ嬉しそうに目を細め、そして、

「それって、もしかしてプロポーズの言葉だと思ってよかったりする？」

「ダメ……ダメに決まってるじゃないですか！」

慌てて答え、誤魔化しながら涙を拭ったティースに、アクアは本気で残念そうな顔をして、

「なあんだ、つまんない。ようやくあたしの魅力に気付いてくれたかと思ったのにい」

口を尖らせるアクアは、先ほどまでとは違ってまるで子供のような反応だった。

（ほ……本当に捕らえどころのない人だな、この人……）

ただ、魅力に気付いた、という点ではまさにその通りで……もしもティースがもっと恋愛に積極的で、もっと色々と自由に動ける身分で、そしてこんな体質でなければ、あるいは彼女の言うとおりになっていたかもしれない。

もっとも、それは意味のない仮定である。

（デビルバスターって言っても……本当に色々な人がいるんだな……）

ホッと息を吐いて、ティースは天井を見上げる。そしてふと、もう一度アクアの方に視線を向けると、

「……あ、ところで、さっきから疑問だったんですけど」

そう言っようやく疑問をぶつけた。

目覚めたときからずっと抱えていた疑問を。

「アクアさん……なんでベッドに縛り付けられてるんですか？」

途端、アクアはハッと気付いた顔をする。

「そうでしょ！？　これってやつぱり変よね、絶対！」

ティースの言葉通り、彼女の体は腕以外の部分が動けないようにしっかりとベッドに固定されていたのである。当然、結び目は手の届かないところにあった。

「その……俺自身、どうしてここに寝かされているかという経過もわからないので、なんとも言えませんが……」

「ああ、それはね。あたしが、どうしてもティースくんと二人っきりで話がしたいって主張したからなんだけど」

「はあ」

「……でも普通、逆じゃないの、これ！ ティースくんが縛られるならともかく、なんであたしが縛られなきゃならないの!？」

ティースはなんともいえない表情で、ひとまずフォローすることにした。

「はあ……でも、その、俺は多分、なにがあっても自分からアクアさんに触れることはないの——」

「それにしたって、ちょっとひどすぎない!? ……これじゃあ、ティースくんを抱っこして寝られないじゃないのおっ!!」

そんな彼女の言葉に……ティースは視線を泳がせて、そして咳払いして答えたのだった。

「……そのままで、お願いします」

一週間後。

その間、ザヴィアの屋敷での行動を辿ることによって、彼の目的——正体までがほぼ判明することになった。

そして、ネービスへと向かう帰りの馬車の中で、ティースはアクアに質問する。

「アクアさん。……“例のヤツら”っていうのは、なんのことなんですか？」

「ティースくんは知らなかったわね」

ガタガタと揺れる馬車の中、ファントムの面々は来たときと同じように、荷物の中の山の中で思い思いの体勢を取り、今日の宿へ到着するのを待っている。

まだ、日は高い。

「正式には“タナトス”と呼ばれていてね。大陸にいくつも存在する、魔を中心とした犯罪集団の一つよ」

「タナトス……?」

ティースには聞き覚えのない名前だった。

そこへ、ダリアが寝転がった格好で目を閉じたまま続ける。

「ウチらの間じゃ、大抵“例のヤツら”で通じる。そういうヤツらさ」

「ええ。タナトスは、あたしたちにとって宿敵と言ってもいい存在なのよ」

そしてアクアの視線がティースに向けられた。

そこに妙に感情のない——いや、感情を抑えたような光を宿して。

「ティースくんも知っているでしょ? だいたい三年ぐらい前、フアナちゃんのお父さん……前のミューティレイク公が暗殺された事件」

「あ、ああ。それはネービス以外でも結構騒がれたから……」

アクアは頷いて、

「あれは、実際は暗殺じゃなくて襲撃だったの。タナトスが、ミューティレイクの屋敷を襲ったのよ」

「え!？」

ティースはビククリして、

「そ、そんな話、初耳——」

「一般にはあまり知られていないもの。……だって、ネービスの街の中心近くまで、魔が大勢入り込んでいたなんて、知られるわけにはいかないじゃない?」

「そ、それは確かに……」

それは、治安の良さを一つのウリにしているネービスとしては、致命的な汚点だろう。

「その事件で、当時のディバーナ・ロウは壊滅状態になったわ。所属していたデビルバスターたちはほぼ全員、使用人もかなりの数が命を落としたの。……あたしの師匠もその中の一人」

淡々と説明するアクアから少し視線を逸らして、ダリアがその先を続ける。

「あたしたちは、ちょうどデビルバスター試験を受けるアクア姉に付き合っただけで帝都まで行っていたから、何とか無事だったんだよ」

「……そうだったのか」

そしてティースは同時に悟った。……ディバーナ・ロウの隊長である彼らが、そして使用人たちの大半が、どうしてあんなに若い者たちばかりなのかということ。

それは古くからの名家としては、あまりにも不自然すぎることで。（つまり、古くからいた人たちは……ほとんど――）

だが、ティースはふと疑問に思う。

「でも、そのタナトスは どうしてディバーナ・ロウを？ ネービスにはネスティアスだって……むしろ、そっちの方がそいつらにとっちゃ邪魔なんじゃ――」

「ゲームなのさ……」

「ゲーム？」

ティースが視線を向けると、ドロシーが相変わらず膝を抱えた格好で呟くように答えた。

「別に邪魔だからとかそんなんじゃない……ヤツらはただ、オレたちを挑発して戦うことを楽しんでいるだけだ……」

「そんな……」

「タナトスはそういう集団なのよ」

愕然としたティースに、アクアはきっぱりとそう言い切った。

「手段とか行動に深い理由なんてない。……あのザヴィアという男を見ればわかるでしょ？ 基本的に、ああいうヤツらなの」

「じゃあ、ザヴィアが今回あんなことをしたのは――」

「おそらくは、あたしたち新しいディバーナ・ロウの力を確かめるため。あとはあいつの言うように、自分の趣味よ」

「……」

ティースはグッと拳に力を込めた。

（そんなことのために……ノエルさんを騙して、何人もの人を殺したのか……！）

「とにかく覚えておいて。あたしたちの当面の敵といえば、間違はなくヤツらのことだから」

アクアの言葉に、ティースはゆっくりと頷く。

言われずとも、彼には忘れることの方が難しかった。

——重苦しい沈黙が馬車の中を包む。

「でも、ま」

やがて、沈み込んだ空気を吹き飛ばすように、無理に明るい口調でダリアが口を開いた。

「何にしろ、あのコンラッドってのが助かったのは不幸中の幸いだっただな」

「そうね」

アクアも同意して、そして少し柔らかい表情を見せる。

途端に、場の空気がほんの僅かに緩んだ。

「……」

ティースにとっても、それだけが今回の事件で唯一の救いだった。そして、彼同様に深いショックを受けたノエルにとってもそれは同じだっただろう。

（本当に……良かったよな）

コンラッドが目覚めたとき、ノエルが泣きながら抱き付いた光景は今もティースの網膜に焼き付いている。そのときはあまりの安堵感に彼まで涙がこみ上げてきた。

ティースは希望を込めてポツリと呟く。

「ノエルさん……きっと大丈夫ですよね」

「そうね」

アクアはその気持ちをすぐに察したようで、即答した。

「コンラッドさんもいるんだし、大丈夫よ、絶対」

少し笑みを浮かべて、

「もしかしたら案外、あの二人でくつついちゃったり——」

「それはないだろうな……」

「……ドロシー？」

振り返ったアクアに、ドロシーは小さく息を吐いて答える。

「ノエルがどうであれ、コンラッドは承知しないさ……」

「え……どうしてだい？」

今度はティースの質問だ。

確かに、これで二人がくつついたら出来過ぎだと彼も思ったが、それを完全否定するほどの理由が思い浮かばなかったのである。

同様に、ダリアとフィリスも怪訝そうにドロシーの言葉を待っている。

「……」

そんな一同の姿を見て、ドロシーは少し面倒そうな顔をしたが、やがて口を開いた。

「ノエルが小さい頃はノエルのそばで護衛……そして今はオーダスの隠し子、ロゼッタの世話……不自然だと思わないのか……？」

「え？」

ティースはもちろんその意味を理解できなかったが、同様に不思議な顔をしたフィリスとは対照的に、残りの二人は何事か思いついた顔をした。

「あ……」

「もしかして……」

ドロシーは続けた。

「護衛って名目だった昔ならともかく……今は執事補佐って立派な役職もあるのに、だ。自ら申し出たとはいえ、何の理由もなくそんなことが通るはずないだろ……」

「つまり……そういうことなのね、ドロシー？」

アクアは完全にわかったようだった。それはダリアも同様で、

「あー、そっか。そう考えりゃ、色々辻褄合うもんなあ」

「？　　どういうことだ？」

「……ほんっとに鈍いなあ、お前」

まだ全然理解できていない様子のティースに、ダリアはため息をついて、

「アクア姉が言っただろ。あの一族にはクセの悪い血が流れてるみたいだって」

「……え？ あ……つ、つまり？」

そこでようやくティースも気付く。“彼にしては”なかなか察しが良かった。

「コンラッドさんは……もしかして、その……ノエルさんのお兄さん！？」

「確証はないが、な……」

ドロシーの言葉に、アクアは視線を少し上に向けて、

「言われてみれば、あの太い眉毛とかオーダス氏にそっくりなのよねえ——って、フィリスちゃん？ どうしたの、口を尖らせちゃって？」

「……なんでもありません」

ダリアも少し怪訝そうに見る。

「なんだよ。なに怒ってんだ、フィリス」

「別に、怒ってなんかいいです」

「変なヤツだなあ」

その言葉に、フィリスはますます機嫌を悪くした様子だった。

「変なのは……変なのは、そんなことを平気な顔で話してるみなさんの方です！」

「??？」

結局、ファントムの面々は誰一人、彼女の怒りの理由を察することはできず。

最後の最後にどうでもいい謎を残して、馬車は、北の街——クレイドウルを離れていくのだった。

夜のミューティレイク邸。

薄手のシャツとゆったりとした形のズボン。寝巻に近い格好で一階の玄関ホールに姿を現したのは、つい先日十二歳になったばかりの屋敷の執事、リディアⅡシュナイダーである。

「あらら？」

手には毎回タイトルの違ういつもの分厚い本を抱え、そしてその目は僅かな驚きと好奇心に開かれていた。

その視線の先。

そこにいたのは――

「ティースさん。珍しいね、ここでお酒呑んでるなんて。しかも一人？」

「ん？ ……あ、リディアか」

ワインの入ったグラスを片手に振り返ったティースは、どうやらほんのほろ酔い気分といったところか。

彼は今日、任務から帰ってきたばかりのところで、いつもなら疲れてベッドに入っているはずだった。

「君こそ、こんな時間にどうしたんだ？」

僅かに赤くなった顔で、ティースは逆に質問した。

時計は夜の十一時を回っている。普通なら、彼女ぐらいの年齢の子供は眠っている時間だった。

ただ、もちろんそんな常識など、最初から常識外れのこの少女に通用するはずはなく、

「ホールにいる人たちに、十二歳になったあたしのセクシーな寝巻姿を見てもらおうかと思って」

「……」

「うわ。鼻で笑ったね、今」

「いや、笑ってないよ。そっか。こないだ十二歳になったんだっけ？」

言いながらも、ティースの頬は緩んだままだった。

「あーあ、馬鹿にしちゃって。知らないよ。あたし、将来は絶対に

美人になるって言われてるんだからね」

「誰に？」

「街角の胡散臭い占い師」

「わざわざ見てもらったのかい？」

リアリストっぽい彼女のイメージからかけ離れた言葉に微かな疑問を向けると、リディアは首を横に振って、

「まさか。お金もつたいないし」

「じゃあ――」

「あの人、いつも見かけるんだけど、誰に対しても同じことしか言わないんだ。だから、あたしにもきつと同じこと言うんだろうなと思って」

「はは……」

相変わらずの少女に、ティースは苦笑いした。

「考えてみたら、将来美人になるとかって、占いとあまり関係ないじゃんねえ」

そう言いながら、リディアは向かいの席にストンと腰を下ろす。

ティースはそれを見て、少し不思議そうに、

「俺みたいな酔っぱらいに付き合って楽しいかい？」

「自分のこと酔っぱらいって言うのは、まだそれほど酔ってない証拠」

「相変わらず、子供らしくない発言だなあ」

笑ったティースに、リディアは真面目な顔を見ると、

「子供じゃないってば。もう赤ちゃんも産める体になってるし、胸だって少しはあるよ。見てみる？」

「……あ、あのね」

アルコールとは別の理由で赤面したティースに、リディアはおかしそうに笑う。

「あはは。面白いなあ、ティースさん。そんなことで赤面する男の人って珍しいよ」

「そ、そんなもんかな？」

「少なくとも、ここにいる十八歳以上の男の人ではティースさんぐらい。……でも、あたしは好きだな」

「……ありがとう。素直に喜んでおくよ」

彼女相手だと、さすがのティースもそれほど照れることなく返すことができた。

グラスの中のワインを飲み干すと、リディアがワインの瓶を手につぎ足してくれる。周りはいつの間にか無人になっていて、ホールにいるのは彼ら二人のみ。

……そしてしばらく。話題もなく沈黙が続いていたところへ、リディアがまるで不意を突くようなタイミングでポツリと言った。

「辛かった？」

「え？」

リディアは少し上目遣いにティースを見て、

「ティースさん、前に言ってたもんね。他の人の恋愛は、ついつい応援したくなるって」

「……」

思わぬ指摘に驚き、無言で見つめ返す。

もちろん彼女は今回の件の大まかな経過を聞いてはいる。が、ティースがどんなことを考えて、そしてどんなことを感じたか、などということまで知っているはずはなかった。

だからもちろん、それは彼女の単なる想像で、しかしきちんと的を射ていたのだ。

「なんとなくね。ティースさんって、そういう無茶な恋愛とかすごく応援しそうな感じだったから」

「はは……君はホント、俺なんかよりよっぽど鋭いな……」

リディアは小さくため息を吐いて、

「人が良すぎるのも考えものだね。そういうのいちいち抱え込んでたら、潰れちゃうよ」

「そういうんじゃないよ。ただ、許せないと思ったただだから」
「許せないって？」

その言葉に、リディアはほんの少しだけ目を細める。

「“魔”が？」

ティースは一瞬、言葉に詰まった。

そして少し声を落とし、答える。

「……違うよ。俺が許せないのは、人の心や命を弄ぶヤツらだけだ」

「そっか。……なら、大丈夫かな」

「？ なにがだい？」

「ティースさんが、魔への復讐だけに燃える人になったら、なんかヤだな、って」

「……ならないよ。俺、今でも、魔が悪いヤツばかりじゃないって信じてるから」

「あれ？ 今回、騙されたのに？」

「それはあるけど、でも、それ以上に俺は——」

「なに？」

「……ごめん。なんでもない」

軽々しく口にすることではないと思い直し、ティースは口を噤んだ。

リディアは少し探るような目で見た。

（う……）

ティースには、どうにも心の奥が見透かされているような気がして落ち着かない。ただでさえ彼は考えていることが顔に出やすく、かつ、目の前の少女はそういうことに鋭い人物であったから。

「——ま、いいや」

あっさりと、リディアの視線が離れた。そして立ち上がる。

「あ……リディア。そのワイン——」

「呑みすぎはよくないよ。それにお酒は本性をさらけ出すものだからね」

それから振り返って、真面目な顔で言った。

「フツ—の女の人に触れないストレスで、あたしみたいな微妙な年頃の娘に襲いかかってくる可能性が高いし」

「……そ、それは絶対にないっ!!」

即座に否定したティースに、リディアは笑いながら目を細めて、
「慌ててるところが怪しいなあ。……セシルさんにも気を付けるように言っておこーっと」

「ちよっ、ちよっと、リディア! ……ったく」

屋敷の奥へ消えていく少女を見送りながら、ティースは仕方なさ
そうに息を吐く。グラスに半分ほど残ったワインにちびちびと口を
つけながら、独り、自嘲気味に笑って、

(……あんな年下の女の子に心配されているようじゃ、ダメだなあ)
それでも、彼女の心遣いに深く感謝するのだった。

——その翌日。

「あの、ティースさん」

「うん？」

「リディアちゃんが、ティースさんと一緒にいると、私の貞操が危
ないって言うんですけれど……」

「あ、あのね、セシル。それはとんでもない誤解——」

「“貞操”って、なんですか？」

「……なんでもないよ」

「……」

妙に冷たいシーラの視線を背中に感じながら、ティースは深いた
め息をついた。

(やっぱ、遊ばれただけなのかも——)

その8『繰り返す“ラブ・ストーリー”』

十月に入るとネービスの街は早々に冬支度に入り始める。大陸でも比較的北に位置するこの都市は紅葉の訪れも早く、それが過ぎればすぐに冬。二ヶ月前には薄着で溢れていた大通りも、そろそろ厚手の服が目立ち始めている。

そんな秋の、とある日のこと。

ミューティレイクの敷地を、その中心にある本館から少し西側へ移動した場所。

ディバーナ・ファントムの詰め所に、一つの別れが訪れていた。

「じゃあ、あの、色々お世話になりました」

「ええ……ティースくんも元気でね」

「はい」

見送られているのは、もちろんひよろつとした長身の男――ティーサイトⅡアマルナである。そしてそれを名残惜しそうに見送るのが、二つのお団子を頭に結った女性、ディバーナ・ファントムの隊長、アクアⅡルビナートだ。

「……ティースくんがなくなると、おねーさんホントに淋しいわあ」

「大げさだっつーの。屋敷でほぼ毎日会ってんだろうが」

そのアクアの後ろでは、ダリアⅡキャロルが呆れ顔で腰に手を当てていた。夏の間はずっと露出の高い格好だった彼女も、今はラフではあるが、比較的落ち着いた服装になっている。

ティースは苦笑して、

「でも、毎日同じ場所で特訓したりするのは多分最後だろうからさ」

「ま、そりゃそうだけだよ」

なんだかんだで彼女は結局、ティースにとって一番話しやすい相手だった。

他の二人、ドロシーとフィリスの姿はそこにはない。ドロシーは

もともとこういう場に顔を出す性格ではないだろうし、フィリスはファナの侍女という副業(?)のため、時期によってはなかなか忙しかったりもするのだ。

「でもま、お前の成長ぶりにはあたしも驚かされたよ。さすが、アオイのヤツに見込まれただけのことはあるよな」

ダリアの言葉に、ティースは照れながら、

「でも、結局ダリアには負け越したままだったじゃないか」

「なに言ってるんだよ。それは最初の頃のアドバンテージのせいだろ……あたしにしてみりゃ、お前みたいな頼りなさそうなヤツにたった二ヶ月で追いつかれて、かなりショック受けてるんだぜ？」

アクアが二度頷いて、

「そうねえ。この前の任務のときなんて、一人で氷の五十六族をやっつけちゃったもの。……おねーさんを追い抜く日もそう遠くないかな？」

「無茶言わないでくださいよ……」

苦笑したティースに、アクアは妖艶に微笑みながら、

「もしあたしに勝てるようになったら……そのときはティースくんのお嫁さんになってあ・げ・る・わっ」

パチッとウインクする。

「……はあ」

すかさずダリアの突っ込みが入った。

「そりゃないぜー、アクア姉。それって報酬っつーより罰ゲームじゃないか」

「なんでよ!」

アクアは思いつき口を尖らせて、少し焦ったような表情でティースを見る。

「……ね、ねえ、ティースくん! そんなことないわよね!? あたしって、そこまで魅力のない女じゃないわよね!？」

「あ……その、えっと……」

肯定しても否定しても、彼に待っているのはおそらくよからぬ出

来事であろう。

「ど、どっちにしろ、それは多分、かなり遠い話ですので……」

結局、曖昧に濁して答えたティースだったが、それは偽らざる言葉でもある。いくら成長したとはいえ、アクアはまだ彼にとって雲の上の存在だった。

「な、なんか適当に濁されたわあ……」

ガックリ肩を落としたアクアに、ダリアは勝ち誇ったように喉で笑いながら、

「……ま、それはいいとして。さっきの話だけだよ」
話題を元に戻した。

「お前ってなんか、筋がいいっつーより、基礎がしっかりしてるって感じだよな？　上達の妨げにならないように基礎を覚えてるっていうか」

「そ、そうかな？」

「聞いたことなかったけど、誰に剣を習ったんだ？　もしかして有名なヤツじゃないのか？」

「まさか」

ティースは笑って、そして答えた。

「俺の故郷の神父さんだよ」

「神父う？」

ダリアが胡散臭い、と言わんばかりの表情をする。

「ああ。もうかなり高齢だったけど、昔は剣の道を目指したこともあったらしくてさ。物知りな人だったなあ」

「ふーん。神父に剣、ねえ。変な話だなあ。……ま、いいか。そろそろ時間、だろ？」

「あ、ああ」

詰め所の中にある時計を見て、ティースは頷いた。

時刻はちょうど正午の十分前。

「じゃあ、アクアさんに、ダリア。……えっと、いつでも会えるのに改めて言うのも変だけど……ひとまず、お世話になりました」

「ああ。向こうでも頑張れよ、ティース」

「プロポーズ代わりの果たし状、楽しみに待ってるからね。……ちゅっ」

「……はは」

アクアの投げキッスに見送られ、そしてティースはディバーナ・ファントムの詰め所を去っていくのだった。

向かう先はもちろん、次の配属先——ディバーナ・ナイト。

それはディバーナ・ロウの最強チームであり、“ディバーナ・ロウそのもの”と言っても決して過言ではない。その隊長はレインハルトⅡシュナイダー。ティースにとってはシーラの命を救ってくれた……そのために立ち上がってくれた大恩人である。

（厳しそうな人だけど——）

武者震いする体に入合を入れ直し、

（よし……気後れしないように頑張らなきゃな！）

そしてティースはディバーナ・ナイトの詰め所へと向かうのだった。

——一方、そんなティースを見送った二人。

「……しかし今度はナイト、か。お嬢さんの考えることもいまいちわかんねえよなあ。英才教育なんだか落ちこぼれ教育なんだか」

頭の後ろで手を組んで詰め所の中に戻っていくダリアに、アクアもまた振り返ってその後をついていく。

「期待されてるわ。間違はなく、ね」

「アクア姉もやっぱ期待してんのか？ ……そりゃそうか」

馬鹿らしいと言った様子ですぐに自分の言葉を撤回するダリア。

アクアは頷いて、

「なんだかんだ言いながら、彼はカノンの厳しい特訓に耐えたし、まだ未熟だけどここで“集中”も会得したわ。ディバーナ・ロウに来て四ヶ月、最初はヴィヴィアンくんに軽くあしらわれていた彼が、

今じゃ五十族とも戦えるようになった。……誰もはっきりとは口にしないけど、これは驚異的なことでしょ」

「本人に一番自覚がなさそうだけどな」

笑いながらダリアは居間を抜け、奥の鍛錬場へと向かっていく。

そこにはティースの一輪車が残っていた。

「ま、結局こっちの才能はゼロだったわけだが」

アクアも苦笑しながら、

「そうね。でも、ここに来たデビルバスター候補生としては、もしかしたらルウくん並の逸材かも」

「ああ、ルーベン、か。……そういやここに来た時期もよく似てんな。性格はだいぶ違うけどよ」

「……そこね」

「？ アクア姉、どういうことだ？」

「性格よ。……彼の才能を邪魔するものがあるとすれば、あの性格だと思っわ」

ダリアは納得できない顔をした。

「そうか？ あたしは、あいつはあのままでもいいと思うけどな」

アクアは少し意外そうに、

「あら？ あなたいつも、女々しい男はみつともないって言うくせに。……もしかして彼に惚れちゃった？」

「んなわきゃねーだろ。……そりゃ確かに女々しいところあるけど、やるときはやるんだからいいじゃねえか」

「あたしも彼の性格自体がダメだというつもりはないわ。……可愛いし」

「……あんたは結局それだもんな」

「なによお。可愛いに越したことないじゃない」

「どうだか」

特に相手が男の場合は……などとダリアは思うのだが、アクアに對しては馬の耳に念仏なのでそれ以上は何も言わなかった。

そしてアクアは続ける。

「でもね……もう少し切り替えが上手ければ、と思うのよ」

「切り替え？　どういうことだ？」

「これはリディアちゃんも言っていたんだけど……ほら、彼って何もかんでも背負っちゃいそうじゃない？」

「ああ……」

それはダリアにもわかった。

「サイラスくんのこと。この前のザヴィアのこと。……今はまだ、それを成長の原動力にしてるみたいだからいいけれど」

「……」

「ナイトは、あたしたちや出来立てのカノンと違うから。……彼がここでの任務に耐えられなくなるとしたら、多分――」

思い直したように口を噤んだアクアの瞳が、心配そうに揺れた。

そこに浮かんでいたのは微かな期待と、それを遙かに上回る不安の色。

「誰か、彼を強力に支えてくれるような人が、いればいいんだけど、ね……」

そしてアクアは目を閉じ、ゆっくり息を吐いたのだった。

さて、それから約一時間後のこと。

ティースの姿は、何故かネービス中心近くの広場にあった。その視線はとある人物の姿を探して彷徨っている。

（ここにいて、マイルズさんは言ってたけど……）

詰め所を訪れたティースを出迎えたのは、屋敷の主治医でもあるマイルズⅡカンバースだった。彼がナイトの一員であるということにまず驚いたティースだったが、医術に関してはいえばもちろん屋敷で一番であり、考えてみれば特別に不思議なことではない。

（でも、マイルズさんがいない間に病人とか出たらどうしてるんだろうなあ）

とまあ、そんな心配は、あれだけの規模を持つミューティレイクにとつては余計なお世話というところなのだろうが……それはともかく。そんなマイルズが中指で黒縁眼鏡を持ち上げながら（どうやら彼のクセらしい）口にした言葉によると、ナイトの隊長であるレインハルトⅡシュナイダーは、用事で街の方に出払っている、ということだったのである。

もちろん今日ティースがやってくることは承知済みだったはずであり、おそらくは緊急の用件だったのだろう。

好天の昼下がり。辺りには人が溢れており、露店もいくつか姿を見せている。その中から一人を捜すのは骨が折れるが、レイという男はティースほどではないにしろ長身で目立つ格好だ。不可能ではないと思えた。

（えっと、背が高くて、確か旅人風の……）

旅人風の格好をした男というのはそれなりに数が多い。大陸の中心からやや離れた北方とはいえ、ネービスは大陸の有力都市の一つ、人が集まればそこには利益が生まれ、仕事もある。特に交易に力を入れていくわけでもなくとも、自然と人は集まるものだ。

それこそつい最近彼が演じたような大道芸人や、仕事を求めてやってきたのであろう傭兵風の男、旅の食料を求めて露店に姿を見せる一団、中には何をしにやってきたのかわからない――ネービスの町娘だと思われる女性に背筋が震えるぐらい軟派な言葉をかけている男もいる。

「見ろよ。君の瞳はまるで、あの夜空に輝く星のようじゃないか」

「……夜空なんてどこにもありませんけど」

「いいや、そんなことはないさ。よく見てみるといい」

「……」

つられて空を見上げたティース。

広がっているのはもちろん青空だ。輝く星はもちろん、月すらもその姿を現していない。

「俺にはちゃんと見えてる。……ほら、その瞳の中。君の心の美し

さを映したように、キラキラ輝いてる」

「……」

女性は戸惑っている。が、言葉そのものというよりは、その雰囲気呑まれてしまっているようで、そこから逃げだそうとはしていない。

客観的に見れば、脈アリ、といったところだろうか。

そして男はここぞとばかりに続けた。

「見えないのなら、俺の目を覗き込んでみるといい。その中に、きつと美しい夜空が見え——」

「って！」

そこまで来て——“彼”にとっては不幸なことに——ティースはようやく我に返った。

「レイさん！ い、一体、何をやってるんですかっ!!」

「ん？」

唇まで僅か三十センチほど。女性にとっては幸かあるいは不幸か。レイが動きを止めて振り返ると、女性はハッとした様子で慌ててその場から逃げていった。

「あ……あら、逃げられちゃった」

改めて声を掛ける間もなく女性の背中中は遠ざかり……そしてレイは再びティースを振り返ると、

「……おい、ティース。どうしてくれんだ。せっかくいいところだったのに」

「そ、それはすみま——じゃなくて！」

反射的に謝ってしまうところだったが、ティースはすぐに気付いて、

「レイさん、任務でここに来ているんじゃないっ!？」

「しっ」

だが、レイは少し眉をひそめ、口元に指を当てて答えた。

「大声出すんじゃない。標的が逃げちまうだろ」

「標的？ ……あ」

急に厳格さを帯びたレイの言葉に口を噤み、ティースはすぐさま自らの愚かさを悟ることになった。

（そ、そっか。今のはもしかしてカムフラージュ……）

考えてみれば当然のことだ。ディバーナ・ロウを象徴するナイトの隊長が、本来の仕事をはっぱらかしてナンパに精を出しているはずもなく。冷静に考えればそのぐらい察してしかるべきだったと気付く。

（そんな簡単なことにも気付かないなんて……）

すかさず自己嫌悪に陥るティース。だが、幸い、と言おうか。周りを見てもティースの大声に注目している人間はそれほどいなかった。

レイも頷いて、

「とりあえず大丈夫だ。……が、軽率すぎるな。気をつけることだ」

「は……はい。すみません」

「わかればいいさ。……お前はしばらくその辺で時間を潰している。こっちはあと一時間もあれば終わる」

「は、はい」

そう頷きかけて、ティースはふと考え直す。

少し声を潜めて、

「あの、俺にも何か手伝えることはないですか？」

「ん？」

レイは少し怪訝そうな顔をしたが、すぐに思案して、

「……なるほど。使えるかもしれんな」

——そして一時間後。

「……」

「どうした、ティース」

人の溢れる大通りには、ようやく“任務”を終え、ミューティレイクへと戻る二人の姿があった。さすがにこの二人が並べば目立つ。

しかも片方はいかにも精悍な旅人風、もう片方は長身の割に頼りない童顔と、アンバランスな組み合わせで尚更目立っていた。

……が、どうやらこの組み合わせは、結果的に言えば今回の任務には不向きだったようで。

「結局……任務ってのはなんだったんですか」

やや、無然とした表情のティース。一応尋ねてはみたものの、その表情からすると、彼の中ではすでに答えが出ているようだ。

そしてレイの返答もまた、その彼の推測と寸分違わぬもので。

「残念ながらことごとく失敗だったな。……お前の人の良さそうな顔は、初期段階の警戒心を除くのに有効かと思ったのだが」

「……どこが任務ですっ！ 単なるナンパじゃないですかっ！！」

だが、ティースの抗議にもレイは涼しい顔を返して、

「任務だなんて一言も言っていないだろ？ 俺はただ、標的……イイ女がお前の大声で逃げ出しちまうことを懸念しただけだ」

「……」

黙り込んだティースに、レイは軽く頭を掻きながら、

「ま、そう膨れるな。初日から気張ってもいいことないぞ」

「……」

どうやら彼の性格に関しては、ティースが思い描いていたものは少々違っているようだ。

（はあ……こんなので、本当に大丈夫なのかなあ……）

そしていつものように、彼の心は不安で一杯になるのだった。

ネービスからは少し離れた、とある森の中。

——チャプ、チャプ。

満月の下、森はまるで水を打ったように静まり返っていた。普段、

森を支配している寧猛な動物たちも、この日ばかりは息を潜め、物音一つ立てることはない。

——チャプ、チャプ。

そこに唯一響いているのは、微かな水音だった。

森の奥にポツンと湧き出る小さな湖。射し込む月光が、その周囲だけを薄明かりで照らしている。

——チャプン。

たった一つだけ、動くもの。

浮かび上がったのは——肌の色。

「……ふう」

それは人の姿をしている。スラリと伸びた足は染み一つないほどに美しく、全身にタオルを巻いて湖を出た姿を見ると、性別に関しては“女性”だと断言して間違いなさそうだ。

頭はもう一枚のタオルで覆い、それでは収まりきらない水に濡れた長い髪が、月に照らされてキラキラと輝いている。

「……」

無言の瞳がタオルの奥から覗いた。深い色のそれは穏やかに夜空を見上げると、満月を映し、微かに憂いを帯びる。

風が吹いて、草木がざわめいた。

「……様——」

誰かの名を呟いたその言葉は、折しも吹いた風にかき消されて。

「どこに……どこに、おられるのですか——？」

幕間『眠れない夜の夢』

ティースとシーラの二人がこのミューティレイクに来てから、すでに二ヶ月余りが経過している。

屋敷自体の規模も、働いている人数もかなり大きなこのミューティレイクであるが、この頃になると二人の存在もようやくこの場所に溶け込むようになっていた。つまり、屋敷の大半の人間が、彼らの存在を認知するに至っていたのである。

しかし、だ。そうはいっても、彼らに直接接する機会のある人間はそう多いわけではない。彼らが姿を見せるのは別館と、正門から別館までの道、別館の中でも訪れる場所というのは一部に限られている。

だから、ほぼ接点のない人々にしてみれば、彼ら二人の存在というのは、ほとんど気にも留めない程度のものか、あるいは無責任なうわさ話の対称でしかないのである。

そして、屋敷の大半の人々にとって、ティースは主に前者であり、シーラは後者だった。

シーラ＝スノーフォールは、その保護者であるディバーナ・ロウの一員、ティーサイト＝アマルナよりも、よほど屋敷の人々の話題にのぼることが多い。ティースのことはほとんど知らずとも、彼女のことは知っているという者も数多い。

だがしかし、それも考えてみれば致し方ない。

ティースという男は、あれだけの長身にも関わらずどこか影の薄いところがあったし、見た目もそれほどのインパクトはなく、平々凡々とした容姿。とにかく背が高いという以外に特徴らしい特徴のない男だ。

それとは逆に、このシーラという少女は、遠目からでもわかるほどに輝く美しい髪を持っていたし、すれ違う者が必ず目を惹きつけ

られてしまうほどに浮世離れした美貌を持っている。

だから男女を問わず、彼女は屋敷の使用人たちの注目の的だった。ある年輩の女性は感心し、ある若い男は胸を走らせ、若い少女たちは憧憬と羨望の視線を向けるのである。

だが、しかし。そんな使用人たちの間で否応なしに流れる彼女に対する様々な噂や評判は、意外に一定していなかった。

——ある者は、わがままで高慢ちきで、すねかじりのくせに偉そうだと酷評する。

——ある者は、そんなことはない、見た目以上に親しみやすく細かい心遣いのできる人物だと反論する。

その真っ二つに分かれた主張がまた、男女年齢問わずにバラバラだという辺りも、彼女の本質を掴みにくい要因となっていた。

そんな使用人たちの中に、マグナスⅡラングリッジという少年がいる。

彼は、後者の意見を持つ者の一人だった。

十五歳、奇しくもシーラと同年代であるこの少年は当初、どちらかといえば前者の意見に傾いていた。実際に言葉を交わすことなどももちろんなく、人伝いに話を聞けば、耳に入ってくるのは傍若無人とまでは言わないまでも、自分勝手な発言や振る舞いばかり。特に彼女の、彼女の保護者である男性——ティースに対する態度が、尾ひれをつけて広がったばかりに、少年の中の彼女に対する悪評価は、ほぼ確定的といえるところまで来ていた。

だが、その評価はある日、とあることから彼女と頻繁に言葉を交わす機会を得たことによって、徐々に傾いていったのである。

「ご苦労様、マグナス」

「……あ、シーラ様」

まだ太陽が昇って間もないというのに、その部屋は薄暗くジメジメとしていた。ぼんやりとした石造りの空間に、微かに流れる水の音。壁際には薄明かりに照らされ、何やら不気味な外観の植物類が

びつしりと並んでいた。

このミューティレイクでは実に多くの植物が栽培されている。外観を飾る木々や花畑もそうだったし、こうして人目に触れることはなくとも、有用な薬の元となる様々な薬草類もかなりの数だ。

マグナスはそういったものの世話、特にこの地下室にある、稀少な植物たちの世話をする係だった。

そしてシーラはよくこの場所に顔を出す。それは彼女が薬草学を学んでいることから考えてもごく自然なことであったが、マグナスにとっては、最初、彼女にこの場所への案内を頼まれたときは、まさか、という気持ちだった。

何故なら、ここにある植物はいずれも一般的とは言い難いものばかりで、もちろん使用される頻度も低い。彼が耳にしていた悪評では、彼女がこれらの植物を必要とするほどに勉強熱心な人物だとは到底思えなかったからである。

「今日も少しもらっていくわ。構わないかしら？」

「はい、それはもう」

反射的にそう答えてから、マグナスは思い出した顔で、

「……あ、ただ、グレゴスの葉は少し生育が悪くて、その、できれば――」

シーラの足が止まる。

「そう。……残念ね」

どうやら、ちょうどそれが彼女の欲しがっていたものだったらしい。

それを察したマグナスは少しもりながら、

「あ、そ、その、シーラ様。どうしてもというのであれば、少しぐらいは……」

「いえ。少し実験用に欲しかっただけ。どうしてもというほどではないわ。ごめんなさいね、仕事の邪魔をして」

「じゃ、邪魔だなんてこと！ 決して！」

「そう？ ありがとう」

シーラの微笑みに、マグナスは首筋まで真っ赤になった。薄暗いために気付かれることはないだろうが、それでも少し慌てて、

「シ、シーラ様は……その、勉強の方ははかどっておられますか？」

「ええ、そうね」

シーラは部屋に広がる植物の元へ足を運び、その一つ一つの様子を観察し始める。

「あなたのおかげで、それなりに、ね」

「あ、そ、そうですか」

さらりと言い切ったシーラの言葉にマグナスはさらに慌て、見るからに地に足がついていない様子で話題を変えた。

「……で、でも、シーラ様はすごいですよ！　なんとと言っても、あのサンタニアで学んでおられるのですから！」

だが、

「別にすごくないわ」

「……え？」

素っ気なく答えたシーラに、マグナスは少し怪訝な顔をして、

「で、でも、ものすごく頭が良くないと――」

「私がすごいというのなら、私と同じ年で立派に働いているあなたもすごいじゃない」

「あ……そ、そんなこと、全然――！」

慌てふためくマグナスに、そんな彼の気持ちを知ってか知らずか、シーラは壁際の青紫色の葉を持つ植物から離れ、少しおかしそうに笑いながら振り返って、

「ここの植物たちがきちんと育っているのは、あなたが丁寧に世話をしているからよ。……もっと自信を持ちなさい」

「シ、シーラ様……」

「それじゃあ、私は行くわ。これからも、よろしく頼むわね」

「は、はい」

そしてシーラは部屋を出ていった。

「……」

感激の余り立ち尽くすマグナス、

——そんな彼が数分後、様子を見にやってきた先輩にどやされるハメになったのは言うまでもない。

（グレゴスの葉がなくてはお手上げね……）

地下室から部屋に戻ったシーラは、早々に今日の計画の打ち切りを決定していた。

学園が休みのこの日、彼女は実は以前から試そうと思っていた“とある薬”の実験を行うつもりで、そのために“グレゴス”と呼ばれる、あまり一般的とは言い難い植物の葉が必要だったのである。

（どうしたものかしら）

そんな彼女の部屋は、他の住人たちの部屋と比べると雑然としているように思えた。色々なものが色々な場所に散らばっているからだ。

が、それは決して彼女が無精だからではない。

彼女の部屋は、様々な薬の調査実験を行うにあたって必要な器具が色々と置いてあったり、あるいは生成中の薬——例えば数時間の日の光を必要とするもの——が日光の良く当たる窓際に置いてあったり、あるいは自ら栽培している特殊な植物の鉢がいくつか置いてあったり……一見散らかっているように見えるのはそのためなのである。実際よく見れば、いくら物が多くとも、それらが決して邪魔にならない位置に考えて配置されているのがよくわかるだろう。

むしろ彼女はキレイ好きであり、部屋の掃除に訪れるミュートイレイクの使用人たちも、彼女の部屋に限ってはほとんど触れるべきところがないほどである。

「ふう……」

各部屋備え付けの机に着いて、シーラは本日の予定について再考していた。

日は昇ったばかり。休みだからといってゆっくりするという考えは、彼女の中には最初から存在していない。彼女にとって、やりたいたことはいくらかもある。時間はいくらかあっても困ることはなかった。

その手が机の下に伸びる。そこはこの部屋で唯一、本当に雑然としている場所。何冊もの本が積まれ、そのほとんどが表紙のついていないものだった。

それらは書庫から借りてきたものではなく、彼女の私物だ。

伸びた手は雑然とした本の山の奥の奥から鍵付きの箱を取り出した。外観は特に何の変哲もなかったが、かなり頑丈な作りのものだ。大きさは十数センチ四方。

シーラは指に填めていた指輪を外すと、慣れた手付きでそれを奇妙な形の鍵穴に詰め込んだ。

カチリと音がして鍵が外れる。

中から出てきたのは一冊の本。表紙はない。が、真っ黒で妙に質感のあるカバーに、縁には妙な文様が描かれており、大事に保管されているだけあって、どこことなく“重み”を感じさせる書物だった。古びている割に、日焼けしていなければ腐食してもいない。

「……」

視線を一度、部屋の入り口へと向けてから、シーラはおもむろにその本を開いた。

中は……いや、中もまた白紙だった。あるいは古い日記帳か何かだろうか。だが、彼女はそこに何を書き込むわけでもなく、ただじっと見つめるだけ。

「ビアリス……パッフル……グレゴス……アルセフィ……」

呟いたのは聞き慣れない単語だったが、どうやらこの大陸に存在する植物の名前のようなだった。

難しそうに目が細められ、美しい睫毛が微かに震える。

「眠りを妨げる……を避けるには……天空の……飛沫と……式の神の恵みを――」

カタン。

「？」

物音に気付いて、シーラは本を閉じる。

振り返ってみたが、誰もいない。物音は、どうやら隣の部屋のようだった。

隣の部屋の主は、今は屋敷にいないはずで――時計に視線を向けて、そして気付く。

（もう朝食の時間……じゃあ、隣にはそろそろ掃除の子が来てる頃ね）

本を元の位置に戻し、そしてシーラはゆっくり席を立つのだった。

「何か、お悩みですか？」

「え？」

食堂では朝食も終わり、希望した者には食後の紅茶が配られている。……とはいえ、今、シーラの他にこの場にいるのは二人だけだ。

上座にはこの屋敷の主である弱冠十七歳の少女、ファナ＝ミューティレイク。

そしてその隣の席には、屋敷の執事兼ボディガードを務める縁なし眼鏡の男性、イングヴェイ＝イグレシウス――通称、アオイである。

「何か難しい顔をなさってましたわ？」

そして、丁寧な口調でシーラに対して鋭い観察力を示したのは、もちろんファナの方だった。アオイの方はといえば、寝起きに弱いという噂どおり、まだどこかはつきりしないボーっとした表情をしている。

シーラなどは、これで本当に護衛が務めるのかと心配になってしまふところなのだが、ファナは『大丈夫ですわ』の一点張りだったし、当の本人は『何があっても絶対に守り抜きますから』と根拠の

ない自信を示している。

もちろん、このアオイという人物について、それほど詳しいことを知る由もないシーラとしては、それ以上口を挟む理由もなかった。

——と、それはともかく。

「悩み事ってほどのものではないのだけれど」

ファナの問いに対して、シーラは紅茶を口に運びながら答える。

「ティースの部屋の机の上に、明らかに女物のガラスの小瓶があるの。……多分、香水を入れておくものだわ。中身は入っていないようにだけ」

「ええ、私も存じております。それが、気になるのですか？」

「気になるというほどではないわ。ただ、少なくとも、あいつが自分で持ってくるようなものじゃないし、何の意味があるのかと思っただけ」

シーラの疑問に、ファナは納得した顔をして答えた。

「ティースさんがカノンでの最後の任務の際、お礼にいただいた物だそうすわ。……かの地方には、女性が自らの使用した香水のビンを感謝の印として男性にプレゼントする慣習があるのです」

「……ああ。聞いたことがあるわ」

目を閉じ、カップを置いてシーラは頷いた。

「今は主に、意中の男にプレゼントするようになっているそうね。」

……ま、あいつのことだから、それはないにしろ」

「そうでしょうか？」

ファナは不思議そうに首を傾げて、それからそっと笑みを浮かべる。

「ティースさんはとても魅力的な男性だと思いますわ」

「その言葉をあいつが聞いたら、きっと真っ赤になって慌てふためくわね」

光景を思い浮かべたのか、シーラは微かに口元を緩める。

確かにそれは、古い付き合いの彼女でなくとも、想像することは容易だったろう。

「それも、ティースさんの良いところです」

「そうかしら……？」

少しだけ視線を流したシーラに、ファナはおかしそうにクスクスと笑って、

「では、女性にだらしないティースさんの方が、魅力的だと思います？」

「……天地がひっくり返ってもあり得ないわね」

誤魔化すようにそう言って、再びティーカップを手にとると、

「とにかく、あのビンはいつが大事にしてるもの、ということね」

「ええ、そう思いますわ。……シーラさん？」

少しだけ不思議そうなファナに対し、シーラはしばらくテーブルクロスを見つめた後、ゆっくりと顔を上げて、言った。

「なんでもないわ、ファナ。……あともう一つ、確かめておきたいことがあるんだけど――」

その日の夕方、ティーサイトⅡアマルナの部屋。

今は主がいなくてあつて散らかりようもなく、また、毎日朝と夕方に定期的に掃除が入るため、埃が溜まるようなこともない。

そのドアは鍵がかかっていることもなく、何の抵抗もなく開いた。住人によつては、自らが不在のときの部屋への進入を嫌う人間もいたが、ティースに関してはまるでそんなことはなく、そういう点ではよく言えばおおらか、悪く言えば無警戒ということができるだろう。

先の朝食の席で話題に上った香水のビンは、机の上にあった。ハート型の小瓶で確かに中身はなくなっていたが、蓋を開ければ香水の残り香が確認できることだろう。

――それは感謝、あるいは、好意の証。

これをティースに手渡した女性、あるいは少女がどんな人物なの

かはわからない。が、どうやらカノンの他の面々に渡していないところから見ても、単なる感謝以外の意図が僅かにでもあったのは確かだろう。

……その事実が、彼女を苛立たせる。

どす黒く胸に広がった感情の名前は――嫉妬、だ。

その感情が、震える手を動かした。それは小瓶に伸びて、やがて触れる。

小瓶の感触は、ほんの少しだけヒンヤリとしていた。いや、鼓動が速まるにつれて、彼女の体の熱が少し上昇していたせいかもしれない。

（こんなもの……）

嫉妬が胸を焦がす。それをティースに渡した女性の顔、それを受け取ったときの彼の顔。それを想像するだけで、狂おしいまでの怒りが胸を支配した。

（こんなもの――）

グツと、それを握りしめる。

簡単だった。それをただ、床に叩きつければいい。それだけでおそらく、小瓶は粉々に砕け散るだろう。割れた理由は、あとでいくらでもでっち上げることはできる。

迷うことは、もう必要なかった。

唇を噛みしめてそれを持ち上げると、怒りにまかせ――

「こんなもの――っ!!」

「――そこまでよ」

「!？」

振り上げたところで、手が止まった。

その制止の声は、先ほどまで彼女以外に誰もいなかったはずの部屋の中。その入り口にいつの間にか一人の人物が立っていた。

彼女とほぼ同じ年だろう。片手を腰に当て、細めた目で振り上げた小瓶を見つめている。

窓から射し込む夕日で、その綺麗な金髪が水飴のように輝いてい

た。

「それは、あいつがきつと大事にしているものだわ。元の場所に、戻しなさい」

そう言ったところで、そうやくその人物の正体を認識する。

「シーラ……様……」

「その小瓶を、元の場所に戻しなさい、パメラ」

うろたえた表情のパメラに、シーラは有無を言わせぬ冷たい口調でそう言い放った。

「っ……」

「パメラ！」

おそらく無意識の行動だろう。小瓶を手にしたまま後ずさろうとしたパメラに、叱咤の声が鋭く突き刺さった。

「それを元の場所に戻しなさい！ さもなくば、あなたは職を失うわよ！」

「っ!？」

シーラの言葉は脅しでもなんでもなかった。使用人が客のものを意図的に破壊したとなれば、彼女の言葉が現実となる可能性は低くはない。

……パメラは決して裕福な家の出ではなかった。父親も母親も健在だったが父親は定職に就けずにいたし、二人の弟を含めた家族の生活費の半分以上は、比較的恵まれている彼女の給料で賄われていた。

解雇が即刻破滅に繋がるほどではない。が、それでもここで職を失うことが、それほど学があるわけでもない彼女にとって、そして父親が定職に就けていない家族にとって、暗い未来を暗示していることは間違いない。

だが、それを考慮にいれてもなお。彼女はシーラの言葉に素直に従えなかった。

彼女には彼女なりに、それだけの理由があったからだ。

「わ、私は――」

「パメラ」

言いかけたパメラの言葉を、シーラはすぐに遮った。

「話は聞かせてもらおうわ。理由次第では、あなたの今の行動を黙っていてもあげる。……ただ、先にその小瓶を元の場所に戻しなさい」
「……」

視線を落としたパメラの体は微かに震えていた。

表情に浮かんでいるのは、興奮と、絶望。

おそらく彼女の中では、“大変なことをしてしまった”という気持ちと、それでもなお収まりがつかない“何らかの理由”がせめぎ合っているのだろう。

「よく、考えることよ」

そんなパメラに、シーラは淡々と言葉を突きつけた。

「あなたがその小瓶を割ったところで、何が解決するというのは？」

あなたの気持ちは、収まるどころかさらにエスカレートして膨れ上がるだけだわ」

「っ……」

観念したように項垂れて、そしてパメラはゆっくりと腕を下ろした。

コト、と軽い音がして、小瓶が元の場所に戻ってくる。窓から射し込む夕日の光を浴びて、透明な小瓶はどこか寂しげな色に染まっていた。

「いい子ね」

それを視線の中に捕らえ、シーラは後ろ手に扉をしっかりと閉めると、パメラの方に向かってゆっくりと歩き出した。

表情は、まだ厳しい。

「でも、わかっているわね？ あなたがしようとしたことは、許されないことよ」

「っ……」

パメラの体が震え、二つ結った短いお下げが小さく揺れた。どこか垢抜けない、よく言えば純朴なそばかすの顔が、大きく歪んでそ

ここに大粒の涙を湛える。

そんな彼女に、シーラは短く言い放った。

「サイラスⅡレヴァイン」

「!？」

ハッとしてパメラが顔を上げる。

その表情だけで、シーラは自らの憶測が正しかったことを悟っていた。

「凶星、ね。……あなたが以前、そのサイラスって人の部屋を担当していたのは、ファナから聞いたわ」

「……」

「他の人からも色々聞いた。……彼が任務に出掛けるときには必ず見送って、彼が戻ったときには必ず出迎えて、彼のためにお守りを作って、彼の功績を耳にするたびに、まるで自分のことのように顔を輝かせていた、って」

「っ……!」

パメラの目に浮かんでいた涙が、一気に溢れて流れ落ちた。両手で顔を覆っても、涙はその指の隙間から溢れて夕日色に染まる。

「わ、私は――!」

そのまま、震える声でパメラは言った。

「あ、あの人が……サイラス様を殺したあの人が、当たり前のように幸せそうに生きているのが、どうしても許せなくて……っ!」

「……殺した？ ティースが？」

シーラは怪訝そうに声を潜めた。

「私は、二人で命令違反して、それでサイラスって人が運悪く命を落としたのだと聞いたけど？」

パメラは顔から手を離し、涙に汚れた顔を隠そうともせずシーラをキッと見つめた。

「わ、私、聞きました! あの人がサイラス様をそそのかして、それでサイラス様は命を落とされたのだと!」

「……」

シーラは何も答えなかった。

——確かに死んだのはサイラスで、生き延びたのはティースだ。彼が嘘をつけば、事実をねじ曲げることはいくらでも可能だろう。そして真相がどうであれ、少なくとも、パメラはそれが事実であると信じているようだった。

パメラはそのまま、忌々しそうに机の上の小瓶を睨んで、

「サイラス様はもう戻ってこれなくなったのに……そ、それなのに……あの人はのうのうと、楽しそうに生きて——！！」

「だから、なに？」

「っ——」

パメラの視線がシーラの元に戻ってくる。驚いたような視線が、やがて苛立たしさを含み、そして唇を噛んだ。

「サイラス様は……サイラス様は、あの人にそそのかされて、それで命を落とされたんですっ！」

だが、シーラは淡々としたまま、

「同じことを繰り返さなくても、あなたの言いたいことはよくわかってるわ」

そして冷たい視線を彼女に向ける。

「それが本当だとしても、だからなんだというの？ そそのかされた？ だったら聞くけど——」

そこで一度言葉を切って、馬鹿馬鹿しいと言わんばかりの口調で続けた。

「例えばあなたは、人殺しをしようとするのかされて手を下した人間にはまるで罪がないと、そう言うつもりかしら？ “そそのかす”というのは強制でも脅迫でもないわ。最後はあくまで本人の意志よ」

「な——」

シーラはさらに付け加える。

「それにあなたの言うのはあくまであなたの妄想でしかないわ。あなたの耳にしたのは無責任なうわさ話であって、正式には、ティ—

スが彼をそそのかしたなんてことは誰も言っていない」

その冷たく鋭い指摘に、パメラは激しく首を振って、そしてさらに涙を溢れさせた。

「も、妄想なんかじゃありません！ それに……それに私、今でも夢に見るんです！ サイラス様が無事に戻られる夢……目を覚ますたびに、何度も何度も泣いて――」

「……」

だが、その言葉にも、シーラはほんの僅かに眉を動かすだけだった。

「よかったわね。夢の中とはいえ、愛しい彼に何度も会えてパメラがシーラを睨み付ける。

「……あなたはっ！ あなたは遺された人の気持ちが全然わかってない！ 私の気持ちなんてこれっぽっちもわかってないっ！」

「……」

シーラは無言だった。

ただ、視線が徐々に、ではあるが、険しさを増していく。

「もう二度と……二度とサイラス様は私に笑いかけてくれないんですっ！ よくやった、って、ありがとう、って、もう二度と、二度と、誉めてくださることもないんですっ！！ 私がどれだけ苦しいかなんて、私の気持ちなんて、あなたにはこれっぽっちも――！！」

「気持ちがわかってない、ですって……？」

シーラが押さえつけたような声色で、そう呟く。

いや、正確には違う。

“ずっと押さえつけていた”のだ。それが“押さえきれなく”なった。

それが正しい。

そして――爆発。

「ふざけるのも、大概になさいっ！！」

「っ！？」

あまりに唐突であり、そしてあまりに激しい感情の迸り。叫びは

空気を振るわせ、決して演技ではない怒りが充ち満ちる。

“堰が切れた”

その表現ですら、どこか物足りなく感じるほどに。

怯んだパメラに、シーラはそのまま言葉を走らせた。

「気持ちが……わかってないですって!? だったらあなたは、あいつの……ティースの気持ちを、一体、どれだけ理解しているというの!!」

「あの人の……気持ち……?」

パメラの意外そうな呟きに、シーラの言葉はさらに苛烈さを増す。

「あなたは、あいつが何も感じていないとでも思ってるの!? ……
：あなたは知らないだろうけど、あいつは今でも彼の名前を呼びながらうなされてるわ! 夢のことなんて私には話そうとしないけれど、でも、それがどんな夢かなんて私にだってわかるっ!!」

いつものクールな様子からは想像もできない激情をそこに浮かべ、そしてそのあまりに端正な顔が、どうしようもない苛立ちで覆い尽くされる。

ギリッと、歯ぎしりの音が静かな部屋に響き渡った。

「それが、どれほどのものか、あなたに想像できるの!? あいつは夢の中で、何度も何度も仲間を失ってるわ! そのたびに何度も何度も許しを求めて!! そのたびに何度も何度も泣きながら自分の不甲斐なさを責めなきゃならないのよッ!!」

「そ、そんなの……」

その剣幕におののきながら、それでもパメラはかろうじて反論した。

「そんなの……だってそれはあの人の自業自得——」
パン!

「……な……っ!」
頬を押さえたパメラを、シーラは平手を止めたまま、細めた目で睨み付けた。

「……だったら、あなたの好きだったそのサイラスという男は、自

分の行動にも責任を持ってないほど、くだらない男だったということ？ あなたはそんなしょうもない男を好きになったのね？」

「そ、そんな……そんなこと——」
手を下ろし、シーラはその拳をグッと握りしめる。

「あなたの言ってることは”そういうこと”なのよッ！」
「——」

返す言葉を探しながら、パメラは頬を押さえたままで恨みがましく見つめた。そんな彼女に、シーラは自らの頬を差し出すように顔を近づけると、

「反論があるなら遠慮せずに言いなさい。そして私の頬を張り返してみるというわ。……私はそれを誰に訴えたりもしない。自分が正しいと思うなら、やりなさい」

「っ……っ！」

「さあッ！ やってごらんなさい!!」

突きつけられた言葉に、パメラの目からは止めどなく涙が溢れ、唇を噛みしめ、肩は小刻みに震える。

反論はない。

その手がシーラの頬を張り飛ばすこともなかった。

「っ……うっ……うううっ……っ!!」

そして、パメラは膝を落とし、そのまま泣き崩れる。

「ううっ……サイラスさま……サイラスさま……あああっ!!」

あとは、二度と戻って来ないその男の名を呼び続けるだけだった。

「……」

シーラは黙ってそれを見つめていた。

それは先ほどまでよりは、だいぶ穏やかさを取り戻して。そしていつもよりも、よほど感情を宿した瞳——そこに、微かな憐れみをも込めて。

「ううっ……あああ……!!」

綺麗に敷き詰められた絨毯の上に、いくつもの黒い染みが出来ては、すぐに色褪せていく。

「……」

やがてシーラは、聞こえない程度の小さな息を吐いて視線を横に逸らす。

その表情には……何故かほんの少しの後ろめたさが伺えた。

「泣きたいだけ、泣けばいいわ」

彼女は間違いなく、屋敷の誰よりも彼を愛していた。だから、その死を悲しむことは、彼女にとって当然に与えられるべき権利だ。言葉も、温もりも伝えられなくなった今となっては、彼女が彼を愛していたことを示す、唯一の手段だった。

シーラはそのまま、ゆっくりと窓に歩み寄る。

……外は夕日が綺麗だった。空に浮かんだ薄雲をオレンジ色に染め、街の風景を綺麗に萌やし出している。

その綺麗な景色を映したシーラの口から、独り言が漏れた。

「偉そうなと言うわね、ホント……」

自嘲の言葉だ。

窓に触れた手が、グツと握られる。

その後ろでは、いつまでも嗚咽が聞こえていた――

「え？」

「……すみませんでしたっ！」

「え、あ、ちよっ、ちよっと待ってよ」

ティースにはちんぷんかんぷんだった。

それはそうだろう。

クレイドルの任務から戻って数日の夕方。今まで話しかけても素っ気なかったり無視してばかりだった使用人の少女――パメラが、いきなり自分から話しかけてきたかと思うと、唐突に謝り出したの

だから。

ティースは自室に備え付けの椅子から少し腰を浮かせて、
「ま、まず顔を上げてよ。いきなりそんなこと言われても、なんの
ことだか、さっぱりわからないじゃないか」

「……」

夕日の支配する部屋の入り口で、パメラは神妙な表情でゆっくり
と頭を上げた。

そして、その視線が机の上――そこにあった、小瓶に向けられる。
「私……ティース様の、その小瓶を壊そうとしたんです」

「小瓶？ え？ これ？」

ティースが手元にある香水を入れる小瓶を示すと、パメラは頷い
た。

その小瓶はカノンでの最後の任務の際、数日間護衛についた女性
から感謝の印にと差し出されたものだった。彼自身は実際に一度も
剣を抜いていなかったから気は引けたものの、ヴィヴィアンなどの
助言もあって結局ありがたくもらったものである。

それは感謝の印……つまりは自分が役に立ったという証だったか
ら、まだ未熟で不甲斐ないティースにとっては素直に嬉しいことだ
った。それを机の上という目立つ場所に置いてあるのが、彼がそれ
だけ喜んでいふことの証明でもある。

「……なんで？」

もちろん、パメラがそれを壊そうとする理由など、ティースには
まるで思いつかなかったのだ。

「……」

そんなティースを真っ直ぐに見て、そしてパメラはまるで懺悔す
るように答える。

「私、以前はサイラス様の身の回りを担当してました。……サイラ
ス様のこと、慕っていました」

ドクン、と、胸の鼓動が跳ね上がった。

「サイラス……？」

穏やかな表情が、ほんの僅かに、無意識のままに引き締まる。

「……そうか」

それだけで――彼にしては珍しいことに、全ての事情を理解したようだった。

そして視線を泳がせ、目を閉じ、その後に、ゆつくりと、絞り出すように、

「君が俺に素っ気なかったのは……俺のことを恨んでいたから、だね？」

パメラは無言で頷く。

そして――重苦しい沈黙。

「……」

「……」

それはティースにとっても、パメラにとっても、悲しい記憶だった。決して消えることのない、この屋敷に存在していた一人の男の記憶だ。

やがて、ティースはゆつくりと頭を下げて。

そして開いた口から漏れた言葉は、

「ゴメン。……俺は、君の愛する人を守ってあげられなかった」
偽らざる、心からの謝罪の言葉だった。

「……」

無言のまま、パメラの瞳が揺れる。

ティースは続けた。

「あのとき、あいつを助けられるのは俺だけだった。でも、俺は助けられなかった。……それは紛れもない事実だ。だから、俺は君に責められても文句は言えない」

「……」

「俺は――」

ティースの言葉の語尾が微かに震えて。

――だが、先に涙を流したのは、パメラの方だった。

「いいえ、ティース様……」

「……え？」

「私は……きつと、誰かに責任をなすり付けたかったただけだから……」

「パメラ……？」

「あの方が死んでしまったのが、あまりに理不尽なことに思えてしまつて。……でも私、ある人に言われて、それで何日も何日も考えてみて、わかつたんです」

パメラは俯いて涙を拭い、そして潤んだ瞳を再びティースへと向ける。

——そこから、また涙が溢れた。

「あの方は……そういう場所で戦つて、それを承知の上で戦つて、強い意志の上で亡くなられたのだから……だからあの方の死は、きつと誰のせいでもないんだつて……」

「……パメラ」

パメラの涙は止まらない。

拭つても、拭つても、止まることはなかった。

「誰かのせいにすることは、死んだあの方の尊厳を傷つけることなんだつて。それは……それは、遺された人が絶対にしちゃいけないことなんですよね」

泣いたままで、パメラは最後に笑おうとした。

だが、それは寸前で失敗する。

「だから私は……二度と——」

それ以上の言葉が、彼女の口から出てくることはなかった。あとは顔を上げることもなく、ただ肩を振るわせる。

静まり返った部屋に、嗚咽の声だけが響いた。

「……」

ティースには、返す言葉が思い浮かばなかった。

……彼女がその結論に達するまでに通過したであろう葛藤と苦しみ。それを想像するほどに、今、こうしてティースの前で笑顔を浮かべようとした彼女が、あまりに健気で、そしてあまりに哀しく思

えたから。

そしてティースは考える。

どうすれば、この少女の強い気持ちに応えてやれるだろうか。

どんな言葉をかけてやれば、少しでも彼女の強い意志に報いてやれるだろうか、と。

……もしも今、自らの命を半分だけサイラスに分け与えられるとしたなら、ティースは迷わずにそうしたに違いなかった。

だが、それは叶わぬ願いだ。

(……あ)

そしてティースが最後に思いついたのは……生前、最後の任務に向かう数日前の酒場で、サイラスが何気なく口にした一言だった。

「あいつ……言ってたんだ」

「……？」

僅かに顔を上げたパメラに、ティースは少し目を細め、そして彼女の顔を見て自分の想像を確信に変えた。

そして続ける。

「ある使用人の子に、いつも色々と世話になってるって。自分が何かを遺すとしたら、あるいはその子かもしれないって……」

「……え……？」

パメラが目を見開く。

「名前とか、どんな子だとか、そんなことは全然聞かなかったけど……それって、もしかしたら——」

だが、パメラは思いっきり首を横に振って、

「そ、そんなこと……だって、サイラス様は人気もありましたし、私より親しかった人だって、私よりずっと綺麗な人だってたくさん——」

「でも、それなら“世話になってる子”なんて言い方しないんじゃないか？ ……たぶん、それに当てはまるのは、あいつの部屋とか、身の回りのこととか、色々と世話をしていた君だけだと思う」

「で、でも私、色々と至らなくて、サイラス様にいつも庇っていた

だいて――」

「パメラ」

確かに。そこにいる少女は自身で言うように特別美しいわけではない。女性としての魅力に溢れているわけでもないし、使用人として完璧な技術を持っているわけでもないようだった。

だが、ティースは思うのだ。

小さな頃に家族も友人も失ったサイラスはきつと、そんなことよりももっと自分にとって必要なものを、この少女の中に見出していたのではないかと。

確かにあのときは酒の席で、冗談交じりに言ったことなのかもしれない。

が、それでも彼は確かに言ったのだ。

『恋人も、家族もない。だけど敢えて言うなら、いつも色々と世話になっている使用人の子に言葉を遺すかもしれない』
と。

結局、彼はそれを遺さなかった。しかし、もしも彼が、自分を待つ運命に最初から気付いていたのであれば……あるいは本当に彼女に言葉を遺していたかもしれない、と、ティースはそう思うのである。

「……本当に強い想いは、通じるものだから。あいつは君が思うよりずっと、君に感謝していたんだと思う。そうでなきゃ、酒の席の軽口でだって、君のことが出てくるはずはないと思うから」

「――」

まるで時が止まったように、パメラの目は大きく見開かれて。

そして彼女を再び動かしたのは、やはり涙だった。

溢れて、溢れて、止まらない。

「サイラス……様……！」

だけどそれはほんの少し。先ほどまで流していたものとは、ほんの少しだけ意味合いが異なっている。

悲しいだけ、ではない。

ティースはゆっくりと天井を見上げた。

彼自身、目の奥に熱いものがこみ上げてくるのを自覚していたのだ。

(……サイラス……お前は、こんなにも他人から好かれていたのか……)

その死から二ヶ月が経った今でも、こうしてその死を悼んでくれる者がいる。その言葉に涙を流してくれる者がいる。

自分はどうかだろうか、と考えた。

それは読心術を心得ていない彼にわかるはずもないことだったが、せめて、一人はこの少女のように想ってくれる人がいて欲しい。そうであるように生きていきたい……そう思う。

(……あ)

そこへふと、ティースの視界の隅に、夕日を浴びて輝くものが映った。

(シーラ……?)

半開きの扉から微かに覗いた美しい金髪は、どうやら彼女のものだ。とはいえ、別に聞き耳を立てていたわけではなく、たまたま部屋の前を通り過ぎただけだろう。

視線を動かさずに、ティースはふと尋ねた。

「……パメラ。君、“ある人に言われて気付いた”って言ってたよね」

「は……はい……」

涙を拭いながら、ようやく落ち着いた様子でパメラはゆっくりと顔を上げた。

ティースは問いかける。

「その、“ある人”って、誰のこと?」

「……あ、それは……」

パメラは少しだけ口ごもって、そして視線を逸らして答えた。

「私の、先輩です」

「先輩……そっか」

もしかしたら嘘をついているかもしれない、と、ティースは直感的に思ったが、彼女が嘘をつく理由もわからなかったし、それを追求する理由も思い浮かばなかったので、それ以上は何も言わなかった。

「……あらゆる……ヴェイダ……の妨害から……身を……沈む？
いえ……落と……安らぐ……？」

その日も、シーラの部屋には夜遅くまで明かりが灯っていた。

「ヴェイダ……は——」

ページをめくる乾いた音が静かな部屋に響く。辺りからは物音一つ聞こえない。

——いや。

コン、コン。

遠慮がちなノック。

「……。つまり……ヴェイダの妨害は、不眠の——」
コン……コン……

二度目はさらに小さく。

「……」

シーラは不機嫌そうに眉をひそめ、二冊の本を閉じて扉を振り返ると、

「誰？」

「あ、起きてたか……？」

扉の外から遠慮がちに聞こえてきたのは男の声だ。もちろんそれは、シーラもよく知っている男のものである。

「ティース？ 何の用？」

「あ、いや、特に用ってわけじゃないんだけど……もし時間があつ

たら、ちよつとだけ話をしたいなと思って……」

さらに遠慮がちに聞こえたティースの言葉に、シーラはやはり不機嫌さを隠そうともせずのため息を吐いた。

「勝手になさい」

「あ、そ、そっか。じゃあ失礼——」

ガチャ。

「あ、あ、あれ？」

ガチャ。ガチャガチャ。

——沈黙。

その後、扉の向こうから少し情けない口調の言葉が聞こえてくる。

「あ……あのさ、シーラ。なんか、鍵が開いてないみたいなんだけど……」

「そう、残念ね」

冷たく言い放って、シーラは再び机に向かった。

「……」

「……」

数十秒の沈黙。

シーラはまるで何事もなかったかのように、再び本をめくっている。

そして……一分ほどが経過しただろうか。

「……シーラ？ あの一——？」

どうやら、ティースはまだ扉の向こうに居座っているようだった。……というより、彼女の言葉の意味を理解できなかったのかもしれない。

「……」

シーラはこめかみを押さえ、本を閉じてその片方を引き出しの中に入れると、ようやく椅子から立ち上がって扉へと向かった。

「……なに？」

扉の向こうに立っていたティースは、寝巻というわけではないが、その一歩手前ぐらいの楽な服装だった。普段着以上に、どこか頼り

ないというか、情けないというか、そんな雰囲気漂っている。

「あ、勉強中だったか？　もしかして邪魔――」

「もう充分邪魔されたからいいわ」

「……わ、悪い」

「で？」

謝ったティースの言葉を意に介した様子もなく、シーラは細めた視線を向けた。

「世間話をしたいのなら、アルコールでも呑みながら商売女を相手にしていたらいいでしょう？　お前にとっても、私と話すよりほど楽しいんじゃないの？」

ティースは僅かに不満を顔に浮かべる。

「そ、そんな言い方しなくてもいいじゃないか。ただ、最近は忙しくてゆっくり話をする機会もなかったし……任務もあったし、たまに色々な話をしたいなと思って……」

「……」

シーラはあからさまに迷惑そうだった。

そんな彼女に、さすがに手応えの悪さを感じ取ったのか、

「……ごめん。なんか、俺のわがままだったみたいだな……」

ガックリと肩を落として立ち去ろうとしたティース。

が、

「待ちなさい、ティース」

「……？」

シーラは視線を少しだけ泳がせて、それから大きなため息を吐く。機嫌の悪そうな表情は相変わらずだったが、それでも彼女は言った。「まさかそのまま戻るつもり？　……結局、私の邪魔をしに來ただけ？」

「え？　い、いや、でも――」

シーラは片手を腰に当て、そしてもう一度、大げさなため息を吐く。

「邪魔されただけで終わるのも馬鹿らしいし、お前のつまらない世

間話に付き合っただけ。……ただし」

細めた視線が、冷たく、鋭くティースを射抜いた。

「本当につまらなかったら……“吊す”から」

「つ、吊す……？」

あまりに本気のこもった言葉に、ティースは少し冷や汗の浮かんだ首筋に手をやって、乾いた笑いを浮かべる。

「じょ、冗談だよな、もちろん——」

シーラはきっぱりと言い放った。

「死なないわ。今の季節なら」

「し、しかも外かつ!？」

確かに死にはしないが、朝になったら虫にたかられてひどいことになっていること請け合いだ。

うろたえるティースの鼻先を、美しい彼女の金髪がふわりと踊る。

「なにをボサつとしてるの。ホールに行くわよ」

「あ……ちよっ、ちよっと! 待ってくれよ、シーラ!」

シーラはとっとと歩いていってしまう。その後を追いかけるが、ティースは本気で情けない顔をして、言った。

「い、いつも言うだろ? 俺には大した期待してないって。……も、もちろん今回もそうなんだよな?」

「……」

「お、おい……シーラあ……」

ティースの呼びかけは、空しく屋敷の廊下に響き渡るだけだった。

——翌日。

「ファナ」

「はい?」

朝食の席で、シーラはファナに向かって言った。

どこか呆れたような苦笑を浮かべて。

「あいつはあのままの方が、まだいくらかマシだわ。……無理に虚

勢を張られると、薄ら寒くて仕方ないもの――」

その日、外に吊されている人間を目撃した者は、一応、いなかったらしい。

その1『慟哭の夜』

小鳥の囀りが軽快に弾んでいた。

上空は見渡す限り一面、青、青、青。

果てのない、青。

肌を感じる風はネービスの街に比べて優しく、そして穏やかだ。

「ティー……ス……」

「そう！ そうだ！」

そこには二つの人影がある。

一人は長身、痩せ形で、見るからに人の良さそうな容姿の青年——ティーサイト・アマルナである。通称“ティース”と呼ばれるこの人物は、人に仇なす“魔”を退治する“デビルバスター”——をを目指す十八歳の男だ。

彼は約一ヶ月前、大貴族ミューティレイク家が保有するデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”の第二隊“ディバーナ・ナイト”に配属されることになった。そして今は、彼らのホームである“学園都市ネービス”から若干南に下った場所にある、ネービス領ブラダマンテという、やや規模の大きな村にやってきていた。

「ティー……ス」

そしてもう片方。

どことなく辿々しい言葉付きで彼の名を呼ぶのは、一人の少女。長身のティースと並ぶと四十センチ近く小さいだろうか。かがみ込んでようやく目線が合うぐらいで、おかっぱのような髪型に花柄の白いカチューシャ。十四歳という年齢にしては少し顔立ちが幼く、ほっぺたが少し赤く見えるのは元来のものらしい。

ナナン・トリストラムというのが彼女のフルネームだった。

「ティース……ティース……？」

「合ってる合ってる！」

ティースが嬉々として何度も頷くと、ナナンはニツコリと笑みを浮かべた。

一見しただけでは、どうして彼がこんなに喜んでいるかわからないだろうと思う。が……このナナンという少女がひどい難聴、いや、難聴どころか、完全に聴力を失っている少女だとすれば、すぐに事情は察してもらえらるだろう。

ようやく言葉を覚えた幼少の頃に音を失った彼女は、同時にほんの一部を除いて言葉すらも失ってしまった。だから、新しい言葉を綺麗に発音することは、彼女にとってそれほど容易なことではないのだ。

「ありがとう……ナナン」

だからティースにしてみれば、彼女が自分の名前を覚え発音してくれたことは、それだけで大きなプレゼントをもらったようなものなのである。

「？」

「あ・り・が・と・う」

一言一言、綺麗に区切り、ティースはナナンの手を取って感謝の意を伝えた。

紙に書いて伝えることは簡単だったが、今の彼はそういう気持ちではなかった。彼女が苦勞して言葉にしてくれたように、彼もやはり言葉で伝えたかったのだ。

「あり、がとう？」

ナナンは首を傾げ、そしてティースが頷いたのを見ると、嬉しそうに微笑んだ。

「ティース。……わたし、も、あり、がとう」

「ナナン……」

それだけで、ティースの胸は暖かくなった。今までの辛かったことを、全て忘れてしまえるほどに。

——ティースが彼女と知り合ったのは、ほんの五日ほど前のことだった。

今回は彼がディバーナ・ナイトに配属されて三度目の任務。ナンは彼らが宿を借りた家の隣に住む娘だった。

出会いは、ナナンが淋しそうに外を眺めているのを、ティースが目撃したことから始まる。どこか影と憂いを帯びた少女の表情は、彼がお人好しの虫を騒がせるには充分過ぎるものだった。

その後、借宿の主人から、耳が不自由であること、それ故に同世代の友達もできないという事情を聞き、ティースはすぐに任務の間を縫って彼女に会ってみることにしたのだ。

……実は彼がそこまで積極的だったのは、彼がただお人好しだったから、ではない。彼にも彼なりの事情——ナイトにおける過去二回の任務で、自分の無力さを痛感していたという事情があった。そしてそれ故に、他人の役に立ちたいという願望が、彼の中ではち切れんばかりに膨れ上がっていたのだ。

とにもかくにも……そうして二人は出会うことになった。

打ち解けるまでに要した日数は五日間。短いようであっても、そこにあった二人のやり取りは決して薄いものではない。ナナンはあまりに不自由な“言葉”と、人と接触することに対して嫌気を差していたし、ティースも決して他人の心を掴む術に長けているわけではなかったから。

それでも彼らが打ち解けたのは、何よりも、彼女の役に立ちたいというティースの真摯な願いがあったからこそだろう。そしてナナンもまた、彼の想いを感じ取れるほどに根は素直で、そしてその態度とは裏腹に、他人からの言葉に飢えていた。

「ティース……わ、た、し……」

十一月にも関わらず、辺りには真っ白な花が咲き乱れている。

見渡す限り一面の、白、白、白。

ナナンは歩き出し、そして後ろで手を結んでティースを振り返った。

——そこにはもう、以前までの暗い影など微塵も残っていない。自分の巣から飛び出す方法をようやく見つけ、そして羽ばたこうと

している、他よりもほんの少しだけ成長の遅れただけの小鳥。

「わ、た、し――」

と、その一瞬。

（……？）

ティースの視界が乱れた。

――ちやうど浮かんだ嬉し涙のせい？

いや、違う。

（あれ……なんだろう……？）

微笑むナナンの背後に、何かが重なって見えた。

「ティース？」

ナナンが不思議そうな顔をする。

「……あ、ゴメン。なんでもないんだ」

「？」

「あ、そつか。……な・に・も・な・い」

「……なにも、ない？」

「そうそう」

頷くと、ナナンは首を傾げながらもひとまず納得したようだ。

が、視界の乱れはその後も断続的に彼を襲う。

（……なんだろう、これ）

目を擦っても、まるでノイズのように。不思議な映像は何度も、

何度もティースの視界を襲った。

青しか存在しない上空に時折夜空のような黒が混じり、一面の白

い花畑は深く赤い茂みの情景に。

――白昼夢？

いや、違う。

「ティース……？」

ナナンが心配そうに近付いてきた。

「どう、した、の……？」

「い、いや」

手を振って答えながら、ティースは何度も首を振った。

（なんだ……でも、どこかで見た……）

夜空。深い森の奥。

頭がフラつく。

「か、ぜ？ きぶん、わるい？」

ナナンの問いに、ティースは首を振って否定する。

気分は悪くなかった。

ただ、視界にノイズが混じるだけ。

夜空と深い森。

黒い――

赤い――

「っ！」

黒と赤。赤と黒。

「ティース……？」

「っ……ナナン……」

点滅する。

生ぬるい風。

目の前にいる、優しい少女。

空と、森と、黒と、赤と、赤と、黒と、森の中の――黒い空と、

赤い月――

「っ！！」

「ティース……」

心配そうに伸ばされたナナンの手が、そっとティースに触れた。

「ごっ……ごめん。俺、なんか変――」

「へん、じゃない……」

「……えっ」

「へん、じゃない……ティース……」

「ナ……ナナン……キミ、俺の言葉が聞こえて――」

ナナンの手がティースの頬に触れていた。

それは、彼が知らないはずの温もり。彼が知るはずのない、彼女の体温。

何故なら――

(……!)

彼は“女性アレルギー”だったから。

一定以上の年齢の女性に触れたら失神してしまう特異体質だったから。

(……あ……あああ……)

触れられるはずが、ないのだ。

触れられるはずが、ない。

――これが、現実であるならば――

(ああ、あああ……!!)

赤と黒。

彼の視界にあったのは、ただそれだけ。

心臓の鼓動は不気味なほどにゆっくりで、胸を突き破りそうなほどに強い。

吐き気。

頭痛。

横隔膜の蠕動が、止まらない。

「ナナン……ナナン……っ!!」

青と白は消え失せて、彼に残されたのは、赤と、黒と、触れられるはずのない生々しい温もり。

「ああ、ああ、ああああ……っ!!」

暗い。暗い。暗い。

目の前には誰もいない。

いたけど、もう、いない。

ただ、ただ、生きて、生きて、生きて。

そして、ようやく生きた証を刻もうとしていた。これから、全てが始まるうとしていた。

たった一度の。ただ一度の。

彼女の、世界が、消えた、その瞬間。

——彼に残されたのは、赤と、黒と、触れられるはずのなかった、温もり。

そして——

「ああ、あああ……あああああ————ッ！！！」

——慟哭。

朝。

「シーラさん、寝不足はお肌に悪いよ」

十一月の半ばになって、ネービスの街は本格的な冬支度の時期だった。今日も空には薄い雲がかかり、太陽はこしばらくその姿を見せていない。ミューティレイクの屋敷もまた、庭、使用人たちの服装——そのあらゆるところに、冬の訪れを予感させていた。

さて、そんな屋敷の、一部の使用人や客人などの生活空間でもある“別館”の二階。

「……リディア？」

“ティーサイトⅡアマルナの被保護者”という扱いで屋敷に住んでいる客人、シーラⅡスノーフォールは、学園都市と呼ばれるネービスにおいても古く伝統のあるサンタニア学園、薬草学科に通う十五歳の少女だ。透き通るような美しいブロンドのポニーテールと、それすらも霞むほどに完璧な造形の容貌を持つ美少女である。

そしてそんなシーラが自室を出てきたところに声をかけたのは、ミューティレイクの執事、リディアⅡシュナイダーだ。年相応の容

姿、見ようによつては可愛らしい少年に見えなくもない……そんな彼女はまだ十二歳である。手には彼女のトレードマークと言っても良いであろう、分厚い難解そうな本が握られていた。

「誰が寝不足だと言ったの？」

振り返ったシーラは、比較的よく言葉を交わす目の前の少女に向かってそう問いかけた。

確かに。振り返った彼女の顔には別にクマが出来ているわけでもなかったし、若干疲れらしきものが見えるとはいえ、その原因が寝不足であると断言できるほどのものはない。

だが、近付いたりディアは断言した。

「でも、寝不足でしょ？ 今、ティースさんの部屋の隣に入ったら、誰でも寝不足になるよ、きっと」

シーラは少し嫌な顔をして、

「わかってるなら、最初から簡潔に言えればいいでしょ。……そりゃ、あの叫び声に毎晩何度も起こされるんじゃ、寝不足にもなるわ」

若干、突き放すような言い方だった。寝不足故か、明らかに不機嫌だ。が、このリディアという少女は、そんな彼女に対して臆することもなく、

「それだけ？」

「どういう意味？」

「心配で、気になって、眠れない、とか」

「心配？」

その言葉に、シーラは眉根を上げた。

そしてきっぱりと、まるで躊躇いもなく答える。

「私が気にしてどうするの？ ああ男がうなされている理由も知らないのに」

「あたしは知ってるよ。理由」

「そう。でも話さなくていいわ」

言葉の端々に垣間見える苛立ちは、その強さを増していた。

「……」

リディアは少しだけ視線を泳がせて、そしてそれをティースの部屋の扉に止める。

朝の早い時間にも関わらず、おそらくその部屋はすでに無人だ。早起きなのではなく、寝たくない、寝ようとしても寝られない、そのために諦めて起き出してくるという状況。

そんな彼の状況を充分に理解し心配もしているリディアだったが、それでも彼女らしく、それほど深刻ではない口調で言葉が続ける。

「ティースさん、もう、かなりキてるよ。……ナイトの任務は特に激しいの多いもん。多分、現実はある人が思うほどに甘くない。助けたくても助けられない人だって、たくさん出てくるからね」

「そうね。あいつのことだから、落ち込んでいる理由ぐらいは想像できるわ」

素っ気ない言葉に、リディアは探るような目をした。

「支えてあげようとか、思わないんだ？」

「……私が？ 支える？ あいつを？」

シーラは口元を歪めて首を横に振る。

馬鹿にしたような、嘲るような笑いだっただ。

「それを私に期待してるなら、見当違いもいいところよ、リディア」
「少しだけリディアの視線が横に流れ、それから上目遣いになる。」

「……ティースさん、潰れちゃうよ」

「だったら、聞かせてちょうだい」

逆にシーラは問いかけた。

「一体どうすればいいというの？ 励ます？ あなたが台本を用意してくれるのなら、やっても構わないわ」

「……」

無言のリディアに、シーラは口元をますます意地悪そうに歪めると、

「それともなに？ あいつと“寝て”あげでもすれば少しは慰めになる？ ……もっとも、あいつが相手じゃ、本当にただ寝るだけになりそうだけど」

「……シーラさん……」

リディアは再び視線を泳がせて、少しの思考を挟む。
そして――苦笑した。

「あたしもそう思うな。ティースさんって、いざとなると怖じ気づきそうだもん」

「――」

あくまで冷静なその返答に、シーラはハッとした後、なんともいえない表情をして目元を押さえた。

僅かな思考。

後悔したような表情が過ぎると、静かに、深く息を吐いた。

「……ごめんなさい。変なこと言ったわね、私。あなたみたいな子供に――」

だが、リディアは平然としたまま、

「そう？　あたしって耳年増だし、フィリスさんとかセシルさんに言うよりは適当だと思うけどね。……それに、シーラさんだってあたしと三つしか変わらないじゃん」

「でも、どうかしてたわ。……ごめんなさい。疲れてるせいね、きつと」

髪飾りが寂しげに揺れ、そのままシーラは背を向ける。目の前から去っていくその背中では、失言を気にしているせいか、いつもより凛々しさに欠けていたように映った。

「……」

それを無言で見送ったりリディアは小さくため息を吐いて、再び“ティーサイトIIアマルナ”と書かれたプレートを見上げる。

一呼吸。

そしてもう一度ため息を吐くと、

「……あたしがストリップしてもダメなんだろうなあ、きつと」
冗談っぽく呟く言葉にも、いまいちキレが感じられなかった。

ディバーナ・ロウの第二隊、“ディバーナ・ナイト”の詰め所。

「くはあ……くっ……！　ぐぐぐ……っ！！」

午後の筋力トレーニングは、ディバーナ・ナイトの日課だ。

基礎体力の向上、戦闘技術の強化。それを延々と繰り返す日々。魔を退治し、人々を救う。そのための力を養う、あるいは維持し続けるために。

それは一歩間違えれば体を壊しかねない、過酷な訓練だ。

「そこまでだ、ティース」

「っ……ぐぐぐっ……！！」

「ティース。やめろと言ってるだろ」

冷たく響いた声の主は、このディバーナ・ナイトの隊長、レインハルトⅡシュナイダー——通称、レイだった。先ほど登場したリディアの実兄でもある彼は、ティースより三つ年上の二十一歳だ。

額に厚めに巻いた灰色の布、そこから覗く無造作に伸びた髪、ティースほどではないが長身。どこことなくワイルドな風貌だが、それでいて野蠻さをそれほどに感じないのは、そこに強い知性の灯った瞳がある故だろう。

「くっ……はあっ！　はあっ！！」

まるで潰れるように突っ伏し、背中に乘せていた重りを下ろして、ティースは荒い息を吐いていた。だが、その視線は息つく間もなく、怪訝そうにレイを見上げる。

「レイさん……はあっ……でも、まだ以前より全然少な——」

「お前の体調が以前と同じならな。けど、今日のお前ならそんなもんだ」

「はあっ……はあっ……」

肩で息をし、上半身をゆっくり起こしながら、去っていくレイを横目で見つめるティース。……そこには少しだけ、納得できていない色がある。

「ま、医者としての視点で見ても、隊長の意見に賛成だね、僕は」

「……マイルズさん」

すぐそばで様子を見守っていたのは、マイルズⅡカンバーズだった。ミューティレイク家の主治医でもあるこの男は、ディバーナ・ナイトの一員というもう一つの側面を持っている。もちろん担当は戦闘ではなく医事の方。

レイと同じぐらいの長身で、クセなのか、それほどズレていない黒縁眼鏡を中指で持ち上げながら、

「ま、気持ちによって肉体の限界をどこまで超えられるか……というのは、僕にとっても非常に興味深いテーマだ。研究者としてなら、むしろ死ぬまで続けて欲しいと思うけどね」

「……遠慮しておきます」

本気とも冗談ともつかないマイルズの言葉に、ティースはすぐに休憩を取ることにした。

そして、そんな二人のやり取りを、少し離れた場所から見ている少年がいる。

「隊長。ティースさん、相当参ってるみたいっすね」

その横を通り過ぎようとしていたレイは、そんな言葉に振り返った。

そこにいたのは、若干幼さを残した大人しそうな少年。だが、その外見に反し、その目は強い意志を秘め、見た目通りの性格ではないことがすぐに窺える……そんな人物だった。

レイは意地悪そうに鼻で笑って、

「おっと、パース。お前には、まだ他人を気にする余裕があるらしいな?」

「え、あ……」

少年の顔がサアツと青くなる。

「よし。お前には今のメニューをもうワンセット追加してやろう」

「うわっ! マジっすかっ!?!」

「ああ、大マジだ。頑張れよ」

「ひい」

この“パース”の愛称で呼ばれる少年は、本名パーシヴァルⅡラッセル。このディバーナ・ナイトの戦闘補助を担当する十六歳の少年だ。そして、現在のミューティレイクにおいては、ティース以外で唯一、デビルバスターを志望する人物である。

そして、ナイトのメンバーはあと一人。

「……」

他のメンバーのやり取りには目もくれず、左目だけを閉じ、ティースやパーシヴァルとは明らかに違ったメニューを黙々とこなす男。短髪にヒゲを生やしたその人物は、見た目からして他の面々より一回り年上に見える。

その彼の名はグレットⅡフレイザー。ディバーナ・ロウでは最年長の三十三歳。身長はレイやマイルズ、ティースと比べれば一回り小さく、パーシヴァルより少し大きいぐらいで男性としては平均だが、常に身に纏う戦士としての威圧感が、実際よりもその体を大きく見せている。

いかにも百戦錬磨と思える容貌。そして実際、彼はその外見に恥じないだけの実力の持ち主だ。常に左目が閉じているのは、そこにあるべきはずの眼球が存在していないからだだった。

「よし。ひとまず全員終了だ」

レイの号令によって、ナイトの面々が集まった。レイの隣にはマイルズ、それと向かい合うようにグレット、パーシヴァル、そしてティース。

（いよいよ、今日の実戦稽古だ……）

ディバーナ・ナイトにおいて、筋トレが終わった後のメニューはその日によって大きく異なる。大抵は実戦を想定した稽古だが、一対一だったり、対複数だったり。様々な特殊な状況も想定され、狭い場所、守るべき存在等々、とにかく一週間の間で同じメニューの日は一度もない。

もちろん勝ち負けは度外視されるが、基本的に過酷であることに間違いはなかった。

「今日のメニューは――」

「……」

ティースは軽く拳を握りしめて、レイの言葉を待った。汗ばんだ体が徐々にヒンヤリとしていたが、体内の熱はまだ冷めていない。たとえばどんなメニューであろうとも、こなすつもりだった。……いや、むしろ今の彼にとっては、それが過酷であればあるほどに喜ばしい。

それによって、自分が少しずつでも強くなっていると信じられるからだ。

（強くなるためなら、どんなメニューだって――）

「ギレット、パース」

レイの声は最初、他の二人に向いた。

ティースは即座に今日の趣旨を理解する。

（今日は二対一……？）

それは確かに、彼にとっては過酷すぎる条件だった。なにしろギレットもパーシヴァルも、最強と言われるデイバーナ・ナイトのメンバーだけあって、ティースが今まで所属したカノンやファントムのメンバーよりも基本的には上……パーシヴァルはあのサイラスほどではないにしろ、デビルバスター候補生として十分な実力を持っていたし、強面でいかにも経験豊富なギレットなどは、その二人を確実に上回っている。

だが、臆する気持ちはなかった。

（……望むところだ）

たとえばそれでボロボロに惨敗することであっても、それが自分の糧になるのなら。それで強くなれるのなら本望だった。

（よし――）

だが、

「今日はお前らで一對一だ」

「……えっ？」

続いた言葉に、ティースは目を丸くした。

どうやら早とちりだったようだ。

（ってことは、今日はレイさんと一対一？）

しかし、それもどうやら違うようで、

「マイルズ。お前はここで二人の面倒でも見といてくれ」

「ああ、いいよ。隊長はどうするんだい？」

「俺か？ 俺は――」

レイの視線がティースを向くと、

「こいつと、ちょっと勉強会だ」

どこか楽しそうな笑みを浮かべた彼に、マイルズは納得顔でやはり笑い返す。

「ああ、なるほど、それは面白そうですね。結果報告、楽しみにしていますよ」

ティースは呆氣にとられて、

「ベ……勉強会？」

外では太陽が頂点から徐々に西に傾きかけていた。

その一時間後。

レイとティースの二人はミューティレイクの屋敷から北へ。学園群を抜け、さらに北へ。辺りに立ち並ぶ、いわゆる高級住宅街には目もくれずにさらに北。

その先にあるもの。

それを知らない者はこのネービスにいない。

ネービスの最北端、そこにあるのはただ一つだ。

「はあ」

思わずため息をついたティースの視線の先にそびえ立つは、あのミューティレイクよりも大きな屋敷。大きく、高く、頑丈な門、その奥に浮かぶあまりにも巨大なそのシルエットは、“屋敷”と呼ぶよりは“城”と表現した方が正しいかもしれない。

それこそがこの学園都市ネービスを含めた“ネービス領”を統治する、ネービス公の屋敷なのである。

門の前には門番が立ち、おそらくその内部も厳重な警備で一杯だろう。ティースのような一般人の枠からそれほど逸脱していない人間にとっては、一生縁がないはずの場所だった。

一瞬の放心状態から解放されて、そしてティースは疑問を隣のレイに向ける。

「レイさん、一体――」

「どこ見てる。こっちだ」

「え？」

レイが向かったのは、その屋敷のすぐ隣にある別の建物だった。外観からすると三階建てぐらいだろうか。ネービス公の“城”と並んでも違和感ないほどの大きさだが、その割に外観や内装はそれほど凝っておらず、どこことなく無骨な雰囲気を漂わせている。

（こっちもかなり大きいけど、なんだ……？）

無造作にその入り口をくぐっていくレイについていくと、その受付らしきところには一人の女性がいた。

「……あら？」

「よっ、アレッタ。久々だな」

手を挙げて軽い挨拶をするレイ。

が、呼びかけられたアレッタという女性――ティースよりは年上、おそらくはレイよりも若干上だろう――は、彼の姿を認識するなり、ショートボブの髪を微かに揺らせ、すぐにその眼鏡の奥から不満げな視線をレイに向けた。

「よっ、久々……じゃないでしょ、レイ。覚えてないとは言わせないわよ、前回のこと」

「前回？」

とぼけた表情で近付いたレイに、アレッタは椅子から腰を僅かに浮かせ、カウンターに少しだけ身を乗り出し、真っ直ぐに人差し指を突きつける。

「約束、すっぱかしたじゃないの。なによ、あれだけ熱心に人のこと口説いたくせに」

「あ、あー……いや、待て待て。それには海より深い事情があったな」

「へえ」

まるで信じてない顔で指を下ろすと、ふふんと鼻を鳴らして、

「どんな事情？ 他の女との約束？」

レイは真顔で答える。

「いや。他の“男”との約束だ」

「はあ？」

眉間に皺を寄せたアレツタに、レイは少し戲けた様子で答えた。

「体重が四百キロぐらいあるナイスガイでな。人の命に関わるってんで、急な呼び出しをくっちゃまったのさ」

「……」

アレツタは両手を広げてため息を吐くと、

「ま、いいわ。私も、あなたが本気だったなんてこれっぽっちも思っちゃいないから」

「ひどいな、そりゃ。まるで俺がろくでなしみたいじゃないか」

「そう言ったつもりだけど。……あら？」

そこで初めて、少し後ろに立つティースの存在に気付いたらしい。怪訝そうに彼の顔を見上げ、それから品定めするように頭のとっぺんからつま先まで視線が移動する。

そして首をかしげ、視線は再びレイの元へ。

問いかけられる前に、レイが答えた。

「ティーサイトIIアマルナ。ウチの新人さ——っても、もう五ヶ月ぐらい経つけどな」

「へえ、新人さん」

もう一度、アレツタの品定め視線が向けられて、ティースは慌てて頭を下げた。

「あ、ティーサイトIIアマルナです。よろしく願います」

状況を把握していない彼としては、何をよろしくすればいいのかもわかつちやいなかったが、ひとまず型どおりの挨拶である。

「……へえ」

アレツタは呟くと、もう一度彼の全身を見回して、そして最後にその顔に視線を止めた。

「身長割に可愛い顔してるわね。……アクアが好きそうなタイプじゃない」

「ま、あいつは基本的に守備範囲広いからな」

「ティーサイトくん、だったわね？」

じっと見つめられているせいか、ティースは緊張気味に答える。

「あ、はい。でも、あの、ほとんどの人からはティースって呼ばれてますけど」

「ティースくん、ね」

そう言つて、アレツタはすぐに意味深な笑みを浮かべると、

「アクアのベッドの寝心地はどうだった？」

「え？」

一瞬、ティースの周りの時間が止まった。その間に、クレイドウルでの光景が彼の頭を過ぎったが、もちろん彼女がそんなことを知っているはずはない。

——数秒の思考の後、

「な、な、何ですか、それはっ！」

ようやく意味を理解すると、ティースは顔を真っ赤にして叫んだ。「そ、そんなこと……それに、アクアさんはそんな軽はずみな人じゃない！」

「……へえ」

ムキになって反論したティースに、アレツタは少し感心したような呟きを発し、そしてレイに向かって言った。

「アクアの真偽はともかく、この子、あなたよりはよっぽどいい男っぽくない？」

レイは苦笑して、

「俺はなんて答えりゃいいんだ？ ……ティース。そうムキになるな。こいつはこういう女なんだ」

「誤解を招く言い方をしないでよね。私はただ、自分の心に正直なだけよ」

眼鏡の奥の目を可笑しそうに細め、それからアレッタは悪戯っぽい笑みを残しながら、唐突に口調を変える。

「それで？ 今日はどうなようなご用件ですか？ どなたかに御用でも？」

「いや。特定の誰かに用ってわけじゃない」

レイはチラッとだけティースを振り返って、そして言った。

「今日は少し他流試合を申し込みたくてな。……候補生の中で、受けてくれそうなヤツを探してくれないか？」

「後ろの子の相手？ どんなのでもいいわけ？」

「できれば、極端な落ちこぼれでもなく、かといってとんでもなく優秀でもないヤツがちょうどいい」

「……微妙な注文ねえ。ま、いいわ。当たってあげる」

アレッタは仕方なさそうに立ち上がると、

「では、結果が出るまでそちらの椅子にでもお掛けになってお待ち下さい」

そう言って、奥の方へと消えていった。

「……レイさん」

言われた通り入り口近くの椅子に腰を下ろし、ティースは疑問を投げかけた。

「ここって、もしかして――」

「ああ。見りゃわかるだろ？」

レイは答える。

「ネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”の本部さ」

「……」

ティースの心臓がドクンと高鳴った。

（ネスティアスの候補生と……他流試合……）

それは彼にとって願ってもないことだった。

エリート集団、ネスティアス。候補生とはいえ、その実力はおそらくハイレベルだ。自分の力がどこまで通用するか、自分が果たしてどれだけ成長しているのか、それを計るには申し分ない。

（よし……！）

グッと拳を握りしめ、そしてその表情は緊張に徐々に強ばっていく。

（やってやる……！）

「……」

そんなティースを、レイは横目で見つめていた。

——どこか、冷めた視線で。

「あ、戻ってきましたね」

上空の太陽がオレンジ色に染まり始めた頃、稽古を終えて汗を拭いていたパーシヴァルが、建物に向かってくる二つの人影を見つけていた。

隣では、少し意地の悪い笑みを浮かべたマイルズが口を開く。

「結果がどうだったか、賭けるかい、パース」

パーシヴァルは笑って、

「賭ける意味、あるんですかね？」

「オッズは十対一ぐらいでどうだい？」

「俺は一の方に賭けますけど、マイルズさんはそれでもいいですか？」

「……残念。不成立だね」

マイルズはそう言って、もう一度、戻ってくる二人に視線を向ける。

答えは聞かずとも、戻ってくるティースの表情を見れば明らかだった。おそらく、彼自身が思っていた以上のひどい内容。

悔しさ。無力感。

そんなものが、戻ってくる彼の顔に満ち溢れていたのだから。

「——くそっ！」

ダン！ と、詰め所の壁が鈍い音を立てる。

誰もいなくなったはずの、夕日に染まるデイバーナ・ナイトの訓練場。

そこで拳を壁に叩きつけた人物は言うまでもない。ティースだ。そして、そこに浮かんでいたのは彼としては非常に珍しい、とてつもなく苛ついた表情。

ネスティースでの“他流試合”の結果は、マイルズやパーシヴァルが予想した通りだった。思い出すのも忌々しいほどの、惨敗。興味半分で見物していた連中の、冷笑にも似た表情が頭から離れなかった。

が、彼が苛立っているのは、そんな周りの目とは関係のないこと。「全然……全然成長していないじゃないか……っ！」

彼を苛んでいたのは焦燥感と、途方もない無力感。

強くなりたい気持ちは今までになく溢れているのに。強くなるための努力も、少しも惜しんでいないのに。

なのに——強くなれない。強くなっていない。少なくとも、彼自身が期待していたほどの成果は上がっていない。

ギリッと歯ぎしりの音が鳴る。頭を壁に押しつけ、そしてもう一度拳で壁を叩いた。

「なにが、悪いってんだよっ！」

厳しいトレーニングにも耐え、過酷な稽古も乗り越えた。だから、自分は着実に強くなっているものだと思っていた。パーシヴァルやギレットを相手にするときも、もちろん負けはするものの、少しずつでも彼らに近づいていると、そう信じていた。

だが——それも今日までのこと。

ティースは今日の出来事で悟っていたのだ。

自分が、このディバーナ・ナイトにやって来てから、ほぼ全くと言っていいほどに成長していないことを。

……今日の相手は、パーシヴァルよりも若干劣る程度の相手だった。来年のデビルバスター試験は元より受けるつもりはなく、再来年に照準を合わせているような、そんな人物だった。

それなのに、結果は――

「俺には……才能がないのか……っ!」

「おい」

「!？」

誰もいないはず――そう思っていたティースは驚いて振り返った。

「ギレット……さん」

「冗談じゃねえぞ。おめえみてえなヤツが才能がないとか軽々しく言うもんじゃねえ」

そこにいたのは、ナイトのメンバーの一人、ギレットだった。

――寡黙で、無骨。彼はそんな外見のイメージそのままの人物で、ティースがこのナイトに来てから一ヶ月と少し経つが、任務上の必要事項以外でまともに言葉を交わしたのは、二、三度しかない。

そんな彼が自ら声をかけてくるのは、非常に稀なことであった。

「見て……たんですか？」

ギレットはそれには答えず、片目だけでティースを見上げた。身長差は十五センチ以上ある。もちろんティースの背が高すぎる故だが、それでも下から見上げるその視線に、ティースは微かな息苦しさを感じていた。

「そういう言葉は、おめえより強くなることに一途で、おめえより強さを渴望していて、それでもどうにもならねえような連中に失礼だ」

「ど、どういうことです、ギレットさん……」

その言葉に、ティースは反発せずにいられなかった。

「……俺が真剣じゃないって言うんですか!？ 俺は……俺は、強くなりたいてって気持ちなら誰よりも大きい! 少なくとも今は――」

「!!」

「ふん」

気色ばんだティースに、ギレットは鼻だけで笑って答える。

「中途半端な野郎がいつちよまえに吠えるんじゃないやねえよ」

「ちゅ、中途半端……?」

「おめえが望むのは何のための強さだ?」

下から向けられたのは、まるで見透かすような視線だった。

「サイラスⅡレヴァインを助けるための力か? それとも、ナナン

Ⅱトリストラムを守るための力か?」

「――!?」

二つの名は、今のティースにとってとはとてつもない“痛み”だ。

その二つの死に、成長を誓ったはずだった。だが、今の彼はその誓いとは裏腹に、思うように成長できていない。

だから、胸が軋んだ。

情けなさに涙が溢れそうになった。

「その……両方だ」

視線を落とし、拳を握りしめ、唇を噛んで、震える声でティースは答える。

「どちらも助けたかった。二人とも生きていて欲しかった! ……
それだけじゃない。俺が強ければ、俺に力があれば、もっともっと
多くの人を助けられた……助けられたはずなんだ……ッ!!」

「……ふん」

もう一度、ギレットは仏頂面のまま、鼻で笑った。

「だから、おめえは強くなれねえんだ」

「……な!」

顔を上げたティースは、猛烈に反論しようとして、それを喉の部分で止めた。

いや……止めざるを得なかった。

「おめえが求めているのは、誰かを助けたいとか、誰かに復讐したいとか、そんなもんじゃねえ」

「っ……」

息が詰まる。

そこにあっただのは——途方もない威圧感。

「ただ、おめえ自身の無力を否定してえだけじゃねえのか？」

「！」

ギレットの片目から放たれる視線は、圧倒的だった。

——なにが？

そう問われても、おそらくティースには答えることができない。

ただ、圧倒的。

全てにおいて自分を上回っている。故に、口答えできない。直感的——いや、“本能的に” ようやく感じたのは、それだけだった。

ギロリと、視線がティースを睨め付ける。

「おめえはさっき言ったな。……ナナンを守りた“かった”。サイラスを助けた“かった”。だが、それ以上のことは一言も言っただけ。今、近くに生きている誰かを守りてえとも、そのために強くなりてえとも」

ティースは狼狽した。

「そ、それは、ただ……」

「たまたまだってえのか？ ……違うな。それこそがおめえの本心だ。おめえが口にしてる決意ってのは所詮、小腹減ったから何か食いてえとか、イイ女がいたから仲良くなりてえとか、その程度のクソみたいに薄っぺらいもんでしかねえ」

「そんな……そんなこと——！」

だが、そのティースの反論はあまりに弱々しいものだ。

もちろん、目の前に立つギレットの雰囲気飲まれたこともあるが、それだけでないのも確かだった。

ギレットは続けた。

「もし後悔を糧にして生きてえんなら、そりゃそれで構わねえ。だが、それならおめえ自身を責める前に、その元凶である魔を根絶やしにするほどの決意を見せてみろ。全ての魔を、殺して、殺して、

殺し尽くしても足りねえぐらいに憎しみを極めてみせろ」

「全ての魔を……殺し尽くしても……足りない——？」

ギレットは背を向けた。そしてその手は、鍛錬上の隅に残されていた朱色のタオルを拾っていく。

どうやら彼は、忘れ物を取りに戻ってきただけだった。

「憎しみを、極める——」

その偶然は彼の未来にとって幸運だったのか、あるいは不運だったのか。

ただ……“停滞”を抜け出すきっかけは与えられた。それだけは間違いない。

「……ギレットさん」

「マイルズ……おめえか。なんだ？」

詰め所の入り口に立っていたマイルズは、ズレてもない黒縁眼鏡を中指で押し上げて、そして微笑を浮かべた。

「医者っぽい見解で言わせていただくと、ですね。ティースさんの成長を妨げていたのは、睡眠不足による体力の低下と、精神の不安定さからくる各機能の——」

「知らねえよ、んなこと」

「……そりゃそうです。結局、治療法はただ一つ、克服すること、ですから」

マイルズは笑って、通り過ぎるギレットを見送りながら、

「隊長の仕事、取っちゃいましたね。……ま、隊長が言うより、あなたの言葉の方が重みも真実味もありそうですしね」

「……」

無言のまま、無愛想な男の後ろ姿は小さくなっていった。

「……憎しみを極めて強くなる、か。体現してそうな人、多いからねえ」

腕を組んで壁に背中を預けると、マイルズはそのまま夕暮れの空を見上げる。

少しだけ強い風が吹き抜け、白衣の裾を揺らした。

「さて、ティースくんはどう転ぶかな。このまま終わると思いたくない。けど、転ぶにしても、果たしてどっちに転ぶことやら——」

その2『苦悩の日々』

ティースがネスティアスの候補生と他流試合をおこなった翌日の朝。

朝日が射し込み始めたばかりの屋敷の廊下に、ほんの少し甲高いソプラノの鼻歌が響き渡っていた。

「♪」

屋敷の執事、リディアの一日は、朝一番で書庫に向かうことから始まる。どこへ行くにしても本を持っていなければ落ち着かないという彼女にとって、朝一番に本を探しに行くことは、一日の糧となる朝食を採ることよりもよほど重要な事項なのであった。

そしてそれは朝一番。本来ならばまだ誰もいないはずの時間。だが、

（ありゃ？ あれは――）

その日は、書庫の入り口付近のテーブルに先客がいた。その後ろ姿を目に留めたりディアは、目をまん丸に見開いて、それからゆっくりと近付いていく。

「今日も、寝不足？」

「……」

振り返ったポニーテールの人物については、もはや説明はいらないだろう。

「なんてことはないわ。ただ、いつもより早く目が覚めただけよ」

その顔を見て、リディアは即座に“違和感”に気付いていた。

「ふうん」

曖昧な言葉を返しながら、その向かいの席に腰を下ろし、言った。「目元の辺りとか、化粧濃すぎるんじゃない？ お化粧なんてしなくても、シーラさんより綺麗な人なんてそうそういないよ」

シーラはチラッと彼女を見て、すぐに視線を本に戻しながら、

「……ホント、嫌な子ね」

「あはは、誉められちゃった」

頭の後ろに両手を回して、リディアは無邪気に笑った。

そんな仕草だけは年相応である。

「そっか。ティースさん、やっぱり昨日もうなされたんだ？」

「そうね。……そのようね。迷惑な話だわ」

「またまた。そんなこと言っちゃって」

「なに？」

視線だけ上げたのを見て、リディアは続けた。

「あたし、少し考えて気付いたよ。……シーラさんはやっぱり、ティースさんのことを心配してるんだよね。心配してて、なのに何もしてあげられないから苛々してるんだ」

シーラは怪訝そうに、

「……何故、そう思ったの？」

「だって苛々してる割に、最近はずっともティースさんに直接当たろうとしないでしょ？ いつもはもつとどうでもいいことで冷たく当たるのにさ。……それって、やっぱり氣遣ってるからなんでしょ？」

その言葉に苦笑したシーラは、肯定も否定もせずに、

「私が死者に鞭打つ鬼婆だとしても言いたいなの？」

「あはは、死者はひどいや」

そう答えながらも、リディアは心の中で首をひねった。

（……微妙な反応だなあ）

もちろんリディアとて他人の心が読めるわけではない。だから、この目の前の冷たく美しい年上の少女のように、表情と内面の感情が一致にくい人間の本心を探ることはなかなか難しかった。

結局、その真偽を探るのは諦め、リディアは話題を変える。

「そういやシーラさんって、ティースさんとは結構長い付き合いなんだよね？ どれぐらい長いんだっけ？」

シーラは素直に答えた。

「そうね。……常識的に考え得る、ほぼ最大限の長さかしら」

「え。マジ？ それって、オムツを取り替えてもらってたとか？」

「……それはないわ」

「うわ、冗談だってば。怒らないでよ」

「怒ってないわ」

そう言いつつ、シーラの表情は寝不足であることは別に、若干不愉快そうだ。幼い頃の話は、あまり触れられたくない話題なのかもしれない。

「でも、つい最近ぐらいまで一緒にお風呂に入ったりし——うわわ、じよ、冗談！ 冗談だって!!」

「……」

ずっと細めた目が、リディアを射抜いていた。

——確実に、本気だ。

「そんなに過敏にならなくてもいいのに……あたしだって小さい頃は兄さんにお風呂に入れてもらってたよ」

「……それとは話が違うでしょう」

リディアはわざとらしく納得できない顔を見ると、言った。

「昨日は寝るとか寝ないとかの話をしてたくせに、今日はお風呂ぐらいで怒るの？ ホント、わかんない人だなあ」

「……」

シーラは気まずそうに黙ると、少し苦い顔をする。どちらも口は達者な方だが、どうやらこの場はほんの僅かにリディアが上回ったようだった。

「でも、どうにかならないのかなあ、ティースさん。……ねえ、長い付き合いとかで、パツと立ち直らせるような方法を思いついたりしないの？」

少し機嫌を損ねたせいかな、シーラは視線を横に向けて素っ気なく答える。

「あるなら、とっくにやってるわ」

「そっか。……そうだよ。寝不足は、お肌の天敵だもんね」

リディアはようやく納得した顔で、椅子から立ち上がった。

「もし辛いみたいだったら、しばらく部屋を変えてもらったら？
あたし、ファナさんに言っておいてあげるよ」

「……そうね」

最後はやはり興味なさそうに答えて、シーラは再び手元の本を開いた。

それを視界の隅に捕らえながら、リディアは付け足す。

「ナイトは、また任務だよ。多分、明日の朝には発つと思う」

「……」

本に集中して聞こえていないのか、あるいは特に言うこともなかったのか、返事はなかった。

それを確認して、リディアは彼女に背を向けて薄暗い書庫の奥へと歩いていく。

(……シーラさんでも役者不足ってことだと、ホント、出口が見えないなあ)

そして首を横に振ると、やはりため息をつくのだった。

「今日の授業は聖力と魔力について、少し深く説明することにします」

午前中、ティースはいつものように、屋敷のもう一人の執事、イングヴェイ・イグレシウス——通称“アオイ”から、デビルバスターに必要な知識の授業を受けていた。

「まず聖力についてですが——」

つい先日、二十二歳の誕生日を迎えたばかりのアオイは、線の細いお坊ちゃん風の外見で、縁なし眼鏡がより一層穏やかなイメージを促進させている優男である。そして実際に彼は、少なくとも普段は穏やかで、そしてどこか微妙にネジの抜けているような、そんな人物だった。

だが、その穏やかな表情が、少し怪訝そうな色に染まる。

「――ティースさん？　大丈夫ですか？」

「え……あ、ああ」

顔を上げたティースの目の下には、うっすらとクマのようなものができていた。

「……」

アオイもまた、その原因については知っていたが、その場はひとまず何も言わずに、

「では、説明を続けます。きちんと理解してくださいね」
言いながら、テーブルの上に用意したものを示す。

「……これは？」

そこにあったのは長さ一メートルほどの筒のようなもの。真ん中の八十センチほどは透明なガラスでできており、両端の十センチは金属のようなもので覆われている。中には僅かに黄色がかった液体が半分ぐらい入っていた。

「この中に入っている液体は、聖力に反応する特殊な液体です。……見ててください」

それをテーブルに用意された台座の上に置くと、筒の中の液体はユラユラ揺れながら水平になる。

が、アオイがその筒の片側……金属の部分を握ると、明らかな変化が起きた。

「あ……」

中の薄黄色の水面は、アオイが触れた方の端に引き寄せられるように微かに傾いたのである。

アオイは言った。

「聖力というものは基本的に、人が生まれつき備えているものです。これは修行などで増やすことはできません。……ではティースさん。リラックスしてそちらに触れてみてください」

「ああ……」

逆側の金属部分に触れると、やはり水面は動いた。水平……いや、明らかにティース側へと大きく引き寄せられている。

アオイは頷いて、

「これはつまり、生まれ持った聖力が、私よりティースさんの方が優れていることを示しています。しかも……この傾きを見る限り、ティースさんはなかなか類い希な強い聖力の持ち主ですね」

「え。そうなのか？」

「ええ。レイさんやアクアさんでは、ここまで引つ張られませんか。今、この屋敷で一番優れた聖力の持ち主は第四隊のアルファさんですが、ティースさんはそれに匹敵する聖力を持ってるようです」

「？ 俺の聖力が、レイさんやアクアさんより強いってことか？」

「ええ。そうですよ。……ただし」

アオイは小さく微笑んで、もう一度筒を見るように促した。

「こういう方法が、あります」

そう口にした瞬間、中の液体がいきなりアオイ側へと勢い良く動いた。

「！」

そのまま一秒、二秒、三秒……五秒ほど経つと、再び元へ戻る。

「今のは……？」

「これが、ティースさんがファントムで習ったであろう“集中”というものです」

「集中？」

確かに、ティースは以前所属していたディバーナ・ファントムで、その隊長のアクアからしつこく“集中”という言葉が聞かされていた。が、それが具体的にどういことなのかは、未だにわからないままである。

アオイは言った。

「聖力というのは基本的に体中と身につけているものを巡ります。武器を持てばもちろん武器にも巡ります。……その全身に巡る聖力を、一時的に一部分に集中すること。この場合、私は手の平へと全身の聖力を集中させたのです」

「……あ、なるほど。それで、俺とアオイさんの聖力が逆転したの

か」

「もちろん、生まれ持った聖力の強さは大きな武器です。しかし、それだけでは強い魔力の壁を打ち破るのは至難の業。……それはティースさんにも、覚えがあるでしょう？」

「……ああ」

ティースの頭に蘇る、一つの名前。

——ザヴィア||フレイラ||レスター。

ティースの中に決して忘れられない“しこり”を植え付けていった風の将魔の名だ。

「あなたほどの聖力を持ち、そしてあなたの持つ驚異的な能力の破魔具“細波”を持ってしても、集中なしには太刀打ちできない敵がいるのです」

集中。

ティースはあの——ザヴィアの壁を一度だけ破ったあのときは、全くそんなことを意識していなかった。が、今になって思い返してみると、確かに全身の力が一点——刃先へと集中していたような、そんな感覚が思い出される。

「集中は人によっては聖力の効果を数倍にも高めます。一般的には、最大で十倍程度までは可能だと言われていますね」

「十倍……？」

いまいち感覚はわからなかった。

「聖力の基準としては、ですね。……ごく標準的な人間が、ごく標準的な破魔具を手にした場合の力——聖力と破魔具の増幅値を掛け合わせた値を“破魔値”と言いますが、その破魔値は大体、人魔で言うところとごく標準的な下位魔、獣魔で言うところと五十族辺りの“魔力の壁”とほぼ同程度と聞いていいでしょう。人魔はクラスが一つ上がる事に二倍強、獣魔は二倍弱といったところです。……実際には聖力の属性や性別などによる相性もあって複雑なのですが、だいたいそんな感じです」

その言葉に、ティースは少し意外に思っ

「つてことは、全く普通の人間でも、破魔具を持ってさえいれば下位魔ぐらいとは戦えるってことか？」

「そう、考えますか？」

アオイは苦笑して、

「魔力の壁を破れないということは、イコール“ほぼ絶対に”勝てないということです。もちろん魔力の壁はあくまで“体内のエネルギーを使って創り出す”ものですから、不意を突いたり、あるいは大勢で魔力をどんどん消耗させてしまえば不可能ではありません……が、“魔力の壁”と同程度の破魔値ということは、基本的に下位魔の約半数について、普通の人間はどんなに優れた技術を持っていたとしても、ほぼ確実に勝てないわけです」

「あ、そっか」

納得顔のティースに、アオイは続ける。

「魔との戦いにおける大前提は、まず“確実に”魔力の壁を破れるということです。……ちなみにデビルバスターになるような人間は、大体普通の人間の二倍の聖力を持っていると言われています」

「二倍……」

つまり、そのぐらいの聖力を持っていなければ、デビルバスターになるのは難しいということであろう。

アオイは少しだけ目を細め……そして躊躇った後に口を開いた。

「サイラスさんの聖力について、ティースさんは詳しくご存じでしたか？」

「サイラス？ ……いいや」

アオイは頷いて、神妙な顔で言葉を続ける。

「彼は技術的にはデビルバスターになっていても少しもおかしくない人物でした。それは、ティースさんもよくご存じのことかと思えます」

「ああ」

「ただ不幸なことに、彼の生まれ持った聖力というのは、常人並……いえ、常人のそれよりもさらに低い値でした。弛まぬ努力によっ

て集中を会得し、なんとか上位魔にも太刀打ちできるだけの破魔値を叩き出してはいましたが、彼が最後に戦った相手は、おそらく上位魔としても高い魔力を持っていたのでしょう」

「……」

ティースの耳に蘇ったのは――甲高い音。

サイラスの剣が無惨に砕け散ったときの、あの絶望的な音だった。

……それは、技術でも気持ちでもどうにもできない、単純な力の壁。

「聖力とは、それほど重要なものです。その点でいうと……ティースさん。あなたは恵まれすぎていると言ってもいい。あなたの聖力は、私やレイさんたちよりもさらに上……常人との比較だと三倍近いはず。“細波”を手にしたあなたの破魔値は、上位族ほどの魔でも集中無しに破ることが可能な値でしょう」

「……恵まれすぎている」

昨日のギレットの言葉がティースの頭を過ぎった。

（お前みたいなのヤツが、才能ないとか軽々しく言うもんじゃない……か）

聖力のことといい、“細波”のことといい、確かに彼は恵まれて
いるのだ。

だが――

「ただ、もちろんそれはあくまで大前提。……それに加え、魔の動きを捕らえ、うち倒すだけの戦闘技術が必要になります」

「……」

アオイの言葉が、ティースの胸に暗い影を落とす。

戦闘技術。それが、思うように伸びない。おそらくこのアオイの言葉は、それを踏まえてのものだったろう。

（中途半端……それが原因なのか……？）

昨日、ギレットに言われた言葉が蘇る。一晩考えて、彼の言うことは確かにその通りかもしれないと思った。

だが……それならどうすればいいのだろう。

思考の行き着いた先は結局そこだった。

サイラスのことも、ナナンのことも、ティースにとって到底忘れられる出来事ではない。毎日の悪夢も、寝不足であることも、それは当然自分が背負うべきものだと思っていたし、何事もなかったように忘れて生きていくことは、少なくとも彼には不可能だった。

（なら――）

全ての魔を憎むこと。

それは簡単なことなのかもしれない。

サイラス、ザヴィア、ナナン――いくつもの出来事が重なった。

それは一つ一つが、魔を憎むのに充分過ぎる出来事だった。

だが……ティースは未だ、ギレットの言うような境地に達することはできていない。

憎いのは確か。

なのにあと一歩、どうしても届かない。

（わからない……どうすればいいのか……）

そして、苦悩は続く――

「目的地はネービス領の南方端にある小さな街、フォックスレア。複数の獣魔と、おそらく高位と思われる人魔が一体、確認されている模様」

淡々と、事務的な口調がミューティレイク別館の執務室に流れる。だがその声は、大人びた口調とは裏腹に幼い少女のものだった。「犠牲者はすでに三十名近くにも及び、ディバーナ・ロウとして、これを見過ごすわけには参りません」

屋敷の主人でありディバーナ・ロウの総帥でもあるファナミューティレイクは、若干十七歳にして、ミューティレイクと、そしてディバーナ・ロウの全てを統率するネービスきつてのスーパーお嬢様である。

「第二隊隊長、レインハルトⅡシュナイダー」

が、実はその声は彼女――ファナのものではない。

ファナの隣に直立し、指令書らしきものを読み上げているのは、どこかアンバランスな男物の正装に身を包んだ屋敷の執事、リディアⅡシュナイダーの方である。

そして、そんなリディアと、何やら楽しそうに微笑むファナの視線の先に立っているのは、どこか飄々とした雰囲気のある男。

頭には灰色の布を巻き、そこから黄土色に近い金髪が覗いている。その口元には、どこか皮肉めいた苦笑。

「あなたに、彼ら獣魔と、彼らを統率する者の排除を命じます」

「はいはい。了解しました、と」

しかしまあ、彼がそんな笑みを浮かべていたのも当然のこと。

レイは両手を軽く広げて、

「んで？ 我が愛しの妹君は、どうして俺のときに限ってそのような格式張った言葉を使うのかな？」

「そりゃ、公私混同しないために決まってるじゃん。色々考えてるんだよ、これでも」

そう言って、指令書をポンと無造作に投げ渡すリディア。

言ったそばから公私混同しまくりだった。

レイは口元に笑みを浮かべたまま、

「いい心がけだな。……けど、それなら仕事中に小遣いをせびりに来るのも今後一切やめてもらえないか？」

だが、リディアはヒラヒラと手を振って答える。

「それとこれとは話が別だってば」

「どこがだよ。……おい、ファナ。いいのか、こんなんで」

言葉を向けると、ファナはおかしそうにクスクスと笑って、

「ええ。構いませんわ」

「やれやれ、ディバーナ・ロウの将来が大いに不安だよ。――で、その執事さんが話をかなり端折ったんで確認しておくが……」

レイは指令書に目を落としたまま、

「高位の人魔。これは上位以上ってことか？」

その問いには、“話を端折った執事”自身が自分の席に腰を下ろして答えた。

「そ。上位以上は確實ってことみたいだね。もしかしたら将族かもしれない」

「情報の信頼性は？」

「実際、その魔を目撃した人の話から、“影裏”の人が推測したんじゃないの？」

“影裏”とはディバーナ・ロウの誇る、ネービス全土にネットを持つサポート部隊のことである。

「その目撃者の目と記憶が信頼できるのか、ってことだな」

「あ、そゆこと。主な目撃者は、その依頼主みたいだね」

「ほう……パトリシアⅡラムステッド、二十七歳、女か。……この歳で独身とはな」

呟いたレイに、リディアが早速突っ込む。

「やめてよ、兄さん。依頼主だけはダメだよ。ディバーナ・ロウの看板が傷つくから」

「おいおい。なんの心配だ」

レイが苦笑して視線を上げると、リディアは真面目な顔のまま、

「二十七歳ぐらいなら全然オッケーでしょ？ 兄さんは上も下も広いからね」

「冗談だろ？ アクアの奴と一緒にしないでくれよ」

「アクアさんは下は広いけど上は狭いじゃん」

「俺だって下は狭いさ」

「またまたあ。だってあたしなんか、兄さんと一緒にいるときはいつでも貞操の危機を感じてたもん」

「そりゃ、広いとか狭いとかの次元じゃないな」

軽口を交わしながらも、レイの視線は素早く指令書の内容を読み解いていく。

そして、次の疑問が口をついた。

「ん？ フリーのデビルバスターとの共同任務か？」

「はい」

今度はファナが答えた。

「ネービスと南のグレシット領を中心に活躍なさっている方ですわ」
「ルネッタⅡフィッシャー……か。確かに、どこかで聞いたことのある名前だな」

レイが少し眉間に皺を寄せて考えていると、そこヘリディアが、
「書いてないけど、名前からすると女の人だね。……手出すなら
そっちだよ」

「しつこいな」

ため息を吐いて、レイは言った。

「相手なんて選ぶ気は毛頭ないさ。……世俗の事情なんてもんは、
瞬時に燃え上がる恋の魔力の前では全くの無力だからな」

「うわ、危ない！ 早速正当化しようとしてる！」

「ああ、思い出した」

レイは指令書をヒラヒラさせながら、そんなリディアの抗議をさ
らりと流して、

「ルネッタⅡフィッシャー。グレシットのどこだかに闇の二十三族
が現れたときに、そいつを葬った連中の一人だな」

ファナが頷く。

「もともとは単独で、状況によっては色々な方とチームを組むそう
です」

「それでこっちに声がかかったってことは、もしかすると一人じゃ
手に負えないかもしれない、と、そういうことか」

「あるいは、そうかもしれませんわ」

「やれやれ……。面倒な相手なのは間違いなさそうだな」

嫌気が差したようにレイは呟いたが、もともとナイトの任務で面
倒でない相手の方が珍しい。ナイトにとってみれば、日常茶飯事と
は言わないまでも、これまでに何度かこなしてきたタイプの任務だ
った。

ただ……今のナイトには若干の不安材料がある。

「兄さん」

それについて、一番最初に口を開いたのはリディアだ。

「ティースさん、大丈夫？」

「さあな」

レイは素っ気なく答え、その反応が不満そうなりディアに対して言葉を続ける。

「あいつの性格に難があるのはわかっていたことさ。割り切れないのなら最初から深く関わらなきゃいいものを、それもできない……相当厄介な性格だ」

「どうすればいいと思う？」

「死ななきゃ直らないんじゃないか？」

笑って答えたレイに、リディアはため息とともに首を振って、

「兄さんみたいのなら死んでも自業自得だけど、ティースさんの場合は可哀想。なんかやり切れないもん」

「おいおい、それが実妹の言葉か？」

「言われたくなかったら真面目に答えてよ」

「……そうだな」

そこで初めて、レイは考える素振りを見せた。ただでさえ鋭い視線をさらに細めて微かに泳がせる。

「ああいう性格ってのはそう容易く直るもんじゃない。結局、落ち込んで、立ち直って、それを繰り返して徐々に慣れていくしかないんじゃないか？」

リディアは納得したように頷いたが、すぐに困ったように首をひねって、

「でもあの人の場合、その“立ち直る”過程で異様な時間がかかるんだよねえ」

「それこそ本人と、特に近しい奴らがどうにかすることだろ？」

「やっぱ、鍵はシーラさん？」

だが、レイは少し考えた末に、

「あの鬱屈した王女様には無理かもしれんな」

「？」

「あいつが今必要としているのは、もっとわかりやすい、目に見える形の支えさ。……本心がどうであれ、あの王女様は、あいつに對してそういう態度を取れそうにない」

リディアはため息を吐いて、

「その本心がなかなかわからないんだよねえ、あの人」

「そうか？」

レイは可笑しそうに口元を緩めた。

「歪んでる理由はともかく、本心はわかりやすいと思うがな。……

ファナ」

「はい？」

「そういやティースの奴が感謝してた。毎回毎回、役に立つ薬袋をどうも、ってな」

「はあ」

ファナは不思議そうに首をかしげて、

「薬袋、ですか？」

「……と、いうことさ」

「?? ……わっかんないなあ」

理解できない顔のリディアに、レイはもう一度笑うだけでそれ以上は答えようとしなかった。

ミューティレイクの敷地内では様々な植物——観賞用から実用のものまでが育てられている。それらを管理するのはミューティレイクに雇われた専門家と、彼らの手足となって働く幾人かの使用人たちだ。

そんな中、日光を嫌う植物のために用意された部屋が、ミューティレイクの地下にある。

鑑賞されることのないそれらの植物は、もちろん全てが実用のも
の。その大半が薬の調合に使われる植物たちで、中には貴重なもの
も数多く存在していた。

そして、その植物たちの世話を主に担当しているのが、マグナス
Ⅱラングリッジという名の、数日後に十六歳の誕生日を控えた少年
である。

「マグナス」

「あ、シ、シーラ様っ」

薄暗くジメジメした部屋の中に、びっくりしたようなマグナスの
声が響き渡る。マグナスはそんな自分の声に驚いて思わず口を塞ぎ、
手にしていたハサミを落としそうになってしまった。

「いつも、ご苦労様」

「ど、どうも……」

階段を降りてきた人物、シーラⅡスノーフォールは、マグナスに
とって憧れの人物だ。

こうして会話を交わすようになったのは結構前のこと。だが、未
だに彼女の姿を見るだけで体はガチガチに緊張してしまう。

しかもこの日のマグナスは、実はいつもと少しだけ違った小さな
決意を胸に秘めていて――

「……あ、あのっ、シーラ様っ！」

決心したように口を開くマグナス。

「なに？」

シーラもそんな彼の様子に気付いたのだろう。植物に歩み寄る足
を止めて、怪訝そうに振り返る。

マグナスは言った。

「そ、そのっ！ きよ、今日は一段と、お……お美しいですねっ！
？」

「……」

一瞬、シーラはきよとした顔で彼を見つめたが、やがて苦笑
を浮かべる。

「……誰に入れ知恵されたの？」

「は！？」

「そういう歯が浮くセリフは、あなたには似合わないわ」

「は、はぁ……」

素っ気ない返事に、マグナスはガックリと肩を落とした。

……実際、その言葉は彼の先輩からの入れ知恵だった。普段の彼であれば、そうそう思いつきもしない言葉だったし、思いついたとしても誰かの後押しがなければ口にしない言葉だったから。

シーラはすぐに部屋の隅に並ぶ植物たちへ視線を戻す。その状態を確認するかのように、軽く手で触れたり、土を調べたりし始めた。
「……」

マグナスは少し浮ついた表情でそんな彼女の一举一動を見つめている。薄暗い部屋に二人きりという事実も、彼の心臓の鼓動を少し速めていた。とはいえ、彼はそれたことは少しも考えていない。彼の先輩たちの中には、冗談混じりに彼をけしかけようとする者もいたが、彼はただ、こうして話をして、その姿を見つめて、そしてたまに植物たちについて会話する。それだけで満足しているのだ。

「グレゴスの葉は以前よりだいぶ良くなっているわね。……マグナス？」

「あ……はいっ」

ボーっとしていて反応が遅れ、マグナスは慌てて答えた。

「も、もう大丈夫です。その、お持ちになられても……」

「そう。助かるわ」

「い、いえ。育てるのが私の仕事ですから……」

微笑みにドキドキしながら、マグナスはそう答える。

いつものことながら、薄暗いことが彼にとっては幸いだった。もし太陽の下であれば、彼の顔面の血行が良くなりすぎているのが容易に悟られていただろうから。

「それじゃあグレゴスの葉を少しもらっていくわ。……あと、いつものを、またいくつか」

「あ、はい。それは全然大丈夫です。……鎮静剤か何かの実験ですか？」

マグナスはそう尋ねた。

グレゴスの葉には、若干ながら精神の安定を促す効果がある。他の薬草と調合することでその効果を高め、鎮静剤などに利用することが可能なのだ。

それはシーラも否定せず、

「ええ、そんなところよ」

切り取った葉や草をそれぞれ別の袋に入れ、そして満足そうにシーラはマグナスを振り返った。

(……あれ?)

そこでふと、マグナスは違和感に気付く。

「助かったわ。また、お願いするわね」

「あ、は、はい……」

立ち去っていくシーラの後ろ姿を見送りながら……マグナスは少し躊躇した後、決心したように口を開く。

「……あ、あの、シーラ様！」

「? なに？」

足を止めて振り返ったシーラに、マグナスはしどろもどろになりながらも、

「そ、その、さっきのことですけど……」

懸命に言葉を紡いでいった。

「シーラ様、今日は……本当にいつもと違う感じがします」

「……」

無言で、シーラがほんの僅かに目を細めた。だが、必死だったマグナスはそんな彼女の表情に気付かず、言葉を続ける。

「こ、こういうこと言ったら失礼なのかもしれませんが……どこことなく大人っぽいというか――」

「そうね」

シーラは素っ気ない口調で答えた。

「化粧してるのよ。これから男を引っかけに行くから」

「……は？」

「冗談よ」

相変わらず抑揚のない声で答え、シーラは地下を出ていく。

「……」

ポカンとしたまま、マグナスは立ち尽くした。

……彼女がほんの少しだけ機嫌を損ねたらしいことは、彼にも容易に理解できた。

そして理解した瞬間、

（で、出しゃばったことを言っちゃったのかなあ……）

彼は大きく肩を落とし、そしてまるでこの世の終わりであるかのような重いため息を吐くのだった。

（もう来てくれなくなったら……どうしよう……）

それは結論から言うともまるで必要のない心配であったが、今の彼にとって、それはとてつもなく大きな不安であり……結局、しばらく頭を抱えていた彼は、後から仕事の様子を見にやってきた先輩にどやされるハメになってしまったのだった。

音もなく、扉が閉まる。

月明かりだけの部屋の中、ティースは照明を点けることなく重い足取りでベッドに歩み寄ると、背中から倒れ込んだ。

疲労感。

それは今の彼にとって、少しも心地よいものではない。

——今日の午後、隊長のレイから新たな任務についての説明があった。

（任務……か）

憂鬱だった。

視線を動かすと、ベッド上の枕が視界の中に映る。それもまた、今の彼にとってには憂鬱の種だ。眠ることすら、彼に安息をもたらしはくれない。

それでも、立ち止まることは許されていなかった。彼が悩んで足踏みしていても、周りはどうどんと歩みを進めてしまうのだから。

「準備だけは……しておかなきゃな」

出発の朝は早い。

ティースは重たい体を押して、荷物の最終点検を始めた。とはいえ、荷物はいつの任務でもほとんど変わらない。慣れたもので、次々にチェックを終えていく。

そして、それらを全て終えたところで、ふと思い出した。

「……これの中身も確認しておくかな」

呟いて、ベッドの上にあった巾着袋を手にする。

ここに戻ってくる途中、ファナの侍女であるフィリスⅡディクタⅠからいつものように受け取った薬袋――任務の際には毎回彼女を通してファナから送られるものだったが、時によっては少し首を傾げてしまう薬まで入っているため、こうして直前に中身を確認しておく必要があったのだ。

「鎮痛、止血、解毒……」

その三つだけは必ず入っているものだ。その先が問題だった。

「今回は……えっと、精神安定剤に安眠誘発剤？　なんだ、これ……？」

ティースは同時に袋に入っている説明書に目を通す。

「気持ちが高ぶっているときにリラックスさせる効果と……不安や興奮などから来る不眠の悩みを解消する効果――」

そこまで読んでティースは自嘲気味に苦笑した。

確かに、それらは今の彼に必要なものだったからだ。

「……ファナさんにまで気を遣われてちゃんあ」

説明書きをよく読んで、もちろん体に害がないらしいことを確認

し、ティースは有り難くそれを使わせてもらうことにする。

安眠誘発……たとえ気休めであったとしても、今の彼には完全な休息が必要だった。

全ての支度を終え、寝巻に着替え、そしてもう一度薬の注意書きを読んでその通りに飲み下す。

——薬の効果か、あるいは偶然か、その日はいつもの夢を見なかった。

その代わりに見たものは——内容の思い出せない、遠い昔の夢——

その3『悪虐の獣魔』

フォックスレアはネービス領の南端、南に接するグreshitt領との境からいくらか行かない場所にある小さな街だ。グreshitt領からネービス領へ、あるいはその逆を目指す人々にとっては、宿場町として広く認識されている。

今回の依頼主、パトリシア・ラムステッドは、このフォックスレアに古くからある名家の主人だ。その屋敷もまた年季の入ったもので、おそらく何度も改修はされているのだろうが、それでも基本デザインや間取りなど、少々古くささを感じさせる。まだ日は高いというのに、何故だか薄暗く感じてしまうほど。

規模的には小さめと言っているだろう。使用人の数もおそらくは両手で数えられる。女主人パトリシアが、自らディバーナ・ナイトの面々を案内していることから、それは容易に窺えた。

そんな屋敷の一階。

「あまり余計なところには触れないように。トラップが作動するかもしれないから」

淡々と言った女主人パトリシアの言葉は、屋敷の雰囲気を加味して考えると、到底笑えないものだった。

「トラップね」

そんなパトリシアのすぐ後をついていくのは、ディバーナ・ナイトの隊長レインハルト・シュナイダーである。

頭にはトレードマークともいえる灰色の布を巻き、背中には二本の半楕円型の剣“夜叉”。その姿はプライベート時とほとんど変わらぬ旅人風の服装だ。

「上手く作動させたら、地下のハーレムにご招待、ってのはないもんかね」

パトリシアは冷たい視線を肩越しに向けて、

「この屋敷のことだから地下ぐらいはあるかもね。……いるのは、

あなたが望む美女などではなく、ネズミと白骨死体でしようけど」

「……」

レイは肩をすくめ、それ以上は何も言わずについていく。

その後に続く面々……マイルズ、ギレット、パーシヴァル、そしてティースもまた、この“幽霊屋敷”の雰囲気当てられてか、あるいは女主人の愛想のなさのせい、口数が少ない。

（怖そうな人だなあ）

そのパトリシアについては、“いかにもやり手っぽい”というのがティースの第一印象だった。実際に頭は切れるのだろう。彼女が二十七歳で独身なのは、あまりに優秀な彼女に男が敬遠するのか、あるいは彼女自身がそれを必要としていないのかのどちらかだろうと思われた。

「さすがの隊長も、今回ばかりは食指が動かないみたいだねえ」

苦笑しながら呟いたマイルズに、レイはもう一度戯けたように肩をすくめてみせる。

幸い、一番前を歩くパトリシアには聞こえていないようだ。

その二人の直後を、相変わらず面白くもなさそうに無言で歩くのはギレット。

そして最後尾はパーシヴァルとティースである。

「ホント、何か変なものが出てきてもおかしくない屋敷っすね」

「はは、それは確かにそうかも」

「？」

笑ったティースに、パーシヴァルは少し意外そうな顔をする。

「ティースさん、何かいいことでも？」

「え？」

「いつもより調子良さそうなんで」

「……あ、いや、特に何もないよ」

ティースはそう答えたが、もちろん彼の体調がいつもよりいいのは事実である。

（やっぱ、ファナさんからもらった薬のおかげかな……）

ファナからもらった“安眠誘発剤”は思った以上の効果を発揮し、彼はあれ以来、充分に休むことができていた。もちろん、それは彼の不眠の原因そのものを解消するものではなかったが、無理矢理にでも体を休めることができれば、気持ちもだいぶ変わってくるものだ。

（いつまでも悩んではいられないもんな……）

「こっちへ」

パトリシアが応接室らしき扉を開ける。

招かれて、レイが最初に部屋に。マイルズ、ギレット、パーシヴアルと入って、ティースまで入ると、パトリシアが扉を閉じる。

入った途端、微かな眩しさを感じてティースは目を細めた。

（……へえ。応接室だけは雰囲気明るいなあ）

思わず部屋を見回す。

広々とした空間。十人ぐらゐは容易に入って歓談できるぐらいのスペース。装飾もここだけは妙に新しく、壁も綺麗だ。南側を向いた大きな窓からは、太陽の光が大きく射し込んでおり、廊下の薄暗い印象とは正反対。暖炉の上には大きな肖像画がある。

そして部屋の中央。そこには大きめのソファが二つ、一人掛けのソファがやはり二つ、長方形を作るように設置されており、その一人掛けソファの片側に、先客がいた。

（え……まさか、この人が――）

その姿を認識して、ティースは驚く。

そこにいるのが、おそらくは今回共闘するデビルバスターであろうことは想像に難くない。

「……」

ゆっくりと立ち上がり、日の光を背中に浴びながらナイトの面々とパトリシアに一礼したのは、髪の長い美しい女性だった。刺繍の入った白いブラウスに裾の長いスカート。ゆっくり頭を下げるその仕草は、どこか愛想のない主人のパトリシアよりもよほど貴婦人らしい。歳はおそらく二十代半ば。

「ひゅう」

誰かが小さな口笛を吹いた。若干驚きの意が込められたそれは、おそらくレイの発したものだろう。

「……」

女性は少し眉をひそめたが、特にそれを咎めることはなく。

そのままパトリシアはもう片方の一人掛けソファへ、そしてナイトの面々はレイとマイルズが大きなソファの片側へ、残った三人がもう片方へ腰を下ろす。

最後に、立ち上がっていた女性がもう一度腰を下ろして、パトリシアが早速口を開いた。

「じゃあ、詳しい話に入る前に、それぞれ自己紹介をしてもらえる？」

「じゃ、こちらからさせてもらおうとするかな」

レイがすぐに答えた。

「チームの隊長、レインハルトⅡシュナイダーだ。よろしく、お美しい貴婦人方」

軽く腰を上げて恭しく礼をする。仕草と口調は軟派そのものだが、視線は飄々としたまま。

他の面々がそれに続く。

「僕はマイルズⅡカンバース。よろしく頼みます」

「ギレットⅡフレイザー」

「パーシヴァルⅡラッセルです」

「えっと、ティーサイトⅡアマルナです。よろしくお願いします」

それぞれに比較的事務的な挨拶を終え、そして全員の視線が髪の毛長い女性へと向けられる。

女性は頷いて、

「私はルネッタⅡフィッシャーです。よろしく、みなさん。……早速だけど、質問させてもらってもいいかしら？」

「どうぞ」

「チームということだけれど、デビルバスターの称号をお持ちの方

は？」

「俺だけだ」

レイの返事に、ルネッタは納得したように、

「じゃあ、あなたたちがあの有名なデイバーナ・ロウというのは本当かしら？」

「なんだ。知らなかったのか？」

ルネッタは頷いて、

「パトリシアさんからは、デビルバスターの率いるチームが一隊、としか聞いてなかったもので。ただ、ネービスからはるるやってくるって聞いて、もしかしたらとは思っていたの」

「なるほどな。……で、質問ってのはそれだけか？」

「ええ。あとは追々、自分の目で確認することにします。……そちらから、何かご質問は？」

「そうだな」

レイは頷いて、ティースを含めたメンバーを見回す。

早速ギレットが口を開いた。

「ルネッタと言ったな。……おめえさんは、どの辺までの魔を退治したことがある？」

初対面にしてはあまりに不躰な口調であったが、それは彼の性格だ。ルネッタもさすがに色々な人間と接してきているのか、嫌な顔をせずに答える。

「チームで闇の二十三族を葬ったことがあります。人型は、残念なこと上位までしかまみえたことがありますけれど」

「ほう」

ギレットが感心したように呟いて片目を細めた。それ以降は口を閉ざす。

どうやら質問はそれで終わりのようだ。

「おっさんはそれだけか？ 他は？ ……いないか？」

誰も口を開こうとはしない。もちろんティースも、この場で質問しなければならぬことは特に思いつかなかった。

レイはそれを確認すると、

「じゃあ俺がチームを代表して、一つ質問させてもらう」

「どうぞ」

「……」

「……」

快く答えたルネットに、ナイトの面々は何故か視線を逸らした。

……それはおそらく、彼の質問の内容をだいたい予測していたからだろう。

「こっちの情報によると、あんたはデビルバスターになって八年、今年二十六歳だと聞いたが」

「ええ」

「それで、独身なのか？」

「……ええ。それが何か？」

怪訝な顔のルネット。ギレット以外のナイトの面々が非難する目でレイを見たが、彼は全く意に介した様子もなく、言った。

「ああ。……旦那がいるのといないのとじゃ、口説き方にも差が出てくるだろう？」

「……」

「……」

「……」

ナイトの面々が“やっぱり”といった表情で無言のため息を吐く。ただ、ギレットだけは我関せずといった様子で腕を組み、じっとしているだけだった。

（というか、いても口説くことに変わりはないんだな……）

ルネットは何とも言えない顔でレイを見ていたが、ほんの僅かに不快そうな色がそこを過ぎたのはティースにも認識できた。

（そりゃ、なあ……）

彼女にしてみればレイは少し年下であり、デビルバスターとしても数年下の後輩である。そう考えてみれば、彼女が彼の――初対面としては失礼な言動を不快に感じたのは当然だろう。

「そんな心配は必要ないかと思います」

やがてルネッタがそう答えると、レイは僅かに口元を緩めて、
「ああ。独身なら何も心配ないな」

「……」

呆れた息を吐くルネッタは、それ以上は視線を外して何も答えなかった。

「そろそろいい？」

つまらなさそうにそれを眺めていたパトリシアが口を挟む。

だが、彼女の冷たい視線にさらされても、レイは自らのペースを乱さないまま、

「ああ。……こっちはいつ始めてもらっても構わないが？」

「……それじゃあ」

パトリシアは軽く咳払いのように喉を鳴らして、膝の上に置いてあつた紙の束を手にする。

「魔が最初に姿を見せたのは九日前の夕方のことよ。その夜、街で最初の犠牲者が出た」

「質問いいか？」

レイがさつそく手を挙げる。

「……どうぞ」

いきなり話を中断されて、パトリシアはあまりいい顔をしなかったが、それでも紙束から顔を上げて彼に言葉の先を促した。

「最初に現れた魔つてのは、人魔か？ それとも獣魔か？」

「人魔よ」

「そいつが現れたのが夕方。なのに、最初の犠牲者が出たのは夜。

……その時間差はなんだ？」

（あ、そうだな……）

それはティースも少し疑問に思ったことだった。ルネッタも少し興味深そうに話に聴き入っている。

パトリシアは頷いて答えた。

「最初に現れた人魔は一度、街人の抵抗にあって退散した。その直

後、手下の獣魔を使って街を襲わせたのよ」

「……なるほど」

レイとマイルズが一瞬だけ目配せする。

どうやら少し疑問が残ったようだったが、それ以上は何も言うことはなく。

続けてルネッタが口を開く。

「私も質問、いいでしょうか、パトリシアさん？」

「どうぞ」

「その人魔は上位族らしいと聞いたのだけれど、姿形をしっかりと記憶している人はいますか？」

「いいえ。その魔はフードをすっぽりと被っていたから、顔までは」

「じゃあ、その魔が上位族以上だと予測したのはどういう理由から？」

「その後に見れた獣魔のランクから、私が勝手に推測したものよ」
勝手に、とは言ったが、パトリシアの返答は自信に満ちあふれたものだった。

それはルネッタも感じたのか、納得したように頷いて、

「あなたは確か、街の対魔調査機関で要職に就かれているとか？」

「ええ」

「それなら、その見解を信用させてもらってもよさそうですね」

そのルネッタの言葉に、当然と言わんばかりの顔をしつつパトリシアは手元の紙を一枚めくって続けた。

「その夜の犠牲者は六人。その中の二名は街の警邏隊員。その深夜から、街は厳戒態勢に入って、素性のはっきりしない者は街へ入れなくなり……あなた方も見たと思うけど、昼夜問わず、警邏隊が厳重な警戒網を敷くようになった」

その言葉にティースは疑問を覚え、尋ねる。

「どうして旅人まで完全に拒絶する必要があるんですか？ 魔かどうかだけを確認すればいいんじゃない？」

「……」

不審そうに顔を上げたパトリシアに、レイがすぐさま、

「ティース。それは俺が後で説明してやる。……パトリシア、構わず先だ」

「……ええ」

パトリシアはもう一度眉をひそめたが、これはおそらく呼び捨てにされたことへの無言の抗議だろう。もちろんレイは気に留めた様子もない。

（……な、なんか初歩的な質問だったのかなあ）

微妙に落ち込んだティースを余所に、話は続いた。

「それ以後も魔の襲撃は続き、これまでに計七回。述べ三十六名が死亡してる」

「三十六人……」

思わず呟いてティースが他の面々を見ると、パーシヴァルやマイルズはもちろん、レイもさすがに神妙な顔をしていた。

確かに過酷な任務の多いナイトではあったが、それでも小規模な魔の襲撃で、しかもこれだけ短期間のうちに三十六人も人間が命を落としているという事件は、そうそう多いことではない。

そんな彼らの反応に気付いたパトリシアが言った。

「これでもすぐ近くの街に応援を依頼して、被害を最小限に食い止めたつもり。……あなたたちのようなデビルバスターはあまりに数が少なく、招こうとしてすぐに、というわけにはいかないようだから」

少し非難するような口調だったが、それはもちろんレイやルネッタたちに罪があるわけではない。

「……聞かせてもらうが」

ドスの効いた低い声が響き渡って、パトリシアがギレットの方へ視線を向ける。

「警邏の連中もボーっとしてたわけじゃねえ。だったら、何匹か魔を葬ってるんじゃないのか？」

「魔はいくら傷ついても退散することはなかった。だから七度の襲

撃で七匹、全てね」

レイは口笛を吹いて、

「獣ども、よほど死に急いでいたんだろうな」

そんな彼の反応に再び眉をひそめたパトリシアだったが、

「そいつらの種族は？」

続いたギレットの言葉にすぐ視線を戻す。

「姿形から推察するに、地が一匹、炎が二匹、水が二匹、風が二匹。その中で六十台に属する魔が三匹、七十台に属する魔が四匹よ」

「間違いねえのか？」

「私がこの目で確認したから、間違いない」

「なるほどな」

ギレットとともにマイルズも頷いて、

「確かに、下位魔だとすると使役する数が多すぎるね。でもま、常識的に考えるならせいぜい上位魔ってところかな、隊長？」

「ま、将族ならもっとマシな奴らを使ってそうなもんだからな」

レイも頷いて、その後、パトリシアからそれぞれに配られた資料に目を通し始める。

それはもちろんティースの元へも配られた。

十枚近くにも及ぶそれは、ほとんどが被害の詳細な解説で占められている。

（一度目は九日前の二十一時頃……薄暗い路地から男の悲鳴。同時に奇妙な鳴き声。茶色の体毛、背骨の上のみに白い毛の生えた大型の魔が周囲の人々を次々に襲い、約三十分後、出動した対魔専門の警邏隊十六名の手によって退治。犠牲者は市民四名と、警邏隊員二名……いずれも首を鋭い牙で咬み千切られてほぼ即死——）

背骨上に白い体毛が生えた大型の魔。その特徴を持つものが“地の七十六族”と呼ばれる魔だということをティースは知っている。実物と戦ったこともあった。

だからこそ、この街を襲ったその惨状は、彼の頭の中で容易に再生される。

——鋭い爪と牙。

——逃げ惑う人々。

——運悪く捕まった男は、恐怖に怯え、自らを襲う獣の凶器に目を見開いて。

そして、視界に迫りくるのは、涎を垂らした獰猛な獣の牙——

「っ……！」

ティースは思わず目を閉じた。

首筋にはうっすらと嫌な汗を掻いている。

意識しないままに、下唇を噛んでいた。

——その後は、あまり想像しないようにして読み流していく。

三十六人。

(どうして……)

それぞれに想いがあって、それぞれに夢や目的があったはずだった。それは数字で表す以上に、重い。今のティースにはそれが嫌というほど実感できる。

そして、それを奪ったのは、やはり魔の者——

(どうして、こんなことが平気で……！)

そこに重なるイメージは、一人の魔の姿。

“タナトス”という魔の犯罪者集団に所属する、ザヴィア・レスターという名の、慇懃な快楽殺人者の姿だった。

「あー、っと。最後に確認しておきたいんだが」

一足先に全て読み終わっていたのだろう。レイが資料の束を脇に放って、パトリシアへと質問する。

「最初に姿を見せた人魔は、今は街の外にいるんだな？」

パトリシアは少し考えるようにしながら、

「そのときは間違いなく街の外に逃げていったから、知らないうちに侵入されていない限りは。さっきも言ったように、今は外部からの訪問者が市街に入ることも断っている状態だから」

「なるほど。……さて。それじゃあ」

レイの視線は次に、同じように資料を読み終えたルネッタの方へ

と向けられた。

「どうするんだ？ 共同と言っても、そっちにはそっちのやり方があると思うが？」

その問いかけに頷いて、ルネッタは逆に質問する。

「あなた方はどういう方法を取るつもりです？」

レイは即答した。

「敵さん、なかなか仕事熱心なようだし、そいつらを潰しつつ敵さんの出方を待つさ」

「それなら、行動を別にする必要はないでしょう」

「どうやら彼女も同意見のようだ。」

レイは笑みを浮かべて、

「それは有り難い。君と一緒に仕事ができるだけでも、ここに来た甲斐がある」

「……本当、冗談が好きな人のようですね」

「冗談かどうか後で確かめてみるか？」

「遠慮させてもらいます」

ルネッタは立ち上がって、そばにあった剣を手取る。

貴婦人然とした格好には似合わないと思ったが、不思議にそれを手にした瞬間、彼女の雰囲気が変わったようにティースは感じた。

それは静かな威圧感、とでも言おうか。

（……やっぱ、普通の人とはどこか違う）

「先に部屋に戻ります」

だが、凜とした口調でそう言った彼女に対し、レイは全く態度を変えることなく、それを見送りながら言葉を付け加える。

「ああ。あとで訪ねて行っても構わないかな？」

「……用事がある場合、でしたら」

眉をぴくりと動かして、ルネッタは部屋を出ていった。

今度こそ、機嫌を損ねたのは間違いなさそうだが、それでもレイは楽しそうな笑みを浮かべている。

続いて、パトリシアも席を立つ。

「じゃあ、私も失礼するわ。……あなた方の部屋は、さっき案内した通りよ」

まるで、ここにすることが時間の無駄とでも言わんばかりの態度でそう言うのと、

「口が達者なのは構わないけれど、それなりの働きもして欲しいものね」

その嫌みにも、レイはさらりと流して答えた。

「それは心配ない。美しい女性の望みを叶えることは、俺の最大の趣味だからな」

「……」

まるで興味のない視線を送り、そしてパトリシアも部屋を出ていった。

ナイトの面々に与えられた客室はそれなりの広さだったが、やはりミューティレイクの個室と比べると狭い。妙に明るかった応接室と違い、綺麗にはされているもののどこか微妙に古くさい雰囲気も漂っていた。

昼食を終え、今はそこにナイトの面々が全員揃っている。

「今回はなかなか手強そうだねえ」

「ああ。一筋縄じゃいかなそうだ」

レイやマイルズが話しているのは、一見今回の任務についてのようにも聞こえるが……“もちろん”そうではない。

「ま、デビルバスターになるような女だ。一筋縄でいく方が珍しいさ」

そんな二人の会話を、ギレットはつまらなさそうな顔で、パーシヴァルはちょっと興味ありそうにしながらもとりあえず口を挟む様子はなく、広場の露店で買ったらしい干し肉をかじっている。

昼食を終えたばかりだったのだが、どうやら彼にとってそれは“

「おやつ」らしい。

「ティースさんも食べます？　おいしいっすよ」

「あ、いや、俺はいいよ」

差し出された干し肉を断りつつ、ティースは眉をひそめてレイに質問した。

「そんなことよりレイさん、さっき――」

だが、彼が言い切る前に、

「魔ってのは、常に魔の姿をしてるわけじゃない」

「――え？」

突然の言葉にティースがびっくりした顔を見ると、レイは彼の方へ向き直って、

「なんだ？　街の厳戒体制の理由をしりたいんだろ？」

「……あ、そ、そうだけど」

「まだアオイから習ってないか？　魔ってのは、人間に姿を変えることができる。……だから、その魔が人間に姿を変えて街に進入する可能性を恐れてるのさ」

「あ」

それは確かにアオイの授業ではまだ習っていないことだったが、経験上、ティースはそれを知る機会があった。

が、それでも少し怪訝な顔をして、

「でも、いくら人間に姿を変えたって、見ればわかるんじゃない？」

「パトリシアが言ったのを聞いてなかったのか？　魔はフードをかぶっていて、その姿形をしっかりと記憶してる者はいない……そう言うってたどろ？」

「あ、なるほど……」

納得顔のティースに、レイは自らの耳を軽く指先で叩いてみせると、

「ついでだから覚えておくといい。魔が人に姿を変える方法は三つだ」

耳――そこは、人と魔を見分けるのにもっともわかりやすい場所

だ。逆に言えば、人と人魔の外見的な違いとは、ほぼその程度のものでしかない。

「一つ目はローリスク、ローリターン。魔力を使っただけ、かなりシビアな時間制限付きの変身だ。得手不得手はあるだろうが、その技に優れた将族クラスでも、せいぜい一時間が限度と言われてる。……が、それでも正体を隠して街に侵入するぐらいは可能だ」

マイルズが付け加える。

「実際、いつだったかファナさんを襲った……ティースくんに助けられたときのあの連中も、その方法といくつかの偽装を使ってネービスに入っただろうしね」

ティースは頷く。それは彼の知っている方法だった。

頷いて、レイは続ける。

「二つ目は魔力のこもったアイテムを使って姿を変える方法だ。モノによっては数日の効果をもたらすものもあるが、こいつの欠点は、人間の姿でいる間は魔力を行使できないことに加え、効果が切れるまで自分の意志で元の姿に戻れないし、いくつかの特殊な方法でその偽装を見破ることもできる。……だから、使われる場合はごく限られている」

「……」

魔力が使えないというのは、魔にとってはもちろん致命的なことである。特に、何らかの目的を持って姿を変えている魔の者であれば、なおさら。

興味深そうに聴き入るティースに、レイは一度言葉を切ってから、

「ラスト……三つ目はハイリスク、ハイリターン。刻印型の破魔具

おぼろ

“朧”だ」

「朧？」

ティースにとっては初めて耳にする単語だった。

「ああ。条件は厳しいが、半永久的に人の姿でいることができる上、魔力も行使できる、見破る方法もほぼ皆無って代物さ」

「半永久的って……」

口から驚きの呟きが漏れる。

もしそれが本当ならとんでもない代物だった。魔が、普通に人の世界に溶け込んで、その上で、いつでも人を遙かに上回るその力を行使できるということなのだから。

だが、もちろんそんな便利なものが、そうそう存在するはずもなく。

「魔力は……そのままで？」

ティースの問いに、レイは頷いて、

「それが条件その一さ。魔力は行使できるが、かなり制限される。およそ五分の一ほど……目安としちゃ、上位族なら下位族を確実に下回る程度、将族でもやはり上位族と下位族の間ぐらいまで制限されちまう」

「じゃあ五分の一って、かなりのの……」

「ああ。下位魔が使おうもんなら、人間と大差なくなるだろうな」

「……」

そんなものを使う魔がいるのか……そう質問する前に、レイは表情からそれを読んだのか、

「ああ。実際に使用された例がいくつかある。……ま、それはあとの話だ」

薄い笑みを湛えたまま答え、続けた。

「条件その二は“身請け人”となる人間が必要だってこと」

「身請け人？」

「“朧”は身請けをする人間と、その効果を望む魔の者の合意によって初めて効力を発揮する。それは基本的に、身請けした人間が死ぬまで続く……が、こいつは強制ではなく誓約によって効果を発揮するタイプでな。魔が自分の意志でそれを破り、元の姿に戻ることは可能だ。ただし、その場合は漏れなく“死の制裁”がついてくる」

「……」

ティースは頭の中で整理することにした。

まず、“朧”というのは、魔を半永久的に人間の姿にとどめるアイテムだということ。

朧によって姿を変えた魔は、魔力を行使できるがその力は極端に制限されること。

朧の効果を得るには、“身請け”をする人間が必要で、その人間と魔の双方の合意が必要であるということ。

その効果は身請けした人間が死ぬまで続くこと。

そして“死の制裁”

「……一度姿を変えた魔が、元の姿に戻るとしたら死ぬしかないってことか」

「いや、もっと簡単さ」

レイは笑って答えた。

「安全に元の姿に戻りたければ、身請けとなった人間を殺せばいいだろ？」

「……」

それは確かにその通りだ。

だが、身請けとなる人間側にもリスクがあるとすれば、ますます疑問だった。

「実際に使用された例があるって言ってたけど、本当に……？」

「魔と人間の間に子供ができるのは、お前も知ってるだろ？」

「え？ あ、ああ」

突然話の趣旨が変わって困惑したが、ティースは頷いて、

「実際、そういう子供がたまにいらっしゃるけど……」

「ああ。そのほとんどは、魔の男と人間の女の間に産まれる子供だ。……つまり、産む方にしても望まない子供でな。あまり大きな声じゃ言われんが、ほとんどが産まれる前に殺されちまう」

「……ああ」

その理由は言われずともわかった。

「だから、この世界で生きている“魔と人間の雑種”ってのは、何らかの手違いや勘違いで生まれ、そのまま育てられた者か、あるい

は捨てられてそれでも運良く生き延びた子供。……それともう一つある。わかるか、ティース？」

「……」

ティースの脳裏には一つの可能性が浮かんだ。

それは彼としては決して否定できない可能性だったが、レイが言った“もう一つ”がそれであるかどうかは自信がなかった。

だが、レイはまるでその返事を得たかのように頷いて、言った。

「そういうことだな」

「え……」

「つまり、基本的にさっき言った奴らとは全く別。“望まれた”子供のことだ」

その言葉の意味するところは、ティースにもよくわかる。

だから今度は、彼の方から口にした。

「それって、人と魔が――」

「ああ。そこで臍に繋がる。……つまり臍ってのは基本的に、何らかの理由で人間と生活を共にする決意をした魔と、その魔を受け入れようとする人間の間で交わされる誓約のアイテムなのさ」

ティースは信じられない思いで、

「……そんなことが、本当に」

「臍によって姿を変えた魔は、人間と区別がつかない。魔力を行使したとしても――」

レイは脇に置いてあった自らの武器“夜叉”に触れて、

「こういった特殊な破魔具の効果だと言い張ればそれで済む。だから、たとえば俺が臍で姿を変えた魔でもおかしくはないし、それは誰についても同じことが言える。それは本人と身請け人にしかわからないことなのさ」

「……」

思わずティースはレイを見つめ返した。

「言っとくが、俺は違うぜ」

レイは苦笑しながら、

「今回の件とは関係ない方向にズレちゃったが、ま、そういうことさ。デビルバスターとしては、覚えておいて損のない知識だ。……中には、何か企んで臙を悪用する奴らもないわけじゃないからな」
「わかった。覚えておく」

……臙。

今日この場で耳にしたそのアイテムの様々な知識が、後々、あらゆる意味で自分に深く関わってくることになるなどと、このときのティースは予想もしていなかった。

そして、その日の夕方。

——フォックスレアの街には悲鳴と、怒号が溢れていた。

「……！」

なんとも形容のし難い鳴き声とともにオレンジ色に染まる地面を蹴ったのは、まるで巨大な団子虫のような形の生き物だった。

体長は一メートル程度だろうか。表皮は油のようなものでテカっており、その表面には無数の棘のようなものがついている。

地の七十二族。

彼らは体を丸め、回転しながらの体当たりで獲物を切り裂くのを得意としている魔だ。

それを向かい合うように立つのは、取っ手のついた棒を両手に携えた少年。

パーシヴァルⅡラッセルだ。

「よっ……と」

まるで緊張感もなく、パーシヴァルは右手の棒——トンファーを

クルリと回して、凶器の固まりとなった地の七十二族へ自ら突進していく。

——距離が狭まる。

瞬間、パーシヴァルの目が細くなった。

「はあああつ!!!」

右手のトンファーが唸りを上げて正面から地の七十二族に打ち付けられる。

ただその表皮は堅く、容易にはダメージを与えられない。

——そのはずだった。

だが、

「……」

地の七十二族はその動きを停止していた。

濁った血が、表皮の隙間から流れ出す。

——パーシヴァルのトンファーは、回転する魔の表皮……その継ぎ目を正確に捉えていたのだ。

達成感を浮かべたその口から、眩きが漏れた。

「……まず一匹」

そこから少し移動した場所。

家の壁には血を流しながら倒れる女性がいる。その女性のそばですすり泣くのは、四、五歳ぐらいの男の子と、それより少し年上ぐらいの女の子。

おそらくは親子だろう。頬のコケた母親は目を開いたまま天を見上げている。

死んでいるのは誰の目にも明らかだった。

旦那は不在なのだろうか。あるいは、子供を置き去りにして逃げたのか。それはこの状況ではわからないことだ。

「……」

そんな親子に背を向け、立っている男がいる。

無愛想な表情。片目を閉じ、左手にはつるはしのような形の武器

を携えている。

ギレットⅡフレイザーだ。

その彼が片目で見据えているモノ。

「ゲエエ……」

聞くだけで不快になるような粘着質の鳴き声を上げ、ヌメヌメした体の皮膚がより一層悪寒を増幅させる。

水の六十一族。体の大きさは成人男性と同じぐらいだろうか。ギョロツと飛び出した目、ずんぐりとした体はまるでカエルのような。その大きな口からは、三本の長い舌が見え隠れしている。それが、女性の命を奪った凶器だ。見た目以上の質量を持ったその舌は、大人の男性が繰り出す棍棒の一撃ぐらいの威力を軽く秘めている。

しかも——それが三本、とてつもない速さで——

だが、右から飛んだ高速の舌を、ギレットの片目は造作もなく捕らえた。

「ゲエエエエツ！！！」

左手のピックが、風とともに魔の舌を切り裂く。ピンク色の物体が宙を舞い、地面に落ちた。

立て続けに、二つ、三つ。

「ゲ……ゲエエ……！！！」

魔はあっという間に丸腰になっていた。

そのときになって、ようやく相手との実力差を悟ったのだろう。

——だが、すでに遅い。

「ガ……ゲゲゲゲゲエエエツ……！！！」

肉を絶つ感触。ずんぐりとした腹が裂け、そこから気味悪い色の臓物と、緑に近い色の体液が噴き出した。

「……」

ギレットの手はさらに容赦なく、色を失いつつあった魔の両目を貫く。

……無愛想なその瞳に、明らかな憎しみの色。

徹底的に、完璧に魔が息の根を止めたのを確認するまで、彼の攻

撃は続いた。

街の中心部。いつもは露店で賑わう大きな広場。そこもまた、今は戦いの舞台となっていた。

崩れた店の残骸。用を為さなくなった手押し車。

「あっ……ああっ……！ 誰か……誰か、助けて……早く、早く……っ！！」

切羽詰まったような苦痛の声。

「ああ、大丈夫だ。もう大丈夫だから安心して、僕を信じて、少し我慢するんだ」

地面にうずくまる少年の元に白衣を翻すマイルズがいた。少年は頭から血を流し、苦痛の声を上げ、その手はまるで何かを探すように宙をさまよう。

「姉ちゃん……姉ちゃんは……っ！」

「心配しなくていい。君のお姉ちゃんも無事だ。僕たちが来たから、もう大丈夫だ」

白衣には彼のものと思われる血がベツトリと大量に付着している。マイルズは懷から白い粉のようなものを取り出すと、それを少年の口に含ませた。

「さあ、呑んで。少しは痛みが楽になる。舐めて、溶かして、流し込むんだ」

「あ……ああ……」

少年の顔がようやく和らぐ。

「アア……アアア……ッ……！！」

その背後で、獣の悲鳴が響き渡り、ボトリと、首のようなものが地面に落ちた。

「どうなってやがる」

自らが葬った獣魔の体を蹴り飛ばし、レイは誰に言うともなく呟くと、

「敵さん、いきなり総力戦のつもりか？ ……マイルズ」

少年の苦痛のうめきはいつの間にか止んでいる。

「……」

レイの視線の先で、マイルズは血で真っ赤に染まった白衣を揺らして振り返った。

「そうかもしれないね」

その手が少年の顔を撫でる。

「確認できただけで十匹。犠牲者は……この子と、そっちの女性を含めて二十一人」

右腕と右足の千切れ飛んだ少年は無惨な姿をさらしながら、それでも今は安らかな寝顔を浮かべている。

それだけが、救いだった。

マイルズは少年の遺体を抱え、そばにあった女性の骸の脇へ横たえると、二人の手をしっかりと繋いだ。

微かに、睫毛が震える。

「実際にはもっと犠牲者が出ているはず。でも、ようやく敵の数も減ってきたようだ」

「……」

そんな彼の行動を黙って見守っていたレイだったが、やがて視線を動かし、

「なら、全部潰して、一気に黒幕を引きずり出すとするか」

「ああ……了解、隊長。これ以上、好き勝手させるわけにはいいかないからね……」

マイルズは二人に向けて軽く十字を切り、そして次の場所へ向かうのだった。

ティースはルネッタとともに行動している。

——パチパチという音とともに、辺りは真っ赤に染まっていた。

「くうっ……!!」

彼が相手にしていたのは“炎の六十八族”と呼ばれる体長一メートルにも満たないネコのような形の魔だ。

警戒すべきは素早く柔軟な動きと、時折口から放たれる熱の息。それほどの殺傷能力を持たないが、顔などに浴びると視界が失われる危険がある。

とはいえ、所詮は六十台に属する下級の魔。五十台の獣魔とも渡り合えるだけの実力を身につけているティースにとっては敵ではない。

その、はずだった。

だが、

(こ……こいつ、本当に六十台なのか……!?)

ティースは未だ、その魔の動きを捕らえきれずにいた。動きに翻弄され、時折襲いかかる爪や炎の息で、ところどころに軽傷を負っている。

狙いを定め、剣を振り下ろす。

だが、すんでのところで横に避けられ、無防備なところに魔が飛びかかった。

「ちっ……!」

反射的に剣を振るったが、間に合わない。

「つうっ……!!」

右腕に焼け付くような痛み。

咄嗟に体をひねったおかげで直撃は免れていた。

そして、その一撃を避けたことで、ようやく勝負は決する。振り向きざま振るった彼の剣が、地面に着地した瞬間の魔を捕らえたのだ。

腕に伝わった感触は明らかな手応え。

その一撃が致命傷となった。

(ルネッタさんは——)

地面で動かなくなった魔を見下ろし、肩で大きく息をしながらティースが視線を移動させると、ルネッタは同じタイプの魔を三匹同時に相手しているところだった。

——いや、“相手している”という表現は正しくないかもしれない

い。

戦っている……そう思った次の瞬間、

(あ——)

すでに勝負は決していた。

そこから一步も動くことなく。細長い剣が無駄なく閃いて、無造作にも見える一撃一撃の全てが、確実に、音もなく三匹の魔を葬り去る。

一匹に一撃ずつ。あまりにも正確無比な、無駄のない攻撃。

「……」

無言のまま血を払って、ルネッタがゆっくりと身を翻す。

(この人……)

その瞬間、ティースの体は戦慄に震えた。

(……強い。もしかしたら、レアスくんやアクアさんよりも——)

「苦戦したようですね。大丈夫ですか？」

あまりにも強烈な今の芸当を見てしまったせいだろうか。ルネッタの言葉は、その氣遣う内容とは裏腹に、どことなく冷徹に聞こえてしまった。

ティースは我に返ると頷いて、

「え、ええ。すみません、足手まといで……」

「いいえ。仕方のないことです。……行きましょう。次の犠牲者が出ないうちに」

「……」

その言葉が、その場の陰惨な状況を彼に思い出させた。

「水だっ！ 水を持ってこい！ ……早くしろ!!」

「……誰かつ！ 誰か来てえええっ!!!!」

背後ではたくさんの家が燃えていた。

人々の悲鳴、怒号。

地面に倒れ、苦しむ男。

燃えさかる家の前で、狂ったように泣き叫ぶ母親。

絶望の表情で座り込む子供。

「……」

ギリツと奥歯を鳴らして、ティースはルネッタの後を追った。

そして約三十分後。

多大な犠牲を払いながら、街に現れた魔のほとんどがようやくその活動を止めた……まるでそのタイミングを狙っていたかのように。何者かの一つの叫びが、人から人へ伝わって、そして彼らの耳にも届いた。

——現れた、と。

フードとローブに身を包んだその魔の者は、自らの歩みを妨げようとする警邏隊員をその圧倒的な魔力で軽く追い払い、街の中へと足を踏み入れていた。

大柄。ティースと同じぐらいはあろうかという長身だ。その顔はフードで完全に隠れており、体もローブで覆われている。

中の敵と、外からの侵入者。

街は今、まさに混乱の極みに達しようとしていた。

「……」

魔は駆け足に近い速度で、街の奥へと向かっている。その方角は、デイバーナ・ナイトの面々が駐留するラムステッド邸のある方向。

いや、その人魔は間違いなく、何らかの意図を持ってそこへ移動していた。

——と。

その正面から、一人の少女が駆けてくる。年の頃は七、八歳だろうか。

「た……たすけ——！」

その後ろには一匹の獣魔。比較的動きの遅い、だが少女の足よりは間違いなく速い、ずんぐりとした体型のナメクジのような形——“水の七十五族”と呼ばれる魔だった。

粘着質の体は酸を纏っている。一瞬で溶かすほど強い酸ではないが、彼らはそれで捕らえた獲物を食する。

少女のような小さな存在は、彼らにとっては絶好の獲物だった。

「！」

そこで少女の瞳が、目の前からやってくるフードの人影に気付く。

「たっ……たすけてえええええっ！！」

少女がもしも大人だったなら。

あるいはあらかじめ予備知識があったなら。

決してその人物に助けを求めはしなかっただろう。

——それは、化け物に囚われ生きながら溶かされるか、あるいはひと思いに——おそらくはその程度の選択。

そしてそれが少女にとって吉だったか、それとも凶だったのか。

フードの魔の者は足を緩め、そしてその視線を少女へと向けた。

「……！！」

そしてようやく、臆気ながらに少女は悟る。自分が助けを求めた人物が、何者であるかを。

ローブが微かに踊る。

その場に正常な判断能力を持った第三者がいたとして、その者がごく平凡で何の取り柄のない人間だったとしても、その“変化”にはおそらく気付いただろう。

肌に触れる空気が、急にその密度——いや、湿度を増したことに溢れ出す、圧倒的な魔力。

「あ……あ……っ！」

少女は足を止めた。

涙を一杯に溜めた瞳を、これ以上ないほどに、大きく、大きく、見開いて。

ガクガクと膝が震える。

もう走れない。逃げることはできない。

——少女は知っていた。その力を行使する者が、人ではないことを。

そしてそれが、どれだけ残酷な存在であるかということ。

「あああああ……っ!!」

少女の絶望の叫びは、大きく、大きく、響き渡って。

同時に放たれた圧倒的な魔力は、そこにあった生命をいとも容易く葬りさっていた——

その4『縁の暴君』

街の警邏隊も、たまたま街に逗留していた腕に覚えのある若者たちも、もはや誰もその人魔の進行を妨げようとしないうや、できなかった。

遠くから射た矢も、不意打ちで背後から放った一撃も。

その全てが、その者の体には届かなかった。

見えない壁——“魔力の壁”

もちろん、彼らの攻撃は破魔具によるものだった。が、そのことごとくが、その者には通じない。

——まさか。

腕に覚えのある一人は、そう思った。

彼は自らの聖力に自信を持っていた。事実、彼はデビルバスターの称号こそは持っていなかったが、ちょっとした依頼で低級の魔を退治したことはあったし、聖力は常人の倍以上軽くあると言われていた。

その彼に破れなかった、魔力の壁。

下位族ではあり得ない。上位族だとしても、少々考えづらい。

魔は彼を一瞥しただけで、まるでそれが路傍に転がる石であったかのように無視して立ち去った。

圧倒的。

まさに圧倒的な力。

決して小心ではないはずのその男は、それを感じて思わず地面にへたり込んだのだ。

誰も阻めない。誰にも止められない。

そのはず、だった。

「……どこへ向かうつもりだ？」

だが、それを阻む者が、その街にいた。

「この先は通行止めだ。特に、お前のような無粋な男は、な」

無造作に伸ばされた黄土色に近い金髪が風に揺れる。口元には笑み。だが、その目は視線の先の魔を油断なく見つめている。左手に持った半楕円形の剣を無造作に下ろし、右手に持った同じ形の剣は肩に乗せて。

「……」

魔は無言のまま、フードに包まれた視線が動いて、その場にいたもう一人へと向けられる。

「覚悟することですね。ここに姿を現したのが、あなたの運の尽きです」

そこにいたのは長い髪の女性。右手にはレイピアのように細長い剣。半身に構え、斜め下に下ろした剣先は微かに円を描いていた。

レインハルトⅡシュナイダーとルネッタⅡフィッツシャー。

前者はディバーナ・ロウの誇る最強チーム、ディバーナ・ナイトの隊長。

後者はこの地方に名を馳せた有能な女性デビルバスター。

——この二人を前にしては、どんな魔であっても先に進むことを躊躇うしかなかった。

「……」

事実、それまでほとんど歩みを止めなかった人魔は、初めて足を止め、警戒するような視線をフードの奥からその二人に向けている。もちろん、二人の実力を察したからだろう。

今までとは違う。……彼らはあるいは、自分の魔力の壁を破るかもしれない、と、そう感じたのだ。

だから動かない。

ただ……それは、レイとルネッタの方もまた同様だった。

「どう、思う？」

「……」

問いかけに、ルネッタは一瞬だけ彼を見て、そしてすぐに視線を

正面に戻した。

「上位族程度では……ありませんね」

レイは満足そうに頷いて、

「君と俺はどうやら相性がいいようだ。価値観の一致ってのは、男と女が仲良くなる上じゃかなり重要なことだからな」

「……」

ルネッタは答えず、ただ黙って魔を見据えている。

動く気配はない。

「他の連中を救護に回して正解だ。こりゃ、俺と君以外は立派な足手まとい——」

言いかけて、ふとレイは怪訝な顔をした。

（……なんだ？）

ルネッタの表情。そこに“何かを待っている”ような色を感じたのだ。

そして一瞬の思考の後、僅かに表情を険しくして問いかける。

「そういや……ティースの奴がいないな。君と一緒にじゃなかったのか？」

「ええ」

視線を動かさずに、ルネッタは答える。

「彼ならいます。すぐ、近くに」

「近く？」

レイの顔が厳しさを増す。

「まさか」

再び魔へと向けた視線の、その先。

——そこにティースの姿があった。

路地の陰から……今まさに、魔の無防備な背中に飛びかろうとしていたのだ。

（……この女——）

隣の涼しげな顔に、レイは思わず唇を噛んだ。

（あいつを囮に使いやがったか……!）

制止する間もなく。

ティースの体は路地から踊り出た――

ティーサイトⅡアマルナの心臓の鼓動が激しくなる。体が熱くな
って、首筋にはべっとりと汗を掻いていた。

遠くからは人々の悲鳴、怒号。

空には幾筋かの煙が立ち上っている。

……ごくり、と、喉が鳴った。それさえも、うるさくて仕方がな
い。

狭い路地に無造作に置いてある荷物の陰。身を隠すには絶好の場
所だ。

たった今、路地の前を通り過ぎた魔は、彼に背を向けたままで立
ち止まっている。その視線の先には、おそらくレイとルネッタがい
るのだろう。そこに集中しているせいか、おそらくティースに存在
には気付いていない。

チャンスだった。

（こいつが――）

荷物の陰からゆっくりと身を乗り出して、彼の視界にも魔の背中
が映る。

ネズミ色のローブに同じ色のフード。細身だが背は高く、ティ
ース自身と似たような体型だろう。だが、中にいるのは彼とは似ても
似つかない。罪のない人々を大量に虐殺した、許し難い“悪”。

（許せない……）

胸に溢れる怒りとともに、ティースの脳裏に重なったのは、いつ
かの光景。

サイラスⅡレヴァインを助けられなかった日のこと。

ナナンⅡトリストラムが無惨な姿で見つかったときのこと。

（許せない――）

そして今日。

嫌というほどに見せられた、あまりに酷く、あまりに残虐な行為の数々。

（もう……迷わない……！）

汗ばむ両手に力を込める。

愛剣“細波”が微かに震える。

迷う必要など一つもないと思えた。

（サイラス……ナナン……俺は——）

ピタリ、と、その震えが止まる。

（こいつを倒して！　そして君たちのことを吹っ切ってみせる！）

集中力が研ぎ澄まされた。

いつかと同じ——風の将、ザヴィアールレスターの魔力の壁を打ち破ったときと全く同じ感覚。

細波の刀身が艶やかさを増す。

魔の意識は、完全にレイとルネッタに向けられている。ティースの存在にはおそらく気付いていないだろう。

折しも吹いた、緩やかな風とともに。

ティースの体は路地を飛び出した。

「——」

音もなく。

魔との距離は、僅かに数歩。

周りの景色も。音も。

何も感じない。

ただ一点。

無防備な魔の背中に向かって、細波を突き立てるべく、ティースは翔けた。

「っ……！？」

魔がようやく微かな驚きの声を発して視線の方向を動かす。

だが、ティースは確信していた。

（もう、遅い——！）

たとえ相手がどのような瞬発力を発揮したとしても。あのザヴィアほどの動きを見せたとしても、もう避けることはできない。

圧倒的な破壊力を込めた細波の切っ先は、魔の体を確実に捕らえるだろう。

急所は外されるかもしれない。だが、ティースの頭はそんな余計なことは考えていなかった。

ただ無心に。

細波を、突き立てる。

極限の集中と、そして絶妙な奇襲によって、全ては彼の思惑通りだった。

「あああああ——っ！！」

「っ！！」

ティースの叫びとともに、細波の切っ先が振り返った魔の背中——左脇腹の辺りに吸い込まれていく。

熱くなる体。

鈍い感触。

そして——

「——な！？」

驚愕。

「なんだって……っ！！」

肩の関節と手首の骨が僅かに軋む。行き場のなくなったエネルギーが、ティースの両腕に真っ直ぐに跳ね返ってくる。

——そこにあったのは、覚えのある感触だった。

（魔力の……壁！？）

細波は、止まっていた。

振り返った魔の、体の直前で。

「馬鹿な……そんな馬鹿なッ！！」

それは信じられない出来事だった。

確かに、彼は“集中”していたはずだった。そして間違いなく、細波は彼の期待する破壊力をそこに秘めていたはずだった。あのザ

ヴィアの壁を破ったときのように。

じゃあ、何故？

ティースが思考していられたのはそこまで……わずか半瞬ほどのこと。

「！」

魔の体から、反射的に魔力が迸った。

左腕を薄い膜のようなものが包んだかと思うと、破裂して無数の水滴がティースに向けて飛んでいく。

もちろん、避ける余裕などなかった。

「くっ……！！」

無数の飛礫を浴びながら、ティースの体は魔から離れる。

幸いだったのは、それほど威力のある攻撃ではなかったことだろう。彼の体が離れたのも、吹き飛ばされたのではなく、危険を感じて自ら地面を蹴ったためだ。

だが、その直後、

「っ……！？」

二度目の驚きの声が、人魔の口から発せられた。

——それはおそらく、全て彼女の計算通り。

ルネッタⅡフィッシャーは、魔の意識がティースに向けられるその一瞬を待っていた。

もちろん彼が魔を倒せると思っていたわけではない。デビルバスターではない彼に、これほどの魔の壁が破れるとは最初から思っていなかった。

ただ、彼が少しでも魔の意識を引き寄せてくれれば。そうすれば、自分が一撃でカタをつけてみせる。

そして、全ては彼女の予想通りに進んでいた。

予想外だったとすれば、魔がティースを仕留め損なったことぐらいだが、それは彼女にとって悪いことではない。罠に使ったとはい

え、彼女は別にティースに恨みがあつたわけではなく、死んで欲しいと思つていたわけでもない。

ただ、利用できそうだったから利用した。それだけのことだったから。

——ルネッタは女だったが、男のデビルバスターと比べても実力的にヒケを取るところはなかった。確かに非力であることは否定しようもないが、聖力はデビルバスターとして恥じることはないレベルで備えていたし、“集中”もかなりの高いレベルで習得している。技術に関しては言わずもがな。その“一撃”の正確さは数多くのデビルバスターの中でも一目置かれていたし、実際、彼女を相手にして『必ず勝てる』と断言できる人間は、大陸広しと言えどもほんの一握りだろう。

デビルバスターとしても、おそらく中堅以上。

その細身の剣は、確実に魔を捕らえる。

ティースよりも鋭く、正確な一撃が、魔の体に吸い込まれる。

……だから、その結末を予測したのは、おそらくその場にただ一人。

「とんでもない」

呟いたのは、レインハルトⅡシュナイダーである。

重なった二つの影——ルネッタと人魔の姿を、視界の中心に捕らえながら。

口元には笑みが張り付いていた。

「とんでも、ないな」

その光景は、彼にとっては想像の範疇だった。

レイはティースの聖力の高さを同僚のアクアから聞いて知っている。そして今、魔に飛びかかった彼の破魔値が“集中”によって高められていることも見て取った。一瞬、そのまま彼が魔を倒してしまうのではないか、と、そう考えたぐらいだ。

その一撃にはここ最近で見られたような迷いが微塵もなかったし、魔は確かに避ける余裕はなかっただろうから。

だから、彼の一撃が魔力の壁に阻まれたときに、レイは確信したのだ。

おそらく、ルネッタの一撃もまた、同じものに阻まれるだろう、と。

「……」

レイは自分の体が微かに熱くなるのを感じていた。

——らしくない。

彼が自分でそう認めてしまうほど、心臓の鼓動が速くなっている。ルネッタは、おそらく信じられない表情でその“結果”を見つめているだろう。

デビルバスターである彼女にとって、自分の攻撃が魔力の壁に阻まれるということは、ひどく屈辱的なことであると同時に、もう一つの事実を意味している。

それは……自分の力が通じないほどのその相手が“一体何者であるか”ということ。

ルネッタの体が、魔から離れた。

おそらくはティースと同じように、軽い攻撃を受けたのだろう。やはり大きなダメージを負った気配はない。

(こいつは……腹をくくる必要があるかも、な)

レイの口にはやはり笑みが張り付いていた。

別に楽しいわけではない。緊張しているのだ。

彼の目の前にいる魔。

それはおそらく、将族でも常識外れなほど高い魔力の所有者か。あるいは――

(魔王降臨……ってどこか)

“王族”

常識的な範囲では戦うことが想定されていない、そういう存在。レイもそれを目の当たりにするのは初めてだった。

自分の力が通用するか、否か。

——自信はある。だが、確信はない。

（見たところ水族か……水族との相性はあまり良くないんだが、な）
今度は意識的に苦笑して、そしてレイは二刀“夜叉”を構えた。

「……」

ルネッタは動けない。ティースもまた、ルネッタの一撃が届かなかったことに驚いているのだろう。動かないまま。

もう、彼らには戦う資格すらなくなったのだ。

その場に残された希望は、ただ一人。

肝を据え、レイは一步踏み出して、魔に問いかけた。

「お前、王族、だな？」

「……」

魔の視線が彼を見る。

レイは緊張感を漂わせながらも、自分のペース——いつもの、どこか飄々とした口調で続けた。

「なんの気まぐれでこっちの世界に現れた？ 人間ごときを殺して楽しいのか？ お前ら王族は、そういうことにはあまり興味がないって聞いていたが、な」

「……楽しい？」

「！」

レイは驚く。

——返事があったこと自体も、それはそう。

だが、それ以上に——

「それは、私が聞きたいことです」

「……女、か？」

レイは目を細めた。

おそらくは彼と同じかやや大きい……百八十センチ以上は確実。その身長からはおそらく誰もが男だと想像するだろう。

だが、深いフードの奥から発せられた声はそのイメージからほど遠い、若干低く落ち着いた、それでも男性ではあり得ない、紛れも

ない女性の声だった。

確かにフードで顔は見えない。ローブで体の線も見えない。女性であることを否定できる材料はない。

それでも、その事実は驚きだった。

「あなたたちは、こんなことが楽しいのですか？」

レイは驚きを隠すように戲けて答える。

「少なくとも、あんたみたいな化け物クラスと戦うのは好きじゃないな。若い女だってんなら、なおのことだ」

魔は小さく首を横に振ると、

「……今はそこを通してください。そうすれば、私はあなたたちを許します。これ以上、手荒な真似はしたくありません」

レイが目を細める。

「ほう、面白いことを言うな。何を許すというんだ？」

「あなたたちが忌み嫌い“魔”と呼ぶ存在。……でも、彼らだって生きているですよ」

答えて、一步、レイの方へと足を踏み出した。

「彼らの命を弄び、踏みにじるあなたたちの所業は到底許せません。でも、今はそれどころでは——」

「ふっ……ふざけるなアアッ！！！」

その言葉に激昂する。

——いや、激昂したのはもちろんレイではない。

「貴様が……ッ！ 貴様らが言えたことかッ！！」

ティースだ。

立ち上がり、一度は消えかけた戦意をそこに漲らせて。

「……？」

怪訝そうに振り返った魔に、ティースは両手で握った細波を構える。

せっかく自覚した“絶対に敵わない”という冷静な判断を、怒りの感情が上回った故の行動。

彼はそういう人間だった。

そして、叫ぶ。

「命を弄んでいるのは貴様の方じゃないかッ！ この街で一体どれだけの人が死んだか！ みんな、みんな、生きて、一生懸命に生きて、生きた証を刻もうとしていたんだッ！！ それなのに……それなのに……ッ！！」

その目に、うつすらと涙が浮かぶ。

剣を握る手が震えた。

そのまま、涙に濡れた目に憎しみを込め、ぶつける。

「貴様は、その、全てを奪ったんだ！ その重みが！ 痛みが！ 貴様らにはどうして……どうして、わからないんだアッ！！」

「え……？」

ティースの怒りを正面から受けて、魔は意外にも動揺したような声を発した。

「……まさか、あなたたちは」

それは、確かに奇妙な呟きだった。

だが、その言葉は怒りに打ち震えるティースの耳には届いていない。

手にした剣——細波が振動する。

その口から、咆吼にも似た叫びが響き渡る。

「だから……貴様らはッ！ 貴様のような奴はアアア——ッ！！」
地面を蹴ったティースに、魔は明らかに慌てたような声色の言葉を発した。

「ま……待ってください！ まさか、あなたたちは知らな——！」

だが、その瞬間。

「っ！？」

魔は“それ”に気づき、振り返って地面を蹴る。

直後、一閃——そして、もう一閃。

とてつもない質量の攻撃が、その立っていた場所を抉る。

レイの一撃だった。

「っ……」

飛び退いた魔のフードの奥から、微かに痛みの声が漏れる。切り裂いたローブから、右腕が覗いていた。

白い肌に血が滲み、そして一筋、流れる。

「ちっ……」

舌打ちして、レイは足を止めた。

立て続けに攻撃しなかったのは、もちろん彼なりの理由があり――「ああああああ――っ！！！」

代わりにティースの剣が、飛び退いた魔へと襲いかかっていく。

「……っ！」

さすがに危険を感じたのか、魔の全身から魔力が溢れた。

――溢れた？

いや、その表現では生ぬるい。

「なっ……！！？」

強烈な圧迫感。

それはまるで、噴火のようだった。

信じられない質量の魔力がその体から噴き出す。

「くっ……！！！」

攻撃ではない。ただ、体の周りを魔力が覆っただけだ。

だが、ティースの足は止まった。

止めざるを得なかった。

（こんな……っ！！）

近付けないのだ。見えない圧力に押されて、足が前に進まない。

（信じられない……ッ！　こんな――！！）

直後、レイが彼の横を走り抜ける。

「ティース！　お前は下がってろ！！」

「……レイさん！」

「！」

その一瞬だけ、魔力が弱まった。

「あ――」

「手こずらせないでくれよっ……！！！」

魔力の波に逆らい、手に持った二刀——夜叉で、魔力の渦を切り裂くようにして、レイの体は魔に向かって一直線に飛んでいく。

「待って……っ!!」

もう一度、魔の口からその言葉が漏れた。

「あなたは——っ!」

だが、それを遮って、レイの呟きが風に乗る。

「二体の夜叉よ……暴悪の拳を振るえ——」

夜叉は、唸り声を上げた。

まるで地獄の獣が威嚇しているかのように。

それが剣であるとは到底信じられないような、とてつもない質量を纏って。

——それは渾身の一撃。極度の集中と、極度の体力を消費するために、そう易々とは放てない、必殺の一撃だった。

極限にまで凝縮された聖力が、二つの刀身に集まって確実に魔力の壁を打ち破る。

「っ——!!」

もちろんそれを察したのだろう。魔も胸の前で両手を重ね合わせた。

途端、今まで形を成さなかった魔力が、自らの身に迫る危険を前に、ついに具現化する。

——水。その体を覆ったのは、大量の水だ。
力と力。

あとはどちらが強いのか。ただそれだけの勝負。

直後——まるで隕石が落下したかのような、轟音と衝撃が、小さな街に響き渡った——

その翌日。

昼時にも関わらず空は厚い雲で覆われて薄暗く、この日のフォックスレアは、異様な霧囲気に包まれていた。

――焼け落ちた家。壊れた塀。乾いてこびりついた血の跡もまだ消えていない。が、それ以上に異様だったのは、人通りの少なさである。

外を歩く人影はほとんど見当たらない。いたとしても、それは警邏隊のバッジを身につけた男たちが、何人か組になって歩いているだけ。

一般人の姿など、全くと言っていいほどに見えなかった。

「厄介なことになりましたね」

そんな異様な雰囲気の中、響いたのはマイルズの声。

ラムステッド邸の一室ではデイバーナ・ナイトの面々が、それぞれに難しい顔をして今後の作戦を練っている。

レイ、マイルズ、ギレット、パーシヴァル……そして、ティース。

「でもレイ隊長の本気の一撃から逃げおおせるなんて、その魔、とんでもない奴っすね」

「本当に“王族”だったってえのか？」

ギレットの問いに、ベッドの上に寝転がったレイは頭の後ろで手を組んで、

「おそらく、な。魔力は将族を遙かに上回る。けど、どこか戦い慣れてない。……典型的な王族の特徴……って、俺は習ったけどな」

最後にそう付け加えて苦笑する。

彼とて本物の王族とまみえたことはないのだから、当然だ。

「……ふん。確かにな」

「しかし、まあ、取り逃がしたのは相手が相手だけに仕方ないにせよ」

マイルズが中指でくいつと黒縁眼鏡を上げる。口元には、やはり苦笑いだ。

「まだ街の中に潜んでいるらしいってのは、おそろしい話だね」

「ま、三日もすりゃ、話を聞きつけた腕利きのデビルバスターたちがこぞって駆けつけてくる。それまでの辛抱さ。……おい、ティース。何か言いたそうだな」

「え？」

ティースが驚いた顔を上げると同時に、レイは言った。

「そんな呑気なことを言っていていいのか、ってどこか？」

「……」

その言葉が、あまりに正確に彼の気持ちを言い当てていたため、ティースは何も言えずに黙ってしまった。

そんな彼に、レイは口元に笑みを浮かべたまま頷いて、

「気持ちにはわからんでもないがな。……お前も見ただろ？ やぶ蛇も、毒のないヤツならともかく、今回ののはとびっきりの毒蛇だ。つかないで済むなら、その方がいい」

そう言ったその左肩には包帯が巻かれていた。

大怪我ではないが、あの瞬間、もしあの魔が逃げることを最優先せずに正面から向かってきていたなら、とてもじゃないがこの程度では済まなかっただろう。

「……」

それを見て少しだけ考え、それからティースは控えめに反論する。

「でも、もし、また昨日みたいなことがあったら——」

「それを言うなら、つついても同じことさ。……もし、追いつめられた敵が、今も従えているかもしれない魔を街中に放ったらどうする？ 正直、王族ってヤツが本気になったら、今の戦力でどうにかできる保証はないぞ」

「……それは、そうかもしれないけど」

それでもティースは釈然としなかった。

昨日、彼が感じた怒りは、一晩経った今でも消えていない。

（あんなヤツを……野放しにするなんて……！）

「……」

拳を握りしめたティースに、レイはため息とともに言った。

「迷いは、消えたらいいな」

「……え？」

「昨日のお前の剣は、なかなか良かった」

「……」

思い返して、確かにその通りだったかもしれない、と思った。あのときの一撃は、結果的に敵の魔力に阻まれはしたが、それでも今までの不振からすれば充分すぎるほどのものだったろう。

（……迷いが、消えた？）

その理由を考えて、ティースはすぐに思い当たる。

あのとき感じていた——許し難い“悪”に対する、怒り、憎しみ。それが、一瞬とはいえ、彼の“抱えていたもの”を忘れさせたのだ。

（……ああ、そうか）

そしてティースは理解した。

いつかギレットが口にした“憎しみを極めろ”という言葉。

今までに積み積みもって、そして昨日、街の人々の哀しみを全身に受けて。

そして彼は一瞬とはいえ、ようやく到達したのだ。

その場所。

憎しみを極めた、その場所に。

「……」

「ティース」

「……？」

レイの言葉に顔を上げると、マイルズの、そしてギレットの視線が一様に注がれていた。

「少し、外を散歩してこい」

「え？」

「大丈夫だとは思うが、一応、気を付けて行けよ」

「散歩って……なんで、突然——」

だが、ティースは途中で言葉を止める。

「いいから、行け」

レイは体を起こし、ベッドの上で片膝を立てていた。いつも通り、捕らえどころのない表情。……それでも、その視線は彼に反論を許さなかった。

「……わかった」

わけがわからないまま、ティースは席を立つ。

部屋を出る直前、視線を感じて振り返ると、ギレットが片目だけで見つめていた。

その向こうでは、マイルズが小さく首を振っている。

（……なんだろう）

だが、その場の妙な雰囲気になんか問いかけることもできず。そしてティースはそのまま部屋を出るのだった。

「……ふん。迷いが消えた、か」

「ああ、言わなくていいぞ、おっさん。言いたいことはよくわかってるからな」

ティースに続いて、マイルズとパーシヴァルが退室した部屋の中。ソファがあるにも関わらず床にあぐらを掻いたギレットは、ベッド上のレイを厳しい視線で見つめていた。

「結局、ああいう奴にはムリなのさ。……おっさんも見ただろ？ さっきのあいつの表情」

レイは仰向けで天上を見上げたまま、片手をヒラヒラと振って、「迷いが消えた理由を自覚した瞬間、また迷いが産まれた。……結局、一時的なものさ。あいつは一匹の犬に噛まれても、犬そのものを嫌いにはなれない。そういう奴だ」

「……向かねえな」

「ああ、向かない。けど、ああいうタイプってのは、ちょっとした

きっかけで化ける可能性がある。……あんたもそっちに期待してるんだろ？ それに——」

少しだけ言葉を切って、レイは続けた。

「ディバーナ・ロウって部隊には、むしろああいうタイプが向いているんじゃないか？」

ギレットは鼻で笑う。

「おめえさんが言うことじゃねえな」

「おっさんもな」

レイも鼻で笑い返して、そして呟くように付け足した。

今度は彼らしい、どこか皮肉めいた笑みを口元に浮かべて。

そして宣言した。

「さて。それじゃあ、こっちもそろそろ疑問解消作業に取りかかるとするか——」

（散歩と言っても、なあ）

今日のように太陽が出ていない日のラムステッド邸は、本当に“幽霊屋敷”だった。

そんな屋敷の中をティースはさまよい歩いている。彼自身の気分がいまいちすっきりしないということもあるが、はっきり言って気分転換できそうな雰囲気ではない。

それを示すように、彼の思考は自然と昨日の魔へと向かっていった。

（……街のどこかに潜んでいる、か）

ティースは足を止め、二階の廊下から街並みを眺める。

まるで人気のない街。昨日の襲撃は人々にとってもない恐怖を植え付けたのだろう。

（そりゃ、今までは一匹ずつだったのが、今回は二十四匹近くも、だから——）

だが。

ふと、不思議に思っただけでティースは思わず眉をひそめた。

(……なんで、俺たちが来た途端に？ 偶然？)

それは当然の疑問だった。あまりにもタイミングの良すぎる偶然。
(俺たちが来るのを待っていた？ だから昨日になって、突然総攻撃を？ 何故？)

だが……その思考はすぐに遮られて、

「ティーサイトさん」

「え？ ……あ、パトリシアさん」

窓から廊下に目を戻すと、そこには屋敷の主人パトリシアが立っていた。

女性としてはそれほど大柄でもない彼女は、立ち止まった後、長身のティースを見上げるようにしていたが、やがて、先ほどの彼のように窓の外に視線を移動させる。

そして言った。

「街はひどい状態のようね。……今度は逃がすことなく捕まえて欲しいものだわ。また、昨日のような被害が出ないうちに」

その言葉には、明らかにティースたちディバーナ・ナイトに対する不満が込められていた。

もちろん、ティースとしては反論する言葉もなく、

「……は、はい。すみま——」

「頼むわ」

最後まで待つことなく、相変わらず無愛想にパトリシアは去っていった。どうやらどこかへ出掛けるらしい。

(……はあ)

さらに憂鬱な気分になりつつ、ティースは自らも歩を進めることにする。

足は自然と玄関へ。

この屋敷では、気分転換など出来そうにない。

(今は……とにかく魔を倒すことだけ考えよう。他の色々なことは、

レイさんやマイルズさんが考えてくれるんだから……)

そう決心して、ティースの体は屋敷の外へ。

外には緩やかな風が吹いていた。十一月の風はヒンヤリしている。ネービスに比べるとまだ暖かいのだろうか、それでも太陽が出ていない分、思った以上に肌寒かった。

(少し、外れの方に行ってみようかな……)

閑散とした街は歩いていて気分が良くなるものでもない。

すぐに進路を変えて、町外れへと。

小さな宿場町だから、宿が建ち並ぶ中心部から離れるとすぐに風景が変わる。こちらでも閑散としてはいたが、家が密集していない分、その寂しさもどこことなく紛れているような気がした。

昨日の事件による傷跡も少ない。

「ふうっ……」

少しは気分が落ち着いてくるのを感じながら……ふと、足が止まる。

(……あれ)

視線の先。そこにはポツンと二つの建物——古びた廃屋と、同じように古びた蔵が建っていた。何の変哲もない、おそらく使われなくなってから五年以上は経つだろう建物だ。

だが、

(あの蔵——)

それを見た瞬間、ティースの脳裏の奥が刺激され、そこに一つの映像がフラッシュバックした。

(なんだか、アレに似てるなあ……)

一瞬の躊躇。

(……行ってみるか)

結局引き寄せられるようにして、彼の足はその蔵に向かっていった。建物の高さは七メートルほど。面積はそれほど広くない。壁には蔦が生え、ひび割れ、屋根もボロボロになっていた。隣の廃屋も無人になって相当日が経つようだが、こちらは使用されなくなっ

らに久しいのだろう。

どこから微かな悪臭が漂ってくるが、それは気にせず扉の前に立った。

（鍵は……壊れてる。入れる……かな）

キィ……と、扉が軋む。意外なほどすんなりと開き、外の薄明かりがゆっくりと蔵の中を照らし出す。広さはせいぜい二十畳といったところか。半分崩れかけた木箱が隅に積まれているが、他には何もない。

カビの匂いが鼻を突く。

だがそれを感じて、なおもティースの胸は高鳴っていた。

（中まで本当に同じだ。もしかして全く同じ設計……？）

それは——彼の子供時代の記憶。

何度も訪れた蔵。彼ら以外に誰も訪れなくなった蔵。大事な思い出の詰まった場所。

楽しい記憶がそれほど多くないその時代にあって、数少ない、決して捨てることのできない大事な思い出の場所。

それと見間違うばかりのものが、今、目の前にあった。

彼がほんの一時だけ現状を忘れ、ほんの少しばかり浮かれたからといって、誰も責めることはできないだろう。

「……」

胸を踊らせながら足を踏み入れると、ホコリが辺りに漂う。ガラシとした蔵の中。内部は入り口からその全てを見渡せる。

本当に、何もない。

だが——

（もし同じ設計なら……ここに……）

ティースが足を運んだのは、蔵の奥。その左端。

（……あった）

胸の鼓動が増す。

もう疑う余地はなかった。

その取っ手は、ちよつとした隠し部屋——この天井の上に隠され

た、小さな屋根裏部屋への入り口を開くスイッチだ。

(動けば……いいけど……)

取っ手を引く。と、カコン、と小さな音がして、壁の一部が凹んだ。

(……やった)

その部分に手を掛けて軽く力を込めると、まるで引き戸のように開いて、そこに小さな階段が現れた。

——昔、何度も何度もこの扉を開けたことがあった。人目を忍んで。

三つ年下の少女を連れて。

手にしていたのは、パンやミルク、あるいは土産話。

決して誰も来ない、人々の記憶の中からも忘れ去られた蔵は、ティースたちにとっては絶好の隠れ家だった。

雨の日には雨漏りしてひどかった。冬、毛布があれば凍えるようなことはなかったが、それでも寒いことには変わりなかった。

それでも文句を言うこともなく。

軋む階段を上ると、そこには八畳ほどの部屋がある。部屋といっても明かりは小さな窓一つから射し込む自然の光のみ、床から天井までは百五十センチあるかないかで、もちろん今のティースは立って歩くこともできない高さだ。

だが、そんな狭い部屋で、彼らはいつも待っていた。

ティースと、そしてシーラが訪ねてくるのを、いつも待っていた。いつも、待っていたのだ。

「……え？」

それは確かに“既視感”だった。

その光景を、ティースは何度も、何度も見てきたから。

そこで待っている人物も。

ハッとして振り返る、その後ろ姿も——

「な……」

視線がぶつかった瞬間、体に電流のようなものが走った。

ただ、そこにいたのは、彼の記憶にあるものと同一ではない。

動きに合わせてたなびいたストレートの髪はこれほどに長くなかったし、背だつてこの天井の低い部屋の中をギリギリ立って歩けるほどだった。

だが……それは、やはり既視感だったのだ。

「……」

尖った耳は、魔の証。

隅に置いてあるネズミ色のフードとローブは、昨日、目にしたばかりのものだ。百八十センチほどもある、女にしてはかなり大きな背丈も、ローブに隠されていたであろう僅かに細身の体格も。

その全てが、そこにいた人物の正体——彼にとって憎むべき存在であることを明確に示していたにも関わらず。

——既視感は消えない。

目の前の二つの大きな瞳が、驚きに見開かれる。

「……ああ」

その眩きにも、ティースは何も反応できなかった。

昨日からずっと携帯している剣——“細波”に手をかけることもなかった。

ただ、呆然としていただけ。

そして先に反応したのは、目の前にいた“魔”の方——

「ここを知っている……もしかして……いえ、やはり……あなたは——」

振り返って、唇を震わせる。

昨日までフードの中に隠れていたのは、穏やかな印象の女性だった。

たくさんの人を殺し。

たくさんの人を苦しめ。

暴虐の限りを尽くす、魔。圧倒的な力を持つ、王魔。

だが、そんなことが信じられないほどに、その女性は暖かく、優しい目をしていた。

……懐かしい目をしていた。

そこから、一筋の涙がこぼれ落ちる。

そしてその口からは、信じられない言葉が漏れた。

「ティース様……私を、覚えてますか——？」

「！」

名前を呼ばれて、ティースの心は大きく脈打った。

そこにあった——彼も薄々は感じていた——紛れもない“事実”
に気付いて。

「……そんな、馬鹿な」

否定の言葉がその口について出る。だがそれに反し、心は少しも
否定してはいなかった。

面影が、確かにあったのだ。

その少女が成長して、そして少し信じられないほどに背が伸びた
なら、おそらくこんな感じだろう、と。そんな想像をするのは、彼
にとってあまりに容易なことだったから。

「……」

何かを待ち望むかのように、その女性は涙の浮かんだ瞳で見つめ
ている。

——何を？

ティースにはわかる。

それは先ほど、名前を呼ばれたときに彼もまた感じたことだから。
ゆつくりと、その口が一つの名を刻み出す。

「……リイナ……リイナ……クライスト……」

「はい……っ！」

感極まった声で女性——いや、リイナは答えた。

「リイナです、ティース様……！」

「な、なんで……君がこんなところに……そんな、馬鹿な……」

それでも信じられずに、ティースの頭は混乱していた。

……四年。最後に彼女と別れた日から、それだけの月日が経って
いた。

ともに成長している。その頃のティースは剣など携えていなかったし、身なりも髪型も今とは違う。背も伸びているし、童顔とはいえ成長期直中の当時に比べれば顔立ちも少しは変わっている。

彼女が昨日の慌ただしい戦いの中で彼のことを気付かなかったのは、至極当然のことだろう。

「……昨日、あなたの名が聞こえて、まさかと思いました。でも、本当にこんなところで偶然出会えるなんて……ああ、まるで夢のようです」

魔——いや、リイナはまるで神に感謝するように手を組み、目を閉じた。

溢れた滴が頬を伝う。

彼女は再会の喜びを、少しも隠そうとはせずにいた。

「……」

対照的に、ティースの胸に渦巻いていたのは複雑な想いだ。

純粹に嬉しい気持ち。それはもちろんある。

信じられない偶然に感謝する気持ち。

懐かしい人の成長を驚く気持ち。

だが、今はそれだけではない。

——苦悩と慟哭、“痛み”を伴う過去の映像、そこにあったいくつかの光景と、昨日の惨劇。

そして産まれる、ほんの僅かな“疑心”。

「……」

目の前の魔は、昨日までは憎むべき存在だった。とてつもない憎悪の対象だった。そして、これまでに街を襲った悲劇は否定しようのない事実だった。

（リイナが……そんなこと——）

信じたい気持ちはとてつもなく強い。

何よりこのリイナという少女は、ティースが“魔”という存在を信じようと思った、そのきっかけであり、彼の魔に対する見方を決定付けた存在であったから。

だが、四年という歳月が、そこに微かな揺らぎを起こす。

……あるいは、変わってしまったのだろうか、と。

裏切り、殺し、奪い尽くす……それが、ここ最近のティースが見てきた魔の全てだった。

彼女も結局は“魔”だ。

だから、そんな疑心に捕らわれてしまう。

思わず、腰にぶら下げた“細波”の重さを意識してしまう。

（――まさか）

ティースには考えられなかった。自分が彼女を斬るなどと。

だが……もしもそれが真実だったなら。彼女を斬ることが、人々を救うことになるのなら。

それが、自らの悪夢を振り払う唯一の方法であるのなら。

思考が、グルグルと回る。

（……確かめなきゃ）

最後にようやく辿り着いたのは、その結論。

（確かめなきゃ、ならない――）

口の中がカラカラに乾く。

その返事が、彼にとってはとてつもなく怖かった。

「リィナ……」

そして、掠れ、震えた声でティースはようやく口を開く。

「まさか、君が――」

だが、彼の問いかけはそこで“強制的に”途切れることになった。

――誰かが踏み込んできた？

――遠くで悲鳴が響き渡った？

いや、違う。

辺りは平穏そのもの。

事実、この外れにある蔵にティースが入り込んだのを目撃した人物はいなかったし、どうやらこの蔵のカラクリを知っている者は、少なくとも街を見回っている警邏隊の中にはいないようだった。

では、何故？

答えは簡単だ。

疑心に捕らわれていたティースの心情など知る由もなく、リイナの方は普通に“感動の再会”を果たしていたということ。

「ティース様……っ！」

「え……あっ！」

——つまり、彼の“特殊能力”の発動条件が満たされてしまったのである。

その5『必死の嘘』

――六年前。それは冬も近付き始めた、ある日のこと。

『ティース！』

誘われて、ティースは森の中へと足を踏み入れていた。

そう深いところではないし、猛獣が出るようなところからは離れている。

『ティース！ さあ、早く！ 早く私を捕まえてごらんさい！』

笑いながら目の前を駆けるのは、最近伸びてきた髪を馬の尻尾のように結った三つ年下の少女だった。彼はその様子に苦笑しながらも、少し手加減して追いかける。

風は冷たい。夕日も沈み始めていて、こうして遊んでいられるのもそう長い時間ではないだろう。

と、そんなときだ。

『あ……』

少女が突然立ち止まった。

『？』

ティースが不審に思って近付くと、少女は大きく目を見開き、すぐに踵を返して彼の後ろに隠れた。

そして、

『ティース、あれ……』

『え？』

それを見た瞬間、警戒心が胸に溢れる。

『……あれは』

そこにいたのは、一見、警戒する必要などなさそうに見える二人の子供。

一人は、少女より少し小さいぐらいの、小柄な、おそらくは男の子。

そしてもう片方は、ティースと同じぐらいの年齢の、おそらくは女の子。

だが――

『……』

無言で後ずさる。

恐怖がティースの体を駆け抜けていた。

――魔。

その二人の子供は、その特徴である大きく尖った耳をそこに備えていたのだ。

『……下がって』

後ろの少女にそう言いながら、ティースは二人の魔を強い視線で見据えつつ、自らも少しずつ後退していった。

――魔は人に危害を加える存在。

――その生命を脅かす存在。

彼は大人たちからそう聞いていた。

だから。

だけど――

『あ……』

小柄な男の子は、そんな彼らの反応を悲しそうに見つめた後、

『……違う』

その瞳に涙を浮かべて言ったのだ。

『違うよ……ボクは、キミらの敵じゃない……!』

「随分と長い散歩でしたね、ティースさん」

「ん？ あ、ああ、パースくんか」

“幽霊屋敷”に戻ったティースが考え事をしながら歩いていると、廊下の向こうからパースヴァルがやってきた。

パンを右手に、左手には肉料理らしきものを鷲掴みにして、

「この屋敷の唯一いいところは、こうやって行儀の悪いことをしても、誰にも咎められないってことっすね」

笑いながらロールパンにかじり付く。

確かに、廊下を歩きながらモノを食べるなど、ミューティレイクではなかなかできないことだ。

ティースは苦笑を返しながら、やがて思いついて問いかける。

「それ、もしかして夕食か？」

「ええ。例によって食堂に適当に用意してありますよ。……女主人さん、どう見ても一同に介して食事ってタイプじゃないですもんね」その言葉にピンと閃いた。

「そうか。……じゃあ、俺も君を見習うとしようかな」

「？　またどこか行くんですか？」

すれ違いざま、ティースは頷いて、

「外の空気が意外に気持ち良くてね。お腹が空いたもんだから戻ってきたけど、そうやってパンでも食べながら外を歩くのも悪くなさそうだから」

「へえ？」

パーシヴァルは少し意外そうに首をかしげたが、特に疑ったりそれ以上突っ込んだりすることはなく、

「でも、本当に暗くなる前に戻った方がいいっすよ。レイ隊長は大丈夫って言ってましたけど、ティースさんは例の魔に顔を知られるから、狙われるかもしれないし」

「ああ、気をつけるよ」

そうしてパーシヴァルと別れ、食堂に向かう。

（……なるほど。確かに適当だ）

用意されていたのはバイキング形式の料理。パンやミルク、他にもいくつかの料理が並んでいたが、すでに冷めかけている。他の面々はすでに終えたのか、あるいはこれからか。そこには二人ほどの使用人がいるだけで、食事をしている人間はいなかった。

だが、それはむしろ好都合。

「これ、外に持ってもいいのかな？」

「え？ あ、ええ。はい」

彼の問いかけに、二十歳過ぎぐらいの使用人女性が頷いた。どこことなく素人っぽい感じの反応で、主人のパトリシアは使用人の教育にもあまり興味を持っていないのかもしれない。

「ありがとう」

他の料理には目もくれず、パンだけを三つ抱えて食堂を出た。その中の一つを口に運びながら、廊下を抜けて屋敷を出ていく。

（もししばらくしたら日も暮れるな……）

夕日の中、相変わらず人気のない街の中をしばらくブラブラと歩き、かなり遠回りをしながらその足は外れの方へ。

（……多分、付けられてない）

確信ではなかったが、少なくとも彼自身は気配を感じなかった。付けられる理由はないものの、これからの向かう先を考えると警戒せざるを得ない状況だったのだ。

辿り着いた先はもちろん、街の外れにある廃屋。その隣の蔵。入り際に再び周りに注意し、素早く中に入ると、隠し部屋の入り口を開いて階段を上っていく。

「……リィナ」

屋根裏では、リィナが出ていったときと変わらぬ体勢で彼を出迎えた。

「ティース様」

ティースは一つ頷いて、天井の低い部屋の中、腰をかがめて入っていくと、

「パンを持ってきたよ。お腹、空いてるだろ？」

「あ、はい。すみません。……ティース様は？」

「ああ。俺は来る途中で食べてきたよ」

パンを二つリィナに手渡し、その場に腰を下ろす。

「それより――」

そしてすぐ、問いかけることにした。

彼がここで気絶して目覚めた後、彼女から聞かされた“真相”について。

「本当なのか？ 獣魔を操っているのが、あの人だなんて……」

「はい。……ティース様。彼らは何も、全てが全て、好んで人を襲うわけではないです。もちろん好戦的な獣魔が多いのは否定しません。私も昨日、襲われる女の子を助けるために、獣魔を一匹殺すことになってしまいました。でも“水の七十五族”と呼ばれるその獣魔は、普通の状態では決して人を襲ったりはしない種類なんです」

「……それは初めて聞く話だなあ」

水の七十五族。ナメクジのような体躯。粘着質の体は酸を纏っているが、動きは遅く、獣魔の中でもおそらくもっとも底辺に近い場所にいるタイプ……それが、ティースの——というよりも、それについて学習した者全てに共通する認識だった。

そこにはもちろん、彼女が言ったような内容は含まれていない。

ティースを含め、この世界の人々がそれを学習するときは、その全てが人に害を為すものだ、という前提があるから。

だが、ふと思い出す。

（そっか……水の七十五族って確か、人前に姿を現すことが少ないって書いてたな……）

あるいはそれが、彼女の言葉の正しさを裏付けているのだろうか。ティースは納得するとともに頷いて、

「じゃあ、それが人を襲ったというのは……」

少しだけ、リィナの視線が落ちる。

「人魔の支配によって強制的に動かされているのか、あるいは——」
そして表情が陰しさを纏った。

普段は穏やかだが、露わにする感情は意外なほどに強い。それは、ティースが知っている昔の彼女と何ら変わりのないものだった。

「人が、何らかの薬品を用いて“改造”した場合です」

「……それはつまり」

目を見開いて言葉を切る。

そういう方法を使って、魔を使役する人間のことをどう呼ぶか、ティースは知っていた。

「デビルサイダー……？」

「……」

無言でリィナが頷く。

にわかには信じられないことだった。が、彼女を信じるという前提であれば、当然、獣魔を操っていたのも彼女ではないことになる。そして、昨日のように種族も強さもバラバラの獣魔たちが、自らの意志でいきなり結束して人を襲うことなどまず考えられない。

やはり他に統率する者の存在が不可欠……とすると、確かにその可能性も充分に考えられることだった。

——ただ、もちろんそれは全て、彼女を信じるのならば、という条件付き。

「……」

ティースの視線の先で、リィナは一つ目のパンを食べ終わるところだった。

まだ、最終結論は出ていない。

（……信じる？）

自問する。

魔を信じようとする彼の心は、とうの昔にひび割れていた。

何人もの人が死んでいった。

中には親しい人も混じっていた。

彼らを殺したのは。彼らの未来を奪っていったのは、全て——

（全て、魔だった——）

ゆっくりと、顔を上げる。

「……リィナ」

「はい？」

彼女はちょうど、二つ目のパンを口に運ぼうとしている。そこに重なる、懐かしい記憶。

——胸の奥でぶつかり合う、相反する二つの激しい感情。

こじ開けるように、ティースの口は重々しく開いた。

「俺は……この道を選んで、本当に色々なことを見てきたんだ」

「……はい」

その表情から、彼女もまた何かを察したのだろう。パンを口元に運ぼうとしていた手が止まり、それはゆっくりと膝の上へ。視線は真剣な色を帯びて真っ直ぐに向けられた。

それは、そう。

彼女は一度、彼のむき出しの怒りをその身に浴びていた。彼がそれほど怒りを発した理由……それを考えるならば、その先に続くであろう言葉の趣旨をおおよそ察したのは当然のこと。

そのまま、重い口が開く。

「……心から尊敬できる人がいた。行く末を見守ってあげたい子がいた――」

何か堪えるように一旦言葉を切って、一息を呑み込み、続ける。「夢や希望を抱いている人もいた。荷物を背負ってそれでも懸命に歩こうとした人もいた。でも、みんな殺されていった。魔に、殺されたんだ。俺の見えるところで。俺の手の届く場所で」

視線が少しだけリイナを離れ、ゆっくりと斜め下に落ちた。

「……信じようと思った魔がいた。でも、そいつはとんでもない奴だった。人の命や想いや、色々な大事なものを弄ぶ、とんでもない“悪”だった。……俺は、騙されたんだ」

拳が震える。

それは未だに消えていない、怒りの証。

そして一瞬の躊躇い。

「……こんなこと言うと、いつまでも独り立ちの出来ない子供みたいだけど……でも、リイナ」

視線はもう一度、目の前の人物へと向けられる。

そんな彼の瞳は自身の言葉通り、まるで頼りない子供のように揺らいでいた。

その眼前にいる少女。

それはおそらく、彼の心にとって、最後の砦。

「俺は、君以上に信じられる魔を、他に知らない。……君のことなら、今はまだ信じられると思う。今は、まだ――」

「……」

ゆっくりと視線が落ちる。

沈黙。

そして、ポツリと、呟くように言った。

「それでも……リイナ。俺は……君を信じてもいいんだろうか……？」

「……」

リイナの視線は、変わらずに真っ直ぐ。

重苦しい沈黙。

……だが、一瞬の後。

「ティース様……」

厳しさを纏っていた少女の視線が、ふっと緩んだ。

そしてその右手が、ゆっくりと伸ばされる。

「リイナ……？」

ティースは微かに身じろぎした。

彼女には先ほど気絶させられてしまったばかりだったが、

が、直前で手は止まった。

「あなたに触れられないのが……とても哀しい」

その口から紡ぎ出されたのは、まるで我が子を慈しむような――
慈愛に満ちた暖かい声。

「……」

白くて細い、とてつもなく美しい指。

「触れられたなら、私の気持ちを全て伝えられる気がするのに……
ままならないのですね」

顔の線をなぞるように、リイナの指が降りていく。

「どうか、泣かないでください……」

「え、泣いて――？」

ティースは慌てたが、確認するまでもなく涙など流してはいなかった。

だが、彼女の指はそのまま、まるで涙を拭おうとするかのように、ギリギリ触れない距離で目元をなぞる。

そして、穏やかなその瞳が優しくに細められた。

「私がああなたの期待に応えられるかどうかはわかりません……でも、ティース様。少なくとも、私の気持ちがああなたを裏切ることではない。決して、ない」

「……」

ドクン、と、ティースの胸が強い鼓動を打つ。

奥が熱くなった。

それは——どんな感情だったのだろうか。

ただ、呆然としたように、彼は目の前の少女を見つめていた。

そして——

「話してもらえませんか？　あなたが今までに感じたこと、苦しかったこと、哀しかったこと……私は、その全てが知りたい。全てを知って、ああなたの役に立ちたい」

「っ……！」

まるで染み出すように。

「……リィナ……」

いつしか、ティースは彼女の言葉通りに涙を流していた。

年下の少女の前で恥ずかしいとは思ったが、堪えきれなかった。

久々に流す、哀しくない涙——

「リィナ、俺……俺は——ッ！」

「はい……ティース様」

頭が熱くなって何もわからないまま、いつしか彼は全てを打ち明けていた。

サイラスのこと、ザヴィアのこと、ナナンのこと——助けられた人、助けられなかった人、許せなかったこと——その全て。

そのたびに、胸に大きく居座っていた黒い塊が溶けていく。

怒り、憎しみ、苦しみ、哀しみ、悩み——その全てが、すうっと溶けていく。不思議なほどに、あっさりと、呆気なく。

そして彼は、その過程で初めて気付いた。

支えてくれる者の存在。その有り難さ。

それは彼にとって、必要なものだった。一人で全てを抱えられるほど、ティーサイトⅡアマルナという人物は、まだそれほどに強くはなかったから。抱えてしまったものを、共に支えてくれる人間が、彼には必要だったのだ。

そうして——どれだけの時間が経っただろうか。

「あ……はは」

全てを吐き出し、涙が乾いた頃、ティースはようやく落ち着きを取り戻した。

途端に恥ずかしくなったらしく、誤魔化すように笑いながら乾いた涙の跡を拭くと、

「ご、ごめんな、リイナ。久々に会ったっていうのに、愚痴ばかりで……」

リイナはクスツと笑って、

「いいえ。逆に安心しました」

「え？」

「ティース様が、昔とちっとも変わってないようで」

「……」

ティースはまだ赤く腫れたままの目を彼女に向け、それからようやく余裕ができたのか意識的に苦笑を浮かべて答える。

「はは……それ、成長してないって意味？」

「あ。い、いえ、そういうことではなくて」

口を抑えて、リイナは少し慌てたような顔をする。

その仕草もまた懐かしい。落ち着いているように見えて、その実、彼女は意外におちちょちよいで、感情的で、そして頑固だった。

暖かさが、さらに胸に溢れ出す。

そして……同時に溢れたのは、決意の心。

「もっと色々話したいこととか、聞きたいこととかあるけど――」
ティースは腰を上げ、天井に頭を擦りそうになりながら階段へと向かった。

「それは、全てが解決した後でしょう。……リイナ。俺は屋敷へ戻るよ。戻って、全てを暴いてみせる。君の濡れ衣を晴らしてみせる」

「はい。ティース様」

リイナは素直に頷いた。

その目は、再会したばかりだというのは、彼のことを完全に信じ切っていた。

四年間のブランクなど、まるでなかったかのようにだった。

「全て、お任せします。……私は、ここでああなたの帰りを待ってます」

「はは。それって何だか、恋人の帰りを待つみたいだなあ」

笑いながらそう言って、直後、しまったと後悔する。

「ふふ、そうですね」

「あ……」

彼女が躊躇いもせずに頷いたのを見て、自分の口走ったセリフに氣付き真っ赤になる。

「ご、ごめん！ いきなり変なこと言って！」

だが、リイナは不思議な顔をして、

「ど……どうしたんですか、突然？」

「い、いや、だって俺、今、変なことを――！」

「？」

リイナは怪訝そうに眉をひそめると、

「恋人というのは変なことでしたか？ 確か、“大事な人”という意味じゃなかったですか？」

「……あ」

その言葉に、思い出す。

――彼女が人間とは少々違った“常識”を持っているらしいという

「いや……うん。だいたいそれで合ってるんだけど」

「でしたら、ティース様は私の恋人です」

「う……」

ニッコリと微笑んだリイナに、彼女が少々勘違いしていることを理解しながらも、彼はますます顔を赤くして、

「……と、とりあえず行くよ。あ、食事時にはなるべく来るようにするから」

「はい」

「そ、それじゃ」

ティースは慌ててその場を立ち去る。

（……ふう）

外に出て感じたのは、ヒンヤリとした空気。何故か実際の気温以上に風が頬に冷たく感じた。

一息ついて、そして古ぼけた蔵を見上げる。

（リイナ……変わってなかったな）

それを実感するだけで、救われる。自分が今まで、揺らぎながらも信じてきたことは、決して間違いではなかったのだと。

そして、たった今別れたばかりの彼女の姿が脳裏に浮かぶ。

再び、頬が微かに熱を帯びた。

（で、でも、見た目は結構変わってたかな。ちょっと……じゃなくて、かなり綺麗になってたかも……）

そんなことを考えていられたのも、彼の心に余裕ができていた証拠だろう。

（……よし）

少し考えた後、彼の足は歩みを進めていく。

太陽は、すでに西に落ちかけていた。

迷いはもう、微塵もなかった――。

日は落ち、厚い雲に覆われた夜空には月も見えない。

「……まったく。大した女だ」

ラムステッド邸にある客室の一つ。ルネッタ・フィッシャーの部屋には、歪んだ笑みを浮かべ、部屋のドアに背を預けたレイがいる。腕を組み、微かに顎を上げ、視線はまるで見下ろすようにルネッタに向けていた。

「まさか、人の部下を勝手に囹に使おうとは、な」

「その文句を言い、わざわざ訪ねてきたのですか？」

答えるルネッタはまるで涼しい顔のまま、鏡台に向かっていた。屋敷のバスルームを使った後で、長い髪を梳かしている。

そして鏡に映るレイをチラッと見やって、

「私が強制したわけではないですよ。私が提案し、彼がそれに乗ったまです。実際、私は彼に奇襲のチャンスをしつかり作ってあげました」

「いいや」

だが、レイは答える。

「別に文句を言いに来たわけじゃない。ただ、見掛けによらないもんだ、ってだけさ」

「大人しいお嬢さんだとも思いましたか？」

「本当にそうだとしたら、口説き方にも熱が入るってもんだがな」
静かな廊下に、使用人らしき微かな足音。

窓から覗く木の枝が風で揺らいだ。

ルネッタはしばらく無言の後、

「男には興味ありませんから」

「……おやおや。それは勿体ない」

戯けてみせて、レイはゆっくりと壁から離れた。

「男にひどい目にでも合わされたのか？」

「いいえ、別に。ただ、好きではないだけです」

「やれやれ、神様も酷いことをするもんだ。君のような美人が、花を咲かせることもなく枯れてしまう運命だなんて、な」

「……」

ルネッタは微かに眉をひそめた。

確かに彼の口調は、口説いているのか挑発しているのか、あまりに微妙な言い回しだった。

やがてルネッタは髪の手入れを終え、鏡台の前から立ち上がると、「つまらない話をするだけなら、帰ってもらえませんか？」

ゆっくりと歩いて、ベッドのそばに置いてあった剣を手取る。

レイの視線は黙ってその動きを追った。

（もう一本のレイピア……か）

「昨日の王魔は、私が必ず仕留めます」

「ほう……何か対策があるってのか？」

「対策？ ……対策というほどのものではありません」

ルネッタは手にしたレイピアを引き抜く。

それは昨日のものとは違い、微かに赤味を帯びていた。

（……なるほど。キャリアを持つだけのことはある。さすがに考えているな）

相性がある。

確かにその武器であれば、あるいは昨日の魔力の壁を破れるかもしれないなかった。

レイは薄い笑みで片手をヒラヒラと振りながら、

「だったら、そいつは君に任せるとするさ」

「……？」

ルネッタの手がピタッと止まり、怪訝そうな視線が彼へと向けられた。

「あなたは挑むつもりはないのですか？」

それは彼女にとっては当然の疑問。

王魔を倒したとなれば、デビルバスターとしての格が跳ね上がる。もちろん相応の危険は伴うし、相応の実力も必要になることではあるが、彼は昨日、実際に王魔の魔力の壁を破っており、それほどの実力を持つのなら、倒して名を揚げようとするのがデビルバスター

としては当然の行動だった。

だが、レイはあっさりと答える。

「俺は君と違って、命の方が大事なもんでな」

「あなたも、見掛けによりませんね」

嘲るように呟いた言葉を、レイは涼やかに流すと、

「……ところで、ルネッタ。君は、昨日の魔の襲撃をどう考える？
不自然だとは思わなかったか？」

「……」

眉間に一瞬だけ皺が寄った。もちろん彼女もその点を不審には思っていたのだろう。

だが、すぐに首を振って、

「私たちが来たことでああいう行動に出たのだとすれば、それは自分の力を誇示してみせたかったのでしょうか。……他になにか？」

「なるほど」

レイは笑って背を向ける。それ以上、特に話すことはなく、彼女の方も呼び止めようとはしなかった。

部屋を出て、その足は薄暗い廊下を音も立てずに渡っていく。

（あれほどの力を持つ王魔が、な）

「レイさん！」

「……ん？」

振り返ると、その視線の先には長身の彼の部下がいた。

「ティースか」

同時に違和感を感じる。

（……なんだ？ こいつ、目の輝きが変わったな）

咄嗟に目を細め、その表情を観察する。

気分転換のためと勧めた散歩。その効果があったのか。いや、それにしても、その変化はあまりにも急激すぎた。

そのときの彼の表情は、まるで――レイが彼と初めて会ったあの日、シーラを助けに行ったときの、そのときの迷いのない姿を彷彿とさせるものだった。

「話があるんだ。……聞いてくれないかな？」

「……」

その言葉に、レイは一瞬の躊躇の後、口元に笑みを浮かべて頷いた。

「ああ。愛の告白以外だったら、な」

ティースはレイを連れて自室まで戻ってくると、椅子を勧め、そして自らはベッドの上に腰を下ろした。

彼をここまで連れてきたのは、もちろんリイナから明かされた“
真実”を話すためだ。

……どう話すべきか、彼はギリギリまで迷っていた。唐突に言っても信じてはもらえないだろうし、もっともらしい根拠を示さなければ逆に突っ込まれることになるだろう。事実を話してしまおうかとも考えたが、昨日、実際にリイナと一戦交えた彼にそれを話したところで、彼女の言葉を信じてもらえる可能性は低いと思った。

だから、ティースは話をでっち上げることにしたのだ。

「ほう……」

椅子に座ったレイは足を組み、ティースが用意した飲み物――さすがにアルコールではないが、それを飲みながら頷いた。

「つまり？ 昨日街を襲撃した獣魔どもは、あの人魔の使役するものじゃないと、お前はそう言いたいわけか？」

「ああ」

「その根拠は？」

当然の質問。

「それは――」

ティースはゴクリと喉を鳴らした。

その挙動をすら、レイの視線は見逃していないように思える。

（この人を……誤魔化さないといけない……）

口の中がカラカラに乾いた。

“明晰”

隊長であるレインハルトⅡシュナイダーについて、ティースが抱いている印象を一つの言葉で表すとしたら、おそらくそれしかない。軟派者であるとか、皮肉屋であるとか、それはもちろん彼のことを語る上で不可欠な言葉だ。が、ナイトに来てから一ヶ月と少し。それだけでないことにはもちろん気付いていた。

たとえ軟派な言葉を述べているときでも、皮肉な言葉を口走っているときでも、そこに必ず付いて回る“明晰”の二文字。

飄々としながら鋭い感覚を持つその視線は、いつでも目の前にいる人物の真意を見抜いているかのようだった。それは考えすぎの部分もあるのだろうが、事実である箇所もおそらく少なくはない。

（俺なんかがいくら考えたって……きつとこの人に及ぶはずはない。だったら——）

気付かれない程度にグツと拳を握り、決意を固める。

（とにかく、堂々と押し切るしかない！）

元来、嘘をつくのが苦手なティースのことである。どう頑張ったところで、完璧な嘘などつけるはずはない。だったら逆に何も考えず、疑う余地もないほどに堂々と嘘をつき、多少強引にでも納得させるしかない。

それが最終的に達した、最善と思える結論だった。

「俺、見たんだ。あの人魔が、一匹の獣魔から女の子を助ける場面を」

「女の子？　どういうことだ？」

「七、八歳ぐらいの女の子が、水の七十五族に追われていたんだ。それを、あの人魔が助けたんだ」

それは事実。

レイの表情が、少し怪訝そうになる。

「お前自身が、それを目撃したのか？」

「ああ」

声が震えないよう腹に力を込めて、強く頷くティース。
だが、

「ほう」

感心の息を漏らしたレイは机に肘を乗せ、頬に拳をついて少し腑に落ちない顔をする。

「お前みたいな直情的な人間が、よくその場面を見守っていられたな。少しは成長したのか？」

「え……？」

「いや、お前のことだ。そんな場面に出くわしたら、後先考えずに飛び出すもんだと、俺は思っていたからな」

「それは……遠かったから、助けに行く暇もなかったんだ」

「ルネッタもそれを見たのか？」

「え？」

「その頃は確か、お前と一緒にいたはずだろ」

「あ、いや……ルネッタさんは、余所見をしていて――」

「余所見？ あの場合で、もっとも手強いはずの人魔から目を離したと？」

ティースの胸の鼓動が速くなる。

「ち、ちが……ルネッタさんは存在自体に気付いてなかったんだ。俺もかなり遠目だったし、そのときはそれが話に聞いていた人魔だとは思わなくて、てっきり街に滞在している旅人が女の子を助けたものだ……でも、後で気付いたんだ。あのときは間違いなく、昨日の人魔だったんだ」

「……まあ、いい」

冷や汗が背中を流れ落ちた。

（こんなことで……どうする……！）

これから、もっと不自然な嘘をつかなくてはならないのだ。この程度のことで怯んではいられなかった。

「で？ 例えばその人魔が元凶でなかったとして、お前は他にどんな可能性を俺に提示してくれるんだ？」

「……」

ここが一番重要なポイントだった。ここさえ乗り切れば、先ほど

の小さなミスなど取るに足らない。

まず、証拠は何一つない。事実、ティースが根拠としているものだって、ただ一つ、リイナの証言だけだ。

それを、何とかして信じさせなければならぬ。リイナ存在を伏せ、もっともらしい嘘をつくことによって。

（小細工は、なしだ）

喉の奥に力を入れ、声が震えないように意識し、視線はまっすぐに見つめ返す。

そして、ティースは結論から答えた。

「パトリシアさんは……おそらくデビルサイダーなんだ」

「……ほう」

レイの反応は意外に冷静だった。が、それはティースの言葉を信用したのとは違う。

「それは突拍子もない話だ。……もちろん根拠はあるんだろ？　なんといいっても、彼女は今回の依頼主で、俺たちを呼び寄せた張本人だ。その辺りの矛盾の答えは、出ているんだろ？」

「もちろん」

それについてはもちろん考えていた。

パトリシアラムステッド。今回の依頼主であり、このラムステッド邸の女主人。

彼女がデビルサイダーであることは、リイナを信じる以上、もはや動かしようのない事実だった。そうでなくば彼女が嘘についているか、あるいは勘違いということになってしまう。

とすれば、当然にパトリシアの行動の動機を考えなければならなかった。

ティースは頭の中で、リイナから聞いた話をもう一度整理する。

まず、リイナは昨日より前に一度、この街を訪れている。それはパトリシア自身の報告にもあったし、レイたちも当然に知っていることだろう。

そのときの真相を、ティースは彼女自身の口から聞いていた。

彼女は旅の途中、人気のない森でパトリシアを目撃し、彼女が立ち去った後に、明らかに自然ではない奇妙な死を遂げた獣魔の死体を発見したのだという。それを問い詰めに向かったのが、一度目の訪問。だが、そのときは逆に魔であることを暴かれ、街の人々に騒がれ、慌てて街の外まで逃げたのだ。

それが十日前の夕方のこと。

そしてその夜に、今度は獣魔が街を襲った。その後も、幾度か。ティースたちが駆けつけるまでに計七回。三十六人の命が失われた。その獣魔はおそらくパトリシアの差し金。

だが、彼女はそれまで、おそらく街の人々に危害を加えていない。いや、加えていたにせよ、それは表に出るほどのものではなかった。とすれば、何故、突然？

その理由を考えるのは、比較的簡単だ。

『……あなたたちのようなデビルバスターはあまりに数が少なく、招こうとしてすぐに、というわけにはいかないようだから——』

ここに来た日のパトリシアの言葉が、ティースの脳裏に蘇る。

（おそらくリイナを殺すために、どうしてもデビルバスターを呼びたかった……そのために、事を大きくする必要があった……）

拳が入る。

もし、その想像が本当だしたら、それはとんでもないことだ。

あまりに自分勝手に、そして到底許せない行為だった。

そしてそう考えてみると、昨日の大規模な襲撃についても説明がつく。

つまり、レイヤルネットたちデビルバスターが見ている前で、事の重大さを知らしめ、そしてなるべく早くリイナを退治するように仕向ける——そう、考えられるからだ。

だが、しかし。

その推理は全て、ティースがリイナから話を聞き、そして彼女のことを信じているからこそ成立するものだ。それをそのままレイに伝えたとしても、単なる絵空事で片づけられてしまうだろう。

だから、それを成立させるために、嘘をつく必要があった。

それは、とんでもない嘘だ。もしもリィナが彼を騙していたならば、それは何の罪もない女性にあらぬ疑いを向ける中傷であり、卑劣な策略の片棒を担ぐものだった。

それを自らの判断と、そして個人的な信頼のために行う以上、その責任はとてつもなく重い。それが嘘だとわかっていて実行する以上、騙されていたからとか、そんなことは何の言い訳にもならない。おそらくはディバーナ・ロウの仲間たちからも誹りを受け、彼はそこにいらなくなるだろう。

だが、

「さっき散歩したとき、町外れの森まで行ったんだ」

ティースは口を開いた。

まるで動じることのない、強い、強い、意志のこもった口調で。

「そこで見た。……薄暗い森の中で、あの人が、獣魔の死体を埋めていた」

「……」

レイは透かし見るような目をしたが、やはり動じることなく続ける。

「昨日の襲撃で倒した獣魔じゃない。だって、それは街の調査機関で処理されているはずだろ？」

「つまり、それはあのパトリシアが個人的に使った獣魔……と、そう言いたいわけか？」

「そう、考えられないかな？」

レイは少し考えて、

「……確かに、お前が散歩に出ている間、パトリシアもどこかに出掛けていたな」

「ああ」

もちろん、その直前に彼女と廊下で鉢合わせたティースはそのことを知っている。

レイは目を閉じた。

数秒。

その間、ティースの鼓動は静かに高鳴っていた。

——もう、後戻りはできない。

「もし、そうだとしたら」

やがて、レイは目を開いた。

「パトリシアが俺たちを呼んだのは、どういう理由だ？」

即座に答える。

「おそらくは、昨日の人魔を殺すため。……あの人魔が言ってたじゃないか。俺たちは、獣魔の命を弄んでいるって」

「……なるほど。昨日の人魔の言葉を信じるとすれば、確かにお前の言っていることの辻褄は合うな」

胸の鼓動がさらに速くなっていく。

——上手くいくかもしれない、と、そう感じて。

「だろ？ あの人魔の目的は、獣魔の命を弄ぶパトリシアさんだった。パトリシアさんは、その人魔をどうにかするために俺たちを呼んだ」

「そのために、動かせる獣魔を使って、街を襲わせた、か？」

「……そう」

一瞬の躊躇い。

だが、それは致命的ではなかったようだ。

「お前の言いたいことはわかった」

レイはゆっくりと椅子から立ち上がると、一瞬の空白を置いて、
「だったら、少し調べてみることにするか」

「……」

胸に、微かな光が産まれる。

（……やった）

少し信じられないほどだった。彼自身、ここまで上手く行くとは考えていなかったのだ。

（これで、リィナの疑いは晴れ——）

だが、その直後。

まるで、彼の緊張の糸が緩む瞬間を狙ったかのように、レイは呟いた。

「ところでティース。……不自然だとは思わないか？」

「え？」

びっくりして目を見開いてティースに、レイは続けて、

「たとえば……パトリシアが、どうしてわざわざこんな大事なときに、死体を処理するために森に行ったのか」

「え……？」

「どこかに獣魔を隠しているなら、その死体の一時的な隠し場所ぐらゐあるはずじゃないか？　なら、俺たちが帰ってからでもいいはずだ。……そういや、妙だな」

レイは腕を組んで、さらに続けた。

「お前は確か、散歩に行く前にこういう類の主張をしたな。『あの人魔を野放しにしているで大丈夫なのか』と。……いや、これは俺の勝手な推測だったが、後の受け答えから考えると凶星だったはずだ」

「え……そ、それは――」

畳みかけるような言葉に、頭は熱くなって混乱を始める。

「なら、“水の七十五族から女の子を助けた人物”とあの人魔が同一だと気付いたのは、今日の散歩中か？　それまた、随分と鈍感だったな。……散歩といえば」

目を閉じたレイは、まるでそらんじるように宙を見上げて、

「街の様子はどうかだった？　あれだけ長い散歩をしたんだ。街の外れに寄り道していたといっても、それなりに眺めて来ただろう？」

警邏の連中にも会っただろう？　……ちゃんと俺のアドバイス通りにしていたか気になってな。奴ら、全部が同じ人数で歩いてただろう？　何人一組で歩いていた？」

「あ……え、えっと……」

不測の事態に慌てながらも、ティースは懸命に記憶を辿る。

（落ち着け、落ち着け……落ち着いて思い出せ――）

警邏が街を見回っているとはいえ、基本的に外を歩いている人間

は少なかった。それに彼の目的地は町外れの蔵だったから、街の中心を見回っている警邏隊とは一度も出会っていない。

が、幸いにも、遠目に一組だけ目撃した記憶があった。

（確か……五、六、七……七人。七人だ）

思い出し、それが間違いないことを頭の中でもう一度確認すると、
「七人……そう。そういや、会った警邏隊は全部が全部七人一組で動いてたなあ。……そっか。何か妙だと思ったんだけど、あれって全部レイさんの指示だったのか」

ホッと息を吐きながら答えたティース。

「いや」

だが、レイは真顔で答えた。

「冗談だ」

「……え？」

「いや、お前が会った警邏隊は、たまたま全部が七人一組で動いていたんだろうさ。見回りも、伝令も、様々な任務に従事する奴らが全員、な。……不便なこともあるだろうに。律儀なことだ」

「――」

絶句。

暗い影が、ティースの胸に去来する。

（ああ――）

おそらくは、最初から見抜かれていた。

度胸を定めて口にした渾身の嘘は、もちろん全ての綻びを埋めていなかった。そしてレイはその態度に惑わされることなく、畳みかける言葉で彼の冷静な判断力を奪い、さらなる綻びを彼自身の口から引き出したのだ。

――終わった、と、ティースは思った。

レイはおそらく次々に矛盾点を突いてくるだろう。そしてやがてはその嘘の理由を考え始める。次に、その理由を探るために、彼の行動を調べるだろう。二度目の外出は気を付けていたが、一度目の外出――偶然、蔵に辿り着いたときのことは何らカムフラージュし

ていない。そこを辿っていけば、リィナの潜む蔵が見つかるのは時間の問題だ。

「……まあ、いい」

「へ？」

呟いた言葉に、ティースは間抜けな声で顔を上げる。意外そうなその視線の先で、レイは首筋を掻きながら言った。

「お前は俺の部下で、俺はお前を部下にすることを承認した。……だったら、理由もなく一度ぐらい信用してみるのも面白い」

「……」

ティースは一瞬言葉を失って、

「……レイさん……」

あまりにも意外なその言葉に、戸惑うとともに、じわっと、胸に溢れるものがあった。

が、それを味わう間もなく、

「その代わり、交換条件だ」

「？」

「そうだな……」

レイは少しでも考えた後に、ティースの目を覗き込むように見つめながら、先ほどまでとは一転、軟派な笑みを浮かべる。

「帰ったら、あの王女様とデート、ってのはどうだ？」

「王女様……？ ……って、まさかシーラと！？」

「ああ」

事も無げに答えたレイに、ティースは狼狽して、

「そっ、それはちょっと……そ、それに、あいつにはちゃんと恋人が――」

「あれだけの美人が、どうでもいいような一般人と付き合ってるってのは、重大な社会の損失だ。俺がこれからその補填をしてやるでしょう」

「そ、そんな！」

この人なら本当にやりかねない、と、思った。それが彼女にとって

ていいことか悪いことかはともかく――

「う……うう……」

悩むティースの顔を、レイはどこか楽しげに見つめていた。

「で、でも……例えば俺が了承したところで……その、つまり、俺にはあいつに言うことを聞かせる権限なんてないわけで――」

「ほう」

レイは彼らの関係を思い出したのか、苦笑して、

「ま、それもそうだな。なら、諦めるとするか」

「え？」

ティースが顔を上げると、

「じゃ、代わりにこいつだ」

「？」

ポンと投げ渡されたのは、金属製の、手の平と同じぐらいの大きさのカード状のものだった。

「これは……？」

その中心には、重なり合う六つの剣――ミューティレイク家の紋章が描かれている。

「便利なもんだが、ずっと持ち歩いているのはなかなか苦痛でな。ネービスに戻るまで預かっていてくれ」

「……？ あの一――」

だが、次にティースが質問しようとしたとき、レイはすでに立ち上がって背を向けていた。

「じゃあ頼む。大事なもんだ、無くさないでくれよ」

ボタン、と、ドアが閉まる。

「……レイ、さん？」

結局、ティースはカードを握りしめたまま、呆然とその後ろ姿を見送るだけだった。

「――人が悪いね、隊長も」

「盗み聞きしていたお前も、な」

部屋の外では、白衣姿のマイルズが腕を組んでレイを待っていた。表情に浮かんでいたのは、どこか呆れたような色。

「気付いてたのに咎めなかっただろ？ 勝手に許可と取ったんだけど、悪かったかい？」

「いや、構わんさ」

「それは良かった」

背を向けたレイの後を、白衣のポケットに両手を入れたまま歩いて、

「部下だから、信じる、か。……なかなか感動的な台詞だけど、隊長の口から出たとなると途端に胡散臭くなるね」

「そりゃひどいな」

「……そんな性格、してないだろ？ 僕やギレットさんのことだって、未だに全然信用してないくせに」

「いや、信用してるさ。アオイの時間感覚と同じぐらいには、な」

「あらら。想像以上に信用されてないねえ」

マイルズは苦笑しながら、

「でも、これで隊長の根拠の薄い推測が立証されたかな。……ま、最初から不自然だったからねえ。それだけの力を持つ王魔が、一度街の人に追い払われた、なんてさ。あっちが本気だったら今頃、ネスティアスが出向くほどの大事件になってるはずだよ」

それからチラッと、たった今、レイが出てきた部屋の方角を見や
って、

「ティースくんがどんな経緯でその考えに辿り着いたかはともかく
――」

「経緯、か」

レイは考えるまでもなく答えた。

「十中八九、昨日の魔に接触してるな。でなきゃ、あんな嘘をついてまでパトリシアに狙いを定める理由がない」

「なるほど。……にしても、ティースくんも随分あっさりと陥落したものだねえ。最近の様子を見る限りじゃ、下手したらもう修復不

可能かと思っていたんだけど」

「なにか劇的な変化があったんだろ」

「誘惑された、とかかい？」

「だとしたら、羨ましい限りだ。王魔に誘惑された人間なんて、歴史を紐解いてもそうそういるもんじゃない。……ま、あれだけの女だ。中身はひょっとしたらゴリラみたいな顔かもしれないがな」

「僕の先入観によると、神魔と王魔ってのは全部美男美女なんだけどねえ」

「ホントにそうだとしたら、ティースのヤツにはもったいない」

レイは笑いながら自室のドアノブをひねった。マイルズはポケットに手をつっ込んだまま、部屋の中で振り返った彼と視線を合わせる。

笑っていた表情が、少しだけ真剣になった。

「……隊長はどう思う？ ティースくんとあの王魔のこと。事情はわからないけれど」

「それはパトリシアのこととはまた別問題だな」

扉を閉めようとして、レイは思い出したように答える。

そして……そこに続いた言葉は、冗談でも何でもなく、おそらくは真実。

「あいつがもしも王魔を庇おうとするなら、厄介だ。……そのときは、俺が面倒くさい役を引き受けなきゃならなくなるかも、な——」

その6『無情の剣』

二日後の昼過ぎ、ラムステッド邸の周囲は騒然とした空気に包まれていた。

怒号と悲鳴。

屋敷の周りは百人以上にも及ぶ警邏隊によって囲まれ、そのさらに外側を取り囲むように野次馬らしきものが集まっている。怒号は主に、野次馬たちの中から聞こえる。中には泣き声のような叫びも入り交じっていた。

そして屋敷の内側……その入り口に近い場所には、この騒ぎの原因を作ったと言っても過言ではないだろう。ディバーナ・ナイトの隊長、レインハルトⅡシュナイダーの姿。

腕を組み、開け放たれた玄関を見つめるその視線の先では、一人の女性が複数の警邏隊に連れ出されるところだった。

獣魔を操り、人々を大量に殺害した罪で捕らわれた屋敷の主人、パトリシアⅡラムステッドだ。

その姿が衆目にさらされるなり、人々の怒声がひととき大きくなった。

パトリシアは無言と無表情でそれに応えようと、一瞬、その視線がレイの方へと向けられたが、すぐに興味なさそうに視線を正面に戻す。

「……大した人っすね」

それを見つめながら、レイの隣で感心したような声をあげたのはパシヴァルだった。

「誰の協力もなしに、自分の屋敷の地下にあれだけの獣魔を隠していたなんて」

パトリシアの後ろ姿は、人々の罵声にさらされながら徐々に遠ざかっていく。

「ま、よほどの執着があったんだろうな」

答えるレイの口調はひどく素っ気ない。事実、彼女がどうしてもその道に走ったかなどということは、彼にとっては何の興味もないことだった。

「にしても、随分とあっさり捕まったっすね。もしかしたら結構抵抗するかも、なんて思ってたんですけど」

「俺たちを呼んだ時点で、覚悟はしていたんだろ」

そう言うのと、レイはパーシヴァルに背を向けて屋敷の奥へと戻っていく。パトリシアが抵抗しなかった以上、彼がこれ以上それを眺めている必要はなかったのだ。

その途中。

彼を呼び止める人物がいた。

「どういう……ことですか？」

足を止め、レイは振り返って答える。

口元にはいつもの飄々とした笑みを浮かべて。

「見ての通りさ、ルネッタ。俺たちの依頼主は、どうやら自らが獣魔を操るデビルサイダーだったようだ」

「そんな馬鹿な！」

当然、これまでの話の流れはルネッタも理解している。

が、それでも納得できない顔で、

「私たちは、この目で人魔の存在を確認しているではないですか！」「いつもの穏やかな口調はなく、飛び出した言葉は苛烈に彼を問い詰めた。」

だが、レイはいつも通りに軽く流して、

「何にしても、屋敷の地下には多くの獣魔が飼育されていた。パトリシアはそこに頻繁に出入りしていた。そして、本人もそれを認めた。これらは全て疑いようもない事実だ」

「っ……しかし」

それは認めざるを得なかったのだろう。ルネッタは少し声のトーンを落として、

「それでも、その陰に人魔が潜んでいたこともまた、紛れもない事

実です。……私たちの任務は、まだこれからではないのですか？」

「悪いが」

だが、レイは彼女に背を向けながら答えた。

「俺が受けた依頼は、この街に出没する獣魔の退治と、それを操っている存在の発見、及び排除でな。その人魔とやらを探す理由は、こっち側にはない」

「な——」

「そいつが今、この俺の目の前に現れたってんなら話は別だがな。どうしてもやりたいなら、君だけで勝手にやるといいさ」

「あなたは……あなたは、それでもデビルバスターなのですかッ！？」

感情を露わにするルネッタ。

レイは肩越しに振り返って、やはりそこに皮肉な笑みを浮かべた。

「文句なら、デビルバスター試験の試験官にでも言ってくれ」

「……」

ルネッタは唇を噛んだ。

——彼女の胸に溢れていたのは、途方もない腹立たしさだ。

パトリシアが捕まったこと自体は、特に親しかったわけでもない彼女にとって感じることはない。が、このレイという——どこか女を小馬鹿にしているような態度の男に出し抜かれたことが悔しくて仕方がないのだ。

……もつとも、彼が小馬鹿にしたような態度を取るのは男女問わず、単に相手次第というところなのだが、男に対する対抗意識の強い彼女にしてみれば、そう勘違いしてしまったのもムリからぬところか。

「……」

だが直後、ルネッタはほんの僅かに笑みを浮かべた。

そして去っていくレイの背中に言い放つ。

「私は……一人でも、あの人魔を見つけ出してみせますよ。もしかしたら、手がかりになるかもしれない情報も手に入れましたから」

「……」

レイは何も答えない。

その背中、ルネッタの遠ざかっていく気配があった。

……屋敷に足を踏み入れて、天井を見上げる。

そして、独り言。

「ティースの奴は、また出掛けたらしいな。……浮かれるのはわかるが、もっと慎重にやってほしいもんだ」

窓から外に目を向けると、昨日までとは打って変わって空は晴れ渡り、十一月にしては暖かな陽気。遙か遠くまで見渡せそうな、眩いばかりの陽光が外を支配している。

「とはいえ……どんな強大な力を持つ王魔も、何も食わずには生きていけない……か」

ぼそりと呟いて、小さくため息をつく、この後に起こりうる“もう一つの騒動”を予感しながら歩みを再開するのだった。

夕方。

「リィナ」

「ティース様」

振り返ったリィナは本日三度目の訪問にも関わらず、相変わらずの弾んだ笑顔でティースを出迎えた。

小さな窓から射し込む光はすでにオレンジ色に変わっており、さすがに風も冷たくなっている。この屋根裏も少し冷え込んでいたが、まだ耐えられないほどではない。

「ほら、夕食分のパン。……本当はもっとバリエーションのあるものを持ってきたんだけど――」

「あ、いえ。私はこれで充分です」

二つのパンを受け取って、リィナは胸の前で手を組んだ。

食事の前にこうして祈るのは彼女のクセ……というか習慣だ。テ

イースの古い記憶の中の彼女も、確かに同じことをしていた。

その変わらない行動にも、懐かしさと同時に不思議な喜びを感じながら、

「でも、まだそんなにお腹空いてないだろ？　あまり夜遅いとさすがに怪しまれるかと思っ、今日は少し早めにきたんだ。……まあ、さっきも言った通り、パトリシアさんが捕まって解決ムードだから、俺の動きなんか注目してる人はいないと思うんだけど」

「私のことを捜している方は、もういないんですか？」

問いかけに、ティースは少し考えて、

「全く捜してないってことはないと思う。でも、少なくとも俺たちの部隊はもう動いていないし……いや、それどころかレイさん——隊長はきつと、俺がこうして君と会っていることに気付いていると思う」

「レイさん……あの人ですか」

一昨日、彼と戦ったときのことを思い出したのだろう。目が少しだけ真剣になる。

「あの圧迫感、とても人間とは思えませんでした。恐ろしい人ですね」

「恐ろしい、か。確かにそうかもしれない。でも、いい人だよ」

「……」

それでもリイナは真剣な視線を床に落としたままだった。

（そりゃ……リイナにしてみれば、むき出しの殺意をぶつけられたわけだから、仕方ないか……）

ただ、今ならレイは決して彼女を殺そうとしたりはしないはずだと、ティースはそう信じている。もしそのつもりであれば、もっと早くに自分を問い詰め、この場所を探り当てているはずだったから。

そして、

「リイナ」

ティースは話題を変えることにした。

「君は……これからどうするつもりなんだ？」

そう尋ねる。

こうして無事に再会を果たし、事件も解決に向かっているとはいえ、諸手を挙げて喜んではいられない。彼女は魔である。昔は子供だったからこういった場所に長期間隠れ住むことも可能だったが、今はそういうわけにいかないだろうし、何よりそれではあまりに不便だろう。

それにそもそも、何のためにこっちに出てきたのかということも、まだ聞いていなかった。

「もしすぐに向こうに帰るつもりなら、せめてシーラに一目だけでも会って――」

だが、リイナは顔を上げて、躊躇うことなく答えた。

「いいえ、ティース様。私は、こっちの世界で暮らすつもりで来たのです」

「え？」

当然ティースは驚いて、

「こっちの世界で暮らすって……で、でもリイナ。君は向こうの世界に家族もいるんじゃない……」

「……ティース様」

リイナは再び視線を落とした。

「ティース様はもちろん知らないことでしょうけれど、向こうの世界の私たちの生活は、こちらの世界に比べて、とても寂しいものなんですよ」

「……寂しい？」

怪訝な問いにリイナは頷いて、視線を横に泳がせた。

言葉通りの寂しさが、その横顔を染める。

「人から“王魔”と呼ばれる私たちの種族は、生まれ付き強大な力を持っています。大昔から魔界における富の大半を保有し、何の不安もないから、争う必要もない。黙っているだけで、死ぬまでを平穩に暮らすことができるんです」

「？」

理解できずに、ティースは首を傾げた。

「争う必要がなくて、平和なら……どこが不満なんだ？」

「ティース様」

リイナは首を横に振って、力無く答える。

「何もしなくてもいいということは、とても楽なことです。……でも、それは同時に、生きている実感すらも無くしてしまうということなんです？　何もなくていいから、努力する必要もない。協力する必要がないから、仲間も必要ない。友達も、恋人も必要ない。ただ種族を絶やさないために結婚はしますが、誰かを必要とすることも、誰かを愛することもないんです」

「……」

そこまで言われれば、彼女の言葉の意味がティースにも理解できた。

それは確かに寂しいことかもしれない、と。

リイナは続けた。

「私は偶然この世界に流されて、世界に“敵”がいることを初めて知りました。空腹を抱え、寒い森の中を歩いていて、獣に襲われて……何もしなければ、傷つき死んでしまうことを知りました。そして――」

そして真っ直ぐにティースを見る。

「あなたとシーラ様に出会って、初めて他人を必要とし、必要とされることを教わりました。だから、今度は私が二人の役に立ちたい。そして二人から必要とされたい……そう思っただけです」

「……」

子供の頃、彼女と一緒に過ごした二年間。彼女にとっても、それはティースと同じ……いや、おそらくそれ以上に大事な時間だったのだろう。

「……そっか」

胸が詰まる思いだった。

誤魔化すように、ティースは笑う。

「でも、そこまで言われると、逆に気が引けるなあ。そんなに大したことをしたつもりはなかったから……」

リイナは微笑んで、

「もちろん一番の理由は、ただ二人にもう一度会いたかったということですけど……そういう気持ちですらも、二人に出会わなければ知らなかったことなんですよ？」

ティースはますます照れてしまった。

が、すぐに、そこに付随する重要な問題を思い出して、

「で、でも、リイナ。そりゃ俺だって、君が近くに来てくれれば嬉しいとは思うけど、でも君は――」

その視線が彼女の耳へと向けられる。

尖った、耳。

それがある以上、この世界で普通に生活するのは困難だ。もちろん、それは彼女だってわかっているはずだった。

「ええ。……ですから、ティース様とシーラ様お願いが――」

リイナがそう言いかけた、そのとき。

……キイツ。

「！」

耳に届いた、軋む音。

(……誰か入ってきた!?)

咄嗟に口を噤むティース。反射的にリイナを見ると、どうやら彼女も察したらしく、同じように口を閉ざした。

微かな足音。

何者かが蔵の中に入ってきている。

心臓の鼓動が速まった。

(……まさか。誰だ……?)

隠し扉は閉めてきた。が、そのスイッチはそれほど巧妙に隠されているわけではない。もし入ってきた人物が、最初から“何か”を捜して入ってきたのだとしたら、見つかるのは時間の問題だろう。

「……」

呼吸音さえも押し殺し、二人は足音が立ち去るのを待った。

そして数秒……ふと、足音が消える。

（行った、か？）

だが、その直後。

……カコン。

「！」

ティースはリィナに目配せすると、階段の方へゆっくりと移動する。

手の平が汗を掻いていた。

そして、階下からの声。

「ティースさん」

「！」

聞き覚えがあった。

（ルネッタさん……か……）

「降りてきなさい。あなたがそこにいることはわかっています」

「……」

その声は確信を秘めていた。おそらくは後を付けていたのだろう。相手が彼女なら、ティースが尾行に気付かなかったのも無理はない。

（なんとか……誤魔化すしかない）

リィナと視線が合う。

不安が過ぎっていた。

右手を向け、じっとしているように指示すると、階段を下りていった。

「ルネッタさん」

「……」

階下から彼を見上げるルネッタの視線は、まるで突き刺すような色を帯びていた。手はすでに腰のレイピアにかけている。

それに気圧されながらも、ティースは狭い階段を下りながら言葉を続ける。

「どうしたんですか？ ……こんなところまで――」

ルネッタの言葉が冷たくそれを遮った。

「芝居は必要ありません。そこに、もう一人いますね？」
ティースは足を止めて、

「……なにを言ってるんです？　ここには俺しか――」

「……」

視線が外れ、ため息とともに下を向く。

そして再び顔が上がって――

「出てきなさい」

「――！」

心臓の鼓動が跳ね上がる。

――いつの間にか、喉元にレイピアの切っ先が突きつけられていた。

背筋が震えて、背中にドツと汗が噴き出す。

（……モーションが……ない……!!）

レアスやアクア、それにレイと稽古をしたときの……それ以上の威圧感。もちろん稽古とは状況が違うにしろ、それでも彼女の實力はティースなどがとても太刀打ちできるものではなかった。

「出てこなければ、彼が痛い目に合いますよ」

ルネッタの言葉は完全に確信を秘めて、階上に向けられていた。

それでもなお、ティースは言葉が続ける。

「ルネッタ……さん。なんの、つもり――」

「……」

ルネッタの視線が細くなつてティースを捕らえる。

と。

「待ってください」

背後から、決意を秘めた声が聞こえた。

（……リイナ……）

振り返ることすらできない状況で、ティースは絶望に身を震わせる。

ルネッタがリイナを捜していた理由。それは考えるまでもない。

おそらくは決着をつけるためだろう。

「今、降ります。その前に、剣を収めてください」

「……来なさい。話をするには、ここは狭すぎます。……逃げようとしても無駄ですよ」

ルネッタは剣を収め、そして階下を離れた。

「ティース様。……ご無事ですか？」

「あ、ああ……でも——」

振り返ったティースは、リイナの姿に驚き、目を見開いた。

「リイナ、きみ——」

「はい」

頷いたリイナは尖った耳も形を変え、その姿は人間と同じものだった。

（……そうか。人に姿を変えて……でも——）

一瞬だけ安堵したティースだったが、すぐにその胸を暗いものが覆い尽くす。

（どれだけその姿を保てるのか……それに、ルネッタさんの剣幕を見ると……それで誤魔化せるかどうか……）

二人が蔵から出ると、ルネッタが夕日を背負うように立っていた。薄暗いところから出たせいか、夕日が少しだけ眩しい。

町外れだけあって、辺りは閑散としていて人影の一つもなかった。ただでさえ、今はパトリシアの件で街の中心に人が集まっている。こんな辺鄙なところにわざわざやってくる人間がそうそういるはずもなく。

そして開口一番、ルネッタは言った。

「元の姿を見せなさい。誤魔化そうとしても無駄ですよ。あなたたちが短い間、魔力によって人に姿を変えられることぐらい知っています」

リイナは答える。

「いいえ。これが、私の本当の姿です」

「ふざけたことを……」

「ルネッタさん」

ティースは口を挟んだ。

「何を言ってるんですか。彼女は普通の――」

「……どうやら、話しても無駄のようですね」

ルネッタがため息を吐いて、視線を落とす。

（……！）

その仕草を見て、ティースの頭を電流のようなものが駆け抜ける。

――迸った、一筋の煌めき。

「っ――！」

響き渡る、甲高い金属音。

「……」

ルネッタの視線が、明らかな怒りを込めてティースに向けられた。

「ティースさん。なんの、つもりですか？」

「ルネッタさん……こそ」

リイナに向かって伸びたルネッタの切っ先は、ティースの剣によって阻まれていた。

咄嗟に反応できたのは、先ほど一度彼女の剣を見たことによって、その行動を予測し、一足早く動き始めていたおかげである。

「そこを退くのです。騙されているだけなら、ただの愚か者で済みます」

「……」

キリッ……と、金属同士が微かにこすれ合う。

「しかし、全てを知っていて庇うのであれば、あなたはパトリシア
Ⅱラムステッドと同様の罪に問われますよ」

「――」

確かにその通りだ。いくらティースがリイナを庇おうとも、魔である彼女を信用してくれる――彼女が黒幕でないと信じてくれる人間はまずいないだろう。

だが、彼は全く揺らぐことなく答えた。

「俺には、あなたが何を言っているのか、わからない」

「……」

ため息が漏れる。

「わからない男ですね」

ふっ……と、ルネッタの体から力が抜けた。

刹那。

「？」

風が通り過ぎた。

そう、思った。

——だが、直後、

「ああっ！！！！」

「ティース様っ！」

全身を襲ったのは、無数の痛み。

頬、肩、腕、脇腹、太股、足首……そのあらゆるところの皮膚が裂け、そこから少量の血が溢れ出る。

「全て浅い傷です。……あなたの将来を奪う傷は一つもない。数日で完治するでしょう」

ピッ……と、血が地面に跳ねた。

ルネッタの握るレイピアの切っ先は、微かに血に汚れている。

「でも、次の一撃は、あなたの利き腕の自由を奪います。その次の一撃は、あなたから自由に駆け回る能力を奪うでしょう。……ティースさん。今のうちに、そこを退けた方があなたのためです」

「くっ……！」

「退けないつもりですか？」

それでも剣を構える彼を見て、ルネッタは理解できない顔をする。

「何故？ どうしてその魔を庇うのです？」

「何故……だって？」

頬から血を流し、衣服の一部を血に染めてもなお、ティースはルネッタを睨み付け、声を張り上げて答えた。

「この子は……この子は俺の友達だ！ 友達に向けられた剣を、黙って見過ごすわけにいくかよッ！！」

「その魔が、友達？」

ルネッタは理解できない顔で首を横に振る。

「どうやら、あなたは危険な思想を持っているようです。……ここで、将来を奪っておいた方がよさそうですね」

「――！」

くる、くる、と、レイピアの先が小さな円を描く。

（来る――！）

全身を襲う痛みは無視できなかったが、幸い、体の自由は充分に利く。

風を切って、レイピアが空を裂いた。

――見えない。

（でも、次は利き腕を狙ってくるはず……なら――！）

狙いさえわかっていれば、防ぐことは可能なはずだった。

右腕を狙ってくるレイピアの軌道を読み、そこに向かって細波を叩きつける。

――だが。

（え……っ！？）

レイピアの軌道をかろうじて認識はできた。

だが、動きにはついていけない。

――レイピアは右腕ではなく、ティースの左腕に向かって伸びてきていた。

（騙された――っ！？）

気付いたときにはもう遅かった。

正確無比なルネッタの一撃は、ティースの左腕……その要となる部分を切断するべく、伸びてくる。

「――っ！！」

だが、その瞬間。

突如、空気が震えたかと思うと、大きな質量を持つ何かが、二人の間に着弾した。

「くっ……！！」

ルネッタの足が地面を蹴って、レイピアの切っ先が離れていく。
が、その衝撃は彼女だけではなくティースにも及んだ。

「くうっつー！」

衝撃に吹き飛ばされ、バランスを崩して尻餅をついた。腰から突き抜けるような痛みが走ったが、幸い、それほどダメージではない。

だが――

「正体を、現しましたね」

素早く体勢を立て直したルネッタが視線を横に滑らせる。

「……リイナ」

振り返ったティースの視線の先で、リイナは片手を広げていた。

目線はルネッタを捕らえ。

その体からは見紛うことなき魔力が迸り。

耳は……尖っている。

ついに正体を、さらしてしまったのだ。

「リイナ……どうして――」

「……」

彼の問いかけに、リイナの右の目尻が微かに震える。

「もう、誤魔化しきれとは思えませんから」

「で……でも――」

「もう、いいのです。ティース様」

その言葉は不思議なほどに淡々としていた。まるで感情のこもっていない、口調。

――違和感。

「リイナ……？」

不思議な感覚が、ティースを襲う。

「残念です」

そこに立つ、彼のよく知っている少女は、今、明らかな“違和感”を纏っていた。

「もう少しで、あのレイという男に上手く近付けたのに……」

「え？」

彼女のその言葉が理解できず、ティースは眉をひそめた。

「リイナ？ 何を言って――」

その言葉を遮ったのは、ルネッタだ。

「だから、言ったでしょう」

レイピアを構え、それをゆっくりとリイナの方へと向ける。

「ティースさん。あなたは騙されているのです」

「……騙されている？」

ルネッタに怪訝な顔を向け、すぐにそれをリイナの元へと戻して、

「リイナ？ ……何の冗談だ？」

乾いた笑みを浮かべるティース。

「……」

だが彼女は何も答えず、彼に視線を向けようともせず、ただじつとルネッタの一挙一動を見つめていた。

警戒を強めたその目に、先ほどまでの暖かな色――ティースが安堵を感じたその面影は微塵も残っていない。

不機嫌そうに目尻が震える。

（リイナ……？）

ルネッタは半身に構え、そんなリイナを真っ直ぐに見つめると、

「昨日のことで私が彼より格下に見られているのだとしたら、少々不愉快ですね」

「彼……？ レイ……さん？」

「……」

リイナはティースを一瞥もすることなく、ルネッタに向かって答えた。

「私の壁を破れるのは、あのレイという男だけです。……あなたでは相手になりません。素直に、引き下がった方が良いのではないですか？」

「……言ってくれる」

その言葉に自尊心を傷つけられたのか、ルネッタは声を低くした。

小刻みに動いていたレイピアが、ピタリと動きを止める。

「だったら……試してみるといい！」

ルネッタの足が動いた。

「っ……」

挑発していた言葉とは裏腹に、リィナの表情が緊張に染まる。

——そのレイピア自体が以前と違うことに、彼女も気付いていたのだろう。ルネッタの力は決して侮れるものではなく、武器の相性次第では、彼女の魔力の壁を破る可能性は充分に残されていた。

ルネッタもちろんそれを考え、おそらく通用すると判断して挑むのだろう。

風が、裂ける。

まるで重力を無視したような軽く素早い動きで、ルネッタのレイピアはリィナの心臓を目掛けた。

対するリィナも万が一を考えたのだろう。右腕に魔力を集め、それを真っ向から迎え撃つ構えだ。

直後。

「!？」

辺りに響いたのは、レイピアがリィナの体を貫く音でもなく、魔力の迸りによる轟音でもなく――

「なっ……!？」

またもや、甲高い“金属音”だった。

驚きの声を上げたのはルネッタ。

いや。

「えっ……?」

それはリィナも同じだった。

「……何度言ったら……わかるんだ」

その口からは、荒い息が漏れている。全身の傷は、浅いとはいえ彼の体力を少なからず奪っていたのだろう。

だが、それでもなお、彼の剣は先ほどと同じようにリィナを庇っていた。彼女に襲いかかろうとするレイピアの切っ先を止めていた。

「ティース様——」

「何故——」

リイナの驚きの声と、真意を問い質すルネッタの言葉に、ティースは剣を合わせたままギリッと奥歯を噛みしめる。

そこに、迷いは一切ない。曇りのない瞳で、ルネッタを睨み付け、言った。

「彼女は俺の友達だ。……傷つけるのは、許さないとやったはずだ」

「……馬鹿な！」

理解できない、という顔でルネッタは叫んだ。

「あなたはさっきの言葉を聞いていなかったの！？ 利用されているのよ！ 騙されているのだと、いい加減に理解しなさいッ！！」

「……」

ティースは眉間に皺を寄せる。

ギリッ……と、金属が再び擦れ合う。

「騙されてなんかいない」

「なにを……！」

「リイナ」

ティースは視線をルネッタから動かさないまま。

「……君が無理に嘘をつくときのクセ、俺はちゃんと覚えてる。やつぱり、君はちっとも変わってないよ」

「嘘……？ 嘘なんかじゃ——！」

反論しようとしたその瞬間、不機嫌そうに歪めたその目尻が微かに震えた。

「……あ——」

ハッとする彼女に、ティースの口元にはこの場にそぐわない笑みが漏れる。

「だから、聞いたんだ。何の冗談だ、って」

そして表情を再び引き締めると、

「ルネッタさん」

「っ……！！」

ティースは視線を戻し、レイピアを弾いてゆつくりと細波を構える。

「リイナは人間ですよ」

眉をひそめるルネッタ。

「なにを……？」

「リイナは仮装するのが大好きなんです。あの耳は、作り物です」

「……ふざけたことを」

ふざけた言い訳だというのは、良くわかっている。

だが、それでもなお、ティースは言い張った。

「本当のことです。一昨日、あなたが戦った人魔は、もうどこかに行ってしまったんです」

「……」

「それでも、リイナに危害を加えようとするなら——」

グッ、と、細波を持つ手に力が入る。

「俺が、あなたを止めます」

決意の瞳には一点の曇りもなく、その口調には決して揺らぐことのない意志が込められている。

それほどに、彼はこのリイナという少女を信じていた。

たった今、彼女が咄嗟に自ら汚名をかぶろうとしたのを見て、信じる気持ちをさらに強めていた。

彼女を疑う理由など、もはや彼の心のどこを探したとしても見つかりはしないだろう。

「……」

ルネッタは目を細めた。

彼が本気だということが、彼女にも容易に理解できたのだ。

「……ティースさん。あなたは——」

言いかけて、止める。

彼女にしてみれば、目の前にいるのは所詮デビルバスター候補生。デビルバスターとしてそれなりに経験を積んだ彼女にとってはまるで話にもならない相手だ。が、かといって、彼を完全に無視して後

ろのリイナに攻撃することはさすがに難しい。

そこまで考え、

「……わかりました」

ルネッタは諦めたように、大きくため息を吐く。と、同時に、全身から発していた闘気が、まるで風船がしぼむように消え失せた。

気配すら、消えてしまったかのように。

「ルネッタ、さん」

ティースの顔に、微かな喜色が浮かぶ。

——だが、直後、ルネッタは小さく呟いた。

「愚かな男……あなたは、死んでしまいなさい」

「え——」

「ティース様ッ！！！」

右手に軽い衝撃が走るとともに、そこにあったはずの重みが消えた。

「……え？」

宙を舞う、細波。

先ほどのまでの迸る威圧感を感じない。

代わりにあったのは、まるで静かな、研ぎ澄まされた針のように鋭い殺意。

「っ——」

彼女は本気だった。そして本気であれば、ティースなど彼女の敵ではあり得なかった。

そこには、リイナの援護が入り込む隙間もなく、無重力の動きで、正確な一撃が心臓を捕らえる。

（——っ！）

声を上げることもできずに、ティースはただ、妙にスローモーションな切っ先を見つめていた。

体は動かない。

ドクン、と、心臓が鼓動を打つ。

風が吹く。

“回避不可能の死”

それを予感した、オレンジ色の光の中。

——巨大な“何か”がティースの背後を襲ったのは、その瞬間だった。

「っ！！！」

爆発音、と言っても過言ではない衝撃。

巻き上がる砂埃。

「なっ——！」

止まっていた世界が突然に動き出した。

ルネッタの驚きの声が聞こえ、レイピアが再び間一髪のところまでティースの体から離れていく。心臓はどうやら無事のようにだったが、それを安心している暇などなく、

「なんだ……うわっ！！」

彼の背後で轟いた爆音は、地面の土を大量に舞い上げ、砂埃がその場にいた全員の視界を奪った。

「っ……仲間か……っ！？」

ルネッタはどうやら、別の魔の襲撃だと思ったようだ。

だが、それは違う。

「……え？」

煙が晴れたとき、振り返ったティースの視界にいたのは知っている人物だった。

その地面には直径四メートルほどのクレーター。

そして、

「ちっ……」

舌打ちをしたのは、そのクレーターの中心に剣を振り下ろした男。レイだった。

……一体どうすれば、剣でこれほどのクレーターができるというのだろうか。

いや、それよりも——

「レイ、さん……」

ティースの言葉は震えていた。

だが、それは喜びでも感謝の言葉でもない。

確かに、レイの発生させた爆風は彼の命を救っていた。だが、もし彼の命を救うのが目的であれば他にやりようはあるだろう。

もちろん、目的は別のところにあったのだ。

「……リイナ!!」

レイが振り下ろした剣の先……その近くにはリイナがいたはずだった。

その一撃の威力に、彼が最悪の結果を想像したのは無理もない。だが、

「っ……ティース様……」

砂埃が晴れて、リイナの姿が視界に映る。

左腕を押さえていたが斬られた様子はなく、見たところ、それほど大きなダメージは見当たらなかった。

「リイナ……」

ひとまず安堵する。が、状況が好転したわけではない。

「やれやれ、勘のいいやつだ」

レイは不本意そうな顔でゆっくりと立ち上がった。そして“夜叉”の切っ先を険しい表情のリイナに向けると、

「まあいい。今度こそ、逃がさないぜ」

「ま……待ってくれ、レイさん!」

ティースは慌てて口を挟む。

どうやら、事態は最悪の事態に陥ってしまったようだった。

「……」

レイの視線が動いた。

それに対し、必死に訴える。

「彼女は……リイナは違うんだ! 彼女は――!」

「こいつは魔だ」

だが、レイはまるで取り合わず、すぐに視線をリイナへと戻した。
「で、俺はデビルバスターだ。デビルバスターってのは、魔を退治

するもんだ。……わかるか、ティース？」

「そ、そんな！　だって、彼女は何も悪いことして——！」

「わかってないな」

リイナに切っ先を向けたまま、レイは呆れたように首を横に振った。

「他がどうかは知らんが、俺は魔を殺すためにデビルバスターになったんだ。家族の仇を討つためにな。デビルバスターってのは大体がそういうもんさ」

「家族の……仇……？」

「アクア辺りからいい話でも聞かされてたか？　残念だが、俺にそいつは当てはまらない。むしろ、ああいうヤツの方が稀少だ」

レイは剣を構え、

「だから、俺は今度こそ、こいつの息の根を……止める」

「っ……！」

レイが地面を蹴ると同時に、ティースもまた細波を拾い上げ、地面を蹴った。

剣が、交錯する。

「おい、ティース」

「っ……！」

真横に構えた細波に、二本の夜叉が強い圧力をかけてくる。

「これ以上は、冗談じゃ済まなくなるぞ」

「くっ……」

間近の眼光に見据えられ、思わず怯む。無数の傷を負った全身から徐々に力が抜けていくのを感じていた。

そんな二人の横を、一つの影——ルネッタが走り抜けていく。

「っ……リイナっ——！」

ティースの背後で、魔力が迸る。

どうやら、リイナとルネッタが戦闘状態に突入したようだ。

——それを確認する余裕すらない。

「っ……レイさん！　頼む！　やめてくれっ——！」

少しずつ、押されていくのを感じながら、ティースは訴えた。

「俺にはあなたの事情とかはわからない！ でも、あなたが今やろうとしていることは、それは……それは絶対に間違ったことだッ！」

「よく言うな」

だが、彼の必死の説得にも、レイは眉一つ動かさずに答える。

「お前だってつい最近まで同じだっただろ？ どんな心境の変化だか知らないが、今更それは都合が良すぎるんじゃないのか？」

「それは——でも！ でも！！」

歯を食いしばり、圧力に負けまいと両膝と腹の中心に力を込める。

「違う、違うんだ！ 彼女は違う！ 彼女は——！」

「諦めろ、ティース」

「！」

カチカチ、と、細波が小刻みに震え始めた。と同時に、彼の両腕にかかる圧力が徐々に大きくなっていく。

（な……なんだ、これ——！？）

交錯した夜叉と細波の間に、少しずつ隙間が出来てくる。

そこに“見えない何か”が産まれつつあった。

（これが……まさか……！）

そしてティースは気付く。

夜叉が今、その刀身に纏いつつある“何か”——それこそが先ほど、地面にクレーターを作ったものの正体である、と。

「拳を、振るえ——」

圧力が増す。

そこにあったのは、圧縮された空気のようなもの。

（まずい……っ！）

そう思ったときにはすでに遅かった。

衝撃が、眼前で破裂する。

「っ……！！」

思ったほどの威力ではなかった。おそらく手加減していたのだろ

う。だが、それでもティースの体は圧力に耐えきれず、弾かれて宙を舞う。

「……がはっ!!」

背中から地面に叩きつけられ、息が詰まった。

全身から力が抜けていく。

ルネッタから受けた無数の傷。強者と闘うことによる精神的な疲労。……そこに加えられたこの一撃によって、彼の肉体はすでにボロボロだった。

「お前はそこで眠ってろ。……あっちは、一人じゃやっぱ分が悪いらしい」

「っ……!!」

「……ティース。いい加減にしとけ」

レイが足を止めた。

ため息を吐きながら振り返って、

「真っ直ぐで強情なヤツってのは、長生きできないぞ」

「っ……はあっ……レイ、さん……」

それでもティースはフラフラと立ち上がり、細波を正眼に構えてレイの背中を睨み付けていた。

「リィナに危害を加えるつもりなら——っ」

「……」

それを見て、レイは仕方なさそうに首を振ると、

「走れるのか？」

「……え？」

レイの体が動く。

ティースではなく、戦いを繰り広げるリィナの方へ向かって。

「まっ……レイさんっ!!」

慌てて、ティースもその後を追う。

走るのに致命的なまでの支障はない。が、それでも、咄嗟の動きについていくことはできなかった。

「ルネッタ! ……そこにいたら巻き添え喰らうぜっ!!」

「っ！」

「――！」

ルネッタとリイナがその動きに気付く。

レイの構える二本の剣は、大きな渦をその身に宿していた。

先ほどティースに見せたそれを遙かに上回る、強大な質量。

「二体の夜叉よ……暴悪の拳を振るえ――！！！」

ルネッタが咄嗟に飛び退く。

対するリイナは……反応が遅れたのか、その場から動けなかった。

「リイナ！ ……リイナああッ！！！」

見開いたリイナの目がレイを見つめ……一瞬、その後ろから追いかけるティースにも向けられる。

そして、ふつ、と、少しだけ表情が緩んだ。

その姿はまるで、自らに訪れるその運命を受け入れようとするかのよう。

――ティースの目には、そう映った。

「やめっ……やめてくれ――ッ！！！」

その叫びも空しく。

彼の視界を遮るように土埃が舞い上がった。

それが、唯一の情けであったかのように。

「……やめてくれええええええっ！！！」

絶叫が空気を裂いて。

そして無情の一撃は、確実に、振り下ろされた――

その7『訣別の日』

フォックスレアの事件解決から三日後の夕方。

「……ティースさんが、いなくなっただけ？」

ディバーナ・ナイトの面々は街での後始末を終え、この日、ようやくミューティレイクの屋敷へと帰還していた。

「ああ」

そして別館の執務室。

当主であるファナと執事のアオイを前に、経過と結果の報告をしているのは、そのディバーナ・ナイトの隊長、レインハルトⅡシュナイダーである。

厳格な雰囲気の漂う部屋には似合わず、相変わらずのラフな服装。瞳に宿る飄々とした雰囲気も相変わらず。

そしてやはりいつも通りの口調で、レイはもう一度、その“事実”を報告した。

「事件が全て解決した日——三日前の夜か。ティースのヤツが急に姿を眩ました。理由は俺にはわからん」

アオイは眉をひそめ、それから少し困ったようにファナに視線を送った。

「……」

椅子に腰掛けたファナは、机の上で両手を重ねたまま少し思案していたが、やがてゆっくりと顔を上げてレイを見ると、

「心当たりはございませんの？」

「心当たり、ねえ」

レイは少しだけ笑い、それからわざとらしく視線を泳がせて、

「最近、妙に塞ぎ込んでたからな。大方、任務をこなすのが嫌になっただけじゃないのか？」

アオイが納得できない顔をする。

「まさか。ティースさんが悩んでいたのは確かですが、いきなり前

触れもなく姿を眩ますような人ではないでしょう」

「知らんよ。……特に変わったことはなかったさ。ただ報告した通り、いつもより犠牲者は多かったがな」

「……」

ファナはもう一度、レイから受け取った報告書に目を通した。

犠牲者は確かに多い。だが、それは事件の規模と性質――街の中に数十匹の獣魔を操るデビルサイダーがいたということを考えれば、仕方ないともいえる結果だ。しかもその半数以上はナイトが到着する前の被害者で、派遣から事件解決までの日数を考えると、任務自体は失敗というほどでもないだろう。

ただ……そこに一つ、気になる報告がある。

事件と関係があったのか結局不明ながら、そこに存在していた一人の人魔。

「レイさん」

そしてファナはもう一度質問した。

「ティースさんは、ご無事なのですか？」

「俺のことじゃないからな」

「レイさんはどう思われます？」

少し考えて、レイは薄笑いで答えた。

「自殺はしてないと思うぜ」

「わかりました」

まともな返事ではなかったが、それでもファナは頷いた。そしてすぐ、隣に直立するアオイの方を見ると、

「アオイさん。……ティースさんは見聞を広める旅に出られるそうですわ」

「……は？」

怪訝そうな顔のアオイに、ファナは穏やかな微笑みを浮かべて、「デビルバスター候補生として、それは必要な経験であると判断しました。そのように、手配をお願いします」

「あ……はい。承知しました」

アオイもようやく彼女の真意を悟って、頷く。

そんな反応にレイは苦笑して、

「甘すぎるんじゃないのか？ 戻ってくるかどうかともわかりやしないんだぜ？」

「大丈夫ですわ」

ファナは確信を込めた言葉で答える。

「事情がどうであつても、ティースさんは必ず一度は戻ってこられます。ここには、シーラさんがおられますもの」

「ま、確かに……」

「二ヶ月、待つことにしますわ。……それでよろしいですか？」

「俺に聞かれてもな」

レイはそう言いながら二人に背を向けて、それでもふと、思いついたように呟く。

「……ま、色々と解決するには充分な時間じゃないのか？」

「はい」

ファナはもう一度微笑んで、満足そうに頷くのだった。

ティースが戻ってこないことが問題となったのは、もちろん執務室の中だけではない。彼が過去に所属していた二隊――ディバーナ・ファントムやディバーナ・カノンの面々、あるいは彼と関わりがあった数少ない人々にとつてもそれなりに影響の大きい出来事だったようだ。

ディバーナ・ファントムの隊長、アクアールビナートは執務室から出てきたレイを待ち伏せして早速事情の説明を求めているし、その背後にはやや神秘的な顔でそれを眺めるダリアⅡキャロルの姿があった。そこを偶然通りかかったディバーナ・カノン隊長のレアスⅡヴォルクスは、興味なさそうにしながらも、何気なくその会話を追っていたようだ。

そして当然それは、屋敷において彼ともっとも深い関係にあった少女にとっても、いつものように冷たく流せる出来事ではなく――。

「……リディア」

「そんな怖い顔で見ないでっば。あたしにもよくわかんないんだから」

「怖い顔なんて、してないわ」

「そうかなあ？ それならいいんだけどさ」

さすがのリディアも少々困り果てていた。

その目の前。

「……」

そこに座っている少女――シーラ＝スノーフォールは、一見いつもと変わらない態度にも見える。が、その正面で言葉を実際に向けられるリディアは、それがいつもと確実に違っていることを容易に感じ取っていた。

明らかな焦りと、苛立ち。

「彼はあなたのお兄さんでしょう。もっと詳しい話を聞けないの？」
リディアは首を横に振って、

「ダメだっば。あの人、相手が妹だろうと上司だろうと、言いたくないことは絶対に言わない人だから。……ただ、あの人言い様からして、ティースさんが生きてることだけは間違いないよ。それもおそらく、ほぼ五体満足でね」

カチ、カチ、と、シーラの爪が冷めた紅茶のカップを鳴らす。

「だったら、どうして戻ってこないの」

「だから、わかんないっば」

この問答もすでに三度目。いい加減、リディアもうんざりして、
「とにかく待つしかないよ。ファナさんも、二ヶ月はティースさんの居場所を空けて待ってるって言ってたしさ」

「……」

シーラは目を細め、じっと紅茶のカップを見つめた。その胸に去来していたのは果たしてどのような想いだったのか。

しばらく、動かない。

(……まいったなあ)

そしてリディアは、想像していたよりも激しい彼女の感情の動きに――それはあくまで何重ものオブラートに包まれたものであったが――少しだけ驚いていた。

(それでも平然としていたらどうしようかと思ったけど……さすがに――)

だが、そんなことを思った矢先。

「? ……どうしたの? シーラさん?」

シーラの口元が微かに動いた。……笑った、というには、少々無理のある歪み方だった。

「そうね……」

問いかけに、彼女はまるで体をほぐすように背筋を伸ばし、肩の力を抜いた。そして小さく息を吐くと、呟くように答える。

「いい加減、馬鹿らしくなったのかもしれないわね」

「なにが?」

「賢くなったということよ」

その言葉の意味を、リディアはすぐに悟って、

「それはないと思うなあ。だって、ティースさんは馬鹿だからティースさんなんだし」

真顔でそう言った。

まるでけなしているような物言いでも、その言葉は比較的好意的だ。

「あの人から“馬鹿”と“正直”を取ったら何も残らないよ。だからきつと、あの人なりに、どうしても譲れない事情があったんだよ」

「……」

シーラはその言葉をしばらく考えていたが……やがて何事か思い出したように、ポツリと言った。

「ま……いいわ」

「？ いい、って？」

問いかけに、ゆっくりと顔を上げて、

「戻ってこないなら、戻ってこなくてもいいということよ。……いえ。むしろ戻ってこない方がいいのかもしれない」

「あはは、またまたあ。そんなこと言っ——」

言いかけて、リディアはハッと口を噤んだ。

「……シーラさん？」

真っ直ぐに見つめ返す、濁りのない瞳。

ゆっくりと微笑む。

「嘘ではないわ、リディア。意地を張っているわけではないのよ」

「あ……」

そして、リディアは瞬時に悟った。

——彼女のその言葉は、決して偽りではない、と。

「何もないもの」

その指は小さくテーブルの上を彷徨い、そして冷めた紅茶のカップを掴んだ。

「少なくとも、私のために戻ってくる義務は、あいつにはない。……そうでしょう？ だって私は、あいつのために何もしていない。あいつが私に義理を果たす理由は何もない」

「……」

「だから、戻ってこない方が自然だと、そう思うだけのことよ」

淀みなく言い切ったその言葉に、リディアは素で驚きの表情を浮かべ、そしてすぐに誤魔化すように視線を泳がせた。

（……シーラさん）

一瞬だけ過ぎった、表情。

その一瞬を、リディアは見逃さなかったのだ。そして、理解した。（でも、なんで——）

意地を張っているとか、おそらくそんな単純なことではない。この二人の間には——あるいは彼女の心の中だけなのか——それだけ

ではない何かがあるのだと。

(……似合わないよ、そんなの)
黙ったままシーラが席を立つ。

「あ、シーラさん！」

咄嗟の嘘が、反射的にリディアの口をついていた。

「言い忘れてたけど……今日からシーラさんに監視をつけることが決まったから！」

「……監視？ 何故？」

当然のように、納得できない顔で振り返るシーラ。
リディアは答えた。

「シーラさんが家出したら困るから、って、ファナさんが」

「……用意のいいことね」

少し慚然とした顔。だが、それは凶星をさされた故の表情だったようにリディアには思えた。先手を打てたことに少しだけホッとしながら、

「言ったじゃん。二ヶ月はティースさんの居場所を空けて待ってるって」

シーラは眉をひそめて、

「それと私を引き留めることに、一体どういう関係があるというの？」

「だってシーラさんのいる場所が、ティースさんの居場所だもん」

「それは、あなたの勝手な妄想よ」

「じゃあ、賭ける？」

リディアは真顔でシーラを見つめた。

「ティースさんが二ヶ月以内に帰ってこなかったらシーラさんの勝ち。帰ってきたらあたしの勝ち。シーラさんが勝ったら、一つだけ、なんでも言うこと聞くよ」

「……」

少し無言で考えたシーラは、やがてそれほど興味なさそうにしながらも、

「あなたが勝ったら？」

「そうだなあ。……あたしの質問に、一つだけ正直に答えてもらおうかな」

「……」

真意を探るように、少女の目を見つめた。が、もちろん彼女はとぼけて考えを表情に出そうとはしない。

無駄だと悟ったのか、やがてシーラはため息をついて答えた。

「……そうね——」

丘の上で、ティースは沈みゆく太陽を見つめていた。

その先、北側へと折れ曲がって続いていく街道。その遙か遠くにネービスの街があるはずだ。

強い風が、身に纏う彼の灰色のローブをはためかせ、

「……」

無言のまま、その街道に背を向ける。歩くたび、腰にぶら下げた一振りの剣、細波が小さな音を立てる。

——今は、戻ることはできない。一時の訣別。

長い影を引きずり、ティースは緩やかな坂を下りていく。

（もう、みんなネービスに戻った頃だろうな。シーラは——少しぐらいは心配してくれてるかな……）

そのことを考えると罪悪感が胸を襲う。が、彼は自らの行動を後悔してはいなかった。

（お前が俺の立場だったら……きっと、同じ気持ちになったよな……）

それは共有する記憶。たとえば彼女があ頃と変わっていたとしても、そのとき感じていた想いはきつと同じだったと、そう信じてい

るから。

少し、早足になる。

歩む先はネービスとは全く別の方向。

ミューティレイク、そしてディバーナ・ロウ。たった半年とはいえ、確かに仲間だった人々に背を向けて。――いや、再びその場所に戻ってくるために。

顔を上げて、前を見た。

その視線の先に、一人の女性が立っている。

「ティース様」

彼と同じ灰色のローブとフードに身を包んだ、百八十センチほどはあろうかという長身の女性。フードの奥から向けられる瞳は、変わらずに穏やかで優しい。

「ああ。……リイナ。行こうか」

「ええ」

頷いて、リイナはフードの奥から微笑む。

そこには少しの不安と、それ以上の信頼の眼差し。……ティースはそれを見て、やはり自分の行動は間違っていないかったのだと再認した。

そして、二人は歩き出す。

「……レイさんという人は、最初から私を殺すつもりはなかったと思います」

途中、ふと呟いたリイナの言葉にティースは頷いて、

「ああ。俺もそう思う」

思い返すと、まさにその通りだった。

あのとき――レイが盛大に土埃を巻き上げたおかげで、二人はあの場から何とか逃げ出すことができた。彼の剣が結局リイナを捕らえなかったことも事実であり、ルネットがすぐに追ってこなかったのも、あるいは彼の仕業だったのかもしれない、と、今ではそう思える。

「最初の不意の一撃も、わざと狙いを外したようでした。私は直前

まで、その気配に気付いていませんでしたから」

「……そうかもしれない」

だとしたら、彼は最初から二人を逃がすために芝居を打ったということになる。

——何のために？

それは、分かり切ったことだった。

ポケットに手を入れると、そこには金属の感触——以前、彼から預かったミューティレイクの紋章がある。

それはこの先、ネービス領内を放浪する上で役に立つはずのものだった。

（ここまで読んでいたのだとしたら……あの人、やっぱりとんでもない人だ……）

とにかく、今はただ感謝の気持ちで一杯だ。シーラのことといい、リイナのことといい。ティースは彼に大きな借りを二つも作ってしまっていた。

いつか、それを返せる日がくればいいと、そう思う。

そう。そのためにも、今は——

「このペースなら、二週間もしないうちにリガビュールの街に着く。約束には、充分に間に合いそうだ」

ネービス領西端の街、リガビュール。

そこが今の彼らの目的地。

「でも、なあ。まさかエルの子供まで一緒にこっちに來てたなんて、思わなかったよ」

その途中、ティースはそう呟いた。

“エル”

それはリイナと同じ時期、同じように彼の記憶の中に存在している者の名だ。

「エルさんは、もともと人の世界に興味を持ってましたから。……覚えてますか？ 私たちが初めて出会ったときのこと」

「ああ、もちろん」

冬の日の森の奥。

そのときの光景を思い浮かべながら、ティースは呟いた。

「敵じゃない、って、あいつが涙を流しながらそう言ったんだ。それで、俺は君たちを信じようと思った」

頭に浮かぶ可愛らしい少年の顔。

リイナは頷いて、

「私がこっちの世界に流されたあのとき、偶然一緒に流されたエルさんと出会っていなければ、私たちが理解し合うことも、私がここにいることも、きっとなかったと思います」

ティースは思い出したように、

「そういや、あいつって最初からすごく“人”っぽかったっけ。：

君は最初、ものすごく無愛想だったんだよなあ」

「わ、私の話はやめましょう」

リイナは恥ずかしそうに抗議すると、

「エルさんは私とは違って、最初から“愛”とか“情”の意味を知っていたんです」

「言われてみれば、確かにそうだったかなあ」

そう考えると彼にも、彼女のような“王魔”と呼ばれる存在が、どれだけ自分たちと違っているかが実感できた。

（ってことは、エルの奴は少なくとも王魔じゃないんだよな。……それとも、単にあいつが変わり者だっただけか……？）

子供の頃の話だ。二人の種族になんて興味はなかったし、当然その頃は下位族だとか上位族だとかの知識もなかった。が、リイナの言う王族についての話が本当であれば、彼はおそらく将族以下の魔なのだろう。

「ところであいつ、少しは成長したのか？」

そう問いかけながら、どんな風に成長したのかと想像すると、ティースの頬は自然と緩んだ。

何しろそのエルという少年、リイナより一つ下……シーラと同年とはいえ、当時の彼女たちより十センチ以上も背が低かったので

ある。

と、その言葉の意味をすぐに察したリイナは微笑んで、

「背、の話ですよね？」

「ああ。ほら、あいつって、俺の中じゃいつまでもあんな感じのイメージしかないからさ」

リイナはクスクスと笑って、

「もちろん伸びました。……その、ほんのちよっぴり」

「ちよっぴりって……」

「これぐらい、です」

「……」

ティースは言葉を失った。

彼女の右手は、その胸よりも下で止まっている。

……彼女の身長が約百八十センチ。そこから推測するに、それではおそらく百四十センチを少し超えるぐらいだろう。

（レ、レアスくんより小さいじゃないか……）

当時の姿から考えて、それほど伸びてはいないかなと想像していた彼でさえ、その事実には哑然とせざるを得なかった。

「それって……百四十センチぐらい伸びた、ってことじゃないよな？」

リイナは笑って、

「まさか。それだったら三メートル近いですよ」

「そりゃそうか……でも、うん。それってあまりにもあんまりだなあ」

女性としては背の高すぎるリイナ。

男性としてはあまりに背の低すぎるエル。

二人の姿を並べて浮かべると、失笑せざるを得なかった。

「でも、小さい方が可愛らしくていいじゃないですか。私はエルさんが羨ましいです」

「そうかなあ」

確かに、彼女は女性としては少々背が高すぎる。ティースはそれ

よりも若干長身だから問題ないとしても、彼女より背の低い男にしてみたなら、やはり威圧感を感じてしまうのかもしれない。

（逆ならいいのになあ……）

そんなことを考えながら、約二週間後に迫った友人との再会を思い浮かべ、ほんの一瞬だけ現状を忘れて心を弾ませたティース。

と、そんな彼に、今度はリィナが質問する。

「ティース様。今度はシーラ様のこと、お聞きしてもいいですか？」

「え？ あ……うん」

頷いたティースに、彼女が口にしたのはいきなりとんでもない質問だった。

「ティース様とシーラ様は、結婚したんですか？」

「え！？ ……ま、まさか！」

手を振りながら慌てて否定すると、リィナは少し首を傾げて、

「カザロスの人たちがそういう話をしていたので……」

「カ、カザロスの？ ……そ、そっか。やっぱ向こうじゃそういう話になっているのか」

故郷——カザロスのことを思い浮かべ、ティースは少し複雑な表情だ。

だが確かに。彼らがネービスに出てきたときの経緯を考えれば、それは仕方のない話の流れだった。そのときは“駆け落ち”だと思われて当然の状況だったのである。

「では、やはり違うのですね？ ……ホッとしました」「え？」

その言葉に少しだけドキツとしたティース。……が、彼女から返ってきた言葉は、彼が期待したようなものではなかった。

「ティース様とシーラ様が結婚だなんて。本当にそんなひどいことになってたら、どうしようかと思っていたんですよ」

（……あ）

そして思い出す。

（そっか……リィナの中じゃ、結婚って“悪”なんだっけ）

そう。彼女……というより“彼女ら”にとっての“結婚”とは、子孫を残すために無理矢理課せられる“義務”のようなものであり、ティースたちが当然に考える結婚——愛し合って、結ばれて、というイメージとは大幅に異なるのである。

（うーん……）

「ティース様？　どうかしましたか？」

「あ、いや……その、リイナ」

理解できるかどうかは別にして、ティースはとりあえずこっちの常識を教えることにしてみた。

「こっちの結婚っていうのは——例外もたくさんあるけど、基本的には愛し合う者同士がお互いに望んでするものなんだよ。だから、リイナが考えてるような悪いものじゃないんだ」

だが、リイナは理解できない顔をする。

「？　愛しているというのは、大事だということですよね？」

「ああ、そりゃそうだよ」

「大事なのに結婚させるのですか？」

「え？」

思わず聞き返したティースに、リイナは眉をひそめて、

「結婚すると子供を産まなくてはならないんですよ？　大事な人に、そんなひどいことをさせるのが人間の世界では普通なんですか？」

「ひ、ひどいって……いや、だってほら、子供っていうのは夫婦の愛の結晶というか……俺は男だからわかんないけど、女の人だって好きな男の人の子供を望んだりする場合が多いっていうし……」

「……わかりません」

ティースは困り果てて、

「じゃ、じゃあさ。リイナは、小さい子供が可愛いとか思わない？」

「あ、はい。私、子供は好きだと思います」

その答えに、ティースはパツと顔を輝かせて、

「そ、そうだろ？　じゃあさ、それが好きな人の子供だったり、自分の子供だったりしたら、なおさら可愛いと思わない？」

だが、やはりリィナはわからない顔で、

「何故ですか？ 誰の子供でも子供は子供ですよ？」

「うう……」

お手上げだった。

彼女らのような王魔には、自分の子供を自分で育てるという習慣もなく、親と子供は全く関係のない別の存在という考え方を持つ種族が多い。家族の繋がりとして存在するのは“兄弟”のみで、そんな彼女がティースの言葉を理解できないのは当然だった。

「……難しいです」

リィナも少し困った顔をしていたが、やがて思い直したようにゆつくりと微笑むと、

「でも、いつか教えてくださいね。ティース様は、私に“愛”と“情”を教えてくれた人ですから。きっと、理解できる日が来ると思えます」

「お、教えるって言われてもなあ」

その意味を少し深読みしてしまって、ティースはまたもやドキドキしてしまった。

そして、慌てて話題を変える。

「……にしても、ものすごい偶然だよなあ。だって、俺やシーラがネービス領まで来ることだってわからなかったはずだろ？」

そう問いかけてみた。

ティースやシーラの故郷はこのネービス領から見て東の方角、間に二つほど他の領地を挟んだ場所にあるジェニス領のカザロスという街だ。大陸は広く、“ヴォルテスト条約”に賛同した領地だけでも三十近い。だから、彼女がこのネービス領にやってきていたというだけでも、驚くべき事なのである。

だが、リィナはその言葉にクスツと笑って、

「偶然ではないですよ。……ほら。昔、シーラ様が口癖のように言っていたでしょう？ ネービスに行って薬師の勉強をしたいんだ、って」

「……あ。そっか」

思い出して納得するティース。

「他に情報もなかったですし、もしかしたらと思って。……カザロスにティース様たちの姿がなかったときは、途方に暮れて泣きそうでした。もう二度と会えないのかと思って……だから、この偶然には本当に、本当に心から感謝しているんです」

「はは……」

照れて、頭を掻くティース。

彼女の屈託のない笑顔に、頬が再び熱を帯び始める。

（……ああ、もう。相手はリィナだったのになあ……）

いくら言い聞かせても、胸の高鳴りは抑えることができません。

……当時とは、あまりに違っていた。

それを意識してしまうほどには成長していたから。

「ティース様。あと少しですね」

「あ、ああ……」

彼女の暖かい笑顔に、ティースの胸は充足感に満ちていく。
最近ではあまり感じたことのない安堵感に身を委ねながら。

——どうやらこの歳にして、ようやく彼の初恋らしきものが始まったようだった。

ガラガラガラガラ……

太陽が昇り始めて間もない早朝、薄暗い中、少しだけ肌寒い空気を切り裂くように、街道とは別のルートを通ってリガビュールに向かう一台の馬車があった。

大きく揺れながら進むその馬車は飾り気もなく、貴族が使うよう

なものではない。が、その割に作りは頑丈。馬車の周りには護衛らしき者たちが四、五名、馬に乗って周りを囲んでいる。よく見ると御者も剣を携え、馬車には光を採る窓も見当たらない。外側からは頑丈な鍵らしきものがかけられており、どこからどう見ても異様な雰囲気漂う一団だった。

そして、その馬車とリガビュールを結ぶ道の間。

——丘の上に、馬上からその馬車を見つめる視線がある。

「来たぞ。……準備はいいか」

徐々に近付いてくる馬車をその視界に捕らえ、三十代後半ぐらいの男が後ろを振り返った。

顔を隠すように深くフードをかぶり、腰には一振りの剣を下げている。盗賊風、と言っても差し支えはないだろう。

その言葉に後ろで頷いたのは、五人。それぞれフードをかぶっており、出で立ちも全員が同じだ。

……その中に一人だけ、目立って背の小さな人物がいる。

先頭の男はその人物に視線を向けて、言った。

「エル。お前はまだ子供だ。無理はするなよ」

「わかってるよ、ボイス。無茶はしないって」

フードの中から返ってきたのは、やはり少年の声だ。まだ声変わりもしていない。年齢的にはおそらく十代前半というところだろう。

「では、行くぞ」

全員が頷いて、手綱を握る。

目標はもちろん、リガビュールに向けて走る一台の馬車——

「……来たぞおっ!!」

馬車の一団が、自らに近付いてくる六騎の影に気付いた。

「キュンメルだ! キュンメルの奴らが来たぞおっ!!」

馬のいななき。

重なる抜刀の音。

怒号をあげて……そして、二つの集団は交戦状態に突入した。

ネービス領リガビュールは、西の国境近くに位置する中規模の街だ。古くから存在する街の一つだったが、大陸の主要都市を結ぶメイン街道からは大きく外れている……というより、意図的に“外されて”いる。

（今日も来ない、か）

この街に来てこれで一週間。十二月も半ばに至って風は冷たい。ティースはこの日も太陽が沈むまで、このリガビュールの“表向きの名所”である、初代ネービス王（都市国家時代のものだ）の石像前で人を待っていた。

目印は“ネズミ色のフード”と、ローブの胸に“赤いリボン”だと聞いていたが、今のところ、そんなアンバランスな服装をした人物の姿は見掛けない。

（もう日も沈むし……また明日、だな）

諦めて、彼は石像の前を離れた。

リイナがエルと交わした待ち合わせの約束は“一年後”だという。正確な日付は今から十二日後のことだ。

（に、しても……）

そのまま彼の足は“表向きの名所”から“事実上の名所”の方へ進んでいく。宿へ戻るには、よほどの遠回りをしない限りそこを通らざるを得なかった。

そしてため息をつく。

（よりにもよって、こんな街を待ち合わせ場所にしなくてもいいのになあ……）

活気のない街。

最初にここを訪れた旅人の、約半数ほどがそう感じるという。何故“半数”なのかというと、それは簡単だ。

……このリガビュールの街は昼と夜で全く別の顔を持っているから。

つまり――

(うう……)

嬌声。

笑い声。

日が沈んで風も冷たいというのに、街のメインストリートはやけに明るい。立ち並ぶ建物には煌々と明かりが灯り、辺りは異様な霧囲気に包まれていた。

その中を、ティースは視線を下に落としながら歩いている。

辺りにいるのは、どこからどう見ても健全とはいえない、風邪を引きそうな格好の女たちと、ペアになって客引きをする男や老婆たち。目が合えば、すぐに手招きされ話しかけられてしまう。

だから彼は、極力視線を上げないように、縮こまって歩いていたのだ。

……ネービスといえば“学園都市”の名が示すとおり、どこか堅いイメージがある。が、それはあくまで首都ネービスだけの話であり、このリガビュールの街は、犯罪組織に似たいくつかの集団が事実上取り仕切っている、ネービス領最大の“歓楽街”だった。

ただ、犯罪組織が取り仕切っているとはいえ、そこにはそれなりのルールが存在し、多少の不穏な影がちらつく以外は、ある一定の治安を保っている。だからネービス公もこの街の状況を半分黙認しており、無責任なうわさ話によれば、その間には一種の利害関係のようなものが結ばれているとも言われていた。

……とはいえ、まあ、その真偽はどうでもいいことではある。

ただ、彼にとって大事だったのは、

(は、早く宿に帰らなきゃ……)

その一点なのだ。

油断すると、すぐに袖を引かれそうになる。……彼がただ小心なだけの男ならそれほど問題ないのだが、彼の場合、不用意に触れら

れでもしたら大変だ。気絶したからといって身ぐるみ剥がされるようなことは――よほど運が悪くない限りはないはずだが、それでもこんな場所で意識を失うということは、とてつもなく不安なことであり。

どんっ。

「わっ……す、すみません！」

女たちの手ばかり警戒していて、通りを歩いていた男とぶつかってしまう。

頭を下げてその場から離れると、今度は、

「お兄さん、ちょっ――」

「ご、ごめんっ！ 俺、客じゃないからっ!!」

顔を上げることもしせずにそこから逃げ出し、まるで迷い子のようにオロオロしながら……そして、なんとかメインストリートを抜けていくのだった。

「ふう……」

賑やかな通りを抜けると、辺りは急に静けさを増す。ギャップがあるだけに、静けさに異様な重みを感じた。

ひとまず安堵の息を吐いたティースは歩みを緩め、無数の星が浮かぶ夜空を見上げる。

……その脳裏に、明るく無邪気な背の低い少年の姿が浮かんでいた。

（エル――）

リイナの話によると、彼は彼らがこの世界で暮らしていくための“方法”を探しに、ネービスの南西に接するモルフイドレル領へ向かったらしかった。

その“方法”とは――

（……臃、か）

魔を人の姿に変える、刻印型の破魔具“臃”。

ほぼ完璧な性能を持つ代わりに、一度使ってしまったらそう容易く元の姿には戻れないという代物。

彼はそれを求め、モルフイドレル領へ心当たりを訪ねていったのだという。

『ですから……ティース様とシーラ様には、どうか私たちの身請け人となって欲しいのです』

その願いをリィナの口から聞いたとき、ティースはもちろん二つ返事で承諾した。

（一年……だもんな）

彼女たちがこの世界にやってきたのが一年前。それだけの月日を二人はティースたちとの再会のためだけに費やしてきたのだ。

（俺も二人の気持ちに応えなきゃ、な）

そんなことを考えて――ボーっとしていたのかもしれない。

彼は自らに近付いていた複数の人の気配に気付かなかった。

「え？」

突然、その脇を一つの影がすり抜けていく。

（――子供？）

一瞬だけその視界に映ったのは、灰色のローブにフードという格好の背丈の小さな人物だ。が、街中でその奇妙な格好について疑問を抱く間もなく、さらに複数の気配が背後に現れた。

「……あ」

腰に剣を差した男が三人。特に声を上げるわけでもなく、無言のまま慌ただしく脇を走り抜けていく。

薄暗い闇の中に消えていく合計四つの人影。

（えっと……）

ティースは立ち止まってしばし思考を巡らせた。

奇妙な格好の人物。

追いかける複数の男たち。

腰にぶら下げた剣。

「……」

ある程度の治安が守られているといっても、やはり性質上トラブルの耐えない街だ。客と店の間で揉めたりはしょっちゅうのこと、

店で働いている女性が逃げ出したりとか、客と駆け落ちしたりとかで、少々物騒な展開になることも珍しくはない。

彼が不穏な想像をしたのは、当然の結果だろう。

そして基本的に“お人好し”な彼の取った行動は――

(……えっと、確かこっちに……)

しばらく追いかけたティースは、先ほどの男たちが立ち止まって何やらひそひそ話しているのを見た。路地の裏や、少し先の分かれ道を指さしながら、小さく首を振ったりしている。

どうも見失ったらしい。

(なんだ……)

事情はわからないまでも、そのことにホッと胸をなで下ろしたティース。

だが、その瞬間。

――カラッ。

「!？」

ほんの微かな物音だ。が、すぐそばにいた彼には確かに聞こえた。どうやらとつくに枯れているらしい古井戸。

暗くて一見わからないが、その縁のところに微かに指が見えている。

(……な、なんて無茶な!)

ティースは仰天した。

水があるならまだしも、枯れた井戸の中になど落ちたら一巻の終わりだ。しかも、そこから覗いている手はあまりにも頼りなく、どう見ても再び這い上がってこられるような状態には見えなかった。

その危なっかしさをとても見過ごせず、ティースは慌てて駆け寄って、井戸の中から生えていた腕を掴む。

「!！」

見つけたと思ったのか、井戸中の人物が震えた。

「しっ」

「……？」

薄暗い井戸の中から、不審そうな視線が彼を見上げてくる。

頭にかぶっていたフードは重力に従ってめくれており、顔を見る限りはどうやら子供。薄暗いせいもあって、男か女かははっきりわからなかった。

ただ、

（……え？）

その瞬間、それよりももっと重大なことに気付く。

「……っ!？」

相手もそれに気付いたのだろう。とっさに隠そうと肩をすくめたが、もちろんその体勢で隠せるはずはない。

——その、尖った耳を。

（人魔……!？）

「おい、そこのお前」

「!」

三人組の一人がティースの存在に気付いて近付いてきた。

（……どうする!？）

背中に汗が浮く。

——彼が助けようとした井戸の中の人物は“魔”なのだ。

「……」

一瞬の躊躇。

「おい、聞こえないのか？　その、おま——」

「っ……おええええええっ!!!!」

「っ!」

井戸の中の人物が顔を歪める。と同時に、ティースの背後に近付いていた男も顔をしかめた。

「うぐっ……おえっ……おええええええ……っ」

「……ちっ。酔っぱらいか」

それは決して素晴らしい演技というわけでもなかっただろうが、特に珍しい光景でなかったことが幸いだった。井戸の中は彼の背中で完全に隠れていたし、まさか枯れた井戸にぶら下がっているとは

考えなかったのだろう。

辺りを少し見回ったあと、男たちは違う方向へ去っていった。

「……」

感覚を逆立て、気配が完全に消えたことを確認してから、

「ふう……まったく、無茶をするなあ」

ティースは大きく息を吐く。そしてぶら下がっていた人物を井戸から引き上げると、ようやく月明かりの下で顔がはっきりと浮かんだ。

少年だった。年の頃は十四、五歳だろうか。幼さを残している分、少し中性的な顔立ちだが、抱き上げた感触は間違いなく男だった。というより、これでもし女だったりしたら、ティースの体の方が少々ヤバイことになっているはずである。

「さて、と。それじゃ事情を——って！ 待て！ 逃げるんじゃない！！」

逃げだそうとした少年の襟首を掴む。

「っ……離せっ！！」

ティースは暴れようとする少年を力ずくで押さえつけ、目立つといけないので路地の中へと引っ張り込んでいった。

「離せ！ この！ 変態！ ……ホモ野郎っ！！」

「だっ、誰がっ！！」

なんとも口の悪い少年である。……いや確かに。先ほども言ったように、少年は少々中性的な容姿だったし、まだ大人とは言い難い年齢で肌も綺麗だ。あるいはその筋の人たちにはウケるのかもしれないし、この光景だって、見ようによっては“そういう風”にも見えるのかもしれない。

が、一応断っておくと、このティースという男にそのケは一切ない。

「と、とにかく！ 追いかけられていた理由を話してもらおうか！」
暴れる少年の両手を後ろ手に押さえつけて、路地の壁に軽く押しつける。

「っ……いたっ！」

「あ、わ、悪い！」

びっくりして咄嗟に力を緩めたが、もちろん離すようなヘマはしなかった。

そんな彼を、少年は肩越しにキッと睨み付けて、

「なんだよ！ お前もあいつらの仲間かつ！ それともなにか、商売女を相手にする金がないからって、代わりに俺を慰み物にしようってのかっ！？」

「だっ、だからそういうんじゃないって！」

（……お、俺って、もしかしてそういう風に見えるのか……）

そんなはずもなかったが、この言葉にティースはいたく傷ついてしまった。

「別に君をどうしようってことは考えちゃいない！ けど、もし君が悪いことをして追いかけてたんなら、このまま逃がすわけにはいかない！」

「だったら、なんで助けたりしたんだよ！」

「そりゃそうだろう！ あんな物騒な連中に追われていたんだからっ……！」

「はんっ！」

少年は信じてない顔で笑い飛ばすと、

「あんたの目は節穴かよ！ 俺のこの耳が見えないってのか！？」

「見えてるから、心配してるんだっ！」

「……はあ？」

ようやく、少年の体から力が抜けた。

目が怪訝そうな色を帯びる。

ティースはそれに合わせ、少しだけ口調を落ち着かせて続けた。

「……君が魔だから、なおさら心配になったんだよ。悪いこともしてないのに、追いかけてたんじゃないか、ってさ」

「……」

どうやら少年の中でようやく葛藤が始まったらしい。

抵抗を続けるべきか、目の前の人物の言葉を信じるべきか――

だが、結論は否応なしに出る。……自分を押さえている人物の力量が、自分より格上であることを少年は悟っていたのだ。

「……離せよ。もう逃げたりしないからさ」

そう言って、少年はペタンと座り込んだ。見上げる視線は不満に溢れていたが、それでも結果的に追っ手から自分を助けた彼のことを信じることにしたらしい。

「お前、俺が魔なのに、心配になったってのか？ ……お前、何者なんだ？ まさか、お前も魔なのか？」

矢継ぎ早の質問に、ティースはホッと胸を撫で下ろしながら、自らも道の上に座って目線の高さを合わせる。

「俺は人間だよ。ただ……俺は魔が全部悪いヤツだなんて思っちゃいないから」

「……」

再び少年の顔が疑念の色に染まる。

が、やがてそっぽを向くと、ぼそりと答えた。

「悪いことはしじゃない。……少なくとも、俺は自分が正しいことをしてると思ってる」

「そうか」

ティースはひとまずそれを信用することにした。

もちろんこのまま解放する気はない。ただ、もう少し安全な場所に移動してからもっと詳しい話を聞こうと思った。

「じゃあ、残りの話は後にして、まずはここを離れよう。……自己紹介もしておこうか。俺は――」

言いかけて、ふと気付く。

（……あれ？）

改めて目に入ったのは、少年が身につけているローブ。キレイなものではなく、長旅を物語る汚れがそこかしこについている。

が、注目したのはそこではなく……その、胸についている赤いもの。

(赤い、リボン?)

あまりにもアンバランスだ。

だが、ティースはそのアンバランスな組み合わせを知っている。
……というより、敢えてそのアンバランスな服装を“してくるはず”の人物を知っていた。

(……え。じゃあ、まさか……)

そうだと考えてみると、少年の尖った耳とも辻褄が合う。

「な……なんだよ」

マジマジと見つめられて、少年はたじろいだ。

「お、お前、やっぱりそのケが——」

「お前……」

だが、ティースはそれに構わずに言った。

——記憶にあるそれよりはかなり男っぽくなっている。が、改めて見ると面影があるような気がしたし、成長という要素を加味するのであれば、それは充分想像しうる範囲の変化だった。

「……エル? お前、ひょっとしてエルなのか?」

「え?」

少年はきょとんとした顔をする。

そしてすぐさま、気味悪いものを見たような顔で、

「な、なんでお前が俺の名前を知って——」

「エル!」

ティースは嬉々として声を張り上げた。すぐにその手を取って、

「俺だ! ティースだよ!」

「え……?」

再び、少年——エルは呆氣にとられたような顔をした。

何を言っているのかわからない、という表情だったが……やがて、その言葉を理解したかのようにゆっくりと口を開きながら、

「ティース……? あ、えっと、お前——」

「ああ! 俺だよ、ティースだ! ……ひっそりぶりじゃないか!」

「……」

エルはまだ戸惑っているようだった。

それはそうだろう。彼にしてみれば、ここにやってくるのはリイナのはずで、彼が直接やってくるなどとは考えていなかったのだろうから。

それでも、数秒後にはようやく整理が出来たのか、ようやくエルも声を張り上げた。

「……お前……あの、ティースか！」

「ああ！」

再会の喜びを手の平に込めて、少し浮かれながらティースは満面の笑顔を浮かべた。

「ははっ……お前、思ったより背伸びたなあ」

少し冗談交じりにそう呟く。

確かに目の前にいる少年の身長は、リイナから聞いていたものと比べて十センチほど高く、百五十センチは確実に越えていた。が、彼女と別々に行動していたこの一年という年月を考えれば、それは決して驚くべきことではないだろう。

エルはそんなティースを見て、

「な、なに言ってるんだよ。お前こそ……昔は、そんなに背え高くなかったよ、な？」

「ま、そりゃそうだけだな。……けど、口調も男っぽくなったじゃないか。昔は自分のこと、ボク、ボク、って言ってたのになあ」

「む、昔の話だろっ」

その抗議の声に笑って、ティースは立ち上がるとともに手を伸ばした。

「でもなんかトラブルに巻き込まれてるみたいだな。……よし。じやあ詳しい話は宿に行つて聞こう。リイナもそこで待ってる」

「リイナ……？」

ティースの口から出たその名前に、エルは少し考えて、

「あ、ちょっと待ってくれないか、ティース」

「ん？」

すでに路地から顔を出して辺りを窺い始めていたティースは、その言葉に振り返って、

「どうしたんだ？」

「……ちよつと今は都合が悪い。宿に戻るのは、少し待ってくれな
いか？」

「？」

怪訝に思ったが、その理由を推測するのは簡単だった。

「さっきの連中か？ ……なんなんだ、あいつらは」

「あいつらは――」

言いかけて、急に止めた。

「？」

再び躊躇って、考え、そしてゆっくりと顔を上げる。

向けられたその視線は、ピタリとティースを見据えた。

「……ティース。さっきの言葉、信用してもいいんだろうな？」

「？ なんだ？」

「敵は悪い奴だけだ、って言葉だよ」

表情は真剣だ。

「……」

そして、その気持ちはティースにも充分に理解できた。

彼もまた、リィナと再会したとき、それを喜ぶと同時に、年月による変貌を疑ってしまったから。だからエルもおそらく、彼が昔から変わっていないかどうか、確認したかったのだろう。

だから、ティースは殊更に力強く頷いて、

「ああ。当たり前だろ」

「じゃあ……俺を手伝ってくれるか？」

ティースは眉をひそめる。

「なんなんだ？ お前、一体何に首を突っ込んでいるんだ？」

「……」

エルの表情がほんの僅かに歪んだ。

それは紛うことなき怒りの表情。

(……こいつが、こんな表情をするってことは――)

彼は本来、温厚だった。別におとなしいというわけではなく、どちらかといえばかなり明るい性格ながら、意外に感情的なリイナと比べると怒る回数は圧倒的に少なく、外見の幼さの割に精神的には大人だったともいえる。

だがその代わり、怒ったときは――

「リガビュールの地下組織、ゲノールト」

「ゲノールト？」

エルの口から出た単語には聞き覚えがない。が、このリガビュールに多数存在する、非合法組織の一つであろうことは容易に想像できた。

「エル……お前、なんだってそんな連中と……」

「多分、ゲノールトはお前が想像しているような組織とは違う」

そしてエルは言った。

「ゲノールトはこのリガビュールでも裏の裏に存在するサービスの提供者なんだ。……デビルスレイバーだ」

「なっ……!」

ティースは驚愕に声を張り上げてしまった。

慌てて口を抑え、そして潜めた声で続ける。

「……デビルスレイバー……だって……!?!」

名は知っている。だが、それが実際に商売として行われている場面に出くわすのは始めてのことだった。

デビルスレイバー――それはその名から想像できる通り、魔を奴隷に見立てて売買する者たちのことだ。デビルサイダーと違うところは、魔を使役して何かをするのではなく、完全な商品とすること……檻の中に捕らえた獣魔、魔同士を戦わせて見世物にしたり……中には人魔の少女に娼婦まがいのことをさせることもあるという。

大きな危険の伴うビジネス、だがそれ故に、少々歪んだ成金や異常な趣味の連中による需要は絶えないと言われていた。

「このリガビュールに……デビルスレイバーの組織があるってのか……？」

コクリと、エルは頷いた。そしてグツと拳を握りしめる。

「俺はそれを救済する組織“キュンメル”に所属——協力していたんだ」

「……キュンメル？」

どこかで聞いたことがあるような名前だった。

（確か正体不明の魔の組織——）

その目的も不明。だが、

「キュンメルは人間に不当に捕まった罪のない魔を救済する組織なんだ」

エルはそう説明して、さらに続ける。

「けど、一週間ぐらい前、この街に来ていた仲間は俺を除いてほとんどがヤツらに捕まるか殺されるかしちまった。……本隊と連絡を取ろうにも警戒が厳重で街から出ることもできやしない」

その言葉にティースは街に入るときのことを思い出して、

「そういや……入るときも、検問が妙にピリピリしてたっけ」

リイナを連れていた彼も一瞬ヒヤツとしたものだが、そこはレイから預かっていたミューティレイクの紋章のおかげで事なきを得たのだった。

「仲間たちの命が危ないんだ。それで一人でなんとかしようとして組織の中に潜入したはいいけど……結局見つかってこのザマだ」

「ひ、一人でって、そんな無茶な……」

ティースがたしなめようとすると、エルの表情が歪んだ。

「無茶でも……やるしかないだろうっ！」

「——！」

「あ……悪い」

驚いた顔のティースに、エルは少し慌てたように口を塞いだ。

「お前には……関係のないことかもしれないな。何より、危険だし……」

そしてチラッと彼のぶら下げた剣に目をやって、

「悪い。聞かなかったことにしてくれ」

背を向けた。

「……」

ティースは無言でその背中を見つめる。

(エル……)

明るく、見た目の幼い可愛らしい少年。自分のことを“ボク”と呼び、どこか女の子のようだった少年。

だが、そんな昔の印象は、この再会によってあっさりと崩れ去っていた。

今、彼の目の前にいたのは、外見は幼くとも、揺るぎない決意と勇気を秘めた、紛れもない一人の男――
胸の奥が熱を帯びる。

「エル。待ってくれ」

「……」

ピタッとエルの足が止まった。そして、ゆっくりと振り返る。

ティースは言った。

拳に力を込めて。

それよりも力強い意志を、言葉に乗せて。

「俺も、手伝う。……お前の言うことが本当なら、それは絶対に許せないことだ」

「……ティース」

驚きに、エルの目がゆっくりと見開かれた。

その目を見つめ返したまま頷いて、

「でも、無茶はなしだ。ひとまず、宿に戻ってリィナに事情を話してから――」

「ま、待ってくれ、ティース」

だが、エルはまたしてもそれを拒否した。

「……エル？」

「その……なんだ」

エルは少し視線を泳がせて、

「リ、リイナ……は……その、なんていうか……危険な目に合わせたくない、というか……」

「え？」

不思議そうな顔のティースに、エルは少し焦ったような顔をする。

「お、お前も男ならわかるだろうっ！ 女を危険な目に合わせるわけにはいかないじゃないかっ！！」

「……」

ティースはしばし、きよんとした後、

「……えっと……エル。聞いたことなかったけど……お前って、アレだよな？ 多分、下位族……」

思わずそう尋ねた。

先ほどの追われていた状況、そしてティースに抵抗しなかったこと……それらを考えると、力量的に彼が上位魔や将魔ということは確かに考えにくい。

「なっ、なんだよ、突然」

肯定はしなかったが、その反応はどうやら凶星である。

「……」

そんなエルをしばらく見て……そして、ティースの口には苦笑が浮かんだ。

（危険な目に合わせたくない、か……）

それはそうだろう。下位魔である彼が、王魔であるリイナに対し、女だから危険な目に合わせられない、と言うのだ。どんな天変地異が起ころうとも、リイナの方が圧倒的に強いに違いないというのに。

「お、おい……俺、何か変なこと言ったのか？」

慌てた様子で少し不安げな顔のエルに、ティースは首を振って、

「いや、気持ちはわかる。……そっか。そうだよな」

そう言った。

危険——力という点では心配なくとも、そのために正体を現すことになるならば、それはもちろん危険なことだ。ティースとて、彼

女にそういう危険を侵させるのは本意ではない。

「だ、だろ？」

ホッと胸をなで下ろしたエル。

ティースはそんな彼を見て、ふと思った。

(こいつ、もしかしてリィナに惚れてるのかな……)

確かに彼らは昔から仲良しだった。こっちの世界にいたときは、子供だったとはいえ、あの蔵の隠し部屋で二年ほどを一緒に暮らしていたし、今回、こっちの世界に一緒に来たことから考えても、向こうでも少しは交流があったのだと思われる。

思わず、笑みが浮かぶ。

だが、少しだけ、得体の知れないモヤモヤしたものが胸を過ぎった。

(……?)

もちろん自覚のなかったティースは、それが微かな“嫉妬”の感情だったということには気付かずに。

——そうして再会したばかりの二人は、ゲノールトに囚われた者たちを解放すべく、共に行動することになったのだった。

幕間『エリートたちの晩餐』

サントニア学園。

広大な敷地と優秀な設備を擁するこの学園は、そこに開かれた数十もの学科からそれぞれ各分野のスペシャリストを年に何人も輩出しており、卒業生のリストには他領の重鎮が幾人も顔を並べているという、この学園都市ネービスの中でも三本の指に入る名門学園。それもいわゆる坊ちゃん嬢ちゃん御用達の学園ではない。その門戸は広く一般にも開放されており、いわば、夢を持つ一般市民にとつての登竜門的な場所なのである。

さて、その広い敷地を持つサントニア学園の、とある一角。

そこに、薬師を目指す人々の集まる薬草学科の建物がある。薬草に関する知識やその調合法……毒草の見極め方やその利用法までを教えているところだ。

この日の放課後、その薬草学科の学舎から出てきた一人の少女がいる。

輝くばかりの綺麗なブロンドの髪を持ち、一際目立つ端正に整った顔立ち。隙のない凛とした姿勢で正門の方に向かっていくと、そばにいた幾人もの生徒が男女問わず彼女に視線を奪われていた。――彼女の存在を認知済みであり、その顔をそれなりに見慣れているはずの人々が、である。

と、そんな、ある意味少々異様な雰囲気の中、

「おおい。シーラあ」

「？」

後ろを追いかけるように学舎から出てきたもう一つの影があった。その声に振り返った長いポニーテールが微かに揺れ、その人物を確認するなり、人形のようなだった顔立ちがほんの僅かに崩れて柔らくなる。

「ディアナ」

どうやら少女――シーラにとって、それが親しい間柄の人物らしいことは疑う余地もない。

「聞・い・た・わ・よおー」

ディアナと呼ばれたこの人物は、シーラと同じ薬草学科の三回生であり、一年と一ヶ月ほど年上の少女だった。学園内の女性比率はそれほど高くない。その中で、特別相性の悪くなかった彼女らが親しくなったのは至極当然の流れだったといえるだろう。

「なに？」

追いつくのを待ってから、シーラはそう問いかける。

肩を並べると若干シーラの方が背が高く、ディアナの人懐っこそうな丸い顔立ちも手伝ってか、二人の年齢は実際よりも逆転して見える。

そのまま、二人は並んで歩き出した。

「あんた、法務学科のお坊ちゃん最近仲がいいらしいじゃない？」

「誰のこと？ ……あそこはそういうの多すぎて区別つかないわ」
馬鹿馬鹿しいと言わんばかりの様子で切り返したシーラは、とぼけているというよりは本当に興味がなさそうな態度だ。

その返答に、ディアナは特に意外そうでもなく、ただ少しつまらなさそうにして、

「なんだあ。また玉砕しただけか」

「ここを社交クラブか何かと勘違いしてる痴者のことなんか、いちいち覚えてられないわよ」

「……うわ、相変わらず言うねえ。うまくいけば玉の輿なのに。アレでも将来はきつとエリートよ？」

「興味ないわ」

学園の敷地を出ると、半数以上の生徒がそのまま南に向かっていく。それはつまり、一般住宅街から通っている人間が多い証拠だ。

「相変わらず真面目ねえ。……ていうか、やっぱりオーウェン一筋

なんだ？」

「どうかしらね」

やはり素っ気ない様子でシーラはそう答えた。

——オーウェンⅡトレビック。その名を持つ少年はシーラたちと同じ薬草学科の三回生でディアナと同じ年の十六歳。背が高くそれなりにハンサムながら性格的にはやや地味でそれほど目立つ存在ではなかったのだが、学園一の美女と噂されるシーラとの関係が明るみに出てからは、薬草学科で一番有名な男子学徒になってしまった、運がいいのか悪いのかよくわからない人物である。

「相変わらずお熱いこって」

おちゃらけてそう言ったディアナは、それからわざとらしく周りをキョロキョロ見回して言った。

「で、そのオーウェンくんの姿が今日は見えないみたいだけど、どうしたの？ 倦怠期？」

「まさか。あり得ないわ」

シーラは呆れ顔で反論する。……というか、一日一緒にいないだけで倦怠期なのであれば、世界中の恋人は大半が倦怠期ということになってしまいうだろう。

「彼には彼の生活があるでしょう。毎日毎日付き合わせるわけにもいかないわよ」

「あらら、いいのかなあ。あんたのことだから、一日離れただけで変な虫がいっぱい寄ってくるんじゃないのお？」

「そうね。でも仕方ないわ、こういう顔だから」

しれっと返ってきた言葉に、ディアナは苦笑して、

「あんた、そういうことばっか言ってるといつか友達なくすよ？」

……あ、でも、あんたぐらいだと逆に嫌味に聞こえないか」

「……」

一瞬だけ空白があって、シーラは答えた。

「顔の善し悪しなんて、きっと取るに足らないことよ。それで望みが叶うわけでもないわ」

「なに言ってるのよ。金持ちのいい男が見つかるじゃない」

「どんな顔だって、世界中の男が振り返るわけではないでしょう？」
大通りを南に下っていくと、人の波が徐々に小さくなっていく。

「そんなもんかなあ。あんたの場合は全員振り返りそうに思えちゃうけど」

二人の足はいつも通りの道を辿り、やがてパン屋の角に差し掛かると、

「――あ、それじゃ、あたしはここで」

ディアナはそこで向きを変えた。

「ええ。また――明後日」

翌日は休校日だ。

「ん。じゃね。……あ、それと」

別れ際、ディアナはちよつとだけ眉をひそめて、

「言おうかどうか迷ったんだけど……あんた、今日はちよつと顔色悪いよ。ま、明日はちよつと休みだけど、調子悪いならちゃんと休んだ方がいいんじゃない？」

「……」

指摘されたことが意外だったのか、シーラはやや意表を突かれた顔をしたが、やがて目を閉じ、ゆっくりと首を横に振る。

「いいえ。大丈夫よ」

「……そう。じゃ、また」

諦めた顔で、ディアナはそれ以上は何も言わずに路地に消えていった。

シーラはそれを――いつもより心なしか優しい視線で――見送ると、やがて踵を返して歩みを再開する。

大通りの喧噪は、いつも通り。

「……」

そのうちに、彼女の顔は再び冷たい表情を形作っていく。

――すれ違う人々から受ける好奇の視線も、たまに声をかけてくる好色そうな男への対応も、彼女はとうの昔に慣れてしまっていた。

出来る限り一人にならないようにはしているし、一人のときは人気がない道を極力避けている。それに、万が一襲われたときの対応も万全。護身術も心得ているし、普通には手に入らない特殊で危険な薬も常に服の下に忍ばせてあるから、いつかのように相手が“魔”だったりしない限りはまず大丈夫だ。実際、誰にも明かしていないものの、それを使用する機会は今までも何度かあった。

ふと足を止め、道端に並ぶ建物のガラスに自らの姿を映してみる。そこに映ったのは、いかにも愛嬌のない、どこか不機嫌そうにも見える見慣れた顔。

「……」

鏡を見たことはもちろんある。風聞だって耳に入ってくる。自身の容姿について、周りがどんな評価をしているのか、当然のように知っている。

彼女自身としては、目元がちょっときつすぎるとか、もう少し丸みのある輪郭の方が良かったとか、色々注文がある。が、周りの人々に言わせれば彼女は“完璧な”美少女らしかった。

（……見慣れてしまえば、全部同じじゃないの）

馬鹿馬鹿しくなってガラスから離れる。

実を言うと、彼女は自分の顔があまり好きではない。……いや、昔は好きだったのだ。周りにちやほやされるのは嫌いじゃなかったし、可愛い可愛いと誰かに誉められるのも悪い気分じゃなかった。

が、年を経るに連れ——特にこのネービスに来てからというものが、それが逆に厄介事を産み出す原因になってしまっている。将来有望で優秀なエリートコースの学徒だとか、貴族の一人息子だとか、大商人の跡取り候補だとか、彼女はそんなものに興味はないのだ。

（……ホント、下らない）

思考がマイナス方面へばかり転がり続け、苛々が募ってくる。……本来ならばとくに割り切ってしまっているはずのこと。なのに必要以上に気分が沈むのは、そこに全く別の要因——別の心配事もあったからだ。

通い慣れた道を左の路地へ入っていく。少しデコボコして足を取られそうになる道だが、歩き慣れている彼女にとってはさほど苦でもない。

「……」

そこはあまりいい記憶のない路地だったが、今はまだ人通りがある。それに他のルートはさらに人も少ないし、それ以外を通るならぐると大きく遠回りをしなくてはならなかった。

三分ほどで路地を抜けると、やや広めの道に出る。中央通りほどではないが、馬車が二台は楽に通過できる道で、そこに沿って歩けばやがてミューティレイクの屋敷が見えてくるはずだった。

（……あら？）

ガラガラガラガラ。

彼女の横を一台の馬車が追い越していく。装飾を施されたそれは、どう見ても貴族の馬車だった。

（珍しい。……この道に向こうに行くってことは、ファナのお客かしらね）

ミューティレイクの屋敷は、有力貴族としては少々変わった場所——高級住宅街と一般住宅街のちょうど境目辺りに位置している。だから、貴族風の馬車がこっちの方角に向かっていたのであれば、ミューティレイクの客だと思ってほぼ間違いなかった。

「……」

赤味を帯び始めた夕日をその視界に捕らえながら、シーラは無言で帰路を辿っていく。

——その背後、およそ十数メートルの位置。

「ふふ。ふふふふ……」

どこか気味の悪い笑みを浮かべながら同じ方向に歩く、やや常軌を逸した雰囲気のある男の存在には気付かないままで——

太陽が徐々にオレンジ色を帯び始めていた頃、カレルⅡストレンジは、だだっ広い建物の通路をやや早足で歩いていた。

まるでその性格を表すかのように、冷徹に同じリズムを刻む足音。

「……」

軍服のようなきっちりした黒い服に身を包み、腰には一振りの剣を携えている。身長は百八十センチ近く、真っ黒な髪は長くもなく短くもない長さで、やや後ろに自然に流してある。かなりのハンサムだが目つきは異様に鋭く、優しいとか穏やかとかいうものとはまるで正反対の印象。年齢は……二十代前半だろうか。窓から射し込む夕日が、両袖に刻まれた“肆”の字をオレンジ色に染め上げていた。

と。

「……ん？」

ピタリと足を止め、カレルはその鋭い視線を横に移動させた。

視線の先にあったのは、とある部屋の入り口。——いや、部屋というには少し広すぎるだろうか。

そこはだだっ広い鍛錬場の入り口だった。

「……」

聞こえた歓声にカレルは眉をひそめ、そしてちょうど鍛錬場から出てきた一人の男を呼び止める。

「おい。何の騒ぎだ」

「ん？ ……あつ、カ、カレルさん！」

出てきた男は、まるで厳しい教師に見つかった生徒のような表情を浮かべた。……いや、どうやら彼らにとって、カレルというのは実際にそういう類の存在らしい。

だが、そんな男の態度など意に介することなく、

「自主訓練にしちゃ随分と騒がしいな。お前ら、なにをやってる？」

「あ、はあ、それが——」

おそらくカレルより二、三歳は年下だと思われる男は少し言いにくそうにしながら、それでも自らに向けられた視線の威圧感には耐えられずに答えた。

「先ほど他流試合の申し込みがありました、今、キャシアスがその相手をしていたんです」

それを聞いたカレルの視線がますます鋭くなる。

「他流試合だと？ 誰が許可した？」

「そ、それは私にはちよつとわかりま——あ、た、ただ、もちろん許可はいただいているはずですよ」

「……」

眉間に皺を寄せ、カレルは鍛錬場の中に目を向けた。

（……あれか）

鍛錬場の中央、野次馬が集まっているために中心はよく見えないが、そこには確かにカレルの知っているキャシアスという青年がいて、それと向き合うように見知らぬ男が立っている。

そして周りの野次馬たちはニヤニヤと試合を眺めていた。

（キャシアスが受けたってことは、許可を出したのは“ヤツら”の方か……）

歓声。

どうやらキャシアスの太刀が相手の太刀を弾き飛ばしたようだ。

笑い声。——冷笑。

（……ふん、下らん）

試合というよりは、一方的に勝っているのだろう。キャシアスと対峙している男は遠目にも動きが鈍っていたし、半分戦意を喪失しているようにも見えた。

「あ、あの、カレルさん……」

「……」

カレルは目の前の男を一瞥すると、何も言わずに背を向けた。

許可を得ているのであれば口を出すことはできなかったし、それに彼は今、そんなことに構っている暇はなかったのだ。

「……ああ、そうだ、お前」

途中で思い直したように足を止め、振り返って問いかける。

「どこかで、ラドフォードを見なかったか」

「え、ラドフォードさん……ですか？　いえ、見てませんよ」

「そうか。ならいい」

すぐに早足で立ち去ると、背中に、笑い声がもう一度聞こえた。
他の場所へ足を向ける。

（ふん……）

すれ違う人々から向けられるのはその大半が尊敬と畏怖の視線だ。
その中を、カレルはいかにも近寄りがたい鋭い雰囲気をつまみ、
やはり淀みのない足取りで進んでいく。

——しかし。

「ちっ……」

自室、鍛錬場、中庭、武器庫……いくら建物自体が広いとはいえ、
一人の人物が訪れる可能性のある場所などたかが知れているはずだ
ったが、どこへ行っても、彼の探すラドフォードという人物の姿は
見えなかった。

探し始めてから三十分以上は経っただろうか。

「どこ行きやがった」

ラドフォードの私室を出たところで舌打ちしたカレル。クールな
表情の中にもほんの僅かに苛々した色が見え隠れしていた。

と——突然、

「……どうしたんだい、子猫ちゃん」

「うおおっ!？」

妖しげな中高音の囁きが響いたかと思うと、耳元に生暖かい息が
吹き付けられた。

反射的に身を翻す。

と、そこに立っていたのは、

「ふふっ……水臭いじゃないか、カレル。一人で何を悩んでいるん
だい？」

女性——いや、美青年だろうか？ カレルと全く同じ、きっちりとした軍服風の制服に身を包み、胸の前で左手に右肘を乗せ、右手は口元に当てて妖艶に微笑んでいる。身長はカレルよりは微妙に低く、百七十センチ半ばといったところか。金髪だったが、まるでカレルとお揃いのような髪型。その両袖には“捌”の字が刻まれている。

「……リゼット、テメー……」

鳥肌の立つ首筋を押さえたカレルに、リゼットと呼ばれた人物はウインクとともに右手の人差し指と中指で軽く投げキッスをして、「さあ、カレル。遠慮することはないよ。君の抱えている悩みを全て、隠すことなく、赤裸々にこの僕に告白してくれ」

カレルは眉間に皺を寄せながらも、やや抑え気味に答える。

「……失せろ。オメーの存在自体が悩みの種だ」

「ええっ、そんな！」

リゼットは目を見開いて、

「そんな、急にプロポーズされても困っ——」

「……どれだけ無理矢理な解釈なんだよッ！」

思わず声を荒らげたカレル。が、そんなごく真つ当な突っ込みも通じることはなく、リゼットは憂いを帯びた表情で深いため息を吐くと、

「ごめんね、カレル。君は素敵な子猫ちゃんだけど、僕はまだ一人のものにはなりたくないんだ。……こんな罪な僕を許してくれ」
ピキ。

「……おい。気色ワリイ冗談も大概にしねえと……殺るぞ、コラ」

「え、冗談なんかじゃ——うわ」

首から数十ミリの距離まで接近した白銀の刃に、リゼットはようやく両手を挙げて、

「ま、待ってよ、カレル。早まっちゃダメだ。よく考えて」

「オメーが人生やり直すこと考えろやッ！」

マジ殺意のこもった強烈な突っ込みに、リゼットは降参してため

息を吐く。

「もう、しょうがないなあ。照れ屋さんなんだから。……ごめん。もうしないから。今のところは」

「……」

カレルは疑わしげな視線を向けていたが、これ以上は無駄だと悟ったのか、無言のまま剣を鞘に収めて背を向けた。

「探しているのは、ラドフォードさん？」

ピタリと足を止め振り返る。

「お前が行き先を知ってんのか？」

「僕は知らないよ。……でも、ルーベンが知ってるんじゃないかな？　一時間ぐらい前に二人で何か話してたから」

「……ちっ、ルーベン、か。また厄介なヤツに――」

「え、呼びました？」

「……」

注目した視線の先。あまりにもタイミング良く通路の向こうに姿を現したのは、やはり彼らと同じ黒い制服を着た青年だった。色白で童顔、いかにも病弱そうな外見は青年というよりは少年っぽく見えるが、年齢はおそらく二十歳近いだろう。天然のものか髪の色は白髪に近く、この大陸でも比較的珍しい髪の色だった。その両袖には“陸”の字が刻まれている。

そして開口一番、

「カレルさん。リゼットさんも、こんにちは。今日も夫婦で仲睦まじいですね」

「ルーベン。てめえ、初っぱなから喧嘩売ってやがんのか」

「嫌よ嫌よも好きのうちといいますし」

「……。立ち聞きしてたんなら話は早え」

眉の辺りにやや苛々が見え隠れしながらも、カレルはなんとか堪えて流した。……このルーベンに関しては、リゼット以上に突っ込みが通じない相手だということを、彼は身を以て知らされているのだ。

「ラドフォードの野郎はどこだ？ 知ってんだろ？」

「あー」

その問いに、ルーベンは少しだけ首を傾けて、

「ラドフォードさんなら色々用事があるって出掛けましたよ。学園群の元締めさんやディバーナ・ロウの総帥さん、あ、あと、ミューティレイクの当主さんにも用事があるんだそうで。なので、遅くなるそうです」

「……全部同じじゃねーか」

そこへリゼットが口を挟む。

「要約すると、この前の警備についての議論を煮詰めて、あとはデシジャラスでアバンチュールなアフターファイブを楽しもうということじゃないかな」

「どこが要約だ？ わかわけんねえぞ。……とにかく。あいつがミューティレイクに行ったのは間違いないんだな？」

「至極つまらない言い方をすればそういうことだね」

カレルはただでさえ鋭い目をさらに細めてリゼットを見据えると、
「で、テメーも実は最初から知ってたわけか」

「ち、違うよ。ルーベンくんの話聞いてピンときたんだヨ」

「……」

怒る気すらも失せ、カレルは背を向けた。

「ミューティレイクへ行く。ルーベン、お前もついてこい。……リゼット。お前は絶対についてくんな」

「ええ！？ 僕だけ仲間外れなんてひどいじゃないか！ どうして！？」

「てめーの胸に手を当てて考えてみろ」

「胸？」

リゼットはきよとした顔をして胸に手を当てると、直後、少しだけ頬を染めて微笑んだ。

「僕の胸に興味があるのかい？ ふふっ、カレルってば、見掛けによらずスケベなんだか——」

白刃が煌めく。

「死・ん・で・み・る・か？」

「あ、ああ危ないよ、カレル。け、剣は仲間に向けるものじゃないだろう？」

刃の向こうにあるカレルの視線がさらに鋭くなる。

「ワリイな、リゼット。俺にとつての“仲間” ってのは、俺に不利益を与えない人間のことを言うんだ」

「は、はは……」

突きつけられた切っ先を前に、リゼットは笑顔を引きつらせながら後ずさった。

と、そこへ、ルーベンが呟くように歌い出す。

「愛し合う二人は〜いつもすれ違い〜♪」

「……」

「すれ違いながら〜ジジイになって〜ポックリポックリ死んでゆく〜♪」

「どんな歌だ！」

ルーベンはさも心外だといわんばかりの表情を作って、

「え、知らないんですか、カレルさん。巷では今大流行ですよ。ベストヒットですよ」

「嘘つけよ！ どう考えても今即興で作った歌じゃねーかッ！！」

「いやいや。一年後にはきつと大ヒットですよ。間違いないです」

「んなもんが大ヒットするなら、俺はとっくに国の一つぐらい手に入れて――」

「そりゃムリだろ」

ピクツとカレルのこめかみが動く。

「……いきなりタメ口か、コラ」

「だって、ムリですから」

そこへリゼットも二度頷いて口を挟む。

「うん、カレルにはムリ。王様っていうよりは犯罪組織のエージェントみたいだし」

「く……！」

こうして二人におちよくられる様は、とても部下たちから尊敬され恐れられるカレルⅡストレンジとは思えない姿だった。

「……ともかく」

こめかみをピクピクさせながらも深呼吸で自制し、剣を鞘に収める。

「ミューティレイクへ行く。ルーベン、ついてこい」

「はい、カレルさん」

素直に頷くルーベン。

「ねえ、カレル。僕は？」

「だから、お前は――」

「もしダメだって言われたら、君が帰ってくるまで延々と受付嬢を口説いてることにするよ？ 隊内の風紀が乱れてもいいのかい？」

脅しなのかなんなのかよくわからなかったが、それでもカレルはこめかみを押さえながら小さくため息を吐いて、

「……勝手についてこい」

「ふふ、ありがと、カレル。愛してるよ」

チュツと音を立てたりゼットの投げキッスに、カレルのこめかみが再びピクリと動いたが、それ以上は何を言うこともなく。三人は建物を出ると、道行く人々の注目を集めながら南の方向へ向かって移動を始めたのだった。

その人物の第一印象をたった一言で表す術を、シーラは知っていた。

「嬢ちゃんはミューティレイクの関係者か？ だったら悪いが、フアナさんへ取り次いでもらえないだろうか？」

「……」

ミューティレイク家の正門まで約百メートル。

その場所で突然声をかけてきた人物。振り返った視界に立っていた一人の男。

歳は彼女よりもずっと上、二十代半ばといったところか。まず目につくのはフサフサとした、まるでライオンのような髪。背の高さは百八十センチ以上、彼女の昔馴染みの青年――ティースと同じぐらいはあるだろうか。だが、童顔で頼りなさげな彼とは違い、いかにも男臭い印象の人物だ。

が、彼女の脳裏に浮かんだ第一印象は、そういうものとはまるで無関係だった。

ただ、

(……変態?)

その一言である。

右手には花束。男の印象からするとミスマッチだったが、それは問題ではない。

問題は……そう。服装である。

下半身は至極まともだ。いや、そこがまともでなかったら、彼女は立ち止まることなく一目散に逃げ出すか、あるいはあらゆる危険な手段を用いてでも男の意識を奪う作戦を実行に移していただろう。上半身。

上着はあまり飾り気のない、それでも比較的生地の良い下とお揃いの黒服だ。袖は肘の上まで捲っており、裾はやや長く太股辺りまである。前をボタンで止めるタイプの服だったが、男はそのボタンを止めていなかった。

そこまではいい。問題はその上着の中に着ている服だ。

……いや、そう言う用語弊があるだろうか。

着ているものが問題なのではない。

“着ていないこと”が問題なのだ。

つまり……ボタンを止めていない上着からは、筋肉隆々の素肌と、そこをほんの少しだけ黒く染める胸毛がそのまま覗いていたのである。

る。

「……」

シーラは無言のまま空を見た。

まだ夕日は出ている……とはいえ、季節柄、風はやや冷たい。

今が夏であるならば、いい。外で働く男たちの中には上半身裸という者も珍しくはない。が、今は十一月。大陸でも北に位置するこのネービスは、すでに冬支度も始まっているという季節だ。

この時期、上着一枚、わざわざその袖をまくり、前のボタンを止めないままで歩いていれば、それは充分に変人だった。貧乏で服が買えないというのならばともかく、服の質自体が良いことから考えても、それはない。

「ん、どうした、嬢ちゃん。俺の顔になんかついてんのか？」

「……」

顔じゃなくて体の方だ、と突っ込みたかったが、そこはグツと堪えた。

そして、ミューティレイクの門を指さして、

「……直接門の方に掛け合ったら？」

「いや、それがな」

男は左手で僅かに無精ひげの生えた顎を撫でて、

「不思議なことに、全く取り合ってもらえなので途方に暮れていたところだ」

「……馬鹿じゃないの」

「ん？　なんだ？」

「いいえ」

表面上は涼しげな顔のまま答え、それから少しだけ考えた後、答えた。

「ファナは今、外出中よ。今日は戻ってこないわ」

もちろん口から出任せだった。

が、男はあっさりと信じたらしく、

「な、なにiiiiiiiiっ!?!　ほっ、本当かっ!?!」

「本当よ。残念ね」

結論……関わり合いにならない方が良い。

シーラは男に背を向けて歩き出した。

が、

「ま、待ってくれ！」

「!?!」

男はびっくりするような早足で、立ち去るシーラの真横に並ぶと、
「や、約束していたんだぞ!? 今日この時間に訪ねていくと言
ったら、ファナさんはあの女神の微笑みで『お待ちしております』
なんて……ぐおおおつ、あの笑顔を思い出ただけで胸の奥が焼
け焦げるようだあああつ!!」

「……」

「おつ、な、なんで急に早足に……」

「……」

「ま、待ってくれ! ちょっと待つんだ、嬢――」

「シーラ様、お帰りなさいませ」

「ええ。……警備、ご苦勞様」

ガシャン!

「おつ!?! な、なにをする! は、離せつ! 離さないかつ!」

「さっさと去れ! 去らんと警邏隊を呼ぶぞ!」

「な、何故だあつ! 俺はファナさんとちゃんと約束を、約束をお
つ!! ……ファナさあああああんツ!!!!」

遠くなっていく叫びを背中に聞きながら、シーラはホッと安堵の
息を吐いた。

（なんなの、一体……ファナにもストーカーってのがいるのかしら
ね）

決して他人事ではないものの、ああいうある意味開き直っている
ようなのは、彼女も初めて見るタイプだった。

（そんな悪い虫がつく機会、あの子にはそう多くないはずだけれど）
そんなことを考えながら、いつものように使用人たちと挨拶を交

わししながら別館へ向かう。

……と、その途中、本館の入り口に視線が止まった。

(あれは……)

見覚えのある馬車がそこに佇んでいた。

(さっきの馬車はやっぱりここだったのね。……あら?)

微かに耳に聞こえてきたのは聞き覚えのある声。

「申し訳ありませんが……」

聞こえてきた穏やかそうな声色は、屋敷の執事、イングヴェイⅡ
イグレシウス——通称アオイの声だ。

その、少し困ったような反応に、不審に思っただけ近付いてみる。
すると、

「何故だ。用事の合間を縫ってようやく訪ねたんだ。少しぐらい――」

「ですから、ファナ様はこれからお客様との面会があるのです。せっ
つかく訪ねていただいたのに申し訳ありませんが、どうかご理解く
ださい」

どうやら何事か揉めているようだった。

(誰かしら……?)

ようやく視界に入ってきたもう片方は見覚えのない男だ。が、着
ているものから察するにネービスの若い貴族……おそらくは馬車の
持ち主だろう。

「……せっかく来たというのに、門前払いしようというのか?」

「ですから、ファナ様にはこれから大事なお客様があるのです」

そこにファナの姿はない。アオイは丁寧に対応していたが、対す
る若い男の方は、何やら尊大な態度で彼を責めていた。

「では、それが終わるまで待たせてもらおう。それから夕食でも――」

「ですから」

何度も似たような問答を繰り返しているのだろう。アオイは今に
もため息をつきそうな口調で答える。

「そのお客様との夕食の席もすでに用意してあるのです。お待ちいただいても、今日中に面会することは叶いません」

「な、なんだ、それは！」

相手の男は完全に気分を害したようだった。

「その客というのはどこのどいつだ！？ 私が直接会って、遠慮するように言ってやる！」

（……なにかしら、あれ）

男の態度に、シーラの視線は完全な嫌悪感を帯びた。……もし対応していたのが彼女なら、とつくに侮蔑の言葉が口をついていたことだろう。

「……」

そしてアオイの方も、あまりに物わかりの悪い相手に呆れた色を浮かべ、気付かれない程度のため息を落とし……そして、仕方なさそうに答えた。

「……お客様は、ディグリーズのラドフォードⅡマティス様です」

「ディー——！」

その途端、男の態度が豹変する。驚いたように息を呑み込み、むせた。

「ゲホッ！ ゲホゲホッ！ ……ディ、ディグリーズだっ！？」

（……ディグリーズ？）

それを遠くで眺めているシーラには聞き覚えのない単語だった。が、貴族の男はどうやら理解したようで、

「どうなさいます？ 直接お会いになりますか？」

「——」

そのときばかりは、いつもは温厚なアオイの態度が少々意地悪く映った。が、男の方はどうやらそれを気にする余裕もないようで、
「……そ、そうだな。いや、考えてみたら先約は向こうなのだから、ここは私が引き下がるべきなのかもしれんな」

「そうですか。助かります」

急に態度を軟化させた男に、アオイはニッコリと微笑んで、

「では、少しこちらで休んでいけます？　それとも、すぐお引き取りになれますか？」

「い、いや。私も忙しい身だからな。残念だが、帰らせてもらうことにしよう」

男はびっくりするぐらい素直になると、身を翻し馬車に乗り込んでいった。

慌ただしい音を立てて、まるで逃げるように馬車が去っていく。

「……」

それを無言で見送った後、

「ふう……っ」

「アオイさん」

シーラは早速近付いて声をかけた。

「え？」

アオイはハッとしたように振り返って、

「え？　あ、シーラさん。今、お帰りですか？　……ああ、ティースさんでしたら、今は少し出掛けられていますよ」

「いえ、それはいいわ。……それより今の、なんだったの？」

馬車の去った方向を眺めてシーラが問いかけると、アオイは少し照れたように、

「あ、はは、見られてましたか。いえ、そんな大したことじゃ——」

「……」

「……あの、他言はしないでくださいよ」

「ええ」

満足そうに頷くシーラに、アオイは声を潜めて答えた。

「スナークウェザー家のご子息、ウィンスロー様です。彼は……その、姫の——」

「ああ」

その説明だけで、シーラにはどういう事情か理解できる。

「ファナに求婚している男の一人、ってところね？」

別に詳しい事情を知っているわけではないが、彼女の立場、年齢、

独身であるということを考えれば、そういう話がいくつも持ち上がっていて不思議もなく。

「……そういうことですね」

肯定した眼鏡の奥の表情が少しだけ疲労を浮かべて、

「中でもあのウィンスロー様は……その、少々――」

「わがままで物わかりの悪い典型的なボンボンなのね」

「……」

アオイはその立場故か何も言わなかったが、苦笑するその表情は明らかにシーラの発言を肯定したものだった。

どうやら彼も色々苦労しているらしい。

（あの子も大変ね……）

心の底から同情しつつ、シーラは続けて質問した。

「ところでアオイさん。ファナのお客の“ディグリーズ”というのは一体なんのこと？ 聞いたことのない家名だけれど」

「あ、ディグリーズは家名ではないですよ。……さあ、中に入りましょう。風も冷たいですから」

そう言って本館のドアを開くアオイ。

本館の方はシーラにもあまり縁のない場所だったが、中の通路を使って別館に移動することができる。その玄関ホールの作り自体は別館と似ていたが、もちろん質素な丸テーブル群は存在していなかったし、別館で見られるような憩いの風景も見られず、やや閑散とした雰囲気である。

途中、アオイは説明を始めた。

「ネスティアスのご存じですよね？」

「ええ」

それはもちろんシーラも知っている。

ネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”。その規模はディバーナ・ロウの何倍にも及び、抱えるデビルバスターの数は三十人近く、傭兵やデビルバスター候補生など、直接戦闘に参与する主要構成員だけでもその数は軽く三桁を越える。ネービス領で

はもちろん最大規模、大陸全土を合わせても、これほどの規模を持つデビルバスターの部隊はそうそう存在しないだろう。

「では、彼らの深緑色の制服はご覧になったことがありますか？」

話しながら、二人は玄関ホールの手右から別館へ続く通路へと足を運ぶ。

「ええ。軍隊みたいなあのきっちりした服ね」

「そうです。では、その中で、深緑ではなく黒い制服の方を見たことはありませんか？」

「黒？ ……いいえ、ないわね」

「そうですか」

特に意外そうでもなくアオイは頷いて、

「ディグリーズというのは、そのネスティアスの中でもトップを占める十人の総称です。彼らは他とは違う漆黒の制服を身につけ、袖にはそれぞれの階級を示す文字が刻まれているのです」

「ネスティアスのトップ？ ……ああ。それであの馬鹿男の態度がコロリと変わったのね」

シーラは納得して頷いた。

実質は単なる雇われデビルバスターとはいえ、ネスティアスのトップクラスともなれば、やはり話は少々違ってくる。デビルバスターとしてもエリート中のエリート。そこらの貴族のボンボン程度では恐れるのも当然の話であった。

「ディグリーズといえば、泣く子も黙る存在ですから」

辛辣なシーラの言葉にやはり苦笑したアオイだが、あの若い貴族を“泣く子”扱いした彼にもまた、あの人物を腹に据えかねている様子が充分に窺えた。

通路を抜け、別館へ。

大階段の前に着くと、アオイは一礼し、

「では、私は姫の元へ向かいます。準備がありますので……にして、遅いですね」

別れ際、独り言を呟く。

「とつくに約束の時間は過ぎているのですが――」

「……」

特に気にせず、シーラは階段を上る……いや、上ろうとして足を止めた。

ふと脳裏を過ぎったのは、少し前の記憶と、アオイの言葉。

（……ネスティアスの制服……？）

引かなかったのは“黒”

（そういえば――）

思い返してみれば“あの男”は確かに上下とも黒で、しかもそのデザインは――中に何も着ていないということを除けば――彼女の記憶の中にあるネスティアスの制服に酷似していた。

「……」

まさか、とは思った。

泣く子も黙る、である。……いや、ある意味泣く子も黙るかもしれないが、それにしても……しかし、偶然にしてはあまりにも不自然すぎる。

しばし迷った後、シーラは口を開いた。

「……アオイさん」

「え？」

振り返ったアオイに、シーラは神妙な顔のまま問いかける。

「その人って、もしかして――」

「な、何をする！ 離せ！ 離さないかつ！ 俺はちゃんとファナさんと約束したんだぞおおおっ！！」

「うるさいうるさい！ とつとと帰らんと、本当に警邏に突き出すぞー！！」

ミューティレイクの正門まで、約二百メートル。何やら派手な言い争いがカレルたち三人の耳にも聞こえてきた。

「うおおおおっ！ まさかつ！ まさかお前らは、俺とファナさんの恋路を邪魔する障害物なのか！？ そーなのかつ！？」

「ええい、何をわけのわからんことをっ！！」

その片方は、聞き覚えのある声だ。

「相変わらずお盛んなようですね」

大きめのひさしがついた白い帽子に手を当て、黒い制服とはかなりアンバランスな格好のルーベンが、いつものとぼけた調子でそう呟く。

「……」

カレルはこめかみを押さえた。

——その声は間違はなく、彼が探していた人物のものだったのだ。「だがな、覚えておけよ！ 俺と彼女の赤い糸はどんな障害に遮られようとも決して切れたりはしない！ 何故なら、俺と彼女の愛こそが“奇跡”だからだっ！ そう、永遠という名の奇跡だ！ 愛こそ全て！ ラブフォーエバー！！」

「まだ警邏に突き出されてないことこそが奇跡だと思うな、僕は」リゼットの呟きに、今度は眉間に指を当てたカレルが絞り出すような声で、

「……誰か、あの馬鹿を止めてこい」

「カレルさんがそう言うなら、仕方ありません」

言葉とは裏腹に“待ってました”と言わんばかりの素早さで承知したルーベン。歩みを早めると、黒い制服の裾と白い帽子が微かに揺れて、直後、風を巻くようにその姿が高速移動する。

白と黒のコントラストが宙に舞った。

「さあ！ わかったならさっさとそこを通さないか！ いくら邪魔しようとも、俺とファナさんの仲を裂くことが不可能だとこれでわか——ごふうっ！！」

「ごいん！ と、鈍い音がして、門番に捲し立てていた男の体がゆっくりと崩れ落ちる。

ちゃきっ……パチン。

ルーベンが地面に着地するなり、幅の広い両刃の剣を鞘に収めて、
「ご安心ください。峰打ちです」

「……お前の剣のどこに峰があんだよ」

あとから追いついてきたカレルはとりあえずそう突っ込んで、嘸然とした顔の門番に対し、懷からプレートのようなものを取り出す。

「怪しいもんじゃない。……ネスティアス所屬、ディグリーズの“肆”カレルⅡストレンジだ」

門番の表情が変わる。

「ディ、ディグリーー」

ついてきたリゼットもやはり同じものをチラッと見せて、

「同じく、ディグリーズの“捌”リゼットⅡガントレット。……以後お見知り置きを、可愛らしいお兄さん方」

恭しく一礼する。

「か、かわいらしい……？」

リゼットのウインクに、二人の門番は顔を見合わせた。

……どう見ても可愛いとは言いがたい、三十代の男二人である。

続いて、ルーベンが口を開いた。

「そして私がディグリーズの“陸”、通称“あまりにも優れた素質”を持っているため嫉妬深い上司の不興を買い、出る杭は打たねばといわんばかりに不遇の扱いを受けている不世出の天才”ルーベンⅡバンクロフトです」

「おいコラ。なげえし、全くの事実無根じゃねえか」

「あ、あの……」

突如現れた、ディグリーズを名乗る三人組に、二人の門番は当然のように困惑した様子だ。が、彼らが提示したプレートと、そしてそれぞれの制服に刻まれた文字は、確かに三人がネスティアスのディグリーズであることを示していた。

「今日来られる方はお一人だと聞いてましたが……？」

「ああ」

カレルはチラッと地面に倒れ伏した男を見やって、

「この馬鹿が、おそらくこういう騒ぎを起こしてるんじゃないかと思ってるな」

「……は？」

「言いにくいことだが」

そう言ってカレルはこめかみを押さえ、心底嫌そうな顔で首を振りながらルーベンを促す。

ルーベンが倒れている男の捲れている袖を元に戻した。

そこに刻まれていた文字は“壺”――

「この馬鹿は俺たちの仲間だな。ディグリーズの“壺”ラドフォードⅡマティス。ここの当主さんとの約束つてのも本当の話だ」

「……は……？」

固まった。

ムリもない。

カレルは小さく笑って、

「冗談だと思うか？ ……いや、むしろ冗談にしまつて、今からでもその事実をこの世から抹消してしまうべきか？」

「カレル。……目が、笑ってないよ」

「ああ。なにしろ真剣だ。というか、切実だ」

「……」

「……」

すぐ近くでそんな会話が交わされているとも知らず、地面に突っ伏した男――ラドフォードⅡマティスは、何故か幸せそうな笑みを浮かべていたのだった。

「先ほどは申し訳ありません。こちらの不手際で」

「いやはははははは！ そんな、ぜんっぜん気にすることないですって！」

「……」

「……」

夜のミューティレイク邸。普段は滅多に使われることのない本館の食堂には、今、五つの人影があった。

上座に位置し、謝罪の言葉を述べたのは屋敷の主人、ファナ・ミューティレイク。その後ろに寄り添うように立つのが、執事兼ボデイガードのイングヴェイ・イグレスウスである。

そして客は三人。

ディグリーズの“壺”ラドフォード・マティス。

同じくディグリーズの“肆”カレル・ストレンジ。

そしてディグリーズの“捌”リゼット・ガントレットである。

今はすでに会合と夕食を終え、それぞれの目の前に食後の紅茶が振る舞われたところだった。

「でも、お怪我なさったと聞き及びましたわ」

ファナの心配そうな顔に、ラドフォードは明らかに“ぽっこり”と盛り上がった後頭部を撫で、

「あ、これ？　このことですか？」

やはり豪快に笑い声をあげながら、

「こいつはちよつとはっちゃけた部下がやっちゃったものですから！　全然、これっぽっちもファナさんのせいじゃないっすよ！」

「……はっちゃけてたのはお前だ」

そんなカレルの突っ込みは当然届いていない。

隣のリゼットが声を潜めて補足する。

「ま、あの子も確かに活き活きした顔で剣を振り下ろしてたけどね」

「いやあ、それにしても！」

ラドフォードの演説は続いた。

「図々しい部下が二人もご馳走になっちゃって、ホント申し訳ない！　もう、こいつらと来たらなんっつか、俺がいないと何もできないっつか！　……あ、いや、頼られるのは望むところなんですけどね！　やっぱ男ってのは頼られてナンボですから！！」

「く……！！」

「カレル。ここは場所が悪いよ」

「……わかってる」

懸命に怒りを堪えたカレルの背中が纏っていたのは、いわば“中間管理職”的なオーラだろうか。

「ふふっ」

そんなラドフォードのハイテンションな演説に、カレルとリゼットのみならず、アオイまでもが少々微妙な表情を見せていたのだが……言葉を向けられている当のファナはといえば、やはりいつも通りに穏やかなまま、クスクスと笑って、

「いつお会いしても面白い方ですわ。ラドフォードさんとお話ししていると、時間が経つのも忘れてしまいます」

「そ、そうですか！？ いやあ、参ったなあ、はははははっ！！」
嬉しそうに頭を掻くラドフォード。

「……」

カレルは時折、そんなミューティレイク家当主の精神構造が羨ましくもなる。

と、そんなこんなで、時間はアツという間に過ぎ去り――

「……そのとき俺は言ってやったわけですわ！ お前ら、その子の代わりに、この俺を――！」

「話の途中、ですが」

永遠に続くかと思われたラドフォードの独り舞台に、カレルはい加減ピリオドを打つことにした。

「そろそろ、おいとまさせていただくことにします」

わざとらしく少し大きな音を立てて椅子から立ち上がると、素早く身支度を整え始める。

「まあ。もうそんなお時間ですよ？」

話を中断されたラドフォードは抗議して、

「お……おいおい、ちよっ、ちよっと待ってくれよ、カレル。これからが一番盛り上がり――」

「では、ミューティレイク公。お騒がせしました。……あと、失礼

を承知の上で言わせていただきますが――」

完全無視の後、カレルはテーブルの上に右手を置き、鋭い視線（意図したわけではなく、元来のものだ）をファナに向けて、

「あまりこの馬鹿を甘やかさないでもらえませんか。色々つけ上がりますんで」

「？　　どういふことですか？」

「……」

本当に不思議そうなファナに、カレルは閉口する。

その隣ではラドフォードが笑いながら手を振って、

「いやいや、ファナさん、どうかお気になさらずに。こいつ、俺とファナさんが楽しく話してるものだから、きっと嫉妬してるんですよ。……いや、名残惜しいですが、仕方ないですね。モテない部下の可愛いわがママを聞いてやるのも、良識ある上司の役目ですから！」

「……く……ぐぐ……！」

「カレル。落ち着いて」

今にも殴りかかりそうなカレルをリゼットが宥める。

……いつも冷静（？）な彼も、このラドフォードに対しては冷静さを保つのに苦労しているようだった。

「……では、ファナさん。また会う日までお元気で！」

「はい。ラドフォードさんも、どうかお体にお気をつけて」

自ら見送るファナの言葉に、ラドフォードは玄関でビシッと敬礼する。

「それは大丈夫！　この、ラドフォードⅡマティス、いつでもネービス公とファナさんのお役に立てるよう、早朝の寒風摩擦を欠かさずやっておりますので……！」

「まあ」

ファナは微笑んだまま、ポンと手を叩いて、

「それなら安心ですわ」

「ははは！　当然ですよ、当然……！」

「……」

一足先に外へ出たカレルはやや諦め気味にため息を吐きながら、片手を腰に当ててリゼットを見やると、

「何が大丈夫で何が安心なのかさっぱりわからんのだが、これは俺の理解力が乏しいのか？」

「どうだろう？ ルーベンにでも聞いてみるかい？」

お手上げ、と言わんばかりに両手を広げるリゼット。

「え、呼びました？」

「……」

そこへどこから現れたのか、一人別行動を取っていたルーベンがトコトコとやってくる。……どうやら、別館の方から一足先に外に来ていたらしい。

「知り合いへの挨拶は済んだのか？」

カレルの問いにルーベンはちよつとだけ眉をひそめ、

「……アレを、あの行為を挨拶というのであれば」

「なんだ、アレって」

「フッ。男は秘密を抱えるほど魅力的になるもの」

「……ならいい。別に無理に聞きたかねえ」

そう言って再び玄関の方を見やったカレル。ラドフォードとファナの会話——というより一方的な演説——は、まだ続いている。

どうやら、また強制終了が必要なようだ。

——と、カレルがそう思った、そのとき。

「あ」

「……」

カレルの視線を追ったルーベンの目線と、ラドフォードの広い背中の中の方こうにあったファナの視線がぶつかった。

一瞬だけ、時が止まる。

驚いたような顔のファナだったが、やがてその表情は柔らかな笑みを伴った。

「ルウさんも、いらしていたんですね」

「……」

ルーベンは無言のまま大きなひさしの帽子を脱ぐと、普段の彼からは考えられないほど真摯な表情になる。

そして、帽子を持った右手を胸に当てると、そのまま一礼した。

「お久しぶりです、ファナさん。お元気そうで、なによりです」

「ルウさん」

ファナはニツコリと微笑んで、

「らしくないですわ。もっと気軽になさってください」

「いえ」

だが、ルーベンは姿勢を崩さないまま答えた。

「私は、あなたの期待を裏切った人間ですから」

「……」

ファナは少しだけ目を見開いて、それから困ったように視線を泳がせた。その後ろにいるアオイも口を挟みこしなかったが、どことなく気まずそうな表情だ。

そして――微妙な沈黙。

ディグリーズのメンバーも事情を察しているのか、カレルは我関せずといった顔で薄暗くなった庭を眺めていたし、ラドフォードでさえも頭を掻きながら、

「あ、あー、コホン。では、ファナさん。我々はそろそろ……」

そう言うのがやっとだった。

「はい。……ルウさん」

頷いて、ファナは少し目を細めた。

……いつもと違うそれは、微かな厳しさと強い意志を伴った視線。そこには少なからず、その相手に対する愛情が存在していた。

「どのような事情にしろ、ルウさん自身が選ばれた道です。それを否定することなど、誰にもできることはありませんわ」

「……」

それに対しルーベンは何も答えず、ただもう一度だけ頭を下げる。そしてディグリーズの面々はそのまま、ミューティレイクを去って

いったのだった。

ディグリーズの四人が屋敷を去った後。

ファナとアオイの二人が別館のホールへ移動すると、そこには丸テーブルで麦酒を口にするレイの姿があった。

「よう、ファナ」

彼女の姿を視界に捕らえるなり、手にした大きめのコップを軽く向けて、

「今、時間あるのか？　なら、少し付き合わないか？」
そう言った。

まるで親しい友人を誘うかのような気軽さで、その相手を考えるところ、普通ならば何を血迷ったことを言っているのかと思うところだが、

「あいにくお酒はお付き合いできませんけれど、それでもよろしいのですか？」

その申し出はこの場において、特別非常識なことではないらしい。「あんたは茶でも飲みながら、話だけ付き合い合ってくれりゃいいさ。……ああ、俺のベッドの中にまで付き合ってくれるってんなら、それに越したことはないがな」

「……レイさん」

これにはさすがに後ろのアオイが眉をひそめた。

「いくら冗談でも、姫に対してそういうことは、どうか……」

だが、当のファナはというと、やはりおかしそうにクスクスと笑いながら自分の胸に左手を置いて、

「この娘にはレイさんのお嫌いな“しがらみ”が漏れなく付いてきますけれど、それでも構いませんかの？」

「ああ……」

レイは楽しそうに口元を歪めてコップを傾けると、

「そいつはゴメンだ。なら残念だが、まとめて後ろの堅物君に譲るとしようか」

「な！」

その言葉に、アオイは僅かに青ざめて、

「じよ、冗談でも、そ、そんな恐れ多いことを——！」

「アオイさん」

ファナがフォローするように口を挟んだ。

「紅茶を、お頼みしてもよろしいでしょうか？」

「は……！ は、はい！ ただいま！」

弾かれたように敬礼し、アオイはまるで逃げるように走り去っていく。

直後。

「うわあっ！ ア、アオイさん、気を付け——！」

「すっ、すみませえん！！！」

通路から聞こえたやり取りに、レイは口元に笑みを浮かべて、
「……冗談のわからないヤツだ。ま、おかげでからかい甲斐があるけどな」

焚き付けた張本人だというのに、あまりにひどい言い様ではあった。

「あら？」

その向かいに腰を下ろしたファナは、ちょっと不思議そうな顔を
して、

「冗談でしたの？」

「……俺としちゃ、どっちでも一向に構わんけどな。お偉いさん方の“社交界”とやらはぶったまげると思うが」

苦笑したレイに、ファナは何を考えているのかいまいわからない表情のまま、目を細めて視線を斜め上に滑らせた。

レイも何気なくその視線を追う。

視線の先——大階段の上、二階の奥へ続く通路、その入り口に刻まれた“六剣”の紋章。それはこのミューティレイク家の紋章だ。

その視線を戻し、レイは話題を変えた。

「ルーベンのヤツには会ったみたいだな？」

ファナもまた、彼の元へと視線を戻しながら、

「はい。お元気そうでしたわ」

テーブルの上にもう一つあった空のコップ。“別の誰か”がここに座っていたらしいことはすぐにわかる。

「来年にはもう一つ階級が上がるのがほぼ確実らしい。大したもんだな」

「まあ」

ファナは嬉しそうに微笑んで頷いた。

「入隊後、僅か二年半でナンバー五。……惜しいな」

僅かに反応を伺うような目をしたレイに対し、ファナは変わらず微笑んだままだ。

——その笑顔は、見る者を和ませると同時に、こうして探りを入れる者に対しては、彼女の中に存在する感情の動きを見事に覆い隠す役割も果たしているようだった。

そのまま、ファナは口を開く。

「ティースさんの御様子はいかがですか？」

「……？」

脈絡のない流れに、さすがにレイの返答にもワンテンポ空白があらって、

「ティースか？ ……まだ引きずってるようだな。ギレットのおっさんが活を入れたみたいだが、効果あるかどうか——ああ、そうか。そういう連想か」

ようやく悟った顔をして、少し考えると、

「そういうアクアのヤツも前に言ってたな。そのときは大してそう思わなかった……が、この状況に陥てみると、確かに不思議なほど酷似してるか。性格以外は」

何も言わず見つめるファナに、レイは軽く手を広げてみせて、

「だが、どうかな。状況は似ていても、性格も歴史も違う。どう転

ぶかなんて予想でみんな」

「ええ。ですが、たとえばどうなったとしても――」

どうやらアオイが戻ってきたようだ。食堂へ通じる通路へ視線を向け、ファナは呟くように言った。

「それが御自身の選んだ道であるなら、私にそれを否定することはできませんわ。私の期待は他人に押しつけられるものではありませんもの」

「ま、そうかもな」

相変わらず探るような目をしていたレイだったが、やがて諦めたように視線をテーブル上に落とし、空のコップを指先で軽く小突くと、

「……できる限りはサポートするさ。少なくとも、あいつが後に悔いを残さない程度には、な」

「はい。私は、レイさんを信じております」

「……」

決して嫌とは言い返せない極上の微笑みに、レイはやれやれと言わんばかりに肩をすくめ、コップに僅かに残っていた麦酒を飲み干すのだった。

その1『四角い処刑台』

ネービス領リガビュールの街は、ネービス随一の歓楽街だ。

その中心部は他の街と全くの逆。昼の間は人もまばらでひっそりとしているが、夜になると煌々と明かりが灯り、一体どこに隠れていたんだと言わんばかりの人で溢れ返る。元来、夜は盗賊などが横行する時間帯であったが、この街の中心部はそこを取り仕切る非法組織たちによりほぼ完璧に近い警備が敷かれているため、人々も例外的に安心して外に出ることができる場所だった。

そんな賑やかな中心部を取り囲むように、街の外からやってくる旅人のための宿がいくつもある。とはいえ、その周辺の宿は大体、基本的に誰かを連れ込むことを前提とした宿ばかりだ。

そしてそこからさらに少し離れた場所。

その辺りによく、一般の人々が住む静かな住宅街。あるいは大半の目的とは異なる理由でこの街に滞在する旅人のための、普通の宿が建ち並んでいる。

そんな街。

ティーサイトIIアマルナ。通称ティース。十八歳、男。長身だが細身で、背の高さからくる威圧感よりも頼りなく優しい印象の方が強いという、見るからに人の良さそうな外見。加えて、女性アレルギーというとてもない業を背負ったこの男だが、これでもデビルバスターを目指して日々努力している。

ただ――普通、デビルバスターといえば、とにかく“魔を退治する”という印象が強いものだが、このティースという人物は少々変わった。

魔であろうと、悪意がなければ敵ではない。それが彼の主張だ。それはごく当たり前のことのようにも思えるが、この大陸に溢れる常識に照らし合わせると、決して当たり前ではなかった。それも

そのはず。魔は元々、人に危害を加える方が圧倒的に多く、ならば人が魔を敵と見なすようになったのも至極当然のことだろう。

だから彼はやはり変わり者であると言ってもよかった。そして、そんな彼であるからこそ、魔のために、魔を助けるために動くという、普通では決して考えられない行動を取ることがある。

リガビュール、中心からは少し離れた一般住宅街の中の、とある家屋。――その、地下。

まだ夜中ということもあり、壁に生えている陽カビ――昼間だけ微かな光を発する特殊なカビ――も、まだ発光していない。その代わり、壁には二組のたいまつが掲げられていた。一辺が十メートルにも満たない閑散とした空間で、真ん中にテーブルが置かれてはいるが、他には何もない。

この場所こそが、罪のない魔を救済する魔の組織“キウンメル”が、この街の非合法組織“ゲノールト”用に作った隠れ家なのである。

そしてそこには今、四人の人物が座っていた。

一人は、もちろんティース。

そしてその隣。

「四人いれば、何とかなるはずだ」

十三、四歳と思われる背の低い少年がそこに座っている。

エル――エルバートⅡザザⅡロージーというのが、その少年のフルネームだ。名が三つあることは、この世界では一つの事実――すなわち、その尖った耳が示しているように、その者が“魔”の者であるということを示している。名と姓の間に入るのは種族名であり、人間風に言うと、彼はザザ族のエルバートⅡロージーという人物なのだ。

そして……そのエルバートの正面に、言葉を向けられた二人の人物が座っている。

「しかし、まさか人間が我々の手助けをしてくれるとはな」

エルバートの言葉にそう返し、改めてティースを見つめたのは、精悍で真面目そうな顔つきの長身の男性。背の高さはティースとほぼ同じぐらい、おそらく百八十五センチぐらいはあるだろう。声もいかにも男らしい、それでいて良く通る声で、軽装の鎧を身につけている。耳はやはり尖っていた。

そしてもう一人、

「ホント、私もビックリ。……んんん、外れないなあ」

少しのんびりした口調で呟いたのは小柄な女性だ。身長はエルバートよりやや大きい程度、百五十センチ半ばというところだろうか。なかなか可愛い顔立ちだが、年齢的にはエルバートよりも確実に年上、おそらくはティースよりも上で二十歳ぐらいだろう。こちらやはり耳が尖っており、前髪はどうやって整えているのか、触覚が二本生えたような形になっている。

俯いてテーブルの下で何かカチャカチャやっていたが、どうやら知恵の輪のようなオモチャらしい。

「ねえ、リユーちゃん。ビックリだねえ」

「……ネイル。その呼び方はやめろと言っている」

この二人、リユーゼットⅡカサⅡドウギラスと、ネイルⅡメドラⅡクルティウスは、見た目からもわかるようにどちら人も人魔である。本人たちによれば、リユーゼットは光の下位魔。ネイルは炎の、やはり下位魔だという。ともにキウンメルメンバーだ。

その二人にティースは答えて、

「そりゃ、俺もゲノールトのやってることは許せないと思うから」「そうか」

リユーゼットは頷いた。

——リガビュールに存在する地下組織“ゲノールト”。それはこのリガビュールにいくつも存在する非合法組織の中でも特に異質な存在である。

俗に“デビルスレイバー”と呼ばれる彼らは、魔を奴隷のように商品として扱い、時にはお互いに戦わせるなどして見世物とし、若

い女性の人魔には娼婦のような仕事をさせて、特殊な人々の異常な趣味を相手に商売している裏の裏の組織だ。

そしてエルバートやリューゼットたち“キウンメル”は、そんな連中の元から罪のない魔を助け出すことを目的としている、やはり魔によって構成される組織である。本来はネービス全土に広がるそれなりに大きな組織なのだが、この街に派遣された彼らの仲間は一週間前にゲノールトによって一網打尽にされており、街の警戒が厳重なため本隊の救援すら仰げない状態であった。

現在残っているメンバーはこの三人。ティースを含めてもたったの四人。この四人で、ゲノールトに捕まった仲間たちを救出しなければならぬ状況なのである。

「それで？」

リューゼットがエルバートに質問した。

「ゲノールトの中はどうだった。一応、中には潜入できたのだろうか？」

エルバートは答えて、

「外の警備はそうでもなかったけどさ。中はさすがに厳しかったよ。

……一応、地下二階までは侵入できたけど」

「んゝゝゝ、外れないよお」

カチャカチャ。

「仲間たちは見つかったのか？」

「……いや」

リューゼットの問いに、エルバートは首を横に振った。

「関係ない魔は何人か見つけた。……けど、みんなの姿までは見つからなかった」

「そうか。無事だいいが」

「んゝゝゝ」

ガチャガチャ。

「……正直、何とも言えないな。人間どものやることだ……もしかしたら……」

言ってから、エルバートはハツとした様子で、

「いや、ティース。別に人間全部が悪いってんじゃないからな」

「ああ、わかってるよ、エル」

特に気分を害したわけでもなくそう答えたティース。

エルはティースにとつて、約四年ぶりに会った昔からの知り合いだ。人間に圧倒的に好意的だった当時に比べると、“人間ども”という言い方にやや残念な想いも抱いたが、少なくともゲノールトという卑劣な集団に対してそういう言葉が出てしまうのは、また仕方のないことだとも思った。

リユーゼットの問いは続く。

「仲間たち以外に、そこに捕らわれている魔がどのぐらいいるのか、わからないか？」

「俺が確認したのは地下二階にいた三人だけ。……たぶん、比較的新しく連れてこられた連中だと思う。十代後半ぐらいの男が二人、それとは少し離れた牢に女の子がいた。獣魔に関してはわかんない」
「仲間たちが生きているなら、もっと深いところに幽閉されているかもしれない」

リユーゼットは腕を組んで頷いた。

「ああ、その可能性は――」

「……んっ!!」

バキッ。

「あ、外れたっ！ 外れたよ、リユーちゃん!!」

話の流れを全く無視し、嬉々として知恵の輪を示すネイル。

「……」

無言で、全員の視線がその手の中の知恵の輪に向けられる。……それは明らかに“変な方向に”歪んでいた。

「でも変なの。さっきまで何回やっても外れなかったのに、ちよつと力を込めるだけで簡単に外れちゃったよ。変なおモチャ」

「変なのは貴様の頭の方だ」

「？」

リューゼットの突っ込みも、ネイルには全く理解できてないようだった。首を傾げながら、やがてネイルは“知恵の輪だったもの”をポイツと投げ捨てると、

「ねえ、キミ」

「え？」

ニコニコしながら、初めてティースを見つめる。触覚のような髪が小さく揺れて、

「キミはもしかしてデビルバスター？」

「え？」

驚いた顔で見つめ返すと、その言葉に反応したエルバートとリューゼットも彼の方を見た。

「い、いや」

その過剰な反応に、ティースは少し慌てながら手を振って、

「違うよ。……なんで急に？」

逆に質問すると、ネイルは頷いて、

「そう」

チラッとティースが腰にぶら下げている剣に視線を移す。

「キミの持つてる剣、異様な力を放っていたから」

「あ……ああ。これはもらったものなんだ」

その言葉でようやく思い出したティースは、剣を鞘ごと手にとつて剣の柄を示し、そこにはまっていた宝石——“細波”をエルバートに見せて、

「エル、お前も覚えてるだろ？ 四年前、別れ際にお前とリイナにもらったこの宝石」

「え？」

エルバートはマジマジとその宝石を見つめて、

「ああ、そういやそうだったっけな」

「へーえ」

ネイルはその宝石とエルバートの顔を見比べて、
「そっか。じゃあ昔の友達だっていうのはホントなんだ」

「嘘を言っても仕方ないだろ。……なあ、ティース」

「ああ。……ネイルさん。俺を信用できないのかもしれないけど、俺は本当にゲノールトのやっтерることが許せないと思ってる。それは、信じて欲しい」

ティースは真摯にそう言ったが、ネイルはというと別に気にした風もなく、

「ん、それは別に疑ってないよ？ 疑う理由もないし。私はただ、キミがデビルバスターだったらいいなと思っただけ」
「え？」

それを補足するように答えたのはリユーゼットだ。

「デビルバスターが味方だということになれば、色々と都合がいいだろう」

「……あ、なるほど」

確かに、デビルバスターだということはかなりの実力の証明である。彼らにしてみれば、心強い味方ということになるだろう。

ティースは逆に申し訳なさそうにして、

「残念だけど、俺はそんなじゃないんだ。一応、デビルバスターを目指してはいるけどね」

「ほう。なら、腕には自信があるのか？」

リユーゼットの目が少しだけ興味の色、というか、少し異常とも思える輝きを帯びた。

「い、いや……そこまでは……」

エルバートが少しもどかしそうな表情で、

「なんだよ。はっきりしないなあ」

「アテにしない方がいいってことなんじゃない？」

相変わらずニコニコしながら、ネイルが言った。悪意はないのだろうと思うが、なかなかきつい言葉だ。

「う……」

反論はできない。

と、エルバートはそれをフォローするように、

「ま、そりゃ、そこまではさすがに期待してないさ。……いや、アテにしてないってことじゃなくて、無理な高望みはしてないってこと」

それから少し目を細める。

「少なくとも、バラードの奴を何とかしてもらおうなんて思ってるわけじゃない」

「バラード？」

もちろん聞き覚えのなかったティースに、エルバートは答えた。

「バラードⅡグラスマン。ゲノールトに雇われている腕利きのデビルバスターだよ。……こないだ仲間が一網打尽にされたのも、あいつのせいなんだ」

「……デビルバスターが、ヤツらに協力してるってのか？」

思わず低くなったティースの声に、エルバートは溜め息を吐いて、「バラードの奴は元々、魔を生け捕りにしてはデビルスレイバーたちに売り払う仕事を裏でやってたヤツなんだ。それが実力を見込まれて、最近ゲノールトの用心棒として加入したってわけさ」

「……そんな奴が」

それ自体は法に触れるわけじゃない。が、一般的に、またデビルバスターたちの間でもそれほど容認されていない行為なのは確かだった。

（そんなデビルバスターがいるなんて……）

静かな怒りがティースの中に溢れ出す。

それはある意味、魔を憎んで無差別に退治しようとする連中よりも、さらにタチが悪いと思えた。

エルバートも忌々しそうに唇を噛んで、

「俺たち下位魔の集団じゃ、よほどのことがなきゃ歯が立たない相手だ。……とにかく、いかにあいつに出会わないように救出するか。今は、それを考えなきゃならない」

「……」

悔しいが、それは事実だ。

その言葉に頷いて、そして四人はこれからの作戦について話し合い始めるのだった。

オオオオオオオオツ！

歓声。

決して数は多くない。が、それでもどこか重々しく、そしてドス黒いものを感じさせる歓声だった。

薄暗い中に浮かび上がるのは、いくつものたいまつが灯った中央の四角い空間。まるで檻のように高い金網に包まれたその空間には一つの人影がある。

「あ……はあ………！」

男だ。年の頃は二十代前半だろうか。服装は腰に白い布のようなものを巻いているだけでほぼ半裸。右の肩口はざっくりと裂け、そこから血が流れ出ている。顔も太股も胴体も傷だらけ。息は荒く、立っている姿もおぼつかない。

手には一振りの剣。両手首は手錠のようなもので繋がれていた。

「……六匹目！」

どこからともなく、野太い男の声が響く。

ガシャン、と音がして、檻の中に六匹目の獣が放たれた。

歓声。

野太い男の声は続く。

「六匹目は氷の七十一族でございます！ 狼の姿をしたこの獣魔は、我々の世界にいる狼と姿形、特性こそ大きく変わりませんが、それを遙かに上回る身体能力を持っており、今の疲労したチャレンジャーにはかなりの難敵であることは予想されます！！」

再び歓声が起こる。

「六匹目にベットしていただいたお客様の配当は十六倍となっております！ さあ、どうぞご期待くださいっ！！」

「……」

氷の七十一族と向き合う男には、そんな野太い大声も届いていなかった。

——氷の七十一族。最下級の獣魔であり、普段であればたとえ手錠を掛けられていたにしても男の敵ではないだろう。なにしろ男は、その尖った耳が示すように下位とはいえ人魔であったから。

だが……意識は朦朧。手に持った剣も重く、体は動かない。

男は決して不幸な人物というわけではなかった。この世界にやってきて、人間に対していくらでも悪さをしてきたし、それを楽しんでもいた。もう少しの間だけ自由な身であれば、そのうち幾人かの人間の命を奪う存在となっていたかもしれない。

これは、そういう意味では天罰であつたのだろうか。

だが——

ワアアアアアアアッ！！

大歓声。

鋭い牙を喉に突き立てられ、男の意識は途絶えていた。噴水のように溢れ出した血が、リングを汚していく。

「おめでとうございますッ！！！」

その後に続いたのは、常人であれば目を背け、嫌悪感を覚えるであろう光景。……リング上の獣魔は極限の“飢餓状態”だったのだ。生々しい水音と肉を食いちぎる音が響く。

だが、

「見事、的中なされた皆様には、配当金が後ほど支払われます！ どうぞ、次の試合にもご期待くださいませ！！」

リング上で繰り広げられる光景から、ことさらに目を背けようとする者は一人もいない。

まるで興味を持たない者。

逆に、ギラギラした目でそれを凝視している者。

そこにいるのは、その二種類の人間のみだ。

そうしながら、的中を喜ぶ声。あるいは、次の試合を待ち望む声。いずれも、とてもまともとは思えない——いいや、そう言い切ってしまうのはナンセンスだろうか。

ここでは、これが“正常”なのだ。

「……つまんないの」

そんな中に、一人の少女がいた。

年齢は十歳ぐらいだろう。長い髪を左右のてっぺんに近い場所です縛り、そこを赤いリボンで縛っている。体型はやや……いや、かなり太め。両手にはリングを揚げたお菓子、あるいはドーナツのようなものが握られており、それをほぼ定期的に口に運んでいる。

その場には似つかわしくない赤いドレス——と言いたところだが、この場にいる人々はほとんどが正装だったから、それは決して浮いているわけではない。

そして少女はリング上の光景を見つめたまま口をとがらせ、やはりやや太めの足をブラブラさせていた。

「セルマ」

そんな少女に声をかけたのは、すぐ隣に座っていた老人だ。老人といってもまだ全身には精力が漲っており、見たところ少女の祖父、あるいは父……どちらかはわからないが、厳格そうな顔に似合わず、少女に向けた口調は思った以上に優しかった。

「……」

そのすぐ隣には、背の高い男が立っている。短く切りそろえた髪、精悍な顔つきで眼光は鋭く、まるで獲物を狙う獣のような雰囲気を漂わせている。歳は三十歳近いだろうか。やはり正装だったが、腰には一振りの剣を携えていた。

素人でも、一目見ただけで彼がただ者でないことは感じるだろう。

「お前はどこに賭けたんだね？」

老人の言葉に、セルマという名の少女はますますふくれっ面になって、

「私、七匹目に賭けてたんだもん！　あと一匹頑張ってくれば当たりだったのにさー！」

お菓子を口にしながら抗議する。

「そうかそうか」

男性はセルマの頭を優しく撫でて、

「だったら次こそは当てなきゃならんな」

その言葉に、セルマの顔がパツと輝く。

「次はどんなの？　強い？　弱い？」

「さあ、それは言えんよ」

「ケチー」

再び口を尖らせたセルマに、男性は笑った。

端から見れば、単なる親子、あるいは祖父と孫の触れあい。

だが、それは確かに“異常”だった。

「さあ、次の試合は――！！」

野太い男の声とともに、再び中央のリングに一人の魔が連れてこられる。

歓声。

そこは……たとえどれだけ勝ち残ろうとも決して生きて出ることのできない、処刑台だった。

リガビュールの中心から少し東に移動した場所。そこに一つの屋敷がある。建物自体はそれほど大きくなく、ミューティレイクなどに比べると少々貧相ともいえるかもしれない。が、この屋敷――ゲノールトの本領は、外からは見えない部分……屋敷の下に存在する、広大な地下空間にあった。

その地下へ向かうには四つの出入り口がある。

一つ目は、ゲノールトの屋敷内部から繋がる、来賓のための出入り口。

二つ目は屋敷の敷地のすぐ外の目立たない場所にある、地下で働く者たちの出入り口。

三つ目は屋敷の裏、小規模な林の中に隠された、捕らえた魔を乗せた馬車等が出入りできる大きめの入り口。

そして最後は、普段はからくりによって閉ざされた、屋敷から遠く離れた場所に地下通路で繋がっている非常口である。

その中で、もっとも侵入しやすいのが二つ目、地下で働く者たちの出入り口だ。

屋敷の中の入入口はもちろん論外、三つ目の隠された大きな入り口も警備が厳重であり、四つ目の非常口は一本通行のため、万が一見つかったときに逃げ場がない。

その点、二つ目の入り口は普段から頻繁に関係者が出入りしていることもあって、警備そのものは薄く、上手く隙をつけば侵入することも可能なのである。

早朝。

その入り口から地下へと下りていった二人の男は、腰に剣をぶら下げている。片方は寝癖の残った頭を掻き、もう一人はあくびをしながら。地下とは思えない広大な通路を迷うことなく進み、やがて通路の脇にあった階段を下りていく。

「おい、交代の時間だ」

そこで見張りをしていた男たちにそう告げ、二人は入れ替わりにその椅子に腰掛けると、すぐに彼らが見張るべき対象……牢の中へと視線を向けた。

小さな牢だ。

その中に捕らわれているのはたったの一人。

「……」

牢の隅っこでじっと床を見つめている女の子は、襟ぐらいまでの髪、横髪は少しだけクセがあるのか、ほんの僅かに内側にカールしている。華奢で小柄の可愛らしい少女だ。見た目、歳は十代前半だったが、やはり耳は尖っており、少女が人ではないことを示している。

見張りの男達が変わっても、少女は視線を動かそうとはせず、声

も一言も発しない。自らの境遇と行く末に不安を感じているのだろうか、やはりじっと床を見つめるままだった。

そんな彼女を閉じこめているのは、ある程度の魔力を封じ込める特殊な牢。そして、やはり魔力を封じめるための特殊な拘束具だった。この二つによって、計算上は下位魔どころか上位魔ですらも、この牢を脱出することはできないことになっている。

ただし、その牢の中は清潔。少女の身なりも同様。他の牢に比べて明らかに優遇されていることは容易に窺えた。

「やれやれ。今日もガキのお守りとはなあ」

牢の中に異常がないことを確認し、片方の男がそう呟くと、それにもう片方が笑って答えた。

「いいじゃねえか。向こうで男どもの監視をしてるよりはずっとマシだろ？ それに、ガキつつつても顔は悪かねえ」

そんな返事に、からかいの言葉がもう片方の口をつく。

「お前、もしかしてこんなガキが趣味なのか？」

「まさか。……けど、ま、世の中にやそういう趣味のヤツもいるだろうし、こいつは下のリング行きだけは免れるだろうよ」

その言葉に男は頭の後ろで手を組んで、

「ま、こっちの牢に入ってるぐらいだから間違いないわな。……俺だったら金をもらってもゴメンだけだな。こんなヤツらを相手にしてちゃ、いつ寝首をかかれるか恐ろしくておちおち寝てもいられねえよ」

「もつともだ」

笑って、男たちはもう一度牢の中に視線を向ける。

「……」

中の少女は少しだけ顔を上げ、二人の男を見ていた。一言も喋らないが、少なくとも彼らの言葉は理解しているようだ。

「……しかし」

そんな少女の視線に、片方の男が少しだけ声を潜めた。

「妙なガキだ。……連れてきた連中の話によりや、街の外を一人、

旅の格好でフラフラしてたと言っていたが」

「なんだ？」

少女が再び視線を床に落としたのを見ながら、男は続ける。

「こんな歳の割にゃ、捕まって暴れるでもなきゃ、泣きわめくわけでもねえ。時折、こんな風に妙な視線で俺たちを見る。……どこことなく、不気味な感じがしねえか？」

「はっ……化け物相手に今更なに言ってるやがんだ。こいつらなんぞ、全部が全部、不気味に決まってるんだろ」

「……ま、そうかもしれないが」

男はそれでも、ほんの僅かに、まるでお化けでも見るかのような目で少女を眺める。

「……」

聞こえているのかいないのか、少女はじつとして、やはり動かないまま。――だが、その態度とは裏腹に、その目は何らかの目的をしっかりとそこに灯していた。

それが、善いものなのか、あるいは悪いものなのか……それは、まだ、わからない。

ネービスの朝といえば有名なのが学園生たちのいわゆる“登校風景”であるが、このリガビュールではそれよりもほんの少しだけ早い時間、仕事を終えた女たちが疲れた顔で自宅へと戻っていく姿が数多く見られる。これもある意味、この街の名物であると言ってもいいだろう。

そんな朝。

この日、リガビュールの街は晴天だった。

「う……」

中心から大きく離れた、街全体から見れば外れといってもいい場所に、一件の宿がある。もちろん、中心から離れれば離れるほど利便性は低くなるが、“それ”以外の目的でこの街に来る数少ない人々にとっては、宿賃が安い割に環境の良い宿が多く、割のいい地域だった。

その、若干薄汚れた感じの階段を上り、二階にある四つの部屋の中の一室。

「ううん……」

そこに、椅子に腰掛け、ベッドに顔を乗せ、頭にフードをかぶったままの姿で寝ている人物がいた。

いや“寝ていた”と過去形にするのが正しいか。

「……あ」

たった今日を覚ましゆつくりと顔を上げた人物は、おそらく百八十センチ以上はあるだろう長身だった。が、体を起こすとともにフードの奥から現れたのは、艶のある美しい長髪に優しげな瞳を持つ女性の顔だ。

そして彼女が魔であることを表す、尖った耳。

リイナⅡグレイグⅡクライストというのが彼女のフルネームで、もちろん“人”ではない。

「……えっと……」

彼女はほんの一瞬だけ寝ぼけ眼だったが、すぐに周囲の状況を確認し、それから思い出したように、

「……あ、私、いつの間にか寝て——」

ハッとして、すぐさま視線を広い部屋の、何故か中央が敷居で遮られた、その向こう側へと向ける。そこにあるもう一つのベッド……だが、そこは彼女が寝たときと変わらず、空っぽのままだった。

「……ティース様」

状況を思い出したその穏やかな瞳に、心配の色が浮かぶ。

（ただ息拔きに遊んでいる……そうであればいいんですけど……）
リガビュールが遊ぶための街だということは、人間の常識に疎い

このリイナでもかろうじて知っている。

が、

（宿の人は、朝まで帰ってこないのは珍しくないって言っていたよ
うだけれど……？）

その言葉とニュアンスからして、普通の人間だったなら容易に“遊び”の内容を理解するだろうが、彼女はそれを理解していなかった。

だがしかし、それはむしろ当然でもある。何故なら“王魔”と呼ばれる、人魔の中でも最上級に近い力を持つ彼女らの間には、いわゆる“色遊び”という文化そのものが存在していない。彼らにとつての男女の交わりはあくまで子孫を残すための義務であり、どちらかといえば“面倒事”だ。だからもちろん娯楽と成り得るはずもなく、従ってそういった文化も理解できない、というより、知識の中に最初から存在していないのである。

（とにかく……朝食を食べても帰ってこなかったら、エルさんとの待ち合わせ場所に行ってみよう）

考えた末、リイナはそう決めた。

すぐに……というより、昨晚のうちに探しに行かなかったのは、先ほどの“遊んでいるのかもしれない”という考えの他に、彼女の現在の立場上、下手に外に出るとかえってティースに迷惑をかける可能性がある、ということが大きい。昨日の彼の出掛けにも、外には絶対に出るなど何度も釘を刺されていたのだ。

「ふう……」

心配をため息に乗せて、リイナはベッドに腰掛けた。

こういうとき、自由に動けない自らの身が恨めしく思えて仕方ない。もし自分が人間であったなら、昨日のうちに迷わず彼を探しに行っただろう。

——ただ、それも、全てが順調に行くならばあと少しの辛抱。

あと少しで、彼女は人間——それとほぼ区別のつかない存在へ変わることはできるはずだった。

（待ち遠しい……でも——）

目を閉じ、天井を見上げるようにして、リイナはその脳裏に一人の人物の姿を思い浮かべる。

（私よりも、エルさんの方がもっと……）

そこに浮かんだのは、背の小さい、外見的には“可愛らしい”と言っても過言ではない人物の姿。

彼女——リイナが人の世界で暮らしたいと考えるようになったのは、ティースとの出会いが原因だった。彼や彼と一緒にいたシーラという少女と出会うことによって、リイナは他人と触れ合うことを知り、友情や愛情……それらを全てひっくるめた“情”というものを知った。それを知ってしまったからこそ、それが存在しない故郷、何もかもがモノクロのようなその場所に居られなくなったのである。だが……そんな彼女と違い、エルの方はティースたちと出逢う以前から人間に対して興味を持っていた。人間の世界のことを自ら学び、魔と人間が理由もなく争うことに対して憤りを感じ、偶然にもこの世界に流されたときには、右も左もわからないリイナを連れ、そして人間——ティースたちと交流することに成功した。

だから、人間世界への憧憬ということであれば、エルの方がリイナよりもよほど長く、そして強いはずなのである。

コン、コン。

「あ、はい」

ノックの音に振り返って、返事する。同時に微かな魔力が溢れて、リイナは人の姿へと変化した。

「失礼しますよ」

入ってきた中年のオバさんは宿の主人の妻だった。この宿は家族でやっているらしく、従業員も主人とその妻であるこの女性、それに娘らしき少女がいるだけである。

少し細身ながら、人の良さそうな笑顔にハキハキとした口調で、リイナもこの人物には好感を持っていた。

と、オバさんは部屋を見回すなり、

「……あら？ お連れさんはまだ帰ってないのかい？」

「ええ」

テーブルに食事を置いて、オバさんは呆れ顔をした。

「なんだい、こんな美しいお嬢さんをほっぽって。どうしようもない男だねえ」

「？」

その言葉の意味がリイナにはいまいち理解できなかったが、それでもティースが責められていることだけはわかったため、反射的にフオローするつもりで、

「でも、たまには息抜きも必要だと思いますから」

「……あんたねえ」

だが、オバさんはますます渋い顔をした。

「そんな物わかりよすぎる性格じゃ、都合のいい女で終わっちゃうよ。たまにはガツンと言ってやんないと」

「ガツン、ですか？」

首を傾げたリイナに、

「そ。嘘でもいいのさ。こう、眉毛をピツとあげて、怖い顔で睨み付けてやって」

オバさんは指で眉を無理矢理上げ、それからギロッと睨め付ける芝居をする。

「あまりひどいようなら、もう口も利いてやんないよ、ってさ。……たまにはきつーくお灸を据えてやるのも愛情ってもんだろ？」

「え」

リイナは驚いた顔をして、

「それが……愛情なんですか？」

「ああ、そうさ」

得意顔のオバさんに、リイナはしばし考えていたが、

「……わかりました。そうした方が、彼のためなんですネ」

やがて真剣な顔で頷いた。

会話は明らかに噛み合っていないはずなのだが、何故か通じ合っ

しまったようだ。……どうやら多大な誤解を含んだままで。

そんなリイナを見て、オバさんは再びため息をつくと、

「はぁ、やれやれ。こんな子がいて、どーしてあんなところに遊びに行くかねえ……」

「？」

「いや、こっちの話さ。さて、それじゃあ私はそろそろ――あ、そうそう」

出て行きかけて、オバさんはふと思い出したように振り返る。

そして今までの陽気な調子とは打って変わって、少しだけ怖い口調で言った。

「どうもね。最近、この街に魔が入り込んだらしくてさ」

「えっ？」

リイナはドキッとする。

（まさか……でも――）

この街に入るときは、ティースが持っていた紋章――ミューティレイクの紋章の効果で、大した疑いを持たれることもなく入れた。

それ以来、リイナは宿からほとんど出ていないし、宿の人間に正体がバレたということもないはずだ。

（それに……バレたなら、こうして話してられるはずない……）

そのリイナの考え通り、オバさんの口から出たのはその心配を否定する言葉だった。

「先月の終わり辺りから、どうも魔の仕業らしい殺人がたくさん起きててね。……ここ一週間ぐらいは鳴りを潜めているからもう安心なのかもしれないけど、一応外出するときには気をつけな」

「……そうですか」

ホッとすると同時に、それは同じ魔である彼女にとって、非常に心苦しい事件だった。

「ま、安心しなよ！」

リイナの顔が曇ったのを別の意味に取ったのか、オバさんは少しわざとらしいぐらいに笑いながら大声を張り上げ、

「ここにいる限り、このあたしが客には指一本触れさせないからさ！ 大船に乗ったつもりでいてちょうだい！」

「……ありがとうございます」

そんな言葉にリィナが顔を上げておかしように笑うと、オバさんは目を細めて、

「ホント、可愛いねえ、あんた。あたしの若い頃にそっくりだよ。」

……背は、見ての通りずっと小さかったけどね」

「でも、私はちよつと大きすぎちゃって……」

「いやいや。あんたぐらい可愛けりゃ、背の高さなんざ関係ないさ」
オバさんは座ったままのリィナと同じ高さの目線で、彼女の全身をもう一度見回すと、

「んじゃ、そういうことだから。……さっきのあたしの言葉、忘れるんじゃないよ」

「はい」

ボタン、とドアが閉まる。

“さっきの言葉”——それがティースのことなのか、魔のことなのかはわからなかったが、リィナは彼女の心遣いに深く感謝する。

軽口、世間話、気遣いの言葉……それは、彼女が以前までいた故郷ではまず考えられないやり取りだった。

（やっぱりこっちの世界に来て良かった……）

胸の奥が暖かくなるのを感じながら、リィナはテーブルの上へと視線を向ける。そこにあった出来立ての朝食に食欲をそそられ、テーブルへと着いた。

魔とはいえ、彼女だってお腹は空くし、体が大きいこともあって食べる量はかなり多い方なのである。

——と、

「？」

カサッ、という音がどこかで聞こえて、彼女は朝食に伸ばしかけていた手を止める。

（なに……？）

視線を動かし、音のした方――扉の方へを見ると、ドアの下の間から白いものがはみ出しているのが見えた。

椅子を立てて微かに警戒しながらドアへ向かう。……外に人の気配はない。

「これ……手紙……？」

拾い上げてみると、折り畳まれた白い紙切れだった。ドアを開けて外を見たが、やはり誰もいない。

鍵をかけてテーブルへと戻ったリィナは、首をかしげながらも椅子に腰を下ろす。

「……」

そしてゆっくりと、折り畳まれた紙を開くのだった。

場所は戻って、キュンメル隠れ家。

「おい、ティース。リィナに手紙置いてきてやつ――」

そう言いながら地下へと戻ってきたエルバートは、そこにあった光景を見て言葉を切った。

そして、怪訝そうに眉をひそめる。

「なに、やってんだ？」

「なにして……」

振り返ったティース。

陽カビが光を発する時間になって、煌々とまではいかないまでも、地下室は普通に行動するのに支障ない程度の明かりに包まれている。そんな中、リューゼットが“我関せず”という表情で壁際に座り込んでおり、そして中央のテーブルにティースとネイルの二人がいた。

「ほらほら。次はそっちの番」

「は、はあ……」

急かされて、ティースは視線を戻した。

その視線の先――テーブルの上にあったのは、木片で組まれた高さ十センチほどの塔である。ただバランス良く組まれただけなので、少しの衝撃で崩れ落ちてしまいそうなものだ。

そして二人の手元には、その塔から抜き出したものであろう木片がいくつか。

「じゃあ……」

ティースがおそろおそろ、塔に手を伸ばした。ゆっくり、ゆっくりと、塔を構成する木片の一切れを掴み、やはり、ゆっくり、ゆっくりと引き抜いていく。

「うわっ……」

塔が揺れた。

グラ……グラ……ピタ。

「ほっ……」

「ふふ。じゃあ、次は私の番だね」

その様を楽しそうに見つめていたネイルは、ティースとはまるで正反対の手付きでほぼ無造作に木片を手取る。さすがに引き抜くときはゆっくりだったが、ティースとは違って淀みない抜き方だった。

が。

「あっ……」

もう限界だったのだろう。平気かと思われた塔は、その一欠片を失うことによって完全にバランスを失い、テーブルの上にバラバラと崩れ落ちてしまった。

一瞬の沈黙。

ティースの背後でため息が聞こえた。

「この状況でよくそんなことをしてられるもんだよ、まったく」

「い、いや……」

なんだかんだで思わず夢中になっていたティースは慌てて弁解しようとしたが、

「ああ、わかってるって。ネイルが言い出したんだろ？」

エルバートは呆れたようにそう言った。

どうやら彼女のこういう行動は初めてでもないらしい。

「とにかくお前の手紙、言われたとおりリイナのところに置いてきたから。……宿と部屋、間違ってるだろ？ 部屋の中までは確認してないから、違っても責任は持てないぞ？」

「ああ、間違いないよ」

ホッと息を吐いてティースはそう答えた。

——リイナに宛てたその手紙とは“しばらく帰れないが自分のこともエルのこと心配しないで宿で待っていてくれ”と、簡潔に言えばそういう内容のものである。もちろん彼女がティースを探しに街に出してしまうことを懸念した故のものだ。

「けど、俺が自分で行っても良かったのに」

ティースの言葉に、エルバートはちよつとだけ考えてから、

「いいだろ。俺は街に出るの慣れてるし、それに少し外に用もあったんだ」

「そっか」

とりあえずこれでリイナの心配はいらないだろう。安心するとともに、ティースは再びネイルの方へと視線を戻した。

「じゃあこのゲームは終わりってことで……って——」

「……」

怪訝そうなティースの問いにも答えず、ネイルはテーブルの上を見ていた。微動だにせず、じつと……テーブルではなく、崩れ落ちた塔をただ黙って見つめている。

「ネイル、さん……？」

もしかして悔しかったのだろうか、と、ティースは少し遠慮がちに声をかけたが、

「……うん？」

我に返った様子で顔を上げたネイルは、特に怒った様子も拗ねた様子もなかった。それどころか、相変わらぬの屈託のない笑みを浮かべ、触覚をぴくりと動かし(?)て、

「強いなあ、ティツティー」

「……は？」

誰？ と、問いかけようとする、

「んー、やっぱり呼びづらいなあ。ティ、ティ……ティモちゃんがいいかな。ねえ、なんとなくしっくり来ない？　じゃあ決定。ティモちゃんにけってーい」

「……」

ただ呆然としていると、その肩をポンと叩いてエルバートが耳元で囁いた。

「諦めろ。……こいつは一度あだ名をつけたら、新しいあだ名を思いつくまで決して呼び方を変えないんだ」

「……」

ティースは絶句してしまった……が、いかにも精悍で男らしいリユーゼットが“リユーちゃん”などと似合わない名で呼ばれていることを考えれば、それも納得だ。

とはいえ。

（“ティモちゃん”がしっくり来るって……一体どんな目で見られてるんだろう、俺……）

ガックリ肩を落としたティース。……とはいえ、どうやらその被害に遭っているのは彼だけではないようで、

「お前なんかまだマシな方だよ。俺なんかー」

言いかけたエルバートの言葉に、ネイルが口を挟む。

「どしたの、チビちゃん？　二人でヒソヒソ話？」

「……」

ピキッとエルバートの表情が固まる。明らかに機嫌を損ねた様子が伝わってくるが、表情の端には諦めが漂っており、抗議の言葉は出てこなかった。……それに実際、女性としてもやや小さめのネイルより、さらに背が低いのだから仕方ないといえば仕方ない。

（……悪意がないのだとしても、ひどすぎる……）

本当に悪意がないのかどうかはともかく。ただ、彼女はそんな意

図など全く感じさせない、のほほんとした表情で大きく伸びをする
と、

「う……っん、と。じゃあさ、ティモちゃんの問題も解決したみたいだし、そろそろ作戦の話をしよっか。あんま時間をかけたら、お仲間さんが皆殺しにされちゃうんでしょ？」

「あ、ああ、そうだな……」

僅かに眉をヒクヒクさせながらも、エルバートはテーブルに着いた。

「……」

リューゼットもまた、ゆっくりとやってくる。どうやら彼はネイルとの付き合いが比較的長いらしく、彼女のペースにも全く乱されていない。

——と、思いきや、

「あ、リューちゃん。その椅子、あぶ——」

「……っ!？」

ガターンッ!!

盛大な転倒音が小さな地下に響き渡った。一瞬、ティースにも何が起こったのかわからなかったが、どうやら彼の腰掛けようとした椅子が突然にバランスを崩したらしい。

どうして——だが、その理由はネイルが明かした。

「脚、一本使っちゃったから、危ないよ」

「……」

先ほどの“遊びの残骸”を指さしたネイルの言葉に、床の上に転がったリューゼットは無表情にゆっくりと立ち上がる。

そしてポンポンとズボンを払った。

「ネイル」

「なに？」

一瞬の沈黙。

その不気味な一瞬に嫌な気配を感じ取ったエルバートが、慌てて口を挟んだ。

「まっ、待て、リユーゼツ——」

いや、挟もうとした。

が、既に遅い。

「決闘だ」

ドゴオオオオオオンッ！！！！

リユーゼツの手から一筋の光が走ったかと思うと、ネイルの座っていた椅子が砕け散ったのだ。

「なっ……うわっ！　ちよっ、リユーゼツさんっ！！」

慌ててテーブルから離れるティース。リユーゼツの手にはどうやら魔力で作り出したらしい光の剣が握られている。

「うわ、危ない」

一足早く回避したネイルは、くるっと宙で一回転して着地すると、
「リユーちゃん、時々意味もなく暴走するんだもん。ホント、困ったちゃんだなあ」

あくまでのんびりとした口調の彼女に、リユーゼツは剣の先を向けながら、

「意味もなく？　冗談も休み休み言うのだな」

「……いや、リユーゼツさんもちよっと短気すぎるような——」

だが、ティースの言葉は全く無視された。

リユーゼツは指を三本立てて、

「さあ、貴様を選ばせてやろう。一、私と決闘して半殺し。二、そこに座ったまま半殺し。三、とにかく半殺し。……さあ、どれだ」

そこから溢れていたのは、紛れもない殺気。

（っていうか、どれを選んでも半殺しじゃないか……）

あまりにも理不尽な選択肢だった。

「うーん。一もいいけど、三はどんな風になるのかちよっと興味あるなあ。……うーん」

「って、真剣に考えてるし……」

「あ」

ネイルは何やら思いついた顔でポンッと手を打つ。

それからニツコリと、本当に楽しそうな笑顔を浮かべて、

「じゃあ、その四。……ここにいる全員皆殺し、っていうのはどう？」

「なんでっ!？」

「……」

何故か無言を返すリューゼットが、ティースには不安で仕方なかった。

エルバートが呆れ顔でため息を吐く。

「二人とも、その辺にしとこうぜ。今はそんなことしてる場合じゃないだろ」

「……そうだな」

リューゼットは剣を収め素直に従ったが、

「冗談なんかじゃないのになぁ」

ネイルの方は相変わらずニコニコしている。……本気のようにも聞こえるから恐ろしい。

——と、そんなこんなで。

「まず」

全員がテーブルに戻ってきたのを見るなり（椅子が壊れてしまったので二人ほど立ったままだったが）、エルバートは今回の作戦について話し始めるのだった。

「ティースには、ヤツらのアジトに潜入してもらおうと思うんだ——」

その2『いっい』

「あー、お前の名前、なんつったつけ？」

「ティ……ティモセオスⅡアベールです」

ゲノールト地下一階。

深緑色の制服に身を包んだ、どうやら新入りらしいノツポの男と、その指導を任された先輩らしき男が話している。地下のために太陽の光は一切入ってこないが、照明で明るさは充分に保たれていた。

「ティモセオス？ あー、覚えにくいな。……よし。面倒だから間を省いてティースだ。いいな」

「あ、はい」

新入りらしい背の高い男は頷いて、ポツリと呟くように付け足した。

「……ティモちゃんじゃなければなんでも」

「？ なんだ？」

「あ、いえ」

ティモセオス——いや、ティースは慌てて首を横に振った。

潜入作戦が実行に移されて五日後。キュンメルが事前を探った“窓口”を通し、ティースは晴れてゲノールトの構成員としてこの地下に潜り込むことに成功していた。新人である彼が配属されたのは地下一階の警備部門。とはいえ、しばらくの間はこの先輩——ペドロとともに行動することになっている。

（でも……偽名なんて必要なのかなあ……）

地下一階の各部の案内を受けながら、ティースは作戦内容を説明された日のことを思い出していた。

「……ティモセオスⅡアベール？」

「ああ。いや、ネイルがお前につけたあだ名を聞いていて、パツと思いついたんだけどな。悪くないだろ？」

まだ陽カビは発光していたが、その光は徐々に弱くなりはじめており、そろそろたいまつ明かりが必要になってくる頃。

「……まあ、確かに」

「えー、ティモちゃんていいんじゃないの？」

「どこもよくない」

エルバートは渋い顔でネイルにそう返す。

部屋の隅ではリューゼットが座り込み、まるで精神集中するかのように目を閉じていた。

「……ティモちゃん、お気に入りなんだけどな」

ネイルの呟きはあっさりとは無視されて、

「で、だ。ティース。ヤツらも多少警戒してると思うが、向こうはこっちに人間の協力者がいることは知らない。だから、お前が潜入することはそう難しいことじゃないと思うんだ」

「ああ」

頷いたティースに、エルバートは指を三本立てて、

「お前に探ってもらいたいことは三つある。……一つ目は仲間たちを含め、捕らわれている魔の状況確認。獣魔までは手が回らないだろうから、人魔だけでいい。二つ目に牢の開け方、おそらく鍵が必要だろうから、鍵の在処の確認。そして三つ目はバラードⅡグラスマンの動向」

「……大変だな」

ティースは表情を引き締めた。

新入りの身分で動き回れる範囲などたかが知れている。その状況でそれだけの情報を集めるのは、おそらく困難——いや、比較的冷静な見方をすれば、ほぼ不可能だろう。

もちろんエルバートもそれは承知済みのようで、

「出来る限り、でいい。お前が頑張ってくれば頑張ってくれるだけ、後に控えた救出作戦の成功率が上がる。……最悪、仲間たちの居場所だけでもいい。ヤツらの魔力を封じる牢は内側にしか耐性がないから、鍵がなくとも力業でどうにかできるはずだしさ」

そういったエルバートが指先をパチツと鳴らすと、そこでほんの僅かに風が渦を巻く。

「あとは……運悪くバラードの奴に出くわさないのを祈るのみだ。こっちは四人だ。バラードの奴さえいなければ、なんとかなる」

「……」

バラードⅡグラスマンは腕利きのデビルバスターだ。実際のところはどうかわからないが、おそらくあのフォックスレアで出会った女性デビルバスター、ルネットⅡフィッシャーと同等ぐらいだと思っておいた方がいいだろう。……とすれば、ここにいる下位魔三人とティース程度では、どう逆立ちしても敵うはずがない。

確かに責任重大だった。

圧倒的不利なこの状況を打破するか否かは、全てティースの活躍に懸かっていると言ってもいいのだから――

「……おい、聞いてんのか、ティース」

「え」

ペドロの言葉に顔を上げるティース。

視線の先にあるペドロの少々ダルそうな顔は、二度説明するのはゴメンだと言わんばかりの表情をしていた。

「ええ、聞いてますよ」

もちろん地理の把握は重要なことだ。考え事をしてはいても、その説明はしっかりと彼の頭の中に入っていた。

「とにかく、非常事態には手近にあるその取っ手を引けばいいんですね」

その返答に、ペドロは満足そうに頷いて、

「ああ、そういうこった。そうすりゃ、この地下の全域に異常が知らされる。……何もないのに間違って引いたりすんなよ。大変なことになっからな」

「……ええ」

十数メートル間隔で配置された非常用の仕掛け。仕組みはよくわ

からないが、それを全部黙らせることは少し難しそうだった。

さらに先へ進む。

「んで、ここが地下二階への階段だ。……ま、最初のうちは使うこともないと思うが、基本的にはこのこと、あと向こうにもう一つある階段を使うことになる」

通路の向こう側を示すペドロ。

「わかりました。……ところで」

その位置をしっかりと把握し、ティースはさらに質問した。

「さっき途中にも二つほど下に降りる階段がありましたよね。あれは？」

その二つは少々薄暗い印象の階段で、片方はなにやら呻き声のよなものが聞こえたし、もう片方は妙に静かだった。

ペドロは答える。

「ああ、あれは牢に続く階段だ。新しく捕らえてきた魔を処遇が決まるまで閉じこめておく臨時の牢でな。入り口に近いところにあったのが、デカくて汚ねえ“ゴミ牢”。で、さっきそこにあったのが、小さくて綺麗な通称“娼牢”だ」

「……なんで二種類あるんですか？」

問いかけに、ペドロは鼻で笑って、

「デカい方はその名の通り“ゴミ溜め”さ。で、小さい方は使えそうな女を閉じこめておくから“娼牢”って呼ばれてる。ほら、そっちはあんま汚くすると、色々マズいだろう？」

「……」

その意味はかろうじて理解できた。ほんの僅かな嫌悪感がティースの顔に浮かんだが、幸い、ペドロはそれに気付かなかったようで、「ま、どっちだろうと俺らには関係のない話さ。一旦閉じこめりや逃げることもなくてまずありえねえし。娼牢の方は今、ガキが一匹入ってる。ガキつつつても顔は悪かねえし、あと一週間もすりや使い道が決まると思うけどな」

「……」

振り返って、ティースは先ほど見えた階段の方を見つめる。

(……想像してはいたけど……ひどい場所だ)

エルバートの憤りがここに来て初めて実感できた。確かにこれなら、命を賭けてでもどこにかしたいと感じても不思議はない。

そしてそれは、ティースにとっても同じだった。

(こんなの……許されるはずが、ない)

「さて、それじゃそろそろ戻るとすつか」

そんなティースの内心にはもちろん気付かず、ペドロは踵を返した。

「ま、最近ちよつといざこざがあつたが、それもほぼ鎮圧したから、しばらくは面倒なことも起きねえさ。気楽にやっていこうぜ」

「……」

言葉を返す気にはなれず、ティースはただ頷いてペドロの後についていく。

——と。

「……様ツ!! ……どこへ——!!」

「？」

背中の方から騒がしい声が聞こえてくる。

振り返ってみると、どうやら騒ぎは先ほどの階段——つまり、地下二階かららしい。

「……あちゃあ。ついてねえなあ……」

同じく振り返ったペドロは、すぐに眉をひそめて片手で顔を覆った。

「ペドロさん？」

ティースが問いを向ける間にも、騒ぎは近付いてきている。

「……こっち来ねえうちに行くぞ、ティース」

「え? どういう——」

「面倒な馬鹿ガキが来やがった」

ペドロがそう言った直後。

「……別にいいでしょおっ!

立ち去る間もなく、近付いていた騒ぎの原因はティースの視界の中に姿を現した。

「ゲームも終わっちゃったし、今、ものすっごく暇なの！」

「な——」

それを見て、ティースは啞然とした。

この場に相応しくない——騒がしく甲高い声

この場に相応しくない——真っ赤なドレス。

そして——

（こっ……子供？）

階段を駆け上がり、逃げるように走ってくるのはどう見ても十歳程度の、小太りな女の子だ。リングのように赤いほっぺ、身に纏ったのは赤いドレス。左右で縛った長い髪が走るたびに揺れていた。

（な、なんでこんなところに子供が——）

それはこの殺伐とした暗いイメージの場所に、あまりにも似つかわしくない。

「セルマ様！ 困ります——！！」

その後を追いかけるのは、二十代半ばぐらいの男。身長は百八十センチぐらいあるだろう。長身で体格の良い黒服だ。——そんな男が、赤いドレスの女の子を必死に追いかける図は、ある意味シュールな光景だった。

「おい、ティース。知らんぷりしとけ」

「え……」

振り返ってみると、ペドロは壁の方を向いて、何やらメモを取るような素振りを見せている。——が、その手にはペンも紙も握られてはいない。

「ほら、早くしろ。とにかく目を合わせんな」

「そ、そんなこと言っても……」

その言葉に従おうとしたが、手には何も持っていないし、咄嗟に芝居しようにも何も思い浮かばず。

そうこうしているうちに、駆けてきた女の子がティースに気付き、

視線がピッタリと重なってしまった。

(あ……)

「？」

慌てて視線を逸らそうとしたが、女の子は不思議そうにティースを見つめると、その速度をゆっくりと緩め——そして、

「……」

ピタリ。

ティースの目の前で立ち止まった。

「あ、えっと……」

少女は、首をかしげ、覗き込むようにティースを見上げている。

……背後では、ペドロがコソコソと逃げていく気配があった。視線の奥には、女の子を追いかけてくる男たちの姿。

「……？」

一方の怪訝そうな女の子の表情は、少しずつ、少しずつ変化していた。まるで、何か大発見をしたかのように、目が大きく見開いていく。

とにかく何か喋らなければ、と、ティースはそう思い、

「ど……どうしたんだい？ なにか——」

言おうとした、その瞬間だった。

「……………パパぁッ！」

「えっ？」

一瞬、悪寒がティースの背筋を過ぎった。……少女が突然、ティースの胸に向かってダイブしてきたのである。

幸いなことに、少女の年齢はまだ彼のアレルギー対象外だったようだ。

が——

「うッ!!?」

胸に走った衝撃に息が詰まる。

もちろん十歳程度の少女だ。身長はせいぜい百三十センチ半ばほどだろう。が……その横幅はなかなかのものだった。決して支えき

れない体重ではないにしろ、不意打ちで咄嗟に対処できるようなものではなく。

「うわ……っと……っと——てッ!!」

見事に臀部から墜落し、尾てい骨から突き抜けるような痛みが背骨に走る。

が、その痛みを十分に味わう間もなく、事態はさらにティースにとって不可解な方向に進んで行き——

「おかえりなさい、パパ! いつ!? ねえ、いつ戻ってきたのっ!?!」

女の子は押し倒した彼の首筋に抱き付くと、いきなりそう捲し立てたのである。

当然、ティースは目を白黒させて、

「パ、パパあ!?! ……ちよつ、ちよつと、君——」

「パパっ……パパあっ……!!」

「ちよ……ちよつと……」

まるで子犬のように胸に頬を擦り付けてくる少女。

追いかけてきた男。騒ぎに気付いた構成員たち。

それらが徐々に集まっているのを見て、思わずティースの口に乾いた笑いが漏れる。……笑うしかなかった。

潜入任務の基本、その一。

“なるべく目立たないように行動すべし”

(さ、最悪だ……)

そんなこんなで潜入初日から、ティースは望まぬ有名人デビューを果たすことになってしまったのだった。

陽カビはすでにその活動時間を終え、その薄暗い地下室には二組のたいまつが灯っている。

ぼんやりと浮かび上がる室内には三つの影。部屋の隅で目を閉じ

る男と、テーブルに着いている少年。そして、地べたにペツタリと座り込み、折り紙のようなもので遊んでいる女性。

このリガビュールに残された残り少ないキュンメルメンバー、エルバート、リユーゼット、ネイルの三人である。

「で、ティースからの連絡はあったのか？」

壁際でリユーゼットが目を開き、口を開いた。

言葉を向けられたのはエルバート。

「ああ」

テーブル上のその手には、一枚の紙切れが握られている。

一日一回の連絡。住み込みに近い形のゲノールトに潜入したティースと連絡を取る方法はごく限られている。

「指定通りの場所にきちんと手紙があった」

あらかじめ街中のとある場所を指定しておき、短い休憩時間を利用して、現在の状況を記した手紙を置く――それが、色々と考えた末に出した連絡法。こちらからの指示も手紙によって伝えることができるし、もちろん怪しまれないように指定場所は毎日変えるようにしてあった。

「――ねえねえ、リユーちゃあん。折り紙で“やじろべえ”ってどーやって作んの？」

「それで、その内容は？」

「ああ。それが、さ。いきなり有名人になっちまったみたいだ」
エルバートは少しだけ困った顔をする。

「ほう。なら、失敗か？」

「……ねえ、リユーちゃんってばあ」

「そうとも言い切れないみたいだけどさ」

そう言っつて、エルバートは軽く丸めた紙を放る。

リユーゼットはすぐ、受け取った紙に視線を滑らせて、

「セルマ||ゲノールト? ……ゲノールトということは」

エルバートは頷いて、

「ああ。どうやらゲノールト総帥の孫娘らしい。そいつに懐かれた

らしいってことみたいだ」

リユーゼットは興味深そうに目を細めて、

「ほう。それで。どうするつもりだ？」

「ああ……本当なら目立たないようにやって欲しいけど、逆に利用できる可能性もあると思う。だから、ティースにはそういう方向で――」

「……ねー、リユーちゃあん。やじろ――」

ゴン！

「あたっ！」

木片が前頭部を見事に直撃して、ネイルは思いっきりのけぞった。

「い、いったあ……」

「少し黙れ」

ゆつくりと、リユーゼットが腕を下ろす。

「それにそれは、“やじろべえ”ではなく“やつこさん”の間違いだろう」

「……あ！ そーそー。その、やつこさん！」

頭をさすりながらそう言ったネイルに、リユーゼットは興味なさそうに視線を外して、

「貴様は“口は災いの門”という言葉を知らんのか？ 貴様は紛れもない馬鹿なのだ。馬鹿は馬鹿なりに大人しくしていた方がいい。

……それで」

何事もなかったかのようにエルバートに視線を戻す。

「つまり、その娘から情報を聞き出すということか？」

「あ、ああ」

さすがにひどい言い様だなと思いつつも、いつものことなのでエルバートもすぐに気を取り直し、

「少なくともそんなのが近付いてるってことは疑われてないってことだろうし、上手くいけば普通にやるよりもよっぽど成果が――」

ゴアンッ！！

「うわッ!？」

ものすごい打撃音とともに、エルバートの目前でリューゼットの体が前方に九十度折れ曲がる。その光景はまさに“やじろべえ”を彷彿とさせるものだったが……いや、それはともかく。

その――背後。

たいまつの明かりに浮かび上がったのは、椅子を振り下ろした……いや、振り抜いた体勢のネイルだった。

「リューちゃん、知らないの？ 馬鹿って言った人が本当は馬鹿なんだよ？」

「……」

リューゼットは動かない。……いや。

「……ネイル」

ゆっくりと。まるで地獄の底から響いているような超低音の声を発しながら、やじろ――いや、リューゼットの体が元に戻っていく。

「なあに、リューちゃん？」

一瞬の――不気味な――沈黙。

そして、

「今日こそ、貴様の息の根を止める」

どおおおおん！！

「うわあつ。リューちゃん、今日も苛々大爆発だねえ」

「貴様が言うな」

ごん！ どおん！ ごわっしやあああん！！

「……また始まった」

エルバートはため息とともに顔を覆った。

決して珍しいことではないといえ――

「はあ……」

諦めたように肩を落とすと、席を立つ。歩いていった先――部屋の隅には何やら手紙の束があり、エルバートはその中の一つを手にとった。

そして、乱闘を繰り広げる二人に向かい、言い放つ。

「ティースの残してた手紙、宿に置いてくるからさ。……戻って

くるまでには決着つけといてくれよ」

どがあああああん！！

(……あの地下室、大丈夫なんだろうなあ……)

去り際に聞こえた一際大きな破壊音にやや不安になりながらも、エルバートは地下室を出た。

「はあ……」

吐く息が白い。外は日も沈み、冷たい風が辺りを支配していた。

……この気温では、客引きも大変だな、などと、全く関係ないことを心配しつつ、フードをかぶってブルツと一つ身震いする。

それから手の中に視線を落とした。

「しかしマメなヤツだな、あいつ。……そりゃ、毎日連絡した方が安心するだろうってのはわかるけどさ」

手紙——それはティースが残していった、リイナへの手紙。最初の一通後に全くの音信不通となれば不安になるだろうという配慮から、ティースがあらかじめ書いておいた複数枚の手紙を、毎日一通ずつ彼女に届けることを請け負ったのである。

ほう……っ、と、もう一度白い息を吐いて、エルバートは一つ頷くと、

「……ま、無理に協力してもらってんだ。このぐらいはやってやんなきゃ、な」

そう呟き、夜の空気が支配するリガビュールの街を東へと向かって歩き出すのだった。

三日後。

「えっと……ここをこう折って……」

「ああ、いえ、違いますよ。こっちを……こう、こうしてから、そ

つちを――」

ゲノールトの地下二階。階段を下り、二股の通路を左に三十メートルほど進んだ場所に、ちょっとした休憩所のようなところがある。本来はゲノールトの構成員が仮眠を取ったり、ちょっとした博打を楽しんだりする場所。だが、ここ二、三日、その姿はすっかりと鳴りを潜めており、代わりそこにあったのは――

「んー……!!」

「ああ、ダメですよ。丁寧にやらないと、きちんと飛ばなくなってしまうから」

どこか場違いな赤いドレス姿でそこに座り込み、どうやら折り紙らしきものを折っている少々太めの少女――セルマⅡゲノールト。なかなか上手く行かないのか、もともと丸々とした頬をさらに膨らませ、やや苛々した様子が表情に見え隠れしていた。が、それでも癪癪を起こさずに根気よく折り紙を続けている。

彼女を良く知るゲノールトの構成員に言わせれば、その“我慢強さ”は奇跡にも近い光景だった。

「……」

離れた場所から無言でその様子を見つめているのは、彼女の護衛を務める男二人。

そして、

「よく見ててください。ここを……こうやって――」

彼女の一番そばで折り紙を教えるのは、言わずとしたティースである。

「こう……こうかな……」

「ええ、そうです」

「これでちゃんと飛ぶの？」

ようやく完成した紙飛行機を手し、無邪気な笑顔を見せるセルマ。ティースは微笑むとともに小さく首をかしげてみせて、

「さあ、それはやってみなければ」

「えー！」

不満そうな声を上げるセルマだったが、そこには小さな達成感のようなものが浮かんでき、機嫌はすこぶる良さそうだ。少なくとも“暇つぶし”という彼女の目的は充分に達せられているらしい。

(ふう……っ)

思った以上に楽しそうな彼女の姿に、ティースも安堵の息を漏らした。頬を微かに緩めながら、

(……でも、まさかこんなことになるとはなあ)

次のため息は、彼の中にある不安の入り交じったものだ。

――あの日、彼女にいたく気に入られてしまったティースは、その翌日から本来の任務を免除され、こうしてゲノールト総帥の孫娘、セルマⅡゲノールトの遊び相手をするように命じられていた。もと彼女のがまま振りはゲノールト構成員の間でも有名であり、ペドロが態度で示したようにやや手を余している状態。だからティースをあてがうことで大人しくなるなら、彼らにとっても願ったり叶ったりだったのだろう。

「ティース、もっと食べる？」

ちなみに彼女もまた、ペドロの考え出したあだ名(?)で彼のことを呼んでいた。

「あ、いや」

常に持ち歩いている菓子の袋を差し出したセルマに、ティースは丁重に断って、

「もう残り少ないようですし、私は遠慮しておきます」

「いいよいいよ。なくなったらまたもらってくるからさー」

口の周りを粉砂糖で僅かに汚し、セルマはニコニコしながらそう言った。

「……」

そんな彼女に笑顔を返し、やはり丁重に断りながら、

(普通の女の子、だよな……)

少し意外に思っていた。

やや食欲旺盛ながら、年相応の、ごく普通に愛らしい少女。

ただ……周りはそうではないと言う。

わがまま。飽きっぽい。気まぐれ。すぐに癪癪を起こす。祖父の言うこと以外は聞こうともしない——だが、たった二日間とはいえ、そんな面をティースは一度も目にしていない。そしてそれはどうやら驚くべきことらしかった。

菓子を手紙に紙飛行機で遊ぶセルマを眺めながら、ティースはもう一つ息を吐く。

(……そろそろ色々情報を聞き出さなきゃ、な)

もちろん当初の目的は忘れていない。

捕らわれているキュンメルメンバーの状況。

牢の鍵の在処。

そしてバードIIグラスマンの動向。

二つ目、三つ目については、彼女が知っている可能性はそう高くないだろう。が、あれだけ組織内を自由に動き回っている彼女だ。捕らわれている魔の居場所ぐらい知っていても決しておかしくはない。

「……」

視線を背後に向けると、そこには壁に背を預け、遠くで様子を窺っているセルマの護衛役が二人。……どこかやる気なさそうに見えるのは、これまで彼女に散々困らされてきた結果だろうか。

といってももちろん下手は打てない。距離的には通常の会話がギリギリ聞き取れるか取れないかという微妙な位置だったし、そうでなくとも、下手な探りを入れて、セルマが誰かにそれを話してもすれば絶体絶命である。

(さて、どうしようか……)

考えるティースの目の前を、すいーっと赤い紙飛行機が飛んでいく。

(さりげなく……上手く会話を運べば——)

と、

「あのねー」

「……はい？」

紙飛行機を追いかけて拾い上げたセルマが唐突に口を開いた。

「パパも得意だったみたいなんだ。折り紙」

「そうなんですか？」

苦笑するティース。

所詮は基本的な紙飛行機の作り方を教えたただけだ。得意というほどではない。

（みたい……か）

その言葉に、再びティースは少女の境遇へと想いを馳せる。

……父親がいないことは確実だ。が、母親という人物の姿も、その話も耳にしたことがない。詳しい事情はもちろん新参者であるティースの知るところではなかったが、少しだけ気になった。

「あ、そうだ！」
と。

飽きたのか、あるいは満足したのか。何度か紙飛行機を飛ばして遊んだ後、セルマは突然、何事か思いついた様子でティースの元へ走り寄ってくる。

そして得意げに満面の笑顔を浮かべると、

「ティースに面白いものを見せてあげるよ！」

「……面白いもの？」

「ついてきてー！」

そう言うのと、セルマは忙しなく駆け出した。その丸々と太った体型に似合わず動きが素早いのは、やはり子供だからだろうか。

チラッと護衛の二人を見ると、こっちの動きに気付いたようだ。

僅かにため息を吐いて、寄りかかっていた壁を離れる。

（……面白いもの、か）

腰を上げ、ティースもまた彼女の後を追うことにした。

階段を上り地下一階へ。

走る。

「こっちだよ」

「……」

曲がり角ごとに立ち止まって手招きするセルマの向かった先は、ティースも知っている場所だった。

「……あ、セルマ様」

そこにあつた階段を下りると、入り口付近にいた構成員が不審そうな顔で立ち上がり一礼する。が、セルマはそれを全く無視して、
「こっちこっちー！」

「……」

すれ違いざま、構成員の男が説明を求めるようにティースを見たが、もちろん説明する暇があるはずもなく、ティースは軽く頭を下げてその横を通り過ぎた。

そして――

（……ここが）

そういうものがあると初日に聞いてはいたが、実際に見るのは初めてだ。

そこは通称“ゴミ牢”。どことなく他の通路より薄暗くジメジメした空気。階段を下りた時点で奥の方から呻き声や微かな怒号のようなものも聞こえていた……が、セルマは気にした様子もなくどんどん先に進んでいく。

そこにあつたのは、大きな牢が二つ。

（これは……）

一つがだいたい二十畳ぐらいだろうか。昼だというのに明かりらしい明かりは階段付近から照らされる微かな照明のみ。微かな悪臭、牢の中には計四人。目の細かい格子を掴んで何事か叫んでいる男。その後ろで無気力にうずくまる男が二人。その奥、ボロボロになった薄い布の上に横たわり、呻き声を上げている者が一人。

もちろん、全員が人魔だった。

「見て、ティース」

セルマは牢獄の前に立って、ティースを振り返る。格子を掴んでいた男が怒号を上げてセルマに手を伸ばそうとするが、格子の目は

指が入るか入らないかの大きさしかなかった。

「セルマ様……」

ティースはやや当惑した様子で口を開く。

——その無邪気な様子と、牢の中の悲惨な様子が、あまりにもアンバランスで、そしてあまりにも衝撃的な光景に思えていた。

「コレね、全部お爺様が捕まえてきたんだよ。すごいでしょー？」

「……」

直後、牢の中で微かな爆発音が起こった。

「ゴフッ！！？」

格子に捕まっていた男が転倒する。……どうやら牢の中で魔力を行使しようとして、跳ね返されたらしい。

「くっ……き……さまらアアアッ！！」

手首を押さえ、床にはいつくばったまま睨み上げる男の姿に、ティースの視線は釘付けになった。

その男は捕まって日が浅いのだろうか。うずくまる二人や後ろで横になったままの男に比べると、まだ元気が残っているようだった。

「ここを出たら、貴様らを真っ先に殺してやるッ！！ 爪を剥ぎ、手足を切り落として、内臓を引きずり出してやるからなアアア——ッ！！」

「……」

僅かにかすれた呪詛の叫びに思わず顔をしかめるティース。だが、セルマの方はその言葉がまるで聞こえていないかのようにニコニコしながら牢の中を指さして、

「ティース、コレ、何に使うか知ってる？」

「……」

言葉が出せず、ティースはただ首を横に振る。

……背中に、冷や汗。そこに二人の護衛の視線を感じていた。

今はただ、彼らに不審な態度を悟られないようにすることで精一杯だった。

「コレね、あとでゲームに使うんだよ。ティース、見たことないで

しょ？ 今度、お爺様をお願いして、ティースにも見せてあげるね」
「ゲーム……ですか？」

何のことかティースにはわからない。が、それが“ゲーム”などという可愛らしいものでないことは容易に想像できた。

そして案の定、セルマの無邪気な口から出てきたのは、その想像通り。

「コレを、動物と決闘させるの。それで何匹目まで勝ち抜けるか賭けるんだよ。面白いんだからあ」

「……」

「たまに強いのがいるんだけどね。そのときは手を縛ったり、かたっぱだけもいだりしてハンデ付けるの。だいたい三匹か四匹ぐらいでダメになっちゃうんだけど、私はいつも六匹か七匹目に賭けるんだ。だって、その方がいっぱいになるの！」

「――」

濁流が脳髓に流れ込んできたような、目眩。

身振り手振りを加え、顔を赤くし、丸々としたほっぺを一杯に緩ませて楽しそうに話す少女の姿に、ティースの冷や汗は止まらなかった。

――見てはいけないものを見てしまったような、そんな感覚。

「こないだは惜しかったんだよー！ 七匹目に賭けてね、六匹目まで行っただの。当たってたらね、えっと、えっと……確か五十倍ぐらいだって。すごいでしょー！？」

「あ……ああ」

震える唇を意識的に引き締める。

「でも七匹目では全然ダメでさー。何もしないで頭もげちゃった。……お爺様が言うにはね――」

どす黒いものが心臓に流れ込む。

吐き気を催す。

（……ダメだ。しっかりしろ……）

言葉はいつもと変わらず無邪気なまま。なのにその内容は、普通

の人間であれば気分が悪くなって当たり前の、あまりに残酷なものだった。

それが普通のゲノールト構成員たちの口から出たのであれば、ティースもここまでショックを受けなかっただろう。が、それが、たった二日とはいえ一緒に過ごした、一見子供らしい無邪気な彼女の口から出たものだったから、なおさら衝撃だった。

（……異常だ——）

沸き上がった怒りは、目の前で残虐な描写を続けるセルマではなく、その背後に存在するものに向けられた。

（ゲノールト……）

この場所で生まれ、この場所で育ってきたセルマという少女。

その彼女にとっての日常。彼女にとっての常識。

——それこそが、このゲノールトが犯してきた罪の証明だった。

（許せない……！）

奥歯がギリツと音を立てる。

「でね！ 近い内にまたゲームが——……ティース？」

「！」

歯ぎしりの音に気付いたのか、あるいは表情を悟られたのか。不思議そうなセルマの問いかけに、ティースはハッと我に返った。

「ねえ、ティース。どうかしたの？」

「……いいえ。楽しそう、ですね……」

それでも、心に爪を立てながらそう答えるのがやっと。

幸い、セルマは疑問を持った様子もなく、すぐに表情を輝かせた。

「そうでしょ!？」

「……」

まるで父親に誉められた幼い娘のように。
複雑な思いがティースの胸に去来する。

（この子は——）

どうすればいいのだろう。——いや、どうすることもできやしない。

結論は即座に現れる。

ティースの立場で彼女にしてやれることは何もなかった。……むしろ、この先ここで生きていく彼女にとっては、罪悪感を感じず、純粹に楽しんでいられるこの状態こそがもっとも最適と言えるのかもしれない。

「セルマ様……」

ティースはギョツと唇を引き締め、出来る限り不自然にならないように問いかけた。

「他に……こういう人たちはいないのですか？」

「こういう人？」

一瞬、セルマは理解できない、という顔をした。
が、すぐに、

「あ、ああ。コレのこと？ ……変なの。コレは人じゃないよ？」

「コレ……は、他にいないのですか？」

再び催してくる吐き気を押さえながら、言い直す。

「うん。たっくさんいるんだ」

セルマは自慢げにあっさりと答えた。

「三階のCブロックにたくさんいてね。四階でゲームがあるの。次か、その次ぐらいには連れてったげるからね」

「そうですか……」

（三階のCブロック……）

おそらくそこが、人魔たちを捕らえておく場所なのだろう。とすると、キュンメルの人メンバーもそこに捕まっている可能性が高い。

このゲノールトの地下組織は三階がメインとなっており、もっとも広がった。AブロックからFブロックまでに分かれており、相互のブロックは普段開いていない非常通路からしか行き来することができなくなっている。だから、その中でCブロックだと判明したことは、救出作戦を実行する上で非常に重要な情報である。

だが、

（……この子は、このままじゃ——）

気分は晴れない。

それは自分の考えるべきことではないと、そうわかっていながらも。

「それじゃ、いこ、ティース」

満足したのか、セルマはその後も“ゲーム”の魅力について説明しながら、通称“ゴミ牢”を離れていく。

陰鬱な気分を懸命に隠し、ティースもまたその後についていくことにした。

階段を上り一階へ。

そのまま、地下二階へ続く階段へと向かう――その途中。

「あ。せっかくだから、こっちも見てみる？」

「え？」

セルマが立ち止まったのは、その途中にあった別の階段。先輩構成員のペドロから聞いた話によれば、通称“娼牢”と呼ばれる牢のある場所だった。

「こっちはよくわかんない」

尋ねておきながら、セルマはティースの返事を待たずに階段を下りていく。

「なんか、ゲームには使わないみたいなの。それに、弱そうなのばっかなんだよ」

「……」

その牢の通称を知っているティースには、その理由がわかる。が、どうやらセルマはまるで理解していないようだった。

（これが娼牢……か）

先ほどの牢と違い、通路にも明らかに清潔感がある。いわゆる“陽カビ”が通路をしっかりと照らしており、先ほどのような悪臭も全くなかった。

「あっ……セルマ様！」

そこにも二人の見張りがいて、牢は一つ。見張りの一人は壁にだらしなく座り込んでうたた寝していたし、もう片方は大きなあくび

の途中。セルマの姿を見て二人とも姿勢を正したが、セルマはやはりまるで眼中に入っていない様子で牢の方へ進んでいく。

ティースもまた、二人の見張りに小さく頭を下げながら牢に近付いた。

「……」

牢にいたのは一人の少女だった。

歳は……セルマより少し上、十二、三歳ぐらいだろうか。先ほど捕まっていた魔に比べると、きちっとした清潔な洋服を身につけ、ベッドもあり、おそらく定期的に風呂にも入っているのだろう。やや内側にカールしたクセのあるセミロングの髪は艶があっただし、肌もキレイで健康的だ。

だが、その少女に待ち受ける運命を想像すると、ティースの心はやはり暗くなる。

（こんな……子供が――）

チラッとセルマの様子を窺ってみた。

相手は歳が近い女の子同士、あるいは違った反応を見られるかとも思ったのだ……が、セルマは腰に手を当て、つまらなさそうに牢の中の少女を見下ろすと、

「コレなら一匹目でダメになっちゃうよねー。こんな弱っちいの、すぐ捨てちゃえばいいのに」

「……」

同意を求めてきたセルマに、ティースは無言で目を閉じ、眉間に皺を寄せた。……どうやら彼女の目には、すでに歪んだフィルターがかかってしまっているらしい。

「やっぱつまんなかったね。行こ」

「はい……」

と。

……異変が起きたのは、セルマが踵を返し、ティースもその後が続こうとして、最後に牢の中に目を向けた、その瞬間のことだった。

（――え？）

ずっと俯いていた牢の中の少女が、いつの間にか顔を上げていた。
そして――

（な――）

視線がぶつかった瞬間、脳裏の奥の“何か”が刺激される。

――どこかで、見たことがある。

咄嗟に、そう思った。

思考の時間は、ほんの二、三秒。

思い当たったのは――

（……エルに……似てる……？）

そう。

もちろん性別の違いはある。が、その少女の顔は確かにエルと良く似ていた。まるで、兄妹かと思ってしまうほどに――

（兄妹……？）

まさか、と、ティースは考える。

そんな話は本人の口から一言も聞いていなかったし、彼に妹がいるということも聞いたことがない。

だが、

（まさか――）

それでもなお、思考はその可能性を否定しきれなかった。

（でも、それなら俺に言ってくれるはず……）

確かに隠す理由は見当たらない。

とすれば、他人の空似だろうか。

いや、しかし――

（……あまりにも似てる）

少女は、ティースの記憶の中にある少年の姿とあまりにもそっくりだった。彼が髪型を変えて少女女の子っぽくすれば見分けがつかなくなるのではないか、というほどに。

「……」

少女は視線を動かさなかった。口は開かない。

その表情も、どこか違和感がある。そこにあったのは絶望ではな

く、秘めたる何らかの意志。

そしてティースを見つめる目には、どこことなく不思議そうな色が込められていた。

——何故、あなたはそこにいるの？ と。

「ッ……！」

見透かされたような気がして、ティースは視線を逸らした。

そしてそのまま、いつの間にか遠くなっていたセルマの後を慌てて追いかける。

（……なんだったんだ、あの子……）

胸に残ったのは、やはり不思議な感覚。

その日、少女の顔がティースの頭から離れることはなかった。

日が沈み、キュンメル隠れ家をたいまつ明かりが照らしている。

エルバートの手の中にあったのは、ティースからの定期連絡。

それに目を通した後、安堵のため息をもらして、

「そうか。彼女はまだ、娼牢から移されていないみたいだな……」

どこに行っているのか、そこにリューゼットとネイルの姿はない。揺れるたいまつ炎。テーブルの上には彼が街へ出る際に使う灰色のローブ。そのそばには、ほどかれた赤いリボンがある。

「仲間たちの安否は依然不明……か」

手紙を置いて、エルバートの視線は天井を仰いだ。

「ティース……早めに、頼むよ……」

祈るように、眩きが漏れた。

「みんなが、無事なウチに――」

その3『境界線』

夕日が斜めに射し込むやや広めの部屋の中、リイナはベッドの上に腰を下ろし、じっとドアを見つめていた。

「……」

無言のまま視線を僅かに横にずらす。壁のカレンダーに刻まれた日付は、ティースが戻ってこなくなって今日がちょうど十日目であることを示していた。

……さすがに、おかしい。

毎日届けられる手紙はおそらく彼の筆跡だ。長年離れていただけに確信ではないが、おそらく間違いないだろうという自信はあった。それは疑いがないとしても……ならば何故、彼は直接事情を説明しに来ないのだろうか。

それが疑問だった。

そもそも、手紙を届けているのは彼本人なのか。……いや、直接姿を見せないことを考えれば、そうではない可能性の方が高いだろう。

考えられるパターンはいくつかある。

——どこかに捕らわれて、手紙だけを無理矢理書かされている。

——何らかの事情でその場から離れることができず、誰かに代わりに手紙を届けてもらっている。

前者であるならばすぐに探しに行くべきだろうし、後者であるなら、彼の言葉通り黙って待つべきなのかもしれない。

夕方。手紙は大体いつも同じような時間に届けられた。

確認する手段はある。もっとも単純な方法。

(今日は逃がさない……)

届けにきた人物に、直接聞けば良いのだ。

実をいうと、この試みは三日前からすでに始めていた。が、初日は手紙に気付いて廊下に飛び出したときはすでに誰の姿もなく、神

経を尖らせた二日目は手紙自体が届けられなかった。そして三日目……昨日は時間を大きくズラして届けられたために気付くことができなかった。

おそらく向こうもリィナの意図に気付いていて、そして姿を見られまいとしているのだろう。

だから、今日は昼過ぎからずっと神経を尖らせていた。

「……」

窓から射し込むオレンジ色の光が、その強さを徐々に弱めていた。もう夜が近い。

……もしかしたら、今日は来ないのだろうか。

そう思い始めた、そのときだった。

「？」

一瞬。

「えっ……？」

窓から射し込んでいた夕陽を遮った、小さな影。咄嗟に振り返ったが、誰もいない。

……いや。

「!？」

いつの間にか窓の隙間に手紙が挟み込まれていた。

(でも……ここは二階——!)

慌てて窓に駆け寄って外を眺めた。が、宿の近くを歩く人間は見当たらない。

(どこに——)

ガタッ。

「!？」

音が聞こえたのは、屋根の上。

上を見ると、ほんの一瞬だけ、何者かの後ろ姿が見えた。が、それはすぐに屋根の向こうに消えてしまう。

思わず、リィナは叫んだ。

「……待って! あなたは……ッ!？」

返事はなかった。

一瞬追いかけてようかとも思ったが、それではさすがに目立ちすぎる。今の彼女の立場からすると、それを実行に移すことは難しかった。

追跡を断念し、窓の枠から手を離す。

（でも――）

視線を床に落とすと、そこには先ほど届けられたばかりの手紙。

（あの後ろ姿……やっぱりティース様じゃ、ない）

それは確信だった。

「……」

無言のまま手紙を広い、そして視線を伸ばした先はカレンダーの日付。

（あと、三日……）

示していた日付。

エルとの約束――“一年後”まであと三日だ。

「……」

手紙の封を切る。内容はいつもと大差ないもの。何か暗号のようなものがあるかとも考えたがそれもなさそうで、筆跡にも動揺は見られなかった。自分の意志で書いている可能性は高い。

（でも……あと三日で進展がなかったら――探しに行こう）

魔である彼女にとって、昼間から街中をさまよい歩くことはとてもないリスクを背負う行為だ。が……それでも彼女は、この不可解な状況にそこまで耐えられるほどの日和見主義でもなく――。

決意を固め、そしてリィナは部屋にある街の地図に手を伸ばすのだった。

「ふう……やれやれ」

エルバートが隠れ家へと戻ったのは、すでに日も沈み、そしてリ

ガビユールの中心街が“活気づいて”きた、そんな時間。

「……参ったなあ」

地下へと続くはしごを下りていくと、たいまつが揺らめいて彼を出迎えた。

「あれ？」

そして、ふと気付く。

薄暗い地下室にいたのは、相変わらず壁際で瞑想するように目を閉じるリューゼットだけだった。

「ネイルはどこ行ったんだ？」

リューゼットは静かに目を開き、横目でエルバートを見ると、

「さあな。だが、いない方が静かでいいだろう。……なにかあったのか？」

「あ、ああ……それが、最近、向こうもこっちの正体を掴もうとしてるらしくてさ。手紙届けるだけでも冷や汗もんだよ」

本当に疲れた様子で椅子に腰掛けたエルバートを、リューゼットは不可解そうな顔で、

「例の、リイナとかいうティースの知り合いか？ ……なにかマズいことがあるのか？ お前にとっても知り合いなのだろう？」

「ま、ちょっと……な」

どこか歯切れ悪く答えたエルバート。だが、リューゼットはそれ以上追求せず、また目を閉じた。

空気穴から流れ込んだ微かな風が、カビの匂いを運んでくる。

そして、

「そろそろ、か」

「……」

リューゼットの呟きに、エルバートは無言で視線を彼の方に向けた。

「三階のCブロック。場所がわかっただけでも良しとせねばな」

「……リューゼット。お前は、怖くないのか？」

エルバートは視線を流して、

「仲間を助けるために命を投げ出してでも、って、そう決心した。……けど、やっぱいざとなると怖い。バラードの奴に出くわしたら、ヤツらに捕まっちゃったら、ってさ」

その言葉通り、口調には隠しようもない不安が溢れていた。

確かに、キュンメル本隊と合流できないこの状況において、ゲノールトはあまりに強大すぎる相手だった。エルバートの言うとおり、ここにいる全員が命を落としても何ら不思議ではない。

だが、リユーゼットはいつもの調子で答えた。

「私は、もともと戦うことが嫌いではないからな。強い者と一対一で戦って死ぬるなら、それはそれで本望だ」

「……羨ましい性格してるよ」

エルバートはどこか呆れたようにしながらも笑って、

「けど、納得はできるな。お前みたいに日の浅い奴らは、全員が街から逃げようとして逆に一網打尽にされちゃったのに、お前とネイルは……って、ネイルはなんでここに残ってんのか未だに良くわかんないけどさ」

「あれは、ただの阿呆だ」

リユーゼットはそう断じた。

仲がいいのか悪いのか、よくわからない二人だった。

「……」

何も言わずに頷いて。

しばらくの沈黙。

エルバートはゆっくりと宣言する。

「あと三日。……それまでに他の有力な情報がなければ、作戦を決定しよう」

リユーゼットもまた、無言で頷いた。

それとほぼ同時刻。

(ふう……)

ティースはちょうど、一時間ほどの自由時間を利用して手紙による定期連絡を終えたところだった。

(今日も、特に有力な情報はなし、か……)

ゲノールト総帥の孫娘、セルマとの関係は相変わらず良好だったが、彼女も捕らわれている魔についての詳細までは知らないようだったが、どうやらここ一ヶ月ぐらいに捕らわれた魔の中には、生き延びている者も多数いるようで、それはつまり、キュンメルメンバーたちの大半がまだ生きているだろうということでもある。

「今日もご苦労だな、ティース」

「え？ ……あ、ペドロさん」

地下一階に戻ってきたティースに声をかけてきたのは、初日に彼を案内したペドロという男だった。どこか調子の軽いやや年上のこの男は、新入りであるティースにも頻繁に話しかけてくる。

そうして二人が向かった先は、地下一階にある構成員たちの休憩所。そこは同時に食堂でもあり、今は多数の構成員たちが夕食をとっているところだ。

「お前、あのガキンチョに相当気に入られたみてーだな？ ……ご愁傷さん」

テーブルについてペドロが話題にしたのは、もちろんセルマのことだった。

ティースが“世話係”となつてからすでに四日目。当初はすぐに飽きられるだろうと予想していたペドロも、四日も保ったことや驚いているようだった。

「はは……でも、そんなに悪くないですよ」

流すようにそう答えたティースに、ペドロは夕食のスープを行儀悪く口に掻き込みながら、

「悪くない、ねえ。ま、将来を考えりゃ気に入られて悪いこたねえ

わな」

器を置いて、それから意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「しかし、ま、あれで少しぐらい可愛けりゃ役得もあるったって、あんなブタみたいなおデブちゃんじゃなあ」

「……」

その言葉に少し気分を害し、ティースは僅かに眉をひそめた。

セルマが少し肥満気味なのは彼にも否定できないが、そこまで言われるほどヒドいわけでもない。ペドロの言葉はおそらく、彼女の厄介な性格も考慮した上での罵言なのだろう。

ただ、もちろんここでイザコザを起こすつもりはなかったのも、ティースは表情を誤魔化すようにスプーンを口に運んだ。

それには気付かず、ペドロは続ける。

「ま、あの母親は相当美人だったらしいが、娘もそうだとは限らねえってことだな」

ティースは少し興味を示して、

「……母親？　そういや彼女、父親も母親もいないみたいですわね」

「ああ。お前は知らないんだっけな。っても、俺だって人伝いに聞いた話だけだよ」

もともと噂好きなのだろう。ペドロはあっさりと話し始めた。

「あれの母親ってのはボスの一人娘さ。で、父親ってのは元々よそ者だったんだが、これがどうやら、最初からここに留まるつもりはなかったらしくてな。ボスもその男を信用してはいなかったんだが、あのガキが産まれてちよっと油断してる隙にドロン……ってことらしいぜ」

「母親も一緒に、ですか？」

「ああ、そりゃもちろん共謀さ。ボスはその一人娘をたいそう大事にしてたらしいが、娘の方はここの環境に馴染んでなかったらしい。……ま、こんな世界だ。嫌気が差したって不思議じゃねえと思うしな」

それはつまり、セルマの両親は比較的まともな精神の持ち主だっ

たということだろう。

「……何故、あの子——いえ、セルマ様も連れていかなかったんでしょう」

ティースの問いにペドロは肩を竦めて、

「そりゃ、産まれたばかりのガキなんか連れて逃げ出せるわけないだろ。要するにあのガキは、ボスを油断させるためのダシに使われたってこったな」

「……」

ティースは押し黙った。

理解は、できなくもない。あるいは女にとって、男は自らを解放してくれる白馬の騎士だったのかもしれない。

だが——

（わかる気がする……あの子が、どうしてあんなに歪んで育てられたのか）

夕食が終わり、ティースはペドロとともに食堂を出た。

「ティース。お前、今日はあと待機だけか？」

「あ、はい。ペドロさんは？」

「俺はこれから一階の警備任務さ。今日はお偉いさん方がビップルームの方に来てるらしいから、警戒を強めてんだってよ」

ペドロはやれやれと言わんばかりに肩を落とした。

確かに。廊下がどことなく緊張感に溢れているのはティースも気付いている。

「ビップルームというところ……地下四階ですよね？」

地下四階。そこは色々な催し物がなされる場であり、週に幾度か“こっち側の”有力者が訪れるらしかった。セルマが良く口にする“ゲーム”が行われるのもその場所だ。

「ああ、だから今日は——」

言いかけたペドロの口が止まる。

「？ ペドロさん？」

問いかけようとして、彼もまた、進行方向から近付いてくる一団

に気付いた。

(なんだ……?)

先頭を歩く男の腰には一振りの剣。身なりは他の構成員と比べてやや立派で長身。歳は三十歳ぐらいだろうか。後ろに二人の男を従えている。

(……この、人――)

ただならぬ気配。

ティースが感じたその印象を肯定するかのように、ペドロは急に顔を強張らせ、無言のまま通路の端に寄って頭を下げた。緊張感が漲る。

「……」

ティースもまたそれに習い、端に寄った。

……首筋に嫌な汗が浮かび、心臓の鼓動が速くなる。

まだ数メートルはあるというのに、まるで上から頭を押さえつけられているかのような圧迫感を感じた。

(まさか、この人……)

徐々に近付いてくる足音。

それが二人の前を通り過ぎていく。……いや。

「……新入りか? 顔を上げろ」

「!」

ドクン、と、心臓が踊った。

隣を窺ったが、ペドロは首筋に冷や汗を浮かべたまま、微動だにしない。

「……はい」

ティースはゆっくりと顔を上げた。

眼前で見ると、短く刈り揃えた髪で眼光の鋭い男だった。歳はティースより十歳以上は上だろうか。

目線の高さはほぼ同じだというのに、まるで見下ろされているように錯覚してしまう。身に纏った雰囲気は、どう控えめに表現してもタダ者とは言い難い。

「……」

幸い、男はすぐティースに興味をなくしたようで、視線を戻し、歩みを再開した。

——いや。

「!？」

ホッとしたその瞬間、首筋に悪寒が走った。

シュパァッ!

空気が裂け、咄嗟に身をかがめたティースの真上を、鋭い手刀が飛んでいく。

「っ……」

風圧が髪を揺らした。

「ほう。なかなかだな」

視線を上げたとき、男はすでに立ち去ろうとしていた。

「……」

ぞくっと全身が震え、総毛立った。背中を、冷たい汗が流れる。廊下の空気が妙にヒンヤリと感じた。

（……あの、人）

無造作に放った手刀。おそらくかなり手加減していたのだろう。だが、それでも——

「……お、おい、ティース。よく避けたな、お前……」

男の姿が廊下の向こうに消えたのを確認してから、ペドロがようやく頭を上げる。いつもの軽い調子はそこにはなく、額に浮かんだ汗は彼が極度の緊張状態にあったことを如実に示していた。

「前、新入りがあの一発で再起不能になっちまったんだ……俺のすぐ目の前でよ……」

「……」

間違いない。そう確信する。

（あの人が、バラードⅡグラスマン——）

ドク、ドク、と心臓は落ち着かないまま。

——デビルバスター。それは善であれ悪であれ、等しく強大な存

在だった。今のティースでは決して齒が立たない、雲の上の存在。
（エルの言うとおりで……あの人とは、絶対に戦っちゃいけない……）

身が引き締まる。

自らの任務の重大性。そして自分が立っているこの場所が、どれだけ危険な場所なのかということ。

そのことを、ティースは改めて自覚させられたのだった。

——この世に生を受けて四十年と少し。男の人生はなかなか波乱に富んでいた。

幼い頃、彼は突如として現れた理不尽な波によって人間界へ流され、両親とは生き別れることとなった。が、幸いにして男は幼い頃から機転の利く頭脳を持っており、新天地でも賢く生き延びる術をすぐに身につける。

身を潜めながら、生きる生活。それは決して楽なものではなかったが、これまた幸いなことに、彼は他人から物を奪わずとも生きていける場所を見つけたし、同じ境遇、同じように両親と生き別れ、幼い頃から力を合わせて生きてきた少女を妻にもした。

二年後、二人の間には娘が生まれ、それからしばらくが長い幸せの絶頂期だった。

オン……オオン……

それは、何の音だろうか。

地上から漏れてくる風の唸りか。あるいは犬、狼の遠吠えか。あるいは……境遇を同じくする者たちの呻き声か。

オン……オオオン……

個別にあてがわれた一人牢の環境は、以前いたゴミ溜めのような牢と大差ない。常に空腹だったし、常にどこから悪臭が漂ってくる。鎖に繋がれた手首は、何度ももがいたせいで擦り切れ、血がこびり付いた錆と入り交じり、膿が浮いている。顔も、その妻が嫌っていた無精髭で一杯だった。

オン……コツ……オオ……コツ、コツ……

何者かの足音が混じる。おそらくは見回りだろう。

男は薄汚い石床に額をつけ、うずくまったまま動かなかった。

やがて、何者かが明かりを持って牢の前に現れる。

「……」

元気の残っている者は、未だ遠くから怒号を発している。

無駄なこと。

かつては自らも繰り返したその行為を、今は愚かなことだと理解していた。

手を括る鎖。そして細かい網の目のような鉄格子。この二つによって、彼らの力はその大半が封じられている。それは、ここに捕らわれている者たちの中では珍しい“上位魔”である男にとっても同じことだった。

だが、その片方だけなら。片方だけならば、全力でどうにかできるかもしれない。

手を括る鎖だけなら。目の前を閉ざす鉄格子だけならば――

見回りが牢の中を一瞥して去っていく。

――どうして、こんなことになったのだろうか？

自問するたび、男の胸は突き刺さるような痛みに襲われる。

人間と争うつもりなど微塵もなかった。ただ男は、理不尽な偶然によってこの世界に流され、それでも懸命に道を見つけ、深い山奥で自給自足の生活をしながら、愛しい家族とともに生を全うしようとしていただけだったのだ。

それなのに――

「……――」

思わず呟いたのは、最愛の者の名。それは、すでにこの世のものではない。その者は、その場で命を奪われてしまった。

――何故、自分は生き長らえたのだろうか？

そう問いかけたとき、脳裏に浮かび上がるのはもう一人の愛しい者の顔。

十五歳になり、美しく成長した娘は、男とともに生きたままこの場所に連れてこられた。

生きているだろうか。……いや、必ず生きている。

それだけが、男の精神を支えていた。

「ナターシャ……」

たった一つ。

自らに残された希望、そして使命。

手錠が赤銅色に染まっても、痛みが痺れ、感覚を失いかけても、なお。

自らの種族名すら覚えておらぬ上位魔、ニールⅡソーントンは、ただそれだけのために力を養い、正気を保っていたのだ――。

翌日の昼過ぎ。

「ねえ、ティース、聞いて聞いてー！」

「はい？」

地下二階。

いつもの場所で、いつものようにお菓子袋を抱えながら、セルマはいつも以上に上機嫌だった。ぷっくりとした頬を嬉しそうに赤く染め、両手を広げ、怪訝そうな顔をしたティースに主張したのだ。

「今夜、アレがあるのッ！」

「アレ……ですか？」

ティースは上の空だった。

本当ならばそのニュアンスで、“アレ”が指し示すものに気付くことはできただろう。だが今、彼の頭はそれ以外のこと——バラードの動向をどう察知するか、その情報をどのようにして手に入れるかということでは一杯だったのである。

（とにかく、どうにかしてあいつのいない隙を狙わないと……）

昨日のエルバートからの連絡によって、作戦の決行日が近いことは知っていた。具体的な日付は今日の定期連絡によって知らされることになっていたが、その文面のニュアンスからして、早ければ二、三日後だろうと考えている。

今まで集めた情報によると、バラードIIグラスマンはもとこの地下組織の警備ではなく、ゲノールト総帥のボディガードだった。だから、総帥がどこかに移動すればそこに付いていくし、ここにいるということもそう珍しいことではない。隙を狙うことは可能だ。

ただ、問題はそのゲノールト総帥の動向をどう察知するか、である。裏世界の大物だけあって、それは単なる一構成員であるティースに把握できるものではない。この地下での催し物に出席するときには警備が厳重になるので察することもできるが、外出する場合、その場所、時間などを察知することは非常に困難だった。

どこかに出たことを確認してから連絡したのでは遅すぎる。事前にそれを知っておく必要があった。

（こうなったら、それとなくこの子に直接聞くしかない……か）

だが、それは危険も伴う。少しでも不自然に思われ、それを周りの人間に話してもされたら終わりなのだ。

——と。

「だ・か・ら。ゲームだよ、ゲーム。前に話したでしょお？」
ハツとする。

いつまでも上の空のティースに、セルマは少々気分を害したようだった。

「あ……ゲームですね。そうですか、今夜——」

再び、胸に黒い影。

「……それは、楽しみですね」

そこに出てくるのはエルバートの仲間かもしれない。だが、現状、それを救うことは不可能に近く、それがどうしようもなくやり切れなかった。

それと……もう一つ。

「お爺様がね、ちょこっただけ教えてくれたの。今日はとっても強いのが一匹出てくるんだって。“じょういま”って言ったかな？だから、とっても楽しみなものッ」

好奇心に目を輝かせる姿。

親のいない寂しさを、様々な遊びで埋めようとする——健気。

「上位魔……そうですか……」

ただオウムのように彼女の言葉を繰り返し、ティースは力無く頷いた。

——そこにいるのは、決して極悪非道の者ではない。おそらく本来はとても素直で、明るく、子供らしい少女なのだろうと感じる。だから、やるせないし、許せない。

「それでねー」

「……」

それでも今、余計なことを考えて彼女の機嫌を損ねるわけにはいかなかった。

「そうですか……ええ、そうですね——」

複雑な心境のまま、弾んだセルマの言葉に相づちを打ち続けるティース。

そしていつものように時間が過ぎ——それから一時間ほどが経った頃だろうか。

「……？」

カードゲームで遊んでいたティースは、ふと顔を上げた。

感じたのは、周囲に走ったさざなみのようなざわめき。同時に訪れた、緊張感。

「……ティース？ どうしたの？」

セルマは気付いていないようだった。が、振り返ったティースと一瞬だけ視線を合わせたセルマの護衛二人は、やがて廊下の奥に向かって頭を垂れる。

（この……圧迫感は……）

昨日感じたものと同じ。頭の上から押さえつけられるような圧迫感。

その視線の先にやがて現れた一行。その中にいたのは、やはり予想通り――

（バードIIグラスマン……でも）

ただ、今日は少しだけ様子が違う。

（あれは――）

昨日はバードが明らかに一行のリーダーだった。しかし、今日は彼も格上の人物に付き従う存在のようだった。

それは、彼の真後ろをゆっくりと歩いてくる、正装の男性。この世界においては老人と言ってもいいだろう、おそらく五十代半ば。

白髪混じりながら厳格な顔付きは彼がまだまだ“現役”であることを物語っている。

（……ゲノールト総帥、か）

見たことはないものの、一目でわかった。その眼光は鋭く、おそらく若い頃は相当に血の気の多い人物であつたろう。

だが、

「……お爺様ッ！」

ようやくその一向に気付いたセルマが、手にしていたカードを放り投げて駆けていく。

と、老人の厳格そうな顔は一瞬にして綻んだ。

「おお、セルマ。元気にしていたか？」

「うん！」

胸に飛び込んだセルマを難なく受け止め、頬を緩ませてその頭を撫でる老人。

「……」

それはティースにとっては少し意外でもあり、そして納得でもある。

（……だから、あの子はあるなりに偏っている……）

娘に裏切られた老人が、おそらく孫娘を確実に自らの元に引き留めるために。非道の行いで財を為した老人にも、やはりそんな人間らしい感情があったのだろうか。

（でも、そんなの愛情じゃない。単なる自己満足だ……）

拳に力が入った。

老人は、それでもいい。

だが、歪められた少女にとってはそれで良いはずがなかった。

「さあ、セルマ。そろそろ離してくれんか」

「えー！」

首に抱き付いたセルマを優しく離し、老人の視線が一瞬だけティースへと向けられた。

「……」

心にモヤモヤしたものを抱えたまま、無言でかしこまる。

どうしようもない。少なくとも、今、この場でどうにかできる問題ではない。

今にも吐き出しそうな衝動に、ティースは必死で耐えていた。

「……お爺様？ 今日は何時頃迎えに来てくれるの？」

セルマの問いに、老人は再び笑顔で彼女へと向き直る。

「そうだな。少し遅くなるかもしれん……八時か、九時か。それまで待てんか？」

「ううん、平気。ティースと遊んでたらすぐだもん」

「おお、そうか。ホッとしたよ」

もう一度、老人の視線を感じた。が、特に声をかけてくるわけでもなく、

「なら、もうしばらくここにいてくれんか？ ……行くぞ」
一団の気配が離れていく。

ゆっくり顔を上げると、ちょうどバラードが最後に背を向けるところだった。

「……ティース。じゃあ続きしよっ」

セルマが戻ってくる。近くにいた彼女の護衛二人も、ほんの少し緊張が緩んだように見えた。

——と、そのときだ。

「とっ……止まれえええええっ……!!」

怒声と——轟音。

「!?!」

突然、聞こえてきた叫び声に、その場にいた全ての者が動きを止めた。

(……なんだ?)

だが、近くではない。遠く……いや、どうやら声の発生源は少し離れた場所にある階段——どうやら地下三階の方だ。

疑問に思う間もなく、怒号は立て続けに二度、三度。視界の隅で、バラードがゲノールト総帥を庇うように立つ。

続けて、もう一度轟音。

「……え? なに? どしたの?」

セルマも何が起こったのかわからないという表情で、キョロキョロと辺りを見回していた。

と、直後、

「どけっ!!」

「っ!?!」

離れていた護衛二人が、ティースを弾き飛ばすようにしてセルマの周りを囲む。

「……」

突き飛ばされて打った腰を押さえながら、ティースもまた物音に集中した。

——何かが、近付いてきている。

「セルマ。じっとしていなさい」

老人の声は、さっきまでとは打って変わり、厳しいものだ。

「……」

バラードはその前に立ったまま、微動だにしない。

（なにかが……来る）

やがて——それは現れた。

（っ……あれは——）

地下三階に続く階段のうちの一つ。ティースが臍気に覚えているマップによれば、それは三階Cブロックへの階段。キンメルの本バーを含めた人魔が多数捕らわれているであろう区画だ。

（……人魔！？）

まだ遠目で詳細まではわからない。が、階段から飛び出してきた黒い影は、尖った耳を持ち、その身に魔力を纏っていた。手首には明らかに無理矢理外したのであろう手錠の残骸が絡まっており、半裸。全身は自らのどす黒い血と埃で汚れ、ボサボサの髪と無精髭、その表情はまるで羅刹のように恐ろしい形相だった。

「っ……！」

その威圧感に、咄嗟に腰の剣に手を伸ばす——が。

（……しまった。剣は一階か……！）

彼はセルマのそばでの帯剣を許されていなかった。“細波”は一階の控え室に置いたままなのだ。

戦う術はない。……行く末を見守るしかなさそうだった。

……ダンッ！

階段を上り終えた人魔は、一瞬の躊躇の後、その視線をゲノールト総帥、そしてそのそばに立つバラードへと向ける。

怒りの声がその口をついた。

「……貴様は……っ！！」

「バラード」

対照的に、老人の冷徹な声が響く。

「あれは、なんだ？」

それに対する返答の声もやはり冷静だった。

「おそらく、一ヶ月ほど前に捕らえた上位魔でしょう。……十分に気を付けろと言ってあったのですが」

「ふむ。上位魔というと、今夜の催しに使う予定だったヤツか」

「どうなさいますか？」

「生け捕りにできるか？」

「不可能ではありませんが、手こずるかもしれませんな。もともとあの上位魔は、アレの娘をダシにどうにか連行してきたヤツですから」

「……ふむ」

老人の視線が一瞬だけセルマの方へと向けられる。

「？」

二人の護衛に囲まれた少女は、未だきよんとした顔で全く状況を把握していないようだった。

老人の視線が戻る。

「ならば構わん。……殺せ」

「はい」

鋭利な声。同時に、抜剣の音。

ジリジリと、人魔は接近してきた。後ろから追う者は、いない。おそらく、大半を無力化してここまでやってきたのだろう。

上位魔。

並の人間の太刀打ちできる相手ではなかった。

まして、

「……娘は——」

その人魔は、背負っていたのだ。憎しみ。

そして、守るべきもの。

人となんら変わることはない。そのために強くなる。そのために命を、自身の全てを賭していた。

「ナターシャは、どこにいるッ！！」
床を蹴る。

「――」

ティースはその人魔――その男の事情を、詳しく理解していたわけではない。が、男の態度とほんの僅かなその言動から、一瞬だけ、不思議と彼が背負っている“何か”が見えたような気がした。

だから。

だから――

「……かはっ……！」

男の動きが止まったとき。

まるでノコギリのようなバレードの剣が、造作もなく男の体を斜めに切り裂いたとき。

時が、止まったように感じた。

「あ――」

ゆっくりと。

ゆっくりと、崩れ落ちる。

伸ばされた手は、何かを求めて。

――娘、と言った。

男が最後に求めたのは、おそらくそれだろう。

心臓が跳ねる。

内臓がせり上がってくるような感覚。

「っ……」

胸の奥に痛みが走った。

同時に吐き気を催す。

……男は、あるいは極悪人だったのかもしれない。人間を何人も殺めた悪い魔だったのかもしれない。それすらもティースにはわからない。

だが、

「っ……っ……っ……！」

吐き気は止まらなかった。

動きを止めた男の体が、冷たい床の上に崩れ落ちて。

……ただ一つだけ、はつきりしていたこと。

「見事だ、バラード」

「恐れ入ります。やはり上位魔の場合、運ぶ際の警戒をもっと強化すべきでしょうな。滅多に捕らえられるものではありませんが」

「ふむ。そう考えると、勿体ないことだが、仕方あるまい。……バラード。代わりを早急に見繕うよう伝えてくれ」

「はい」

煮えくり返る。強く噛みしめた奥歯が微かに悲鳴をあげる。

そして改めて確信した。

たとえばあの男が善であろうと、悪であろうと――

（こいつらは……紛れもない、悪だ……ッ!!）

男の遺体は、騒ぎを聞きつけた構成員たちが手早く片付けようとしている。

拳が震えた。

誰かの視線がそれを見つめているかもしれない。が、それを理解していてなお、ティースは言い知れぬ怒りを隠しきることができなかった。

……勘の鋭い人物ならば。あるいは彼のことをじっと観察する者がいたなら、今の彼の心の中を読みとるのは簡単だっただろう。そして、何人かはそんな彼の姿を視界の端には捕らえていた。

が、それに気付いたどうかはともかく、少なくとも咎めようとする声はなく――。

――じっと見つめていた者は、ただ一人。

「？」

少女は不思議そうに、彼の形相を見上げていた。

（ティース……？）

優しく、まるで幼い頃に別れたきりの父親のようだった青年。顔

の細かいところまで覚えていたわけではなかったが、少なくとも持っている雰囲気は、少女の認識の中では父と瓜二つだった。だから少女は彼に懐き、彼と一緒にいることを望んだ。

だが、その一方で。長く一緒にいるうちに、彼には父親とどこか違うところがあると、密かにそう感じていた。同一人物ではないのだからそれは当たり前だったが、それが最近、少女にとっては少しだけ物足りない気がしていたのだ。

しかし――

「あ……」

その、どこか違っていた一欠片が、今、欠けていた部分にピタリと填ったような気がした。

「……」

彼が浮かべていたのは、見たことのない溢れるような怒りの表情。なのに、どこかで見たことがあるような気がしている。

それは――遠い昔。

(パパ……?)

いつか、彼女の父親がこれと同じ表情で、彼女の祖父を見ていたことがあった。……あるような気がした。

何故?

少女には理解できない。

そして興味が沸く。

それを知りたいと思った。近付きたいと思った。

幼い頃、自分の前から姿を消した父と母に。

「……ねえ、ティース?」

騒動は一時間もすると完全に落ち着きを見せていた。

静まり返った地下二階の休憩所は、あんな騒ぎなどなかったかのようにいつも通り。騒動の後だというのに、セルマとティースは変

わらずにその場所で折り紙をしていた。

「……はい」

ティースの気分は沈んだまま。

いけない。このままじゃいけないと思いながらも、いつものように笑顔を浮かべることができなかった。先ほどの人魔の形相が脳裏をちらついて顔が強張ってしまうのだ。

（ダメだ、このままじゃ……）

幸いだったのは、相変わらず遠くで見つめているセルマの護衛二人が、彼から見て背中の方に居たことだろう。少なくとも表情を見られることはないし、声も少し潜めれば届くことはない。

だが、しかし。

突然セルマから浴びせかけられた質問は、そんな彼をハッとさせるに充分なものだった。

「ティースは、どうして怒ってんの？」

「……え？」

ドキッとして顔を上げ、戸惑う。

……誰かに指摘される危険は感じていた。が、それがまさか、この少女だとは想像していなかったのだ。

（……まずい……笑わないと——）

ようやく浮かべたのは引きつった笑み。

「セルマ様——」

だが、さらなる戸惑いが、その言葉を途中で遮った。

（……え？）

驚きに目を見開いて少女を見つめる。

——そこにいる少女は、いつもと少しだけ違っていた。

常に手にしていたお菓子袋は遠くに置いたまま。彼の前では常に緩んでいたまん丸のほっぺも、今は引き締まっている。

その瞳は、ただひたすら真っ直ぐに——

「ティースが怒っているのは、お爺様のせい？」

「！」

さらに核心へ。

心臓が跳ね上がり、背中に冷や汗が浮いた。咄嗟に背後の気配を探ったが、幸い動きは感じられない。セルマの言葉はいつもと違い落ち着いたもので、護衛たちにはその内容まで聞き取れていないのだろう。

今なら、まだ誤魔化せる。

ティースはそう思い、口を開いた。

「怒ってなど――」

だが、それもまた、すぐに遮られる。

「パパもね」

「……？」

「パパも怒っていたことがあるの。今のティースとそっくり」

「……え――？」

「でも、どうして怒ってんのか、私にはわかんなかった。……ねえ、教えて？ ティースはどうして怒ってんの？ 私……それが、どうしても知りたいの」

無邪気な、しかし真剣な問いかけ。

「――」

自分を見つめる少女の瞳に、まるで心臓が鷲掴みにされたような、そんな錯覚を覚えた。

言葉に詰まる。

（あ……）

“疑問”

それはおそらく、遙か昔から少女の心に根付いていたものだ。今まで芽吹くことすらなかった、ほんの小さな種。それは人として、当然に感じるはずのもの。

「パパはどうして怒ってたの？ ティースは、どうして怒ったの？」

問いかける、瞳。

「……」

すぐには答えられなかった。

今の彼はゲノールトの構成員だ。当然、その総帥である人物の行動に怒りを感じるなど、あってはならない。

「セルマ様。それは——」

誤魔化さなくてはならない。自分は怒ってなどいないと。それは勘違いだ。もしバレてしまえば、今までの努力が全てが水の泡となってしまう。いや、それどころか彼自身の命さえ危険にさらされかねない。

だが。

言いかけて、再び、心臓が鷲掴みにされる。

——本当に、それでいいのか、と。

自分にはどうすることもできないと、そう思った。他人の歩む道。その進路を変えることは非常に難しいことだ。まして、少女はすでに両足をどつぷりと浸からせてしまっていたのだから。

だが……今、少女は紛れもない疑問を抱いた。

否定することはおそらく簡単。それがもっとも無難で、もっとも失敗の少ない道だろう。何しろ、少女に道を指し示す行為は、この地下で助けを求める罪なき者たちの将来を奪ってしまうことにも繋がりがねないのだ。

しかし。それは同時に、少女の中に芽生えたものを潰してしまうことでもある。年齢的にも、根本的な変化を受け入れるにはもうギリギリの境界線上だ。この異常な環境の中で、踏みつぶされたものが再び芽吹くことは、おそらく二度とないだろう。

ほんの一瞬の、葛藤。

そして——

(っ……ダメ、だ……！)

賭けられない。

……それが、彼の出した結論だった。

微かな、エゴにも近い小さな希望と、囚われた数多くの命。その二つはとも天秤にかけられるようなものではない。

たとえばそれが、少女の僅かな可能性を奪ってしまう選択だったと

しても――

「……怒ってなど……いませんよ、セルマ様」

絞り出すように答えたティースに、セルマは不思議そうな顔をした。

「? そうなの?」

その表情は彼の言葉を疑っている風ではない。今の彼女は、彼の言葉を全て信用するだろうから。

続けて、答える。

「ちよつと、気分が悪かっただけですから……」

その言葉に、やはり疑った様子もなく、セルマはパツと顔を輝かせた。

「なんだあ。……じゃあ、パパもあのととき、たまたま気分が悪かっただけなのかな?」

「……胸が」

問いには答えず、ティースはさらに続けた。

「胸が……苦しくなるのです」

その言葉に、セルマはきよとした顔をする。

「? 何かの病気なの?」

「いいえ」

まぶたが小刻みに痙攣する。

表情は苦しいまま。

「人の胸は……他人の痛みを感じられるように出来ているのです、セルマ様」

「他人の……痛み……?」

わからない顔だった。

「だから――だから、胸が苦しくなったのです……」

唇をギュツと噛む。胸をグツと掴んだ。

――それが、精一杯の言葉。それ以上は、踏み込めない。

だが、それが言葉足らずなのは、充分に理解していて――

「……良く、わかんないけど、でも、怒ってたんじゃないんなら、

「いや」

案の定、セルマは理解できないままにそれを投げ出してしまう。興味をなくしたように視線が彷徨い、近くにあったお菓子袋を手取る。

それで、ほんの一瞬の“予兆”は、完全に彼女の元を去ってしまった。

「じゃあ、あそぼっ。折り紙の続きねー」

「……」

落胆がないといえば、嘘だろう。だが、もうそれ以上の言葉は思いつかばなかった。

そしてすぐに気持ちを切り替えなければならない。作戦の成功のために。

「折り紙、ですね……」

努めて冷静に、出来る限り明るく、ティースはそばにある折り紙を手を取った。

……仕方がない。それに――たとえ彼女の意識を変えることに成功したとしても、それが必ずしも彼女のためになるとは限らないのだから。

そう思いこませることで自分を慰め、そしてティースは口を開いた。

「……では、セルマ様。次は何を――」

「あれっ？」

言いかけた彼を遮って、セルマが突然素っ頓狂な声を上げる。

「ティース……手、怪我してるよ!？」

「……え? あ」

言われて初めて気付く。どうやら先ほどの騒動の際、拳を強く握りすぎて爪が皮膚を傷つけていたらしい。半分以上乾いた血の跡が手の平に残っていた。

セルマは眉をひそめて、

「痛い? 大丈夫?」

ティースは笑って答えた。

「大丈夫です。大したことはないですから」

「でも、痛そう……血が出るとね。すっごく痛いんだよっ」

その表情は、まるで自分のことのようにだった。おそらく昔、自分が怪我したときのことを思い出しているのだろう。

「ええ。でも、ほら。もう血は止まっていますから」

「……」

彼が示した手の平を、セルマは恐る恐るという顔で見つめ、それを確認するとホッと息を吐くと、

「ホントだ。……じゃあ、もう遊んでも大丈夫……なの？」

そう尋ねてくる。

その遠慮がちな仕草が妙に可愛らしくて、ティースは思わず頬を緩めた。

「ええ」

「じゃあ……折り紙っ！」

「はい」

セルマはどうやら紙飛行機がお気に入りのように、色々な種類の紙飛行機の作り方をせがんだ。とはいえ、ティースもそれほど多くを知っているわけでもなく、最近では本を買ってきてそれを二人で見ながらの作業であった。

「えっと……こう、かなあ……？」

「違いますよ、セルマ様。ここはきつと、こう……こう、です」

「……あ、そっか！」

ここに来てから一週間が経とうとしていて、彼女が他の場所で見せる傍若無人さも何度か目にもすることもあった。が、それでも相変わらず、彼の前では素直な少女だった。

だから……やはり残念なのである。

（環境さえ変われば、きつと――）

そして、そんな中。

「……あ、そうだ！ あかね、あかねー！」

突然、セルマが嬉々として漏らした一言。

「明後日ね。お出掛けなんだっ！」

「お出掛け？」

「うん！ お爺様と一緒にお出掛け！」

「……！」

ドクン、と、心臓が跳ね上がる。

……期せずして訪れた機会。彼の方から尋ねたのでなければ、ここで聞き返すことは、もちろん何ら不自然ではあるまい。

平常心を保つよう努力しつつ、ティースは口を開いた。

「どこに……ですか？」

「徒手のトーナメントがあるのっ！」

「トーナメント？」

一瞬、彼女がいつも語っていた地下での催しを想像してしまったが、わざわざ彼女が出掛けると言っている以上、それはおそらく“表の”ごくまともなトーナメントのことだと気付く。

“トーナメント”は、一般市民から上流階級の人々までもがほぼ等しく楽しめる娯楽の一つだった。昔はそれぞれの国家に所属する騎士たちが名誉と賞金を争う場だったが、今は一種のショー的なイベントのことで、徒手、剣、馬上槍など、さまざまなスタイルが存在している。

ただ、もちろん参加する人々は真剣だ。昔と違って死人が出るようなことはほとんどないが、興行主が抱える強者に、街の腕自慢などが参加し、真剣勝負で賞金を争う。観客は入場料を払い、ひいきの選手に声援を送りながら試合を楽しむのだ。

「トーナメント、ですか……」

このゲノールトの地下で行われる催しは別にしても、彼女は元来そういったものを好む性格なのだろう。

（と、すると……上手くいけば——）

このリガビュールの街でトーナメントが行われる場所といえば、西側にある闘技場しかなかった。距離は結構ある。馬で移動したと

しても町中のこと。スムーズでもおそらく一時間はかかるだろう。

「お昼頃から、ですね？」

「うん」

いくらこの街でも、一般的な催しである以上、そう遅くに試合が行われるはずはない。時間はおそらく正午から夕方にかけてだ。

「明後日は予選でその次の日が決勝なんだけど、レオニードⅡアンサルクが出るから予選から見に行くの！」

「レオニード……アンサルク……？」

「ティース、知らないの？ すっごく強いんだから！」

どうやら徒手の有名な選手のようなのだ。ティースは知らないが、それが彼女のひいきする選手らしい。

が、そんなことよりも。

（明後日……か）

ティースにとって重要だったのは、彼女とともにゲノールト総帥が出掛けるいうことだった。となれば、その護衛であるバラードももちろんついていく。闘技場は多くの人が出入りする場所、それだけ危険も多くなるだけに、ついていけないはずがないのだ。

……たとえばこっちで異常が発生し、知らせがバラードの元に届くまでに一時間。ただ、届いたとしてもすぐにゲノールト総帥のそばを離れるわけにはいかないだろう。移動時間も含め、三時間ほどは猶予があると見ていい。

三時間。脱出ルート確保などの問題もあるし、決して楽観できる時間ではないが不可能ではない。なにより、捕らわれているのは“魔”なのだ。一度解放されてしまえば、いくらゲノールトとはいえそう容易に収拾できないはずで、バラードが戻ってくる前に混乱に乗じて脱出することはおそらく可能だった。

（……これしかない……）

幸運、偶然にも転がり込んできた情報。

（これしか――）

そうして、ティースは決意を固めるのだった。

オオオオオオオツ！

重々しく、禍々しい歓声。

「明後日のトーナメント、すっごく楽しみっ！」

「そうかそうか」

ゲノールトの地下四階。そこで催されるイベントは本日も盛況だった。

今日起きた“不測の事態”もそれほどの悪影響を与えることはなく。

「あーあ、早く明後日にならないかなあ」

セルマはいつものように祖父であるゲノールト総帥の隣で、お菓子の袋を片手にしていた。が、今日はトーナメントの方に気が移っているのか、いつもほど試合に集中していない。

そして――四角いリングの上。たいまつに照らされたその場所には、やはり半裸の男がいた。体はほぼ無傷、五体満足の状態で、足下には地の七十三族と呼ばれる大型獣魔の死体が転がっている。

「……二匹目！」

野太い男の声が響いて、二匹目の獣が檻の中に放たれた。

もう一度、歓声。

「ところでセルマ。今回はどこに賭けたんだね？」

「え？」

祖父の声で、少女の意識がようやくリング上へと戻る。

「あ、えっとねえ……八匹目だよ」

「……セルマ」

その返答に、祖父は苦笑して、

「せっかく今度のは弱いと教えてあげたのに、それでは意味がない

じゃないか」

「だって、弱いのが嫌いなんだもん」

口を尖らせて答えるセルマ。

そこへ、すぐそばのバードが薄い笑みで口を挟んだ。

「ま、よいではないですか。賭事は何が起こるかわからないから楽しい。それに一匹目はまぐれとはいえあのようにならないうけで退けたのですから、万が一がないとも言切れませんよ」

「それはそうだがの」

だが、リング上で繰り広げられる戦いは、徐々にその“万が一”を否定する方向へと進み始めた。

手錠を填められたまま消極的な戦いを見せていた人魔はやがて、地の六十六族——ワニのような体躯の獣魔が皮膚から突き出した一メートル近い針に、その身体を捕らえられたのだ。

パツ、と。

人魔の脇腹から血が飛び散る。

……その、瞬間。

「あ」

セルマは何か魅入られたようにその光景を見つめた。
焼き付いた。

「あ——」

薄暗い、四角いリング上に飛び散った、赤い飛沫。

赤い——赤い、血。

「……いたっ」

ハッとして、セルマは自分の手を見つめる。

手の平は、何ともない。

……胸がドキドキした。

興奮？

いや、違う。

(……あれ……?)

妙な悪寒が少女の体を覆っていた。

(なんだろ、これ……)

リング上。

もともと戦いに適した者ではなく、長い牢での生活がその体力も奪っていたのだろう。一撃を受けたところで、人魔は完全に戦意を喪失しているようだった。

二匹目にベットした人々は熱狂的な歓声をあげ、四角いリング上を見つめている。

そして再び、リング上に飛び散る鮮血。

「っ！」

もう一度、心臓が破れんばかりの鼓動を打ち、セルマは息を呑んで視線を落とした。

体がぶるっと震えた。

「? どうした、セルマ？」

祖父の心配そうな声。隣のバラードも、眉をひそめて突然の変化を怪訝そうに見つめていた。

だが、今の彼女には届かない。

(なんで……?)

今まで、気付かなかった。

『……血が出るとね。すつごく痛いんだよ』

昼間、自ら語ったその言葉が脳裏に蘇る。

同時に蘇ったのは――彼女の世話をする青年の手の平に残っていた血の跡。

赤い、血の色。

痛い。――痛い。とてつもなく。

(おかしいよ……なんで……なんで血が出てるのお……っ!?)

気付かなかった。

今までは、そんな簡単なことにも気付かなかったのだ。

ゆっくりと、視線を上げる。

リング上。

脇腹、右肩、両太股を突かれ、血を流し、苦痛にリング上をのたうち回る人魔。

——苦悶の表情が、フラッシュのように網膜に焼き付いた。

「っ!!?」

ガタンッ!

「……セルマ?」

「あ……あ……あぁっ!!」

両肩を抱え、セルマは震えながらその場にうずくまった。

祖父の疑問の声を掻き消すように、どす黒い大歓声が会場を震わせる。

(なんで……なんで——ッ!?)

震えが止まらない。心臓は胸を突き破らんばかりだ。

吐き気がせり上がってくる。頭がガンガンする。

……オオオオオオオッ!

「っ!」

耳を塞ぐ。

(気持ち……悪い……)

リング上から響いたのは、おそらく試合の終了を告げる、断末魔の叫び声。

そして、歓声。

オオオオオオオッ!

「気持ち……悪いよお……」

「セルマっ!」

少女の体が椅子から崩れ落ちるのを見て、祖父は自らそれを抱き留めて叫んだ。

「おい、誰かつ!!」

そばにいた数人が慌ててセルマの体を支え、医務室へ運ばんと抱きかかえる。

「おめでとうございますッ!!」

場違いな実況が会場に響き渡った。

熱狂は、止まらない。

(……助けて……)

薄暗い会場。

異常な熱に覆われた空間。

見慣れたはずの場所。なのに、まるで見覚えのない別世界のような、その天井を薄目で見上げ、朦朧としていく意識の中――。

(助けて……ティース……助けて――……)

「――四匹目！」

セルマが退出した後も催しは続いている。

「……調子の悪そうな素振りなど、なかったのだがな」

医務室からの“ 大事な ” という報告にひとまず胸をなで下ろし、老人は隣のバラードに疑問の声を向けていた。

「直前まで、明後日のことをあれだけ楽しそうに話していたというのに」

「……ですな」

バラードはただそう答え、リング上の戦いを見つめていた。

いつもと変わらない、彼にとっては退屈なことこの上ない殺し合い。

「まだ子供ですからな。体の調子が悪くとも、無理をしてしまうところがあるのでしょ」

「ふむ。ま、少々無鉄砲に育てすぎたところもあるか」

「……」

バラードは無言のまま、相変わらぬ鋭利な目付きで無表情にリングを眺めている。

ほんの僅かな“ 疑惑 ” が、その脳裏を過ぎっていた――

その4『救出作戦』

二日後の朝。

朝と言ってもすでに日の短いこの時期、まだ日の出は訪れておらず、地下を照らす“陽カビ”もまだほんのりとししか発光していない時間。

午前五時半。

「おい」

ゲノールトの地下は魔界由来の素材によって建設されており、たとえ冬でも内部の気温はそれほど下がらない。とはいえ、外が非常に冷え込んだこの日、地上に近い場所はさすがにそれなりの寒さだった。

「おーい」

娼牢。

牢の中には十代前半ぐらいの少女がいる。ナチュラルにカールした微かに内巻きの髪。幼げなその瞳は相変わらず無言のまま床を見つめていた。

「おーい、エルちゃん」

「なんだ、その“エルちゃん”ってのは？」

この日、交代で娼牢の見張りについたのは、片方はいつもと同じ顔。だがもう片方は二十台後半、年齢の割に頭髮は薄く、どこか薄気味の悪い笑みを常に浮かべた男だった。

「なんだあ。ホントに喋らないんだなあ」

「おいって！」

「……ん？」

語気を強めると、ようやく振り返る。

「なんなんだ、お前が呼んでるその名前」

「名前？ ああ」

男は少しはげ上がった前頭部を撫でながら答えた。

「お前、知らなかったのか。この子の名前さ。エルレーン、っていうらしいぞ」

「……は？ そうなのか？ 一言も喋らねえって聞いてたから、わかんねえもんだと思ってたけどな」

「捕まったときに自分の名前だけ答えたらしいな。……おい、エルちゃーん。こっち向いてー」

少女は動かない。

「おい」

……かと、思いきや、

「お」

少女は突然ゆっくりと、何かを思い出したかのように顔を上げた。

「ようやくお兄さんと喋る気になったのかい？」

やや気味の悪い笑顔を浮かべたままの男を、少女はじっと見つめた。嫌悪感を浮かべるでもなく、かといって笑顔でもなく、無表情というわけでもない。

ただ世間話をするかのように口を開いた。

「今日は、何日？」

それは、彼女がこの牢に入ってから初めてのことだった。外見と同じく幼さを残した声に、もう一人の男が驚いた顔をする。

「お……おい！ 喋ったぞ！！」

「うるさいなあ、お前は。俺だから喋ったんだっての。……で、今日の日付かい？ 今日は二十四日だよ？」

「お、おい、余計なことは――」

「いいだろ、日付ぐらい。減るもんじゃなし」

「二十四日……もう、そんなに」

少女は視線を天井に彷徨わせ、思案していた。その表情は今までと違い、どこか困惑しているように見える。

そして再び、男たちへ視線を向けると、

「……いつになったら、ココを出してくれるの？」

「え？ ……難しい質問だなあ」

男がそう言って返答を思案しているうちに、もう一人の男が答えた。

「んなもん俺らが知るかよ。買い手のメドがついたらに決まってるだろ」

「……」

その返答に、少女は明らかに落胆したような表情を見せ、再び何事か考え込むように視線を床に落とした。

「おい、そんな投げやりな言い方ないだろ。……なあ、エルちゃん。がっかりしないでさ、もっとお兄さんとお喋りしようよー」

「……」

だが、少女――エルレーンが二度と顔を上げることはなかった。

「え？ 体調が悪かったって？」

「ああ。そうらしいぜ」

早めの朝食を終え、前日に引き続き一階の警備任務についていたティースは、先輩のペドロから、昨日姿を見せなかったセルマについて話を耳にしていた。

「なんか一昨日の夜ぐらいから調子悪かったらしくてな。昨日は三階Aブロックのビップルームで休んでたらしいぞ」

「そっか。それで昨日は来なかったのか……」

少々不安を感じていたティースは、その事実にはホッと胸をなで下ろす。

「ははは。一日でも解放されてラッキーだったなあ」

安堵のため息を、ペドロはどうやら違う意味に取ったようだ。

「けど、もう完全に回復したらしいから今日は来るだろうな。……ま、ガンバレよ」

意地の悪い笑みを浮かべて肩を叩くペドロ。

だが、ティースは今日も彼女が来ないことを知っていた。

(……あれだけ楽しみにしてたんだ。体調が戻ったなら間違いない
行くはず)

一時はどうなることかと思ったが、これなら予定通りに進みそう
だった。

そして、ふと、

(でも、これでもう、あの子に会うことはないんだな……)
多少の名残惜しさがその胸を過ぎる。

……赤いドレス。まん丸にしたリング色のほっぺ。いつも片手に
携えていたお菓子袋と、無邪気に懐いてくる仕草。あのセルマとい
う少女は、少なくとも彼にとっては、自分を慕ってくれる可愛らし
い子供だった。

(結局、何もしてやれなかったけど……仕方ない、か)

それに微かに抱いていた危惧――“巻き添え”にしてしまう可能
性がほとんどなくなつて、安堵もしている。それだけは、避けなけ
ればならないと思っていたのだ。

「おっす」

「？」

突然隣で聞こえた声にティースは顔をあげた。が、それはペドロ
が他の同僚に声を掛けたものだったようだ。二人組の男がペドロに
挨拶を返しながらか、近くの階段――“娼牢”へと続く階段を下りて
いく。

(そういえば……)

ふと、ティースの脳裏に数日前の少女の姿が蘇った。

「ペドロさん。その牢つて、まだ人がいますよね？」

「ああ。……人、じゃねえけどな」

ペドロは笑いながら揚げ足を取ると、

「あと数日だつて話さ。こないだ初めて目にする機会があつたんだ
が、なかなかのもんだつたぜ。十年後だったら、俺が引き取りたい
ね」

無言のティースに、付け加える。

「ま、そんな金、どこにもないけどな」

「……」

それでもティースは無言だった。

（エルに似てた、子……）

脳裏にその姿が蘇る。

（エルと、絶対に何か関係があるはずだ……）

結局、その少女についてエルバートに尋ねることはなかった。が、日を増す毎に、疑惑は膨れ上がってくる。

「……」

すでに記憶したその牢の位置を、もう一度脳裏に焼き付けた。どんな状況であろうと、あの少女はきっと助けてやろう、と、そう心に誓って。

それとほぼ同時刻。

「ただいまあ。ふう」

熱い息を吐きながら隠れ家へ戻ってきたネイルは、微かに頬を赤く染めていた。

「……ネイル？ お前、どこ行ってたんだ？」

僅かに硬い口調で問いかけたのは、部屋の隅で薄い布をかぶっているエルバートだ。

その吐く息はやや白い。今日はかなり気温が下がっているため、特殊な設備によって微かな暖房が効いているこの地下室も、気温は確実に一桁だった。

はしごを下りてきたネイルは、濡れている髪をタオルで拭きながら答える。

「水浴びだよ」

「みっ……水浴びい！？」

素っ頓狂な声をあげるエルバート。

付近にこの時間から使える温水施設などない。とすると、文字通りどこかで水を浴びてきたということなのだろう。

「うん、さっぱりした。チビちゃんも行ってきたら？」

「よせよ……こんな日にそんなことしたら、確実に風邪ひいちゃうぞ。大事な作戦当日だったのに」

ネイルはきよとした顔をして、

「風邪？」

「エルバート」

そこへ、エルバートと同じように布をかぶり目を閉じていたリュ―ゼットが口を開く。

「馬鹿は風邪を引かない、という言葉が、人間の世界にはある」

「あ……ああ」

「？」

思わず同意してしまったエルバートだったが、幸い、ネイルには聞こえてなかったようだ。

ネイルはタオルを無造作に放ると、ブルブルと頭を振って、

「さて、と。そろそろ乾かそつと」

言った途端。

「うわっ」

魔力が溢れる。全身に炎のようなものが揺らめくと、直後、熱風が室内を支配した。一瞬だけ息苦しくなったが、それはすぐにおさまって、

「完了」

ネイルの長い髪はアツという間に乾ききり、何故か特徴的な触覚型の前髪までもが再現されていた。

「便利……ってか、どうなってんだ、それ……」

「え？ これ？」

ネイルが首を傾げると、ピコピコと触覚が動く。……実際は頭の動きに合わせて揺れているだけなのだろうが、自分の意志で動いているように思えて仕方なかった。

「瞬間乾燥。私の必殺技の一つだよ」

「……」

便利は便利だが、戦いにはあまり役に立たない必殺技である。

「でもお前、そんな一瞬で乾燥させるだけの力があるんなら、もっと上手く使えば結構——」

「あ、ダメだよ」

ネイルは無邪気に笑い、頭を指さして答えた。

「私、自分の力で出来るのはこれだけだから」

「……」

脱力。

使えねえ……と、エルバートが思ったのは間違いないだろう。

「それはともかく」

リューゼットがゆっくりと身を起こし片膝をつく。相変わらず生真面目、ネイルとは対照的にほとんど動かない表情をエルバートに向けて、

「作戦は予定通りでいいのだな？」

「あ、ああ……少し気になることもあるけどな」

寒さに少し身を震わせ、懷から紙切れ——昨日のティースからの最終連絡を手取る。

「昨日は例の娘が姿を見せなかったらしい。……もしかしたら、何かあったのかもしれない。ティースのヤツも少し懸念しているみたいだ」

「例の娘？ 総帥の孫娘とかいう者のことか？」

「ああ。だから——」

「どうでもいいじゃん、そんなの」

そこへネイルが口を挟む。

いつの間にか手にしていたのは、一面が九つに分かれたカラフルな立方体。どうやら面を回転させて色を合わせていくおもちゃのようだ。

「どうせ時間ないんでしょ。考えても仕方ないし」

「……ま、それもそうだけどさ」

ネイル自身はいつものように適当に答えたのだろうが、それは確かに一理あった。もともとバラードの動向が掴めなくとも動くつもりだったのだ。ダメで元々。ゲノールトに捕らわれている仲間たちの安否を考えれば、これ以上の作戦延長は考えられない。

「じゃあ、作戦は予定通りだ。……二人とも頼むぞ」

「ああ」

「ううううん」

見た目に派手な炎の力を持つネイルと、大柄でいかにも目立つリューゼットが陽動。小柄ですばしっこいエルバートが侵入し、中で待つティースとともに混乱に乗じて仲間たちを救出する、単純な陽動作戦だ。

中に侵入するエルバートはもちろんのこと、陽動するネイルやリューゼットにも相応の危険が伴う。何しろ、仲間が救出されるまでの間、ゲノールトの構成員たちをたった二人で相手しなくてはならないのだ。いくら人魔とはいえ、下位魔であれば容易ならざる行為だろう。

――だが。

「ん~~~~~難しいよ~~~~~」

カチャカチャカチャカチャ。

「……」

二人はいつも以上に、いつも通りである。下手をすれば命を落としかねない作戦だというのにも関わらず。

「……ホント羨ましいよ、まったく」

苦笑を浮かべたエルバートは大きく息を吐き、それでもどこか頼もしそうにその二人を眺めていた。

救出作戦が実行に移されたのは、正午を過ぎた頃。正確に言えば十二時三十二分。

ちょうど、リガビュール西の闘技場でトーナメント開催の花火が上がった頃である。

火蓋を切ったのは、派手な爆発音と、熱風。

そして――悲鳴。

ネイルⅡメドラⅡクルティウスの放つ“炎の魔力”が、突破口を開いていた。

そして地下二階。

頭の上で轟音が鳴り響くたび、パラパラと粉のようなものが降ってくる。

「急げッ！ これ以上の侵入を許すなっ！！」

二階にいた構成員たちが武器を片手に、こぞって一階を目指し駆けていく。

そんな中。

「……また、派手にやってるな」

とある一室。食料品の保管してある倉庫の扉を僅かに開き、そこから小柄な少年が顔を覗かせていた。

「行ったか？」

その後ろにもう一人。少年より三十センチは背の高い青年が、上から同じように顔を覗かせた。

ティースと、すでに潜入を果たしていたエルバートである。

「ああ、どうやら行ったらしい」

キィ……とドアを軋ませ、二人の体がそこから現れる。ティースはもちろんのこと、エルバートも調達したばかりのゲノールトの制服に身を包んでいた。

そうしてエルバートはもう一度周囲の状況を確認すると、

「よし。じゃありューゼットとネイルが粘っているうちに、急ごう」

駆け出す。

作戦はどうやら順調に進んでいるようだ。何より、ネイルとリュ―ゼットの奮闘は予想以上で、地下二階にいた構成員たちは大半がその姿を消した。三階からかなりの数が上に向かったようで、おそらく三階の各ブロックの警備も相当薄くなっているはずである。

途中、ティースはエルバートに疑問を向けた。

「エル……一階に捕まってる子は、いいのか？」

すでに素通りしてきた地下一階の娼牢。ティースはもちろん、先にそこを解放してから地下三階だとばかり思っていた。

だが、

「一階？ ……ああ」

エルバートは一瞬思案するように目を細めたものの、迷うことなく答えた。

「今、一階に捕らわれているのは一人だけなんだろう？ だったらそれよりも、三階に捕らわれている大量の仲間たちが優先だ」

「けど、あの一階に捕らわれてる子は――」

――お前の関係者じゃないのか、と、そう問いかけようとしたティースに、エルバートはきっぱりと答えた。

「もちろん、彼女も最後に必ず助けるさ」

「……そうだな」

それ以上は問いかけることなく、そのまま無人の通路を駆け抜けていく。

目指すは三階Cブロックへの階段。

ここまでは、おそらく気付かれていない。途中、幾人かの構成員とすれ違って声をかけられたが、向こうも彼らに疑問を抱いて深く問い質すほどの余裕はないようで、誤魔化すのは比較的楽だった。

（問題は三階、だな）

六つのブロックに分かれた地下三階は、魔を捕らえておく牢の他、要人たちのビップルームや金庫、大きな武器庫等もあり、地下二階までとは重要性が段違いだ。この騒ぎでいくら手薄になっていると

はいえある程度の警備は残っているはずだし、そう簡単には通れないだろう。

とはいえ、

「けど、正直ここまでスムーズにいくとは思わなかった」

エルバートの表情は早くも達成感らしきものに満ちていた。確かに、ここまで順調に来れたことは信じられないほどの幸運だった。

「お前のおかげだよ、ティース。俺たちだけじゃ、この地下組織の構造を把握するのも難しかった」

「……感謝するのはまだ早いよ、エル」

だが、対照的にティースの表情は引き締まったままだ。

確かに、ここまでは怖くなるほど順調に来ている。が、このまま全てが上手くいくとは到底思えない。油断はできなかった。

それに――

（……なんだろう）

目指す三階への階段が近づくにつれ、不思議な感覚がティースの胸を襲っていたのだ。

（この、嫌な感覚――）

予感、とでもいえるのか。

何故か、黒い不安が拭い去れない。何か悪いことが起きるような、そんな予感。

「……ティース、あれか？」

やや興奮気味のエルバートの声に、現実に戻される。

「あ、ああ」

見えてきた階段。それこそが、三階Cブロックへ続く唯一の階段だった。その先に、エルバートの仲間たちが捕らわれているはずである。

「……ようし！」

小柄なエルバートの足が心なしか加速する。

だが――その瞬間。

（……っ！？）

ぞくつと。

得体の知れない不安が、明らかな悪寒となってティースの背筋を襲った。背中を、一筋の冷たい汗が流れる。廊下の空気が妙にヒンヤリする。

（これは——っ!?!）

その、感覚。

覚えがあった。

「……エルっ!?!」

咄嗟にティースは叫んだ。

進む先。

Cブロックへ続く階段。

その少し手前にある、路地のような曲がり角。

——そこから放たれていたのは、覚えのある圧迫感。

「エル! 止まれええええっ!?!」

「え?」

ティースが床を蹴り、細波に手をかけたのと、ほぼ同時。

「!?!」

エルバートもまた、それに気付いた。

強烈な殺意が、そこから飛び出してきたのだ。

「……エル——!?!」

少し時間は遡って、地下一階。

「ルルルルバルちゃん、バルチャーん♪」

奇妙な歌を歌いながら、ネイルの小さな体からいくつもの炎の固まりらしきものが放たれる。それは集まってきたゲノールト構成員たちを吹き飛ばし、怯ませ、混乱させるのに充分すぎるものだった。

「くっ……ひ、怯むなあっ!?!」

どうやら地下一階の警備責任者らしき男が必死に叫ぶ。が、もと

もこの一階の警備をしている者たちは、魔を相手にすることなど想定していない。低級な獣魔ぐらいはどうか退けられるにしろ、相手が人魔、しかも二人となれば完全に話は別だった。

轟音。

「思ったより楽だねえ、リユーちゃん」

その隣に立つのは彼女のパートナー、リユーゼットⅡカサードウグラスだ。

「ネイル。もう少しセーブしておけ」

その場に腕を組んで仁王立ちしたまま、戦況を見つめている。

彼はティースからの情報によって、ゲノールトに警報システムが完備されていることを知っていた。そのうち、もっと深いところから手練れの構成員たちが出てくるであろうことは想像に難くない。だが、

「でも、リユーちゃんってさあ」

話を聞いていないのか、聞こえないフリをしているのか。話をしながらも、ネイルの攻撃は少しも緩む気配を見せず、

「バ……バ……バなんとかってのと戦いたかったんじゃないの？」

「バラードだ」

「あ、そーそー。それ」

リユーゼットはそれには答えず、やはり戦況を見つめていた。

ネイルの放つ攻撃は、陽動としては充分すぎるものである。いや、それどころか、少しずつ敵を押し込んでいた。

「……妙だな」

「え？」

「抵抗が弱すぎる」

「？」

ネイルはわからない顔だった。が、確かにリユーゼットの言うとおり。いつまで経っても敵の抵抗が強まる気配はなく、ゲノールトとしては、あまりにお粗末な守備と言わざるを得なかった。

「随分と諦めが早い……後ろに何かあると見るべきか……」

と、そのとき。

「ちいいっ!!!」

一人の構成員が、ネイルの放つ炎の弾幕をかくぐってきた。どうやら手練れの者らしい。明らかに他とは違う練達した動きを見せ、どうやら破魔具らしき二刀を携えて、真っ直ぐにネイルへと向かってくる。

「……あれ」

「くらえええええっ!!!」

話と攻撃に夢中だったネイルは、その接近にまるで気付いていなかった。

全くの、無防備。

だが、

「な——っ!?!」

瞬きほどの一瞬。

その間に、リューゼットの巨躯がネイルと男の間に割り込んでいた。

手にしていたのは、光の魔力で形作られた武器。男の持つ武器と同じ長さ、同じ形の二刀——

「去れ——刻苦足りぬ者よ」

「っ——!!」

片方の剣が男の二本の剣を弾き飛ばし、そしてもう片方が男の体を切り裂く。

「……かはっ」

一撃だった。

誰がどう見ても致命傷。

「ネイル」

男が倒れるとともに手の中の剣が姿を消し、リューゼットは言った。

「私は奥へ行く。もしかすると、謀られた……いや、謀られたというほどでなくとも、こちらも不安が的中したのかもしれない」

「あ、そーなの。たばかったんだあ」

噛み合ってるのか噛み合っていないのかよくわからないやり取り。ネイルはおそらく、いや間違はなく、理解していないだろう。

リユーゼットは気にせずそのまま続けて、

「もし、私が死んだら――」

淡々とした口調でそう言った。

「あとは全て、貴様の好きにするがいい」

「うん、わかった」

まるで重々しさのない、だが、それについては二人の間で暗黙の了解でもあるのか、ごくスムーズな会話だった。

「それと」

去り際、リユーゼットは振り返り、目を細めると、

「さっきも言ったが、必要以上にやりすぎるな。貴様も高等生物の端くれなら、少しは加減とか配分というものを覚えろ」

「うん、わかった」

ドオオオオオン！

「……」

それ以上は何も言わず、リユーゼットは襲いかかる構成員たちを打ち払いながら地下二階への階段を目指すのだった。

どちらかの反応があとコンマ五秒遅れていたら、エルバートの命はなかっただろう。

「――あああああっ！！」

バックステップを踏んだエルバートの身体と入れ替わりに、ティースの繰り出した一太刀が、路地から飛び出してきた影の剣筋を遮る。

重なり合う、金属音。

「っ！！」

手を襲ったのは強烈な痺れだった。微かに剣を弾かれたが、敵もおそらく不十分な体勢からの一撃だったのだろう。追撃はなく、何とか距離を置いて体勢を立て直すことができた。

かかをと鳴らし、細波を正眼に構える。飛び出してきた影もまた、無形の構えで二人を見据えた。

「……な——!?」

背後でエルバートの驚愕の声が上がる。

「こいつは……っ!!?」

だが、ティースは確認するまでもなくその正体を感じ取っていた。それはどこか、予感していた通りのもの。

「……バラードⅡグラスマン——」

「ほう、やはりお前だったか」

短く刈り揃えた髪、鋭い眼光、圧倒的な威圧感。そこにいたのは紛れもなく、ゲノールト総帥の護衛であり、デビルバスターでもある長身の男、バラードⅡグラスマンだ。

ティースの首筋を、汗が流れた。

「少し疑問に感じた程度だったが、予定を取りやめにして正解だったな。キュンメルに、人間の協力者がいたか」

「っ……」

どうして見破られたのか。……いや、まるで心当たりがないわけではないし、それは今考えても詮無きことだと理解していた。

今はただ、どうやってこの場を切り抜けるか。それだけだ。

退くか、進むか。

「……ティース! 退けっ! お前にどうにかできる相手じゃない!」

我に返ったエルバートの咄嗟の叫びが通路に響き渡る。

それはもちろん理解できていた。

だが、

「……っ」

息苦しい。冷たい汗が次々に浮かび上がってきた。

この状況では、おそらく逃げることにすら不可能だろう。一瞬でも視線を外せば。少しでも足を動かせば。その瞬間に切り捨てられそうな、そんな強圧感がある。

動けない。

まるで殻をかぶり、じっと耐えるしかないかたつむりのように。

……二人がかりなら……いや、それでもおそろく――
そして。

「エルー！」

お前だけでも逃げろ、と。

ティースがそう言おうとした瞬間だった。

「――行け」

「え？」

背後から、声がした。

「二人とも行け。この男は、私が相手をしよう」

「……リユーゼット!？」

通路をゆっくりと歩いてきたのは、一振りの剣を携えたリユーゼットだった。いつも通りの精悍な表情、だが全身からは今までにな
い闘気を迸らせ、視線は真っ直ぐにバラードを見据えている。

「……馬鹿なっ!!」

だが、エルバートは叫ぶ。

「お前一人でどうにかなるわけないだろ!？ ……いや、俺たち三人で力を合わせれば、もしかしたら――」

だが、

「行け、と言っているのだ」

言うやいなや、リユーゼットの足は地面を蹴った。

乱れのない動きは、実力という以上に、おそらく躊躇のない心の表れ。

「……」

バラードの目が微かに細められ、その一太刀は造作もなく受け止められた。だが、リユーゼットはそれで怯むでもなく、全く変わら

ぬ口調で言葉を続ける。

「前にも言った。……私は強者と一対一で戦って死ねるのならば、悔いなど一つもない。手助けは、迷惑だ」

揺らぐことのない意志が、リユーゼットの言葉の端々から溢れていた。強がりでも見栄でもない、それは紛れもない本心なのだろう。
「っ……」

迷っている暇はない。階段は彼らの目と鼻の先にあった。リユーゼットが押さええている間なら、どうにか駆け抜けることもできるだろう。

「……ティース！ 行くぞっ！」

「っ！」

決意したのはほぼ同時。ただ、行動したのは一瞬だけエルバートの方が早い。

ティースもすぐ後に続いていった。

「……」

バラードの視線が、一瞬だけ二人に向けられる。が、意外にも遮ろうとする動きはまるで見せず、二人が通り抜けた後もリユーゼットと剣を合わせたまま。

……やがて、階段を刻む足音が二つ遠ざかっていくと、それを背中に聞きながら、バラードは落ち着いた口調で言った。

「お前、名前は？」

「リユーゼットⅡカサードウグラス」

ガリッ！！

鈍い音がして、二人の間合いが広がった。

押し戻されたリユーゼットはかかとを滑らせながらすぐに体勢を立て直す。構えた剣は彼が魔力で創り出したもの。通常より長めで、刃がノコギリのようにギザギザになっているものだった。

「なるほど。警備があまりに不甲斐ないと思っていたが……下位魔ばかりのキュンメルに、お前のようなヤツが潜んでいたのでは仕方ないか」

油断なく、バラードの視線はリューゼットを見つめた。が、それは今までのように、相手を見下したものではない。

「……面白い」

大抵の場合、バラードの前に立ちふさがる相手は、敵であって敵ではなかった。それはつまり、デビルバスターとして、すでに普通の下位魔や上位魔程度では相手にならないほどの実力を身につけていたからである。

だが……このとき、彼は久々に“敵”を認識していた。少なくとも、無造作の一太刀で片付けられる相手ではないと、そう感じていた。だからこそ、ティースとエルバートをそのまま見逃したのだ。「凡庸な集団の中に、一人だけ逸材が埋もれているというのは稀にあることだ」

「全力で来るがいい、バラードⅡグラスマン」

剣を正眼に構え、リューゼットは宣告した。

「さもなくば、大きな後悔が貴様を襲うことだろう」

「馬鹿な」

バラードは薄笑いを浮かべて答える。

「手加減などという無意味な行為、試そうとしたこともない」

それは、余裕ではない。

何度も死線をぐぐり抜けてきた。アリとライオンほどの圧倒的優位でない限り、たとえ実力にそれなりの差があろうとも、油断することなど決してない。そういう男だからこそ、バラードはこの世界でこれだけの地位を築くことができたのだ。

油断など、あり得ない。

「ここでは場所が悪い。少しだけ、移動することにしないか？」
言って、バラードは階段から離れていく。

……階段を駆け下りていった二人のことは、どうでもよかった。そもそも彼は、ただ条件が良かったから一時的にここに雇われていただけで、ゲノールトに対する忠誠心など最初からないに等しい。今はその利益を守ることよりも、目の前の男を倒すことが優先だと

感じたのだ。

もちろんリユーゼットにもその申し出を断る理由などなく、

「よからう」

そのまま従った。

移動することはエルバートやティースが脱出してくる場合にも好都合――いや、そんなことより、彼もまた、誰にも邪魔をされないところで戦いたいという望みがあったのだ。

三階のAブロック。

他とは明らかに違う、豪華な装飾の施された部屋。このAブロックは来賓などを泊めることができるビッブルームがいくつか並んでいる。

その中の一つ。

「きゃあああああっ!!」

何度目かの振動に、パラパラと、粉のようなものが天井から降ってくる。

「も……もうヤダあっ!!」

「セルマ様！ 落ち着いて下さい！」

昼頃からこのゲノールトの地下を襲っていた異変は、ついにこの三階にまで波及し始めていた。振動の発生源……襲撃者は、おそらく地下二階にまで達しているだろう。

その部屋にいたのは、ベッドの上で半泣きになって頭を抱える少女セルマと、その護衛が四人。

当初、少数の襲撃を知らせるレベル一の警報が鳴ってから約二十分。三階以下に居た者たちの大半はすぐに鎮まると樂觀していたが、今になって警報は大規模の襲撃――レベル四へと修正され、その余波はすでにこの地下三階の天井を揺るがすほどまでに接近していた。未確認情報だが、三階Cブロックに捕らえていた魔が侵入者によ

って解放されたという情報も入ってきている。……もし事実であれば、大事だ。怒り狂った魔が万が一殺到しようものなら、それを防ぐだけの戦力などここにはない。

「助けて！ 誰か！ 誰か助けてよお——ッ！！」

「セルマ様！」

おそらくこれだけの恐怖を感じたことはないのだろう。平常心を失って取り乱すセルマを懸命に宥めつつ、彼女の護衛長である男は行動を決めかねていた。

ここでじつとしているべきか。

あるいはここを出て、非常口からの脱出を計るべきか。

事態はすでに深刻なものとなっている。どれだけの数の襲撃なのか詳しいことはわからないが、ここまで鎮まらないところをみると相当数と見るべきだろう。——事実とは違っていたが、彼がそう考えたことはおそらく正しい。

ならばもちろん、脱出を試みるのが最良だった。非常口の一つは、このビップルームのすぐそばにある。脱出することは可能だろう。

だが、不安もある。

——大きな、振動。

「いやあああつ……あつ！！！！」

セルマの絶叫が示すように、その振動はどんな火薬を使っているのかと思うほど桁外れに大きい。堅固に作られたこの地下を大きく揺るがすほどだ。……とすると、一本道である非常口を辿ることは大きな危険も伴う。万が一道が崩れでもすれば、先へ進めないどころか生き埋めになってしまう危険もあるからだ。

「ティース！ 誰か、ティースを呼んできてえ——ッ！！」

「……ちっ」

思わず、男は舌打ちを漏らした。

……男は護衛対象であるこの少女に、主人としての尊敬など少しも抱いていない。少女はあまりに自分勝手に、護衛する者たちにとってはあまりに厄介な存在だった。ただ、自分が護衛をしている間

に死なれては自分の首が飛ぶことにもなりかねないから、仕方なく真剣に護衛を続けているだけのことだ。

振動は収まらない。

「セルマ様、大丈夫です。今頃、おそらくバラード様が——」
パン——！

宥めようと伸ばした手が、払われた。

「……あんたはいいからッ！ 早くティースを呼んできなさいよオッ——！！」

「……」

微かに残っていた感情が、凍り付く。

その瞬間だった。

……ミシッ……ッ。

「え——？」

「……な——！」

その部屋にいた誰もが、天井を見上げ——そして、見た。

「ば……馬鹿なっ——！」

天井に大きく刻まれた、亀裂。

——この地下を構成するのは、人の持つ最新の技術と、魔界に由来する特殊な資材。たとえ上の階で数トン級の動物が暴れようとも耐えられるだけの造りになっている。

その、はずだった。

だが——

「天井が、崩れる——ッ！？」

絶叫が、部屋を支配した。混乱の中、それが誰のものは知れない。ただ、そこには確実に、幼く甲高い声——セルマのものが混じっていた。

それだけは、確かだった。

「……!？」

「どうした、ティース？」

絶え間なく襲う、轟音と振動。まるで大軍勢が攻め寄せたかのような混乱の渦の中、三階Cブロックで解放された人魔たちによって、“混乱”は“恐慌”へとその質を変貌させていた。

一部の魔たちは脱出よりもゲノールトへの復讐に燃え、何処かへと散っていった。ゲノールトの構成員たちは自らの命を守ることに精一杯で、地下内部はすでに組織としての形を保っていない。

「いや……」

そんな中、ティースとエルバートはかろうじて生き延びていたキユニメルメンバー数人とともに、地下一階まで逃れていた。

「リユーゼットさんとネイルさんのことが気になって――」

それは半分本当であり、半分は嘘だった。

バラードとともに姿を消したリユーゼット。未だ地下二階で陽動を続けているらしいネイル。すでに彼らの目的は達していたが、二人が退いてくる気配はない。

だが、それとともに、もう一つ。

（バラードがいたってことは……もしかして――）

ティースの胸を過ぎった不安は、セルマのことだ。

本当ならトーナメント観戦に出掛けているはずの少女。だが、バラードは『予定を取りやめた』と言った。それが彼とゲノールト総帥だけのものならば良いが、あるいは彼女も外出を控えていたという可能性は充分に有り得る。

ならば、解放された魔の怒りの矛先が彼女に向けられる可能性すら――いや、もしここに残っているのならば、その可能性は高い。

「……」

ネイル、リユーゼット、そしてセルマ。

気になり始めると、先へ進む足取りが重くなった。

やがて……止まる。

「……エル。俺、一旦戻るよ」

「はあ!？」

急に立ち止まったティースを、エルバートは信じられないという顔で振り返った。

「なに言ってるんだよ!　ここまで来て!」

立ち止まった場所は、地下一階、娼牢に続く階段の入り口付近。再び、大きな振動があり、下での戦いはまだまだ鎮まる気配がない。振動が静まるのを待って、ティースは口を開いた。

「もしかしたらネイルさんは、俺たちがここまで来てることに気付かないで、それでまだ無茶してるのかもしれない。だろ？」

「……そりゃ」

確かに、彼らは逃げる途中でネイルと顔を合わせていない。意外にも彼女は地下二階まで敵を押し込んでいるらしく、二階は一階と違ってやや入り組んだ構造になっているため、行き違いになったようだ。

「けど、状況を見れば俺たちがすでに成功したことぐらいわかるだろう?　いくらネイルだって――」

言いかけて、エルバートの言葉がピタツと止まる。

「……ああ、そうか。“あの”ネイルか……」

苦々しい表情になった。

「それにリューゼットさんだって、もしかしたらまだ頑張ってるかもしれない」

「……」

それに対しては、エルバートは視線を流すだけだった。

相手を考えれば、リューゼットの腕がいくら立つとしても、これだけの時間を耐えきっているとは思えない。もちろん、それはティースにもよくわかっていたが、まるで希望がないわけでもないだろう。

「とにかく」

それと、セルマのこと。

一旦引き返す理由としては、充分だった。

「敵の混乱も想像以上だし、今のうちなら戻ってもそれほど危険はないと思うんだ」

「……わかった」

エルバートは頷く。

「けど、それなら俺も行く。そもそもこの作戦は俺のものだし、俺にはその責任が――」

「いや」

だが、ティースは首を横に振った。そしてすぐ近くにある娼牢へと続く階段を指すと、

「お前はあの子を助けて、早く脱出するんだ。ここを出ても、まだ安全ってわけじゃないだろ？ お前はキュンメルメンバーを安全な場所まで誘導してくれ」

「……ティース」

「全てが終わったら――」

心配そうな表情をしたエルバートに、ティースは微かに笑みを漏らして答えた。

「リイナのいる宿で待ち合わせだ。今度こそ、三人で昔話でもしよう」

「……」

「それと」

それから少し冗談っぽい口調を交えて、横目で娼牢へと続く階段を見て、

「できれば、あの子の紹介もな」

「……紹介？」

エルバートは怪訝そうに、眉をひそめる。

「お前……うわっ!!」

言いかけたその瞬間、一際大きな振動が襲った。

どこかで、何かの崩れる音が響く。

「っ……エル！ とにかく頼んだぞ!!」

猶予している暇は、どうやらないらしい。表情を引き締め踵を返

す。

「あ……ああ！」

エルバートの言葉を背中に聞きながら、ティースは今来た道を引き返していった。

（……急がなきゃ——）

壁や床はところどころが黒っぽく焼け、どこから焦げ臭い空気も漂ってくる。

途中、地下全体を襲う振動に何度か足を取られそうになった。

そして——ふと、不審に思う。

（でも……ネイルさんにしては、派手すぎるな……）

また嫌な予感がした。

状況を考えれば、この振動の発生源はネイルのはずだ。……だが、果たして下位魔でしかない彼女が、これだけの破壊力を持っているのだろうか。振動は断続的、かつ強烈。しかも、その威力は時間を経る毎に増してきている。

「……」

不審に思いながら、ティースは速度を緩めずに階段を下りていった。

地下二階。

そのまま破壊の跡を辿り、おそらくネイルが進んだであろう方向へと向かう。

と。

「つ……」

おそらく攻撃をともに浴びたのだろう。ゲノールトの構成員らしき男たちが通路の脇に倒れていた。生死は不明だが、少なくともすぐに起き上がってくる気配はない。

壁に走っている亀裂。

そして、

「これは——」

先へと進んだティースは、驚愕にその足を止めた。目を見開き、

胸に冷たい空気が流れ込む。

「こんな……」

そこは一部、床が崩れていた。ここの床が崩れるということとはつまり、地下三階の天井が崩れたということになる。

「……どうなってるんだ……?」

ゲノールトの床はかなりの厚さの石床で、さらに間に挟まれた魔界由来の建材によって強化されている。並大抵のことで壊れるようなものではない。

「ネイルさんがこんな力を持つてるはずは——」

それは下位魔程度には絶対に不可能な芸当だった。

(……何か。俺の知らない何かが起きている——?)

周囲に、人の気配はない。破壊音はさらに奥へと続き、聞こえる喧噪はその先。

「……」

ティースは自らを緊張に身を震わせながら、ゆっくりと“細波”を抜き放ち、そして一歩ずつ、奥の方へと歩を進めていくのだった。

階段を下りたところで、エルバートの表情は苦々しさに歪んだ。

「……ティース……すまない」

そして一言、そう呟く。

「俺はお前を——」

媚牢。

そこに捕らわれている少女。

エルバートは一度だけ、その少女と会ったことがある。

名前は知らない。素性も知らない。ただ、前回ここに潜入した際、ほんの僅かに脱出の手助けをしてもらった。だから、その恩を返す必要があった。

それ以外の個人的な感情は一つもない。もちろんティースが勘違

いしたような関係も、彼と彼女の間にはない。彼らが似ていたのは、単なる偶然でしかなかったのだ。

そして――

「……え？」

その牢の前までやって来たエルバートは、そこで驚愕に目を見開くほどの光景に遭遇することになる。

「いな……い？」

牢はもぬけの殻だった。

いや、それだけじゃない。

「なんだ……これ……!？」

僅かな戦慄がエルバートの身体を駆け抜ける。

――牢の扉はすでに何者かによって破壊されていた。

「そんな……」

背筋が冷える。それは、まず有り得ないはずの光景。

牢は格子が吹き飛び、破片が壁際まで飛び散っている。まるで数トンもの巨大な物体が衝突したような、そんな惨状だ。

しかも、それだけではない。

「そんな、馬鹿な……」

格子は“外側”に散らばっていた。つまりその牢は“決して破られないはずの内側から”破られていたのである。

見張りはとっくの昔に逃げ出しているようだ。

と。

「？」

突如風が吹き抜け、彼のすぐ背後で渦を卷いた。

その直後、

「!」

ハッとする。

風が集まったところに、まるで空気が実体化したかのように突然人の気配が現れたのだ。

そして、

「キミは――」

「……」

咄嗟には振り返ることができず、ドクン、と、心臓が大きな脈動を打った。

――ゲノールトの牢。それはたとえ上位魔であろうとも内側からは破ることのできない堅固な牢だ。……その、はずだ。

だが、それは今、疑いようなない事実を示して彼の眼前に現れている。

「覚えてるよ。キミは確か、前にもここに来た子だね？」

動けない。冷たい汗が流れた。

声に聞き覚えがある。それは確かに、この牢に囚われていた少女のもの。

だが……この状況を目の当たりにしては、認識を改めざるを得ない。

「……あんたは、一体――」

少女は、いつでも抜け出せた。それだけの力の持ち主だった。囚われていたのではない。おそらく何らかの理由があって、囚われたフリをしていたのだろう。

だが、少女はエルバートの緊張など知らない様子で、続けた。

「聞きたいことが、あるんだ」

「……」

心臓の鼓動は収まらない。

冷や汗を掻いたまま。

エルバートは抵抗することもできず、観念してゆっくりと振り返った。

地下二階の状況は凄まじい。あらゆる部分の壁が崩れ、ところどころでは火がパチパチと燃えている。ほとんどが石の造りなので急速に燃え広がる心配はないが、まるで戦乱に巻き込まれた街の様子を見ているかのようにだった。

と、そんな中。

「……どけよ……このガキがッ!!」

ようやく人の声を聞いたのは、二階の比較的深い場所。

「ヤダッ!! 置いてかないでえッ!!」

場所は、ティースの認識が正しければ三階Aブロックに続く階段のすぐ近く。その方角から、逃げるように一人の男が走ってくるのを見た。

見覚えがある。それは確か、セルマの護衛の片割れだった。

(……ってことは――あの声!)

男はティースの存在には見向きもせず、慌てたようにその横を駆け抜けていく。右腕と頭からは血が流れており、どうやら負傷している様子だった。

破壊音はその奥から、どうやらこちらに近付いている。

ティースもまた、一目散にその場所へ急いだ。

そして――

「……セルマッ!!」

「え……ッ!？」

通路の、ずっと奥。まだ顔も確認できないほどの距離だったが、彼はそこにセルマの赤いドレス発見したのだった。

「……ティースッ!? ティースなのッ!!?」

おそらくは護衛の男に見捨てられたのだろう。絶望に打ちひしがれ、声が掠れるほどに泣きわめいていた少女は、そこに頼りとする青年の声を聞き、喜びと安堵に涙で濡れた顔をほんの僅かに輝かせた。

「ティースッ!!!!」

立ち上がり、真っ黒に汚れた赤いドレス姿で、フラフラと駆け寄

つてくる。どこか怪我をしているらしく、動きはひどくぎこちない。
「セルマ！」

ティースもまた、少女に向かって駆けた。

——やはりここに残っていた。戻ってきて良かった、と。

その心に、僅かな安堵感を抱きながら。
だが。

「……え？」

その背後。

ゆらりと陽炎のようなものが浮かび上がるのを、見た。

そして、爆音。

「きゃあああっ！！？」

「セルマッ！？」

背後から襲った爆風に、少女の小さな体が煽られ、うつ伏せに転がる。

破壊音は近付いていた。

——いや、すでに。

「ツ——！？」

ゆらりとそこに浮かんだのは……得も知れぬ邪気。

「セルマッ！ 立て！ 走れえッ！！！」

自らも全力で疾走しながら、ティースは叫んだ。

浮かび上がった、人影。

背後に揺らめく炎で、顔は朧気だ。が、何故かそこに浮かぶ笑みだけは、確認できた。

……どこかで見たような、笑み。愉悦の、笑み。

胸に、無数の針が突き刺さったような、痛みが走る。

「セルマあああ——ッ！！」

「ティース！ ……ティース……ッ！」

足を擦りむいたのだろう。痛みに顔をしかめながら、セルマは半ば床を這うようにして彼の元へ向かってくる。

だが、邪気は、それより速い。

浮かび上がった、笑みは――

(……ネイル、さん……ッ!?)

炎が、飛ぶ。

ティースの存在に気付いていないのか。

いや、あるいは――

「……セルマッ! 走れえ――ッ!!!」

絶叫が、熱のこもった空気を裂く。

「ティ――ッ!!!」

それに応えようとしたセルマの叫びは、最後まで続かなかった。

「っ――!!!!」

炎はセルマを避けた。偶然だったのか、意図的だったのか。

「え――ッ!!!?」

だが、彼女を避けた炎の塊は、壁と天井を打った。場所は奇しくも、いや、まるで狙ったかのように、少女が居たその場所。碎かれた壁そのものが少女に向かって崩れ落ちる。

「セルマアアッ!!!」

「きゃああああっ!!!!!」

少女の体の数倍はあろうかという石の塊は、しかし幸運にも彼女の体を避けた。小粒の石がその体を掠めていったが、大事に至るものはない。

「あ……あ……」

声も出せなくなって、大量の瓦礫の中に埋まるように、腰を抜かせたセルマがペタンと崩れ落ちる。

だが――

「――セルマあッ!!!!!」

ティースの絶叫は止まらない。

……彼は知っていた。その幸運が、決して彼女の命を保証するものではないことを。

「立て! 立って、走れえっ! 走るんだああ――っ!!!!!」

「……え?」

彼が自ら助けるには、まだ遠すぎる。あと、十五——いや、十メートル。

——遠すぎた。

「え——」

天井を見上げ。

ピタリと、セルマの動きが止まる。

「あ——」

崩れ落ちる、天井。

一辺が四メートルはあろうかという、巨大な石の塊。

助けるには、遠すぎた——。

「セルマあああああ——ッ！……！！」

絶叫が再び空気を切り裂いて。

「——」

絶望的な無言の声を残し……そして、赤いドレスは瓦礫の中へと消えていった——

その5『死を運ぶ者たち』

リガビュールの昼はこの日も静かだった。

“事実上の中心部”から少し離れた中央広場では市場らしきものも開かれている。が、そのにぎわいはネービスやそれ以外の主要都市に比べればたかが知れており、それはもちろん中心から離れれば、なおのこと。街自体の規模を考えれば、外を歩く人々の数はあまりに寂しいと言わざるを得ず。冷たい風とどんより曇った空が、その雰囲気さらに増長させていた。

そんな中。

（ティース様……）

リイナはネズミ色のフードとローブ姿で街を歩いていた。正体をさらす危険を侵してまで街を歩いている目的は、もちろんただ一つ。（一体、どこに……いるのですか……？）

失踪した彼を捜すため。

まず向かった先はエルとの待ち合わせ場所でもある、初代ネービス王の石像前だった。だが、この寒い日の朝、そこには人影一つなく。一時間ほどそこで待った後、夕方に再び戻ってくることを決めて、次は街の“事実上の中心部”へ向かうことにした。

まだ午前中、そこは当然のごとく閑散としていたが、それでもいくつか営業している店がある。夜ほどではないにしろ客引きもいくらかいて、当初、フードをかぶって大柄なリイナを男性と勘違いしたのか声を掛けてくる者もいたが、フードの中から返った声を聞いてはすぐごと引き下がっていく。それが何の店か理解していない彼女にとって、それはひどく不思議な光景だった。

ただもちろん、そんな状況でティース本人を見つけるどころか、何の手がかりを掴めるわけでもなく……そして昼も過ぎたこの時間、リイナは中心部を離れ、やや閑散とした郊外の方をアテもなく彷徨っていたのである。

（ティース様……）

この寒風の中を何時間も歩いていれば、いくら王魔と呼ばれる彼女でも体が凍えてくる。魔力の壁で寒風を遮ることは可能だったが、この街中で無闇に力を纏えば察知される危険もあり、そういうわけにはいかなかった。

はぁっ……と、手の平に息を吐きかけ、擦り合わせる。息は完全に白く、空を見上げれば今にも雪が降り出しそうだ。

（まさか、二度と会えないなんてこと、ないですよね……）

そんな自らの想像に、心までもが冷たくなる。

——まさか。

だが、彼の筆跡を持つあの手紙ですら、ここ二日間彼女の元に届いていなかった。それはもちろん、エルバートが彼女に見つかることを恐れたためで、彼女自身もその原因が自らの深追いにあるのだろうとわかってはいたが、そもそも、手紙が届けられている間だって、彼が無事だったという保証はどこにもなかったのである。ティースという青年の存在を心から大事に思う彼女にとって、その不安は当然のことであった。

（こんなことなら、最初から私もついていけばよかった……）

後悔しても、遅い。

彼が何かに巻き込まれたらしいのは、彼女にも理解できていた。

（エルさん——どうか）

ギュッと、胸の前で赤くかじかんだ手を握りしめる。

脳裏に浮かんだのは、一緒にこの世界にやってきた友人の姿。

（もし一緒にいるのなら、どうかティース様を守って——）

空からは、チラチラと雪が舞い降り始めていた。

ガリッ！！！

剣とは思えないような鈍い交錯音を立て、二つの影が反発した。ゲノールト地下三階、Eブロック。そこに、何もない広大な空間がある。もともとは何らかの催し物が行われる場所だったが、今は地下四階がメインとなっており、ほとんど使われていない場所。

そこで、リユーゼットⅡカサードウギラスとバラードⅡグラスマンが、未だ激闘を繰り広げていたのである。

「っ……」

間合いを取り、ほんの僅かに声を漏らしたのはバラードだ。百戦錬磨、冷徹で練達。優秀なデビルバスターである彼が、リユーゼットの一撃に、左腕から微かな血を流していた。

「……信じられんな」

その視線の先。

バラードの持つ剣と全く同じ形、全く同じ長さの光る剣を手にしたリユーゼットが、正眼に構えている。が、彼も決して五体満足ではない。ほんの僅かながら、ところどころに傷を負っているようだった。

ほぼ、互角。いや、現時点ではややリユーゼットが押しているか。

“信じられない”

おそらく、ティースやエルバートが見ていても、同じ感想を漏らしただろう。

「そろそろケリをつけよう、バラードⅡグラスマン」

カチリ、と、リユーゼットの持つ剣が音を立てる。

「殺傷力の高い形状。貴様はもともと、持久戦を得意とするタイプでもなからう」

「……付け焼き刃の分際で、知った風なことを言う」

バラードは薄く笑った。が、それは事実でもあった。

「なかなか面白い力だ。それは相手の武器を写し取る力か？ ……なら精一杯、魔力を込めることだ」

「……」

リユーゼットの眉が微かにピクリと動く。

——感じていた。バラードの持つ剣から漂う、鋭い気配を。

「吠えよ……かまいたち“鎌鼬”」

キイイイイ……ン。

「！」

超音波のような甲高い音が突然周囲を襲った。

目を細め、リユーゼットはその音の発生源を捕らえる。

「刃……か」

刃が細かく振動していた。バラードがゆっくり下段に構えると、触れてもいない石床が微かに削れていく。

「魔力で創り出したその剣が、この一撃に耐えられるか？」

「……」

“鎌鼬”の一撃は、並の鉄や鋼はもちろん、魔力で象った物質も容易に切り裂く。下位魔、上位魔、将魔ですら、その一撃に耐えるのは難しいだろう。

「やってみるがいい」

だが、リユーゼットは怯むことなくそう言い切った。

「それだけの威力、放った方もただでは済むまい」

「……」

バラードが微かに眉を動かした。

……確かに、いくら優秀なデビルバスターだろうと、自らの持つ神具の能力を限界近くまで引き出せば、その直後はとてつもない脱力感に襲われる。以前、レインハルトⅡシュナイダーがリイナに向けて放った一撃と同様、連続では放てない。まさに必殺——いや、必殺としなければならない、一撃だった。

「私はその一撃を避けはしない。避ければ、おそらく貴様はすぐに体勢を立て直してしまうだろう。だから避けずに受け止め、貴様が作る、その一瞬の隙を逃さず、勝負を決める」

リユーゼットの言葉に、バラードは目を細めた。微かに笑みが浮かぶ。

「面白い。やってみようじゃないか」

怯むことはない。

“鎌鼬”が纏う一撃はおそらく、将魔どころか王魔の体ですらも切り裂く威力だ。たとえリューゼットが自らの武器を強化しようとして、並大抵のことで防げるものではない。

「本当に受け止めることができたなら、おそらくお前の勝ちだ。リューゼット」

自負がある。自らの実力と、そして長年のパートナーである“鎌鼬”。その一撃に、プライドがあった。もちろん、今まで阻まれたことはない。

「可能だ」

一方のリューゼットとて、負けるつもりはなかった。強い者と戦って死ぬのは確かに本望だが、強い者に勝つことは更なる至上の喜びだ。そしてこの目の前のバライドという人物は、そんな彼の望みを満たすに充分すぎるだけの実力を備えていた。

渾身の力を、自らが持つ光の剣に込める。もちろんその武器が破壊された経験など未だかつてなく、やはりそこにはプライドがある。武器を魔力で具現化するタイプであり、それを主な戦闘手段とする彼にとって、その武器こそが彼のプライドだった。

確実に、どちらかが崩される。そしてそれは、その者の敗北をも意味するだろう。どちらも自信がある。だが、確信はない。二人の戦いは予測を越え、それほどに拮抗していた。

神経が研ぎ澄まされる。

溢れんばかりの闘気に、肌がビリビリと震えた。

轟音と喧噪の中。

合図は……階上で響いた、一際大きな崩壊音。

「……」

「……」

無言で、二人の足はほぼ同時に、床を蹴った――

「おい……エル」

「……」

「一体、何がどーなってんだ？」

「俺にも、わかんないよ……」

困惑したエルバートの隣を走るのは、この地方に派遣されたキューメンルの部隊長、ボイスという男だ。歳は三十代半ばから後半ぐらい。長い牢生活のためか、あるいは元来のものか、口や顎には濃い髭がいっぱい生えている。

出口は近い。遮るものもない。

それは当然だった。

「ゲノールトは……ほぼ壊滅に近い状態だ」

ボイスは信じられない表情で呟く。

「エル。お前は一体……何者を連れてきたんだ……？」

「……」

目的は達した。仲間たちは半分以上が無事だったし、他に囚われていた罪のない人魔たちを解放することもできた。

が、

「俺にもわかんないよ、ボイス……」

事態はいつしか、完全にエルバートの手を離れていたのだ。

再び、地下全体が揺れる。通路の端々には焼け焦げた死体がいくつも転がっており、凄まじいまでの光景だ。もちろん憎き相手のこと。それを見て感慨にひたることなどないが、信じがたい思いは膨れ上がった。

「……」

ボイスは神妙な顔だったが、やがて気を取り直したように、

「……とにかく、皆が脱出できたのはお前のおかげだ。事態を把握するのは、無事に脱出してからでもいいか……」

出口が見えてくる。

エルバートは無言でその後をついていった。

（リユーゼット……ネイル……）

そのとき、少年の脳裏に浮かんしたのは、ともにこの作戦を戦った三人の姿。

（ティース……一体、何がどうなってんだ——？）

何が起こっているのかもわからないまま。

崩落音。

それはおそらく一階の床——二階の天井が崩れ落ちる音。

「エル！ 急ぐぞ——！」

「あ、ああ……」

エルバートはそうして仲間たちとともに、一足先にゲノールトを脱出したのだった。

燃えさかる通路。

崩れ落ち、ぽっかりと空いた天井。

積み重なる瓦礫。

「——」

言葉が、出ない。

先ほどまでそこにあった赤いドレスは、完全にその姿を隠している。……いや、瓦礫の隙間からスカートの端が微かに覗いていて——そこから、じわりと赤い液体が染み出してきた。

心臓の内側に強烈な痛みが走る。

それは彼女が、確実にそこにいたことの、証。

「セ……ルマ……」

呆然としたままティースの口が紡いだのは、目の前で呆気なくその人生を閉じてしまった少女の名。

足が震え、一瞬だけ思考が止まる。

そして——

「や、ティモちゃん。元気そうだね」

「……なんで」

片手を上げ、相変わらず無邪気そうに笑うネイル。まるで何もなかったかのように、セルマの消えた瓦礫の脇を通り過ぎ、ゆっくりと彼の方へと近付いてくる。

「っ！」

その仕草に、カッと頭が熱くなる。そのまま、彼は堪えきれない憤りをぶつけた。

「なんでッ！ どうして彼女を狙ったんだッ！！」

「え？」

ネイルは不思議そうな顔をして、それからゆっくりと首を傾けると、

「どしたの？ 私、まだキミが怒るようなことしてないでしょ？」

……あ、今の子？ でもセルマって、確かこの偉い人の子供じゃなかったっけ？ じゃあ、敵でしょ？ 違った？」

「――！」

相変わらず何も考えてなさそうな彼女の言葉が、彼の怒りをさらに煽った。

……確かに。彼らにしてみればセルマは敵だったかもしれない。

あるいは憎い相手だったのかもしれない。ネイル自身には何の悪気もなかったのかもしれない。

だが、それを理解していながらも、ティースは叫ばずにいられたかったのだ。

「なにも殺すことはなかったッ！！」

「え？ なんで？」

「ッ……！！」

ギリッと奥歯が音を立てる。

彼はセルマの保護者でもなければ、教育係でもない。彼は情報を得るために彼女を利用し、そして彼女はただ、退屈を紛らわせるために彼と“父娘ごっこ”をしていただけだ。彼女の考え、この先の

人生、それを変える力が自分にあるなんて、そこまで自惚れていたわけじゃない。

だが、それでも。

それでも――

「あの子は……あの子は何も知らなかったただけなんだ！　こんな死に方をしなきゃならないような子じゃなかったのにッ！！　なのに……なのに――ッ！！」

どうしようもない憤り。涙が浮かびそうになるのを、懸命に堪えていた。

だが、

「あはははは、そういう意味かあ」

ネイルは気に留めた様子もなく、微かに返り血を浴びた表情に相変わらずのニコニコした笑顔を浮かべ、言った。

「でも、知らないよ、そんなの。どうでもいいじゃない」

「な！」

頭がさらに熱くなる。気色ばんだ。

「あんたは――！」

だが……その直後、

「私、ザッピールと違って、別に誰かの悶え苦しむ顔が見たいわけじゃないし。事情なんてめんどっちいからいちいち気にしないの」

熱が、一気に冷め切った。

「……え？」

一瞬、彼女が何を言っているのか彼にはわからなかった。

だが、

（“悶え苦しむ顔”……？）

そのセリフは、彼の脳裏に強く残っていた言葉、強く残っていたイメージを刺激する。そこに浮かんできたのは、本来、この場とは全く関係ないはずの人物。

ターバンを頭に巻いた、許し難き男の顔――

「ザヴィア……レスター……」

「あれ？」

思わず呟いた彼の言葉にネイルが反応する。

そして、驚愕の事実を口にした。

「ザッピールのこと、知ってるの？」

脳裏の奥がチカチカとフラッシュする。

「なん……だって……!？」

そして頭の一部がようやく冷静な思考を取り戻す。

——辺りを覆う強烈な炎。

それは明らかに不自然だった。とても、下位魔の力とは思えない。そして、紡ぎ出された“あの男”の名前。屈託のないネイルの笑顔。——そこに、いつか見た“あの男”の慇懃な笑みが重なり合う。

「! まさか——」

繋がった先は、一見何の確証もない推測。だが、何故かそれは確信に近いものを彼に感じさせていた。

「まさか、お前は……タナトス——!」

「あれ、バレちゃった? なんで？」

ネイルはあまりにもあっさりと彼の推測を肯定した。

「!」

頭の中が一瞬だけ真っ白に染まる。

「でも、ま、いっか。もう遊びは終わりだってリユーちゃんも言ってたし」

「……!」

リユーゼット。

彼もまた、タナトスのメンバーだったのだろうか。

「リユーちゃんはキミに興味持ってたみたいだけど、なんでかなあ。あまり強そうじゃないのにな」

ゆらっ、と、まるで陽炎のように、ネイルの全身に炎が浮かび上がる。

「くっ……」

襲いくる熱波に、ティースは顔を覆った。まともに目を開けてい

られない。辺りにあったゲノールト構成員たちの死体が勝手に燃え上がる。

（なんて……魔力——！）

それは王魔であるリイナにも匹敵する力だった。やはりどう考えでも下位魔程度のもではなく、最低でも将魔クラス。おそらくは偽っていたのだろう。

「なんで……どうしてお前らが、エルに協力していたんだ！」

圧迫感に抵抗しながらぶつけたティースの問いに、ネイルはケロツとした顔で答えた。

「暇つぶしだよ」

「暇つぶし……だと……!？」

「リユーちゃんはいつもの病気でね。強い人と戦いたくなっちゃって。私も何かむしょーにウズウズしてきたから、ヌーボーが、それならここがいいって教えてくれたの」

「……!」

無意識に嚙んだ唇から微かに血が流れた。

（……タナトス——）

圧倒的な魔力。

背筋を襲う本能的な“恐怖”

脳裏を焼く抑えきれない“怒り”

せめぎ合う。

……後を押したのは——この数日間の記憶だった。

ジリツと、かかとが音を立てる。

（リイナ、エル……）

手にした細波が微かに震える。

（……シーラ……俺、帰れないかもしれない……）

グツと柄を握る拳に力が入る。

（けど——）

ネイルはすでに戦闘態勢に入り、どうやら次の狙いを完全に彼に定めたようだ。……見逃してくれるとは思えない。ただ、それでも、

一目散に逃げた方がまだ生き残る可能性は高いだろう。
だが、バラードのときと同じように、足が動かない。
恐怖？

いや、今度は違う。

それとは全く別の、全く正反対の感情。

——愚かだということはわかっていて。誰かがその行動を『下らない』とか『犬死に』だとか言うかもしれない。

それでも——

(逃げたく……ない)

燃えさかる炎を瞳に映しながら、ティースはゆっくり細波を構えた。

「……あれ？ 普通に立ってられる？」

ネイルは意外そうだったが、少し考えて、

「はあ、なるほど。リユーちゃんが言ってたのはこういう意味か」

「……」

「強い力を、持ってるね」

ゆらゆらと、ネイルの瞳が揺れていた。自らの炎を映して真っ赤に。

笑顔のまま。微動だにしない。だが、その瞳の奥にあったのは、紛れもない、愉悦。ザヴィアールレスターがあのと看せた笑みと、全く同種のもの。

同じ、人種。

胸の奥が、ミシリと音を立てた。

「キミはどんな音を立てて、壊れるのかな？」

ネイルの足下にあった炎が形を成す。

「いくよ、バルちゃん」

「！」

陽炎のように、その背後に人の姿らしきものが浮かび上がった。ゆらゆらしてはつきりとはしない。が、どうやら狩人のような格好、手とおぼしき部分には弓らしきものの影が見える。そしてほ

とんどモーションもなく矢をつがえると、二本の炎の矢……というより、炎の塊をティースに向けて放った。

「っ……!？」

(どうする……!?)

考えるより先に体が動く。床を蹴って一本を避けると、もう一本の矢に向かって細波を振るった。

手の平に伝わったのは、滝に向かって剣を叩きつけたかのような、強烈な圧力。

「くっ……!」

押し戻されないように力を込めると、ようやく破壊された炎の塊が破裂して辺りに飛び散った。が、それ自体は、強い聖力に包まれた彼の体には影響しない。

「ふうん」

ネイルは感心したように頷いて、

「じゃ、これならどうかなあ？」

まるで未知のものに遭遇した子供のように無邪気な口調。

そしてもう一度、炎の矢が放たれる。

ただし――

「!」

その数は、十本を軽く越え――そしてその一つ一つが、致命傷となるに足る破壊力を秘めていた。

「っ――」

一瞬の“思考停止”

直後、頭にカッと血が上る。

体が熱い――まるで自分の体ではないかのように。

怒り。

魔の命を弄んでいたゲノールト。

人の命を弄ぶタナトス。

人であろうと――。

魔であろうと――。

——ドクン。

口が、無意識に叫びを刻んだ。

「どうして——!!」

直後——爆音。

幾筋もの軌跡を残し、全ての炎の矢が轟音を伴って突き刺さった。
立ち上る、爆煙。

クスツと笑い声が漏れる。

「……バイバイ、ティモちゃん」

歪んだ口元は愉悦を刻み、瞳は真っ赤に燃え、大きく見開いていた。

——いや。

見開いていた目が、さらに大きく見開かれた。

「？」

愉悦ではなく……“驚愕”によって。

そのまま、視線を斜め上に向ける。

そこに——爆煙の中から飛び出してきた一つの影。

「どうして……お前たちはどうして！ そんなことが、平気で！」

平気でできるんだアアツ!!」

炎の燃えさかる通路の中。ティースの体は風を切って宙を飛んでいた。

細波が炎を映し、オレンジ色に輝く。

「え——？」

ネイルの目は開いたまま。

動かない——反応できない。

彼女が遅かったのではなく。彼女にとってはあまりにも予想外、

予測の範囲外の速度で、ティースの体はその眼前に達していたのだ。

「懺悔しろ……ッ!!」

宙を滑るように、細波が静かに唸りを上げる。水に濡れた刀身が、

風のように鋭く、熱を帯びた空気を切り裂く。

「お前が苦しめた人たちに……償えええエエツ!!」

「……」

驚きに目を見開いたまま、ネイルは固まっていた。

だが、

「カイくんーッ」

ハツとしたようにその口から叫びが漏れ、背中の炎が形を変える。浮かび上がったのは――羽根飾りをかぶり、サーベルを手にした炎人形だった。

「ッ!!」

間一髪。やはり炎で象られたサーベルが、ティースの振るった細波と激突する。

衝撃。

「くうっ……!!」

反動がティースの両腕を襲い、炎が辺りに飛び散る。

「……」

未だ驚きに目を見開くネイルの眼前で、細波は炎のサーベルによって防がれていた。ジリッ、と、かかどが床に擦れる。

少しだけ、押されていた。

一瞬、全ての動きが止まる。

「……ティモちゃん」

剣を重ね合うティースと炎人形の狭間で、ネイルは見開いていた目を僅かに細め、呟いた。

「キミは、すごく、怖いね。ゼンゼン、見掛け通りじゃなかったね……」

「ッ!!」

衝撃とともに、細波が弾かれた。そのまま炎人形はさらにサーベルを振るう。

ティースもまた、負けじと細波を振るった。

「うおおおおおっ!!!!」

一撃、二撃、三撃――

そのたびに弾ける衝撃音。まるで、本物の剣豪とまみえたかのような手応え。

「……」

打ち合うその間で、ネイルはじつとその状況を見つめているだけだった。

――彼女が炎人形を操っているようには見えない。おそらく自動。それが彼女の能力。

（強い……ッ、けど――！）

心臓がドクドクと早鐘を打ち、全身を熱い血が駆けめぐっていた。神経が研ぎ澄まされる。視界がクリアになる。熱に浮かされたように、まるで自分のものではないかのような体が、無意識に反応する。（……見える……見えるッ！！）

とてつもなく高速で繰り出されるサーベルの軌跡。普段なら全く反応できるはずのない次元の速度だというのに――
少しずつ、少しずつ。

彼の繰り出す細波の太刀筋が、炎人形の攻撃を上回り始めていた。

「……」

それに気付いたのだろう。ネイルは微かに眉をひそめる。

「俺は――ッ！」

一際大きな音を立てて、細波とサーベルがぶつかり合った。両腕に渾身の力を込め、ティースは叫ぶ。

「お前たちのようなヤツは、絶対に許さないッ！ 人であろうと、魔であろうとッ！！」

「！」

サーベルが大きく弾かれ、そして炎人形の輪郭がまるでノイズのように大きく揺らめいた。

もうネイルを守るものはない。

躊躇はなかった。

男であるか女であるかはもちろん、人であるか魔であるかすらも

関係ない。

今の彼に見えていたのは、打ち倒すべきものであるか、そうでないか、その二つを分ける、たった一つの単純な境界線――

「……」

ネイルは一瞬、目を細めた。その足が、軽くバックステップを踏む。

すぐにその差を詰め、ティースは両手に力を込めた。

カチリ、と、細波が音を立てる。

「逃がさない――ッ!!」

叫びが通路を満たす。

両手で握った細波を、振るう。

詰めの、一撃。

――だが、

「フォルっち」

ネイルの眩きは、未だ僅かな余裕を保っていた。

右手の平をティースに向ける。

「この子を、突き放して」

「!」

浮かび上がったのは、長い髭の騎士。

手にしていたものは、炎の槍――

「くうっ!!」

高速の突きが繰り出され、足が止まった。受け損なった一撃が左肩をかすめ、そこから焼け付くような痛みが走る。

「……くそっ!」

「ティモちゃん」

足を止めたティースに対し、間合いを取ったネイルは顔を歪めた。そこに浮かんだのは、やはり愉悦の笑み――

「私はリユーちゃんみたいに危険な戦いが好きなわけじゃないの。だから、バイバイ」

「なにを――」

「バルちゃん」

「！」

再び視界を埋める、炎の矢。

だが、今のティースにはそれを確実に捕らえることができた。

「こんなものッ!!」

細波がその潜在能力を遺憾なく発揮する。彼自身が自覚せぬままに、細波はその刀身から微かな水しぶきを迸らせ、剣筋は渦巻く風を纏って炎矢の威力を削いだ。

周囲に飛び散る、炎の残骸。

「今度こそ——!!」

全ての矢を凌ぎきり、かかとを鳴らして、彼の視線は強い意志を秘め、目の前の無邪気な邪悪へと向けられる。

——そのときだ。

「……!!」

耳鳴りがした。

地の底から響く振動。その震えが床から体と伝わる。

「な——」

その発生源は……ネイルの足元に急速に集まり始めた、巨大な質量の魔力だった。

「ルル——」

炎の狩人が姿を消し、足下に広がった炎の中から“何か”が産まれる。

燃えさかる炎の中、孔雀の羽のように広がった雪のような白。

それは——“翼”だった。

「なっ……」

一枚、二枚、三枚——神々しいまでの輝きを放つ——十二枚の翼。そして産まれる、炎の天使。

「!!」

再び耳鳴りが激しくなる。

ネイルの背後に浮かび上がった天使は、その両手に二つの球体を

携えていた。

それは――全てを燃やし尽くす“神の業火”

あまりの魔力に、崩れかけた通路の壁が小刻みに震え、それは床を伝わってティースの体にも到達していた。

パラパラ、パラパラと細かな瓦礫が崩れ落ちていく。

「っ！」

危険を察し、ティースの体は咄嗟に動いた。

後ろ。左右。

……逃げ場はどこにもない。

だから、向かった先は、

「っ……あああ――ッ！！」

正面。

どれだけ冷静に考えようとも、この狭い通路、逃げ場はない。

だが――それはあまりにも無謀な賭け。それほどまでにネイルの魔力は圧倒的で、そして凶々しさに満ちていたのだ。

「じゃあね」

笑顔とともに、ネイルの手が小さく“バイバイ”のジェスチャーをする。

何の躊躇も容赦もなく、一撃は放たれた。

「！！」

生ぬるい小さな風が渦を巻いて。

そして天使の手を離れた球体は、ゆっくりと宙に浮かぶと一瞬だけ収縮し――弾けるように圧倒的な質量の波動と化すと、

「――」

轟音を残したまま、ティースの体をアッという間に呑み込んでしまった。

「え——？」

その音だけは、近くにいる街の人々も耳にしただろう。微かに耳に届いていた破壊音。そして肌に伝わってきた紛れもない魔力の波動。それを感じたリィナが、その発生源へと足を進めていたそのとき。

——空気を伝わったのは、禍々しいまでの力。

王魔であるリィナですら、驚きに足を止めてしまうほどの――

「……」

確信など、どこにもない。だが、何故かその音、その出来事に“彼”が関わっている気がしてならなかった。

（ティース様……ッ！）

その無事を必死に祈りながら。

リィナは寒風の中を駆けていった――。

その6『風の妖精』

パチパチ……。

パチパチ……。

微かな残り火。崩れ落ちた瓦礫の山。

魔を見世物、売り物とし、それによって利益を得る者たち——“デビルスレイバー”ゲノールト。ネービスにおける非合法組織の聖地ともいべきこのリガビュールの街で一時の栄華を誇った地下組織。

しかし今、それは無惨な姿をそこにさらしている。

ほんの数時間前まで、そこは魔を虐げる者たちによって支配されていた。

だが、今、そこを支配していたのは——

「ご苦労様、ルルー」

微かな風が爆煙をゆっくりと押し流す。そこに君臨していた禍々しい炎の天使は、主人である女性の元にその姿を沈めていった。

ネイルⅡメドラⅡクルティウス。

それは炎の将族であり、凶悪な魔の組織“タナトス”の幹部でもある女性だ。

「さて、とお」

彼女が産み出す炎の天使の一撃は、タナトスでも横に並ぶ者のない、王魔にも匹敵する魔力を秘めていた。トップクラスのデビルバスターでも、それをまともに受けて無事でいられる者はそれほど多くない。まして、未だデビルバスターですらない青年など、どれだけ優れた素養を持っていようと、生き延びていられるはずがなかった。

そしてネイルは鼻歌混じりに足を踏み出す。

「リ्यूちゃんは、生っきってるっかなあっ♪」

どちらを望んでいるのかいまいち良くわからない、弾んだ声。

微かな風が、爆煙を払っていく。
風。

「――？」

跡形も残らない、強烈な一撃の痕跡を残しながら。
風が吹いた。

「……」

ネイルの足が止まる。表情が、一瞬だけ怪訝そうになる。
風。

……不自然な、風だ。それは一方向に吹いておらず、爆煙の中心
で渦を巻いていた。

そして、

「！」

今度こそ、ネイルの表情が驚きに変わった。
聞き覚えのない人物の声とともに。

「……間一髪、だったね」

ゴッ！！

渦巻いていた風が、アツという間に爆煙を払う。

「っ……」

ネイルは腕で顔を覆った。長い髪がなびき、服がパタパタと泳ぐ。
腕の下から目をこらす。

「……」

その中心。

「！」

驚くべきことだった。跡形も残らない“神の業火”にさらされた
はずのその場所に、人の形を留めているものが二つもある。

「――……？」

何が起きたのかわからない表情で、細波を構えたまま呆然と立ち
尽くすティース。

髪の毛の先や服の端々に微かに焼け焦げた跡が残っていたが、生
きている。それどころか、体そのものにダメージらしきダメージは

見えない。

そして、そこにいた、もう一人。

“風”だった少女は、まるで無重力の中を舞うように、つま先でふわりとティースの眼前に降り立った。

「間に合って、良かった」

ほんの僅かに内側にカールしたセミロングの髪が軽やかに踊り、身につけたヒラヒラした服が微かに宙を泳ぐ。小柄で可憐なその様はとても人とは思えない。

まるで空を自由に舞う——妖精のようだった。

「キミ……は……？」

混乱と、驚愕。

ティースは未だ呆然としていた。自分が助かったのはもちろんわかる。助けてくれたのが、目の前の少女だということもかろうじて理解できた。

が、それでも驚きに変わりはない。

……そこにいたのは、あの少女。娼牢に囚われ、エルバートに良く似ていた少女。彼の家族ではないかと、密かにそう疑っていた少女だった。

だが、

（あれだけの攻撃を……防ぐなんて——）

突如現れた少女の魔力は、桁外れなネイルの一撃を完璧に打ち払っていた。それはもちろん、下位魔や上位魔に出来る芸当ではない。

——ならば、一体？

だが、現状をなんとか整理しようと足掻く彼に、少女はさらに混乱に拍車をかける一言を口にした。

「ティース」

「……え？」

「ティース、平気？」

もう一度、少女はティースの名を呼んだ。
名乗った記憶はない。

「な……なんで、俺の名——」

だが、最後まで問いかける前に、少女は続けた。

「実は最初に見たときもアレ？　と思ったんだけどね。あまりにも大きくなってたし、まさかこんなところにいるなんて思わなかったから。……ティース。ボクだよ」

「え……？」

親しげな声と口調。

——脳裏が刺激される。

そのときになって、彼はようやく気付いた。

「……な……なんでッ!？」

“それ”がひどく聞き覚えのあるものだという事。それが、彼の脳裏の奥に存在する記憶と“全く同じ”だったということに。

だが……それは彼にとって、とんでもない“違和感”だった。

同じ。確かに同じだが、一つだけ、彼の記憶と明らかに違っている部分があったから。

ますます混乱する。

「な……なにがどうなって——」

なにしろ、目の前にいるのは紛う事なき“女の子”だったのだ。

それに……“彼”とはすでに再会を果たしていたはずで——

だが、少女はさらに言った。

「ボクのこと、忘れちゃった？」

「え？　い、いや……だ、だって、エルは——」

さらに困惑するティースに、ついに少女は微かに眉をひそめた。

「もしかして、あのエルバートって子のこと？」

「エ、エルバートお？」

彼にとって、それは全く知らない名だった。

そしてその反応で、少女は全てを察したらしい。

「……あの子から事情を聞いて、まさかとは思ったけど」

少女が右手を振るうと、再び一陣の風が吹いて残っていた炎を全てかき消した。そして肩越しに向けた可愛い瞳に、微かな不満

の色を浮かべると、

「キミ、二年間も一緒にいて、本気でボクのこと男の子だと勘違いしてた？ ……それ、いくらなんでもちよっとヒドくない？」

「……え？」

さらに混乱する。

エルレーンⅡファビアス。それはリイナとともに出会い、そして二年間をともに過ごした少年——のはずだった。

だが今、記憶の中にあるエルレーンの姿と、目の前にいる少女の姿が、彼の脳裏で重なり合う。

（あ、あれ……？）

不思議と違和感はない。いや、当然と言うべきか。もともとテイースも、彼女とエルバートは顔が似ていると感じていたし、そうだと言われて見てみれば、確かにエルバートよりも彼女の方が昔の面影が強かったようだ。

「じゃあ……本当に、君がエル……エルレーン？」

「……呆れた」

少女はため息をつく、やはり少々憮然とした様子で、

「そりゃ、昔からボクとリイナに接する態度がちょっと違うとは思ってたけど。まさか男の子だと思われてるなんて、さすがに想像しなかったよ……もお」

「……」

驚きに口が塞がらない。

それはそうだ。彼は本気でこの四年間……いや、一緒にいた二年間も含めた六年もの間、ずっと彼女のことを男だと思っていたのだから。

だがしかし。口調、声、態度……彼女が“少年”ではなく“少女”であったということを認めてしまえば、全てがピタリと当てはまった。違和感など、どこにもない。

どうやらそれは事実。

そして……数秒、

「……す、すまん」

ようやく事実を受け入れて、ティースは反射的に謝った。それが本当だとするなら、確かに失礼極まりないことだ。

「俺、本気で勘違いしてた……」

別に彼女——エルレーンが特に男っぽいわけではない。ただ単に昔は幼かったのと、彼女の言葉遣いが微妙なラインだったこと、そしてちょっとした勘違い——先入観のせいである。が、今は勘違いしようもない。年齢よりも幼く見えるのは昔と変わらなかったが、今の彼女は紛れもない女の子だった。

「……ま、いいけどね」

だが、ティースの謝罪に、エルレーンはすぐに表情を崩すと、
「キミらしいといえばらしいよ。変わりないみたいで、かえって安心したかな」

おかしそうにクスツと笑って、そしてすぐに視線を正面に戻した。

「詳しい事情は後だね。今はそれよりも」

「……」

その視線の先のネイルは、目を見開いたままじいっとエルを見つめている。どこか惚けたようにも見えるが、戦意を失ったわけではないだろう。

いや、むしろ、

「……すごいなあ。ルルーの攻撃を吹っ飛ばした人なんて、初めて見たよ」

口調は、どこか浮かれたものだった。

「ルルーはすごいんだよ。ヌーボーもねえ、ルルーの攻撃を受けて立ってられる人なんて、この世界にはそういないだろう、って言うってたんだから」

「……エル」

「大丈夫だよ」

だが、少女——エルレーンは全く怯むことなく、ネイルを見据えていた。

微かに、風がその髪をはためかせる。

「あの人、確かに信じられないぐらい強い。でもきっぱりと、言い切った。」

「ボクの方が、強いから」

「バルちゃん」

再び視界を埋め尽くす、炎の矢。

「エル！」

「下がって、ティース」

エルレーンは左手を後ろに向け、前に出ようとしたティースを制止すると、右手をゆっくり持ち上げた。

「！」

直後、ぼうつ、と、その体が淡い緑色の光に包まれる。瞳も微かな輝きを纏ってネイルに向けられた。

そして、口が“呪文”のような言葉を紡ぎ出す。

「風は、いずこより来たりて……いずこへ行くかを知らず——」

口調も先ほどまでとは違う。まるで何かが乗り移ったかのようにだった。

……微かにそよ風が吹いた程度。だが、ネイルの放った炎の矢は、そのそよ風に取り込まれるようにあっさりと消え失せていく。

「フォルっち」

だが、ネイルは炎の矢を弾幕にして接近していた。その背後に長い髭の騎士が炎の槍を手に浮かび上がる。

「エル！」

咄嗟に前に出ようとするティース。だが、エルレーンはまるで動じることなく、左手は彼の動きを制止したまま、右手がゆっくりと空を切った。

「されど、風の吹くところ、命が生まれ」

「！？」

再び、そよ風がネイルの両脇を吹き抜け、辺りを包み込んだ。ネイルの足が止まった。

「え……?」

そして、何が起きたかわからない顔で、自分の背後を振り返る。

「……フォルっち……?」

まるで憑き物が落ちるように、邪悪なる力を込めた炎は掻き消えていたのだ。

「バルちゃん? カイクン?」

続けて呼びかける。が、反応はない。

「万の邪なる者は、神霊の名の下、蠢き、止まむ――」
さあつ、と。

涼やかな風が流れ、禍々しさに満ちていた通路を、清涼な静けさが支配した。

「ルルー? ……ルルー!」

超絶的な破壊の力を持つ天使ですらも。

「……さあ」

そしてエルレーンは緑色の光を纏ったまま、微かにその衣服をはためかせてネイルを見据える。

「これでもう、キミの力は動けないよ」

「……」

ネイルは驚きの表情で目の前の少女を見つめた。

その目が、徐々に見開かれていく。

（……すごい……!）

そしてティースもまた、驚愕に身動き一つできないままだった。

……あれだけの力を持つ、おそらく将魔であろうネイル。その彼女の力を完璧に封じたエルレーン。小柄なネイルよりもさらに小さな体躯だったが、緑の光に包まれたその存在感は、神々しさすら身に纏っている。

そんな彼女を前に、ネイルは今、あまりにもあつさりと戦う術を失ってしまったのだ。

「それじゃあ……ティース」

そしてエルレーンはゆっくりと問いかける。

「ボクにはまだ事情がよくわからない。だから、この先はキミが判断して」

「――」

それは思いがけぬ選択だった。僅かに躊躇する。

……それを判断することは難しい。圧倒的な力の下、力無き相手に死を宣告することは、純粹な戦いの中で命を奪ってしまうことは、同じようで大きく違うものだ。まして……ティースという男の性格を考えればなおのこと。彼は視界に入ったものであれば、蟻を踏みつぶすことさえ避けようとする男だった。

だが――

「そいつは――」

体勢不利をようやく悟ったのだろう。

ネイルは間合いを取り、逃げようとした。

「……そいつは、悪だ……ッ！」

唇を噛みしめて、振り絞るようにティースは答える。

声は、微かに掠れていた。

「そいつは――……ッ!!」

「ありがと、ティース。……ゴメンね、嫌な質問して」

エルレーンは最後まで言わせなかった。

再び、風が渦を巻く。

「きっとボクもキミと同じ。でも」

何かを堪えるように、その目が鋭く細められた。

「奪うべき命は、確かに存在するよ。……ティース。ボクは、キミを信じてるから――」

風が周囲で鋭さを増し、やがて肌で感じ取れるほどに圧縮される。

「ボクは、あの人の命を……奪う！」

シュパアアアッ!!

螺旋を描きながら、鋭い風の槍がネイルの背を追った。目にも止まらぬ速さだ。逃げ出した彼女を貫くまでの猶予は、おそらく一秒もなかっただろう。狙いは正確。避ける余裕はおそらくない。防ぐ

手だても、また。それは確実に致命的な一撃。

――の、はずだった。

だが。

「！ あれは……ッ！？」

まるで、最初から示し合わせたかのように。ネイルが逃げた先。崩れた床。地下三階と繋がったその場所から、黒い影が一つ飛び出してきた。

「……」

長身、生真面目で無愛想な表情の男。手に携えたのは、刃がノコギリのようにギザギザになった長い剣だった。

「リユーちゃん！」

「ふっ……！」

短い呼吸音とともに、リユーゼットはその太刀を振るう。

「！」

衝突。

同時に、無音の衝撃が周囲に波及する。

「……ほう」

口から漏れた呟きは、微かに驚きを纏っていた。が、腕に力を込めるだけで、風の槍はその目前で四散する。

「！」

それを見たエルレーンの表情が、少しだけ厳しくなった。力を、感じたのだろう。

「……リユーちゃん！ ねえ、聞いて聞いて！！」

リユーゼットが床に降り立つなり、ネイルはすぐさま踵を返し、口を尖らせて彼に詰め寄った。

「あの子がなんかやった途端、ルールもバルちゃんも出てきてくれなくなっただよ！ ねえ、なんでなんでー！？」

「相性の悪い相手に当たったな、ネイル」

リユーゼットはそんな彼女をチラッと見やって、

「あの者が微かながらに纏うのは神気だ。おそらくは王魔。……格

が違う。力押ししか能のない貴様では、百年かかっても勝てはせん」
「ええーっ！ そんなの、つまんない！」

「つまるつまらぬの問題ではない。……さて」

リユーゼットはすぐさまティースたちの方へと向き直る。

「ティース。それに王魔の少女よ」

「……エルレーンだよ」

エルレーンの口調には、ピリピリしたものが混ざっていた。それだけ、新たに現れたこの男に対し、脅威を感じていたのだ。

「ほう。ならば、エルレーン」

リユーゼットは手にしていた剣を手放した。途端、剣は四散する光となって消える。

「貴様は、どうしても戦いを望むか？」

「……？」

不思議そうな顔をしたエルレーンを見て、リユーゼットは視線を横に移動させる。

その先にいたのは、ティースだ。

「ティース。私は、この場におけるこれ以上の戦いを望まない。一対一は望めないし、これ以上留まってあまり人の目につくのも好ましくない」

「ど……どういうことだ……？」

「貴様たちが戦いを望まないのであれば、私とネイルはすぐさまこの場所を去ろう、ということだ」

「ええーっ!？」

その提案に真っ先に意義を唱えたのはネイルだった。

「そんなの、つまんなー!!」

「ゴイン!!!!」

「……いったあ~~~~っ!!!!」

「阿呆はしばらく黙っている」

肘打ちが額に見事に決まって、ネイルはその場にうずくまった。が、リユーゼットの視線は相変わらず、ティースとエルレーンをそ

の場に縫い止めるように射抜いている。

そして、言った。

「エルレーンとやら。貴様はその、隣にいる男の命を失いたくはないのだろうか？」

「……！」

エルレーンの顔が強張った。

……コン。

リュージェットはさらに、ティースに向けて言い放つ。

「そしてティース。この中で、貴様だけは遙かに“低い場所”にいる」

「っ……！」

「このまま戦いになっても、勝敗はわからないだろう。だが、私とネイルがその気になれば、貴様の命だけは確実に奪うことができる。たとえばその後、我々が負けるとしても、だ」

「……」

言い返せない。悔しいことだが、それはおそらく事実だった。

コン。……コツン。

「さて、どうする？」

「……」

「……」

沈黙。

複雑な感情が、ティースの中で渦巻く。

（ここで……こいつらを逃がせば――）

タナトス。

ザヴィアだけではない。ネイルもまた、許し難い悪だった。リュージェットも……未だ信じられないことだが、その仲間だという。ここで彼らを逃すことは、新たな惨劇の種を世に放つことにもなるだろう。

だが――

「……エル」

「ボクは――」

エルレーンは言いかけて淀み、少しだけ視線を泳がせた。が、最後まで言わなくともわかる。

そこに浮かんでいた色は、明らかに戦いに否定的だった。

（――情けない……）

理由は、考えるまでもない。ティースの身を案じてのことだろう。
――コッソ、コッソ。

拳を握りしめた。

彼は、この場ではあまりに無力だった。少なくとも、戦局を左右するだけの力は持っていなかった。

彼らに対する怒りは変わらない。つい先ほど、目の前で短い生涯を閉じてしまった少女のことも忘れていない。“それだけの力”を持っていたなら……いやそれどころか、もし自らの命が危険にさらされるだけならばおそらく、彼は戦いを是としたに違いなかった。

だが、この戦いに賭けるものはそれだけではない。

コッソ。……ゴン。

「……わかった」

ティースは答えた。……そう答えることすら、今の彼には屈辱的だった。

本来、彼には選択肢を得られるだけの実力もない。彼がそう答えられるのは全て、隣にいるエルレーンのおかげなのだ。

しかし、そのエルレーンとて、ネイルとリューゼットの二人を相手にすればどうなるかわからない。事実、リューゼットは彼女の攻撃を造作もなく一刀両断していた。自信ありげなその態度も、決してハッターとは思えない。

自らが手助けできない以上、それほどの危険を、この再会したばかりの昔馴染みに押しつけられない。

それが、決断を促した最後の理由だ。

そして、

「この場は――」

彼がそう言いかけた、そのときだった。

ゴン……ゴイン……！！

「……っ！！」

リューゼットの後頭部を、一際大きな瓦礫がクリーンヒットした。

ドスン……ゴロゴロゴロ。

大きな破片が転がっていく。

「……」

「……」

「……」

一瞬の沈黙がその場を支配する。

言いかけたまま、思考停止したティース。

びっくりした顔で目を見開いたエルレーン。

そして、頭を垂れた体勢で固まったリューゼット。

……微妙な空気が流れた。

「ネ……イル」

だがそれは次第に重く、異様な気配を帯び始める。

「貴様には“状況”というものすら理解できんのか……」

ゴゴゴゴゴゴゴ。

ゆらりと。明らかにいつもとは違う雰囲気のリューゼット。

だが、その後ろ、ネイルはまるで言葉が聞こえていないかのよう
にしゃがみ込み、転がっていた壁や天井の欠片を次々とリューゼッ
トに向けて放っていた。

……ゴン。

また一つ。

リューゼットは首を振って、少し赤くなった額を押さえながら、

「ネイル……答えろ」

だが、ネイルはそっぽを向いて何も答えない。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……だってえ」

ようやく、ネイルは口を開いた。

「リユーちゃん……しばらく黙ってろって言ったじゃない」

「……」

その瞬間、その場の緊張感を保っていた何かが、キレた。

ドオオオオオン！！！！

「……うわあつ。リユーちゃん、すごい、すごい」

「死ぬ。貴様は死ぬ。馬鹿は死ななければ直らん」

手に産まれた、とてつもなく巨大な光のハンマー(?)を振り回すリユーゼット。

「だ・か・ら、馬鹿は馬鹿って言った方が馬鹿なんだってば！……あれえ？でもそーすると、馬鹿に馬鹿って言った人も馬鹿になるんだから——」

リユーゼットの攻撃を巧みに交わしながら、ネイルはうーんと考えて、

「あ、そっかあ。結局、みんな馬鹿なんだあ！」

「……」

ガスッ！　ゴガンッ！　ドオオオオオオオン！！！！

爆音と土煙を上げながら、二人の姿は徐々にティースたちの視界から消えていった。

——敵役にあるまじき、あまりにも緊張感のない去り方。

だが、しかし——

「っ……」

グッ、と、握りしめたティースの拳に、悔しさが満ち溢れていた。

……ふざけているようにも見える、二人の敵。そんな彼らに対してすら、隙を見出すことのできなかつた自分に。

(くそっ！)

戦いは、終わった。囚われた魔を助けるという目的は達していた。本物のエルレーンにもこうして出会うことができた。なのに……清

々しい気持ちはどこにもない。

今の自分にはそれが精一杯だとわかっていても。悔しい気持ちは拭い去れなかった。

「……ティース。行こ」

その気持ちを少なからず察していたのか。エルレーンもまた、再会の喜びは後回しに、今はこの場からの離脱を彼に促した。

「これだけ暴れたら、ココもいつ崩れるかわからないよ」

「……ああ」

それは正しいし、理解もしていた。

だが、ティースには一つ、ここにやり残したことがある。

「……ティース？」

怪訝そうなエルレーンの声を背に、ゆっくりと歩いていく。

――崩れ落ちた瓦礫。微かな残り火。

あれだけの戦いの中にありながら“その場所”だけはそのままの状態に残っていた。

「俺は……また、守れなかったな……」

微かに覗く赤いドレスの切れ端。

その目前に、膝をついた。

「セルマ……ごめん、な……」

「ティース？」

後ろからやってきたエルレーンも、そこに積み重なった大量の瓦礫と、その隙間から覗く赤いドレス、流れ出す赤い血に、すぐ状況を察したのだろう。

「……そっか……」

そして微かに視線を伏せる。

だが、その直後、

「!？」

次の彼の行動を見て、エルレーンは血相を変えた。

「え……え？　ちよっと待ってよ、ティース！　何をする気!？」

「……」

ゆっくりと瓦礫に手を伸ばしたティースは、そのまま振り返らずに答えた。

「女の子がいるんだ。……まだ、子供だった。せめて、きちんと埋葬してやりたい」

「だ、だって、この瓦礫の下なんでしょ？ ……ティース……キミ——」

「……心配するな。別に気が触れたわけじゃない」

瓦礫が崩れないように、ゆっくり、ゆっくりと力を込めていく。

声は哀しみに染まっていたが、比較的冷静だった。

「何度も経験した。俺は力不足だから。仕方ないって……でも、割り切れないから、全部持っていくことにしてるんだ。初めてじゃない。前にも、似たようなことがあった。そのときはきつかったけど、リイナのおかげで今はもう大丈夫だ」

「リイナの……？」

エルレーンは再び瓦礫を見つめる。

……その下にあるものが、どんな状態になっているかは想像に難くない。埋葬するにしても、全てを持っていくのはおそらく不可能な状態だろう。

「エル。……お前は見るの嫌だろ？ 先に行ってくれ」

グググ……と、上に乗っていた大きな瓦礫が微かにズレる。崩落した天井はそれほど細かくは割れずに、大きな破片のままそこにあった。そのため、一人の力で持ち上げるのは不可能だ。少しずつズラしていくしかない。しかも、瓦礫が崩れないように注意しながらだと、体の一部が現れるまでと考えるのも何時間かかる作業だろう。

「……」

しばらく、エルレーンは迷うようにその作業を見つめていたが……

……やがて、

「……手伝うよ」

「エル——」

「とんだ再会になっちゃったね」

その足下で風が渦を巻く。

「……すまん」

「男の子と勘違いされてただけでも、充分にヒドい再会だけどね」

「う……それもすまん」

風が吹き上げると、ティースの腕に感じる瓦礫の重さが半分以下になった。

「っ！」

力を込めると、少しずつ瓦礫が持ち上がっていく。

少しずつ、少しずつ。

赤いドレス。微かに流れ出した赤い血。目を背けなくなったが、ティースはそれをグッと堪えた。

（セルマー――）

脳裏を襲う、この数日間の記憶。

常に潜入任務と隣り合わせで、純粹にそれを楽しむことはできなかった。が、それは彼にとっても、決して苦痛ではなかった。

いや、もっと言うならば……確実に“楽しい日々”だったのだ。

（俺は……君の淋しさを、ほんの少しでも癒してあげられたのかな……？）

目の奥が熱くなる。いくら堪えようとしても、何度経験しようとも、それは決して耐え難いもの。

（ごめん……ごめんな……）

そして一筋、涙がこぼれ落ちる。

と――そのときだった。

「……え？」

エルレーンが突然、素っ頓狂な声を上げる。

「？」

怪訝な顔をしたティースの視線には構わず、彼女は続けて眉間に

皺を寄せ……そして直後、急にハツとしたかと思うと、

「……ちよっ、ちよっと待って、ティース!!」

「え？」

「あ、違うよ! 力は抜いちゃダメッ!!」

「え……っ!？」

慌てて力を込め直す。カラカラと細かい瓦礫が足下に転がった。

「ど……どうしたんだ……？」

当然のように不満の声を漏らすティース。だが、エルレーンはそれに構わず、やや耳を澄ませるような仕草をした。魔特有の大きな耳がほんの微かに動く。

「……？」

やがて、

「ティース……この子、瓦礫に巻き込まれたのはいつ？」

「え？ そりゃ……十分ぐらい前から――」

その後の戦いで、やや時間の感覚がおかしくなっている。実際のところは五分も経っていないだろう。

だがそれを聞いて、エルレーンは何やら確信したらしい。

そして、言った。

「この子、生きてるよ……」

「……へ？」

「生きてるよ、この子!!」

理解していない表情のティースに、エルレーンは繰り返した。

「瓦礫の下で生きてる! 潰されてないよッ!!」

「な――」

その意味が、彼の頭の中で形を為すのに、数秒。

「なんだってええっ!!？」

「あ! 待って! 動かしちゃダメッ!!」

「っ……ふぬっ……!!」

微かに瓦礫を持ち上げた体勢のまま、ピタリと制止するティース。が、その体勢はややくついらしく、足がガクガクと震える。

「エ……エル……ッ!!」

顔が真っ赤に染まり、こめかみの血管がピクピクと震えていた。

「慎重に、慎重にやってね」

吹き上げる風がほんの僅かに強さを増す。それとともに、ティースの腕にかかる重さも少しずつ緩和されていった。

「呼吸が聞こえる。そんなに大きく乱れてないよ……大丈夫。普通に生きてるから」

大丈夫、とは言うものの。そんなエルレーンの言葉が、彼に充分すぎるプレッシャーをかけていた。

ゆっくり、ゆっくりと瓦礫が持ち上がる。

……ミシッ!

「! ……エル……」

「しっ」

持ち上げようとした瓦礫の中心に、ほんの小さなヒビが走っていた。

——もし、これが崩れたなら。

そう考えると、ティースは気が気でなかった。

風が、さらに強さを増す。

ぼうっと、再びエルレーンの全身を緑色の光が覆うと、

「大丈夫。風は、命を産み出す力だから」

そう言った。

ティースにとっては初めて聞く言葉だったが、今はそれに縋る気持ちで一杯だ。

(セルマ……)

少しずつ、少しずつ、赤いドレスの先——小さな指先が見えてくる。

(……これは——)

そこまできて、ようやく理解した。

(奇跡だ……)

最初に崩れ、彼女を襲った壁の残骸。それが周りを囲むように積

み重なり、その隙間にうずくまるようにしていた彼女を、天井の崩落から守っていたのだ。

もちろん、まだ安心はしていない。いくらエルレーンの言葉を信じるとしても、かなりの血が流れているのは事実。どこか大きな怪我をしていると見るのが妥当だ。が、少なくとも、先ほどより希望のある状態であることは確かだ。

（見えてきた――）

指先、腕……その先に、ボロボロになった赤いドレスと――

ピシ……

「！」

ティースの手を微かな振動が襲った。

ピシ……ミシミシミシ……ッ

「エル……ッ……！」

「ティース！……吹き飛ばされないように踏ん張って……！」

それは、持ち上げようとした瓦礫が崩れ落ちるのとはほぼ同時だった。

ゴ……ッ……！！

エルレーンの体を纏うオーラが輝きを増し、途端、床から吹き上げていた風が暴走したかのように威力を増す。

「うわっ……うわああああっ……！！」

踏ん張る以前の問題だった。ティースの体はアッという間に浮き上がると、まるで木の葉のように吹き飛ばされてしまう。

「うっ……！」

何とか受け身を取って急所を庇う。瓦礫の破片が突き刺さったのか、手の平に鋭利な痛みを感じたが、そんなことは無視してすぐ視線を戻した。

「セ……セルマは……ッ……？」

「ゴメン。大丈夫、ティース？」

振り返ったエルレーンは、緑の光に包まれたまま、ニッコリと笑みを浮かべていた。

「無事だよ。怪我はしてるけどね」

瓦礫に埋まるセルマを中心に、風が強烈な渦を巻いていた。彼女の上を覆っていた瓦礫は二メートルほど吹き飛ばされ、そこで粉々に砕け散っている。

「……無事……なのか？」

「うん」

もう一度、エルレーンは答えた。

「……」

風が、止む。同時に、彼女を覆っていた光も消えた。

ふらっ……と立ち上がり、ティースはゆっくりと近付いていく。

「……うわ……っ」と

撒き散らされた瓦礫に足を取られ、転びそうになりながら。

——瓦礫の中。

「ホントだ……」

初めて、自分の目でそれを確認した。

「生きてる……」

丸々としたほっぺは汚れ、赤いドレスはところどころが破け、外気にさらされた右足からは血が流れている。その傷は決して浅くはない。

が、しかし。

「生きてる——」

頬に触れると暖かい。……あの、命の灯火が消えた直後の、嫌な生暖かさではなく。鼓動の感じられる暖かさだった。頭などの急所にも怪我はまったく見当たらない。

「……よかったね」

「っ！！」

何気ないエルレーンの一言。

その一言に、どうやら彼の涙腺は決壊してしまったようだ。

「っ……っ……！！」

俯き、言葉にならない嗚咽を漏らす。

——助けることができた。そう言ってしまうには、あまりに都合が良すぎるかもしれない。それはあくまで偶然であり、彼の力に依るところではないだろう。

だが――

「……良かった……」

どうでもよかった。自分が役に立てたかどうかなど、些細なことだった。

「良かった……ッ！」

怪我に触れないように、セルマの体をゆっくりと抱きかかえ、そつと抱きしめる。

「良かったあああつ……」

「……」

そんな彼を、エルレーンはしばらく、まるで自分のことのように見つめていた。微かに目を細め、少しだけ彼と同じように瞳が潤んでいるようだ。

が、やがて、尖った耳を微かに動かして、

「……そろそろ行かなきゃ、ティース。人が集まってくるみたいだし……その子も、医者に見せないと、ね」

「あ……ああ」

その言葉によく我に返り、涙を拭うと、力強く頷く。

考えなくてはならないことはあった。が、今はとにかく、彼女が生きていたことの喜びで頭が一杯だった。後のことは、彼女の意識が戻ってからでいいだろう。

こうして――リガビュールの事件は最後にほんの僅かな光を残し、ひとまずその幕を閉じたのである。

その7『二ヶ月の代償』

ゲノールトの事件から約一ヶ月。

「うう……寒っ」

年をまたぎ、寒さはさらに勢いを増していた。リガビュールの街には半月ほど前に雪が降り、それがそのままうっすらと積もったまま。さすがに夜の客引きたちも薄着の上に上着を着込んだりと、寒さ対策をしているようだ。

とはいえ——今は昼。リガビュール名物の歓楽通りも、今は静まり返っていることだろう。

そんな至って健全な街の通りを、ティースは手に息を吐きかけながら歩いている。

すぐ近くの広場にはいくつか店も出ているが、客足はいまいちのようだ。

「気をつけないと、道もすべっ——おわっ!!」

言った途端、足を取られてコケる。

「……いたた」

痛いやら情けないやらで、顔を歪めながらティースはゆっくり立ち上がった。そこからはさらに慎重に、まるでがに股のようになつて歩き出す。

「つめた……まいったなあ」

ズボンにはいかにも“コケました”と言わんばかりの濡れた跡が残り、どうにも情けない。が、まさか宿に着替えに戻るわけにもいかないし、仕方なくそのまま向かうことにした。

表向き、街は平穏だ。事が事だけに、半月前の事件は一般にはほとんど公にされていない。エルバートを含むキュンメルの人々も、未だ街に隠れているのか、あるいはすでに脱出したのか、あれ以来、音沙汰がなかった。

『申し訳なさそうにしてたよ、あの子』

というのは、エルレーンが語った、エルバートの最後の表情である。結果的にティースは騙されていたということだが、別にそれについての遺恨はない。結果的に彼の行動は、ティース自身の主義にも沿ったものであったし、その必死な気持ちは充分に理解できていたから。

ちなみに彼がエルレーンに似ていたのは単なる他人の空似。彼が最初、目印の灰色のローブと赤いリボンを身につけていたのは、最初にゲノールトに侵入した際、エルレーンのものを借りてきたそうである。確かに思い返してみれば、不自然な部分は多かったのだが……思い込みは恐ろしい、といういい教訓だろう。

向かった先は、街の小さな診療所。そこですぐに手続きを済ませる。金は……さすがに一ヶ月分の宿代と合わせると手持ちが乏しかったので、申し訳ないと思いつつも、ミューティレイクの紋章を示し、そっちに付けてもらうことにした。とはいえ、戻れば貯蓄がいくらあるはずだし、どうにかすぐに返せる金額である。

一ヶ月。

それは、セルマの怪我が完治するまでにかかった日数だ。未だ足の傷跡は痛々しいが、普通に歩く分には支障無いところまで回復していた。

(さて、と……)

これでもう、この街でやり残したことはない。

「ティース様」

「ん……？」

宿の前まで戻ると、そこにはリイナが小さく手を振っていた。淡い水色のセーターに白のロングスカート。つい最近、この街で買った服だ。

「リイナ」

そんな彼女を見て、改めて胸が高鳴る。

無骨な旅用のローブとは違い、普段着の彼女はますます魅力的だ。

ずっとその格好でいて欲しいとさえ、ティースは思った。

「二人は？」

「中にいます。……全て、片付きました？」

「ああ。終わったよ」

「じゃあ、いよいよ出発ですね」

ニッコリと微笑んだ。

待ち侘びた、という表情。ある程度落ち着いてからこの数日というものの、彼女はもう一人の昔馴染み……シーラとの再会を心待ちにしている様子だった。

「ここからだとホルヴァートを經由して、ネービスまで一週間ってとこかな」

「楽しみです。……でも、ちょっとだけ不安もあるんです」

「ん？」

二人で宿の入り口をくぐっていく。

「確か“人”の世界は、仕事をしてお金を稼がなければ生活できないですよ？ ……私、この世界の常識には疎いですし、上手くできるかどうか……」

「ああ……でも、心配ないよ。こっちの世界に慣れるまでは、俺が何とかするからさ」

だが、自信ありげにそうは言ったものの、実は彼の心も不安で一杯だった。その不安の正体はもちろん、これから帰る先、その状況のこと。

（やっぱクビ、かなあ、俺……）

彼がそう考えたのは至極当然である。事情はどうあれ任務中に勝手に隊を抜け、そしてすでに二ヶ月間も音沙汰なし。普通に考えればとくに除隊されていておかしくない。

戻って、こっちで使った医療費を返し、なおかつリィナとエルレーンをもしばらく養う。また傭兵家業に戻ったとして——実のところ、単純に考えても少々厳しい気がしていた。

（……あ、それに）

もう一つの要素をすっかり失念していたことに気付く。

（セルマの養育費も必要だし……）

セルマⅡゲノールト。結局、ティースは彼女をネービスに連れていくことに決めていた。それは彼女自身の意志とも相談した結果である。

あるいはこの治療期間に、ゲノールトが彼女を迎えに来るかもしれない、とも考えていた。が、結果的には誰一人として姿を見せることはなく——噂によれば、ゲノールト総帥は生死不明とも耳にする。それほど、ネイルとリ्यूゼットは徹底的にゲノールトを叩き潰していったのだ。

（……でも、ま）

ひとまず考えるのをやめ、そしてティースは肩の力を抜いて深呼吸する。

（生きてるんだ。どうにかなるさ）

「……ティース！ おかえりっ！！」

「うわっ！ ……うぷっ！」

扉を開けた途端、まるで待ち伏せしていたかのようなタイミングでセルマが飛びついてきた。

ここに来てから金銭的な理由もあって間食を止めてはいたが、それでも急に痩せるなんてことはあるはずもなく、相変わらずその背丈の割には激しく密度の濃い衝撃である。

「セ……セルマ。急に飛びついてくるのは止めてくれないか……心臓に悪い」

「ええ、なんでー？」

「おかえり、ティース」

奥では、エルレーンがおかしそうにクスクスと笑っていた。頭には大仰な包帯。……と言っても、怪我をしたわけではない。魔の証である尖った耳を、主にセルマに対して隠すためのものだった。もちろん彼女には、怪我をしているのだと言い含めてある。

少し間をおいて、後ろからリィナが部屋に入ってくると、

「では、そろそろ準備をしましょうか。九時半には馬車が出るはずですから」

「ああ、そっか。馬車で移動するのも久々だなあ」

普通なら徒歩で行くところだが、今回はセルマも一緒のため、街道を走る馬車を利用することにしたのだった。もちろんそのための資金は別に取ってある。

「さ、行こうか」

「うん！」

元氣良く返事をし、真っ先に宿を飛び出したセルマ。

「あ、セルマ。ダメだよ、勝手に行っちゃ。……ほら、ティースが淋しがるから」

それをエルレーンが追いかけていく。

「ええー。じゃあ、早く早く！ エルも早く！」

不思議とウマが合うように見えるのは、エルレーンも幼いから……ではなく、その逆だ。彼女は見掛けとは裏腹に精神的には非常に大人びた人物であり、セルマとの付き合い方もすぐに悟ったようである。

そんな二人を視線の先に捕らえながら、ティースの隣のリイナがそっと呟いた。

「エルさん、まるで頭を大怪我をしたみたいですね」

「……まあ」

耳を隠すほどなので、かなり大げさに包帯を巻いている。今はその上から帽子をかぶっているのもそれほど目立たないが、頭の半分は包帯に隠れていると言ってもいい。

「夏だったら汗掻いて大変だったって、冗談交じりに愚痴ってたなあ」

笑いながらティースが答えると、リイナは苦笑しながらも申し訳なさそうに、

「少し、悪い気がします。本当はエルさんが先のはずなのに……」

答えた彼女の長い髪が、ふわっと微かな風に踊った。

——そんな彼女は、エルレーンと違って頭に包帯も巻いていなければ帽子もかぶっていなかった。馬車で移動するため、服装もほぼ普段着のまま。

「そうかな。エルは別に気にしてないと思うけど」

言いながら、ティースは自らの左手の甲を見つめた。

何の変哲もない、左手。だが時折、そこに自らの体温とは違う不思議な暖かさを感じる。

そこに埋め込まれたのは——刻印型の破魔具“朧”だ。

——それは、あの事件が終わった翌日の早朝のこと。

「これが“朧”だよ」

無事に再会を終えたティース、エルレーン、そしてリィナの三人は、新たにもう一つ借りた部屋に集まっていた。そして集まるなり、エルレーンが二人に向かって差し出したのは、何とも言い難いまるで古代文字のようなものが描かれた、手の平サイズの透明なプレートである。

「これが……？」

「朧、ですか？」

ティースもリィナも不思議そうな顔で見つめる。確かにそれは、ただ透明なプレートに変な文字を書き記したものにしか見えない。

「うん。でも、朧本体はこの文字の方。プレートは朧をしまっておくための容器なんだ」

「ふうん……」

ティースは不思議そうに受け取り、裏返したり透かしたりしてそれを見ていた。

「……でも、エル。お前、これをどうやって手に入れたんだ？ モンフィドレル領に行ってたって聞いたけど……」

「あ、うん。それはね」

ティースが返したプレートを受け取って、エルレーンは答えた。

「モンフィドレル領に知り合いがいるの。ボクが子供の頃、こっちの世界のことを色々教えてくれた人で、ボクがこっちに興味を持つようになったキッカケなんだ」

「その人も、やっぱり魔なのか？」

「うん、もちろん。今は人と結婚して、そこで学者さんをやってる」
「……へえ」

彼女は何でもないようにサラッと言ったが、それは一般的な常識人が耳にすれば驚きに飛び上がってしまうほどの事実である。

「効果は……二人とも、知ってたよね？」

無言で頷くティースとリイナ。

“朧”——それは魔が人に姿を変えるためのアイテムだ。人と魔の間に交わされた誓約によって効力を発揮し、その代償は約八割ほどの魔力。だが、その代わり、効力は半永久的であり、誓約を交わしたどちらかが命を落とすまで続く。逆に言えば、どちらかが死ななければ効力を取り消すことはできない、ということだ。

後戻りは出来ない。

エルレーンは今一度問いかけた。

「リイナ。これを使ったら、もう向こうには戻れないよ」

「ええ」

だが、リイナは即答。

次に視線はティースを向く。リイナに向けたものと比べると、そこにはほんの僅かな躊躇いがあった。

「……ティース。ボクは、キミがこんな仕事をして、あんな人たちと戦ってるなんて、思ってもいなかったんだ」

前日の出来事を思い返すように、視線が泳ぐ。

「これを使っちゃったら、もし昨日みたいなおことがあっても、ボクもリイナも、もうキミを助けてあげられない。実際使ってみないとわからないけど、とても昨日の二人に対抗できるだけの力は残らないと思う。それでも——」

「……やめてくれよ、エル」

だが、ティースもまた、笑いながら即答した。

「それじゃあ俺があまりに情けなさすぎるじゃないか。……そりゃ、俺にはまだ力がない。今の二人には遠く及ばないし、そうなるまでに何年かかるかわからないし、もしかしたらそこまでの才能はないのかもしれない。……でも、俺は二人の夢を叶えてあげたい。そのために努力することぐらいできる。それに――」

少しだけ、引き締める。そしてグッと、拳を握りしめた。

「……あいつらは俺自身の力でどうにかしたいんだ」

エルレーンはその気持ちを理解したようにゆっくり頷いて、

「うん、わかった。ティースのそういう前向きなところ、ボクは好きだな」

「……はは。サンキュ、エル」

と、ティースは笑って答えたが、

(……前向き……か)

それはやや思いがけない言葉だった。

サイラスとナナンの死を目の当たりにして以来、彼はずっと後ろ向きだった。過去を引きずり、後悔することで強くなろうとしていた。

――だが。

(なんとなく……ギレットさんの言いたかったことがわかった気がする)

後悔することでも人は強くなれる。だが、それは強い憎しみによって、だ。

「大丈夫。……強くなる」

自らに言い聞かせるように、ティースは呟いた。

(ここにいる二人のために……俺自身のためにも――)

「じゃ……リイナ。準備はいい？」

だが、リイナは少し躊躇して、

「いいんですか？ 私よりもエルさんが先に――」

「ううん。ボクはほら、小柄だし、リイナより目立たないから後で

いいよ」

理由になっているのかいないのかわからないが、とにかくエルレインは準備を進めた。

「それにティースも、男か女かわからないお子様より、大人っぽいリイナが相手の方がいいよね？」

「……もう許してくれよ」

「ふふ、冗談」

笑って、朧のプレートを二人の間に掲げる。

「じゃ、プレートを挟んで、お互いの左手と左手を合わせて。……大丈夫だと思うけど、二人が心から朧の効果を願わないとダメだからね」

ピタッと、ティースとリイナの左手の間でプレートが挟まれる。

「……」

「……」

二人の視線が一瞬だけ交わされた。

ティースは不思議な気恥ずかしさを感じ、慌てて目を閉じる。

（な……なんか緊張するな……まるで結婚式——）

思わず想像した単語に、ますます頭に血が上った。

（な、なに考えてんだ、俺……相手はリイナだぞ。リイナ……リイナ——）

気持ちを落ち着かせるべく、念じるように過去の映像を思い浮かべる。

（……そうそう。確か昔のリイナは無愛想で、ホントに非常識だったんだよなあ）

あの薄暗い屋根裏。あの頃の彼女は“おはよう”とか“おやすみ”という挨拶すら知らなかった。笑うことだって、ほとんどなかったのだ。

（それが今では——）

昨日、ティースの無事を確認したリイナは、安堵した表情を見せた後、きちんと説明せずに姿を消したことに對し、微かな怒りを彼

にぶつけてきた。彼としてはエル——だと思っていたエルバートに止められたこともあり、仕方ない部分もあったのだが……それでも素直に謝った。

それは彼女が、心から自分を心配していたからだ、そう感じる事ができたからだ。

ようやく動悸が収まって、ゆっくり目を開く。

と——リィナはそんなティースを、不思議そうに見つめた後、
(っ!?)

小さく微笑んだ彼女に、心臓が再び跳ね上がった。

(……何やってんだろ、俺……)

「二人とも、目を閉じて」

プレートを中心に、微かな光が二人を包んでいく。

朧によって結ばれる絆。それさえも、今のティースには喜ばしいものだった。

錯覚であれ、それが彼女との繋がりを永遠にしてくれるような、そんな気さえしていたから——

「そーいやすつと聞き忘れてたけど……エル」

舞台は再び現在へと戻って。

すでにティースたち四人は、二頭立て四人乗りの馬車に乗り込んでいた。盗賊対策のため同じ目的地の馬車がいくつも集ったこの一行は、リガビュールから約百八十キロほど離れたホルヴァートへ四日、さらに百二十キロほど離れたネービスへ三日、合計一週間かけて到着する予定である。

「お前、どうしてゲノールトに捕まってたんだ？」

馬車に揺られ始めるなりセルマはすぐ眠気を催したらしく、今はティースの膝の上に頭を乗せて眠っていた。そんな彼と向かい合う二人掛けの座席にリィナとエルレーンが並んで座っている。

「うん」

エルレーンは頭に巻いた包帯をほどいてやや軽めに巻き直しながら、

「リガビュールには十一月の頭ぐらいには到着してたんだよ。それで、あとはリイナを待つだけだったんだけど……そこにいるうちに、ゲノールトの噂を聞いたの。そしたら、居ても立ってもいられなくなつて――」

「わざと捕まったのか？」

「うん。――もしかしたら、偉い人に直接文句を言えるチャンスがあるかなつて」

ティースは呆れ顔をする。

「……それ、無謀すぎ」

彼に無謀と言われるのは、密かに結構ショックなことだと思うのだが……それはともかく、エルレーンは素直に頷いて、

「それはわかってたんだけど、他に方法がなかったんだよ。……今回みたいにあまりにも騒ぎを大きくすると、リイナと待ち合わせるのに支障が出ると思ったし。ボくら、こっちの世界に家があるわけじゃないから、もし待ち合わせに失敗したら、二度と会えなくなる可能性だつて高いんだもの」

「まあ……」

それでも無謀なことに変わりはなく。

ただ、彼女の名誉のためにここで断つておくと、本来の彼女はそこまで無謀でもなく、考えが足りないわけでもない。今回の状況は彼女の信念にとって、どうしても動かざるを得ないものだったのだ。それを知っているティースには、一応彼女の心情は理解できた。

「あ、聞き忘れたといえば……ティース」

ふと思ひ出したように、今度は逆にエルレーンが質問を口にする。

「キミ、シーラと結婚したってホント？」

「え？ あ……ははは、お前までそんな話を聞かされてたのか」

苦笑いのティース。もちろん二人はティースの故郷であるカザロ

スまで行動をともにしていたのだから、同じ噂を耳にしていちつともおかしくない。

「あ、エルさん。それはやっぱりデタラメだそうですね」
嬉しそうにニコニコしながらリイナが答える。

……相変わらず、彼女の中での結婚は“悪”のようだった。

「そっか」

対するエルレーンの方は少し微妙な反応だ。彼女の方はリイナと違い、こちらの結婚の意味を知っている。だからこそ、だったのだろう。

「じゃあ駆け落ちってというのは、やっぱりシーラの勉強のためなんだね」

「ああ。って、そもそも駆け落ちなんかじゃなくて……エルならわかると思うけど、あいつももう少しで——」

「うん、わかる。カザロスの人それぞれらしい話をしてたから。だから、駆け落ちだと思われたんだと思うし」

「？」

リイナ一人が会話の流れを理解していないようだった。

「でもそれ、多分シーラの方から言い出したんだよね」

「そりゃそうさ。……考えてもみろよ。俺が自分から連れ出せると思うか？」

冗談交じりに笑ったティースに、エルレーンはちよつと考えて、「女の子としては、少しはそういう強引さがあってもいいんじゃないかと思うけどね」

「はは……あいつ相手にそんなことしたら、こっちが蹴っ飛ばされちゃうよ」

彼は至極当然のようにそう言ったのだが、

「……え？」

エルレーンは理解できない顔で素っ頓狂な声を上げた。

「シーラが？ ティースのこと蹴っ飛ばすの？」

「え？」

逆に驚いたティース。だが、リイナもエルレーンと同じようにびっくりした顔で見つめていた。

「あ、そっか」

その理由に気付く。

（あの頃のシーラって、まだ今みたいな感じじゃなかったっけ……）
口調などは今とさほど変わっていない。が、彼に対し、今のよう
に明らかに邪険な態度を取ることはなかったのだ。

ティースは苦笑して、

「今じゃ、ね。顔を合わせるたびに邪魔者扱いだよ。……ああ、いや、本当に直接蹴っ飛ばされるなんてことはほとんどないけどね」

だが、二人の驚きの表情は変わらないまま、

「ティース様を邪魔者扱いだなんて……シーラさんが、そんな……」

「あの、ティースにベツタリだった、シーラが……？」

「ベツタリってほどだったかなあ……？」

実際はそうでもなかったのだが、その頃、ティースが二人を訪れるときは必ずと言っていいほどシーラと一緒にだった。だから彼女らの目にはそう映っていても仕方あるまい。

（今と比べものにならないほど良好な関係だったのは確かだけど……）

一瞬の沈黙に、馬車の音が大きくなる。

「……だから、さ。二人ならきつと大丈夫だと思うけど、もしかしたら、昔とは少し勝手が違うかもしれないよ」

「……」

「……信じられません」

無言で思案顔のエルレーンに、リイナの呆然とした呟きが重なった。

そして再び、少しだけ重い沈黙。どうやらティースの語った事實は、二人にとって想像以上にショックだったらしい。

「はは、まあ四年も経ってるしな」

そんな雰囲気振り払うように、ティースはやけに明るい声を出

した。

「結構、色々と変わっただろ？ 俺のアレルギーとかさ」

「……そっちは変わったとかのレベルじゃないよね」

考えるのを止めて、エルレーンがすぐさま話に乗ってくる。

「それってボクが触れてもダメなのかな？ セルマが大丈夫なんだから、とりあえず子供には反応しないんだよね？」

「多分……アウトかな。俺の経験からすると、子供っていてもせいぜい十二歳ぐらいがギリギリで……エルは確か、えっと十三——」
「十五だよっ！ あと三ヶ月で十六！」

「あ、そ、そっか」

だが、エルレーンはまるで迫力のない可愛らしい瞳で不満そうに、
「今の、絶対ワザとだ。シーラと一週間しか変わらないって、覚えてないはずないもの」

ティースは苦笑を返した。……もちろん意図的だ。そんな冗談が飛ばせるほど、心には余裕ができていた。

ちなみに、一週間だけエルレーンが年上なのである。

「ま、なんにしろ、エルは確実にアウトだと思うよ」

「でも、シーラは大丈夫なんだよね？」

「ああ……それが不思議なんだよなあ。あいつより一つ年下の子でダメだったんだ。昔から知ってる子ならいいのかと思ったんだけど、リイナはダメだったし……」

「でも、リイナはこの四年で結構変わったでしょ？ その点、ボクならそんなに変わってないから、大丈夫ってこともあるんじゃないかな？」

「……って、自分で言ってるじゃないか」

エルレーンは明るく笑って、

「だって、見た目が子供っぽいのは本当のことだもん。ホントは全然気にしてないよ。それに、これはボクらの種族の特徴でもあるからね」

“風”は魔の十属性の中でも、もっとも小柄——特に女性——な種

族なのである。

「じゃあ……」

ティースは膝のセルマを起こさないように苦心しながら、右手をエルレーンに向かって差し出す。

「一瞬だけ、触れてみてくれないか？ 五秒未満」

「そんなに一瞬なの？」

「ああ。こう……なんていうか、触れた瞬間に視界がフェードアウトしていく感じなんだ」

「じゃあ……」

指先が、触れる。

その瞬間。

「っ……！」

案の定、頭のとっぺんから血が引いていくような感覚に襲われた。頭がフラつく。

「ティース！ 大丈夫！？」

「あ、ああ……やっぱダメみたいだなあ」

触れたのが本当に一瞬だったため、気絶することは免れたようだ。が、頭の奥に痺れたような感覚が残っており、意識をはっきりさせるため頭を振る必要があった。

「……それによってないって言っても、俺から見れば結構変わったよ。だって、今はどこからどう見ても女の子だ」

「……うーん」

エルレーンは少し考えて、

「たとえばの話だけど、同じ年ぐらいの、男の人か女の人かわからない人に触れられた場合、どうなるのかな？」

「……それは試したことないなあ」

そもそも原因がわからないのだ。が、例えばミューティレイク家主治医のマイルズが以前言ったように精神的な問題であれば、その判断はティースの認識に委ねられているということだろう。つまり、彼がその相手を女と認識しているか否か、ということになる。

（とすると、俺はシーラのことを女だと認識してないってことか？
……そんな馬鹿な）

そんなはずはあるまい。もしそれが、恋愛対象としていうこと
であれば話は違ってくるが、

（……それならエルだって、なあ）

他にも除外されそうな人間はいくらでもいそうなものだ。

「でも、本当に困ったね。……それじゃ恋人もできないんじゃない
？」

「そりゃ、まあ……ね」

そこへ、リイナが不思議そうな顔で、

「え？ 恋人でしたら、たくさんいますよね？ 私もエルさんも、

きつとシーラさんもティース様の恋人です」

「ちよっ……リイナ」

ティースは慌てた。……別に誰が聞いているわけでもないが、事
情を知らない人間が聞いたらひどい誤解をされそうなセリフである。
（恋人つてのを、親友みたいなもの勘違いしているんだもんなあ
……）

そこへ、エルレーンがフォローを入れる。

「リイナ、違うよ。恋人っていうのは、その人にとって特別な一人
のことなんだよ」

「え？ 一人だけなんですか？」

「うん。リイナの考え方だと――」

エルレーンは少し考えて、

「リイナにとって、結婚して子供を産むことはものすごく嫌なこと
だよな？」

「それは、誰でも嫌です」

真顔での返答に、エルレーンは慣れているのか、ただ頷いて、
「だったら“その人”の頼みなら結婚して子供を産んでもいい、っ
て、そういう風に思える人が恋人、かな」

「子供を……？」

「たとえば、ティースがキミに子供を産んでくれって頼んだとして――」

「ちよっ、ちよっと、エル!!」

突然のたとえ話に、ティースはびっくりして、

「そ、そういう例えにいきなり俺を使わないでくれ!」

「え? ……あ、そ、そっか」

顔を真っ赤にして抗議するティースに、エルレーン自身もその意味を深く読んでしまったのか、少しでも頬を上気させた。

「?」

リイナは一人だけ、不思議そうなまま、

「とにかく……それぐらい大切な人、ということですね?」

「……うん。そうかな」

エルレーンはすぐに立ち直ったが、ティースは未だ頭を熱くしたまま、リイナの顔を正視できない状態だった。

……と、そこへ見事な追い打ちが炸裂する。

「でもそれなら、きっとティース様は私の恋人です」

「!?!」

完璧にクリーンヒットだった。

「な……な……な……!」

何も答えられず、ティースはただ視線を合わせないことに必死だが、リイナの方はまるで意味を理解した様子もなく、

「でも、ティース様がそんなひどいことを言うはずないですけどね」
冗談っぽくそう付け加えた。

俯いたままのティース。

「ティース?」

そんな彼を不思議そうに見つめていたエルレーン。

やがて怪訝そうな顔で何事か思いつき、

「ティース……キミ、もしかして――」

途中で切った言葉の先は、おそらく彼自身すらもまだ自覚しきっていない真実を捕らえていたのだろう。

「……そっか」

そう呟いて、その幼く見える顔に少々難しそうな色を浮かべた。

「？ ……あの、エルさん？ 私、何か悪いことを言いましたか？」

「え？ ううん。何でもないよ」

エルレーンはそう答えたが、やがて外を見つめ、何やら困った様子でそっと呟く。

「四年……だもんね」

再会の喜びをもう一度噛みしめるかのような独り言。だが、そこに全く別の意味が込められていたのは確かだった。

二月に入り、いくらか一時期の寒さは緩和されてきた。

大陸の北に位置するだけあって、ネービスの冬は他に比べれば長く厳しいが、それでも馬車の通行が困難になるほどの雪が降ることは少なく、北の街クレイドウルなどと違って、交通機関が麻痺することはほとんどない。

そんなネービスの街の昼時。

朝から働き詰めだった者も、学園に通う学徒たちも、今は一時の休息を取り昼食で腹を満たしている頃だろう。街の通りはまだ寒いにも関わらず厚着した人々が行き交い、商売人たちも精を出している。

そんな中。

中央通りを北に進み、一般住宅街と高級住宅街の境目を西に向かつてずっと進むと、そこに大きな屋敷がある。

ネービスでも有数の大貴族ミューティレイク家の屋敷だ。

その、一辺がキロ単位であろうかという大きな敷地の正門……から、少々離れた場所。

「……行かなきゃなあ」

白い息を吐きながらそこに佇むは、言わずと知れた長身の青年、ティーサイトⅡアマルナだった。ここに到着したのは五分ほど前だったが、それからしばらくそこをうろついており、端から見ると少々不審な人物にも思えたかもしれない。

「よし。……あと六十数えたら行くぞ」

そんな彼の腰が引けてる理由は言わずもがな。

今回のことで迷惑をかけた人々を、どんな顔で訪ねればいいかわからなかったのである。

(二十……二十一……)

彼自身、自分の選択は正しかったと思っている。二人の昔馴染みと無事再会できたし、その一人は臍によってすでにその夢を叶えることができた。……が、それはあくまで、彼個人の問題である。迷惑をかけてしまったことは間違いないし、やむを得なかったことはいえ、ミューテイレイクの名を色々なところで勝手に利用してしまった。下手をすれば罪も問われかねない。

(三十二……で、でも……三十三……最低でも自分の荷物を引き払って……三十四……勝手にツケちゃった分のお金を返して……それから――)

ため息が口をつく。

(それに……三十七……クビになるなら……三十八……期待してくれたファナさんやアオイさんには……三十九……ちゃんと謝らなきゃな……四――よし!)

決意はできた。

六十数えるまでもなく、彼の足は正門へと向かい始める――かと思いきや、すぐに立ち止まって、

「……で、でも、待てよ。せめてお詫びの品でも買ってから――」

「なにやってんの、ティースさん」

「おわあっ!!」

文字通り、飛び跳ねた。体も、心臓も。

「あ、ああ……」

そんないつもと変わらない様子の彼女に、ティースは少しホツと
していた。緊張が僅かに緩和されて、

（これなら、中でもそれほど大きな問題になってないのかも）

そんな淡い期待を抱きながら、体を起こしつつ尋ねる。

「で、でもいいところで会ったよ。これから――」

「で」

だが、次の一言に、雪を払おうとした体が凍り付いた。

「今更、何しに戻ってきたの？」

「――」

淡々と。

いつも通りに。

……ゆっくりと、視線を彼女の元へと戻す。

そこには以前のように、秘めた親しみというのが微塵も感じられ
なかった。

いや、それどころか――

「あ……」

自らの考えの甘さに心の中で頭を殴りつけながら、ティースは頭
を下げた。

「……すまない」

「なにが？」

だが、リディアは表情を動かさない。そこに突っ立って、頭を下
げる彼をただ見下ろしたまま。……そこには、微かな怒りすら浮か
んでいた。

「何を謝ってんの？ あたしに謝って、何か解決すんの？」

「あ……ああ、そうか……」

ティースは頭を上げた。それからひどくゆっくりとした動作で冷た
く濡れたズボンの雪を払う。

そうしながら考えをまとめ、ようやく口を開いた。

「みんなに迷惑かけたのはわかってる。でも、俺、どうしてもやら

なきゃならなかったんだ」

「……」

「それが言い訳だったのはわかってるよ。責任は取る。ファナさんにも謝って、もし償う必要があるなら償う。それで……俺は、もう二度とここには来ないよ」

真摯な気持ちだった。少しでも自分の気持ちが伝わればと、そういう願いを込めて言葉を口にしていた。

「ファナさんに？ 責任？」

だが、リディアの口調に変化はない。それどころか、怒りの色は表情だけでなく、言葉の中にすら微かな起伏をもたらし始めていた。「別にファナさんに償う必要なんかないよ。ティースさんが突然いなくなったところで、ディバーナ・ロウはちっとも困らないもの」

「……そうか」

それは厳しい言葉だったが、少なくとも現段階では事実だろう。

「とにかく俺、ファナさんのところへ行くよ。それで荷物をまとめて……そう。シーラを連れて出ていくから——」

「だから」

リディアはもう一度言った。

「何しに戻ってきたの？」

「……？ だから荷物をまとめて、シーラを連れて——」

「だから」

繰り返す言葉は、あくまで淡々としていた。

「ここから連れていく？ 誰を？」

一歩、リディアは近付いた。長身の彼を見上げる瞳が、微かに細められる。

「……」

ドクン、と。

心臓が鼓動を打った。

「……そうか」

その可能性は考えないでもなかった。ティースがいなくなったこ

とで、シーラもまた、このミューティレイクの客人ではなくなったのだ。ここに置いてもらえると考えるのは樂觀的すぎるだろう。

「ってことは、俺の荷物もシーラが持ってたか。じゃあ、どこに移り住んだのか——」

「荷物はそのままあるよ。ティースさんが残していった蓄えも、全部そのまま。銅貨一枚たりとも動かしてない」

「え？」

ドクン、と。

心臓が再び嫌な鼓動を刻む。不安が胸を包み込んだ。

「だから言ってるでしょ。……ファナさんに責任？ もっと責任のある相手、他にいるんじゃないの？」

そんな彼に、リディアは淡々と続けた。

「ファナさんは優しいから。ティースさん、きつと何か事情があるんだろうって。だから“二ヶ月”待つって。そう言ったの」

「二ヶ月……？」

呆然と呟いたティースに対し、リディアは寂しげに視線を伏せた。そしてポツリと呟く。

「……四日、遅かったよ、ティースさん」

「！」

その言葉が、胸に突き刺さる。

リディアは続けた。

「今、シーラさんはここにはいない。どこに行ったかも、あたしにはわからない。……ちゃんと生きてるかどうかって——」

突如、肩が震え、語尾が乱れる。

——涙声だった。

「な——！」

「なんで……！」

「!？」

再び顔を上げた彼女の目には涙が浮かんでいた。そのまま彼を睨み付けると、拳を握りしめ、叫ぶ。

「なんで……なんで、もっと早く戻ってきてくんなかったのさッ！
シーラさん、ものすごく不安そうだった！ ティースさんがもう
戻ってこないんじゃないかって……あの通りの性格だから、口には
出さなかったけど……でも、でも！」

ティースは呆然と、その叫びを聞いていた。

「……あいつが……いなくなった……？」

「どんな事情があったのか知らないけど！ なんでもっとシーラさ
んの気持ちとか考えてあげられなかったの！？ ああ見えてあの人
ものすごく繊細で、ものすごく寂しがり屋だって……長い間一緒に
いたくせに、そんなことも知らなかったっていうのッ！？」

「！」

言葉が、脳髓を焼く。

——知っていた。彼はそのことを知っていたのだ。

何故ならそれは……昔、まだ小さかった頃、今ほど強くなかった
ときの彼女そのものだったから。

（あ——）

彼女の気持ち。

最近の彼女は強くなった。だから大丈夫だと思った。もっとした
たかに生きてくれると思っていた。

だが、現実はい——どうやら彼が思いこんでいたものとは、大きく
違っていたようだ。

「ッ！！」

グッと拳を握りしめ、ティースは地面を蹴る。

「学園だ。サンタニアに行けば——！！」

「……無駄だよ」

だが、落ち着きを取り戻したりディアの言葉が、無情にもそれを
引き留めた。

「シーラさん、ティースさんがいなくなったすぐ後からサンタニア
には行っていない。休学届けを出したみたい」

「きゅ……休学届け……？」

唇を震わせて、ティースは振り返る。

「そ、それじゃあ……どこに――」

「だから、あたしにもわかんないってば……」

「……」

沈黙。

心臓の鼓動が、やけにうるさかった。

（学園にも……行っていない……？　じゃあ、一体どこに――？）

そう考えて、一瞬の思考の後、

（……そんな……俺――）

愕然とする。

――知らない。ティースは、シーラの行きそうな場所を一つも知らなかった。

このネービスに来てからというもの、彼女とどこかに出掛けた記憶がほとんどない。それは最初のうちは仕事で手一杯だったりとか、途中からは彼女に恋人が出来たからとか理由はいくつもある。だが、それにしても、彼はこの街での彼女を知らなすぎた。彼女の交友関係すら、一つも把握していなかったのだ。

……浮かれていた。

リィナやエルレーンとの再会。久しぶりに会った昔馴染みの成長した姿に胸を躍らせた。その瞬間は、確かにここで待つ彼女の存在を忘れていた。

「っ……！！」

自分の愚かさに胸がムカムカする。

たったの四日。

その程度、どうにでもなるはずだった。もちろん彼は期限のことを知らなかった。が、たとえそうだとしても、少しでも早く彼女の元に戻ることを考えて行動していれば、ここで待つ彼女の気持ちを考えていれば、間違いなく間に合っていたはずだろう。

「……探してくる……！」

「あ、ティースさん！」

背後からリディアの呼び止める声がする。が、足は止まらなかった。

（出ていったのが四日前なら、まだどうにかなる！）

未だ雪の残る地面を蹴りつける。

まずは、ミューティレイクに移る前まで住んでいた、あの借家。

そこがダメなら、たまに買い物に出掛けた店。そこがダメなら――（絶対、見つけ出してやる……！！）

とにかく、彼女と同じ記憶の存在する場所。たとえば些細なものでも。そこがダメなら、何日でも街を彷徨って探し出す。――探し出してみせる。

その決意は楔のように胸に打ち込まれた。

それは彼の中で、何事にも優先するものだった。

（絶対、絶対に――！！）

……と。

そうして走り出してから、ほんの数秒後のことである。

「あら？」

すれ違ったのは、屋敷に戻ってきたミューティレイクの使用人。

どうやら買い出し――というより、品物を注文に行つての帰りだろうか。紙のメモらしきものを手にして、

「ティース？」

どうやら顔見知りのようだ。使用人は足を止め、隣を駆け抜けようとした彼の名を呼んだ。

「……」

だが答える余裕もなく、彼はその場を走り抜け――

「お前……いつの間に戻ってきたの？」

「……――は？」

ピタリ、と、足が止まった。……いや、やや凍った地面に足を取られ、再び体が宙に浮く。

「おわっ……てッ！！」

再び痛打。だが、今度は痛みなど気にならなかった。地面に腰を

落としたまま、ゆっくり、ゆっくりと振り返る。

……その視線の先――冬の日差しに踊ったのは――透き通る水飴のような輝くブロンドのポニーテイル。腰に片手を当て、地面に尻餅をついた彼を呆れて見下ろす視線。

もちろん、見覚えがあった。

「え……」

それはまさしく――

「なにをやってるのよ。……私に、何か言うべきことがあるのではないの？」

そう言っただけを見つめるのは、どこか冷たさすら感じるほどに容姿端麗な美少女。

「し……し……」

ティースは、震える指を目の前の少女に向けた。

そして、

「……シーラああッ!？」

「？」

指さして叫んだ彼に、シーラはその形の良い眉を僅かにひそめて、

「なに？ 何かの嫌味？」

「な……どどど……どこ行って……え……?」

「あ、シーラさん、おかえりなさい」

その背後から、トコトコトリディアがやってくる。

「どこ行ってたのー？ あ、買い出し？」

シーラは彼女を振り返って、

「ええ。買い出しと言っても注文してきただけで、あとは勝手に届けてくれるみたいね」

「そっか。今日は寒かったし、もしかしたら凍死してるんじゃないかと心配してたよ」

「？ そこまで寒いかしら？」

「そうでもないかなあ。……あ、そうそう。ティースさんが、つい先ほど戻ってきたみたいだよ」

「ええ、見ればわかるわよ」

「あはは。シーラさん、実は嬉しいのに我慢してるんでしょ？ いいよ、ほら。今はあたししか見てないし。どうぞ、感動の抱擁を」

「……怒りの鉄拳の間違いではなくて？」

だが、目の前で繰り広げられるその会話に、ティースはまるで参加できずにいた。

（な……なにが、どうなって――？）

「ご苦勞様でした、ティースさん」

至って平然と、まるで何の違和感もなく、ティースはミューティレイク別館の執務室へと迎え入れられていた。

正面の机には、二ヶ月前とまるで変わらぬ暖かな微笑みのミューティレイク家当主兼ディバーナ・ロウ総帥、ファナ||ミューティレイク。そしてその隣には、相変わらず温厚な表情に縁なし眼鏡のイングヴェイ||イグreshウスー|アオイ、がいる。

「期限の“三ヶ月”まではまだ時間がありましたのに。すでに何か収穫がありましたか？」

「え？ あ、は、はい……」

見聞を広げる旅。無断の失踪ではなく、許可を得た上での放浪。

……どうやらそういうことになっているらしいことは、すでに耳にしていた。意味ありげに笑うアオイの視線にも助けられ、ティースは懸命に話を合わせている。

「では、“お貸しした”紋章を戻していただけます？」

「は、はい」

懷から、六剣の紋章を出し、それを歩み寄ってきたアオイへと手渡す。

それを見て、ファナはニツコリと微笑むと、

「ご苦勞様でした。しばらくはゆっくり体を休めていただいて結構ですわ」

「はあ……」

「他に、何か？」

「あ、いえ……じゃなくて、えっと、その――」

あまりの展開になかなか頭がついていかない。が、こうなった以上、言うべき事は言っておく必要があると、ティースはそう思っ

「その、実は旅の途中でお金が――」

「それについては、ご心配無用ですわ」

「で、でも、ちゃんと返――」

だが、ファナは本当に不思議そうな顔をして、

「何故ですか？ ティースさんは任務で旅をなさったのです。その費用をこちらで持つのは当然ですわ」

「……」

口答えはできない雰囲気だった。

いや、もちろん口答えなどする必要はなかったのだが、

「……その、それと」

この後、またいくつかのお願い事をする立場の彼としては、非常に心苦しいことこの上なかったのである。

「実は――」

とはいえ……それも結局は、あっさりと受け入れられることになるのであるが。

「リディア。……一体、どういうことなんだ？」

ディバーナ・ロウ復帰の手続き、その他の懇願、全てが済んだ後、執務室の前で待っていたリディアに、ティースは不満げな顔で詰め寄っていた。

「なにが？」

トボける彼女に、ティースの眉間に微かに皺が寄る。

「あ、あのなあ……冗談にしても、さっきのはタチが悪すぎだぞ。そりゃ俺が悪かったことは悪かったんだけど、それにしても……」
だが、リディアはあっけらかんと答える。

「冗談？ あたし、嘘なんて一つもついてないよ。全部、真実だし」

「な……だ、だって、シーラが出て行ったなんて——」

「え？ 出て行ったなんて言っただけ？」

「言っ——」

言いかけて、考える。

「——ってない……」

「今はここにいない、って言っただけだもんね」

勝ち誇ったように、リディアは悪戯っぽく言った。

「シーラさんがどこに出掛けたかだってホントに知らなかったし」

「で、でも」

会話を思い出し、どうにか反撃の糸口を探し出す。

「期限が二ヶ月、とかって言っただろ？ でも、ファナさんは三ヶ月だったって。……それは、どう考えても嘘じゃないか」

「ああ、そのこと」

何故かりディアは不満そうに口を尖らせて、

「実際はそうだったんだもん。……あーあ、嫌なこと思い出しちゃった」

「え？」

「ティースさんのせいで、あたし、一ヶ月も書庫の整理しなきゃいけなくなっただけだからね。からかったのは、その腹いせだよ」

「へ？」

いまいち意味がわからない。

「ホント、あたしには感謝して欲しいぐらいなんだけどなあ」

困惑するティースに、リディアは頭の後ろに手を回してそっぽを向きながら言った。

いつも通りの言葉の、ほんの端っこに僅かな真剣さを交えて。

「大事なこと、忘れかけていたこと、気付かなかったこと。色々と確認できたんじゃないの？」

「！」

ドキッとする。

それは……その通りだった。全てが丸く収まっていたのは結果論。

彼がシーラの存在を失念しかけていたのは紛れもない事実なのだ。

「文句は、それだけ？」

「……」

文句などあろうはずもなく。

「じゃ、あたしはファナさんに話があるから、そこどいて？」

「あ、ああ……」

扉の前から移動する——と、直後、ティースは思い出して、

「そ、それじゃあ、リディア？ シーラが休学して学園行ってない
つてのは……」

ドアの前に立ったりリディアは振り返って、

「ああ、それ——」

「それも、嘘ではないわ」

「……え？」

廊下の向こうからやってきたのは、話題の少女——シーラだった。
やはり何故か、ミューティレイクの使用人服に身を包んでいる。

そして彼女はまず、リディアに視線を向けると、

「……あのとときのティースのおかしな反応、やっぱりあなたの悪戯
だったのね」

「あはは」

リディアはペロツと舌を出すと、ノックしながら執務室のドアを
開いて、

「でも、嘘はついてないよ。……ちょっとだけ小道具使って芝居入
れちゃったけどね」

ポケットから小さなビンを出して見せる。——目薬だ。

「相変わらず手の込んだことね……」

呆れるシーラに対し、笑って手を振りながらリディアは執務室の
中に消えていった。
と。

「……お、おい、シーラ」

ティースは彼女らのそんな会話など聞こえていない様子で、

「ど、どういうことだ？ 休学？」

「ええ。それは本当よ」

「な、なんで――」

「なんで？ ……なんで、ですって？」

シーラは目を細め、彼を見据えた。

「お前がいなくなって戻ってくるかどうかわからなかった以上、働かなくてはここににいるわけにいかないでしょう。いくらファナの好意であっても」

「……」

返す言葉もなく。

「最終試験も受けられなかったし、卒業は一年延びることになりそうよ。……でも、もしお前が認めないのなら、このままやめてもいいわ」

「そ、それは困る！！」

ティースは即答した。……立場がどうも逆に思えて仕方ないが、彼女の夢は、彼にとっても夢だ。だから、彼らの間ではこれで普通なのである。

「そう。だったら、あと一年、頼むわね」
素っ気なく言い放つシーラ。その後、思い出したように付け加えて、

「それと。いつかの約束も、一年延長してもらおうわ」

「え？ 約束？」

「ええ。なんでも一つ、言うことを聞くという約束よ」

「あ。ああ……」

彼はすっかり失念しかけていたが、確かにいつだったか、そんな約束をしていた。

「どう？」

「……」

無言で、見つめ返す。

――リディアの冗談は、確かに起こりうる事実でもあった。もし

彼がディバーナ・ロウを除名されていたなら、彼女はここにいられず……いや、たとえファナが認めたとしても、ここにいることをよしとせずに出ていただろう。そして二度と、会えなくなっていたかもしれない。

……二度と、戻らなかったかもしれない――

そう考えると急に、胸を中心に、体が熱を帯びた。

「いや」

そして答える。

目の前の少女の顔を真っ直ぐに見つめて。

「そのぐらい、おやすい御用だ。……二ヶ月も留守にしている、すまなかった」

「……え？」

頭を深く下げたティースに、シーラは少しびくりした顔をする。が、視線はすぐに横に流れた。

「や……やめなさい。……気色悪いわ」

「あ、あのなあ」

その言葉に少なからずショックを受け、ティースは顔を上げて抗議する。

「気色悪いって言い方はないんじゃないか？　せめて、らしくない、とか――」

シーラは横目で彼をチラッと見て、

「虫酸が走る、とか、蹴り飛ばしたくなる、とかの方がいい？」

「……いや、気色悪くていいよ、もう……」

諦めたようだ。

「……あ、でも、さ」

だがその後、再びティースはその顔に明るい表情を浮かべた。……その先の言葉は、確実に彼女を喜ばせることができると思ったから。

「え？」

そして、不思議そうな顔の彼女に、言った。

「きつとお前にとっても、嬉しい知らせがあるんだ――」

「……にしても、ほんつとわかんない人だなあ」

「ふふ、そうですか？」

夕日の射し込む執務室の中。部屋にいるのは屋敷の主ファナと、彼女の補佐役である執事のリディアだ。

二人の机の上には書類のようなものが山積みになっている。ほぼ、日課。それを二人で捌いていく。話をしながらでも、その速度が緩むことはない。

そして二人の話題に上っていたのは他でもない。シーラのことだった。

「あの人、二ヶ月前はホントに出ていきそうな雰囲気だったんだ。だからあたし、嘘をついてまで引き留めようとしたのに――」

そうしてリディアは首をひねったまま、大きく息を吐いた。

「いざ期限になったら、今度は除名するのを一ヶ月でいいから延ばして欲しい、なんて。……おかげであたしは一ヶ月も書庫の整理をするハメになっちゃってさ」

「それは、賭けなどなさったリディアさんの自業自得ですわ」

リディアは口を尖らせて、

「何でも言うこと聞くなって約束しちゃったんだもん。……ファナさんも鬼だよ。いくら交換条件だからって、こんないたいけな少女に一ヶ月も重労働を課すなんて」

「あら。でしたら書庫ではなく、庭の手入れになさいます？ 外はまだ風も冷た――」

「ううん。ファナさんは天使様のように慈悲深い人だよ」

「……まあ」

クスクスと笑うファナ。

「ですが、リディアさんの苦労はきつと無駄にはなりませんわ」

「やっぱり？　そう思う？」

「ええ」

ファナは微笑んだまま頷いて、そしてゆっくりと目を閉じた。

「ティースさんは、色々学んで戻ってこられたようです。……今年は無理かと思っただけ、もしかすると五月に間に合うかもしれないわ」

五月。それは帝都ヴォルテストでデビルバスター試験の行われる月だ。

リディアは頭の後ろで手を組み、背もたれに体を預けて、

「うーん、あたしはさすがに無理だと思うけど……まあ、行って自信を失うだけ、ってことはないかもね」

「次のことは、予定通りアルファさんをお願いしようと思ってますの」

「……え。ホントにやるの？」

びっくりした顔をして体を起こすリディア。

「ていうか、アルファさん、引き受けるって？」

「いえ、まだ何もお知らせしておりません」

「じゃあ、まずそこからスタートじゃん。……大丈夫かなあ。それに、アルファさんから学ぶことなんてあるの？　そりゃ、実力は間違いないと思うけど、“あれ”はちょっと……他人には吸収できないよ、きつと」

「ええ、私もそう思います」

「……ファナさん。なにを考えてるの？」

「そうですね……すぐにはなくとも、そうすることが結果的に良い結果を導くような、そんな気がしますの」

「根拠は？」

まるで理解できない顔のリディアに、ファナは変わらぬ笑顔のままいつものように答えるのだった。

「なんとなく、ですわ——」

幕間『一撃の男』

カアアアアア……ン。

「なっ……!？」

甲高い音が鳴り響き、レアスⅡヴォルクスの手から木刀が弾かれたとき、その場にいた誰もが目を疑った――

新年を祝う催しが終わり、普段通りの生活に戻って少しの日が過ぎ去った頃。

新たにディバーナ・ロウに入隊したデビルバスター候補生の青年は、その初日から“能力”と“外見”という二つの意味で屋敷の人々の注目を浴びることになった。

彼の名はクリシュナⅡガブリエル。自己申告と戸籍によれば、ネービス西にある“剣の街”ジラート出身の十七歳、今月の誕生日を迎えて十八歳になる男性だ。身長は百七十センチを少し越えた程度で平均より少し高いぐらい、体型はスリムだが貧弱ではない、あまり無駄のない体付き。顔の作りも涼しげでかなりのハンサムだといえるだろう。

だが、しかし。実を言うと、それらの要素自体は多少人々の目を引きはするだろうが、極端に興味を集めるほどのものではない。

では、何故彼の外見が注目を集めたかという――

ミューティレイク別館二階の一室。

「つしよっ……」

左右に結った短めのお下げ、そばかすの残る顔の純朴そうな一人の少女が、その部屋の掃除をしていた。

パメラⅡレーヴィットというのがその少女の名だ。年齢は十五歳。このミューティレイクに住み込みで働きながらネービスに住む両親

と二人の弟を養い続けて、今月で丸々三年になる、見た目のイメージよりは幾分活発で気の強い、明るい性格の少女だった。

パンツ、と小気味良い音がして、皺一つない純白のベッドシートが外から射し込む真昼の陽光に映える。

「これでよし……っと」

彼女に与えられていた仕事は、主に屋敷――特に別館の清掃や各部屋のベッドメイクなどである。屋敷の客人と接する機会も多く、屋敷に住まうデビルバスターたちやデビルバスター候補生、その関係者たちとも顔見知りだった。

そして、

「ふう……」

いつも通りに自ら仕事をこなしていたこの少女が、あまりの驚きに立ち尽くすことになったのは……新たにやってくるというデビルバスター候補生の部屋を準備し終え、そこを出てきたときのことだった。

（……あれ？）

部屋を出た彼女の視界に映ったのは、ちょうど大階段を上ってくる二つの人影。

そのうちの片方――頭のとっぺん近くで左右に束ねた長い髪が印象的な少女は、パメラの良く見知っている人物だった。

（エレン？）

同じ年で同僚。本人同士の認識はともかく、周りから言わせれば“仲が良い”と言える間柄の少女だった。

そして、もう片方。

（……あれが新たに來たっていうクリシュナ様かな……？）

話し掛けるエレンの言葉にテンポ良く言葉を返しながら近付いてくる青年。

その格好は“貴族風”とでもいいえば一番わかりやすいだろうか。膝丈ぐらいの前が開いた装飾付きのコート、半ズボンにハイソックスという出で立ちにはあまり一般人が身につけるものではなく、額に

備える古ぼけた薄黄色のゴーグルが妙にミスマッチだった。

（変わった格好——）

そう。

普通であれば“変わった人が来たな”ぐらいの感想で終わっていたことだろう。そして“変わった人”などという人種は、この屋敷ではそれほど珍しいものではない。

だが、

「——!？」

その青年の顔をはっきり認識した瞬間、パメラはハッと息を呑む。続けて口元に手を当てると目をいっぱいに見開き、まるで幽霊でも見たかのような驚愕の表情をそこに浮かべた。

幽霊？

——確かに。その表現は今の状況を表すに最適だったかもしれない。

「ん？」

青年がパメラの存在に気付いて視線を向ける。

と、同時にエレンも気付いた。

「あら、パメラ。部屋の掃除はきちんと済んだの？ ……パメラ？」

エレンは彼女の返事がないことを訝しむと、その視線が隣の青年——クリシュナの顔に固定されているのを見て、

「ああ。この方が新たにいらしたデビルバスター候補生のクリシュナ様よ。ちゃんとご挨拶——って、ちょっと。あんた、なにボーッと突っ立ってんの？」

「え……あ」

パメラはハッと我に返り、慌てて廊下の脇に避けた。……が、その視線は、相変わらずクリシュナの顔を窺ったまま。

と、そんな彼女にエレンは少し意地の悪い笑みを浮かべて、

「なあに？ あなた、もしかしてクリシュナ様に見とれてんの？」

「……え——」

普段であれば、そんな軽口に反論するところだった。このパメラ

とエレンは、本人たちこそ犬猿の仲を謳っているが、その実“喧嘩するほど仲がよい”と周りに評される関係であり、こういったやり取りは決して珍しいことではない。

だが――

「……」

パメラは何も答えられずに黙り込んで、俯いた。

――それどころではなかった。

（そんなはず――）

彼女の心臓は予測外の事態に早鐘を鳴らし、その脳はあまりの出来事に混乱して上手く言葉を紡ぎ出せない状態だったのだ。

（そんなはず、ない……）

ただ、心の中で呪文のように繰り返しながら。

「パメラ、というのか？」

「っ!？」

青年の声に、弾かれたように顔を上げるパメラ。だが、目が合うと、またすぐに視線を泳がせてしまう。

それでもかろうじて、震える唇が言葉を紡いだ。

「は……はい」

「へえ」

青年――クリシュナはマジマジと彼女を見つめ、それからその涼しげな顔に小さな笑みを浮かべて、言った。

「こんなデカイ屋敷だから使用人も垢抜けたのばかりかと思ってたけど、キミみたいに田舎者っぽい子もいるんだな」

「……え？」

意表を突かれた様子で、パメラの表情が固まる。

が、クリシュナはそれに気付かないのか、それとも気付いていて気にしていないだけなのか、そのまま言葉を続けた。

「ああ、だからどうこうってのはないけどさ。だからキミもそんなに恐縮なんかせず、気軽に俺に話し掛けてくれればいい」

「……」

「ま、とにかく、これからよろしく頼——」

「——失礼します」

クリシュナが言い終わるより早く、パメラはその身を翻していた。

「？」

「パメラ？」

驚いたようなクリシュナの表情と、やはり拍子抜けしたようなエレンの言葉を背に、パメラは足早にその場所を離れた。

「……」

廊下を進み、まだ明るい日差しが射し込む大階段を一階へと下りていく。

周りで動く使用人たちの間を抜け、一階ホールから屋敷の奥へ続く通路の一つへ達すると、胸の早鐘はいつしか不快なものへと変わっていた。

（……違う。あんなの——）

冷静に考えれば簡単にわかったこと。

いくら顔が似ていても。

いくら声が似ていても。

（サイラス様じゃ、ない……）

当たり前のことだった。

彼女が慕っていたデビルバスター候補生“サイラスⅡレヴァイン”は、すでにこの世の者ではない。これが夢でも幻でもなく、現実である限り。どんな方法を使おうとも、どんな奇跡が起ころうとも、死人が生き返ることなど決して有り得ないのだ。

他人の空似。

そんなことは、学のない彼女にもよくわかっていたはずのことで。
「っ……！！」

涙が溢れてくる。

田舎者などと言われたことは、ちっとも悔しいと思わない。彼女は自分の容姿が垢抜けないことぐらい理解していたし、それを特別気にしているわけでもなかったから。

ただ……否応なしに記憶が呼び起こされた。そして、忘れかけていた悲しみが蘇ってしまった。

ただ、それだけのこと。

(……やっと、気持ちの整理ができたと思ったのに……)

涙の理由を誰かに詮索されるのが嫌で、パメラは顔を伏せながらそのまま屋敷の奥へ向かった。

書庫に通じる通路は比較的人の少ない場所だ。途中、怪訝そうに振り返る同僚の姿は目に入ったが、少なくとも彼女を問い質す声は一つもなく――

「……ふう」

どうにか気持ちを落ち着かせながら壁にもたれると、ほんの少しだけ頭痛がした。

(……意地悪)

それは確かに、彼女にとっては残酷な偶然。

(神様の、意地悪……)

また涙が溢れそうになって、パメラはゆっくりとその場に崩れ落ちた。

その日の夕刻。

別館の一階ホールには、豪華なメンバーが珍しく一同に介していた。

その内訳は、青年が一人、女性が一人、そして少年が一人、である。

「で、お前は呆気なくその新入りに負けちゃったわけか」

「負けてねえっ!」

「まあまあ。わかってるってば、レアスくん。……でも、ま」

口論する二人を宥めるようにそう言ったのは、大人っぽい外見とはアンバランスに子供っぽい仕草でお団子頭を小さく傾ける女性――

ーディバーナ・ロウの総隊長、及び第一隊ディバーナ・ファントム隊長のアクアールビナートだ。

「いくら油断していたにしても、レアスくんがいきなり負けちゃうぐらいの子なんだから、相当なものなんじゃないの？」

「……てめえ、ちつともわかつてねえじゃんか！ だから、負けてねえってさっきから何度も言ってるだろうがッ！！」

そしてテーブルに身を乗り出して反論したのが、赤いツンツン頭が目立つ弱冠十二歳の天才少年、第三隊ディバーナ・カノン隊長、レアスⅡヴォルクスである。

さらに、

「ま、その真偽はともかく、だ」

そんなやり取りを適当に流しながらビールの入ったコップを傾けたのは、灰色の布を頭に巻き、一見“ならず者”のようにも見えるラフな出で立ちの青年、第二隊ディバーナ・ナイト隊長、レインハルトⅡシュナイダーだった。

「聞いた話で確認しちやいないが……どうもその新入り“誰かさん”にそっくりらしいじゃないか」

「え？ 誰かさん？」

「……」

その言葉に、少しだけ勢いを失った赤髪の少年が眉間に皺を寄せた。

そのまま視線が横に流れる。

「なに？ なんのこと？」

わからない顔のアクアに、視線をそむけたままのレアスが殊更に素っ気なく答えた。

「サイラスの野郎にそっくりなんだよ」

「サイラスくん？」

きょとんとした顔のアクア。

もちろん彼女も、元レアスの部下であり、デビルバスター候補生でもあったそのサイラスという青年のことは良く知っている。

それから思い出したような顔で、ポンと手を叩くと、

「そういや昼間、使用人の子たちがサイラスくんのこと話してたわねえ。どうして急にそんな話を、と思ったんだけど……」

「別に、だからどうってわけでもねえ」

そう言いながらもどこか不機嫌そうなレアス。

レイは頷いて、

「ま、死人が生き返ったってわけでもないしな。……で？ そいつ、少しは使えそうなのか？」

アクアが口を挟む。

「決まってるじゃない。油断してたとはいえ、レアスくんが負け――」

「負けてねえッ！ 剣を弾かれたただけだッ！ それに！」
勢い良く反論した後、一瞬の空白。

「それに――」

レアスは一つ息を吐くと、まるで懺悔するかのようにゆっくり目を閉じた。

「……油断は、してねえ」

「え？」

「……」

驚きに目を見開いたアクア。その横でコップを傾ける手を止めたレイ。

動きを止めた二つの視線に、レアスは繰り返した。

「油断は、してねえんだ。あの一撃は身をかわすのがやっとだった」

「……」

「……」

その告白に、アクアとレイは顔を見合わせる。

「本当にレベルの高い“瞬歩”だ。ヘタすりゃ、俺以上かしんねえ……」

「……」

「……」

もう一度、アクアとレイの間で視線が行き交う。
驚きは消えないまま。

——そして数十秒後。

一つの“疑問”を口にしたのはアクアだった。

「じゃあ……それほどの実力者を、なんだって一から鍛えることになっっているわけ？」

レアスは小さく首を振って答える。

「それが、ちょっと“問題”のあるヤツでな……」

「——ぱんぱかぱーん♪ さあ本日も新しい朝、希望の朝がやって参りました！ 凍える空気、どんよりと曇った空、清々しい朝とは決して言い難いですがしかしそんなことは全然関係ナッシング！ 我らがミューティレイクお掃除部隊はお嬢様のためお客様のため時にはいがみ合い時には助け合いながら今日も今日とて元気に屋敷中を駆け回るのであります！」

日が昇る前の薄暗く冷たい空気を引き裂くように、テンションの高いトークがその一室に響いていた。

「つとまあ、そんな前口上はこのくらいに、さあ、それでは早速ゲストに歌っていただきましょう！ 哀愁漂うカントリーソングを歌わせたら右に出る者なし、ちよっぴり残ったそばかすが愛らしい十五歳、パメラ||レーヴィットさんです！ わーわーどんどんひゅーひゅーぱふぱふー！」

「……」

「って、アレ？ ちよっと？ おーい、パメラー？」

「……」

「パメラー、パメちゃん。おーい、起きろー。座ったまま寝たら

死ぬぞー」

ヒラヒラ。

「……え？」

電源が入ったようにパメラは肩をビクツと震わせ、キョロキョロと辺りを見回した。

少し肌寒い空気。ミューティレイクの屋敷とは少し違う、やや質素な八畳ぐらい部屋にベッドが三つと小さな鏡台が一つ。

「……あれ……？」

ここはミューティレイクの敷地内にある建物の一つ、女性使用人寮の一室である。

そしてパメラが座っているのは、自分に割り当てられたベッドの上。着ているのは寝巻ではなく、ミューティレイクの制服。

そう。彼女は先ほど起床し、準備を終えてこれから仕事に向かうところだったのだ。

「……あ、なに、ヴァレンシア？」

状況を把握し、パメラはそう言ってようやく目の前に立つ女性を見上げる。

「聞いてないしね」

その反応に対し不満そうに口を尖らせたのは、パメラよりも二歳半ほど年上の同僚であり、基本的に三人一組で使われるこの寮部屋の室長でもあるヴァレンシア嬢キッチンだ。

ややクセのついたショートカットの髪、かなり大きめで強い光を宿す瞳、悪戯っぽさを浮かべる口元がどこことなく“猫”を思わせる女性である。

パメラは小さく首を振って、

「あなたのことだから、どうせまた意味不明なことを言ってただけなんでしょ？」

「ひ、ひどいわ、パメラッ！」

ヴァレンシアは大袈裟に目を見開くと、

「この陰鬱で怠惰な雰囲気の漂う重苦しい朝の空気を一掃するため

苦悩に苦悩を重ねた末に乙女の羞恥心さえもかなぐり捨てて一肌脱
ごうとしたこのあたしの血の滲むような努力を意味不明だなどとい
うまるでその存在自体を否定するかのような一言であっさりと片付
けようとするなんて血も涙もない鬼や悪魔の所業としか思えないわ
ッ！」

「きょ……今日はまた絶好調ね、ヴァレンシア……しかも意味わか
んない……」

たじろぐパメラに、ヴァレンシアはグツと胸を張って、

「“今日”は？ ……いいえ、違うわ、パメラ。あたしはいつでも
絶好調。何故ならこのあたしこそが、ミューティレイクの美しく優
雅で知的な使用人の鑑、ヴァレンシアⅡキッチンだからッ！」

「喧しく幼稚で痴的、の間違いじゃないの？」

と、そこへ口を挟んだのは、洗面所から部屋へと戻ってきた少女
だった。

「毎度毎度、朝から騒がしいこと」

どこか小馬鹿にしたような口調。やや自尊心の高そうな表情。

長めの髪を頭のとっぺん近くで左右に分けたその少女は、この三
人部屋を使用しているもう一人の同僚、エレンⅡライブリだ。年齢
はパメラと同じ十五歳だったが、背の低さもあってか見た目はそれ
よりも少々年下に見える。

エレンは小さなため息を吐くと、腰に手を当て呆れ口調で、

「まったく。二人とも、少しは格式あるミューティレイク家使用人
としての自覚を持って欲しいものね。あなたたち二人がそんなんだ
から、同部屋のこの私まで一緒にたにされ——いでっ！ いだだだ
だだだッ！」

突如彼女が上げたのは、とても格式あると言い難い悲鳴だった。

「ちょ……いでっ！ いでででッ！ 痛いッ！ ……はっ、離し
なさい！ ヴァ……ヴァレンシアアアああッッ！！」

「あれ？」

「あれ、じゃないわよオッッ！」

エレンは二つに分けて縛ってある髪の毛の根本を押さえながら、いつの間にか後ろに回り込んだヴァレンシアを涙目で睨み付けると、
「あ、あああんと、一体、どういうつもりでいきなり私の髪を引っ張ったりするわけッ!?　せ、説明なさいよオッ!!」

ヴァレンシアはしれっとした顔で答える。

「いやほら。ちょうど手綱みたいだから、制御できるかなーって」
「ばっ……!」

エレンの顔がさらに真っ赤に染まって、

「で、できるわけないでしょおっ!!　　というか、私を馬なんかと一緒にしないでちょうだいよオッ!!」

「高さもちょうど掴みやすい位置じゃない?」

「き……きいいッ!　わ、私の背が低いとでも言いたいのおっ!!」
「?」

歯ぎしりしながら喰ってかかっていくエレン。

ちなみに彼女は百四十センチ半ばと、かなりのちびっ子だ。対するヴァレンシアも極端に高い方ではないが、それでも彼女に比べると十五センチは長身である。

「まあまあ、落ち着きなさいってば」

ヴァレンシアは両手を前に出してそんな彼女を制止すると、

「モノは考えようでしょ。背が低いってのも悪いことばかりじゃなくて世の中にはそういう子にしか情欲を呼び起こされない男も存在しているらしいしそういう点でいえばあなたのその背の低さとまるで幼児を連想させる態度は一種の武器であると考えることも不可能ではないわけで決して悲観する必要はないと思うのよね」

「?」

いつも以上の早口は、エレンにはまるで聞き取れなかったらしい。ただ、

「なんだかよくわかんないけど、ものすごい悪口を言われたような気が――」

「エレン」

そこへパメラがすかさず口を挟んで、

「要約すると“可愛い”ってことよ」

「そ、そう？ ……それならいいんだけど」

あっさり丸め込まれてしまう彼女は、やはり見た目通りの単純な性格だった。

空の端っこがほんの少しだけ明るくなり始めた頃、ミューティレイクの使用人たちは幾分早い朝食を終えて動き出す。

この時間、別館の食堂は男性使用人たちの、一階ホールは女性使用人たちの朝会の場となっており、その一階ホールでは女性使用人たちを束ねるハウス・キーパー、アマベルⅡウィンスターが、ズラリと並んだ使用人たちを前にして今日の来客予定、行事、心構え等を喋っていた。

その特に代わり映えのしない“演説”に、聞く者の態度は様々だ。大半はきちんと耳を傾けているが、中にはあまりの退屈に全く関係のないヒソヒソ話を始める者もいる。

そしてそんな中、

「ねえ、聞いた？」

列の最後方近くに位置していたパメラに、そのすぐ後ろにいるエレンがそう話し掛けた。

「なにが？」

確かにこの位置ならば、よほどのことがない限りずっと前方で喋っている上司に聞き咎められる心配はない。

「新しく来たクリシュナ様のこと」

「……なに？」

それはパメラにとってあまり触れて欲しくない話題だった。が、逆に突っ込まれるのが嫌で平静を装う。

もちろんエレンはそんな心の動きには気付いた風もなく、

「すごいよ。入隊試験、隊長との試合でいきなり一本取ったらしいんだから。しかも噂によると、たったの一撃で」

「一撃？ ……隊長って、ディバーナ・ロウの？」

パメラは驚きを隠さずに聞き返した。……それもそのはず。ディバーナ・ロウの隊長といえば全員がデビルバスターだ。普通ならば一本を取るどころか、その体に触れることすら難しいはずだった。

と、そんな彼女の反応に、エレンは何故か得意げな顔をして、

「もちろんよ。……すごいわねえ。ハンサムでスマートでお金持ち、実力も折り紙付きでしかも性格も良いなんて——」

「……そうかしら」

パメラは思わず仏頂面でそう答えていた。言ってからすぐに後悔したが、仕方なく言葉を続ける。

「私はあまり好きになれそうにない。……ほとんど話してないけど、そんなにいい人とは思えない」

案の定、エレンは怪訝な顔で、

「はあ？ ……あ、そっか。あなたってどっちかと言うと泥臭い人の方が好きそうだもんね。クリシュナ様みたいに優雅でスマートな方はタイプじゃないのか」

「……」

パメラは視線を斜めに落とし、無然として黙り込んだ。

……もちろんそんなことはない。彼女がこれまでの人生でもっとも憧れた人物は、確かに“優雅”というイメージではなかったが、充分にスマートでカッコ良かったのだ。

モヤモヤしたものが胸に広がっていく。

さらにエレンは続けた。

「それに、ほら。クリシュナ様って、あの方にもすごく似てると思わない？ 私はあまり接する機会がなかったんだけど、前にこの屋敷にいたサイラー——ぐえええっツ！！？」

「え？」

突然響いた“グキッ”という鈍い音に、びっくりして視線を上げるパメラ。

すると、

「エ、エレン？」

そこにあっただはずのエレンの首が、後方に九十度ほど傾いている。その、さらに後ろ。

「……んにゃ？」

眠そうな顔のヴァレンシアが、エレンの後頭部から生えた髪の束を握って惚けていた。

「……！！！！！！」

「……あ」

顔を真っ赤にしながらジタバタするエレンに、ヴァレンシアはようやく我に返った様子で手を離すと、眠そうに目を擦りながら、

「あ、あー、ごめんごめん。あまりに眠くてつい手近なものを頼っちゃった」

「ヴァ……ヴァ……ヴァ……ヴァレンシアアアアああッ！！！！」

さすがにこの怒りは正当だろう。

エレンは折れ曲がった首を元に戻すと、平然とした顔のヴァレンシアを振り返って烈火のごとく抗議を始めた。

「あ、あんた、この私を殺すつもりイイッツ！！？」 わ、私の首

はねえ、あ、あんたの体重を支えるようには出来ていないのよおッ！！！！」

本当に痛かったらしい。涙目だった。

だが、ヴァレンシアはあくまでマイペースなままで、

「ところがどっこい。人間って意外に丈夫なもんよ？ あたしなん

か昔その大階段を派手に転げ落ちたことあるけど、ほら、こうしてピンピン——」

「一緒にすなああアッ！ あんたと違ってねえっ！ 私の体はものすごくデリケートなのよッ！！」

「ふう……まったく。いつまで経っても子供ね、エレンは」

「……？」

突如、気だるそうなため息をついたヴァレンシアは、怪訝そうな顔で勢いを失ったエレンに対し、小さく肩を竦めて言った。

「別にわざとじゃないんだから。いい加減許してあげたらいいのに」
「っ……き、きいいいいッ！ げ、元凶が、なにいきなり他人顔してんのよッ！！ ……だ、だいたいねえ！ あなたはいつもいつも——っ！」

「あ」

ふとヴァレンシアの視線が上を向く。

……それは明らかな異常を伝えるサインだったが、激昂した（しかも、もともと察しの悪い）エレンがそんな細かな動きに気付くはずもなく。

「——なんだから、いい加減に——……って、ちょっと！ 聞いてんの、ヴァレンシアアアッ！！」

「……」

もちろんヴァレンシアは聞いていない。視線は相変わらずエレンの頭上を越え、その先を見つめたまま。

「？ ……え？」

そしてエレンがようやく異常に気付いたときは……すでに遅かった。

「……あ・な・た・た・ち？」

背後で聞こえたのはやや甲高い、凜とした女性の声。

「ひっ！」

怒りで真っ赤だったエレンの顔が、サアツと青ざめていく。数秒の硬直の後、ゆっくり、ゆっくりと視線は後方へ。

いつしか、彼女たちの周りには注目が集まっていた。激昂したエレンの声はとくに許容範囲を“大幅に”越えていたのだ。

そして、

「いい加減にするのは、エレン、あなたじゃないの？」

それは当然、最前列で演説していたはずの上司の耳にも届いていたのである。

「ア……アマベル様……ッ！」

腕を組み、眉間に皺を寄せて仁王立ちの上司——アマベルに、エ

レンはさらに青ざめ、慌てて言い訳を始めた。

「ちっ、違うんです、これは――そ、そう！　ヴァ、ヴァレンシアが私の髪をッ！」

「……」

腕を組んだまま、アマベルがチラッとヴァレンシアを見る。

が、ヴァレンシアは我関せずと言わんばかりの顔で両手を広げると、

「エレンさんが何をおっしゃってるのかさっぱりですね。私はただ、お喋りしてた彼女を注意しただけなんです」

「なっ……！　ヴァ……ヴァレンシアアアッ！！」

青から赤へ。

「どうどう」

喰ってかかるエレンを適当にあしらうヴァレンシア。なにぶんリ―チ差があるため、ヴァレンシアが手を伸ばせばそれだけでエレンの手は空を切ってしまうのだ。

と、

「……ふう」

それを見ていたアマベルは呆れた様子で一つため息を吐くと、
「とにかく。朝会が終わったらすぐに私の部屋に来るように。……いいですね？」

「え、えええっ!？」

赤から青へ。……なかなか忙しい。

「そ、そんなぁ……アマベル様ぁ……」

「まあまあ、エレン」

そんな彼女に、やはり他人事の顔でヴァレンシアが肩をポンと叩いた。

「せっかくの機会なんだから。ボスの愛情がこもったお説教を、有り難くいただいてきなさいな」
だが。

「……何を言ってるんです？」

その言葉に、踵を返しかけていたアマベルは再び眉間に皺を寄せて言ったのである。

「ヴァレンシア、あなたですよ」

「え」

きょとんとした顔で、

「……マジですかい？」

「当・然です。……私が冗談を言ってるように見えるとしても？」

「……いえ、あなたの冗談自体、聞いたことないっす」

「それなら、わざわざ確かめるまでもないでしょう」

冷たい言葉と仏頂面を残し、アマベルは身を翻して最前列の方へと戻っていった。

「……」

それを目で追ったヴァレンシアは頭を掻きながら、

「……あちゃあ」

「ううう……ヴァレンシアああ……あんたのせいよおお……」

あまり応えた様子のないヴァレンシアとは対照的に、エレンはガツクリと項垂れた。

“格式あるミューティレイク家の使用人”を自称する彼女にとって、上司に説教を喰らうということ自体、落ち込むに十分な出来事らしい。

「……」

そして一人“天災”を回避したパメラはそんな二人に苦笑しつつ、とぼつちりが来ないようにそそくさと正面に向き直ったのだった。

その日の午後。

「……はあ」

窓の棧を拭いていたパメラの口から、思わずため息が漏れた。が、まだ動き出してから時間は短い。疲れたというわけではないだろう。

“ティーサイトIIアマルナ”という名札の掲げられたその部屋は、

パメラが担当する部屋の一つである。事情あつて部屋の主は現在長期不在中だが、パメラは毎日掃除のためここにやってくる。主がいないので散らかることはないが、黙っていても埃はたまっていくものなのだ。

「……」

無言のまま、彼女の視線は部屋に備え付けの机の上に向かった。そこに置いてある小さな小瓶が目にとまる。

（ティース様……）

この部屋の主は屋敷に来てからまだ一年と経たないが、ちょっとした出来事があつて以来、彼女と比較の数多く言葉を交わすようになっていた。親しい、と言うほどではないが、あまり立場を気にせず言葉を交わせる相手である。

（ティース様なら、どう思うだろう）

そしてパメラはふとそう考えた。

……サイラスという青年は優秀であり、そして人望があつた。もちろん彼を慕っていた者は数多くいる。が、その中でも、パメラと同じかそれ以上に影響を受けた人物といえば、おそらくこの部屋の主ぐらいのものだろう。

だから、パメラは想像してみたのだ。

この部屋の主が、あのクリシュナという青年を見たときに、一体どういう反応を示すのか、と。

——所詮は別人だと気にも留めないのか。

——あるいは彼女と同じように動揺するのか。

とはいえ、

「……はあ」

やがて考えても無駄なことだと気付き、パメラは窓を離れた。入り口から全体を見回し、不備がないことを確認して部屋を出る。と、

「パメラ」

「あ」

丁度そこを通りかかった少女がいた。

比較的良く見知った、同じ年だが、持っている雰囲気は幼さを残すパメラよりもずっと年上を感じさせる客人の少女。

「……シーラ様？」

だが、その相手を認識した直後、すぐに感じた違和感がある。

パメラの視線はその違和感の正体——少女の着ている衣服へと止まって、それから心配そうな表情になると、

「またそんな格好で……学園の方はどうなさったんですか」

少女が身につけている白と紺の衣服はミューティレイクの制服だった。パメラのものとは少し違ってややお洒落なデザイン——主に接客や給仕を担当する“パーラー・メイド”のものである。

それはもちろん客人であり、このネービスでも伝統のある“サンタニア学園”の学徒である彼女が着るはずのものではなく。

だが少女——シーラはその問いには答えず、両手に持った空のトレイを示して、

「朝食よ。……仕事自体は理解してるつもりだけど、いざやってみると覚えることがたくさんあって大変だわ」

「……」

パメラは困った顔で視線を泳がせたが、以前にも同じ問答をしたことがあったので、それ以上は何も言わなかった。

すると、逆にシーラの方から、

「どうしたの、パメラ？」

「……え？」

「元気がないように見えるけれど」

突然の指摘。予想してなかっただけに、パメラは一瞬うろたえたが、

「え……あ、そんなことないですよ。元気、元気です」

咄嗟にそう答え、勢いで力こぶまで作って見せる。

「……ならいいのだけど」

言葉と裏腹に納得した様子ではなかった。

見透かされてる気がして、パメラは慌てて話題を変える。

「その朝食、もしかしてレインハルト様ですか？」

「？ どうして？」

パメラは苦笑して、

「最近、シーラ様をご指名なさることが多いと、噂で聞いたので」

「ああ……そういえば最近多いわね。何か勘違いしてるのではないかしら、あの男」

シーラは仕方なさそうにため息を吐いたが、すぐに、

「でも、今日は違うわ。……今日初めて会ったのだけれど、変わった人が来たわね」

「え？ あ……」

その言葉に、パメラの視線はもう一度シーラの手にある空のトレイに止まる。

「クリシュナ様、ですか？」

「ええ」

躊躇いがちの問いに、シーラは頷いて、

「みんながうわさ話をしてるから、どんな人かと思っていたのだけど」

「……」

パメラは再び躊躇った後、

「……どんな方、でした？」

思わずそう尋ねていた。

——できる限り触れたくないと思う反面、やはりどうしても気になってしまうのだ。

「そうね」

シーラは少し考えたが、それほど迷うことなくすぐに答える。

「ハンサムだし、物腰も丁寧で紳士的だし、第一印象では非の打ち所がないわね」

「丁寧で……紳士的？」

思わず、パメラは眉間に皺を寄せた。

……初対面の人間に“田舎者”などと口走る人間が丁寧で紳士的だなどと、彼女にはとても信じられなかったのである。

「なに？」

だが、逆にシーラは怪訝そうな顔で聞き返す。

「パメラ？ 何かあったの？」

「あ……いえ、そういうわけじゃ。……そうですか」

そう言いながらも、パメラの表情は自然と陰を帯びる。

——見下された、と思った。おそらくあのクリシュナという人物は、相手を見て態度を変える男なのだろう、と。

胸を再びモヤが覆う。

それが普通の相手であればこれほどの嫌悪感は覚えなかっただろう。

だが、偶然とはいえ、彼はあまりにも“似すぎて”いた。いくら関係ないのだと言い聞かせてみても、それはパメラにとって容易に割り切れるものではなかったのだ。

「……」

シーラはそんな彼女を黙って見つめる。

……誰が見ても異常だと気付いただろう。彼女はそれほど思い詰めた表情をしていた。

一つ、ため息。

そしてシーラは言った。

「パメラ。……今日、仕事が終わったら私の部屋へ来なさい」

「え？」

突然の申し出に驚くパメラ。

だが、そんな彼女には構わず、シーラは有無を言わさぬ口調でもう一度、

「話があるのよ。特別な用事がないのであれば、来なさい」

「……」

その言葉には妙な威圧感があって……パメラにそれを断る術はなかった。

夜のミューティレイク邸別館。

特別に仕事が遅くなったりしない限り、パメラがこの時間にここを訪れることは滅多にない。

まして——こうして客のように迎えられることなど、そうそうあるはずもなかった。

「ファナが気を利かせてくれたみたいね」

「きよ、恐縮です……」

部屋に備え付けのテーブルには紅茶のカップと、小さなシフォンケーキが二つずつ。テーブルについたパメラは言葉通りに恐縮しながら、紅茶を入れるシーラの手際を見つめている。

部屋を包むのは薄いオレンジ色の光。天井に備えられた魔界由来の照明器具は、日によって明るさや色合いにややバラつきがあり、今日はかなり赤味が強い。

「……はあ」

「なに？」

「あ、いえ」

パメラがため息を吐くほどに見とれていたのは、オレンジ色の光に揺れる飴色の髪だった。……職業柄、高貴な身分の女性も数多く見てきたパメラだが、ここまで美しい髪を見るのは初めて——いや、髪だけではない。このシーラという少女は、その全てにおいて文句の付けようがないほどに美しかった。

もう一度、ため息。

そしてパメラは言った。

「私、ローズ様より美しい方はこの世にいないとずっと思ってたんですけど、シーラ様はもしかするとそれ以上かもしれないです」

「そう？　ありがとう」

素直に感謝の意を表情に出して、シーラは紅茶をパメラの目の前

に差し出した。

「す、すみません」

再び恐縮しながら受け取って、少し口を付ける。透き通った薄茶色の液体が、白い陶磁器の中で微かに波立っており、覗き込むとうっすら自分の顔が映った。

そうしながら、パメラはすぐに口を開く。

「ティース様は……いつ頃お戻りになられるんですか？」

「知らないわ」

返ってきたのは素っ気のない言葉。……先ほどまでより、少しだけ堅いように思えた。

パメラは少し怪訝そうな顔をして、

「特殊任務だって聞きましたけど、随分長いですよ。それに単独だなんて……あ、いえ、ティース様ならきっと大丈夫だと思います——」

「そんなことより」

興味なさそうに話題を切って、シーラは自身のティーカップにも紅茶を注ぎながら、

「ちよつと耳に挟んだわ。あのクリシュナって人のこと」

「……そうですか」

もちろんパメラも、それが本題であろうことは予測していた。

「私は会ったことなかったからわからないけど……そっくりなんですってね」

誰に、ということはもちろん言う必要がない。

パメラは視線を泳がせて、

「……似てません」

「本当にそう思っているのなら、言うべき事は何もないわ。でも、それは嘘ね」

「……」

真っ直ぐに見つめられて断言されると、パメラは反論できなかった。

……カチャツ、と、ティーカップが音を立てる。シーラは目を閉

じて紅茶を口にとすると、一度話題を逸らした。

「このケーキはフィリスが作ったそうよ。あなた、フィリスとは親しいの？」

「あ……いえ、特別親しいわけじゃ。でも、話をすることはありません」

「そう」

シーラがフォークを手にしたのを見て、パメラもまたケーキに手を伸ばした。柔らかなスポンジを口にとすると微かな紅茶の香りが口の中に広がっていく。

「あなたがそんな顔をするぐらいだから、よほど似ているのね」

「……」

嘘をつく理由が見当たらず、今度は素直に頷いた。

「そう。……思い出して悲しくなる気持ちは私にも理解できる。でも、それは彼に非があるわけではないでしょう？ まだ会ったのは一度だけれど、あなたがそうやって顔をしかめるほど悪い人には見えなかったわ」

「……それはきっと、シーラ様が美しくて気品のある方だからです」
「どういう意味？」

怪訝そうな顔のシーラ。

パメラはクリシュナに初めて会ったときの一部始終を彼女に話した。

「……私はこういう外見ですから。だから、あの人はああいう言い方をしたんだと思います」

「なるほどね」

シーラはようやく納得したような顔をする。

「似てるから尚更、そのギャップがあなたには許せない。だから、そんな苦虫をかみつぶしたような顔をしてるのね」

「……そんな顔してますか？」

「してるわ。せっかくの可愛い顔が台無し」

「からかわないでください」

パメラは口を尖らせた。相手が相手だけに、そう言った類のお世辞は素直に受け入れられなかった。彼女にだって羨望の感情ぐらいはあるのだ。

だが、シーラは小さく笑みを浮かべただけで、

「もちろん、あのクリシュナがそういう人物である可能性を否定はしないわ。私だって今日会ったばかりだもの。……でも、あなたに言った言葉だって、決して悪意があったとは限らないのではないの？」

「……え？」

シーラの意外な言葉に、パメラは不思議そうな顔をする。

「田舎っばいという言葉が悪口だって、どうしてそう思ったの？ 私だって、使う言葉は違ったにせよ、あなたに対する印象は似たようなものよ。でも、それは決して見下しているわけでも、蔑んでいるわけでもない。……ティースが前に言ってたわ。この広すぎる屋敷で、あなたに会うとホツとする、気持ちが悪く着く、ってね」

「え……でも、あの人の言い方は――」

「もちろん、それはあくまで可能性。別にあのクリシュナという人を弁護する気はないわ。……ただ私が言いたいのは」

シーラは真っ直ぐに彼女を見つめ、

「真実がどうであれ、あなたは最初から歪んだ眼鏡で彼を見てるのではないかしら？ ……あなたが好きだったのは、サイラスという男の外見だけなの？ 違うでしょう？」

答えるまでもなかった。そしてシーラもまた、パメラの返事を待つまでもなく肯定だと決めつけて言葉を続ける。

「外見なんて本当に些細なことよ」

そして再び目を閉じ、ゆっくりとティーカップに口を付けた。

「まして、ただ顔が似ているからという理由で内面まで見比べてしまうのは、本当に意味のないことだわ。私があなたの顔を持っても、決してあなたにはなれない。あなたが私の顔をしていても、やっぱり私にはなれないのよ」

「……」

「勝手に比べて、そのことで嫌ってしまいうのは、おかしいことだと思わない？」

パメラは視線をテーブルの上に落とす。

紅茶に映る、自分の顔。脳裏に蘇る、憧れた人の顔。

……そうしてパメラは今、ようやく自分の胸に渦巻いていたものの正体に気付いていた。

（私……何を期待していたんだろう……）

そう。

それは“期待”だった。

期待していたからこそ、裏切られたことに怒りを覚えた。

期待があったからこそ、興味を逸らすことができなかった。

彼女は心のどこかで、あのクリシュナという青年が、サイラスという人物を“演じて”くれることを期待していたのだ。

「……っ！」

膝の上で結んだ拳に思わず力が入った。

——演じてくれば、それで満足できたのだろうか。“代わり”を得ることで満足できていたのだろうか。

そう考えると、自分の浅ましさに悔しくて涙が溢れてきた。そんなものじゃない、と、そう信じたかった。

と、

「落ち込むことないわ」

まるでその思いを見透かしたかのように、シーラはそう言った。

「私たちの心なんてそんなに強いものじゃないもの。……たとえばあのクリシュナという人が中身までどれほど似ていたのだとしても、あなたはきつとそれを認めようとはしなかったはずよ。そう思う」

パメラは顔を上げる。

「……シーラ様」

シーラは目を細めて微笑むと、

「私はあなたの想いを良く知ってる。心配などしなくても、私がそ

れを保証するわ」

「……っ」

慌てて目を擦る。

パメラが彼女に涙を見せるのは二度目だ。前は状況も顧みずに号泣してしまったが、今回はそれをぐっと堪え、

「……ごめんなさい、シーラ様」

目を赤くしたまま、少し無理して笑顔を浮かべた。

「ダメですね、私……同じことで二度も迷惑をかけてしまって……」

「本当。……でもね、パメラ」

シーラは空になったティーカップを置いてゆっくりと手を組んだ。いつもの凜とした口調に、ほんの僅かな揺らぎが混じる。

「私がこうやって偉そうに言えるのは、自分がそういう立場にないからよ。……私があなたの立場だったら、きっとあなた以上に取り乱れていると思うわ」

「……まさか」

「思えない？」

「想像……できません」

「そうね。……私もそう思うわ」

そう言って苦笑するシーラ。

おそらく慰めの言葉なのだろうと考え、パメラは合わせて笑った。「ありがとうございます、シーラ様。ホントに気持ち軽くなりました」

「そう」

頷いて、

「いつか、恩返しを期待してるわ」

冗談交じりにそう言ったシーラに、パメラもまた冗談で返す。

「大丈夫ですよ、シーラ様。ティース様はきっと、シーラ様のことを置いていたりしませんから、私の慰めなんて必要ないと思います」

「……」

「シーラ様？」

本当ならばすぐに素っ気のない否定の言葉が返ってくるどころだが、

「……そうね。忘れてた」

一瞬だけ視線を流した、その端正な顔に横切ったのは、果たしてどのような想いだったのか。

「あと十日……か」

「え？」

その眩きに秘められた意味を、パメラには理解できなかった。

ただ、何かを迷っているような、そんな表情に見えた。……そう、思えた。

数日後の朝。

「——ぱんぱかぱーん♪ さあ本日も再び新しい朝、希望の朝がやって参りました！ 昨日までとは打って変わって晴れ渡った空、空気は相変わらず冷たいですが、しかしそんなことは関係ナッシング！ 我々ミューティレイクお掃除部隊は今日も今日とて——」

「……う、うるさいうるさいっ！ ヴァレンシア、ちょっと黙ってッ！！」

悲鳴のような声がその狭い一室に響いた。

声の主は、どうやらようやく着替えを終えたばかりのエレン。いつも結んでいるはずの髪はほどかれたままで、目の下には微かにクマが出来ている。

そんな彼女を煽るように、ヴァレンシアはさらに声を張り上げて、「おおっと、エレン選手！ どうしたとか、時間ギリギリだというのにまだ準備ができていないぞおっ！ これはまさか……ちっ、

遅刻かあっ!？」

「だっ……誰のせいだと思ってんのよッ! あんたが遅くまでわけのわからん寝言を言ってるから——」

「ほらほら、エレン。ホントに急がないと、またアマベル様にお説教されるわよ」

苦笑しながらそれを手伝うのはパメラだ。

「お、お説教……」

数日前の悪夢が蘇ったのだろう。エレンの顔がさあっと青くなっ
た。

「パ、パメラ! ほ、ほら、早く。早く髪を結んでよっ!!」

その言葉に、パメラは繭をひそめて、

「ちよっと、エレン。それって人に物を頼む態度じゃないでしょ」

「じ、自分でやったら時間がかかるんだから、仕方ないじゃない!
」

「へえー」

パメラはわざとに意地の悪い笑みを浮かべると、

「じゃあ尚更、きちんとお願いしてもらわないとね」

「ぐ……ぐぐぐ……!!」

エレンは悔しそうに顔を真っ赤にしていたが、背に腹は替えられ
なかったのだろう。

「お……お願いします……」

「よろしい」

ニッコリと微笑んで、パメラは髪留めを手にとった。

いつもの朝だった。

「——パメラ」

「あ、シーラ様」

その日の昼を過ぎた頃、本館の掃除を終えて戻って来たパメラは、
一階ホールで丁度厨房の方から戻ってくるシーラと鉢合わせた。

「って、シーラ様……また、そんな格好で——」

「顔色、だいぶ良くなったようね」

また質問に答えることはなく、シーラは腰に手を当ててパメラを見つめた。

あの日以来、二人が顔を合わせるのは初めてのことだ。が、シーラの言葉通り、はたきを手にしたパメラは明るく弾んだ口調で、
「ええ。シーラ様のおかげですっきりしました。もう大丈夫です」
「そう」

確かに、言葉で確認するまでもなかった。

「でも……シーラ様」

「うん？」

怪訝そうな顔のシーラに、パメラはわざとらしくちょっとだけ口を尖らせると、

「クリシュナ様は、やっぱり私の嫌いなタイプでした」

「……それはどうしようもないわね」

と、シーラは苦笑する。

「だってあの人……って、そうだ。シーラ様聞きました？ クリシ

ユナ様が一撃でレアス様から一本取ったって話」

「ええ。噂では」

「でもそれ、本当は違うらしいですよ」

「？ どういうこと？」

「一撃でレアス様の剣を弾いたのは本当らしいんです。でも……」

パメラはそう言いかけて小さく周りを見回すと、少し悪戯っぽい笑みを浮かべて声を潜める。

「あまりに力んじやったせいかな、足が攣って試合を続行できなかったらしいんです」

「……それでも充分すごいことではないの？」

「それが、ですね」

パメラは笑ったまま、

「クリシュナ様って、“その一撃”を出すと必ず足を攣ってしまう
そうなんです。……想像すると、なんだかカッコ悪いですよね……」

…あ、このことは一部の人しか知らないんで、内緒ですよ？」
言葉に嫌味はなかった。

シーラは苦笑して、

「噂ってそうやって広がっていくものよ、パメラ」

「私、あの人嫌いなんで、それでも構わないと思います」
しれっとした顔のパメラに、さらに苦笑。

「……そう」

だがその言い方からすると、言葉ほど嫌っているように思えなかった。

「それじゃあ、私、仕事があるのでそろそろ行きますね。……あ、私が言ったってことだけは絶対に内緒ですよ」

悪戯っぽい笑顔を残して去っていくパメラ。——もう、心配はなさそうだった。

「……」

シーラは安堵の表情でそれを見送った後、

「……さて、と」

一瞬だけ、何事か決心したような顔を見せると、ゆっくりと屋敷の中……執務室の方へ向かっていくのだった。

——とある人物と交わした賭けの賞品を請求するために。

プロローグ

その瞬間、世界は真っ白になった。

——何故？

状況を理解できぬまま、自問したのは当然の疑問。

何故、こんなことになったのだろうか、と。

唇を伝わる感触は、柔らかく、暖かく——感じる全てが初めてのものだった。

少しずつ。少しずつ。

彼の頭が認識を始める。

——鼻孔を突く心地よい香り。

——止まない胸の鼓動。

自らの唇を塞いでいるもの。

……そう。

紛れもなく彼——長身で猫背で優柔不断で頼りなく、女性が苦手
で、女性アレルギーな、デビルバスター志望の青年——ティーサイ
トIIアマルナは、たった今、

“唇を奪われていた”

のである。

——何故、彼がこんな面白——いや、突拍子もない事態に陥って
しまったのか。

それを最初から全て説明するには、とりあえず二週間ほど遡る必要がある――

その1『サン・サラス』

比較的陽気な二月下旬のある日。

学園都市ネービスの一角にある大貴族ミューティレイク家。広大な土地と数多くの建物を保持するこの家は、当然のことながらそれを維持するために大勢の使用人を雇っている。

男性使用人たちの頂点にいるのは三十代半ばの若きバトラー、パブロ・シンプソンだ。

その下には、主に屋敷外や力仕事などの雑用を担当するフットマン、馬車や馬の管理、世話をするグルーム。広大な庭の管理をするガードナー、料理を作るコックや給仕担当のボーイなどがいる。

一方、女性使用人たちの頂点にいるのが二十代半ばのやはり若きハウス・キーパー、アマベル・ウィンスタード。

その下には屋敷内の掃除や洗濯、各部屋のベッドメイクやその他雑用を担当する数多くのハウス・メイド。厨房や台所周りの手伝いをするキッチン・メイド、給仕を担当するウェイトレスのようなパーラー・メイドたちがいる。

その他、この屋敷ではバトラーやハウス・キーパーとは別に、他の使用人たちから完全に独立している当主の補佐役として二人の執事がおり、その直属に三人の侍女がいて、その他、屋敷外での仕事を与えられている者も含めれば、使用人の総数は軽く三桁に及ぶだろう。

さて、そんな数多く存在する使用人たちの中。

そこに、やや異彩を放つ二人がいた。

昼時の少し手前。

「おう、エル！ 忙しいとこ悪いんだが、こいつの味を見てくんねえか？」

「あ、うん」

ヒゲを生やした四十歳過ぎのコック長、プレスリー・ウッズワースに呼ばれたのは、質素で清潔な屋敷の使用人服に身を包んだ、百四十センチ半ばの小柄な少女だった。その口調にはまだ幼い響きが混じっており、外見の幼さも相まって、一見、十歳を少し過ぎたぐらいの年齢にも見える。

彼女の名はエルレーン・ファビアス。つい最近、このミューティレイクに籍を置くようになった少女である。

こう見えてすでに十五歳、二ヶ月後に十六歳の誕生日も控えていた。

「どう思う？」

「うーん……」

プレスリーの言葉に、エルレーンは少し首をかしげて、

「もう少し酸味があった方がいいと思う。柑橘系の果汁を絞ってみたらどうかな？」

すると、プレスリーは自分でも再び味を見て、

「……なるほど」

「いつも通り、保証はしないけどね」

彼女が笑顔とともに謙虚な言葉を口にする、プレスリーは男臭い顔にニツと笑みを浮かべて、

「いやいや、お前の舌に間違いはねえ。毎度毎度悪いな」

「ううん。またボクで役に立てることがあったら、いつでも呼んで」満面の笑みを浮かべたエルレーンは、まるで舞うようにしてクルリと小柄な身を翻す。

「……おっ、なんだ、エルちゃん。もう行っちゃうのか？」

それを見て、近くで作業をしていた若いコックが声を掛けた。

「エルちゃんが居てくれると、この戦場みたいな場所も少しは潤うんだけどなあ」

確かに。今日はミューティレイク本館の方に客が訪れているため、そのランチの準備で厨房は戦場のようだった。

「ふふ、ありがと。お世辞でも嬉しいよ」

そう言って、エルレーンはそのコックに優しい微笑みを向けながら厨房の出口まで行くと、もう一度、クルッと身を翻して、厨房の全員に頭を軽く下げ、

「それじゃ、お邪魔しました。みんな頑張ってね」

そう言って手を振ると、

「おう！ 忙しいとこ悪かったな！」

そんなプレスリーの声に続いて、すぐさま、そこにいた十人近い料理人たちから次々に言葉が返ってくる。

「エルちゃんも頑張れよー！」

「体壊さない程度にな！」

「仕事で背が届かなかったりしたらすぐに呼ぶんだぞっ！」

「ちゃんと毎朝牛乳呑めよー！」

「イジメに遭ったりしたらお兄さんが相談に乗ってやるからな！」

「ふっ、確かに可憐だが、しかしまだまだ私の美しさには遠く及ばな――」

「今晚、俺と星を見ながら語り合おうぜっ！」

「俺と結婚してくれーっ！」

「……アホか、お前らはっ！！」

最後にプレスリーの突っ込みが入って、厨房は爆笑の渦に包まれる。

「あはは、考えておくね」

いつも通りの様子に、エルレーンも可笑しそうに笑って、

「それじゃ、お邪魔しました」

もう一度、頭を下げ、未だ笑い声に包まれる厨房を後にしたのであった。

そしてその頃、屋敷内のまた別の場所。

もう一人の人物は、陽光の射し込む大きな部屋の中にいた。

「助かったわ、リイナちゃん。ありがとね」

「ええ。このぐらいはお安い御用です」

本館一階の奥にある客間。そこにはやはり、使用人服に身を包んだ二人の人物の姿がある。

片方は三十歳過ぎぐらいの、少し小太りの女性。こちらは特筆するほどの特徴があるわけではなかったが……その、もう片方の女性。「いやあ、あたしたちじゃどうしても手の届かないところがあるのよねえ。わざわざ男どもに頼むのも面倒だしさ。リイナちゃんが居てくれて、ホント、助かるよ」

「お役に立てたなら嬉しいです」

と、はにかんだ笑顔を見せる女性。

腰まで届きそうなくらいの、まったくクセのない艶のあるロングヘア。優しいな雰囲気を含める大きな瞳と、やはり穏やかな印象を与える、僅かに下がり気味の目尻。

だが、それよりも、その女性にはもっと目立つ特徴があった。

「リイナちゃんなら、普通の男どもが届かないところまで届くもんねえ」

もう片方の女性がそう言ったように、彼女は一般的に言って、非常に高い身長を持っていた。

身長百八十一センチ。一般女性の平均を二十センチ以上。そして、一般男性の平均を十センチ以上、上回っているだろう。この屋敷にいる女性たちの中では、もちろんダントツでトップ。男性を合わせたとところで、彼女より背の高い人物はそう多くなかった。しかもそれは現段階での話であり、年齢を考えればまだ成長するかもしれない。

なにしろ、彼女はまだ十六歳。

リイナ・クライスト。彼女もまた、エルレーンとともにこの屋敷にやってきた新顔だった。

「ホントあながと、リイナちゃん。また――」

女性がそう言いかけたところへ、また別のところから声がかかる。

「……リイナちゃん！ ちょっと、こっちも頼むよー！！」

「あ、はい」

どうやらもうしばらく、彼女の活躍は続くようだ。

と。

（心配すること、なかったなあ）

新入りにも関わらず、思った以上に屋敷に溶け込み、それどころか人気者になっているそんな二人の様子を見て、ホッと胸をなで下ろす人物がいた。

長身でやや猫背。優しげな作りの童顔に安堵の表情を浮かべ、屋敷の玄関へ向かって歩いていく。

（リイナの方は少し不安もあったけど、問題ないみたいだし……）

ティーサイトⅡアマルナ。通称ティースと呼ばれるこの男は誕生日を間近に控えた十八歳の青年で、このミューティレイクが抱えるデビルバスター部隊“ディバーナ・ロウ”の一員であり、いわずと知れたこの物語の主人公だ。

先ほどの二人は彼の昔馴染みであり、もともとは“魔”——それも強大な力を持つ“王魔”と呼ばれる存在だった。が、今は特殊なアイテムにより人と変わらぬ姿になり、こうしてミューティレイクで働くことになっていたのである。

（これで、心おきなく次の任務に就ける）

さて、ホッと胸をなで下ろした彼は屋敷を出て、冬の匂いが残る敷地内を歩いていく。

向かった先は敷地内でも外れの方に位置している一つの建物。

第四隊。

第一隊“ファントム”。第二隊“ナイト”。第三隊“カノン”。

だが、この第四隊だけは名称がないという。しかも、部隊と言いなから、所属するのは一名。

その奇妙な部隊（？）に、彼は本日を以て配属されることになっ

ていたのである。

（アルファさん、かあ……）

アルファ・クールラント。

それが第四隊隊長の名だ。話によればティースよりも一つ年下の十七歳。誕生日も含めていえば二歳近くは年下ということになる。

そして次に、彼の口をついたのは、

「ふう……」

ため息。

（……いつものこととはいえ、今回も不安だなあ……）

その不安の原因は、数時間前に遡る――。

「第四隊？」

本日から任務復帰というこの日の朝、早速別館の執務室に呼ばれたティースは、このミューティレイク家の当主であり、デイバーナ・ロウの総帥でもあるスーパーお嬢様、ファナ・ミューティレイクから今後のことについて聞かされていた。

「第四隊っていうと、例の――？」

「はい」

ファナは静かに頷いて、その穏やかな瞳と柔らかな微笑みを彼に向けた。

「ティースさんもすでにご存じの通り、第四隊はたった一人のメンバーによって構成されています。その方の名はアルファさん――アルファ・クールラントとおっしゃいます」

お嬢様と言えば、お淑やかな深窓の令嬢、あるいはわがままで高圧的、というどちらかのイメージが一般的だが、このファナはいかにも前者の典型という人物だった。

ただ――十七歳、ティースより一つ年下という年齢で、当主かつ総帥という二つの職務をこなすだけあり、ただお淑やかで世間知らずという人物ではない。おっとり、のんびりとしていながら頭の回転は速く、優秀な人物なのである。

「これからティースさんは第四隊の一員となって、アルファさんと協力しながら任務に当たっていただきたいのです」

「そそ」

ファナの言葉に続けたのは、彼女のそばで事務的なサポートをする、まるで少年のような出で立ちの少女。

弱冠十二歳の執事、リディアⅡシュナイダーだった。

「アルファさん以外の人が所属するのは、ティースさんが初めてだよ。心してかかってね」

「……」

脅すような言葉に、ティースが少し不安になってファナを見ると、
「大丈夫ですわ。アルファさんはとても綺麗な方ですよ。おそらくシーラさんにもヒケを取りませんわ」

意図的か天然か、やや軸のズレた返答がいかにも彼女らしい。

「ファナさん、それ、なんのフォローにもなっていない……っていうか――」

そこで、初めて気付く。

「え？ アルファさんって、女性？」

だが、ファナはクスクスと笑って、答えた。

「さあ、どうでしょう？」

「へ？」

リディアに視線を向けると、彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべて、
「せっかくだから、ティースさん確かめてきてよ。……ただし、遺書は準備してね」

「……はい？」

――というわけなのである。

（まったく。冗談なのか本気なのかわからないけど……）

だが、その真偽は彼にとって非常に重要である。……というのも、このティースという人物、実は“妙齢の女性に触れられると気絶し

てしまう”という厄介で奇妙な体質の持ち主なのだ。

（でも、ファナさんの言い方だと、見た目は女の人ってことか。それでああいう言い方をするんだから、要するに女の人みたいな男の人ってことかな？）

と、そんなことを考えて歩いていたティース。

そこへ、

「あ、ティースさーん」

その視界の奥。

見覚えのある少女が進行方向からやってきた。

「あ……」

しかも、やってきたのは少女だけではない。

ゾロゾロ、ゾロゾロ、と。

「うわ」

何度見ても、それは異様な光景だった。

ティースに向かって手を振りながら先頭を歩くのは、十代前半と思われる少女。パツチリとした目に、冷たい風に微かに揺れる栗色のセミロング。かなり見目麗しく、いかにも女の子らしく可愛らしい少女だ。

そして、その後ろ。

「……」

「……」

「……」

真っ黒な皮膚に、まるで無表情な無数の目。見慣れない人間であれば、威圧感どころか微かな恐怖さえ覚えるかもしれない。

黒い体躯にしなやかな筋肉を持つ――それは“犬”だった。番犬。それが十数匹、その可愛らしい少女に追従しているのである。

それはやはり、異様な光景と言わざるを得まい。

「こんにちは、ティースさん」

セシリア・レイルーン。彼女は“屋敷のアイドル”――もとい、“屋敷の（番犬たちの）アイドル”と称される十三歳の少女だ。彼

女が微笑むと、どんなに恐ろしい形相の番犬たちも骨抜きになって単なる愛玩動物へと変貌するという、不思議な魅力の持ち主なのである。

……ちなみにそれは一部の人間にも通用するらしいという噂だ。確かに人の目から見ても相当に可愛らしい少女なので、決してデタラメとも言い切れない。

「あれ、セシル。今日は学園休みだっけ？」

「はい。それで今日は、みんなと遊ぼうかなって」

ゾロゾロと番犬たちを引き連れて、セシルはティースの目の前で立ち止まった。途端、その背後から放たれる無言のプレッシャーが彼に襲いかかる。

(……なんだかなあ)

その様は、そのままアイドルの親衛隊である。

ただ——その番犬の群の中に、一匹だけ異質なもの。銀色の毛を持つ“狼”が混ざっている。

その“マルス”という名の狼だけは、他と違ってどこことなくまともな視線をティースに向けていた。

言うなれば、常識をわきまえた親衛隊長、といったところか。

「そっか。にしても、相変わらずすごいなあ。そんなにペットを引き連れて——」

「——二十点」

「へ？」

驚いた顔のティースに対し、セシルはちょっと真顔で人差し指を立てた。

「ペットだなんて言っちゃ、ダメなのです」

まるで教師が生徒に指導するかのような口調で続ける。

「動物たちをペットと呼べるのは、きちんと養って、きちんと世話をしあげられる人だけです。私は条件を満たしてないので、この子たちとは対等なのです」

「な、なるほど……それは一理あるかも」

彼女らしい理論というべきか。ティースは妙に納得してしまった。セシルはニコリと微笑んで、

「わかれば、よろしいのです」

「はは……気を付けるよ」

思わずホッとしてしまう笑顔。

体質抜きに女性を苦手とするティースにとって、未だ女性とも言い切れない年齢の彼女は、肩肘張らず気楽に話のできる数少ない異性だった。――非常に情けない話だが。

「ところで……セシル？ その、手にしている鉢は？」

「え？ あ、これですか？」

彼女が手に抱えていたのは、直径十センチほどの小さな鉢植えだった。そこに複数枚の葉を持つ一輪の鮮やかな紫色の花のつぼみが植えてある。

「これはレツィアーレの花です。今日咲くみたいなので、あとで部屋に持っていこうかと思って」

「レツィアーレ？ 今日咲くって、まだ全然つぼみの状態だけ……？」

怪訝そうに問いかけたティースに、セシルはにこやかに微笑みながら、

「レツィアーレの花は、ほんの一瞬、夕暮れが迫る頃に咲き始め、日が沈むと同時に花を閉じてしまいます。ですから、その花を見ていられるのはほんの数時間しかないのです。ちなみに――」

セシルはもう一度人差し指を立て、やはり教師のように得意げに続ける。

「花を咲かせる当日は、この下についてるたくさん葉っぱが緑から少し赤っぽい色に変色するのです。……とても綺麗な花を咲かせるので、この花を見るためだけに戦争が一時中断した、なんて伝説が残っているぐらいなのですよ」

確かに今、その葉はほんの僅かに赤味を帯びていた。

「へええ……」

もちろんティースのような男がそんな気の利いた知識を備えているはずもなく。

セシルは少し悪戯っぽい口調で言った。

「男の方でもこういう知識を少しぐらいは備えておくべきですよ？
そうしないと、女の子にモテないのです」

「はは、考えておくよ」

気のない返事でティースは苦笑して、

「じゃ、俺はこれから仕事だから、そろそろ行くよ。また」

「はあい。頑張ってくださいね」

手を振るセシルと別れ、さらには無数の無表情な視線に見送られながら、ティースはさらに歩みを進めていった。

(……冬もそろそろ終わりかなあ)

ところどころに残っていた雪もほとんどが溶け、残っているのは端に寄せられた雪山の一部のみ。ここ数日は陽気も続いていたし、気温的にもそろそろ、だろう。

広大な敷地内ではんの僅かに春の気配を感じながら。

そして第四隊——名称がないので通称“ディバーナ・ゼロ”とも呼ばれる——その詰め所。

そこに到着したティースの第一声は、

「……なんだ、こりゃ」

だった。

彼がこのミューティレイクに来てからすでに八ヶ月ほどが経過している。が、仕事や訓練が忙しいこともあってその全てを把握しているわけではない。もちろん敷地の隅っこにある、このディバーナ・ゼロの詰め所など、見るのは初めてだった。

——詰め所？

そう表現するのが正しいか否か。

他の三部隊の詰め所は、普通の一軒家と鍛錬場が一体化したような建物であり、大きさ的にもそれなりだ。四、五人の隊員が詰めるには少々大きすぎると思うぐらいで、半永久的に生活することさえ

可能ではないかと思われるものだった。

が、しかし、この第四隊ディバーナ・ゼロの詰め所は、それと全く正反対である。

建物自体はどうやら金属製の、まるで飾り気のない四角い箱のよう。広さは……せいぜい二十畳弱といったところか。窓は南と東に一つずつ。西側におそらく出入り口であろうドアがついており、北側は何もない。南に面した窓の外には洗濯物が干してあり、厚手のトレーナー、厚手のズボン、厚手の靴下に、手袋……それを身につけている人物はよほど寒がりなのだろう。

「……ミューティレイクの敷地に、こんな建物が……？」

そんなティースの呟きは至極もつとも。まるでその建物だけ、どこか別の場所から持ってきたようなのだ。……とはいえ、まさか異次元に迷い込んだわけでもあるまい。そこがゼロの詰め所なのは間違いないことだった。

「……」

未だ半信半疑。やや不安に感じながらも、ティースは入り口に立ってノックすることにした。

一回、二回。

だが、返事はない。

「あのー……アルファ、さん？ 今日から配属されたティーサイトです」

三回目。

たったこれだけの広さだ。ノックが聞こえていないはずはない。……とすると、不在か、何か取り込み中か、あるいは聞こえていて無視しているか、のどれかだろう。

「入ってもいいですか？」

それでも返事はない。

ティースは仕方なくドアノブに手をかけた。あっさりと回る。

——微かに、花のような香り。

「え……？」

一瞬立ち止まったティース。

中の風景は外観からも容易に想像できるものだった。

まるで飾り気のない壁。床も敷物は一切無く金属がむき出しのまま。部屋の隅には、少々場違いにも思える紫の花の鉢が置いてあった。一瞬だけ感じた香りは、その花のものだろう。

彼が立ち尽くした原因は、それらではない。

「アルファ、さん……？」

その鉢とは反対側の隅、そこに簡素なベッドがあり、一人の人物が腰掛けてその花を無表情に見つめていた。

と……その視線が、ゆっくりとティースに向けられる。

「――」

言葉を失った。

それは……なんと表現すべきだろうか？

腰まで届こうかという銀色の髪。肌は雪のように白く、やや切れ長の目はどこか“影”を感じさせるもの。

ファナが言ったように、容姿の端麗さでは彼の良く知る少女、シリウスノーフォールにもヒケを取らないだろう。

だが……しかし。

“人形のような”とよく表現されるそのシ―ラですら、この目の前の人物に比べれば“陽”の美しさと言えるかもしれない。

そこにいた人物のそれは、それほどに憂いと影、脆さと儂さを同時に秘めた“陰”の美しさだった。

（――雪女）

思わずティースの脳裏に浮かんた言葉。確かにそう表現するのが近いかもしれない。

しかし。

実を言うと、彼が絶句した理由はそれだけでもなかった。

（……にしても、このファッションセンスは――）
そう。

いや、確かにこのティースという男も、決して他人のセンスをど

うこう言える人物ではない。五段階評価をするなら万年“二”程度の劣等生だろう。

が……そんな彼をしてもそう感じさせてしまうほど、この人物の服装は極めて“特殊”だった。

クリーム色のセーター、室内だというのに水色のマフラー、白い薄手の手袋と、かなりの厚着でとても雪女らしくはない。それだけならまだしも、セーターの下にはさらに色々着込んでいるようで体はややアンバランスに膨れ上がっており、口元は幾重にも巻いたマフラーで隠れ、一見するとまるで我慢大会をやっているかのよう。さらにセーターの胸の部分には大きなハートマークが刻まれていたのだ。

本人の真剣な表情と相まって、それは微妙に笑いを誘う光景だ。

(ど……どういふ人なんだ、一体……)

それだけでは、内面をとっても判断できまい。ただ、ティースを見つめる視線はやけに冷たく、そこだけは間違いなく“雪女”のそれであった。

(とうか……女の人、だよな?)

と、自問する。

いや、確認するまでもない、そこにいたのはどこからどう見ても女性だ。もちろん色々着込んでいるため体の線は全くわからなくなっているが、男が天然でこの容姿だとは到底信じられない。

しかし……そうするとティースはますますわからなかった。

(それじゃあ、ファナさんもリディアもなんであんな言い方を――)

「ティーサイト、だったか」

「……え? あ、はいっ!」

突然の呼びかけに、慌てて反応する。

声は女性にしてはやや低めでハスキーだ。第一印象から異様に無口な人物を想像し、やや不安に感じていたが、どうやらそれほどでもないらしい。

が、

「何しに来たんだ？」

「へ？」

「まだ任務はない。ここに来る必要はない」

「え？」

ティースは驚いて、

「い、いやだって、任務がなくても訓練とかあるでしょう？」

「訓練？」

視線が泳ぐ。そしてアルファは何事か考える素振りを見せた。
やがて、

「それは私が、君を鍛えるということか？」

「ええ。まあ、たぶん……」

それ以外に何があるというのか。まさかその逆でもあるまい。
だが、アルファは真顔のままに納得したように頷くと、

「そうか。……それで、どうする？」

「へ？ い、いや、俺に聞かれても……筋トレとか、稽古とかじゃ
――」

「そうか。それなら、好きなようにやって構わない」

そのまま、視線を戻してしまった。

「え？ ……あ、あのー」

「……」

「アルファ……さん？」

「……」

「……」

どうやらこれ以上話してもラチが明かないようだ。

（……想像以上だな、こりゃ）

ティースは早々に諦め、仕方なくナイトで繰り返してきた基礎トレーニングから始めることにした。

「……」

彼が黙々とトレーニングをする傍らで、アルファは相も変わらず
視線の先の花を見つめている。アドバイスするでもなく、もちろん

自らがトレーニングするわけでもない。まるで、自分一人の世界をそこに作ってしまっているかのようだ。

（やっぱり変な人だった……）

現在、このディバーナ・ロウに所属するデビルバスターは四人。アクアⅡレビナート、レインハルトⅡシュナイダー、レアスⅡヴォルクス……そしてこのアルファⅡクールラント。

ティースはこれでその全員と相まみえたことになるが、その中でも変人度では群を抜いて一番だろう。

そうして無言の時間が過ぎ――約二時間後。

「はぁ、はぁっ……ッ!!」

したたり落ちた汗が床のところどころに小さな水たまりを作っている。床は先ほども言ったように金属がむき出しになったままなので吸収されるでもなく、少しずつ乾いていく他はそこに溜まる一方なのだ。

「はぁ……はぁ……ッ!」

（そ、想像以上にキツイ……）

ここに戻ってきてから本格的なトレーニングをするのは初めてだ。今までも体を動かさなかったわけではないが、それでも久々のトレーニングに使ってない部分の筋肉が悲鳴をあげていた。

「はぁっ……はぁっ……ふうっ……」

少しずつ、ゆっくりと呼吸を戻していく。金属の床のヒンヤリした感触が心地良かった。

「あ……アルファさん……ひとまず、終わりましたけど……」

「そうか」

「……」

「……」

「あの……ふうっ……次は、何をすれば……」

「まだ、何かしたいのか?」

「まだ、って――」

二時間前と似たような問答の繰り返しだった。

（ていうかこの人、二時間もずっと同じ格好のままだし……）

とりあえず体と床に落ちた汗を拭き取ることにする。が、そうしている間もアルファは全く動く素振りを見せなかった。

「……あの、アルファさん」

そうしてさすがのティースもようやく気付く。

どうやらここは今まで所属してきたところとは根本的に違って、ひとまず今日は訓練を諦め、まずは彼女とのコミュニケーションを取ることが優先らしい、と。

「少し、話をしてもいいですか？」

「話？」

切れ長の美しい目がようやくティースを捕らえた。

「ええ」

汗を拭き終え、ティースは意を決してその場に腰を下ろした。：もちろん彼は女性と話すことが苦手である。が、近付かれられなければ普通に会話することは可能だし、このアルファという女性は美しいことは美しいが、いかにも女性らしい明け透けな色香とは無縁（そのコスチュームの影響も多分にあると思うが）のようで、比較的接しやすいだろうと思えたのだ。

「しばらくチームを組むわけですから、お互いのことを色々知っておいた方がいいかなって」

だが、彼女は素っ気なく答えた。

「私には別に必要ないが」

「う……そ、その、俺には必要なんです」
食い下がる。
と。

「それなら、別に構わない。私のことを話せばいいのか？」

「え？ あ、ええ……」

意外にもあっさりした承諾に、ティースは少々拍子抜けした。が、

そんな彼の心情を気にした様子もなく、そのままアルファは自らの自己紹介を始める。

「アルファIIクールラント。十七歳。十二月二十五日生誕。身長百七十五センチ。体重五十五キロ」

「あ、百七十五センチもあるんですね」

ティースは意外そうに呟く。……どうやら、ずっと座っているのとやや膨れた厚着せいで感覚が狂っていたようだ。

しかし、そこでふと気付いて、

「……っていうか、自己紹介って、別にそんなところから紹介しなくても——」

「性別、男」

「いや、だから——って……おっ、おとおおおおっ!!?」

絶叫にも近い声が小さな建物の中に響き渡った。もし窓が開いていたなら、おそらく相当広い範囲まで届いていただろう。

「なにか?」

だが、そんなオーバーリアクションにも、彼女——いや、彼?

は平然とそう聞き返した。

「い、いや、だって……え? 男?」

「私が男だと、そんなに不思議なのか?」

「……不思議っていうか——」

そのときになって、ティースはようやくファナたちの言葉の意味を悟ることになった。

「だ、だって……どう見ても、女の人にしか見えません……」

「……」

アルファは何事か考える仕草をした。長めの睫毛が微かに震える。……こうして見ると化粧もなにもしていないようで、肌の白さも長くてくつきりとした睫毛も、全て天然のものらしい。

——ますます信じがたい。

やがて、考えた末に自らの長い銀髪を指先に挟んでアルファは答えた。

「髪の毛の長い男がそんなに珍しいのか？」

「いやいや！ 髪が長いとか短いとかの問題じゃなくて！」

ティースは手を振って否定する。

「というか、たとえ髪を全部剃ったところでおそらく女性にしか見えないだろう、とティースは思った。」

再び考え込むアルファ。

「……身長が百七十五センチもあるのは、女にしては珍しい部類だ」
「俺の知り合いは百八十センチ以上ありますが……」

「……。普通の女はこういう乱暴な喋り方はしないものだ」

「ダリアとかドロシーはもっと乱暴かなと……」

「私が女だとしたら、もっと——」

「というか」

ティースは怪訝そうな顔のまま、突っ込む。

「本当に男なら、普通、そういう弁解の仕方はしないんじゃないか……」

「……」

目を閉じて、困ってるような困ってないような微妙な表情をする。

「しかし私は男だよ。ファナに確認してみるといい」

「笑いながら、『どうでしょう？』……と言ってましたけど」

「……」

「……」

黙り込む。とはいえ、気分を害した様子ではなく、どう答えるべきか迷っていて、なおかつその言葉がなかなか思い浮かばない。……そのうちに答えるのを諦めてしまったようだ。

そんな彼（彼女？）の姿を見て、ティースは確信する。

「……男だって言ってるけど……どう考えたって女の人だよ……」
だが、その後……それ以上のコミュニケーションを諦めてそこを退出したティースは、ファナやリディアが曖昧な言葉を口にした“本当の理由”を知らされることになるのである。

「……ああ、やっぱりそう思った？ でもね。ディバーナ・ロウ的にはそういうことになってるし、戸籍的にも確かにそうなるんだ」

夕食後、別館一階のホールにて。

アルファに対する正直な感想を述べたティースに、リディアはいつものように片手にした分厚い本を丸テーブルの上に置き、彼の正面に腰掛けてそう答えていた。

「そういうこと、って、男だってこと？ ホントにか？」

驚くティースに、リディアは小首を傾げて、

「ま、戸籍なんてアテにならないけどね。主要都市以外に住んでる人なんてかなり適当だし、いくらでも他人を名乗ることはできるからさ。ただ、わかる限りでは特に疑う余地はなし。データのみで言う、アルファIIクールラントは間違いなく男だよ」

「で、でも、あの人、デビルバスター試験とか受けてるんだろ？」

リディアは首を横に振って、

「デビルバスター試験に性別検査はないよ。ウチだって入隊時にいちいち調べたりしないし。ティースさん、裸にされて調べられた？」

「そ、そりゃ、されてないけど……でも、ここで暮らしていれば偶然でも誰か確認する機会もあるんじゃないか？ ほら、風呂場とかで……」

ティースは食い下がった。

ここの浴場は基本的に一人で入るタイプで、いくつかある浴場を交代で使うことになっている。が、実際のところ、四、五人で入っても充分足りるだけの広さがあるため、きっちり一人ずつ入るようなことはない。たとえそうだとしても、脱衣所で他人と顔を合わせることが珍しくなかったのだ。

が、リディアはそれに答えて、

「それがねえ。ティースさんも会ってわかると思うけど、あの人、人前に肌をさらすのを極端に嫌うんだ。だから、お風呂も真夜中に

必ず一人で入るの。……以前、アルファさんが入っていると気付かなかった使用人の男の子が、脱衣所に入った瞬間“何者か”に気絶させられたらしいって話もあるんだから」

ティースはやや苦笑いをして、

「……それって肌をさらすのを嫌うとか、そういうレベルじゃないなあ」

「女だつてのを隠すために、とも考えられるんだけどね。ただ——」
リディアは小さく首を振って、

「あの人が男だつていう、なかなか揺るがしがたい証拠もあるんだな、これが」

「証拠？」

「うん。実は——」

と、言いかけたところへ、

「あれれ。珍しい組み合わせですね」

「ん？」

「あ。セシルさん」

振り返った二人の視線の先に、大きめのトレイを手にしたセシルの姿があった。トレイの上にはまだ手のついてない夕食が乗っている。

（あれ。でも、確かさっき、俺と一緒に食べてたはず……夜食かな？）

ティースは一瞬そう考えたが、まさかそんなはずはなからう。彼女は確かに、その体型の割には“かなり”健康的な食欲の持ち主だったが、さすがにそこまでの暴食家でもない。

と……彼女もそんな彼の視線に気付いたのだろう。

「あ、ティースさん。もしかして私が食べると思ってます？」

「……あ、いや」

セシルは少しだけ不満げな顔をする。

「いくらなんでもそんなに食いしん坊じゃないですよ、私。……あ、今、ものすごく疑わしい顔しましたね？」

「い、いや、してないよ」

だが、どうやら信じてもらえなかったらしい。

セシルの不満顔はさらにエスカレートして、

「ひどいです。こう見えても私、今はシーラさんのように美しくなるべく、日夜ダイエットに精を出しているのです。それなのにこんな食べてたら、すぐブタさんになっちゃー」

そこへリディアがポツリ。

「あ、セシルさん。チーズケーキ」

「えっ、チーズケーキ!? どこどこ、どこにあるの、リディアちゃん!?」

「……のような雲がさっきあったなあ」

「え——」

「……」

「……」

二人の無言の追求が、冷たくセシルに突き刺さる。

「……うう」

セシルはちよつとだけ言葉を探すように視線を泳がせたが、やがて観念した顔でガックリと項垂れて、

「リ、リディアちゃん、チーズケーキは反則だよ……」

「でもセシルさんが一度に食べるケーキの総カロリーは、そのトレイに乗ってる夕食の軽く三倍はあるんじゃないかな、きつと」

「三倍って……」

言葉だけで、ティースは胸焼けを覚えてしまった。

「そ、そんなに食べるのか」

セシルはブルブルと首を横に振って、

「たっ、食べませんよっ!？」

「そりゃ、いつもそうなる前に誰かが止めるからね。そうじゃなかったら、今頃ブタどころか牛みたいになってるよ、きつと」

「うう」

かなり形勢不利なセシルは、たじろぎながら苦しい反論をした。

「……わ、私の故郷では、ケーキ分のカロリーはお腹じゃなくて胸に行くという素晴らしい言い伝えが――」

「それは聞いたことがないけど」

リディアは平然と答えてから、セシルの胴体をじっと見つめて、
「少なくとも実践した結果は、その言い伝えを、真っ向から、完璧に、完膚無きまでに、否定しているみたいだね」

「……くすん」

どうやらこの舌戦(?)は、最初から勝負にもなっていないようである。

と、そんな二人のやり取りにティースは苦笑しながら、

「まあまあ」

普段なら絶対に口を挟まないような話題だったが、相手が年端も
いかない少女二人とあって(中身はそうでもなさそうだが)すぐさま
フォローを入れた。

「なんていうか、まだ若いんだし。そんなの全然気にすることない
よ、うん」

だが、彼のそんな不用意なフォローに、リディアが早速突っ込ん
で、

「うわ、年寄りくさ。とても十代の言葉とは思えないよ、それ」

「う……」

たじろいだところへ、セシルもちよつと上目遣いに彼を見つめ、
「でもティースさん。私、リディアちゃんにも負けてるんですよ……
…その、ほんのちょびつと」

そう言って人差し指と親指で“ちょびつと”の隙間を作ってみせ
る。

「は、はあ……」

やや具体的な話になりはじめて、さらにたじろぐティース。……
すでに会話に参加したことを後悔し始めていた。

「……ま、まあ、そういうのは人それぞれに個性があって、いいん
じゃないのかなあ」

適当に濁し、会話を終わらせようとする。

が、リディアがそれを見逃すはずはなく、

「ああ、そうだよね」

手をポンと打って、

「ティースさんの場合、むしろ成長してない方が好ましいわけだから」

「……は！？ そりやどういう意味——」

「そ、そうなんですか？　じゃ、じゃあ、私みたいな感じでも……？」

上目遣いのまま微かに頬を染めたセシルに、思うつぼだと心のどこかで理解しながらもティースは大いに狼狽した。

「ちっ、違う違う！　違うって！　俺はただ、そんなのは個性だから気にするようなことじゃないって言ってるだけで——そっ、それにセシル！　君は充分可愛いんだし、そんな自分を卑下するようなことを言っちゃ——！」

案の定、リディアはケラケラと笑って、

「ムキになっちゃって。冗談、冗談だってば」

「……ああ。ごめんなさい、ティースさん」

セシルも悪戯っぽい笑顔を浮かべた。……どうやら共犯だったらしい。

「っ……」

ティースもようやく自分の声が必要以上に大きくなっていたことに気付き、慌てて口を噤む。

そして続きかけていた言葉を呑み込むと、やや落ち着きを取り戻し、

「……はあ」

口をついたのはため息。

（……どうも、ここでは俺が一番弱い立場だったみたいだなあ）

そんな自分の考えに、情けなさを感じるところか、可笑しさに苦笑を浮かべてしまう。

腐っても（？）年長者ということか。平常心さえ取り戻せば、彼女らの冗談を微笑ましいと思う程度の余裕はあるようだ。

「でも、可愛いって言うてくれたのは嬉しかったです」

今度は演技でもなく僅かに顔を上気させたセシルに、リディアが不満そうな顔をして、

「変だなあ。あたし、一度も言われたことないよ」

ティースはようやく反論する。

「だって、君の場合は言われても嬉しくないだろう？」

「わかってないなあ。わかってないよ、ティースさん」

ため息とともに首を振って、

「女の子はいつでも可愛いって言って欲しいもんなの。そんなんだから、その歳で恋人もできないんだよ。……どうせシーラさんにも言っただけなことなんてないんでしょ」

言いたい放題だったが、ティースは気分を害した様子もなく苦笑して、

「はは、そりゃそうだ。俺がそんなこと言ったら、喜ぶどころか気味悪いって一刀両断だよ」

「ああ……あの人は確かにそうかも」

反論せず、リディアは納得した表情をした後、ボソツと呟いた。

「……とりあえず口ではね」

「？　なんだ？」

「なんでもなあい」

そっぽを向いたリディアにティースは不思議な顔をしたが、それ以上突っ込むことはなく話題を変えた。

「ところでセシル。結局、そのトレイは？」

「あ、はい。これはお兄ちゃんのところへ持っていくのですよ」

ティースは少し驚いた顔で、

「え。君、お兄さんなんていたのか？」

「あれ？　言ったことなかったですか？」

セシルは意外そうにした後、ニツコリと笑みを浮かべて、

「とても優しくて、とてもカッコいい兄なのですよ。今度、ティースさんにも紹介しますから、仲良くしてくださいね」

相当仲がよいのか、セシルはまるで自分のことのように誇らしげだった。

「ああ」

確かに彼女の兄ならばほぼ間違いなく美形だろう。

自然、ティースの口元には微笑みが浮かんで、

「そっか。じゃあ楽しみにしてるよ」

「はあい。あ、いい加減急がないと冷めちゃう。……それじゃあティースさん、リディアちゃん、またね」

「うん。またね、セシルさん」

リディアが手を振ると、セシルも手を振ろうとして――両手がトレイで塞がっていることに気付き、考えた末に恭しく一礼して去っていった。

「へえ」

そんな彼女を見送りながら、ティースは意外そうにポツリと、

「あの子にお兄さんなんていたんだなあ」

だが、リディアは当然のように答えて、

「そりゃそうでしょ。保護者がここで働いてなきや、普通の学生のセシルさんがこの屋敷に住んでるはずないじゃん」

「あ、そりゃそうか」

至極もつともな話だった。

「でも、聞いたことないなあ。ディバーナ・ロウじゃないのか？」

「ディバーナ・ロウだよ。裏方じゃなくて、ちゃんと隊に所属してる」

「え？　でも……？」

ティースは怪訝そうに視線を流して考える。

……ディバーナ・ロウは第一隊“ファントム”第二隊“ナイト”第三隊“カノン”……そして第四隊の通称“ゼロ”で全てだ。そして彼は今までその全てに所属し、全てのメンバーと顔見知りになっ

ている。

「レイルンなんて名字、セシル以外で聞いたことないぞ？」

「うん。セシルさん、小さい頃遠い親戚に引き取られたんだって。だから、今もそっちの名字を使ってるの」

「へえ……ってことは、そのお兄さんは俺の知ってる人ってことかあ」

「当ててみる？ 考えればすぐわかると思うけど」

「え？ ……それじゃあ」

今まで知り合ったディバーナ・ロウのメンバーを思い浮かべる。

（まず、レイさん……じゃないだろうなあ）

当たり前だ。それだと、リディアとセシルが姉妹ということになってしまう。

（ファントムには女の子しかないし、ナイトは……ギレットさんはさすがにないだろうから、マイルズさんとパーシヴァル……あとは……ヴィヴィアン？）

一瞬、ヴィヴィアンとセシルが並んでいる姿を想像して、吹き出しそうになった。

「ビビさんは違うよ。それじゃセシルさんがあまりに不憫すぎるし」
反応だけで彼の思考を見抜いたようだ。……知らぬところでネタにされるヴィヴィアンも少々可哀想ではある。

「じゃあパーシヴァルかな？ 年齢的にも三つ？ ぐらいでピツタリだし」

「……ティースさん」

ティース自身は至極まっとうでしかも自信のある回答だと思っていたのだが、リディアは呆れたように大げさなため息をついた。

「話の流れを考えてよ。今の流れですぐわかるって言ったら、一人しかないでしょ」

「え？ 話の流れ？」

その言葉に従い、ティースの思考は会話の流れを逆に辿り始めた。セシルとのやり取り、そしてその前の会話――

「……え？」

すぐ気付く。

そう考えてみれば確かに。その流れで行くと、回答は一つしかない。

「つてことは——……で、でも待った。だって、アルファさんはどう見ても“兄”じゃ——」

「だから言ったでしょ。なかなか揺るがしがたい証拠があるんだ、つて」

テーブルに肘をつき、リディアは視線を横に向けた。

「実の妹——ううん、実の妹と思われるセシルさんが、あの人のことを“兄”だと認めてるの。……認めてるって言い方はおかしいかな？ 最初から兄妹としてここに來たわけだし」

「……」

それは確かに、なかなか揺るがしがたい証拠だった。

「じゃあ、本当に……？」

「だから、それがわからないから確かめてみてって言ってんの。……

……あ、そうだ」

ポンと手を叩いて、リディアはまるで悪戯を思いついた子供のような表情をした。

「そういや、簡単に確認できる方法があるじゃん」

「……え？」

嫌な予感。

もちろんこういう場合の彼の予感は、外れた試しがなく——

「喜んでいいよ、ティースさん。まるで役に立たないその厄介な体質が、遂にスポットライトを浴びる日がやってきたんだから」

「うわ、やっぱり……冗談じゃないぞ。俺だって気絶すんのはゴメンなんだ」

「大丈夫大丈夫。データ上、アルファさんは完璧に男だから」

「つたって、それ以外は完璧に女性じゃないか！」

「うーん、性格もって言いたいけど、ウチにはダリアさんとドロシ

「ーさんがいるから弱いなあ。あの二人、アルファさんよりは確実に男らしいし」

「……言いたい放題だなあ」

ティースはため息とともに、

「とにかく。そんなことするぐらいなら、男でも女でもどっちでもいいよ、もう。……セシルが言ってるんだ。きっと男の人なんだろ」「うっわあ。つまんない結論ー」

「つまんなくていいんだよ。それに、そんなに調べたいなら、君のお兄さんとかに言えばいいだろう？ あの人なら、きっと興味があるんじゃないの？」

と、ティースは言った。

リディアの兄、レインハルトⅡシュナイダーはデイベーナ・ロウの第二隊ナイトの隊長であるが、女性と見ればすぐ口説きにかかる――要するに“女好き”なのである。確かにアルファが女性だとするなら、彼にとっても見過ごせないことだろう。

……と、ティースは思ったのだが、リディアはパタパタと手を振って、

「あー、アレはダメダメ。たとえ女だとしても苦手なタイプだって。……それに、いくら兄さんでも、力づくではちよっと難しいかもねえ」

「？」

テーブルに肘を立てて手を組み、そこに顎を乗せてリディアは彼を見つめた。

「ティースさんは“サン・サラス”っての、聞いたことある？」

「え？ ああ……もちろん」

突然の話題変化に戸惑ったが、それはもちろん、デビルバスターを目指す彼には聞き覚えのある単語だった。

“サン・サラス”

本来は神の使いと称される獣魔“光の一族”の種族名である。が、その単語にはもう一つの意味があるのだ。

ティースは答えた。

「デビルバスター試験でもっとも重要な科目“戦闘技術”に関して、その年の試験をトップの成績で通過、尚かつある一定以上の基準を満たした者に贈られる称号、だろ？」

「ご名答」

リディアはパチパチと軽く手を叩く。

「まあ、俺にとっては雲の上の話だけどなあ」

「だろうね」

ティースの言葉に、リディアもまるでフォローすることなく素直に頷いた。

何しろ現在、サン・サラスの称号を持ち、なおかつ現役で戦っている者は、大陸全土を合わせて二十人にも満たず、それはこの大陸に存在する領地の数より少ないのだ。

もちろん、それはあくまでデビルバスター試験終了時の評価であり、サン・サラスが常にその世代最強というわけではない。が、一定以上の実力の証明ではある。

「現在、このネービス領にいとされる“サン・サラス”はたったの三人だよ」

リディアはそう言って指を三本立てた。……それでも三人もいるのは、大陸第二と言われるネービスだからこそ、だろう。

「ネスティアスのディグリーズ……ティースさん、ディグリーズは知ってたよね？」

「ああ。ネスティアスのトップを占める十人のデビルバスターのひとだよな？」

もちろんネービスの誇る、ネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”のことだ。彼だってそのぐらいのことは基礎知識として持っていた。

「そう。……そのディグリーズの一人で、十三年前のサン・サラス、オリヴィオⅡタングラム。そしてもう一人もディグリーズで、七年前のサン・サラス、カレルⅡストレンジ」

名前は初めて聞くものだ。が、それを二人も抱えているネスティアスは、さすがというべきか。

「それでもう一人が、近十年で最高レベルと噂された三年前、三百十七年のサン・サラス。……誰のことかは、言わなくてもさすがに気付くでしょ？」

「え？」

言われて初めてティースは、彼女がこの話題を持ち出してきた意味を悟った。

「まさか、アルファさん？」

話の流れを考えれば、答えはそれしか有り得なかった。

もちろんリディアも頷いて、

「そう。一見、女性にも見える……ううん、女性にしか見えない、当時はまるで無名のあの人。もちろん試験官も周りの人も、アルファさんのこと女性だと思ってた。だから、そのときの試験会場は異様な雰囲気に使われていたみたい。女性のサン・サラスは——性別検査があるわけじゃないから確実にじゃないけど、一応、まだ一人も出ていないはずだからね」

「……」

ティースは驚きの表情のまま呟く。

「あの人サン・サラス——？」

とても信じられない話だった。

あのどこかおかしな格好、女性のように（おそらくは）華奢な体、どこかピントの合っていない性格。

そこから“世代最強”を想像するのは確かに難しいだろう。

リディアは続けた。

「あの人たちぐらいのレベルになると、十回戦って十回とも勝つなんて、そんなことは滅多にない。体調、精神状態、環境、偶然……だから例えば、アルファさんと兄さんが戦ったらどっちが強いかなんて、そんなことはわかんない。でもね」

そしてリディアは悪戯っぽく笑った。

「全く同じオッズだったら、あたしはアルファさんの勝ちに賭けちゃうな。もちろん相手がアクアさんでもレアスちゃんでも同じ」

「……レアスちゃん、って」

「あ。本人に言ったら怒るから言わない方がいいよ。……ま、あたしは別にいいんだけどね。あの子あしらうのは慣れてるから」

ティースは苦笑する。

いくら同じ年とはいえ、ディバーナ・カノンの隊長である少年に對しても、彼女は言いたい放題だった。

「つまり、アルファさんはそれほど強いってことか」

「ま、実際どうかなんてやってみなきゃわかんないし、今のところ、実現する理由もどこにもないけどね。……ああ、待てよ。あと五年もすればもしかすると――」

「？」

「最愛の妹が好色な同僚の毒牙に掛けられ、怒り狂う兄の復讐劇。

……どう？」

「……」

ため息が落ちる。

「あ、これだとどっちとも取れちゃうか。あたしも五年後には魅惑的なナイスバディになってる予定だし、アルファさんが男なら色香に迷ってもおかしくないなあ。それに兄さん、とびつきり可愛い娘でも洗濯板にはあまり興味なさそうだから、セシルさんじゃ五年経っても望み薄だし……でも待てよ。逆だとしても、アレがあたしのために怒り狂うなんて、もっと、ってゆーか、絶対にない話じゃん」

「……」

「うっわ。なにその、“ありえねえ”って目」

「……いや、ただ呆れてるだけだよ。君の言いたい放題ぶりに、ね」
ついていけそうになかった。

それに、

（ま……事実がどっちであれ、俺がアルファさんに触れないようにすれば、それで済む話なんだよなあ。じゃあ、どっちでもいいや）

彼は比較的、野次馬根性に乏しい男でもあったのである。

その2『関係改善の決め手は温泉旅行』

まだ二月だというのに、ネービスではここ数日、まるで春のような陽気が続いていた。道の脇に微かに残っていた雪は完全に溶けてしまい、気の早い草花は今にも芽吹こうかとしている。

そんな麗らかなミューティレイクの昼下がり。

正門を抜けて敷地内に入り、本館及び別館へと向かう道を半分ほど辿った後、途中から右へ進路を変えてしばらく足を進めていくと、そこにまるで小さな丘のように隆起した場所がある。

頂上付近は大体二階と三階の間ぐらいの高さがあり、そこからはミューティレイクの庭のほとんどが見渡せる場所だ。

「平和だなあ」

今日はそこに、ティースの姿があった。

「暖かいし、風は気持ちいいし、のんびりした陽気だし……」

そのあまりに安穩としたセリフは、今もなお、汗だくになりながら特訓を続けているディバーナ・カノンの連中に聞かれたら、速攻で袋叩きにされそうな言葉である。

「平和、だなあ」

丘の頂上に腰を下ろし、一本だけそびえる大木に背中を預けたティースの口から、もう一度その言葉が漏れる。

彼がディバーナ・ロウの第四隊“ディバーナ・ゼロ”に所属するようになってから今日でちょうど一週間。この日の午後は執事のアオイからデビルバスターに必要な知識を教えてもらうことになっていたのだが、直前になってそのアオイが急用によって出掛けてしまい、その時間が丸々空いてしまった。そこでせっかく空いたこの時間を、気分転換のためにこうして使っているというわけである。

「ふう……」

涼やかな風が駆け抜けた。視線の先にはミューティレイクの本館があり、庭では使用人たちが動き回っているのも見える。

と。

「ティース様！」

「……ん？」

その声に、遠くに向けていたその視線を近い場所へ戻す。と、そこには、白と紺の清潔感溢れるミューティレイクの使用人服に身を包み、長いストレートロングの髪を微かに風になびかせ、中サイズのバスケットを片手に駆け寄ってくる顔見知りの姿があった。

「リイナ」

その姿を視界に捕らえるなり、彼の胸は意識せずに高鳴って。

リイナはグレイグッドクライスト。彼にとっては昔馴染みであり、最近再会した“元”王魔グレイグ族の少女である。

(……似合うなあ、やっぱ)

そんな少女の姿には、彼でなくとも数多くの男性が胸を踊らせることだろう。それほど、そのスタイルは彼女にピタリとハマっているようだった。

「どうしたんだ、リイナ。仕事は？」

「ええ」

ほんの僅かに息を切らせて、リイナはティースの眼前で立ち止まった。

その姿を見てもわかるように、彼女はこのミューティレイクで屋敷の掃除やベッドメイクなどを中心とした、いわゆるハウス・メイドの仕事をしている。

やや“人間世界”の常識に欠ける彼女のこと、当初はティースも上手くやれるかと心配していたのだが、どうやら上手に溶け込んでいるようだ。

「今はお昼休みをもらいました。それで、ティース様がここにいると聞いたので——」

リイナはそう言って手にしたバスケットを示し、ニッコリと笑顔を見せる。

「一緒に食べようかと思って、持ってきたんです」

「あ、そっか」

さらに胸が高鳴る。……いや、たとえば彼女に“そんなつもり”など微塵もなかったのだとしても、少なからず好意を持っている女性のそんな申し出が男として嬉しくないはずはない。

「隣、失礼しますね」

リイナは服が汚れないようにと持っていた大きめのスカーフを敷いて、そこに腰を下ろした。

少し強めの風が吹いて、長い髪がふわっと宙に踊る。

ティースはそれをなんとなく焦点に捕らえながら、質問した。

「仕事、少しは慣れたかい？」

「ええ。思っていたよりも大変です」

素直に答えるリイナ。

「だろうなあ」

確かに、あれだけの広さの屋敷だ。いくら人数がいて分担されているとはいえ、毎日の掃除だけでも大変な手間だろう。

だが、さらに答えるリイナは笑顔のまま続けて、

「でも、楽しいです。みんな親切ですし、充実……というんですか？ とにかくそんな感じがします」

「……そっか」

その言葉に、ティースは改めて胸をなで下ろす。

彼女にとっては“仕事”というものの自体、初めて体験する行為だ。このミューティレイクはその家柄だけあって非常に厳しい職場だが、その分、教育、環境はしっかりと整っている。仕事に対する真剣な気持ちさえあれば非常に働きやすい場所だろうし、その点、彼女にとっては最良ともいうべき条件だったのかもしれない。

（ファナさんのおかげ、だよなあ……）

リイナもそうだし、一緒に来たエルレーンについても、こちらでは正確な戸籍などももちろん存在するはずもなく、要するに全く素性不明の二人だ。が、当主のファナはそんな二人に対し、ティースの知り合いというだけで面接を許可し、その結果、採用される運びと

なった。

本来、このミューティレイクのような家柄のはっきりした場所では考えられないことであつたが……しかし。

『ああ、そんな恐縮しなくてもいいんじゃない？ 別に珍しいことじゃないし。むしろそういう怪しいので溢れてるからね、ここ』

とは、執事でもあるリディアの弁であり、おそらく事実なのだろう。

さて。

そんなこんなで、早速、彼女の持参したバスケットを開いたティース。

「じゃあ、早速いただき——」

だが、中身を覗くなりピタリとその動きを止めた。

「……？」

微かに怪訝そうな表情。

バスケットの中に並んでいたのはパンの間に具を挟んだ、いわゆるサンドイッチのようなもの。……が、具の組み合わせは少々見慣れないものばかりだった。中には、食べるのを躊躇ってしまうような奇妙なものまである。

「……あの」

そんな彼の表情に気付いたのだろう。怖ず怖ずと、リイナが説明を始めた。

「自分で作ってみました。……こちらの食材は見慣れないものばかりで、まだ良くわからないんですけど、自分で味を確認して、合いそうなものを選んで」

「あ、ああ、なるほど」

そういうことならば、見慣れない組み合わせがあるのも頷けた。

リイナは少し躊躇いがちに、

「あの……もし口に合わないようでしたら、すぐにちゃんとしたのを持ってきますから——」

「ああ、いや。自分で味を確認したんだろ？ だったらきつと問題

ないよ」

もちろん彼には疑うつもりなどない。彼女が少ない休み時間を利用し、苦勞してまで作ってきてくれたものなのだ。むしろ喜んで手を伸ばす。

しかし、

（あれ……でも、待てよ。リイナって確か――）

“それ”を思い出したのは、一つ目――見た目からして一番無難な、すりつぶした玉子の挟まったサンドイッチを口に運んだときだった。（……！！）

食べた瞬間、口の中に広がったのは……この世のものとは思えない、甘ったるい香り。

「どうですか？」

「い、いや……うん」

狼狽しながらも、二口目を運ぶ。……背中に汗が浮かんだ。

「お、おいしい……かな」

「本当ですか？」

パアツと、笑顔が輝いた。

「それじゃあ、私も少しいただきますね。……あ、ティース様は遠慮なさらずにどんどん食べてください」

「あ、ああ……」

一つ目、完食。

再び、バスケットの中へ視線を移す。……さらに冷や汗が浮かんだ。

不味いわけではない。今、笑顔でそれを口にする彼女のように、その味を好む者もいるだろう。

だが――

（そ、そうだ……リイナって、ものすごい甘党なんだっけ……）

一つ目で、すでに彼の胸は一杯だった。……一見玉子のように見えたのは、バナナらしき甘い果物をベースにしたクリームだ。しかも、標準的なそれよりもさらに甘さが強化されている。

震える手で、次のパンへと手を伸ばした。……おそらくラズベリージャム。他の怪しげなものよりは、正体の知れているそれが一番無難だと感じた故の選択だった。

だが、それはもちろん“甘い”考えで――

「このジャムは少々甘さが控えめのようなので、少し砂糖を加えてみたらちょうどよくなりました」

「あ、そう……」

どう考えても、“少し”というレベルではなく――どうにか二つ目、完食。

（うっぷ……）

食べられないレベルであるなら、心を鬼にして拒否することも可能だったろう。が、なまじ普通に食べられるだけに、それもできないまま――

「ごちそうさま……」

「ごちそうさまです」

結局、彼女自身が口にした二つ以外――総計十個ほどのサンドイッチは全てティースの胃袋に収まっていた。

（うう、口の中が甘ったるい……何か飲み物――）

そんな彼の心情を（中途半端に）察したのだろう。リィナは準備済みのコップを彼に差し出して、

「飲み物です。どうぞ」

「……」

一見、普通の牛乳。……もちろん、それがどんな味であるかなどもはや想像するまでもなく。

なんとか牛乳らしき甘ったるい液体を飲み干して、

（……今度、それとなく忠告してあげることになろう……）

と、ティースは心に強く決意するのだった。

そして――

「それじゃあ、私はそろそろ仕事に戻ります。……ティース様」
ゆっくり立ち上がったリィナは、弾んだ笑顔で彼を見る。

「ああ……？」

と。

顔を上げ、太陽を背にした彼女の姿を視界に捕らえた瞬間。

「……」

まるでその周りだけ一足先に春が訪れ、花開いたかのような、そんな錯覚を覚えた。

やがて、ティースはその原因に気付く。

「頑張ってくださいね。私、仕事でも、食事中でも、寝る前も、いつでもティース様のことを応援していますから」

暖かな、微笑み。まるで花が咲いたかのような笑顔。

思わず胸が静かに鼓動を打ち鳴らして。

「あ……ああ」

その言葉に――胸焼けなどアツという間に消え失せた。

「ありがとう、リイナ」

あまりにストレートで、あまりに純粹な言葉は、いつでも彼を勇気付け、元氣付けることができた。……彼が無自覚ながら、彼女に対して徐々に心惹かれていったのも、それは無理からぬことだったろう。

小走りに遠ざかっていく少女の後ろ姿を追いながら、ティースの頬は思わず緩んでしまう。

と。

（……あれ？）

リイナを追った視線の先。

そこに、やはり彼の方へと向かってくる見覚えのあるシルエットを見つけた。リイナとは少しデザインの違う使用人服に身を包み、何故か同じようなバスケットを手にした、輝くポニーテールの少女だ。

（シーラじゃないか）

シーラ＝スノーフォール。彼が保護者として面倒を見る少女であり、このネービスの伝統あるサンタニア学園、薬草学科に通う三回

生……だったが、今は諸事情によって休学届けを出しており、四月から三回生をやり直すことになっていた。

(でも……なんでまたあんな格好してるんだ?)

首を傾げるティース。

確かに、彼が最近二ヶ月ほどここを留守にしていたときは、彼女自ら志願してこの使用人として働いていたようだ。が、今はもう、その必要はないはずである。

「あ、シーラさん」

「リィナ」

微かに耳に届いた声。

二人は途中で当然のように鉢合わせ、そこで立ち止まり何事か話し始めたようだ。が、最初の第一声以外はまったく聞こえてこない。(なに話してんだろ……?)

少し、気になった。

意外と言うべきか、あるいは当然と思うべきなのか。シーラは久々に再会した二人——リィナとエルレーンに対し、ティースがここ数年見たこともないような驚きと喜びの表情を浮かべ、僅かにはしゃぐ様子すらも見せた。

過去の関係を考えれば、当然の反応。だが、最近の彼女の様子を考えるなら、やはり意外でもあり——

(……なにが、変わったのかな……)

視線の先で言葉を交わす二人。リィナは先ほど彼に向けていたのと同じ微笑みを見せていたし、対するシーラの方も、普段彼には決して見せないような明るい笑顔を浮かべている。

どこからどう見ても、四年前と変わらない。仲のよい、友人同士の会話。……彼女がああ微笑みを彼に対しても向けていたのは、一体いつのことだったろうか。

(……まいったなあ)

苦笑しながら、胸が微かに軋む。

彼もまた、どうでもよいと思っているわけではないのだ。ただ、

慣れてしまった……半ば諦めてしまっただけで、それは彼女にとってとても淋しいことだった。

「あっ……」

どうやら会話が終わったらしい。リイナが本館の方へと戻っている。

そして――

「おっ……おい、シーラあっ！」

同じようにそのまま去っていくとするシーラを、ティースは思わず呼び止めた。

「……？」

彼女が立ち止まり振り返ったのを見て、慌てて腰を上げ走り出す。

「なに？」

「いや……はあっ……」

慌てすぎたのだろう。大した距離でもないのに、ティースの息は少し切れていた。

ゆっくりと息を整え、それから顔を上げて、

「ほ、ほら……最初、こっちに向かって来てただろ？ だから何か用事があったんじゃないかと思ってさ」

「ああ……」

シーラは納得した顔だったが、すぐに素っ気ない言葉が続いた。

「用はあったけど、もうなくなったわ」

「え？ あ、ってことは、俺じゃなくてリイナに用だったのか？」

「……」

少し、考えるように視線が流れた。……正直に答えるか、適当にあしらうか迷ったのだろう。

その思考が一体どのような順序を辿ったのか定かではないが、結局、彼女は正直に答えることにしたらしく、

「これ」

「え？」

彼の目の前に示したのは、手にしていたバスケットだ。

「お前の昼食をエルに頼まれたのよ。あの子が自分で用意したのだけど、急に仕事を頼まれたらしくて、代わりに」

「あ……ああ、なるほど」

「でも、リィナが先に持ってきたようだし、もう必要ないでしょう？ だから戻ろうとしただけのことよ」

シーラは片手を腰に当て、屋敷の方角を見つめる。その視線の先では、ちょうどリィナが屋敷の中に戻っていくところだった。

「そ、そっか……」

なんともタイミングの悪い話である。

それ以上、会話も続かず。

「そういうこと」

背を見せかけるシーラ。

「あつ、で、でもさ」

ティースは咄嗟に、やや強引に会話を繋ぎ止めた。

「エルのヤツ、俺のにしちゃ随分大きいのを作ったなあ。俺、昔ってそんなに食べてたっけ？」

「……」

肩越しに振り返るシーラ。その視線が自らの手の中――バスケットへと落ちる。

確かに。それはリィナが持ってきたものとほぼ同じサイズだ。一人分としては明らかに大きすぎる。

シーラはもう一度視線を泳がせた。

が、特に偽ろうとする様子もなく答える。

「半分は私のよ」

「え？」

きょとんとした顔のティースに、シーラは少し眉をひそめた。

「なに？ 私が昼食を食べることがおかしいとでも？」

「い、いや、そんなこと言うはずないだろ！ ……ただ、そういうのって珍しいなと――」

言いかけた言葉を遮って、

「せっかくあの子が作ってくれたのだし、こうして詰めてくれたものをわざわざ二つに分ける必要もないでしょう。……だいたい、朝だって夜だって同じ食堂にいるわ。昼をお前と一緒に食べることに、今更一体何の特別があるというの？　馬鹿馬鹿しい」

息もつかせぬ言葉の波にティースはややたじろいだだが、かろうじて言葉を返す。

「う……い、いや、でも、俺はちょっと嬉しいな。ほら、天気もいいし、気持ちのいい風が――」

「なにを言っているの？」

そう言って、シーラは眉間に皺を寄せる。

「お前はもう、リィナと昼を食べたのでしょうか？」

「……あ」

本気で忘れていたようだ。

「……」

そんな彼を、シーラは呆れ返ったような視線で見つめる。

そして、そのまま背を向け――

「いやっ……あ、そ、そうだ！」

「？」

ティースはピンと閃いた。

そしてもう一度振り返った彼女に向かって提案する。

「ちようど良かった。俺、リィナが持ってきた分じゃちょっと足りなかったんだよ！」

「え？」

呆れ顔が、少しだけ驚きの表情に変わった。

……本当のところを言えば、すっかり八分ほどの状態だった。が、まるつきり嘘というわけでもなく、彼の口は“甘い”以外の味を猛烈に求めていたのである。

ティースは自然に笑顔を見せて、

「だから、さ。やっぱり一緒に食べないか？　ほら、さっきも言ったけど天気もいいし、風も気持ちいいし、たまに外で食べるのもい

いじゃないか」

「……」

すぐには答えず、シーラは一度屋敷の方へ視線を流した。少し考えて、次に先ほどまでティースが腰を下ろしていた丘を見る。

やや強い風が吹いて、水飴のようなブロンドの髪が微かに宙に揺れた。

(……あ)

ティースの視線は思わずその様を追ってしまう。

見慣れていても、ふとした瞬間にこうして視線を奪われることはあった。もちろん彼だって素直にそれを、彼女のことを、美しいと思うのだから。

やがて、

「……リイナとは、どんな話をしていたの？」

「え？」

その言葉に我に返る。

彼女が余所見をしていたのは彼女にとっておそらく幸いだ。じっと見つめていたことに気付かれたら、また不審な目で見られていたに違いない。

「あ、うーん、話っていう話はしてないけど……ああ、一応仕事の話をしてたかな」

「そう」

言って、シーラは丘の方へ歩みを進めていった。

「あ……シーラ？」

明確な返事はなかったが、その行動からすると昼食の件は承諾したらしい。

ホッとしながら、ティースはその後をついていく。

会話は続いた。

「二人とも意外に大丈夫そうね。エルは大丈夫だろうと思っていたけど、リイナは少し心配してたわ」

「そうだなあ。初日なんて、いつ変なこと言い出すかと思ってドキ

ドキしてたよ」

ティースはそう言って笑いながら、腰を下ろした彼女の隣へと。何気なく腰を下ろしてから、肩が触れそうな距離に気付いたが、特に文句を言われることはなかった。

（……今日は機嫌いいのかな？）

こんな距離で話をするのは数ヶ月、いや、下手すれば一年以上なかったかもしれない。

大木の幹に背を預け、ゆっくりと息を吐き出す。

そうしてふと、

（……あ。少し、背伸びた……？）

彼女が一年前と少しだけ違っていたことに、ティースは初めて気付いた。

この一年で五センチほどは背が伸びて、おそらく百六十センチ半ばぐらいだろうか。女性としては平均よりも若干高い方になる。

「……」

そんな彼女の姿に、ティースの古い思い出が少しだけ呼び起こされる。

（そうだよな……あの人も周りの人よりは高かったし。顔だって、やっぱり似て——）

「背、伸びて、すごく可愛くなったでしょ？」

「え？」

突然の問いかけに、ティースは目を丸くして彼女を見つめた。

そして戸惑う。

（な、なんだ、突然……？）

どう答えていいやら迷った。

が……結局正直に答えることにする。

「そ、そうだなあ。で、でも、ほら、背とか関係なく、昔からすごく大人びてたじゃないか。……俺が言うとまた何か言われるかもしれないけど……昔から可愛いっていうか、きっと美人になるんだろうなあとは思ってたし……うん。実際そうだったなって、そう思う

よ」

「そうね」

どこか素っ気なく頷いて、シーラは少しだけ考えるような表情を見せる。

そして、しばらく。

（なんだろう。急にそんなこと聞いてくるなんて、一体――）

疑問に感じながらもバスケットを開き、昼食の準備をしていくティース。

やがて、

「……いいのではないの？」

呟くようにシーラの口が開いた。

「え？ なにが？」

わからない顔のティースに、シーラは小さく首を振って、

「とぼけなくてもいいわ。お前の態度を見ていればすぐにわかるもの。……好きなのでしょう？ 隠す必要ないじゃない」

「……え？」

呆気にとられるティース。

シーラはさらに続けた。

「たとえば恋人として付き合うことになっても、上手く行くはずよ、きつと。問題は色々あるでしょうけど、そういうことなら私も積極的に協力するわ」

「え……ええええッ!!？」

突然のことに、ティースは大いに慌ててしまった。

「ちよっ、ちよっと待ってくれよ！ い、いきなりそんなこと言われても、突然すぎて何がなんだか――」

だが、そんな彼の態度にシーラは目を細めて、

「隠さなくてもいいと言っているでしょう？」

「か、隠してるっていうか!!」

ティースは顔を真っ赤にしながら声を大にし、意味不明の身振り手振りをしながら、

「そ、そりゃ——お、俺はお前のことすごく大事だし、幸せになつて欲しいとは思ってるけど、そ、そんな恋人だとか愛し合うとか、そんなこと考えてるわけじゃ——!!」

「——え?」

そこでようやく、シーラは“食い違い”に気付いたようだ。

が、ティースはもちろんそれに気付くはずもなく、

「そ、それに、その、もしそんなことになったら、色々と、も、も、申し訳が——」

「ちよっ、ちよっお待ちなさい、ティース」

シーラは慌てて彼を制止すると、コホンと咳払いした。

「お前……何か勘違いしてない? 私が言ってるのはリィナのことよ?」

「……へ?」

顔を上げて、間拔けな顔を見せたティース。

……考えてみれば当然のことだ。元々話題はリィナについてであり、途中で回想モードに入った彼が勝手に脱線しただけのことなのである。

しばしの思考。

ティースもようやくそのことに気付いて、

「うわぁっ!」

羞恥にさらに顔を真っ赤にすると、その場に平身低頭した。

「すまん! お、俺、ちようどお前のこと考えてたから、勝手にお前の話だと思ってた!」

「……」

視線を泳がせるシーラ。

どうやら頭の中で、先ほどの会話を追ったようだ。やがて目を細め、

「……つまり? 私が、お前にプロポーズしたとでも?」

「うわぁッ!!」

その言葉に自分の愚かさを再認識させられたらしい。ティースは

さらに地面に頭を擦り付けて、

「すまん！ すまんすまんすまんッ！！！」

「……」

端から見たら、そんな彼らは一体どんな風に見えただろうか。

恋人に土下座して許しを請う情けない男か、あるいは主人に許しを請う使用人か。どちらにしろ、“上”と“下”がわかりやすい状況であったことは間違いない。

「……ふう」

やがて、大きく深いため息がシーラの口をついた。

「やめなさい。お前の大ボケはいつものことだし、別に気にしてないわ。それに――」

少しだけそっぽを向くと、いつもの凜とした口調にほんの僅かな起伏が生じる。

「背が伸びたとかの話も、私のことだと思ったのでしょうか？ 誉められて、別に悪い気はしないもの」

「え？ ……あ」

顔を上げたティース。先ほど自分が口にした言葉を思い出してその意味に気付く。

と同時に、先日、リディアと話していた話題が脳裏を過ぎった。

（あ……気味悪い、って、言われないんだな……）

そんな彼の表情に気付いたのだろう。

「なによ？ 意外そうな顔をして」

「あ……いや、お前だったら多分、そういう言葉聞き慣れてるだろうなと思ってたから、ちよつと……」

シーラはそれに対し平然と素っ気なく答えて、

「聞き慣れてるどころか、聞き飽きてるわね。それに紛れもない事実だもの」

「そ、そっか」

確かに異論を挟む余地はない。

だが、

「でも、慣れない相手からそう言われれば、私だって少しは気にするわよ」

「……」

そっぽを向いたままなのは、どうやら照れ隠しのようだ。

その一瞬だけ、いつも大人びた風を装っている彼女に、年頃の少女の一面が垣間見えた気がした。

(……?)

そんな彼女に、ティースはますますわからなくなる。

(……なんだろう)

それは決して初めて見るものではない。昔の――このネービスに来る以前、そして来てしばらくの間に、ティース自身が何度も目にしたものだ。つまり、それが本来の彼女の姿だと言ってもいい。

――環境が変わり、彼女自身も変わってしまったものと、そう思っていた。そうすることで、昔と今、その自分と彼女の関係の食い違いを納得させてきた。

だが、つい先ほど、リイナとエルレーンに対する変わらない態度を見た。そして今、久々に“彼女らしい”仕草を見た。

何も変わっていないんじゃないか、とさえ、思えてしまう。

(……俺、もっと知らなきゃ……知ろうとしなきゃ、ダメなのかな――)

二度目の昼食を口にしながら、ティースが真剣にそんなことを考えた昼下がりの出来事。

――ちなみにこの日、彼は食べ過ぎでお腹を壊した。

ネービスの街から西に百キロほどの場所に“ラグレオ山”という

ネービス領唯一の活火山がある。実際に噴火したのはもう百年以上も前の話で、その麓の街“ロマニー”はネービス領唯一の温泉街だ。貴族や金持ちの別荘、療養所、その他に観光客用の温泉宿（全て街が直接管理する公営のものだ）などで栄え、温泉を汲み出す施設やそこにかかる人件費は温泉宿での収入の他、別荘を持つ――主にネービスの――大金持ちたちからの援助によって賄われている。ネービス公はもちろんのこと、ディバーナ・ロウの属するミューティレイクもまた、この施設に対して援助を行っていた。

その街の外れ――そこに、温泉を汲み出すための施設がある。魔の十属性の一つ“空”の魔力がこもった魔界由来の巨大な装置をラグレオ山の麓、地下深く掘った洞窟の中に設置し、そこから管を通して地上へと温泉が送られる仕組みであった。

そして……二月も半ばに差し掛かったこの頃。

この温泉街ロマニーで、少々困った問題が持ち上がった。

温泉は、汲み上げ装置のある洞窟付近に密集している。遠くまで運ぼうとすれば当然それだけ費用も莫大にかさむからであり、例外はネービス公や、その他有力者たちの別荘ぐらいのもの。一般客が利用する温泉施設は、全て洞窟付近に存在している。

さて、先ほども言ったように洞窟はラグレオ山の麓にあり、ロマニーという街の全体からすれば外れの方。基本的に露天である温泉は、見上げればすぐさまラグレオ山の自然が見渡せる状態であり、施設の職員は野生動物たちを追い払うのに苦慮し、ごく稀にだが、野生動物に客が襲われて怪我をするということもありえる、そんな場所にあった。

それが猿や狐だというのなら害も少なく、まだ微笑ましい話で済む。それが熊なら少々笑えない話だが、そんな事例はあまり聞かないし、それで死者が出たという話も、公式的には一つもないのだ。

だが最近、この街の温泉客を時折襲っていたのはそんな生易しいものではなく――。

ティースが腹痛でベッドに転がっていた頃、ミューティレイク別館の執務室。

「え？ アルファさんを？ ロマニーに？」

別館とはいえ、使用頻度を考えればこちらが本体と考えてもいいだろう。

扉の真正面の机には夕日を背に、屋敷の主でありディバーナ・ロウの総帥でもあるファナ||ミューティレイクが座っている。そしてそれと直角に配された方の机には、彼女の補佐役であるリディアが座っており、疑問はその彼女の口から出されたものだった。

「あ、アルファさんっていうか、今は第四隊って言った方がいっか。
“一応” ティースさんもってことだよね」

「はい」

頷くファナは手元の報告書らしきものを整理している。温泉街ロマニーを襲った事件について、依頼主及び、ディバーナ・ロウの諜報部隊“影裏”から伝えられた情報だった。

「……っていうか、あたし、やっぱ賛成できないなあ」

首を傾げるリディアの手元にもまた、同じものがある。すでに目を通した後らしく、チラツとその上に視線を落としただけで、

「依頼主の情報と影裏の情報に食い違いが多すぎるよ。なんかすごく大袈裟に書いてる気がして、信用できないし」

ファナはそれに答えて、

「ですが、魔が街の方々を脅かしているのはおそらく確かですわ」

「でも実際のところ、まだ被害なんてほとんどないでしょ？ あそここの街はお金あるんだし、その気になればフリーのデビルバスターだって雇えるじゃん。いざとなればネスティアスだって出るっしょ。ネービス公の別荘だってあるんだから」

キイツ……と椅子を軋ませて背もたれに寄りかかり、頭の後ろで手を組んだ。

「なのにタダでウチにやってもらおうなんてさ。なんか、足元見ら

れてるみたいで気分良くないなあ」

「……」

そんな彼女に、ファナはやや肯定的な笑みを漏らして、
「リディアさんのお気持ちは良く理解できますわ。ですが、あの街にはデイバーナ・ロウに支援してくださる方々の別荘も多々ございますから」

「ああ、ヤダヤダ。あたしの純真無垢な心が汚れちゃう」

と言いながら、リディアの手元にはすでに制作完了した指令書がある。……彼女もこの任務の必要性は承知済みで、ただ愚痴をこぼしてただけなのだ。

やがて会話は脱線して、

「あたしも行きたかったなあ、温泉。肌が綺麗になるってホントかなあ。……やっぱアレ？ ファナさんの玉の肌は、小さい頃からロマニーの別荘で温泉に浸かってたおかげ？」

「さあ、どうでしょう？」

微笑みを浮かべたまま小さく首を傾けるファナ。

「でしたら、リディアさんもお同行なさいますか？ 向こうでデイバーナ・ロウのために宿を用意してくださるそうですから」

「えっ、マジ！？ 行ってもいいの！？」

身を乗り出したリディアに、ファナはゆっくり頷いて答える。

「はい。おそらく三人よりも四人の方が、賑やかで楽しいと思いますわ」

「え、三人？ アルファさんと、ティースさんと……誰？」

どうも計算が合わないような気がした。

それから日も落ちて、屋敷の中が少し静かになった頃。

「ふう……ようやく収まったあ……」

自室を出たティースは、まだどことなく違和感が残るお腹を撫で

ながら、玄関前の大階段を下りていた。夕食を抜いたためか今度は逆に空腹になり、何か食べるものがないかと下りてきたのだが――

「ん？ ……やあ、ティースくん」

「よう、ティース」

「あ、マイルズさん。それに、レイさんも」

大階段を下りたところ、質素な丸テーブル群の並ぶ一階ホールの一角には、屋敷の主治医であり第二隊“ディバーナ・ナイト”で医事を担当するマイルズⅡカンバースと、そのナイトの隊長であるデビルバスター、レインハルトⅡシュナイダーが何やら歓談していた。マイルズはその黒縁眼鏡の奥からティースの顔色を見つめて、

「お腹の具合は良くなったかい？」

「ええ、おかげさまで」

もちろんその症状を見たのもマイルズだ。まあ、診断するまでもなく、食べ過ぎなのはわかりきっていただろうが。

「お腹、空いたんだろ？ 君にあげた薬、消化を促進させる作用があるからね」

「そうです。それで、厨房の方に何かないかなと……」

そこへレイが口を挟んで、

「ああ。なら、ちょうどいいだろ。ここに座れよ」

「え？」

その手の中のコップには、エールらしきものがなみなみと注がれていた。

ティースは少したじろいで、

「い、いや、空腹にアルコールはちょっと……」

「よく見ろ」

そう言ってテーブルの上を示すレイ。と、そこには酒の肴だろう。夕食の残りらしきものが並んでいた。

「厨房に行っても、もうロクなもんは残っちゃいないぞ？」

「え。あ、もらってもいいんですか？」

「というより、余ってた大半が元々お前のもんだ」

「あ」

言われてみればその通りであった。もちろんティースには断る理由もなく、素直にそこに腰掛けることにする。

「――で。どうだ、アルファのヤツは？」

食事を始めるなり、レイはティースにそう尋ねてきた。

「どうだ、って言われても……」

すでに冷めていたが、テーブル上で切り分けられたチキンはまだ食欲をそそるスパイスの香りを漂わせている。マイルズから借りたフォークをそれに伸ばしながら、ティースは答えた。

「アドバイスされるでもないですし、実際に剣を交えて稽古するわけでもないですし……あの人に関しては何もわからないっていうのが正直なところですよ」

その返答に笑ったのはマイルズだ。

「はは、それはよくわかるね。アルファくんに関しては、僕もまだ良くわからないよ。……二年半も一緒にいて性別もわからないなんて、屋敷の主治医として失格かね、やっぱ」

レイはコップを傾けながら、

「ま、あそこまで徹底的にガード固められちゃ、逆に疑いたくなるのが心情ってもんだがな」

「……え。ってことは、やっぱり女性なんですか？」

「さあな。俺の中じゃ半々ってとこだが」

どうやら本当に誰も真実を知らないらしい。

ティースは戸惑いながら、

「で、でも……もし女性だとするなら、当たり前だけど、セシルの本当のお兄さんではない、ってことですよね？」

「ああ……」

その問いに、レイは事も無げに答えた。

「お前、そんなこと信じてたのか？ アレが本当の兄妹なはずないさ」

「え？」

ティースは一瞬呆気にとられて、

「で、でも、戸籍上はそうだって言うし、セシルだって――」

レイは口元に小さな笑みを浮かべると、コップをテーブルに置いて、

「ま、あのセシルがどう考えてるかは知らんけどな。だが、アルファのヤツが男だとか女だとかいうことは別にして、あの二人に血の繋がりはない。九割九分、な」

「？」

未だ疑問顔のティースに、マイルズが補足するように言った。

「ティースくん。君、アルファくんとは何度も顔を合わせているだろう？ ……あの銀髪はもちろん目に入ったと思うけど、瞳の色を見たい？」

ティースは首を横に振って、

「いえ、そこまでは……」

「青っぽい色だよ。……銀髪と青瞳の組み合わせは、大陸の北西――このネービスから見て西の方向にあるブリュリーズ領の山奥に住むイスラフェルって少数民族特有のものなんだ。もちろん、色々と血が混ざってそれ以外にも青い瞳や銀髪を持つ人はいるし、遺伝の関係で兄妹が違う色になることは全く珍しくないけれど――」

中指で黒縁眼鏡をくいっと持ち上げる。

「君が言った自己申告の“戸籍”によると、アルファくんとセシルくんの出身は大陸東のラッテ領だ。セシルくんはおそらく嘘をついていないだろうから、彼女は本当にラッテ領の出身だろう。だが、アルファくんはどうかという……ブリュリーズ領とラッテ領の位置関係を考えても、確率的にはかなり低いと言わざるを得ない」

「で、でも――あ、俺、酒はいいです」

レイに薦められた杯を断って、ティースは続けた。

「もしそうだとしたら、あの子、気付かないですか、普通？ 自分の兄が入れ替わってるんですよ？ それに、髪の色や目の色もおかしいっていうなら――」

「いや。僕の言った髪の色とか目の色というのはやや専門的な知識だからね。セシルくんはもちろん、アルファくん本人も知らないかもしれない」

「いや、それもそうですけど……」

ティースはフォークに刺したチキンを口に運び、咀嚼しながら首をかしげて、

「見た目で……むぐ……わかったりとか——」

「彼女が親戚に引き取られたのは二歳になる前だそうだ。そこまではつきりと覚えてるはずはないよ」

「……うーん」

まだ疑問顔のティースに、レイがコップを傾けながら続けた。

「そう信じる何らかの要因があったんだろ。……ま、本当に信じているのか、信じてるフリをしているだけなのか知らんが」

マイルズは頷いて、

「一番考えられるのは、アルファくんが“本物のアルファ・クルラント”と知り合いだって線かな。……ああ、この話、セシルくんの前ではしちやいけないよ。もし本気で信じていた場合、ショックだろうからね」

「あ、ええ。それはもちろん……」

「あいつら自身が納得してるのなら、事情なんて勘ぐるものじゃないしな。……ティース、お前だってそうだ」

「え？」

突然矛先を向けられて、ティースが呆気に取られていると、

「お前だって偽の戸籍を使ってる理由、探られたくはないだろう？」

「……えっ！？　な……なんでわかったんですか!？」

ティースは驚きに目を見開いた。

確かに。彼が普段使っている戸籍は偽造のもので、出身はネービスの田舎ということになっている。そういった適当な田舎の戸籍はひどく簡単に手に入るし、よほど公の職に就くのでない限りその辺を深く調べられることはないのだ。

レイは笑って、

「正直だな。……ま、お前とあの王女様の場合、誰がどう見たってワケ有りだとわかるさ」

「どうやらカマをかけただけらしい。」

「そ、そんなもんですか……」

納得できるようなできないような、そんな微妙な表情のティースに、レイはさらに続けて、

「そりゃそうさ。もし何のワケもなくあんな美人と二年間も同棲してたなら、とつくの昔にモノにしてるはずだろ？」

「……むぐっ！？ ……ぐっ……」

喉を詰まらせ、胸をドンドンと叩く。

「はい、ティースくん」

「っ……っ……んぐっ……んぐっ……」

マイルズが差し出した水を流し込んで、なんとか一息つくと、ティースは少し恨みがましい目でレイを見つめ、

「モ、モノに、って……あ、あのですねえ……」

だが、レイは意に介した様子もなく、

「それも、なんでか知らんが、あの王女様だけはお前の厄介なアレギーとやらが反応しない。……俺がお前の状況なら、移り住んだその日に口説いてるね。なんせ、そいつを逃したら一生女に縁がない生活かもしれないんだ」

「く、比べないでくださいよっ！ 俺はレイさんみたいに女好きでも軟派者でもないんだから！！」

その反論に、レイは苦笑しながら軽く両手を広げて、

「どう思う、マイルズ？」

マイルズは腕を組んで小さく首を傾けた。

「うーん。悪いけど、僕も隊長と同意見ですかねえ。……というより男の立場としては、そういう状況になることを向こうが認めた時点で、脈ありと判断するものではないかなと」

「マ、マイルズさんまで……」

裏切り者を見るような目のティースに、マイルズは再び中指で眼鏡を押し上げながら、

「あくまで一般的な意見だよ、ティースくん。ただ、だからこそ普通に考えて——ああ、シーラくんがごく一般的な常識を持っているという前提だけでも——彼女は君とそうなることを良しとする、あるいはそうなくても仕方ないという覚悟があったということになると思うけどね」

「な……な……！」

ティースは顔を真っ赤に——するかと思いきや、逆に青ざめながら興奮した様子で反論した。

「そ、そんなことは絶対に有り得ない！ あ、あいつは、そんな——」

「……どっかの誰かさんと同じ反応だな」

ボソツと呟くレイ。

「まあまあ、ティースくん」

マイルズは苦笑しながらそんなティースを制止して、

「あるいは常識の範囲を超えて、彼女が“そうならない”ことを確信していたということもあり得る。君が言いたいのはそういうことだろう？」

「そ、そうですよ！ それに、実際そうです！」

「はっ」

レイは鼻で笑うと、エールを傾けながら、

「自慢していいもんかどうか微妙だぞ、そりゃ」

「生物学的に言うと、恥じるべきことかもしれませんが。まあ、未だ人類繁栄に貢献していない僕が言うのも難ですが」

「それを言っちゃ俺も同じだがな」

「いえいえ。隊長の場合、知らないところすでに貢献してる可能性が高いですから。……きっとそのうち赤ん坊を連れた女の人を押し掛けてきますよ。そのときは、僕が責任を持って、無条件で隊長の子供だと認定しますから」

「おいこら。ものすげえ無責任じゃねえか」

「……」

二人の掛け合いは、残念ながらティースにとっては敷居が高すぎたようだ。

「……はあ」

我に返って、先ほどまでの興奮も冷めてしまったらしく、

「あの。じゃあ俺、腹も膨れたからそろそろ戻ります」

ため息をつきながら空になった皿に手をかける。

「……あ、悪いね、ティースくん。肴にしてみました」

だが、ティースは特に気にしていない様子で、

「はは……慣れてますから、そういうの」

「それも侘びしいねえ。……ああ、そうだ」

なんともいえない苦笑を浮かべた後、マイルズは人差し指を立てて、

「お詫びに一つ、アドバイス。シーラくんのことだけどね」

「？」

皿を手には怪訝そうな顔で振り返ったティース。

「彼女が実際に何を思っているのかは僕にもわからないけれど」

そう前置きして、マイルズは言った。

「たとえどれだけ相手のことを信賴していたとしても、あの年頃の少女が男と二人で暮らすことを決意するのには、やはりそれなりの覚悟が必要だと思うよ。……彼女、何故かたまに遊び回ってる風を装ったりするけど、きつと貞操観念はかなり強い方だ。これは、隊長のセクハラ発言に対する反応から間違いない」

「いつの間にやら、ひどい悪役だな」

「だって悪役ですからね」

レイの抗議を軽く流し、マイルズはティースに問いかけた。

「正直に答えなくてもいいけど、彼女、結構いいところのお嬢さんじゃないのかい？」

「……え？」

戸惑ったような顔のティース。それが全く覚えのないことだったのか、あるいは突然の指摘が意外だったのか、それは見た目にはわからない。

気にせずマイルズは続けた。

「貞操観念だけじゃない。君がいない間ここで働いていたときの言葉遣い、仕草、礼儀、どれを取っても、ね。あれは一朝一夕で身に付くものじゃない」

「……」

ティースは何も答えず、ただ首を横に振った。

「うん。……ま」

マイルズはそれ以上は追求せずに頷いて、

「とにかく、そんな彼女がそれでも君と同棲することを良しとしたのは、紛れもない強い好意の現れだ。君の言う“信頼”に置き換えてもいい。……君は彼女に邪魔者扱いされていると言うけど、その好意はきつと、ちょっとした環境の変化や、僅か一、二年の新しい経験で揺らぐ程度のものではないんじゃないのかな？　まして……経済的な事情があるにせよ、つい最近までもその生活を続けていたんだからね」

「……」

意図を質すように、ティースの視線はマイルズを見つめた。

マイルズは答えて、

「つまり、ね。彼女の君に対する態度にどんな理由があるにせよ、彼女が君に寄せる好意と信頼、それにおそらく間違いはないということだよ。……だから、君が彼女との関係改善を望むのなら、いっそもっと思い切って踏み込んでみた方がいいんじゃないかな？」

「……踏み込む、たって」

彼が弱り顔をしたのは当然だ。

「あいつ、俺がちよっと突っ込んだことを聞こうとすると、すぐに機嫌悪くしちまうし、なんていうかそれ以前の問題ですよ」

「はは、そりゃきつと、お前のやり方がよっぽど悪いせいだな」

レイは小馬鹿にしたように笑って、

「俺が今のお前と全く同じ立場だったなら、あのガードの堅い王女様を確実に落とせる自信があるね。信じちゃいないが、神に誓ってもいい」

「隊長のはすでに目的が違ってるけどね。……ま、でも、一理ある。例えば女性はムードを大事にするとよく言うし、まずは彼女の心をほぐす舞台作りが必要かもしれないよ」

「ムードって……そもそも話をする機会すら、朝食と夕食のときぐらいしか――」

「ああ。だったら、ちょうどいいじゃないか」

「ええ。ちょうどいいですねえ」

何やら意味ありげに頷き合う二人。

「……は？」

ティースがその理由を知るのは、“当日”になってからのことであつた。

「……ラダコーン草？」

「はい。シーラさんならご存じではありませんか？」

「ええ、もちろん知ってるわ。心臓の病に効く貴重な薬草だもの」
ミューティレイク別館にあるファナの私室は、本館のものと比べるとややこぢんまりとしている。というのも、もともと別館に当主用の私室ではなく、普通の客室を彼女の私室として使用しているためだ。

外は暗く、部屋を照らしているのはランプの明かりのみ。ベッドの上に腰掛けるファナはすでにナイトドレス姿で、どうやら今日はこの別館で休むつもりの方だった。

部屋には廊下への扉以外にもう一つ、隣の部屋へ通じる特別な扉が設置されており、隣の部屋には護衛のアオイがいる。……とはい

え、彼は自分の主人よりも先に寝息を立てており、本当に護衛として役に立つのかどうかは怪しい限りであった。

（屋敷の中で滅多なことなんて起きないと思うけれど……主人より先に寝て、主人より後に起きる護衛なんて前代未聞だわ……）

ソファに腰掛けてそんなことを思うシーラも、今では苦笑しか出てこない。そんな彼らの奇妙な主従関係にも、すでに何ら違和感を感じなくなっていたのだ。

ファナは続ける。

「ラダコーン草はデリケートで、栽培するのが非常に難しいと言われておりますわ」

「ええ、そうよ。自然には活火山の麓にしか生息しない。栽培するのは不可能ではないけれど、根気とコツが必要だと聞くわね」

「ところでシーラさん」

ファナは突如、話題を変えた。

「いつまでその服を着ておられるつもりですか？」

「え？ ……そうね」

自分の姿を見下ろすシーラ。昼間、ティースの前でそうだったように、彼女は未だにミューティレイクの使用人服姿だった。

「特に決めてないわ。ただ、四月までは学園もないし、少しでも役に立てればと思うだけよ。……逆に迷惑でなければいいのだけど」

「いいえ。そんなことはございませんわ」

ファナは即座にそう否定した。

本来、使用人としての教育を受けていない者がここでいきなり働くことは難しい。つい先頃ここにやってきたリイナとエルレーンにしても、今は他の者に付いて色々と学んでいる身なのだ。

が、彼女——シーラの場合は少々違って、

「一昨日いらっしゃったデイトヴィードのおじさまが、シーラさんを見ておっしゃっておられました。一体、どこの貴族の娘が花嫁修業に来てるんだ？」と」

「一昨日……ああ。あの方ね」

シーラはその類い希な美貌を活かすために接客の仕事を与えられており、その日に尋ねてきた初老紳士のことはもちろん覚えていた。ハドリアン・ディトヴィード。このネービスでも上位に位置する貴族の当主で、詳しいことはもちろん彼女にはわからないが、どうやらディバーナ・ロウの支援者でもあるようだった。

「シーラさんのお美しさはもちろんですが、何より礼儀作法があまりに完璧でしたので、大層お気にいられたご様子でした。もし許嫁が決まっていけないのなら、息子を紹介させてくれ、とも」

「片田舎出身の平凡な一市民には荷の重すぎる話だと、断っておいて」

「おそらくそうおっしゃられると思い、丁重にお断りしておきましたわ」

シーラは興味なさそうにしながらも、チラッとファナを見て、
「そういう話だったら私よりもあなたの方が相応しいのではないの？」

至極もつともな言葉だった。

が、しかし、ファナは考える間もなく首を横に振って、

「私はどちらかと言うと、年上の男性が好みですの。おじさまもそのことは重々ご承知のようすわ」

「……その子、いくつ下なの？」

その問いに、ファナは可笑しそうにクスクスと悪戯っぽい笑みを浮かべると、

「十、ですわ」

「……」

シーラは無言で大きくため息を吐く。……つまり、彼女と比べても八つ近く年下、現在は八歳ぐらいということである。

「……それで？」

気を取り直した様子で、シーラは改めて問いかけた。

「ラダコーン草とその話、何か関係があるのかしら？」

「ディトヴィードのおじさまは関係ありませんわ。ただ……」

もう一度、ファナはシーラの身につけた衣服に視線を止めて、

「もし、シーラさんがまだお手伝いをなさってくださいるのであれば、少々変わったお仕事をお頼みしようかと思うのです」

「……変わった仕事？」

「ラグレオ山の麓にラダコーン草の群生地があるのはご存じですね？」

シーラは頷いて、

「ええ。ラグレオ山はネービスで唯一の活火山だもの」

「はい。……それで、その群生地そばにあるロマニーという街に、ラダコーン草の研究をなさっているニューマンⅡアーカーソンという方がいらっしゃるのです」

「……ああ」

そこまで聞いて、シーラは理解した。

「その人に、ラダコーン草についての話を聞いてこい……ということ？」

「はい。すでにこちらでも幾度か栽培を試みたのですが上手くいかないようなので、その方に詳しいお話を聞くことができれば、あるいはと。そのお方、気難しいというほどではないのですが、まるで知識のない者がお訪ねしても何も答えてくださらないそうです。……その点、シーラさんでしたら色々とお詳しいでしょうし、適任かと思えますの」

「私もまだ学生の身だけれど」

そう言いながらも、シーラの瞳はその奥底にほんの微かな輝きをまとい、

「でも、貴重な機会だわ。もし私でいいのなら、こちらからお願いしたいぐらいよ」

ファナは頷きながら、どこか満足そうな微笑みを浮かべた。

「そのニューマンさんのご子息夫妻がロマニーの公営宿の管理人をやっておられます。滞在中はそちらで宿を用意してくださいさるそうですわ」

「え？」

その言葉に、シーラの眉に怪訝そうな色が走って、

「向こうで、宿を用意してくれるというの？」

「はい。シーラさんのお仕事はそう長くかからないでしょうから、その後は、他の方々の任務が終わるまで、ゆつくりと温泉を楽しんでくださいね」

「……え？ 他の、方々？」

彼女がその言葉の意味を知ったのは、やはり“当日”になってからのことだった。

その3『ホントはワガママで嫉妬深い?』

ロマニーの温泉宿は全て街の管理する公営宿だ。

にも関わらず、街の外れに所狭しと並ぶ温泉宿は、実にバリエーションに富んでいる。外観に凝っているものもあれば美味い料理を謳い文句にする宿もあり、そこには確かにある程度の競争関係が存在しているようだった。

さて、そんな宿の中の一つ。

“アーカーソン”という夫婦の管理する温泉宿は、大小合わせた部屋数が三十弱。収容人数は最大百人程度という中規模の宿である。他の大半の宿とは違って混浴の露天風呂は一つもなく、男性用の風呂が一つなのに対し、女性用は景色に趣向を凝らした複数の露天風呂がある。元々温泉を好んで利用する比率は女性が圧倒的に多いため、このような経営方針は決して珍しくないのだが、その中でもやや群を抜いて女性を優待しているタイプの宿であった。

夕暮れ時。

その宿から歩いて一分程度の場所にあるアーカーソン夫婦の自宅。そこから出てきた一人の少女が、家の中に向かって一礼した。

「色々とお世話になりました、ニューマンさん」

そう言って美しいブロンドの髪を揺らせたのはシーラである。

その右手には一冊のノート。そこにはたった今、ニューマンアーカーソンから学んだラダコーン草に関するデータ――栽培に必要な土、水、肥料、環境、その他気を付けるべき項目がびっしりと書き込まれていた。

家の中から返ってきたのは、おそらく年輩の男性の劳いの声。シーラはもう一度礼をしてその家を離れる。

「ふうっ」

疲労を吐き出すように息を落として歩みを進めた先はもちろん宿の方角。裏口の方から宿の中に入ると、借りている部屋に向かって

廊下を歩いていった。

視線の先の通路を、どうやら温泉から上がったばかりらしい三人の女性客が横切っていく。

（ひとまず一段落）

この街にやって来たのが三日前の夕方だ。それから一昨日、昨日、今日と、三日を丸々使い、シーラはずっとニューマンの元に入り浸っていたのである。

（でも、聞いていた通り、すぐに栽培を成功させるのは難しそうね）そんなことを思いながらノートをパラパラと眺めていたが――ともかく、これで彼女がここで果たすべき仕事は終わった。

が、実を言うと、すぐに帰路に就くというわけにはいかない。

何故なら、

（……ティースの仕事はいつになったら終わるのかしら）

そう。彼女はもう一つの目的を持ってこの街にやってきたディバーナ・ロウの第四隊、通称“ディバーナ・ゼロ”に同行してきた身分だった。

だから彼らの任務が終わるまではここを離れることができないのである。

（ファナは温泉を楽しんで、なんて言っていたけれど）

もちろんシーラも温泉というものが嫌いではなかった。美肌効果があり、健康にも良く、なおかつ気持ちがいいとなれば、彼女のような若い女性がそれを嫌う理由はなからう。

ただ、このロマニーという街は、温泉以外にそう面白いものがあるわけでもなく、

（いくらなんでも一日中入っているわけにはいかないものね……）しばし考えた末、シーラは視線を自らの左手の中に落とす。

「……そうね」

微かに、瞳が揺れた。

そこに携えていたのは、数十センチ四方の鍵付きの箱。少しだけ、暗い影がその表情を過ぎる。

「もう、あまりのんびりしてられないもの、ね……」

——と。

そんな彼女が宿の玄関に差し掛かったのと、本日の任務を終えたティースが宿に戻ってくるのは、ほぼ同時だった。

「あ、シーラ！ おーい！ おおーい！！」

先に声を発したのはティースの方である。

その声にシーラは足を止め、そして外から戻ってきた彼の方へと視線を向ける。

そして、

「……ふう」

そのため息の正体は、実は彼女自身にしかわからぬ複雑な心情故のものだが、それを他人に察しろというのも無茶な話。

案の定、駆け寄ってきたティースは微妙に泣きそうな顔で速度を緩め、情けない声を出した。

「そ、そんな、会うなりいきなりため息をつかなくてもいいじゃないか……」

「別に、お前の顔を見るのが嫌でため息をついたわけじゃないわ」
そして残念なことに、彼女の方にも積極的に誤解を解こうとする意欲が見られない。

「……」

続ける言葉を失って黙ってしまうティース。そんな彼に、やはり無言のままその場を立ち去ろうとするシーラ。

屋敷にいるときと何ら変わらない、何の進展もない、いつものやり取りがそこに展開されようとしていた。

……と、そのとき、である。

「あ。おかえり、ティースくん」

「え？」

変化をもたらしたのは、第三者の登場。

どことなく艶っぽい声。

ティースの目線の先——つまりシーラの後方から一つの影が現れる。

「あ——」

「今日は早かったのね」

「っ……」

シーラはあからさまに眉をひそめた。……というのも、現れたその女性は、まるでシーラが存在が目に入らないかのように、強引に二人の間に割り込んだのである。

「マ、マーセルさん」

「はあい。マーセルさんよ」

にこやかにそう言ったのは、やや背が高めの女性だった。歳はシーラより上、ティースよりも年上、本人の申告によれば二十一歳。結び上げてうなじが見える髪型。やや目尻が下がり気味で一見大人しい印象だが、少々ラフに着崩した真っ白なバスローブからは桃色に染まった肌がかなり露出していた。

マーセル＝バレット。宿の泊まり客であり、本人曰く“某成金商人の一人娘”ということだが、その真偽は不明。

それにティースにしてみれば、その真偽などさして重要な問題ではなかった。

「昨日より帰ってくるの遅かったから、心配しちゃったじゃない」

と言って、まるでしなだれかかるように——実際には触れない距離で寄り添うマーセル。

「あ、え、ええ、今日は、ちょっと……」

当然、ティースはたじろく。

……そう。彼にとって重要だったのは、彼女が、彼のもっとも苦手とする、いかにも女性らしい色香に溢れた人物だということであり、そして何故か——いや一応それなりの理由はあったのだが——その彼女が、彼に対してかなり際どいアプローチを繰り返しているということなのである。

「ま、何にしろお疲れさま。……ね、それで、どうだったの、今日の成果は？」

言いながら、マーセルはさらに強引に間に割り込んだ。結果、立ち尽くしていたシーラを背中を押す形になったが、彼女に対しては一瞥もくれず。

「……」

さらに気分を害した様子で目を細めるシーラ。

その表情の変化に気付いたティースは、やや慌て気味になりながら、

「え、あ、えっと、そうですね。今のところは獣魔らしき影も見えないですし、痕跡も見つかってないです。何しろ、襲われたって人の証言が曖昧で、まだ獣魔の正体も――」

「……」

「あ！ お、おい、シーラっ！！」

無言で背を見せたシーラを呼び止めようとするティース。

だが、

「い・い・か・ら」

「ぐえええっ！！」

首にタオルらしきものが巻き付けられ、ティースは思いつきりのけぞった。

「マ……げほっ……マ、マーセルさん！ こっ、殺す気ですかあっ！！」

顔を真っ赤にして咳き込みながら抗議するが、

「だって、抱き付いて引き止めたら、また気絶しちゃうんでしょう？」

「だ、抱き……って、そっ、それはそうですねっ！！」

実は数日前、ティースはすでに彼女の前に“醜態”を晒していたのである。

と、そうこうしているうちに、シーラの姿は完全に廊下の向こうへと消えていってしまった。

「あ。あーあ……」

がつくりと項垂れるティース。

（また、これかあ）

ここに来て早四日。

シーラとの早期関係改善を願う彼にとって、今回の任務は（偶然か意図的かわからないが）期せずして与えられた絶好の機会だった。このロマニーの温泉というのは、健康効果はもちろんのこと、美肌効果をも大々的に謳っており、ネービスの女性たちにとっては憧れの場所と言ってもいい。一般市民にはやや敷居が高くあるが、それでも無理してお金を貯めてでも……という人は後を絶たない。女性の心をほぐす方法としては、かなり効用が高い場所だと言えるだろう。

しかし――

「そんなことより、今日の話を聞かせて？　ね？」

「は、はあ……」

ここに来た日に出会ったこのマーセルという女性の存在は、ティースにとって完全に予想外だった。ただこうして親しく会話を交わすだけならいいのだが、彼女は何故か、彼がシーラと話そうとするたびに毎回こんなタイミングで現れ、そしてシーラはそのたびに呆れ顔で立ち去ってしまうのである。

しかも悪いことに、

「いいですけど、大して面白いことないですよ」

このティースという男、いくら相手が苦手なタイプであっても、理由もなく冷たい対応を返すなどということはほとんどない。しかも好意を寄せられて嫌な気分になるわけもなく。

そんな彼の対応がまた、さらに状況を悪化させていたのである。

「そんなことないない」

マーセルは手をパタパタと振って、それから興味津々の視線を向けると、

「デビルバスターを間近で見るのって初めてだもの。ホント、新鮮

なのよ」

「俺はまだ候補生なんですけどね……って、それなら、俺じゃなくてアルファさんに話を聞いた方がいいんじゃないですか？」

「アルファって、あなたと一緒に来た美人でしょう？ そりゃ、あんな顔でデビルバスターっていう人にも興味はあるけど——」

そう言って、マーセルは口元にやや色っぽい笑みを浮かべると、
「どうせなら男の子の方がイロイロと楽しいじゃない？」

「は、はあ」

（あの人も一応男ってことになってるんだけどなあ……）

どうにも、彼女の言葉はいちいち“含み”のようなものが感じられて、そのたびにティースはたじろいでしまう。

とはいえ、

（……俺って、そんなにからかい甲斐があるのかなあ）

ティースは結局この日も、乞われるままに彼女の話し相手となるのだった。

「アルセフィ……と……そして黄昏の一葉を——黄昏の一葉……？」
外の日が完全に落ちた頃、宿の一室に明かりが灯った。
各部屋備え付けの机の上に、本のページをめくる音が定期的に響く。

「でも、これは……胸の病……か。違うわね」

その部屋の借り主であるシーラはすでにやや厚手の寝巻姿で、黒塗りの重厚感のある分厚い書物を右手に、何やら辞書らしき古い書物を左手に、その間にノートを挟み、手にはメモを取るためのペンを握っていた。

視線は真剣。時折難しそうに眉間に皺が寄る。事実、彼女が手にしている辞書は古代語の書物で、解読しようとしているのはどうやら現代語の本ではないらしい。

だが、やがて、

「……ふう」

ため息について椅子の背もたれに体を預け、天井を見上げながら眉間の辺りに指を当てる。美しく透き通るブロンドのポニーテールが微かに揺れた。

どうやらあまり集中できていない様子だ。

（いまいち、気が乗らないわね……）

二度目のため息を落としてから、どうしようか、と、考えた。日が沈んでいるとはいえ、寝るには少し早い。かといって、温泉には今日だけでもう三度も入っている。

「……」

そうしていると、意識せず部屋の壁に視線が移動した。その壁の向こうはティースの借りている部屋。

そこに人が戻ってきている気配はない。

時間を見る。

彼女にとって寝るにはやや早いとはいえ、すでに夜だ。照明家具のない家庭の人々ならば当然に寝ている時間だろうし、そろそろ、常識的なマナーとして他人の部屋を訪ねていい時間を過ぎようとしている。

（……なにをやっているのかしら）

ほんの僅かな不機嫌が、その端正な顔に表れた。

——実を言うと、彼があのように仕事で知り合った女性に好意を寄せられるのは、それほど珍しいことではない。彼は優しい性格だったし、基本的に“いい人”だ。

まあ、大抵の場合はその“いい人”止まりで終わるのだが——それはともかく。

シーラはそんな彼のロマンスを意図的に邪魔しようなどとは思わない。彼にもチャンスがあれば自分の恋人を捜す権利が当然にあると考えていたし、それによって自分が被害を被る——たとえば彼の支援が受けられなくなったのだとしても、それはそれで諦める覚悟

があった。彼に義務がないことを、彼女は当然に理解していたから。ただ、

（なにを、やっているの）

この日、彼女はなかなか部屋に戻ってこないティースに対し、明らかに苛立ちを露わにしていたのである。

——理由？

あのマーセルという女性が事ある毎、彼女に対して明らかに邪険な、敵対心らしきものを見せてくること。それも理由の一つではあるだろう。それに同じ女性としても、ああいう男好きな感じのするタイプは、どちらかといえば好きな方ではなかった。

だが、彼女の苛立ちの引き金を引いた決定的なものは、それではない。

（お前は——）

その眉間に、やや深い皺が刻まれる。

（お前はリィナのことが好きはずでしょう。だったら、あんな女にデレデレしている場合じゃ——）

コン、コン。

「！」

丁度のタイミングでノックの音がした。

シーラは壁からドアの方へと視線を移動させると、右手にしていた本をボタンと閉じる。

そして、

「誰？」

「あ、起きてたか？ 悪い、遅くに」

「……ティース？」

返ってきたその声に、ほんの微かな安堵。

まだギリギリ。常識的に“単なる他人”や“ちょっとした知り合い”程度を訪ねていて不自然ではない時間帯だ。

だが、シーラは表面上、いつもの素っ気のない言葉で返す。

「何か用？」

用心のため鍵は常にかけてあった。閉じた本を元の箱の中に戻して鍵をかけ、体をドアの方へと向ける。

そこから返ってきたティースの声は、どことなく遠慮するようなものだった。

「あ、ほら……えっと、なんていうか、そろそろ色々とお互いの進捗状況について話をしておきたいな、とか……時間、ないか？」

「……」

一瞬の沈黙。

彼女の脳裏に玄関での会話が過ぎった。少しだけ、頭の奥がピリピリする。

「……まだ、話し足りないの？」

「え？」

「あの女に思う存分話したのでしょう？ だったらもういいじゃない」

言うてから、我ながら意地の悪いことだと思った。もちろん彼は、その進行状況が彼女の帰還時期にも関わるからこそ、知らせに来たのだろうから。

「あ……あのさ、シーラ」

ドアの向こうの声は、相変わらず遠慮がちだったが、

「マーセルさん、ちょっとわがままなところがあるけど、根は悪い人じゃないんだ」

フォローするような言葉。さすがのティースも、彼女がマーセルのことを嫌っていることには気付いていたようだ。

だが、その言葉が導く結果——つまり、それがシーラの胸にさらに深い靄をかけてしまうことには気付かなかったようである。

「だから、なに？」

更に冷たい声がかが口をついていた。

「え……い、いや、だから、つまり……」

「私があの子に腹を立てていて、だからお前の話を聞かないのだと、

つまりお前はそう言いたいのかしら？」

「え……」

「馬鹿じゃない」

苛々してくると、言葉が止まらなくなる。右手で自らの首筋を押さえると、やがてその手は少しずつ上へ。そのままそこにある結び目の上の髪飾りに触れた。

小さく、それを引っ掻く。

「馬鹿じゃないの」

もう一度、そう言った。

——大人びている、クールだ、と彼女はよく言われる。

が、それはおそらく見間違いだ。ただ彼女は、表情と言葉を凍らせるのが得意なだけ。その胸に渦巻く感情はむしろ他人よりも強い方だった。

「そもそも、私が腹を立てるのだとしたら、それはあの女ではなく、お前に対してよ、ティース」

「……え？」

全く自覚のない返事。

また、苛々が沸き上がり、言葉は鋭さを増した。

「お前がどこの女と仲良くなろうが、どこの女と寝ようが、本来、私には全く関係のないことだわ。でも——」

言葉の途中で、びっくりしたような反応が返ってくる。

「な……ちよっ……シーラ。マーセルさんは別にそんな——」

「けれど」

抗議の声を逆に遮って、シーラは続けた。

「私ではなく、リイナにとっては大いに関係のあることなの。そうでしょう、ティース」

「え？ リイナ……？」

「せっかくだから、この場でお前に言っておくわ」
そして戸惑うティースに、きっぱりと宣告する。

「お前があの子を好いていて、そして近い将来、あの子と結ばれる

ことを少しでも考えているのであれば、私はお前の“浮気”を決して許さない。あの子を傷つけるような行為は絶対に認めないわ。絶対に」

「え……ええっ!？」

ティースは慌てたような声だ。その表情は容易に想像できた。おそらく彼は慌てながら顔を徐々に火照らせているところだろう。

「ま、待ってくれよ! ま、前にも話したけど、俺は別に……そ、そりゃリイナのことは可愛いと思うし、色々と助けられて感謝もしているけど、そんなことまで考えているわけじゃないよ!」

それはおそらく本心だ。たとえ彼の心が実際は彼女に惹かれていたのだとしても、自覚といえるものはなかったのだから。

が——それを信じるシーラの耳に、そんな彼の言葉はひどく言い訳じみて聞こえた。

そして、胸の苛立ちがさらに加速する。

「……そんなに」

「え?」

眉間に皺を寄せ、吐き捨てるようにシーラは言った。

「そんなにあの女が気に入ったの? そんなにあの女を抱きたい?」

「ばっ……!」

ドアの向こうから戻ってくる声も、さすがに大きさを増した。

「い、いきなりなに言ってるんだよ! 俺はただ話を——そ、それにお前だって知ってるだろ!？」 俺が女の人に触れない体だってこと!!」

「……ああ、そうね」

出てくる言葉が容赦なく傷付けていく。

こうなると、もう止まらない。

「もしそうでなければ、お前は立派なプレイボーイだわ。……その体質に感謝することね、ティース。そうでなくば私だけでなく、エルやリイナもきつとお前のことを軽蔑していたでしょうから」

「なっ……違う! 俺はそんなつもりなんてこれっぽっちもないし

……お、お前だって俺のことぐらい知ってるだろ！　俺がそんなこと考えるような人間かどうか――！！」

鋭い、呼吸。

そして、

「黙れ」

「ッ……！？」

「黙りなさい、ティース」

短く、鋭利な言葉に、抗議の声は一瞬で沈黙した。
微かな空白。

その後、冷たい言葉はさらに続いた。

「お前のことなど、どうでもいい。ただ私の考えはさっき言った通り。それだけ覚えておくことよ。他に話すことなどないわ」

「……」

「部屋に戻りなさい。……聞こえた？」

返事はない。が、抗議の意思表示なのか、ドアの外の気配は動かなかった。

もう一度。

「戻れ、と、そう言ったのよ。聞こえたでしょう？」

今度は抵抗の意志はなく。

明らかに落胆したような空気を残し、気配は部屋の前から去っていった。

「……」

それでもシーラはしばらく無言で、扉を軽く睨み付けていた。

他人の前ではそう容易く見せない、感情の溢れる表情。しかしやがて、その視線は小さく下を向き、ため息がその口からこぼれる。ほんの一瞬だけ後悔が過ぎた後、僅かな嫌悪感。視線が流れ、ゆっくりと立ち上がった足はそのままベッドへと向かう。

ぼふっ。

うつ伏せに倒れると、もどかしそうに右手が自らのポニーテールに触れ、そこにあった髪飾りを細い指先で撫でた。

それほど高価ではないその装飾をゆっくりとなぞるように。
微かに目を細める。

しばしの間があって、彼女はそのまま髪をほどいた。そのまま仰向けになると、少しだけクセのついた水飴のように美しい光沢の金髪がベッドの上に広がる。

「ふう……」

もう一度、ため息。

怒りをぶつけたところで気分が軽くなるわけではない。いや、むしろ逆。

リイナのためだからと、そう自分を慰めてはみるものの。

（なんで私がこんなこと……馬鹿馬鹿しい……馬鹿みたい）

しかしその日、深く沈んだ気持ち再び浮かびあがってくることはなかった。

翌日の朝。空はあいにくの雨模様。

「はあ」

朝食後、ティースは自室にて外へ出る準備を進めていた。

ベッドに腰掛け、撥水加工のほどこされたフード付きのコートを脇に置き、滑り止め用の薄い手袋を付け、靴もぬかるんだ地面に対応するため、大きな突起のついたものを用意する。

左腰の金具に愛用の剣“細波”の鞘をしっかりと留め、固定されていることを確認。

と、そうしながら、

「はああ……上手くない」

ため息とともに、窓を叩く雨の空を見つめた。

そんなため息の理由については言わずもがな。本日の空模様のように曇った彼の心には、昨日のシーラの言葉が重くのしかかっていたのである。

「今日はひとまず誤解を解かなきゃなあ。リイナのことともそうだけど、マーセルさんのこともちゃんと説明して……だ、だいたい、俺がそんなこと考えるわけじゃないじゃないか。そもそも、普段冷静なくせに変なところで早とちりなんだよ、まったく。マーセルさんだってそんな悪い人じゃないって、少し話せばわかるはずなのにさ」
ぶつぶつ、ぶつぶつと。

独り言はいつしか愚痴へと変わっていた。

そうしながら右の腰に、昼食と応急処置用の簡易な道具と薬を詰めた巾着を装着していく。今日は雨ということもあり、それほど深く入り込む予定はなかったたので、それ以上の装備は必要なかった。そこでふと思いつく。

「あ、そういやファナさん、今回は葉くれなかったな。あれ、市販のものより使いやすくて好きだったんだけどなあ」
腰のベルトをきっちり締める。

「そういやシーラの仕事ってもう終わったのかな……こっちが先に終わったら手伝ってあげれば――あ、でも、どうせ邪魔だって言われるだけか……あーあ、なんかこう、劇的な効果のある魔法の言葉とかないのかなあ」

結局、思考は巡って。

「……はあああああ」

「どうしちゃったの、ため息なんかついて？」
「うわあっ！」

ティースがびっくりして顔を上げると、

「マ、マーセルさん!？」

「おはよ、ティースくん」

「あ、おはようござーって、な、なんで人の部屋に勝手に入ってきてるんですか!」

いつの間にか彼の目の前に立っていたマーセルは、相変わらずの白いバスローブ姿、今日は頭にもタオルを巻いていた。体は湯気が立ち上りそうなほどに上気しており、やはり温泉から上がったばかり

りのようだ。

「だって、ドア半開きになってたから」

「え、ホントですか？」

「ええ。だから入っていいのになって」

マーセルは平然とそう言って、ベッドと向かい合う一人掛けソファに座ると無造作に足を組んだ。

バスローブから覗くスラリとした足に、ティースは慌てて視線を彷徨わせながら、

「で、でも、それでもノックぐらいしてくださいよ。そ……それと！ その格好でそんな無造作に足を組んだりしないでください！」

「ん？」

マーセルは自分の足元に視線をやって、

「ああ……ごめん。って」

どうやら自分でも気付いてなかったらしい。バスローブの裾を直し、それから少し興味深げに呟く。

「男の人に肌を隠してくれて言われたの、父以外では初めてのことだわ。脱いでくれて言われたことは何度もあるけど」

「……」

ティースの顔は真っ赤だった。

「同じ男でも、色々な人がいるものね」

マーセルはそう言って手を組み、そこに顎を乗せ、興味深げに上目遣いに見上げる。

「あなたは、私が付き合ってきた男たちとは全く正反対。ホント、興味深いわ」

ティースはやはり視線を彷徨わせながら、

「そ、そうやって前屈みになるのもやめてください。その、み、見えますから」

「ああ。これは、ちゃんと見せようとしてるのよ？」

「うわあっ！ と、とにかく！」

慌ててそっぽを向くなり、ティースは大きく咳払いをしてベッド

から立ち上がった。

視線はあらぬ方向に向いたまま。

「俺、そろそろ行きますから！ マーセルさんも部屋に戻ってください！ それに、そんな格好でウロウロしていたら風邪ひきますよ！」

「うーん」

マーセルは苦笑しながら体を起こし、頭を掻いた。興味深い視線は薄れていなかったが、そこにやや怪訝そうな色も入り混じって、

「あなた、もしかしてあの娘に遠慮してる？」

「へ？」

「あの偉そうな態度の娘よ。なんて言ったわけ？」

「……シ、シーラのことですか？」

本人に聞かれたらまた機嫌を悪くされそうだったが“偉そうな態度の娘”に該当する彼の知り合いといえば、ここではどうやっても彼女のことしか思い浮かばなかった。

「ああ、シーラとか呼んでたわけ？ あの生意気そうな子。あなたには悪いけど、私、最初から気に入らなかったのよね。あの子の目」

「目？」

確かに、比較的冷めているように感じる彼女の視線は、人によっては嫌う者がいるかもしれない……と、ティースはそんな風に思ったのだが、マーセルが口にしたのはそれと全く正反対の印象だった。

「あれは、ね。きつと、ものすごく我が儘で嫉妬深い女の目よ」

「へ？」

まるで予想外の言葉に、ティースは固まった。

それから、思わず苦笑が浮かぶ。

「そ、それはないと思いますけど。我が儘かどうかはともかく、どう考えても嫉妬深いようなやつじゃないですよ」

「あら。どうしてそう思うの？」

「だってあいつ、そういう部分に関しては結構ドライですから。一応恋人がいるみたいだけど、扱いがかなりおざなりな感じですし…

…」

デートの約束をすっぱかしたり、存在自体を軽視するような彼女の発言は日常茶飯事だった。

マーセルは意外そうな顔をして、

「え、そうなの？　というかあの子、私があなたに近付くたびに、ものすごく不機嫌そうなオーラを漂わせていたから、てっきり」

「それは……」

確かにそれは今回ティースも少なからず感じていた。

とはいえ、彼女がそんな態度を露わにしたことは今までなかったし、その引き金となったのは、彼女自身が言うように、彼ら二人にとって共通の友人である少女――リィナが存在なのだろう。

（あいつ昔から、友達思いが高じて見境なくすこともあったからなあ）

と、ティースはため息を吐く。

その点は昔から――少なくともエルとリィナに対しては、ちっとも変わっていないようだった。

「ま、何にしても、嫌な子だわ」

そう言ったマーセルはその言葉通り、ほんの僅かな不快感を表情に出して、

「言いたいこともロクに言わなくせに、自分の権利だけは一人前に守ろうとしちゃってさ。子供みたい」

「こ、子供？　あいつが？」

やはり意外な彼女の評価に、ティースはビクリした顔をして、
「で、でもあいつ、言いたいことは結構言ってきますよ。昨日だって俺、結構色々言われましたし」

だが、その言葉にマーセルはますます嫌悪感を露わにすると、

「昨日？　……ふうん。ホント、ヤなヤツ」

さらに強い調子で断じると同時に、何やら考え込むと、

「……」

「え？」

突然立ち上がったマーセルに、ティースは不思議そうな顔をした。
そして、

「ちょっ……マーセルさん」

思わず後ずさる。

マーセルはゆっくりと彼に近付いてきた。

その声が、微かに艶を帯びて、

「仕事仲間なのか個人的な知り合いなのかは知らないけど、いくら顔が綺麗でも、ああいう性悪女とは付き合わない方が身のためよ……」

そう言って顔を覗き込むと、二人の間はすでに微かな体温が感じられるほどの距離になっていた。

「っ……」

ティースはさらに後ずさったが、彼女はゆっくりと、まるで獲物を追いつめるかのように接近していく。

やがて、背中が壁にぶつかった。

「……あ、ああああああの！ マーセルさん！！」

顔が近すぎて正視することすらできず、今度は思いっきり顔を斜め上にそむけると、

「お、おれっ！ そろそろ行かなきゃ——！！」

「大丈夫。一分か二分ぐらいで終わるわ」

「な、なにがッ!？」

「ティースくん……あなた、もしかして——」

そんな彼の反応にマーセルは満足そうに目を細め、口元に妖艶な笑みを浮かべると、

「キス、って、したことない？」

「え……ええッ!？」

ティースの顔が噴火したように真っ赤になった。さらに壁に背中を押しつけ、必死に逃げ場を探しながら、

「ま、まさかっ……ま、まままま待ってくださいっ！ そっ、そんなことしたら、俺、気絶しちゃ——！！」

「大丈夫よ。気絶した後も、私がリードしてあげるわ」

「ぜっ、ぜんぜん大丈夫じゃなああいっ!!!」

ティースはそう叫んだが、マーセルはどうやら本気のようにだった。体は触れないようにしていたが、顔は徐々に近付いてくる。

（ど、どうするッ!?!）

心臓がひっきりなしに警鐘を鳴らしていた。……逃げ道はない。逃げる方法があるとすれば、目の前の彼女を突き飛ばすことぐらいだ。が、そんなことが彼にできるはずもなかった。

「こら、ティースくん。そうやって顔を背けてたらできないでしょう?」

「でっ、できないようにしてるんですよっ!!」

「ふーん」

するとマーセルは口元に意地悪な笑みを浮かべて、

「だったら、このまま抱き付くわよ?」

「ひっ!!」

恐怖に体が固まる。

奇妙な話だが、彼女のその言葉は彼にとって充分な“脅し文句”になるのである。

その隙を狙って、まるで懐柔するようにマーセルの言葉は続いた。「試しに軽く、ほんの数秒よ。あなたが気絶しない程度。それにキスだったら、もしかしたら気絶しないかもしれないじゃない?」

こういう理論か謎だったが、今のティースにはそれに疑問を抱く余裕すらなかった。

ただ、混乱する頭の中で咄嗟に思ったのは――

（だっ、抱き付かれて気絶するよりは、マシか……?）

確かに。抱き付かれた場合は“確実”だ。が、彼女の言うようにほんの数秒であれば、もしかしたら気絶せずに済むかもしれない。至極単純な比較だった。

「よしよし」

観念して一瞬だけ動きを止めたティースに、マーセルは満足そう

に頷く。体の距離はほとんどゼロに近い、が、彼女は器用にも触れないようにつま先を伸ばし、顔だけを近付けていった。

動きに合わせて、微かな空気の流れが頬を撫でていく。

あと、十センチ。

「……っ」

頭の奥が熱くなって視界がチカチカし始める。石鹸の匂いが鼻孔をくすぐって、さらに心臓の鼓動音が速くなった。

と、そのとき。

「っ……!!」

ふと——…脳裏に浮かんだ、少女の顔。

途端、彼は急速に正常な思考を取り戻した。

(や、やっぱダメだ!)

一瞬だけ、強引に突き放そうかと手が動きかけたが、それも彼は直前で思い直した。

そして、

「マーセルさん、やめ——!!」

そう叫び、あと僅か二、三センチまで迫った、その時。

……バアンッ!!!!!!

「!」

驚きにマーセルの動きが止まった。

ティースも、また。

「え……?」

「……なに?」

そして二人同時に、音の発生源——部屋の入り口へ視線を向ける。その音は明らかに部屋の扉が立てたもの。だが……部屋の扉は閉じたまま。何の変化もない。

「何の音——」

ティースはそう言いかけて、廊下を立ち去っていく足音に気付い

た。

真っ赤になっていた顔が急激に青ざめて、

「マ、マーセルさん、もしかして……ドア、開けっ放しだったんじゃないー！」

「え？ ああ、うーん。そういえば閉めた記憶がないかも」

「っ……！」

「あっ、ティースくん！」

制止の声も振り切って、ティースは慌てて廊下へ飛び出していく。

「シーラ！」

だが、そこに彼女の姿はすでになかった。

代わりにそこに立っていたのは、

「ティース」

首筋まで覆うほどの分厚くダボダボのセーター。そこにマフラーを巻き、さらに上から撥水用のコートを身に纏った、銀髪の雪女（？）……彼の上司であるアルファークールラントだった。

「あ……アルファさん」

「出発の準備はできたのか？」

「いえ、えっと……」

その言葉に任務のことを思い出し、それから辺りを見回す。

が、やはりシーラの姿は見えない。

ティースは尋ねた。

「シーラ、見ませんでしたか？」

「ああ、見た」

と、アルファは相変わらず独特の、ややハスキーな声色で即答する。が、必要以上のことは言わないし、聞かない。

「そ、そうですか……」

「もう、準備はいいのか？」

「あ……いえ、あ……ええ、はい」

本心では追いかけたかったが、まさか任務を放るわけにもいかず。

（シーラ……）

胸には暗雲が立ちこめていた。それも先ほどの単なる曇り空ではない。雷雲をも伴った大荒れの空模様だ。

（昨日、あんなこと言われたばっかなのに）

彼女は比較的静かに怒るタイプだ。先ほどのように、物に当たるような態度は珍しかった。

つまり——おそらくは“激怒”状態。

（さ、最悪だ……）

後に訪れるであろう“仕打ち”を想像し、そしてティースはガツクリと肩を落としながら本日の仕事へと向かうのだった。

ラグレオ山の東側、崖のように切り立った場所に掘られたその洞窟からは、地を這うようにいくつものパイプが伸びている。周囲には監視小屋のようなものがいくつも立っていて、許可なくそこに近付くことはできなくなっていた。

ここが、温泉を汲み上げる装置のある洞窟である。

「アルファさん……」

そしてロマニーの職員二人が見守る中、ティースたちは三日連続でこの場所へとやってきていた。

雨は少し強さを増している。撥水加工のコートを着てはいても、少しずつ中へと染み込んでいるのがわかった。足元も少々頼りなく、靴の周りは雨と混じった泥でぐちゃぐちゃだ。

ティースはその入り口の岩肌に触れ、それから地面を——この天気で足跡など残るはずもないが——じっと観察しながら、黙って洞窟の奥を見つめるアルファに問いかけた。

「もう三日目ですけど、ホントにこの洞窟って怪しいんですか？」

「さあ」

「さあ……って」

チラッと振り返ると、彼らを見つめるロマニーの職員二人が、ど

ことなく苛々した様子を見せていた。……それも無理あるまい。ティースは色々調べるような素振りを見せているからまだしも、アルファはただ黙って洞窟の入り口に突っ立っているだけだ。しかも聞き込み中心だった調査初日を除きそれが三日連続、今日の雨も相まって、付き合わされている方としてはいい加減うんざりだろう。

（……大丈夫なのかなあ）

この三日間、毎日こんな様子なのである。調査とは名ばかりで手応えなどはもちろん無く、彼が心配するのも無理からぬところだ。

（何を考えてるんだろ）

ティースが不安そうに見つめる先の、その美しい切れ長の目にははつきりとした光が灯っていない。それがまた不安に拍車をかける。少し視線を下に落とす。と、視界に入るのはその手の中にある一振りのスピア。長さはアルファの身長と同じ、百七十センチぐらいだろうか。長い柄の部分には何やら文様のようなものが刻まれており、その刃の先端はこの厚い雲の下でも微かな光を反射して――いや、刃自体が微かに発光していた。

見た目からして、明らかに曰く付きの代物である。

「あの、アルファさん。この洞窟って周りにこうして監視所もたくさんあるし、ここから獣魔が出てきたりしたらすぐわかるんじゃない？」

「……」

「あのー……」

「……」

まるで返事なし。

（……ダメだ、こりゃ）

聞こえているのか、それとも聞こえていて答えないだけなのか。

……常識的に考えれば後者だろう。

（こっちも打ち解けるにはまだ時間かかりそうだ……）

と、そのとき。

カツ、カツ……カツ、カツ……

「？」

微かに甲高い音が聞こえた。見ると、アルファの持っている槍の刃先が微かに震え、足元に転がる小さな石を打ち付けている。

「……？」

アルファの顔には何の変化もない。――いや。

「あつ……アルファさん！？ どこ行くんですっ！！」

突然、歩き出す。洞窟の中――とは逆の方向。

「もう、いい」

「ええ！？ もう、いいって……今日の調査はもう終わりってことですか！？」

「……」

カツ、カツ……カツ、カツ……

返事はない。が、どうやら肯定のようだ。

「ちよっ……あ、す、すみません。今日はありがとうございました！」

あからさまに不快そうな表情の職員二人に頭を下げ、雨でぬかるんだ地面を蹴ってティースはアルファの後を慌てて追った。

「ア、アルファさん！！ もう終わりって――」

曇り空で太陽の位置は確認しづらい。が、まだ昼にもなっていないだろう。

アルファの足は確実に宿の方に向かっていく。

「ま、まさか本当に終わりなんですかつ！？」

「……」

カツ、カツ……カツ、カツ……

ホントに終わりらしかった。

ディバーナ・ロウにおいて、というか部隊と名の付くものは大抵そうだろうが、隊長の命令なく勝手に調査、行動することは基本的に許されていない。部隊としての団結、及び隊員の安全を守るため、というのがその理由であり、そのため、隊長にはそれなりの判断力、決断力がなければ部隊として上手く機能しないものだ。

もちろんデビルバスターになるような人間は、魔に対する対処法は熟知しているし、それに必要な判断力や決断力は大抵備えているが、もう一つ、隊長として重要な要素——“指揮能力”に関しては、たとえ有能な人物であったとしても、必ずしも優れているとは限らない。

“一匹狼”とでも言おうか。他人を指揮したり他人に指揮されたりするのが性に合わない人々。このアルファ・クールラントという人物は、どうやらその枠で括られる性格のようだった。第四隊に隊員がいないというのは、おそらくそういった事情なのだろう。

逆に言えば、それでもディバーナ・ロウで活躍してる以上、相当に有能な人物ということなのであろうが……しかし。

（俺、一体何をすればいいんだろ……）

ティースがそんなことを悩んでしまうのも当たり前のこと。はっきり言って今の彼は、ただアルファに付き従うだけの付き人、もっと悪く言えば金魚のフンみたいな存在に過ぎなかった。

（でも、もしアルファさんがそういう人なら、ファナさんは、どうして俺をこの隊に入れたのかな）

何か意味があるはずだとティースは考えていたのだ……が、しかしまあ、実を言うとそれは今のところ些細なこと。

今の彼にのし掛かるのは、それよりもずっと大変な悩み事の方だった。

「はああ」

思い出して思わずため息。

アルファに遅れること数分後。相変わらず降り続く雨の中、彼が宿に戻ってきたのは昼を少し過ぎたぐらいの時間だった。このまま部屋に直行して眠ってしまうのはいくらなんでも早すぎるし、この天気では外を出歩くのもうまくない。

なにより、そんなあからさまな態度では“逃げた”と思われてさらにひどい仕打ちに合うことは間違いないだろう。

「シーラのヤツ、きつとまだ怒ってるんだろなあ……どうしよう。

何かうまい言い訳を——って、別にやましいことはないんだけどなあ」

やましいことはないというか、そもそも朝の出来事は半ば脅迫されていたにも近い状態なわけで、彼としては被害者だと言っても過言ではないのである。しかしまあ、そんな説明をしたところで、おそらく今の彼女には言い訳としか聞こえないだろう。

「マーセルさんも冗談が過ぎるよ……ったく」

そして未だに彼は、マーセルの好意が本物だなどとはこれっぽっちも考えていなかった。女性にモテた試しのない（少なくとも自覚のない）男なんて、所詮こんなもんなのである。

トボトボと、ティースの足は宿の玄関へと達する。

「とにかく、どうにかして機嫌を取らなきゃ。顔、合わせてくれればいいけど。多分しばらくは無視されそ——」

「……」

「……」

一瞬、そこにいた人物と見つめ合う。

二秒ほど時間が止まった。

そして、

「……おわあっ!!」

宿の入り口。

そこに、彼女はすでに立っていた。

しかも、

「ご苦労様。随分と早かったわね」

「シ、シーラ。た、ただいま……」

そこで腕を組む美貌の少女の言葉と視線は、予想通り、これ以上ないほどに凍り付いていたのである。

（や、やばいなあ……）

引きつった笑みを浮かべるティースの背中を、冗談拔きの冷や汗が流れた。

この状況。……話す機会すら与えられないよりはマシだと、そう

考えるべきなのだろうか。いやしかし、このオーラはただ事ではない。まるで手練れのデビルバスターを目の前にしたかのような感触だった。

プレッシャーに耐えかね、妙な早口がティースの口をつく。

「ア、アルファさんが、急に今日は終わりだって言い出してさ……ま、まあ、楽が出来てラッキーかな、って——」

「そう。ま、どうでもいいわ、そんなこと」

「……」

軽く戯けてみせても、全く効果はない。まるで永久凍土だった。

「別に、今朝のことを言い訳しろとも言わない。済んだことは仕方がないし、私が何を言ったところで過去を変えられるわけでもないわ」

ティースは慌てて、

「ちよっ、待ってくれよ、シーラ。今朝のは別に、そ、その未遂とどうか、そもそも何も済んでは——」

すうっと目が細められる。

「私が喋っているのよ。いつ、誰が、お前に発言を許したというの」

「——」

反射的に全身が固まる。

気を取り直した様子で、シーラは続けた。

「私がお前に言うことは一つだけよ」

「……」

ゴクリ、と、喉が鳴った。

途端、シーラの眉がぴくりと動く。あるいは音が聞こえたのかもしれない。

（な、なんだろう。まさかこの雨の中、一日中外に立ってるとか？ 風邪ひく……っていうか凍死するぞ……ああ、よりもよってこんな日に雨降らなくてもいいじゃないか……）

空模様に八つ当たりしても仕方ないのだが、とにかくティースは彼女の言葉を待つ。

しっかり数秒ほどの間。

「簡単なことよ。今後、あのマーセルという女を、近付けないようにしなさい」

「……え？」

拍子抜けした表情のティースに対し、シーラは片手を腰に当てて視線を横に流すと、

「今朝のことがお前の意志でないことなどわかっているわ。けれど、ああいう状況になる可能性があると理解したならば、お前自らの手でその可能性を極力排除するようになさい、と、そういうことよ。」

「……簡単でしょう？」

「ま……待ってくれよ、シーラ！」

びっくりした顔で、ティースは抗議した。
簡単なこと。

それは確かにその通りだ。びっくりするほど普通すぎる要求である。

が、しかし、ティースはそれを容易に受け入れるわけにはいかなかった。

「今朝のはマーセルさんの冗談なんだってば！　そ、そこまでしなくたって……あの人は本当に俺の話を聞きたがってるだけなんだよ！」

「……」

シーラの表情が険しくなる。

そして、

「それはお前が——」

と、そう言いかけたときだった。

「ちよっと？　聞き捨てならないわね、今の話」

「！」

「あ……」

視線を横に向けると、奥からマーセルがやってくる場所だった。ちよっと良いタイミング——いや、ティースにとってはもしかす

ると、最高にバッドでデンジャラスなタイミングだったのかもしれない。

その証拠に、チラッと振り返ったシーラの眉が険しくなるのが見えた。

「何の権限があるのか知らないけど、ティースくんの言うとおり、随分と横暴な話ね」

「……」

シーラの表情がさらに険しさを増す。

案の定、マーセルの口調は挑戦的だった。いつものように温泉から上がったばかりなのだろう。見慣れた白のバスローブ姿、一歩間違えば扇情的ともいえるその格好は、お洒落でシックな装いのシーラとはまるで正反対だ。

「あなたには、関係のないことだわ」

きっぱりと、シーラはそう言い切った。彼女がマーセルと直接言葉を交わすのはこれが初めてだったが、遠慮など微塵もない。最初から喧嘩腰だった。

だが、もちろんマーセルが黙って引き下がるはずもなく、

「関係大アリよ。ね、ティースくん」

「近付かないで」

ティースに近付こうとしたマーセルを、シーラが足を小さく踏みならして牽制する。

「……」

マーセルはピタッと足を止め、そして横目で彼女を見つめると、その眉がほんの少しだけつり上がった。

「お嬢ちゃん……一体何様のつもりか知らないけど、あまり我が儘が過ぎると、彼に嫌われちゃうわよ？」

だが、シーラは冷たく答える。

「関係ないわね。あなたと違って、別に好かれようと思ってるわけじゃないもの」

「へえ。じゃあどういいうつもりで邪魔するのか、聞きたいものね？」

シーラは一瞬だけ躊躇ったが、すぐに、

「話す必要、ないわ」

「だったら、私もお嬢ちゃんの言葉には従えないわね」

軽く手を振って、再び歩みを再開する。

——空気が凍り付いた。

（え、えっと……）

その渦中で、当事者（？）のティースはただオロオロするばかりだ。が、会話が途切れたその一瞬に、どうにか勇気を振り絞って口を開く、

「あ、あの、マーセルさん。シーラは別に悪意があって言ってるわけじゃ……そ、それにシーラもそんな言い方しなくたって——」

「ああ、いいのよ、ティースくん」

必死にフォローしようとするティースに、マーセルはニツコリと微笑んで言った。

「こう見えても色々経験してるの。こ・ど・もの扱いは慣れたものよ」

「！」

（ひ、火に油ッ！！）

「……」

シーラの表情が明らかに変わった。

……これまで大抵の場合において、実際の年齢よりも大人として扱われてきた彼女にとって、その言葉はおそらく想像以上の屈辱だったのだろう。

こうなっては、ティースとしてもなりふり構ってられない。手遅れになる前に、フォローするしかなかった。

「マ、マーセルさん！ あ、あまり過激なことは言わな——！！」

だが、時既に遅し。

「ティースッ！！」

「はっ、はいいいっ！！」

怒鳴り声が玄関に響き渡る。ティースは体を硬直させ、そして彼

に近付こうとしていたマーセルも動きを止めてシーラを振り返った。そのときのティースとマーセルの距離は、およそ二メートルほどだろうか。

それを睨み付けるように、

「もう忘れたのッ!? 私はお前に、その女を近付かせるなど、そう言ったのよッ!」

激昂。

まるで彼女らしくもない――…いや。それは所詮、彼女のことをよく知らない者たちの戯れ言だろう。その激しい気性は、遠い昔から彼女の中にあつた変わらぬものだ。

もちろんティースは“その彼女”を知っている。が、姿を現したのがあまりにも久々だったせい、今は動揺の方が大きかった。

「ま、ままま待ってくれ、シーラ。もっと冷静に話を――」

「……いいわ、ティースくん」

だが一人冷静顔で、マーセルは言った。

「決めるのはあなただもの。どうしようと私は文句も恨み言も言わない。決めて。あなたが近付くと言ったなら、私は二度とあなたの前に姿を見せないわ」

「え……」

ティースは無言で彼女を見た。

あくまで落ち着き払っている。シーラのように怒鳴ることもなければ、ティースのように動揺することもない。

それを見て、ティースの心は少し落ち着いた。冷静な思考が戻ってくる。

(……俺は――)

シーラの言葉には、極力逆らわない。それが彼の基本だ。実際、彼が真っ向から逆らうことなど稀だった。半年に一度、あるかないか。

だが――。

「俺、そんなつもりはないですよ、マーセルさん」

このときばかりは、きっぱりと、あまりに明確に、ティースは彼女の言葉に逆らうことになった。

「！」

驚きの表情を浮かべるシーラ。

「ティースッ！ お前——！！」

「シーラ……」

そして、次に彼女に向けた視線は、微かな戸惑いと悲しみを纏って、

「どうしちゃったんだよ……俺のことはともかく、他の人にそんな理不尽なこと言うなんて、お前らしくないよ……俺、今回ばかりはお前の言うこと聞けない」

「っ……！」

明らかな動揺が、彼女の表情を覆った。目を見開き、口は何かを言いかけて止まったまま。手は無意識のまま首筋に触れる。

その次に表れたのは、失望。

そして——

「マーセルさんは、ちょっとふざけ過ぎるところもあるけど、悪い人じゃない。もっと、ちゃんと話してみてくれよ。お前ならきっとわか——……あっ！」

言葉は最後まで続かなかった。

「まっ……シーラッ！！」

ブロンドのポニーテイルを大きく揺らし、彼女はすでに背を向けていた。表情は見えない。追いかけることもできなかった。

「……シーラ」

ポツリと呟くティースの言葉にも、大きな動揺。

——改善を図ったはずの二人の関係は、さらに悪化の一途を辿っていた。

いつもはティースが折れることでどうにかこうにか元に戻っていた関係。だが、今回ばかりはそうもいかないようだった。

（ああ……なんで、こうなっちゃうのかな……）

絶望感に、小さく天井を見上げる。

だが……それでも。

明らかな理不尽に目をつぶってしまうなど、彼にはできなかったのだ。

（だって、マーセルさんは……）

——悔しい。

悔しい、悔しい、悔しい、悔しい！

うつ伏せにベッドに倒れ込み、シーツをグッと握りしめる。

滅多にないことだった。彼が、あんなにも明確に彼女の“命令”を拒否するなどということは。

悔しい。

その原因となったのがあの女であるということが。

思わず涙が浮かびそうになる。が、それはグッと堪えた。

——泣いてはいけない。泣けば、惨めな思いをすることになる。

それは、嫌だった。

ならば……どうする？

熱くなった頭の中、思い浮かんだのはただ一つ。

まだ確かに彼女の手の手の中に残っていた、圧倒的なアドバンテージ。

（リィナ……リィナ——）

下唇を噛み、ゆっくりと仰向けになる。

（心配しないで……認めないわ。絶対に——）

その4『ファースト・キスは罪の味』

まだ昼過ぎだというのに、宿の一室――ティースの部屋は薄暗い。というのは、別に意図して暗くしているわけではなく、未だ弱まることを知らない雨のせいだ。

ティースはベッドに腰掛け、その正面のソファには普段着のマーセルが座っていた。彼女がバスローブから普段着に着替えるまでの間にはまた一悶着あったのだが、それはここでは割愛することしよう。

しかし、それにしても。

「……なんてことがあったんです。だから一口にデビルバスターって言っても、ホントに色々な人がいるんだなあって」

意外と言おうか、あるいは当然と言うべきか。

ティースが自らの様々な体験談を話して聞かせる間、マーセルは一度たりとも彼に迫ったりすることもなく、好奇心に目を輝かせ、聴き入っていた。

そして話し終えた彼を、憧れの視線で見つめるのだ。

「……羨ましい。私も男で、もっと体が丈夫だったら、あなたみたいなデビルバスターになりたかったわ」

「はは。前も言いましたけど、俺、まだデビルバスターじゃないですよ」

一息ついたところでティースは窓の外に目を向けた。

先ほども言ったようにまだ雨は降り続いており、時折雷鳴も聞こえてくる。

(……ふう)

どんどん暗くなっていく空模様は、今のティースの心そのもののようだった。

少し視線を動かして部屋の壁を見つめる。

その先にあるはずの隣室――シーラの部屋からは物音が一切聞こ

えてこない。

（温泉にでも行ってるのかな……）

再び、雷鳴。

「あら……今の、近かったわね」

「……ええ」

「この雨だと、さすがに露天には入れないわ。屋根付きも悪くはないんだけど、やっぱり自然が見渡せる露天の方が開放感があっていいわよねえ」

「……そうですね」

「今度、一緒に入ろうか？」

「ええ、そう……——って、そ、そんなことできるわけないじゃないですかッ！」

「つまらないわねえ」

マーセルはクスクスと笑って、

「上の空でも、そういうことにはしっかり反応しちゃうのね」
「え？」

「う・わ・の・そ・ら」

どうやらしっかりと見抜かれていたらしい。

（……年の功、かなあ）

「なんか今、失礼なこと考えなかった？」

「えー！？　そ、そんなことないですよ！！」
と言いながら、過剰に否定するティース。

つくづく嘘の苦手な男であった。

だが、マーセルは特に気分を害した様子もなく、
「あのシーラって子が、そんなに気になるんだ？」

「え、いや……」

と、そのとき、丁度廊下を戻ってくる足音が聞こえてきた。
おそらくはシーラだろう。

（……やっぱ温泉に行ってたのかな）
ピタリ、と、部屋の前で足音が止まる。ティースは一瞬ドキッと

したが、足音はすぐに通り返ぎ、やがて隣室のドアが閉まる音が聞こえてきた。

「……ふう」

ホッ、と胸をなで下ろす。

そんな彼をマーセルはしばらく無言で見つめていた。が、やがて何事か思いついた顔で、少し悪戯っぽい笑みを浮かべると、

「今、私が大声で悲鳴を上げたりしたら、あの子、どんな顔をするかしら」

「えっ!？」

ティースはものすごい勢いで振り返ると、

「やっ……やめてくださいよ、ホントにッ!」

「そう? やめて欲しい? じゃあ、交換条件」

そのまま、彼女の笑みは妖艶なものへと変化する。

「キスしてくれたら、許してあげる」

「マ、マーセルさんッ!!」

「あはは、冗談冗談」

「シャ、シャレになってません……」

疲れた顔で肩を落とすティース。

「ふふ、そうね。……でも、私の言った通りだったでしょ? あの子、きつと、ものすごくワガママな性格だって」

「う……」

確かにあんな場面の後では反論の余地がなかった。いつもは違ふんだと言ったところでどうにもならない。

だが、ティースはそれでも黙っていられずに言った。

「でも……あいつ、いいところもあるんですよ」

「ふうん、たとえば?」

「たとえば——」

考える。

良いところ。彼女の良いところ。

……だが。

「思い浮かばない、と」

「ちっ、違います！ ちょっと、今はたまたま——」

焦りまくるティースに、マーセルは小さく首を傾けて、

「可愛いところ、かしらね？」

「そ、そんな見た目の話じゃなくて！」

「ええ違うわ。顔の話じゃない」

「え？」

意表を突かれた顔のティース。

マーセルは手を組み、何やら意味ありげに微笑んで、

「ワガママにも色々あるってことよ。世の中、従順なお人形さんばかりが可愛いわけじゃないでしょう？」

「はぁ」

いまいち曖昧な返事のティース。

「……えっと、つまり、あいつのワガママが可愛いってことですか？」

だが、マーセルはきっぱりと答えた。

「ぜんっぜん。あまりに生意気で腹立つわ」

「？」

さらに混乱。

「でも、それは立場にもよるでしょう？」

「はぁ」

やはり理解できなかった。

マーセルはそんな彼の反応をいちいち面白そうに眺めている。

そして……ふと。

「ねえ、ティースくん」

声が厚みを増した。

「はい？」

「一つ、確認させてもらってもいい？ 一応、ね」

雰囲気の変化。

だが、ティースは気付かず普通に聞き返す。

「なんですか？」

マーセルは組んでいた足を下ろして揃え、穏やかに彼を見つめた。
「私、こう見えて……というか、多分見た目通り、結構遊んでる方よ。実家は田舎だけどそれなりに金持ちだったから、あたし一人を遊ばせておく余裕は充分にあってね。付き合った男なんて手の指じや数えられない。同時に四人の男と交際してたこともあったわ」
「……」

言葉通り、意外ではない。ティースをからかったり誘惑したりする態度は余裕に溢れていて、それなり以上の恋愛経験を積んでいることは容易に予測できる。

「でもね」

だが、そう言った直後、彼女の顔は自嘲に歪んだ。

「こんな体になってここで療養するようになってから、今までちやほやしてくれた男どもは、誰一人として顔を見せなくなったの。……まあ、私も大して期待してたわけじゃないけど……それでようやく気付いたわけ。ああ、私、なんてつまらないことしてたんだろうなーって」

その話はティースにも理解できた。

それは何も彼女が被害者だということではない。彼女が逆の立場だったなら、やはり見舞いになど行かなかっただろうから。

本人たちも本当は気付いていながら、気付かないフリをしていたような、そんな関係。

「後の祭り、なんて、ナンセンスな言葉だと思ってた。だってほら。私の目の前には楽しいことばかり転がってる。後ろを振り返る必要なんてないじゃない……なんて、ね」

自嘲を続ける彼女があまりに痛々しく思えて、ティースは言った。
「……まだ、これからがあるじゃないですか」

「ふふ、ありがと」

マーセルは素直に嬉しそうな顔をして、

「初めて会ったときも、そう言ってくれたわね。私、その言葉が本

当に、泣きそうぐらいに嬉しかったの。……ねえ、ティースくん。私が言いたいのはい——」

言葉を切って、真っ直ぐにティースを見つめた。

冗談でもからかいでもなく。

それはおそらく、紛れもない真実の言葉。

「そのこれからを、あなたと一緒に歩めればいいなって、こと」

「え……」

「からかってないし、冗談でもないのよ」

先回りしてマーセルはそう言った。

それから小さく首を振って、

「いいえ、最初から冗談なんかじゃなかった。今朝だって、さっきだって、本当にあなたとキスができれば素敵だって、そう思ってたのよ。……我ながら乙女チックなのが照れくさくて、冗談みたいになっちゃったけど」

「え……え……え……え？」

思考停止。

言葉の吸収に数秒、意味の解析に数秒、その他、言葉を選ぶのに数秒。

彼が次の反応までに要した時間は、約十六秒。

「あ、あの、でも、俺、こんな体で——その」

しかも口から出たのは、気の利いてるとは到底言い難い言葉だった。

が、マーセルの方もそんなことは最初から期待していなかったらしく、

「いいのよ、そういうのは。そりゃ、あなたに抱き締められたらきつと、言葉には言い表せないほど幸せだと思うけれど、でも、そうでなくてもいい」

「……」

カアツと、頭が熱くなった。

「え、えつと……その……」

あまりのことにどうすればいいのかわからず、適當なことを口走ってしまいそうになったが、それをなんとか堪え、ゆっくりと呼吸を整えた。

真剣な想いには、きちんとした言葉で答えなければならぬと思ったから。

ゆっくり、ゆっくりと、深呼吸を繰り返して、目を閉じる。

少しずつ心臓の鼓動が収まって、頭の熱が引いていく。

そんな“準備運動”の彼を、マーセルは至近距離でじっと見つめていた。

一分……いや、二分以上は経っただろうか。

ようやく、ティースは口を開く。

「すみません……俺、それには応えられないです」

「……」

マーセルは特に落胆した様子もなく。ただ、彼が最初の言葉を発したその瞬間だけ、目を閉じた。

ティースは正直な気持ちを言葉に乗せていく。

「その、マーセルさんみたいに綺麗で魅力的な人にそう言ってもらえるのは、ものすごく嬉しいです。でも俺、今は色々とやるが多くてそういうこと考えられないし……それに——」

目を閉じて一呼吸。

ゆっくり目を開け、真っ直ぐに見つめて言った。

「マーセルさんのこと、一番に考えられる自信はないです。だから……すみません」

「……」

外の雨は少しずつではあるが、徐々に弱まっていた。雷鳴も、ここ数分はその鳴りを潜めている。

静かだ。

隣の部屋で動く人の気配が感じ取れてしまいそうなほどに。

やがて——

「わかったわ」

一呼吸。

マーセルはゆっくりとティースから離れ、ソファに腰を落ち着けると、

「というか、会ってまだ数日だし、当たり前といえば当たり前よね」
少し笑う。

「自分でもまだ信じられないんだけどね。私がこんな、まるで一目惚れみたいな体験をするなんて……でも、それだけ胸に響いたわ。あなたの言葉」

「……」

マーセルは少し考えると、

「別に私のことを一番に考える必要はないんだけど……と言ったら、やっぱり困っちゃう？」

「……困ります。俺、そんなに器用な人間じゃないです」

「そっか。それなら仕方ないわね」

すっきりした様子だった。

本人が言うように、結果は予測済みだったのだろう。

「それじゃ、この話はこれでお終い。また色々な話、聞かせてくれる？」

「ええ、それはもちろん」

ホッと、息を吐く。

そして同時に、ほんの少しの不安が胸を過ぎった。

（……こんな返事で、良かったのかな）

余計なことまで言ってしまった気もしたし、もっと気の利いた言葉があったような気もした。

が、それらは全て済んだことで、考えても詮無きことだ。

なにより目の前の彼女の表情を見れば、それが少なくとも間違った言葉でなかったことは明らかで。

「ホッとした顔ね」

「あ……その、俺、こういうの慣れてないもので……」

「そう。意外ね」

そう言った直後、マーセルの表情は少し悪戯っぽいものに変わって、

「でも、安心するのは、もしかしたらまだ早いかもしれないわよ？」
「え？」

ティースが怪訝な顔をしたそのとき、隣室のドアの開く音が聞こえた。

——直後、ノックの音。

「え？ あっ……」

もちろんその主が誰であるかは明らかだった。

「どっ、どうぞっ！」

思わず腰が浮き、声の上擦る。

——それは彼にとって予期せぬ事態だった。先ほどの剣幕から、任務を終え帰る日まで顔を合わせる機会はないんじゃないかと、そう考えていたぐらいだったから。

しかしノックの音は比較的冷静。

カチャ——

「……」

ゴクリ、と、喉が鳴った。

忙しなく、心臓の鼓動音が再び高まっていく。

マーセルの告白といい、ティースにとっては不測の事態の連続だった。

（お……落ち着け、ティーサイト……わ、わざわざ向こうから来てくれたんだぞ。誤解を解いて仲直りする絶好のチャンスじゃないか！ ……あああ、でも、もし絶縁状を叩きつけに来たんだったらどうしよう！ いや、それどころか訪ねてくるフリをして空気扱いされたり……いやいや、もしかしたらいきなりベッドに葬式用の花とか置かれるのかも！）

そんなことはまずないと思うのだが、とにかくなかなか見事な混乱っぷりである。

（あああああ、そんなひどい扱いされたら、俺、しばらく立ち直れ

ないいい……)

「ティース」

「？」

響いた声は、やはり冷静だ。

しかも――ドアの向こうから現れた彼女の姿に、ティースは一瞬だけ意識を奪われる。

「……シ、シーラ？」

やや複雑な金糸の刺繍が入った黒いベルベットのトップにロングスカート。先ほどのまでの普段着とはまるで違う出で立ちで、ドレスとまでは呼べなくとも、彼女の普段着の中では飛び抜けてお洒落ないわゆる余所行きの服だった。

「あ、えっと……」

別に彼女のその格好を見るのが初めてなわけではない。が、普段目にするのと、こうして見慣れぬ土地で目にするのでは、印象がまるで違って見えた。

ティースはベッドから腰を浮かせながら、

「ど、どうしたんだ？ 急にそんなお洒落して……」

「……」

シーラは一瞬だけソファのマーセルを見たが、すぐに彼の方へ視線を戻して、

「さっきは、悪かったわ」

「え？」

「ごめんなさい。どうかしてた」

ティースの思考は再び停止する。

「え、えっと……シーラ？」

あまりの態度の変化に戸惑いは消えなかったが、かろうじて、彼女が仲直りを望んでいるらしいことは理解できた。

「そ、そっか」

ようやく話ができるという喜びがじわじわと胸に染み出してくる。そこまでは、良かった。……もしも彼がもう少し疑り深い性格で

あれば、かろうじて、彼女の台詞が棒読みだったことに気付いていただろう。

つまり、不自然だったのだ。

が、ティースはそれに気付くことなく、安堵の笑顔を浮かべながら、

「あ、いやいや。俺の方こそ、きちんと説明できなくてゴメンな。俺、あまり説明するのうまくないし……」

「……」

ゆっくりと部屋に入ったシーラは、無造作にそんな彼の元へと近付いていく。途中、もう一度だけマーセルに視線を送ったが、やはりすぐに戻した。

「は、はは……でも、良かったよ。俺、ものすごく怒らせたと思ってたから、もしかしたらもう口も利いてくれないんじゃないかと——……シーラ？」

ようやく異変に気付いたのは、彼女が目の前までやってきてからのこと。

相変わらずの冷静な表情。

——冷静？ いや違う。そう思っていたのは彼だけだ。

「……」

小さく息を吸う音。

それは冷静などではなく“緊張”だ。

ティースはその違いを見抜けなかった。

そして次の瞬間——

「△※□凹☆×↓＊●！！？？？？」

世界が、真っ白になる。

……いいや、世界はいつも通りだ。外の雨は徐々に弱まりつつあり、時計はいつも通りに時を刻み続け、隣の部屋ではアルファが相変わらず一点を見つめて固まっているのだろう。

真っ白になったのは、ただ一人、この部屋にいるティーサイトⅡ
アマルナという男の頭の中だけ。……いや、正確に言えばもう一人、
それに近い状態になっている者もいたが——それはともかく。

何が起きたのか。

一体どうなったのか。

ティーズの頭はそれを容易には理解しなかった。

ただ感じるのは、口の中の微かな痛み。脳天にまで響きそうなそ
の微かな痛み。

なんの香りだろうか、とにかく心地よい、それだけで胸がドキド
キしそうな甘い香り。

そして。

そして唇に感じる、柔らかく、暖かな感触——

「——」

動けない。

手が添えられているのは、左の頬だけだ。そこに細く美しい指が
そっと添えられている。体は、どこも押さえつけられていない。な
のに、体が固まって動けなかった。

息もできない。

少しずつ白以外の色を取り戻し始めた視界の中で、透き通るよう
な水飴の髪が微かに揺れているのがわかった。乱れた幾筋かが、首
を微かにくすぐる。

心臓の鼓動は、まるで自らを追いつめる足音のようにゆっくりと、
だが確実に強くなっていた。

「——」

最初の衝撃からようやく感覚を取り戻した頭は、次に、温泉に長
く浸かるよりも強烈な熱と、麻薬のように甘美な快楽に侵され始め
る。

あと十秒もそうしていれば、彼の頭は確実にのぼせ上がっていた
だろう。

——実際にそうしていたのは、ほんの数秒のこと。慣れた者にし

てみれば、ほんの軽い、挨拶替わりのものかもしれない。

が、彼にとってそれは、とてつもなく長い、現実とは思えない世界の出来事だった。

そして、

「っ……っ……」

ゆっくりと離れていく。微かな吐息が、すぐ近くに聞こえた。

甘い、吐息。

「――」

思わず沸き上がった衝動。

離れていくそれを引き留めようと、手が伸びる。

――いや。

「――……は？」

それは寸前で止められた。

あまりにも遅すぎる“認識”によって。

「……あ、あれ？ ……シーラ？ 俺――」

頬を上気させた美しい少女の顔がすぐ近くにある。それはいつものクールで冷たいものではなく、あまり見たことのない表情。

現実味のない光景。

（あ……）

素直に、綺麗だと思った。

首筋に一本だけ残された、美しい黄金色の髪。

鼻孔をくすぐる残り香。

そして、口の――

「……！？」

ティースはハッと口を押さえた。

――残っている、感触。

「……！！？」

目を見開いて、眼前の熱っぽい表情の少女を見つめる。

少女――それは紛れもない、彼の良く知る少女、シーラ＝スノー
フォールその人だ。

状況と記憶。

それらが彼の頭の中で少しずつその手を結び始め、そして徐々に“その出来事”を形作っていく。

「!!!!!!!!!!?」

理解し、そしてもう一度、二度目の衝撃が彼を襲った。

「なっ、なななななななっ!!!!」

「……」

すうつ、と、息を吸う音。左頬に添えられていた手が離れていくと同時に呪縛が解け、浮き上がったまま固まっていたティースの腰はストンとベッドの上に落ちる。

困惑の瞳で見上げると、シーラは彼と目を合わせようとはせず、すぐに視線を外して後ろを振り返った。

「……」

その状況を黙って見つめていたマーセルも、しばしの間、驚きの表情を崩さなかったが、やがて我に返った様子で目を細め――そして無言のままソファを立った。

――パタン。

ドアが閉じて、部屋がしんと静まり返る。

雨音がほんの一瞬だけ強さを増した。

「……」

小さく、深く息を吐く音。

それはティースではなく、シーラのものだ。……何より今の彼には、そんな落ち着いて深呼吸するほどの余裕もなかった。

口を押さえたまま青ざめて、それから再び顔が真っ赤に染まる。

「な、なななな……あ、ああああ……」

「少し、落ち着きなさい、ティース」

シーラは対照的に落ち着いた口調で、背中を見せたままゆっくりと離れ、窓際まで歩いていく。

「別に大したことではないわ」

「だ、だだだだって……お、おおまえ……いい、いい今……」

呂律が上手く回っていない。彼の頭は完全にオーバーヒートしてしまっているようだ。

「いいじゃないの、キスくらい。別に初めてのことでないでしょう？」

「――」

シーラは肩越しに怪訝そうな視線を向けて、

「……もしかして、初めて？」

「……」

黙ってコクコクと頷くティース。

「そ、そう……」

少しだけ、口調に動揺が走った。

「それは……少し、悪かったわ……そうね。お前、そんな体だものね」

「お、おおお……俺……」

言いかけて、思い出したように深呼吸。

一度、二度、三度。

そこまでやって、ティースはようやく言葉を取り戻した。

「お、お、俺のことは、ど、どうでも……そ、それより、お、お前、ななななにを――」

「私はいいのよ。慣れてるもの」

シーラは素っ気なくそう言って、再び窓の外に視線を戻した。

「な、慣れ……？」

「なに？ 何か不思議？」

「い、いや……」

確かに、普段の言動からすればそうであってもまるでおかしくはない……が、そう理解してはいても、不思議な淋しさが胸に渦巻いた。

だが、シーラはそんな彼の心中など察した様子もなく、

「だから、お前も何も気にしないでいいわ。いいじゃないの。初めてなら尚更、貴重な体験ができたと思えば――……なによ」

もう一度肩越しに振り返ると、口を押さえたままのティースに対し、あからさまに不機嫌そうな感情を美しい形の眉に表した。

そして少しだけ、瞼が震える。

「そんなに嫌なの？ それなら、すぐに口を濯いでくればいいじゃない」

「え……い、いや、そんなんじゃない——」

「だったら、なに？」

シーラの口調は徐々に苛立っていった。……確かにそのときのティースの態度は、女性としての彼女のプライドを深く傷付けていたのかもしれない。

だが、しかし。

彼が口を押さえていたのは、決してそんな理由からではなく——
「そ、そうじゃなくて……く、口の中……歯がぶつかったところが、痛くて……」

「……」

ハッとした様子で、シーラもまた自分の口を軽く押さえた。彼女の口の中にも、やはり同じ痛みが残っていたのだ。

少し気まずそうにしながら、

「……仕方ないでしょ。そういうものなのだから」

「そ、そういうものなのか……」

とりあえず納得するティース。

いや、納得したというより、それ以上追求する余裕がなかったというのが正解か。

「そ、それより」

話題を戻す。

心臓の音はようやく収まりつつあったものの、顔を上げて目の前の少女を見ると再び熱が上ってくる。

そこでティースは視線を外し、あらぬ方向を見ながら言った。

「お、お前、今のは一体、どういうつもり——」

「どういうつもり？ ……決まってるじゃない」

対するシーラの方は目を閉じ、事も無げに答える。

「あの女を、お前から引き離すためよ」

「え？ ……あ、あれ？」

そこで初めて、ティースはマーセルが部屋を出ていったことに気付いたようだった。

「マーセルさん……？」

シーラは目を閉じて続ける。

「あの女はお前には決して触れられないのだもの。こうすれば、必ずショックを受けるはずだと思ったのよ」

「え……？」

その言葉にティースは顔を上げ、それからその意味を理解すると、ゆっくりと目を見開いていく。

——頭の中に掛かっていた靄が一気に晴れた。

「……」

そして。

ドクン、と。

心臓が今までとは違う意味の鼓動を打つ。

だが、それには気付かず、シーラは深いため息を吐いて続けた。

「迷惑な話だわ。お前がもっとしっかりしていれば、こんなことをする必要はなかったのに。でも、これでリィナも——」

「……お前……」

「？」

ピタッと、シーラの言葉が止まった。と、同時に怪訝そうな視線が彼の方へと向けられる。

そして、

「お前、そんなこと——」

「え？」

それを見たシーラの表情が凍り付く。

喉を絞るようなティースの声は、それだけで、怒鳴り出すのを懸命に堪えていることがわかる。さらに声は震え、押さえきれない怒

りが視線に滲み出ていた。

「そんなことのために……！」

「……あ」

そのとき彼が見せたその感情は、本来、彼女に対して向けられるべきものではなかった。向けられたときの記憶を思い出すのも難しいほどに。

動揺した。

彼女らしくもなく、それを隠す余裕すらもなく。

「マーセルさんは――あの人は真剣に、俺のこと好きだって、そう言ってくれたんだ」

「え――」

シーラは目を見開いたまま。彼の本気の怒りを察してか、心なしか顔の血の気が引いているようにも見える。

「つ……」

ティースは唇を噛み、無言のままベッドから立ち上がった。

「あ……ティース……」

行動の意味を問うその声は、普段の彼女からは考えられないほどに弱い。

「……」

ティースは無言のままドアに向かってゆっくりと歩き出し、途中、ピタッと立ち止まって視線を床に落とすと、

「……慣れてるからとか、何とも思ってたないとか……それなら、それはそれでいいよ。俺はお前と違ってそんな風に思えないけど、男だからさ……でも」

彼自身、まだ気持ちの整理がついていないような、そんな複雑な表情で続けた。

「誰かの真剣な想いを、そんな軽い気持ちで、そんな卑劣な方法で踏みにじろうとしたことは……それは、絶対にしちゃいけないことだ。たとえリィナのためでも、許せない」

「！」

ハツとした顔でシーラは反論した。

「ちっ……違う！ 軽い気持ちなんかじゃ——私はただ……！」
言いかけて、思い直したように止まる。

その後に出たのは、明らかに力無い言葉だった。

「ただ、あの子のために——」

「リイナは、絶対にそんなこと望んでない」

ティースは力無く首を横に振って、悔しそうな表情を浮かべると、
「……ごめん。俺、しばらくお前の顔、まともに見られそうにない」
「え……あ……ま……待って！ 待ちなさい！ ……ティース……！」
だが、早足で部屋を去っていくティースの足が止まることはなく
――。

――パタン。

「あ――」

思わず手を伸ばす。……が、それはあまりに遅すぎた。

「……」

遠ざかっていく足音。

窓を叩く雨の音。

静けさに包まれる部屋。

そして――口の中に残った微かな痛み。

「っ……」

目を伏せて服の裾をグツと掴む。黒いベルベットの生地に大きな
皺が出来たが、そんなことは気にする様子もなく。

（なんで……あんなこと――）

ズキズキと痛む。

多分、理由はわかっていた。

冷静に考えていればやる前から全て予測できたはずのこと。しか
し今日の彼女は冷静ではなかった。ただ、それだけのことだ。

視線が流れる。

(……馬鹿)

窓にうつすら映った頬の上を、雨が流れた。

(馬鹿みたい……最低ね、私……)

激しい後悔と、そして自己嫌悪に包まれながら――。

――そして一方。

勢いよく部屋を出ていったティースの方は――

(……あつ、あああああ、どっ、どうしよう！ あ、あんなことまで言うつもりじゃなかったのにいいいいっ!!！)

あれだけの啖呵を切ったにも関わらず、廊下に出て少しすると我に返り、すぐさま後悔に頭を抱えていた。

……こういう男なのである。少なくとも、あのシーラという少女に関しては。

(あああ、終わった。完全に終わった……くそっ、馬鹿馬鹿！ もっと他にいくらでも言い様はあったのに……そ、そういうやり方は良くないぞって、もっときちんと諭してやれば、まだ少しは――)

もちろん彼は、自分の言い分が間違っていたとは思っていない。彼女のやり方に怒りを感じたことも確かだ。が、だからと言って、彼女と絶交だとか、本気でしばらくは距離を置くとか、そんなことはこれっぽっちも考えていないわけで。

(ほ、本当にもう顔を合わせてくれなかったら、お、俺はどうすれば……い、今すぐ謝りに行けば間に合――で、でもさすがにあそこまで言っちゃったら、戻るに戻れないし……はああ……なんであんなこと言っちゃったんだよおお……)

ガックリと肩を落とす。

だが、あのかきは熱くなっていて、勢いのままに想いを口にしてしまったのだ。

正常な思考を失っていた。

――怒りのせい？

それはもちろんある。

が、実をいうと、彼が正常な思考を失っていた原因はそれだけではない。

「……」

無意識に右手が口元に触れると、途端、カァッと顔中が熱くなった。

（だ、だって、俺――）

鼻孔をくすぐった香り。

すぐ近くを感じた、体温。

柔らかな感触。

（そ、そりゃ、あいつは慣れてて平気なのかもしれないけど！ お、俺なんて初めてのことで、なにがなんだか……そ、そんなすぐ忘れられるわけないし……！！）

思い出すだけで、心臓の鼓動が異常な速さになる。ぶつかった歯はまだ微かに痛んだが、正直なところ、あのときはその痛みなど全く気にならなかった。

（あ、あんな――うう）

のぼせて、壁に手をつく。

（せ、背中に電気みたいのが走って……なんだか不思議な……まるで夢の中にいるみたいで……あ、あいつの体温が――って、ああ、なに考えてんだ、俺ッ！！ こっ、この不心得者おとおおッ！！）

ガンッ！

「いてっ！」

「なにやってるの、ティースくん」

「うわあッ！！」

壁に頭を打ち付けたと同時に背後から声を掛けられ、ティースは思いつき飛び上がった。

振り返る、と。

「一見脳天気そうに見えるけど、あなたにも自殺願望なんてものが

あるの？」

「マ、マーセルさんっ!？」

「壁に頭を打ち付けて死ぬのはやめた方がいいわよ。カッコ悪いから」

クスクスと笑いながら、近付いてくるマーセル。手にはタオルとバスローブを抱えており、どうやら温泉へ向かうところらしい。

「そ、そんなんじゃないって、そんなことより！」

言い訳しようとして思い出し、そしてティースはすぐに頭を下げた。

「さ、さっきは、その……すみません! あ、あいつ、本当はあんなヤツじゃないんです! ただ……その、ものすごく友達思いなところがあって、それで——」

だが、

「え? なんの話？」

「へ？」

互いに不思議そうな顔で見つめ合う形になった。

「え、えっと……」

戸惑うティース。だが、目の前のマーセルの表情にとぼけている様子はない。何故謝罪されるのか本当に理解していない顔だ。

「私をフットしたこと? それとも、もしかしてあのシーラって子のこと？」

「あ、えっと……後の方です」

素直にそう答えると、マーセルはますます首をひねった。

「どうしてあなたが謝るのかわからないんだけど?」

「あ、いえ、その……あ、後であいつの方からもうかして謝らせますから」

「じゃなくて」

「?」

「別にどっちにも謝ってもらわないじゃない」

「へ?」

再び見つめ合う二人の脇を、温泉の方から戻ってきた三人組の女性がブツブツと文句を言いながら通り過ぎていく。どうやら今日の雨に文句を言っているらしく、確かに露天の多いこの宿では、雨が降るとその魅力も半減してしまうのだろう。

マーセルはその三人組を横目で見送りながら、

「雨、まだ上がらないみたいね。でも少し弱まってはいるみたいだし、もし夜になって止んだらもう一度入りに行こうかしら？」

「あのー……だってマーセルさん、さっき、怒って部屋を出ていったんじゃ……」

「え？」

問いかけに、マーセルは呆気にとられたような顔で振り返って、笑った。

「あはは、まさか。そりゃ全然悔しくないって言ったら嘘だけど、もうフラれちゃった後なんだし、そんなに怒るわけじゃないじゃない」

「そ、そんなもんですか……」

「邪魔っばかったから出ていっただけよ。あなたとの話も終わっていたし、ただでさえ私、あの子に嫌われているみたいだしね」

どうやらこのマーセルという女性、彼が思っていた以上にさばけた性格らしい。

ひとまずホッとしたティース。

だが、すぐ思い直したように視線を落として、

「あ、で、でも、後で絶対謝らせますから。あいつ、マーセルさんを俺から引き離すためだけにあんなことしたんです。それは、絶対に良くないことだと思っうんで」

「引き離すため？ ……そういえばさっき、友達思いがどうか言ってたわね？」

「……ええ」

ティースは正直に事情を話すことにした。リイナという友人がいること。彼女と自分のことについて、シーラが早とちりをしていること。それが先ほどの出来事の原因だということ。

「だから……その、あいつ、ただマーセルさんに当てつけるためだけにあんなこと」

もちろん、それを話すことによってシーラの印象がさらに悪くなることも懸念した。が、たとえそれを踏まえていても、それによって嫌な思いをしたであろうマーセルに隠しておくことはどうしてもできなかったのである。

だが、しかし。

その話に対するマーセルの反応は、彼が予想していたものと違っていた。

いや、違うどころか――

「ぷっ……あはは……アハハハハハッ!!」

「へ?」

全く正反対だった。

「マ、マーセルさん?」

「ぷっ……くくくっ……」

体を小さく折り曲げ、右手で口元を押さえ、顔を真っ赤にしている。

「……? あのー……」

「ごっ……ごめん……ちよっ、ちよっと……あははっ……面白すぎ……っ……!」

「?」

ティースは全く理解していない。自分の言葉を思い返してみても面白いことなど一つもなかったし、そもそも彼は怒られることを覚悟の上で話をしていたわけで――

「な、なにか可笑しかったですか?」

「え? あ、ううん……ご、ごめんねえ」

言いながらも、マーセルはまだ顔を赤くして可笑しそうなまま、
「そ、それは確かにものすごく友達思いね……うん。なかなかできることじゃないわ」

「はあ」

「あー……笑いすぎて心臓止まるかと思った」

「だ、大丈夫ですか？」

「大丈夫大丈夫」

ようやく上体を起こすと、マーセルはうんうん、と頷いて、
「そういうことなら、謝ってもらわなくていいわ。全然気にしてないし……むしろ、笑いを提供してくれて感謝したいぐらいよ」

「な、何がそんなに可笑しかったんですか？」

鈍感な彼もさすがに含みらしきものを感じたらしい。

だが、マーセルはきっぱりと、

「教えてあげない」

「そ、そうですか……」

どうにも納得できないティースだったが……それでもホッと胸をなで下ろさずにはいられなかった。

「じゃあ、ね。……あ、それと」

マーセルは両手のタオルとバスローブを抱え直して、
「生真面目なあなたのことから、そのことで喧嘩でもしたんじゃないの？ もしそうだったら、早めに仲直りした方がいいわ」

「はあ……」

どうにも理解できない。あれだけシーラのことを嫌っていた女性の言葉とは思えなかった。

が、マーセルはそんな彼の心を見抜いたかのように、

「だって、もうフラれたんだもの。あの子を嫌う理由の大半はなくなっちゃったじゃない？」

「お、俺、声に出してました？」

「いいえ。勘よ」

「……」

遠ざかっていくマーセルの後ろ姿を見つめながら、ティースは首を傾げるのだった。

（お、女の人って、不思議だなあ……）

——雨はどんどん弱まっている。

「夜には、上がる……」

ベッドの上で、アルファはじっと一点を見つめていた。外なのか、あるいは窓際に飾られた鮮やかな紫の花を見つめているのか。……いや、もしかすると何も見ていないのかもしれない。

隣室での些細な騒動など、まるで気に留めた様子もなく。

その口が、微かなメロディを紡ぎ始めた。

「揺れる、揺れる、誘蛾灯……」

少し掠れた歌声が、静まり返った部屋に響く。

「おいで、おいで、光の誘うままに……」

長い銀色の髪が微かに流れる。その青味を帯びた瞳は、やはり何者も映してはいない。

雨足が弱まると同時に、西の方に傾きかけた太陽は夜の訪れを告げ始めていた。

「揺れる、揺れる、誘蛾灯……ユラ、ユラ、ユラ——」

その5『不治の病』

宿に異変があったのは、その日の夜だった。

「……ふう」

本を閉じて。開いて。また閉じて。

雨は止んでいた。それどころか、厚い雲が途切れて月の光さえ射し込んでくる。

「……」

長い睫毛が微かに震え、宝石を思わせる瞳は彷徨って……それはいつしか一点に止まった。

何もない壁。

首を振って、靄を振り払う。

すっきりしない気持ちのまま、シーラはこの日の夜を迎えることになっていた。

（……今更嫌われたところで、それがなんだと言うの）

左手の指が、本の背表紙を撫でる。右手は髪に触れ、髪飾りの装飾をなぞった。どちらも意味のない行動。ただ、彼女はそうすることと自分の気持ちを落ち着けようとしていたのだ。

しかし、それは彼女が望むほどの効果をもたらすことはなく――

（同じこと。嫌われたって同じ。何も変わらない……だったら、別に――）

ため息が口をつく。

（……なんて。馬鹿ね……）

いや、確かに彼女はそれを望んでいたことがある。彼を遠ざけ、嫌われるような態度を取ったことも数え切れないほどにある。

本当に嫌われたかった。嫌われる努力もした。しかし結局、彼は断固として彼女を拒絶しようとしなかった。

だが――しかし。

今、思わぬことからこんな状況になってみて、初めて気付いたのだ。

（嫌われるのは、やっぱり辛い……）

それが彼女の偽らざる素直な気持ちだった。

ゆっくりと視線を上に向ける。……天井には微かに揺らめく光源。特殊な振動に反応して発光する、比較的広くに普及している魔界由来の植物を加工した照明器具だ。

まるで宝石のように澄んだ彼女の瞳の中で、その光源がユラユラと揺らめいた。

（謝ろう。謝れば、許してもらえるかしら……）

彼女の心のそれは疑問形だったが、おそらくは間違いないだろう。……いや、先に事実を言ってしまったえば、ティースの方こそどうやって彼女に謝ろうかと悩んでいたぐらいなのだから当然の話である。

シーラには自分が間違っていたという自覚があったし、謝ることにそれほどの抵抗はなかった。

「ふう……」

心を決めて、ようやく気持ちが落ち着いたようだ。それまで髪飾りの上にあった指がゆっくり離れ、それが口元へと移動する。

（リィナのため……とはいえ……本当に、どうかしてた）

痛みはとくに消えていた。

（あんなこととしてしまうなんて。あんなこと——）

後悔のため息が漏れる。熱い息が、指の隙間を抜けていった。

そのまま首を横に振って本を閉じる。すでに集中力はなかったし、それがなければその本を開いている意味はない。

椅子を引き、ゆっくりと立ち上がった。足を向けた先は、部屋の隅にまとめてある荷物の元。

（もう、着る機会はなさそうね……）

先ほど、暗い気持ちのままに着替えて脱ぎ捨てたお気に入りの服を手にとって広げると、綺麗に畳んで片づける。

——と、そのときだった。

(……あら?)

遠くで、誰かの声が聞こえたような気がした。

(なにかしら……?)

耳を澄ます。……しばらくは静かなまま。気のせいかと思ったその矢先、

「……!？」

もう一度、誰かの声が聞こえた。——叫び声だ。

同時に、近くで勢い良くドアの開く音。

すぐに、

「シーラッ!!」

ドンドンッ!

「!」

声の主は、先ほどまで彼女の悩みの種になっていた男だ。

「ティース? なに——」

だが、ドアへ向かおうとしたシーラよりも先に、ティースは叫んだ。

「絶対に部屋から出るな! いいか! そこでじつとして、何か異

常があったらすぐに助けを呼んでくれッ!!」

それだけを言い残し、足音は急速に去っていく。

(……まさか)

もちろんそれだけで、シーラは状況をすぐに察した。

(魔が……とすると、さっきの叫び声は誰かが……?)

少し思案した後、彼女はすぐに行動した。荷物を漁り、中からビンに入ったいくつかの薬を取り出す。

どれも彼女自身が調合したもので、そのうちのいくつかは、とある理由により、一般に市販されている薬よりも効果の高いものだ。

さらに取り出したのは包帯、消毒薬などの治療具一式。それらを手早く小さな鞆に詰め、肩に掛ける。さらに——治療薬とは別の特殊な薬をいくつか忍ばせて、彼女は部屋のドアを開いた。

——喧噪。それは間違いなくこの宿の中。おそらくは温泉の方だ。

辺りの状況を素早く確認する。……しばらく様子を窺ったが、喧噪が移動する気配はない。ティースが行ったからか、あるいはそれ以前にアルファが向かっていたか。どうやら鎮静の方向に向かっている、と、彼女は判断した。

躊躇することなく移動を開始する。

向かう先はもちろん、騒動のあった先。

すると、宿の中は思ったほどの混乱もなく、それを怪訝に思う間もなく、すれ違った使用人の言葉が耳に入ってくる。

「ああ、そうそう。だけどなんか知らんけど、もうやつつけちまっ
たらしいぜ——」

「……」

（すごい手際ね、ディバーナ・ロウ……）

彼女がその働きぶりを目の当たりにしたのはもちろん初めての
と。

（あいつは——下っ端とはいえ、そんなところで頑張っているのね
……）

温泉に通じる廊下に達すると、人の数も少し多くなってきた。も
ちろんほとんどが宿の関係者。

「……いやあ。にしても、助かったなあ。まさかネービスのデビル
バスターがここに滞在していたなんてな」

「どうやら、街の方で雇ってたらしいぜ。ま、とにかく怪我人も出
なくて——」

会話が耳に入ってくる。

（怪我人が、いない……？ 随分と手際がいいものね……まるで、

襲撃を予期していたみたい）

ほんの少し、シーラの胸に引かかるものが産まれる。

いくらディバーナ・ロウが、アルファが優秀だと言っても、この
早さは確かに異常だった。おそらくはティースが到着するよりも先
に解決しているのではなからうか。

（セシルのお兄さん、相当優秀なデビルバスターだと聞くけれど…

…)

だが、それでも幾分安心して、シーラはさらに温泉の方へと進んだ。辺りの状況を見ても、すでに危険が去っていることだけは間違いない。

どうやら騒動もとつくに収まって——いや。

そう思った、その直後だった。

「……マーセルさんッ!!」

(え——)

悲痛な叫び声が聞こえたのは、進行方向の先。

(……ティース?)

聞き間違えることなど、有り得ない。それは間違いなくティースの声。

シーラは躊躇うことなく、廊下を駆けた。

……なにかあった。

おそらくはマーセルという女性の身に重大な何かが。

彼女が一日に何回も温泉に入っていたことをシーラは知っていたし、獣魔の襲撃の場にいたとしても何ら不思議はなく——そして聞こえてきたティースの声の調子は、その予測を裏付けるものだったのだ。

少しでも集まり始めた野次馬の脇を抜け、向かった先は女性用の露天風呂。入り口付近に宿の使用人らしき女性がいて、駆けてきたシーラを驚いたように見つめたが、制止される前に強引に中へと飛び込んでいく。

もう一度、声が聞こえた。

「マーセルさん、しっかり——!」

「ティース!」

「!」

まずシーラの視界に飛び込んできたのは、脱衣所の床にかがみこむティースだった。その後ろでは、やはり宿の使用人らしき中年の女性が不安そうな顔でオロオロしている。

そして――

「!」

「シーラ……」

ティースの眼前に仰向けに倒れているのは、マーセルだった。おそらく露天風呂に入っていたのだろう。今は裸に大きめのタオルをかけられただけの状態。

見たところ、どうやら意識がない。

「マ、マーセルさんが……獣魔に襲われて――そ、それはアルファさんが退治してくれたんだけど、きゅ、急に――」

「怪我は、してないわね」

動揺した様子のティースとは対照的に、一つ深呼吸をしたシーラはマーセルのそばにかがみ込み、すぐに脈を取る。

「シーラー――」

「続けなさい。お前が知っている事実を、全て話すのよ。……マーセル。聞こえる?」

シーラは視線を動かさずに素早く言いながら、軽くマーセルの頬を叩く。……反応はない。腕を軽くつねってみても、同じ。

「意識が、ないわ」

「マーセルさんは……心臓が悪いんだ。そ、それで――」

ティースの言葉に、シーラは眉根に皺を寄せて振り返った。

「……心臓が悪い?」

「アルファさんがすぐに駆けつけて、ぜ、全然怪我はなかったんだけど、なんか急に様子がおかしくなっ――」

言いかけた直後、怒りの声が脱衣所に響き渡る。

「だったら何故、温泉になんか入ってたのッ!!!!」

「え……!!!」

ティースは目を見開いて、それからまるで子供のように泣きそうな顔になる。

「な、なんでって……だって医者が、ここの温泉が心臓の病に効くって言ったらしくて――」

「っ……」

少し冷静になる。——もちろん彼が悪いわけではない。医療がそれほど発達していない地域だと、それは当然のように語られる療養法だ。知識のないマーセルがそれを信じたことも、ティースが何の疑問を抱かなかったことも、それは仕方がない。

シーラはすぐに彼女の気道を確保する。自発呼吸はない。もう一度、首筋に手を当てて脈を取る。

「……まずいわね……」

「ま、まずいって……」

ティースが泣きそうな顔のままで青ざめる。

「まさか、マーセルさん、死——」

言いかけた彼を、シーラはキッと睨み付けて、

「黙りなさい」

「！」

鋭い言葉に、ティースは口を閉ざした。

「……」

シーラは、マーセルの体を覆っていたタオルをズラして上半身を露出させると、その胸の下に手を当てる。

「心配なら後で好きなだけするがいいわ。……ここに手を当てなさい。両手を重ねて……そう。腕を伸ばして、真っ直ぐに、小刻みに圧迫するの。私がいいと言ったら、一分に百回の速さで、十五回よ」
言うや否や、気道を確保した状態のまま彼女の鼻をつまみ、ゆっくりとかがみ込んで口付け、息を吹き込む。

「……」

「いいわ、ティース。……強めに、一、二、三、四——」

「こ、こうか……」

凜としたシーラの言葉に、ティースは動揺することも忘れた様子で、必死に心臓マッサージに取り組んでいった。

すぐさま額に汗が浮かぶ。

「ええ、そう。……お前に余裕があるなら、声をかけてあげなさい」

「声……？」

十五回終えて、シーラが再び呼吸を吹き込む。

「……」

その必死な姿を、ティースはどこか呆然とした表情で見つめていた。

——少しずつ、胸に満ちていた絶望感が薄れていく。

「マーセルさん」

そして、震える口からようやく声が出た。

「頑張って、マーセルさん——」

再び、雨が降り出していた。

重苦しい沈黙。本来ならばとくに消灯しているはずの宿。その一室には、今も明かりが灯ったままだった。

ユラユラと揺れる照明に、そこにいる二人の影が同じように揺れる。

「なんで……こんなことに」

ポツリとそう呟いたのは、ティースの方だった。

「マーセルさん、心臓が悪くて、いつ命を落とすかわからないって、そう言われてたらしいんだ。たぶん、あと一年前後だろうって」

「……」

その正面。

椅子に腰掛けたシーラは軽く下唇を噛み、目を細めて宙を見つめていた。

そこに浮かんでいたのは、紛れもない後悔の色。

「いつ発作が起きて、いつ死ぬかわからないって……それってさ。ものすごく怖いことだろ？ だけどさ。いくら病気で医者にそう言

われたからって、自分が生きること諦めちゃったら……そうしたら、人生って本当にそこで終わっちゃうと思うんだ」

「ええ……そうね」

「だから、少しでもその力になればと、そう思ってた。マーセルさんもそれを喜んでくれて、なのに――」

手を組み、項垂れた声が少し震えた。

「……」

シーラはその言葉に視線を泳がせ、暗闇に降りしきる雨を見つめながらゆっくりと目を閉じる。

（……馬鹿……）

彼がそういう男だということを、彼女は嫌というほどに知っていた。

自分の愚かさが身に染みる。

そして――自然と、言いにくい言葉がその口をついていた。

「ごめんなさい」

「え……？」

きいっ……と、彼女の腰掛ける椅子が微かに軋んだ。

視線は逸らしたまま。

「今日は、本当にどうかしてたわ。自分でも、よくわからない」

「……」

顔を上げ、ティースは少し驚きの視線で彼女を見つめた。

――が、その視線は、すぐに落ちる。

「いや、いいんだ。マーセルさんも、気にしてないって言ってたし……それに、お前ってやっぱりすごいよ。俺は……武器なんて手にして、そういう場所で過ごしてるつもりでも、やっぱり身近な人がああいふことになるって頭が真っ白になっちゃって……」

「だって私は、そのために勉強しているのよ」

そう答えるシーラの声は、少しだけ意志の強さを増す。

「放っておけば失ってしまう命を守るために、勉強しているのだから」

「……そっか」

ティースは少し笑みを浮かべて、

「きつと、マーセルさんも喜んでるよ。……もしかしたらさ。お前とマーセルさんって、案外仲良くなれたのかも——」

「……なにを言っているの？」

その言葉に目を細めたシーラは真っ直ぐにティースを見つめて、そして言った。

「なれた、かも？ ……違うわ。なれるかどうかは、これから判明するのよ」

ティースの顔に戸惑いが産まれる。

「で、でも、マーセルさんは、もう——」

「まだ、生きてるわ」

答えた声は、本来の彼女らしく凜としたものだった。

「……シーラ？」

ティースは目を見開いて彼女を見つめる。

——小康状態。

駆けつけた医者は、一両日中が峠だろうと言った。……それはどちらかといえば、その間に再び発作が起きて命を落とすだろうという、そういうニュアンスだった。誰もが——ティースでさえもそう受け取っていた。

だが——

「お前はもう、自分の部屋へ戻りなさい」

シーラは椅子を回して机に向かうと、足元にある鍵付きの箱に手を伸ばした。

「ゆっくり休むのよ。後でマーセルに元気な顔を見せられるように」その言葉に、ティースは呆気にとられた顔で、

「で、でもシーラ。医者だって、ああやって言って——」

きい……と、もう一度椅子が軋む。

水飴のような美しい髪が薄暗い照明の中で小さく踊った。

怖いほどに美しく整った輪郭。

そして――

「ティース」

「え……」

彼に向けられたのは、宝石のような瞳。そして、その奥に宿った炎のように眩い意志だった。

「同じことを何度も言わせないで。私は“そのために”ここにいるのよ」

そこに秘められていたのは、普段の彼女からはとても考えられないほどの情熱――いや。

「シーラ……」

ティースは本当は知っていた。

ここに来てようやく再確認するに至った。

冷たくクールな表情が、彼女の真実などではないこと。それはここ一、二年の間に身につけたばかりの、ただの仮面でしかないことを。

「……」

無言のままゆっくりと、ティースは立ち上がる。

（……シーラ）

根拠など、あるわけではない。

いくら優秀とはいえ、彼女は所詮学生の身。今日、マーセルを見た医者は、ネービス出身で経験も深いきちんとした人物だ。その人物が半分さじを投げたのだから、本来、それを彼女にどうこうできるはずもない。

だが――

「……頼む」

グッと目を閉じ、そして思わず力の入った拳を握りしめ、そしてティースは彼女の部屋を出た。

普通に考えれば芽生えるはずもない希望。

その微かな光を、確かに胸の中を感じながら。

——指輪を外し、それを特殊な鍵穴に差し込む。

カチャリと音がして、鍵が外れた。

「……」

取り出したのは一冊の本。異様なほど重厚感のある黒表紙。明らかに古い書物であるにも関わらず、汚れも劣化も見られなかった。タイトルは——ない。飾りもなにもない。本を開いたところで、全てのページは白紙だ。

——そのはずだった。
が、しかし。

「胸の病……もしか、したら——」

それを見つめるシーラの、まるで宝石のように輝く瞳には、その本のタイトルが確かに映っていたのだ。

黒表紙に刻まれた、古代文字。

“アズラエル”——と。

一方。

(……アルファさん、起きてるかな)

シーラの部屋を出たその足で、ティースは真っ直ぐにアルファの部屋へと向かっていた。

……さすがは“サン・サラス”とでも言うべきだろうか。先ほどの騒ぎでティースが温泉に駆けつけたとき、彼はすでに三匹の獣魔を退治し終えた後だった。怪我人が出なかったのはその尋常ならざる素早い行動故。もちろん発作を起こしたマーセルを獣魔の爪から守ったのも彼ということになる。

だからティースは任務の状況確認のついでに、その礼を言うつもりだったのだ。

……コン、コン。

部屋の前に立ち、控えめにノックする。

「……」

相変わらず返事はない。部屋の明かりもどうやら消えているようだ。

（寝てるかな……？）

だが、彼の場合、そうとも断言できない。一応、声をかけてみることにした。

「アルファさん？ 起きて——」

「起きてる」

すると案の定、短い返事が部屋の中から返ってくる。

そんな彼の変わった態度にも、ティースは少しだけ慣れてきていて、

「入りますよ」

ドアを開けると、廊下の明かりが真っ暗な部屋の中に射し込んでいく。

そんな中、アルファは相変わらずベッドの上に腰掛けて、窓際に飾られた花をじっと見つめていた。

その視線は動かないまま、

「なにか用か？」

「あ、いえ、少し今日のについてお話ししたいと思って」

後ろ手にドアを閉める。……別に閉める必要はなかったが、開けっ放しにしていると何か言われそうで、なんとなく閉じてしまった。部屋は再び真っ暗闇になる。

「明かり、点けないんですか？」

「……ああ」

問いかけに、アルファは思い出したように答えて、

「点けたことがない。必要だったことがない」

「そ、そうですか」

確かに。特に動き回るわけでもない彼にとって、明かりを点ける

ほどの理由は何もないのかもしれない。

ティースは手探りで部屋を歩き、少しずつ慣れてきた視界の中、
ようやく椅子を探り当てて、そこに腰を下ろす。

アルファの視線は少しも動かない。おそらくティースが黙っていれば、いつまでも無言が続くことだろう。

もちろんティースは自ら口を開いた。

「今日はホント早かったですね。おかげで、怪我人も出ずに済んだみたいです」

「……」

何も答えない。誉め言葉にはあまり興味なさそうだった。

（……そういえばアルファさん、宿の人にお礼を言われても素知らぬ顔だったなあ）

他人に感謝されることに、特別なことを感じないのだろう。見た目の印象通り、無感動というか、任務だけをこなすロボットのような性格らしかった。

だが、それでも彼の素早さが事態を収拾したのは確か。ティースは素直にその能力に感心しながら、

「俺なんか、ぜんぜん気付くの遅かったみたいで——」

「明かりを、点けた」

「え？」

「明かりを点けた。来るのがわかっていたから、待ち伏せしていた」
「??」

ティースにはその言葉が理解できなかった。

が、アルファはそれを気にした様子もなく、

「誘蛾灯」

「……誘蛾灯？」

微かに、部屋が明るくなる。

「え——」

光源は、アルファの左手のすぐそば。ベッドに立てかけてあった槍の刃先が僅かに光を放っていた。

ユラ、ユラ、ユラ、と。

「誘蛾灯……？」

「地の六十一族は爬虫類型の保護色を持つ獣魔。薄暗く視界の悪い洞窟内で戦おうとすれば、討ち漏らす可能性も高い。入り口付近で待ち伏せするにも、あの辺りは雨のせいで足場も視界も悪すぎる」

淡々と、アルファは言葉を続けていった。

「地の六十一族は雨を嫌う。知性は極めて低い。だから雨が降り止んだ後、残してきた“誘蛾灯”の明かりと人の気配に引かれて、この宿に姿を見せることはわかっていた」

ユラ、ユラ、ユラ――。

「……わかって、いた？」

呟いて、そしてティースの脳裏に今朝の出来事が蘇る。

――微かに光を発していた槍。帰り際、それがまるで目印を残すように、ところどころの石を打っていたこと。

それが、おそらくは彼の持つ“誘蛾灯”という名の槍に秘められた特殊能力なのだろう。つまり……知性の低い敵を、ある程度誘導することができる能力。

そして、そう理解した途端。

「……それって、まさか――」

ティースの心臓は一度大きく跳ね、それから泥水のようなものが胸に流れ込んできた。

「まさか、アルファさん……確実に敵を討つために、わざとヤツらをこの宿におびき寄せたってこと……？」

「そう」

「！」

アルファは呆気なく答えた。――呆気なく？ それはそうだろう。彼は至極合理的な考えに基づいて、任務を達成するために最善と思う行動を取った。その答えを躊躇う理由など、彼には微塵たりもない。

だが、

「そんな……」

ティースにとつては違っていた。

「だったら……だったら、マーセルさんはそのせいで——」
「？」

そのとき初めて、空气中に漂う微かな怒気を感じたのか、アルファはティースの方へと切れ長の美しい視線を向けた。

暗闇に浮かんだ微かに青色の瞳は、不思議そうな色を宿している。ティースは押さえきれずに怒りを吐き出した。

「……何を考えてるんだッ！ そんなことをして、宿の人たちに被害が及んだらどうするつもりなんだよッ！！」

「及ばない」

「！」

アルファは変わらぬ調子で淡々と続けた。

「ファナと約束をした。任務は、出来る限り周りに被害を及ぼさないように達成する、と。だから私は、被害が及ぶ前に敵を排除した」
「な、なにを言ってるんだ！」

そんな彼の言葉は、さらにティースの怒りに火を付けて、

「あんただって見てただろ！ マーセルさんは獣魔の襲撃に驚いて、それで心臓の発作を起こしたんだッ！！ ……そうでなくたって、何の抵抗手段も持たない人たちを囿に使うようなこと……そんなことが、許されるわけがないじゃないかッ！！」

「……」

アルファは動かない。

彼はどうかやら、ティースが何故怒っているのか理解していないらしく、しばらくは答えを探しているようだった。

が、やがて——

「ッー！！」

視線が窓際へと戻る。

……いつかのよう。答えることを諦めてしまったように。

「あんたは——ッー！！」

「……」

返事はない。

「ッ——」

ダンッ！！！！

床が大きな音を立てて軋む。怒りを込めた視線が、ベッド上のアルファを貫き、震える拳は今にも殴りかかりそうに見えた。

それでもアルファは動かない。まるで傀儡師を失った人形のように。

実際に、何も感じていないようだった。

翌日の朝になっても雨は降り続いていた。

宿の一室には、今も街の医師が待機している。彼が手にしているのは、ラダコーン草から作られた心臓の病に効くとされる塗り薬。

「気休め程度、ですが……」

部屋を訪れた宿の管理人、アーカーソン夫妻の問いかけに、医師はそう答えた。

一般的に普及しているその薬は、心臓の裏——つまり背中に塗布することによって、心臓の負担を和らげると言われている。が、塗り薬であるが故に劇的な効果はなく、そもそもこの大陸において、心臓の病といえばほとんどが不治の病。もともと僅かな延命の効果しか望めず、ここまで悪化した状態においては、確かに気休めにしかならなかった。

「ご家族には連絡しましたか？」

医師の問いに夫妻は頷いた。が、それに妻の方が付け加えて、「ただ、こちらに到着するのはおそらく一週間近く後になるのではないかと……」

そう言った。

どうやら妻の方は、マーセルの家の事情を少なからず本人から聞いているようだった。……それもそのはず。何しろ彼女はもう一年近くもこの宿に滞在しているのだ。

「それでは、おそらく間に合いませんな」

初老の医師はやや冷たいとも思える口調で言った。

もちろん彼にとってこの状況は特に真新しいものではない。ラダコーン草の群生地でもあるこの街には、心臓に病を抱えた者がよく療養にやってくる。当然、この街の医師である彼は、その死に目にあう機会が数え切れないほどあったのだ。

「次に発作が起きれば、おそらく助からないと思います」

「……そうですか」

夫妻は暗い表情で頷いた。

……故郷は遠く、もちろん見舞いに訪れる人間などいない。そんな彼女の境遇に、二人は少なからず同情していた。単なる客として以上には、彼女に対して親身になっていた。

だが、どうしようもない。

医者でもない彼らには――いや、医者でもどうしようもない病の前にしては、ただ、奇跡が起きることを祈るしかなかったのだ。

そして昼。

「ヤニス、カラッサ、アルセフィ、ラダコーン……」

雨が窓を流れていく。太陽の光は厚い雲に遮られ、昼間だというのに部屋の中は薄暗い。カタカタと窓が音を立て、時折稲光のようなものが周囲を照らしていた。

「それと……黄昏の一葉」

独り言を呟くシーラの手元には、机の上に開かれた重厚な黒表紙の本、そして古代語の辞典。

その足元には何種類もの薬草らしきものが並べられ、その周囲はまるで荷物をひっくり返したように足の踏み場もないほどに散らかっている。

細めた目の下は、彼女の疲労を表してか薄く黒ずんでいた。いつも綺麗に整えられているはずの髪は僅かに乱れている。

「黄昏の、葉……」

視線が宙を泳ぐ。

黒表紙の本に記された“その薬”の材料は十一種類。そのうち三種類は彼女の手持ちの中にあり、七種類は街の薬屋で手にすることができていた。

だが、最後のピース。

それがどうしても埋まらないのだ。

“黄昏の一葉”

その本に記された材料は、ほとんどがキーワードのようなもので表現されている。

十一種類のうちの十種類については、今までに解読した分や、単純な発想で突き止めることができていた。が、最後の一つ。“黄昏の一葉”で示される薬草は、これまでの解読の中でも登場したことはなく、そして彼女の記憶の中にあるどの薬草も連想させなかったのだ。

「黄昏……夕暮れ……西の方角……西国……？」

あまりに曖昧すぎたし、無理にひねりすぎると今度はあまりにかけ離れてしまう。

「とすれば……」

眩きに影が落ちた。

……この本を解読するにあたって、今回のような状況は珍しいことではない。いや、すんなり解読できることの方が珍しいぐらいだ。そして経験上、こういう場合の答えはたったの二つしかなかった。それがすでにこの地上に存在していない植物か。

あるいは、現在、薬草として用いられることが全く認知されてい

ない植物か。

「……」

シーラは無意識に下唇を噛んでいた。

前者であれば、絶望的。後者であれば……それでも途方もない。常識の枠を外してしまえば、植物の種類などそれこそ無限に近い。その中から“黄昏の葉”などというキーワードに収まる植物を探すことなど、何らかの偶然でも起こらない限り不可能に近かった。

「……！」

机に叩きつけそうになる拳をグッと堪える。

さらに唇を噛んだ。

（よく考えるのよ、シーラ……何か、思い当たることがあるのではないの……？）

目を閉じ、深呼吸をして思考を巡らせる。が、一旦熱を帯びた頭は同じ所を行ったり来たり、しまいには考えているのか考えていないのかすらわからなくなってしまう。

（どうしてこんな大事なときに……！）

苛々が止まらない。頭が熱くなる。さらに思考が鈍る。

悪循環だった。

（最初から、基本から順に……落ち着いて、焦らずに……よく考えて――）

コン、コン。

ノックの音に、思考が途切れる。

「……誰？」

「あ……」

シーラの声は苛立ちを隠し切れていなかった。ドアの向こうでもそれを察したのか、その声はいつも以上に遠慮がちで、

「入っても、いいか？」

「ティース？ ……今、忙しいのよ。邪魔しないで」

苛々をぶつけるつもりはなかった。が、声が思わず陰を帯びてしまったのは、彼女が比較的激しい気性の持ち主であり、また人の子

でもある以上、仕方のないことだろう。

だが、

「……シーラ」

ドアは開いた。どうやら余裕がなくて鍵を掛けるのも忘れていたようだ。

眉をひそめて振り返るシーラ。

「時間がなくて焦ってるのはわかるけど……少しだけ、休憩しないか？」

そう言いながら部屋に入ってきたティースは、手にティーカップを乗せたトレイを抱えていた。

「なにを言ってるの？」

シーラは眉間に皺を寄せ、すぐに語尾が荒くなる。

「人の命がかかってるのよ？ 休憩なんて――」

「わ、わかってるよ。でも……」

ティースはその剣幕に少したじろぎながらも静かに反論して、
「何度か様子を見に来てたんだけど……お前、何か行き詰まってるみたいじゃないか。そういうのって、あまり根を詰めすぎるとかえって悪いしさ。ほら、いったん気を落ち着けて。そうすると、案外簡単に答えが見つかったりするもんなんじゃないか？」

「……」

一瞬、何か反論しかけたシーラだったが、やがて考え直したのか少しだけ視線を泳がせると、小さく息を吐いて、

「……そうね」

結局素直に頷いて本を閉じた。

確かに思考は袋小路だった。時間をかければ抜け出せるという類のものでもない。それに、彼が様子を見に来たことにすら気付いていなかったのだとすれば、彼の言うように一旦休憩することも必要かもしれない、と、そう考えたのだ。

「……」

そんな彼女に、ティースもホッと安堵の息を吐いて空いていたソ

フアに腰掛ける。そしてテーブルの上にトレイを乗せると、

「紅茶、もらってきたんだ。あ、お菓子は無いんだけど」

「いいわ。ありがとう」

シーラもまた彼の向かいのソファへ移動し、少し乱れた髪を手で整えながら目の前に出されたティーカップを手取る。

口を付けると、暖かな液体が喉を通して体の中に染み込んだ。

……少し気分が落ち着く。

視線は窓の外へ。

外は相変わらず雨のままだった。

「……ごめんな。考え事の邪魔しちゃって」

「ん」

紅茶に口をつけたまま、シーラは曖昧な言葉を返した。

「マーセルさんのことはもちろん心配だよ……でも、ホント言うとお前のことも心配でさ。お前、昔っから結構無茶するタイプだったから……」

「……」

無言で窓の外から視線を戻すシーラ。

見つめられたティースは少し気を遣った様子で、

「あ、あ、いや、昔の話だよ。今は……今のお前はそうでもない……のかも」

誤魔化すように自分の分の紅茶に口をつけたが、すぐ思い直したように続けて、

「で、でもさ……あまり責任とか、そういうものを背負いすぎないでくれっていうか……マーセルさんのことはお前が悪いわけじゃないし……もちろん助かって欲しいけど、でもお前って昔から……あ、ああ、いや、今はそうじゃないのかも——」

「……思い出した」

「え？」

怪訝な様子で顔を上げるティース。

そんな彼に、シーラはほんの少しだけ笑みを漏らした。それから

視線を手の中のティーカップへと移す。

揺れる琥珀色の液体からは、まだ微かに湯気がたっていた。

「お前の名の由来よ。ティーサイト」

「……へ？ 俺の名前？」

全く話の流れを理解していないようだった。……いや、それも仕方あるまい。確かに彼女の言葉は、会話の流れを全くと言っていいほど無視していたのだから。

「ふう……」

落ち着いた吐息を漏らし、無言のまま紅茶を口にするシーラ。

しばらく続く沈黙の時間。

ただ、流れる空気はいつになく和やかだった。

……ややあって。

「助かったわ」

空になったティーカップが、ティースの目の前にあるトレイに戻された。

「本当はお前の言うとおりに行き詰ってた。でも、おかげでまた冷静に考え直せそうよ」

「……」

ティースはポカン、とした顔で、

「……え？」

「なに？」

「……あ、あ、いや！」

慌てて、すでに空になって置いたはずのティーカップにもう一度手を伸ばして口をつけ、中身もないのに飲み干す仕草をする。

どうやら素直に礼を言われたことが意外だったらしい。……いや、ここ最近の様子を考えればむしろ当然の反応か。

「えっと……はは、いや、役に立てたなら本当によかったよ、うん」
頭を掻きながら、手持ちぶさたな様子で下ろしかけたカップにもう一度口を付けるティース。

……が、こういう“いい雰囲気”のときにこそミスってしまうの

が、このティーサイトⅡアマルナという男であり。

そんな彼に対し、シーラはほんの少しだけ眉をひそめると、

「……そのカップ、私のよ」

「え？ あ……あぁっ!!」

ガシャン!!

「うわぁっ!!」

「ちよっ……ティース。落ち着きな——」

だが、言い終わる前に、ティースは口を押さえながらブンツと頭を下げて、

「す、すすすすまん! お、俺、今、なんかボーっとしてたみたいで!」

「……見ればわかるわよ」

慌てる彼とは対照的に、シーラの突っ込みは冷静だった。

落としたティーカップを拾い、その縁を確かめながら、

「割れてないみたいね。……なに? 今度はカップにでも歯をぶつけたの?」

「っ!」

その言葉で、ただでさえ赤くなっていたティースの顔がさらに真っ赤に染まった。

「そっ……そそそそんなことッ! べ、別にっ……!!」

どうやら昨日のことを思い出してしまったらしい。口を押さえたまま、呼吸するのも忘れていようだ。

「……」

それを見たシーラは少しだけ困ったように視線を泳がせると、やがて小さく息を吐き、口を押さえたまま固まる彼に言った。

「もう、忘れなさい。昨日はどうかしてた。でも私は気にしないのだから、お前が忘れてしまえば、全てなかったことと同じよ」

「う……あ、ああ……そ、そうは言うけどさ。でも……」

だが、もちろんティースにも言い分はある。

何しろ“それ”は彼にとって初めての体験であり、そして相手が相手でもあった。それをすぐに忘れろなんてのは、彼にしてみればあまりにも無茶な要求なのだ。

とはいえ、

「いいから。忘れなさい」

「……は、はい」

有無を言わせぬ調子でそう言われてしまえば、可能か不可能かは別として、そう答えるしかなかったのである。

「マーセルの様子は、まだ変わらない？」

ソファを立ち、再び机の方へと戻っていくシーラ。

ティースは二つのティーカップをトレイに乗せながら答えた。

「あ、ああ……今のところは。大丈夫ってことはないけど、大きな変化はないみたいだ。けど先生が言うには、いつ発作が起こってもおかしくないって……」

「そう」

その口調に、ほんの微かな焦りが混じった。だが、すぐにそれを振り払うように小さく首を振る。

「じゃあ、私はまた作業に戻るから。何か異常があったら知らせてちょうだい。それ以外は、もう来ないで」

「ああ、わかった」

言い方こそ冷たかったが、感謝の意がこもっているらしいことは鈍感なティースにもわかった。

「じゃあシーラ。最後に……ちょっとだけいいか？」

「？」

不思議そうに振り返ったシーラは、ティースが手にしているものを見てさらに怪訝な顔になる。

「なに？」

「何だと思う？」

彼にしては珍しくもったいぶった言い方だった。

「なについて……花のつぼみね」

見たままを答えるシーラ。

植木鉢に植えられたそれは、根本付近に赤味を帯びた葉をたくさんつけた一輪の花だった。

「なんの花か知ってるか？」

「……」

シーラは視線を泳がせた。

彼女は葉草についてはもちろん詳しいが、それ以外の植物については特別に詳しい方でもなかった。花を愛でる感情はあるが、殊更それに執着する方でもないのである。

考えた末、

「……わからないわね。せめて花が開いた状態でないと」

「そっか」

ティースはちよつとだけ嬉しそうに頷いて、得意げに答えた。

「これはレティオーレっていう花なんだ。ほんの一瞬しか開かないけどとても綺麗な花で、花が開く直前にはこの葉っぱが緑から赤っぽい色に――」

だが、全て言い終わる前に、

「レティオーレ？ ……レツィアーレじゃないの？」

「……え」

得意げだったティースの顔が、アツという間に赤くなった。

「そ、そう。レツィアーレだ……」

一気に勢いを失った彼の姿に、シーラは苦笑して、

「誰に教わったのか知らないけど、中途半端な知識はひけらかさない方がいいわね」

「いや……実はちよつと前、たまたまセシルに教わったばかりでさ」
ティースは赤い顔のまま素直に詳細を暴露して、照れ隠しに頭を掻いて笑う。

「で、ほら、ちょうど葉っぱが赤くなってるだろ？ これが花が開くサインらしくて……あと二時間ぐらいで開くはずなんだ。セシルが言うには、戦争が中断したって伝説があるぐらい綺麗な花らしい

し、気分を落ち着けるには丁度いいんじゃないかって」

「そうね。じゃあ……そこに置いといて」

頷いて、シーラは窓の縁を指さした。

チラッと時計を見る。

（二時間……か。それまでにはどうにか解決の糸口ぐらい見つけたいわね……）

「ここでいいか？」

「いいわ」

そちらを見ずに答えて、シーラは机に向かう。もう無駄な時間を使うつもりはないようだった。

ティースも、あとは無言で部屋を出ていくだけ。

——いや。

「……ティース？」

「え？」

出ていこうとしたティースだったが、部屋の入り口まで行ったところで、呼び止める声に再び振り返っていた。

呼び止めたのは、もちろんシーラだ。

が、

「どうした？」

ティースが振り返った視線の先で、彼女は机に向かったまま宙を見つめていた。

まるで惚けたように。

ゆっくりと……驚いた表情で彼を振り返る。

そして目を見開いたまま、言った。

「お前……さっき、なんと言った？」

「え？」

何のことかわからずに戸惑うティース。だが、そんなことを気にした様子もなく、シーラはハッとした表情で窓際に視線を移した。

その視線の先にあったのは、ティースが先ほど設置したレツィアーレの花。

「二時間ぐらい、と言った？ 二時間？ ……そう……レツィアーレは確か、夕方の僅かな時間にだけ花を咲かせる——」

「シーラ？」

「夕方に咲く花……夕方の花——」

その眩きは急激に熱を帯びた。

そして、

「——黄昏の花ッ！？」

ガタンッ！！

椅子が派手な音を立てて倒れ、そのままシーラは窓際に駆け寄っていった。

「お、おい、シーラ、何を——」

「ティースッ！！」

「え！？」

レツィアーレの植木鉢を手にしたシーラは、鬼気迫る表情でティースを振り返ると、

「お前は今すぐマーセルのところへ！ あと三時間……いえ、二時間でもいいわ！ なんと少しでも、彼女の命を保たせなさいッ！！」

「え、ええっ！？ も、保たせるったって、どうやって……！！」

「なんでもいい！ ……とっとと行きなさいッ！！」

「は、はいッ！！！！」

反射的に返事をして、ティースは弾かれたように部屋を飛び出していった。

それを見送ったシーラは、レツィアーレの花を抱えたままドアを閉め、鍵をかけるとすぐに机に向かった。

植木鉢を机の上に置くと、黒い背表紙の本を開く。

「黄昏の花……黄昏の葉……」

そして根本に蓄えられたたくさんのレツィアーレの葉を一枚ちぎると、それを窓から射し込む薄暗い光にかざした。

「全然聞いたことがないし、違うかもしれない……でも、やってみる価値はあるわ……」

その6『仮面をかぶった王女様』

『――でも仕様がないわ。それがあの子の性格だもの』

部屋は静かだった。物音がしないという以前に、そこを包み込む重苦しい雰囲気静寂さを引き立たせている。

(マーセルさん……)

昨日の発作のショックで昏睡状態に陥ったマーセルは、未だ目覚めようとしなかった。いや、医者診断によれば、このまま目覚めない可能性の方が高いという。

いつ“そのとき”が訪れるかわからない。

医者は昨日から何度か席を外しただけで、ほぼ付きつきりだ。今は宿の管理人であるアーカーソン夫妻もいる。

そしてティースはその部屋の隅で壁に背を預け、心臓を鷲掴みにされるような緊張感の中、ただ祈るだけだった。

(……シーラ)

外はすでに暗くなっており、相変わらずの雨が降り続けている。時計に目を向けると、どうやら彼女の部屋を出てから二時間以上は経過しているようだ。

(一体、どうするつもりなんだ)

視線の先、ベッドの横に待機する医者の表情は変わらない。以前深刻なまま。本来忙しいはずのアーカーソン夫妻がここに付きつきりなのも、おそらくは両親の代わりに彼女の最後を看取るつもりでいるのだろう。

部屋にはすでに紛う事なき“死の匂い”が漂っている。

それを逆転させることなどは、普通に考えれば絶対に不可能。不可能……のはずだ。

「……」

目を閉じて、大きく、ゆっくりと、息を吐く。

しんしんと降り続く雨の音。自分の心臓の鼓動さえ聞こえてきそうなほどの、静けさ。

そんな空気に誘われて、ふとした拍子に近付いてくる情景。

(……カザロス、か——)

彼の故郷——カザロスは非常に雨の多い土地だった。だからこういう薄暗い雨の日には、目を閉じるだけでその情景が目の裏に浮かんでしまう。

『——あの子はそういう性格なの。一途だから無茶でもなんでもしてしまおうし、臆病だから一人で抱え込んでしまおう。いっそ全てを晒して後悔してしまおう方が楽なこともあるのにね』

「……」

ほんの三年にも満たないほどの過去。

それほど遠くない。

なのに、いつからか遠い昔だと思っていた情景——

『だけど、それがあの子だから。止めても言い聞かせても無駄。もし、あなたがそれを助けてあげたいと思うのなら——』

……ドスン。

「？」

何か重いものがぶつかるような微かな音に、ティースはハッと我に返った。

「なんだ？」

音がしたのは部屋の外だ。それが彼の空耳ではない証拠に、医師とアーカーソン夫妻も怪訝そうな顔でドアの方に目を向けていた。

「……」

結局、ドアに一番近い位置にいたティースがそれを確認することになる。

が、彼が手を伸ばすより一瞬早く、ドアは向こうから開き始めた。ノックもない来訪者に対し、初老の医師の制止の声が飛ぶ。

「こら、この部屋は勝手に――」

「シーラ？ ……おい、シーラ？」

医師の声は途中で遮られた。遮ったのは他ならぬティースの怪訝そうな声。

彼がそんな声をあげたのは、そこに明らかな異常を認めたからだ。

「お、お前――」

慌てて彼女に駆け寄るティース。

……異常はそこにいる誰の目にも明らかだった。

「っ……あまり大声は出さないで……病人がいるのだから……」

開いたドアに頼るように左手をつき、ゆっくりと部屋の中に入ってきたシーラは、肩で小さく細かい息をしながらチラッとティースを見た。

「おまつ……ど、どうしたんだよ、その顔――！」

確かに、彼女はどちらかといえば肌の白い方である。が、そのときの彼女はそれどころの話ではなく、まるで血の気がない、死人のように真っ青な顔だったのだ。

二時間前に会ったときも確かに疲れた様子はあった。が、それを考慮に入れたとしても、明らかに異常。

だが、

「どきなさい……ティース……」

シーラはそれを説明することもなく、フラフラと部屋の中に入ってきた。

「どうした？」

一度は彼女を咎めようとした医師も、その異常な様子に席を立てて、

「そんなフラフラの体で。キミ、彼女を支えてあげな――」

「どきなさい……！」

「！」

射竦めるようなその視線に、ティースは思わず伸ばしかけた手を引っ込めてしまった。

それほどに強い視線だった。

そのままシーラは彼を押し回すのけるようにして歩を進めていく。

フラ、フラと。

だが、その視線がベッドの上へと向けられると、口元に微かな笑みが見え隠れした。

「……よかった。まだ、無事なのね……」

「おい、キミ……」

「どいて……」

医師。そしてアーカーソン夫妻。

誰もが驚いた様子で彼女を見ていたが、やがて、
「……待ちなさい。一体、なにをするつもりだ？」

医師が、彼女の右手にあるものを認識してそう問いかけた。

咎めるような口調だった。

「なにを……？」

それもそのはず。

彼女の右手にあったのは薬包紙だ。中に何か入っていることも容易に窺える。

「薬よ……」

シーラは素直に――いや、取り繕う余裕などなかったのだろう。そのまま答えて、

「マーセルに吞ませる……心臓の……っう!!」

言いかけた彼女の体が、突然膝から崩れ落ちた。

「シーラッ！」

慌てて駆け寄っていくティースだったが、シーラはすぐに立ち上がって、

「大丈夫。目眩がしただけ……」

医師が困惑の顔で言った。

「……キミ。何だかわからないが、彼女を隣の部屋へ連れて行って

寝かせてあげなさい」

「え……あ」

「ダメよ……」

ティースの肩に手をかけ、深い息を吐きながらシーラはゆっくりと立ち上がった。

「……この薬を、彼女に――」

「連れていきなさい」

だが、医師はそう言って彼女の前に立ち塞がると、

「キミが何をしたいのかはわからないが、無理はいけない。後で私が診てあげるから、今は大人しく部屋で休んでいなさい」

言葉は柔らかかったが、有無を言わせぬ口調だった。

「っ……」

その言葉はもつともだ。医師として、彼女が手にしている得体の知れない薬の使用など許すはずもない。

だが、

「いいから、どくのよ……!」

シーラは引き下がらなかった。

当たり前だ。彼女は本気でマールセルを救おうとしていたのだ。引き下がるはずがない。

「……」

医師はため息とともに、ティースに視線を向けた。

「キミの知り合いだろうか？ そんな状態で無理をしては危ない。早く連れて行ってあげなさい」

「――」

ティースは躊躇った。

正論である医師の言葉。常識人として従うべきは、もちろんそちらだろう。その言葉の正当性はティースにだって理解できたし、そうすることが当然であるとも思える。

その様子を見守るアーカーソン夫妻にしても、ティースに向ける視線は同じだ。妻の方はシーラの必死な様子に戸惑いを見せていた

が、夫の方は非常識な闖入者に対して明らかに不快な表情だ。もしティースがこれ以上躊躇えば、おそらく彼が代わりに彼女を部屋から追い出そうとするだろう。

だが――

「ティース……！」

そんな周りの雰囲気気付いたのか。

シーラは唯一、自分の味方になりうる青年に対して言葉を向けた。
「……」

さらに躊躇うティース。……そんな彼を非難するのは酷だろう。医師という存在は、病人に対して絶対的なものであり、たとえそれが間違いであったとしても、知識を持たない者には反論するすべがない。そしてこの場合、ティースにはもちろん反論するほどの知識などはなく、知識を持つシーラにしても学生の身。

長年医師を勤めてきた男と、未だ学生である少女。そこに存在する常識の壁は、当然の如く厚い。厚すぎる。

信頼していないから躊躇ったのではなく。

信頼しているからこそ躊躇ったのだ。

わけもわからず盲信しているのではなく、少女の本質を理解し、その上で信頼しているからこそ、そうして分厚い常識の壁に対抗してみせた。

そうしてその結果――

「……みなさん」

左腕で彼女の体を支え。

顔を上げると同時に、視線は医師、そしてアーカーソン夫妻を真っ直ぐに見つめる。

「彼女の……シーラの言うとおりにしてあげてくれませんか」

その瞬間、彼の視線の先にいる三人の表情を過ぎったのは、まったく同質のものだ。

「……」

“不可解”

それはまるで常識外の存在に向ける視線。

どれだけ彼女が必死でも。いくら彼が真摯に訴えたとしても。受け入れがたい。

そこに存在する常識の壁は、あまりにも厚すぎたのだ。

——そして、異変は突如として訪れる。

「っ………！　っっ………！」

「！？」

それまでは比較的静かに眠っていたマーセルが苦しみ始めたのだ。

「マーセルさんっ！」

ティースたちの前に立ち塞がっていた医師が、表情を引き締めてベッドに向かう。アーカーソン夫妻もまた、身を乗り出してベッドに視線を向けた。

「っ………はっ………はあっ………！！！」

「発作か………」

医師の言葉は冷静だった。手元にあった塗り薬を手にする。気休めだった。元々劇的な効果が望めるものではない。

おそらく最期の時。

ベッド上のマーセルの様子に、誰もがそれを予感していた。

——いや。

ただ一人を除いて。

「………ティースッ！！！」

ふらつく体を押して、そして全霊を込めてシーラは叫ぶ。

「どんな手を使ってもいい………！　彼らを………彼らを全員、ここから追い出しなさいッ！！！」

「え！？」

「聞こえないの………ッ！？　ティース………急いで………ッ！！！」

彼女の顔は真っ青なまま。………いや、先ほどよりも悪くなっているかもしれない。

「シーラ……」

「キミ、こんなときに悪ふざけは——」

ついに堪忍袋の緒が切れたか、アーカーソン氏がシーラに向かって手を伸ばす。

「——」

おそらく彼女の体はそれに抵抗する力を持たないだろう。

「ティース……ッ！」

限界。

それはもう誰の目にも明らかだ。

だが——

「ティースッ！ 私は……私は“そのために”ここにいるのよッ！

！」

「！」

ハッキリとした声、そして瞳の炎は、未だ確実なる意志をそこに宿していた。

眩いばかりの、強靱な意志。

「……！！」

チカチカと。

目の奥がフラッシュした。

『——支えてあげなさい。あの子の無茶を、無茶じゃないように、一番近くで支えてあげればいいのよ』

（……ああ——）

その勘違いは、単なる錯覚だったのか。

あるいは、彼女自身がそうするように仕向けたのか。

それは、わからない。

だが、それが単なる“勘違い”であったことは、今の彼女を見れば一目瞭然だった。

（変わってなんかない。あの頃と同じ……同じ、だ——）

気付いたのは、たったそれだけのこと。

言動、態度がどうであれ。その“根っこ”の部分は昔と何ら変わりないという真実。

そして、

「……」

それだけで充分だった。彼が行動するのに、それ以上の理由はいらなかった。

もはや躊躇いなど微塵もなく。剣が鞘を擦る。

昨日の魔の襲撃以来、念のためずっと身につけていた剣——神剣“細波”。

それは“その頃”に彼が誓いを立てたものだった。

『お守りなんて、私には必要ないもの』

暖かく柔らかく細めたその目には“疑う”などという行為そのものが馬鹿らしく思えるほどの、明確な信頼の色が宿っていて——

『だって、お前が私を護るのだから。そうでしょう——？』

「動かないでください」

その一瞬、その場にいる全ての人物の動きが停止した。

そして誰もが、その彼の行動に目を見張る。

医師、アーカーソン夫妻。……そしてシーラでさえも。

「動かないで」

もう一度、ティースはそう言った。……彼が抜き放った細波の切っ先は、何もない宙を指していた。丁度、医師とアーカーソン夫妻の間を裂くように。

「この剣は、善意の人に向けるものじゃない。だから、あなた方に剣を向けることはありません。……でも、動かないで。彼女の邪魔はしないでください」

「……キミは……なにを——」

気でも狂ったのか、と言わんばかりの表情で、医師はティースを

見た。

もちろん、ティースがネービスから来たデビルバスターチームの一員であることは知っているだろう。だからこそ、その行動はあまりにも理解しがたいものだったのだ。

「彼女の言うとおりにしてください。……お願いします」

だが、剣をピクリとも動かさずに、ティースは小さく頭を下げた。
「何があつたとしても、責任は俺が取ります。だから――」

「……なにを馬鹿な！」

それまで穏和だった医師が、その言葉に激昂して一喝する。

「人の命がかかっているときに、責任も何もあるものか！ ふざけるのも大概にするんだッ！！」

その言葉には、長年、患者の生と死に関わってきた者ならではの、真なる想いが込められていた。

「……だからこそ」

だが、ティースは決して怯まずに言い返す。

「助きたいんです。俺はマーセルさんを助きたい。その希望がここにある。俺はそう信じているんです」

グッと足指に力が入る。

その視線をシーラの方に向けた。

「さあ……シーラ、急いで。その薬をマーセルさんに」

「ティース……」

さすがの彼女も、まさかティースがそこまですると思わなかったのだろう。少しの間は驚きに固まっていた……が、やがてグッと唇を結び、薬を手にもつてマーセルのもとへ歩いていく。

「動かないで」

ティースがその場の三人を牽制する。

「……」

さすがに刃物を出されては、誰も動けなかった。

ただ、医師は顔を歪め、

「キミたちは……自分たちが何をしているのか、わかっているのか」

彼らを睨み付けるようにして言った。

「これは犯罪だぞ。彼女が命を落とせば、殺人の罪を犯したも同じことだ」

「……」

その言葉は重い。たとえマーセルが助かったとしても、あるいは罪に問われることかもしれない。

それほど、今の彼らの行動は非常識だった。

だが――

「構いません」

「！」

驚愕の表情を浮かべる医師に対し、ティースは答えた。

「俺みたいな馬鹿にだって、何もしなければマーセルさんが死んでしまうことぐらいわかります。だったら俺は――いえ、俺たちは小さな可能性にでも賭けたいんです。……助かると、俺はそう信じています」

「馬鹿な……」

医師は絶句した。が、これ以上は何を言っても無駄と感じたのだろう。その後は身動き一つせず、シーラの動きを目で追うだけだった。

「……マーセル。聞いたとおりよ」

ベッドまで辿り着いたシーラは、苦しむマーセルの体を軽く押さえ、そして薬包紙を開いた。

中に入っていたのは、ややムラサキがかった荒い粉末状の薬。

「必ず、助かるわ。……生きなさい。でないと、承知しないから――」

それから一夜、明けて。

ティースは薄暗い部屋の中にいた。

重苦しい沈黙。肌に触れる空気はどこか湿っぽく、雰囲気はまるで、あのゲノールトにあった地下牢のよう。

そして、

「……資格を持たないものの医療行為を黙認、補助したばかりか一般人を剣で威嚇」

沈黙を切り裂くように響いたのは、冷たい男の声。

「さらに、因果関係はハッキリしないものの、その行為の直後に病人が死亡、か」

「ま、待ってくれ！」

思わず反論したティースの両手は後ろ手に括られていた。

「まだ死んでなんかいない！ 小康状態だって医者が――」

「いいえ」

今度は女の声だった。

「さっき死亡が確認されたそうよ。ティースくん、残念だけど」

「そ、そんな……」

すぐ近くから、また別の声が聞こえる。

「それは仕方ないさ、ティースくん。覚悟の上だったんだろう？」

ま、医者としての立場から言わせてもらえば、今回のことはなかなか興味深い出来事だったけどね」

「……」

ティースはガックリと項垂れた。が、すぐにハツとした様子で顔を上げると、

「そ、そうだ！ シーラは？ あいつはどこ行ったんだ！？」

「ああ、彼女なら退学になったよ」

「た、退学！？ そんな！」

「ま、心配するな。あれだけの美人が、どうでもいいような一般人と付き合ってるってのは、重大な社会の損失だ。俺がその補填をしてやるとしよう」

「ええ！？　ま、待ってくれ！　あいつにはれっきとした恋人が――」

「なんだい、ティースくん。もしかして一度キスしたぐらいで恋人気取りかい？」

「ぼっ……ばばばば馬鹿な！　お、俺はそんな大それたこと――」

「大丈夫よ、ティースくん。シーラちゃんがいなくても、あたしが代わりに可愛がって、あ・げ・る」

「えっ！？」

暗闇から手が伸びる。咄嗟に身をかわそうとしたティースだが、何故か体が動かない。

「うわわわわっ！　た、助けてくれッ！　……お助けを！　か、神様ああっ！」

そして手の平が頬に触れた瞬間、彼の意識は急速に暗闇の中へと落ちていくのだった。

……
……
……

カーテンの隙間から射し込む強烈な日差しは、昨日までの雨が嘘のような快晴であることを示している。

「は、離してくれえ……お、俺は女の人ダメなんだあ……」

「……」

ベッドの上で苦悶の表情を浮かべるティース。

彼の“体質”を知らない人間が聞けば何やら勘違いしそうな寝言であったが、そんな彼のそばにいたのは幸いにして事情を知る者だ。

「お、お願いだから手を離してくれえ……気絶……気絶する……か、神様、お助けをお……」

さらに寝言を呟きながら身をよじると、ちょうど顔面が日差しの直撃を受ける角度になった。

「ん、んん……」

その眩しさに、ようやく彼の意識が覚醒を始める。
同時に、ギシッとベッドの軋む音。

「……あれ……?」

混濁した意識。

瞼の裏に入り込む強烈な光の刺激。

鼻孔をくすぐる柔らかな香り。

「!」

ティースは勢いよく身を起こし、自分の両手首を確認した。ぶん
ぶんと手を振り、窓の外に視線を向けるとホッと息を吐いて、

「ゆ、夢か……ふうう……ひどい夢だったなあ」

「随分とうなされてたわね。どんな夢だったの?」

「え? ああ、聞いてよ」

差し出された寝覚めのミルクティーを受け取りながら、ティース
は答えた。

「我ながらホントひどい夢なんだ。たぶんレイさんとマイルズさん
とアクアさん……だと思っただけど、三人が俺を囲んで。今回の
ことで俺を責めまくるんだよ」

「今回のこと? マーセルのこと?」

「ああ。夢の中じゃ助からなかったことになってさ。それで必死
に神様に助けをもとめ……って、うわぁッ!!」

そこでようやく、その不自然な状況に気付く。

「シ……シーラお嬢様!? ど、どうしてここにいつ!?」

シーラは怪訝そうに目を細めて、

「お嬢様? ……なに? まだ夢の中?」

「え……あ」

ティースはハッと気付いた様子で周囲をキョロキョロと見回すと、
やがて誤魔化すように頭を掻いた。

「す、すまん。その……か、神様とごっちゃになったみたいだ」

「それは理解不能ね」

苦笑するシーラ。

「……あ」

てつきり怒られるか馬鹿にされんと思っていたティースは、驚きながら彼女を見つめた。

斜め上から射し込む朝の光に照らされた彼女は、お洒落な黒いベルベットのトップにロングスカート姿。手にしたティーカップに静かに口を付けるその様は、まるで現実感のない、絵画から飛び出した美しい令嬢のようだった。

「と、ところで……」

思わず視線が釘付けになりそうになるのを、どうにか理性でひっぺ返して、

「こ、こんな朝っぱらから一体どうしたんだ？」

シーラは答えた。

「ええ。お前に、礼をしようと思ったのよ」

「え……礼？」

「ええ」

そう言って、ゆっくりとティーカップを下ろして小さな皿の上に乗せると、

「……昨日のこと。元はと言えば全てお前のおかげ——」

「あああ、昨日といえッ!!」

「？」

突然ティースは何事か思い出した様子で身を乗り出すと、

「お、お前、体はもう大丈夫なのか!? ……だ、大体なあ! 作

ったこともない薬をいきなり自分で飲んでみるだなんて、いくらなんでも無茶すぎるだろおッ!」

「え……ええ」

確かに彼の言うとおり、昨日、彼女は自分が作った心臓の薬を試用したために血圧が急低下してしまったらしく、あの出来事の後ですぐに気を失ってしまったのである。

幸い、二時間ほど後には意識も回復し、見る限りは後遺症などの

問題もないようだったが、それでも彼が無茶だと叫ぶ気持ちはもつともであった。

だが、それに対するシーラの態度は素っ気ないもので、

「結果的に無事だったのだからいいでしょう。そんなことより――」

「そ、そんなことおッ!？」

その言葉にティースは怒る――かと思いきや、情けないことに泣きそうな顔になって、

「お、お前なあ！ お、俺がどれだけ心配したことか！ あんな真っ青な顔で倒れちゃうもんだから、も、もしかしたらお前、そのまま死んじゃうじゃないかって……」

「……」

それに対してシーラの口から出かった言葉は、思い直したようにため息に変わる。

こうして興奮した彼には、ちよつとやそつとの言葉などまるで無駄だということを、彼女はよく知っているのだ。

だから。

「そ、そりゃお前が一生懸命マーセルさんを助けようとしたってのはわかるけど、で、でも少しは自分の体のことも考え――」

そんなティースの言葉を遮ったのは、ちよつとやそつとの“言葉”などではなく。

明確なる“行動”

「――へ？」

それは二度目の邂逅だった。

ふわりと漂った二日前と同じ香り。

宙に小さく躍る水飴の髪。

左頬に添えられた、白く細い指。

そして徐々に頭の奥を焼いていく、甘美な熱。

ただ、二日前と僅かに違っていたのは――

「私を護って戦ったナイトに、ほんのささやかなお礼、よ」

「……」

右頬に手を当て、ティースはしばらく惚けていた。

その手の下に残っている暖かく柔らかい感触は、二日前に感じたのと同じもの。そこに残った温もりは、間違いなく目の前にいる少女のものだ。

「え……あ——」

「特別な意味も卑劣な意図もないから安心なさい。言ったように、単なる礼。それとも……頬でも恋人同士じゃなければダメかしら？」

その言葉に、ティースの顔は急速に沸騰して、

「い、いや、ダメも何も……いや、だって、その、命がけとかじゃないし……あ、いや、俺が言いたいのはそんなことじゃなくて……え、ええっと、その——」

どうやら頭の歯車が上手く回ってないらしい。

その後も何やら意味のわからないことを言いかけては思い直して止めるという作業を何度か繰り返したが、やがて最後に口から出てきたのは——

「……も、もったいない」

シーラは一瞬だけきょとんとしたが、やがてその言葉の意味に気付くと、吹き出すように笑った。

……まあ確かに。女性から祝福のキスを受けて“もったいない”などと言い出す男は、大陸広しといえどもそうそういるものではないだろう。

ティースはさらに顔を真っ赤にする。

「じ、実際にそう思ったんだから仕方な——そ、そんなに笑わなくてもいいじゃないか」

そんな抗議の声にも、シーラは可笑しそうにクスクスと笑いながら、ゆっくりとテーブルに肘をついた。

「そんなにもったいないと思うのなら……」

「え？」

そんな彼女から向けられた悪戯っぽい視線はいつもの凜としたものではなく、そこに不思議な暖かさを滲ませていて、

「いつそ、私を恋人にしてみたらどう？　そうすれば、もったいないなどと感じる暇もなくなるのではなくて？」

「ぼっ……！」

ティースの心臓は一瞬だけ跳ね上がった。

「じよ、冗談はやめてくれよ。そんなことあるわけないじゃないか」「でしようね」

ゆっくりと顔を横に向けると先ほどまでの視線は影を潜め、代わりに作られた微笑みは気高き月の女神。地上にいる人間がいくら手を伸ばそうとも届きはしない……思わずそんな気にさせられてしまうほどに完璧な、いつもの彼女だった。

「知ってたわ、ずっと前から。そんなお前だからこそ、恋人でもないのに二年間も一緒に暮らしてこられたのだから」

「……」

その言葉に、ティースは少し驚いた顔をした後、

（……やっぱ信頼されてたんだ）

ホッと胸をなで下ろした。

おそらくそれは事実。そしてその信頼はマイルズが言ったように今もそれほど色褪せていないのだろう。

そのことが急に誇らしく思えて、ティースはコホンと咳払いすると、

「そんなこと当たり前だろ。俺はお前の保護者なんだから、お前の望みは出来るだけ叶えてやりたいと思うし、お前が望まないことはしようと思わないよ」

「……感謝してるわ」

「え？」

「全て私のワガママだもの。私の勝手な事情でお前を傷付け、利用しているだけ。だから――」

少し、視線が流れた。

「嫌になったら、やめればいいだけのことよ」

「あ、お、おい」

彼女が立ち上がるのに合わせて、やはり心地よい香りが漂った。

「私はお前が思っているよりずっと自分勝手に悪い人間だわ。その証拠に、ほら。お前がこうしていくら頑張っても、見返りなんてほとんどないに等しいじゃない」

ティースはきよとした顔をして、

「見返りってなんだ？ ……っていうか、それとお前が自分勝手だってこととどう関係あるんだ？」

「……」

振り返って眉をひそめるシーラ。これにはさすがに呆れたようだ。ただ実際のところ、このティースという男は自分のやっていることが“犠牲”だとはこれっぽっちも感じていないのである。そこにはもちろん彼なりの考え方があって、彼なりの理由があるのだが、まあそれを知らない人間には理解できなくとも仕方あるまい。

そしてティースは屈託のない笑顔を浮かべると、

「それに俺、お前の我が儘だったら全然嫌じゃない……っていうか頼られるのは逆に嬉しいから、どんどん我が儘を言って欲しいって気もするよ」

「……そんなだから」

深いため息。

シーラは仕方なさそうに首を横に振って、

「馬鹿は死ななければ治らないと言うけど、どうやら本当のようね」

「ば、馬鹿！？ い、いやそりゃ、確かに頭は良くないけど、そんなストレートな……」

「じゃあ強調でもしてみろ？ 史上最大、救いようがない、唯一無

二の――」

小さく息を吸って、

「馬鹿」

「……」

これにはティースも返す言葉が出ず、ため息とともに肩を落とした。

（ああ……ちょっといい雰囲気になったと思ったのに、結局これか……）

いや、しかしそれは鈍感な彼が気付いていなかっただけのことだろう。今回の出来事は彼らの関係に確実な変化をもたらしており、それは第三者が見ても思わず首を傾げてしまうほどに顕著だ。

彼がその変化に気付くのも、そう遠い未来のことではないだろう。ただ、それが彼にとって手放して喜べるものかどうかといえ、断言することに多少の躊躇いを覚えないでもないが――

時と場所に移り、その日の夕方、ミューティレイクの屋敷には一台の馬車が到着していた。

「……」

音もなく馬車から降り立ったのは、長い銀髪と蒼い瞳の美青年。細身の体に季節外れな厚着、ハートマークのついたセーターは本来笑いを誘う格好であるが、実際のところそんな彼を笑う者はいないと、いうより――近付こうとする者がいないのだ。

このアルファという人物は、この変わり種揃いのミューティレイク家にあってもさらに飛び抜けて異質だった。そんな彼に敢えて近付こうとする者はほんの一握り。

さて。

そんな“一握り”の中に、ミリセントローヴァーズという使用人がいる。

「お帰りなさいませ、アルファ様」

馬車を降りたところに直立不動で待機していたその女性は、前髪をやや横に流したショートカットで眼鏡を掛けており、見た目はどこことなく生真面目な印象だ。

二十二歳の若さで“侍女長”の肩書きを持つ彼女は、当主であるファナールミューティレイクの信頼厚き側近であり、執事であるアオイやリディアとは違った面でサポートをする重要人物だった。

そして彼女は、滅多に別館に姿を見せないアルファへの連絡役としての任務も持っていたのである。

「ご苦労様でした」

「別に苦労はしなかった」

玄関に出迎えたミリセントに対し、素っ気なく答えるアルファ。まるで会話をする事自体に興味が無いかのよう。

「そうでしたか」

だが、ミリセントもそんな彼の反応に慣れている。事務的にそう答え、用件だけを伝えた。

「別館の方でセシリア様がお待ちです」

「セシリアが？　そうか」

特に何の感慨もなさそうに頷いて、アルファは別館の方へと歩みを進めていった。

足音もなく、その背中が遠ざかっていく。

「……ふう」

見送ったミリセントの口から小さなため息がこぼれた。

と、同時に、

「お、聞きました。今のため息、しかと聞き届けましたよ、ミリイさん」

「……」

無言で振り返ったミリセントの視界に現れたのは、やや調子の軽そうな十代後半の青年だ。

着ているものはやはりミューティレイクの用人服だったが、白を基調にしたやや特殊なデザインは、彼が厨房で働くコックであることを示している。

「さすがのミリイさんも、あの人は苦手ですか」

青年は笑顔のままミリセントに近付いてくると、アルファが去っ

た別館の方角を見つめて、

「しっかし相変わらず気難しい人みたいですわね。……妹の方はいつも俺のお菓子をホント美味そうに食べてくれて可愛いんだけどなあ」
ミリセントは答えた。

「別に気難しくても問題ありません。口ばかり達者なお調子者よりは、よほどお嬢様のお役に立ちますから」

「はは、ま、そりゃそうですね」

「……」

「え、なんですか、その目……って、え！？　口ばかり達者なお調子者って、もしかして俺のこと！？」

ミリセントはそんな彼を横目で見て、

「他にいないでしょ。……せっかくの機会ですから忠告しておきますが、あまり調子に乗って遊んでばかりいるとそのうちクビになりますよ、シュー＝タルト」

「またまたあ。ミリイさんも冗談が上手いんだから」

青年――シュー＝タルトというお菓子みたいな名前の菓子職人は、手をヒラヒラさせながら笑う。

「俺がいなくなった屋敷を想像してみてください。あまりの淋しさにみんな泣き出すに決まっていますから」

ミリセントは腕を組み、真面目な顔のままで答えた。

「一太刀で決めてあげるから安心して」

「っーか……“クビになる”って、そっちの意味かよッ！！」

「ま、冗談はともかく」

「ブラックすぎますよ、ミリイさん……」

ミリセントは腕を組んだまま、アルファが消えていった屋敷の入り口へともう一度視線を移動させて、

「私は構わないと思うのだけど、中にはいるのよね。彼をどうにか周りに馴染ませたいと思う方々が」

「俺もどうにかミリイさんともう少し馴染みたいなあ、なんて」

「……」

「うわ、完全シカトかよッ！」

——と。

そんな会話が後方で繰り広げられているとも知らずに（知ったところでどうということもないが）アルファは屋敷の別館へ足を踏み入れていた。

そして彼がドアを開くと同時に、

「あっ」

幼さを多分に残した少女の声が、広い一階ホールの中に響き渡る。

「おかえりなさい、お兄ちゃん！」

栗色のセミロングが揺れた。

同時に彼へと向けられたのは屈託のない笑顔。……彼に向けられる感情としては、もつとも違和感を覚えるであろうもの。

あまりにも純粹な、親愛の情。

ただ、

「セシリア」

残念ながら、アルファから彼女に向けられたのは、先ほどミリセントに向けたものと大差ない、素っ気ない口調だった。

「私に何か用なのか？」

「三・十・点！」

「……？」

白く冷たく美しく整ったその顔に、若干の困惑した色が差す。

それに対するセシルは、いつものように人差し指をピツと立て、言い聞かせるような口調で続けた。

「おにーちゃん。そういうときは、わざわざ待っててくれてありがとうーって言わなきゃダメなのですよ。……はい」

「……？」

「待っててくれてありがとう……。……はい」

「……」

困惑が色を増す。

「待っててくれてありがとー」

「……」

無感動で孤独を好む兄と。

屋敷の人々に可愛がられ、人と関わることを喜ぶ妹。

おそらく、この屋敷内においてもとても奇妙なカップリング。
それがこのアルファとセシルだった。

「あ、それとね。今日は学園で――」

「……」

そして二人の噛み合わないやり取りは、屋敷の人々の好奇の視線を浴びながら、それからもしばらくの間続くのである――。

その7『責任』

「ん……うん……」

朝を告げるスズメの声が清々しいと思うか喧しいと思うか、それは人それぞれ、あるいは状況次第である。

明日に大きな希望を抱く少年にとってはもしかすると輝かしい未来の象徴であるのかもしれないし、昼日中を棺桶の中で過ごす吸血鬼が仮に実在したとすれば、それはやはり歓迎すべきものではないのだろう。

そして、ここミューティレイク家の一室。

「んん……」

休日の朝はベッドの中で微睡むことが密かな楽しみという、平々凡々、何の変哲もないこのティースという男にとってのそれは、まさにささやかな幸福の象徴であり、心地よい微睡みを演出してくれる素晴らしいアーティストであった。

ディバーナ・ロウにおける完全休暇日は、通常、任務から帰還した次の日しかない。通常日も基本的に拘束規定がないものの、実際のところは遊んでなんていられないのが現実だ。

つまり、昨日ロマニーから帰還したばかりのこの日は、誰にも気兼ねせず堂々と一日中ゴロゴロしてられる貴重な、決して朝の微睡みを邪魔されることのない日なのである。

……とはいえ。

「ふはあ……むにゅむにゅ……」

よだれを垂らし、布団を抱き締め、まるで無防備に微睡むその姿は、とても死地に身を置く者の姿とは思えない。

さて、それはともかく。

こんな姿を見せておいて難だが、誤解のないように。このティースという男、朝の微睡みが趣味とは言っても特別に寝起きが悪いということではない。過酷な訓練や任務から帰還した次の日などたま

に寝坊をすることはあるが、所詮はその程度。

で、そういうときに彼を起こすのは、大抵パメラというハウス・メイドの少女だった。

カチャ。

「ティース様……？」

このとき時計が示していたのは、午前七時を少し過ぎた辺り。この時期、使用人たちは大体日が昇る直前の五時過ぎ頃から動き出し、それ以外の人々も大抵朝食となる七時前には目を醒ます。だから今の彼はややお寝坊さんといったところか。

「……今日はお休みですから。ゆっくりなさるつもりなのでしょう」
潜めた声。

足音が少しずつベッドに近付いていくが、ティースは小さく寝返りを打つだけで目を醒ます気配がない。

「あ、あの……どうなさるおつもりですか？」

よくよく聞いてみると、どうやら部屋に侵入してきた足音は二つのようだった。

「う……ん……」

ほんの少しだけティースの意識が覚醒する。瞼の裏に突き刺さる陽光に、思わず顔を背けた。

「パメラ……？ もう少し寝かせて……ん……」

半分夢の中。言葉も頼りない。

こういう場合、パメラは大抵そつとしておくことにしている。まして今日は休日。彼女もそのことは承知済みであり、無理に起こす必要などどこにもないのだから。

だが、この日は少し違った。

ベッドに射し込む陽光が何者かの影に遮られると、ティースの眉間の辺りに柔らかい何かが触れる。

「ん……？」

ひんやりとしていて、粘着質。

「な……ん……？」

そして流れてきたのは、やや鼻をつく刺激臭。

と、次の瞬間！

「い……ぎいやあああつあああッ！！！！！」

突如網膜に流れ込んだ激痛に、ティースは跳ね起きた。いや、飛び起きた上にベッドから転げ落ち、あまつさえ床をのたうち回った。

「ひぎいいいっ！！……目が！目があああああッ！！！！！」

ゴロゴロと床を転がった挙げ句、這うようにして洗面所に飛び込んでいく。

バシヤバシヤバシヤバシヤ！！！！

「ティ、ティース様……だ、大丈夫ですか？」

そんなパメラの声もまるで耳に入らず、洗う。

ただひたすらに洗う。

完膚無きまでに洗う。

そして――

「……」

ポタ……ッ。

約五分後、ようやく水音が停止。周りには水が飛び散っていた。

「……」

まるで死人のような様相のまま振り返り、目をパチクリさせたティース。

二度、三度。

「……目、真っ赤です……」

心配そうなパメラの顔が視界に入る。

幸い、失明はしていないようだ。

額に手を当て、そしてティースは問いかけた。

「……パメラ。い、一体、俺の身に何が……？」

「え、あ、それは――」

だが、答えようとしたパメラの言葉を遮るように、

「効果抜群ね」

「え……?」

声はベッドのある方向。視線を向けると、先ほどまでティースが横たわっていたベッドの上には、何事もなかったかのように腰を下ろした少女がいた。

学園用の普段着の着こなしも、綺麗に整え纏め上げた飴色の髪型も、相変わらず一分の隙もないその少女の正体は言うまでもない。

「シ、シーラ?」

その姿を確認し、そして次に彼の視線が向かった先は、少女の手に握られた見慣れないビン。

中には薄緑色の、粘着質の液体が入っていた。

「目が覚めたのならさっさと着替えなさいな。いつまでその見苦しい格好を晒しておくつもり?」

「……」

確かに今の彼は大きな寝癖がついたまま、寝巻姿、しかも急に飛び起きたものだからズボンは半分脱げたような状態と、とにかくひどい格好だった。

が、しかしティースはそんなことを気にするよりも、彼女が手にしているビンの中身――嫌な予感の方が先に立っていて、

「……シーラ。も、もしかして今の、その毒々しい――」

「ああ、これ?」

シーラはそのビンを目線の高さで小さく振って見せて、

「目覚まし薬よ。眉間に塗るだけでスッキリ目が覚めるの。どう?なかなか良い出来でしょう?」

「ばっ……」

当然、ティースは猛烈に抗議する。

「……あのなあッ! 目が覚めるどころか、目が潰れるかと思ったじゃないかあッ!」

「あら、大丈夫よ」

だが、シーラは涼しげな顔で、

「覚める上に、目にも優しい薬なの」

「……絶対嘘だッ!!」

これはさすがのティースも騙されなかった。

と、そんな彼の態度に、

「そんなに痛かった？　だったら改良の余地があるわね。……ま、そんなことはどうでもいいのだけど」

「ど、どうでもいい!?　お、お前なあ、人に痛い思いさせておいてどうでもいいってことは――」

シーラはため息とともに肩を竦めて、

「いちいち細かい男ね。そんなだからその歳まで恋人もできないのよ」

「な――!」

片手を広げ、腰に手を当ててシーラはさらに続ける。

「顔も平凡だし、気も利かないし、話が面白いわけでもないのだから、せめて寛容な心ぐらい持つようになさいな。そうすれば、あるいはどこかの奇特定の女の子が目留めてくれるかもしれないのだから」

「な、な……」

言葉を返す暇もない。

その挙げ句、

「ともかく。さっさと着替えて食堂にいらっしやい。……二度寝なんかしたら、そんなものじゃ済まないわよ」

何事もなかったかのように部屋を去っていくシーラ。

「……」

窓も開いてないのに風が吹いた……ような気がした。

(な……)

呆然。

ただ呆然。

(……な、何だったんだ……?)

パメラの同情の視線が痛かった。

「あ、あの。シーラ様、何かあったのですか。その、なんだか以前

より……なんというか……その、ティース様への当たりがさらに強くなったというか……」

「……お、俺にもわからん……」

そんな、ちょっとだけいつもと違う、完全休暇日の朝だった。

「不思議に、思ったことはありませんか？」

ミューティレイク別館の午前はなかなか騒がしい。

もちろん使用人たちが忙しく動いているからというのもあるが、この屋敷の使用人というのがこれまた個性派揃いであり、とにかく何事もすんわり終わることがない。曰く、この別館ではそれが許されているらしく、一定の規律の範囲内ではあるものの、とにかく賑やかだ。

今日も一階ホールでは、度を外しすぎたのか、屋敷のハウス・キパーであるアマベルⅡウィンスターに叱られる使用人の姿があった。

……ちなみに、それはアオイが尋ねたこととは全く関係がなく、「ティースさんは、レアス君の身長がいくつあるか知っていますか？」

現在、彼らはデビルバスター試験に向けての勉強真っ最中なのである。ティースにとっては完全休暇日の本日であるが、この勉強会はアオイの時間が空いていることを耳にした彼自身から申し出たものだ。

「え？ そうだなあ」

アマベルに叱られる使用人の少女からアオイへと視線を戻し、ティースはディバーナ・カノン隊長である赤毛少年——レアスⅡヴォルクスの姿を頭に思い浮かべてみた。

「……百五十センチ半ばぐらいかな？ 最近ちょっと伸びたように

も思えるけど」

「ええ、大体正解です。……ではもう一つ。ティースさんはレアス君に腕相撲で勝つ自信がおりですか？」

「え？ そりゃー」

言いかけて、思いとどまる。

「普通に考えれば勝てると思うけど……どうなんだろ。少なくともレアスくんは普通じゃないからなあ」

いくらデビルバスターとはいえ、相手は少年だ。身長だって三十センチ近く違う。技術では勝てなくとも、単純な腕力なら勝てると思うのが普通だろう。

だが不思議とティースには、自分の勝つ姿というのが想像できなかった。

「ええ、正解です」

「へ？ 正解って……俺、まだどっちとも答えてないけど？」

不思議そうなティースに、アオイはニツコリと微笑んで、
「実際がどうであるかはこの際問題ではないのです。……今、ティースさんは“普通に考えれば”と言いましたね？ その“普通”というのが筋力のこと。そして“普通じゃない”と感じた部分。それが今日お話する“心力”のことです」

「心力？」

初めて聞く単語だ。一般に浸透しているような言葉ではない。

「不思議に思ったことはありませんか？」

アオイはもう一度そう言った。

「レアス君の小さな体のどこに、あのような……まるで消えたように錯覚するほどの瞬発力が隠されているのか。アクアさんやアルファさんの華奢な体のどこに、獣魔のパワーを押さえつけるほどの力が隠されているのか、と」

「……そりゃ」

言われて、ティースは初めて気付く。

それは確かに不思議なことだった。

隊長だから。

デビルバスターだから。

しかしよく考えてみれば、それはあくまで強さの証明であって、強さの根拠にはなっていないのだ。

それでもティースはどうにか答えて、

「人にはその筋力だけで括れない不思議な力がある、っていうか……」

曖昧だった。

が、その返答こそがアオイの意を得たもので、

「ええ。多くの人はティースさんと同じように、漠然とはありますが“その力”の存在を知っています。そしてある程度の基礎鍛錬を積んだ者は、意識するしないに関わらずその力を行使している可能性があります。……ティースさんにも覚えがありませんか？たとえば攻撃を受けたのに思ったよりも傷が浅い、普段では考えられないほどの怪力が発揮された、など……」

「……」

記憶にフラッシュバックする、いくつかの光景。

「……ある、かも」

充分に覚えがあった。

彼がこの屋敷に招かれる原因となった事件のときのこと。あるいはリガビュールの街において、タナトス幹部である炎の将魔、ネイルⅡメドラⅡクルティウスと戦ったときのこと。

確かに彼が認識する彼自身の実力を遙かに上回る力が発揮されたことがある。

「でしたら、あるいはそれが心力によるものだったのかもしれませんが。……通常では引き出すことのできない潜在的な能力、という言い方が一番しっくり来るかもしれませんね。ただ、それらは実を言ううと、訓練によって自由に引き出すことが可能になるのです」

そう言って、アオイは手元にあった紙とペンを取る。

「さて、その心力についてですが……心力は全部で九つの要素から

構成されています」

言いながら紙の中心に小さな丸を書き、その中に“発気”と記すと、さらにそこから八方向に引いた矢印の先にそれぞれ、

“自愛”

“鋼身”

“瞬歩”

“神足”

“流星”

“剛力”

“息吹”

“刻眼”

と、文字を記していく。

「ええっと……？」

「一つずつ、順に説明しますね」

困惑顔のティースに、アオイはニツコリとそう言った。

——と、そんな彼の説明では少々長くなってしまうだろうと思われるので、ここでは要点だけを簡潔に説明することにしよう。

“心力”

それは全ての人間が等しく併せ持つ、神秘的なパワーのことだ。“気功”とか“オーラ”とかいえば少しはわかりやすいだろうか。つまり人間の持つ肉体能力を高める力のことなのだが、この世界におけるその力——“心力”はそれほど曖昧なものではなく、その影響が及ぼす範囲というのはある程度明確に解析されている。

それがアオイの言う九つの要素だ。

まず、紙の中心に書かれた“発気”は“八気”とも言われ、他の八つの力全てに影響を及ぼす、いわば心力の基礎的な力のこと。その他八つの能力の強さはだいたいこれに比例することになる。さて、その他の八つの力だが、こちらもごく簡潔に記そう。

“自愛”は自然治癒能力を高め、“鋼身”は肉体の防御力を高める。

“瞬歩”は超高速の瞬発力を得、“神足”は持続的な高速移動能力を高める。

“剛力”は瞬間的な超怪力を得、“流星”は高速での打撃能力を高める。

“息吹”はスタミナ能力を高め、“刻眼”は動体視力を飛躍的に高める。

さらにこれら八つの力は個人個人によって得手不得手があり、大抵は一つか二つ、多い場合は三つの得意分野、あるいは苦手分野を持つ。

ディバーナ・ロウの三人の隊長たちを例にあげるならば、アクアⅡルビナートは“神足”と“流星”を得意とし、レアスⅡヴォルクスは“瞬歩”に特化している。そしてレインハルトⅡシュナイダーは“剛力”“神足”“刻眼”が比較的得意、という具合だ。

ただ、その得手不得手はあくまでバランスの問題であり、もっとも大事なのはやはり基礎能力である“発気”ということになる。得手不得手はそこに百をかけるか、あるいは八十や六十をかけるか、という違いでしかない。

そしてこの力があるからこそ、この世界では一人の人間が十人や二十人を相手に立ち回ることも可能だし、子供や女性が魔と戦うことも不可能ではないのである。

「――少し、休憩なさいませんか？」

「え？」

心力に関しての説明が終わって二人が一息ついたとき、その間に割って入る声があった。

ティースは振り返り、そしてそこにいた人物の姿を目にすると少し驚いて、

「ファナさん？ 珍しいね」

白い陶器のティーセットを手にしたファナは、相変わらずの心とむぼやゝとした笑顔で立っていた。が、そんな外見からは想像で

きないほど忙しくしている彼女のこと、こうして昼間から姿を見せることはそうあることではない。

「……姫!？」

そしてティースと同じく驚きの声を上げたアオイ。

だが、こちらはティースのものはだいぶ意味合いが違っており……それはつまり、ここに“いるはずのない”彼女がここにいることへの驚きだった。

「い、一体どうなされたのですか!？ 今日ロベルト様に御招待されて、ミリイさんと一緒に行かれたはずでは!」

ファナは小首をかしげて、

「あらあら。そうでしたの?」

「ええッ!？」

そんな彼女の不思議そうな反応に、アオイはさらに慌てて、

「わ、私ならともかく、ミリイさんがそんな、伝え忘れなんてポカをするはずが――」

「それではきつとアオイさんの勘違いですわ。夢の中のお話と混同なさっているのではありませんか?」

「え? は……そ、そう言われてみればそんな気も……」

「……」

ティースは先ほど、外出用の馬車が本館の前に用意されているのを偶然目撃していたが、ここは敢えて口を挟まないことにした。

(色々、あるんだなあ)

ミューティレイク家当主という、十八歳の少女にはやや重すぎるはずの肩書き。その責任を見事に果たしている彼女がすっぱかしてしまう約束など、ティースの知る限りは一種類しかない。

おそらくロベルトという男は、彼女に求婚する者の一人なのだ。

(ホント、色々あるんだろうなあ……)

ただ、それは彼女ののんびりとした笑顔からはとても想像できないものであったが。

「お勉強は捗っておられますか?」

ティースが考え事をしているうちにファナは彼らと同じテーブルに腰を下ろし、紅茶を注がれたティーカップから湯気と芳ばしい香りが漂い始めていた。

「あ、えっとまあ、俺にできる限りはね。でも、あんま頭のいい方じゃないから」

「大丈夫ですわ。ティースさんはたいへん努力なさってますもの。――どうぞ」

「あ、どうも」

受け取って早速ティーカップを口に近づけたティースは、その香りに手を止め、そして首を傾げた。

「あれ。なんかいつもと違う……？」

「おわかりになります？」

ファナは静かに微笑んで、

「今年採れた茶葉が届いたばかりですの。この屋敷では、ティースさんが一番乗りということになりますわ」

「へええ、それってなんか嬉しいなあ」

そんなささやかな幸せを噛みしめながら、紅茶に口を付けるティース。

ふと気付いたように顔を上げて苦笑すると、

「でも、それって俺みたいな味音痴にはちよっともったいないかも」

「そんなことありませんわ。香りですぐに気付かれたのですから、ティースさんは繊細な感覚をお持ちです」

「……」

そんなファナの隣では、アオイが何度も首をひねりながら懸命に紅茶の匂いを確かめていた。

「ところで、ティースさん」

「ん？」

昼が近付いているせいか、今度は厨房の方がにわかに騒がしくなっている。

そんな、大貴族の屋敷としては不自然なほどに賑やかな雰囲気

中、ファナは和やかな笑顔のまま問いかける。

「アルファさんとは上手くやっておられますか？」

「え？ ……あ、うん」

反射的に頷いてはみたティース。

……が、それは真っ赤な嘘である。あのロマニーでの一件で怒りをぶつけて以来、ティースは彼と一度も口を利いていなかったのだから。

咄嗟に嘘をついたのは、そんな個人的な感情で生じた軋轢をファナやアオイに告げていいものかどうか迷ったからだ。

だが、

「いや、実は――」

結局、ティースは相談してみることにした。

……ロマニーの温泉宿で起きた出来事。そしてその後、アルファに対して疑問と怒りをぶつけたことまで。

そして大体の事情を話し終えた後、ティースは感情を吐露した。

「後で冷静に考えて、確かにあいつの言うことにも一理あるとは思った。結果的に最小のリスクで任務を果たすには最上の選択だったのかもって。……でも、俺にはあのやり方はどうしても受け入れられない」

それから少し視線をそらして、

「それって……間違ってるのかな？」

「……なるほど」

アオイは真剣な表情で何度か頷いた。その反応は、どちらかといえば彼の意見に同意しているかのようだ。

そのまま、視線をファナを見る。

すると彼女は少し憂いを秘めた瞳をしながらも、言った。

「ですがティースさん。その状況でアルファさんが、そのマーセルさんという方の病気を察知するのは不可能だったと思いますわ」

「……ファナさんはあいつのやり方が正しいと思うのか？」

ファナは小さく首を横に振って、

「いいえ。確かに力を持たない一般の方々を危険にさらすことは極力避けるべきと考えます。……ですが、どうかアルファさんのことを誤解なさらないようにしていただきたいのです」

「誤解？」

ファナはゆっくりと紅茶を置く。

それから視線をゆっくりと横へ。……その視線の先、おそらく誰かが飾ったのであろう鉢の中には、見覚えのある紫色の花のつぼみがあった。

「あの方は決して心が冷たいわけではありませんわ。まだ、途上なのです」

「……途上？」

「はい。……ティースさん。ティースさんは……“イスラフェル”という民族をご存じですか？」

「え？ あ……」

偶然にも、彼はつい最近その名を聞いたことがあった。

「えっと、銀髪で蒼瞳の……その、アルファさんの――」

ファナは視線を戻しながら頷いて、

「イスラフェルは西のブリュリーズ領の山奥に住む少数民族です。古くから世界の秩序を護ると伝えられており、地元では神格化されるほどの民族でした。……ですが、十五年ほど前、彼らの集落は一つ残らず滅ぼされてしまったのです」

「……え？」

それは初めて聞く話だった。

「生き残られた方がおられないため、いくつかの有力な魔の組織がその容疑をかけられています、今のところ断定には至っていません」

「アルファさんが……その生き残りだってこと？」

その問いかけに対し、ファナは肯定も否定もせず、

「全ては憶測で、あの方がどのような人生を歩んできたのかなど私たちにはわからないことですわ。ですが、私はあの方のことを信じ

ているのです」

「……」

「今回のように常識の枠を外れた行動を取られることもあります、それはあの方なりに最善を選ぼうとしただけですね。どうか誤解なさらないでください」

「で、でも……」

ファナの言いたいことはティースにも理解できた。

が、それと、それを受け入れられるかということとはやはり別の問題であり、

「俺はそれでも、あの人のやり方にはついていけそうに――」

だがそんなティースの反論に、ファナは彼を真っ直ぐに見つめて、言った。

「それを、ティースさんをお願いしてはいけませんでしょうか？」

「……へ？」

意味がわからずに問いかけるティース。

「私どもがこの場で語るだけの言葉ではどうしても限界があります。ですが、ともに現場で動く方々の行動は必ず心に響くものがあると思いますの。……その任に、ティースさんはピッタリですね」

「え」

その言葉で、ようやく理解する。

それはつまり――彼に教育係を引き受けてくれ、ということなのだ。

もちろんティースは戸惑いを隠せずに、

「で、でも、ちょっと待ってくれ。そういうことならもっと付き合いの長いレイさんとかアクアさんとか――だ、大体、俺はあくまでアルファさんの部下で、結局アルファさんの命令に従うしかできないんだし――」

「？」

そんなティースの言葉に、ファナは不思議そうな顔をする。

「ティースさんはアルファさんの部下でしたの？」

「え？ い、いやだって、アルファさんは隊長で、俺は――」

「……」

ファナは少し視線を巡らせた。

それから何事が閃いたらしく、ポンと両手を合わせる。

「ティースさん。おそらく誤解、なさっておられますわ」

「え？」

口元で両手を合わせたまま、ファナはその奥で再び静かな微笑みを浮かべて、

「そもそも第四隊に隊長はおられません。ティースさんを第四隊に配属したのはアルファさんの部下としてではなく、同士、協力者として、ですの」

「え、協力者……？」

「はい。もともとティースさんには、協力して任務を遂行する義務はあっても、アルファさんの言葉に従う義務はないのです。おそらくリディアさんがお伝えになった配属の指令書にも、アルファさんの部下として、とは書かれていなかったと思いますわ」

「……う」

そんな細かいところまでティースは確認していなかった。

「で、でもさ。そうはいつでも俺は未熟だし、経験だって浅いし、結局はアルファさんに従わざるを得ないっていうか――」

「はあ、それもそうですわね」

再び視線を巡らせるファナ。

だが、やはりすぐに何事が閃いたらしく、もう一度ポンと手を打ち、

「では、こう致しましょう」

「え？」

その後、ファナの口から出たのは、あまりにも突拍子もない提案だった。

「本日付けで、ティースさんを第四隊の臨時隊長に任命致します。そうすれば全て解決しますでしょう？」

ニコリと。

「……へ？ い、いやちょっと待っ——」

「責任重大ですわ。頑張ってくださいね、ティースさん」

「え……ええっ、マジで!？」

恐る恐る聞き返すティースの視線の先で、ファナはニコニコと満面の笑顔のまま。

——どうやらマジらしい。

「マジで……?」

呆然と呟くティースの胸に広がったのは、突然背負わされた重い責任に対するとてつもない不安の波であった……。

一人目は、ネービス領の南東ベルンの街付近。

「♪~~~~♪」

迫り来る恐怖。近付いてくる死の予感。産まれたばかりの赤子が雰囲気を察して泣き出し、母親が慌ててその口を塞ぐ。

今更騒ごうと静まろうと、何も変わりはないというのに。

通常、馬車で長い距離を移動する場合は目的地を同じくする者たちとキャラバンを作ることが多い。それは街道に現れる盗賊対策であり、あるいは時折現れる獣魔対策でもあった。

だが今回、そこに見えるのはあろうことか馬車一台。乗っているのも四人。夫婦であろう男女、産まれたばかりだと思われる赤子が一人、そして一家が雇ったのであろう護衛が一人である。

馬車を襲ったのは猫のような形の獣魔、炎の六十八族。口から吐く熱い吐息は殺傷力という点ではそれほどでもないが、その鋭い爪と牙は充分に生命を奪いうる。

数は七匹。

普通の獣ならばともかく、獣魔が七匹ともなればその一家と雇われの護衛一人を皆殺しにして充分過ぎるほどのお釣りが来る。

そのはずだ。

……が、しかし。

「おくれは電光石火♪ おくまえのハートに♪火いをつけるぜ♪」

センスのない歌詞に、音程のあやふやな歌声。

恐怖に震える一家とは裏腹に、彼らに雇われた護衛の男は上機嫌で地面に降り立った。

見たところ二十歳前後。テングロンハットのような妙に背の高い帽子をかぶり、ジーンズと白のシャツに袖のない茶色のジャケット。身長は百七十センチあるかないかで、目は細く、唇には小さなピアス。

見た目からして、ややアウトローな印象の青年だった。

「セ、セレナスさん……」

馬車の中から震える声を発した一家の長は、まだ若い三十歳ぐらいの男だ。服装を見るにそれほど貧しくはなかったが、おそらくは何らかの事情があつて、やむなく一台での移動を試みたのだろう。

そしてだからこそ、護衛には腕の立つ者を選んだ。

「ま、オイラにまかせとき」

鼻歌混じりに腰にぶら下げた武器を手にする青年。

奇妙な形の武器だ。一見レイピアのようだが、先端五センチほどが小さく三つ又に分かれている。

「さうて、と。いっちゃん御機嫌なヤツはどいつかな？」

獣魔たちが一斉に動いた。

だが、青年のもとに向かつてきたのはたったの二匹。残りの五匹は馬車を目標に定めたようだった。

「獣の分際で、えげつないねえ」

青年は慌てない。だが、馬車を守る気配も見せない。ただ、もと

もと細い目をさらに細め、自分に向かってきた二匹の片方に照準をセツトする。

「んじゃ、おまえにきくめたつと！」

一閃。

甲高い悲鳴が響き、一匹の獣魔が青年の武器に貫かれる。

……バチンッ！！

同時に響いたのは、放電の音。

「ごろうじろゝごろうじろゝ♪」

バチ……バチバチバチ……ッ！！

一瞬で息絶えた獣魔の体が、まるで充電するかのように急速に電流を纏っていく。

「最大ゝ七ゝ連鎖ゝうまくいったらゝ拍手御喝采をゝ♪」

バチンッ！！

許容範囲を超え、獣魔の体が弾けた。

「雷針”ライトニングイリュージョンでござゝいゝ♪」

バチバチバチバチッ！！

弾けた獣魔の体から飛び出た二本の稲妻は、馬車を襲おうとした五匹のうちの二匹に命中する。

「一ゝ二ゝ三ゝ……さあさあ皆さん、拍手のご用意をゝ♪」

バチバチバチバチバチッ！！！！

稲妻にさらされた二匹から、さらに二本ずつ。計四本の稲妻が、まるで自分の意志を持っているかのように、丁度残っていた四匹の獣魔に向かって伸びた。

「四ゝ五ゝ六ゝ……アラ？」

だが、一匹だけ、稲妻の直撃を受けたにも関わらず、ただ弾かれただけで無傷の獣魔が残る。

「……残念。目測ミスったか」

舌打ち。

だが、すぐに青年は陽気な調子を取り戻して、

「世ゝの中ゝ思い通りに行かないからこそ面白いゝ♪」

たった一匹残った獣魔ごときが、そんな彼の敵であろうはずがなかったのである。

二人目は、ネービス領から南に領地二つ分離れたヴィスカイン領。

ちりん……ちりん……

幾筋もの鈴の音。

長く伸びる影。

それは夢か幻か。

三月の夕日の中に舞い散るは、白く儂い雪の結晶。

そして――

「逃げるの？」

何の変哲もない問いかけ。

だが、その声は、ただそれだけで支配すら許してしまいそうになる……あまりにも美しい響きの旋律だった。

「逃げるのならそうしてみるといい。でも無理。たとえこの場では逃げ出しても、あなたはきっとその“衝動”からは逃れられない」
琴を奏でるように、言葉を紡いでいく。

ちりん……ちりん……

女性は腰の辺りまで伸びた髪を九つに分け、その先端付近を鈴付きの紐で縛っていた。何かのおまじないなのか、その中には一つだけ真っ白の鈴が混じっている。

「戦う必要なんてないのに。楽しく暮らしていければそれでいいのに。なのに、戦うことをやめない。みんな、みんな」

一際強い風が吹き、言葉の旋律に、鈴の音が伴奏をつけていく。そして、まるで神に仕える巫女のように神秘的な女性は、悲しげな瞳で目の前の人間――いや、魔――人魔を見つめた。

「ねえ。あなたも、私もそう――」

その手に握られていたのは、長さ二メートル近くもある棒状の杖。
……杖？

いや、違う。

それは――

「っ……！！」

ついに人魔の男が背を向けた。

下位魔。

人より優れた戦闘能力を持つとはいえ、今回ばかりは相手が悪かったのだ。

「……目覚めよ“雪姫”」

雪の結晶が杖の先端に集まり、徐々に形を成す。

「そして、歌い、舞い、踊れ――永久に、儚く……」

幻想のように美しい音色。

幻想のように美しい結晶。

幻想のように美しい彼女。

――全ての極が表裏一体であるように、美しすぎるそれは凶気を纏うことによって、やがて凍て付く恐怖と化する。

死者を誘う大鎌――氷のデスサイズ。

神秘的な彼女にはあまりにも不似合いで、それが逆に凄まじいまでの戦慄を呼び覚ます。

ちりん……ちりん……

風が吹いた。

ちりん……ちりん……

ちりん……ちりん……

……ちりん――――

「――次の世では、どうか楽しく安らかな一生を送れますように……」

三人目は、ネービス領の西、リガビュールの南に位置するグランドウッドの街から東に二十数キロ離れた森の中。

駆ける、駆ける、駆ける。

風を切る、黒い影。

夜の森は闇に生きる獣たちにとって絶好の猟場だ。

微かに見えたオレンジ色の光は、おそらくたき火の明かりだろう。だが、彼らは火を恐れない。恐れるはずがない。

炎の六十二族と呼ばれる彼らは一見馬のような大きさと形をしているが、一般的に知られるそれよりも遙かに毛深く、また口には鋭い牙が生えており、肉食で獰猛な種族だった。

それが三頭、たき火を目指して走る。

たき火と人。

彼らは幾度もの狩猟の結果、その二つを結びつけることを覚えていた。

そして人は彼らにとって、もつとも闘争本能を掻き立てられる獲物だ。どういった事情かはわからないが、彼らが等しく併せ持つ本能は人型の獲物を見たときに一番興奮するように作られていた。

たき火の前で野宿をするのは一人。

旅の男だろうか。比較的軽装、鉄製の額当てを巻き、黒いマスク。短髪で輪郭は病的に思えるほどに細いが貧弱な印象はなく、体は無駄のない肉付きでしなやかさを秘めている。右手にのみ黒い手袋を填めており、年齢は二十歳半ばぐらいだろう。

「……現れたか」

マスクの下にくぐもった独り言は、もちろん獣たちには理解できない言葉だ。そして彼らは、自分たちが“敢えて”誘き出されたのだということにも気付いていない。

彼らの中にあつた衝動はただ一つ。

目の前の獲物を、喰らい尽くせ――

「ガアアアアアアッ！！！！」

まるで争うかのように、同時に襲いかかる三つの体躯。三つの牙。たき火が揺れた。

風を切ったのは、宙を舞う男の体と、三つの苦無。

勢い余ってたき火に突っ込んだ三匹の獣の体に、それぞれ苦無が突き刺さる。

――だが。

「ガアアアアッ！！」

深く堅い体毛に覆われた獣には効いていなかった。かろうじて刺さりはしたものの、刺さっているのか体毛に埋もれただけなのかわからない程度。

獣たちは気に留めた様子もなく方向転換し、地上に降り立った男に向かって突進していく。

しかしそれも全て、男の予想の範囲内。

「強者の匂いすら嗅ぎ分けられない、愚かな獣どもよ」

黒い手袋をはめた右手を三匹の獣に向け、そしてまるで引き金を絞るように指を折り畳む。

途端、獣たちの体の一部――苦無を打ち込まれた部分が破裂した。

「ギャオオオオオンッ！！！！」

“惨響”とともに、砕け散れ」

呟く男の右手には、再び三本の苦無。

最初の一撃で体の四分の一を失った獣たちに、その攻撃を避ける術など存在していようはずもなかった。

“雷針” セレナスⅡカンファイス。

“雪姫” マリアヴェルⅡソーヴレー。

“惨響” ジンⅡファウスト。

それぞれに特徴的な武器を持つ彼らは、しかし決して意図的に選ばれたわけではない。

それは単なる偶然。

事実、彼ら三人の間には一点を除きほとんど共通点らしきものはなく、出身も生い立ちも性格も様々。彼らを結びつけるものはない。ただ、一点だけ。

彼らが持っていた明らかな共通点。

それとて絶対的な要素ではなかったが、しかし、それでよかったのだ。

それを計画した者にとっては、彼ら三人であることが重要だったのではなく、彼ら三人が“それ”であったことが重要だったのだから。

共通点。

それはつまり――彼らがデビルバスターであったこと。

……この時点では誰も想像していなかった。

主役である彼ら三人も、もう一人の主役であるアルファ・クルラントも。そしてティー・サイト・アマルナを始めとする、その他少なからず関わることになる人々も。

時期はこのときより約一ヶ月の後。

主催は“ネアンスフィア”

その、大陸でも名高い魔の組織のことを、一部の人々は畏れを込めてこう呼ぶのだ。

魔物狩りを狩る者たち――“デビルバスター・ハンターズ”と。

幕間『ミューティレイク井戸端会議』

シュー＝タルトはネービス領東のヴァニリッツという街に産まれた十八歳の青年だ。

父は街でも有名な菓子屋の主人。その長男である彼もまた、幼い頃から自然と菓子職人の道を歩むことになったのだが、十四歳のときに父親と仲違いし家出。

その後、ネービスの菓子屋で働きながら腕を磨き、二年前の春、ネービスで行われた若手料理人による菓子作りコンテストで優勝すると、その一ヶ月後にミューティレイク家に招かれ、現在、その厨房で菓子担当のコックとして働いている。

短髪というほどではないが、料理人としては問題ない程度には短めの髪、容姿はどちらかといえば爽やかな部類に入るだろうが特筆すべきほどのことはなく、身長は本人曰く“小数点以下を切り上げれば百七十センチ”ということだが、ゼロを切り上げるなどという暴挙はなかなか普通の人間に出来ることではないだろう。

その性格は一言でいえばお調子者。三枚目。ただ、お菓子作りに関しての情熱だけは本物らしく“誰もが笑顔になれる菓子作りがモットー”などという恥ずかしいセリフを真顔で言っただけのける様を見れば、彼が悪人でないということは誰もが理解するだろう。さて。

本日はそんな、別に隠された力も大して特殊な過去も持っていない彼の周辺に少しだけスポットライトを当ててみることにしよう。

二月下旬のとある日の夜。

ミューティレイク家別館のある場所では、秘密の会議が行われていた。

出席者は全部で四人。

その四人はミューティレイクの関係者ではあるが、ディバーナ・ロウそのものとはほとんど関係がなく、おそらく見慣れない者たちも多いだろうと思うので、先にここでまとめて紹介しておくことにしよう。

まず一人目は、一部を除いた女性使用人たちの頂点に立つハウス・キーパー、アマベル・ウィンスタールだ。通称で“ベル”などと呼ばれることもあるが、その名で彼女を呼ぶ者は非常に限られている。

ネービス領ブレインスタンという街の下級貴族の四女として産まれた彼女は、九歳のときネービスの“令嬢育成所”リーラッド学園に入学。十年前、十五歳でミューティレイク家のパーラー・メイドとなり、二十一歳のときハウス・キーパーの任に就いた、非常に真面目で仕事熱心な女性である。

現在の年齢は二十四歳。少々長めの金髪を左右から捻ってまとめた上品なシニョンスタイルの髪型に、女性にしてはやや高めの身長、さらには非常に厳格そうな雰囲気がいかに“管理職”な人物であった。

……ただ、実際もそのイメージ通りなのかどうかといえば、それはまた微妙に頷けないところもあったりするのだが、まあそれはひとまず置いておこう。

二人目は、接客を担当するパーラー・メイドたちの長、ローズマリー・クロフォード。彼女の場合はアマベルとは逆に、ほとんど“ローズ”あるいは“ローズさん”などと省略して呼ばれる。

出身はネービス領の西に接するモンフィドル領。クロフォード家といえばそこそこの名の通った上流貴族であるが、色々と複雑な家の事情のため、八年前、十三歳のときに、クロフォード家と交流のあったミューティレイク家に預けられ、そのまま現在に至る。

そんな彼女の見た目に関しては、たった二言で事足りるだろう。

“清楚”な“美人”だ。

加えてやや薄幸そうに見えるのは、容姿のせいか性格のせいか、

あるいは生い立ちのせいなのか。ともかく、少々別格のシーラリス
ノーフォールを除くと、彼女は間違いなくこのミューティレイク一
の美人であろう。

ただ、その性格は少々――いや、これは後ほど実際に見てもらっ
こととしようか。

三人目。

掃除やベッドメイク等を担当するハウス・メイドの少女ヴァレン
シアⅡキッチンは、両親がもともとミューティレイクの使用者で、
産まれも育ちもこのネービス。五年前に十三歳で使用人として正式
に雇われ現在に至っている。

ややクセ毛のショートカットで、いつも浮かべている悪戯っぽい
表情がネコを連想させるこの少女はともかく賑やかな性格だ。口を
開けば持ち前のマシンガントークが炸裂し、何にでも首を突っ込ん
でかき回してしまう上、全然懲りる気配がない。屋敷随一のトラブ
ルメーカーと言っても過言ではなからう。

そして最後の一人。

冒頭でも紹介した菓子作り担当のコック、シューⅡタルト。

……一見、なんとも統一感のない顔ぶれと思うであろう。

が、この四人が集まっているのにはもちろんきちんとした理由が
あって――

「それじゃ、まあ」

雰囲気は重い。とてつもなく重い。

丸いテーブルに四つの椅子。それぞれに座した面々を見回して口
を開いたのはシューだった。

「みなさん、どうしましょ」

「……」

少々軽い調子の声に、対面のアマベルが無言で彼を睨む。

シューは思わずビクツとして、

「ちよっ、ちよっ和阿マベルさん！　なんでいきなり俺を睨むんで

す！」

バンッ！

「一体誰のせいだと思ってるんですか！？」

「いや、そりゃ俺の責任もありますけど、全部が俺のせいじゃないですって！」

「むゝゝゝゝゝゝゝゝ」

唸り声。

発したのはシューから見えて左手に座っている少女、ヴァレンシアだ。

アマベルはそんな彼女をチラッと横目で見た後、またすぐにシューの元へ視線を戻して言葉を続けた。

「ともかく、私は忙しいんです！　こんなことしてる暇はないんです！」

「いや、まあそれはよく存じ上げておりますです、ハイ」

シューは素直にそう頷いたのだが、それでもアマベルは不満そうに、

「だったら、なるべく早く結論を出して下さいね！　“責任者”さん！」

「うわ。ぐさりと来ますね、その言い方」

だが確かに。今回の件は彼本人に直接の責任がなくとも、彼が担当している部門の問題である。彼が中心となって解決しなければならぬことであるのは間違いないかった。

「あ、じゃあこんなのはどうです？」

そう言いながら、シューはぴっと人差し指を立てて、

「アマベルさんとローズさんの色仕掛けでとりあえず誤魔化——うおおっ！！」

ギロリ。

殺気が迸った。

「……何か世迷い言が聞こえた気がしますけれど、もちろん気のせいですよね？」

向けられたのは、あまり見慣れないアマベルの満面の笑顔。

シューはそんな彼女の背後に鬼を見た。

「た、多分、気のせいだと思いマス」

「むゝゝゝゝゝん」

「まったく。くだらないこと言っていないで、早く話を進めてください」

「そんなこと言われましても。まず今からでは時間的に絶対無理という問題が」

「じゃあどうするんですか！」

「そりゃまあ、どうしようもないでしょう」

シューとしては至極当然の回答だった。

と、そこへ思わぬところから横やりが入る。

「……困りました」

八方塞がりの状態に、ローズマリーが頬に手を当て、はああ、と深く重いため息を吐いたのだ。

「！」

そのため息に、シューとアマベルの二人がすかさず反応する。

……それは予兆だ。

「あの、ローズさん——」

咄嗟にシューがフォローしようとしたが、時既に遅し。

「……ふうう」

成分の五分の一ぐらいが鉛で出来てるんじゃないかと思うほどの重いため息を吐いて、ローズマリーは顔の前で祈るように手を組むと、視線を下に落とした。

「ウィンスロー様はあの菓子がなければとても御機嫌が悪いのです。おそらく……私たちもそうならないよう努力するつもりですけど、私ごときの力ではきつと……いえ、絶対ムリ……ムリです。ムリに決まっています……」

「あ、い、いや、ローズさん、そこまで深刻になるようなことじゃ——」

懸命のフォローを試みるシューだったが、彼女にはまるで届いた様子もなく、

「……そもそも私なんて何の取り柄もないんです。暗いし、愚鈍だし、無能だし、接客なんて向いてないんです。期待してくれる皆さんのために少しでもお役に立ちたいと思って頑張ってきましたけど……ダメなんです。何やってもダメ、ダメダメ人間……」

「ロ、ローズさん……」

そしてシューに突き刺さるアマベルの無言の視線。

「……え。もしかしてこれも俺のせいですか？」

「あ、あなたが早く話を進めないからです！」

「んな無茶な……」

だが、どもったところを見ると、どうやらアマベルも多少は無茶だと思っているようだ。

——ちなみに現在の事情を簡単に説明すると、こうである。

明日、ミューティレイク家に客人が来る。名はウィンスローリース
ナークウエザー。

スナークウエザー家はネービスに居を構える中流貴族であり、ウィンスローはその長男ということになる。一応はこのミューティレイク家当主であるファナの婚約者候補の一人だったが、本人からはあまり相手にされておらず、使用人たちには徹底的に嫌われているという少々困った人物だった。

そしてそんな彼の大好物が、寒天を使用したとある乾燥菓子……いや、というより、菓子はそれしか口にしないとのこと、このミューティレイクでも彼が訪れる際には毎回必ずその菓子を出すようにしていたのだが、今回、とある理由から急にその菓子が出せなくなってしまった。

それで、どうしようか、というところなのである。

「ふうふうふう~~~~~~~~」

「おいコラ。唸ってばかりいないでお前も少しは考えろ」

先ほどから唸り続けて会話に参加してこないヴァレンシアに対し、
ようやくシューの突っ込みが入った。

「……ん、ほら。こうして一生懸命考えてるんよ」

「嘘つけ」

確かに。ダルそうにテーブルに突っ伏している彼女の姿を見れば、
誰もがその言葉を嘘だと断定するだろう。

「だってさ」

しかも当のヴァレンシアは言い訳するつもりもないようで、やは
りテーブルに突っ伏したまま言った。

彼女特有の早口で。

「アマベル様とローズさんはいわば最高責任者と接客責任者なわけ
だしシューはお菓子作りの担当者だからわかるんだけどなんで関係
のないあたしまでこの場に呼びだされなきゃならないのかってその
一点がどうしても理解できないわけでどっちかどちと明日も早い
んだしとっと帰って寝たい気分なんだけどな」

「……」

「……」

「……ダメに決まってる……きつとまた失敗して怒られる……」

未だ戻ってこないローズマリーはともかく。

その他の二人――シューとアマベルは無言で顔を見合わせた。

……というのは、別にヴァレンシアの言葉に考えさせられたから、
ではなく。

次の瞬間、見事にハモる。

「そもそも、お前の（あなたの）せいだろうが（なんですよ）ッ！」

「おろ？」

ヴァレンシアはビックリした顔をする。

そんな彼女に、シューは勢い良く指を突きつけて、

「おろ、じゃないっつーの！ お前が俺の目を盗んでつまみ食いな
んぞしなければ、こんな面倒なことにはなっていないんだッ！」

だが、ヴァレンシアも反論する。

「だって、厨房のテーブルに無造作に置いてあるんだもん。食べていいのかなーと思うじゃん。お腹減ってたし」

「ぐ……だ、だからってあれだけあったのを全部食うか、フツー！」
「そ、そうですよ、ヴァレンシア！　そもそも、つ、つまみ食いだなんて女の子のすることではありませんよ！」

全く別の切り口ながら、息のあったタイミングで詰め寄るシューとアマベル。

が、しかし、このヴァレンシアという少女、その程度でオロオロするような性格ではない。

そんな二人の追求をさらりとかわすように、

「おろろ、なーんか二人して息ピツタリじゃん。……あやしいなあ。シューってば、いつの間にアマベル様とそんな仲になったの？」

「へ？　いやまあ、そりゃ確かに俺とアマベルさんは切っても切れない、ふかーい仲——ふごおっ！！」

ごわっしゃーん！！！！

「乗せられてどうするんですか！　いい加減にしてくださいッ！！」
顔を真っ赤にしたアマベルが怒鳴る。

そして、キツと視線を移動させ、

「ヴァレンシア！」

「……ハイ」

悶絶しているシューを見てさすがにヤバいと感じたのだろう。ヴァレンシアは姿勢を正して急に神妙になった。

「確かにシューさんの管理にも問題ありましたが、あなたが元凶であることは確かなんですからね！　少しは反省しなさいッ！」

「ハイ。ゴメンナサイ」

「うぐぐ……な、なんで俺だけ」

そこで椅子から転げ落ちていたシューがようやく復帰する。

荒い息を吐いたアマベルはそんな彼を一瞥すると、気を取り直すようにコホンと咳払いをして、

「……それで。結局、どうするんですか？」

「ス、スルーですか……まあ、そうですね。ともかく今から作るの
は不可能ですから、何か代わりになるようなものを考えるか、ある
いはどこかで仕入れてくるか、でしょうけど」

そう言うとしューは腕を組んで、

「マイナーな菓子ですからね。取り扱っている店を探すだけでも時
間がかかるかもしれないです」

「そうですね。……ローズ。ウインスロー様がいらっしゃるのは何
時頃だったつけ？」

「……さい……」

「え？ なに、ローズ？」

聞き返すアマベル。

すると、ローズマリーはぶつぶつと繰り返すように言った。

「……ごめんなさい……私なんかが産まれてきて、ごめんなさい……」

……

「……」

「……」

微妙な空気が流れる。

「え、えっと、確か昼近くだったと思いますけど」

妙に白々しく明るいシューの返答に、アマベルもぎこちない笑顔
で頷いて、

「そ、そうですね。それじゃあまり時間もないですね」

二人とも、とりあえず聞かなかったことにしようと必死だ。

「普通であれば何か別のものを考えるところですけど、ウインスロ
ー様の性格からすると、それでは納得なさらないかもしれません」
そこへヴァレンシアが口を挟んで、

「わがままだかねえ、あの人」

「……ヴァレンシア。失礼ですよ」

窘めるアマベルの声に、ペロツと舌を出すヴァレンシア。普段で
あればもったときついお叱りがあっておかしくない発言だったが、こ

のウインスローという人物に関しては特別だった。

要するに、彼のわがままぶりは全ての使用人共通の認識なのである。

「んじゃま、とりあえず」

最後にシューがまとめる。

「アマベルさんの方で近くの店を当たってみてもらえますか？ 俺はなんとか代用になりそうなものを考えてみますから」

「……ええ。仕方ないですね」

アマベルが真剣な表情で頷く。

なんだかんだと時間をかけた割には何のひねりもない結論だったが、最初からそのぐらいしか対策がないのである。

「あーあ」

そこへ、ヴァレンシアがボソリと呟く。

「そんなつまらない結論ならわざわざあたしを呼ばないで欲しいな」

「……お前はもっと反省せんかああッ！」

——と、まあそんなこんなで。

次の日の早朝。

「ふわああああ……とは言ったものの」

ミューティレイク家別館にある厨房には、眠そうに目をこするシューの姿があり、半徹夜気味で厨房にこもっている彼の周りは、菓子作りに使う様々な食材で散らかっていた。

あくび混じりに首を回す姿からわかるように、まだ代用品は完成していない。

「味とか食感だけなら似たようなものは作れるんだがなあ……」

ため息が漏れる。

「でもあの坊ちゃんの場合、形や色が違うだけで難癖つけられるのは目に見えてるし。……そりゃ確かにお菓子は見た目だって重要だけど、でもアレの場合は綺麗とかおいしそうとかって基準じゃなく

て、単なるわがままだからなあ」

椅子に腰を下ろしてテーブルに肘をつき、もう一度ため息を落としながら、とりあえず片手間に作ったマドレーヌを口に運ぶ。

「うーむ、これだって充分美味いんだが。他の菓子は一切に口にしていないってこだわりはよくわかんが、まあ味覚は色々だからなあ。

う……ん……………とお」

大きく伸びをしてテーブルに突っ伏す。

「あーあ。仕事とはいえさすがに疲れたな……」

時間は刻一刻と過ぎていく。いつの間にか空も白み始めて、そろそろ使用人たちが動き出す時間になっていた。

このままでは、結局何もできずに終わってしまう。かといって、解決の糸口すらも見えないこの状況では、なかなか動く気になれないのも仕方のないことだった。

と、そこへ、

「やっふー。頑張ってるー？」

「……」

無言で振り返ったシューの耳に、さらに勢いを増した言葉の波が押し寄せる。

「いやー、清々しい朝だねえ！ 晴れ渡る空、涼やかな風、澄み切った空気、そして何より同室の娘っこどもより先に目覚めたというこの進むばかりの優越感！ 早起きは三文の得とはよく言ったものだ！」

言葉通り、すでに制服に着替えたヴァレンシアは顔色もよく、まさに絶好調といった気配だ。

だが、

「……ほう。超寝不足なこの俺の前で、よくそんなことが言えたものだ」

そんな彼女とは対照的に腫れぼったくなった目を細め、恨めしそうに見上げるシュー。

「うわ、怖ッ。寝不足は体に悪いよ？」

「誰のせいじゃッ！」

身を起こして思いっきり突っ込むシューに、ヴァレンシアは少ししなを作ってみせて、

「いゃん。そんな大声出されちゃ、ヴァレンシア、困っちゃう〜ん」

「……」

ゴンッ！

「った〜ッ！」

「気色悪い」

ヴァレンシアは後頭部を押さえながら少し涙目に彼を見つめて、

「……し、失礼しちゃうなあ。せっかく、花も恥じらう十七歳の乙女が色っぽいポーズを取ってあげてるのに」

「恥じらうどころか尻尾巻いて一目散に逃げ出すわ、アホ」

「む〜〜」

冷たい反応に、口を尖らせてヴァレンシアはかなり不満げだった。

「まあ、そりゃあたしはローズさんほど美人じゃないし、アマベル様ほどグラマーでもないけどさあ。でもほら、少しぐらいは——」

「“ほど”？ はっ、なに言ってるんだ」

シューは途中で遮るとともに鼻で笑って、

「比べる以前にベクトルが全然違ってるっつーの。孔雀とアヒルに美しさを競わせるようなもんさ。天と地、月とスッポン、提灯に釣り鐘ってなもんだ」

「むかつ。……ふ〜んだ。そんなこと言うんだったら、あたしにも考えがあるんだかんね」

「なんだよ」

ヴァレンシアは指先を勢いよくシューに突きつけて、

「アマベル様とかローズさんとかミリイさんとかに、ないことないこと全て言いふらしてやるッ！」

「待て！ ないことばっかかよッ!？」

思わず強烈に突っ込んで、さらに頭を抱えるシュー。

「そんなことされてしまったら、俺の爽やかなイメージが台無しに

なってしまうじゃないかああっ！」

「バカ、そんなもん最初からないっつの。……マドレーヌいただきっ」

「あっ！」

「……うんうん、ホント、お菓子の腕だけはまともだねえ」

「あ、あーあ」

シューはそんなヴァレンシアに非難の目を向ける。

「お前なあ。それ、セシルにやろうと思って残しといたヤツなんぞ」

「……うわ！　こんな身近にモノホンのロリコン野郎が！」

「違うわ、アホッ！　あの子はお前と違って、俺のお菓子をホントに美味そうに食ってくれてだなあ！」

「だからあたしも美味しいって言ってあげてんじゃん」

うるさそうにパタパタと手を振るヴァレンシアに、シューはため息を吐いて、

「ぜんっぜん有り難みを感じねえ言い方だな、おい。……で、結局お前は何をしに来たんだよ。何も用事ないんなら、いい加減邪魔だから帰ってくれ」

「あ、そうそう」

その言葉に、思い出したようにポンと手を叩くヴァレンシア。意外にも、きちんと用事があったらしい。

そして言った。

……少々信じがたいことを、いともあっさりと。

「アマベル様、今日は休暇を取ったみたいよ」

「は？」

動きかけて、固まる。

「……え、なに？　よく聞こえなかった」

シューはそう聞き返したが、もちろん聞こえなかったわけではない。聞こえた言葉が信じがたいものだったから、聞き返したのだ。だが、

「だ・か・ら。アマベル様は今日お休みだって」

聞き返しても内容は同じだった。

「……は？」

まさに寝耳に水の話。

「それで今日はローズさんが代理をやるってさ。いや、あたしも昨日のことがあったからまさかと思ったんだけど、どうもホントみたいなんだわ」

「ちょっ……それ、マジかあっ!？」

彼が慌てたのは当然であろう。アマベルとは昨晚、協力してこの問題に当たろうと確認し合ったばかりだったのだ。まして今、彼の方は八方塞がりの状態。彼女頼みという面もかなり大きかったのだから。

ヴァレンシアは頭の後ろで手を組んで、

「マジマジ。でも、アマベル様の性格からして理由もなくすっぽかすってことは考えにくいから、よっぽどの事情があったんじゃない？　なんか遅くまで引継の準備とかしてほとんど寝てなかったみたいだし」

「そりゃそうかもしれんが……そ、そうだ！　そういうことならローズさんに改めて協力をお願いしておかないと！」

「あ。ちよっと、シュー！」

ヴァレンシアの制止の声も聞こえず、シューは厨房を飛び出した。(冗談じゃない……いや、そりゃ頼り切ってたわけじゃないけど、でもこっちがこんな状況じゃ——)

食堂から一階ホールに続く通路を抜け、そこからさらに別の通路へ。大半の使用人たちは敷地内の別の建物に寝泊まりしているが、一部の上級使用人たちはこの別館の中に私室を持っている。

パーラー・メイド長であるローズマリーも当然、この別館の中に部屋があった。

そこへシューは一目散に飛び込んでいく。

「ローズさん！」

バンッ！

「ア、アマベルさんが休暇って本当ですかッ！？ お菓子の件はどうなって——って……うわああああああッ！！！！！」

部屋に飛び込んだはずのシューが、断末魔の叫び（？）とともにすぐさま飛び出してきた。

屋敷内で殺人事件でも起こったのかと思わせる絶叫だったが、もちろんそんなことはなく。

ボタンッ！！

「……シューさん……？」

「はあっ、はあっ！」

ローズマリーの怪訝そうな声。

が、シューはそんな言葉など耳に入っていない模様。

肩で息をしながら真っ赤な顔で、

「ロ、ローズさん！ な、なんて格好してるんですかッ！！」
そう。

部屋にいたローズマリーは上下ともに薄い布を着ただけの姿、要するに下着姿も同然だったのである。

「って、自分の部屋なんだから普通じゃん！」

自分で突っ込みを入れるシュー。どうやらかなり混乱しているようだ。

そして直後、扉の向こうから聞こえてきた声が、彼の混乱に拍車をかける。

「……見られた……」

「うわあああッ！！！」

パニックになったシューは、慌てて扉に向かって土下座すると、
「ごめんなさい、ごめんなさい！ わざとじゃないんです！ ホントです！ 俺なんて口では偉そうなこと言っても、そんなことする勇気のある人間じゃないんです！ マジで！ 信じてくださいいいッ！！」

「……ううっ……」

「ロ、ローズさん――」

混乱した頭でどうにか繋ぐ言葉を必死に検索する。
だが、

「ごめんなさい……」

「……へ？」

思わぬ返答に顔を上げるシュー。

すると扉の向こうのローズマリーは、まるで人生の終わりが迫っているかのような弱々しい声で続けた。

「ムリなんです……私なんかがアメルさんの代役だなんて……ムリ……ムリに決まっています……きつとみんなに迷惑をかけるに決まっています……」

「え。あの、ローズさん……？」

そこでシューは気付いた。……どうやら彼女は、シューに下着姿を見られたことを嘆いているわけではないらしい、と。

そして彼女はさらに続ける。

「一晩中下着姿だったのに風邪も引かないなんて……こうなったら、もう……手首を切るしか……」

「うわあああッ！ い、いきなりなにを言っちゃってるんですかああああッ！！」

慌ててドアノブに手を伸ばしかけ、思わず躊躇する。

（う！ ……そ、そうだ！ ローズさんはまだ下着姿――！）

「ロ、ローズさん！ 馬鹿な真似はやめてください！」

「と、止めないで！ 風邪で倒れられなかった以上、皆さんに迷惑をかけないようにするためには、もうこうするしかないんですッ！
！」

「なんじゃそりゃあああッ！」

彼女の思考回路はかなりエキセントリックだ。

「ちよっ、ま、待ってくださいってば！ だいたいローズさん、そんなこと言って失敗したことなんてほとんどないじゃないですか！
！」

慌てて扉を叩きながらそう主張するシュー。

確かに。このローズマリーという人物は美人だけでなく、気も利く上に礼儀正しく頭も良い、まるで非の打ち所がない優秀な人物なのである。

……ただ一点、この、どうしようもなくネガティブな性格を除けば。

「ふふ……うふふ……これでもう、誰にも迷惑をかけることもないですね……」

「うわあッ！　ロ、ローズさん！　早まらないでくださああいッ！！」

ドンドンと扉を叩きながら、シューの頭の中ではすでに葛藤が始まっていた。

（……扉を開けるんだシュー！　人の命がかかってるんだ！　姿勢好なんて気にしてる場合か！）

（ふん、そんなこと言いながら、本当は見たいだけなんだろう？　なんとって屋敷一の美人の下着姿だもんな、ぐへへへへ）

（ち、違う！　そんなじゃない！　ただ純粹にローズさんを助けたくて——）

（まあまあ、いいじゃないか。俺とお前は一心同体。幸い周りには誰もいないし、遠慮することなんてないだろ？　ドアの向こうにはこの世の天国が待ってるんだぜ）

「う……ううう……」

よくわからない数秒の葛藤の後、シューは意を決した様子でドアノブに手を伸ばした。

「……ご、ごめんなさい、ローズさん！　やましい気持ちなんて神に誓ってこれっぽっちもないんです！　ないですけど……でも人命救助のため、やむなくこの扉を開けさせていただき——ごべえっ！　」

側頭部を突然の衝撃が襲い、まったくの無防備だったシューは情けなくも廊下にキスをするハメになってしまった。

「い、いてて……一体なにが……？」

「本当に救助だけが目的なら言い訳なんてする必要ありませんよ、シュー||タルト」

耳を押さえながら床にはいつくばるシューの頭上から聞こえてきたのは、事務的な女性の声。

「……ミ、ミリィさん？」

顔を上げるシューの眼前に立っていたのは、前髪を僅かに横に流した生真面目そうな眼鏡の女性。レディズ・メイド長のミリセント||ローヴァーズだった。

手には書類を綴ったものだろうか、厚さ十センチほどのファイルを手にしており、どうやらこれがシューの側頭部を直撃したものの正体らしい。

「……ご、誤解ですよ、ミリィさん！」

シューは慌てて身を起こし、即座に弁解する。

「お、俺はただローズさんを助けようと思って！　そ、そりやまずいとは思いましたけど、他に方法が――」

「入るわよ、ローズ？」

ガチャ、バタン。

「つて……ねえ、聞いてよ、ミリィさん……」

が、そんな弱々しい声がドアの向こうに聞こえるはずもなく。

聞こえたところでどうなるわけでもなく。

ガックリと項垂れたシュー。

……と、そんな彼の視界の端に、どうやら一部始終を目撃したらしいヴァレンシアの姿が入ってくる。

「ヴァレンシア……」

シューは助けを求めように彼女を見て、

「なあ、お前は俺の身の潔白を信じてくれるよな……？」

「スケベ」

「うっ」

ぐさっ。

「変態」

ぐさぐさっ。

「覗き魔」

どすっ……ばたっ。

ひゅううううう……

「さーて。あたしもそろそろ朝ご飯食べてこよーっと」

「……」

何故か館内に吹きさらす風の中。

あとに残ったのは無惨な屍のみ。

（お、俺、何か悪いことしたっけか……？）

おそらく、そこまで責められるほどのことはしていないのだろう。
ただ、

（……ああ、でも、ローズさんの白い太股、眩しかったなあ……）

そんなある意味正直な彼の性格が、災いを運んできたのであろう
ことだけは間違いない。

さて、そんな騒動があろうがなかろうが、日はいつもと同じ速度
で空に昇り、屋敷はやはりいつもと同じ時間に活動を開始する。

「……ふうううう」

結局、問題の方は何の解決策も見つからないまま。

ローズマリーに協力をお願いしようにも、あんな姿を見せられて
しまっただけは余計な仕事を頼む気が起ころうはずもなく。

まさに孤立無援。

「誰か俺を救え……」

厨房の隅っこで、シューは途方に暮れていた。

今日はウィンスローとは別の客が午後からやってくる。むしろ屋
敷としてはそっちの方が本命であり、厨房はその準備で大忙しだ。

当然、シューがのんびりと菓子を作っているスペースなどそこに

はなく、

「誰かああああ」

「なんだよ。なに騒いでやがんだ？」

「お？」

救世主出現を期待して振り返ったシューだったが、そこにいた少女の顔を見てすぐさま落胆する。

「……なんだ、ダリアか」

そこにいたのは、このネービスでは比較的珍しい部類であろう褐色の肌にパーラー・メイドの制服。ただし中身は気品などという言葉とは少々無縁に思える少女、ダリアⅡキャロルだった。

「残念ながら、な」

そのサバサバした性格を表すように、彼女はシューの失礼な言い様にもまったく気を悪くした様子はなく、

「お前にしちゃ珍しく景気悪そうな顔してんじゃないか。またフラれたのか？」

「またってなんだよ、またって。言っとくがな。俺は産まれてこの方、女の子にフラれたことなんて一度もないんだぞ」

「フラれるところまでいかねーもんな」

「……否定できん」

シューは降参とばかりに手を広げて、

「ま、けど今回は違う。実はちよっと午前の客に出す菓子の都合がどうしてもつかなくてさ。どこか余所の店で調達しようにも、人手がなくて」

「午前の客？ ……ああ、なんだ、ウインスローか」

少し考えたダリアはまるで気にもかけない様子で、

「んなもん適当にやっつけばいいじゃねーか」

「そうしたいなあ」

そんな二人の発言は、屋敷の使用人としては少々問題があると言わざるを得まい……が、実際のところ、その菓子が出せなかったからといってシューを糾弾する人物はおそらくいない。あるとすれば

アマベルの小言ぐらいのもので、あのおっとりとした当主のフアナはもちろん、その周りの者だって“仕方ない”の一言で済ましてしまふであらう。

ウィンスロー＝スナークウェザーとはつまり、屋敷にとってその程度の存在なのである。

だが、シューはその後に続けて、

「けど、相手が誰だろうと、一度注文受けたら客が満足するもんを用意するのが筋ってもんだしさ。まして、今回はもともとがこっちのミスなんだ」

「へえ」

ダリアは手にしていた空のトレイをクルクルと指先で回しながら、「自分で作ったもんじゃなくてもか？」

「う……そ、そりゃ自分で作ったもんを出すのが基本だけだな」
突っ込みに、シューは少したじろぎつつも、

「けど、それがどうしても叶わなくて、なおかつ別の方法でも客が満足するってんなら、なんとかするのがせめてもの償いだろ？ たたとえばそれが競合店の商品だったとしても、さ。……大事なのは自分のプライドよりも、客の笑顔だからな」

「へえ。ま、あたしにはわかんない話だけど、お前がそう思うならそうなんだろうな」

そう言いながらも、ダリアはピタッとトレイを回す手を止めて言った。

「暇なら手伝ってやりたいとこだけさ。ローズさんの仕事が増えたおかげであたしたちの方にもしわ寄せが来てんだ。わりいな」

「……いや、もともと俺のミスだし」

「ま、ガンバレ」

ドンッ。

「うぷっ」

シューの背中に思いつき張り手を喰らわして、意外に似合っていないわけでもない制服のスカートを揺らしながら、ダリアは去って

いった。

「いてて……ったく。こっちは一般人なんだから、少しは手加減しろよ……」

そんな後ろ姿に愚痴をこぼしながらも、時計を見る。

（……さて、と。本格的にどうにかしなきゃな）

現在午前八時。

ミリセントに確認したところ、約束の時間は午前十時だという。

残りは約二時間、ぐずぐずしている暇はない。

（こうなりや自分の足で探しに行くか……けど、徒歩で片道一時間弱っていうと限られてんなあ）

ネービスの地図を頭に思い描くシュー。

その範囲内にある菓子屋といえば、彼の把握してる限りでは二軒しかない。しかもその二軒はここからだとはほぼ正反対の方向で、つまり訪ねられるのは実質一軒のみということになる。

一軒はここから大通りに出て少し北に行ったところにある新しめの菓子屋。

もう一軒は南の一般住宅街の中にひっそりと立つ老舗菓子屋。

規模から言えば前者の方が大きい。

が、

（マイナーな菓子なら向こうだろうな。……よし。行ってみるか！大丈夫。やるだけのことをやってりゃ、神様だって絶対に微笑んでくれるさ！）

そう決意すると、作業着のままシューは屋敷を飛び出していくのであった。

——そうして歩くこと、約四十分。

パタパタ、パタパタ。

風に舞う白い髪。……いや、紙。

二月も終わりに近づき太陽が顔を出しているとはいえ、地表に吹

く風はまだまだ冷たい。いくらミューティレイクの制服がやや厚手の造りになっているといっても、寒風の中を歩き続けるにはさすがに少々心許ないものだ。

が、そんな寒風の中でシューを突き動かしたのは、信念だった。相手が誰であろうと、注文を受けた以上は満足を与えたい。彼が菓子職人である自分に求めた、最低限のルール。

それがために彼は、やはり菓子屋を営んでいた父と対立し、そして家を飛び出すことになったという過去がある。

だからこそ、そこはどうしても譲れない部分だったのだ。
パタパタ、パタパタ。

また、少し風が強くなってきた。

住宅街の中にひっそりと佇む老舗菓子屋“アズマ”。基本的に中流以上の人々が口にする菓子というものを、それ以下の人々にも楽しんでもらおうと立てられたこの店は、未だに創立者である六十過ぎの老人が菓子を作り続けている。

値段を控えめにしている分、日持ちのしない菓子はほとんど扱っていない。つまり大半が焼き菓子か乾燥菓子だ。

パタパタ、パタパタ。

彼が求めるものを取り扱っている可能性も低くはないだろう。おそらく五分五分といったところ。

――が、しかし。

パタパタ、パタパタ。

シューの背後を、一組の親子連れが通りかかる。

「……ママー？ あのお兄ちゃん、なんでお店の前で土下座してるのー？」

「しっ」

風が吹いた。

パタパタ、パタパタ。

店の門でたなびく、一枚の紙切れ。
そこには、こう書かれていた。

“店主、ギックリ腰のため、休業中”

「……」

五分五分の可能性は、呆気なくゼロになっていた。

「……ママー。あのお兄ちゃん、なんでお店の前でねんねしてるの
ー？」

「しっ。指さすんじゃないません」

もう一度風が吹いた。

「……うああ」

ゴロゴロ、ゴロゴロ。

「うああああああ」

ゴロゴロ、ゴロゴロ。

「ママー。あのお兄ちゃん、なんで――」

「近付いちゃダメよ、リョーちゃん！ ほら、行きましょ！」

「……うがあああッ！」

「！」

突然奇声を上げたシューに、親子連れが弾かれたようにその場から逃げ出していく。

が、当人はそんなこと気に掛ける余裕もなく、

「神よ！ 寒風の中を歩いてきた俺の努力は！？ 俺の信念は！？

この世は鬼と悪魔しかいないのかジーザスラブフォーミーイイイ
イイイッ！！」

まあ、思わず叫んでしまう気持ちも多少は理解できる。

が、そんなところでいくら意味のわからないことを叫んでみたところで、奇跡が降臨するはずもなく。彼に与えられるのは努力に対する祝福どころか、周りからの奇異と憐れみの視線のみだったのである。

「……はあ」

短くなった影を辿りながら、疲労と空しさを引きずるようにして
帰路につくシュー。

眩しい太陽は少しずつ頂点に近付いていた。

正確な時間を把握する術はなかったが、感覚的におよその時間
は掴める。

「あとだいたい三十分ぐらいか……はあ。屋敷に戻ったらいい時間
だろうなあ」

憂鬱を踏みしめながら一步步屋敷への道を辿っていく。

もはや為す術はない。

「ははっ……ったく、お笑いぐさだ」

太陽を見上げながら嘲笑を漏らす。

「この程度の注文もどうにかできねーで、なにが菓子職人だ」

おそらく今回の出来事で彼を責める者はいない。

ただ一人。彼自身を除いては。

「ハア……」

道ばたの石ころを蹴り飛ばす。

コロコロ、コロコロ。

大通りから西へ。ミューティレイクに続くやや広めの通り。

もう一度小石を蹴る。

コロコロ、コロコロ。

「お嬢様に頼み込んで、直接謝らせてもらおう……はあ」

それで気が済むわけではない。が、何もしないよりはマシだと思
えた。

「……くそ」

コロコロ、コロコロ……コツン。

「あ」

苛々して周りを見る余裕がなかったせいだろう。もう一度蹴り飛
ばした小石が、少し早足で横を通り過ぎた女性のかかさに当たって

しまった。

「す、すみません」

「え？」

不思議そうな顔で振り返る女性。どうやら小石が当たったことに気付いていなかったようだ。

それでもシューはペコペコと頭を下げながら、

「あ、いや、ちょっと苛々してて、石を蹴ったら当たっちゃって……」

「え。あ、いえ、平気ですから」

女性は二十代半ばぐらいだろうか。身長はやや高めでシューと同じか若干高く、手には包みのようなものを持っている。どこことなく気品のある出で立ちだが、一人で歩いているところを見ると貴族の娘というのではなく、どこかの屋敷に勤める上級使用人といったところか。厚手の上着の上からでもわかるほどにスタイルがよく、上品なシニヨンスタイルの髪が魅力的な――

「って……アマベルさんじゃないですか！」

「えっ？ あ、シューさん！？」

ビックリしたのはどうやらアマベルも同じらしい。

そして、

「「こ、こんなところでなにやってるんですかッ!？」」

見事にハモった。

その後、お互いに何度か譲り合いつつ、結局シューの方から喋り始める。

「なにやってるって、俺は例の菓子調達に動き回ってるところですよ。アマベルさんの方こそ！ 急に休暇なんか取って、こんなところで一体なにをしてるんですか!？」

別に責めるつもりではなかった。

彼はアマベルの真面目な性格をよく知っていたし、おそらく十分に納得できるだけのやむを得ない理由が必ずあるはずだと信じていたからだ。

が。

彼女から返ってきた答えは、彼の予想を裏切った。……ある意味。

「なにをって、決まってるじゃないですか」

何をわかりきったことを、とでも言わんばかりの表情でアマベルは答えたのだ。

「近くの店を当たってくれと言ったのはシューさん、あなたの方ですよ。もう忘れたんですか？」

「……へ？」

思わず間拔けな顔をしてしまうシュー。

「なかなか骨が折れましたけど……でも、どうにか八軒目で目的の物を見つけることができましたよ」

そう言って、手にしていた包みを示すアマベル。

「……」

シューは無言のまま包みを見つめた。……確かに。その大きさは丁度菓子折ぐらい。包みに刻印された店名らしきものも聞き覚えがあるものだ。

「……」

さらに無言のまま、ゆっくりと視線を上げるシュー。

そこにあったアマベルの顔はどことなく誇らしげだった。

「……あの、アマベルさん」

そしてシューは確認するように、尋ねる。

「もしかして……自分の足で、朝から街を歩き回ったんですか？」

「え？ いえ、日が昇ってから出発したのでは遅いと思って、日が昇る少し前ぐらいに屋敷を出しましたが、それがなにか？」

「あ、いや、そういうことじゃなくて」

「？」

アマベルはきょとんとした顔をする。

質問の意味が理解できない、といった様子だ。

シューはさらに言った。

「あの、俺が頼みますって言ったのは、誰か使いの都合をつけてく

ださいってことで……それにアマベルさんの権限なら、屋敷の馬車とかも普通に使えるでしょうし……ていうか、普通そうするでしょう？」

「え？」

「だいたい、ただでさえ忙しいアマベルさんにそんな無茶なことお願いするわけないし……なによりどう考えたってそんなの効率悪いじゃないですか。」

「え？ え？」

さらに困惑した表情のアマベル。

そんな彼女の態度は真偽のほどを確認するのに充分すぎるものだったが、シューは敢えて再確認した。

「もう一度聞きますけど……本当に自分の足で？ わざわざ休暇を取ってまで？」

「……」

片手を口に当てたまま、アマベルは固まった。

それから視線を泳がせ……少しずつ頬が赤くなり始める。

そして――

「……ぷっ」

「！」

吹き出す音に、アマベルがビクツと震えた。

「くくっ……あははははははっ！」

「シュ、シューさん！？ わっ、笑うことないじゃないですかッ！」

「い、いや……くくっ……だって！ ど、どー考えたって、ふっ――

……あははははははっ！！」

腹を抱えて笑い転げるシュー。

「俺、アマベルさんのそーいうところ、めっちゃ好きだー！ すげー真面目なのに変なところで抜けてるってゆーか……あはははは、ロ、ローズさんも災難――げほげほッ！！！」

「……！ も、もう、知りませんっ！」

笑い止む気配のないシューに、ついにアマベルは真っ赤な顔を俯

けたまま背を向け、ズンズンと歩き出してしまった。

「げほっ、げほっ……あ、あ、待って、待って……謝ります、謝りますか——げほげほッ!!」

「こ、こんなに苦労したのに……ぐすっ」

そんな呟きも、笑い転げるシューの耳に届くことはなく。

「あ、あ、待ってくださいってば! ホント、マジで感謝してますからアハハハハハハ!!」

「……感謝しなくていいから、もう笑わないでッ!!」

悲鳴のようなアマベルの声が通りに木霊して。

そうしてまったく対照的なテンションのまま、二人は屋敷へと戻っていくのだった。

……そしてその十数分前、ウインスローの使いから訪問キャンセルの連絡が入っていたことを、二人はまだ、知らない——。

その1『まずはゲーム探しから』

（こいつらは確か……地の六十三族——！）

大陸でも最北に位置するという関係上、ネービス領というのは決して交通の要所というわけではない。どちらかといえば“遠い国”というのが、一般の人々の共通認識だろう。

にも関わらず、領内にいくつかある街道を馬車が頻繁に行き交うのは、学問を修めんとする人々を中心に、それだけ物資の需要量自体が多いためである。

さて、それらの馬車たちの主な終着点であるところのネービスの街。そこへ達するための道筋は主に五つだ。

西に接するモンフィドレル領からのルートが主に一つ。ネービス最西端の都市グランドウッドを通り、ネービスの中央付近にあるラグレオ山を北に迂回してホルヴァートからネービスへ到達する道だ。そしてネービス領の南と東を覆うように接するグレシット領からは、国境付近に位置する街——かつては領土を守るための城塞都市であったユーイング、スタークホルム、ベルン、ヴァニリッツという四つの都市をそれぞれ経由する道。

このグレシットから繋がる四つの道のうち、東のヴァニリッツ以外の三つのルートを辿る人々は、次にネービスの街からすぐ南にあるルナジェールという大きな街を目指すのが常套だ。

ルナジェールの街。

首都ネービスから直線距離で四十キロ程度だろうか。馬車なら朝に出発すれば夕方頃には楽に辿り着けるし、徒歩でもその日のうちに辿り着くことは十分に可能だろう。

元は首都ネービスを守るための最重要拠点として繁栄したこのルナジェールの街は、今はネービスへ向かわんとする様々な人々のための中継地点として大きく栄えていた。他の領土からネービスへと

やってくる人々の、実に八割弱がこの街を一度は訪れることになるのだから、それもそのはずである。

当然、ルナジェールからネービスへと続く街道には嚴重な警備が敷かれており、一時間に複数回、警邏隊が巡回を行っている。賊が出没すれば瞬く間に制圧され、魔が出現すればネービス公直属のデビルバスター部隊“ネスティアス”がすぐさま飛んでくる。

その街道は、ヘタをすればネービスの街そのものよりも安全だ……などと、真顔でそんなことを口にする者さえいるほどだった。

さて。

この物語の主人公であるところのティーサイトⅡアマルナが獣魔退治の指令を受けたのは、四月初日のことだ。……いや、実際に獣魔に遭遇したこの日が四月の初日なのだから、正確にいうと指令はそれ以前に受けたものということになるか。

まあ、それはともかく。

このティーサイト——通称ティースはつい先頃、何やら成り行きっぽい展開でディバーナ・ロウの第四隊、通称“ディバーナ・ゼロ”の隊長に任じられた。

そしてこの日も唯一の“部下”であり、自らよりもディバーナ・ロウの在籍期間が長く、それ以上に遙か上の実力を備えるデビルバスター、アルファⅡクールラントを引き連れ、現場にやってきている。

その現場とは、ネービスとルナジェールを繋ぐ重要な大街道……などではもちろんなく、そこからだいぶ北東に外れた小さな街道のそばだ。平坦な道が多い大きな街道とは違い、整備もそれほど行き届いていない、非常に馬車通りの少ない街道である。

ただそうはいってもそれが道である以上、多かろうと少なかろうと利用する人は存在するのであるから、何も卑下することはない。立派な任務である。

それにまあ……今の彼の状況から言って、あまり極端なプレッシャーのかかる任務は到底不可能だという事情もあるわけで――

昼下がりの荒野の中。

しん……と、一瞬だけ静まり返る。

聞こえるのは微かな振動。

足の裏から伝わる微かな振動。

――何かが、地面の中を動き回る音。

「アルファ！」

大きめの岩山を背にしたまま愛剣“細波”を構え、油断無く辺りを窺いながらティースは叫んだ。

「そいつら、どっから飛び出してくるかわからない！ 何か障害物を背にして戦うんだッ！」

言ったそばから、ティースの真横の土が盛り上がる。

「っ……！」

ティースは即座に反応した。

飛び出してきたのはモグラのような形をした“地の六十三族”。

体こそ人間の半分もないが、両手の鋭い爪で土の中を高速で移動し、瞬時に飛び出しては獲物を切り裂く厄介な獣魔だ。

本来、その素早い動きと土を隠れ蓑にする戦術に手を焼くところだったが、今のティースのように大きくて堅い物を背にして戦えば話は別である。

背後から襲われる心配さえなければ、それほど手強い相手ではないのだ。

細波が獣魔の腹を真一文字に切り裂く。手の平に確かな感触。それが確実に致命傷であることを確認し、ティースは次の襲撃に備え、すぐに体勢を立て直した。

そして、

「アルファッ！！」

もう一度叫ぶ。

その視線の先。

——その声を向けられた人物——アルファ・クールラントは何もない場所に立ち尽くしたままだった。

長い銀色の髪と季節外れのマフラーが風に踊る。

構えるわけでもなく。

視線を巡らせるわけでもなく。

まるで倒されるのを待っただけの木偶の坊のように。

「アル——」

だが、もちろんそうではなかった。

それはティースの言葉が途中で途切れたことから容易に推察できる。

……前触れもなく、彼の背後から飛び出す地の六十三族。彼らは土の中からでも相手の背後を取る術を知っており、そうすることで獲物の反応が遅れることを知っていた。

しかし——彼らの爪が切り裂いたのは空気と、残像。

明確な感情など持っていないはずの獣魔が、驚愕にも似た反応を示す。

風か。

雲か。

……いや。

光だった。

「つ……」

何度も見たはずのその光景に、ティースはまるで色褪せることを知らない戦慄を覚えてしまう。

一閃。

まさに言葉通りの、一瞬の煌めき。

アルファの持つ光のスピア“誘蛾灯”が獣魔を切り裂く。

目にも止まらぬ動き。

それ自体は他の人物でも何度か目にしたことがある。デビルバスターと呼ばれる人々は総じて、人の目にも止まらない動きを見せる

ことがあるからだ。

しかし——それらとは少しだけ違う。

他の者たちのそれが一瞬の爆発的なイメージであるのに比べ、アルファの動きはあまりに造作なく、一連の動き全てが速かった。

表情が動かないせいもあるだろうが、そこにはある種の余裕すら感じてしまう。

真っ二つになって地面に落ちる獣魔の体。……いや、それは地面に到達する寸前、さらに四倍ほどの数のパーツに分裂して落ちる。

高速。

いや“光速”と言っても過言ではない。

その圧倒的な力の前では、獣魔が遠い昔から培ってきた戦術などまるで無意味。

「……」

そしてティースはただ、呆然とその姿を見つめていた。

いや、違う。

見つめている以外に、やるべきことなど存在しなかったのだ。

戦術などとうに超越し、造作もなく獣魔を屠っていく彼——アルファ＝クールラントの前では——

「……はあ」

翌日の朝は何ともいえない虚脱感に包まれていた。……とはいえ、外は文句のつけようがない快晴。暖かさを増す春風は肌に心地よく、庭を見渡せば色付き始めた木花が心を踊らせる。

そんな最高の朝にも関わらず虚脱感が先に立ってしまうのは、もちろん当人の方に問題があるに他ならない。

ミューティレイクの二階にあるティースの自室。

備え付けの机の上には資料のようなものが山積みになっており、崩れた一部の資料が足元にも散らばっている。

ベッドの上には寝癖のついた頭を撫でつけながら浮かない顔をする部屋の主。

チラッと机の上の資料の山を見つめ、そしてもう一度、

「……はああああ。うまくいかない」

ため息と同時に、半分諦めたような呟きが口から漏れる。

なんともため息の似合う男だ。

とはいえ、そんな彼の心情も理解できないわけではない。

彼が第四隊の臨時隊長となってから早三週間。その間にこなした任務は三つ。もちろんどれも彼の身の丈に合った任務ばかりで、先の街道での任務もその一つだった。

——ミスらしいミスをしたわけではない。突然隊長に任じられて、慣れないことをやらされているわりには健闘してるといつてもいいだろう。もちろん机の上の山を見ればわかるように、その陰には彼の涙ぐましい努力があるわけなのだが……しかし。

実のところ彼に期待されているのは、ただ単に任務をこなすという、ただそれだけのことではなかったのである。

（……やっぱ無理だ。だいたい向こうにその気がないのに、どうやって打ち解けろっていうんだ）

彼の部下、アルファークールラントは一匹狼だ。

この三週間、ティースは自らの中でまだ燻っていたわだかまりを投げ捨て、少しでも彼の内面に迫ろうと挑戦してみた。何度も何度も話し掛け、あるいは協力を呼びかけ、そして任務の際にはフォロ―することを試みた。敬語を止め、対等な言葉遣いをするようになったのも、多少強引に近付いてみようと考えた末のものだ。

しかし、悲しいかな。

その結果、結局わかったことといえば、彼が屋敷の誰ともほとんど交流を持っていない真正正銘の一匹狼であるということと、そして彼が、他人の助けなどほとんど必要としないほどの、とてつもない実力の持ち主であるということだけだった。

「あーあ……」

ぼふっとベッドに寝転がり、天井を見上げる。

（ファナさんは信じてるなんて言うけど、でも、あいつに人間らしい心があるなんてとても思えないよ……）

どちらかといえば他人の善意を信じるタイプのティースがそう感じるのだから、よほどのことだ。確かに、これほどまでに人間らしい仕草を見せない人物が相手とあっては、彼がそう考えてしまうのも致し方ない。

（……よし。ファナさんには悪いけど、いい加減辞退させてもらおう。こんなこといつまで続けてたって——）

彼がそんな決意をし、ベッドから足を下ろしたときであった。

コン、コン。

控えめなノックの音。

「？」

時計を見る。掃除の時間にはまだ早い。

「誰だ？」

問いかけに返ってきたのは、明るい少女の声だった。

「あ、ティースさーん。おはようございまーす」

「え？ セシル？」

「はあい」

「あ、ちょ、ちょっと待って」

意外な人物の突然の来訪に、ティースは少々慌てる。

その人物、セシル……セシリアレイルーンは、この屋敷に住む十三歳の少女だ。

ティースにとっては女性であることを意識せずに話せる年齢の相手であり、また彼女の方も話しやすいからと言って比較的彼に懐いている。いわば可愛い妹分だった。

だから彼が慌てたのは、別にそれが恋焦がれる相手だったからとか、逆にとてつもなく苦手で大嫌いな相手だったから、というわけではない。もちろん見られてマズいことをしていたわけでもない。

では、何故慌てたのかというところ――

「お、おはようセシル」

寝癖を押さえつけながら扉を開けると、そこに立っていたセシルは大きく可愛らしい瞳でティースを見上げて、

「おはようございます、ティースさん。今日も昨日と同じでいいお天気ですよ」

「あ、ああ、そうだなあ」

屈託のない笑顔に、ティースの胸を過ぎったのはほんの僅かな後ろめたさ。

だが、セシルの方はそんな彼の心情など察した様子もなく、

「こういう日は外に出て、太陽をいっぱい浴びながらもみんなと一緒に昼寝するのです。ポカポカしてすぐ気持ちいいですよ」

「はは……いきなり昼寝するんだ？ 遊んでからとかじゃなくて？」

「え？ ……あ、ひどいです、ティースさん」

「へ？ なにが？」

いきなり不満そうに口を尖らせたセシルに、ティースがわけもわからず聞き返すと、

「今、そんなだから一ヶ月前に履けたはずのスカートが履けなくなるんだぞ、とか思いました？ 思いましたね？」

「いや！ いやいやいや！ そんなことこれっぽっちも思っていない――っていうか、俺が知るわけじゃないよそんなこと！」

弁解する彼の言葉は至極もつともな話であったが、それでもセシルは口を尖らせたまま俯いて、

「いいんです、事実ですから。……でも、女の子にそんなひどいことを言うティースさんは赤点です。落第で再試験で丸刈りです」

「……ま、丸刈りはさすがに嫌だなあ」

苦笑。

いい加減、ティースも彼女のこういう反応には慣れてきており、それが楽しく感じるようになっていたし、また微笑ましくもあった。

「それで？　今日はこんな朝早くからどうしたんだい？」

その問いかけに、セシルはパツと表情を変えて、

「あ、そうでした。……実はですね、ティースさんにもプレゼントがあつて持ってきたんです」

「プレゼント？　今日ってなんかあつたっけ？」

何も思い当たらずにティースは首を捻る。

彼の十九歳の誕生日は一ヶ月前に過ぎていたし、その他、プレゼントをもらうような心当たりもなかった。

と、そんな彼の疑問にセシルは明るく答えて、

「ティースさんは特別です。いつでも感謝感激雨霰日和ですよ」

「あ、雨霰日和？　変な日和だなあ」

独特の物言いにもう一度苦笑。

「でもなんで俺が特別なんだ？　俺より仲のいい人なんていっぱいいるじゃないか」

そう問いかけたティースに、セシルはニコニコしながらさも当然のように答えた。

「だってティースさんは、お兄ちゃんとともに仲良くしてくださいさるのです」

「……」

胸がチクリと痛み、ティースは思わず視線を泳がせた。……彼女の顔を見た瞬間に感じていた後ろめたさが、再び胸に浮かび上がる。そう。

信じがたいことだが、あのおよそ人間らしくない冷徹なアルファと、この暖かく朗らかな少女セシルは、兄妹なのである。

「お兄ちゃんはちょっとだけ照れ屋さんなので、あまり屋敷の皆さんとお話できないのです。でも、ティースさんがいてくださるおかげで、お兄ちゃんは私がいないときでも一人つきりにならなくて済みます。……一人つきりはとても淋しいのです」

笑顔でそう続けたセシルに、ティースは聞こえない程度の小さなため息を吐く。

(……ちょっとだけ照れ屋さん、か)

もしそうであつたなら、どれだけ気が楽になることだろう。

だが現実には、ちょっと照れ屋さんどころか、そういう類のもので
すらない。

それはいわば“断絶”だ。

何事を問いかけても返ってくる答えは全て事務的、機械的。そこに感情が入り込むことはなく、言葉の全ては状況描写に過ぎない。言葉は通じて、心が通じることが決してない。……言葉の通じない犬や猫の方がよっぽどコミュニケーションが取りやすいとさえ言えるだろう。

完全にお手上げだった。

微かな光さえ見えない。

だからこそ彼は、白旗を掲げることを決断した。そしてその判断は客観的に見ても、決して間違つてるとは言い切れないものだ。

だが――

「だからティースさん。これからお兄ちゃんと仲良くしてあげてくださいね」

「……」

そんな笑顔を目の前にすると、ティースの決心はまた揺らいでしまふのだった。

その日の朝食後。

「タナトス、ネアンスファイア、ヴァルマシード、そしてベルリオーズ」

アオイの口からその四つの単語が飛び出したのは、もはや恒例となった一階ホールでの勉強会の際であった。

「――今日は私たちディバーナ・ロウを取り巻く状況について、少し詳しくお話したいと思います」

冒頭でそう切り出し、その後に出てきたのがその四つの単語。そのうちの一つはティースにも聞き覚えのある単語であり、そこから推測すれば、他の三つがどういった意味の言葉なのかも容易に推測できた。

「主にネービス近辺……中には大陸全土に及ぶものもありますが、そこに悪名を轟かせるのがこの四つの組織ですね」

ティースは真剣な顔で耳を傾ける。

——大陸のあらゆるところに存在する“魔の組織”。

それらは規模も目的も千差万別。二、三人で徒党を組んだだけのものもあれば、国家に脅威を及ぼすほどに統率された集団もある。ただ人を襲うことを楽しむものもあれば、何らかの明確な目的を持って戦いを仕掛けてくるものもある。……中には以前ティースが協力したキュンメルのように、救済を目的とする組織もあるだろう。

それだけ様々な組織が存在するのだから、この大陸で起こる魔絡みの事件の確実に何割かは、彼らが糸を引いていると言って過言ではない。とするならば、彼らの目的や行動理念を事前にある程度理解しておくことは、任務の際の判断材料として大きな意味を持つことになるのである。

もしも“隊長”として指揮を執る立場であるならば、なおのこと。「まずはティースさんもよくご存じのタナトスですが……」

おそらくはアオイも、彼にそういった意識が多少なりとも芽生えていることを感じ取って、この話を切りだしたのだろう。

「彼らは“ニューバルド”と呼ばれる氷の将魔を総帥とする、比較的小規模の集団です。その他、幹部と呼ばれる将魔の存在が数人確認されているものの、明確な組織としての形態を取っているわけではありません。普段は半ば好き勝手に動き、必要に応じて招集される……そのためか個々が様々な場所で様々なタイプの事件を起こし、その真の目的もいまいち知れません。ただ、一つだけはっきりとわかっていることは——」

眼鏡の奥の穏やかな瞳が一瞬だけ細められた。

「私たちデイベーナ・ロウを執拗に狙っているということ。そして私たちにとっても、仇敵と言っても良い存在であるということです」そこに、普段の穏やかな彼には似つかわしくない炎が宿る。

「……」

もちろん、その理由をティースは知っている。

四年前の五月。

その雨の夜にミューティレイクはタナトスの大規模な襲撃を受け、当時のデイベーナ・ロウは壊滅した。デビルバスター、隊員、使用人、そして前当主——つまり現当主であるファナ||ミューティレイクの父親まで、数多くの人々が命を落とし、当時、屋敷にいた者で難を逃れたのは、両手で数えられるほどの人数だという。その、実に十倍以上もの人間がそこで命を落としたのだ。

彼らの慰霊碑が敷地の隅にあり、そして毎日必ず誰かがそこに黙祷を捧げているのを何度も目にしていた。

「ただ——」

アオイは一つ息を吐いて気持ちを切り替えたらしく、再び穏やかな表情に戻って、

「実はタナトスという組織の危険度は、五段階で下から二番目程度でして、一般的な話で言えばそれほど取るに足らない存在なんです」「え?」

「意外ですか?」

そんなティースの反応を予想していたらしく、アオイはそう言うて少し笑う。

「そ、そりゃ、あれだけの力を持ってる奴らが取るに足らないだなんて……」

それは彼には想像できない世界だった。

だが、

「いえ、彼ら個々の力が取るに足らないというわけではありません。確かにタナトスの幹部たちはおそらく全員が強大な力を持っていますし、それは他の組織の中核を成す魔よりも強力かもしれません。」

……ただ、彼らの人数、目的、行動、それらを全て総合した上で、国家を転覆させるほどの力は持っていないという判断なんです」

「国家転覆……」

それもまた、なかなか想像しきれない規模の話だった。

「逆に言うと、そういう可能性を持つ組織も実際に存在しているということです。ヴァルマシードやベルリオーズという二つの組織は、そういった意味でネスティアスが警戒している連中ですね。ただ、逆にそういう連中は私たちと関わることはあまりないと思いますから……関わることはあるとすれば、残る一つのネアンスフィアでしょう」

「ネアンスフィア……？」

ティースは腕を組んで少し難しい顔を見ると、

「そういやその名前、どっかで聞いたことあるんだよね……」
首を捻る。

「ええ。一般的な知名度でいえば、おそらく先ほど挙げた四つの組織の中でもっとも上だと思います。活動範囲も大陸の広範囲に及んでいますから」

そして、一呼吸。

「――デビルバスター・ハンターズ」

「え？」

「と、そう呼ばれることが多いですね、彼らは」

「デビルバスター、ハンター……？」

復唱して、その意味を理解しようと試みるティース。

もちろんハンティングするデビルバスター、などではない。

「デビルバスターを狩る者……？」

アオイは頷いて、

「ええ。彼らはまさにハンティングをする感覚でデビルバスターの命ばかりを狙うのだそうです。正確に言えば一つのまとまった組織などではなく、同じルールに則ってそのゲームに参加する複数の魔の組織をまとめてネアンスフィアと呼びます。もちろん相手が相手

ですから、それは彼らにとっても命がけのこと。……そういう狂った連中です」

「……」

ティースにしてみれば、デビルバスターというのは雲の上の存在だ。デイバーナ・ロウの四人のデビルバスターも、これまでに何人か出会ったその他のデビルバスターも、全員がとんでもない実力の持ち主ばかりだった。

そんな彼らばかりを付け狙うデビルバスター・ハンターズ―ネアンスフィア。

「そ、想像できない世界だなあ……」

もちろん想像できるはずはなかった。

この数日後、彼自らがそんな危ない連中と関わってしまうことになるなどとは。

「……また、増えてる」

書物というものは基本的に、というより至極当然のことなのだが、どこからでも読むことができる。内容の理解ができないとか、物語がつまらなくなるだとかそういったリスクはあるにせよ、いきなりページの最後から読み始めることだってできるし、それは全て読み手の自由だ。

が、しかし。

今、彼女―シーラリスノールの中にある重厚な黒表紙の書物は、そんな常識をまったく無視した代物だった。

ページをめくる乾いた音が室内に響く。

「この前までは白紙だったのに……」

そんな彼女の呟きを、もしも間近で見ている者がいたとしたら、あまりの不思議さに首を傾げることだろう。

何故なら、目を細めながら彼女が見つめるそのページも、それ以前のページも、それ以降のページも、最初から全て白紙だ。……不自然なほどに白。古い書物に見られる黄ばみすらも見当たらない。そのはずだった。

だが、

「……腐食の楔を……征服する……腐食の楔？」

そう呟く彼女の目は、間違いなくその白紙を捕らえている。暗唱しているようにも思えないし、どうやら彼女の目には文字が映っているともて間違いないだろう。

片手に古代文字の辞典を手にしていると、おそろくは古い文字で書かれた何かが。

あまりに不気味な代物だ。どう考えてもまともなものではない。もちろん彼女自身もそれを認識しているようで、普段は鍵付きの箱にきちんとしまっていたし、他人の目に触れさせないようにもしているようだった。

コン、コン。

「！」

ノックの音に、シーラは本を素早く机の下に隠した。そして平静の声で問いかける。

「誰？」

振り返ると、金糸のようなポニーテールの髪が揺れる。これ以上ないほどに整った美貌が部屋の扉へと向けられた。

声が返ってくる。

「シーラ様。私です」

「リィナ？」

シーラはホッと息を吐いてすぐに席を立て扉へと向かう。そして彼女の表情に、旧知の友に対する親愛の笑顔が溢れた。

「どうしたの？ ……あら。エルも一緒だったのね」

「シーラ、元気だった？」

そこに立っていたのは、身長百八十センチはあろうかという長身

の女性と、対照的に百四十センチ半ばしかない小柄な少女。

リィナⅡクライストとエルレーンⅡファビアスは、このミューテイレイクで使用人として働く、少々ワケありの二人だ。そしてシーラにとっては先ほど述べたように旧知の仲であり、気の置けない親友なのである。

完璧な美貌を持ち、どこか気高く隙のなさそうなシーラ。

女性としては高すぎる身長に、穏やかで優しい暖かさを持つリィナ。

そして小柄で愛らしい外見に、やはり明るい笑顔のエルレーン。なんともバラバラな個性を持つこの三人は、その華やかさも手伝ってか、最近では屋敷でも有名なトリオとなりつつあった。

が、当の三人はそんなこと気にした様子もなく、

「ちょうど、リィナと同じ時間に昼休みをもらえたんだ。それで、シーラも今日学園休みだって聞いてたから、お昼を一緒しようかと思ってる」

エルレーンの言葉に、隣のリィナが同意して頷く。

「昼？ あ、もうそんな時間？」

意外そうに時計を見るシーラに、エルレーンはクスクスと笑って、「どうしたの？ 好きな男の子のことでも考えてた？」

「まさか。そこまで時間を持て余してないわ」

シーラはさらっとそう返して、

「じゃあ、どうしましょうか？ ホールに行く？ それとも――」

「ここにしょ。ホールも楽しいんだけど、たまには三人水入らずもいいでしょ？」

「葉草臭い部屋でも？」

シーラが冗談めかしてそう言うと、エルレーンはお人形さんのような小さな頭をキョロキョロと動かして、それからニッコリ微笑むと、

「大丈夫。シーラはとってもいい匂いだから」

「なんか微妙ね、それ」

苦笑するシーラに、あとから小さくお辞儀して入ってきたリイナも、ほんの少しだけ鼻を動かしながら、

「これ、何かの香草ですね。すごくいい香り……」

シーラは答えて、

「ええ。香水にも使われるいくつかの香草を自分でアレンジしたものよ。……テーブル、少し小さいけど。二人ともそっちのソファに座って」

「あ、自分で作ってるんだ。シーラ、いつもいい匂いだもんね」
エルレーンはちょこんとソファに腰掛け、それから手にしていたバスケットをテーブルの上に乗せる。

その隣に座ったリイナも頷きながら、
「爽やかで気品があって、私もシーラ様にピッタリの香りだと思います」

「そんな大層なものじゃないわ」

その謙遜は香草の調査技術に対するものか、あるいは自分自身に対するものか。とにかく、そう言いながらシーラは自らもソファに腰を下ろした。

リイナが昼食の準備を始める。

そのバスケットを開いた途端、リンゴの甘酸っぱい香りが漂った。
「あら……」

思わず声を漏らしたシーラに、その反応を期待していたのかエルレーンは嬉しそうに、

「リンゴ、好きだったよね。ちよつと季節が違うけど、コックさんに干しリンゴをもらったから」

リイナがそれにつけて、

「こっちのリンゴは真っ赤なんですネ。向こうでは黄緑色のものしかないの、初めて見たときはビックリしました」

「こっちにも赤以外のリンゴはあるわよ。でも、確かに赤の方が一般的ね」

シーラはそう答えながらも、何事か気にしたようにチラッと扉の

方を見る。

「あ、心配しなくても大丈夫だよ、シーラ」

その理由を察したエルレーンがすぐにそう言った。

「声が伝わりづらいように、ちよつとだけ空気の流れを調整してるから、ちよつとぐらいそつちの話をしても平気」

言って、少し指先を振ってみせる。

ひゅうつ、と、窓の閉じた部屋に、微かな風が吹いた。

「……便利ね」

「それでも“元”王族だから」

冗談っぽくエルレーンはそう言った。

彼女たち——リィナとエルレーンは元々、人ならざる者、つまりは人魔だ。

二ヶ月ほど前“朧”というアイテムによって人に姿を変えたために魔力の大半を失った。が、それでも元が強大な力の持ち主であるため、今もそれなりの魔力を行使することができるのだ。

もちろん、その正体を周りに知られるわけにはいかない。魔であるということは、たとえば事実がそうでなくとも、人間に恐怖を与えるものだから。

——とはいえ。

「それに朧の効果は完璧だもん。ちよつとした話を聞かれたって証拠なんてないし、確かめる方法もないよ」

もつともな話だった。シーラも納得して、扉から視線を戻す。

そうして賑やかな昼食が始まった。

内容は主にリィナやエルレーンの仕事の話、あるいはこの四月からサンタニア学園の薬草学科に復学したシーラの学業の話。

同じ屋敷内で過ごしているとはいえ、三人が一同に会す機会はそれほど多いわけではなく、その分だけ話は弾む。

性格はもちろんのこと、立場、あるいは種族すら違う三人ではあったが、端から見てる限りは普通に仲の良い少女たちとなんら変わらなかった。

と、そんな中、

「そういえば……二人とも、“腐食の楔”ってなんのことかわかる？」

「え？」

「腐食の楔、ですか？」

ふと尋ねたシーラの言葉に、呆気に取られた顔をする二人。

彼女がそれを尋ねてみたのは、ほんの思いつきだった。少なくとも一般的に意味の知られている単語ではなかったし、それならばダメ元で“一般外の知識”を持ち合わせているであろう彼女らに聞いてみようか、と思い立ったのである。

が、それは思いの外、素晴らしい閃きだったようで、

「それは魔界の言葉で、ということですか？」

首を傾げながら聞き返したリイナに、シーラは少し驚いた顔をして、

「知ってるの？」

リイナは頷く。

「はい。最近ではあまり使われなくなりましたが“腐食の楔”というのは魔界では幻覚能力を指す言葉です」

「幻覚能力？」

「油断とか心の隙間を突いて間接的に攻撃する性質から、昔の人がそういう言い方をしたそうですよ」

「……」

その言葉に少し考え込むシーラ。

やがて少し真剣な表情になって、

「……ねえ、リイナ。もう少し詳しく話してもらえる？」

「え？ それは構いませんが……」

リイナは戸惑うような素振りを見せたが、それでもすぐに答えて、

「シーラ様は魔の十属性について知ってますか？」

「ええ。少し勉強したわ」

「でしたら……幻覚能力は十属性の一つ、幻の魔が使う力のことで、

大きく“感情”“五感”“記憶”の三つに分けられます。基本的には、対象者に錯覚を起こさせる能力です」

「錯覚？」

「はい。……疑惑を不信に、怒りを殺意に、主に扇動や不和を起こさせるために使われるのが“感情”の幻覚。ナイフを一輪の花に見せかけたり、私の声をエルさんの声に置き換えたり、あるいは小石がぶつかった程度の痛みを激痛に変えたりするのが“五感”の幻覚。そして記憶の混乱や置き換えをするのが“記憶”の幻覚です」

「……」

整理するかのように少し視線を泳がせるシーラ。

その説明自体は、言葉そのものから受ける印象と大差なく、容易に理解することが出来るものだった。

「私もそれ以上となると、あまり詳しいことはわからないのですが……エルさん」

「あ、うん」

その求めに応じ、どうやら彼女よりも詳しいらしいエルレーンがボタンを引き継いで、

「ボクもそんなに深くはわからないけどね……リィナの説明にもう一つ付け加えると、幻覚能力ってものすごく特殊な力なの。たとえば――」

そう言いながら、テーブルの上にあったナイフとスプーンを手に取りると、それらをシーラの目の前にかざしてみせる。

「ボクがシーラに対して、こっちのスプーンもナイフだと錯覚させる能力を発動しようとするでしょ？　でも、いきなりやろうとしても、それはできないんだ」

「？　どういうこと？」

「うん。幻覚能力は発動するのに必ず何らかの“条件”を必要とするの。……あくまで一例だけど、たとえば幻覚を見せようとする前に、こっちもナイフの形を相手に記憶させておきゃなきゃならない、とか」

「……なるほどね」

納得した様子だったが、シーラはすぐに疑問を投げかける。

「でも、それって特に難しいことでもないんじゃないかしら？　だってナイフの形ぐらいだいたい覚えてるでしょ？」

エルレーンは頷くと、

「この場合はね。だけどー」

そう言いながら今度はスプーンだけを置き、その手にナプキンを取る。

「同じようにボクがこのナプキンをナイフに見せかけるには、さつきよりもさらに難しい条件が必要になってくる……どうしてかわかる？」

「え？　……」

視線を泳がせて考え込むシーラ。

が、その時間はそれほど長くはなく、

「スプーンに比べると、形とか質感が遠ざかったから……？」

「うん、正解」

エルレーンはニツコリと微笑む。

「錯覚を大きくしようとすれば、それだけ発動条件が厳しくなる。それが基本。……その他にも色々な制約があるみたいだよ。一人の魔が同時に二つ以上の幻覚をかけることはできないとか、一人の人間に作用する幻覚は最大でも二つまで、とか」

「……そう都合のよいものではないということ？」

「うん。自分で使うわけじゃないからわからないけど、幻の属性は最弱、っていうのがあっちでの一般的な意見だからね。……でも」

「でも？」

エルレーンはまるで謎かけのように言った。

「――王を討つ兵は、窟の中にこそ産まれる」

「？」

怪訝そうなシーラに、エルレーンは微笑んで、

「向こうで良く口にされる教訓だよ。窟――あなぐらに隠れ住むの

はもつとも弱き者、幻属性を揶揄して使われる言葉。でも、王を討つ兵――王は格上、兵は格下、つまり格上の魔を討てるのは、唯一幻属性の者だけだ、という意味なの。……これはちよつと大袈裟な言い方だけど、でも、単純な力差を埋める可能性がもつとも高いのは幻属性。それは確かにそうかなとボクも思う」

「……使いよう、ということね」

そんなエルレーンの言葉は、シーラにも理解できなくなかった。――実際のところ、王魔よりも強い将魔、将魔よりも強い上位魔というのはどの属性でも存在する。どんな種族であれピンキリだし、格下が格上を倒してしまうことは、珍しいことではあっても充分に起こりうることだ。

ただ、歴史を紐解いていくと、それが起こりうる確率がもつとも高いのは、やはり幻属性がもつとも高く、そしてそれは当然、魔と魔の間に限ったことではない。

エルレーンの口にした教訓と似たようなものが、デビルバスターたちの間にも存在する。それはつまり過去、幾人もの腕利きのデビルバスターが、本来恐れるに足らないはずの幻の下位魔や上位魔の手に掛かって命を落としているということなのだ。

「……でも、シーラ様。どうして急にそんなことを？」

と、リィナが不思議そうにそう問いかけた。

それは当然の疑問。今の話は、少なくとも薬師を目指すこのシーラという少女には、全く必要のないはずの情報なのだから。

だが、

「そうね……単なる知的好奇心、じゃ答えにならない？」

さらりとかわすように答えるシーラ。

だが、リィナは納得できない顔で、

「“腐食の楔”なんて言葉、魔界でもそんなに耳にしない言葉ですから……」

「耳にする機会があったのよ。友達からね」

「シーラって変な友達がいるんだね」

そう言つて、エルレーンは笑つた。

シーラの言葉をそのまま真に受け止めたわけではなさそうだが、それでも彼女はそれ以上追求することではなく、

「何にせよ、少しでもシーラの役に立てたなら嬉しいよ。……ね、リイナ？」

「え……あ、はい」

その言葉に、リイナもニツコリと嬉しそうに頷いて、

「シーラ様とティース様のお役に立てることが、今の私には何よりの幸福ですから」

「あら。嬉しいわね」

シーラはもう一度苦笑した。

リイナの言葉は、まるでお芝居のセリフか、そうでなければ口の上手い商売人の常套文句だ。だが、その表情には一点の躊躇いもなく、また打算の色も皆無。

見ている者を思わず和ませてしまうような、その雰囲気。

先ほどの発言が本心からの言葉であることを疑う者は、少なくともこの場にはいなかった。

(……ホントいい子だもの、ね)

シーラも心からそう感じている。

だからこそ、多少こちらの常識に欠けていても、上手く人間たちの中に溶け込んでいるし、周りから好かれもするのだろう、と。

「……」

「さ、じゃあそろそろ行こつか、リイナ」

ちょうどバスケットの中身もなくなったようだ。

エルレーンが立ち上がると、リイナも頷いてそれに従う。

「では、シーラ様。また」

「……ええ、またね」

「？」

シーラの返事がワテンポ遅れたことにエルレーンは怪訝そうな顔をしたが、それについては特に追求することもなく、

「じゃあ、シーラ。勉強、頑張ってね。――男の子のことばかり考えてちゃダメだよ？」

「ええ、そうね。あなたじゃなくてリィナのことを考えるようになるわ」

「むっ」

エルレーンはわざとらしく膨れてみせて、

「君といいティースといい、ホントに失礼だよ、もう」

「ほら。早く行かないと叱られるわよ」

「ふん、だ。いこ、リィナ」

隣でクスクス笑うリィナに、エルレーン自身も結局可笑しそうに笑ってしまう。

そんな二人に向けられたシーラの笑顔には、一点の曇りもない。それは彼女が二人に対し、完全に心を許していることの証明であった。

衝撃。

甲高い音。

手の平を突き抜け、耳の奥と肩口に飛んでいく痺れ。

血液が体中を駆け巡り、脳の奥が熱く、全身が高揚し、汗が飛び散った。

「おおーッ！」

一步、踏み込む。普段頼りなく見えるはずのティースの長身は、鬼気迫る気迫をまとってそこに威圧感すらも迸らせていた。

「っ……」

そんな彼に対するは、彼よりも十センチ以上小柄な少年、パーシヴァルⅡラッセル。両手にはかなり長めのトンファーを携え、こちらも視線は真剣そのものだ。

「くっ……！」

一撃を受けたパーシヴアルの表情が歪む。バランスが崩れた。好機。

その一瞬をティースは逃さない。

打ち払い、目にも止まらぬ一撃を見舞う。

勝利を確信。

——いや。

「えっ……!？」

突然、視界から少年の姿が消えた。

と、同時に、右手を襲う鋭い痺れ。

「っ……」

甲高い音とともに宙を舞う木刀。

肩口に軽く鈍い痛みが走って、背後に気配が現れて——

「——そこまで」

喉元にグツとトンファーが押しつけられ、冷静な声が響いて、場に張り詰めていた空気は霧散。

荒い息。

外から聞こえる犬の鳴き声。

焼け付くような暑さ。

今までは意識もなかった周囲の状況が、急にリアルに動き始めた。

「……惜しかったっすね、ティースさん」

ゆっくりと背後の荒い呼吸音が離れていく。

もちろんティース自身の呼吸も荒い。が、勝負の結果とは対照的に、どうやらパーシヴアルの方が疲労の色は濃いようだった。

「氣い、抜いたでしょ？ そんなんじゃないっすまで経っても俺には勝てないっすよ」

パーシヴアルは息を吐きながらタオルを首にかけ、置いてあった水筒に口を付ける。

必要以上に強気な言葉は彼が思いの外追いつめられていた証のように見えたが、言葉の中身そのものは真実でもあった。

だが、ティースは納得できない顔でその場に座り込んで、

「俺が気を抜いたわけじゃないってば。君の動きが急に速くなったんじゃないか」

「はは。それを気を抜いたっていうんですよ」

パーシヴァルも壁に背を預ける形で座り込み、もう一度水筒に口を付けて喉を潤すと、

「俺たちは多かれ少なかれ、ある程度の心力を前提に戦ってるんだから、ほんの少しの気の緩みが一般人よりも遙かに顕著に跳ね返ってくるんすよ。俺も確かにピンチだったから速く動こうとはしたけど、それ以上にティースさんの動体視力が急激に落ちたんじゃないっすか？」

「……うーん」

そんなパーシヴァルの言葉に、ティースはやはり納得できない顔で頭を掻いて、

「心力がどうこうと言われても、意識してやってるものじゃないからわかんないよ……」

「そのうち慣れますよ。心力の基礎はとくに身に付いてるみたいだし、あとは感覚をしっかりと掴んで、気を抜く癖さえなくせば――」
「ま、気を抜く癖に関しちゃ、お前が偉そうに言えることでもないしな」

「……げ、隊長」

そんな二人に歩み寄ったのは、ディバーナ・ナイトの隊長であるレインハルトⅡシユナイダーだ。

そしてここはもちろんナイトの詰め所。

午前中にアオイの授業を終えたティースは、午後から志願してナイトの面々とともに稽古を行っていたのである。

歩み寄ったレイは相変わらぬラフな服装にどことなく投げやりな態度で、パーシヴァルに言い放った。

「今のにしたって初撃をしっかりと受けてりゃ、あそこまで追いつめられてない話さ。……ま、それで窮地に陥るのは俺じゃないから別

にいいがな」

「うう……すみません」

「……」

飄々とした態度の割に、彼の指導はだいたいの確だ。ただそれは、教えることに秀でているというよりも、観察力、洞察力の高さが表れているということだろう。

さらに、その言葉が今度はティースへと向けられる。

「お前はちよつとばかり自分の感覚に頼りすぎかもしれないな」

「え？」

レイは自分のこめかみ辺りをチョンチョンと叩いて、

「もっと頭を使えってことさ。相手がこう動いたから、こう返す。

相手が怯んだから踏み込む、ってんじゃ後手に回りすぎる。……それもこいつみたいなのアホが相手なら構わんが――」

「げ。隊長、それはちよつとひどくないっすか……」

だが、パシヴァルの抗議はまるで無視されて、

「俺ならそれを利用して、逆にお前の動きをコントロールできる。

そうして先回りすることができる。……だから、どんな状況でも、

どんな窮地でも常に考えるクセを身につけた方がいい」

「戦いながら、考える……？」

「ああ。……駆け出しに特に多いんだがな。ロクに考えもしないで、簡単に捨て身とか投げやりになったり、あるいは渾身の一撃、最後の一撃とか勝手に決めつけて戦おうとする。頭のいいヤツってのは、そういう連中がどのタイミングで思考を放棄するか知っていて、そいつが罠にかかるのを待ってるもんなのさ」

「あ、頭を使う、か……」

少し情けない顔になるティース。……あまり勉強に通じてない彼にとって、頭を使うという行為はどこか苦手意識があった。

レイは少し手を広げて、

「ま、自分の感覚の方がずっと大事と主張する連中も多いがな。ウチじゃアクアなんてのがその典型だが……あいつの場合は自分の感

覚というより“野生の勘”だ。真似しようとは考えない方がいい」

「野生の勘……」

ティースはアクアの顔を頭に思い描き、吹き出しそうになるのをどうにか堪えた。

「……あーあ、隊長。そんなことが耳に入ったら、あの人また怒りますよ」

「拗ねた女の御機嫌を取るのも男の仕事、だろ？」

軽く戯けるレイに、パーシヴァルは不満顔で反論した。

「んなこと言って、隊長、いつも面倒になったら俺の方に丸投げじゃないっすか！俺がそれで何度酷い目にあったか——」

「社会勉強だと思っときゃいいさ。あいつほど扱いやすい女はそうそういないし、練習台にはもってこいだ。……もつとも」

と、レイはからかうような薄い笑みを浮かべた。

「あまりデレデレしていると、肝心の本命に逃げられちまうかもしれないがな」

「な……」

パーシヴァルの顔が真っ赤になる。

「な、なに言ってるんすか！俺は硬派なんです！デレデレとか本命とか、そんなもんは一切ないっすよ！」

わめき立てるように抗議するパーシヴァル。それだけで動揺しているのがバレバレである。

（……ああ、こういうことか）

ティースはなんとなく、レイの言う“コントロール”の実例を目の当たりにした気分だった。

（でも、なんだろう、本命って。パスにもやっぱ好きな子がいたりするのかな）

いまいちそういったことに疎いティースであつたが、全く興味が無いわけでもなかった。

「ま、そういうことにしよう。……で、続きだが」

散々パーシヴァルをからかった末、レイは自分から話題を戻して、

「頭と勘、どっちが本当に大事ななんて議論はナンセンスだがな。両方備えているに越したことはないし、天性の勘ってやつはやろうと思って備わるものでもないが、戦略ってのは知恵と経験で身につけられるもんだ。やって損はない」

「う。が、頑張ってみます」

（……でも俺って、きつとレイさんよりはパースの方のタイプだろうなあ）

思わず苦笑するティース。それは彼の謙遜などではなく、おそらくは限りなく真実に近い実感であった。が、そういった自分の弱さを自覚している辺りは、彼の良いところともいえる。

そんな心情を見抜いたのか、レイは再びからかうような表情になつて、

「ま、頭のいい男は女の扱いも上手いもんだからな。あの王女様にいいように振り回されてるお前にゃ、ちよつと難しい話か」

「……」

反論できる言葉があらうはずもなく。

と、そんなところへ、

「ティース」

「え？」

「……おや」

突然の来訪者。

真っ先にその気配に気付いたレイが振り返って、そして少し大仰に驚いて見せた。

「珍しいじゃないか。何年振りだ？」

そんな皮肉な笑みの先。

「なあ、アルファ」

そこにあつたのは、銀色の髪に蒼の瞳。相変わらずの凍り付くような雪の仮面に、まるでアンバランスなハートマーク付きのセーターとマフラー。その手に携えるのは、光の力を込められた神槍“誘蛾灯”。

アルファ・クールラント。

ディバーナ・ロウ、第四のデビルバスターにして、世代最強を意味する“サン・サラス”の称号を持つ“公称”十七歳の青年であり、どう考えても不自然なことだが、現在はティースの部下に当たる人物だった。

「一年は経ってない」

特に面白くもなさそうに、いや、それどころか何も感じてすらない表情でそう答え、アルファはそのままティースへと視線を向けた。

「ファナが呼んでる。任務だ」

「え、あ、ああ、わかった」

「やれやれ、相変わらずせっかちなことだ。たまには、ゆっくりしていつてみないか？」

「ゆっくり？」

まるで凍り付いたままの表情の、その瞳の奥にだけ、ほんの僅かに訝しげな色が浮かぶ。

「こんな場所でも、茶ぐらいは出せるがな」

「水分なら補給したばかりだ。今、他に必要としているものはない」「……なるほど。それじゃ仕方ない」

少々戯けた調子で、レイはお手上げとばかりに両手を広げてみせた。

（ああ、やっぱりレイさんでも同じなのか……）

それはそうであろう。何しろ、この兄のことをあれだけ慕っている妹のセシルに対しての態度さえ——少なくとも外から見ると限りは、まるで変化がないのだから。

（なのに……そんな人のことを、俺がどうこうできるわけないじゃないか）

それでもセシルは彼のことを優しいと言い張る。仲良くして欲しいと懇願する。

ファナはそんな彼に対し、信じていると言う。

セシル。

そしてファナ。

「はああああ……」

そんな二人分の期待を否応なしに思い出させられ、ティースは今
すぐにも逃げ出したい気分になってしまったのであった。

その2『接近、第一射』

(うはぁ……)

なんの変哲もない田舎村。いや、なんの変哲もないと言ってしま
うと語弊があるか。

ネービスのすぐ南にあるルナジュール。

その南西の国境付近にあるスタークホルム。

南東の国境付近にあるベルン。

その三つの大都市を結ぶ街道を三角形に見立てると、その重心に
位置する地域はかなり交通の便が悪い山岳地帯であり、ネービスで
もっとも開発の遅れている地域の一つだ。

そんな地域の山奥深くにポツンと位置する名も無き村が今回の仕
事場である。

馬の走ることができない険しい山道を大きく迂回しながら進み、
道案内がなければ迷ってしまいそうな獣道を辿って、野宿を一度挟
み丸一日とちよつと。

陸の孤島と言っても過言ではないようなその村は、外よりも一回
りほど文化レベルが遅れているような、そんな印象の場所だった。
とはいえ。

ティースが先ほど感嘆の声を漏らしてしまったのは、実を言うと
それが直接の原因というわけではない。

(……この規模の村にデビルバスターが四人って、すごい光景だな
あ)

と、ということなのである。

そこは村長とおぼしき人物の家。都会で見られるような、魔界の
植物を利用した暖房や照明器具などは一切見当たらず、ソファのよ
うなものもない。木造の堅い椅子にかるうじて敷物をかぶせたよう
な椅子が一、二……合計六つ。

一つは村長と思われる初老の人の良さそうな男性が腰かけており、

皺だらけの頬を緩めてニコニコとしている。

二つ目、三つ目はそれぞれティースとアルファのものだ。

そして残りの三つ。

「では改めて……」

一人目は細身の男。年齢は二十代の半ばぐらいだろう。

「私はジンⅡファウスト、このネービス出身のデビルバスターだ。今回はご期待に応えられるよう、尽力させてもらう」

やや病的に瘦けた頬と鋭い眼光が少々とっつきにくい印象だが、口調は比較的穏やかで丁寧。今は外しているが、鉄製の額当てと口元を覆う黒いマスクを備えている。一見軽装で丸腰に見えるが、よくよく観察すると、服の下に何やら色々なものを隠し持っているらしいことがわかった。

そして右手にだけ填めている黒い手袋。

（なんで右手だけなんだろう……？）

ティースはそこに妙な違和感を覚えたが、もちろん今はそれを問はず質す場ではない。

次に、その隣。

「私はマリアヴェル。マリアヴェルⅡソーヴレ」

（……うわ）

次の女性が口を開いた瞬間、ティースは背筋が軽く震えるのを感じた。

（綺麗な声だ……）

とはいえ、艶っぽいというのは全然違う。

透き通った、それでいて心が震える響き。極端な物言いを承知の上で表現するならば“神秘的”と言おうか。もしもその声で歌ったならば、さぞ多くの者を虜にするであろうと思われた。

が、もちろん彼女は歌姫などではない。

「デビルバスターとしての経験は浅い方、かな。でも、少しでもあなたたちの力になれば、と、思う」

ちりん、ちりん……

彼女が身につけている“振り袖”型の衣装は、他文化が集まるこのネービスでさえ滅多に見掛けることはない。長い髪を九つに分けるという変わった髪型で、髪のを小さな鈴のついた紐で縛っている。声、少々独特な間を持つ口調、姿勢好……とにかく全てが“神秘”を連想させる女性だった。

年齢はやはり二十歳を少し過ぎたぐらいだろうか。後ろに立てかけてある身長よりも長い棒のようなものが、どうやら彼女の武器らしい。

そして、最後の一人。

「おっと。オイラが最後でいすかね？」

これまた前述の二名とはかけ離れた雰囲気の名。おそらく他の二名よりは年下、二十歳前後といったところか。

「はい！ みなさん注目、ちゅうもく！」

パンパン！

室内にも関わらずテンガロンハットのような背の高い帽子をかぶったまま、手を叩いた青年は急に歌い出した。

「せゝいぎを胸に、悪をゝ誅しゝ弱きを助け、強きをゝ挫くゝ♪
でゝんこうせゝつかのデビルバースター……オゝレはゝオゝレはゝ
つゝよくてゝ……あゝ、えゝつと……」

ちよつと考えた様子で、

「……るゝるるるゝ……せゝレナスゝカンファゝイスゝ♪」

（ご、誤魔化した……）

パンパン。

不審そうな視線を一身に集めながらも気にした様子はなく、再び手を叩き、それからまるで道化のようなわざとらしい一礼をして、
「ってなわけで。オイラはセレナスⅡカンファイス。みなさん、どうぞよろしく♪」

最後はやはり歌っぽくなった。……が、しかし、かなりの音痴であるということはキチンと付け足しておこう。

ジーンズと白のシャツに袖のない茶色のジャケット。身長は百七

十センチあるかないかで、目はかなり細く、唇には小さなピアス。どことなく狐を思わせる風貌だが、陽気な物言いのとおり人当たりは良さそうだった。

武器は腰にぶら下げた、先が三つに分かれた奇妙な形のレイピア（？）だろうか。

「ふふ……面白い人」

マリアヴェルがそう言って微笑むと、セレナスは眼球が隠れてしまふほどに破顔して、

「どもども、お美しい方。お褒めの言葉があれば、オイラのやる気も無尽蔵に湧いてこようというもののさね」

「……さて」

そこに口を挟んだジンIIファウスト。

「それでは、詳しい話に入っていたかどうか」

外から聞こえてくる少年少女の遊ぶ声。

まだ日は空の中間辺り。

村長から話を聞くには、まだまだ充分すぎるほどの時間があつた。

「しかしこんな小さな村にデビルバスターが四人とはなあ……んゝゝゝと……」

外に出たティースが大きく伸びをする頃には、太陽はやや西に傾きかけていた。

日が沈むまでもうしばらくの猶予はあるものの、これから行動するには少々遅い。万全を期すため、本格的な行動は明日からということで全員の意見が一致したところだった。

四月にしては暖かな陽気。一人一人に別々に割り当てられた借家に行く前に、村の地理を把握する意味でもブラブラと歩き回ること決めて、ティースは足を踏み出していた。

こうして歩くとわかるが、本当に小規模な村だ。山中を切り開くように作られており、畑がある分広さ自体はそれなりだが、人口はおそらく二桁、それも五十人未満で収まるに違いない。子供も極端

に少なく、村長の家を出たときに見掛けた三、四人の集団がおそらく唯一。家の中に赤ん坊などがいると考えてたとしても、一桁の年齢の子供はおそらく十人未満か。

こんな村に、よく三人もデビルバスターを雇う金があったものだと、ティースは変な感心をしてしまう。あるいは何らかの特産品があるのだろうか。でなければ、こんな不便な場所にいつまでも人が住んでいることもないだろう。

（壊れた家や荒れた畑は……多分、大規模な獣魔の襲撃があったからなんだろうな）

その爪跡はそこかしこに見受けられた。視界に入る家は半数くらいが何らかの被害を受けている。もし人が全く歩いていなければ、廃墟にすら見えたかもしれない。

そのまましばらく歩いて一回りした後、だだっ広い草むらを見つけて腰を下ろす。そのままゴロンと寝転がると、そよ風が微かに前髪を揺らした。

青空を泳ぐ薄い雲。

肌を撫でる涼しい春風。

鼻孔をくすぐる草の匂い。

（あー、気持ちいい……）

一瞬だけ仕事であることも忘れ、心地よい自然の空気を満喫する。
と、

「ん？」

ふと鼻孔をくすぐったのは、青々した草の香りとは異なる芳香。

「あれ？」

不思議に思っただけを見回しても、辺りは一面の緑で花らしきものは一輪たりとも生えていない。
が、

「あ、これか」

思い出したのは、彼自身の胸に入っていた小さな袋。手の平の半分ぐらいのサイズの小袋だが、鼻先に近づけると気分の落ち着く和

やかな香りを発している。

それは数日前の何の変哲もないあの朝に、セシルからもらったプレゼントだった。

「これ、なんだか、あの子そのもの、って感じの香りだよなあ」

そんな彼の発言は一步間違えればセクハラとも捉えられかねないが、まあ誰が聞いているわけでもないし、言ってる本人も何も考えていないのだから問題はあるまい。

「ああ、それにしても気持ちいい……」

と、そうしているうちにウトウトしてきたようだ。

もしそのまま五分も経っていたら、彼の上下の瞼がランデブー状態に陥るまでそう時間はかからなかっただろう。

が、

「こんにちは、お寝坊な剣士さん。こんなところで寝ると風邪ひくよ」

「え？」

びっくりして起き上がる。さらに辺りを見渡すと、

「まあ、いいんじゃない？ 寝る子は育つってよく言うさ♪」

西に傾きかけた太陽を逆光にして一組の男女が立っていた。

「あ、セ、セレナスさんに……マリアヴェー……いたっ！」

悲鳴とともに口を押さえるティース。

どうやら舌を噛んでしまったようだ。

「マ、マリアヴェルさん……」

少し涙目で舌を出しながら言ったティースに、マリアヴェルはクスツと微笑んで、

「マリア。マリアでも構わないよ。私の名前、少し呼びづらいでしょう？」

身に纏う神秘的な印象から厳格そうにも見える彼女だったが、見た目よりはかなり気安い口調。言葉の端々からは和やかな優しい雰囲気滲み出ており、思った以上に取っつきやすそうだった。

そのことにティースは舌の痛みも忘れてほんの少し胸をなで下ろ

し、

「マリアさん、ですね。……あ、それじゃあ俺のこともティースでお願いします」

「ティース？ ティースさん、か。なるほど、確かにその方が呼びやすい、ね」

琴を奏でるような声でマリアヴェルはもう一度微笑んだ。

そこへセレナスが口を挟む。

「ほんじゃま、ティースくん。オイラのこともセレナス、で、いちよろしく」

「あ、はい——って、そのまんまじゃ……？」

「ああ、ダメダメ！ 突っ込みはもっとう、自信を持ってやらな！」

「え、あ、はあ」

こっちはほぼ見た目通りだった。

「あの、ところで、どうしたんですか？ お二人揃って」
改めて、ティースは二人にそう問いかけた。

「うん？」

マリアヴェルは不思議そうにセレナスを見てから、少し考えて、
「なんとなく、かな。彼と会ったのもついさっき」

「オイラも似たようなもんさ。……誰も彼もがく似たもの同士くオイエイ〜♪」

そのまま草むらの上にどかっと座り込むと、背の高いテンガロンハットを深くかぶり直すと、

「ま、そんな理由なんてどうでもいいさね。オイラたちがこうして偶然出逢えたのも何かの縁。ここらでちよっくら世間話でもしようじゃないの」

「え……世間話、ですか？」

唐突な申し出にティースが戸惑うと、

「そうさあ。ティースくんはデビルバスター志望っしょ？ 先輩の話は色々面白いといった方が、後々絶対役に立つさあ。どうさ、マリア

さん？」

その言葉に、少し考えるような仕草を見せたマリアヴェル。
ちりん、と、鈴が風に揺れる。

「ティースさんが望むならいいんじゃないかな。私の話が役立つかどうかはわからないけど、ね」

「あ、いえ、そんなこと！」

思わぬことではあったが、それは確かに彼にとっても望ましいことであった。

「んじゃま、そういうことで。……あ、そういやティースくん、連れの女性はどうしたんだい？」

「え？ あ、アルファのことですか？」

セシルの兄であり、戸籍上もちろん男性であるはずのアルファは、しかしどこからどう見ても女性にしか見えない容貌をしている。……もつとも、見た目が不自然なのか、それとも戸籍が偽りであるかは、かなり微妙で五分五分といったところであるが。

もちろんティースも、わざわざ彼（彼女？）が一応男性であると説明するようなことはない。

と、

「あの人はデビルバスターを名乗っていた、ね。――アルファークールラント」

何事か思い出した様子のマリアヴェルは口元に手を当て、少し考えながら言った。

「私の記憶が確かなら、確か三年前のサン・サラスが同じ名前だった、かな」

「ええ！？」

セレナスはビックリした顔をティースに向けて、

「ティースくん、それ、マジかい？」

「あ、はい。俺も同じ話を聞いてます」

「へええ。……おっとお」

風が吹いて、彼のテンガロンハットが少しだけ煽られる。セレナ

スはそれを右手で押さえつつ、その帽子の奥から興味深そうな視線を向けて、

「そういうこっちゃあ、後輩だからってあんま馬鹿にやできんねえ」

「セレナスさんって、デビルバスターになってどのぐらいなんですか？」

今度は逆にティースがそう質問すると、

「ん？ オイラはそのアルファさんの一年前さ。ちょうど丸四年つてとこかね」

「へえ。マリアさんは？」

「うん？ そうだね。私はちょうど七年になるかな」

「ほえ？」

それに対し、再びビクリ顔をしたのはセレナスだ。

「七年？ ってこたあ、あんた試験通ったの十代半ばかい？ ……

うはあ、ほんじゃオイラの三つも先輩……これまたお見それしましたわ」

そう言っ、やはり大仰に深々と頭を下げる。

マリアヴェルは可笑しそうに小さく笑って、

「ふふ、でも彼——ジンⅡファウストほどじゃないよ」

「そらそうだけど。あの人と比べる方がおかしいさ」

「え？ あの人、有名な人なんですか？」

無知をさらけ出すようで少し気が引けたものの、ティースは素直にそんな疑問を口にしてみた。

すると、セレナスはちよつと首をかしげながら、

「ん？ ああ、まあ一般的にはそこまで知名度高いわけじゃないさね。けど、下手なベテランより確実に信頼できる腕の持ち主と言われてる」

「へえ……」

ジンの姿を思い出す。

鋭い眼光。

厚みのある存在感。

それはおそらく確かな実力と経験、あとはある程度完成された人格に依るものなのだろう。確かにティースも、セレナスの言葉に納得できるだけのものを感じた。

「私も少し聞いていい、かな？」

「……」

「ティースさん？」

「へ？ ……あ、俺ですか！？ す、すみません、ボーっとしてました！」

「ふふ、謝らなくてもいいよ」

マリアヴェルは特に気分を害した様子もなく、逆に優しく微笑むと、

「ティースさんはきつと優しい人なんだろうね。顔にも、言葉にも、それが面白いぐらいよく出てる。……なのに」

「？」

鈴が微かな音色を奏で、そして彼女は唐突に問いかけた。

「あなたは、どうしてデビルバスターになろうなんて思ったの？」

「え？」

不思議そうに見つめ返したティースに、マリアヴェルは視線を少し横に流した。

その先を、何度か見掛けた子供の集団が楽しそうに元気良く駆け抜けていく。

彼女はそんな光景をどこか懐かしそうに眺め、

「戦うことが好きそうには見えない。だったら戦う必要なんてないでしょう？」

「え……」

そんなマリアヴェルの様子に若干の戸惑いを覚えたティースだったが、少し表情を引き締めて逆に問いかけた。

「じゃあ、マリアさんは戦うことが好きなんですか？」

「多分……ね」

「多分？」

「だって、現実には戦っている。本当は戦う必要なんてないのに」
「でも、こうして人助けをしてるじゃないですか」

「人助け？ ふふ、そう見える？」

マリアヴェルはゆっくりと視線を戻した。

その口元に浮かんだのは、どこか淋しげな笑み。……その陰にうつすら透けて見える葛藤の跡は、過去のものか、あるいは現在になお続く傷跡か。

「目的がどうであろうと、戦いで生まれた遺恨はさらに罪のない人も巻き込んで広がっていくもの。戦うことが正しいだなんて、どんな理由を付けようと、そんなのただの言い訳でしかないよ」

「……」

平然とした物言いの中に潜む“何か”を感じ、ティースは口を閉ざした。

それぞれに、それぞれの事情がある。

それは当たり前のことで、まして彼らのようなデビルバスターの世界は決して生ぬるいものではない。常に危険と隣り合わせに生き、数多くの絶望を見せつけられ、こうして穏やかな笑顔を见せている彼女であっても、これまでいくつもの死線をくぐり抜けてきているはずだ。

たった今の発言もそのいくつかの経験から産み出された、少なからずある種の真実さえも含んだものなのだろう。

（でも……）

彼の価値観からすると、その考えは決して受け入れられるものではない。

考えた末、ティースは答えた。

「俺、未熟だし頭も良くないから、そんな難しく考えたことないですけど……でも、たとえば目の前にある命が戦うことで守れるとするなら、好きとか嫌いとか、理由とか言い訳とか、そんなこと考えたりせずに戦ったりするんじゃないですか？」

「……」

マリアヴェルは一瞬だけ考えるように目を閉じたが、
「でも、あなたを愛する幾人かの人は、きつとあなたが戦うことを嫌う。……あなたが戦い、あなたが苦しむことで周りの人が一緒に傷つくとしても、それでもあなたは戦い続ける？」

「え？」

即答できずに、目を見開くティース。

それは少しでも意表を突かれる問いかけだった。

（俺が苦しむことで、周りの人が……？）

彼が戦わんとする理由は、シーラが魔にさらわれた事件を発端とし、サイラスという青年やナナンという少女の死、ザヴィアという名の悪——タナトスという組織との出会い、リイナやエルレーンとの再会、ゲノールトでの一件を経て確固たるものとなった。

それはつまり——その対象が人であろうと魔であろうと——理不尽に奪われる罪のない命を救い、そんな命を奪わんとする“悪”を討ちたい……という、子供でも容易に理解できるほど単純で、そして単純であるが故に強固なもの。

だが、しかし。

ご承知の通り、このティースという男は基本的に一途であり、悪く言えば一面的な人間である。しかも周りにはそれなりに気を遣う性格のくせに、自分自身のことについては驚くほどに疎い。

だから、たった今マリアヴェルに言われたようなこと——つまり、周りが彼自身に対して持つ感情に関しては、それほど深く考えたこともなかったのだ。

（……周りの人、か）

だが、考えた末にティースはきっぱりと答えた。

「それでも……きつと、俺は戦います」

「……そう」

マリアヴェルの瞳がまるで失望するかのようにその色を薄くし、そしてゆっくりと閉じられた。

だが、

「でもその上で、理解してもらえたら嬉しいと思います」
「？」

視線が再び向けられる。

少し緊張しながら、ティースは言葉を続けた。

「俺は戦うのが好きで戦ってるんじゃない。守るべきものを、放っておけば無惨に奪われてしまう命を、たとえ一人でもいいから守るために戦っているんだ、って。そう理解してくれて、応援してくれるならすごく心強いし、苦しいことも乗り越えられるんじゃないかなって」

「……」

ほんの少しだけ見開かれたマリアヴェルの瞳が、再び色を纏い、それからまるで遠くを見つめるように細められる。

そしてゆつくりと、問いかけた。

「それは誰かの言葉？ それとも――」

ティースはハッと我に返って、

「あ……すみません、偉そうなこと言って。……その、俺、思ったことを何も考えずに言っちゃう癖があって――」

「謝らなくてもいいよ。……そう。あなた自身の言葉なんだ、ね」

マリアヴェルはそう言って考え込むように黙った。

何か思うところがあつたのだろう。

そんな彼女にティースは思わず、

「……マリアさん？ どうしてそんな質問を？」

マリアヴェルは少し考えて答えた。

「なんとなく、ね」

「……」

風が吹いて、鈴が微かに振動する。

ティースはしばらくそんな彼女を見つめていたが……やがて、それ以上突っ込むことはできないと判断し、会話の矛先を変えることにした。

「そうだ。そうじゃセレナスさんはどうしてデビルバスターに――」
そう言いながら振り返ったティースは、驚きに言葉を止め、目を丸くする。

「うう、ぐすっ……」

「……ど、どうしたんですか、セレナスさん？」

啞然とするティースに、セレナスは目元をゴシゴシと擦って、
「これが泣けずにいられるかい……あの表情を見りゃわかる。きつ
とマリアさんの過去にゃとんでもなく辛い出来事があったに違いな
いさ」

「は、はあ」

その予測を否定するつもりはなかったが、さすがのティースもそ
の想像だけで泣くまでには至らない。

このティースですら、だ。

しかしセレナスは帽子をグッと押さえて目線を隠し、指を鳴らし
てリズムを取り始めると、

「……君が……れだけ泣いて……ても……無力な僕には……なにもでき
ない……♪ あああ……泣かなく……いで……僕のマイハニイ……♪」

「……」

頭がクラクラした。

「ああ、夕日が目にしみるさ……」

「はあ……」

とりあえず放っておくことにして、ティースは仕方なく視線を遠
くに向けることにした。

すると、

「……？ あれは――」

視界の奥。小さな畑を二つほど挟んだ先に、見覚えのあるシルエ
ットを見つける。

（――ジンさん？）

ティースのいる場所からでは顔の詳細まで確認はできなかったが、
遠くの原っぱに見えるシルエットは服装からしてジンⅡファウスト

で間違いなさそうだった。

そしてそんな彼の周囲に、先ほどティースの視線の先を駆け抜けていった子供たちが集まっているのがわかる。

「……へえ」

その光景に、ティースは思わず声を漏らした。

「? どうしたの?」

「え? あ、いえ」

声を聞きつけたマリアヴェルの問いにティースは答えて、

「ジンさんってああいうことする人なんだな、って」

「……あー」

ティースの指した先を眺め、ようやく涙を拭ったセレナスが答えて、

「子供好きって噂は聞いたことあったけど、ホントだったのかな」

「子供好き?」

「あの人、稼ぎの大半は故郷の貧しい子供たちを養うために使ってるらしいさ。あくまで噂だけでも、こうして見る限りはあながち嘘とも言いきれんかね」

「……へえ」

ティースは感心した。と同時に、彼に対する興味も増してくる。

（見た目ほど無愛想な人じゃないのかも。……今度、声をかけてみようかな）

そんなことを思いながら、なんとなくしに赤味を帯び始めた空を見上げてみた。

——心配事など何もない。

ティースはそのとき、そんな風にすら考えていた。

下級の獣魔を相手にする任務の内容からして。頼もしいデビルバスターが四人もいる現状からして。心配するどころか、自分の仕事があるかどうかすら怪しいのではないか、楽な任務だなと感じたのも、ある意味では当然のことだろう。

だがしかし、それはもちろん大きな間違いであり。

彼がそのことに気付くのは、これから十数時間ほど後のことであつた。

——はっ、はっ、はっ、はっ。

駆ける、駆ける、駆ける。

風を切る、黒い影。

夜空が急迫し、生ぬるい空気はまるで手足を捕らえんと蠢く。

その正体は幻。

だが、わかつてはいても、恐怖からは逃れられない。それがたとえ歴戦の強者であつたとしても、明確なる死の感触にはそう容易く抗えるものではないのだ。

しかもそれが、まったく予期せぬ、唐突に訪れたものであるなら、なおのこと。

——はっ、はっ、はっ、はっ！

肺が焼け付くほどの荒い呼吸。

心臓が壊れるほどに脈打つ。

闇が、迫る。

狩猟者はいつも用意周到だ。

巧妙に準備され、巧妙に隠された罠。

眼前に広がる逃げ道すらも、罠でしかない。彼らは逃げ道をわざと与えた上で、少しずつ追い込んでいく。

一旦捕らわれた獣が逃げ出すことは容易ではない。
ならば、ならば、どうする？

一瞬の躊躇を挟んだ後、ようやく死を覚悟したその思考は、せめて狩猟者に一矢を報いようと、その思惑を打ち砕いてやろうと、反逆の意志を固める。

遠吠えを上げ、他の者にその危機を知らせること。……それこそが、命の残り少ない自らに課せられた最後の使命、残された最後の矜持であり、それをもって悔いのない終焉を迎えよう、と。

……だが、しかし。

聞こえたのは、そんなその心を見透かしたかのような――声。

それは窮地を救わんとする仲間の声。

――微かな希望が産まれる。

それは生き延びることへの希望。

事実この世に生きている限り、死の恐怖による呪縛を容易に逃れる術などはなく、生への欲望を断ち切ることもまた、容易ではない。そうして産まれた希望は、せつかく産まれた覚悟の輪郭を曖昧にし、微かな安堵は緊張の糸を寸断して正常な思考力を奪った。

そして――

「っ!？」

ごぼっ……

それすらも罠であったことに気付いたとき、致命的な一撃は、その喉元に風穴を開けていたのだ。

錆びた鉄のような、死の匂い。

「ひひひ……ひひひひひ……」

光が、風が、重力が、天と地が、その意味を失う。

「ひひひひ……ひひひひひひ……」

「ヒヒ……ヒヒヒヒヒ……」

「へ……へへへへ……」

どさ。

笑い声。

ギラギラと脂ぎった瞳。

「ひひひひひ……ひひひひひひひひひ……」

「ヒヒヒ……ヒヒヒヒヒヒ……」

「へへ……へへへへへへ……」

不気味な笑い声は、いつまでも響き続けていた――

翌日の朝は昨日と比べると少々パツとしない天気だった。

太陽は薄く灰色に染まった一面の薄雲に姿を隠し、空気は湿り気を帯びている。雨こそ降ってはこないものの、風は少し冷たい。

「ううゝ、つめた」

外の井戸水で顔を洗うと、折から吹いた風が肌をピリピリと刺激する。

思いつきり伸びをして息を吸い込むと、

「っ、はぁゝ」

村はまだ静かだ。

農業に従事する者ならばとつくに動き始めているはずの時間だったが、村人はまだほとんど外に出てきていない。なんともものんびりした人々である。

（さて、と）

ゆつくりと足を踏み出したティース。

向かう先は村の中心部。

村の建物は基本的に全て造りが小さいため、ティースたちにはそれぞれに一軒ずつ無人の借宿が与えられていた。が、少々不便なことにお互いの宿が離れているのである。

のんびりとした歩調で歩く。

ふと空を見上げると、鴉が中空を旋回していた。

（……なんか、昨日と雰囲気違うなあ）

村の空気に、ティースはそんなことを感じていた。

天気のせいだろうか、昨日までの長閑な雰囲気は急に影を潜めており、冷たい風が埃っぽい空気を運んでくる。

昨日見掛けた子供たちの姿も今朝は見えない。

（悪いことの前触れじゃなきゃいいけど……）

そして五分弱。

彼が辿り着いた先はアルファの借りている家だった。

「おい、アルファー。起きてるんだろー？」

と、ひとまず声をかけてみるものの、返事がないのはいつものこと。

（……はあ）

起きているのは間違いなかった。……というより、ティースは彼が寝ているところを一度も見ることがない。寝姿を見られるのがよっぽど嫌なのか、あるいは寝ていてもすぐに目覚める体質なのか、ティースが訪れるときにはいつも必ず起きていて、それなりに身支度も済ませているのである。

（あのセーターのまま寝てるってことはないと思うけど……）

「入るぞー」

どうせ返事がないのもわかっているので、声をかけると同時に扉を開ける。

「……ったく。返事くらいしてくれたっていいじゃなー」

首を振りながら室内に踏み込んだティースの言葉が、ピタリと止まった。

眉をひそめる。

入った途端に感じたのは、どことなくいつもと違う雰囲気。

室内はまだ薄暗い。

中で動くものは何もない。……いや、あのアルファという人物は居たとしても身動き一つしないこともあるのだが、しかし。

「!？」

何気なくベッドの上に目を向けたティースの視界に、驚くべき光景が飛び込んできた。

「……うわああアアッ！」

まるでこの世のものとは思えないような悲鳴が空気を切り裂く。その、薄暗いベッドの上。

そこにあつたのは、見るも無惨な惨殺死体。あの無類の強さを誇り、魔の攻撃など寄せ付ることすらなかった、あのアルファークールラントの変わり果てた姿——…だったとすれば、その悲鳴と慌てぶりも十分に納得できるというものだ。

が、実際のところはそうではない。

いや、それどころか、そのときの状況を単純に描写したならば、何故彼がそんなに慌て、弾かれるように家から飛び出してきたのか全く理解できない者さえ出てくるだろう。

何故ならその状況とは、

『ある朝、隊長（臨時）である男が、部下である男の借宿に入ったところ、部下の男は起きたばかりで着替え中であつた』

という、ただそれだけのことだったのだから。

言うまでもなくティースは男性であり、アルファークールラントもまた男性だ。これが故意であり、かつ加害者側に男色の気でもあつたというのならいざ知らず、ティースはそういうことに關しては至極平凡な嗜好の持ち主であり、もちろん今回の出来事は純粹な事故でもある。

しかし、だ。

ご存じの通り、このアルファはそういう点で言うと少々、いや、かなり“疑わしい”人物だった。

——数秒の間があつて。

「ティース」

「……お、おはよう、アルファ。け、今朝はお寝坊だったんだな……」

尻餅をついたまま出迎えたティースは額と背中に冷や汗を掻き、平然を装おうとしていながら、まったく動揺を隠しきれていない口調だった。

それに対するアルファの方はといえば……特にいつもと変わらな
い。ハートマークのついたセーターとマフラー、手には愛用の神槍
“誘蛾灯”。まるで雪女のような冷たい表情もいつもどおり。

違うといえば、いつもならばそのまま何も言わずに通り過ぎてい
くところを、しばらく無言でティースを見つめていたということぐ
らいで――

「うう……」

そのとき彼が感じたプレッシャーは、妄想か、あるいは現実か。

「あ、い、いや、驚かせて悪い。でも、着替えてるなら返事をして
くれれば……」

「……」

一ミリたりとも反応無し。

(き、気まずい……)

男性であるなら気にすることなど何もない。女性だったならば、
彼だってあれほど無造作にドアを開けたりはしなかっただろう。

が、そのどちらでもない、ということがティースにとって不幸だ
った。

と言っても、もちろんオカマだったりニューハーフだったりする
わけではなく、彼は公式的には真正正銘の男性。が、容貌を例えて
“雪女”などと言われることからわかるように、その外見があまり
にも“女性すぎる”のである。

その真偽は、今のところ誰も――ファナですらも知らないらしい
のだが、今日この日、ティースは望みもしないところで、その真実
にほんの一步だけ近づいてしまった、というわけであった。

「で、でもほら！ 背中向けてたし、薄暗かったし、俺もすぐ出て
いったし、ほとんど何も見えなかったっていうか！」

そう。

だからあくまでほんの一步であり、確定的な何かを目撃したわけ
ではない。……が、彼の網膜に焼き付いた白く細い肩と背中の子イ
ンは、その容貌と同じく、やはり女性としか思えないものだった。

「……」

アルファの表情は相変わらず動かない。何か考えているように見えて、何も考えていないようにも見える。そのままだ無表情に、尻餅をついたままのティースを見つめていた。

（……うう、ど、どうしよう。思いつきり謝った方がいいのか……でも、本人が男だって言い張っている以上、謝るってのも変だし……）

葛藤が始まる。

こういふとき思い切って開き直れないのがこのティースという男の悪いところであり、そして美点でもあるのだが……

このときは幸い、葛藤の答えが出るまでもなく救いの手が差し伸べられた。

「……」

アルファが無言のまま、ティースに向けていた視線を上——正面へと向ける。

「？」

つられて振り返る。

と、そこにいたのは、

「おうところなら、強いて敷いても尻に敷かれるな」

「あっ、セレナスさん！……って、なんですか、その歌……」

相変わらず意味不明だったが、ティースの顔は何故か羞恥に赤くなる。……どうやらその意味するところを何となく感じ取ったらしい。

セレナスはテンガロンハットを押さえながら、親指をグッとティースに突きつけて、

「ま、人生色々あるさね、ティースくん。強く生きなきゃダメよ」

「……」

励ましているのか貶しているのかいまいちわからない態度だ。が、少なくとも悪気はないのだろう。

幸いアルファの意識も逸れたようだ。

ホッと息をつくティース。

ようやく地面から腰を上げ、泥をポンポンと払いながら、

「とにかく、おはようございます。……マリアさんとジンさんは？」

「いや、まださ。とりあえず一番寝坊しそうな君のところが先かと、ね」

「……俺、そんなに頼りなさそうに見えます？」

少し不満そうに抗議すると、セレナスはグッと拳を握りしめて、

「そおおおりやああああああ、そおおおおさああああべん、べべん♪」

異様に小節が効いていた。

ティースはため息をついて、

「……じゃ、いったんみんなで集まりましょうか」
振り返る。

「アルファ——」

が、しかし。

「——アルファ？ お、おい、どこ行く！？」

アルファはすでに歩き出していた。……ただし、ティースがこれから向かおうとしていた村の中心部とは逆方向に、である。

「お、おい、アルファ！」

慌ててその後を追いかけるティース。セレナスも怪訝な顔をしながらそれにく。

空を、鴉が旋回している。

湿っぽい風が吹いた。

呼びかけに振り返りもしないアルファに、ティースはさらに声を張り上げて、

「アルファ！ アル——！」

「……おい、ティースくん」

「え？」

突如、重みを増したセレナスの声が重なる。

鴉の声。

鳴き声が多重奏を奏でた。

「何か様子がおかしいさ……」

カチャリ、と、腰の三つ又レイピアが音を立てた。

「え？ ……！」

そしてティースもまた気付く。

「……」

アルファが立ち止まって見上げたのは、半壊した家の庭に立つ一本の大きな木だった。寒さに強い品種なのか、この時期にも関わらずその枝に緑色の葉をたくさん茂らせている。

もし今日が前日のように心地よい陽気の中であれば、あの木の根元にでも寝転がって、緑の匂いを胸一杯に吸い込みながら昼寝でもしたくなったことだろう。

しかし、この日はとてもそんな気にはなれる状況ではなかった。

何故なら――

「なんだ、あれ……」

響く、鳴き声。

その木には、緑の枝葉が真っ黒になって見えるほど大量の鴉が群がっていたのだ。

「なんで、あんなに鴉が……」

異様な光景に、ティースの胸にも薄暗い雲が広がり始める。

嫌な予感。

――予感？

いや、違う。それは希望的観測による錯覚であり、冷静に状況を把握するならば“確信”と表現するべきものだった。

鴉がそれだけ群がるにはもちろん理由がある。そういった光景を、ティースはこれまでに何度も目にしてきた。

いつも、圧倒的な負の空気が支配する場面で。

（馬鹿な……そんな馬鹿な！ いつの間に……！？）

ティースが抱いたその疑問は当然のものだ。

村を囲む森のそばには決して近付かないようにと、昨日村中に警

告したばかりだ。もちろん村人たちもそれを心得ていたはずだし、自ら森に近付こうとする、森に入ろうとする者などあるはずがない。かといって、村の中にいた者が襲撃を受けたと考えることもまた難しい。だとすれば、滞在する四人ものデビルバスターが何も気付かないはずがなからう。

とすると。

警告を無視して何者かが森に入ったのか。

あるいは外からやってきた何者かが犠牲になったか。

ドロドロしたものが胸を渦巻く。

何にせよ、誰かが犠牲になったことはほぼ間違いのないことであり――

(……くっ)

ただ、しかし。

そこまでは確信であったとしても、おそらく、その後に待ち受けていた光景は、この時点ではまったく予測していなかっただろう。

その場にいた三人の、誰一人として。

……バサバサッ！ バサバサバサッ！

アルファが近付くと、群がっていた鴉が一斉に飛び去っていく。中には獲物を横取りするなどと言わんばかりに威嚇する鴉もいたが、相手の実力を感じ取ったのか、最終的には全ての鴉がその場を飛び去っていった。

「……」

見上げるアルファの表情は微動だにしない。ただ一度、後ろからやってくるティースとセレナスを振り返り、そして躊躇うことなく逆手に持った“誘蛾灯”を振るった。

大木が振動する。

枝葉が不吉な音を奏でる。

そしてそこから――まるで実った果実がもげるように――いくつかの物体が落ちた。

「……っ」

思わず目を背けそうになったティースだったが、そこはグツと堪える。

……嘔吐を催すほどの死臭を辺りに漂わせる、果实。

それは予測した通り、元は人だったものの成れの果てだった。

そして――

「っ……！？」

「なっ……！」

セレナスとティースの口が同時に驚きを刻んだ。

アルファもまた、無表情ながらにその視線の動きを止める。

三人の目が、その“モノ”に釘付けになった。

あまりの驚愕に。

「ばっ、馬鹿な……！」

セレナスの声がわずかに上擦る。

その視線が見つめていたものは、鴉につつかれ、肋骨が剥き出しになるほど無惨な姿になった胴体。それとは別に、緑の絨毯の上に転がった首。眼球のない空洞の瞳。

そして、その額にかろうじてまとわりついていた、額当て。

それはその場にいる三人の、誰もに見覚えのある代物。

「ジン……ファウスト――」

「っ！？」

セレナスの呟きに、ティースの背中を言い知れぬ戦慄が駆け抜けた。

（まさか――そんな馬鹿な！！）

そんなはずはない、と、ティースの思考は反射的にそう考えた。

何故ならジンⅡファウストはデビルバスターであり、セレナスやマリアヴェルが認めるほどの実力者である。

そんな人物が、そうたやすくヤられるはずがない。

それはある意味当然の思考であり、また大体において正しいともいえるだろう。

が、しかし。

辺りに散らばる苦無。

首と離れた胴体の右手に、見覚えのある黒い手袋。

ボロボロになった服装。

その全てが、セレナスの言葉を嫌というほどに肯定していて――

「っ……」

一瞬の思考停止。

だが、ティースは奥歯を噛みしめながら口を開いて、

「……セレナスさん！ 急いでマリアさんと合流しましょう！」

そんな言葉が反射的に飛び出したのは、この一ヶ月の間に培われた“隊長”としての使命感故か。

「何があつたのかわからないけど……でも、考えるのは後だッ！
とにかく、早く！！」

「ああ。その方が良さそうさ……」

真顔のセレナスが同意すると、アルファもまた無言でそれに従った。

そしてすぐに駆け出す。

（……何が）

駆けながら、もう一度冷たい戦慄がティースの背中を突き抜けた。

――脳裏に焼き付いた、空洞の瞳。

鴉が、一際甲高い声を上げる。

切迫する、恐怖。

（一体何が起ったんですか……ジンさん……）

だが、物言わぬ屍がそんな心中の問いに答えるはずはなく――

その3『追い込み開始』

早朝、薄曇ったネービスの空を、一匹の鴉がまるで逃げるように忙しなく飛んでいった。

雨か。あるいは厄の前触れか。

とはいえ、

「あれれ？」

そんな空の下の一角にあるミューティレイクの人々にとっては、その日は特にいつもと変わらない朝。十数分ほど前、一階のホールでヴァレンシアという使用人の少女がちょっとした騒動を巻き起こした直後ではあったが、それを含めて“いつも通り”の朝なのであった。

さて、ここはそんなミューティレイクの別館にある執務室。そこには今、いつもの三人――すなわち、当主であるファナⅡミューティレイクと二人の執事がいる。

「ね、ちよつとちよつと、アオイさん。これ――」

「ふわあああ……はあ、なんれすかあ……」

入り口付近に突っ立ったアオイは寝ぼけ眼を擦っていた。首が徐々に傾きかけてはハツと目を醒まし、十秒もしないうちに今度は逆の方向に傾いていく。

「……」

そんなアオイを一瞬で見限ったリディアは、視線を百八十度移動させて、

「ねえねえ、ファナさん」

「どうなさいました？」

リディアの机と直角に配された執務机のファナは、貴族の娘らしい優雅な装いを整え、その表情は起きたばかりの眠気など微塵も感じさせなかった。何度もアッチとコッチを行き来している頼りないボディガード兼執事の男性とは全く正反対である。

「……これ、アオイさんにも見習って欲しいなあ」

「はい？」

「あ、ううん、独り言。……でさ。この影裏からの報告なんだけど。六十二番ね」

と、リディアは手にしていた紙切れ――ディバーナ・ロウ情報部隊“影裏”からの報告書をファナに示す。

それを見たファナは机の上に積まれた書類の束から、何の躊躇いもなく一枚の紙を選び出して、

「この、第四隊に関する報告書でしょうか？」

「うん、それぞれ」

リディアはそう言いながらピラピラと紙を振って、

「ま、大したことじゃないんだけどさ。今回の作戦に協力してくれるデビルバスターがいるじゃない？ ジンⅡファウストって人――」

「はい。このネービス領で活躍なさっておられるセレナスⅡカンファイスさんと、もう一人は普段、大陸の中央付近で活動されている方と聞き及びましたわ」

「そうそう。その、もう一人はどうも女の人らしいんだけど」

「まあ。では、ティースさんは少々お困りかもしれませんがね」

ほんわかとした微笑みを浮かべるファナ。もちろんそれは、ティースが女性アレルギーであることを踏まえての言葉であった。

「うん。……でさ。今回の現場って山奥の村じゃない？ で、実はその女の人、山の麓の街でお供を連れていたらしいんだ」

「？」
それは別段変わったことでもなんでもなく、ファナが不思議そうな顔をしたのは当然だ。

が、もちろんリディアも、そんなことは百も承知のようで、

「大したことじゃないと思うんだけどね。報告にもついでみたいに書かれてただけだし」

そう前置きしてから、言った。

「なんかそのお供が、少し時間を置いてから後を追うように山に入っていったんだって。……ちょっと変だと思わない？　一緒に戦うつもりなら一緒に入っていけばいいんだし、戦わないならわざわざ危険な場所に入っていくことないでしょ？」

「……」

ファナはきよんとした顔でリディアを見た。

それから一度、二度、三度と瞬きすると、ゆっくりと頷いて、

「それは確かに、少し不思議ですわ」

「でしょ？　……まあ、だからどうだってわけじゃないんだけどさ」

そう言って、六十二番の報告書を机の上に放るリディア。

確かに些細なことだ。その些細な矛盾に対する言い訳など、考えようと思えばいくらでも思いつくであろう。

だが、

「……」

ファナは考え込んでいた。

その、些細なる不可思議。多忙な彼女であれば、まったく気にしなくても当然の、あまりに小さな報告。

実際、その情報でたとえどのような推測を立てたとしても、それを根拠に動くことなど現実には不可能だろう。また、ちょっとしたアクションを起こそうにも、第四隊がいる村は外界から隔離されているにも等しい山奥であり、魔の脅威にさらされている場所でもある以上、非戦闘員である“影裏”を現地に直接派遣するわけにもいかない。

戸惑い。

不安。

——ティーサイトIIアマルナはまだまだ未熟だ。戦闘能力はレイやアクアたちデビルバスターはもとより、同じ候補生であるパシヴァルにも劣るし、判断力だって、長くディバーナ・ロウで働いてきたドロシーやギレットには遠く及ばないだろう。

そんな彼を隊長に据えたことには、当然、本来の任務をこなすこ

ととは別の思惑、別の期待があった。だからこそ、力不足である彼に与える任務の内容には、それまで以上に気を遣ってきたつもりだった。

今回のことも、そう。

事前に情報を集めて把握している限り、敵は取るに足らない下級の獣魔たち。

それに対し、味方はアルファを含め四人ものデビルバスター。

命を賭して戦うこの世界に絶対は存在しないとはいえ、客観的に考えれば狼がネズミに喧嘩を売るような、それほどまでに容易い任務。危険など微塵も感じない。

唯一気になることがあるとすれば、先ほども言ったように、その舞台が外界とは隔離された山奥であるということだが、彼女がそこまで考えなかったことは決してミスではなからう。というより、そんなことまで考えていては彼に与える任務など一つもなくなってしまう。

だから常識的に考えて、彼女の判断は正しいかった。

リディアの提示した“不可解”も、それが直接危険に繋がるという類のものでもなく。

そして――

「……」

漠然とした違和感を胸に抱えながらも、ファナは結局、そのままその日の執務を再開せざるを得なかったのである。

それと、ほぼ同時刻。

遠くの地にいるファナの想いとは裏腹に、ティースたちの周囲は今、緊張の渦に呑み込まれようとしていた。

「……間違いない。ネアンスフィアさ」

山奥の村は圧倒的に静まり返っている。その様はまるで廃墟、立

ち並ぶ家々が墓場のように見えるほどだった。

薄曇りだった空は今にも落ちてきそうにその厚さを増しており、吹きすさぶ風は湿った死の匂いを運び、鴉の鳴き声はまるで死霊の雄叫びのよう。

そして今、この押し潰されんばかりの負の空気にさらされた村の中で、アルファ、セレナス、マリアヴェル、そしてティースの四人は、村の外れ近くにあるマリアヴェルの借宿に集まっていた。

「セレナスさん、村の人たちは……？」

「皆、村の中心付近の家に固まるよう指示したさ。まあ、何も言わんでも家から出てみようだなんて、みんな思わんはずだけども」

セレナスの返答にホッと息を吐いたティース。

それは無論、村の人たちが少しでも安全になったことを喜んでのことであるが、そんな彼の安堵は、この状況においては少々的是ずれでもある。

なにしろ――

「ま、どっちにしろ、相手がネアンスファイアだとすりゃ、奴らの狙いは最初からオイラたちさ。村を襲撃したのもおそらくオイラたちを誘き寄せるためってことさな」

「……」

重い空気が立ちこめた。

デビルバスター・ハンターズ――ネアンスファイア。

一つのまとまった組織でないが故に、その実力、危険度にはピンからキリまである。が、総じて彼らはデビルバスターにとって驚異的な存在であり、そしてそんな彼らが今、ティースたち四人の命を虎視眈々と狙っているというのだ。

マリアヴェルが窓から外を窺っている。

ちりん、と、鈴が音を立てた。

「力押しで迫ってこないのは、私たちを弄んでいるのかも、ね」

「奇襲でなきゃ勝ち目が薄くなるから、ってのは樂觀視しすぎかい？」

「否定しないよ。でも、それを根拠に行動を起こすには少し心許ない、かな」

そんなセレナスとマリアヴェルの議論に、ティースが口を挟む。「セレナスさん。敵がネアンスファイアだっていうのは、間違いないんですか？」

だが、間違いであることを期待する彼に、セレナスはあっさりと答えて、

「ジンIIファウストの額に、ネアンスファイアの刻印が刻まれていたのを見なかったかい？ 誰かが何らかの理由で模倣してるのでなきゃ、間違いないさね」

「……額、ですか」

ティースは眉をひそめて、それから力無く首を横に振った。

あるとき、懸命に目を逸らさないようにしていたとはいえ、さすがに生首の額に刻まれた刻印にまでは目が届かなかった。いや、あの状況では、たとえ見ていたとしても、ただ顔面が無惨に切り刻まれたようにしか見えなかっただろう。

「さて、どうすつかね」

セレナスの不自然なほど明るい口調は、それなりの死線をくぐり抜けてきたことによる自信なのか、あるいは単なる強がりか。

マリアヴェルが問いかける。

「あなたの意見は？」

「全員で逃げるのが一番さね」

それは一見情けなくも思える消極的な意見だった。

だが、マリアヴェルもあっさりと同意して、

「そうだね。間違ってる」

確かに、敵の規模がまるで見えない上、外界との連絡も容易ではない状況。圧倒的に情報が不足している現状は、彼らにとってとてもなく危険で不利な状態である。

それはこの重い空気を肌で直接感じ取っているティースにも充分に理解できた。

が、

「……俺たちが逃げ出したりしたら村が襲われませんか？」

そんなティースの疑問に、セレナスは頷いて、

「それは充分有り得るさ。あるいはオイラたちが逃げることを見越して森に罠を仕掛け、待ち伏せてるかもしれない。どっちにしろ賭けてことさな」

そしておもむろにテンガロンハットを押さえ、歌い始める。

「人生なんてゝ所詮はバクチゝのゝ繰り返しゝ♪　ここがゝ人生の分岐点ゝ今年一番の見せ所さゝ♪　べべん……ってな感じで、そろそろ意見をまとめましょか」

「……」

ティースは即座に口を開きかけたが、すぐ思い直したように黙り込んだ。

実際のところ彼の意見はとっくに決まっていた。

（だって、村の人たちを見殺しにするわけにはいかないじゃないか……）

決して恐ろしくないわけではない。

ジンⅡファウストのあまりに呆気ない最期には途方もない戦慄を覚えた。未知の敵に対する恐怖は、死そのものへの恐怖にさえも匹敵した。

それらが心臓に爪を立て、得体の知れない力に腰が浮き上がりそうになり、不可視の圧力に足がもつれて地面に伏してしまいたいそうになる。

だが、それでも。

「俺は――」

「村の人を見殺しにするようなことはできない」

「え？」

「――だよね？」

言葉を遮ったのは、まるで琴線をくすぐるかのような美しい声色。驚いて見つめたティースに、マリアヴェルはふふっと微笑んだ。

「顔に出てるよ、ティースさん。……でも、今回は私もその意見に味方してみようかな。なんとなく、ね」

「……マリアさん」

「セレナスさん？　あなたは どうする？」

「ふふん」

マリアヴェルに視線を向けられたセレナスは鼻を鳴らし、膝でリズムを取り始めると、やはりおもむろに歌い始めた。

「せゝいぎを胸に、悪をゝ誅しゝ弱きを助け、強きをゝ挫くゝ♪
でゝんこうせゝつかのデビルバゝスタゝオゝレはゝオゝレはゝつゝ
よくてゝかゝれいな無敵のゝ戦士ゝ♪」

そして最後にポポンと膝を二回、強く叩いた。

「全員で逃げたところで事態が好転するとは限らんし、そもそもヒーローが逃げ出しちゃ観客の皆さんも納得しないさね。……ま、オイラにまかしとき。この正義のデビルバスター、セレナスⅡカンファイスさんが華麗なるイリュージョンを披露してみせるさゝ」

「セレナスさん……」

なんとも心強い二人の言葉に、ティースはじわりと胸が熱くなるのを感じた。

デビルバスター、と一口に言っても、その中身は様々だ。自らの利のみを追求する者がいれば、中には邪悪にその両手を染め、目の前に立ちはだかる者もいるだろう。

だが幸いにして、今、ティースの眼前にいる二人のデビルバスターは、そういった類の者ではなかったらしい。

（……よし）

グツと拳に力が入る。

決して事態が好転したわけではない。が、たったこれだけの決意を交わし合っただけでどうにかなりそうに思えてしまうのだから、雰囲気というのは全く不思議なものである。

そしてこうなれば、実力的に大きく劣るティースとて足手まといになってはいられない。

「じゃあ、早速具体的な方針を決めましょう」

少しでも役に立ってみせようと決意を新たにし、先陣を切って口を開いた。

「ジンさんがあんなに簡単にやられてしまうほどの相手ですし、まずとはとにかく単独行動を避けるのが基本だと思いますけど……どうですか？」

セレナスとマリアヴェルの反応を伺うと、どちらも彼の提案を否定する素振りは見せない。

自信を持って、ティースは続ける。

「じゃあ、これからは可能な限り全員一緒に行動するようにしましょう。いくら敵が強いとしても、全員が一緒にいる限りそう簡単には――」

だが。

まるで、その加熱した空気に冷水を浴びせるかのように、冷たく抑揚のない声が響いた。

「止めた方がいい」

「え？」

熱しかけていた場の雰囲気が一瞬にして静まり返る。

全員の視線は声の主――それまで一言も発せず、まるで他人事のように窓際に佇んでいたアルファの元に集まった。

「アルファ？」

ティースの問いかけに対し、アルファはいつもの調子であらぬ方向を見つめたまま、もう一度、

「止めた方がいい」

そう言い放った。

いつもの通り多くは語らない。が、いくら変わり者とはいえ、何の理由もなくそんなことを言う人間ではない。

「死体を見た」

「え？　　どうということだ？」

アルファは淡々として応える。

「ジンIIファウストの受けた初撃は無防備な背中から、致命傷ではないが、戦闘能力の大半を奪う一撃だ。おそらくまともに戦ってすらもない」

「……？」

ティースはその言葉の意味をすぐに理解することができなかったが、

「無抵抗……予期せぬ一撃……」

セレナスは神妙な顔をしながら考え込んで、それからチラッとアルファを見る。

「“騙し”があつた……？」

「え、騙し？ ……ジンさんが、誰かに騙されて殺されたってことですか？」

ティースの問いにセレナスは腕を組んで頷くと、

「あれだけの実力者があつさりやられちゃったことを考えると、むしろそう考えるのが自然かもしれんさ。もしかしたら敵に幻の人魔が混じっていたのかもしれない。けど……」

セレナスはただでさえ細い目をさらに細め、アルファを見つめた。『どうも、先ほどの発言と合わせて考えると、そちらさんの言いたいことはそれだけじゃないっぽいさね』

「え？」

「……」

無言のアルファと、セレナスの視線が交錯する。

一度は和みかけた場の空気が、少しずつ、緊張を増しているのがわかった。

「セレナスさん……？」

わけのわからないティースを余所に、

「なるほど、ね」

今度はマリアヴェルが納得顔で頷くと、こちらはいつもと変わらない瞳をアルファに向けて、

「アルファさん。つまりあなたは、ここにいる誰かを疑ってるんだ

「？」

「え？ マリアさん……？」

表情は微笑んだまま。それは意図の掴めない微笑みだった。皮肉のようにも、あるいは余裕のようにも見える。

マリアヴェルはそのままティースを見て、

「だって私たちはお互い初対面。もしもネアンスファイアが最初から計画を立てていたのなら、この中に“裏切り者”——ネアンスファイアが紛れ込んでいてもおかしくない。ジンⅡファウストの死体の状況からして、その可能性も決して否定はできない……そういうことだ、ね？」

「そんな……」

まるで予測もしなかった可能性にティースが驚きの瞳をアルファに向けると、彼は視線をゆっくりと外の方へ向けながら躊躇もせず

に答えた。

「そう」

「……そんな馬鹿な！」

ティースはすぐに腰を浮かせて反論する。

「だって昨日、俺はこの二人と少なくとも二時間近く一緒にいた！もし人魔が人に姿を変えていたんだとしたら、そんなに長い時間は保たないはずだろっ！」

だが、アルファは動じず答えて、

「“封魔”を使えば、何日でも姿を変えられる」

「それじゃ魔力が使えなくなって戦闘力が落ちる！　そこまでのリスクを侵す価値があるとは思えない！」

「……」

「……」

答えないアルファ。

睨み付けるティース。

——この場合、客観的な視点でいえば、どちらの意見が正しいかを断定するのは非常に難しい。

“封魔”は人魔が人間に姿を変えるためのアイテムだ。特別な制約もなく使用できる代わり、ティースが言ったように人間としての姿を保つ間は魔としての力を完全に失い、また一定の時間が過ぎるまで自分の意志で元に戻ることはできない。しかもこの“一定の時間”は“封魔”の種類の他に個人差もあるためいつ頃効果がなくなるかを正確には特定できず、使用するリスクは確かに大きいのだ。

しかし、だからといってメリットがないわけではない。もし敵が複数で頭の良い集団であるとするならば、使い方によっては有効な手段であるとさえいえるだろう。

と。

そんな二人の対立に突破口を示してみせたのは、セレナスだった。

「……まあまあ」

緊張を解すように大きく息を吐きながら、

「疑われてるオイラが言うのもアレだけど、冷静に考えて今回はティースくんが正しいと思うさ」

「……」

まるで反応を見せないアルファに対し、セレナスは軽く苦笑してみせて、

「そもそも初対面のオイラたちに化けたところで、あのジンさんがそこまで心を許すはずがないし、やっぱメリットが少なすぎる。“騙し”があったとしたら、そんなちっぽけなもんじゃなくもっと狡猾な罠さね、きつと」

マリアヴェルもまた頷いて、

「ジンⅡファウストにそう疑える傷を残したのも、あるいは仲間割れを画策する敵の思惑の内かも、ね」

「……」

ぽう……と、アルファのもつ“誘蛾灯”の刃先に小さな明かりが灯った。

ゆら、ゆら。

ゆら、ゆら、と揺れる。

「……」

アルファは何も答えない。反論が思い浮かばないのか、反論する気がなくなったのか。その表情から真意は見えないが、少なくとも全員の結束に賛同する気がないことだけは確かだった。

と、

「ちなみに、アルファさん？」

「……」

マリアヴェルの言葉に、ようやくアルファの視線が動いた。

そして彼女は、そのまま問いかける。

「裏切り者”がいるとしたら、誰だと思う？」

「……」

ゆら、ゆら。

誘蛾灯の明かりがその瞳の中で踊る。

視線は、真っ直ぐにマリアヴェルを射抜いたまま、動かなかった。そしてマリアヴェルの表情も、微笑んだまま。

「私？ どうして？」

アルファは淡々と答えて、

「セレナスⅡカンファイスにはデータがある。容貌も、三つ又の細剣“雷針”も情報通り。別人である可能性は限りなくゼロに近い」

「なるほど。それに比べて、私は確かに素性不明なもの、ね」

マリアヴェルは可笑しそうにクスクスと笑った。

あまり深刻ではない。初見からそうだったが、彼女もまた、いまいち真意の知れない態度の持ち主だった。

「……」

アルファは無言のまま。

あからさまな険悪ムードにならないのは各人の性格故だろうが、場の空気は確実に白け始めていた。これから命運を共にし、協力して危地を脱しようというには、あまりに頼りなく、あまりに情けない雰囲気。

“裏切り者”など存在していないのだとすれば、それはおそらく敵

にとって思う通りの展開であっただろう。

そして、

「……もう、やめよう」

その空気をもっとも敏感に感じていたのが、ティースだった。

先ほど激昂してしまったことを反省するかのように、今度は言い聞かせるような静かな口調でアルファに言葉を向ける。

「アルファ。お前の言うこともわかるけど、俺にはマリアさんが敵だなんてどうしても思えない。確かに俺たちは昨日が初対面だけど、でも、この人が昨日見せてくれた色々な表情が偽りだなんてどうしても思えないよ」

そんなティースの言葉に、マリアヴェルは鈴のような音色で喉を鳴らして、

「巧みな演技かも、とは思わないの？」

「……」

ちくり、と、その胸に痛みが走った。

騙された経験は、彼にとって深い傷跡だ。

だが、

「思いません。……というより」

彼の長年培ってきた人生観は、その一事だけでいきなり人間不信に陥ってしまうほどヤワでなかったし、彼の中にある基本はいつも、他人を信じる心だ。

もちろんそれがいつの場合も絶対的に正しいとは言えず、今回それが吉と出るか凶と出るかはわからないが――

「俺は、全員を信じます。……会って日は浅いし、薄っぺらいと思われるかもしれないけど、でも信じられると、俺は勝手にそう思ってますから」

「……」

「……」

マリアヴェルはゆっくりと目を閉じ、セレナスはテンガロンハットに手を置いて目線を隠した。

そしてその一言に、澱んでいた空気が流れ始める。
たったの一言だ。

根拠も何も感じられない、まるで無責任な発言。

だがこの場に限って言えば、ティースのその単純明快な一言は確
実にその場にいる者の心を動かしたようだった。

いや……ただ一人を除いて。

「……」

無言のまま、アルファの視線は再び他人事のように外の景色を眺
め始めていた。

動かない。……いや、この程度で動くものなら、ティースとて最
初から苦労はしていないだろう。

「アルファ……協力して、くれないか？」

「……」

そんな呼びかけにも反応はない。聞こえてはいても、返答する言
葉を探そうとしていない。返答することが無意味であると、そう主
張しているかのように。

「アルファ……」

そんな彼の態度に、ティースは絶望する。

真摯な言葉さえも伝わらない。それが取り柄であり、悪くいえば
それしか取り柄のない――回りくどい言い回しや説得を苦手とする
ティースにとって、もうそれ以上の言葉は思い浮かばなかった。
と。

「なら、こうしちゃどうだい？」

そんな状況を見かねたセレナスが妥協案を示す。

「単独行動が危険なのはティースくんの言った通りさね。けど、疑
ったまま行動をとにもするってのもあんまウマくない……ってこと
で、とりあえず二手に分かれるのさ」

「え？ 二手に？」

「そ。片方は精力的に動いて真相を暴く。もう片方は万が一に備え、
村を守るためにここに残る」

セレナスは軽く両手を広げてみせて、

「ここにいるのは曲がりなりにも何度も魔と戦ってきた人間ばかりさ。一人ならともかく、二人で手を組めば、敵がよほどの手練れでもない限りあっさりやられることもないっしょ」

「二手、ですか……」

確かに悪い手ではない。全員で動くよりは危険だが、このままではアルファが単独行動を起こそうとするのも時間の問題だ。ならばそうした方が賢いだろう。

仕方なくティースは頷いて、

「……わかりました。マリアさんも、それでいいですか？」

マリアヴェルは迷った様子もなく、

「構わないよ。……ただ、希望を言ってもいいのなら」
ちりん。

「私はティースさんと一緒に行動させて欲しいな」

「え？」

ティースはビックリした。

「そ、それは構いませんけど、いいんですか？」

彼が戸惑ったのは当然だ。どう考えても四人の中でもっとも実力の劣る彼と一緒に行動することは、ヘタをすれば足手まといになってしまう可能性も孕んでおり、それを嫌いこそすれ、望む理由などあるとは到底思えない。

だが、

「なんとなく、ね」

ちりん。

もう一度鈴が鳴って、マリアヴェルは微笑でティースを見つめると、

「あなたに興味があるから」

「……え」

精霊のように美しい声色に、痺れのようなものが全身を走り抜ける。美しさと儚さが同居したその音色には、確実な引力があった。

「……じゃ、じゃあ」

ハッと我に返り、ティースは少し顔を赤くしてマリアヴェルから視線を外した。

「アルファ。お前とセレナスさん、俺とマリアさんで二手に分かれて行動する、ってことで、構わないか？」

「……」

アルファはゆっくりと外から視線を戻してティースを見つめ、そして数秒、その後ろに佇むマリアヴェルを見つめた。

視線が交錯する。

が、すぐに、

「君がそれでいいのなら、構わない」

やはり興味をなくしたように視線を外しながら、そう答えたのだった。

ザザザザザザッ！！

風の七十一族は体長一メートルほどのリスのような形の獣魔だ。

鋭い爪と牙を持つのは大抵の獣魔に共通のものだが、この獣魔は背中の中心に穴のようなものが空いており、そこから瞬間的に強烈な風が吹き出る。殺傷能力こそそれほどないものの、バランスを崩したり視界を失ったりするには十分な威力であり、その動きの素早さもあって群れで現れた場合には十分な警戒を必要とする獣魔だ。

——とはいえ。

「っ……」

鋭い視線が獣魔の動きを射抜く。横にステップを踏んで風撃を避けたティースの細波が、風の七十一族の体を捉えた。

骨を断つ感触が腕を伝わって肩に抜ける。灰色の空の下に獣魔の赤い血が飛び散って、服を微かに汚す。

微かに乱れる呼吸。だが、動きにはまだまだ余裕があった。

「次——っ！」

ティースたちが二手に分かれてから二時間後。

厚い雲の向こう側で太陽が頂点に達しようとしていたこの時間、突如村に現れた獣魔——風の七十一族たちは、他の村人などまるで眼中にないかのように、村の中を見回っていたティースとマリアヴェルを目掛けて襲ってきた。

その数は四匹。

……なんとも微妙な数、と言わざるを得ない。

この小規模な村の住民だけであればそれでも十分な脅威だったかもしれないが、今、この村には都合三人のデビルバスターが滞在している。そのうちの二人が調査のため出払っているとはいえ、七十台の獣魔が四匹という戦力は、たとえ新米デビルバスター一人であっても充分に対応できるであろう数だ。

まして、この場にはそのデビルバスター——マリアヴェルだけではなく、それなりに場数を踏んだティースという存在もあるのだから。

「よしっ、二匹目……マリアさん！ そっちは！？」

「終わったよ、ティースさん」

二匹目の骸が地面に転がったのを確認して振り返ったティースの視界には、彼よりも一足先に戦いを終えたマリアヴェルの姿があった。

「……って。マリアさんのその武器……ものすごいですね」

「ん？」

周囲を伺い、敵の気配がないことを確認して、ティースはマリアヴェルへと歩み寄った。

ちりん……。

彼女が手にしている長い棒。先ほどまでは単なる棒だったはずのその先端には、いつの間にか氷で出来た刃が備わっている。

死神の大鎌——氷のデスサイズ。

神秘的な佇まいの彼女にとって、それはミスマッチのようであり

ながら、どこか絵になる雰囲気も漂わせていた。

聖者の持つ凶器。

それは墮天使のような美しさ、とても言おうか。

「これで終わりだね」

「ええ……どう思います、マリアさん？」

ティースはそう言いながら、腰にぶら下げたタオルで細波の血を拭った。水に濡れたような細波の刀身は自ら血と脂を弾き、一拭きで使用前とまったく同じ状態に戻っていく。

「ネアンスフィアならある程度はこちらの力量も察しているはずだし、少なくとも本気ではないと思う」

パキン。

硬質な音を残し、マリアヴェルの武器“雪姫”が再びその刀身を隠した。……こちらは血を拭う必要すらないらしい。

ちりん。

風が吹いて、九つに分けた彼女の髪が揺れた。

同時に空気を震わす、鈴の音。

「様子見、ですか……？」

「そうかもしれないし、何か他の意図があるのかもしれない。たとえば私たちを、村の中に足止めしておきたい、とか」

ちりん、ちりん……

確かに実際にこうして襲撃があったことで、村を守る立場の彼らはそう容易に動けなくなっていた。

「……ふう」

戦いの余韻が消えると、途端に体がブルツと震えた。風は相も変わらず湿っぽく、空の雲は徐々に厚みを増している。

（まだまだ様子見、か……）

見上げると、低い空を鴉が旋回していた。

まるで次の獲物を待ち望んでいるかのように。

（……少し、不安だけど）

そのときティースが感じていた感情は、人であれば誰もが持つこ

く当たり前のものだ。

細波を握りしめる手の平はじっとりと汗を掻き、何度握り直しても乾く気配がない。動悸は静かに、だが力強く肋骨を叩き続け、頭の奥はともすれば思考を放棄し、現実から逃げ出してしまいたいそうになった。

そよぐ枝葉に、まだ見ぬ敵の幻影が見える。

風の音が誰かの断末魔の悲鳴に聞こえる。

――だが。

（……でも、村のみんなもこんな恐怖と戦ってるんだ）

それを想像すると、彼の心は逆に奮い立つのだ。

（隔離されたこんな場所で、突然魔の襲撃にさらされて……）

決意の思考は、生き残るための最善の道を探して巡る。

（守って、そして生き残らなきゃ。なんとしてでも――）

「ふふ……いい風だね、ティースさん」

「……え？ は、はあ」

目を閉じ、空を見上げるマリアヴェルはあくまでマイペースだった。

ちりん。

風が吹いて、鈴が揺れる。

と。

「あ、そういやマリアさん。昨日から気になってたんですけど……」

「ん？」

空を見上げたままのマリアヴェルに、ティースは尋ねた。

「その鈴、どうして一つだけ白いんですか？」

「これ？」

彼女の九つに分かれた髪の毛のそれぞれにくくりつけられた鈴。九つのうち八つまでは普通の鈴――金のメッキだったが、よくよく見てみるとティースの言うように一つだけ色のない真っ白の鈴だった。

すると、マリアヴェルは白い鈴のついた髪の毛の先端を左手に取って、「これは、大好きな人からのプレゼント」

「え……あ、はは、なるほど」

その返答に、ティースの顔には思わず微笑みが浮かんだ。

（……マリアさんってちょっと不思議な感じだからあまり想像できなかったけど、でも、恋人ぐらいいたっておかしくないよなあ）

それを想像するだけで、何となく幸せな気分になるティース。

つくづく単純というか、純粋な男であった。

……が、だからこそ気の回らない部分があることも確かで、

「でも洒落てますね、白い鈴なんて。俺はよく知りませんが、確かネービスで主流のミーカール教では縁起のいいアイテムですよね？」

「ふふ、確かにそうらしい、ね」

マリアヴェルは少し可笑しそうに笑って、手にしていた髪の手先を再び風に流した。

鈴が鳴る。

「でも私の産まれたところでは、白い鈴は不幸の象徴だったよ」

「え？」

その言葉が纏う雰囲気、ティースの口元に浮かんでいた笑みが止まった。

「それもただの不幸じゃなくて、不幸な幸せ、転落を前提とした幸福を意味する、とても、とても不吉な品。……もちろん、あの人はそんなこと知らずにプレゼントしてくれたのだけど、ね」

「……」

まるで他人事を語るかのようなマリアヴェルの表情に、ティースの幸せな気分はアツという間に萎み、今度は逆に胸が締め付けられる想いに襲われた。

と、同時に悟る。

……決して口に出して聞けはしないのだが、おそらく彼女の言う“あの人”は、すでにこの世の者ではないのだろう、と。

「ティースさん……あなたは、あの人によく似てるの」

突然、マリアヴェルはそう言った。

「え？」

「昨日あなたと話していたら、久しぶりにあの人の言葉を思い出した」

当然の如く戸惑うティースに、マリアヴェルは懐かしむようにゆつくりと目を閉じ、そしてその美しい声色で詩のように言葉を紡ぐ。「救える者がたった一人であつたとしても、一人でも多くの命を救うことができるのなら、他にどんな戦う理由が必要だろう……だから私は戦う。私を犠牲にしても戦い続ける。それがもしも、お前に理解されなかったとしても……って、ね」

淀みのない口調。

おそらくは一語一句、言葉の隅々まで鮮明に記憶しているのだろう。

「結局、私には最後まで理解できなかったな……」

目を閉じたまま呟くその姿に、ティースの瞼は微かに震えた。

（マリアさん……）

その背後に見えたのは、おそらくは何らかの悲劇。それを平然として語ろうとする彼女のその姿がとても物悲しく見えたのだ。

そしてティースは少し視線を斜めに落としながら、

「……マリアさんが戦い続けるのは、その人が戦っていた理由を理解したいから、ですか？」

「え？」

まるで考えていなかった、という顔だった。

だが、やがてマリアヴェルは表情を緩めると、

「……なるほど、ね。そういう考え方もあるんだ」

しゃん——

涼やかな風が吹いて、九つの鈴が一斉に美しい音色を奏でた。

まるでそれを合図にしたかのように、雰囲気に戻る。

「さ、ティースさん。敵の攻撃も終わったようだし、いったん家に戻って休もうか」

そう言って踵を返すマリアヴェル。

だが、

「……あ、いえ。ちよつと待ってください」

「ん？」

すでに歩き始めたマリアヴェルが振り返ると、

「その前に、少し村の人たちに話を聞いてみたいと思います」

「話？」

「ええ、昨日のジンさんの行動について調べてみようと思うんです。ジンさんが一体どこでやられたのか。村の中なら俺たちが誰も気付かなかつたのは変だし、村の外ならどうして一人でそんなところに行ったのか腑に落ちない」

マリアヴェルは納得したように頷いて、

「でも、それを調べてどうするの？」

「セレナスさんが言ってたでしょう？ ジンさんほどの人が騙されたのだとすれば、それはきつと狡猾な罠だ、って。じゃあ、その罠の正体を暴くことができれば、この先の戦いを有利に運べると思うんです」

⋮

「情報を集めて、そして考える。どうすれば守れるのか。どうすれば生き延びられるのか。……でも俺はまだ未熟だし、色々見落としたり、考えが及ばなかったりすると思うんです。だから……それを補ってもらえませんか？　みんなが生き残るために、一緒に考えましょう」

そんな彼の強靱な視線を受けて、マリアヴェルは目を細めた。

やはり何かを思い出すような表情で。

「……もちろん。協力させてもらうよ」

「るゝるるるるゝ♪ はじけとゝぶ、せゝんこうゝ♪」

弾け飛ぶ閃光。

三つ又のレイピアから迸った稲妻が、背後から飛びかかろうとした風の七十一族に命中し、何度も何度も打ち付け、吹き飛ばす。

魔力、あるいは生命力の強い魔であれば致命傷とはならない。が、最下級に位置される七十台の獣魔にとって、それは充分に命を奪いうる威力だった。

「……」

そこから視線を少し移すと、陽気な歌のセレナスとは対照的に、淡々と獣魔を退治していくアルファの姿がある。

光の力を込めた神槍“誘蛾灯”が目にも止まらぬ速さで敵を切り裂いていく。

停止と行動。

一定の速度と一定の威力。

まるで無駄がなくほとんど波のない戦い方は、まるで彼の性格を表しているかのようだった。

ただ――

「ふうん」

すでに自らのノルマを果たしたセレナスは、まだ一匹の獣魔と戦っている彼の背中に、独り言を呟く。

「サン・サラスってあんなもんかね」

「……」

おそらくアルファの耳には届かない程度の声。

“誘蛾灯”が最後の獣魔を捉える。

もちろん常人には目にも止まらない速さ……だが、セレナスの目にはその動きがしっかりと捉えられていた。

避ける、と言われれば、余裕を持って避けられただろう。

「……ふうん」

狐のような細い目に少し拍子抜けしたような色を浮かべながらも、セレナスはすぐいつもの人のよい陽気な表情に戻って、

「お疲れさん。しかしまあ、失礼なヤツらさね。オイラたち相手に最下級の獣魔がたったの六匹とは」

振り返るアルファの表情はいつもと変わらない。

事も無げに、地面に落ちた獣魔の死体を一瞥すると、

「おそらく、これで全てではない」

「ま、それはそうさな。ジンさんがやられたぐらいだもの。……さて、どうすつかね。もっと深く行ってみるかい？」

セレナスはそう問いかけた。

彼らが今いるのは、村から歩いて十五分ほど入り込んだ地点だ。

今のところは敵の出方を見て、いざとなれば村にいるティースたちに救援を求めることが可能であり、なおかつ村に異変があれば戻ることのできるような位置である。

「……」

アルファは黙ったまま森の奥を眺めた。

だが、ほとんど思考することなく、ゆっくりと踵を返す。

「……戻るのかい？」

少し意外そうにセレナスはそう言った。

「ま、マリアさんのことを疑ってるなら、ティースくんが心配な気持ちもわからんでもないさね」

「……」

アルファは答えない。

だが、彼の判断はおそらく正しい。こうして実際に敵の襲撃があったとはいえ、まだ真相が浮かび上がったとは到底言い難い。……それどころか、レベルの低い獣魔が出現したことで、ジンⅡファウストの死がさらに不可解になったとさえ言える。

深入りせずに様子を見る。それがもっとも安全な方法に間違いなかった。

が、しかし。

そういった思惑というのは、大体的場合にして思い通りにいかないもので――

「！」

急に足を止め、振り返るアルファ。

セレナスは咄嗟に“雷針”に手をかけ、そして辺りを窺った。
「悲鳴？」

二人の耳に確かに聞こえた、助けを求めるような甲高い女性の声。
ガサガサガサッ！！

「！」

そんな彼らの視線の先からは、茂みを掻き分ける音が聞こえてくる。

さらに、

「た、助けてくれええええッ！」

今度ははっきりと、確実に助けを求める声が聞こえた。

村人か。

あるいは外から来た人間か。

「……あっちさ！」

方角を特定するなり、セレナスはすかさず地面を蹴る。

「……」

対するアルファはほんの一瞬だけ躊躇った。

——方角は森の奥。これ以上奥に入り込めば、何らかの不測の事態に対処できなくなるかもしれない。

「……」

が、結局は彼の足も地面を蹴る。

その時点で考えられるいくつかの可能性の全ては根拠の薄い推測でしかなく、助けを求める何者かを見捨てる理由にはならなかった。また、すでに先に行動を始めたセレナスに単独行動を強いることも得策ではないだろう。

最初から選択肢はなく、止むを得ない。

「……」

表情はいつもと変わらぬまま。

アルファは長い銀髪を揺らし、セレナスの後に続いていくのだった。

「……」

騙したのは果たして誰なのか。

ジンⅡファウストの遺体の推定出血量と、その場に飛び散っていた血の量から判断すると、彼が命を奪われたのが死体の発見場所でないことはわかっていた。

村の中にそれらしき痕跡はどうやら見当たらない。

とすると、残る可能性は森の中……つまり彼はあの日、単独で森の奥へ向かったということになる。

——何故、単独で行動したのか。

たとえ腕利きのデビルバスターであっても、単独行動に大きな危険が伴うことは当然に承知しているはずだった。一人では緊急時の手当をするにも不便だし、何らかの錯誤、何らかの小さなミスがそのまま死に直結することもあり、それはどれだけ経験を積んだデビルバスターにも共通して言えることである。

しかも今回の場合は同じ村の中に二人のデビルバスターがいるのだ。たった一声かけるだけ、普通に考えれば単独行動を取る必要などない。

とすると、ジンⅡファウストの単独行動の理由として考えられるのはせいぜい三つほどだろう。

ジンが自らの力を過信し、そして命を落としてしまうような愚か者だったか。

それとも、単独で行動しなければならないほど“緊急の事態”だったか。

あるいは——“本当は単独ではなかった”。つまり、一緒に行動していた誰かが、実は敵だった、という可能性だ。

「そういや昨日の夜、日が沈んだ後、セレナスさんがジンさんと一緒に森の中に入っていったのを見ましたけど……」

「……」

今さっき聞いたばかりの村人の言葉に、ティースは考え込んでいる。

騙したのは、誰なのか。

ティースは歩きながらふと、後ろのマリアヴェルを振り返って尋ねた。

「セレナスさん、そんなこと一言も言ってませんでしたよね？」

「そうだね。彼を最後に見たのは、私たちと一緒にいたあのときだと言ってたよ」

「村の人の見間違えって可能性は……」

「でも、セレナスさんの格好はこの村じゃ見掛けないものだし、見間違える方が難しいかもしれないよ」

「……」

不可解だ。

ティースはさらに考え込む。

その証言——昨日の夜、一緒に歩くセレナスとジンを目撃したという証言をしたのは、一人ではなかった。先ほどの青年に加え、若い少女と、三十台後半の女性。

三人の村人が同じことを証言しているとすると、マリアヴェルの言うとおりに、全員が見間違えたということはどうしても考えにくい。とすると、出てくる結論はもちろん一つ。

三人の村人が嘘をついていないと仮定するならば、セレナスが偽ったとしたか考えられないだろう。

「なんのために嘘をついたんだ……？」

「……」

マリアヴェルは黙ってティースを見つめていた。

「嘘をついて得することなんて何一つ——」

そう。普通に考えれば嘘をつく理由などない。

それこそ。

それこそ敵——つまり、ネアンスファイアだというのでなければ。

「……」

ティースは首を振った。

考えにくい。

どうしても、考えにくい……が、そうすると矛盾がどうしても晴れない。

八方塞がりだった。

(どうということだ……まさか、でも——)

焦る心を懸命に落ち着かせながら、さらに思考を巡らせる。

思考を巡らせていて——ふと。

「……？」

ティースは辺りの景色が見覚えのある——昨日、セレナスたちと会話をした場所であることに気付いた。

足を止める。

目の前には、昨日寝転がった、だだっ広い草むらがあった。

——思い出す。

声をかけてきたセレナスとマリアヴェル。

被害の爪跡を残す家々を見つめながら、言葉を交わした。

青空を泳ぐ雲。

気持ちの良い春風。

鼻孔をくすぐる草の香。

楽しそうに駆け回る子供たち。

セレナスが世間話をしようと申し出た。

アルファの話題。

ジンの話題。

マリアヴェルがティースに質問し。

そんな彼女の過去を勝手に想像して、セレナスは半泣きになりながら謎の歌を歌った。

その後、遠くに子供たちと遊ぶジンの姿を見つけ。

ジンが子供好きらしいという話をセレナスから聞いて。

その後、別れ——

(……あれ?)

そしてふと、感じた違和感。

「……そんな、馬鹿な」

「？」

「なんであんな——」

ハッとして背後を振り返るティース。

目の前には不思議そうな顔をするマリアヴェル。

その向こうには一面の畑。

壊れかけの家々。

ジンと子供たちが遊んでいた広場。

鬱蒼と生い茂る森——

——蘇る恐怖。

まだ見ぬ未知の敵。

それは、その一端が垣間見えたことによる、恐怖だった。

戦慄。

恐ろしい想像。

(そんな、馬鹿な……でも、もしそうだとしたら——)

確信ではない。

微かな矛盾から導き出された、あくまで可能性。

だが、その可能性は現時点で矛盾の回答を導き出していた。

手練れのデビルバスターであるジンⅡファウストが、あまりにも

無抵抗に殺されてしまったこと。

そして今、村人から得た証言。

「……」

確信ではない。ティース自身、その可能性については半信半疑だ。

だが、もしもそうだとしたら——

「……マリアさん」

内心の動揺を懸命に押さえ込みながらティースはマリアヴェルを振り返った。

落ち着いた口調。

彼としては迫真の演技だったといえるだろう。

「とりあえず、アルファたちと一度合流しましょう」

もしそうだとしたら、今のこの状況はとてつもなく危ういものだった。

最悪の可能性。

そう。

彼の中で芽生えたその可能性が事実だとしたなら、彼らは今、とてつもない“全滅”の危機に瀕しているといっている。

（信じられない……信じられないけど、でも——）

まだ見ぬ敵。

巧妙に隠された悪意。

（敵は、もしかしたら——）

風が吹いた。

運ばれてきたのは、死の香り。

彼の閃きは重大であり……そしてほんの少しだけ、遅かった。

ネアンスファイアたちの狩りは、これからが本番なのだ——

その4『狩獵、続行』

ネービスの誇るデビルバスター部隊“ネスティアス”。その軍服風の制服は通常深緑色だったが、その中でもトップの十人にのみ与えられる“ディグリーズ”の称号を持つ人物は漆黒の制服を身に纏っている。

そしてこの日の昼過ぎ、ルナジェールの街に、その漆黒の制服を身につけている人物が二人姿を見せていた。

リゼットⅡガントレットとルーベンⅡバンククロフトである。

「ルーベン、見てごらん。ほら、とても美しいイヤリング。すごく似合うと思わないかい？」

そう言ってリゼットが示したのは、一歩間違えれば悪趣味じゃないかと思われるほど大きな赤い石のついたイヤリングだった。

だが、それを見ていたルーベンは別のものを手にとって、

「そうですか。どっちかというところの方がいいんじゃないかと」

これまた悪趣味な小さな髑髏——ではなく、生首型の彫刻がついたイヤリングである。

「ああ、ダメダメ。カレルはああ見えてそういうの嫌いだから。嘘じゃないよ。長年付き合ってきたこの僕が言うんだから間違いない」

「それは残念」

ポン、と、投げ捨てるように生首型のイヤリングを元の場所に戻す。と、どういう仕組みになっているのか、生首は笑い声のような音を出した。

「じゃあ、ルーベン、次の店に行ってみよう」

結局、先ほどのイヤリングは買わないらしい。……普通に考えて正解だろう。何より、カレル——敵からも部下からも恐れられるディグリーズのカレルⅡストレンジが、イヤリングなどというものを身につけるはずがないのである。

「ああ、そうそう、受付嬢のお土産もきちんと言っていかないかね。」

あの子猫ちゃんはなかなか気まぐれだから、一度機嫌を損ねると大変なんだ」

ディグリーズの一人である“月神”リゼットⅡガントレットは、長くも短くもない長さの金髪をやや後ろに流した“男装の麗人風”の人物である。袖に書かれた字はディグリーズでは最下位の“玖”だが、もちろんその実力は並のデビルバスターを遙かに上回る。

外見、口調ともにどこか芝居じみていて鼻につくところもあるが、どうやら本人に悪気はないようで、一部の女性からは熱狂的ともいえるほどの視線が送られているという。

一方。

「気まぐれっつか、欲まみれなだけですよ、あの人。こないだラドフォードさんのお土産とか質屋にふつーに売られてましたし」

“白の御子”ルーベンⅡバンククロフトは大陸全土を見渡しても非常に珍しい、先天性の白髪を持つ青年だ。が、それは今、ひさしの大きな帽子で隠されている。袖に描かれた字は“伍”。ディグリーズでは六番目にあたる。

そんな彼らの年齢は二十三歳と二十歳。

喋り方や態度を見ての通り、リゼットの方が若干年上である。

「ああ、でも困ったな。あまりお土産を配りすぎると八方美人だと思われてしまうね。やはり一人に絞るべきかな」

悩みながら次の店に向かうリゼット。その斜め後ろをトコトコとついていくルーベン。

「もう思われてますよ、きつと」

「うーん、どうしよう。カレルのニヒルな魅力にも痺れるし、かといって受付嬢の愛らしい笑顔も忘れられない。弱ったな」

「もう面倒だから、通り名を両刀使いに変えてもらったらどうです」
会話になっていない。まあ、リゼットの方が話を聞いてないのでそれも当然か。

ちなみに、二人の後ろにそれぞれの率いる部隊員がズラツと並んでいることからわかるように、これは決してバカンスなどではない。

いわば任務の合間の小休止といったところか。

中にはそんな二人の行動に眉をひそめる者もいるが、大半は慣れているのか好意的に受け止めているようで、中にはちゃっかり便乗して、家族や恋人への土産を買っていく者もいる。

と、そんな、不自然なほどに和やかな雰囲気の中。

その空気を一変させたのは、途中で入った一つの伝令だった。

「ネアンスファイア……“クリアアント”？」

リゼットの呟きに対し、ルーベン隊を含めた部隊員たちに一気に緊張が走る。

「……ネアンスファイア？」

「ネアンスファイアだって……？」

そんなざわめきを前に、馬から下りた伝令がかしこまって答えた。「はい。それらしき情報がありましたので、至急現場に急行を願います。もしそれが事実であり、かつ可能であるならば直ちに殲滅せよとのこと。また、増援としてディグリーズ“捌”隊と、その他二部隊の計三部隊がネービスからすでに派遣されております」

「……来なくていいのに」

ボソツと呟くルーベンに、リゼットはそれを窘めるようにチラッと見て、またすぐに伝令の方へと視線を戻した。

「わかりました、直ちに急行します。……ルーベン、行くよ」

「はいはい。ふう、相変わらず人使いの荒いことですね」

「なお」

伝令はさらに言葉を続けた。

「現場である村には、ネアンスファイアの標的となったらしき三人のデビルバスターが向かったとの情報が入ってます。フリーのデビルバスターが二人と、残る一人はディバーナ・ロウの者らしいのとです」

「ディバーナ・ロウの？」

チラッと振り返ったりゼットの視線の先で、ルーベンの表情が微かに動いた。

「……ま、それじゃ行きましょうか」

何気ない風を装ったその言葉にも隠しきれない微かな起伏が産まれ、どこか色素の薄かった瞳が急激に鋭さを増す。

その理由を知っているリゼットは、特に不審がることもなく、ただ一つだけ頷いて、

「うん。……みんな！ 心の準備はいいかい!？」

部隊員を振り返って叫ぶ。

おおおおお！ と、空気を震わすほどの関の声が返ってきた。

疲れなど微塵も感じさせない。

どんな状況であれ。

どんな内容であれ。

ネービス領内を脅かす者には容赦せず、躊躇せず、殲滅する。

それがネービスの誇るデビルバスター部隊、ネスティアスだった。

——とはいえ。

彼らが村に到着するには、どれだけ楽観的に見積もっても丸一日はかかる。

それまでの間、獲物となった四人がネアンスフィアの魔の手から逃れ続けられるのか、否か。客観的に言えば、答えは明らかだった。否、である。

ザザザザザッ！

小刻みに茂みを掻き分けるその音は、その主が常人では考えられないほどの速度で動いていることを表していた。

「……」

長い銀色の髪が宙に躍り、頬に刻まれた新しい傷跡からは微かに血が滲んでいる。身に纏うハートマークのセーターはすでに敵の返り血に汚れていた。

——異常だ。

何が異常かというと、その浴びた返り血の量。

そのデビルバスターの青年、アルファⅡクールラントは光速だった。同じディバーナ・ロウのデビルバスターであるレアスやアクアのように爆発的な瞬発力を持っているわけではなかったが、一連の動き全てが淀みなく、しかも速い。返り血が吹き出すよりも速い。だから、返り血を浴びるということがほとんどないはずだった。

では、この日に限って、何故？

理由はいくつかある。このときの彼が本調子でなかったということもその一つ。が、それはともかく、あれだけの強さを誇った彼が徐々に追いつめられているのは確かだった。

「……」

一緒にいたはずのセレナスの姿はない。

視界に移るは、木々。

木。

木。

木。

——おかしい。明らかにおかしい。

いくら非常事態でも、帰り道を失ってしまうほど彼は愚かではない。入り込むときには確実な目印を残してきていたし、その目印を辿ってもきた。

が、進めど進めど、村にたどり着かないのだ。

「……アルファ！」

森の中に声が響く。

聞き覚えのある声にアルファは思わず立ち止まった。

ティーサイトⅡアマルナの声だ。

——仲間の声は生への希望。死を恐れる人々にとって、それは万人に等しい安堵の快楽だ。

しばらくして、森の中から声の主が姿を現す。

慌てた様子で駆け寄ってくるティースは、同じように敵に襲われていたのか、手には剣を持ってすでに臨戦態勢を整えていた。

「……」

アルファはゆっくりと神槍“誘蛾灯”を下ろす。

そして、

「……かつ……！」

槍が一閃し、ティースの喉を貫いた。

——いや。

「……」

どさっ、と地面に崩れ落ちたのは、ティーサイトⅡアマルナとは似ても似つかない、全くの別人だ。

幻覚。

……狩猟者は用意周到だった。大掛かりな罠で獲物を追い込み、弱ったところで甘い罠に引き寄せ、そして確実に狩る。追いつめられた人間に対して、それは非常に有効な手段といえる。

こうなっていると、今まで頼りにしてきた目印も、どこかで偽物を見せられていたと考えるのが自然だろう。

「……」

しばし考えた後、アルファは空を見上げる。

分厚い雲に覆われた太陽の位置を探すのは容易ではなかったが、そこらにある切り株の年輪と合わせて考えればおおよそ方角の検討はつく。現在地の把握ができないだけに決定的な方法とはいえないが、何の頼りもなく動くことに比べればずっと有意義だろう。

「……こっちか」

そうして彼は森の中を再び歩き始める。

狩猟者の悪意が溢れる死地へと向かって。

死の恐怖。

死とは生命にとって終焉を意味するものであり、その先は疑いようもない零の世界だ。零に何を乗じてでも零であるように、どんなに

大きな喜楽の感情も死の恐怖の前では輝きをなくし、打ち負けてしまう。

もちろん死と隣り合わせに生きていればそれが麻痺することもある。努力によってその恐怖を押さえ込むことも決して不可能ではない。平静を装う程度のことであれば充分可能だろう。

が、しかし。

それがこんな小さな村の、ごく平凡な子供たちだったとしたら、どうだろうか。

「……そりゃ事実を目の当たりにしていないのなら、わかるんです。恐怖を実感していないという可能性もありますから。でも」

鴉が上空を旋回している。

村は丁度昼食時。だが、のんびりと昼食を摂っている者など、この村の中には一人もいなかった。

不吉な風が家のドアをガタガタと揺らす。

鴉の鳴き声。

埃っぽい空気。

無表情な足音。

「半壊したたくさんさんの家を見ればわかるように、今回の敵は実際村に入り込んで破壊活動を行っていて、村の人は実際にそれを目の当たりにしているはずなんです。……だから——」

「なるほど、ね」

窓際に佇むマリアヴェルはそっと頷いて、窓の外へ視線を移す。

「つまり、そういうことなんだ」

「……マリアさん」

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

足音はその大きさを増してくる。

不自然なほどにゆっくりと、まるで行進するかのように。

窓の外を見つめたまま、マリアヴェルは言った。

「確かに、ね。本当に獣魔の襲撃があったなら、子供を外で遊ばせたりするはずない」

「……」

「——でも」

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

足音は複数。

それも一つ、二つではない。

十か、二十か。それ以上か。

「ほんの少しだけ、気付くのが遅かった……かな」

「ひひひひ……ひひひひひひ……」

「ヒヒ……ヒヒヒヒヒ……」

「へ……へへへへ……」

笑い声。

「……」

無言で覗き込んだ窓の外には、脂ぎった複数の瞳が見えた。

「ひひひひひ……ひひひひひひひひひ……」

「ヒヒヒ……ヒヒヒヒヒヒヒ……」

「へへ……へへへへへへ……」

子供。

女性。

老人。

昨日、無邪気に遊んでいた子供がいる。

道ばたで何度か見掛けた顔もある。

少し前、言葉を交わしたばかりの青年もいる。

そしてその先頭には、皺だらけの頬を緩めてニコニコとする好々

爺。

村長。——村長を装っていた老人。

それらが皆、同じ笑みを浮かべていた。

引きつったように頬を吊り上げ。

前歯を剥き出しにし。

目尻にはたくさんの皺を寄せ。

そして——

「ひひひひひ……ひひひひひひひひひ……」

「ヒヒヒ……ヒヒヒヒヒヒヒ……」

「へへ……へへへへへへ……」

一緒に、同じ笑み。

愉悦。

獲物を追いつめ、そして引き金を引き絞る瞬間の、愉悦。

「……」

異様な光景に、ティースの背筋が震えた。

誰もが、つい先ほどまでは友好的な笑みを浮かべていた。獣魔の襲撃に怯え、村を救いにやってきたデビルバスターたちを頼り、救世主と崇めていたのだ。……そのはずだった。

「村そのものが罠とはね。敵がそこまで大規模だなんて考えもしなかったよ」

マリアヴェルの呟きに、ティースは無言で窓の外を見つめる。

家を囲む“元”村人たちはその多くがすでに人魔の姿を晒していた。

おそらくは数日の効果をもたらす“封魔”で姿を変えていたのだろう。現在も五分の一ほど人間の姿が混じっているのは、個人差で封魔の効果が長続きしているためか。

とはいえ、これだけの人数であれば、そのことによる戦力減も些細な問題である。

「村は、とつくに全滅していたんですね……」

呟くように言ったティースの言葉に、マリアヴェルは窓の外を見つめながら頷いて、

「おそらく私たちの元に依頼が来る前から、私たちを罠に掛けたに
めだけに、ね」

「っ……」

カチリ、と、細波が音を立てた。

——沸き上がる、灼熱。

おそらくは三十人を超える人魔たちと、彼らが従えるそれ以上の

数の獣魔たち。見たところ大半が下位魔、あるいは最下級の獣魔だが、いくらなんでも多勢に無勢だった。

もしこの場にアルファとセレナス、さらにジンがいたとすれば結果はわからない。が、マリアヴェルと、そして戦力的に劣るティースの二人だけではいくらなんでも無茶な戦いと言わざるを得ないだろう。

戦えば、確実に命を落とす。

そしてこの状況では逃げることもまた難しい。

——死の恐怖。

その感情は確かにティースの胸の中にも存在する。

だが、それ以上に——

「そんなことで村の人を……ッ」

ざりっ、と、歯の軋む音が静かな家の中に響いた。

煮えたぎる怒り、憎しみ。

それは時に冷静な判断能力を奪い、合理的とは言いがたい難しい行動に誘う危険な感情だ。……が、そう頭で理解してはいても、それを押さえることは今の彼には不可能だった。

「許せない……ッ！」

「……」

マリアヴェルはそんな彼を冷静な瞳で見つめていたが……ふと、その口元に笑みが浮かんだ。

誰も見ていない。だが、誰かが見ていたとしてもおそらくは意図の掴めない、それは不思議な感じのする笑みだった。

ざっ、ざっ、ざっ、ざっ。

ゆっくりと近付いてくる足音。

一つ、二つ、三つ。

それを遠巻きに、ニヤニヤしながら眺める群衆。

最初の一人が扉に手をかけるまで、あと三十秒とかからないはずだ。

「……」

ティースの足に力が入る。

あとはいつ、踏み出すか、だけだった。

かなり高確率の死が待ち受ける、その第一歩を。

――が。

ちりん。

「……マリアさん？」

そんな彼の機先を制するように、マリアヴェルが彼の眼前に割り込んだ。

かたん、と。

彼女の武器――“雪姫”が床を離れる。

「ティースさん」

「……マリアさん？」

マリアヴェルはニツコリと微笑んで、それから小さく息を吐いた。

「行きましょう」

ちりん――……

鈴を鳴らし、マリアヴェルはゆっくりと歩を進める。

覚悟か。

あるいは何か胸に秘めた策があるのか。

ともかく、彼女はティースよりも先に動いた。

「目覚めよ、雪姫――」

パキ、パキパキパキ。

長い棒の先に集まった冷氣が、そこに大きな刃を形成していく。

生者を死に誘う大鎌――デスサイズ。

ちりん――……

美しい音色。

外の足音が少しずつ近づく。

三十メートル。

二十メートル。

そしてマリアヴェルは、一度だけティースを振り返った。

細めたその瞳を一瞬過ぎたのは、懐旧の影か。

「……マリア、さん？」

——しゃん。

九つの鈴が一斉に鳴り響く。

——しゃん。

周囲に、まるで天使の羽根のような白い結晶が産まれる。

キラキラ、キラキラと。

衣が翻る。

あまりに幻想的な彼女の姿はほんの一瞬だけティースの心を奪い、足をその場に縫い止めた。

そして——

「……ッッ！！！」

空気が真っ二つに避けた。

声にならない断末魔の叫び。

紙のように切り裂かれた木製の扉の向こうで、一人の人魔が血飛沫を上げながら倒れるのが見えた。

「歌い、舞い、踊れ——……」

デスサイズを振り抜くモーションすらも、まるで神に捧げる踊りの一部分であるかのように。

九つの鈴が宙に跳ねる。

口が琴のような音色を刻んだ。

「雪姫よ、永久に、儚く……」

——しゃん。

笑い声と怒号。

同時に、

「！！」

地を揺るがすほどの足音が響く。

敵の、一斉突撃。

「マリアさん——ッ！！！」

驚くティースの視線の先で、マリアヴェルは何の策を弄すわけもなく敵の直中に駆けていった。

鈴の音色に合わせ、薄暗い灰色の中空に舞う血飛沫。

「があああああッ！」

「きいいいいいいッ！！」

数十匹の獣魔が放たれる。

大きなリス型の風の七十一族、狼型の氷の七十一族、大柄な猿型の地の七十三族。

肉片が弾け飛び、鮮血が中空を満たし、断末魔の叫びが木霊する。

「――」

マリアヴェルはそれでも躊躇することなく、光の粒のような雪の結晶を纏いながら死地へ飛び込んでいく。

深く。

さらに深く――

「マリアさんッ！！」

ティースも慌てて細波を抜き、その後を追いかけた。

「マリアさん、待ってくれ！　せめて俺と一緒に――！」

だが、

「……え――？」

外に飛び出し、その直後の状況を目の当たりにして。

ティースはようやく気が付いた。

（マリアさん……？）

何の策も弄さずに飛び込んだ……そう見えた、その裏に隠された彼女の意図。

彼女の“作戦”に。

（まさか――）

周囲を囲まれようと、背後を取られようと、マリアヴェルはまるで気にも留めた様子もなく、ただ敵の中央を駆け抜けていた。

敵の一撃がその衣を掠め、美しい髪が数本宙に舞う。

――きい……ん。

鈴が一つ、弾け飛んだ。

（まさか、まさか……ッ！！）

想像にティースの背筋は震える。

「マリアさんッ！！！」

一際力を込めて地面を蹴った。

そんな彼女の思惑を“阻止”するために。

が——遅い。

「ひひひひ……ひひひひひひ……」

「ヒヒ……ヒヒヒヒヒ……」

「へ……へへへへ……」

獣たちが血飛沫を上げながら倒れ、人魔たちは武器を振り上げて獲物を狩らんとする。

マリアヴェルの振るう“雪姫”は次々に敵の命を奪い——同時に、確実に傷ついてもいった。

美しい衣の袖が裂け、そこから白い腕が微かに覗き、すぐに赤く染まった。

「……」

それでもマリアヴェルは止まらない。

止まらずに、敵の群の中に呑み込まれていく。

そして——

「マリアさんッ！ 待つて！ ……マリアさんッ！！！」

大波が、引いていくように。

必死の叫びも空しく、ティースは今、その場に取り残されようとしていた。

——それもそのはず。

ネアンスフィアはあくまでデビルバスターを狩ることが目的のゲームだ。その他のネズミやモグラを狩ったところで当然ポイントになりはしない。

つまりティースの存在など、最初からネアンスフィアたちの眼中にはなく。

だから——

「マリアさん！ ……マリアさああああんッッッ！！」

もちろん、ティースとて二本の足を持っていて、走ることができる。ただボーっと取り残されるばかりではないが、そんな彼を、敵がいつまでも放っておくはずがない。

「っ……くっ……!!」

踵を返してきた一人の人魔に、ティースの足は否応なしに止められる。

「くそ、マリアさん……!」

最下級とはいえ曲がりなりにも人魔である。そう容易く退けられる相手ではない。

逸る心を懸命に押し込めながら、打ち、払い、斬りつける。

——どすっ。

「なんで……」

そして、ティースの口から眩きが零れた。

手の平に鈍い感触を残し、貫いた下位魔の体から細波が抜ける。

血飛沫が舞い、息の根を止めた下位魔がどさり、と地面に崩れ落ちた。

血なまぐさい空気が辺りに漂う。

両腕は、返り血で赤く染まり、飛び散った赤黒いものが頬に付着して——ティースは顔面を歪めた。

「どうして……ッ!!」

歪んだ視界の中。

まるで大波がさらっていった後のように、マリアヴェルとそれを追いかけるネアンスフィアたちの姿は、すでに彼の視界から消えていたのだ。

「っ……!!」

細波を握った拳が震える。

やり場のない怒り。

あまりの不甲斐なさ。

「どうして、マリアさん……ッ!」

一緒に戦い、協力して、ほんの僅かでも生き残る可能性に賭ける

つもりだった。

一人では絶望的であっても、二人ならどうにかできるかもしれない、と、絶望的な状況であってもティースは本気でそう考えていたのだ。

しかし彼女の方は、そう考えていなかったらしい。

「どうしてそんなことするんだよッ！　生き延びるんだって！　みんなが生き残る方法を考えようって！　そう、言ったじゃないかああッ！！！」

空しく吸い込まれる叫び声。

吹き抜ける灰色の風。

——あれだけの敵を相手にすれば、大陸最強クラスのデビルバスターであろうとも切り抜けることは容易でない。

奇跡でも起こらない限り、彼女は命を落とすだろう。そしてこの絶望的な状況で奇跡など起こりようもなく。

「っ……」

これまでも幾度となく感じてきた、途方もない虚脱感。

だが、状況は、彼が立ち止まっていることさえも許してはくれなかった。

「……オオオオオオ——ン……ッ！！！」

「！？」

突如鳴り響いたのは、地を震わすほどの叫び声。

ビリビリ、と、空気が震えた。

「な……」

常識では考えられないような強烈な遠吠え。

おそらくは村を囲む深い森の中から。

ティースはハツとする。

「……アルファ。セレナスさん——」

灰色になった胸に、ほんの僅かな灯がともる。

そう、まだ全てが終わったわけではなかった。……彼には責任がある。ディバーナ・ロウ第四隊隊長としての責任が。

「行かないと。敵のことを知らせないと――」

そしてティースは森に向かって歩き出した。

唇を噛みしめ、手にした細波に再び力を込め……一瞬だけ目尻に浮かんだ涙を払い。

悪意が渦を巻いて待ち受ける、死の森へと――

白い閃光が弾け飛ぶ。

「るゝるるゝ、正義ゝ無敵のゝデビルバスタあああゝ♪」

バン！ バン！ バチバチバチバチッ！！！！

衝撃と、焼け焦げる匂い。

木の幹に叩きつけられ、宙に投げ出され、乾いた土の上に転がった獣魔たちは、雷針から鋭く伸びる雷に次々と打ち付けられ息絶えていった。

「ふふふゝん、アンタら、ちょっとばかり相手が悪かったさねゝ♪」
現在残ったメンバーの中で、今回のような戦いにもっとも向いているのが彼、セレナスⅡカンファイスだった。

彼の持つ神具“雷針”は非常にトリッキーな特性を持っている。

まず、その刀身に貫かれ生命活動を終えた者は、体内に残った魔力を雷に変換され、その骸から二本の稲妻を放出する。放出された稲妻は、最初に貫かれた者よりも魔力の弱い者――という条件付きで自動的に次の獲物を襲い、その稲妻によって命を落とした者はやはり最初の者と同じく稲妻の媒介となって、再び二本の稲妻を放出……それが延々と続いていく。

つまり、最初に集団でもっとも魔力の高い者を仕留めることさえできれば、たったの一撃で、その効果範囲内（およそ半径十メートル）にいる全ての敵の身を打つことさえ可能なのである。

“連鎖雷”

それが雷針の特殊能力だった。防御力の弱い七十台の獣魔であれ

ば、どんな集団でもただの一撃で全滅させることさえ可能な力を秘めているのだ。

「ほいっ……と」

再び七体の獣魔が雷に打たれ命を落とし、地面に転がる。

「どうせなら、花火のよううに、色鮮やかに生きて、死んで」
♪

クルン、と、まるでサーカスの一芸のように雷針を右手の中で回転させ、左手をテングロンハットの上に置いてピタッとポーズを決めるセレナス。

とはいえ……彼も決して無傷というわけではない。肩を見れば少々激しく上下していることがわかるし、体のあちこちには明らかに獣魔の攻撃によるものと思われる傷と相応の出血があった。

が、それさえも彼の周囲に転がる獣魔たちの代価とすれば、驚くべき軽傷であることは間違いないだろう。

「さてさて、なかなか功を奏さぬ敵役の、次なる一手は如何なるものか♪ みなさま、刮目してご覧あれ♪」

リズムに乗った口上は獣魔たちを使役する人魔を挑発するためのものだろう。つまりは木々の陰に隠れてなかなか姿を見せようとはしないネアンスフィアたちに対しての発言である。

と、そのように陽気に振る舞うその一方、

（……さて、アルファさんはティースくんたちのところに辿り着けたかね）

彼は至極冷静な思考で敵の攻勢が弱まったのを見計り、懸命に息を整えようとしていた。

じわっ、と、左の脇腹から溢れた血が服の表面に滲み出してくる。それはつい先ほど、村人を装うネアンスフィアに不意の一撃を受けてしまったときのものだった。

疲労もダメージも見た目以上に深い。

（間に合ってればいいがね……ティースくんもマリアさんも、ここで死なせてしまうには惜しい人たちさ……）

彼がアルファと別れたのは――自らおとり役を買ってここに残ったのは、この森の中でついに正体をさらけ出したネアンスフィアの正体を、村に残った二人に伝えるためだ。

無謀だ、と、冷静な誰かは言うだろう。

いくら対複数の戦いが得意だと言っても、あまりに無勢すぎる。必ず命を落とすとは言わないまでも、とてつもなく危険な状態であることに変わりはない。

森に潜むネアンスフィアたちは、村にいた者たちと比べるとその数も少なく、アルファと二人での行動を続けてさえいれば、彼の生存率は飛躍的に上がっていたことだろう。

が、しかし。

このセレナスという男は脳天気で破天荒な印象とは裏腹に、非常に義理堅く、また人情味に溢れる人物だった。手遅れである可能性に自らの身の危険をプラスして天秤に架けてもなお、彼は村にいるティースとマリアヴェルに危険を伝える選択肢を選ぶことに何の躊躇いも感じなかったのである。

「だってさ……」

ふうっ、と、一際大きな息を吐いて、そしてセレナスは狐を思わせる細い目をさらに細め、口元に小さな笑みを浮かべる。

「信頼してもらったなら、やっぱそれに応えるのが正義のヒーローってもんさね」

それが利己的な人間に言わせれば、無意味で愚かな行為だということに当然のように理解しながら。

「……オオオオオオオ――ン……ッ!!」

突然響いた遠吠えに、大気が震えた。

ゆっくりと、セレナスの口元から笑みが消える。

「……やっぱ隠し玉があったかい」

周囲で蠢いていた獣魔たちが、急に萎縮して戦意を失っていくのが感じられた。

……最下級とはいえ、獣魔である。その集団をたったの一声で黙

らせるなど、そう容易くできることではない。

そして。

「……こいつあ」

セレナスの口元にもう一度、笑みが浮かんだ。……それは先ほどとは意味合いの異なる、体を駆け抜ける緊張に思わず零れた、引きつった戦慄の笑み。

「なんだい。単なるザコの寄せ集め部隊かと思ったら、最後にとんでもないもんを隠してたらしいさ……」

ガサツ、と茂みが揺れる。

やがてその木々の向こうに現れたのは、一体の人魔と、一匹の獣魔。

「……へへ。役にたたねえクソどもだ。ヒヒヒ」

人魔の方は二十歳前ぐらいの青年だ。人とは違う長い耳に数え切れないほどのピアス。セレナスと同じように細い目は、しかし彼とは正反対に濁りきり、その口元には街の片隅に寄生するチンピラを思わせる嫌らしい笑みが浮かんでいた。

「しかもよりにもよって男の方かよ。クソ面白くもねえ。ヒヒヒヒ」

「……」

下位魔だろう。デビルバスターであるセレナスにとってみれば、たとえば疲労し、いくつかの傷を抱える現状であっても遅れを取ったりする相手ではなかった。

が、しかし――

「……」

その傍らに佇む一匹の獣に、セレナスの視線は釘付けになったままだ。

（風の二十七族、ウィルヴェント――）

その形は狼、に一番近いだろうか。

黒に近い深緑色の体毛はふわふわと風に揺らいているが、その割に金属のような尖った光沢を放ち、その全身が放つ異様な雰囲気は

他の獣魔とは明らかに一線を画している。

鼻先は狼のように長く口も大きい、不思議なことに牙は見えず、耳は頭のとっぺん付近に二つ……いや、頭の側面にも耳らしきものが付いていた。

(……風穴を開ける者——かい)

風の二十七族、ウィルヴェント。“風穴を開ける者”という異名の由縁は決して比喻などではなく、彼の能力そのもの。牙のないその口から放たれるドリルのような形状の鋭い風は、標的に文字通りの風穴を開ける。その威力は対魔用に強化されたフルプレートにすら易々と穴を穿ち、その中身を一撃で葬るほどに強力だ。

また、そのような特性をひとまず置いておくとしても。

二十台の獣魔といえばその能力は将魔にすら匹敵し、単独でこれを仕留めるには中堅のデビルバスターでもなかなか難しく、通常は複数のチームで相手することが基本だった。

「また随分身の丈に合わぬペットをお持ちで……」

それだけの力を持つ獣魔であるから、通常、彼らを使役するのは将魔でも一握りの実力者か、あるいは王魔クラス——だが、相手が獣である以上、決して不可能というわけではない。

おそらくこの下位魔は何らかの方法、偶然、巡り合わせ……ありとあらゆるものが積み重なって、この身の丈に合わぬペットを手に入れることに成功したのだろう。

「とすると、ジンさんがヤラれたのは、ただ罠にかかっただけってわけでもなさそうかね」

くるん、と、雷針を一回転させ、半歩下げた左足が力強く地面を抉る。バチ……ッ、と、その右腕を小さな電流が駆け抜けた。

そんな彼の構えを見て、チンピラ風の人魔が再び下品な笑みを漏らす。

「ヒッヒ……いいのか？ それとも、あのマリアヴェルとかいう女のように抵抗して、じわじわとなぶり殺しにされる方が好みなのか？」

「……」

その言葉に、セレナスの眉がほんの少しだけ動いた。

「ヒヒ、俺は連中と違って優しいからな。抵抗しないなら、両手両足くっついたまま綺麗な姿であの世へ送ってやってもいいぞ？」

「……。それはそれは。ご忠告痛み入りまする」

あくまで陽気なピエロのような口調で、しかし細めた目には無表情な怒りを湛え、セレナスは右手に持った雷針を軽く振るった。

バチッ。

「しかしま、残念なことにオイラはこの逆境って言葉がひじょく大好きでね。なんつってもオイラは絶対無敵、正義のヒーローだからさあ」

「……ヒヒ、バカが。だったら苦しんで惨めに死ね」

ためらいも、駆け引きもない。その人魔は心の底から人の命を軽んじ、それを奪うことに何の躊躇も持ち合わせていなかった。

同時に、ウィルヴェントの瞳に闘志の炎が灯る。

「オオオオオオオーッ……ッ！！」

「……」

セレナスのこめかみから一雫の汗が流れ落ちた。……が、それは裏腹に、彼の太股を叩く左手がリズムを取り始める。

じわり、と、脇腹の赤黒い滲みが広がる。

だが、口から漏れだしたのは、やはり陽気な歌。

「……ラララ〜無邪気な笑顔のた〜めならば〜♪ た〜とえこの身砕けて〜流砂に成り果てようとも〜♪」

バチ……バチバチバチ……ッ。

じりっ、と、左足がさらに深く地面に食い込んだ。

細い目がさらに細められ、雷を纏った三つ又のレイピア“雷針”

が、人魔と、その横で威嚇の唸りを上げる風の二十七族——ウィルヴェントに向けられた。

「……さて。それじゃ始めようかね。雷光のイリュージョンを、さ不利であることは承知の上。」

だが、それをわかっていても、もう引き下がれない。

彼はその少々脳天気な性格や破天荒な外見とは裏腹に、この目の前の人魔の言動に怒りを覚えるほどには真っ直ぐで、そしてこの場面において戦う以外の選択肢が見出せないほどには単純だった。

たとえばそれが勝ち目の薄い戦いだったとしても。

一方。

ティースが森の奥にアルファの姿をようやく見つけたのは、彼が森に入り込んでから一時間半ほど経った頃である。

「……アルファ！」

深い木々の向こう側にチラリと見えた銀色の髪、若干着膨れしているハートマーク付きのセーター。

あまりに特徴的なそれらのパーツは、どうやっても他人と見間違えようがなかった。

「良かった、無事だったか！」

「……」

そう言って駆け寄るティースに対し、アルファは無言の視線を向けた。そして次の瞬間にはホッと安堵の息を吐く。

この深い森の中で偶然にも出逢えたことは、奇跡とまでは言わないまでも運の良いことだった。ヘタをすれば彷徨ったまま、一人ずつネアンスフィアたちに殺されてもおかしくない……彼らはそんな、絶望的な状況にいたのだから。

アルファはかなり疲労している様子だったが、見たところ外傷はないようだ。

ティースはさらに彼に近付いて、少し辺りを見渡しながら、

「……セレナスさんは？」

「……」

その問いに対し、黙って首を横に振るアルファ。

「そうか……」

ティースは落胆の色を隠せずそう呟いたが、それ以上詳しく問いかけることはなかった。

事情は移動しながらでも聞くことができる。今はともかく、少しでも安全を求めて移動することが大切だった。

そしてティースは、肩で息を吐く彼に手を差し伸べると、

「お前ももう知ってると思うけど、あの村はもう全員、ネアンスフイアに――」

その手を取ろうとした。
が。

「……えっ？」

その華奢な、まるで女性のような白い手が、ティースに触れる前に。

風が、裂けた。

風？

いや――それ以上か。

それは目にも止まらぬ速さ、目にも止まらぬ一撃だった。

ドスッ！

「っ……」

アルファの口から溢れた、まるで押し潰された空気のような、声にならない呻き声。

「――え？」

一瞬の安堵に気を緩めたティースの口から、まるで惚けたため息のような声が漏れた。

森の奥から光速で迫ったその一撃。

ごぼっ……

「アル……ファ……？」

彼の胸から刃先らしきものが生え、そこから赤黒い液体が溢れ出る。

左胸。もっと正確に言えば胃の少し左上――つまり、心臓を、寸

分違わず。

「――」

何が起きたのか、ティースはすぐに理解できないでいた。

もちろん、目の前の現実が信じ難かった、ということもある。

が、彼が驚愕したのはそれよりも、もう少し先の展開に対して、
だった。

つまり――

「ティース」

肉を抉る生々しい音とともに、胸に穴を開けたもの――槍の刃先
が体から抜け、そして呆気なく息絶え地面に崩れ落ちるアルファ。

……いや、それは正確ではないか。

ティースは呆然とその光景を見つめながら呟いた。

「アルファが……二人……？」

そう。

ティースの眼前でアルファの体を貫いた槍の持ち主もまた、アル
ファだった。

つまり今、その場にはアルファが二人存在していたのである。

ティースが状況を容易に把握できなかったのも当然だろう。

「なにが――」

が、言いかけてハッとする。

そして地面に崩れ落ちた骸を見下ろすと、やがて納得した顔で、

「幻覚……？」

「ネアンスフィアにはどうやら、少なくとも見ても四、五人の幻人魔が
混じっている」

「……」

たった今地面に崩れ落ちたアルファ――“アルファだった者”は、
その手に小型のナイフを握っていた。

（これが……幻覚能力――）

もしも本物のアルファが駆けつけていなかったら、どうなってい
たことか。

それを想像して、背筋がゾッと冷える。

先ほど手を差し伸べたその瞬間、ティースは目の前の人物に一片たりとも疑いを抱いていなかった。おそらくはナイフが体に突き刺さるその瞬間まで――いや、ナイフが突き刺さってもしばらくは状況を理解できなかったことだろう。

もっとも、気付けないことはなかった。

安易な安堵の表情、あっさりと見せた弱気の色、それらがいつものアルファらしくなかったのはもちろんのこと、あの状況で一言も発しなかったことも、冷静に考えれば不自然なことだろう。

しかし。

そうは言っても、あの状況でそれに気付くことがどれほど難しいことか。知識ではわかっていても、いざとなるとそう容易くは見抜けない。

まして何らかの理由で焦り、あるいは安堵し、その感情に大きな波があるときであれば尚のこと。

「幻人魔がいるとわかっているときは、必ず姿とともに声も確認することだ。大抵の場合はそれで済む」

「……ああ」

いつか学んだ幻覚能力に関する知識を頭の中で反芻しながら、ティースは神妙な顔でゆっくりと頷いた。

姿と、声。視覚と、聴覚。その二つを常に同時に確認できるならば、幻覚能力は恐れるに足らない。

何故ならば、幻覚能力の基本は“一対一”なのだ。

“一人の魔が同時に使える幻覚は一つ”

“錯覚の対象物は一度に一つ”

“一人の相手に同時に起こさせることのできる錯覚は一つ”

例外として、同じ種類で、尚かつ対象物を同じくする錯覚であれば、一人の力を複数の相手に作用させることが可能――つまり一人の魔が、ティースとアルファという二つの相手に対し、同時に同じ錯覚を起こせるようなことは（能力次第では）可能なのだが、ま

あ大体の場合においては“ 一対一 ”なのである。

「……」

それらの知識を何度も何度も頭の中で噛みしめながら、改めてティースはアルファに問いかけた。

「……セレナスさんは？」

「別れた。君もマリアヴェルとはぐれたのか？」

「マリアさんは――……」

視線を落とし、拳をグッと握りしめる。

セレナス。

マリアヴェル。

生きている可能性は低いだろうか？ いや、だが必ず死んでいるとも言い難い。彼ら二人は少なくとも数年の経験を持つデビルバスターであり、たとえ敵の戦力が勝っていたとしてもそうむざむざやられてしまうような連中でもないだろう。

と、そんなティースの心を見抜いたかのように、

「二人を探すつもりか？」

そんなアルファの問いかけに、ティースは一瞬の躊躇の後、

「……探したい」

それがどれだけ無謀であるかは理解している。

だが、それでも彼は口に出さずにいられたかったのだ。

視線を落とし。やるせなさに肩を微かに震わせながら、

「マリアさんもセレナスさんも、きつと本当にいい人なんだ。こんなところで……あんな卑劣な連中に殺されていいような人たちじゃない……！」

言葉の端に怒りが滲む。

「だから、助けられるものなら――」

「諦めることだ」

「……」

ギリッ。

淡々としたアルファの返答に、ティースの拳にもう一度力がこも

った。

——これは分岐点などではなく、正しきただ一つの道の他、全ては破滅へ通じる道なき道。

理解していた。

理解していながら、それでもティースは、そこに残った僅かな可能性を捨てきれなかったのだ。

いい人たちだと思ったから。

そんないい人たちが、許し難い悪に殺されてしまうことが、悲しく、そしてどうしても納得できないことだったから。

「わかってる。わかってるけど——！」

だが、

「……どちらにしろ」

状況は、やはりそんな彼の思いを踏みにじる。

ティースの言葉には直接答えず、アルファは相変わらず淡々とした口調で言った。

「まずは、この包囲を崩さなければならない」

「え？」

「……ひひ」

「ッ！」

風に乗った笑い声に、ティースは弾かれたように辺りを見回した。と、同時に、

「ひひひひ……ひひひひひひ……」

一つ。

「ヒヒ……ヒヒヒヒヒ……」

二つ。

「へ……へへへへ……」

三つ——いや、それ以上。

全身の神経が逆立った。

「……こいつら——！」

迫っていたのは、彼らを仕留めんとする狩猟者たちのギラついた

瞳。

一、二、三、四、五——マリアヴェルを追いかけた連中ほど多くはない。が、それでも十人余りの人魔たちと、それを上回る数の獣魔の気配が、薄暗い茂みと木々の奥に垣間見えていた。

「こいつら——ッ！！！」

胸に燦っていた熱が急激に勢いを増す。

「ひひひ……女だ、女の方をやれ……」

「……」

アルファは無言のまま辺りを見据えている。瞳の中で、槍の先に灯った明かりが微かに揺れた。

「ヒヒ……んじゃ、オマケの方は獣どもに任せとくとするか、ヒヒヒ……」

「っ……！」

煮えたぎる。

吐き気がするほどに心臓が跳ねた。

「へ……へへへ……ヒへへへへへへ」

「ひひひひ……ひひひひひひ……」

「ヒヒ……ヒヒヒヒヒ……」

笑い声が、反響する。

森の中に。

頭の中に。

心臓が早鐘を打つ。

ティースの脳裏に焼き付いていた映像が、瞼の裏に蘇った。

全滅した村。

無惨なジンの遺体。

セレナスのひどく陽気な歌声。

マリアヴェルのどこか影のある微笑み。

そしてネアンスフィアたちの、異常な、あまりにも異常な悦楽の表情。

目の奥がチカチカとフラッシュして——そしてティースは、喉を

振り絞って叫んだ。

「……お前たちの思い通りになどならない！　なるものかああ——ッ！」

水飛沫が跳ねる。

細波が、風を纏う。

ざんっ、と、右足が土の地面を抉って、炎の灯った瞳は森を覆う悪意の群れを睨み付けた。

「贖わせてやる！　お前たちが奪ったたくさんの命に——！！」

「ひひひひ……ひひひひひひ……」

「ヒヒヒ……ヒヒヒヒヒ……」

怒りの声にも、返ってくるのは気味の悪い嘲笑のみ。

追いつめた獲物が懸命に足掻く様を、楽しそうに見つめる狩猟者の瞳。

生ぬるい風が吹いて、遠くで鴉が鳴き声をあげる。

そして、ポツリ、ポツリと。

空が泣き始めた。

甲高い、鴉の声。

まとわりつくような生暖かい空気が辺りに漂っていた。

木の幹には焦げた跡。

土の上に残る跡は、獣と人が争いを繰り広げた証。

ポツ、ポツ、ポツ。

消えた雷鳴を追いかけるように降り出した雨。

ポツ、ポツ、ポツ。

それらはさらに強さを増して、土の地面に、深い茂みに、木の幹に吸い込まれていく。

——ポツ。

最後に、水滴がその者の顔を打った。

「……」

言葉はない。

ポツ、ポツ。

一滴、二滴、三滴――

地面に伏したまま。

ポツポツ、ポツポツ……

「……」

ポツポツポツ……サアアア――

雨粒が雨糸に変わっても、その者は動かなかった。

地面を汚す、赤黒い水たまり。

見開かれたままの瞳。

時計を止めた――心臓。

「……オオオオオオオ――ン……ッ!!」

そして薄い霧雨の中、勝利を意味する遠吠えが響き渡った――

その5『窮鼠にご注意』

ネアンスファイア“キラーアント”に所属する人魔の数は、今回のゲームを始める直前の時点で五十二名だ。

その内訳は下位魔が五十一人と上位魔が一人。構成人数の多さは大陸全土に分布するネアンスファイアたちの中でもトップクラスに位置するが、魔力の高い者――つまり単体でデビルバスターを相手にできるような力の持ち主は一人もいなかった。

そんな彼らがこれまでに幾人ものデビルバスターたちを仕留めてきたのは、団体のリーダーであるオークデンという男の能力に依るところが大きい。

“おかしい”

幻の下位魔であるオークデンは現在四十二歳。

七歳の頃、望まぬ偶然から人間界に流され親と生き別れた後、途方に暮れていたところをネアンスファイアの参加者に拾われ、その後三十五年間に渡ってこのゲームに参加してきた。これまでに所属した団体で仕留めたデビルバスターの数は軽く三十人以上に上る。

彼はこのキラーアントという団体の創設者でもあり、作戦参謀でもあり、仲間たちのいざこざの調停役でもある有能な人物だった。

“おかしい”

そんな彼が強くそんなことを感じ始めたのは、太陽が頂点から西に傾き始めて三時間ほどが経過した頃のこと。

これまで、全てが計画通り。

最初の一人、ジンⅡファウストは、犠牲を出すことなく罠に捕らえ、仕留めた。

二人目のマリアヴェルⅡソーヴレーは、副リーダーである氷の上位魔率いる四十人近い主力部隊が、三人目のセレナスⅡカンファイスは風の二十七族“ウィルヴェント”を連れた彼の息子が、それぞ

れ仕留めているはずだ。

残るターゲットはあと一人……それと、それにくつついているオマケのみ。それを、彼が直接率いる十人余りのメンバーで仕留める。手こずるようならば、主力部隊カイルヴェントが合流するまでの時間を稼ぎ、獲物を疲労させておけば良い。

すでに詰めめの段階。それで何の問題もないはずだった。

——しかし、おかしい。

オークデンは順調なはずの計画がどこからか歪み始めたことを悟る。

その原因は計算違い。

単純な、とても単純な計算違いだった。

森がざわめき、そこから三匹の獣魔が飛び出してくる。

「くっ……！」

充滿する血の匂い。

ピンと張り詰めた集中の糸。

一瞬、一瞬の判断が生死を分ける——逆に言うと、今はまだ、集中さえしていれば充分に対処できる状況だった。

獣魔の爪をかわし、すれ違いざまに致命の一撃を見舞う。細波が宙を滑り、微かな水飛沫を撒き散らしながら獣魔の体を斜めに切り裂いた。

と、そこへアルファの鋭い声が飛ぶ。

「テイス！ 右だッ！」

「！」

思わず右に視線を向ける。

——が、何もない。

「っ……！」

ティースはハッとして反射的に身を翻した。

“左”腕に激痛が走る。

「くそっ……！」

「ティース！ 後ろだッ！」

立て続けに聞こえる、アルファの声。

背筋に汗が浮かんだ。

「くっ……」

「ティース！」

「くそっ……」

「ティース！」

「……くそっ……！」

ポタ……ッ、と、赤い血が地面に吸い込まれていく。

乱される集中力。

わかっている。

だが、頭でわかっているても心が乱れる。そしてその一瞬の乱れが、この圧倒的に不利な状況においては致命的だった。

羽根のように軽いはずの細波が重く感じる。

細かい出血が、じわりじわりと体力を奪っていく。

幻覚による間接的な攻撃は、精神的にも肉体的にもじわじわと、まるで真綿のようにティースの首を締め付けていた。

（くそ……どうする……ッ！）

相對するは、三人の人魔と彼らが使役する十数匹の獣魔。

とはいえ、それはこの場にいる敵の五分の一度で、残る敵は全て、ここから数十メートル離れた場所でアルファと交戦中だった。

（どうにかして……早く助けに行かなきゃ……！）

だが、しかし。

「……くっ！」

視界に現れたアルファが、突如人魔の姿に変貌する。

わかっている。

わかっているはずなのに——躊躇いが生まれ、一度鈍った剣先は

元の勢いを取り戻せず易々と弾かれた。

(まずい——ッ！)

がら空きになった胴体に吸い込まれる敵の切っ先。

人魔の口元に勝利を確信した笑みが漏れた。

「っ！」

体がかッと熱くなる。

伸びる切っ先。

白刃。

「ッ——」

カチリ、と、彼の体の中で歯車が噛み合う。その瞬間、視界が急に鮮明に、目に見える全ての動きがゆっくりになる。

心臓に吸い込まれるはずだった一撃は、僅かに逸れて脇腹を掠めるのみだった。

「!?」

その予期せぬ動きに、人魔は驚愕の表情を浮かべる。

ざんっ！

ティースの右足が地面を深く抉った。

「こんなところで……死ぬわけにはいかないッ!!」

速度を増した細波が、今度は人魔の胴体へと吸い込まれていく。

——が。

「!?」

突如、間に割り込んできた見覚えのある銀髪のシルエットに、再び切っ先が鈍った。

そんなはずはない。

そんなはずがないと、頭ではわかっているのに——

「ッ……!!!!」

左肩に激痛が走る。

ぶしゅうつ……と、肩口が裂けて血が噴き出した。

辺りに漂う、血の匂い。

「くっ……」

体勢を崩していた人魔が間合いを取る。ティースの肩口を裂いた獣魔は、素早い動きで離脱していった。

息が乱れる。

気持ちも、また。

（っ……どうにか、しないと――）

責任感が、焦りを産んだ。

迫る刃。

迫る敵。

体勢を立て直そうにも、四方八方逃げ場はない。

（ダメ……なのか……）

荒い呼吸。

動悸。

「ヒヒ……ヒヒヒ……そろそろ終わりだな……」

周りを囲む人魔と、それに引き連れられた獣魔たちが、徐々に包囲を狭めていく。

（くそッ……せめて――せめて、幻覚を見破る方法があれば……！）

敵の幻覚を見極める方法さえあれば。

（でも、一体どうすれば……）

敵の輪郭がぼやけてきた。

「ひひひ……ひひ……」

「へへへへへ……」

頭の中で反響する笑い声。

意識が朦朧としてくる。

（どうすれば――）

痛む左肩。

胸をグッと押さえる。

動悸が治まらない。

血の匂い。

死の匂い。

（こんな……ところで――）

その現場から八十キロほど離れたネービスでは、もちろんティースたちの危機など知る由もなく、

「……あら？」

夕方、いつも通り学園から屋敷へ戻ったシーラは、彼女と廊下ですれ違った瞬間、すぐに違和感を覚えて問いかけた。

「覚えのない香りね。セシル？」

ミューティレイク家の客人には、奇しくも同じ名門サンタニア学園に通い、同じ学問——薬草学を学んでいる二人の少女がいる。

その片方、金髪のポニーテイルを持つ美少女シーラスノーフォールはその容姿の完璧さだけが取り沙汰されることが多いが、学業においても彼女はかなり優秀だ。

何しろこの学問都市ネービスでも伝統のあるサンタニア学園で、入学当初から常にトップの座を保っているというのだから、彼女の容姿ばかりに気を取られる連中も認識を改めざるを得ないというものだろう。

そんな彼女の知識は、基本である薬——つまり怪我や病気の治療に用いるもの以外に、香草——料理や紅茶の香り付け、あるいは香水の原料になるような植物の類にも及ぶ。実際、先日リィナが指摘したように、彼女が普段のとき身につけている香水は彼女自身の手によって作られたものだ。

「え。あ、わかりました？」

と、そんな彼女の指摘に答えたのは、薬草学を学ぶもう一人の少女セシリア・レイルーンである。

サンタニア学園に通っているという事実だけで優秀であることの証明となるが、こちらはシーラに比べると平凡な成績だ。が、彼女もまた香草の類には興味があり、シーラに教わって色々な香水を作ることがある。

先日、ティースに贈った香り袋も、彼女が自ら作ったものだった。と、そんな彼女はシーラに違いを気付いてもらったことがよほど嬉しかったのか、ニコニコしながら答えて、

「今回はですね、いつもとちよつと違ったコンセプトなんですよ」
栗色のセミロングを微かに揺らし、誰もが頬を緩めてしまいそうな愛らしい仕草でセシルはそう言う、手にしていた小袋をシーラの方へと差し出して、

「この前の授業で教わったことと、シーラさんに教えていただいたことを私なりにミックスして作ってみたのです。……コンセプトはズバリ“瞬間移動”です」

「瞬間移動？」

香水のテーマとしてはいまいちピンとこない単語に、シーラは首をかしげながら小袋を受け取った。

手の平にちよこんと乗るサイズの小袋は口がギュツと閉じられていたが、それでも袋を通してはっきりとした香りを発している。

「ハーモナリスの花をベースにしたのね。柔らかい香り。あなたらしいわ」

「あ、ホントですか？」

そんなシーラの感想に、セシルはますます嬉しそうに頬を紅潮させると、

「あの、実はですね。これは香水にするのではなくて、こうやって小さな袋に閉じこめてプレゼントするために作ったんですよ」

「プレゼント？」

「はい。香水ではなく、お守りなのです」

セシルは頬を紅潮させたまま胸の前で手の平を合わせ、それから想いを馳せるようにゆっくり目を閉じて、

「危険な仕事をしている私の大事な人を護ってください、って。袋を手にするたびに、遠くにいる私の想いがその近くに瞬間移動できるとしたら、ものすごくステキなことだと思いませんか？」

「……なるほど。それで瞬間移動なのね」

「はい！ 願い事だつてきつと、近くにいた方が叶いやすいに違いありませんから！」

満面の笑顔ではっきりとそう言つてのけるセシル。

そこには打算の色などまったく見えない。見ている者が思わず和み、感心し、同時に心配になつてしまうほどの純心。

それはもちろん、シーラとして例外ではなく、

「叶うと思うわ、その願い」

「……はい！」

微笑んでそう言つたシーラの言葉に、セシルは力強く頷いた。

——まさにその瞬間、彼女の願いが成就しようとしていたことなど、もちろん彼女は知る由もない。

怒りと恐慌の狭間をティースは彷徨つていた。

（こんなところで、死ぬわけには——！！）

死ねない。

死にたくない。

何よりも、これほどに非道で許し難い連中の思惑通りになつてしまふことが、許せない。

——許せない。

「っ……！」

怒りの炎がボヤけた意識を覚醒させる。

（どうにかして……どうにか——！！）

一瞬だけクリアになった思考が、懸命にその方法を探し始める。考える。

考える。

視覚、聴覚がアテにならないのならば、残るは嗅覚だろう。

（だけど、それは——）

そのとてつもなく単純な結論は、これまでに何度か導き出され

たものだ。が、普通に考えて、嗅覚で一人の人間を見極めることなど、犬並みの嗅覚でも備えてなければ不可能だろう。

その人物が、何かわかりやすく強烈な匂いを発しているというのならばともかく――

(……匂い?)

いや。

ピクリ、と、ティースの鼻先が動いて、

「あっ!」

閃きがあった。

胸の奥。……いや上着の奥。

そこに確かに感じた温もり――そこに確かに存在していた想いは、圧倒的とまではいかないまでも、この現状を打破する光を彼にもたらしたのだ。

もちろん彼が知りたいのはアルファの動きであり、本物と偽物を見分ける方法だ。だから彼が持っているその匂い袋ではなんの役にも立たない。

だが、

「アルファ――ッ!!!!」

ティースは叫ぶ。

木々や敵の群れに阻まれて姿は確認できないが、おそらく近くで戦っているはずの仲間に向けて。

「“袋”だ、アルファ! “袋”の口を開けてくれッ!!」

あまりに曖昧な要求。戦っている真っ最中のアルファがその意味を理解できるかどうかは定かではない。

それどころか――彼がその“袋”を持っているかどうかすら確実ではなからう。

だが、ティースには確信があった。

(言ってた……あの子は確か俺にプレゼントだって――俺にも、プレゼントだって、そう言ってた……!)

数日前の朝、セシリア・レイルーンが彼にも渡したプレゼント――

―それは香水のように和やかな花の香りを閉じこめた、小さな袋だった。

懷にあつた袋の口を開くと、血の匂いに微かな花の香りが混じる。

（これなら――）

再び袋の口を閉じ、懷の奥深くにしまつて躊躇なくティースは動いた。

（あの子が……兄をあんなに慕っているあの子が、あいつにこのプレゼントを渡していないはずがない……）

体は消耗しきっていたが、それでも最後の力を振り絞って細波に力を込める。

そして目は、動きを捕らえるためだけに。

耳もまた、その動きを捕らえるためだけに。

判別は――嗅覚のみ。

敵味方を判別するのは、血の匂いと、花の匂い。

ただ、その違いだけだ。

「……！！」

怒号が響く。

罠に捕らわれ、死を待つばかりだった獲物が急に息を吹き返したことに、狩猟者たちは驚愕し、逃すまいと迫った。

「ティース――！！」

何度も聞こえた、偽りの叫び。

何度も見えた、偽りの姿。

――だが、香りが無い。

それだけで、不思議なほどに迷いが消えた。

「ああああああ――ッ！！！」

手の平に鈍い感触が伝わってくる。

肉を裂き、骨を断ち、返り血がその身を汚した。

断末魔の表情を浮かべる、アルファ。

一瞬だけ、心が臆病になる。

が、しかし。

「っ……」

ぶしゅうつ!!

血を吹き出して“アルファだった者”が、呆気なく地面に崩れ落ちていく。

——いや、そもそも恐れることなど何一つなかった。

あのアルファという人物が、あんな叫び声でティースを呼ぶはずがなく、またこの状況で無防備に彼のそばに佇んだりするはずもなく。

問題は彼の気持ち。

躊躇い。

万が一、万が一を想像し、切っ先を鈍らせてしまふ、その躊躇う心だけ。

だから実際問題として、アルファがセシルからその小袋を受け取っていて、そして今その袋の口を開けていたかどうかなどということは、さしたる問題ではなかった。

「っ！」

太股の裏に激痛が走る。

四方八方から迫る攻撃を全て避けるのは、今のティースの技量では不可能なことで、だから彼は必要最低限、とにかく致命的な一撃を避けることだけに留意した。

全身に増える傷。奪われていく体力。

だが、それを遙かに上回る気力。

それを支える怒り。

「ああああああ———ッ!!!!」

……そして——

「馬鹿な」

オークデンは、驚愕の眩きを漏らしていた。

彼らに襲いかかったネアンスファイアたちは、人魔十二名、獣魔が

四十七体。

戦いが始まってから十分。

「はあっ！ はあっ！」

ただの“オマケ”であつたはずの青年の足元には、すでに四人の人魔と十五体の獣魔が倒れていた。

「馬鹿な、これほどに――」

完全に計算外だ。

オークデンは自らの失敗を悟る。

甘く見ていたこと。

彼がデビルバスターにくつついたオマケなどでは決してなく、デビルバスターとともに充分に注意を払うべき“敵”だった、ということ。

「……」

オークデンは舌打ちし、そして即座に一時撤退の命令を出すことにした。

彼が率いる仲間は、三分の二以上がすでに地に伏している。相手の疲労も考えれば戦いの行方はわからないが、全滅の危険すらあった。

そこまで無理をする必要はない。

近くには風の二十七族――ウィルヴェントを従えた彼の息子と、彼らの主力である三十数名の部隊が迫っている。

合流してからでも遅くはなく、その方がより確実。

それは統率者に相応しい、至極冷静な判断だった。

「はあっ！ はあっ！ ……え……！？」

敵の波が急激に引いていくのを、ティースは驚きの目で見つめていた。

――その少し前に鳴り響いた笛の音が合図だったのだろう。波が引くように、周りを囲んでいた人と獣の群が次々に姿を消していく。

「はあっ！ はあ……っ！」

追いかけることは不可能だった。そこまでの体力が彼に残されているはずもなく。

「……はあっ……はあっ……」

それが何らかの罫である可能性も捨てきれないだろう。

そうしてティースはゆっくりと視線を彷徨わせ、緊張の糸をピンと張ったまま冷静に状況を分析することにした。

「はあっ……はあっ……」

息を整えながら、気配を探る。

木の陰、辺りの茂み、上空を覆う木の葉の群れ。

……がさつ。

「！」

咄嗟に振り返ると、そこには、

「……」

真っ赤に染まった分厚いセーター。

手には微かに光を発する神槍“細波”。

無言のまま、アルファがゆっくりと近付いてきていた。

「……」

なおも持続する緊張の糸。

だが――

「……アルファ」

鼻孔をくすぐった和やかな花の香りに、ティースはホッと息を吐いた。

姿と、香り。

そして、

「ティース」

声。

たとえどんな状況であれ、三つの感覚が同時に幻覚の力に侵されることなど有り得ない。

彼は間違いなく、本物のアルファだった。

「はあっ……アルファ……無事、か……？」

緊張の糸が切れると急に全身が重くなり、ティースは腰から崩れ落ちて大木に背を預ける格好になる。

とっくに限界を超えていたのだろう。

そしてティースは歩み寄ってきたアルファを見上げながら、言った。

「お前、やっぱ持ってたんだな。セシルからのプレゼント……」

「ああ」

近付いてきたアルファは相も変わらずの無表情で淡々としながら、「セシリアはいつも、自分だと思って持っていてくれと言う。だから持っている」

「……」

荒い息を吐きながら、ティースの口元には思わず微かな笑みが浮かんだ。

それは彼の意外な一面……と言ってもよからう。

（……そっか。こいつにとってもセシルはやっぱ特別なんだな……）

ほんの少し。あくまでほんの僅かのことだが、ティースは初めて彼の人間らしい一面を見たような気がした。

とはいえ、そんな和やかな空気も一時的なこと。

ティースはすぐに表情を引き締めて、

「行こう、アルファ。あの敵がこのまま引き下がるとは思えない。

……大丈夫か？」

「ああ」

アルファは即座にそう答えた……が、

「……本当に大丈夫か？」

ティースの目にはそんな彼の足取りがどうも頼りないように思えた。

その様子は単に疲労しているものとも違う。あるいはどこか体調が悪いのか。

（そういや今朝の寝坊といい、今日はあまりこいつらしくなかった

よな……)

そんなことを思い返しつつ、

「本当に大丈夫か？ 体調でも悪いんじゃない——」

おそらくは先ほどの出来事で、ほんの僅かな親近感が芽生えていたのだろう。

何も考えず、ティースの手は彼の体調を探らんと無造作に伸びていた。

と——

「!？」

触れた瞬間、アルファの体がグラツと揺れる。

「……アルファ!？ お前、本当に熱が——!」

いや。

「……れ？」

違う。

いや、ある意味でいうと正解か。

「ティース？」

遠くに、アルファの冷静な声。

「……あれ。揺れてるの……俺の方……?」

そう。

揺れていたのは彼の方だった。そしてアルファの額が火のように熱く感じたのは、彼の体から血の気が引いていたせいだろう。

「くっ……」

腰から崩れ落ちる。

立ち上がろうとしても、膝に力が入らない。いや、膝どころか体全体に力が入らなかった。

動けない。

「うっ……うう……っ!」

しかも寒い。寒いのに、左肩と、左腕と、切り裂かれた太股の裏と、脇腹だけが熱かった。

思った以上に出血が多かったのだろうか。

まるで生命力が全身から抜け落ちていくように、ティースはその場に崩れ落ちていく。

「ティースー？」

ほんの僅かに怪訝そうなアルファの声。

「……アル……ファ……」

意識が遠のいていく。

尋常ではない、抵抗の余地もない、強力な脱力感。

（……ダメだ……こんな、ところで……）

敵の主力はまだ残っている。いくらアルファでも、意識を失った彼を連れて敵の追っ手から逃れることは不可能だろう。

つまりここで意識を失うことは、死ぬことにほぼ等しい。

だが、

（っ……）

動けない。

自分の体が自分のものではないかのように、まったく動けないのだ。

（こんな、ところで……死ぬのかー？）

そんな彼の、懸命の抵抗も空しく。

（セレナスさん……マリア、さん……ごめんー）

「……」

屈み込んだアルファの細い指先が頬に触れた感触を最後に、彼の意識はそこでプツリと途切れてしまったのだった。

翌日。

早朝の空の下。

「――七班、八班は後方援護！ 九班以降は万が一に備え、この拠

点の防備に当たれ！」

山の中、中腹よりも少し下辺りに設置されたネスティアスの拠点に、凜としたリゼットの声が響いていた。

「先陣の一班から四班は特に幻覚に留意！ 単独行動は厳禁！ 呼びかけには必ず暗号を使用！ ……いいか、決して油断するな！！」
空気を震わすほどに気合の入った返事が響く。

ネスティアスのディグリーズ玖隊。“月神”リゼットⅡガントレットの率いる部隊はどちらかといえば若手の隊員が多く、ネスティアスにおいてはもっとも女性の比率が高い部隊でもある。

「よし！！」

ゆっくりとリゼットが武器を引き抜く。

それは優男かあるいは男装の麗人かと言った容貌にまるで似合わない、大きなナタのように無骨な大剣だった。

「じゃ……行こうか、みんな」

そしてリゼットは声色を急に変え、後ろに控える部下たちに向けて軽くウインクしてみせると、

「生き延びた子には全員にご褒美をあげるから。だから頑張っ」
途端、部隊員の間から失笑が漏れた。

まあ、それはそうだろう。それが金一封だというならともかく“ほっぺにキス”などというご褒美では。

……もっとも、知っていてなお奮起する者が密かに数名（男女とも）いたようだが。

と、それはともかく。

「リゼット様！！」

「うん？」

伝令がやってきたのは、今まさに、山に向かって突入を開始しようとしていた、そのときのことだ。

身につけているのはネスティアスの制服。深緑色の制服の袖にあるのは“伍”の文字。

彼らとは別の場所から突入する予定だったルーベンの部隊からの

伝令だった。

「どうしたの？ ルーベンがまた仮病でも使った？ ……しようがないな。あの子はすぐにそうやってにサボろうとする。君も真似してはダメだぞ」

「い、いえ……」

リゼットの軽口に伝令は少しだけ萎縮しながら、

「たった今、我々の部隊が山の奥から脱出してきた者を保護しました」

「……逃げてきた？ 話は聞いたの？」

少し表情を引き締めたリゼットの問いに、

「はい。それでルーベン隊長がおっしゃるには、敵はネアンスファイアー―前情報通り“キラークラント”で間違いなさそうとのこと、村の方はすでに全滅。ですが、まだ二人ほど仲間が生き残っているかもしれないとのことですよ」

「なるほどね。了解です。他には何か？」

「はい。それが……」

使いは少し躊躇った。

が、すぐに意を決したように口を開いて、

「忙しい中伝えてたのだから、使い――その、つまり私に“ご褒美”を持たせてやってくれ、と……あの、ご褒美、というのは一体――」

「……」

再び失笑が漏れた。

「はあ……まったく、あの子は」

リゼットもまた、ルーベンの悪戯に仕方なさそうなため息をつきながらも、ニツコリと笑顔を使いに向けて、

「君はご褒美、欲しい？」

「あ、いえ！ わ、私はそんな！」

「そっか。それは残念。じゃあ、ルーベンに伝えといてよ。そんなに褒美が欲しいのなら、自分で取りに来なさいってさ」

「は、はあ……」

わからない顔で戻っていく伝令の男。

「さて、と」

見送ったりゼットの表情に、再び闘志の色が差す。

と、同時に、部隊員全員にも緊張が戻る。

「油断は禁物だよ、みんな。……いかに取るに足りない相手でも、ね」

そしてこの日の太陽が僅かに顔を覗かせた頃、ディグリーズの二部隊は山の奥へ向かって突入を開始したのだった。

——はっ、はっ、はっ、はっ。

駆ける、駆ける、駆ける。

荒い呼吸。

迫り来る生温い風。

おかしい。

おかしい、おかしい、おかしい。

絶対に、おかしい！

——はっ、はっ、はっ、はっ。

単純な計算違いだ。

彼らの戦力はたとえまともにぶつかり合ったとしても勝てるだけのものであり、彼が巡らせたのは勝つための策ではなく、ただ犠牲を減らすための策だった。

ネアンスファイアは“ゲーム”である。よって狩猟の楽しみを損わ

ないようにとルール——毒を用いてはいけない、最初から丸腰の敵を襲ってはいけない、等、いくつかのルールが設定されている。

彼——キラアントのリーダーであるオークデンはそのルールの範囲内で、出来る限り味方の犠牲を減らすためにいくつかの策を弄してきた。

ジンIIファウストを仕留めるところまでは、上手く行きすぎたと思うほどに順調。

その後に敵を分断し、確実に勝てるだけの戦力を個々にぶつけていった。

そこまでも予定通り。

……アルファとティースに対し、一時撤退せざるを得なかったところも、想定できる範囲内の出来事ではあった。

では、どこで計画が狂ったのだろう。

いや——“誰が”計画を狂わせたというのだろうか。

「!!」

ぐにゃっ、という感触。

「くっ……!!」

足元を確認するまでもなかった。

辺りに散らばっていたのは、赤黒い肉塊。もはや元が誰であったか判別できないほどに寸断され、千切れ飛んだ生命の成れの果て。

しかも——

「全……滅……だと!!」

辺りに散らばる死体は、全て彼の仲間のものであった。

キラアント——総勢五十一名のうちのどれだけか。少なくとも見ても三十人近くの死体がその三倍以上のパーツに分かれ、木々の生い茂る地面に、木の幹に、枝の上に散らばっていたのだ。

“地獄絵図”さながらに——

「馬鹿な! そんな馬鹿なッ!!」

負けるはずがなかった。

まともにぶつかっても負けないだけの戦力のはずだった。

「こんなにも早く人間どもの部隊がやってきたとでもいうのか――！」

まさか。

それはどうしても考えにくい。あらかじめ彼らの動きを察知していなければ、とてもこの時間には間に合わないはずだ。

だが、しかし、現実仲間たちは全滅に危機にさらされている。

“狩られる”立場に追い込まれてしまっている。

実際に、狩られている――

「……オオオオオオオ――ン……ッ！！」

「！？」

響いたのは大気を震わす、聞き覚えのある遠吠え。

風の二十七族、ウィルヴェント。それを率いているのは彼の息子だった。

まだ、戦っている。

「くっ……！！」

オークデンは咄嗟に声の方向へ走った。

走る、走る、走る。

彼の息子と、その息子にだけ従順なウィルヴェントだけは失うわけにはいかない。失えば再建の望みが失われる。彼の一生を賭けたこのネアンスフィアというゲームから、永久に脱落することになる。茂みを掻き分け、仲間たちの死体を踏み荒らし、視界を覆う木の枝を払いのけ。

走る。

走る。

「……ヒヒ」

「！」

聞き覚えのある笑い声が聞こえた。

息子の笑い声。

――聞こえたような、気がした。
ガサツ。

上空で、木の枝が揺れる。

「なに……？」

オークデンは立ち止まった。

そして見上げた上空。

そこから落ちてくる。

「な……」

反射的に手を伸ばしたオークデンの体に、水飛沫のようなものが飛び散った。

「っ……」

一瞬目を伏せる。

どさっ。

腕の中に飛び込んできたのはちょうどスイカぐらいの大きさで、生暖かい果物のような感触の物体。

赤黒く。

青白い。

「っ……っ……！！！」

叫び声を堪え切れたのは、戦地に身を置いてきた長年の経験故か、あるいはあまりの衝撃に言葉すら失ってしまったのか。

尻餅をつく。

ギョロリと剥いた息子の白目が、恨めしそうに彼を見つめていた。

「どっ、どうしてこんな——」

「……オオオオオ——……ッ！！！」

「！」

もう一度聞こえたウィルヴェントの遠吠え。

「……オオ……オ……」

だが、それは不自然に途切れた。

まるで……そう、まるでそれが断末魔の叫びであったかのように。

「……」

そして静寂。

空気が質量を増したかのような、重苦しい静寂。

——単純な計算違い。

「はぁ、はぁ……」

聞こえるのは、唯一自らの呼吸音だけ。
体が動かない。

「はぁ、はぁ、はぁ……！」

まるで周りの空気に全身を押さえつけられているかのように。

「はぁ——はぁ——はぁ——……ッ！」

肺が焼け付くほどの荒い呼吸。

心臓が壊れるほどに脈打つ。

闇が、迫る。

恐怖。

押し潰されんばかりの、恐怖。

——ちりん。

狩猟者は用意周到でもなく、緻密でもなかった。

ただ、圧倒的。

ひたすらに圧倒的だった。

死の影が、彼の背後に舞い降りる。

死神が——舞い降りる。

——ちりん。

最後に彼の耳に届いたのは、涼やかな鈴の音と。

そして……魂を奪う、セイレンの歌声。

「次の世では、どうか楽しく安らかな一生を送れますように——」

薄暗い霞の空に、血飛沫が舞う――。

その6『回収、後始末』

ネアンスファイアたちに滅ぼされた山奥の村からもっとも近い、麓の街コッサル。

ベルン、ルナジェルという二つの大都市を結ぶ街道の中間地点から脇に僅か一、二キロ。旅人が体を休めるのに良い条件が整っているにも関わらずどこか寂れた田舎臭が漂っているのは、雨が降るとすぐに土砂災害が起こってしまう土壌の悪さとともに、ベルンとルナジェルを結ぶ街道が整備されるに従って一日の移動距離が伸び、立ち寄る人の数が年々減り続けているためである。

とはいえ、まあ。

この日の天気は真正面を向くだけで眩しくなるほどの快晴で、一昨日の夕方に降っていた雨もすぐに上がったため、とりあえず本日に関していえば土砂災害が発生する確率はかなり低いと言えるだろう。

さて。

そんなコッサルの街の一角にある宿屋。

「……た、頼む、見逃してくれえ」

死に行くものの断末魔の叫びとしてはあまりにも情けなく。また、死を覚悟した勇者のものとしてもやっぱり情けない。

三流の悪役が正義の味方に許しを請う、そんな場面にピッタリな眩きとでも言うべきか。

が、それもそのはず。

彼——ティーサイトIIアマルナの発したその寝言は、死とはほど遠い安全な環境の中、身体に負ったいくつかの怪我も生命には全く危険がないと診断された、その直後に発したものだっただから。

「た、頼むから触らないで……気絶するうう……」

しかも、どうやら彼が見ているのは敵に襲われる悪夢などではなく、それとは全く別の——彼特有の悪夢らしい。

そんな彼の不憫な境遇には同情を禁じ得ないが——まあそれはともかく。

今は彼が、必死とも思えたあの山奥から生還したことを素直に喜ぶこととしよう。

さて、そんなこんなでティースが目を覚ましたのは昼過ぎだった。

「リゼットⅡガントレットです。はじめまして」

「……はへ？」

暖かな陽光。

爽やかな空気。

息づいた人々の喧噪。

「……へ？」

目を閉じる以前の暗闇はどこにもなく、その身に迫っていた死の匂いも、狩猟者たちの魔の手も、全てが跡形ない。

そこにあったのは色付いた街の風景。

生きている街の空気。

夢か、幻か。モヤのかかった彼の頭はそれすらすぐに判別できない。

が、

「な、なにが……いっ——っ!!」

脇腹に走った痛みが、彼に答えを示した。

首筋に浮かんだ脂汗を感じながら、しかめた顔で自分の手の平を、体を、布団に隠れた足の先を見つめる。

「俺……生きて、る……？」

全て、ある。

生きている証——感覚がそこにあった。

「は・じ・め・ま・し・て♪」

「え？ え、うわぁ!!」

もう一度、今度は耳元で囁くような声に、ティースは跳ね上がった。

た。

「い……ぎやああああッ!!」

当然のように全身を襲う、激痛。

「あ、ゴメンゴメン。そんなに驚くと思わなかった」

「ぐ、ぎぎぎぎぎ……」

だが、その痛みは確かに生きていることの証。

（……そうか。俺、生きてるのか……）

状況を認識することで心に少し余裕が生まれ、包帯の巻かれた脇腹を押さえながらティースは涙目で辺りを小さく見回した。

木造の小さい部屋だ。内装は質素で脇のサイドテーブルには一輪挿しの花が飾られている。窓から見える風景を見ると、どうやら二階のようである。

部屋にいるのはベッドに横たわるティースと、もう一人。

ティースはようやく目の前の人物に視線を戻して、

「あ、ええっと……」

「リゼット。リゼットⅡガントレットです」

「リゼット、さん？ ……あなたは――？」

言いかけて、ティースは思い直すように口を噤んだ。

リゼットと名乗った青年の着ている、軍服風の黒い制服。

袖に刻まれた“玖”の文字。

見覚えがあった。

「リゼット……ガントレット……？」

その名前にも僅かに記憶が刺激されて。

「……まさか、ディグリーズの？」

「そう」

リゼットはニッコリと微笑んで、足を組み直した。

「ディグリーズの玖、リゼットⅡガントレットです。以後、お見知り置きを、ティーサイトⅡアマルナくん」

「……」

驚愕。

と、同時に納得した。

「じゃあ……あなたの方が俺たちを助けてくれたんですね……」
そう言って大きく息を吐く。

確かに、あれだけの窮地から救うことは容易ではない。が、ネス
ティアスのデイグリーズならば……と、彼がそう考えたのは当然の
ことだった。

しかし、

「うーん。僕らが助けたっていうのは半分正解だけど、半分違っ
てるね」

リゼットは小さく首を傾けて言った。

「君を助けたのは君の仲間。僕らはそれを保護しただけ」

「え？」

「アルファIIクールラントはデイバーナ・ロウで一番の使い手だっ
て聞くけど、噂は間違ってたなかったようだね」

「！」

その言葉にティースはハツとして思い出す。

「そ、そうだ！ アルファは——そ、それにセレナスさんやマリア
さんは！？ ネアンスフィアは——……いつッう！！」

「興奮しない方がいいよ」

リゼットはそう言って宥めようとしたが、ティースは脇腹を押さ
え、額に脂汗を浮かべながらもさらにリゼットに詰め寄った。

「っう……みんなは……ど、どうなったん……ですか……！？」

「……」

小さなため息。

どうやら宥めても無駄だと悟ったようだ。

「あとで、と思ったけど、その様子じゃ今話した方がよさそうだね」
「っ……」

その言葉に、ティースの胸に暗い影が落ちた。……言い方からし
て、少なくとも手放して喜べる結果ではないことは確かなようだ。

「まず——」

リゼットは足を再び組み替えると、軽く前髪を掻き上げながらやや上目遣いの視線を彼に向け、ゆっくりと切り出す。

「君を背負って山を降りてきたアルファくんは無事です。何故か診察を拒否されてしまったので詳しい状態までわからないけど、君よりは重傷で、でも動いているところを見る限りでは命に別状はないといったところかな」

「……」

少し安堵する。

が、リゼットはすぐに容赦なく続けた。

「セレナスⅡカンファイスは残念ながら遺体で見つかりました。辺りには無数の獣魔の死骸が転がっていたそうです」

「ッ……」

その瞬間、ティースの唇が小刻みに震えた。

ゆっくりと視線が落ちる。

（……セレナスさん――）

仕方のない結果、ある程度予測できていた結末だったからといって、こみ上げる感情を完璧に制御することは不可能だった。

ティースは声を振り絞るように、

「じゃあ……マリアさんは？」

「マリアヴェルⅡソーヴレーは行方不明です」

「……行方、不明？」

最悪の結果を想像していたティースにとって、それは少々拍子抜けしてしまう返答だった。

「行方不明……ですか」

落胆と安堵、二つの感情が入り交じって胸に渦を巻く。

もちろん広くて深い山中のこと、遺体が見つからないといって無事だと考えるのはかなり無理がある。が、それでも生き残りの可能性が僅かにでも残ったのは確かだ。

……彼女が生きていたなら、心がどれだけ救われることかと、

「ところで、ティースくん」

そんなティースに、リゼットは唐突に問いかけた。

一見繊弱そうにも見える視線が一瞬だけ鋭い光を纏ったが、ティースは気付かず、

「え、なんですか？」

「君と一緒にいたのは、それだけで間違いない？ 他に仲間はない？」

「え、あ……はい。ジンさんという方が――」

「それだけ？」

「？」

ティースにはその問いの意味がわからず、眉間に皺を寄せ、窺うようにリゼットの顔を見つめ返して、

「それだけ……ですけど、それがなにか？」

「ううん、間違いないならいいんだ」

意外にあっさりとリゼットは引き下がった。

そして片方の足をタン、と鳴らすと、組んでいた足をほどいて、
「それとネアンスフィア“キラアアント”は全滅したから安心して、
もし危地を脱していたなら、そのマリアヴェルさんも必ずどこかで
生きているはずだ」

「え、あ……はい」

いまいち腑に落ちないティースの目の前でリゼットがゆっくりと立ち上がる。

「とにかく、もうしばらくしたらこの街を出発するから、それまではゆっくりしているといいよ。馬車の揺れが傷に響くかもしれないけど、男ならそのぐらいは我慢できるよね？」

「あ……は、はい」

「では、お大事に」

パチンとウインクして部屋を出ていったリゼットに、ティースはしばらく呆気にとられたような表情だった。

が、やがて、

「……」

無言で視線を布団の上に落とす。

誰もいなくなった部屋は静けさに包まれ、その静寂は彼の意識を現実世界から思考世界へと徐々にシフトさせていった。

「……」

痛み。

光。

喧噪。

……生き延びた。

運が良かった、と言うべきだろう。あのとき彼が追い込まれていた状況は、実力や気力だけではどうにもならない状況だった。

もし三十余名のネアンスフィア主力部隊が彼を襲っていたら。

あるいはウィルヴェントが彼の目の前に現れていたら。

確実に死んでいた。それは努力だとか、決意だとか、そういったものが及ばない領域のものだ。

今の彼には決して左右できない、運命の力。

そして――

「セレナスさん……」

それもまた、彼にはどうしようもできない結末だったろう。

勇敢であり、人情家であったが故に失われた、尊い命。

だからこそ、悲しい。善き命であったからこそ、ティースにはその死がどうしようもなく悲しかった。

「――……っ」

目尻から溢れた涙が頬に一筋流れる。

そして、祈る。

もう一人。

僅かな可能性に賭けて。

「マリアさん……どうか生き延びてくれ……」

――一方。

「リゼットさん」

「ああ、ルーベン」

そんなティースのいる民家から出たリゼットは、道の向こうから歩いてくるルーベンの姿を目に留めて立ち止まっていた。

そして問いかける。

「どうだったの？」

歩いてきたルーベンは顴の広い日除け帽を深くかぶり、ゆらゆらと近付いてくると、

「毎度のことながら、太陽ってホント、ウザいですよね」

「……え？」

意表を突かれた顔で、それでもリゼットはまともに答えて、

「でも、その太陽があるおかげで僕らは生きていられるんだろう？」

「だってほら。太陽ってなんかラドフォードさんに似てるっしょ」

「……」

無言で空を見上げるリゼット。

「……確かに似てるかも」

「ウザいですよね」

何の躊躇もなく言い切ったルーベンにリゼットは苦笑しつつ、改めて質問する。

「それで？ マリアヴェルⅡソーヴレーのことは何かわかったかい？」

「ええ。全然」

「どっち？」

「何もわからないということがわかりました」

「なるほどね」

得心がいったという表情でリゼットが頷くと、ルーベンは憎らしそうに青空を見上げながら、

「もっと調べればなんか出てくるかもしれないですけど、まあ今のところは特におかしなところもないですね」

「でも、そうすると、キラアアントを全滅させたのは誰なんだろう

？」

腕を組み、思案するリゼット。

思い出すと、微かな戦慄が体を駆け抜ける。

……それは壮絶な光景だった。

薄明かりの森に飛び散る無数の肉塊。木の枝に、幹に、茂みのあちこちに、足の踏み場もないほどに散乱した生命の成れの果ては、おそらくそのほとんどがネアンスフィア“キラーアント”のものだろう。

全滅。

おそらくそう判断して差し支えのない、それほどに徹底的な、言うなれば“殺戮”だった。

リゼットは言った。

「生き延びたディバーナ・ロウの二人の証言からして、全滅させるまでのそれほど長い時間はかかってないだろうね。でも大勢でやっただけにしては、僕らが全く存在を感じられなかったのも腑に落ちない。あまりに鮮やかすぎる」

「少数、それも三人以内でしょうね」

そんなルーベンの言葉に、リゼットは賛同しながらもやはり腑に落ちない表情で、

「だとすると相当な実力の持ち主だ。それにやるだけやって姿を消した理由もわからない」

「ま、人にはそれぞれ事情があるってもんです。……あー、いい加減消えてくれませんかね、あのラドフォードさんみたいな太陽」

「……」

リゼットは仕方なさそうに苦笑して、

「ま、僕らの仕事はここまでだものね。ディバーナ・ロウの二人も無事助けられたことだし……ほら、これで君も少しは恩返しができるんじゃない？」

「……」

その言葉にルーベンは視線を一瞬だけリゼットに向け、そしてた

だ小さく首を横に振った。

——その山の頂上付近は周囲が全て急な崖になっており、普通の人間には決して踏み込めない領域。

訪れるのは一部の鳥、獣、虫。

だからそこにある綺麗な天然の花畑を知る者はほぼ皆無と言っていいだろう。

だが、しかし。

今、そんな未踏の領域に二人の人物がいる。

「やれやれ」

吹き抜けるのは、地上よりも少しだけ涼やかな心地よい風。

「リュウゼットさんやネイルさんの自分勝手ぶりにも驚かされますが、あなたのそれも負けず劣らずですね」

一つは青年。穏やかで、知的。だが、どこか捕らえどころのない、得体の知れなさを感じさせる響きの声だった。

そしてその声向けられた先には花畑を背に、崖っぷちに腰を下ろした一人の女性。

長い耳。

それは彼女が人魔であることの証だ。

そして、

「ふふ。でも、君がわざわざ助けに来るなんて予想外だったよ」

答えた声はまるで琴を奏でたような美しい音色。

神秘的。

青年は答えた。

「クロイライナさんがどうしても、と言うので。ま、結局はその必要もなかったようですけれど」

女性の背後、五、六メートルほど後方で大きめの岩に腰掛けた青年は頭に白いターバンのようなものを巻いている。

左右には、鋭い爪を持つ巨大な鳥——いや、鳥型の獣魔が二匹控えており、手には一本の管楽器。

その甲に浮かび上がるのは、涙型の入れ墨だった。

女性はクスッと笑って、

「いい風だね、ザヴィア」

「ニューバルド。何度も言いますが、私に自然とやらの善し悪しは理解できませんよ」

「そ」

特に気分を害した様子もなく、ニューバルド——古宗教の神名で呼ばれた女性は再び小さく微笑んだ。

「ああ、いえ」

ザヴィアは目を閉じ、わざとらしく思い出したような顔をして言った。

「今はまだ、マリアさん、とでもお呼びした方が良いですか？」

ちりん。

風に揺れて、鈴が音色を奏でる。

「どちらでも」

返った答えには少しの揺らめきもない。

「そうですか」

ちりん。

「今は……そう。夢と現の狭間。白と黒の、ちょうど中間。……そうだ、ね。あの太陽が完全に姿を現すまで、かな」

「狭間、ですか」

ザヴィアは昇りかけの太陽をチラッと見て、小さく肩をすくめた。

「……理解できませんね。タナトスなんて素晴らしく無秩序な組織を作り上げたあなたが、どうしてそんなに人間としての自分にもこだわろうとするのか」

「ふふ、だろうね。私にもわからないもの」

マリアヴェルは可笑しそうに目を細め、未だ半円型の太陽を見つめた。

「なんでだろう。なんでだろう、ね……でも」

「なにか？」

マリアヴェルは首を横に振ると、

「ううん、なんでもないよ。……そうそう。なんだか今回の“封魔”は前のより効果が短かったような気がするね」

「クロイライナさんが心配して密かに調節したのでしょう。ニューバルド。あなたがもし誰かに負けるとしたら、人の姿でいる、そのときぐらいでしょうから」

「ふふ、そうかも」

ゆっくりと、太陽が昇っていく。

「……そういえば」

ザヴィアはやはりわざとらしく、さもたった今思い出したかのような表情をして言った。

「今回のお仲間にはディバーナ・ロウが混じっていたそうですね。それもどうやら、私と少々縁のある方も一緒だったようで」

一瞬、空白。

「……ティースさん、か」

「どうでした？ なかなか見所のある方でしょう？」

「……」

どこか意味ありげなザヴィアの問いに、マリアヴェルは遠くに広がる水平線を眺めて、

「生き延びてくれて良かった」

呟くように言って、ゆっくりとザヴィアを振り返った。

朝日を背にした彼女の瞳には一点の曇りもなく――

「彼の言葉を聞いて思ったんだ、ザヴィア。この人はあんな連中に殺されてはいけない人だって……ね」

「……」

ザヴィアの口元が歪んだ。

「……あなたは本当に不幸な人だ、ニューバルド」

沈痛な言葉とは裏腹に。楽しそうに、心の底から楽しそうに笑みを浮かべるザヴィア。

「でも、だからこそ私はあなたに協力する。あなたの辿り着く先に、どれだけ皮肉でどれだけ不幸な結末が待ち受けているのか……それが楽しみで楽しみで仕方ありませんからね」

「そう。だったらザヴィア、あなたの好きにするといい、よ」

「……」

少しも揺らぐことなく平然と返したマリアヴェルの微笑みに、ザヴィアの背中には微かな痺れが走った。

——変化。

紛れもない。

「私は何も強要しないし、何を与えもしない。私はただ、私の道を進むだけ」

瞳に宿る光の質。

身に纏う空気。

——あるいは元に戻りつつあった、という方が正しいのか。

「理由なんて忘れちゃった。でも私は、ディバーナ・ロウが憎くて憎くて仕方がないの」

「……」

ザヴィアは大いなる興味と、そして微かな戦慄を胸にそんな彼女を見つめた。

（ニューバルド——報恩と復讐の女神、か……）

「……ふふ」

風に乗った、笑い声。

神秘的な装いはそのままに、ただ彼女を彩っていた色だけが剥がれ落ち、少しずつ、少しずつ狂気という名の汚泥を纏い始めていた。太陽が、その姿を完全にさらけ出す。

「……」

ザヴィアは手の平に滲んだ汗を隠すように、手にした管楽器を口

元に運んだ。

「ふふふ……あは……」

日が昇り、女神は地に堕ちる。

地に堕ち、いつか地獄の悪魔すらも従えて人を恐怖の渦に陥れることだろう。

「はは……あははは——」

いつか——必ず。

「どうぞ、ティース様」

「あ、どうも、すみません」

ティースたちがディグリーズとともにネービスに帰還したのは、その次の日の昼過ぎだった。

自分より二十歳近くは年上であろう御者の男性にペコリと頭を下げ、ティースは細波を片手に馬車を降りる。

「っ……！」

眩しい太陽に目を細めた。

光の中から浮かび上がるのは、綺麗に刈り揃えられた芝生と目の前にそびえる屋敷。

（アルファのヤツもたまにはこっちまで来ればいいのになあ）

いつも第四隊の詰め所で“生活”している彼は、正門を抜けたところで一足先に馬車を降りてしまった。よって、本館までやってきたのはティース一人である。

馬車が去っていく。

と、それと入れ替わるように、

（……あれ？）

屋敷の別館から出てくる三つの人影がティースの視界に入ってく

る。

（あれは――）

「ティース様！」

そしてそのうちの一人はティースの姿を見つけるなり声を張り上げ、スカートの裾を掴んで彼に駆け寄っていった。

「リイナ？」

パーラー・メイドの清楚な衣装と、他の女性よりも頭一つ分以上抜けた身長が非常に目立つティースの昔馴染みの少女、リイナはクライストである。

もちろん、彼女がこうしてティースを出迎えたこと自体は別段不思議なことでもない。

ただ、

「お、お怪我はッ！？ あ、歩いたりして大丈夫なんですかッ！？」

「へ？」

その突然の慌てように、ティースは少々面食らってしまった。

「え、あ、ちょっと、リイナ？ ……うわっ」

彼女の手が伸びたのを見て咄嗟に身を引いてしまうティース。：

女性アレルギーであるが故の、悲しい条件反射である。

だが、一方のリイナはそんな彼の動きにも全く気付くことなく、それどころか彼の胸元からグルグル巻きの包帯が見えると、さあつと青ざめてさらに慌てた。

「シ、シーラ様！ ティース様が、ひ、ひどいお怪我を――」

「リイナ、少し落ち着きなさい」

そんな彼女に対し、後からやってきた二人。

「見なさい。ああやって一人で立っているし、両腕も両足もきちんと付いてるでしょう」

「そうだよ、リイナ。ほら、ティースだって困ってるでしょ」

シーラの言葉に同意して頷くエルレーン。ティースにとっては幸いというべきか、二人はリイナと対照的に冷静だった。

「で、ですが万が一ということもありますし……あ、そうです！

こういうときは確か人工呼吸とかいうものをすれば良いと聞いたことがあります！」

「えゝ……」

不穏な(?)発言に思わず後ずさってしまふティース。

「状態を悪化させたいのなら止めないわ」

ため息とともに肩をすくめるシーラに対し、エルレーンは苦笑して、

「と、止めてあげてよ、シーラ……」

「え? 人工呼吸ではダメなんですか?」

「うん。色々な意味で止めた方がいいと思うよ」

「で、でもそうなる则一体どうすれば……ティース様がこんな瀕死の重傷を負っているというのに――」

「……随分元氣な瀕死人ね」

「シーラ様!」

と。

そんな三人の会話に、

「……一体、何事なんだ?」

まるでわけがわからずティースは一人取り残されていた。

確かに今までも彼女らに出迎えられることはあったが、三人揃ってというのは今回が初めてのこと。

「そんなことを言ってて、もしティース様が危篤になられたらどうするんですか!」

「……」

もちろんリィナのこんな過剰な態度も初めてのことで、いくら彼の任務に危険が付き物とはいえ明らかに異常だった。

(な、なんかこのまま死んだことにされそうな勢いだよね……)と。

「ティース」

「ん?」

いつの間にかエルレーンが彼の横に来て手招きしていた。

「どうした？」

耳を貸せ、ということらしい。彼らの身長差は四十センチ以上もあり、もちろん立ったまま耳打ちすることは物理的に不可能だ。

そこでティースが腰をかがめて耳を寄せると、彼女は言った。

「昨日、キミの近況についてみんな知らされたんだ」

「え？」

「敵がネアンスフィアだって聞いたからね。もちろん昨日の時点で無事だったことも聞いてただけど……ほら、リイナは結構心配性だから」

「……あ、なるほど」

それでようやく合点がいった。

ネアンスフィアという言葉の意味を知る者にとっては、それこそ絶望的な事故から奇跡の生還を果たしたようなものだ。そういう事情であれば彼女が過剰に心配する理由も理解できなくはないだろう。

エルレーンは続けて言った。

「もちろんボクらも心配だったんだから。でも、リイナがあんな感じだもの、ボクらまで大騒ぎするわけにいかないでしょ？」

非常に幼い外見とは裏腹に大人びたセリフで、悪戯っぽくウインクしてみせる。

そんな彼女の言葉に、

（……そっか。それで心配して出迎えてくれたわけか……）

じいんとティースの胸に響くものがあった。

当たり前といえば当たり前のこと。だが、そういう気持ちが実際に行動で示される機会などそれほど多くはないだけに、こうしてストレートに表現されると言い様もない喜びこみ上げる。

そして、ふと思ひ出す。

（……そういやマリアさんが言ってたっけ。俺が苦しむことで周りも苦しむことがある、って）

今の状況。

「でも、本当に無事でよかった……」

祈るように手を組み、空を見上げて安堵の息をもらすリイナ。

「本当だったらこの手でティース様の鼓動に触れて無事を確認したいのですが……残念です」

「リイナ……」

そんな彼女の姿にティースは僅かな顔の火照りと、微かな胸の痛みを感じる。

（少しでも心配させないようにしなくちゃ、な。もっと、もっと強くなって……！）

拳に微かに力がこもって、そして彼は決意を新たにするのだった

――と。

まあ。

それはひとまずの感動シーンであり、これがティースという男の成長だけを記録した物語であればこの辺りでパツと場面を変えてしまうのが正解だろうとは思う。

が、しかし。

「……」

蛇足であることを承知の上で、今回は敢えてその先の些細な顛末についても語っておこうと思う。

――トン。

「きゃっ」

「へ？」

前者はリイナのあげた小さな悲鳴。

後者は、意表を突かれたようなティースの声。

そのときリイナが急によろめいてしまったのは、急な目眩が彼女を襲ったわけでなければ、安堵のあまり脱力しすぎてしまった……というわけでもない。

その理由はもっと単純で、彼女の背中を不意に襲った軽い衝撃が、

単純な物理法則に従って彼女を前方へとよろめかせた、ただそれだけのことである。

前方。

その時点でリイナが見つめていた相手は言うまでもなくティースであり、彼女の両目が前方についている以上、そのよろめいた先に彼が立っていたのは当然のことであろう。

距離は、どうだろうか。

人と人との親しさは、日常会話をするときの距離でおおよそ計れるというが、そういう点で言う跟他们はかなり親しい間柄だと言ってもいい。

……と、まあ、非常に回りくどい言い方になってしまったが。

要するに何が起こったのかというと、

「――」

くらっ……

「ティース様!？」

リイナの口から悲鳴が上がる。

――突然彼女に抱きすくめられる格好になったティースは、三秒と保たずに意識を失っていた。

「ティース様!？」 ティース様! すっ、すみません! しっかりしてください!」

青ざめたリイナは慌てて彼の体を支え起こす。

が、もちろん“アレルギー症状”を起こした彼がそんなことで目覚めるはずもなく――というか目覚めたとしてもまた即座に気を失ってしまうに違いなく。

リイナはそれを悟ると、彼の体を支えたまま後ろを振り返って、

「……シーラ様! な、なんてことをするんですかッ!」

そこにいるシーラに向かって糾弾の声を挙げた。

ちなみにその言葉は正当である。不意をつかれたリイナが自らを支えきれなかったのは至極当然のことであり、何より彼女の背を押したシーラの行動は明らかに“それ”を狙ったこととしか思えない。

いのだから。

だが、

「心配することないわ」

シーラは涼やかな口調で視線を流し、やはり涼しげな声で答える。
「その症状は別に体に悪影響を及ぼすわけではないし、疲労した体を休めるのに丁度良いぐらい。……ああ、でも失敗ね。ここだと運ぶのに少し大変なもの」

明らかに論点をすり替えた回答だった。

もちろんリィナもそんな言葉に納得するはずはなく、

「だ、だからと言ってこんな——」

「リィナ」

さらに問い詰めようとする彼女に、シーラはゆっくりと視線を戻して言った。

「生きてるでしよう？」

「……え？」

呆気にとられるリィナ。

そんな彼女の腕の中に収まったティース。

「……」

シーラはそんな二人の姿に、急に優しげな目をして表情を緩めた。
「あなたは普段触れられないのだから、この機会に思う存分触れて無事を確かめておくといいわ。……この男だって、そのぐらいのことは許してくれるでしょ」

「え？ シーラ様？」

怪訝そうなリィナに背を向けるシーラ。

水飴のような金色のポニーテイルが宙に躍り、ふわっと香水が漂う。

と。

（……あ）

リィナはその香りに微かな違和感を感じた。

（この前のとは違う……？ でも、どこかで——）

刺激されたのはもつと遠い過去の記憶。

だが、彼女がそのことを具体的に思い出すより先に、「ティースには後で謝っておくわ。でも、屋敷まで運ぶのはあなたに任せるわね」

「あ、シーラ様……」

背筋を伸ばし、凜としたその後ろ姿は一部の隙もなく、そのままシーラは一度も振り返ることなく屋敷へと戻っていく。

そんな彼女を、リィナは不思議そうに、エルレーンは少し思案する表情で見送って。

そして、先に口を開いたのはリィナだった。

「……シーラ様、一体どういいうおつもりなのでしょう？」

エルレーンは少し考えて答えた。

「たぶん言った通りじゃないかな。シーラはきつと、キミとティースの距離をもつと近付けてあげたいと思ってるんだよ」

「近付ける？」

リィナは不思議そうな顔で呟き、自分の両手を見つめ、腕の中で寝息を立てるティースを見つめ、それからやはりわからない顔で首をかしげた。

「近付けるというのは、どういうことですか？」

「……」

そんな彼女にエルレーンは再び思案深げな顔をして、

「うん。リィナはわからないよね、きつと」

それからそつと独り言のように呟いた。

理解できないのは、決して彼女の考えが足りないからではなく。小さい頃からこちらの常識に触れる機会があったエルレーンとはとなく、このリィナという少女は王魔と呼ばれる、人から見れば常識外の常識を持つ者たちの中に産まれた人物であり――

「難しいよね、色々」

もう一度、エルレーンは独り言のようにそう呟いたのだった。

快晴だったネービスの空が澱み始めたのは夕方のこと。

急激に空を覆った雲は徐々にその重さを増し、日が沈む頃、雷鳴を合図にネービスの街は強い雨に包まれた。

雨。

雷鳴。

——それは彼女にとって、大いなる不吉の象徴。

「マリアヴェル、ソーヴレー……」

そして本日、彼女の心を惑わせる一つの報告が、無事に帰還したディバーナ・ロウの第四隊によってもたらされていた。

広いミューティレイクの庭はすっかり暗闇に包まれ、時々鳴り響く雷鳴が木々の陰をそこに映し出す。

窓は流れ落ちる幾筋もの雨に覆われ、薄明かりの中に佇む彼女――

ファナ||ミューティレイクをそこに映し出していた。

いつもの微笑みはそこになく。

目に浮かぶのはただ、憂いと、哀しみ。

そしてその唇が、ゆつくりと言葉を刻んだ。

「……マリア姉様」

「お嬢様」

その部屋にはもう一人いた。

が、それはいつも彼女のそばでそのサポートをする二人の執事ではなく、

「……ミリイさん。あなたは、どう思われます?」

ゆつくりと振り返ったファナの視線の先。

そこに佇んでいたのは前髪を少し横に流した、それほど長くはない黒髪の女性。生真面目そうな眼鏡が印象的な彼女は、この館の主人であるファナの世話をする侍女……その頂点に立つ侍女長、ミリセント||ローヴァーズだった。

ミリセントは答える。

「ティーサイト様の出会われたその女性が、大罪人マリアヴェルⅡ
リグノルドである可能性は否定できないと思います」

ファナは頷いて、

「ええ……私もティースさんの報告を聞いてかなりの共通点がある
ように感じましたわ」

「目的、意図、その他、納得できない部分は多々ありますが、そう
いう可能性があることは考慮しておくべきかと」

「ええ……」

「……お嬢様」

ミリセントの声が僅かに起伏した。

それはいつになくはつきりしないファナの態度を窺めるような、
そんな口調。

そしてミリセントは言った。

「あの者は大恩ある前代様を裏切り、お嬢様の姉君の命を語るもお
ぞましい方法で奪い去り、あまつさえ四年前の襲撃ではその前代様
と、この屋敷に関わりのあった多くの者の命さえ奪いました。……
あの者は」

敢えてそこで一旦言葉を止め、眼鏡の奥からあまり感情の見えな
い事務的な視線をファナへ投げかける。

「……」

ファナは再び窓の外へと視線を流す。

ミリセントの口から出た二つの名は、彼女にとって特別なもの。

――父と姉。

どちらもすでにこの世の者ではなく、そして二人の命を奪ったの
はいずれも同じ相手だった。

しかし、

「……マリア、姉様」

その人物の名もまた、彼女にとっては特別なもの。

「……」

外は雨。

窓の縁をゆっくりとなぞる。

——ややあって。

「……わかってます」

背中を向けたまま、ファナはそう答えた。
今度は強い意志。

「わかってますわ、ミリィさん」

穏やかでのんびりとした性格とは裏腹に、このミューティレイクを確実に支えてきた当主としての強い意志で、彼女はもう一度そう答えたのだった。

訣別は、遙か遠い昔のこと。

そんな彼らの再会の日は、それほど遠い未来の話ではない。

その7 『反省会』

「うーん、おっかしいなあ」

そんな悩ましい声が聞こえてきたのは、ティースたちディバーナ・ロウの第四隊が帰還してから六日ほど経った頃のこと。

おわかりかと思うが、悩ましいというのは決して官能的という意味ではなく、そのまま言葉通りの意味である。

「うーん」

場所は広大なミューティレイクの庭。

言葉を発した人物はこのディバーナ・ロウが誇るデビルバスターの候補生であり、女性アレルギーで高所恐怖症、馬車に乗るとすぐ酔っぱらってしまう、やや猫背でなで肩な頼りない容貌の――いや、正直に羅列するとあまりにヒーローらしくない要件ばかり揃ってしまっているのでこの辺にしておこうか。

つまりその人物とは、この物語の主人公であるところのティーサイトIIアマルナであった。

「うーん」

ひよろつとした長身に乘った童顔が微かに傾き、腕を組んだまま唸るその様は、どこからどう見ても知的には見えず、例えるなら道に迷って途方に暮れる情けない青年といったところか。

とはいえ、いくらそんな頼りない彼であっても、歩き慣れたこのミューティレイクの敷地内で迷子になどはなるはずはなく。

「このまま死ぬのかと思ったぐらいだったのに……」

彼が首をかしげていた要因は、それらとは全く関係がなかった。

『なんだ。どんな大怪我かと思ったら、かすり傷ばかりじゃないか』彼を悩ませていたのは、六日前、彼が戦場から戻った際の、屋敷の主治医であるマイルズの言である。

事実、彼の傷はそんなにひどくなかった。あれから六日経った今日、早くも彼にトレーニング再開許可の診断が下されたこともそれ

を裏付けている。

確かに彼らは心力の一つである“自愛”によって、一般の人々よりは治癒力が高くなっていた。その能力に長けたものであれば、常人の半分、あるいはそれ以下の時間で怪我が完治することさえも珍しくはない。

「でも、あんなに勢い良く意識が飛んだのになあ」

そうして彼が辿り着いた先は、敷地内にある第四隊ディバーナ・ゼロの詰め所。

「――おはよう」

ガチャ。

ティースの呼びかけに、扉の向こうで銀色の髪が微かに揺れ蒼色の瞳がゆっくりと動いた。

「おはよう、ティース」

分厚いハートマーク付きのセーター、季節外れのマフラー、変化のない表情、まるで雪女のような冷たい容貌。

アルファークールラントの出で立ちはいつもと全く変わらなかった。

が、

「お前、今日もそんな格好してるのか？ 外はいい天気なんだけだなあ」

「別に問題ない」

「暑くないのか？」

「特に感じない」

「……ならいいんだけどさ」

そんな彼の素っ気ない態度にも、ティースは以前ほどの拒絶感を感じていなかった。

「けどお前、まさか真夏もそれで通すつもりなのか？」

ベッドに腰掛けたアルファの前を横切って部屋のカーテンを開けると、眩しい日差しが直方体の建物を満たした。

「何か問題があるのか？」

「いや……そりゃ勝手だけだな」

真夏にこの格好で外を歩く彼の姿を想像して、ティースは少し可笑しくなった。

「夏はセシリアが着るなと言う」

「だろうなあ。俺もその方がいいと思——」

「だからマフラーだけは外している」

「——マフラーだけッ!？」

どうやら彼の体温調節機能は相当優秀にできているらしい。

……と、まあ。

こうして見てもわかるように、彼らの関係に何か劇的な変化があった、というわけではない。アルファは相変わらずアルファ（当たり前だが）だったし、淡々とした口調も能面のような表情もどこか理不尽に思える行動も、その全てが変わっていない。……にも関わらずどこか以前と違って見えるのは、おそらくティースの中にある彼に対するイメージが変わったためだろう。

（……冷たいわけじゃない、か。確かに、ファナさんの言うとおりかもなあ）

あの日、彼が妹——セシルからのプレゼントを大事に身につけていたことを知り、そして後日、彼がいつも身につけているハートマークのセーターやマフラーが、やはり彼女からの贈り物であったと聞かされたとき、ティースはちよつとだけそう思ったのだ。

そうして改めて見てみると、確かに彼の行動の全てにはまるで悪意を感じられなかった。

「そういやこの春から二回生なんだな」

そう言いながら、金属の床に腰を下ろす。

「……」

「ほら、セシルのことだよ」

「そうか」

いったんはそこで会話が途切れたかに思えたが、

「……セシリアはよく君の話をする。君のことがよほど気に入った

ようだ」

視線を動かさないまま、今度は自分から話題を口に出した。

「俺のこと？　へえ、そんなに俺の話をしてくれるんだ？」

「ああ」

アルファはゆっくりと頷いて例の匂い袋を懷から取り出すと、それを目の前でユラユラと揺らしながら、

「最近マルスの次ぐらいに君の話題が多い」

「……狼より下なの、な」

いつもセシルのそばにくっついてる銀毛の狼を頭に思い浮かべて、ティースは何とも複雑な気分になった。

「……」

アルファの視線が一瞬だけ向けられる。が、それはすぐ元の位置に戻り、長い睫毛が瞬きに揺れてあとはいつもの無言。

ティースの方も特に話題が思い浮かばなかったので、ひとまず会話はそこで打ち切り、自主トレの準備を始めることにした。

（さて、と）

まずはウォーミングアップから。体の先から順番に、じっくりと時間をかけて伸ばしていく。脇腹辺りに少し違和感が残っているものの、体を動かすのに支障がないことは屋敷の主治医であるマイルズのお墨付きだ。

（……にしても、不思議だなあ）

そうしながら、彼の思考はここに来る途中の疑問を蒸し返していた。

（確かにあのときは疲労もピークだったし、精神的にもかなり参ってたけど……）

思い出すのはあの、抵抗の余地もない強烈な脱力感。

（だってあの感じは、まるで――）

と、そこへ。

コン、コン。

「おい、アルファ。入るぞ」

ノックに続いた声。丁度、顔をしかめながら太股の裏を伸ばして
いたティースは、突然の来訪者に顔を上げた。

「レイさん？」

「よう、ティース」

ティースの言葉通り、その扉の向こうから姿を現したのは、ディ
バーナ・ロウの第二隊、ディバーナ・ナイトの隊長を務める青年、
レインハルトⅡシュナイダーだった。

外から流れ込んだ風に、彼の頭に巻かれたバンダナの尾が微かに
揺れる。

「珍しいですね、レイさんがここに来るなんて」

柔軟の手を休めずそう尋ねたティース。

「まあな」

確かに彼がここにやってくるのは珍しい。……というかそもそも、
この場所をセシルとティース以外の人間が訪れること自体珍しいこ
とだ。

「……」

一方のアルファは視線も動かさなかった。と、そんな彼に対し、
レイはいつもの飄々とした口調で、

「元気そうじゃないか、アルファ。ネアンスフィアとの激戦の後で、
てっきり寝込んでるんじゃないかと思ってたが」

「別に問題はないよ、レイ」

淡々と答えるアルファ。

誰を相手にしても変わらない、彼独特のペース。ともすれば拒絶
しているようにも取れてしまうその口調に、レイは少し肩を竦めて、
「そいつは重畳なことだ。お前が珍しく苦戦したらしい話を聞いて、
また例のモノが出たんじゃないかと心配してたんだがな」

「例のモノ？」

その言葉を聞き咎めたティースは柔軟の手を止めて、

「なんですか？ その、例のモノって」

「……」

アルファが無言でレイを見つめた。

レイは答える。

「こいつの持病さ。……なあ、アルファ」

「……」

やはりアルファは何も言わなかった。

が、ティースはピンと思い当たって、

「あ、じゃあ……あのときってやっぱ調子が良くなかったのか？」

「なにかあったのか？」

逆にそう問いかけるレイにティースは頷いて、

「ええ。あの日のこいつ、珍しく寝坊したり……はっきりとわかったわけじゃないですけど、どことなく動きに精彩がないような感じにも見えたんで」

「ほう、なかなかよく見てるじゃないか」

レイは少し感心したような声で頷いた。

「いいことだ。男はマメな方がモテるからな」

「は、はあ」

「ま、医者がどうこう言ったわけじゃない。本人も何も言わないしな。俺が勝手に想像して“持病”ってな感じに定義しただけのことさ」

「はあ……？」

いまいちよくわからなかった。

「……」

そして相変わらずレイをじっと見つめるアルファ。見ようによつては非難しているようにも思えたが、表情自体はいつもと変わらないので気のせいだったのかもしれない。

と、レイはそんなことはまったく気にした様子もなく、

「それに、こいつにはちよつとした“法則”がある」

「はあ……？」

ますますわからない。

が、本当にそうだったことがあるのなら、一応この第四隊の隊長

として把握しておく必要がある、と、ティースは単純に考えて、
「法則ってなんですか？」

その問いかけに、レイは口元に微かな笑みが浮かぶ。試すような、
からかうような、そんな明らかに何らかの意図を含んだ笑み。

「原因は全く不明だがな。おおよそにして月に一回程度、こいつは
急に体調を崩すんだ」

「月に一回程度？」

「……」

無言のままのアルファ。

笑みを浮かべたままのレイ。

そんな二人を交互に見比べながら、ティースはさらに首をかしげ
た。

「なんですか、それ？ そんな病気あるんですか？」

だが、レイは肩を竦めて、

「さあね、俺は聞いたことがない。だから言ってるだろう？ 原因は
不明だ、って」

「？」

「レイ」

と、そこでアルファがようやく口を開く。

相変わらずの独特な声色は抑揚がない分低く響いて聞こえる。だ
が実際、それを何の先入観もなく聞けば、どちらかという男性よ
り女性のものに近い高さに聞こえるだろう。

「私に何か用があるのか？」

「いいや」

レイは少々戯けた調子で両手を広げてみせて、

「さっきも言っただろ？ お前の体調を心配したのと、あとは久々に
その、美女も真っ青な御顔を拝みたくなった……ただそれだけのこ
とさ」

「……」

ピクリとも動かない長い睫毛の奥で、蒼色の瞳がさらに深くレイ

を見つめた。まったくクセのないシルバーブロンドの長髪が、扉から流れ込む風に微かに揺れる。

(……でも、確かに、なあ)

そんなアルファを見つめ、ティースは改めて首を傾げた。女性と見紛うと言ったらそれはおそらく間違いで。

(——って、あれ?)

そこまで考えが及んだところで、恐竜の神経並に鈍いティースの頭によりやく白色電球の光が灯った。

そして思い出すのは、あの戦いの日、気を失う直前の出来事。

(そういやあのとき——)

体調が悪そうなアルファを気遣って手を伸ばしたこと。

(で、支えようとしたら、逆に俺の方が気が遠くなって——)

そして抗いようもない、脱力感。

急速に現実から剥がれていく意識。

……その“感覚”には覚えがあった。

(え……あれ? え?)

いつもというわけではないが、何度も体験した感覚。

数日前、この屋敷に帰還した日にも体験した感覚。

そう。

それはまるで——

「……あああああッ!?’」

素っ頓狂な叫び声をあげたティースに、アルファとレイの視線が集中した。

「え!?’ え、あ……え!?’」

突然の奇声とともに取り乱す彼の姿は何とも挙動不審だ。

レイが怪訝そうに眉をひそめる。

それに対し、アルファから向けられた無言の視線は——おそらくはティースの思い込みであろうが——まるで彼が気付いた“限りなく真実に近い推測”を口止めするかのようになり、真っ直ぐに彼の顔面を射抜いていた。

“限りなく真実に近い推測”

それは、つまり――

（ま……間違いないッ！ あときは戦いが終わった直後で少し気も抜けてたし……それなら不自然に気が遠くなったことの説明も付く……！）

女性に触れると気絶してしまうという特異体質を持つ彼ならではの理論。

（つ、つまり、こいつ――じゃなくて、この人ってやっぱ女――）
チラッ。

「……」

（うッ！）

感情のない視線が相変わらず彼を射抜いていた。

ゆら、ゆら。

（ううッ！）

手の中で揺れる“誘蛾灯”の切っ先が、心なしか彼の方を向いている……ように思えて仕方なかった。

気のせいか。

いや、あるいは――

「おい、ティース？」

「……な、なんでもありません！」

レイの呼びかけに、ティースは反射的にそう答えていた。……いや、彼がそうしたというより、本能が彼にそう命じていたのだ。

そう答えなければ、かなりの高確率で殺られる、と――。

「……」

アルファの視線はすぐにティースから離れ、彼の視線はいつものように部屋の隅に飾られた紫色の花へと向けられた。……が、その手の中の誘蛾灯は相変わらず、まるで獲物を狙う食虫植物のように静かに揺らめいている。

ゆら、ゆら。

ゆら、ゆら、と。

(……お、俺ってもしかして……)

ゆら、ゆら。

ゆら、ゆら――

(踏み込んだじゃいけない領域に踏み込んだんじゃ……)

意図も望みもしていない。むしろ彼自身が踏み込んだというより、目隠しされて歩かされた挙げ句、必然として泥の沼地にはまりこんでしまったというところか。

兎にも角にも、否応なしに貧乏くじを引かされるのがこのティースイトⅡアマルナという男であり――

(ま、また厄介ごとが一つ……)

そしてティースはガックリと肩を落とすのだった。

――さて、そんなこんなで午後。

「ティースさんにとっては、これがおそらく最後の任務になるかと思えます」

「へ？ 最後？」

午後も三時間ほどが過ぎ、庭を照らす陽光がほんの僅かにオレンジ色を帯び始めた頃、別館の執務室に呼び出されたティースを待っていたのは、衝撃の解雇通告だった。

……と、そこへ突っ込み。

「アオイさん。その言い方じゃ、まるでティースさんヤメさせるみたいじゃん」

「え？」

パタン、と分厚い本を閉じた少女は屋敷の若すぎる執事、リディアⅡシュナイダー。

そして、

「あ、ああ、あの、最後というのはもちろん、試験前の最後、ということです」

慌ててそう訂正したのが一見頼りなさげなもう一人の執事、イン

グヴェイ||イグreshウスだった。

そんなイングヴェイ——アオイの天然ボケに、ティースはホッと胸をなで下ろすとともに少し笑って、

「あ、ああ、なるほどね。びっくりしたよ、何か悪いことでもしたのかと——って、試験？ 試験ってなんのこと？」

いや。天然ボケはどうやらアオイだけではなかったようだ。

「……はあ」

そんな二人の天然ボケラー(?)に囲まれて、一人、回転の良すぎる頭を持った少女は自らの不幸を嘆いてため息を漏らした。

「決まってるじゃん。五月といえば、大陸中のデビルバスター候補生が帝都ヴォルテストに集まる月、でしょ」

五月。帝都ヴォルテストにおいて行われる、半月にも及ぶ大陸でもっとも過酷な公式の試験、デビルバスター試験だ。

「？」

ティースがそこで不思議そうな顔をしたのは、その事実を知らなかったからではない。知ってはいたが、それを即座に自分と結びつけることができなかっただけである。

その証拠に彼はたっぷり十秒ほどの時間をかけた後、徐々に表情を驚きに染めて、

「え……も、もしかして、それ、俺も出るのか!？」

「もしかしくてもそうだったの」

「言ってますでしたか？」

と、不思議そうなアオイ。

ティースはすぐさま反論して、

「は、初耳だよ！ そんな無茶な！」

彼がそんな反応をしてしまったのも、まあ無理もない。

デビルバスター試験に受ければデビルバスターになれる。逆に言えば、デビルバスターになれるだけの実力がなければ試験には受からない。それは当然のことだ。

そして、彼がこれまで見てきたデビルバスターたちはいずれも圧

倒的に格上の存在ばかりで、いつか追いつくことを目標にしてはいても、現時点でその領域に及んでいるなどとは彼には到底考えられないことだったのである。

「まあ、アオイさんのことだし、言い忘れてる可能性もあるとは思ったけど」

リディアは平然と、微妙にアオイがへこみそうなことを口にして、「それはともかく。ティースさん、自信ないの？」

「そ、そりゃあ……だって俺、レイさんやアクアさんはおろか、パーシヴァルにだって負けてばっかだし――」

懸命に自分の未熟さを主張するティースに対し、リディアはほんの少し意外そうな顔をして、

「あれ？ でも負けてばっかってことは、勝てることもあるってことだよな？」

「え？ そりゃ、たまには」

「どのぐらい？」

「五回に一回か二回ぐらいかな」

「……ふーん」

「？」

リディアは少し思案するように視線を泳がせ、それから彼女の身には少々大きい執務椅子の背もたれを軋ませながら言った。

「ティースさん、もしかして何か勘違いしてるんじゃない？」

「勘違い？」

「うん。……ティースさん最近、ダリアさんやビビさんとは手合わせしてる？」

「へ？ そりゃ、最近はナイトの、主にパーシヴァルとだけ。……それがどうしたんだ？」

「んー。だろうね」

頷いて、リディアは手元の分厚い書物をパラパラと適当にめくりながら、

「ま、とりあえず自信がないなら来年でも再来年でも、好きなとき

に受ければいいんじゃないかなあ。実際、あまりのレベル差に自信を無くす人だってたくさんいるもんね。心配なら止めといた方がいいのかも」

「……え？」

ティースは少し虚を突かれたような顔をした。

「……」

そして考え込む。

彼女の口調は決して彼の姿勢を責めるようなものではない。しかもその言葉は全て事実だろう。

合格率一パーセント未満。その数字が全てを物語っている。

しかもこのデビルバスター試験は半月にも渡る期間の長さ、唯一帝都ヴォルテストでのみ開催されるというその条件から、冷やかして受けるような者はほとんど存在しない。つまりこの“合格率一パーセント未満”とは、それなりの可能性を持つ者たちが受験した上で、それでも合格者は常に百人に一人にも満たないということなのである。

そのレベルの高さは子供でも理解できそうなもの。実力のない者が挑めば取り返しの付かない大怪我をすることだってあるのだから、棄権することが必ずしも間違いであるとは言えないだろう。

「……リディア」

考えた末、ティースはゆっくりと顔を上げて言った。

「少し考える時間をもらっても、いいかな？」

「そりゃあもちろん。……受かる見込みがないならむしろ行かないで欲しいなあ。ほら、ヴォルテストまでの必要経費だって馬鹿にならないし」

「……」

苦笑する。

非常に彼女らしいコメントであった。

クールで、知的。

狡猾で、計算深い。

天使、あるいは悪魔。

彼女を評する言葉は、人によって大きく違ってくる。

好意的な言葉は熱っぽく、悪意の言葉は嫉妬と蔑みを含んで。

そして学園の大半を占めるネービスの若者たちは、そんな彼女にある一つの共通する称号を与えた。

——ミステリアス。

「今月に入って、これで十三件目」

「なに？」

「あんたが振った男の子の数」

木の枝に蕾をつけて咲くチェリンという名の淡い桃色の花は、大陸でも北方の比較的涼しい地域に多く頒布する種類の樹木だ。三月下旬、春の訪れとともに蕾をつけ、四月が始まると同時に咲き始め、中過ぎ頃に儂く散ってしまうその花は、この学園都市ネービスにおける出会いと別れの象徴である。

そんな桃色の花が宙を舞う四月、今年もまたネービスの内外から学徒たちが集まり、そして一定以上の成績を残した学徒たちは次にステップへと駆け上がっていく。

そして——

「十三件中、新入生が十二件。毎度のことながら、あなたの魔性の女っぷりには脱帽だわ」

残念ながらこのサンタニア学園では、希望溢れる新入生が十二人ほど早くも人生の挫折を味わってしまったようだった。

「ディアナ」

そよ風に躍る金色の髪。美しい海の色をした瞳。そして精巧に作られた彫刻のように整った顔立ち。

いくら大都市であるネービスといえども、彼女ほどの美貌を持つ女性はそのよう見当たるまい。

そんな彼女——ここサンタニア学園薬草学科の三回生であるシーラ・スノーフォールは、ランチタイムが終わった午後、学園内の並木道を学園の友人であるディアナ・リーとともに歩いていた。

「私は誰もたぶらかしたりしないわ。ただ、男たちが勝手に迷っていくだけのことよ」

「出た、遠慮のかけらもない女帝発言。……ま、あんたの場合はそういう話にしる成績の話にしる、全部ホントのことだから手に負えないんだけど」

まるで諦めたようなディアナの言葉に対し、シーラは謙遜するでも自慢するでもなく、そっと微笑むだけだった。

「……でもさ」

さて一方、隣を歩くこのディアナという少女。

人懐っこそうな丸っこい顔立ちに、太っているというほどではないが全体的に丸みを帯びて小柄な体躯。

そして何より特徴的なのが、短めの髪をまとめて頭のてっぺんで縛った、まるでタマネギのような髪型だ。……髪の短い赤ん坊ならともかく、この年齢の少女にしては比較的珍しい髪型だといえよう。なんとも対照的。だが、そんな彼女はシーラにとって、この学園でもっとも親しい女友達だった。

「あんたってばただでさえ誤解されやすいんだから、そういうのもほどほどにしておかないと、また——」

いや——その言い方はあるいは誤解を招くだろうか。

正確にはもっとも、などではなく。

“唯一”と言うべきだろう。

「……あら。あの子、まだ学園にいたのね」

この日はちょうど、午後から“特別講義”が開始される日だった。

特別講義とは毎年この春先にのみ集中して行われる、その名の通り“特別な”講義であり、この薬草学科に限らず、今年二度目以上の三回生を迎えた者――年度始めの基礎授業を必要としない留年組を対象とした、基本的には本来の学科の趣旨とは関係ない選択式の短期授業である。

知識の幅を広げるため、あるいは普段学ぶ機会のない珍しい知識や技術に触れるため……目的は様々であり、もちろん本来の学科の基礎授業をもう一度受ける者も多い。

今年は六種類開講されるこの特別講義の中、シーラが選択したのは“護身術の基礎”と題された講義だった。

学園内の第三区にある薬草学科の学舎から、講義の会場である屋内競技施設までは徒歩で五分強ほどの時間。

「さすがのあの子の“魔力”も卒業試験にまでは及ばなかったのでしょ――」

その途中で彼女たちの耳に飛び込んできたのは、これ見よがしなヒソヒソ声だった。

「そりゃあね。いくら色ボケした先生方だって不正がバレたら職を失うもの。そんな危険を侵して卒業までさせようとは思えないでしょうし」

「……」

ディアナが眉をひそめる。

別段気にした様子もなく通り過ぎようとするシーラ。

その距離が縮まるにつれ、ヒソヒソ声はさらに甲高くなっていく。……いや、ここまでくると“ヒソヒソ”などという表現自体がもはや的確ではないか。

「あはは、それじゃあせっかくの苦労も水の泡ね」

「無理して涼しい顔しちゃって……内心では焦りまくってるくせに――」

それでも少女たちのそれはあくまで“陰”口。反応さえしなければそれ以上のことは何も起こらないし、シーラたちもそのことをよ

く理解していた。
が。

「ちょっと……あなたたちッ！」

わかってはいても我慢できないのが人間というもので。……とはいえ、この場合我慢できなかったのはシーラの方ではない。

「ディアナ」

すぐに制止の声を放つシーラ。だが、もちろん遅い。

「なに？」

ディアナの怒りの声に振り返った三人の女生徒たちは、すでに挑戦的な表情で彼女らを振り返っていた。

「あら、誰かと思ったら。何か用？」

白々しい、というべきか。少女たちはもちろん確信犯であり、こうして噛みつかれることもむしろ望むところだったといえるだろう。
「何か用、じゃないっしょッ！」

一方、自分が詰られたわけでもないのに顔を真っ赤にして噛みついていくこのディアナという少女は、少々正義感が強すぎるのか、あるいはよほど友人を大事に思う人物なのか。……あるいはその両方だろうか。

「気持ち悪いのよ、あんたたち！ 言いたいことがあるなら、もっとはっきり面と向かって言やいいじゃないのさ！」

「は？」

三人組は当然のようにトボけた。

「いきなりなに言ってるの？ 誰もあんたたちのことなんか話題にしてないじゃない」

だが、ディアナも簡単には引き下がらず、

「嘘ばかり！ あんたたち、今日だけじゃないでしょ！ 毎回毎回、あたしたちが横切るたびにヒソヒソヒソヒソ——いい加減にしないと、こっちだって堪忍袋の緒が切れるわよ！」

さらにヒートアップ。

まあ、この場合彼女の言葉は正しい。少女たちの中傷は紛れもな

く彼女たち——いや、シーラに対して向けられたものであり、百人いれば九十九人はそう受け取るだろう。

が、そうはいつでも、こういう場合においてそれを立証することは難しく、本人たちがしらばっくれればそれまでの話で。

案の定、少女たちはクスクス笑いながら言った。

「言いがかりもいいとこだわ。自意識過剰なのよ、引き立て役のお猿さん」

「なっ……!」

どっ、と、笑い声が並木道に溢れる。

「……」

そのときシーラの視線が初めて三人組の少女たちへ向けられた。

「あんたたち——」

ディアナが一步足を踏み出す。
が。

「ディアナ、止しなさい」

「シーラ……」

怒りと嘲笑が交錯する中、ディアナの肩に手を置いたシーラの声は場違いに思えるほど淡々としていた。

「私のために怒ってくれるのはありがたいけど、もういいわ」

「でも! シーラ、悔しくないの!？」

怒る立場と宥める立場が完全に逆転しているようだが、そこは性格の違いだろう。

「あんた、最近また根も葉もないようなことばかり色々言われてるじゃない! 成績がいいのは教官に色目を使ってるからだの、人の彼氏に手を出すのが趣味だの……やっかみだか腹いせだか知んないけど!」

三人組の一人が口を挟む。

「ちよっと人聞き悪いわね。誰もやっかんでなんか——」

「別に悔しくなどないわ」

「……え?」

「だから、もういいのよ」

その場にいた全員の視線が彼女へ集まる。

意外そうな、あるいは思惑が外れたような顔で。

「……」

物憂げなため息。

折しも吹いたそよ風と宙に散った桃色の花びらが、まるで意志を持ったかのようにただでさえ美しい彼女をさらに美しく、幻想的に飾り立てた。

その場にいる誰もが視線を奪われた、その一瞬。

「行きましょう、ディアナ」

その直後、三人の少女たちに向けられたのは、魔性と称された瞳——見る者によっては太陽にも月にも、あるいは底なし沼のようにさえも思える“魔力”を秘めた瞳。

そして、そこに浮かんでいた色は——

「道ばたの石ころよ。相手しても仕方ないわ」

侮蔑。

そのまま背を向ける。

「なっ……!」

当然、三人組の少女たちは一斉に気色ばんだ。そして、背を向けて歩き出したシーラを早足で追いかけて手を伸ばす。

「ちよっ……ちよっと、待ちなさいよ、あんた——!」

「——お前たちの相手はしない、と、そう言っているのよ」

「っ……!?!」

別に声を荒らげたわけではない。が、振り返ったその視線一つで、少女たちの足はその場に縫い止められていた。

見下す視線は相変わらず、そしてゆっくりと体を彼女たちの方へ向けて、

「道理も根拠もない、浅学なお前たちの醜い誹謗を黙って見過ごしてあげようというの。大人しく引き下がった方が賢いわ……もっとも」

そう言った口元が薄く吊り上がる。

「心の醜さは他人に許されたところでどうなるものでもないわね。自覚があつてさえ出口の見えない者もいるのだから、お前たちのそれはきつと一生ものよ。せいぜい上手く付き合つていくことね」

抑揚のない、まるで辞令書を読み上げるかの如きその言葉は、いわゆる普通の少女たちをいっせいに黙らすには充分すぎるほどの圧迫力があつた。

「ディアナ」

「え……あ……あ、うん……」

気圧されてか、冷水をかけられたかのような顔のディアナが素直に頷く。

そのままシーラがもう一度背を向けると、今度は誰も追いかけてこようとはしなかった。

「――怖いなあ」

ディアナはシーラと同じ年にこのサンタニア学園薬草学科に入学し、同じタイミングで進級して現在四年目の三回生。ほぼ入学当初からの付き合いであるから、もう三年以上の付き合いになる。この学園の生徒たちの中ではもっとも長い付き合いだ。

だから当然、この学園の誰よりも彼女のことをよく知っている。

頭がよく美人。

クールでミステリアス。

おそらくは男嫌い。……二回生の頃の実地授業において、彼女の手を取ろうとした若い教官に辛辣な言葉を浴びせかけた事件は学科内では有名な話である。

産まれ育ち――不明。彼女は学園において一切その手の話をしやうとはしない。

家庭環境――不明。その自宅を知る者すら学科内には一人も存在しない。

放課後や休日の過ごし方――不明。

……要するに学園でもっとも親しいディアナですら、その程度しか彼女のことを知らない、とも言えるだろう。

「あんただったらどんなことがあっても、きっと取り乱したりすることなんてないんでしょね」

「そんなことないわ」

問いかけに返ってきたのは至極当然の答え。普通ならば、それで当然だ。……が、ディアナは彼女が取り乱したシーンを一度たりとも見たことがない。

「想像できないなあ」

今、こうして特別講義の舞台である屋内競技施設にいても彼女の存在だけはまるで別格で、誰もが視線を奪われ、彼女が歩けばどんなに混雑した人垣でも自ら割れていくのではないかと思わされる。

彼女は完璧に優秀であり、完璧に美人で、なおかつ感情すら完璧に統制しているのではないかと。

もちろん、それは妄想だ。

ディアナはディアナなりに、このシーラという、おそらくは普通の人間であろう少女の本質をある程度知って——少なくとも知っているつもりでいる。

例えば先ほどの少女たちに向けた辛辣な言葉。いつもは涼しい顔のまま黙って通り過ぎるはずの彼女が今日に限ってあんな言葉を発したのは、おそらく自分が侮辱されたからではない。

“意外に面倒見が良く、情に厚いところもある”

これはディアナが三年間の付き合いの中で得た、おそらくは少数しか知らない彼女の真実。

クールな彼女が時折気まぐれで情を見せるのか、あるいは情に厚い彼女が普段はクールに装っているだけなのか、それはわからないが、他の連中が口にするほど冷血でもなければ完璧でもない、と、少なくともディアナはそう考えていた。

そして、

(……でも、たまには憶測なんかじゃなくて、この子の意外な一面

つてのを目の当たりにしてみたいものねえ)

なんてことを妄想してみたりするのだ。

興味本位というよりは、もっと単純に、この友人のことをよく知りたいという欲求から。

ざわ、ざわ……

室内は少しだけざわめいていた。

屋内施設の一角を仕切る形で作られたその“教室”は、広さだいたい二十メートル四方。その入り口側の方にやはり十数個の席が用意され、生徒たちはそれぞれ思い思いの場所に腰を下ろしている。生徒数の割に広めのスペースが用意されているのは、もちろん授業内容に実技の項目があるためなのだろう。

十余名。

この特別授業がほんの一部の生徒たちを対象にしていると考えても、全ての学科を合わせた対象者はおそらく百人を超えるはずだから、この人数は比較的——いや、かなり少な目だと言える。

そして定刻。

ざわ……

仕切りの奥から聞こえてきた足音——おそらくは講師のもの——に、生徒たちのざわめきが急速に静まっていく。

この特別講義、学園にはもともと存在しない授業の内容をウリとしているだけあって、講師にはほとんど外部の人間を招いている。もちろんこの講義——“護身術の基礎”——とて例外ではなく。

そして、

「えー……」

「……？」

仕切りの向こう側から二人の講師が姿を現したとき、ディアナはちょっとした驚きを覚えた。

室内がざわつく中、学園の講師に連れられた特別講師は二度、三度と頭を下げながら生徒たちの正面に立つと、

「えー。こんにちは……じゃなくて、は、はじめまして、みなさん。

お元気ですか」

「？」

何とも頼りなさそうな挨拶。

もちろん“特別講師”というだけあって、中には人にモノを教えることを本職としていない者も数多くいる。その中には大勢の前で話すことに慣れてない者もいておかしくはあるまい。

が、そういった事情は考えたにせよ。

“護身術”……その授業内容から、学徒たちがその講師に体育会系のゴツイ印象を抱いていたとて何の不思議もなく、その頼りなさそうな挨拶にギャップを感じてしまうのも無理はなかった。

僅かな失笑。

各所から聞こえたその音に、講師はひよろつとした長身を少し萎縮させて、

「あ、え、ええっと、俺、いや僕——じゃなくて私、今日から、その、こちらでお世話になる——うわわっ！」

ばさばさっ！！

脇に挟んでいた資料の束らしきものが滑り落ちてバラまかれる。

慌てて拾い集めようとする講師の青年は、頭をペコペコさせながら、

「あ、ご、ごめん！ 俺、いや僕——ああ、いや、こういったものには慣れてないもんで——」

さらに失笑。

さすがにディアナも少し吹き出すと、隣に座っているシーラの袖を軽く引いて、

「ぷふっ……な、なんか頼りないなあ？ ……あ、でも厳つい“いかにも”なオッサンよりはいいか。ねえ、よく見るとなんだか可愛い顔してるし——……シーラ？」

怪訝そうに視線を横に向けたディアナ。

「……」

「へ？ 何したの？」

そして驚いた。

そのときディアナが目の当たりにしたのは――クールでミステリアスだった彼女の、およそ見慣れない表情。

隙のない視線は微かに見開かれ、パチクリ、パチクリと二度、三度瞬きをする。他者を寄せ付けない高貴さのようなものはすつかりと影を潜め、素のままに驚きを浮かべるその表情は、同じ年頃の普通の少女たちが見せるものとまったく変わらなかった。

そしてその視線が見つめる先は、ただ一点――

「あ、改めまして。僕――えっと私、今日から約半月の間、みなさんに護身術を教えさせていただきます、ティーサイトⅡアマルナです。どうぞ、よろしく願います」

「……」

偶然か、あるいは仕組まれたものか。

ともあれ。

「……シーラ？」

どうやら彼女――ディアナⅡリーは期せずして、ミステリアスな友人の秘密の一端に触れる機会を得たようである。

幕間『ジュニス・レディ』

午前十時。

ミューティレイク家のハウス・メイドたちにとってもっとも忙しいと思われるのが、この、朝食を終えてから昼までの時間である。掃除、洗濯、客室の準備等々……いわゆる家事と呼ばれるものの大半を受け持つ彼女たちの仕事は屋敷の女性使用人たちの中でもっとも身体を動かす仕事であり、他の使用人たちに比べ圧倒的に体力を必要とする。

と、そんな体力自慢(?)なハウス・メイドたちの中であって、一際目立って大柄な女性がここにいた。

「ジョエッタさん。このシーツはどこに置けばいいですか？」

「ああ、そっちの、ほら。カドんここにでつかいケースがあるだろ。そこに放り込んで——ああ、ああ、畳まなくていいからね。あとはそっちで勝手にやるからさ」

答えたのは三十代前半だろう、かなりクセの強いショートカットの女性で両手には山盛りの洗濯物を抱えている。身長は平均程度だろうが、幅が普通の女性の二人分ほどもあるため山盛りであるはずの洗濯物が少々物足りなく思えてしまうほどだ。

が、そんな女性——ジョエッタの後方にいる女性はさらにすごかった。

「よいしょ……」

声質は柔らかく、抱えたシーツの奥から時折覗く顔はいかにも優しげで清楚。長く伸びた黒髪とおっとりとした雰囲気は深窓の令嬢かあるいは聖職者を思わせるほどに淑やかだ。

しかし、である。

「ここでもいいですか？」

「ああ、リイナちゃん、もうちょっと右、右……はい、おっけー」
「どすん！」

綿で出来ているとは思えない重い音を立てカゴの中に積まれる白いシーツ。……いや、カゴがシーツの山に埋もれたと表現した方が正しいかもしれない。シーツを取りにやってきた洗濯担当のハウス・メイドが目丸くするのも当然だった。

さて。

見ての通り、この二人の女性はミューティレイクのハウス・メイドである。

今年三十三歳になるジョエッタは同い年の夫と三人の子を持つ通いの使用人だ。この屋敷にやってきたのは二年ほど前だがそれ以前にも別の屋敷で同じ仕事をしており、この道に関していえばそれなりのベテランであるといえるだろう。

一方、彼女の付き従う形で仕事をこなすリイナの方は現在十六歳。屋敷に来て二ヶ月程度の新米であり、まだまだ仕事を学んでいる真っ最中だ。

にも関わらず。

「……いやあ、ホント助かるよ。リイナちゃんがいなきゃ何回も何回も往復しなきゃならんとこだからねえ」

などと、彼女がジョエッタに感謝されることは一日に一度や二度ではない。いやジョエッタに関わらず、彼女の手が空いていると見るや否や、実に様々なところから彼女に依頼の声がかかるのだ。

「お役に立てて嬉しいです」

ニッコリと聖女のように微笑むリイナ。その様は自分が役に立てたことを素直に喜ぶ純粋で努力家の普通の少女だ。

が、しかし。

彼女には“普通の少女”であるとは言えない部分が三つあった。

「ホント、リイナちゃんがいなかったらと思うと……って、前はそれなりに何とかやってたはずなんだけどねえ。やっぱ人間楽すること覚えるとダメだわ」

あはは、と笑いながらも賞賛の言葉を止めないジョエッタの視線は常に斜め上を向いている。……と言ってもあらぬ方向を見つめな

がら喋っているわけではない。

「でも私も早く仕事を覚えて、ジョエッタさんに迷惑をかけないようにはしないと」

標準的なジョエッタの身長に対し、このリイナという十六歳の少女の身長は実に百八十二センチ。身長差は約二十センチ……ともなると、顔を見て話をするだけでも視線が斜めになるのも致し方ないところであろう。

これが、彼女が“普通”ではない理由の一つ。

そして二つ目は――

「うっきやあああああああッ!!」

「!」

ジョエッタとリイナが一息つきながら一階のホールまで戻ってきたときのこと。

屋敷に響いた奇声はまだ幼い少女の悲鳴だった。

「だっ、誰か! 誰か助けてええええッ!!」

「……」

一瞬顔を見合わせるジョエッタとリイナ。彼女ら二人がそれほど慌てなかったのは、その声が彼女らにとって聞き覚えのある人物のものであったことと、もう一つ。

「……またあいつらかい」

ジョエッタが呆れた表情でそう呟いたように、その悲鳴がそれほど珍しいものではなかった、ということである。

「私、行ってみますね」

「ああ、ああ、すまんね。きっとまたヴァレンシア辺りがちよっかい出したんじゃないかと思うけど」

ジョエッタの声に微かに微笑んでみせてから、リイナは一階ホールから悲鳴の聞こえた書庫へと続く通路に足を運んだ。

「エレンさん、大丈夫ですか?」

悲鳴が聞こえた近辺で声をかけながら進む。

すると案の定。

「えっ？ あ、リイナ！ リイナ、ちょっとこれ、なんとかしてよ
おっ！！」

「……な、なにをしているんですか？」

リイナはとてつもなく不思議な顔をする。

さもあらん。

通路の途中。エレンという、彼女と同じハウス・メイドで年下の少女がうつ伏せの状態で通路にうずくまっていた。……そこまではいい。が、このエレンという少女、ほどけば腰よりも長い髪を頭のてっぺん近くで左右に分けているのだが、何故かその片方が通路の途中に置いてある騎士の銅像に踏み付けられる形になっていたのである。

エレンは涙目になりながら、

「わ、わからないわよお！ ここの床を拭いててようやく終わったから立ち上がろうと思ったら……いだだだッ！！」

「あ、動かないで、エレンさん……」

軽く二百キロはあろうかという銅像だ。当然無理矢理引き抜こうとして抜けるものではない。

「おやおや、ちょっとなにやってるんだい……」

と、後からやってきたジョエッタもその惨状を見て眉をひそめた。

「だ、だから知らないってばあ！ ……き、きつとまたヴァレンシアだわ！ ヴァレンシアが何か仕掛けていったに違いないのよおとおッ！！」

などと、エレンは彼女の天敵でもある少女の名を上げて訴えたが、ジョエッタは馬鹿馬鹿しいという顔をして、

「あの子じゃその銅像を持ち上げるのは無理でしょ……ちょっと待ってな、今誰かにハサミもらってくるから」

そんなジョエッタの言葉に、涙目になっていたエレンの表情がさあっと青ざめた。

「ハサミ！？ も、もしかして切るのッ！？」

「それしかないだろう？」

腰に手を当てて答えるジョエッタの言葉はもつともである。

だが、エレンは必死な形相で、

「いやよ！ いやいや！！ 切るのだけはいやッ！！ ……ひ、ひ
どいよお！ あ、あたし、何も悪いことしてないのにいつ！」

とうとう本当に泣き出してしまった。

その声は何事かと少しずつ人が集まってくる。

「つたって、切らなきゃいつまでもそのまま——」

「……」

と、そこへ。

何事か考えていたリイナがゆっくりと銅像へと歩み寄っていった。
そして、

「エレンさん」

「え？」

「三、二、一で起き上がってくださいね」

「へ？」

そのリイナの行動にジョエッタが目丸くする。

「ちよっ、ちよつとリイナちゃん。あんた一体何をするつも——」

だが、リイナは答えずそのまま銅像に手を掛けると——

「いきますよ。……三、二、一！」

ずず……。

「……え？」

どすん。

「……へっ？」

身を起こしたエレンが目丸くする。さっきまで挟まっていた左
の髪を手に取り、わけがわからないという顔で銅像を見て、そして
最後にリイナを見上げた。

何が起こったのか、と、問いかけるように。

銅像は動いていない。……いや、動いていないように見える。
が、しかし。

「……」

ぽかんと口を開けるジョエッタの表情が何が起こったのかを如実に表しており――

「大丈夫でしたか？」

ニッコリと聖女のように微笑むリイナの額には、ほんの微かに汗が浮かんでいた。

「あ、あ、ありがと、リイナ……」

大事な髪を失わずに済んで本来ならば喜び勇むはずのエレンも、その、あまりに信じがたい出来事にただただ呆然とするばかりであった。

……と、まあ。

そういった感じでいくつか“普通ではない”点のある彼女（三つ目については敢えて説明する必要はないだろう）だが、屋敷の人々の受けは非常に良い。ハウス・メイドの仕事は決して楽なものではないが、仕事そのものを楽しんでやっているというのが端から見てもすぐにわかるし、努力家であり同僚思いでもある。何かと目立つ部分もあるが、だからといって驕るようなところもまるでなく。

そして何より慎重深い。相手が年下であっても礼儀正しく、年上であれば尚更相手を立てて出しゃばることがない。

屋敷の人々はいつしかそんな彼女を表す言葉として、とある単語を使用するようになった。

彼女はまるで――の、ようだ、と。

「昔々、大陸の東方に位置するジェニス領には、女から男に愛を伝えてはならないという厳格な法が存在していました。何故なら女が自分をアピールすることには慎みがなく、また男に恥を掻かせる行為でもあると広く認識されていたからで、記録によれば過去、その罪で死刑になった人もたくさんいたということです」

その日の昼下がり。

膨大な蔵書量を誇るミューティレイク家書庫の入り口には、薄暗い書庫内部とは違ってきちんと採光された読書用の席がいくつか配置されているのだが、そのうちの1ヶ所に二人の少女が腰掛けていた。

その片方がパタン、と、分厚い本を閉じる。……となれば、その声の主も大体想像がつくだろう。

難解な分厚い本がトレードマーク、弱冠十三歳のミューティレイク家執事リディアⅡシュナイダーである。

「その法が姿を消した現在もなお、一部の上流階級ではその法に準ずる厳格な教育を施す家もある……これが“ジェニス・レディ”っていう言葉の起源なんだけど、今は一般市民レベルではやっぱ過去のもので、その言葉も単に“慎重深い女性”や“引込み思案の女性”のことをそう呼ぶようになったみたいだね」

「それって誉め言葉だと思っていいいのかな？」

と、そんなリディアの説明に聴き入っていたのは屋敷の制服に身を包んだ少女だった。リイナの着ていたものと若干デザインの異なるそれは、食卓に係わる色々な仕事をこなすキッチン・メイドの制服だ。

その少女、エルレーンⅡファビアスは“まるで妖精のよう”などと表現され、彼女の正体を知るティース辺りが微妙に引きつった笑みを浮かべてしまうような、小柄で細身の少女である。

「うん。ジェニス・レディは歌劇とか物語の世界では割と一般的な題材でヒロインをイメージさせる言葉でもあるから、あんま悪い意味では使われないと思うよ」

「そっか。うん、ありがとね、リディア」

エルレーンがホッと胸をなで下ろすと、やや内側にカールしたセミロングの髪が微かに揺れた。

「いいいえ、どういたしまして。授業料はちゃんとティースさんに請求しておくから」

しれっと言つてのけたリディアにエルレーンは苦笑して、

「ティースに怒られたりしないかなあ」

「エルさんなら大丈夫。ティースさんロリコーじゃなくて心が広いから」

「……リディア、ボクより三つも年下でしょ」

と、エルレーンは不満そうに、だけどどこか冗談っぽく口を尖らせた。

「あはは、まあね。……ちなみに余談だけど、本当の意味で言うジエニス・レディはどっちかっていうとあんまい意味じゃないんだ。基本的に悲劇のヒロインだからね」

「悲劇のヒロイン？ どういうこと？」

「ジエニス・レディが好きな男にアピールする方法ってすごく限られてるっしょ。あからさまにならないよう微妙に手を変え品を変え……でも気付いてもらえない、なんて。いかにも悲恋物語のヒロインでしょ？」

「あ……なるほどねー」

と、エルレーンは真顔でしみじみと呟く。

「やっぱ難しいものなんだね、人間の恋愛って」

「ま、色恋が思い通りにいかないのは何も昔のジエニスに限ったことじゃないだろうけど」

エルレーンは不思議そうな顔をして、

「リディアにはそんな経験があるの？」

「あたし？ あはは、あるわけないじゃん」

リディアは即座に否定した。

「あたしは望みが低いから。莫大な遺産さえ残してくれれば後はどうでもいいし」

「またそんなこと言って」

苦笑する。

が、あながち完全に冗談であると断言もできない辺りがこのリディアという少女の恐ろしいところだ。

「……ジェニス・レディかあ」

リディアと別れたエルレーンは書庫から彼女の主な仕事場である厨房へ抜ける廊下を歩いていた。

なんとも興味深げな呟き。

ジェニス・レディ。その通りジェニス領の女性を指すその言葉は、リディアの説明した通りの言葉であり、今の世では恋愛性を強く想起させる単語である。

しかしだからこそ、エルレーンはこう思うのだ。

「でも、リイナを表現するにはちよつと遠い、かなあ……」

「――エルさん」

顔を上げるとちょうど廊下の向こうからやってくるリイナの姿が見えた。

小さく手を挙げて応える。

「リイナ。今からお昼？」

「はい。エルさんですか？」

歩み寄ってきたリイナは袖を捲っていかにもたった今掃除を終えてきた、というような格好だ。

「ううん。ボクは終わってこれから戻るとこだよ」

「そうですか……」

リイナは少しだけ残念そうに視線を落として、

「久しぶりにエルさんとゆっくりお話がしたかったです……」

「そうだね。リイナ、夜は寮に戻ってすぐ寝ちゃうもんね」

エルレーンの言葉にリイナは頷いて、

「ええ。こんなにも忙しく動くことなんて今までなかったことで
すし、覚えることもいっぱい体より頭の方が先に疲れてしまいう
み
たいです」

「うん、そうだね」

それでもどこか充実した顔つきの彼女を見てエルレーンは満足そ
うに目を細めた。

そして先ほどのリディアの言葉を思い出す。

（“ 慎み深い女性 ” や “ 引っ込み思案の女性 ” かあ……）

引っ込み思案、という表現はもちろん似合わないだろう。

「最近、変なこととかはない？」

「え？ 変なこと、ですか？」

「うん。人間の生活ってちよつと勝手が違うでしょ？ 戸惑ったりとか、他の子に変な顔されたりとかしなくなった？」

そんなエルレーンの心配にリイナはニツコリと微笑んで、

「あ、それはもう大丈夫だと思います。夜は寝る前に少しでも人の書いた書物を読むようにしていますし、エルさんの忠告通り “ 家族 ” とか “ 恋愛 ” とかそういう話にはできるだけ参加しないようにしていますから」

「うん、そっか」

それなら大丈夫だろう、と、エルレーンは頷いた。

……王魔である彼女たちと人間たちの間に存在する感覚の違い。その中でもなかなか理解し難き感情のうちの一つ。

恋愛感情。

エルレーンの方こそ幼い頃から人間界に興味を持ち、また詳しい知り合いがいたからこそ多少なりともそれを理解できてはいるが、それでも先ほどのように恋愛事に係わる様々な模様を耳にするたび、その複雑さに感心してしまうことも少なくなかった。

このエルレーンですらそうなのだ。

「でも、聞けば聞くほどわからなくなるんです。皆さん、好きな人の話をするときに多くがその理由としてカッコイイからと言うのですが……」

リイナの方は昔、二年ほどティースたちと一緒に過ごしたことがあるとはいえ、ごくまともな王魔としての感覚が圧倒的に濃い。そんな彼女がジェニス・レディー——悲恋を象徴するヒロインに例えられるとは、なんともミスマッチであると言わざるを得まい。

「カッコイイから好き、というのは、どういうことなんでしょうか。」

美しいものを愛する気持ちは私にも理解できますが、皆さんの言うことはそれとは違うようで……中にはほとんどまともに話をしたことがないという人もいるようで、もう何が何やら……」

「あ、うーん……」

エルレーンにはそんな彼女の感覚がよく理解できた。

王魔にも愛情という概念は存在する。が、それは男女のそれでも家族のそれでもなく、純粋な個体そのものに向ける愛情でしかない。だから王魔に愛されるということはすなわちその存在全てを認められるということで、当然、相手をよく知らずに愛するということはまず有り得ない。

「人間は、きつとボクらより直感的に他人を愛することができんじゃないかな」

結局、エルレーンはそんな風に答えた。

「直感的、ですか？」

「うん、本に書いてたんだ。愛とは、愛するに値する相手かどうか考える前に愛してしまうことだ、って。それはきつと良い面も悪い面もあると思うんだけどね」

リイナは困り顔で、

「なんだか難しいですね……」

「うん。ボクも完全にはわかってない」

正直にそう言ってエルレーンはクスクスと笑った。

「でも、もしボクやリイナにそれが必要だとしたら自然にわかってくることだと思うよ。運命を司る花信風のお導きで、ね」

「あ」

昼下がりの青空を白い鳥が飛ぶ。白い鳥から落ちた白い半液体状の物体はベチャリと音を立てて黒い布地の上に落ちた。

「ふーふふふーん。ああ、俺はなんて幸せ者なんだろう。こんな

麗らかな春の日に麗しのあの方にお会いできるなんて！」

「……」

ルーベンは白い日傘の奥から前を歩く鼻歌混じりの背中をじっと見つめていた。

妄想爆発真っ盛りのためか、前を歩く男は自らの背中を汚した白い物体の存在に気付いていないようである。

「見よ、この清々しい青空を。ああ、愛しのファナさん！ 今日こそはこの燃え上がる思いの丈をあなたに伝えてみせます！」

「……鳥のフン付きだけだな」

「ん？ 今なにか言ったか、ルーベン？」

「いえなにも。ラドフォードさん、前見て歩かないと危ないですよ」
振り返ったライオン頭の大男の問いに、ルーベンは涼やかな顔でそう答えた。

「ん？ おお、そうかそうか。こんな大事な日に躓いて怪我でもしたら大変だ」

「そうですよ。もう手遅れですけど」

「ん？ どういう意味だ？」

「ああ、その、ラドフォードさんの熱い思いはもう誰にも止められませんね、と」

即座にそう返したルーベンの言葉に、ラドフォードは満面の得意顔をした。

「ふっ、何を今さら！ 海より高く山より深いこの俺の愛が止められるわけじゃないかあああっ！！」

「ええまったくそのとおり」

隣を走っていく馬車に視線を送りながら明らかに心のこもってないルーベンの返答であった。……いやこの場合、心がこもってない方がかえって有り難いというものか。

ネービスが誇るデビルバスター部隊でもトップ十のうちの二人、ラドフォードⅡマティスとルーベンⅡバンクロフトは麗らかな春の陽気の中、徒歩でミューティレイクの屋敷へと向かっていた。

徒歩である理由はただ一つ。

「ああ、こうして一步、また一步と愛しい人の元へ近付いているかと思うと、なんともいえない高揚感があるじゃないか！　なあルーベン！」

「そうですね。これで太陽が出てなければもったいいですね」

そう言いながら日傘の奥から憎らしげに上空の太陽を見上げる。

「ついでにウザいライオン頭もいなければもったいいですね」

「なに、ライオン？」

ラドフォードは不思議そうにキョロキョロと辺りを見回して、

「なんだ？　そんなものどこにもいないじゃないか」

「比喻ですよ、比喻」

「ああ、そうか比喻か」

なんとも頭が悪そうなやり取りだ。この会話を聞いている者がいたとしても、彼らがネービスの誇るエリートデビルバスターたちだなどとは夢にも思わないだろうと。

そうこうしているうちにようやく彼らの目的地であるミューテイレイクの屋敷が見えてきた。

「ああ、あと言い忘れてましたけど」

そう言っただけルーベンは日傘を深く傾ける。

「ファナさん、今日いいらしいですよ」

「……………な、なにいいいいいっ！！！？」

「どうも。情報提供、感謝します」

「いえ。どうかお役立てください」

ミューテイレイク本館の応接室。誠実そうな柔らかな声質の持ち主は屋敷の執事、イングヴェイ・イグレスウス——通称、アオイである。

そんな彼の正面、クッションの利いたソファの先っちょに腰掛けたルーベンは受け取ったばかりの紙の束に軽く目を通し、それを封

筒のようなものに入れた。

アオイが少し遠慮がちに問いかける。

「やはり気になっていますか？ 先日ネアンスファイアの事件……ルーベンは小さく頷いて、

「ええ、まあ。公にはあまり言ってませんがかなり異常でしたから。下位魔ばかりとはいえ約三十体の魔に加え、風の二十七族ウィルヴェント。それもゲリラ的に各個撃破した形跡はなく、ほぼ一ヶ所に死体が固まってきました」

「ウィルヴェント……？ 風の二十七族まで混ざっていたのですか？」

ひそめた声ながらアオイは驚きの表情を隠せずにそう聞き返していた。

「そちらの二名は運良く遭遇しなかったようですね。ともかく、普通に考えれば少なくとも数十名の戦力が必要、四、五名でやったとすれば全員がデビルバスタークラス、二、三名ならその中でも選りすぐりの手練れ、一人でやったとすれば――」

「……人間じゃ、ない」

「あるいは人類最強クラスですね」

「……」

無言で考え込むアオイ。もちろん何かを推測するには材料が少なすぎる。が、その異常さは思わず考えさせられてしまうほどのものではあった。

それを見つめていたルーベン。

「ところで」

やがてトンと、手にした封筒の端で軽くテーブルを叩いて、

「アオイさん。“マリアヴェル”という名に聞き覚えはありませんか？」

「え？ あ、ああ……確かこの事件で行方不明になったデビルバスターだと聞いていますが、それがどうかしめましたか？」

「未だに消息が掴めていないそうです。まあ死んでいるとか、もと

もと余所の領地で活躍していた人らしいんでどっかで元気にやっているのかもしれませんが。……いえ、知らないならいいんです。なんとなく気になっただけですから」

そう言っただけでルーベンは何事もなかったかのように室内を見渡した。やや高めの天井。このミューテイレイク本館は別館と違い内装や調度品も豪華で、もちろん別館で見られるような騒々しさは微塵もない。

と、

「ところで今日はラドフォード様も一緒にいらっしゃると聞いてましたが……」

「ああ、アレなら外で黄昏れてます。まあいつものことです。……じゃ、今日はこの辺で」

「あ、ルウさん」

資料を手には立ち上がったルーベンをアオイは引き留めて、

「せっかく来たんですから皆さんに会っていかれてはどうですか？
アクアさんなんかは前回いらっしゃったとき会えなかったのを悔しがっておられましたよ」

「……」

ルーベンの表情に珍しく微かな苦笑が浮かんだ。

「遠慮しておきます。隊長の十八番を喰らうと三日は行動不能に陥ってしまいますから」

「……そうですか。ではアクアさんには秘密にしておきましょう」

「そうしてもらえると助かります。特に私の背骨辺りが」

笑い返すアオイに対しルーベンは小さく一礼した。

「頑張ってくださいね、ルウさん」

「……」

もう一度頭を下げ、見送りを固持してルーベンは応接室を出た。応接室からは一人の使用人に案内され、一階ホールへと。もちろん別館のような質素な丸テーブル群などはなく、厳かで気品に溢れた内装に支配されている。

別館へと続く目立たない通路。

そこへ一瞬だけ視線を送り、ルーベンは出口へと進んでいった。夕焼けが射し込んでくる。だいぶ日差しは弱くなっていたが、それでもルーベン目は目を細めながら歩いていた。

「……？」

彼が一瞬そこに視線を奪われたのは特に大きな理由があったわけではない。

ただ特徴的だった。それだけのこと。

そしてたまたま視線が合った。

長い黒髪。柔和な表情。

思わず呟いてしまったのはルーベンにとって圧倒的な失点だったろう。

「フラニー……？」

「？」

足を止めた女性は彼より十センチほど背が高い。だがその割に威圧的な雰囲気は微塵もなく、どこか心和ませるオーラさえ身に纏っているような女性だった。

「私のことですか？」

「あ、いや」

不思議そうな顔の女性に対し、ルーベンはすぐにいつもの調子に戻って否定しようとした。

が、それより先に女性は自らの右手を胸の上に置いて、

「私はリィナといいます。リィナIIクライストです。フラニーさんという方は……すみません、私、まだ全員の名前を覚えていません」

「……」

ルーベンは一瞬だけ言葉に詰まったが、すぐに切り返す。

「背、大きいですね」

「え？」

「知ってますか？ 水属性を持つ魔の女性はとても大柄な人が多いんです」

「……え？」

「つてことでサヨウナラ」

「……」

びっくりした顔のリィナを残したままルーベンは一瞬とその場を離れた。……その態度はいつもの彼を知る者からすればかなり不自然で、自らの失言を誤魔化すためのものだということはすぐにはわかったはずだが、もちろん初対面のリィナがそんなことを知るはずもなく。

「……はあ」

外に出て日傘を広げ、洩れたため息。

なんとも言えない気持ちでルーベンは日傘を傾けた。

「全然似てない」

誰にも聞こえない独白。

「背高いとこだけ。雰囲気と」

そもそも見間違えたというわけではないのだ。彼が失言を口にしたのはリィナのシルエットに対してであって、顔を見て言ったわけではないのだから。

場所も悪かった。

彼の意識が少なからず過去を遡っていたことも影響しただろう。

……とはいえ、この出来事によって何か重大な損害があったわけでもなく。その失言が産み出したものといえば、彼がリィナ＝クライストというあの少女の名を知り、彼女が――後々まで覚えているかどうかはともかく、このルーベンの顔をひとまず記憶したということ、ただそれだけだろう。

「……さて。ライオン頭でもからかって帰るとすっかな」

春の風。開花を知らせる風が吹く。

夕日に染まったネービスの街は何事もなく静かに夜を迎えようとしていた。

プロローグ

“圧倒的な力”には常にあらゆるしがらみがついて回る。

憧憬。嫉妬。打算。欲望。

それが権力であれ、金力であれ、武力であれ、知力であれ、そのしがらみから逃れる術はなく、結果としてあらゆる人々の思惑の波に吞まれることになるだろう。

その力が望んだものであろうと、また望まざるものであろうと――
|。

「殺して欲しいヤツがいます」

それを生業にする者たちにとって、このネービスほど住みづらい土地はないだろう。

ご承知の通り、このネービス領の首都であるネービスの街は大陸でも屈指の治安を誇り、犯罪者たちの存在を決して許そうとしない。他の街では当たり前のように起こる殺人事件も、この街ではそれほど日常の出来事ではなかった。

殺し屋。

その名の通り、生き物を殺すことを生業とする人々がいる。彼らは当然に犯罪者であり、もしその身を警邏に拘束されたならば、ほぼ間違いなく死罪が待っているであろう、この世のもっとも底辺に位置する犯罪者。

「……」

夜のネービス。

この裕福な街にもほんの僅かに存在するスラム地域。その一角に存在する無人の建物の地下に、交渉のテーブルを構えた一組の殺し屋と依頼主がいた。

「余計なことは言うな。用件など言わずともわかりきったこと」
地下室の壁に声が響く。

「ターゲットと、必要な情報、前金と成功時の連絡方法だけを残して去れ」

「……」

フードの奥から向けられた淡々とした声に、依頼主は微かに背筋を震わせた。

と、同時に期待に彩られた頬が笑みを刻む。

「こ……これが前金。ターゲットの情報はこっちの資料にまとめてあります」

お互いに顔を隠し、明かりは部屋の端に備えられた蝋燭の揺らめきのみ。もちろん彼らはお互いの素性を知る必要もなく、またそれを探ろうとすることは協定違反でもある。そのときはどちらかが血を流し、またどちらかが命を落とすことになるだろう。

ゴクリと喉を鳴らしたのは、依頼主の方。

「……」

しばらく資料を眺めていた殺し屋は、無言のまま手にした資料を懐に入れた。

それは依頼を受けたことの証。

「……お願いします」

依頼主は手の平の汗を握りしめ、奥歯を微かに震わせながら席を立った。

微かな空気の動きに、蝋燭の炎が大きく揺らめく。

――矢は放たれた。もはや後戻りはできない。

だが、それでも。

それでも、その依頼主の心には後悔よりも期待の方が大きかった。

「ふふ」

ひんやりとした夜の空気を浴びて、その頬に引きつった笑みが漏れる。

「これで私は自由になれる……」

圧倒的な解放感。

長いトンネルの向こう、自由の光はもうその眼前にまで迫ってい

て――

「これで、ようやく――！」

達成感と微かな恐怖に震えるその声は、晴れ渡るネービスの夜空に吸い込まれていった。

その1『波乱含みの講師生活』

「お前とは今日から赤の他人よ」

真っ赤な夕暮れの中、二つの長い影が佇むネービス中央広場。

休日の朝などにはカップルの待ち合わせ場所にも利用されるこの場所、今、一つの関係が終わりを告げようとしていた。

青ざめた男が必死に言い訳する。

「そ、そんな！ そりゃ今回のことは悪かったと思ってるよ。でも、仕方ない――」

「余計なことは言わなくていいわ。私が今のお前に望むことは、ただ一つだけよ」

片方はひょろつとした長身の人の良さそうな青年。

もう片方は眩いブロンドのポニーテイルを持つ美しい少女。

青年の表情は情けなく歪み、言葉を探すように視線が彷徨う。対する少女の方は硬い表情で念を押した。

「絶対に私に話し掛けないこと。可能なら視線も向けないで」
精巧な人形のように整った顔立ちが言葉に鋭さを加える。

「そ、そんな無茶な！」

当然、青年は反論しようとした……が、彼らの力関係を考えれば少女が青年の言葉に聞く耳を持つはずもなく、

「とにかく、そういうことよ」

「そんな……」

そんな二人。

少々頼りなくいかにも情けない男、といった印象のティーサイト
Ⅱアマルナ、通称ティースはここ学園都市ネービスでデビルバスター
Ⅰを目指す十八歳の青年である。

百八十センチを越えるひょろつとした長身、やや猫背、童顔であること以外に取り立てて語ることもないルックス、それなりに清潔だが凡庸としか言いようなない服装、髪型、その他諸々の美的セン

ス。……一応物語の主人公であるからどうかして誉め言葉を並べ立てたいところなのだが、残念なことに普段の彼を誉めるとすれば“誠実”あるいは“心優しい”ということ言葉ぐらいしか思い浮かばない、まあ善人ではあるがそれ以外に特徴のない平々凡々な男なのである。

しかし。

彼と一緒にいた少女シーラースノーフォールはそれとまったく正反対だった。

何一つ欠点のない年齢よりもやや大人びた美貌。隙のない凛とした姿勢で歩く姿は常に人々の羨望と憧憬の視線を集めている。

その性格を一言で表すことは難しいが、ティースに接する彼女は強気で高圧的な態度が非常に目立っていると言えるだろう。

そんないかにもミスマツチな二人は、これまでおよそ十六年弱の付き合いである。シーラの年齢が現在十五歳と十一ヶ月ほどであることを付け加えれば、彼らの関係の深さについてこれ以上言及する必要はないだろう。

しかしそんな彼らの関係も決して永遠のものではない。

「シーラ……」

「わかった？ わかったなら――」

姿を変え、形を変え、紆余曲折ありながらもこれまでどうにか続いてきた二人の関係は、この日、あまりにも一方的な絶交宣言によって終わりを告げたのである。

……のだとしたら、おそらくこの物語自体にとってもただ事ではないのだが、もちろんそんなことはなかった。

「なにボーっとしてるの。ほら、帰るわよ」

「へ？ でも……」

わけがわからないという顔のティースに、シーラは片手を腰に当てて呆れ顔をする。

「今の話は学園の中でのことよ。なににも普段からそうしろと言ってるわけじゃないわ」

「……あ、なあんだ」

鳴いた鴉がもう笑った、とでもいうのだろうか。ティースは照れたように笑いながら頭を掻いて、

「ビツクリさせないでくれよ。てっきり絶交されるぐらい怒らせちゃったのかと思ったじゃないか」

「……」

そんな彼の安堵した態度が気に入らなかったのだろうか、シーラは目を細め間髪入れずに言った。

「そうね。……その方が確実だったわね」

飴色の髪が不機嫌そうに夕日の中に躍る。

「え!?! うわわ、そんな! ま、待ってくれよ! シーラ!」

再び暗転。

と、まあ、しかし彼女が不機嫌になる理由もわからないではない。

——デビルバスター試験を一ヶ月後に控えたティースが、何故か彼女の通うサンタニア学園に護身術の特別講師として招かれることになったこの初日。

彼女にとってそのことが愉快であるか不愉快であるかということ語る以前に、彼女がその事実を知ったのは、偶然にも彼の授業を選択した彼女が授業を受けようとしたその瞬間であり、まずそこで秘密にされていて結果的に驚かされたということが気にくわない。それに加えて——やはり、彼が学園にやってくるということ自体も彼女にとっては決して歓迎すべきことではなかった。

「……」

「お、おおい、シーラ! 待ってってくれって!」

そして慌てて追いかけてくるティースを振り返ることもなく、シーラは不機嫌そうに沈みゆく夕日を見つめながらミューティレイクへの帰路を辿るのだった。

さて、そんなこんなで、まあいつもの調子の二人を少しだけ先回りしてみよう。

彼ら二人の帰る場所。

ネービス有数の大貴族ミューティレイク家。その一階玄関ホールには屋敷に似合わない質素な丸テーブル群が設置してある。

「――にしても」

そこに籍を置く弱冠十二歳の執事リディアⅡシュナイダーは夕日に焼ける窓の外に、屋敷へ向かって歩いてくるひよろつとした青年と美しい少女――“美女と野獣”ならぬ“美女と草食動物”の何ともアンバランスな組み合わせを見つけて、一割ほどの憐憫と二割ほどの好奇の入り交じるため息を漏らした。

残りの七割？ ……それはご想像にお任せするのでしょうか。

「偶然って意地悪だよね。まさかシーラさんがよりにもよってティースさんの授業を受けに来るだなんて」

パタン、と、彼女のトレードマークである分厚く難解な図書が質素な丸テーブルの上で乾いた音を立てる。

独り言かと思いきや、そうではない。

「ね、そう思わない、兄さん」

「ん？」

彼女の正面には後頭部で両手を組み天井を見上げる格好で座っている青年がいた。

リディアとまったく同じ濃い色の金髪を持つ青年――レインハルトⅡシュナイダーはそんな、九つほど歳の離れた妹の言葉に小さく笑みを浮かべて、

「偶然なんてもんは結局は必然の積み重ねさ。ことに男と女の出逢いに関してはな」

「いや、兄さんのナンパ論になんてこれっぽっちも興味ないよ」

レイは小さく肩をすくめると、

「淋しい発言だな。お前もそろそろ少しぐらい色気づいていい年頃だったのに」

リディアはまったく動じず即座に、

「兄さんのおかげで恋愛に幻想なんて抱けなくなったからね」

「ああ……いや、それはいいことだぞ」

似たもの兄妹と言うべきか否か。

夕日に照らされたミュージーティレイク別館、一階のホールには彼らと動き回っている使用人の他には誰もいない。ここに姿をよく見せる面々は大半が任務か何かで屋敷を出ているようだ。

と、そこへ玄關の扉がやや重々しい音を立てながら開く。

「よ、お二人さん」

入ってきたティースとシーラに対し、レイが早速声をかけた。

「初めての学園デートの感想はどうだ？ 相変わらず仲が良さそう
で羨ましい限りだ」

「……」

シーラは無言でチラツとレイを一瞥するなり、

「おかげさまで。学園生活上最悪の一日だったわ」

抑揚のない声でそう答えた。

もちろんレイの方もその不機嫌そうな返答を予想していたのだろう。苦笑しながら彼女の後ろからやってきたティースに視線を向けて、

「と、王女様は仰せだが？」

「……」

話を振られたティースは何も答えず”それ以上刺激しないでくれ”とも言わんばかりにレイを見つめた。

それ以上は会話もなく、そのまま立ち去っていく二人。

その後ろ姿を見送りながらリディアは小さく、

「――不機嫌だったね、シーラさん」

それに対し、レイは相変わらぬの飄々とした笑みで答える。

「ま、色々不都合があるんだろ。女ってのは元来隠し事の好きな生き物だからな」

「えー」

リディアは納得できない顔で、

「どっちかっていうと男の方が隠し事多いんじゃないの？ 浮気とかするのだって大抵は男の方じゃん」

「そりゃ違う。男の方が浮気してるように思えるのは、単にバレる確率が高いってだけのことさ」

「あー、そうなんだ。そっか。世の中、兄さんみたいに狡い男ばかりじゃないもんね」

「聞き捨てならんな、そりゃ」

それでも具体的な反論は口にせず。

夕日を手にしたグラスに落としながら、レイは楽しそうに口元を緩めて、

「なんにせよ、ティースのヤツにとっていい気分転換になればいいが、な」

「……とてもそうは思えないけど」

なんとも微妙な表情で首を傾げるリディアの意見は、彼らのことをそれなりに知る者としてはしごくもつともな意見であった。

サンタニア学園。

シーラの通うこの学園はネービスに住む、主に中流階層の人々にとっての上を目指すための登竜門的存在である。

ネービスに数多く存在する名門学園はそのほとんどが上流階層、いわゆる貴族や金持ちをターゲットとしたものであり能力以前の問題で入学拒否なんてことは日常茶飯事だが、このサンタニア学園だけは一般階層にも広くその門戸を開放しており、しかも様々な分野で数多くの成功者を出しているのだ。

ただそれだけに能力に関する敷居は非常に高い。

高難度の入学試験をパスし晴れて入学を果たした者のうち、最短の三年で卒業できるものはそのうちの五分に満たない。

五割は卒業できずに中途退学。

三割は卒業までに倍の六年以上を費やし。

一割五分は四年から五年で卒業する。

残った五分がストレート、つまり留年せずに三年で卒業していくことになるのである。

さて、そんなサンタニア学園の昼休み。

「でも意外だなあ、シーラさんがあの授業を取ってるなんて」

「そうかしら」

桃色の花びらが満開の並木道を歩く三人組の学徒たちの中に、昼食を終えて次の授業へと向かうシーラの姿があった。

午後の授業開始まであと十分ほど。ほとんどの学徒たちが昼食を終えて教室移動など次の授業の準備に取りかかっている時間であり、そこかしこに急いで、あるいはのんびりと授業道具を片手に並木道を歩いていく姿が見受けられる。

さて、ここはひとまず、シーラとともに歩いている二人の生徒に注目してみることにしよう。

「わかってないわねえ、オーウェン。この子ぐらいになると護身術の一つや二つ身につけてないと、すぐ通りすがりの悪党にさらわれちゃうんだから」

そう言った少女はディアナリリー。シーラと同じサンタニア学園薬草学科の四年目三回生の十六歳であり、彼女の学園における数少ない友人の一人だ。

やや丸みを帯びた顔立ちと短い髪を頭のとっぺんで結んだ特徴的なヘアスタイルが愛嬌のある少女である。

そしてもう一人。

「そうなの、シーラさん？」

「そんなはずないでしょ」

「あはは、そうだよね」

笑いながらそう言ったのは柔和で穏やかな表情の青年だ。

スラッとした長身、飾り気はないが清潔感のあるスマートな服装で、なかなかのハンサム。

そんな彼、オーウェン・トレビックはシーラたちと同じく薬草学科三回生の十七歳で、今年で三度目の三回生を迎える。

前述の通り、なかなか顔立ちの整った好青年なのだが、性格的にやや大人しいため印象としてはそれほど目立つタイプではないが、しかし。

そんな彼もこのサンタニア学園においてはちょっとした有名人であつた。

というのも、

「でもオーウェン、実際のところその辺どうなの？　こんな、ちょっと普通じゃない子の彼氏としては」

彼はシーラの恋人と噂される青年なのだ――噂される、などというはつきりしない表現になってしまったのは別に当人たちがそれを否定しているわけではなく、ただ周囲がそれを信じなかったり、あるいは認めなかったりするだけのことである。

「どう、ってなにがさ？　俺はシーラさんが美人なのは嬉しいし、別にケチを付ける気もないけど？」

「じゃなくて」

どこかとぼけたオーウェンの反応に、ディアナはやれやれと首を振って、

「やっかみとか何だとかで色々心配事もあるでしょ。そういう意味でどうなのよって話」

「どうなの、と言われても困るな」

オーウェンは言葉通り困ったような笑みを浮かべて、

「しょうがないと思うけど。だってシーラさん美人だし」

「……あんた、何かというとすぐそれね」

「でも事実だし」

ディアナはため息を吐いた。

「ま、あんたも結局は信者の一人だもんね。……その辺どうなって

るの、シーラ？」

「なに？」

話を聞いていたのか聞いていないのか——興味があったのかなかったのかと言うべきか——シーラの反応は何とも素っ気ないものだった。

再びディアナはため息を吐く。

「なに、じゃなくてさ……はあ。あんたたちってば、もう一年半も付き合ってるんでしょ？」

「一年と十ヶ月かな」

と、オーウェンが答える。

「でしよう？　なのになんて、あんたたちったらたまにお昼と一緒に食べるだけで手を繋いでるのすら見たことないんだから。友人としてはちゃんと上手くいってるのになんて気になるのは当然じゃない」

腰に手を当ててそう主張するディアナにシーラは苦笑しながら、

「あなたのは単なる野次馬根性でしょう？」

「う。そ、そんなことないわよお」

と、そこへオーウェンが笑いながら答える。

「付き合い始めるときに釘を刺されてるんだよ。ちよつとでも触れたら絶交だ、って」

「はあ？」

これにはディアナも眉をひそめて、

「……ちよつと本当なの、シーラ？」

「本当だと思う？」

そんなシーラのやや冗談っぽい口調にディアナは少し考えて、

「普通じゃ考えられないけどさあ……あんたってば二回生の頃、外傷薬の実地授業のとき——あー、なんていったかな、あのスケベそうな顔した先生」

「シェーマスⅡフランシス？」

「あ、そうそう、フランシス先生。今はもういないけどさ、確かそ

の授業のとき、あの先生に向かって『私に触れるなッ!』ってものつすごい怒鳴ったことあったじゃない?」

「あったかしらね、そんなこと」

とぼけたわけではない。素っ気ないのはただ興味がなかったただけだ。

「あったのよ。だからあんたってば実は男嫌いなんじゃないかって噂も一時期――」

と、まあ。

そんな思春期の少年少女に相應しい(?)恋愛話に花を咲かせていた三人だったが。

ふと。

「シーラ?」

ピタッ、と。

先頭を歩いていていたシーラが足を止めたのに合わせ、ディアナとオーウェンも同じように歩みを止める。

「どうしたの?」

「……」

シーラはそれには答えず、黙って視線を正面に向けていた。

……頭上の枝から落ちた桃色の花びらがひらひらと彼女の周囲を舞う。

すれ違う他学科の学徒たちはそんな彼女に、明らかに他のものとは異質な視線を向けた。

憧憬、軽蔑、羨望、敵意――強く、両極端な感情の数々。望むと望まざるとに関わらず、それらはいつでも彼女の周囲を覆い尽くしている。

それに対する彼女の視線はいつでも無関心で、その渦の中を彼女はいつも隙のない凜とした姿勢で歩いていた。……いや、そうでなかったならば、彼女が自ら引き寄せた潮流はとっくの昔に彼女自身をどこかへ押し流してしまっていたことだろう。

彼女はこの学園においてはいつでも完璧で、かつ鉄壁だった。

が、しかし、

「シーラさん？」

「いえ……」

小さく首を振って再び歩き出すシーラ。

このとき一瞬だけ浮かんだ困惑は彼女としては――あくまでこの学園内においては――非常に珍しい表情だった。

その理由をディアナとオーウェンの二人は理解できなかったようだが……彼女のことをもう少し良く知る者ならばおそらく理解できるだろう。

「あれ。……あ、先生――、こんにちは――」

何事かに気付いてディアナが張り上げた声。

向けられたその視線の先には、並木道を横切ろうとする一人の青年がいた。

「え？ あ……」

そのいかにも情けないというか頼りないシルエットを見間違うはずもなく。

タイミングがいいのか悪いのか。

彼女らの前にフラフラと出てきた青年は紛れもなくティースだった。

「こんにちは、ええっと……ディアナさん、だったっけ？」

そう言いながら足を止めたティース。

長身で細身、いかにも人の良さそうな童顔とどこか頼りなさそうな雰囲気が取っつきやすかったのか、ティースは初日から生徒にそれなりに受け入れられており、特にこのディアナとは帰り際にいくつか言葉を交わした間柄であった。

見知らぬ場所で多少とはいえ顔見知りの少女と出会い、ティースの顔は一瞬、笑顔を作ろうとする。

が、その直後、

「！」

その表情が一瞬で強張る。

……原因は、言うまでもなからう。

いつもより鋭さを増したシーラの視線が、彼をその空間に磔にしていたのである。

「あ、もう覚えてくれたんですか？ ……って、先生、どうしたんです？ 急にそっぽを向いちゃって」

「え、ええっと……」

「……」

ティースの額にうっすらと冷や汗が浮かんだ。

「そ、その、ほら、た、太陽が眩しいなあと思って――」

「はあ」

その言葉につられて空を見上げるディアナ。が、タイミングの悪いことに太陽はまばらな雲にちょうど隠れたところだった。

「太陽、出てませんけど？」

「え！？ あ、ははは、いや、そうじゃなくて、太陽っていうか青空、青空だよ、うん。空が眩しいなあって――」

「……馬鹿。もっと自然に……」

「ん？ シーラさん、今なにか言った？」

「……なんでもないわ。行きましたよ」

平然と受け流しながらシーラは歩き出した。隣のオーウェンもティースに軽く一礼してその後を追う。

が、ディアナは不思議そうな顔をして言った。

「え？ あ、ちよつとシーラ。どうせこれから先生の授業だもの一緒に行けばいいじゃない。……先生も教室に向かうところなんですよ？」

「え！？ ええっと……」

「……」

無言で振り返るシーラ。

それは彼女にとって明らかに好ましくないであろう提案であり、ティースの先ほどの狼狽ぶりを見せられてしまえば、彼女でなくともいつボロが出るかと不安になるのは当然だろう。

彼はとにかくにも嘘をつくことが苦手な男であり、シーラは当然にそのことを良く知っているのだから。

が、しかし。

「……ええ、それもそうね」

難色を示せば不自然でかえってボロが出そうな状況。

シーラはことさら無関心を装ってそう答えるしかないのだった。

そんな、こんなで。

（これはとんでもないことになったぞ……）

ティースは今、下着が背中に貼り付くほどの冷や汗をかきながら、針のむしろの上をそろりそろりと歩いているかのような気分を味わっていた。

「先生って普段はどんな仕事してるんですか？」

「え？ ええっと……」

昨日、話し掛けるどころか視線も向けるなど釘を刺された、その翌日。こうなったら出来るだけ近付かないようにしよう、などと決心したのが今朝の寝起きのこと。

しかし早くもその計画は打ち砕かれそうになっていた。

「……傭兵っぽい仕事、かな」

そんな彼はディアナの質問に回答するたび、チラチラと前を歩くシーラの様子を窺っていたが、幸いなことに今のところ失言はなさそうだった。

「傭兵ですか？ ええ、見えませんね」

オーウェンがちょっと驚いたような顔をする。

「そ、そうかい？」

ディアナが頷いて、

「うん、ぜんぜん見えない。先生ってなんか争い事とか向いてなさそう」

「はは……って、もしかして誉められてなかったりするのかな？」

「どうだろ？ あたしはそっちの方が好ましいと思いますけど……
ねえ、シーラ。あんたはどう思う？」

そんなディアナの振りに、ティースは恐る恐るシーラの方を見る。

「……」

一瞬の間。

だが、チラッとディアナを振り返った彼女の返答はティースが予測していたような恐ろしい(?)ものではなく、

「ええ、そうね。腕力を誇示して威嚇するだけが能の野蛮人よりはマシだと思うわ」

「だって。……先生良かったですね、学園一の美女のお墨付きがもらえて」

「……」

シーラの返答が素直に喜べるような誉め言葉だったかどうかはともかく、それとは別の意味でホッと胸をなで下ろしたティース。

(よかった……まだそんなに機嫌悪くなってないみたいだ)

ともかく彼女は自分とティースの関係について知られたくない、もっと広げていえばプライベートの話を学園の中に持ち込みたくない、と、こういうことらしい。

普通の人と比較すれば特殊な環境にいる彼女のことである。それはティースにも大いに理解できることだった。

(つまり他人を装っていればいいんだよな。……よおし、攻撃は最大の防御って言葉もあるし——)

と、なにやら妙な自信を持ったティースは(止せばいいのに)今度は自ら口を開いていくことにした。

「へえ、シーラさん、は学園一の美女なんだ。すごいんだね」

「……」

シーラがピクツと肩を揺らす。が、ひとまず反応はなし。

(よし。今のはいかにも初対面、って感じの反応だよな)

端から見れば少々こちない芝居がかった口調ではあったが、それでもまあディアナやオーウェンは特に疑問を抱かなかったらしく、

「何を今さら」

ディアナは笑いながら言った。

「先生だってさっきからチラチラとシーラのこと見てたくせに」

「え？」

「……」

ピク。

先ほどより大きく肩を揺らしたシーラに、ティースは少し慌てる。

「あ、い、いや、それは気のせいだよ。じゃなくて……あ、いや、

そ、そう。シ、シーラ、さんがあまりに美人なものだから、つい……

……あはははは」

「そんな焦らなくてもいいですよ、先生。この子の場合、いつものことなんですから」

「あ、そ、そうなんだ」

不幸中の幸いと言うべきか、ディアナはシーラを窺う彼の視線を別の意味で受け取っていたらしい。

と、同時に

（いつものこと、か……）

ティースは思わずシーラの後ろ姿を見つめてしまった。

もちろん彼も付き合いの長いこの少女が美人であることぐらい知っている。

怖いほどに整った顔立ち。金糸のような美しい髪。

小さい頃からの彼女を知っているティースは、他の男たちに比べればその魔力に対し強い“免疫”を持っているといえよう。が、そんな彼であってさえも改めて見つめてドキリとすることがある。

それほどに彼女は美しく。

特に最近はその傾向がほんの少しだけ顕著になっていて――

（う……）

折しも吹いた緩やかな春風に乗って、鼻孔をくすぐる香水とは違う甘い香りが漂ってくる。

脳髓の奥が微かに刺激されて映像がフラッシュバックした。

「……！」

反射的に口元を押さえる。

「？ 先生、気分でも？」

ディアナがそう尋ねたのも当然だ。

が、ティースの表情は青ざめるどころか逆に真っ赤になりつつあって、

（……ああああっ！）

ポカッ。

「いてっ」

「？ 先生？」

ディアナとオーウェンは一様に不思議そうな顔をして。

「……」

シーラの方はといえばその原因が自分にあるなどとは露知らず、また始まったと言わんばかりに呆れ顔をするだけだった。

さて。

それは、そんな一行が目的地である競技施設の十数メートル手前までやってきたときのことである。

「あら？ ……誰かと思えばシーラさんじゃありませんか？」

「？」

ティースの耳に聞こえたのは、やや幼さを残しながらもおっとりとして大人っぽい口調の少女の声。

そして、

「げ」

足を止め、真っ先に“非”歓迎の音を発したのはディアナである。

並木道の向こうからやってきたのは二人組の少女だ。

その片方、シーラたちに声をかけてきた方はこのサンタニア学園ではそれほど多く見掛けないお嬢様然とした巻き毛の少女。服装も明らかに他の学徒たちとは違っていておそらくは本当に良家の娘なのだろう。

「？」

この学園にやってきて二日目のティースにはもちろん見覚えがない。

(……シーラの友達かな?)

ニッコリと友好的な笑顔を浮かべる少女にティースは咄嗟にそんなことを考えたが、

「驚きました」

その少女はもう一人、同い年ぐらいの少女を引き連れるようにして彼らの目の前に立ち止まると、いったんチラッとティースを見た後、何事もなかったかのようにシーラへと視線を戻して、

「シーラさんのことですから、てっきり昨年度で卒業なさったものと思ってましたのに。やはり最終試験は運や偶然でどうにかなるものではないということでしょうか」

表面上はにこやかに。だが、薄皮一枚隔てた向こうに明らかな毒を秘めて。

(……友達じゃ、ないみたいだ)

この鈍感なティースですら気付けるのだからよっぽどである。

だが、シーラはそんなあからさまな嫌味に対しても淡々と答えた。

「ええ、残念ながら上手くいかなかったわ。努力が足りなかったのかしらね」

「そうですか。では、これからはもっと努力しなくてはいいけませんわね、色々」

「ええ、そうね」

巻き毛の少女はフツと鼻で笑って、それから再びティースへと視線を移動させる。

「あ……」

一応講師という立場上、何か挨拶でもしようかとティースが口を開きかけた、そのとき。

「……それで、こちらの何も考えてなさそうなみすばらしい男は何者です? いくら自由な校風とやらがウリのこの学園でも、部外者を勝手に入れるのは問題ではありませんの?」

「な、なにも考えてなさそうなみすばらしい男……?」

思わず自分の服装を見下ろしてしまうティース。

こういうとき怒りよりも先に自分の落ち度を探そうとしてしまう辺り、まったく彼らしい行動であるといえよう。

それからちよつと情けない顔をして、

「み、みすばらしいのかな、俺……」

そんな彼の独り言は完全に無視されたまま、ディアナが反論した。
「ちよつと! この人は部外者なんかじゃないわ! 特別講義の先生なんだから!」

「特別講義……? ああ、あの落第者のお遊び講義のこと?」

少女は再び再び鼻で笑って、

「なるほど、受けなくて正解でしたわ。そのいかにも主体性のなさそうな男を見るだけで内容などだいたい想像できてしまいますもの」

「なっ……先生に失礼じゃないの! 謝りなさいよ!」

ディアナが当事者たちを差し置いて真っ先に激昂する。

どうやら彼女はなかなか感情的な性格の持ち主らしい。

「何故?」

だが巻き毛の少女は対照的に冷静に受け流していた。

「私は思ったことを正直に口にしただけですもの。……失望しましたわ、シーラさん。いくら最終試験に落ちたからといって、今度は講義の先生を丸め込んでいい点数をもらおうだなんて……私だけは、シーラさんがそのようなことをする方ではないと信じてましたのに」
「む……むつかああああ! ちよつと! ちよつとシーラ!」
さらに顔を真っ赤にしたディアナは形勢不利を悟ったのか、今度はシーラに対して捲し立てる。

「悔しくないの! 悔しいでしょ!? ほら、なにか言い返してやってよ!」

(……いい子だなあ)

ティースはそんな彼女の態度を一步引いたところで眺めつつ。

(いい友達を持ったよ、シーラは。うん)

などと、自分のことが論戦の一端に上っていることなどすでに忘れて呑気に保護者気取りであった。

「あらあら、ディアナさん。そうやって顔を真っ赤にしていると、ますますお猿さんのように見えますわよ」

「む……むっきいいいいいっ!!」

と、そんな圧倒的に形勢不利な情勢の中。

「もう、やめなよ」

「……オーウェン」

二人の言い合いに口を挟んだのはオーウェンだった。

巻き毛の少女は彼とも顔見知りなのか、今度は僅かに躊躇ったような態度を見せながら、

「オーウェン。あなた、またその子の味方をするつもりですか?」

「当たり前じゃないか」

言葉通り何の躊躇いもなく答えるオーウェン。

「……」

少女は微かに表情を歪めて憎々しげにシーラを睨み付けたが、オーウェンはそんな彼女を宥めるように、

「シーラさんに色々悪い噂があることは俺だって知ってるよ。でも、それって全部根拠のない話だろ。俺はシーラさんがそんな人じゃないって思ってるし……」

「……悪い噂? なんだろ……」

もちろんこの学園に来たばかりのティースにはわからないことである。が、この巻き毛の少女の物言いといい、彼女の学園生活が決して順風満帆でないらしいことはティースにもかろうじて理解できた。

（もしかしてイジメとか受けてるのかなあ……）

と、やはり保護者チックなことを考えてしまうティースだった。そんな彼を余所にやり取りは続く。

「何を言ってますの? 根拠のない話でしたらこんなにも広がるはずありませんわ」

「でも、君だってその根拠ってのを知ってて言ってるわけじゃないんだろ？」

そんなオーウェンの言葉に少女は馬鹿馬鹿しいとばかりに肩をすくめて、

「それはそうです。私は探偵ではありませんし、そこまで労力を費やす気にもなりませんもの」

「だったら、そういうことを言うもんじゃ——」

「もう、いいわ」

「え……？」

ふわ……っと、小さく振った首の動きに合わせて美しいブロンドのポニーテイルが宙を躍る。

微かに漏れたため息。

シーラがオーウェンを手で制して前に出ると、巻き毛の少女の表情が身構えるように微かに強張った。

「いくら言い合ったところで何が本当かなんてどうせわからないことよ。そうでしょう？」

「え、でもシーラさん……」

「いいのよ」

そう言ったシーラの口元に浮かんだのは、魔力を秘めた、魔性の笑み。

「確かに私の身体はそれだけの力を持っているもの。この子の言うようなこともあるいは可能かもしれないわね。……ねえ？」

「っ……」

不敵にさえ思えるシーラの問いかけに、巻き毛の少女は気圧された様子だった。

だが、すぐに強気な口調を取り戻して、

「よくもまあ……臆面もなくそのようなことを。育ちが知れますわ」
シーラは即答する。

「あら、残念ね。負け惜しみにしか聞こえないわ」

「まっ……負け惜しみですって!？」

少女の頬が怒りで微かに上気する。……その様は、先ほどのディアナとのやり取りを逆さに見ているかのようだった。

「私の、どこがあなたに負けているというのです!」

怒りの言葉に応えたのは、薄い笑み。

「どこが、勝てると思っているの?」

「っ……!」

それはひどく屈辱的な言葉だ。

が、少女の口からはすぐに反論が出てこない。

……それもそのはず。このシーラ＝スノーフォールという人物には弱点らしい弱点が存在しないのだ。少なくとも周りの生徒たちはそれを一つとして知らない。

完璧で、かつミステリアス。

それがこの学園におけるの彼女の評価だった。

反論など、そう容易く思い浮かぶはずもない。

「ああ、それと」

じっくり二十秒ほど、少女の口から反論の言葉が出てこないのを見てシーラは思い出したように言った。

「もう知ってるようだけれど、私はシーラ。シーラ＝スノーフォールよ」

少女が怪訝な顔をする。

「……それは、どういう意味ですの?」

シーラは取り澄まして答えた。

「そろそろあなたの名前を覚えてもらえないかしら? ……見覚えはあるのだけれど、誰だったのかどうしても思い出せないの」

「~~~~~!」

さらに屈辱的な一言に、少女はついに顔を真っ赤にして地団駄を踏んだ。

「アリエル! アリエル＝リンプシャーよ!」

「……ああ」

思い当たった顔のシーラ。本当に知らなかったのか、あるいは演

技なのか……なんとも判断がつけにくい。

が、しかしどちらにしてもこの時点で勝負あったようだ。

(……容赦ないなあ)

そんな彼女たちのやり取りに、ティースはほんの少しだけ巻き毛の少女――アリエルに同情してしまった。

普段彼女の容赦ない“口撃”に晒されている彼ならではの、妙な親近感故の反応である。

カラン、カラン。

そこに鳴り響いたのは午後の授業開始を予告する鐘の音。

懸命に何か言い返そうとしていたアリエルも結局怒りのやり場を見つけれないまま、

「何をボサつとしているの!? 行きますわよ!」

「え、あ、はい……」

最後は後ろに引き連れていた一人の少女に怒鳴りつけて、そのまま腹立たしげにその場を立ち去っていったのだった。

(……うーん。やっぱ同年代の女の子でも特別なのかなあ、シーラは)

アリエルの後ろ姿を見送りながらそんなことを考えるティースの横で、

「……まったく! あの子ったらいつも突っかかってきて!」

憤懣やる方無いといった口調のディアナに、オーウェンは少し苦笑いで答える。

「アイツ、昔っから負けず嫌いだから……」

「そういう問題じゃないでしょ! ……って、でもそっか。あんた、結構前からあの子のこと知ってるんだっけ」

少し口調を和らげたディアナ。

「昔から性格のキツいところはあったな。でもあんな酷いこと言うヤツじゃなかったんだけど……」

「さ、行きましょう」

そんな二人の会話を背に、先ほどまでの出来事などまるで意に介

した様子もなく再び歩き出すシーラ。

「あ、待ってよ、シーラ。……もう、あんたも少しは怒るとかなんとかないの？　ほんつとにクールなんだから」

「あはは……」

オーウェンの苦笑いが、この光景が決して珍しいものではないことを如実に表していた。

だからこそ。

この後の展開に二人が同じ反応をしてしまったのも無理からぬことだろう。

「でも……ホツとしたな」

そう言ったのはディアナ。

「なにが？」

問い返したのはオーウェン。

アリエルの出現で少しピリピリしていた空気もすぐに消え、ディアナはさっきまでの怒りなど忘れたかのように和やかな表情になって、

「いや、ほら。あんた、すぐシーラの味方してくれたじゃない？

……それって当たり前のことなのかもしれないけど、この子ってば何かと敵が多いからさあ」

それから少しだけ冗談っぽい口調になって、言った。

「さすがはシーラの彼氏だなあ、って――」
と。

「え、シーラの彼氏……？」

そんなディアナの言葉に思わず呟いてしまったティースの明らかな“失言”は、幸いなことに誰の耳にも届いていなかった。

何故なら彼がそう呟いたとき、その場にいた誰もが彼と同様に驚いていたのだ。

……と言っても、もちろんディアナが口にした“オーウェン＝シーラの彼氏”という事に対して驚いたのはティースだけ。そんなことは当事者のオーウェンやシーラはもちろん、この学園では数多く

の人物が知っていることだ。

では、何に驚いたのか。

言うまでもなからう。

「ちょっ……」

ディアナの言葉の直後。

おそらく思考の入る余地もない反射に近い速度で発したシーラの言葉……その反応に対して、だ。

「ちよっと、ディアナ！ 余計なこと——」

「えっ……？」

ディアナがハツとした顔をする。同時にオーウェンもビクリした顔でシーラを見た。

それもそのはず。

その明らかに感情的な叫びは、おそらくこの学園の人々に言わせれば“彼女らしくないもの”であったから。

実際、彼女の言葉に起伏が見られたのはその一瞬だけのことで、

「……余計なこと、言わないで」

そこまで言い切ったとき、彼女の態度はもういつもの通りだったが、しかし。

「あ、う……うん」

「……」

半ば惚けたように返すディアナと驚いた顔のままのオーウェンを見れば、誤魔化しきれていないのは明白だった。

「……」

そんな二人の顔を見たシーラは微かな苛立ちと後悔の色を見せながら正面に向き直り、何事もなかったかのように歩き出す。

後ろで視線を交わし合うオーウェンとディアナ。

そしてティースはといえば、そんな三人の不自然なやり取りにはまったく気付かぬまま、

（……そ、そっか。この子がシーラの、恋人——）

今まで何度か話に聞いていたとはいえ。

突然目の前に現れた彼女の恋人の存在に、なんとも言えぬ気持ち
でしばらく呆然としていたのだった。

その2『人間模様は多角形』

“春だからね”

と、誰かがこういう言葉を耳にした場合、あなたはそのときの光景をどのように想像するだろうか。

ここで一組の仲のよい恋人たちを想像したとしよう。

今まさに花開かんとする麗らかな並木道を歩く二人。暖かな陽気と、耳に心地よい小鳥のさえずりと、肌をくすぐるそよ風の祝福。そんな仲睦まじい二人にはおそらく夢と希望に満ち溢れた未来が待っているのではなからうか。

……と、まあこんな感じであればこの上なく幸いであり、この幸せな情景を思い浮かべて吐き気を催す人間がいるとすればそれはかなりの性悪か往生際の悪い横恋慕者ぐらいのものであろう。

しかしながら。

「……春だからねえ」

心躍る麗らかな春の陽気の中、華やかなミューテイレイク邸の別館でリディアの視線の先にあった光景は、前述のように希望に満ち溢れた祝福すべきものとはあまりにかけ離れたものだった。

「――つまり、ティースさんの持つ細波を含め神具にはそれぞれ特徴があり、それを知り生かすことが戦いをより有利に――ティースさん？ ……ティースさん！」

「ほへ？」

鼻ちようちんが割れた音でも聞こえてきそうな、すつとぼけた反応のこの男。

我らがヒーロー、ティースサイト＝アマルナである。

「え。あ、アオイさん……？」

ミューテイレイク別館一階のホール。その丸テーブル群の一つに腰を下ろしたティースは縦長の背中をこれ以上ないほどに丸め、両肘をテーブルに立て、重ね合わせた手の甲に顎を乗せる形でボーッ

とあらぬ方向を見つめていた。

「ん……？」

ぼんやりとしていた焦点が徐々に合わさっていく。
たっぷりと五秒。

ティースはハッとするやうに姿勢を正して、

「え！ あ、ご、ごめん！ な、なんの話だったっけ！？」

「大丈夫ですか？」

そんなどうにも頼りない彼の正面に腰掛けるのは、眼鏡と優男風の外見が特徴的なミューティレイク家の執事、イングヴェイ||イグレシウス……通称アオイであった。

アオイは眉をひそめて心配そうに見つめると、

「慣れない仕事で疲れているのでは？ もし調子が悪いのでしたらマイルズ先生に診てもらって——」

「い、いや、そういうわけでもないんだ。ほら、その、春だからついついボーっとして」

慌てて言い訳するティース。それはもちろん口から出任せだったのだが、

「ああ！」

アオイは妙に納得顔で手をポンと打つ。

「それはよくわかります！ 実は私も今朝、陽気があまりに心地よくてついつい寝坊をしてしまいました」

「……いつもじゃん」

離れた席でそう突っ込むリディアの言葉は、どうやら二人の耳には届かなかったようだ。

ミューティレイクでは一番忙しい午前中の喧噪もある程度落ち着いて、ちよつとのんびりした空気が流れ始める午前十一時。この空気を味わおうと部屋から出てこのホールにやってくる人々も数多い。その中の一人、と言つていいのだろうか。

「おはよー……ティースくううん……」

このミューティレイク家が抱えるデビルバスター部隊ディバーナ・

ロウの第一隊隊長、アクアールビナートが間延びした声を発しながらその場に姿を現した。トレードマークのお団子頭の後ろに右手を当て、足取りはどことなく重苦しい。

「おはよう、アクアさん。今、起きたんですか？」

そう問いかけたティースに、アクアは一度、二度と頭を振って、

「んー、昨日はちょっと飲み過ぎちゃってえ……ああ、頭痛い。まだ朝御飯残ってるかなあ……。じゃ、またあとでねええええ……」

そう答えるや否や、やはりフラフラとした千鳥足で立ち去っていく。

「……」

ティースはアオイと無言で顔を見合わせながらそんな彼女を見送ったのだが、その後すぐ入れ替わるようにして、

「おい、ティース」

「ん？」

「紅茶二人分、持ってきてやったぜ」

彼らの前に姿を現したのは、トレイにティーカップを二つ乗せた褐色の肌を持つパーラー・メイドの少女、ダリアⅡキャロルだった。

「あ、サンキュ、ダリア」

「仕事だからな」

と、ダリアはそんなぶっきらぼうな口調からは意外に思えるほど丁寧な仕草で紅茶をテーブルに配していく。中身がいくら竹を割ったような性格の彼女だとはいえ、接客用の制服を着ている以上は曲がりなりにもプロだということか。

「ところで、今フラフラ歩いてったのアクア姉か？」

ティースは入れ立てのティーカップに手を伸ばしながら、

「ああ。なんか飲みすぎたって言ってたけど、またレイさんと飲んだのかい？ ……あちいっ!!」

「さあ、あたしは知らないけど。つか、気をつけろよ。……ほい、アオイさん」

「あ、すいません」

二つの紅茶を配し終えたダリアは空のトレイを器用にクルクル回しながら、

「最近はお得意の失恋話も聞かされてないしな。いつものヤケ酒ってわけでもないと思うが、どうだかね」

「はは……」

笑っていいものかどうか、と、噛みつぶしたように苦笑するティース。

アオイが横から口を挟む。

「昨日は外へ飲みに行ったようですよ。誰が一緒だったかはわかりませんが」

「あれ、珍しいなあ。アクアさん、いつもここで飲むのに」

意外そうなティースに、ダリアは悪戯っぽい口調になって、

「よくわからんけど気を付けろよ。あと三ヶ月で二十五歳。アレも相当焦ってるみたいだし、油断していると突然牙剥いて襲いかかってくるかもしれないぞ」

「はは、まさか。……でも、アクアさんならそんなに焦らなくたって大丈夫だと思うんだけどなあ。美人だし、すごくいい人だし」

そんなティースのフォローもダリアは一笑に付して、

「それなのに今まで独り身だって事実の方に注目すべきだと思うがな、あたしは。……ま、どうでもいいか、んなこと」

どうでもいいで済まされたことを彼女が知ればまた拗ねてしまいそうだが、周囲を見回す限りその心配はなさそうである。

ダリアが話題を変えた。

「そーいやお前、護身術教えに行ってるんだってな？」

「ん。あ、ああ……一応、ね」

「一応、か」

素直なティースの反応にダリアは笑う。が、そのことについては特に言及せず、

「それで、どんな感じなんだ？　ってか、大丈夫なのかよ、お前」

「え？　なにが？」

「ほら、お前の例の病気さ。教える相手も男ばっかじゃないんだろ？ 護身術ってことは実技指導もしなきゃならないんじゃないのか？」

「あ、ああ……」

その言葉を聞いた途端、ティースの表情が憂鬱に曇っていく。

例の病気とは、彼の持つ持病——女性アレルギーのことである。妙齢の女性に触れると気が遠くなってしまう、というその特異体質を思えば、彼が護身術を教えることに疑問が生じたのも至極当然のことであろう。

ティースは答える。

「今はまだ、ね。昨日と一昨日は実技やらなかったから」

「今日は？」

「一応、対策は考えてあるよ」

「そっか」

そんな彼に、ダリアは少し視線を横に流しながら、

「できれば助けてやりたいんだけどさ。あたしらも明後日から任務だからそういうわけにもいかなくてな」

「え？ あ、ああ、いや、いいよ、そんな。ダリアは俺なんかよりよっぽど忙しいんだろうし」

彼女からの思わぬ言葉にティースは慌ててそう答えながら微笑みを浮かべると、

「でも、そう言ってくれるのは嬉しいよ。ありがとう、ダリア」

「え？ ああ……いや」

ダリアは少し戸惑ったように視線を泳がせて、

「……ま、助けが必要な理由も情けないしな」

「う……た、確かにそうだけど、そんなはつきり言わなくても——」
ブツブツと不満げなティースに、ダリアはふっ……と頬を緩めると、

「ま、しっかりやれよっ！」

バンッ！

「いでっ!!」

ティースが悲鳴を挙げると、ダリアは口元に軽く笑みを浮かべ、そのまま踵を返して去って行ってしまった。

「いてて……な、なんで叩かれ……?」

顔をしかめながら恨めしそうに呟くティース。どうやら本気で痛かったようだ。

アオイが笑いながら、

「おそらく、照れくさかったのではないですか?」

「照れくさい?」

「ええ。……さあ、それはともかく。先ほどの続きをやるのでしょうか」

「え、あ、ああ——ん?」

よくわからないまま頷きかけたところに。

「ティースさーん」

立て続けにやってきた三人目の来訪者。

「お、セシル?」

ティースが振り返った先では、ちょうど外から戻ってきたらしい栗色の髪の少女——“屋敷の（番犬たちの）アイドル”セシリアⅡレイルーンが玄関から手を振っていた。

「あれ、学校はどうしたんだ? 今日には早すぎないか?」

まだ午前だ。シーラと同じサンタニア学園薬草学科の一回生である彼女が帰ってくるにはいくらなんでも早すぎる。

「今日は午前の実習が早く終わったのでー! いったん帰ってきてしまったのでーす!」

元気の良い返事。

「あ、なるほど」

と、ティースが納得するかしないかのうちに、外からは聞き慣れた犬の大合唱が聞こえてきた。

「あ、みんな、いま行くから待ってー。……あ、じゃあティースさん、私、マルスたちと外で遊んできますのでー!」

「あ、ああ、気を付けてなー」

結局何のために中に戻ってきたのか、セシルはブンブンと音が聞こえそうなほど大きく手を振ると、長めのスカートを軽くなびかせて、アツという間に外へと出ていってしまうのだった。

「……元気だなあ」

ポツリと呟いたティースの言葉にアオイも頷いて、

「ですね。番犬のアイドルだなんて言われますけど、彼女にはむしろ人間の方がファンが多いかもしれません」

「はは、確かに。あの子なら学園でも人気者なんだろうなあ」

そんな彼女の話題で頬を緩めるこの二人にも、充分にファンの資格はあると思われる。

同時に紅茶を口に運ぶ二人。

少々の沈黙。

ポツリ、と。

「学園でも人気者、かあ……」

「？ ええ、セシルならきつとそうだと思いますよ。……さて」

ティースの呟きにアオイは何気なくそう答えて、

「それでは続きをやりましょうか」

と、気を入れ直した。

が、

「そりゃ……そうだよなあ」

「ティースさん？」

物憂げなため息が落ちる。

続いたのは、呆然とした独り言。

「あいつのことだからきつと大丈夫……いやいや待てよ、頭のいい女ほど変な男に引っかかりやすいって誰か言ってたような……うーん……うーん……」

「……」

再びあらぬ方向を見つめてブツブツ呟き始めたティースに、アオイは訝しげな顔で困ったように首をかしげる。

もちろん彼にティースの眩きの本当の意味などわかるはずもなく。

「……」

と、遠くでそんな二人を眺めていたりディアはやがて軽く肩を竦め、もう一度独り言を呟くのだった。

「……春だから、ねえ」

「春だつてのに、ねえ」

場面は変わって、ここはサンタニア学園薬草学科の実習室である。部屋に入った途端に顔をしかめてしまう強烈なカビのような匂いはこの授業で使っている薬草から発するものだろうか。

「なに、ディアナ？」

友人の呟きに、白い頭巾とマスクを装着したシーラはそう聞き返した。

頭巾は髪の毛の混入を防ぐためのもので全員が身につけているものだが、マスクは彼女のオリジナル装備で、おそらくはこの悪臭から少しでも逃れるためのものだろう。室内でそれを装備しているのはどうやら彼女だけらしい。

「いやさ。世間は麗らかな春の陽気だつてのに、あたしはどうしてこんな薄暗い実習室でこんな悪臭にまみれてなきやならないのかな、と思って」

そう言いながらディアナは彼女のマスクを少し恨めしそうに見やっ

って、
「あんたってば、ホント準備いいわねえ。あたしだって今日の実習がこんなもんだと知ってればちゃんと用意してきたのにさ」

「あら。先生はちゃんとヴェルフェールの花を使った調査実習だと言ってたわ」

平気な顔でそう答えたシーラに、ディアナは不満そうに頬を膨らませて、

「そんなマイナーな原料を知ってるのはあんたぐらいのものよ。去年の実習でだって一度も使わなかったんだから」

「苦みが強くて敬遠されがちだけれど、内服鎮痛剤としての効果が非常に優秀な原料よ。手に入りにくいから、一般に市販される薬には適さないけれども」

「つまり、フツ一の薬屋目指してるあたしには必要ないってことね」
「でも、知っておいて損はないわ」

会話を続けながらシーラは小鉢の中ですりつぶした紫色の花に、あらかじめ用意してあった黄色の粉末と少量の水を加え、軽くかき混ぜて火にかけた。

ディアナはそんな彼女の手際よく手慣れた動きに首をかしげながら、

「あんたの手際っていつつも見事ねえ。まるで何度も調合したことがあるみたい」

「ええ、あるわ」

「……あんたって」

ディアナは半ば感心し半ば呆れたようにしながら、

「ホント、三年連続学科トップの頭脳は伊達じゃないわねえ」

「あら。あなただって何度も学費の免除を受けているじゃないの」
机の上を片づけながらシーラはそう言った。

学費の半額免除はこの学園の全学科において実施されている措置で、定期試験ごとに上位三名の生徒にのみ与えられる特権だ。学費の免除を受けている（受けたことがある）というのは、少なくとも学科内でトップ三を争えるだけの優等生ということであり、それはつまりこのディアナという少女が一見した印象に似合わぬ好成績の持ち主だということでもある。

だが、ディアナは小さく首を振って、

「どっちかというと学費の免除より素敵な出逢いが欲しい十六歳と九ヶ月の春。……あーあ、あたしにもあんたみたいな絶世の美貌があればなあ」

「あれば？」

「もちろん。それを生かして素敵な彼をゲットするのよ」
シーラは流し目でそんな彼女を見やって、

「素敵な彼って、誰のこと？」

「……」

視線が右、左、もう一度右へ。

空白の時間はたっぷり十秒ほどあっただろうか。

「……そう言われると急には思い浮かばないけどさあ」

「そんなものよ」

と、視線を手元の小鉢へと移動させる。

火にかけて薄紫の液体はコポコポと音を立て始めていた。

「おとぎ話みたいな素敵な彼より、将来を保証してくれる男を探した方がいいと思うわ」

「あんたって……でもほら、素敵な彼でかつ将来を保証してくれる甲斐性があればいいわけじゃないかい？」

「妄想と現実が違うのよ、ディアナ」

あくまで冷めた物言い。その言葉を聞くと、なるほど、確かに彼女は恋愛に興味がなさそうに聞こえる。

もちろんその目の前にいるディアナもそう感じていて、それでもなお反論するのだ。

「あ、ひどい言い方。素敵な彼って言ったって、別におとぎ話の王子様を想像してるわけじゃないんだから。そうね、たとえば――」
コポコポコポ。

火傷をしないようやや厚めの布を両手に持ち、シーラは小鉢に手を伸ばした。

「たとえば、ほら、あの、護身術の先生みたいな」

「……」

コポコポコポコポ。

「？」

コポコポコポコポコポコポ。

薄紫のドロツとした液体が振動を速くする。

「どしたの、シーラ？」

ディアナの問いかけに、ようやく彼女の長い睫毛が微かに動く。

「素敵な彼？ ……あの男が？」

「え。いや、たとえばの話で、そんな、ものっすごい驚いたような顔しなくても——って、シーラ！ 小鉢、小鉢！」

「え……あ、ああ。そうね」

コポツ……

沸騰寸前までいった薄紫の液体だったが、ディアナの指摘のおかげでどうにか爆発を免れたようだ。

火から下ろし、軽くかき混ぜて黄色の粉末が溶け残ってないことを確認すると、小さな団扇を手にとって今度は冷まし始める。

パタパタ、パタパタ、と。

「危ないなあ。急にボーっとしちゃって、あんたらしくもない」

一瞬、空白。

「あなたの趣味の悪さに、ちょっと、ね」

「え、そうかな？ だってなんか可愛いじゃない、あの先生。緊張してるのがバレバレでさ。きつとすごく純粋な人なんだと思うなあ」
「単に度胸がないだけじゃないの？」

「いやでも、ほら、ものすごく優しそうじゃない」

「そうかしら。それ以上に優柔不断そうだけど」

「一見頼りなさそうなのに護身術の先生っていうギャップもいいよね。なんかこう、ちよつとだけ謎めいているっていうか——」

「見たままの男よ、きつと」

「……」

ここまで来て、ディアナはようやく怪訝な顔で上目遣いに彼女を窺うと、

「あんたって……もしかしてあの先生嫌い？」

パタパタパタパタ……

「嫌いになるほど知らないわ。私はただ、感じたことを口にしたま

でよ」

「むうう……まああんたの言うこともわからないではないけどさあ」
ディアナはどうにも納得できない顔だ。が、もちろん、シーラと
ティースが実は知り合いだななどというところまで推理が及ぶはずも
なく。

「でもでも、ほら、なんかあの先生って、外見よりも中身を見てく
れそうな感じしない？　なんていうか、いわゆる性格美人のあたし
としてはそっちの方が勝算が――……って、シーラ？」

「そうね」

ほんの一瞬だけ動きを止めたシーラは短くそう答えた。

「そうかもしれないわね」

初めての肯定の言葉は今まで以上に素っ気なく。右手がそつと髪
飾りを撫でる。

表情には別段の変化もなく。

そして次に口をついた言葉も、彼女らしい冷静な指摘の言葉だっ
た。

「ディアナ。……その葉、そろそろ仕上げないと減点になるんじゃない？」

「え？　あ！」

ハツとするディアナ。

話に夢中で彼女の手は数分前から止まったままだったようだ。

「ああああ――っ！　あと五分しかないじゃないッ！」

彼女の調査はまだ小鉢を火に掛けるところまでも進んでいない。
間に合うかどうか、とてつもなく微妙な判断となりそうな情勢だ。

「だから、そう言ってるじゃないの」

「シーラ、言うの遅い！　今年こそ卒業しなきゃなのに――！」

もちろんそんなことで文句を言われる筋合いはないわけだが、シ
ーラは特に何も言わず呆れたように肩をすくめるのだった。

そうして授業も終わって昼休み。

「シーラさん！」

教室を出たシーラたちにタイミング良く駆け寄ってきたオーウェンは開口一番、

「今日の昼はどうする？　もし決まってなければ、クッションで今日から新作を売り始めるらしいから、ちょっと行ってみない？」

「え、ホント！？」

隣のディアナが敏感な反応を示す。

ここネービスの学園群では昼時になると、学園の許可を受けたいくつかの店が校門の前で露店を開くのだが、“クッション”はこのサントニア学園の前で商売をしている人気ナンバーワンのパン屋である。

その新作ともなれば、初日は売り切れ必死なのだ。

「行こう行こう！　シーラ！　ほら、早く行かないと売り切れちゃう！」

ディアナは目を輝かせてシーラの袖を引っ張ったが、

「私は――」

「……って、そっか。あんたって昼はいつも手作りだっけ」

と、ディアナは思い出して呟く。

その言葉通りシーラの手には、どうやらサンドイッチらしい小さなバスケットがあった。

オーウェンも思いだしたように、

「そういえばそうだっけ。いつも作ってきてるんだよね、確か」

「残念だけど、私が作ったわけじゃないわ」

「お母さん？」

「小人さんよ」

と、シーラは答えた。

彼女がプライベートなことを極力口にしないのはいつものことなので、ディアナもオーウェンもただ苦笑するだけだったが、もしその言葉を彼らではなくティースが耳にしていたとしたら、おそらく彼らとは別の意味で苦笑していたことだろう。

なにしろそのサンドイッチは、確かに小人と言っておかしくない

ほどに小柄な少女、エルレーンⅡファビアスの作品だっただから。

ひとまず三人は露店のある校門前に向かって歩き出す。

外は心地よい陽気だ。先に歩き出したディアナ。シーラの動きを確認しながらゆっくりと歩いていくオーウェン。敷地内の芝生は早くも陣取った生徒たちの楽しそうな声で溢れている。

こういった光景は当たり前のようにも思えるが、実は庶民が多く通うこのサンタニア学園ならではのものだ。貴族子女が多く通う他の学園では芝生の上に直に座って昼食を摂るなどということはとても考えられず、屋外で昼食を摂る場合にも必ずテーブルに着く。ここサンタニアでも同じような屋外テーブルがいくつか設置されているが、他の学園に比べ需要はそれほど多くない。

とはいえ、

「あら、シーラさんではありませんか」

もちろん生徒たちの中にはそういった、いわゆる庶民的な雰囲気にも馴染めないグループもいて。まるで計ったかのようにバツタリと遭遇したアリエルⅡリンプシャーもその中の一人だろう。

「げ。また出た……」

先頭で足を止めたディアナが嫌そうな顔でシーラたちを振り返る。「ごきげんよう。これからランチですよ？」

アリエルはいつものように同年ぐらいの少女を一人引き連れ、見た目から良家の出とわかる上質な洋服に身を包み、頬には優雅な笑みを刻みながら、瞳の奥に微かな敵愾心を秘めてそう言った。

対するシーラはいつものように平然と返す。

「アリエルⅡリンプシャーね。私に何か用？」

「名前を思い出していただけたようでは何よりですわ」

先日の屈辱を思い出したのか、アリエルはやや口元を引きつらせ、地毛なのかあるいは付け毛なのか、妙にボリュームのある巻き毛を微かに揺らしながらさらに威圧的な視線をシーラに向けた。

だが、もちろんそんなことで彼女がたじろぐはずもない。

ゆっくりと瞬きして、

「それで？」

「っ……」

少しの揺らぎもなく真っ直ぐ向けられた視線に、逆にアリエルが少々たじろいだように見えたが、そこは彼女もすぐに持ち直して、
「今日はあなたに用があるわけではありませんわ」

そう言っ、シーラの隣で成り行きを見守るオーウェンへと視線を向けた。

「？ 俺に？」

「ええ、オーウェン」

シーラに向けるものよりは若干柔らかい口調でアリエルは言った。
「今日は少しお話したいことがありますの。せっかくだすから、お昼でもご一緒してくださらない？」

「話？ 話だったら別にここでも――」

「ここでは少し……」

そう言っアリエルはチラッとシーラを見た。盗み見るというよりも、意味ありげな視線をわざと見せつけているといった様子だ。

と、そこへ、

「ちよつとアリエル！」

ディアナが敵対心剥き出しの口調で口を挟んだ。

「そんなこと言っ、どうせまたあることないこと、シーラの悪口を吹き込むつもりなんでしょ！ そうはいかないんだから！」

「……」

アリエルは一瞬だけディアナに視線を送ったが、すぐにオーウェンへと戻して、

「どう？ オーウェン」

「ちよつ、ちよつと！ 無視しないでよッ！」

ため息。

「相変わらずキィキィとうるさい方ですわね、ディアナさんは」

「むきーッ！ ちよつとシーラ！ あんたも何か言っやってよッー！！」

やはり彼女とディアナでは少々分が悪いようである。

シーラは小さく首を振って、

「今のはあなたが悪いわ、ディアナ。彼女はただオーウェンを昼食に誘いたいだけだし、札を失してもないわ。……ねえ、アリエル？」
微笑みながら流し目をアリエルに向ける。

「も、もちろんですわ。他人にどうこう言われる筋合いはありません」

「わかったよ、アリエル」

と、そんな彼女らのやり取りがまた陰悪になることを恐れたのだろう、オーウェンはゆっくり頷いて言った。

「俺も君に色々話したいことがあったんだ。ありがたくお誘いを受けることにする」

と、そんなオーウェンの返事に。

「それが賢明ですわ、オーウェン」

意外なほどにアリエルの表情がサツと明るくなった。

「そ、それに今日はあなたの分のランチも用意してますの。あなたの好みが昔から変わってなければ良いのですけれど……と、とにかく、善は急げといいますわ。さ、行きましょう」

忙しなくそこまで言い切って、傍らにいた取り巻きの少女に向かって言った。

「コートニー。あなた、今日は余所でランチにしてくださいさる？ 用があればまた後で呼びますわ」

「はい」

連れの少女の返事を確認することももどかしく、アリエルはオーウェンの手を取ると、

「行きましょ、オーウェン」

弾んだ声と屈託のない笑顔は、シーラに向けているものとはまるで別人。

彼らが以前からの知り合いであることはシーラも聞いている。その詳しい関係まで立ち入ったことはないが、この様子を見る限りそ

れなりに親しい間柄だったのだろう。

いや、あるいは――

「……」

シーラは僅かに目を細めアリエルの背中を見つめる。その瞳に、この学園では滅多に見せない微かな揺らぎが走ったが、その場にいる誰一人としてそれには気付かなかった。

「――あー、なんか、スツキリしない！」

アリエルたちと別れた後。

予定通り校門前の露店パン屋“クッション”に向かってみたものの、お目当ての新作は売り切れた後で。

とはいえ。

ディアナがスツキリしなかったのはそれが原因ではない。

「あの子、今頃絶対あんたの悪口言ってるんだから！」

先ほどのアリエルとのやり取りが何とも腹に据えかねていたためである。

「……」

シーラはちょうど空いていたベンチに腰掛け、バスケットを太股の上に乗せる。風に泳いだ金糸の前髪を指先で軽く梳かし、僅か上空に向けた視線。

「なんなのかしら、あの子！ 今度はオーウェンを使って嫌がらせ！？ あんな見え見えの芝居がかった笑顔なんか浮かべちゃって！」

「……そうじゃないわ、きつと」

シーラは小さくそう呟いたが、ディアナの耳には届かなかったらしい。

「そりゃオーウェンのことだから真に受けたりすることはないと思うけどさあ。きつと今頃、あることないこと力説してるに決まっている！」

「……」

さあつと春風が吹く。

「構わないわ。……誰に言われずとも、自分がどれだけ性の悪い女であるかは私が一番良くわかっていているもの」

「またそんなこと言って……」

ディアナの口調はやや勢いを弱めたが、その代わりに口を尖らせ、本音を見透かそうとするかのように彼女を見た。

「あんたは自分でそうやって言うけど、でも少なくともあたしは、あんたが面白半分で男を誘惑したり騙したりするのを一度も見たとないよ。勝手に玉碎していくのは何度も見ただけ」

「……」

何も答えないシーラ。

ディアナは躊躇いながら視線を流した。

少しだけ自信なさげに。

「それどころかたまに……あんたってもしかすると、自分のそういう顔があんま好きじゃないのかなあって思うことある」

シーラはサンドイッチに伸ばそうとしていた手を止めた。

そしてディアナを見る。

「何故？」

「いや、ほら……さっきだってあたしが護身術の先生のこと、外見より中身を——なんて言ったときも、考え込むような顔してたし……」

「……そうかしら」

若干意表を突かれたようだった。それが身に覚えのないことだったからか、あるいはそこまで観察されていたことが意外だったのか、その態度からは判断できない。

「って、んなわけないか」

ディアナはそう言って誤魔化すように笑った。

「きつとあたしの気のせいよね。……っていうか、そんな贅沢な悩み、同じ女としてちよっと許せない」

「……」

シーラは黙って苦笑した。

その後はアリエルやオーウェンの話題からも離れ、新作パンの形態予想から午前中に行われた授業の話と辿って、午後の授業の話題へと移っていく。

「今日から実技演習だって言ってたよね、そういや」

と、ディアナが話題にしたのは午後の一番手に控える護身術の授業であった。

「そうらしいわね」

答えたシーラの口にサンドイッチの最後の欠片が消えていく。二切れのサンドイッチを平らげるのにかかった時間は約二十分。ディアナと会話しつつ、どうやら絶品らしいサンドイッチの味を十分に味わいながら食べたにしても遅い。

なんでもてきぱきこなす彼女にしては、と言うべきか。あるいは現実離れした気品ある容貌の彼女らしい、と言うべきか。

「どんなことやるのかちよつと楽しみだわあ。……手取り足取り教えてもらいうちに恋が芽生えちゃったらどうしよう」

バスケットの蓋を閉じながら、シーラは一言、

「有り得ないわね」

「即答!?! 夢がないなあ、もう」

「夢見るほど素敵なこととも思えないわ」

ディアナは不満そうに口を尖らせたが、シーラの言った“有り得ない”は、恋が芽生える云々の部分ではなく、もちろん“手取り足取り”の部分である。

（そうよね。あいつ、触れないのよね……）

太股の上のバスケットに右手を置き、風で僅かに乱れたスカート裾を直しながら、シーラの視線は中空を見上げた。

（どうするつもりなのかしら……?）

護身術の生徒十四名中六名の女生徒、その中でティースが触れることのできる生徒はシーラただ一人だ。他の五名であれば、触れた途端に気を失ってしまうことだろう。

もちろん触れずとも口頭で指導することも可能ではある。歳も近

く若い講師だけに、下手にベタベタ触れば逆に変な目で見られかねず、そういう点でいうと心配はないわけだが……たとえばコツが掴めない生徒などに対しては、直接の指導が必要になる場面も出てこよう。

(……私をアテにしてるって可能性もあるか)

可能性はなきにしもあらず。事前にそのような話は一切聞いていないが、あのティースのことだ。今回の一件で機嫌を悪くしていた彼女に対し、最後まで言い出せずにいたということも有り得なくはない。

「そろそろ時間だわ、ディアナ」

ベンチから腰を上げ、歩き出す。

——もしもそうだとしたら。

思考は巡る。

関係がバレかねない行動は極力避けたい。しかし——

(まさか生徒の面前で気絶させるわけにもいかないものね……)

ため息。

仕方ない、と。

小さく首を振って再び視線を正面に向けた、そのときだった。

(……え?)

次の授業の教室となる屋内競技施設まで真っ直ぐに続く並木道。

そのずっと奥、距離にして百メートル以上先。

そこに、見覚えのある特徴的な後ろ姿が見えた。

「? どうしたの?」

シーラの歩調が変わったことに気付いたディアナが怪訝そうな顔をしたが、

(……なるほどね)

「いえ、なんでもないわ」

シーラはただそう答え、納得して歩調を元に戻した。
ふわりと金色の髪が宙に舞う。

(私の出番はなさそうね……でも)

視線のずっと先、見覚えのある後ろ姿は一足先に屋内競技施設へ入っていったようだった。

胸を過ぎる一抹の不安。

(……ちゃんと上手くやれるのかしら、あの二人……)

「えっと、えー、つまり何度も言うように護身術というものは一般的な武術と違って戦うための技術ではありません」

「……」

「……」

「……」

「えっと……」

世の中には人の視線を気にする人間と全く気にしない人間の二種類がいる。視線を気にするグループはさらに、他人の視線が集まることに喜びを感じるグループと、逆にたじろいでしまうグループに分けられる。

では現在、サンタニア学園の一角で教鞭をとっているティースは一体どこに分類されるのだろうか。

おそらく、考えるまでもない。

「……あー、えー、そのー……」

手元を見たり視線を宙に彷徨わせたり。忙しない動きを繰り返し、どもりながらもかろうじて講師としての体裁を保ちつつ授業を進めていく。

そんな彼がここで教鞭を取り始めて今日が三日目だ。

その生徒は総勢十四名だが、今日は男子が一人姿を見せていないために、男子七名、女子六名の十三名で、このサンタニア学園の男女比率から考えると女生徒の割合はかなり多い。

「つ、つまり護身術の基本は、えー、まず第一に危険を事前に回避することであります。その、まず危険な場所を歩かない、あと、え

つと……日が落ちてからは外を出歩かない、など――」

彼の授業は実を言うところ好評だ。

生徒たちにとっては歳が近くて親しみやすいということもあるし、授業の題材がこの学園の生徒たちにとっては新鮮味があつて面白いということもある。また、このティースという男のイメージと護身術という内容のミスマッチが多少なりとも興味をそそる原因になつてもいよう。

と、まあそんなこんなで。

今日も生徒たちは当初から興味津々だったのだが――

「それでも、えー、なお、身に危険が及んだ場合には、身近なものを使って撃退することになります」

しかし。

よくよく彼らの様子を観察してみると、どうも今日に限っては昨日までと雰囲気異なっている。

少々騒がしい。といつても授業に支障が出るほど騒いでいるというわけではなく、そこかしこで何やらひそひそ話が聞こえてくる程度のものだが、明らかに前日までより私語が多い。

今日から始まるという実技演習にワクワクしているのかと思えば、どうやらそんな風でもなく、

「……ねえ……かしら、あの……」

「たぶん……の……じゃない……?」

「……にしても……すごい……」

「いったい……と……だろ……」

そんな彼らの視線が向けられている先は、もちろん教壇に立つティース――いや。

さらによくよく観察してみると、若干ではあるが違う。いかにも興味津々といった生徒たちの視線が注がれているのは、彼ではなかった。

「というわけで、昨日も言ったとおり今日は実際にやってみることにしましょう」

生徒たちの間にざわめきが走る。その視線が向けられた先はティースの右斜め後ろ、約六十センチの場所。

昨日、一昨日と誰もいなかったはずのその場所に、今日は人が立っていた。それだけで“何のために？”という興味が沸き上がって当然のことと思うが、生徒たちが注目したのはそれだけが理由ではない。

そこに立っている人物が、否応なしに一目を引く外見をしていたからだ。

「えっと……それじゃあその前に、今日からの実技演習を手伝ってくれる人を紹介します」

ティースの言葉に従い、柔らかい歩調で一步前に踏み出した女性。聖女を思わせる飾り気のない淡色の衣装、そのイメージをまったく損なうことのない容姿、長い黒髪、淑やかな物腰。

そしてなにより――その身長。

女性がゆっくりと口を開く。

「――リィナークライストです」

生徒たちの間には再びざわめきが波のように走った。

あくまで柔らかく、優しげな声。イメージ通りとも言えるし、その長身からすれば思った以上に可愛らしいと言うこともできるだろう。

リィナはゆっくりと生徒を見回し、そのうちの一点で止まった。

「……」

そこにいた顔見知りの美少女と一瞬だけ視線を交わし、頬に微かな笑みを刻んで再び動き出す。

そして彼女――その容貌に似合わず、おそらくこの場所にいるどの男子生徒よりも長身であろう彼女は続けて口を開いた。

「みなさん、どうぞよろしくお願いします」

そこに聖女の微笑みを浮かべ。

反応を見る限り、それだけで彼女は生徒たちの心を捕らえてしまったようだった。

「では、男性と女性に分かれてください。基本的に女性の指導は彼女にやってもらいますので、わからないことがあれば彼女に聞くようにお願いします」

これが彼が用意した女性アレルギー対策（というほどに大袈裟なものではないが）である。リイナには事前に今日の授業内容を教えてあり、指導の仕方も含めて準備はバッチリ。もちろん彼女に正當な護身術の知識などはないが、ここで教える内容はごくごく簡単な初歩の護身術だ。彼女が素人であっても数回の練習でそれなりにはこなせるようになるのである。

生徒たちが二手に分かれていくのを満足げに眺めながら、ティースはそっとリイナに耳打ちした。

「リイナ。悪いな、無茶なお願いしちゃって」

だが、リイナはニツコリと微笑むと、

「いいえ。私はティース様のためでしたら、どんなことでも」

ティースはちょっと慌てた顔で、

「ど、どんなことでもって……そんな大袈裟な……」

「大袈裟ではありません。ティース様は、色のない私の生に新たな命を吹き込んでくれた、いわば命の恩人のようなものですから」

「あ、あはは……」

あまりにストレートなリイナの物言いにティースが照れて頭を掻いていると、

「……先生。皆、準備終わってますけど」

「えー!？」

声に慌てて視線を向けると、すでに二手に分かれた生徒たちが何とも不審そうな顔で二人を見つめていた。……確かに。リイナとヒソヒソ言葉を交わしながら照れて頭を掻くティースの姿は、生徒たちの目にはなんとも怪しげに映ったに違いない。

（ま、まずいまずい!）

生徒を見回すと、その中の一つと視線がぶつかった。

（す、すまん、シーラ……）

警告してくれたのはどうやら彼女のように。ティースは一瞬視線を合わせた後に心の中で感謝の言葉を呟いて授業を再開した。

授業の最初は相手に体の一部を掴まれたときの対処法、手を掴まれたときや背後から急に羽交い締めにされたときの対処など。最終的に相手を倒すための術ではなく、いかに相手を振り払い、逃げ延びるかに重点を置いた内容である。

男子生徒に対し、実演を交えながら授業を進めていくティース。時折リィナの様子を窺ってみるも、授業と離れた質問をいくつかぶつけられている以外は特に問題なさそうだ。

やや常識的にズレたところのある彼女であるから、まったく不安がないというわけでもなかったのだが、その辺についてはティースは楽観視していた。

（それに、なにかあればきつとシーラが助けてくれるさ……）

彼女が自分以外のリィナやエルレーンに対して優しいことはすでに実証済みだ。まあ、最初からそこまで計算に入れていたわけではないのだが……

と。

「すみません！」

突如室内に響いた大声にティースはビクリして飛び上がる。振り返ってみると、ちょうど一人の男子生徒が室内に飛び込んだできたところが目に入った。

「え？ あ、ええつと……」

そういえば、と、今日、男子生徒が一人少なかったことを思い出す。

生徒の名簿に視線を落とす。

「えつと、オーウェンくん……か」

そう呟きながら反射的にシーラの方を見てしまい、睨み付けられ慌てて視線をオーウェンへと戻したティース。

オーウェンは額に汗を浮かべながら、

「すみません……遅れてしまって……」

息が切れて苦しそうなところを見るとかなり急いでやってきたようだが、授業開始からはすでに十分が経過している。うっかりしてというよりは、何か事情があって遅れたと見るべきだろうか。

（昼寝でもして寝過ぎたのかな……）

などと、シーラに聞かれたら“お前じゃあるまいし”とか言われそうなことを考えながら、

「あ、いや、今始まったところだから大丈夫だよ。でも、次からは気をつけて」

「はい、すみません」

恐縮しながら二度、三度と頭を下げるオーウェン。見る限り本当に反省している様子で、これならきつく言う必要もないだろうと判断する。まあ、このティースという男の場合、その辺のボーダーはかなり高めに設定されているに違いないのだが。

「ちょっとオーウェン、どうしたのよ」

「あ、ああ、ちょっとね……」

おそらくディアナだろう
女生徒と二言、三言、言葉を交わし、男子生徒の輪の中に入っていくオーウェン。シーラとは言葉を交わさなかったようだ。

（……付き合ってるんだよなあ、あの二人）

とはいえ、あの彼女のことだ、普段からベタベタされるのは嫌いなかもしれないし、あるいは今回の自分のように色々と注文を付けてたりするのもかもしれない、と、ティースは色々なことを想像しながら、

（昨日の様子だと、どっちかといえばオーウェンくんの方が熱を上げているみたいだし……シーラの方から、ってのはなんとなく考えにくいもんなあ）

そう考えて何故だかホツとしてしまうのであった。

「あ、あれ、えっと、こっちからこう掴んで——」

「違う違う。そうじゃなくてこっちから、こう——あれ？ 違った？」

授業は比較的スムーズに進んでいる。

このサンタニアは他の学園に比べ一般市民層の学徒が多い、というのはこれまでに何度も述べてきたことであるが、そうは言ってもそのほとんどがそれなりに安定した収入を持つ家庭の子供たちであり、こういった格闘術に触れたことのない者がほとんどだ。

授業も終盤に差し掛かり、現在、生徒たちが練習しているのは、簡単な打撃と手首や肩の関節技だ。これも相手を倒すためというよりは一時的に相手の行動力を奪い、上手く逃げおおせるための技である。

それはごくごく簡易なもの。

だが、生徒たちはそれなりに戸惑い、苦戦しているようだった。

そんな中、

「え……うわあ！」

「ほら、こうやると簡単に振りほどけるんだ」

「……へええ、なるほどなあ」

「おーい、オーウェン。こっちもちょっと教えてくれー」

男子生徒八名の中、一人手慣れた手付きで練習相手を務めるオーウェンはもともと心得があるのか、あるいはよほどに筋がいいのか、遅れてきたハンデなど微塵も感じさせず、いつの間にか講師役であるティース以上にリーダーシップを発揮しているようだ。

シーラのことは別にして、人間的にオーウェンにどことなく好感を抱いているティースとしては、なんとも喜ばしいことであった。

そんな彼の活躍をひとしきり眺めた後、今度は女生徒の集団の方へ視線を移す。

そこでは、どうやらこういったものが苦手らしいディアナとリイナが会話に花を咲かせていた。

「ええー……ッ！ リイナさんって私と同年なんですかあああー！？」

「見えませんか？」

ディアナの驚きの声に不思議そうな顔のリイナだが、確かに彼女は背の高さや落ち着いた立ち居振る舞いから実年齢よりも大人びて

見える。対するディアナが実年齢よりも若干幼く見えるからなおさらだ。

「ぜんっぜん！ 二十代前半ぐらいだと思ってました！ ……いいなあ、あたしもリイナさんみたいにスラッと背が高ければもうちょっと大人びて見えるのになあ」

「いえ……私は少し大きすぎるので、逆にディアナさんが羨ましいです。背が小さい方が女性らしいとよく耳にしますから」

「そんなことないですって！ そりゃあ“デカイ！” って感じだったらちよつとアレですけど、リイナさんは背大きくても可憐で可愛らしいですもん！」

「可愛らしい……ですか？」

リイナは意外そうな顔で少し考えて、それからニツコリ微笑むと、「あまり言われたことないですけど……嬉しいものですね。ありがとうございます、ディアナさん」

「いえいえ。ってゆーか、あまり言われたことないってのが不思議だなあ。誰がどう見たってリイナさん可愛いのに」

確かにそれはそうだと、ティースは妙に仲よさげな二人を眺めながら一つ、二つと頷いて、さらに視線を横へと移動させる。

「そうじゃないわ。ここでもう、相手の右足を思いっきり踏みつけたまま、こっちの右手を回して相手の手首を掴むのよ。そこから両腕の力で思いっきりこっちにひねる。……簡単でしょう？ てこの原理で簡単に相手の腕が折れるわ」

こっちではディアナや他の生徒で手の塞がっているリイナをサポートするかのよう、シーラが他の女生徒たちにやり方を実演して見せていた。

（あれ。結構馴染んでるじゃないか）

ティースは昨日、他の女生徒とのトラブルを目の当たりにしたことで、彼女の学園での立場に一抹の不安を感じていたものだが、この様子を見ると陰悪なのはどうかや一部は生徒だけらしい。

ホッと胸をなで下ろす。

「大事なものは躊躇わないこと。腕力では男に絶対に敵わないのだから、相手が油断しているうちに確実に機能を奪っておかないとダメよ。殺す気でやりなさい」

(……でもシーラ。俺、そんなことまで教えてないぞ……)

彼女の護身術講座はティースのものより何倍も過激であった。

と、そんな感じで、一見波乱含みかと思われた演技演習初日は和気藹々とした雰囲気の中で何の問題もなく進んでいった。途中、女生徒の一人が失敗して思いつき尻餅をついたり、悪乗りした男生徒同士の間で一瞬喧嘩になりそうな場面もあったが、結果的には大きな怪我也騒動もなく。

拍子抜けするほど平穩無事。

——しかしながら。

「では、今日の講義はここまでにします」

平穩無事であったのはあくまでこの講義、この建物内部での話。

——波乱を告げる大騒動はこのとき、建物の外ですでに起こっていたのだ。

「えっと、明日……は休みですので明後日からは今日練習した技にさらに応用を加えたものを——」

言いかけたティースは建物の外が騒がしいことに気付いて言葉を止めた。

「……なんだあ？」

「え、なにかしら？」

生徒たちが訝しげな声を発する。

外から聞こえてきたのは慌ただしい喧噪。扉を閉め切っている建物内部でさえ明らかにわかるほどの喧噪。しかも騒ぎは徐々に大きくなりつつあって、ただ事でないらしいことは誰でもすぐに察することができただろう。

「……」

シーラがそっと視線をティースに向ける。

(……言われなくてもわかってるよ)

と、小さく頷いて、

「みんな、静かに。僕が様子を見てくるからここから動かないで」
そう言って出口へと足を向ける。
が。

「！」

彼が外に出て行くより早く、扉が向こうから開いてそこから一人の男子生徒が飛び込んできた。

ティースには見覚えのない男子生徒だ。

「オーウェン！」

入ってきた男子生徒は飛び込んでくるなり室内を見回してオーウェンの名を呼んだ。

室内がさらに騒然とする。

「……どうしたんだ？」

どうやら顔見知りらしい、オーウェンが立ち上がってそう問いかける。

男子生徒は彼の姿を見つけるなり歩み寄っていくと、青ざめた形相と震える声で、

「大変だ！ アリエルが……アリエルが……！」

「アリエル？ ……あいつが、どうかしたのか？」

その形相からだた事でないことを悟ったのだろう。オーウェンの言葉は微かに焦りの色を帯び、それを周りで見つめる生徒たちも固唾を呑んで見守っている。

「……」

ティースは外へ視線を向けた。

騒ぎはさらに大きく。微かに悲鳴のような叫び声も混じっていて。肌にピリピリと響くその空気。

ティースはその空気を何度も感じたことがあった。

（まさか……）

それは紛れもない“死の空気”だ。

「中庭で……中庭で倒れてて……」

その男子生徒は彼女とどのような間柄だったのか。ティースにはそれを知る術はなかったが、その後に続いた声は悲痛な重みを持っていた。

「呼吸してないって……なんか死んでるみたいだって——」

「！！」

ダン！

「あ、オーウェン！！」

言葉を最後まで聞くことなく、オーウェンは血相を変えて飛び出していった。

ティースもまた、すぐに行動する。

「っ……リィナ！ ここを頼む！ 生徒たちは指示があるまで外に出さないようにしてくれ！」

そう言って即座に外に飛び出した。

「は、はい！ ……って、あ！ シーラ様ッ！！」

「シーラ！？」

後を追いかけてきたシーラに驚いたティースだったが、結局は制止することもなく。……こういうときの彼女に何を言っても無駄なことはよくわかっていなのだ。

無言の彼女は何を思うのか、厳しいその表情からは何を伺い知ることがもできず。

平穏無事かと思われた講師生活三日目は、最悪の形で波乱の幕を開けることになったのだった。

その3『禁断の葉』

翌日のミューティレイク家。

「――以上が、サンタニア学園内で女生徒が突然死した事の顛末です」

「ご苦勞様でした、ミリィさん。何かありましたら隨時報告をお願い致します」

「畏まりました。お嬢様」

一分の隙もない礼をして部屋を出ていくのは、眼鏡を掛けたこの家の侍女長ミリセントⅡローヴァーズ。そして彼女を見送ったのは言わずとしたディバーナ・ロウの総帥であり、このミューティレイク家の当主でもあるファナⅡミューティレイクだ。

昨日、学園で一人の少女が突然死した事件は、サンタニアを含むネービス学園群の大半を管理する彼女の耳にも当然届いていた。

「……」

ミリセントが出ていった後、ファナは十秒ほど目を閉じて学園内で命を落とした少女の冥福を祈った。それからゆっくり目を開くと、その視線を横に移動させて、

「リディアさん。申し訳ありませんが、ティースさんをここに呼んでいただけないでしょうか？」

「ん？」

視線の先にいた執事の少女、リディアⅡシュナイダーはその言葉に顔をあげた。机の上にはどっさりと書類の山が積まれていたが、彼女は平気な顔でそれらをてきぱきと捌きながら、

「ティースさんなら出掛けたいだよ。たぶん、今の話の関係じゃないかなあ」

「あら、まあ。そうでしたか」

いつものようにのんびりとした口調ではあったが、リディアはそんな彼女に問いかける。

「何か気になることでもあるの？」

「ただ、現場に近かったティースさんのお話も伺ってみたいと思っただけですわ」

「ふーん」

リディアは手にしたペンを指先でクルクルと弄びながら、

「人が死んでるわけだから気持ちもわからないわけじゃないけど、そんなことまでいちいち気にかけてちゃ体がもたないよ。ただでさえタナトスだとか何だとか、魔の活動が活発化してるせいで最近あんま寝てないんだし……それにほら、学園の方でも最近例の噂話とか……あ、そっか。それでか」

リディアは自動的にファナの言葉の真意を理解した。

クルクルとペンの動きが速さを増す。

「でもどうかなあ。例のヤツが関わってるとしても、今回みたく死んだりはしないはずだよ」

「ええ、存じております。ですが、それに関わる何らかのトラブルがあったという可能性も考えられますわ」

ピタッとペンの回転が止まった。

「殺されたってこと？ まああっちの方でもその可能性を捨てきつてはいないみたいだけど……でも医者は病死だって言ってるんですよ？」

「リディアさんはどう思われます？」

「その死んだ子が関わってた疑いがあるなら、調べる価値はあるかもしれない」

ファナはゆっくりと頷いた。

「やはり、ティースさんにご意見を伺ってみることにしましょう」

ここネービス領における“信仰”はごくごく大雑把に二つに分けることができる。この地方に古くから根付きネービスの守護剣神を

奉るミーカール教と、大陸全土に広がり、この大陸におけるスタンダードとでも言うべきクライン教の二つがそれだ。

どちらも単一宗教であり、節制と自戒を説く辺りはよく似た宗教であるが、クライン教の方があらゆる面で寛容であり、ネービスの国教ともいうべきミーカール教の方はより秩序を重んじ、罪に対して厳格な立場をとっている。また、恩に報いることを強く説いているのもミーカール教の特徴といえよう。

また、死者の行く末についても少々主張が異なっている。死後、時を経て再び人に生まれ変わるために現世で徳を積むのだというクライン教に対し、ミーカール教には生まれ変わりとはいえない。現世で信仰篤かった者は死後の世界でミーカール神の元、永遠の命を得ることになっている。

古くはミーカール教しか存在しなかったネービスであるが、暦が大陸歴と変わって三百二十年、大陸各地との交流が活発になり、また学園都市として他領から多くの人間がやってくるようになって、今はおよそ三割弱の住民が大陸のスタンダードであるクライン教を信仰するようになっていた。幸い、どちらの宗教も他の神の存在に寛容であり、またネービス自体が異文化を受け入れることで成長してきた背景もあるため、宗教間での争い事はほとんどなかった。

さて、そんなネービス領ネービスの街にあるミーカール教の教会。どんよりと曇った青空。――と、そんな奇妙な表現がその場には相応しいのかもしれない。どんなに晴れやかな日差しであろうと、どれほどに心地よい涼風であろうとも、愛する者の死に流した涙を乾かすまでには至らないのだから。

嗚咽。

吹き抜ける、重苦しい沈黙の風。

昨日、サンタニア学園で倒れたアリエルリンプシャーは、結局そのまま帰らぬ人となった。一時は騒然となった学園も、彼女の死因がどうやら突然の心臓発作だったらしいことが判明した後、一部を除いてすぐに日常へと戻っていった。

そしてその翌日、つまり今日。

（天の神の御許へ、か）

朝早く、ミーカール教会の火葬場の前には百人近くの人々が集まっていた。彼女の家族、友人、彼女の家で働く使用人たち……今、ティースはそんな人々を後ろから眺める位置に立っていた。

視線は少し上に。建物からたち上る煙が風に運ばれていく。

火葬はネービスの国教であるミーカール教特有のもので、大陸全土に広がるクライン教は土葬だし、他の宗教もやはり土葬が圧倒的に多い。ティースの故郷は九割九分がクライン教を信仰しているため火葬場なるものは一つもなく、彼が火葬というものを初めて見たのはここネービスにやってきてからのことだ。他宗派の信者には遺体を燃やすという行為に眉をひそめる者が多いのだが、ティース自身はこの、炎で身を清め、煙となって天に昇っていくという考えには納得できるものがあつた。

（でも、いくらなんでも早すぎるよ……）

空から視線を下ろすと、死んだアリエルの母親だろうか、三十代半ばの女性が堪えきれずその場に泣き崩れるところだった。寄り添う父親らしき紳士は五十歳ぐらいだろう、そのすぐそばには同じ顔をした双子らしき二十代後半の男性二人——これは兄か——が神妙な面もちで立っている。

その誰もが予想だにしていなかったのだろう。まだ十七歳の娘が、妹が、唐突にこの世を去ってしまうなどとは。

「……先生？」

「え？」

唐突に呼びかけられて振り返ると、そこには見知った顔の男子生徒、オーウェン・トレビックがいた。学校で見えるものよりもさらに落ち着いた質素な服装。死人を見送るときに派手な格好をしないのはミーカール教もクライン教も同じだ。

「オーウェンくん？ どうしてここに？」

「先生こそ」

周りの人々と同じく少々疲れた面もちのオーウェンは、ティースの前で少し無理したように微笑んでみせた。

「俺はアリエルと昔馴染みでしたから。父が美術商で、ちよくちよく彼女の家に入入りしていたもので。ちょうど今日は学園も休みですし」

「ああ……そうだったのか」

そういえば以前そんなような話をしていたな、と、ティースは思い出した。

そして問いかける。

「前に一度会ったときは元気そうに見えたけど、彼女、心臓悪かったんだ？」

「いえ……どうなんでしよう。少なくとも俺はそういう話を聞いたことありませんでしたけど、最近は昔ほど話をしなくなってたし……それに先生も前に見ましたよね。アリエルはシーラさん——えっと、先生の授業を受けているシーラスノーフォールですけど——」

「あ、ああ、もちろん知ってるよ」

「彼女と仲が悪かったんです。だから俺とも自然と疎遠になって……でもたまに会うときは元気だったし、昨日の昼も少し話をしましたけど、とてもどこか悪いようには見えませんでした」

「……」

ティースはオーウェンの視線を追って火葬場の上空を見上げた。

集まった人々は火葬場を囲むようにして、死者を弔う祭司の言葉に耳を傾けている。

「だから、彼女が死んだって聞かされたとき、もしかしたら“クウエルダ”のせいかと思ったぐらいです」

「……クウエルダ？」

「知りませんか？」

オーウェンが視線をティースに戻した。

「最近、ネービスの一部の学生の中で広まってると噂の麻薬のこ

とです」

「麻薬？」

声をひそめたのは、その話題がこの場に相応しくないと考えたからだ。幸いにして、集団から少し離れた後方の彼らに注目している者は一人もいない。

「麻薬って……その薬を彼女が服用していたってこと？」

「いえ、まさか！」

オーウェンはすぐにそれを否定して、

「ただ、ちょうどそういう噂が聞こえてきたのが最近だったもので、ふと頭を過ぎったんです。……そうでもしなきゃ説明がつかないぐらい唐突でした」

「……」

「あ、じゃあ俺はそろそろ……」

どこか淡々として見えるのはまだ悲しみよりも戸惑いの方が大きい故か。彼自身がそう言ったように、彼女の死は本当に突然だったのだろう、と、ティースは参列者の輪に戻っていくオーウェンを見送りながらそう思った。

（せめて安らかに眠ってくれよ）

最後にもう一度少女の冥福を祈り、ティースはその場を離れる。

（しかしクウエルダ、か。あの学園でそんなものが……？）

まさか、という思いだったが、オーウェンの口調からするとそれは単なるデマやうわさ話で済む程度のものではなさそうだった。

（シーラにでも聞いてみるか）
と。

「……先生？」

「え？」

教会を出たところで、ティースはまたもや予期せぬ人物と出くわした。

「先生も来てたんですね」

学園内でいつもシーラと一緒にいる少女、ディアナリーだった。

喪服ではない。が、その口調からするとただ通りがかっただけというわけでもなさそうだ。

「ディアナさん？ 君——」

ティースは彼女とアリエルとのいがみ合いを何度か目撃しているだけに意外に思っ言葉を投げかけると、ディアナは彼女らしくないというべきか、どこか憂いを含んだ眼差しで答えて、

「別に来ようと思ってたわけじゃないんですけど、オーウェンの姿がチラッと見えたものだから、ああ、ここがそうなんだと思って」

「中には、入らないのかい？」

「嫌いでしたから、あの子のこと。向こうも同じでしょうし。でも」ポツリ、と、ディアナは言った。

「今にして思えば、死ななきゃなんないほど悪い子じゃなかったな……」

神妙な言葉だった。

ティースは小さく頷いて、

「死ななきゃならない人間なんて、そういないよ」

「……ですよね」

そう言っ中空を見上げるディアナ。

（……そうだよ。いくら仲が悪くたって、人が死ねば胸が痛むんだ……）

空に昇っていく煙を見つめる彼女の瞳には、紛れもない哀悼の色が浮かんで見えた。

そんな彼女に、ティースはもう一度言った。

「中に、入ったらどうかかな？」

「え？」

驚いたようなディアナ。

「死んだ人が何を考えるかなんてわからないけど、でも僕だったら自分を偲んでくれることが一番嬉しいと思う。……今の君だったらアリエルさんも迷惑だなんて思わないんじゃないかな？」

「……」

ディアナはしばらくティースを見つめ、それから考える顔をした。
が、やがて、

「先生？」

「うん？」

「今日はこれから暇ですか？」

「？　とりあえず時間はあるけれど――？」

一体なにを、と、ティースがそう尋ねる前にディアナは言った。

「じゃあ今から私とデートしましょ。ね、そうしましょう！」

「……へ？」

あまりに突拍子もない申し出にティースは目をパチクリさせたのだった。

午前十一時、シーラは自室で客を待っていた。

（心臓発作、か）

細く白い陶磁器のような彼女の指先が、窓際に飾られた紫色のつぼみをそつと撫でる。

テーブルの上には小さな菓袋。物が多いにも関わらずきつちりと整頓された部屋からは聡明さと勤勉さの気配が香り立つ。

学園の人間の一人でもこの部屋に招待したならば、彼女という人間への評価が少なからず変わるのではないかと思われたが、残念なことに彼女は学園の人間を一度たりとも――同じくこの屋敷から学園に通うセシリアという少女を除いて――招待したことがない。

それは以前住んでいた借家でも同様だった。

コン、コン。

「シーラ様、お客様をお連れしました」

ノックの音に視線を移動させると、知った顔の従僕と彼に案内された一人の女性が部屋に入ってくる。

待っていた客人だった。

「あゝらら。相変わらず難しそうな顔してんのねえ」

女性はシーラの顔を見るなりそう言った。年の頃は二十歳をほんの少し過ぎた程度、ほんの少し下がり気味の目尻と色香に溢れたいかにも男好きのしそうな、シーラとはまったく正反対なタイプの女性だった。

「何か悩み事でもあるのかしら？　でも残念。あなたの相談には乗ってあ・げ・な・い」

シーラは微かに眉をひそめて女性を一瞥すると、すぐその後ろに視線を向けて、

「ご苦労様、マグナス」

「はい。では……」

シーラに対し一礼して、退室しようとして、マグナスは自分が連れてきた女性をチラッと見る。

「ん？　なに？」

「あ、い、いえ。どうぞごゆっくり」

慌てて視線を逸らしたマグナスは、そそくさと部屋を出ていった。すると女性はそれを可笑しそうに見送りながら、

「あの子、あたしの太股がやけに気になってたみたい」

「そうね、マーセル。この屋敷であなたほど短いスカートを履く人間はあまりいないわ」

シーラの言葉には冷たい皮肉があからさまに乗っかっていたが、女性は気にした様子もなかった。

その女性――マーセルⅡバレットは二ヶ月ほど前、とある事件でティースやシーラと知り合った人物だ。元々はネービス領の南東にあるベルンという街の富豪の娘で、心臓の病のため二ヶ月前までロマニーという温泉町で療養していたが、シーラたちと出会った後にネービスに移り住んでいた。

「あたしの父は典型的な成金だから、あたしもそんなお上品な教育は受けてないのよ。それに女ってのは男の視線を集めてナンボでしょ？」

言いながらソファに腰を下ろしたマーセルはこれ見よがしに足を組んでみせる。

「ティースくんは元気？」

「生きてはいるわね。……そんなことよりあなたの調子は？」

「悪くないわ。悔しいけれどあなたのおかげでね。これ、前回もらった薬よ。使わなかった分」

「そう」

マーセルの差し出した手の平サイズの薬袋を受け取ると、代わりにテーブルに置いてあった薬袋を彼女に手渡した。

「いつも通り三回分。それと――」

「使用期限、使用量、使用のタイミングを決して間違えないこと、でしょ？」

「ええ」

頷いたシーラはマーセルから受け取った古い薬をビーカーの少量の水に溶かし、植木鉢の中に流し込んだ。

シーラがマーセルに処方しているその薬は一般には市販されていない。いや、それどころか著名な薬師ですらも調合法を知らないであろう特殊な薬で、マーセルがここに移り住んだのもそのためである。

「どんな薬にも必ず致死量があるわ。特にその薬は――」

言葉を切って、シーラは微かに視線を泳がせた。

「……マーセル。その薬、どんな味がする？」

「味？ 変なこと聞くのね」

不思議そうな顔をしながらもマーセルは指を口元に当て、少し天井を見上げるようにして考える。

「まあとにかく苦いわねえ。使うときは味なんて気にしてらんないときが多いけど」

「そう。……そうよね」

マーセルの感想にシーラは頷いた。

実のところ、その薬がとてつもなく苦いものであることは知って

いた。マーセルに飲ませる前に自分で試したことがあるからだ。
そのときのことを思い出す。

全身から血の気が引き、平衡感覚を失い、心拍数は異常に速くなって、頭の中は真っ白に。血圧を操作するその薬は、健全な人間が服用すると当然に体調を崩してしまうのだ。

「マーセル。何度も言うけれど、その薬は決して他人に渡してはダメよ」

「ふふふ、わかってるって。よく知らないけど、真っ当な素性の薬じゃないんでしょ？　こんなの勝手に処方してたことがバレたら面倒なことになるのよね？」

「それもあるけれど。万一、何も知らない人間が口にすれば大変なことになるわ」

「わかってる」

マーセルは少し真顔になって頷いた。

「ネービスの守護神たるミーカールの名に誓って、あなたに迷惑をかけることは絶対にしない。いくら相容れない性格の生意気な小娘でも、命の恩人は命の恩人だもの」

シーラは無愛想に彼女を一瞥して答えた。

「私もあなたの価値観とは相容れないわね。きっと永遠に」

マーセルはクスクスと赤いルージュの唇を微かに歪めると、ゆっくり足を組み替えた。

「ところで話は変わるけど……実はここに来る途中、街でティースくんらしき人を発見したの」

意味ありげに語りだしたマーセルに、シーラはまるで無関心な口調で、

「そう」

「それがねえ。彼、実は女の子と一緒にだったのよ」

「それで？」

「あら。あたしのとときと比べてずいぶん淡泊な反応ね」

シーラは表情をピクリとも動かさずに彼女を一瞥して、

「本当かどうかもわからない話にいったい何を言えというの？ それにあのときは、ただ単にあなたのことが気に入らなかっただけのことだわ」

「じゃあ、興味ないのね？」

「興味ないわ」

即答する。

「じゃあ、あたしはちょっと興味本位で聞いてみていいかしら？」

マーセルは少し不思議そうに首を傾けた。

「ティースくんって、もしかして副業とかやっていたりする？」

「？　　どういうこと？」

マーセルは人差し指を口元にあて、思い出すようにしながら、

「だってその女の子が呼んだのよ。確か、彼のこと“先生”って」

「……先生、ですって？」

喜ばしくないことに、シーラには心当たりがあった。

「ねえ、先生。先生はどういう経緯でウチの学園に来ることになったんですか？」

「え？　　あ、ええっと、知り合いのツテでね」

「知り合いつてウチの学園の先生とか？」

「ん、あ、いや、まあそんなとこかな……」

奇妙なことになった、と、ティースは少々困っていた。

気分転換に、という名目でお願いされ、結局断りきれずに付き合いわされることになった。まあその辺はこのティースという男の優しい（悪く言えば押しに弱い）性格に依るものだし、そのぐらいのこととは特に問題ではないだろう。

しかし問題は、そこからディアナによる猛烈な質問責めが始まってしまったということだった。

何しろ彼女はシーラの友人である。うっかり余計なことでも喋っ

てしまえば後が恐ろしい……と、ティースが一步も二歩も引き気味になってしまふのは致し方ないところで。

(参ったなあ)

と、そんな困り果てた彼の心情とは裏腹に。休日の大通りは春らしい絶好の日和も手伝って盛況模様だった。平日の何倍もの露店が辺りに並び、少し先では大道芸人がちよつとした人垣を作っている。

「あ、すごいすごい。先生、見て、アレ」

「ん？」

ディアナが指し示したのはその大道芸人の一団である。

どうやら一輪車を使ったパフォーマンスのようだ。

(……一輪車、かあ。懐かしいなあ。アクアさんに練習させられたっけ)

結局まともに進むことすらできなかったことも、今となってはい思い出だった。

立ち止まってしばし鑑賞の後、

「……あ、先生、ごめんなさい。あたし、お金ぜんぜん持ってきてなくて」

「ああ、いいいいいよ」

そう言つて幾ばくかの鑑賞料を支払ったティースたちはその場を離れることにした。

「ところで先生？ 先生はどこに住んでるんですか？」

それから再びディアナの質問責めが始まる。

「あー、えっと……東地区の十一ブロックだよ」

以前住んでいた借家の場所である。

「先生、独身ですよ？ 家族とかは？」

「あー、えっと、故郷は田舎の方だね。名前を言ってもわからないぐらい小さな村なんだ」

「じゃあ――」

延々と続く質問にも少しずつ慣れてきて、どうにか大過なく答えていたティース。この調子なら問題なく乗り切れるかな……と、そ

それはそう思った矢先のことだった。

「ところで先生？」

「ん？」

「先生は、もしかしてシーラとお知り合いなんですか？」

「あー、えっと……えっ!？」

びっくりして立ち止まり、ディアナの顔を見つめる。と、同時に冷や汗が背中に浮かんた。

（な、なんだ!？　なんか俺、マズイこと言ったっけ!？）

慌てて今までの会話を思い返してみるが、どう考えても心当たりがない。今日はシーラについての話題すら一つも出ていなかったのだから当然である。

もちろんティースは取り繕うと試みた。

「と、突然どうしたんだい？　そんな突拍子もない――」
だが、

「昨日のあの騒ぎのとき、先生、シーラのこと呼び捨ててたでしょ？」

平常を装おうとして見事に失敗しているティースに対し、ディアナは的確にそう指摘してきた。

「え」

記憶にない……が、言われてみればそうだったかもしれない。

（……ま、まずい）

もしそれが理由だとすれば完全に彼のミスである。シーラにバレたら何を言われるかわかったものではない。

「その前からもなーんか変だと思ってたんです。シーラって先生がいるときに限っていつものような反応するんですよね。思い出してみると先生が初めて来たときも何か変だったし」

「そ、それは……」

（というか、この子、意外とよく見てるなあ……）

と、ティースはやや感心してしまった。どちらかというと大雑把なタイプだと思っていたが、どうやら印象以上に聡明な少女のよう

だ。

「あー、えっと……」

さあ、困った。

証拠などないのだからしらばっくれればいいだけの話なのだが、咄嗟にそうできない辺りが彼らしいというべきだろう。そもそも嘘をつくのが上手な男ではないのだ。

そのうちにディアナは自信をさらに深めたらしく、

「あ、無理しなくてもいいですよ。あの子がプライベートなことを隠そうとするのはいつものことですし……」

一瞬、その表情に淋しげな陰が浮かんだが、彼女はすぐにパツと顔を上げて、

「まあ、とにかく深く追求はしません」

「……」

なんとも有り難い申し出だったが、バレてしまったことに変わりはないうである。

（やれやれ今日は小言を覚悟しなきゃならんな……）

「えと、でも一つだけいいですか？」

「ん？」

ディアナは少し心配そうな顔で言った。

「シーラと先生って、恋人とか、実はとくに夫婦とかじゃないんですよね？」

そんな彼女の突拍子もない質問に、ティースは思わず笑った。

「あはは、それは違うよ。というか、シーラにはちゃんと恋人がいるだろ？ 君の方がよく知ってるじゃないか」

「んー、そうなんですけどー」

ディアナは何とも曖昧な顔をして、

「あの二人——っていうか主にシーラの方なんですけど、全然恋人らしくないんですよ」

「え、そうなのかい？」

「ええ、そうなんです。まあシーラはああいう性格だし、どっちか

というところ、オーウェンの方が熱を上げてる感じだから仕方ないんですけど……それにしたって信じられます？ 理由もなく触れたら絶交だって言うんですよ」

「え……触れたら絶交って、オーウェンくんがシーラに、ってこと？」

これにはティースも咄然とした。普段から男に対して厳しい発言のある彼女ではあったが、そこまで男嫌いという話は聞いたことがない。

それに、

「でもあいつ、休日とかよく恋人とデートだって出掛けてたけどなあ……」

「デート？ まさかあ。あたし、オーウェンが断られた話しか聞いたことないですよ。だから、なにかあるのかなあと思ってたんです」「そっか……」

（でも、だったらあいつ、誰とどこ行ってたんだ……？）

そんなことまで詮索すべきではないとは思っているものの、やはり気にはなるのである。

「でもよかった」

「ん？ なにが？」

「だって」

そこはあるいは警戒して然るべき場面だったかもしれない。が、ただでさえ容量の少ない頭がシーラの行動に対する疑問でいっぱいになっていた今は、そんなところにまで気が回らなかった。

「先生はまだ独身で、シーラともそういう関係じゃないってことでしょ？」

「へ？」

弾んだ声と同時に左腕にグツと柔らかな重み。

「せっかくの機会だし、もっと先生のこと聞かせてください。ね、いいでしょ、先生？」

「……」

視線を左斜め下に向け。

ほぼ疑いようのないその（彼にとっては）暴拳を認識して。

——血液が突如、重力に従順になる。

「え！　せ、先生ッ！？」

そしてティースの意識は、アッという間に闇の中へと落ちていったのである。

「——つまり」

「……」

情状酌量の余地さえない凶悪事件の容疑者が、もはや疑う余地のない死刑判決を受けるときというのは、まさにこんな感じなのかもしれない、と、ティースは思った。

「あれだけ釘を刺したにも関わらず、よりにもよって私と一番親しい子に捕まって余計なことをペラペラ喋った挙げ句、デートだとかおだてられない気になって良からぬ妄想をしている間に腕を取られて気絶した、と……そういうことなのね？」

「誤解だ！」

この期に及んでティースは悪あがきを試みた。いや、シーラの言葉も九割方は正解だと言えるだろう。が、

「俺はいい気になってないし、良からぬ妄想なんてしちゃいない！」

そこだけははっきり主張しておきたいところであった。

「そう？　だったら、どうしてそんな簡単に腕を取られたのかしら？」

「そ、それは……」

勢いは一瞬だけだった。

まあ、客観的に言えば完全に彼のミスだろう。ディアナの本心はどうであれデートという名目で誘われたのだし、ああして触れられ

る可能性も考慮してしかるべきだった。

「ちよっと、ボーっとしてて……」

本当のことをいうとシーラのことを考えていたわけだが、そんなことを言えば何を言われるかわかったものではない。

「そう。いつもどおり、お前らしいミスね」

「うっ……」

反論の余地はない。

なにしろ彼の失態は気絶しただけではない。その後、偶然その場を通りかかったセシリアとアルファに屋敷まで運ばれて――それはまあよかったのだが、あろうことかディアナが最後までついてきてしまい、ティースとの関係どころかシーラがこの屋敷に住んでいるということもバレてしまったのである。

これを致命的と言わずして何と言おうか。

「お前が学園に来てから今日で何日目だったかしら？」

天井に吊された灯りが、彼女の瞳の中でユラユラ揺れる。部屋の中に伸びた影には悪魔の尻尾が生えているようにティースには思えた。

「きよ、今日でまだ四日目……かな？」

「そう。私がディアナと初めて会ったのは三年以上前よ。三年以上、彼女が私の住む家を訪ねてくることはなかったわ」

「……すまん」

ここはとにかく平謝りするしかないティースであった。

「……まったく」

とはいえ、シーラの方もいまさらどうこう言っても仕方ないことはわかってる。

「お前のミスはともかく……どうしていきなりデートだなんて状況になるのかしら」

「い、言っとくけど、俺が誘ったとかそういうことはないからな」

今の雰囲気なら言いかねないと思ってティースが先に釘を刺すと、
「そんなことわかってるわ。だから余計すつきりしないのよ」

「はあ」

ティースには全然意味がわからなかった。

しかしまあ、とにかくこれ以上のお説教はなさそうだと判断して、「じゃあ俺、そろそろ……この後、リディアに呼ばれてるんだ」

「リディアに？」

「ああ。たぶんファナさんの用事だと思うんだけど」

シーラは少し考え込んで、

「……昨日のアリエルのことかしら」

「え？ さ、さあ、でもタイミングからするとそうかも——あ、そういや」

ティースは昼間のことを思い出して、

「シーラ。お前、クウエルダって聞いたことあるか？」

「あるわ」

その言葉が出ることを予期していたかのような即答だった。

シーラはテーブルの上の辞典らしきものを左手でパラパラと無造作にめくっていくと、

「クウエルダは服用することで一時的に強い開放感を得られる薬よ。おそらくお前が聞いたであろう学園での噂話も知ってるわ。——これよ」

「どれどれ……？」

身を乗り出してシーラの手元を覗くと、彼女の指し示した辞典のページにはクウエルダという薬についての詳細が書かれていた。

「……比較的強い中毒性と、常用することで稀に幻覚などの症状を引き起こす場合があるため、大陸の八割強を占めるヴォルテスト条約加盟国では全面的に服用が禁止されて——こんなものがあの学園で、本当に？」

パタン、と、シーラが辞典を閉じる。

「あくまで噂話、ということよ。断定ならとっくに警邏隊が動いているはずでしょう」

「それもそうか……」

「ただ、噂話としてならファナだって把握してるはずだし、公的機関ではないけれどそれなりに調査にも動いているはずよ」

「じゃあ。もしかして、昨日のアリエルさんの死因って――」

「それはないわね」

シーラは即座に断言した。

「書いてあったでしょう？ クウエルダという麻薬は確かに体に悪影響を及ぼす恐れがあるけれど、それが原因で心臓発作まで起こしたりすることはない。もちろん大量に摂取すれば死に至ることもあるだろうけれど、心臓発作とは似ても似つかない症状のはずよ」

「……ってことは、彼女はやっぱり病死ってことか」

独り言で呟いたティースに、シーラは言った。

「だと、いいわね」

「え？」

シーラは机の上に置いてあった小さな薬袋を片手に、ティースと真正面に向き合うと、

「今日、マーセルが来たのよ。この薬、覚えているわね？」

「マーセルさんの心臓の？」

「そうよ。この薬は血圧――簡単にいえば血の流れを調整して心臓の負担を和らげる効用があるのだけれど……」

さらさらすると、彼女の細い手の平に薄紫色の粉末がこぼれ落ちる。彼女はそれをティースの眼前に差し出した。

「？」

思わず顔を近付けて匂いを嗅いでみると、いかにも薬草くさい香りがした。微かに芳しい花の香りが混じっていたのは、薬ではなく彼女の身につけた香水のものだろう。

ティースが顔をあげると、シーラは言葉を続けた。

「たとえばこの薬、この手の平の五倍の量を飲んだとしたらきつと死ぬわ。おそらく心臓発作のような症状で、ね」

「え？」

驚くティースを後目に、窓際の鉢にその粉末を流し込むシーラ。

「有害なものでなくとも、人体に何らかの作用をする以上、必ず致死量があるのよ。お前も知っての通りこれは医者も薬師も知らない薬。もしこの薬の誤使用で死んだとしたら、医者は心臓発作と診断するかもしれないわね」

「え、じゃあ誰かがその薬を――」

「早とちりしないで。この薬は苦みが強いしさっきお前が嗅いだような匂いもある。致死量を本人に気付かれないように飲ませるのは難しいわ。でも、そのように見せかける毒薬が他に存在していても不思議はないということよ」

ティースは少し考えた。

「……でも、医者や薬師でもわからない薬だったとしたらお手上げじゃないか」

シーラはチラリとティースを見て、

「仮に未解明の毒薬が使われたとしたら、それはそこいらの一般人に入手できるものじゃないわ。プロの殺し屋か、薬草学に造詣の深い人間の仕業。どちらにしても必ず理由があるはずだし辿っていくのは充分可能よ」

「理由……」

ティースの頭上によくやく閃きが灯った。

「クウエルダ、か……」

「何とも言えないわね。確かに彼女の死は唐突だったけれど、自ら麻薬に関わるような子には思えないし、普段なら何の疑問もなく病死で処理されていたケースよ。ファナがお前に何か聞きたいというのも、たまたまクウエルダの件と時期が重なったためでしょうね」

「……」

シーラの言うことももつともだ。

しかしもし。もし彼女の死が自然死ではなく、誰かの意志によるものであったなら。誰かの思惑によって理不尽に奪われたものだとしたら。

なんともいえない気持ちが胸にこみ上げる。晴天の下で泣き崩れ

る母親の姿が脳裏に映る。

もしそうだとしたら、その行為を許すわけにはいかない、と、そう思った。

「なあ、シーラ。ちょっと頼みがあるんだけど……」

今日は失態を見せているだけに少々遠慮がちにティースはそう切り出した。

「なに？」

「俺、学園のこととか薬のこととかまだ全然わからないだろ？ だからお前の知恵を貸して欲しいんだ」

「調べるの？」

「ああ。……ダメかな？」

シーラは少し考えたが、すぐに、

「わかったわ。でも、学園でのルールは守ってもらわよ。ディアナにバレてしまったことはともかく、他の子に絶対にバレないようにすること。それが条件よ」

「あ、ああ、それはもちろん。今度こそは気を付けるよ」

それは言われなくてもわかっていた。何よりティースの危惧が現実だったとすれば、身に危険が及ぶ可能性も考えなければならない。シーラとの関係については今まで以上に秘匿する必要があるそうだ。

「ディアナには私の方から釘を刺しておくわ。今日のことは絶対に他言無用だと、ね」

「……なあ、シーラ」

そんな彼女に、ティースはふと疑問に思っただけで尋ねてみた。

「お前が学園のみんなに自分のこと隠すのって……もしかして“追っ手”が来るかもしれないって考えてるからか？」

後半は少し声を潜めて。

シーラの肩がピクリと動き、続いて彼女は不可解そうな顔でティースを見つめた。

「なに、突然？」

「いや。ただ……今日、ディアナさんが少し淋しそうだったのを思

い出してさ。お前が自分のことは何にも話してくれないんだって言うたから……」

「ディアナが？　そう……」

視線が斜め下に落ちる。微かな罪悪感のようなものがその表情に過ぎった。

（やっぱり、そうか……）

それはそうだろう。三年以上も付き合っている友人に必要な以上の隠し事をするのが、いくらなんでも彼女の本意であるはずがない。それを確認して、ティースは続ける。

「……なあ。もうあれから三年も経つし、何もないのはたぶん向こうがお前を完全に見失った証拠じゃないかな。もうそこまで徹底しなくても――」

だが、シーラは硬い表情で首を横に振る。

「ダメよ。万が一何かあればファナにも迷惑がかかるわ」

「でも、そんなんじゃないつまで経ってもちゃんとした友達とか……恋人だって――」

言ってから、ティースはしまった、と思った。

シーラは探るような目でティースを見る。

「……ディアナにオーウェンのことを聞いたのね」

「え！　あ、いや……」

ティースは慌てて言い訳を探そうとしたが、すぐに不可能だと悟って、

「いや、その、ディアナさんがお前のことを心配してて……」

シーラは少し考えるように視線を泳がせて、

「じゃあ、お前から聞いたわけではないの？」

「あ、ああ。それはもちろん」

責任転嫁するようで少々気は引けたが事実である。オーウェンとの関係が気になっていたことも確かだが、そんな余計なことは言わない方が吉だろう。

「そう」

シーラは自分の眼前に右手の爪先を広げ、何事か考えながら、
「そうね、お前に詮索されるようなことではないわ。……それに心配しなくとも平気よ。私に群がってくる男なんて自分から探さなくともごまんというもの」

僅かに口元を歪めた彼女に対し、ティースはかろうじて反論して、
「お、お前なあ……そういうのは友達とか恋人とかって言わないんだぞ？」

シーラは彼を一瞥し、どこか挑発的な口調で答えた。

「だったらどうするの？ お前がそういう連中を追い払ってくれる？」

「……そりゃ、必要があるなら——」

「今の私には必要ないわ。だったら問題ないでしょう」

そこでようやくティースは彼女の口調が徐々に冷たさを増していることに気付いたが、そのときはすでに遅かった。

「話は終わりよ。そろそろ出て行って」

きっぱりそう言い放って机に向かったシーラは、二度とティースの方を振り返ろうとしなかった。

「あ、ああ……」

ティースはゆっくりと立ち上がる。

一時期よりいくらかマシになったとはいえ——こうなってはもう、取り付く島もなかった。

パタン。

後ろ手にドアを閉じる。

ため息。

天井を見上げる。

（群がってくる男なんて……か。だから俺にも冷たくなったのかな……）

昼間にディアナから聞いた話と合わせ、ティースはそんなことを考えて深く嘆息するのだった。

翌日、何事もなく過ぎた放課後のこと。

「わかってるって。昨日のことは絶対に他言しない。約束するわ」
昨日とは打って変わってどんよりと曇ったどす黒い灰色の空。まだ太陽が空にある時間帯にも関わらず辺りは薄暗く、いつ雨が降り出してもおかしくない空模様だった。

実際、街の通りも人通りは少なく静まり返っていて、シーラの視界に入るのと同じように北の学園群から下校する生徒たち数人だけだ。

「でも、昨日のって確かミューティレイクのお屋敷よねえ。あんな超豪華な屋敷に住んでるなんて、ますますあんたってミステリアスガールだわ」

と、ディアナは昨日の出来事を少々興奮気味に語ったが、対するシーラはあくまで淡々と答えて、

「単なる居候。私自身はただの一般人よ」

「ふーん。まあ、あんたの場合、嘘でもホントでもそう言いそうだけど。……そうそう。そういえばシーラ、あんた聞いた？」

「なに？」

「シェーマス先生が今月から戻ってきてるんだって」

「シェーマス先生？ ……ああ、シェーマスⅡフランシスね」

二回生の頃、薬草学を教えていた若い講師の顔を思い出してシーラは興味なさそうに呟いた。

ディアナはちょっと意地の悪い笑みを浮かべて、

「大丈夫よ。今度のはあの先生も学習して、きっとあんたには触れないようにするだろうからさ。……おっと。それじゃあたしはこっちだから」

「……あ、ディアナ」

「ん？」

珍しく呼び止められたディアナは不思議そうな顔でシーラを振り

返った。

「そういえば聞きそびれたけれど、あなた、昨日のことはどういうつもりなの？」

「へ？ あ、ああ、昨日のってティース先生のこと？」

ディアナはあっけらかんとした口調で、

「いやあ、こういうつもりってほどのこともないんだけど、どんな人なのかちょっと興味があっただけ。試しに誘っても危険はなさそうだったし」

（……確かに。あいつほど安全な男もいないわね）

と、シーラは思った。

それはそうだ。触れようとすれば自ら失神してしまうのだから。

……もちろん、誘った時点ではそんなことは知らなかったはずだが。

「それに、ちょっと話してみたら想像通りの人で。あの人ってホント、正直が服着て歩いているみたいなのね」

「悪知恵に回す頭がないだけよ」

相変わらずシーラの批評は辛辣である。

ディアナは笑って、

「そうかもしれないけどね。でもだからこそ、たまに馬鹿正直な言葉が心に響いちゃったりするんじゃない？」

「どうかしら」

視線を流して、

「まあ、いいわ。ちょっと確認したかっただけだから」

そんなシーラに対し、ディアナはちよつと冗談交じりの口調で、

「もしあたしが本気になったら協力してよね、シーラ」

「……それは無理よ」

「え？ どうして？」

シーラは小さなため息とともに答えた。

「他に……応援したい子がいるの」

「え。あー、そっかあ。あの先生、ああ見えてモテるのかあ」

「……」

それは誤解だとシーラは思ったが、敢えてなにも言わなかった。
ディアナの方もそれ以上は追求することもなく。

「じゃー、また明日ー」

「ええ。気を付けて」

ディアナと別れ、シーラは歩き出した。

(……嫌な天気だわ)

ミステリアスと評される仮面の下で、シーラは普通の人々と同じように憂鬱を小さなため息に変えて吐き出した。

雨が降りそうだからと、今朝、屋敷の者は彼女に馬車の使用を薦めたが、彼女はいつものようにそれを断った。庶民の登竜門であるサントニアにも馬車を使う学徒は多いが、個人所有の馬車で送迎される者は一握りだ。プライベートを詮索されるような行動は極力避けるようにしていた。

――が、この日に限っていえば、素直に馬車を使った方が正解だったかもしれない。

(あら。あの店、新しくできるのね……)

あまり目立たない通りに建築中の建物を見て、シーラは少し口元を緩めた。近場だし、もし洋服店なら今度覗いてみよう、と、そんなことを考えながら歩みを進めていく。

彼女の出で立ちは紺を基調にした長袖の服と膝ぐらいの長さの深緑色のタイトスカート、茶色のブーツ。衣服の部分部分に刺繍が入っているところに彼女のお洒落に対する意識が微かに垣間見えているが、全体的にいえば割と地味な装いといえるだろう。

ただしそれでも、彼女は目立つ。街を歩いていれば通り過ぎる人々の大半が彼女に視線を送るし、彼女自身もそれを感じていた。
が、しかし。

(……変ね)

それからさらに進んだところで、突如、空気が変わったように感じた。雨が降り始める前のじっとりとした空気に混じって、さらに嫌な雰囲気。

「……」

シーラは何度もこの感覚を覚えたことがある。彼女はそういったことに比較的敏感で、そして過去に一度、その感覚を覚えた直後に二人組の暴漢に襲われたことがある。

用心するに越したことはない。彼女の圧倒的なまでの魅力は、彼女が望むと望まざるとに関わらず憧憬と嫉妬、打算と欲望を全身に集め、それらはときに牙を剥く。

彼女はこの街に来てから、それらを理解する機会に充分すぎるほど恵まれた。

辺りを窺う。

それなりに大きめの通りだったが天気の良い日もあって辺りに人は少ない。人の多い大通りまではまだ距離がある。

(……まずいわね)

さっきまで潜めていた足音が背後から少しずつ近付いてきているのがわかった。

ポツ、ポツと雨が落ち始める。

「……」

振り返らずに少し歩みを速めた。

背後の足音も少しずつ速く。

辺りに人がいなくなるのを見計らっていたのか。絶妙のタイミングだった。

もう、疑う必要はない。

スカートの中に潜ませた暴漢撃退用の薬袋を右手の平で確認する。今日持ってきていたのはいつかの朝ティースを実験台にして試した薬で、目に入ると痛みとともにしばらく涙が止まらなくなる薬だが、

「――!?」

前方の路地から男が二人、同時に出てきた。足を止める。

と、同時に背後から声がした。

「叫ばない方がいい。下手をすれば命がなくなる」

「……」

背後から響いた声はシーラの背筋を微かに震わせた。

（声が据わってる……ただのゴロツキじゃない……）

全部で四人。そのうちの二人はただのチンピラのようなだったが、残る二人はもっと地に足のついた雰囲気を漂わせていた。

待ち伏せされていたところを見ると、最初から狙われていたらしい。

「……私に何の用？」

少なくともただの暴漢ではないことを悟ってそう詰問する。心当たりはなかった。

が、

「時間がない」

四人のうちのリーダー格らしき男は質問に答えず、親指で“ついてこい”とジェスチャーをした。

「大人しくしていりや命は助かるかもしれないが、騒ぎ立てれば確実に命はない。……それに、誰か通りかかったらそいつも巻き添えになるぞ」

「……」

男たちが全員懐に刃物を忍ばせていることはすぐにわかった。男たちがどうやら本気であることも。

それを確認して、

「……わかったわ」

肩を落としたシーラに、前方と背後にいた男が一人ずつ彼女に近付いていく。

「物わかりいいじゃねえか。好きだぜ、そういう女——」
手を伸ばす。

と。

「——っ」

がしっ。

背後から肩に手をかけようとした男の体が一回転した。

「なっ!!?」

「――触れるな、下郎」

ドスッ!!

「っ!!!!?」

背中からまともに叩きつけられた男が、さらに股間を全力で踏み付けられ悶絶する。

「て、てめえっ……!」

「っ……!」

飛びかかってきたもう一人の男に対し、体をかわしながらすれ違い様、忍ばせていた薬袋を投げつける。

紐の緩んだそれは寸分変わらず中の粉末を男の顔面にぶちまけた。

「な、なんだこりゃ……っ……ぐぎゃああああああ!」

男はあまりの激痛に、顔面を抑えて地面をのたうち回った。

「――見くびらないで」

二人を撃退するまでの間はほんの五秒ほどの出来事。それは彼女が身につけた護身術と、恐怖に屈しない意志の強さの賜物だった。

「お前たちのような下衆に、簡単にいいようにされたりしないわ」が、しかし。

(あと二人……)

奇襲と、奥の手。カードはどちらも切った。これ以上の手はない。

だが、シーラは臆することなく視線を上げ、そのリーダー格の男に鋭い視線を合わせた。

「……後悔するぞ」

男の言葉にシーラは口元を歪めた。

「やってごらんない。下等なお前たちと違って、私には死よりも恐ろしいものが無数にある。それを守るためなら死など少しも怖くない」

背筋に走る震えを懸命に堪えて。だが、口にしたのは心からの言葉だ。

「……」

微かに、ほんの微かに男が気圧されたように見えた。だが、それは一瞬のこと。

——動く。

「っ……」

身のこなしは明らかに武術を身につけた者の動き。護身術に覚えがあるとはいえ、一般人の領域を出ない彼女に太刀打ちできるものでないことは確かだった。

（……ティース）

それはほんの一分にも満たない出来事。

そのときまだサンタニア学園にいたティースに、それを察することなどできようはずもなく——。

雨を裂くように、甲高い鳥の鳴き声が灰色の空に響き渡った。

その4『ツバサ』

——雨の中、鳥の鳴き声が響き渡った。

距離が詰まる一瞬に、シーラの頭には様々な思考が過ぎる。

前後から同時に迫る男たちの足は素早く、静かだった。その身のこなしは常人のものではなく、明らかに戦うことを目的として鍛えられたもの。手にした刃物を使う素振りが無いのは、おそらく殺す気がないからだろう。だが、だからといって大人しく付いて行っただとしても命の保証はない。いったん虜になれば非力な彼女がそこを抜け出すことは難しいのだから。

では、どうすればいいのだろうか。

彼女の手にあって武器になりそうなものは鞆と傘。傘は突き出すことで牽制には使えるだろうが、この二人の男たちを撃退するにはあまりにも頼りなさすぎる。悲鳴を上げたところで他人が駆けつけるには時間がなさすぎるし、この雨の中でどこまで届くだろうか。それに相手の力量を考えると、下手をすれば犠牲者を増やしてしまうことにもなりかねない。悲鳴を聞きつけたのが偶然通りがかった腕利きの剣士だなんて、そんな都合のいいことがそうそうあるはずもないのだから。

(……ダメ、か)

最初の二人を撃退したことで、あるいは相手が少しは警戒して時間を稼げるかとも考えたが、現実はそう甘くなかった。

八方塞がりだ。

こうなった以上は無理に抵抗せず、大人しくしている方が上策だろうか。あるいは何か抜け道が見出せるかもしれない。

と。

シーラがそう考えたときだった。

甲高い鳥の鳴き声が灰色の空に響き渡る。

(……?)

これで三度目だった。雨の中、不自然とも思える鳥の鳴き声。それはまるで何かの合図のように。

「！」

そして遠くから聞こえてきた、軽快な足音。

「……?　なんだ？」

男たちも気付いた。

遠くから聞こえる足音。

いや。

すでに遠くない。

「！」

雨を切り裂いたのは、遠吠え。

雨粒を弾きながら疾走する、銀色の影。

銀色の獣。

「なんだ……!?　狼だと!？」

男は咄嗟に腰の短剣を抜き放った。

だが、銀の体毛を持つ大柄な狼は速度を緩めることなく、首をグツと下げ地を這うように男に迫ると、振り下ろされた短剣をかいくぐり男の下腹部に激突した。

「ぐへっ……!!！」

鈍い音とともに決して軽くはないだろう男の体が宙を舞い、五メートルほど後方に吹き飛ぶ。と、狼は吹き飛んだ男に追い打ちをかけるでもなく、そのままシーラの足元に駆け寄るとそこでピタリと足を止めた。

「お前……」

シーラは目を見開いて足元の狼を見つめる。低い唸り声をあげるその姿には見覚えがあった。

「確かいつもセシルと一緒にいる……マルス？」

ミューティレイクの屋敷でいつも見掛ける狼。それが何故ここに……当然の疑問だったが、今はそんなことを考えている状況ではな

い。

「……」

男の動きは止まっていた。吹っ飛ばされた男も左手を下腹に置いて脂汗を浮かべながらよろりと立ち上がる。

目配せ。

彼らもそこいらのチンピラとは違う。おそらくマルスの動きがよく訓練された獣のものであると悟ったのだろう。

一瞬の間の後、

（！ 逃げる……！？）

一言も発さずに背を向けて退散する男たち。シーラに撃退され地面を転がっていた二人も足をもつれさせながら一目散に逃げていく。鮮やかな引き際。

やがて、パシヤツと水たまりの弾ける音がしてシーラは我に返った。

「大丈夫ですか、シーラさん！」

「……セシル」

やってきた少女に視線を合わせ、ようやく緊張の糸が緩んだ。ホッと息を吐いてその場にしゃがみ込む。

「助かったわ……ありがとう」

マルスの濡れた背中にとっと手を置くと、狼はチラッと彼女を見て、なんでもないというようにすぐそっぽを向く。まるで言葉が通じているかのようだ。

彼が駆けつけていなかったらどうなっていたことか。そう考えると微かに肩が震えた。

シーラは次に心配そうな顔のセシリアを見上げ僅かに微笑むと、「セシル。あなたが連れてきてくれたの？」

「あ、いえ、マルスは私を迎えに来てくれただけだったんですけど、セレスが危ないって教えてくれて」

「セレス？」

「はい」

セシリアがゆっくりと上空を見上げる。

と、同時に、

「！」

ばさっ、と、黒い影が視界を横切って空から舞い降りた。

「それが……セレス？」

鷹だった。黒い、まるで女性の髪のような漆黒の翼を持つ鷹。

そういえば、先ほどの不自然な鳥の鳴き声。どうやらこのセレスという鷹が発した声だったらしい。

「セレスははじめましてですか？　じゃあご挨拶。ね、セレス」

セシリアがそう言ってくちばしを撫でると、セレスはじつとシーラを見つめ喉を微かに鳴らした。

やはり言葉が通じているかのようだった。

「……あなたって不思議な子ね」

シーラは思わず笑みをこぼす。

「まるで猛獣使いのようだわ。でもおかげで助かった。本当にありがとう」

「え？　あ、いえ、それなら私ではなくー……」

セシリアは小さく手を振って、肩に乗った黒い鷹――セレスの背を撫でた。

「マルスとセレスがとてもお利口さんなのです。誉めてあげてくださいね」

「ええ。あとで何かおいしいものでもプレゼントさせてもらうわ」

ピクリとマルスの耳が動く。……どうやら喜んでいるようだ。

シーラはゆっくりと腰を上げた。傘を開き、雨に濡れてしまった髪を掻き上げて小さく整える。そういえば服もびしょ濡れだ。ピツタリと肌に貼り付く感触が何だか気持ち悪い。

「寒くありませんか？　お屋敷まで、大丈夫ですか？　もしよかったら私の上着を――」

「いいわ、ありがとう、セシル。……それより早くここを離れましょう。もしかしたらさっきの連中が仲間を連れてくるかもしれない

わ

一瞬見せた疲れや安堵の色はすぐに消えて。そう言った彼女の表情はいつもの凜としたものに戻っていた。

シーラがそんな危険な目に合っていたことなど露ほども知らないティースはその頃、放課後の学園で情報収集に励んでいた。

「あの日のアリエルさんの行動ですか？」

「そう。急な心臓発作だって聞いたから、もしかしたら激しい運動でもしたのかなって」

そのコートニという名の短いお下げの少女は、アリエルにいつも付き従っていた少女だ。一昨日も彼女が倒れる直前まで一緒にいたらしく、話を聞きに来たのである。

「一昨日は確か授業を終わってお昼を食べようとしたら、アリエルさんと仲の悪い子と鉢合わせて……その後、オーウェンっていう男の子と一緒にお昼を食べたみたいです」

「みたい、ってことは、君はその場にいなかった？」

「はい。アリエルさんが別のところで食べてくれて言ったので……でも、どうしてそんなこと？」

「あ、いや、ごめん。その、なんか気になることがあると放っておけないタチで」

真っ赤な嘘である。放っておけないどころか、どちらかというと触らぬ神に祟りなしが信条なのだ。

「彼女、何かおかしいところはなかった？ 体調が悪そうだったとか……」

「うーん。そういえばいつもと比べてまだマシ……じゃなかった。いつもほどは元気じゃなかった気がしますけど、でも私、彼女とはそんなに付き合いが長いわけじゃなかったので、よくはわかりません」

「でも君はいつもアリエルさんと一緒だったって聞いたけど？」

「最近の話ですよ。あの子、強引だったから」

「……なるほど」

素っ気ない口調から、どうもこのコートニーという少女もアリエルのことはあまりよく思ってたらしい。

（しかし、嫌々でも付き合わざるを得なかったってことか……）

その辺の事情がティースにはいまいち理解できない。

「あの。アリエルさん、もしかして病気じゃなかったんですか？」

と、逆にコートニーが不安そうな顔で聞いてきた。

「ああ、いや！ ぜんぜんそんなじゃないよ！」

ティースは慌てて否定し、話を切り上げることにした。

「それじゃ、君はその後アリエルさんには会ってないんだよね？」

どうもありがとう」

「いえ」

コートニーという少女はペコツと礼儀正しく頭を下げて去っていった。

（うーん。ってことは、最後に一緒にいたのはオーウェンくんか……）

……そういや昼にアリエルさんと話をしたって言ってたっけ）

と、いまさらそんなことを思い出しながら、どんより曇った空の下、ティースは学園の敷地内を歩く。今日の授業はほとんど終わったらしく、敷地内に残っている生徒は半分ぐらいになっていた。

（雨、降ってくるかなあ）

空を見上げる。傘は持ってきていたが、降らないのであれば降らない方がいい。

と、彼がそんなことを思った矢先。

ポツ、ポツ。

（……あーあ）

降り始めた。だが幸い雨足は遅い。

（今日はもう無理か……）

なんて心の中で呟いたとき、雨とともに人の足音が聞こえて振り

返る。

「ティース様。待ちました？」

「ああ、リイナ。いや、そうでもないよ」

やってきたのは、今日も彼の護身術の授業を手伝ってくれたリイナだ。

「降ってきましたね」

「降ってきたなあ」

リイナの口調がどこか弾んでいるように聞こえたのは、水の精である故か。晴れの日よりも雨の日の方が元気になるようだ。

「ところで、どう？ なにかわかった？」

ティースの問いかけに、リイナは小さく首を振って、

「いいえ。みなさん、その“クウエルダ”という薬の噂は知っててもそれ以上のことは知らないそうです」

「そっか。……そりゃそうだよな」

何しろ麻薬の話である。たとえそれ以上を知っていたとしても、いきなり尋ねて正直に話してくれるはずもない。

「ただ……その薬のこととは関係ないんですけど、亡くなったアリエルさんという方のことで……」

「ん？」

「彼女、以前はそれほど目立たない方だったらしいんです。それが一年ほど前から急にたくさんの方人を連れて歩くようになったらしいですよ」

「一年前から？」

それは確かに不思議な話だ。

（そういやさっきのコートニーって子も、ムリヤリ連れ回されてたみたいな言い方してたもんな……）

いや、しかし。いくらアリエルが裕福な家の出であったにしても、この学園でそんな横暴な振る舞いができるはずはない。人望があって人が勝手に付いてまわるというのならともかく、一年前まで目立たない程度の存在だったというのなら、なおのこと。

（……麻薬の力？）

とっさに思考が飛躍したが、いや待てと考え直す。

（シーラもオーウェンくんも、彼女はそんなことするような人間じゃないって言ってたしなあ。それに、もともとお金持ちの彼女がリスクを侵してまでそんなものに手を出すかな……？）

ないとは言い切れない、が、腑に落ちない。

（ひとまずオーウェンくんにもう一度話を聞いてみなきゃ……）
ポツ、ポツポツ……

「うわ、強くなってきたか」

思考をいったん中断し、傘を広げる。そして同じように傘を広げたリィナを振り返って、

「生徒もほとんど帰ったみたいだし今日はこのくらいにしよう」

「はい」

もちろん今日一日で何かわかんと思っていたわけではないし、あまり大っぴらに調べ回ると警戒されるということもある。

と、そこへ。

「せんせー」

「え？ ああ、オウムくん。これから帰りかい？」

背後からやってきた小柄な少年はティースの教え子の一人だった。今日、ようやく全員の顔と名前を完全に覚えたところである。

オウムはチラッとリィナの方を見て、

「せんせーはこれからリィナさんとデートですか？」

「へ？ ばっ……そんなわけないだろ！」

「あはは、せんせー、さよーなら」

慌てて否定するティースを可笑しそうに笑いながら、オウムは逃げるように去っていった。

「……まったく。今時の子供は」

などと、三つか四つしか違わないのに妙に年寄り臭いことを呟くティースだったが、隣にいる少女のことをついつい意識してしまっただけのことはいうまでもない。

しかし一方のリイナはといえば不思議そうな顔で、
「ティース様？ デートというのはなんのことですか？」

「あ、いや。うん……」

嘘を教えるわけにもいかず、かといって正直に答えるのも何やら
気まずかったので、

「デートするってのは、つまり遊びに行くってこと……かな」

嘘ではない。大事な部分を端折っているだけで。

リイナはますます不思議そうに、

「はあ、遊びに行くことをわざわざデートというんですか。難しい
んですね、こちらの専門用語は」

「……」

何やら微妙にズレた知識を与えてしまったようだったが、今さら
訂正するわけにもいかず。

（まあ……きつとそのうち誰かが詳しく教えてくれるさ。うん。別
に間違ってるわけでもないし）

「じゃあ、ティース様」

そんな彼の心中などもちろん知る由もなく。リイナは柔らかに微
笑んで言った。

「今度休みが重なったときには、シーラ様とエルさんと四人でデー
トしましょう」

「……」

やはり早いうちに訂正した方がいいのかもしれない、と、ティー
スは思った。まあ、彼ら四人の休日が重なるなんて、どれだけ先の
ことになるかわからないが。

さらに雨が強くなってきた。

学園から出ると、雨に濡れた斑色の猫が前を横切って路地に駆け
ていく。

（チェリンの花も終わりかな……）

雨にしおれたような桃色の花びらを見て、そう思う。このネービ
スではこの花が散る頃から徐々に太陽の日射しが強くなってくる。

（その頃にはデビルバスター試験、か）

どうなることやら。どうにも自分が成長しているという実感はないのだが、しかしいずれは通らなければならぬ道である。

ガラガラガラガラ……ッ

「？」

顔を上げる。

雨に煙る通りの向こうからやってきたのは何やら急いだ様子の馬車だった。それは特別珍しい光景ではなかったのだが、ティースは横を通り過ぎていくその馬車を目で追いながら、

「あれ、リイナ？ あの馬車ってどっかで見たような——」

「あ、いたっ！！」

突如、女性の声が響いたかと思うと、馬車はその場に急停止する。

「？」

「ティース様。あの馬車はお屋敷のものでは……」

リイナが言い終わらないうちに、馬車の中から見覚えのある少女がひよこつと顔を出した。

「ティース様！ リイナ！」

「あれ？ 君は確か——」

見覚えはあるのだが——しばらくの空白。

「ヴァレンシアさん？」

そう言ったのはリイナだった。

「あ、そうだ。ヴァレンシアだ」

少女はミューティレイクのハウス・メイドだ。ティースの部屋を担当するパメラという少女と仲の良い子で、顔と名前までは知っていた。

「どうしたんだ？ 馬車なんか使って——」

問いかけるティースに、ヴァレンシアは馬車から飛び降りるなり雨も気にせず駆け寄ってきて言った。

「迎えに来たんですってば！ ティース様！ リイナも、急いで急

いで！ シーラ様が大変なんです！！」

「え？」

「ヴァレンシアさん！ 何があったんですか！？」

「説明はあとあと！ ほら、乗った乗った！！」

ヴァレンシアは慌てた様子でとにかく二人を促す。

「あ、ああ……」

戸惑いながら馬車に乗り込んだティースたちは、そこで初めて、シーラが暴漢に襲われたらしい話を耳にしたのであった。

「シーラ！」

バアンツ！

乱暴に開け放たれたドアに、室内にいた全員の視線が振り返る。が、入っていった本人はそんなことこれっぽっちも眼中にない様子で一直線に駆け寄ると、

「け、怪我は！ どこを怪我した！ 大丈夫なのかッ！？ ま、まさか顔じゃーも、もし跡が残ったりしたら申し訳がー！！」

「ちよつと、ティース……」

両腕を掴まれたシーラが困惑の表情を浮かべる。

「そ、そうだ、医者！ 医者と呼ばなきゃ！ 医者を――」

「医者ならここにいろよ、ティースくん」

「マ、マイルズさん！」

シーラのすぐ横にいるのが屋敷の主治医マイルズであることに気付いて、

「マイルズさん！ シーラの怪我は……いや、いったい何があったんですか！ 怪我はちゃんと治るんですかッ！？」

マイルズは答えた。

「いやあ、治すってのはちよつと難しいかもねえ」

その言葉に心臓の鼓動が跳ね上がる。

「そ、そ、それってどういう——」

マイルズは両手を広げて、

「だって怪我してないからね。治療のしようがない」

「へ？」

シーラの両腕を掴んだ体勢のまま、ティースは固まった。そしてゆっくりと視線を彼女の方へ向ける。

「……馬鹿」

呆れたような声。

そこでティースはようやく彼女の様子を観察するに至った。

装いはまったくの普段着。顔——ティースの行動に若干驚いたようだったが、それ以外はいつもと変わらない、近くで見るとよりいっそう際だつ美しさのまま。髪が若干湿って乱れているが、泥などが付いていないところをみるとあるいは風呂上がりなのだろうか。もちろんどこかに包帯を巻いているというようなことはないし、そもそも大怪我をしていたらこんなにも普通に椅子に腰掛けていたりはしないだろう。

「ぶ、無事なのか……？　じゃ、じゃあ、暴漢に襲われたっていうのは……」

マイルズは苦笑して、

「どうやらヴァレンシアがちゃんと話さなかったらしいね。見ればわかるように、どこも怪我はしてないよ。危なかったことに変わりはないけど、彼女のおかげでね」

「え？」

ティースはそこで初めて、室内にもう一人いることに気付く。

「セシル？　君がシーラを……？」

まさか、この可憐でいかにも非力そうな少女が暴漢を追い払ったのだろうか、などと、どう考えても有り得ないことを一瞬考えてしまったティースだったが、もちろんそんなことはなく、

「あ、いえ、私ではなく——」

セシルは小さく手を振った。

正確にいうと、そこにいたのは一人と二匹だった。

「マルスとセレスのおかげです。セレスが鳴き声で教えてくれて、マルスが駆けつけてくれたんですよ」

膝の中には体を丸めた銀毛の狼。

右肩には女性の髪のような黒羽を濡らした一羽の鷹。

「マルス……と、セレス？」

その銀毛の狼がマルスという名で、庭でよく彼女と遊んでいることはティースも知っていた。

確認するようにシーラを見ると、彼女は頷いて、

「セシルの言うとおりよ。――それより」

すっと目を細めた。

「腕、そろそろ離してもらってもいいかしら」

「へ？ うわ、ごめん！」

慌てて手を離し、さらに一步後ずさった。

それを見ていたマイルズの眼鏡がキラリと光る。

「なるほど。シーラくんに触れても平気ってのは本当、か」

バアンツー！！

「シーラ様！ お怪我は！？ お、起き上がったたりして平気なんですか！？」

「……はあ」

血相を変えて飛び込んできたリィナに、シーラは呆れ顔でため息を吐いたのだった。

「――に、しても」

それから十分ほどして。リィナが状況を把握しマイルズとセシリアが部屋を去った頃、ティースはようやく冷静に事情を聞くに至っていた。

「どうしてこんなことになったんだ？ お前を襲った四人組ってのは何者なんだ？」

「わからないわ」

カチャ、と、ティーポットがシーラの手元で乾いた音を立てる。その手付きを見る限りいつもと変わったところはなく、襲撃のショックも今はほとんど残ってないようだ。

答える声もまた冷静で、

「アオイさんにも話したけど、待ち伏せされていたらしいことは確かよ」

「じゃあ人さらいとか？」

治安の良いネービスの街では珍しい。だが、そういった犯罪組織がまったくの皆無というわけではないし、彼女ほどの容姿であれば商品価値も高いだろう。と、ティースはそう考えたのだが、シーラは否定的だった。

「どうかしら。ああいう連中はもっと狡猾よ。大した理由もなく今回ほどリスクの高いことをするとは思えないわ。――リイナ、砂糖は何杯？」

「あ、すみません。十杯お願いします」

「十………わかったわ」

両手を広げて十杯をアピールしたリイナに、シーラは素直に頷いてカップに砂糖を流し込んでいったが、よく見ると口元が微妙にヒクヒクしている。彼女も一般的な女性と同程度には甘い物が好きだし、好物の林檎にハチミツをかけて食べるのが好きだったりもするが、さすがにリイナの超甘味覚にはついていけないようだった。

「はい、リイナ」

「ありがとうございます」

リイナにそれを渡した後、自分の紅茶には砂糖一杯半と少量のミルク、もう片方には砂糖一杯を入れて軽くかき混ぜ、何も言わずにティースの前に置く。

「あ、すまん。……あちち、それじゃあ――」

少し口を付け喉を湿らせて、ティースは話を続けた。

「何かちよっとしたことでも、心当たりはないのか？」

「恨みなら随分買ってるでしょうけど。ここまでのことをされると

は思えないわね」

紅茶のセットを脇へ寄せながら、シーラは思い出したように一瞬だけ長い睫毛を震わせた。

「連中はたぶん、ああいうことを生業にしてるヤツらよ。あのまま連れ去られていれば命の保証はなかったと思うわ」

「……」

その言葉にティースは一年前、彼女が人魔にさらわれたときのことを思い出し、いまさらながらに肝を冷やした。

もちろん今回のことは予測のしようもなく、運が悪いとしか言いようがないのだが。

（……運？ いや、待てよ——）

と、考え直して、

「なあ……シーラ」

「なに？」

「今回のこと、例の麻薬が絡んでるって可能性はないのか？」

「え？」

ティーカップを持つシーラの手が止まった。意外そうな顔だった。だが、視線を泳がせ思考を巡らせた後、

「それはないと思うわ。私は例の噂以上のことなんて知らないし、もちろん関わったこともないのよ」

「でも、相手が勘違いしたって可能性は？ アリエルさんがもし麻薬のことで何か知っていて殺されたんだとしたら、彼女とよく一緒にいたお前のことを狙ってもおかしくないんじゃないか？」

「まさか。考えられない」

シーラはティースの推測を完全に否定した。

「アリエルが私を嫌っていたことは学園でも有名よ。その考えで行くなら、私より先に彼女の友達を狙うはずでしょう？」

「でも、アリエルさんって友達とか少なかったらしいじゃないか」

「あら、それは初耳ね。でも、だからって私があの子と親しかったなんて勘違いをする人間はいないわ。それなら……たとえばオーウ

エンの方がよっぽど危険じゃないかしら」

「オーウェンくん？ ああ、そういや彼は――」

呟くように言った後、ふいにシーラと視線が重なる。

「え、えっと……そっか、オーウェンくんの方が危険だよな。うん、そうだよな」

「……」

急にどもりだしたティースにシーラは不審そうな目を向けたが、すぐに視線を逸らして何も言わなかった。

そこへリイナが、

「オーウェンさんというと、ティース様の授業を受けている男の方ですか？ シーラ様と仲良しの方ですよ」

「あ、ああ、そう。彼はシーラの友達でね。亡くなったアリエルさんとも仲が良かったらしいんだ」

そう答えるティースに、シーラは淡々と言い放った。

「友達じゃないわ。恋人よ」

「あ、そ、そうか。ま、まあとにかく仲がいいんだ」

「……」

「恋人？」

一方、そんな微妙な空気を察した様子もないリイナは不思議顔で、
「シーラ様にはティース様以外にも恋人がいらっしゃったんですか？」

「え？」

これにはシーラが怪訝な顔になる。

（あ。リイナは“恋人”の意味を勘違いしてるんだっけ）

と、思い出したが、彼がそれを口にするより早く、

「なにを言ってるの、リイナ？ 私とティースは恋人なんかじゃないわ」

「え？ でも、恋人というのは確か“大事な人”という意味では？」

「……ああ」

それでシーラもようやく理解したようだ。

苦笑して、

「それは少し違うわ、リイナ。恋人というのは……そうね。家族以外で、一番大事な異性のこと。それもお互いにそう思い合っている人のことよ」

だが、リイナはますます不思議そうな顔になった。

「それならなおさら、シーラ様の恋人はティース様ではないのですか？」

「……リイナ」

シーラは深いため息を吐くと、

「それはきつと昔のイメージよ。もう思い出せないぐらい昔の話」
さらりとそう答えた。

(……昔の話、か)

それは単に恋人ではないということを主張したいだけなのか、あるいは今はもう大事な人間ではなくなったということを言いたいのか……前者であればもちろんその通りだからいいのだが、後者であればティースにとって少々酷なことである。

(はあ、俺は今も昔も変わらないつもりなんだけどなあ)

「とにかく話を戻すわ。……ティース？」

「え？ ああ、ああ、そうだな」

ティースは気を取り直して、

「じゃあ、今回のこととはまったく関係ないって考えていいのかな」
「断言はできないけれど……少なくとも私が狙われる理由は今のところ思い当たらないわね」

ティースは納得して、

「そっか。ならいいんだが……でも気を付けてくれよ。また同じことが起こらないとも限らない」

「ええ。さっきアオイさんと話したのだけれど、大通りまでは誰かが送ってくれることになったわ。……お前こそ、わかってると思えうけれど、しばらくは学園での行動に気をつけなければダメよ。特に昼食とか口に入れるものは全て」

「ああ、それは大丈夫。授業はだいたい午後からだし、ほとんどここで食べてからだから」

「ならいいけど……リイナ、あなたもよ。食べ物だけじゃなく飲み物もね」

リイナはニツコリと微笑んで、

「飲み物に関しては心配ありません。液体に危険物が混入されていれば水精が教えてくれますから」

シーラは驚いた顔をして、

「今の状態でもそんなことができるの？」

もともと強大な魔力を持つ彼女も、今は人の姿と代償に大半の魔力を失っている。

だが、リイナは答えて、

「ええ、これは魔力の強さとは関係のないことです。ティース様の口にするものは私が全てチェックしますので安心してください」

ティースは感嘆の声をあげた。

「さすがは魔王の一族だなあ……水精だなんて」

「そんな大したことでは……」

はにかんだ笑顔を浮かべると、

「その気になればティース様にもできることですよ」

「え？ まさか」

と、ティースは笑ったが、リイナは真顔で、

「水精は心の優しい人が大好きなんです。だからティース様なら大丈夫だと思います」

「でもそれって、水魔だからできることだろ？」

「ええ。でも——」

リイナはそっとティースに手を伸ばす。一瞬緊張して身構えてしまったが、彼女の手はティースの体ではなく、その脇に置いてあった彼の武器に伸びていった。

「ティース様にはこれがありますから」

「え？」

それは彼の愛剣“細波”だった。

「彼女たちはいつもティース様に呼びかけているんですよ。……もつとあなたの力になりたい。もつとあなたを助けてあげたい、と。きつと風の精たち——私には聞こえませんが同じ気持ちのはずです」
「……」

ティースは愛剣“細波”を手に取り、柄の部分に埋め込まれた宝石を耳に当ててみた。

「……なにも聞こえない」

「そうですか……」

リイナは少し残念そうだったが、すぐに気を取り直した様子で、
「でも意識してあげてください。そうすればいつかきつと」

「うーん」

唸ってマジマジと細波を見つめるティース。……どう眺めてもそんなものが聞こえるような気はしなかった。

今日はいっそう夜の闇が濃い。

——もう一刻の猶予も許されない。

まさか。まさかこんなことになるなんて。

出来うる限り不自然じゃないように。平静を装って歩く。

しかしなんにせよもう後戻りはできない。

少しずつ歩みが早くなる。

あの講師はきつと、そう。最初から“そういう目的”でやってきたに違いないのだ。

何故最初から気付かなかったのか。クウエルダの噂が表面化したこの時期にミューティレイクの関係者が講師を装って来るなんて偶

然のはずがないのに。

冷や汗が背中に浮かぶ。

悪くない。

私は悪くない。

悪いのはあのアリエルだ。

彼女が私を脅したりするから。私はただ、欲しがる人に薬を斡旋してあげていただけなのに。彼女が私を脅したりするから。だから私は――

いや。いやいや。今はそんなことを考えるより、どうするかだ。

いや、違う。

どうやって、あの男を黙らせるか、だ。

「……」

ピタリ、と、足を止める。

……やるしかない。

どうにかして、あの男を殺すしかない。

だが、どうやって。

殺し屋とはもう連絡が取れない。新しい殺し屋を探すにしてもそれでは時間がなさすぎる。何より、これ以上“オーナー”の手を煩わすようなことがあれば今度は自分が切られかねない。

……ああ。ようやく。ようやく憂いが消えたと思ったのに。ようやく自由になれたと思ったのに。

こんなことなら殺さなければ良かった。アリエルだって細かい証拠を掴んでいたわけじゃない。言うとおりに辛抱していれば。

でも、もう遅い。

こうなったらやるしかない。

手の中の小さな袋を握りしめる。

「やるしか……ない」

泥沼にハマろうとしているのは自分でも感じていた。が、もう後戻りはできない――

翌日は快晴だった。

「あれ？ オウムくんは今日は休み？」

講義開始とともに欠席者がいることに気付いてティースはそう尋ねてみたが、生徒たちからは口々に知らないという言葉が返ってくる。

色々な学科から生徒が集まるこの特別講義ではここで初めて顔を合わせるという生徒たちも少なくない。資料によるとオウムという生徒は声楽科の所属で、その学科から来ているのは彼だけのようにだった。他の生徒たちがその所在を知らないのも仕方ない。

一人の男子生徒が手を挙げた。

「朝だけど、あいつ見掛けましたよ。サボりじゃないっすか？」

「ん、そうか……」

曖昧に頷きながら昨日会ったときの様子を思い出す。

確かに真面目な生徒というイメージはないが、これまでは楽しそうに講義を受けていただけに少し意外だった。まあ、もともとこの講義自体、彼らが普段学びに来ているものとはかけ離れた内容の授業だし、突然受ける気がなくなったとしても不思議ではない。あるいは何らかの事情で遅れてくるということも有り得る。

「それじゃ今日の講義を始めようか」

ともかく、いつものように講義を始めることにした。

今日は休みを挟んで五回目の講義。実技演習は今日が三回目です。生徒たちもそれなりに慣れてきたらしく、ティースが最初にやり方を教えると後はそれぞれ生徒だけで色々工夫しながら練習しているようだった。

（やっぱみんな頭いいんだなあ。俺とは大違いだよ）

などと、部屋の端っこに座って微妙に退屈を持て余し大きなあく

びなんかしていると、

「せんせー。ちょっと、ちょっと」

「？」

顔を上げると女生徒の固まりの方で、ディアナが手招きしていた。

「どうかした？」

何かトラブルがあったのかと思ったが、女生徒たちはリイナを中心に和気藹々と練習を続けていたし、特に問題があったようには見えない。

「ちょっと、ちょっと」

ニコニコしながら手招きするディアナ。どこことなく嫌な予感がしつつも無視するわけにはいかずティースは腰を上げた。

「どうかした？ 練習は？」

「今は休憩。みんなで相談して交代で休むことにしてるの」

「ああ、なるほど」

適度に休むようにとは言ったものの、細かい指示を出したわけではない。見るとディアナの他にもう一人休んでいる女生徒がいた。

「ほら、座って座って。先生だって暇そうにしてたじゃない」

「い、いや、僕はちゃんとみんなが怪我しないように見守ってて……」

「あくびしてたくせに」

ハッと口を押さえる。

「そ、それはたまたまだよ。人間、あくびの一つや二つするもんだ」なんて苦しい言い訳しながらも、促されるままディアナの隣に腰を下ろした。

するとそれを見て、休んでいたもう一人の女生徒が、

「あ、なにになに？ どしたの、ディアナ？」

興味津々といった表情でやってくる。

彼女はアドーラという名の生物学科所属の女生徒だ。年齢は確かディアナと同じ十六歳。今回講義を受けている生徒の中では一番大柄で見るからにボーイッシュな少女だった。

「先生が面白い話をしてくれるんだってさ」

「へええ、そりゃ楽しみ」

「ちよっ……そんなこと言っていないって、まったく」

二人の少女に挟まれてティースは何とも落ち着かない気分になった。

（参ったなあ……）

頭を掻きながら視線を彷徨わせっていると、ふと練習に励むシーラと目が合ってしまう。すぐに彼女の方から視線を逸らしたが、どうやら彼が余計なことを言わないか気になっているらしい。

（大丈夫だよ……たぶん）

なんだかんだと失態を見せているだけに強気になれないのが悲しいところだ。

「あ、先生、またシーラさんの方ジッと見てた。今日これで四回目」

「え、あ、いや」

指摘してきたのはディアナではなくアドーラの方だった。

ティースが慌てて視線を戻すと、ディアナが口元を微かに緩ませて、

「気を付けた方がいいよ、先生。この子、他人を観察するの得意なんだから」

「そ、そうなんだ？ ……生物学科だからかな？」

「あははっ、それ、あんま関係ないです」

アドーラはケラケラと笑って、

「でも、先生。あの子はやめた方がいいんじゃないですか。噂じゃあの子にフラれて学園止めた講師もいるってぐらいで――」

「あ、アドーラ。それ、もうあたしがだいぶ前に言ったよ」

「え？ あ、そっか。あんたってあの子と仲良しだもんね」

「先生はシーラには興味ないんだってさ」

ディアナがそう言うと、アドーラは驚いて、

「え、ホントに？」

「うんうん。ね、先生？」

ディアナに同意を求められティースは苦笑しながら、

「え？ あ、ああ、そりゃまあ、なんていうか、講師だからね」

「へええ」

アドーラは感心した顔をして、

「でも実際、講師とかなんとか関係ないです、あの子の場合。あたしの彼なんか、一緒に歩いているときでもあの子と擦れ違うとずっと目で追ってますし。足踏んづけてやんないと元に戻らないんですよ。……まあ、正直、あたしの目から見てもしょうがないかなって思いますけど」

「……そ、そっか」

なんとも反応に困ってしまう話だったが、彼女の明るい表情を見ると、あるいは笑うところだったのかもしれない。

ディアナはうんうんと頷きながら、

「でもまあ、目で追うくらいならまだマシじゃない？ あたしもシーラのそばで色々見てきたけど、中には自分の彼女ほっぽって話し掛けてくるヤツとかいるもん」

「ああ、それよりはマシかな。……ま、どっちにしろあいつみたいな冴えない男、あの子に相手にされるわけないけど」

「あはは。聞いたら泣くよ、彼」

ティースを挟んで可笑しそうに笑う二人。

あまりに息の合ったやり取りにティースはふと疑問に思って問いかけた。

「君たちって、もしかして前から仲良しなのかい？」

「え？ あ、はい」

アドーラが答える。

「実は一回生のとき、今回みたいな学科ごちゃ混ぜの講義で私とディアナと、あとコートニーっていう社交学科の子と同じ班になって、すぐ仲良しになったんです」

「……？」

「今までずっと音沙汰なかったくせに」

ディアナがすぐに突っ込むと、アドーラはケラケラと笑って、「ごめん。勉強が忙しくて、なかなか他の学科までは顔出せないのよ。今年三回生に上がったのだってギリギリだったんだから」

「彼氏と遊ぶのに忙しかったんじゃないのお？」

「そんな余裕ないってば。ウチの店だって最近雲行き怪しいんだから……って、それならあなたみたいに頑張って学費免除受けるよって話だけど」

「あはは、あたしは別に家のために頑張ったりなんてしてないけどねー」

「でもあれからお母さん一人で大変なんですよ？」

「いやあ、あの母はあたしに似て、なんとなーくどうにかしちゃうタイプだからさあ」

楽しそうに会話を続ける二人の間で、結局何のために呼ばれたのかわからないティースはしばらく黙っていた。視線の先ではリイナがシーラと何やら言葉を交わしており、そのさらに向こうでは男子生徒たちが練習を続けている。

が、ティースはそのときまったく別のことを考えていた。

（社交学科のコートニーって……あのアリエルさんと一緒にいた子のことかな……）

社交学科といえばアリエルが通っていた学科でもある。つまりあの二人は同じ学科で——まあそのこと自体は特に不思議でもなんでもないのだが。

「……」

なにか拭いきれない違和感が残った。

（コートニー＝シッドル、か……）

目立たない地味な印象の少女。だが、よくよく考えると彼女はアリエルともっとも関係の深い人間の一人で、かつその関係にはどうにも不自然な点がある。

（あの子にもう一度話を聞いてみないとな……）

そう決意したところで、ちょうど授業の終わりを告げる鐘が鳴っ

た。

——静かな、静かな道を少年は歩いている。
ここはどこだろう。何をしていたんだろう。
何も聞こえない、白く明るく静かな道。
だけどやるべきことはわかっていた。

“殺すんだ”

あいつはそう言った。あいつがそう言ったならやらなきゃなら
ない。大丈夫、僕ならできる。今の僕ならできる。

少年は自分の懐の中にズシッと重い感触があるのを知っていた。
大丈夫。今の僕はなんでもできる。勉強だって、運動だって、そ
の気になれば空だって飛べる。

人を殺すぐらいのことがなんだっていうんだ？

“大丈夫だから”

あいつがそう言った。だから大丈夫。大丈夫。

そっと懐に手を置く。服の上から堅い感触に触れる。

ナイフ。鉄さえも切り裂く鋭いナイフ。

あいつの言葉と、あいつのくれたこのナイフがある限り。

僕は無敵だ。

たとえ百人がかりでも僕を止めることはできない。誰も僕を邪魔
できない。僕を見下す氣にくわない同級生も、僕を無能呼ばわりす
るウザったい学園の講師も。

そうとも。今の僕ならあんな男の一人ぐらい、赤ん坊の手をひね
るより簡単だ。

白く明るく静かな道の向こうに、標的の姿が見えてくる。

殺せ。

殺せ、殺せ、殺せ、殺せ！

「あれ？」

相手が僕に気付いた。

今さら気付いてももう遅い。

「オウムくん？ どうしたんだ、こんなところで。今日の講義は？」

そんなこと決まってる。

お前を殺しに来たんだ。

いや、いやいや違う。

ああ、何故今まで気付かなかったんだろう。

僕はお前を殺すために産まれたんだ。お前を殺すために今まで生きてきたんだ。

お前を殺せばきつと、これまでにない快感を得られるに違いない。

あの薬、クウエルダなんて及びも付かないほどの、空の果てまで

昇り詰めるほどの――

懐にある堅い感触。

「！」

僕の取り出したものを見て、相手は驚愕に目を見開いた。

「オウムくん、なにを――」

もう、遅い！

躊躇うことなく突き出した。

ああ、これで。

これで――

「！！？」

突如、激痛が右腕に走る。

ナイフが腕からこぼれ落ちた。

直後、全身の力が抜けていく。

……ああ。待って。

待ってくれ。

ナイフを拾い上げようとした手が闇に溶けていく。

待ってくれ。待ってくれ、僕のツバサ。

僕の。

僕の――

意識は突然に途切れた。

重いため息が昼の陽光に溶けていく。

「……」

ティースはその建物を振り返って、もう一度深くため息を吐いた。そこは通常であればあまりお世話にはなりたくない場所――ネービスの治安を守る警邏隊の詰め所。

「ティース様。どうだったんですか？」

姿を認めて駆け寄ってきたリィナに、ティースは横を向いたまま答えた。

「……薬を飲んでたらしい。その効果で錯乱していたか、あるいは誰かの言われた通りに行動していたんじゃないかって」

リィナは眉をひそめ、それから彼の左上腕に巻かれた包帯を見る。

「かすり傷だよ」

相手が顔見知り――自分の講義の生徒だったことで反応が若干遅れた。それでも完全に不意打ちだったことを考えれば、かすり傷で済んだのは不幸中の幸いというべきか。

「じゃあ、今回のもやはりクウエルダという薬の？」

「いや」

ティースはゆっくりと歩き出した。

学園までは歩いて五分ほどの距離。

「今回ののもっと強烈な薬で“ツバサ”とかって呼ばれてるヤツらしい」

「ツバサ、ですか……」

「羽根が生えたような気分になって、どんなことでもできてしまうような錯覚に捕らわれてしまうそうだよ。もちろん正常な判断能力なんて無くなって、ね」

リィナはその穏やかな顔立ちに微かな嫌悪感を浮かべた。

「まるで幻覚魔力のようですね」

「ああ。ここまで来るとそれに近いのかもしれない」

あるいは、と、ティースは考える。

この大陸に無数に溢れる麻薬の中には魔界由来のものも少なくない。今回のツバサがそういうものだとする、魔がどこかで一役買っている可能性も否定できない。

（ツバサ、クウエルダ……魔が絡んでいる可能性、か）

今回彼が襲われたのは間違いなくクウエルダ絡みだろう。彼を襲ったオウムという生徒から個人的に恨みを買っていたということは考えられないし、今回のことは間違いなく別の誰かの意志だ。

誰か。

（アリエルさんはやっぱり殺されたんだ……）

病死ではなく犯人がいる。そしてそれを調べ始めたティースを邪魔に思い、やはり殺そうとした。この推論には無理がない。そのとおりである可能性も高いだろう――が、そうするとさらに進んだ一つの推論と、どうにもすっきりしない違和感が残る。

まず、犯人は学園に自由に出入りできる人間と見て間違いないだろう。学園には一応それなりの警備が敷かれている。まったく外部の人間が単にティースのことを邪魔だと思ったなら、わざわざ学園の中で狙う必要はない。アリエルのことに関しても同様だ。

そして違和感。

「なあ、リィナ。……あまりに稚拙すぎる気がしないか？」

「稚拙、ですか？」

「ああ」

ティースは今回の襲撃がどうにも腑に落ちない。

「アリエルさんのときはちゃんと病死か他殺かわからないように偽装されてた。なのに、今回ののはあまりに危険で確実性がなさすぎるよ。反応も過敏すぎる」

アリエルのことを調べ始めたとはいっても、実際のところはまだ何もわかってないのと変わらない状況だ。にも関わらず、相手はいきなり命を狙ってきた。それもあまりに不確実な方法で。

失敗するとは考えなかったのだろうか。確かにティースが普通の人間であれば、オウムのナイフを避けられずに命を落としていたかもしれない。だが、それにしただって博打みたいなもの。

（どうなってんだ……？）

知らないうちに真相に近付いていて、あるいは相手が何らかの理由でそう勘違いしていて、相当焦っているのか。わざと捕まろうとしているのでなければ、そうとしか考えられない。

「オウムさんの目が覚めれば何かわかるかもしれませんがね」

「いや」

リイナの言葉に、ティースは首を横に振って答えた。

「医者のお話だと、たぶん前後の記憶はないんじゃないかってさ。まあ、実際目覚めてみないとわからないらしいけど。……いや、待てよ」

ティースは足を止める。

（……理由はわからない。けど、相手が焦ってこんなことをしたんだとしたら……）

そして閃いた。

「リイナ」

「はい？」

ティースは振り返って真剣な顔で言った。

「頼みがあるんだ。もしかすると、犯人を見つけられるかもしれない」

「え？」

リイナは驚いた顔をした。

――失敗した。

もう終わりだ。何もかも。

コートニーシッドルは周りから不自然に見えないよう気を付けながら、しかし焦る気持ちを抑えきれずに早足で歩いていた。

おそらくあの講師はもう見当を付けているはず。いや、素人でもわかる。アリエルの死に疑問を持って、本腰を入れて調べていれば自分に辿り着くのは当たり前のことだ。

しかしまだ諦めるわけにはいかない。万が一警邏隊に捕まるようなことがあれば、上が放っておかないだろう。

――殺される。

脊髄が痺れて冷や汗が止まらない。

……やめておけば良かった。いや、最初からこんなことに手を出さなければよかったのだ。そこまでお金に困っていたわけじゃない。勉強ばかりの日に嫌気が差して、ほんの少し遊ぶお金が欲しかっただけなのに。

とにかく。

とにかく今は最善を尽くすことだけ考えよう。

向かった先は学園からそれほど離れていない場所にある診療所。周りは意外にも静かだった。使ったモノがモノだっただけに、警邏隊の人間が出入りしているかと思っただが、幸いそんなこともなかったようだ。あるいはまだあの薬の正体に気付いていないのかもしれない。

今のうちだ。

しんと静まり返った診療所の裏側へと回り込む。隣の家の塀が高いおかげでこうしていても目立たずに済む。まだ運がある、と、コ

トニーは思った。

……いた。

小さな診療所で入院用の部屋は二つしかない。そのうちの一つは空っぽ。もう片方には患者が一人。医者は外来の客の相手をしている。

汗ばんだ手の平で薬包紙がかさつと音を立てた。
やるしかない。

あのオウムという男子生徒は何の恨みもない、それどころかお得意様とでもいふべき少年だった。あの“ツバサ”の影響下では記憶が残ってない可能性も高いが、それでも絶対とは言いきれない。彼の口から事が漏れれば今度こそ確実に破滅だ。仕方ない。

薬包紙の中にあるのは致死量の麻薬だ。これだけ飲ませれば確実に死ぬ。彼はもともとクウエルダの常習者だ。上手く行けば自殺だと思わせることができるかもしれない。

手が震えた。

アリエルのときはあくまで補助的役割だった。だが、今回は間違はなく自分の手で人を殺すことになる。

窓は開いていた。不用心というべきか。いや、医者が薬の正体に気付いていないのなら不思議はない。そうに違いない。

足跡が残らないよう靴を脱ぎ、音を立てないように忍び込む。奥の方から医者らしき人間の声が聞こえた。どうやら外来の客が来ているようで、こっちに来る気配はない。

急がないと。

一メートルほどの間隔を空けて並べられた二つのベッド。空っぽのベッドの横を素通りして近付いていく。震える手の中の薬包紙をギュッと握りしめると、ふっと震えが止まった。

意外だった。震えが止まらなくなると思っていたのに。

そして同時に、今度こそ後に引けないことを悟った。

——学園を卒業したらこんなことは止めて普通の生活に戻るつもりだったのに。ほんの軽い気持ちで始めたことだったのに。なのに

もう、自分はこんなところまで来ている。

脳裏に親の顔が浮かぶ。きっと悲しむだろう。

だが、もうやるしかない。でなければ自分のみならず、家族にまで被害が及ぶかもしれない。

薬包紙を開き、中の白い粉を口に含む。舌に感じる微かな刺激。

呑み込まないよう注意しながら唾液で溶かす。

よし。これなら大丈夫。

そしてコートニーは布団に手を掛けた。

と。

「！」

違う——オウムじゃない！

ベッドの中にいたのは女性だった。

その女性が何事か呟いた途端、異変が起きる。

「なっ……！！」

突如、空中に発生した水の塊が急速に大きくなって、微かに開いたコートニーの口の中に飛び込んでいく。

「んむうっ……！！」

それはまるで自分の意志を持っているかのように、口の中に溜めていた“ツバサ”の溶液と溶け合うと、次の瞬間、彼女の口の中から飛び出していった。

びちゃっ、と、吐き出した水が床の上に落ちる。

「っ……げほっ、げほっ……！！」

ベッドに寝ていた女性——リィナは身を起こし咳き込む彼女を見て言った。

「すみません。そのまま呑み込んでは大変でしたから」

「っ……！！」

「おっと。逃げられないよ。……よいしょっと」

あらかじめ待機していたティースが窓から入ってくる。

「……」

コートニーは後ずさった。

ティースは小さく息を吐いて彼女に視線を合わせると、

「君だったのか。もちろんアリエルさんのことも、君が関わっていったんだね？」

「な、なんの――」

「言い逃れようとしても無駄だ。その床に零れたものを調べれば、君が何をしようとしていたのかはすぐにわかる」

「……」

コートニーはがっくりと肩を落とした。

隠れて待機していた警邏隊の男が二人、部屋に入ってくる。

彼女はもう抵抗しようとはせず、その場に泣き崩れた。

「――アリエルさんも、やはりあの子が殺したのでしょいか？」

コートニーが警邏隊に連れられていった後、リイナが理解できない顔でそう呟いた。

「さあ……それはこれから警邏の方で調べてくんじやないか」

だが、彼女の言葉はティースにも理解できた。……どう見ても普通の女の子だ。とても人殺しをするようには見えない。

「たぶん、あの子も思ってたんじゃないかな。自分が、まさか人殺しまでしなきゃなくなるなんて。……だってそうだろう。

あんな女の子が一人で麻薬なんてものを扱えるわけがないんだから」

「そうですね……」

これで全てが終わったわけじゃない。

背後に何らかの犯罪組織がある。それは間違いないのなことだった。

今回のことでせめてそれらが明らかにされてくれれば。

ティースはそう願わずにはいらなかった。

その5『心構え』

コートニーが警邏隊に捕まった日から四日後。

「ん？」

講義のため昼頃サンタニア学園にやってきたティースは、敷地の一角を歩くシーラスノーフォールの後ろ姿を見つけた。

ちょうどランチタイムに入ったばかりだろう。

彼女は同じ学園の生徒らしき少年と一緒に歩いていて、オーウェンⅡトレビックかと思ったらどうも違うようだ。

不思議に思っ少しの間立ち止まって眺めていると、

「あ、せんせ。なにしてんの？」

「え？」

後ろから声を掛けてきたのはディアナⅡリーだった。

「ああ、ディアナさんか」

ティースは彼女の姿を認めると、左右に視線を動かして辺りを見回した。それから彼女に視線を止めて、

「いや、ちよつとね……」

少し口ごもったが、ディアナはすぐシーラの姿を発見したらしく納得顔になると、

「ああ、アレ？ 見てたらすぐわかるよ、きっと」

「？」

その言葉が終わるか終わらないかのうちに、一緒に歩いていた男子生徒が立ち止まり、シーラはそれを振り返りもせず歩いていたってしまった。

ディアナは苦笑して、

「たぶん今月の初撃墜」

「撃墜？ ああ……そういうことか」

話ではよく聞くものの実際そういう場面を目撃するのは初めての

ことで、なんとも申し訳ないような情けないような変な気持ちだった。

誤魔化すようにティースは口を開く。

「でも他の生徒が周りにいるのに、あんなことできるなんてすごいなあ」

「あの子ってば入学当初からああいうのは全部無視なの。どっか来てくれて言われても絶対行かないし、ゲリラ戦じゃないと告白すらできないみたい。それでも玉砕する子が後を絶たないっていうからすごいんだけど」

「なるほど……でも、それじゃあオーウェンくんは？」

と、疑問を向けてみた。

「オーウェン？ ……最初は相手にされてなかったなあ、確か」

「ふーん」

なんて頷いたところで、

「ティースさーん」

「え？」

遠くから聞こえた覚えのある声に横を見ると、並木を挟んだ向こうの道から春色のワンピースに身を包んだセシリアⅡレイルーンが手を振っていた。栗色の髪から覗く水色のヘアバンドが可愛い。（あ、そっか。あの子もこの生徒だったなあ）

今まで顔を合わさなかったのが不思議なぐらいだ。

ティースが小さく手を振り返してやると、セシリアは満面の笑顔になって、

「講義、頑張ってくださいねー」

彼女は友人二人と一緒にいたらしく、そのまま手を振りながら通り過ぎていった。

ディアナはそれを見ながら不思議そうに、

「あの子も先生の知り合い？」

「ん？ 知ってるの？」

「下の子と同じ講義を受けることもあるから、名前は知らないけど

顔は見たことある。……ふーん」

「え、なに？」

少し意地の悪い笑みでティースを見上げて、

「先生って意外と面食いなんだなーと思って」

「へ？ あ、ああ、いや、そんなじゃないよ。ただ、僕の仕事仲

間の身内みたいなので、それにあの子なんてまだ子供じゃー」

「あはは、冗談だから。……でも、そういう巡り合わせてたぶん、先生の天運っていうか、そういうものだと思うなあ」

「天運？」

「そう。可愛い女の子に振り回された挙げ句不幸になる、女難の運命」

「……」

完全に否定できない。

ティースが情けない顔をしていると、ディアナは可笑しそうに笑いながら言った。

「でも先生、女難ってゆーのは、女の子に好かれない人には起こらないんだよ。だから喜んでいいんじゃないかなあ」

「好かれるのは嬉しいけど、災難はゴメン被るよ……」

それに自分はそんなにモテないしね、と、心の中で付け足す。

「あはは。じゃ、行こっか、先生。せっかくだし、お昼一緒に食べよう？」

「あ、いや、僕はもう食べてきたから」

「じゃあ一緒にいるだけでいいからさあ」

ディアナはいつもより楽しそうだ。

「……そうだね」

考え、少し視線を泳がせた後、ティースはそう言って頷いた。

はっ、やあっ、というかけ声が教室の中に響いている。

「みなさん、だいぶ慣れてきたみたいですね」

目の前にタオルが差し出され、ティースは顔を上げた。
リィナだった。

「ああ。やることなくて暇なぐらいだよ」

そう答えて笑う。

「そっちは大丈夫かい？ 君だって初心者だから大変だろ？」

「ええ」

正直にそう答えながらもリィナは微笑みを浮かべて、

「でも私もみなさんと一緒に学んでいるみたいで楽しいです。向こうにはこういう風習はありませんでしたから」

「そっか」

その様子にティースはホツとしながら視線を生徒たちの方に戻した。

十四人——いや、オウムが薬の影響で休学したため（色々調べた結果、彼は普段からクウエルダを常用していたらしい）十三人に減った生徒たち。コートニーが捕まってからこの学園でも数人の仲間や使用者が発覚し、それぞれに処分を受けている。

クウエルダの進入経路に関しては、今ネービスの警邏隊が必死に調べている。学園の責任者たちは多忙な日々を送っていることだろうが、大半の生徒にとっては何の関係もないことで、学園は休むことなく今日もいつも通りに動いていた。

「……せんせー」

「ん？」

講義も終盤に差し掛かった頃。

全員で同時に休憩を取っていると女生徒の一人が手を挙げた。

「先生って、護身術の他にも武道みたいのやってるんですよね？」

「え？ いやまあ、そりゃあね」

むしろ護身術は本職ではなく、剣術の他に基本的な体術はもちろん習得している。

女生徒は言った。

「護身術とはちょっと離れるかもしれないんですけど、いっぺん誰かと実戦みたいのってやってみてもらえませんか？　そういうの、間近で見てみたくて」

「実戦？　組み手のことかい？」

戸惑った。興味本位のようだが、確かに時間も少し余っている。

ティースは軽い気持ちで答えて、

「それは構わないけど……でも誰かって、誰と？」

「そりゃ私たちじゃ絶対敵わないし、男子の誰かで」

何とも無責任な発言に男子生徒からいくつか非難の声があがった。が、発言した女生徒は平然として、

「馬鹿ねえ、あんたたち。せっかくいいところ見せるチャンスをあげてるのに」

しいん、と男子生徒たちが静まった。

一瞬何の話なのかティースにはわからなかったが、男子生徒たちの一瞬の視線の動きを見て何となく事情を察した。

（……いいところ見せるって、そういうことか）

この授業も残すところあと数回。それが終わればここに集まっている他学科の生徒とはほぼ接点がなくなってしまう。もちろん同じ学園内なのだからやろうと思えばいつでも会えるだろうが、簡単に自分をアピールする機会はそうそう訪れないだろう。

（みんな勉強一筋なのかと思ったら、案外そうでもないんだなあ）

と、まあ、もちろん不真面目だなどと怒るようなことはなく、むしろ微笑ましいと感じるのであった。

（よし。じゃあ少し手加減して協力してあげなきゃ）

などと妙な親切心まで発揮してしまったのだが、しかし彼らとて考えなしではない。いくらティースが頼りない外見をしているといっても本気で勝てると思っている者はまずいないだろうし、大半が本当の初心者だ。なかなか決まらない。遊び半分ならまだしも、女生徒の発言によってどうしても無様な姿は見せられないという空気が広まってしまったようだ。

結局、事態はそのまま収束するかと思われた。

が、しかし最終的に一人の男子生徒が手をあげる。

「じゃあ、俺がやります」

「え？」

ティースは面食らって立ち上がった男子生徒を見つめた。

「オーウェンくん、君が……？」

「はい」

意外、とはいえないだろう。この講義において、彼は間違いなく男子生徒の中でもっとも成績が良かったのだから。

「……」

シーラの視線を感じる。いや、特別な意味などないのかもしれないが、相手が彼女の恋人ということでもどうしても余計に意識してしまう。

しかし、一度やると言ってしまった以上はやるしかあるまい。

（……参ったなあ）

オーウェンと対峙すると、周りの生徒たちから歓声が飛んだ。

ティースは言った。

「えっとまず、絶対ムリはしないこと。怪我でもしたら大変だからね」

オーウェンは少しだけ緊張した面もちで、

「大丈夫です。子供の頃から徒手の武道場に通ってますから、だいたい」

「……なるほど」

経験者だったというわけだ。それなら他の生徒たちと動きが違っていたのも頷ける。とはいえ、もちろん負けるなんてことは絶対ないだろう。

（さて。怪我なんてさせたら本気で絶交だろうな……）

どうしたものか。手加減をするのは当然として。敢えて負けてみせるという手もあるが、それはさすがにわざとらしいか。勝つにしてもどのぐらい苦戦するか、そのさじ加減がどうにも難しい。

（うーん、悩ましいなあ……）

「ティース様！ もう始まっています！」

「へ？」

気付いたときにはもう遅かった。

クルッと視界が回転して――

……どすん！！

「いててて……」

「大丈夫ですか？」

いや、情けないにもほどがある。まさか生徒に投げ飛ばされて腰をしたたかに打ち付けてしまうとは。

講義終了後、オーウェンは責任を感じたのか残って心配そうにしていた。

「すみません。緊張してたせいか、先生の準備が終わってないことに気付かなくて……」

「あ、いや……」

別に君が悪いわけでは、と、言おうとすると、

「あんなときにボーっとしてる方が悪いわよ」

「……」

冷たいその物言いはもちろんシーラだった。

「う、うん。彼女の言うとおりだ……」

ティースとしても引きつった笑顔でそう答えるしかない。

「あはは、でもいいじゃない。その後に仕切り直して汚名返上できただし」

そう言ったのはディアナだ。

「カッコ良かったよ、せんせ。なんかいつもと別人みたいだった」

「いや、はは……」

ストリートな物言いにティースが照れていると、

「当たり前じゃない。講師が生徒より弱かったら困るわよ」

「……」

そのとおりである。そのとおりではある……が、もっと言い方でもあるんじゃないかとティースは主張したいわけだ。

あくまで心の中で、だが。

「もう大丈夫でしょ。じゃ、私は帰るわね」

そう言ってシーラは鞆を手に――一瞬だけティースとディアナを見つめ――さっさと行ってしまった。

「あ、シーラさん。……すみません、先生。じゃあ俺もこれでオーウェンもそう言って鞆を手取る。」

「あ。ああ、悪いね。心配させちゃって」

「いえ。また明日……じゃなくて明後日」

手を振ってオーウェンはシーラの後を追いかけていった。

残ったのはディアナだけだ。今日はリィナも先に出て――途中でシーラと合流して一緒に帰ることになっているらしい。

ディアナは二人が出ていったのを見届けると、ティースのそばに屈み込んで言った。

「先生、どう？ そろそろ薬効いてきた？」

「え。あ、ああ。なんだかすーっとしてきたよ」

ディアナは嬉しそうに、

「その湿布用の薬液、あたしが午前中の授業で作ったんだ。あ、もちろんちゃんと使用許可ももらったから」

「へええ……」

「それ自体はそんな難しいものじゃないんだけどね。でも使い方を間違えると肌が爛れたりするから日が落ちる前には取り替えて……って、たぶんシーラがちゃんとしてくれると思うけど。あ、お屋敷だもんね。お医者さんもいるんだっけ？」

「ああ。でも楽になったよ。ホントの薬屋さんみたいだ」

「いちお、三年以上勉強してますから」

そう言ってディアナは笑った。そして視線を横――シーラたちが

出ていった方に向けると、

「オーウェン、今日こそ一緒に帰れるかなあ。……って、無理か」
「ん？」

「なんか色々深い事情があるっぽいもんね。シーラって」
「……」

ティースはゆっくりと立ち上がった。腰が痛むといってもそんな大袈裟なものではない。

「さて、帰ろうか。今日も途中まで、一緒に行くかい？」

「え、いいんですか？」

「そりゃもちろん」

「やった！」

ディアナはぴよんと飛び跳ねて、鞆を手にとると、

「じゃあ行こ行こ。寄り道とかアリ？」

「あまり遅くならないぐらいなら、ね」

ティースはそう言って頷いた。

「オーウェンねえ、先生のこと意識してるみたいよ」

「え？」

帰り道、ティースが買ってあげた薄焼きのパンケーキを頬張りながらディアナが急にそんなことを言い出した。

「たぶん薄々気付いてるんじゃないのかな。シーラが先生と知り合
いだってこと」

「え、ホントに？」

全然気付かなかった。

ディアナは二度頷いて、

「シーラの反応、先生に対してはやっぱちょっと特殊なもの。今日
だって先生が投げられた途端、一瞬だけど啞然とした顔してたしさ。
なんだかんだ言いながら最後まで残ってたし」

「ははは……さすがのあいつでも、俺がそこまで間抜けだとは思わ
なかったんじゃないかな」

「先生、あのときはやっぱシーラを気にしてたの？」

「そりゃあね。あいつの恋人に怪我でもさせたら大変だと思って」

「それで自分が怪我してちゃ世話ないなあ」

可笑しそうに笑うディアナに、ティースは頭を掻いて、もったもだ、と思った。

見上げる空は曇っている。あまりのんびりしていると雨が降り出すかもしれない。

「……」

ティースは立ち止まって後ろを振り返った。

「？ どしたの、先生？」

「いや、なんでもないよ」

ネコが通りを横切っていく。

「あ、ブチだ」

「ブチ？」

「うん。行き帰りにたまに見掛けるネコ」

「ネコ、好きなんだ？」

「そんなこともないんだけど。どっちかというと犬の方が好きかなあ。……パンケーキ、ごちそうさまでした」

ペコリと礼儀正しく頭を下げるディアナ。

「ああ、いや、なんでもないよ、そのくらい」

手を振ってそう言っていると、

「先生、シーラにもこうやって奢ってあげたりするの？」

「え？ あ、いや、ないなあ。こうやって一緒に歩くこともあんまりないしね」

最近の彼女との関係を考えると想像もできない。

「ふーん。まあ、確かにシーラのそういうところ、想像できないかも。……そういや先生、コートニーのこと聞いた？」

矢継ぎ早に次の話題へと。

「……ああ。聞いたよ」

ティースは少し表情を強張らせて頷いた。

それはコートニーが捕まった一件のことではない。彼女が警邏隊に捕まった翌日、大量の麻薬を飲んで自殺してしまったこと――いや、それはあくまで表向きだ。警邏に捕まっていた彼女が大量の麻薬など入手できるはずもなく、自殺だったとしても誰かが警邏隊の目を盗んで彼女に接触していることになる。

つまり殺されたも同然だった。

「でも、どうしてそんなこと？」

ティースがそう尋ねると、若干空気が動いた気がした。

ディアナは少し考えながら言葉を選ぶ。

「……ねえ、先生。先生は前、死ななきゃならない人間なんてそういないって言ったでしょ？」

「ん？ うん」

「あの子のことはどう思う？」

「コートニーさんかい？ ……さあ、それはなんとも言えないな。

でもそういう話とは別に、可哀想だとは思う」

「そっか。……ね、先生」

「ん？」

もう一度、空気が動く。

「もう気付いてるかもしれないけど……あたしのうち、貧乏なんだ」
目まぐるしく変わる話題は、彼女の心が不安定になっている証だろうか。

ティースはあくまで追求せず、黙って先を促すように彼女を見つめた。

「ん、ほら、いつも先生に奢ってもらっちゃってるし、先生なら話してもいいかなと思って。……もともとはそうでもなかったんだけど、二年ぐらい前に父さんが事故で死んで、母さんも最近は病気で自由に動けなくなってるね。だからあたしが卒業して働いて……弟が二人いるんだけど、あいつらが一人前になるまであたしが頑張らなきゃなんなかったんだ」

「……そうなのか」

ティースは少し考え込んで、そしてポツリと言った。

「それじゃあ……大変だろうね」

「ホントは今年の三月で卒業だったんだけど……卒業試験に落ちちゃって。あのとき受かっていればなあ」

「……」

ティースはピタリと立ち止まった。

ここはディアナの家に続く帰り道。その中でもっとも人気のなくなる場所。

ディアナはグツと口元を引き絞った。

「……先生。お屋敷って、こっちじゃないよね。もう、通り過ぎてるよね」

「今日は、最後まで送っていくよ」

ティースは頷いて、

「受かっていれば、か。……そうだね」

感慨深げに呟いて、ゆっくりと腰の剣に手をかけた。

「君が受かっていれば……少なくとも、こうしてシーラを悲しませるようなことはなかったのかもしれない」

「！」

ディアナも“それ”に気付いた。

雨が落ち始めるのを待っていたかのように。

「おそらく、こうなるんじゃないかと思っていたよ……」

言葉は厳しく、どこか哀しげに曇って。

男が三人、武器を片手に路地から現れたのを見て、ティースは腰の細波を抜きはなつたのだった――。

「……降ってきたわ」

帰り道、リィナと合流したシーラが屋敷に戻ってきたのとはほぼ同時。

雨がポツリポツリと落ち始めていた。

「雨。嫌ね、雨が多いと」

部屋の窓から雨に煙る庭を眺める。外にいた使用人たちが慌てて戻ってくる姿が見えた。

「シーラ様」

そばにいたのはリイナだ。彼女の本職であるパーラー・メイドの仕事着に着替え、手にはティーセットを持っていたが、これはシーラが彼女と話したいときによく使う口実だ。

「カザロスの街も雨が多かったですね」

「ええ……そうね。雨が降るたびに思い出すわ」

「私にとってあの頃の記憶は、掛け替えのない記憶です」

「……」

「シーラ様は、どうですか？」

視線を外に向けたまま、シーラは応えた。

「あなたと同じよ、リイナ。あなたやエルは、私の掛け替えのない友人だもの」

微笑むリイナ。

だが、その口元はすぐに憂いを伴って、視線は斜めに落ちる。

「ディアナさんも……そうですね？」

「あなたたちほどではないわ」

視線を動かさず、シーラは抑揚のない声でそう答えた。

「……」

リイナは同じように窓の外へ視線を向け。

ポツリと、

「ティース様、遅いですね」

「そうね……きつと」

得も言われぬ重い空気。

シーラはゆっくりと目を閉じた。

「馬鹿な子だわ。本当に……」

ゴッ！！

「くはっ……！」

剣の柄が顎を直撃して男が宙に浮く。

「このっ……！」

「――」

同時に斬りかかってきた男の太刀を円の動きで捌き、細波を絡ませて相手の剣を弾き飛ばすと、右足を振り上げた。

「ぐへっ……」

自らの勢いで、ティースの膝が鳩尾にめり込む。反吐を吐きながら倒れ込んだ男を一瞥すると、ティースは細波の切っ先を残るもう一人の男に向けた。

残った一人は覆面の上からでも人魔の証である尖った耳が見える。

「悪いけど、この子には指一本触れさせない」

細波を相手に向け、ティースは鋭い視線でそう言い放った。

「貴様……ただの講師じゃないな」

人魔の男が緊張感の溢れるくぐもった声でそう言った。
ピシャッ。

返事を待たず、水たまりを弾いて人魔が地面を蹴る。

――普通の人間とは明らかに違う、超人的な速度。

「先生！ 危ないッ！！」

背後にディアナの悲痛な叫び声が聞こえた。
が、

（……大丈夫だ。見える）

集中すると、超人的な敵の動きさえもスローに見えた。

風の下位魔だ。今まで彼が対峙してきたタナトスのザヴィアやネイルといった本当の化け物連中に比べれば、何のことはない。

余裕を持って、牽制に放たれた風弾――空気の固まりを弾き、迎え撃つ。

体がカッと熱くなった。

——動く。

「え……っ!？」

おそらくそれなりに実戦を経験してる下位魔が、なんとも間拔けな驚きの声をあげる。

「お前は……まさかデビル——」

言い終わらないうちに、細波の一撃が下位魔の意識を寸断する——

——ザアアアアアア。

カチリ、と、鞆に戻した細波が音を立て、ティースは振り返った。

「先生……」

塀を背に、ディアナは放心した様子で見つめた。驚きに目を見開いたまま、表情が見つからず引きつったような笑み。

「……先生って……すごい人だったんだ……」

「そんなことはないよ」

ティースはそう答え、地面に倒れ伏す三人を見下ろした。

先ほど、そばを通りかかった者に通報を頼んだ。おそらくもう何分もしないうちに警邏隊が駆けつけるだろう。

「コートニーさんを死なせてしまった。最初からこういう可能性を考えていれば、彼女は死ななくて済んだかもしれない」

「それは先生の責任じゃないですよ……お金に目が眩んだあの子が悪いんだもん」

ディアナは泣き笑いのような顔をした。

「ここ数日一緒に帰ってくれてたのは、私を守るため？」

「うん。たぶん、こうなると思ったからね」

「……先生は、優しいなあ」

ディアナは雨を気にした様子もなく、ゆっくりと塀から離れた。

「いつから気付いてたの？ 私がコートニーの仲間だ、って」

ティースは剣の柄から手を離しディアナに歩み寄っていくと、

「確信があったわけじゃないけど……前のアドーラさんの話が引かかってたんだ。一回生の頃、彼女と君とコートニーさんが仲良かったって話」

「……」

やっぱり、という顔だった。

「その割にどっちも他人みたいに振る舞ってたし、何かあって絶交したのになってことも考えたんだけど、コートニーさんが例の事件の犯人だってわかったとき、もしかしたらってね。もしかしたらわざと関係ないフリをしてたんじゃないかって」

少し間を置き、歩み寄る足を止める。

「コートニーさんは俺がミューティレイクから来た人間だって知っていたんだ。そのことを知ってる人はそんなにいないはずだし……そういうやシーラが襲われたのも、君が偶然屋敷にやってきた翌日のことだった。だから」

頭を掻いてディアナは笑った。

「アドーラの話は何気ないフリで誤魔化したつもりだったんだけどね。コートニーと仲が良かったなんて知ってるの、あの子ぐらいだったのに……ツイてないなあ」

すぐに手を止め、硬い表情になると視線を落とす。

「……あの子にはただ、先生がミューティレイクの人らしいって教えただけなの。……でも今にして思えば失敗だった。あの子、疑心暗鬼になっちゃって、それで焦ってあんなことを……」

ティースは問いかける。

「君は、どういう風に関わっていたんだ？」

もう逃げられないと悟ったためか、ディアナは素直に答えた。

「最初はコートニーに助言したりしてちよつと報酬をもらってただけだったの。……麻薬なんて使ったこともないし、そのものを触ったこともないし……でも仲間が増えてからは分け前とか売りさばき方とか考えるようになって、いつの間にか一目置かれるようになって。でも、実際に触れるわけじゃないから罪悪感はあるまなかった。

アリエルがあんな風になるまでは……」

ディアナはチラッと地面に倒れる男たちを見て、「上」と接点があったのは私とコートニーだけ。だからたぶん、捕まった他の子は命を狙われたりしないと思う」

「そうか」

ティースもそれは心配していた。

それから少し間を置いて、

「……シーラや俺を襲わせたのも君の考えかい？」

「！」

ディアナはハッと顔を上げた。反射的に何事か言いそうになったが、考え直したように口を閉じ、それから力無く視線を落として、「……シーラや先生のこととは、何も知らなかった。失敗したって聞かされて初めて……知ってればそんな馬鹿なことさせなかったし、それにシーラは……友達だもん」

そしてもう一度顔を上げた。

「ね、先生、信じて。私、シーラを危険な目に合わせるようなことは、一度も考えたことない」

ティースは何も答えずに、

「じゃあ、アリエルさんのことは？」

「……」

ディアナは悲痛な面もちで項垂れ、そして呟くように答えた。

「……私の指示じゃない。でも、薄々勘付いてて、でも止めなかった」

「そうか」

あの日、アリエルの葬儀にやってきた彼女の表情が脳裏に蘇る。

おそらくは後悔が彼女に足を運ばせたのだろう。

ディアナは続けた。

「アリエルはコートニーが何か悪いことをしてるって気付いたらしくて。どこでどうやって、どこまで知ってたのか、それは結局わからなかったけど……あの子、とにかくシーラに対抗心燃やしてて、

どうしても仲間が欲しかったらしくて、それをネタにあの子たちを従わせていたの。あたしは先生も知ってのとおり、意識してコートニーと他人のフリをするようにしてたから大丈夫だったけど……」

「たぶん、麻薬だなんて知らなかったんだと思うよ。知ってたら真っ先に通報していたんじゃないかな」

「……」

ディアナの唇が震えた。

大きく息を吐く。

「君は頭のいい子だ。俺に疑われてることも気付いてたんだろ？」

……でも君は結局、俺やシーラに何もしようとはしなかった」

一拍置いて、

「だから君の言葉は信じるよ」

「！」

ディアナが顔を上げた。

「君のしたことは悪いことだけど、でも、君はそれが悪いことだと理解してる。理解しててきつと償える人間だと思うから」

「先生……」

涙顔でディアナはティースを見た。

「もしかすると君の証言があれば背後が明らかになるかもしれない。ちゃんと協力すれば悪いようにはならないはずだ。……君はまだまだ若いんだし、やり直すチャンスはきつとある」

「……ホント？」

「もしそのときが来たら、俺も微力ながら協力させてもらうよ」

ディアナは泣きながら、ホッとしたように笑った。学園でいつも見せていたような笑顔だ。

「先生……シーラにごめんなさいって、伝えてくれる？」

「ああ、言っとく。まあ、落ち着いたらあいつが直接行くかもしれないけどね」

「……先生は、ホントに優しいね……」

呟くようにそう言うとディアナは素早く顔を寄せ、雨に濡れるテ

イースの頬にそつとキスをした。

気絶せずに済んだのは、緊張していたからか、あるいはそれがほんの一瞬だったためか――。

「――と、いうわけで」

時は流れ。

……というほど時間が経ったわけではないが、半月に渡った全十三回の護身術の講義もついに最終回。途中、生徒が二人減るというアクシデントがあるにはあったが、講義自体は全て滞り無く終了していた。

「しつこいようだけど、君たちに教えたのは戦う手段じゃなく、いかに身を守り、いかに危険を回避するかということ。その最低限の技術だ」

十二人の生徒の視線が集中している。だが、ようやくそれにもだいぶ慣れ、最初に比べればどもることも少なくなっていた。

「忘れちゃいけないのは、危険はいつも危険だとわかる形で横たわっているわけじゃないということ。危険はとても身近にあって、それはときに誘惑という形で近付いてくる。誰もが欲しがる強い誘惑には多くの危険が付いて回る」

いつもはメモを手元に置いて喋るのだが、今日は用意していない。どうやら必要もないようだ。

「護身術に一番大切なのは心構えだ。技術があっても強い心がなければ使いこなせない。危険を察知しても誘惑に負け自ら近付くようじゃ意味がない。……これは君たちだけじゃなく僕自身の課題でもあるし、目標でもある」

ティースは室内の生徒たちを見渡した。

一呼吸。

そして締め言葉を口にする。

「短い間でしたが、僕の教えたことが君たちの未来の糧になれば幸いです。――以上で、講義を終わります」

一拍置いて。

拍手がパラパラと沸き起こった。

「――ふうっ」

講義の終了を学園長に報告し、外に出て大きく息を吐くと、なんともいえない充足感が胸に残る。

最初はどうなることかと思った特別講師の任もこれで終わり。慣れないことで戸惑ったが、案外自分にはこういう仕事も向いているのかもしれない――などと、ちよつと甘いことを考えながら歩いていると、

「ご苦労様」

「え？ あれ、シーラー――シーラさん？」

学園の中心から出口に伸びる一番大きな並木道の途中で、シーラが彼を待っていた。

「ど、どうしたんだ？」

辺りには下校する生徒たちの姿もちろはらと見える。こんなところで立ち話をしていいのかと思ったが、その疑問の答えは彼女の口から語られた。

「生徒代表よ。偶然私が選ばただけ」

そう言った彼女の手には小さな花束とメッセージカード。

「本当は講義の終わりに渡す予定だったらしいわ。でも都合でどうしてもギリギリ間に合わなくてね」

「……」

受け取る。小さな花束と、メッセージカードには生徒全員から一言ずつコメントが寄せられている。……ちゃんと十四人分の名前があった。都合というのはおそらくそういうことなのだろう。

「ありがとう」

晴れ晴れとした気持ちでティースはそう言った。
それに釣られたのか。

シーラの顔にも——おそらくは素の——微笑みが浮かぶ。

「よくやったと思うわ。お前には案外向いているのかもしれないわね」

「俺も一瞬そう思ったよ。でも、みんなだってこれから護身術の道を目指すわけじゃないからなあ。みんなにはみんなの、俺には俺の目指す道があるわけだし」

ティースはそう言って視線を遠くに向ける。

視線の先に、講義を終えた生徒たちが校門に向かって歩いていくのが見えた。

「そんなこと考えたら、やっぱり今年のデビルバスター試験受けてみようって思ったよ。リディアに言われてホントはちよつと迷いがあつただけど、時間は待ってくれないし、今やれることをやらないで後悔しても遅いんだよなって。……まあ、受かる受からないは別にして、さ」

シーラは少しの間ティースの顔を見つめたが、すぐに視線を逸らして、

「ホント、先生みたいなこと言うのね」

“まだ”先生だよ」

笑う。

「でもたまには、こうやって先生をやるのもいいかもなあ。うん。
なんか清々しい」

「……すぐいい気になるんだから」

「ん？ 何か言ったか？」

「何でもないわ」

そう言いつつ、シーラも満更でもない表情だった。

——こうしてティースの講師生活は無事に幕を閉じたのである。

その6『前々日』

ぶっちやけて言うのと、彼女の仕事はとても暇だ。

「ふんふんふふふ〜ん♪」

まだ日が高いこの時間、手鏡片手に鼻歌でも歌いながら、ほんのちよつとだけ高価な櫛でショートボブの髪を梳かし、さらにのんびりと眼鏡の手入れまで済ませてしまったりしても、彼女の仕事には何ら支障がなかった。

何しろ客らしい客が訪れることなんて日に数える程度しかない。来たところで適当に笑顔でも振りまきながら、それが顔見知りだったなら軽口でも叩いて世間話をしていればそれでいいのである。

そもそも彼女——ネスティアスの受付であるところのアレッタⅡサプレス嬢（二十四歳独身）の家はかなり裕福だしネービス公とのパイプもあって、彼女がこうしてネスティアスの受付に収まっているのも半分のや九割以上はコネだった。

とはいえ、彼女は元来愛想も良く頭も決して悪くはないため、受付嬢として不足があるわけではないのだが——
さて。

「あら？」

そんな彼女が本日三人目の客を視認したのは、日が西に傾きかけてから二時間ほどが経過した頃のこと。長身の割にひよろつとしていてどこか頼りない、やや童顔の青年がどこか遠慮がちに建物に入ってくるのが見えた。

「……」

しばしの思考。

そしてアレッタはポンと手を打つ。

「こんにちは」

怖ず怖ずと挨拶してきた青年に対し、アレッタは仕事用と素の笑

顔を半々に織り交ぜて、

「ティーサイトさん、だったっけ。レイから話は聞いてるわ。……また、うちの候補生と練習試合がしたいのよね」

「あ、はい。よろしく願います」

ティースは丁寧なペコリと頭を下げたのだった。

——この二時間前。

ミューティレイク、ダイバーナ・ナイトの詰め所。

「くっ……そおおおッ!!」

ティースの気合が訓練場に木霊した。

頭は冷静に。

体は燃えるように熱く。

「……」

対峙する少年、パーシヴァル・ラッセルの表情も真剣そのものだった。目には殺気に至る一步手前の気配を漂わせ、両手にした柄の長いトンファーを構える。

限りなく実戦に近い組み手。互いの手にした獲物も、彼らが本来使っている武器に模したものだ。

距離が一気に詰まる。

リーチは身長差もあってティースの方が勝っているが、二本のトンファーを使ったパーシヴァルの防御はいつも鉄壁だった。

打ち合う。

舞い散る剣戟。

「おおおおおッ!!」

休む間を与えない連撃。僅かでも鈍れば即座に反撃が飛んでくる。

汗が飛び散り、衝撃に頬が歪む。奥歯を噛みしめ、体の中心に力を込めて足を踏み出していく。

「くっ……」

先に崩れたのはパーシヴァルだった。ついに堪えきれなくなつて距離を取ろうとする。

きゅっ！

踵が鳴った。

「!？」

ティースは、ほぼ無意識に反応していた。

「な……っ！」

予想外の速さにパーシヴァルは絶句する。左手のトンファアーを合わせていこうとするが、まるで間に合わない。

「くっ……」

「おおおおお——ッ!!」

「そこまで!!」

「!」

ピタリ、と、両者の動きが同時に停止した。……乾いた音を立て、トンファアーが床の上に転がる。

荒い呼吸音。

ピリピリと張り詰めた空気。

ポタリ、と、パーシヴァルのこめかみから汗が落ちた。……ティースの模造刀はその胸元まで迫っていた。

「三度目の正直だな」

レインハルトⅡシュナイダーがそんな二人に歩み寄っていく。

「ティース。お前の勝ちだ」

「勝つ……た……？」

確認するようにティースは彼を見た。

遅れて、喜びが体を駆け抜ける。

「よしっ!!」

思わず飛び出たガッツポーズ。

「……」

対するパーシヴァルは悔しそうに顔を歪め無言でティースから離れていくと、

「くそっ!!」

手にしたタオルを頭からかぶって、どすんとその場に腰を落とした。

ティースはそんな彼の後ろ姿を見送りながらゆっくりと天井を仰ぎ、

「ふううう……」

どっと体の力が抜けていった。

レイが言ったように今日三度目の対戦だった。三度目の挑戦でようやくパーシヴァルに一矢報いることができたのだ。

(……って、ダメだな、このぐらいで満足してちゃ) 首を振って自戒する。

もちろん成果は感じていた。ほんの少し前まで十回に一回勝てるかどうかだった相手に、三回に一回というレベルまで迫ったのだ。充分な成長速度だといえるだろう。

が、しかし。

半月後に迫ったデビルバスター試験のことを考えると、そう浮かれてはいられなかった。

(そうだ。できればパースと五分五分ぐらいにまで……)

「……ティースさん」

「ん？」

パーシヴァルがタオルの奥からティースの方を見ていた。

「あとでもう一回。今度は負けないっすよ」

「あ……ああ、望むところだ」

自然と笑みが浮かんだ。

パーシヴァルは本気で悔しがっているようだ。それはつまり、彼が本気で戦って負けたという証拠でもある。

「一回と言わず、二回でも三回でも頼む。今はやればやるだけ強くなってる実感があるんだ」

と、そこへ、

「二人でやる気になってるところ悪いが、それは無理だな」

レイが口を挟んだ。

「ティース。お前にはこの後、場所を変えて続きをやってもらうことになってる」

「え？」

何も聞いてないティースが驚いた顔で見ると、

「お前、受付のアレッタには会ったことがあっただろ？　もう話は通してある」

「へ？　アレッタ、さん？」

聞き覚えのある名前だった。

そして思い当たる。

「……ネスティアスの受付の人？」

「ああ、練習試合さ。やってみたいだろ？」

ニヤリ、とレイは笑った。

「……」

ネービス公の抱えるエリートデビルバスター部隊“ネスティアス”。ティースは以前、そのデビルバスター候補生との練習試合に挑み、まるで歯が立たずコテンパンに打ちのめされたことがある。

あれから半年ほど経っただろうか。しかし、その記憶はまだ彼の中で新しい。

ブルツと体が震えた。

もちろん恐怖ではない。

緊張？　……確かに。半分以上は緊張だろう。

だが、残りの半分は恐怖でも緊張でもない。

（ネスティアスの候補生と練習試合、か）

それは、興奮。

彼はどちらかというと、事実よりも自身を過小評価するタチだ。

だが、そんな彼であっても、最近はある程度の手応えを感じていた。

何より、あの頃とは意識そのものが違う。

当時は強くなることに強迫観念にも似た焦りを感じていた。その

結果、必要以上に体を酷使し、冷静な判断すらもできなくなっていた。

だが、今は違うのだ。

リイナ、エルレーンという昔馴染みの再会の過程において、まだ漠然としながらも自身の成すべき事の輪郭がぼんやりと見えてきていた。今はそのための階段を一步步上っている段階だと、はっきり自覚できている。

（もう、一度――）

仕返しなどという気持ちは微塵もない。ただ単純に、今の自分の力を確かめたい。

あるいは再び打ちのめされるかもしれない――

（ヤバイヤバイ。えっと――）

時と場所は戻って。

アレツタは少々慌てながら手元の書類を漁っていた。

レイから話は聞いている――なんて軽々しく口にはしたものの、実のところつい先ほど彼の姿を見るまではスポンとそのことを忘れていたのである。

とはいえ。もちろん今も奥の鍛錬場では何人ものデビルバスター候補生が戦闘訓練を行っているし、相手がいないというわけではない。ネスティアスとディバーナ・ロウは同じ街のデビルバスター部隊として関わりは深いし、お互いを高めるための練習試合というのまたたびび行っていることである。これには何の問題もない。

が、しかし。

だからといってちょこっと鍛錬場に赴き、誰でもいいから相手してやって――と、そんな風に簡単にはいかない事情もある。

というのも――

（ルーは確かさつき出てったばかりだっけ。カレルさんも今日は出てるはず……つか、ラドフォードの野郎、こんなときにのんびり休暇なんて取ってんじゃねーよ！）

アレツタ個人の認識で言えば、ネスティアスとディバーナ・ロウの繋がりには、どっちかといえば“面倒事”のイメージの方が強い。ネスティアスは縦割りの組織だ。実行部隊のトップを占める十人のデビルバスター“ディグリーズ”がそれぞれに部隊を持っており、それを一単位として行動する。正規の隊員から訓練生までほぼ全員がどこかの部隊に所属しているため、練習試合の相手を選ぶにしてもトップであるディグリーズかそれに近い立場の者の承諾が必要となる。

ただ、それも決して誰でも良いというわけではなく――

「……あの？」

「あ、ああー、ちょっと待っててね。どうぞ、そっちにお掛けになってお待ちください」

怪訝そうなティースの問いかけに、アレツタは顔を上げずに備え付けのベンチを指し示す。

「あ、はい」

不思議そうにしながらも素直に従うティース。

その後ろ姿をチラッと横目で見やると、

（まいったなあ。よりもよって面倒なとこしか残ってないや……）

アレツタは気付かれないようにため息を吐いた。

――派閥、だ。

このネスティアスには、大きく分けて三つの派閥が存在し、そのうち二つの派閥は色々な方面で意見を対立させ、色々な場面において様々なことを争っている。

その“様々”の中の一つ、ディバーナ・ロウへの接し方という点で言うと、単純に“親”と“反”、そして“中立”の三つに分けることができる。

壱部隊、ラドフォードⅡマティス。

肆部隊、カレルⅡストレンジ。

伍部隊、ルーベンⅡバンククロフト。

玖部隊、リゼットIIガントレット。

この四部隊がいわゆる“親”ディバーナ・ロウ派だ。そして残る六部隊中の四部隊は“反”であり、二部隊は中立および無関心。

当然、面倒事を避けるという意味では“親”派閥から相手を選ぶのがいいのだが、生憎、その四部隊のトップはいずれも不在だった。

せめて中立の二部隊から、と思ったのだが、

（ジャマール爺もいないし、ってことはナイジェル……うわあ、それはないなあ……）

片方はやはり不在。そしてもう片方は人間性的にオススメできない人物だった。

「??」

思い悩むアレッタに、ティースはますます不思議そうだ。

（さて、どーっすかなあ）

と、そんな彼女のもとへ。

「アレッタ？ どうした？ その男は何者だ？」

「え？」

奥から姿を見せた人影があった。

「あ……」

一見してわかる、他とは違う漆黒の制服はネスティアスのトップス——つまりディグリーズの一員であることの証。

顔を上げたティースの顔に明らかな緊張が走る。

それとは対称的に、アレッタはホッと安堵の息を吐いていた。

「なんだクインシーじゃない。ちよつと。驚かさないでよね」

「なんだ？ 君が勝手に驚いただけじゃないか。失礼な」

クインシーと呼ばれたその男は前髪を軽く掻き上げながらそう言った。

歳は二十歳を少し過ぎたぐらい。背は高くティースほどではないにせよ百八十センチはあるだろうか。どこか気品のある顔立ちで物腰も柔らかい。前髪は少々奇抜で全体を横に流したような形だった。

「あ、でもそっか。あんたならまだマシだな……」

アレッタはピンと閃いたようだ。

「？ 何の話だ？」

「いやね。実はこの子……」

アレッタはティースの方を指して、

「ウチの候補生との練習試合を希望してるの。今年のデビルバスター試験を受けるらしくてね。……あ、素性はしっかりしてるから。あたしの知り合いの頼みでね」

「ほう」

クインシーは少々興味深げにティースを見ると、ゆっくりと彼に歩み寄った。

ティースは慌てて立ち上がる。

「ディグリーズの参、クインシーⅡフォーチュンだ」

差し出される右手。

（ディグリーズの参……ってことは、トップに近い人だ……）

ディグリーズの参“聖天使”クインシーⅡフォーチュン。その名前はティースも何度か聞いたことがあった。

慌ててズボンで手を拭き握手に応えと、

「あ、え、ええっと、俺はティーサイトⅡアマルナといいます。よろしく願います」

「ティーサイトくん、か。歳は？」

「十九歳です」

「なるほど。……いい目をしているな」

ふっ、と、クインシーの目尻が一瞬だけ緩んだ。振り返ると、

「わかった、アレッタ。引き受けよう」

アレッタはホッと安堵の息を吐いて、

「お願いね、クインシー」

「ああ。では来たまえ、ティーサイトくん」

「あ、はい」

歩き出したクインシーに付いていこうとするティース。
すれ違いざま、アレッタが耳打ちしてきた。

「……自分がデイバーナ・ロウだってこと、できれば言わない方がいいよ」

「え？」

問い返す暇などなく。

ティースは首を傾げながらクインシーの後についていったのだった。

ちょうどその頃、ミューティレイクの屋敷では――

「よう、ルーベン。最近よく会うじゃないか」

「レイさん。どうも」

応客室のソファに天然の白髪少年が座っていた。ディグリーズの一人“白の御子”ことルーベンⅡバンククロフトである。

「ウチのボスはもう少し時間がかかるそうだ」

「待ちますよ。子供の使いじゃないですから」

「――失礼します」

ノックの音で入ってきたのは接客を担当するパーラー・メイドの少女だった。

少女はレイがいることに少し戸惑ったような顔を見せたが、

「ああ、俺のことは気にしないでいい」

レイのその言葉に頷き、

「紅茶です。どうぞ。――失礼します」

と、ルーベンの前に紅茶を置いて出ていった。

「……」

「――リイナⅡクライスト。ちょっと前に来た新しい子だ」

「？」

ルーベンが怪訝そうに顔を上げると、

「今、目で追ってただろ？」

「名前なら、もう知ってます」

「ほう。手が早いじゃないか」

「それはもう。講師が優秀だったもので」

「なるほど。ディグリーズにはよほど軟派者が多いと見える」

「……」

ルーベンはレイをチラツと見て、それから微かに苦笑した。

「どうせわかってるんでしょ。ちよつと知ってた子に似てると思っ
たんですよ」

「だろうな」

レイはそれ以上追求せず、ルーベンの向かい――ファナの座る場
所に腰を下ろし、頭の後ろで手を組んだ。

「ところで今日、ウチの見習いをそっちにやったんだ。てっきりお
前に世話になるものと思ってたんだが……アレッタのヤツから聞い
てなかったか？」

ルーベンはちよつと視線を上に向けた。

特徴的な白い髪がパラパラと後ろに流れる。

「ああ……思いつきし初耳です」

「……だと思ったよ」

と、レイは苦笑する。

「今日はカレルさんもライオン頭もないはずですよ」

「リゼットは？」

「所用でどっかに出てたと思いますけど、今頃はもう帰ってるかな。
帰ってたらしいですね」

「なるほど」

レイは可笑しそうに呟いた。

「戻ってなかったら“事故”か」

「いやあ、どうでしょう、五分五分ぐらいかと。チンピラブラザー

ズなら事故でしょうけど、他なら、まあそうとも限らないというか」

「他ってのは誰のことだ？」

「残ってるのは、ナイジェルⅡローゼンとクインシーⅡフォーチュンですよ。知ってのとおりどっちも変人……って、まあ、ライオン頭とか両刀使いとか、ウチもまともな人間の方が少ないですけど」

レイは鼻で笑って、

「ま、いいさ。仮に門前払いでも喰らったならまた後にすればいい。アレツタのヤツに一つ、貸しもできるしな」

ルーベンは少し考えて、

「見習いつてのは、ティーサイトⅡアマルナさんのことですか？」

「知ってたのか？」

「ええ。以前、ネアンスファイアの事件のときに少し。直接話してはいませんけどね」

「ああ、お前らに世話になったんだったか」

レイは思い出した顔をして、

「そーいや誰かが言ってた。ティースのヤツを見ると、お前のことを思い出す、ってな」

「……」

ルーベンは少し視線を泳がせてから、

「なら今頃、ネスティアスの訓練生をそれはもうコテンパンに伸してるに違いない。ええ、そうに違いない」

レイは笑った。

冗談に対する笑いではなく。

もっと意味ありげに。

「賭けでもするか？」

「……」

ルーベンは微かに眉を動かした。

……言うまでもないことだが、ネスティアスの訓練生は大陸各地にいる同じデビルバスター候補生の中でも明らかにレベルが高い。

当然だ。ネービス公の援助のもと、毎日高いレベルの指導を受け、デビルバスターとして必要な要素の全てを叩き込まれるのだから。

ディバーナ・ロウのそれと比べても、遙かに上。

しかし、それはあくまで平均値の話だ。全てが全て上回るなどということはない。それはルーベンもよくわかっていて、

「やめときます。あなたのはほとんど詐欺ですから。結果、わかってるんでしょ？」

そう答えた。

ティーサイトⅡアマルナは以前、ネスティアスの訓練生に同じように挑み、そして目も当てられない惨敗を喫した。

今回は二度目の挑戦。

時期は――デビルバスター試験を間近に控えたこの時。

そんな大事なときに、このレインハルトⅡシュナイダーという人物が、練習試合とはいえ勝ち目のない人間を送り出すとはとても思えなかった。

「そうか」

レイは薄く笑った。

「大したことはないさ。パースのヤツと十回やって三回勝てりやいい方だ」

「パース？ ……パシヴァルⅡラッセルに十回中三回？」

ルーベンは呆れてため息を吐いた。

「いよいよひどい人だ、あなたは。ウチの訓練生があいつとやって何回勝てるか――」

そのときカチャツとドアが開き、ルーベンは言葉を切ってすぐに腰を上げた。

入ってきたのは屋敷の主人ファナⅡミューティレイクと執事兼ボディガードのイングヴェイⅡイグレスウス――アオイだ。

ファナの表情が綻ぶ。

「ルーさん。ようこそいらっしやいました」

対し、ルーベンは深々と頭を下げて、

「ご無沙汰してます、ファナさん。御健勝のようで何よりです」

「あら。またその言葉遣いのですの？」

「……」

ルーベンは頭を下げたまま動かなかった。

「姫」

「ええ」

アオイに促され、ファナは頷いて彼の向かい——レイはとっくに席を空けていた——へ腰を下ろす。

「じゃ、俺は退散するでしょうか」

「いえ、レイさん。レイさんもそちらへ」

レイは怪訝な顔をして、

「なにかあるのか？」

「今日のお話はレイさんにも関係のあることですわ。……ルーさん。お願いします」

「はい」

ルーベンは腰を下ろし、レイを見て、ファナを見た。

「最近、タナトスに少々不審な動きが見られる……そんな情報がウチに入ってきているようです」

「不審な動き？」

「ええ。……みなさんもご存じの、学園群で起きた麻薬事件。アレ、どうもタナトスの一員が一枚噛んでいたようで」

「……」

レイは無言で腰を下ろした。

（この青年——）

その光景に、クインシー・フォーチュンは目を見張った。

「そ、それまで！！」

訓練場に響く審判役の声。

クインシーの目の前には項垂れるネスティアスの若い訓練生と、どこか驚いたような顔で立ち尽くす青年がいた。

勝敗が決したのは誰の目にも明らかだ。誰もが一瞬静まり返ったのは、その結果が予想の真逆だったことと、そしてそこに至る経緯があまりにも鮮やかすぎるせいだろう。

「あ、えっと……」

ぽかんとした青年——ティースの顔に勝った喜びらしきものは微塵も感じられない。それほどにその勝負はアツサリしすぎていた。いや、もつと言うならば——“勝負”になっていなかった。

「……」

結果がその逆であればクインシーもそうは驚かなかっただろう。ネスティアスの訓練生は個々の違いこそあれトータルでいえば非常にレベルが高いといえるし、今回相手に選んだのも、トップクラスにはほど遠いとはいえ、それなりに見所のある訓練生の一人だ。

クインシーは認識を改めた。

そこにいるティースという青年が、どうやらネスティアスの訓練生でいえばトップクラスの實力の持ち主であるらしい、と。

「見事だ、ティーサイトくん」

手を二度、三度と叩きながら歩み寄っていく。

「あ、はい……」

なんとも頼りない反応。

クインシーは興味深い目をしながら横に流した前髪を右手で軽く掻き上げ、チラッと敗北した訓練生を見るとティースに尋ねた。

「ティーサイトくん。彼の剣はどうだった？」

「え？ えっと……」

少し考えて、ティースは正直に答えた。

「そ、そうですね。どこことなく荒いつていうか、無駄が多いつていうか……あ、いや！ でも太刀筋は鋭かったし、捌き方も——」
「なるほど、ありがとう」

クインシーは口元を緩めると、もう一度、訓練生の方を見て言い

放った。

「慢心するから、そうなる。貴様は基礎クラスから出直しだ」

「……」

訓練生はガツクリと項垂れた。が、自分の不甲斐なさを自覚しているのか反論する気配はない。

クインシーはティースに向き直ると、

「ところで聞いてなかったな。……いや、正直言うところ今の戦い振りを見て興味が湧いてきた。――君は一体どこの者だ？ 誰に師事している？」

「え……」

ティースはドキツとした。

“ディバーナ・ロウであることは言わない方がいい”

アレツタに言われたその言葉が脳裏を過ぎる。……彼はネスティアスとディバーナ・ロウの関係など何にも知らない。いや、知らないというより、同じ街の同じデビルバスター部隊、当然仲間であり、掛け値無しの友好関係にあると思っていた。

だからほんの少しだけ少し迷った後、正直に答えたのだ。

「ディバーナ・ロウです。今は主にレインハルトⅡシユナイダーさんに教わっています」

その途端、辺りがざわついた。

少しだけ、極端に。

(……え?)

それはもちろんティースにも伝わった。

理由はわからない。

だが、

「ディバーナ・ロウ……?」

直後、僅かに強張ったクインシーの表情から、ティースはアレツタの言葉の意味をほんの少しだけ肌で感じることができていた。

が、それでも。その変化の意味まではわかるはずもなく、

「クインシーさん？」

クインシーの瞳の奥で困惑のようなものが交錯していた。
やがて、

「……なるほど。アレツタめ。言い忘れたわけではなかったか」
「え？」

クインシーはティースに視線を合わせ、一步、歩み寄った。

その瞬間、

「っ……！」

急速に迸る威圧感。

そこに先ほどまでの友好的な雰囲気はなく。

「しかし正直に答えたということは、何も知らないということだろうな。……ならば」

そしてクインシーは目を細め、驚くべき言葉を口にした。

「ウチに來ないか、ティーサイトくん」

「……え？」

ティースは目を丸くする。

クインシーは気にせず続けた。

「デイバーナ・ロウを抜けて、ウチに來ないかと言ったのだ。君には見所がある。素質が感じられる」

「……」

「私に付いてくれば、必ずデビルバスターとして君を大成させよう。必ず、だ」

ティースは驚いてクインシーを見つめ返した。

何を言っているのか瞬時には理解できなかった。

（ウチ？ ウチって……？ 付いてこいって……え、まさか——）

“引き抜き”

ようやくその言葉が頭を過ぎったのはたつぷり十秒以上の時間が経ってから。

……それもそうだろう。そもそもこのティースという男、基本的に自分を過小評価する傾向にある。そんな彼がいきなり、ネービス最強のデビルバスター部隊、そのトップ十に君臨する男から部隊に

誘われたというのだから、戸惑うのも当たり前のことだ。

しかし、クインシーの顔はどう見ても冗談ではない。彼は本気でティースの素質を評価し、本気で勧誘している。

そのぐらいのことはティースにもわかった。

本気だ。

本気で自分を欲しがっているのだ、と。

「君のような人材をディバーナ・ロウに埋もれさせるのは惜しい」
ティースが返す言葉を探しているうちに、クインシーは立て続けに言った。

「そもそも君は、あのディバーナ・ロウの本当の目的をまだ知らないようだ。ならばなおさら、ウチに来るべきだ」

「え？ ……本当の目的？」

何のことかティースにはわからなかった。

クインシーは続けた。

表向きは冷静に、だがその内には確かな熱を秘めて。

「今のうちだ、ティーサイトくん。……私のところへ来い。その方がいい。今のうちにディバーナ・ロウを抜けなければ、きっと取り返しのつかないことに――」
と。

「クインシー」

「！」

彼の言葉を遮るように、少しハスキーな声が訓練場に響き渡った。

コツ、コツと軽快な足音が響く。

クインシーの振り返った先――ティースの視線の先には、見覚えのある人物が立っていた。

「イケないナア。そうやって言葉巧みにウブな若者を誑かそうとしちゃ」

黒い制服――ディグリーズの証。その肩には“玖”の文字。
リゼットⅡガントレット。

“月神”の異名を持つディグリーズの一員で、ティースは以前に少しだけ言葉を交わしたことがあった。

「リゼット……」

クインシーの呟きにリゼットは微笑みを浮かべる。……その笑みがどこか倒錯的に感じるのは、彼の装い、仕草、声……その他諸々が男装の麗人、あるいは女形のような雰囲気纏っているからだろう。ネービスの国教であるミーカール教において月の神は両性具有の神とされており、そう考えるとなるほど“月神”とは彼にピッタリの称号だと思えた。

「どうせ誑かすなら女の子の方がいいんじゃないかな。いくらそうやって配下を増やしたところで、彼らは誰も君をキモチ良くしてくれないよ？」

「……」

クインシーは何も答えずに視線を横に逸らすと、
「誑かすなどと人聞きの悪い。私は彼に正しい道を示そうとしたま
でだ」

「正しい道、ね」

リゼットはクスツと笑って言った。

「そんなヘンな髪型の人に言われても説得力ないな、なんか」

「……」

クインシーは咄嗟に髪——真横に流した前髪に手を触れると反論した。

「なにを言うのだ、リゼット。よく見ろ、風もないのになびくこの髪を。これが今後のトレンドだと何故気付かん」

リゼットはため息を吐くと、

「君のセンスの悪さは薄々気付いてたけど、ここまでとは思ってなかったよ」

「……」

何やら妙なことになってきたぞ、と、ティースは少々困りつつそんな二人のやり取りを眺める。……訓練生たちの姿がいつの間にか

消えていることには気付かなかった。

クインシーはリゼットの頭を指して、

「貴様こそなんだ、その髪型は」

「え、僕の髪は普通じゃない。ねえ、ティースくん？」

「へ？」

いきなり話を振られて固まってしまった。リゼットはどうやら以前一度会っただけのティースをよく覚えていたらしい。

ティースは少々たじろぎながらも、

「ふ、普通だと、思いますけど……」

そう答える。

実際、リゼットの髪は耳が半分隠れる程度の金髪を自然に後ろに流したもので、特別お洒落というわけではないが、クインシーほど奇抜でもなかった。

「ありがと、ティースくん。……ちゅっ」

ウインクと同時に投げキッスが飛んでくる。一瞬ドキッとしてしまったティースだが、彼がもし男だったらと考えると今度は寒気がした。

それからクインシーに向き直って、

「ほらね。ティースくんも君の髪型がヘンだって」

「え！？ 言ってな——」

「……貴様」

地から響くような声にティースはドキッとしたが、幸いその言葉が向けられた先は彼ではなくリゼットだった。

「貴様には言われたくない。——未だ、他人の背中を追いかけることしか能のない貴様には、な」

「……」

空気が変わった。

リゼットの言葉も微かに低くなる。

「……別にそういうつもりはないよ。髪型が似ちゃったのもただの偶然。でも……君はもう、追いついたつもりなんだ？」

「追いついたのではない。追いついたのだ、リゼット。とつくの昔に、な」

そこで交わされたのはティースには理解のできない内容の会話。だが、異変にはすぐに気付いた。

空気が沈み込む。

重く、重く。

危険だ。

——何が？

いや。

(っ……!?)

気付く前に、体が勝手に後ずさっていた。

その場に満ちる、得体の知れない威圧感に気圧されて。

「じゃあ……せつかくだし、久々に見せてもらおうかな」

リゼットの頬に微笑が浮かぶ。

——先ほどのものとは明らかに質が違っていた。挑発的な笑み。

「僕が審査してあげるよ。君が本当に、言うほど強いのかどうか」

「……」

リゼットの挑発に、クインシーは微かに躊躇を見せた——ようにティースの目には映った。が、次の瞬間にはゆっくりと腰の獲物に手をかける。

……訓練用の武器ではない。おそらく彼がいつも使っている武器だ。

「いいだろう。リゼット。そうすれば貴様も認めざるを得まい。この私の言葉を」

「ふふ……」

リゼットはチラリとティースを見た。

「いい子だから下がってね。ティースくん。あとでアメ玉あげるから」

「え？　　ちよっ、ちよっと——」

忘れ去られていなかったのは彼にとって幸いで、その場の空気は

すでに“アメ玉”に突っ込む余裕もないほどに張り詰めていた。

先に武器を抜いたのはクインシーの方だ。鞘から抜いたのはオーソドックスな中サイズの両刃剣。鍔が二重の輪になっている以外はごく普通だが、刀身がほんの微かに発光しているように見えた。

(あれは、アオイさんのと似た光……)

ディグリーズであれば当然というべきか、おそらく普通の破魔具ではない。光属性の魔力を秘めた神具だろう。

対するリゼットはクインシーのものと比べると幅も長さも一回り大きい、やはり両刃の剣だった。細身の彼には少々身に余っているようにティースには思えたが、持ち主のレベルを考えれば大した問題ではないのかもしれない。

——動く。

「！」

一、三、七、十撃——

(っ、速い……!!)

一つ一つを数えることが不可能なほどの打ち合いが繰り広げられ、ティースは身の危険を感じてさらに後ずさった。

「！」

すぐに背が壁にぶつかる。

(……すごい)

迫り来る竜巻を眼前にしたかのような、そんな圧迫感。

目の前で繰り広げられる常人を遙かに超えた競り合いに、じわじわと胸に恐怖心が沸き起こってきた。

……大丈夫。彼らはティースの存在を忘れているわけではないから危害が及ぶことは考えられない。だから大丈夫。理性ではそう感じていながら、恐怖は消えない。

そして、

ドクン……っ！

同時に、その奥底で。

微かに沸き起こる、マグマのような熱情。

（なんだ、これ……）

……ざっ！

数え切れないほど打ち合った後、二人の間合いが開いた。
空気が張り詰める。

リゼットは手にした剣でくるっと円を描くと、言い放った。

「廻って巡れ——“玉兎”^{たまうさぎ}」

「！」

きい……ん、と甲高い音がして、リゼットの持つ剣の刀身が少しずつ黒ずんでいく。

「残影“十六夜”の型——」

リゼットが床を蹴った。

クインシーの視線が鋭さを増して。

再び、打ち合う。

「……？」

一見、先ほどまでと何も変わっていない。

いや、

（クインシーさんが少し押されてる……？）

さっきまで余裕のあった（少なくともティースにはそう見えていた）クインシーの反応が、明らかに先ほどまでと変わっていた。

鈍くなっている。……いや鈍くなっているというより、迷いが産まれていたと言った方がより正確だろうか。

何故、と、考えて、ティースは目を見張った。

（あれは……？）

リゼットの剣がおかしい。

（二本……？ いや——）

目をこらすと、刀身が二本に見えた。だが、手にしている剣は確かに一本。速すぎて残像が見えているのかとも思ったが、ほぼ同じ速さで動くクインシーの剣は普通に見える。

（さっきの力……あれが何か——？）

正体はわからない。だが、間違いないだろう。何かしらの“能力

”なのだ。

「っ……！」

たまらずクインシーが間合いを広げた。

リゼットは追いかけない。追いかけて、再びくるっと円を描いた。

「当たると大怪我するよ、クインシー」

「！」

「――飛閃“三日月”の型」

リゼットはそう呟き、その場で一太刀振るった。

どう見ても届いていない。

が、

「!？」

ティースは目を見張った。

振るった剣の軌跡が宙で型を成し、空気を切り裂きながら飛んだのだ。……それも一撃だけではない。二撃、三撃――リゼットの斬撃に合わせ、近距離にいるのと大差のない鋭く速い斬撃がクインシーを目掛け飛んでいく。

「ち……」

クインシーは足を止め、それらを打ち払っていく。

（これじゃ近付くこともできない……）

ごくりと喉が鳴った。

手が汗ばむ。

左手はいつの間にか腰の細波を震えるほど力強く握っていた。

（どうするんだ……？）

彼がこのままで終わると思えなかった。その漆黒の制服に刻まれた数はリゼットよりも格上。であれば、ここまで一方的に打ち負けるはずがない。

必ず反撃するだろう。

……見たい。

そのときティースの心の中に、確かにそんな欲求が生まれていた。

遙か雲の上にいる、彼らの実力をその目で見届けたい、と。

「リゼット……」

瞬間。

背中を戦慄が駆け抜ける。

クインシーが本気になった。――ティースは漠然とそう感じた。

「！」

振るった剣で、飛ぶ斬撃が四散する。

そのまま、切っ先をリゼットへ向けた。

「貴様こそヘマをするなよ。……死ぬぞ」

「――」

リゼットの斬撃が止まった。その“気配”を感じたのか微かに表情を強張らせ、再びその手の剣“玉兎”をくるっと回転させる。

クインシーの視線がリゼットを射抜いた。そつと左手を刀身に添える。

「裁きの光……迸れ“天輪”――」

「奥義――“望月”の型――」

衝撃が、訓練場に満ちた。

「――どうした、ティース？ 自分の剣をジッと見つめて」

その日の夜。

屋敷一階のホールで一人考え込んでいたティースの元に、麦酒の杯を手にしたレイがやってきた。

「あ、レイさん。いや、ちょっと……」

「リゼットとクインシーの戦いに当てられたか？」

「そんなところです」

ティースは正直にそう答えた。

レイが正面に腰を下ろす。

この時間、使用人たちはほぼ仕事を終え、自宅、あるいは寮の方へ帰っている。今、この建物にいるのは一部の使用人とティースたち客人扱いの者のみだ。

ティースは顔を上げて質問した。

「レイさんも確か……“夜叉”でしたっけ。不思議な力の武器を持つてるんですね」

「ん？ ああ」

腰にぶら下げた二本の曲刀を軽く手で撫でる。それからニヤツとティースを見ると、

「考えなくていい」

「え？」

「結論から言うと、可能だが……なんだ？ 要するに、そういう不思議な技が自分にもできないものかと考えてたんだろ？」

「え……あ、ええ、その通りです」

あっさりと見抜かれていたようだ。

レイは麦酒を一口、二口と呑んで続けた。

「魔の連中が使うヤツと違って、こいつらの力つてのはあくまで補助的だ。制約が多くて見た目ほど使い勝手のいいもんじゃない」

「制約？」

「いずれわかる。まずはそんなものナシで戦えるようになることだな」

「はあ……」

ティースはテーブルの上に視線を落とす。

見とれるほど美しい“細波”の刀身が照明を反射して輝いていた。

「ところで」

レイは再び杯を傾けて話題を変えた。

「お前、試験の同行者のことはもう聞いたか？」

「え？ 同行者？」

「ああ。試験の会場である帝都ヴォルテストまでは結構な長旅だから、コンディション維持と安全確保のサポート役として同行者が付いていく。今年はお前とパーシヴァルの他に四人の予定だ」

「へ？ コンディション維持と安全確保ってたって……馬車に乗って行くだけですよね？」

このネービスからデビルバスター試験会場のあるヴォルテスト領の帝都までは五つの領土を横断し、アクシデントがない限りはおよそ二十日間の行程だ。デビルバスター試験の受付締切は五月の末日で、ティースたちはその二十五日前……明後日にここを発つことになっている。

レイは笑って、

「過保護だとは思うが、その程度で少しでもリスクを減らせるなら安いつてことさ。ウチにとっちゃお前もパースも貴重な人材だからな」

「へえ」

至れり尽くせりだなあ、などと、半ば他人事のようにティースは感じていた。

もちろんその時点で、その“何でもない”はずの行程にアクシデントが生じることなど推測できたはずもなく。

そしていよいよデビルバスター試験、出発の前日を迎えるのだった。

その7『六人』

今年、ディバーナ・ロウからは二名がデビルバスター試験を受験する。

また、彼らのサポート役としてディバーナ・ロウ、ミューティレイク家から四人が同行し、合計六人が試験会場である帝都ヴォルテストへ向かうことになっていた。

北方にあるこのネービスから、大陸のほぼ中央に位置する帝都ヴォルテストまでは、主となる街道を馬車で片道およそ二十日の行程。さらに試験そのものが半月にも渡って行われるため、再びこのネービスに戻ってくるのは約二ヶ月後だ。

さて、その六人の中の一人、パーシヴァル・ラッセルはティースとともに試験を受験するデビルバスター候補生である。

人生なんてわからないものだ。

パーシヴァルは現在十六歳で一応大人として認められる年齢ではあるが、まだ人生を振り返るほどの歳ではない。

しかし、彼は思うのだ。

人生なんてわからない。この自分がデビルバスター試験を受けることになるなどとは……三年前の知り合いはきつと誰一人として想像できなかっただろう、と。

彼はこのネービスの中でもほんの一握りの貧困層の家に産まれた。十ヶ月年上の兄は二歳のとき肺炎で命を落とし（もちろんその記憶など彼にはない）四つ年下の妹は彼が九歳のとき、自宅そばの壊れた古い排水坑に誤って転落し命を落とした。

そして父親は、そのときのほんの僅かな見舞金を持って姿を消してしまった。

しかしまあ不幸中の幸い。母親には親切的な知人が多く、パーシヴ

アルは彼らの力を借りてどうにか無事に成長していった。

しかし十歳になった頃。どこでどう間違ったのかあまり質の良くない友人ができる、それからの三年はズルズルと引きずられるまま悪事に手を染めるようになる。

ディバーナ・ロウに拾われたのは、本当に後戻りできなくなる一歩手前だった。

引き返すことができたのは彼自身の本質が正しい方向を向いていたためだろうが、結果として悪事を行ってきたことは間違いなく、そのことは今も忘れていない。

運が良かったのは、彼を拾ったのがこのディバーナ・ロウだったということ。ここには彼と似たような境遇の人間がたくさんいて、まともな素性の人間を探すのに苦労するぐらいだ。

相談できる相手もいたし、彼を理解してくれる人間もたくさんいた。

だから、彼はここまで来ることができた。

恩を返したい。

似た境遇の仲間たちと同じように。

「……ふう」

朝の涼しい空気がパーシヴァルの全身を満たす。

緊張するにはまだ早い。試験は一ヶ月近くも先のことだ。

しかし――やはり緊張する。

「……もうちょつとやつとくかな」

と、パーシヴァルがストレッチを再開したところへ、

「パスくん」

「ん？ あ、よう、フィリス」

彼の元へやってきたのは、こここの当主であるファナミューティレイクの侍女の一人であり、ディバーナ・ロウの仲間でもあるフィリス・ディクターだった。

子羊を思わせる外見のこの少女は彼より半年ほど年下だが、ミュ

ーティレイクでは一ヶ月ほど先輩であり、そして彼が一番最初に打ち解けた相手だ。……というより、彼女がいたおかげですんなりここに溶け込めた、そう言った方がより正確だろうか。

そういう意味でパーシヴァルにとつての彼女は恩人であり、友人であり……そして本人は顔を真っ赤にして否定するが思い人でもあった。自称“硬派”の彼はまだその想いを伝えてはいないが、知らぬは当事者ばかりなり、という状態である。

「いよいよ明日出発だね。パースくん。体調は万全？」

「完璧に決まってるだろう？」

パーシヴァルがそう言って力こぶを作って見せると、フィリスは笑顔になった。

「良かった。お母さんにはちゃんと報告した？」

「半年ぐらい前からもう言っているよ。あの人は心配性だから早めに言っておく方がいいんだ」

「じゃあ安心だね。……しばらく見ててもいい？」

「ん？ ああ……別にいいけど」

フィリスはスカートをうまくたたんで庭石の上に腰を下ろした。パーシヴァルは彼女に背を向け、ストレッチを続ける。

「……」

「……」

しばらく無言だった。パーシヴァルは時折気になって後ろの彼女の様子を窺ってみるのだが、彼女の方は邪魔したくないとの思いからか一言も喋ろうとしない。

「……なあ、フィリス」

やがてパーシヴァルは振り返って、

「なんか黙られるとかえって気になる」

「えっ、あ、ごめんなさい……」

申し訳なさそうなフィリス。

「いや、謝らなくてもいいけど……なんか面白い話とかない？」

「お、面白い話？ え、ええっと」

フィリスはあたふたしながら、

「じゃ、じゃあ、詰め所の屋根の下に巣を作ってるスズメの話とか、どう？」

「スズメ？　詰め所ってファントムのか？」

あまり面白くなさそうだとは思ったが、パーシヴァルはストレッチを再開しながら話の先を促すことにした。

「うん。南側の窓のひさしのところに、いつの間にかね、巣を作ってたの」

「へえ」

下手したらそれで会話終了かなとパーシヴァルは思ったが、幸い彼女の話には続きがあった。

「それで……それで私、昨日気付いたら嬉しくなって、すぐにその話をドロシーさんにしたの。そしたら――」

フィリスの眉間に少し皺が寄る。

「ドロシーさんったらいきなりその巣をナイフで打ち落とそうとしたの」

「へ？」

思わぬ急展開だ。

「だから私、びっくりして必死に止めたの。それで、なんでそんなことするんですかって聞いたたら、なんて言ったと思う？」

「なんて言ったんだ？」

さらに眉間に皺が寄る。

「スズメの味が懐かしくなって、つい、って」

「……ああ、でも」

パーシヴァルは真面目な顔で返した。

「スズメってあれで結構美味いんだぜ。サイズのちよつと物足りないんだけど味はなかなか――」

ピタリ、と、パーシヴァルの口が止まる。

「……パースくん……」

「あ……いや、別にそのスズメを取って喰おうとかそういうことじ

やなくて——っていうか、聞いた話だよ、聞いた話！」
慌てて弁解する。

「……パースくんは食べたことないの？」

「ないよ！　あるわけない！」

嘘である。確かにここネービスでは一般的にスズメを食用とする風習はないが、それはあくまで一般の話。スズメを食べることを規制する法などもちろんないし、彼は何度か野生のスズメを食べたことがあった。

しかしここはまあ、彼女の悲しそうな顔を見せられてしまったては、咄嗟に嘘をついてしまった彼を責めることはできないだろう。

するとフィリスは言った。

「そうなんだ……私はね、昔、お父さんに騙されて食べたことあるんだ」

「……え、あ、そうなのか」

ちよつと気の抜けた声を出してしまう。

「うん。それがショックでね、私、今でも鶏肉が食べられないの」
そう言ってから彼女はホッと息を吐いて、

「でもよかった。そうだよ、スズメは食べるものじゃないよね」

「あ……ああ、うん、そうだよね」

何となく後ろ暗い気持ちながら、パーシヴァルはそう言って頷くしかなかったのである。

午前五時半。

使用人たちは朝食を含めた一日の準備に忙しくしている。その他の人々もそろそろ起きてくる時間だろうか。

「……じゃあ、邪魔しちゃうからそろそろ行くね」

フィリスがポンポンと裾を払いながら立ち上がった。

ディバーナ・ファントムの隊員であるとともに屋敷のレディズ・メイドでもある彼女は通常屋敷の制服を着ているのだが、今日は珍しく私服だ。あるいは今日そっちの仕事は休みなのかもしれない。

「え、もう行くのか？」

パーシヴァルは少々拍子抜けした。

明日から二ヶ月も会えなくなるのだし、彼としてはもっと名残惜しむというか“気を付けて”とか“淋しくなるね”の一言でも期待していたのである。

しかし、

「え？ 何かあった？」

などと、不思議そうに返されては、自称“硬派”の彼としてはそれ以上どうすることもできず。

「あ……いや、別に。えっと、なんだ。元気でな」

そう言うのが精一杯である。

するとフィリスはきよとした顔で、

「元気で、って？」

「いや、ほら……二ヶ月ぐらい戻ってこないから。いや、お前には別に関係ないことだろうけど……」

ふてくされているのを悟られないようにしながらも微妙に隠しきれていないという、第三者から見るとなんとも微笑ましい態度のパーシヴァルに、フィリスはますます不思議そうになって言った。

「え？ でも私も一緒に行くんだよね？」

「……え？」

パーシヴァルは間抜けな顔をした。

「あ、あれ？ 私の聞き間違いじゃないよね？ 私、一昨日、執事様にそう言われて準備していたんだけど……」

「……」

完全に初耳だった。いや、確かに同行者が付くことは知っていた。アクアのときは先ほどの話に出てきたドロシーとダリアの双子姉妹が付いていたらしいし、レアスのときもやはり何人が同行したと聞いている。

「でもファントムの活動はどうするんだ？ 二ヶ月間も活動停止するわけじゃないだろ？」

「パースくん和テイース様の抜ける二ヶ月間は隊を再編成して当た

るんだって。ナイトだってパースくんが抜けたまま活動するわけにはいかないでしょ？」

「あ、言われてみりゃそっか。……」

パーシヴァルは頭をポリポリと掻きながら、

「ん……まあ、そんじゃよろしくな。準備とかできてるのか？ 忘れ物すんなよ？」

「うん、大丈夫。パースくんこそちゃんと荷物チェックしないとダメだからね」

「ああ、わかってる。ってか、付いてくるのってお前だけじゃないよな？ ティースさんもいるんだし……他には誰が来るんだ？」

パーシヴァルの問いかけに、フィリスはちよつと視線を上に向けて答えた。

「えつとね、確か――」

一にコンディションの維持、二に身の回りの世話、三に安全のための護衛。

フィリスⅡディクターがこのうちの一と二を兼ねて選ばれたのだとすれば、パメラⅡレーヴィットが選ばれたのは二番目の役割をメインで張るためである。

「パメラちゃん、おめでとー！ どんどんひゅーひゅーぱふぱふー！」

「やめてってば、ヴァレンシア」

使用人寮で同室の先輩、ヴァレンシアⅡキッチンの祝福にパメラは心の底から迷惑そうな表情を浮かべた。

ご存じの方もいるかと思うが、彼女、パメラⅡレーヴィットはミューティレイクのハウス・メイドの一人であり、毎日の客室掃除ではティースの部屋の担当もしている、二本の短い三つ編みとそばかすがトレードマークの十五歳の少女だ。

「ありゃ。嬉しくないのかい？」

時刻は午前十一時。パメラは明日以降の準備のため今日一日の仕事を免除されていた。

ちなみにヴァレンシアは先ほど交代制の昼休み（本日一番乗り）を利用して戻ってきたところである。

「なに言ってるの。嬉しいとかじゃなくて大事なお仕事でしょ。浮かれる理由がないじゃない」

「なにをおっしゃるウサギさん」

荷物を準備するパメラの前、ベッドの上に腰掛けたヴァレンシアはチツチツと人差し指を横に振って、

「二ヶ月も一緒に旅をするのよ？ そしたらもう、やることは決まってるっしょ」

「なに？」

パメラが怪訝そうな顔で聞くと、ヴァレンシアはわざとらしく声を潜めた。

「この際どっちでもいいからモノにしてきなさい」

「……ヴァレンシア」

「あ、なんかすごい顔。の割に赤くなってるところが、カ・ワ・イ・イ」

「馬鹿なこと言わないでってば、もう……」

顔が赤くなっている自覚はあったので、パメラは荷物を詰め込むフリをして顔を伏せた。

だがヴァレンシアはニヤニヤしながら、

「別に馬鹿なことじゃないと思うけどなー。パースのヤツだってもし受かったらいよいよデビルバスターよ。下手すりゃパーシヴァル様よ。高収入よ。玉の輿よ。悠々自適で豪遊し放題の奥様ライフよ」

「なんだかよくわかんないけど……パースさんはフィリスのことが好きだってもっぱらの噂じゃない」

手早く荷物を詰めていく。

「ああ、そっか。ならティース様でいいっしょ」

「……ちよつとヴァレンシア」

パメラは手を止め、眉をひそめて顔をあげた。

「見た目が頼りなさそうだからみんな色々言うけど、ティース様はとても立派な方なんだから。そういう言い方ってないと思う」

「別にダメだなんて一言も言っていないじゃん」

「まあ……そうだけど、でも……」

ヴァレンシアの言うとおり、ティースの評判は決して悪いわけではない。しかし毎日顔を合わせて言葉を交わしているパメラの立場からすると、見た目のせいか態度のせいか、どうにも不当な評価を受けているような気がして、それが常日頃から納得いかないのである。

「でもほら、中身とかはともかくさ。見た目ならパースの方が間違いないく上つしょ」

「……そうかなあ。そりゃパースさんはカッコいいけど……」

納得いかない。いや、確かにパーシヴァルは屋敷でも指折りの美少年だ。単純に比較すれば彼の方がカッコいいに決まっているし、多数決を取れば九割以上は彼に軍配を上げるに違いないだろう。残りの一割弱も残念ながら“ティースカッコいい派”ではなく、まるで興味がない者を含めた“どちらともいえない派”であるが、パメラはこの一割弱の住人の中でもかなりティースびいきの評価だ。もちろん毎日顔を合わせていて親しいというひいき目込みで、だが。

「……ともかく」

ポン、と、最後の荷物を鞆の中にしまい込んで、パメラは目の前の少女を見上げる。

「そんなこと言ってないで。ヴァレンシア。私がない間、エレンのことお願いね」

「それはもう！」

ヴァレンシアは力強く頷いて、

「このヴァレンシアさんにお任せなさい！ なんとって同室のカワイイ後輩だもの、徹底的に面倒見てあげちゃうわ！」

「じゃなくて」

気合の入るヴァレンシアに、パメラはごくごく冷静に返した。

「何もしなくていいから。……お願いだから何もしないであげて」

「ええ！ な、何故に！？」

オーバーリアクションで抗議の意を示すヴァレンシア。

パメラはため息を吐いて、

「私がいらないだから止める人がいないでしょ。あなたの巻き添えであの子までアマベル様に叱られたら可哀想じゃない」

「むー仕方ないなあ」

ヴァレンシアは困った顔で首をひねって、

「あ、でもアレだね？ 寝てる間に顔にラクガキするのはセーフだね？」

「アウト」

「えー。だったらお下げを引っ張ってお馬さんドウドウごっこは？」

「アウトだってば」

「エエー。じゃあじゃあ顔洗ってるところでタオル隠して水も滴るいい女ごっこか髪飾りをあの子のギリギリ届かないところに置いて高い高いごっこかも——」

「ア・ウ・ト！ ……アマベル様に言いつけてくる」

「わ、待って、冗談冗談！ やだなあ、パメラちゃんってば、もう！」

パメラは仕方なさそうに腰に手を当てて振り返る。

「……心配だなあ。ホント」

「なにをおっしゃるウサギさん」

「それ、二回目」

「大丈夫だいじょーぶ」

ちっとも大丈夫そうに思えないのが彼女のすごいところだ、と、パメラは呆れ、もう一度ため息を吐きそうになるのをなんとかこらえ——ふと顔をあげた。

「あれ。この足音——」

「パメラ！ パメラパメラパメラ~~~~~ッ！！」
ボタン！！

噂をすれば影、である。

勢いよくドアを開けて飛び込んできたのは、この寮部屋のもう一人の住人でありパメラと同じ年の少女エレンⅡライブリだった。

「あっ、パメラッ！ ちょっと！」

と、エレンは“触覚”だとか“手綱”だとかヴァレンシアにからかわれる二本の長いお下げを揺らし、小さな肩で息をしながら彼女は一気にパメラに詰め寄ってきた。

「ちよつとちよつと！ どうして秘密にしたの！？ ずるいじゃないのお！！」

パメラはすぐに彼女の言わんとしている意味に気付いて、

「別に秘密にしていたわけじゃないってば。それに仕事で行くんだからずるいものもないでしょ？」

宥めるようにパメラはそう言ったが、反論するエレンの口調ははさらに勢いを増して、

「し、仕事だったらなおさら、あなたじゃなくて私の方が相応しいのにい！ あ、も、もしかしてアマベル様におねだりしたりしたわけーッ！？」

「そんなことできるわけじゃないじゃない」

「じゃ、じゃあ、ティース様だ！ ティース様をお願いしたんでしょ！？」

「だからしてないってば！」

なんとなくこうなることはパメラも予想していた。だから彼女にはギリギリまでわざと知らせなかったのだ。

「ずるい！」

「ずるくない！ ……もう、エレン。そんなことよりお仕事は？」

「……お昼休みよ」

エレンは口を尖らせながらトコトコとベッドに歩み寄り、ボスン！ と、ふてくされたように勢いよく腰を下ろす。

パメラは彼女に気付かれないようにため息を吐いた。

……これで常日頃から“格式あるミューティレイク家の使用人”を自負しているというのだから呆れるというか微笑ましいというか。

「……ちよつとヴァレンシアあ。なに笑ってるのよお」

「べつつにー。さて、あたしはそろそろ戻ろうかなつと。アマベル様に怒られたら大変タイヘンつと」

恨みがましいエレンの視線を軽く流して、ヴァレンシアはさっさと部屋を出ていった。

「ふん。なんか嫌な感じ。いつもだけど」

半ば八つ当たりのようにそうこぼすと、

「ともかくパメラ。……選ばれちゃったのはまあ仕方ないけど責任重大なんだから。いつもヴァレンシアとやってるみたいな恥ずかしい真似だけはしないでよ」

「はいはい」

パメラは適当にあしらいつつ、さっきまでのあなたみたいな真似もね、と、心の中で付け加えておくことは忘れなかった。

「仕事で行くんだから。いくら帝都で珍しいものがあつたって遊んでたらダメなんだからね」

「わかってるわよ。大丈夫」

「……」

エレンは急に無言になると、やはり恨みがましい目でパメラを見る。

「なに？」

聞くと、彼女はしばらくの間真剣な顔で悩んだ後、少々遠慮がちに言った。

「……やっぱりお手当とか出るの？ 街の中見て歩いたり出来るの？」

パメラはすぐに察して苦笑すると、

「わかったわよ。もし時間があればだけど、綺麗な髪留め買ってきてあげるわ」

エレンの顔が輝いた。

「ホント!？」

「嘘言ってもしょうがないでしょ」

「あ、じゃあ――」

そう言ってエレンはベッドサイドにある私物入れの引き出しを開けてガサゴソと漁り始めて、

「これ。この前のお給金で買ったのだけど、こんな感じのちよっと大人っぽいのお願い」

パメラに見せたのは小さな赤いバラの形をあしらった髪飾りだ。

「でもそういうのはこっちでも買えるでしょ？」

「だからこういう感じなので、でも向こうにしかないようなものを選んで」

「……あまり自信ないなあ」

そもそも都会の良家に生まれたエレンと田舎生まれのパメラではそういうセンスにかなりの開きがある。彼女の気に入るようなものを選ぶ自信はなかった。

だがエレンはそのことを百も承知のようで、

「別にあなたのセンスに期待してるわけじゃないの。一緒に行く人の中にいるじゃない。とてもセンスのいい殿方が」

「センスのいい殿方？」

少し考えた。

(ティース様のことじゃないよね、きつと……)

いくら鼻肩しているパメラといえど、彼のセンスが一般的に言ってそんなによろしくないことはさすがに理解している。パーシヴァルにしても顔はいいが美的センスに関してはごくごく普通とか比較的無頓着だ。

他、一緒に行く男性といえれば一人しかいない。

「……あ。アレでいいんだ」

「え？ パメラ、今何か言った？」

「ううん」

パメラは何とも言えない顔で首を横に振った。

「わかったわ。一応お願いしてみるけど……どうなるかはわからないからね」

「わかってる。あの方だってお忙しいに決まってるんだし。……あ、でもパメラ。言っておくけど仕事で行くんだから。浮かれてあの方にベタベタしたり、抜け駆けしたりしないですよ」

そんなエレンの言葉に、パメラはキツパリと答えた。

「それは心配ないわ。私には合わない方だと思うから」

「あ、そうよね」

エレンは思い出したように笑って、

「あなたはどっちかというスマートな方より泥臭い方が好みなのよね？ すっかり忘れてたわ」

「……」

そんなことはない。が、そもそもパメラの目には彼女の言う“あの方”がそんなにスマートだとは到底思えないのだ。

いや、それどころかむしろ――

「ああ……」

そんなことをパメラが考えているとは露知らず、エレンは浮き浮きした顔で胸の前で手を組んだ。

「楽しみだわ。クリシュナ様が私のためにお土産を選んでくださるなんて……」

「……ちよつとエレン。買ってくるのは私なんだからね」

「わ、わかってるわよう。わかってるからちゃんと買ってきてよね」
パメラはため息を吐いた。

「わかってる。その代わり、私がない間よろしくね」

「その点は心配ないわよ。あなたの一人や二人いなくなつて、私がいくらでもカバーできるもの」

と、自信ありげ言い放つエレン。

「……ホント、大丈夫かなあ」

パメラは失礼な彼女のその物言いより、本当に大丈夫なのかとい

うことの方が気になって、もう一度ため息を吐くことになったのだ
った。

パメラたちの話題に上った“もう一人の男性”クリシュナⅡガブリエルという青年は、四ヶ月ほど前、今年の一月にディバーナ・ロウに加わったデビルバスター候補生である。

「――あ、クリシュナ様だわ」

「今日もステキね……どこに向かわれるのかしら」

年齢はティースより一つ下、パーシヴァルより一つ上の十八歳。身長は百七十センチ半ばと、この職業を目指す者としては標準ぐらい。無駄のない体付きで爽やかな正統派の好青年。

出で立ちは膝丈ぐらいの前が開いた装飾付きのコートに半ズボン、ハイソックスといった少々オールドな“貴族風”の衣装に、ミスマツチな古い薄黄色のゴーグルを額に備えている。ハイセンスであるとは言い難いが、个性的であるということと、何より元値が高いということがあって、逆にセンスがいいという評価になっているようだ。

そして特に……そう。

笑顔、だ。

誰かと向かい合っているときは常に笑顔。それも嫌味のない至極爽やかな笑顔。これが女性たちの心を捕らえて離さない。

加えてパーシヴァルのように特定の誰かとの浮いた噂があるわけでもなく。

「ねえ、聞いた？ クリシュナ様、今回の試験に同行するそうよ」

「クリシュナ様なら今年お受けになられてもきつと合格するのに……どうして受けさせてもらえないのかしら……？」

現在はレアスⅡヴォルクス率いるディバーナ・カノンの下に付き、デビルバスターを目標して訓練中。ミューティレイクの使用人たち

の間ではディバーナ・ロウ始まって以来の天才という評価が定説となっている。

それも決して根拠のない噂などではない。実際入隊試験の際にデビルバスターであるレアスを追いつめたという実績があった。

有能でハンサム、真面目そうで人当たりもいい。

これで目立つなという方がどだい無理な話で、女性使用人たちの間における一番人気は（あくまで人数の上では）彼だと言い切って間違いないだろう。

「……クリシュナ様！」

「ん？」

昼過ぎ。別館一階のホールから外へ出ようとしていたクリシュナを呼び止めたのは、ミューティレイクの使用人の少女たちだった。一人ではなく四人、全員が十代前半から中過ぎぐらいだろう。

クリシュナは足を止めて振り返った。

四人とも見覚えがある。何度か話したこともあるだろう。名前は覚えていなかった。

自然と微笑みが浮かぶ。

「どうした？」

「……ほ、ほら。はやく渡して」

「ちよっ、ちよっと待ってよ……」

四人の中のおそらく一番年長と思われる少女が、他の少女たちにせつつかれて懷から何か取り出す。

「あの、これ持ってってください」

「？」

受け取ったそれはどこかで見たことのあるお守りだった。

（……なんだ。その教会で売ってる旅行安全祈願のお守りじゃないか）

クリシュナはすぐに顔を上げて少女に尋ねる。

「これは？」

「あの、それ、旅行安全祈願のお守りなんです。クリシュナ様が明

日から遠出されると聞いて、みんなで買ったんです。ね？」

彼に見つめられ、年長の少女が後ろの三人に同意を求めると、少女たちは一斉に頷いた。

「ああ、そうか。旅行安全の……これを俺に？」

「は、はい」

クリシュナはマジマジとお守りを見つめて、一呼吸。

ニッコリと笑顔を浮かべて、

「嬉しいよ。ありがとう」

「あ、いえ、その、役に立たないかもですけど、でも、もしかしたら……」

「俺、こういうの結構信じる方だから。ホントどうもな」

もう一度礼を言って、さらに頬を赤くした少女たちと別れた。

玄関から外に出る。

少し強くなった日射しの中、緑の芝生の上をしばらく歩いた後、

「……やれやれ」

クリシュナはそう呟いて手の中のお守りを目の前にぶら下げた。

空いた左手でポケットを探る。

まったく同じものが目の前に二つ、ぶら下がった。

ため息。

まあ、少女たちの好意は素直に受け取っておくにしても。

「あれ。こういうのって返品して換金したりとかできるのか——」

「クリシュナ様！」

「！」

お守りをポケットに隠して振り返る。

やってきたのは先ほどの四人組のうちの一人、お守りを渡してくれた年長の少女ではなく、後ろにいた三人の中の一人だった。

反射的に微笑みが浮かぶ。

「どうした？ 何か——」

「これ、もってってください！」

小声で、しかし勢い良く。耳まで真っ赤にした少女は視線を伏せ

たまま、手にした何かを押しつけるように渡してきた。

「えっと――」

問いかけるよりも早く。

少女はアツという間に走り去ってしまった。

しばらく呆然とした後、なんとなく辺りを見回す。幸い、誰もいなかった。

「……」

視線を手元に落とすと、そこにあったのはやはり旅行安全祈願のお守りだった。……先ほど少女たちからもらったのと違うのは、ミールカール教で縁起の良いとされる白い鈴と小さな宝石が組み合わされていることだ。

「これは、また……」

宝石自体はそれほど質の良くない安物だが、値段にすれば先ほどのお守りの軽く数十倍、おそらくあの少女たちの月給の何分の一かに相当するものだろう。

顔を上げた。

すでに少女の姿はない。

「抜け駆け、ってヤツか……」

とてつもなくわかりやすい好意の表現。それ自体はもちろん喜ぶべきことだろう。

が、しかし。

「やれやれ。俺はこういうの信じてないんだが……」

扱いに困る高級お守りを見つめながら、もう一つため息。

「……この高い方はどこかで換金できるかな……」

お守りをポケットに入れて歩き出す。

「ん？」

視線の向こうから歩いてくる人影に気付いた。
知っている人物だった。

「ああ、パメラじゃないか」

パメラⅡレーヴィット。特に接点があるわけではないのだが何かと縁のあるハウス・メイドの少女で、今回も仕事と一緒に帝都ヴォルテストへ赴くことになっている。

クリシュナは気安く声をかけた。

「ちょうど良かった、パメラ。ちょっと明日のことで聞きたいことが――」

「……」

スタスタ、と、短いお下げの少女はそのまま横を素通りしていく。

「パメラ？ あ、おい……パメラ？」

「？」

ようやくパメラが立ち止まって振り返った。

「私ですか？ すみません、聞こえませんでした」

「ああ、そうか」

彼の声は比較的低音が強い。その響きにうっとりする女性も多いが、決して聞き取りやすいものではない。

クリシュナは意識的にはっきり発音するようにし、改めて尋ねた。

「それでな、パメラ。キミに聞いておきたいことが――」

「知りません」

「……」

一瞬の沈黙。

「え。あ、まだ何も言ってないんだが……」

「何ですか？」

パメラが真っ直ぐに見つめてくる。

「あーっと……あ、忙しいのか？ だったら後でもいいんだが……」

「暇ではないですけど。後、って一ヶ月後とかでもいいんですか？」

「……」

何も返せずにいると、パメラはしばらく黙った後、急に表情を緩めた。

「それで、何ですか？」

「あ。ああ、実は一緒に行くメンバーのことで――」

どうにも調子が狂う感じだ。

もちろん使用人の全部が彼に好意的なわけではない。が、このパメラに関しては完全に嫌われているというわけでもなく、かといって先ほどの少女たちのように好かれているわけでもなさそう、という、なんとも奇妙な態度なのだ。

(ホント、なんなんだか……)

思い返してみれば、最初に会ったときから何とも微妙な距離感だった。とてつもなく冷たい態度を取られたかと思えば、時折遠くから見つめられている。そこで積極的に話し掛けてみるとさっきのように冷たい態度で返される。それが彼女の性格なのかと思えばそうでもなさそう。

(何か嫌われるようなことでもしたか……それにしちゃ時たまこっちを気にしてる素振りを見せたりもするし)

何とも掴めなかった。

——もちろん彼は知らないのだ。以前、サイラスⅡレヴァインという自分に瓜二つの人間がこの屋敷にいて、そしてその人物が彼女と親しかったことなど。

クリシュナは気を取り直して言葉を続けた。

「ティーサイトⅡアマルナとパーシヴァルⅡラッセルだろ？ それにキミとフィリスⅡディクター。そして俺」

「はい」

「そこまではわかるんだが、あと一人誰が行くのか知らない。キミは知ってるか？」

「え、聞いてないんですか？」

「いや、俺が聞き逃したわけじゃない。最初から聞いてないんだ」
パメラは少し眉をひそめて、

「だから、聞いてないんですよね？」

「あ、ああ……キミが世話担当で、フィリスが医事担当、俺が護衛担当だから——」

「あ」

話の途中でパメラの目線が横に逸れる。

「シーラ様！」

「あら、パメラ」

やってきたのはシーラ・スノーフォールだった。

「今、お帰りですか？ 今日はずいぶんと早いですね？」

打って変わって弾んだパメラの声。

「ええ。ほとんど去年のうちに習得しているから、あまり必要ないのよ」

「そ、そうなんですか。シーラ様、すごいですね……」

「きちんと学んでいれば当然のことよ。……あ、それとパメラ。今晚、少し用意してほしいものがあるのだけれど――」

「なんですか？」

「実は――」

と。

そんな二人の会話を眺めながら、

（……やっぱ嫌われてると見るべきかな、これは）

放置されたクリシュナはなんとも居心地の悪い気分だった。

（いや、別にいいんだが。けど理由もわかんないってのはすっきりしないというか）

とりあえずその場を離れることにした。

残りの一人のことは明日になれば嫌でもわかるだろう。パメラに尋ねたのもたまたま思い出しただけのこと、特別気にかかっていたわけじゃない。口うるさいヤツじゃなければいいなと思うぐらいのことだ。

（しかし、ティーサイト・アマルナとパーシヴァル・ラッセル、か。ほとんど話したことがないな……）

どっちも自分とタイプが違う、話が合わないだろうという認識はあった。そう考えて同行するメンバーを思い浮かべてみると、気軽に喋れそうなのはフィリス・ディクターぐらいだろうか。

一人でいるのは特別嫌いではないが、会話のできない相手と長時

間一緒にいるのは間違いなく苦痛だ。

(……やれやれ。勉強になるとはいうが、二ヶ月もつてのは正直しんどい……)

「あ、クリシュナ様ー！」

「……ああ。キミは確かー！」

これなら屋敷でキャーキャー言われてた方が何倍も気が楽だな、と、そんなことを考えながら、クリシュナⅡガブリエルはいつもの微笑みを浮かべ、屋敷へと戻っていくのだった。

「……ふう」

ティースが全ての支度を終えた頃、外はオレンジ色から薄闇色へと移り始めていた。

ちよつとした用事で外から帰ってきた後、外で狼のマルスや番犬たちと戯れるセシリアと二言三言会話を交わし――ほつれた袖に危うくハートマークのアップリケを付けられそうになりながら――屋敷の玄関ホールへと戻ってくる。

丸テーブルの並ぶ一階ホールは比較的閑散としていたが、食堂へ続く通路からは夕食支度の喧噪が聞こえてきた。

「お帰りなさいませ、ティーサイト様」

「え、あ、た、ただいま戻りました」

ちようと出くわしたのは、屋敷の女性使用人を束ねるハウス・キパーのアマベルⅡウィンスターだ。

長いブロンドのシニョンスタイル。眼鏡の奥の顔立ちは二十代半ばという実年齢やその職種から受けるイメージよりは幼く可愛らしい形をしているものの、女性にしては上背があり、表情は大体の場合において厳格さを保っているため、総合的には取っつきにくいという印象があった。

多分に漏れず、ティースも彼女の前では萎縮してしまう一人で、
こういうときの挨拶のやり取りぐらいしか言葉を交わしたことがな
い。

と、しかし。

「あ。ティーサイト様」

「え？」

今日は珍しく彼女に呼び止められる。

「あ……はい。なんですか？」

ちよつと緊張しながら振り返ると、アマベルは思い出したような
顔で、

「実は今晚、お嬢様のご意向でささやかながら壮行の催しを行う予
定なんです。ですから御夕食は食堂の方でお願いしたいのですが…
…」

「え？ あ。わかりました」

もちろん支障はない。何も用事がないときはいつも食堂で夕食を
摂っているのだ。

アマベルはほんの微かに口元を緩め、軽く会釈して、

「よろしく願います。午後七時よりお嬢様も同席いたしますの
で——」

「アマベル様ああっ！」

「！」

突然の悲鳴にアマベルはビクツとして顔をあげた。

「大変！ 大変ですううっ！」

「な。な、何事ですか！」

真っ青になって駆け寄ってきた——おそらく新人だろう——十代
前半ぐらいのまだまだ幼さの残る使用人の少女に、アマベルは少々
不安げな顔で問いかける。

「じ、じつは、今晚の御夕食のことで——と、とにかく来てくださ
い！ わ、わたしもう、どうしたらいいか——！」

少女は今にも泣き出しそうだ。

「ま、まずは落ち着きなさい。すぐ行きますから。――す、すみません、ティーサイト様。これで失礼しますっ!」

自身も微妙に平静を失ったままそう言ってティースに一礼すると、
「さ、どこ? どこでなにがあったの?」

「じ、じつはヴァレンシアさんが――」

二人はそのまま早足で食堂へ続く通路へと消えていった。

「……」

アッという間の出来事に、半ば呆然とそれを見送ったティース。

とはいえ特別珍しいことではない。このミューティレイク別館はたわいのないトラブルの発生率が異常に多い場所だ。――それが天災なのか人災なのか、真偽のほどは不明であるが。

「でも……そっか。壮行会か……」

その言葉に、まだ少し漠然としていたものが急に輪郭を帯びてきたような気がした。

明日、出発。

そこからまだ日にちがあるとはいえ、あとは試験会場へ一直線だ。戻ることはない。

ピタッと大階段の前で足を止めた。

少し上を見上げると、ミューティレイク家のシンボルである六剣の紋章がある。

心が引き締まる感じがした。

デビルバスター試験。

大陸の八割以上を占める数々の領地から数千人が受験するが、受かるのはその百分の一未満と言われる。しかも危険を伴う試験のため、受験するのは皆それなり以上の鍛錬を積んだ者ばかり……その中の百分の一未満、なのだ。

超難関であることは言わずもがな。しかし受ける以上は可能性がないわけではないし、もちろん受かるつもりでいる。

そしてもし受ければ――

(……っても、突然何か変わるわけじゃないか)

受かるのが目的ではない。

脳裏を過ぎったのは、今までに感じてきた様々な想い。

そこに一步近付く――受かることでデビルバスターとして様々な特権も授与されることになるが――個人的にはただそれだけのことだ。

体が熱くなった。

進んでいる実感がある。

一歩ずつ。

いつか誓った、目標に。

そしてもう一歩。

思いつきり踏み出す。

いや――

「あ……」

階段を一步上ったところで、ティースは足を止めた。

ふと心に引っかけたもの。

「そうだ。シーラのヤツに言っとかなきゃ。まあ知ってるだろうけど……二ヶ月もいなくなるんだし……」

独り言を呟いて、以前屋敷を空けてしまったときのことを思い出す。

考えてみればそのときのことが原因で彼女は卒業できず、今も学園に通うことになっているのだ。

「今年こそは卒業してもらわなきゃ。それで――」

思わず言葉が止まって、

「……その後って、どうすんだろ」

ふとそんなことを考えた。

まったく抜けてるというか、彼はそれを全然考えていなかった。

……名門サンタニア学園の薬草学科卒、となれば、彼女の夢である薬師への道は半分以上開かれたと言ってもいい。基本的にはどこかの薬師に弟子入りするのだろうか、好成績で卒業することが濃厚な彼女の場合、援助さえ受けられるならすぐに店を開く道もある。

「店、かあ……それってネービスでやるのかな。それとも――」

そこまで考えて、ティースは再び上を見上げた。

彼女が今日、早くに帰ってきていることは知っていた。

「……そういうことって、話しておかないとダメだよな。そろそろ」

壮行会、とは言っても特に派手なことがあるわけではなかった。

ただ、いつもより若干多くの人が食堂に集まり、いつもはしないような話をする。

そこには屋敷のデビルバスター全員がいた。

アクアⅡルビナート。

レインハルトⅡシュナイダー。

レアスⅡヴォルクス。

そして、アルファⅡクールラント。

いつもより少し豪華な食事と、少し高級なお酒。

アクアはいつもより一割ほど増して饒舌に絡んできたし、レイはいつもと変わらぬ飄々とした態度で時折ティースやパーシヴァルをからかい、レアスは他の面々が手にした酒の杯をどことなく無然とした顔で眺めていた。……自分のジュースには一度も手を付けず。

アルファは相も変わらず、どこか一点を見つめたまま動かなかったし、場の雰囲気吞まれたアオイは早々に酔いつぶれ、主人であるファナに介抱される始末。

そんな雰囲気の中、

（あ、もうこんな時間か……）

ティースもまたいつもより飲みすぎた。といっても明日に支障があるほどではなく、ちょうどほろ酔い気分といったところか。

テーブルの料理は八割方片付けられ、何人かがすでに退席した頃。

「……あれ、ティースさん。もう戻るんスか？」

パーシヴァルの呼びかけにティースは頷いて、

「ああ、パース。ちょっと飲みすぎたみたいだね。……じゃアクアさんの相手、よろしくな」

「え！？　ちょ、ちょっとティースさん——！」

抗議の声が最後まで聞こえることはなく。

「パースくん……おねーさん、遠くから応援してるから、頑張ってくるのよおおお……」

「えっ、う、うわっ、ちょっ、まっ、ア、アクアさ——うわあああああっ」

「……すまん、パース」

珍しく他人に厄介ごとを押しつけることに成功して、ティースは食堂を出た。

時間は午後九時半を過ぎたぐらいだろう。屋敷の中は静かで、食堂以外を担当する使用人たちは今日の反省会も終えて各々寮や自宅へ戻ったようである。

「……ちよっと飲みすぎたかな」

相変わらず雰囲気弱い性格だなと少しだけ自嘲して、歩き出す。向かう先はもちろん、彼より十五分ほど先に退席したシーラの部屋だ。

階段に足をかける。

玄関ホールには誰もいない。

しいん、と。

賑やかだった食堂とは雰囲気が一変。

紅い月と、照明の薄明かりの中、頭上に見える六剣の紋章にチラリと目をやって階段を上った。

遠くで聞こえる犬の遠吠え。

階段の途中から見える外の景色は、緑の芝生が春風にそよぎ、桜色の花がはらはらと舞う、雅やかな月夜の情景。

食堂を出てから階段を上りきるまで、誰にも出会うことなく。

彼女の部屋の前もまた、静寂の中にあった。

「……」

少し胸がドキドキしているのはアルコールのせいだろうか。

(……灯り、消えてるみたいだ)

ドアの隙間を見てティースはそう思ったが、まだ食堂を出てからそれほど経ってないし寝ているということはないだろう。

あるいはどこかに行っているのだろうかと思いつつ、軽く扉をノックする。

「開いてるわ」

「あ……」

意外にもすぐに反応があってやや戸惑ったが、すぐに返事をする。

「あ、シーラ。俺だけ……」

「ええ。……言わなくてもノックの音でわかる」

「あ、そっか……」

納得しながらも、少しいつもと違う空気があった。その理由はドアノブをひねって中に入った瞬間にわかる。

「あれ……」

部屋の中に微かに果実の香り。

「なんとなくだけど、来るような気がしてたわ。……ファナの口癖じゃないけど、本当に、なんとなく、ね」

もしかしたら寝支度をしているかと思っていたが、その予想は見当違いの方向に外れていた。

「お前、それ……」

彼女は窓際の椅子に腰掛けていた。

金糸の刺繍が入った黒いベルベットのトップは彼女のお気に入り。お気に入りだが滅多に着ることはない。

ティースが前にそれを目にしたのはいつだったか――

そして薄暗い室内の月明かりに浮かぶ、ぞっとするほど美しい彼女の横顔。

そこにほんの少しだけ紅が差していた。

紅い月のせいではない。

「どうしたの？ ああ、これ？」

シーラは彼の表情を見て、そしてすぐに視線を右手のワイングラスに落とし、少し上擦った声で答えた。

「変かしら。でも今日からは私がこうしていても誰も眉をひそめたりはしないのよ」

「今日から……？ あ、そうか。今日って――」

言われてティースは思い出した。

「今日で十六歳か……」

そう。今日は彼女の十六歳の誕生日だ。

「そっか……そうだよな……」

彼がそのことを失念していたのは決して彼女をないがしろにしていたからではない。それは彼らの産まれたジェニス領に誕生日を迎えた本人を祝う風習がなく、代わりに親に感謝し親孝行をする日とされてはいるものの、近くに親のいない彼らにとってそれほど重要な日ではないためである。

が、このネービスで十六歳といえば確かに、完全に大人として認められる年齢であり、彼女の言うようにお酒を飲んでもなんら問題のない年齢でもあった。

「立ってないで中に入ったら？ それとも用事もなくノックしたの？」

「――」

彼女の視線を受けて、ティースの心臓は少しだけ速さを増した。

（うわ、まずい……）

アルコールでほんのりと赤くなった彼女の顔。その表情が彼に、思い出してはいけないこと――いつかの、不可抗力（？）で彼女とキスしてしまったことを思い出させてしまったのだ。

（……あああっ！ しっかりしろ、俺！！）

首を振って手綱をギュッと引き絞る。とてつもなく強固な鎖で作られたそれは、僅かに波立った彼の心を半ば強制的に抑え込み、そこに秩序を呼び戻した。

そして口を開く。

「ああ、いや。実はちょっとお前に話があつて」

動揺しないよう、意識的に語気を強めた。

「話？」

ティースは後ろ手にドアを閉じ、薄暗い足元に注意しながら進んで、彼女から一メートルほど離れたソファに腰を下ろした。

背の低いソファに座ることであちやうど彼女と目線の高さが同じになる。

「まだ先のことなんだけどさ……俺、二ヶ月も留守にするし、それに大事なことだから早めに決めておいた方がいいと思つてさ」

「大事なこと？」

シーラは少し不思議そうな顔でワイングラスをガラステーブルの上に置いた。

その仕草がいつもより艶やかに見えるのはやはりアルコールのせいだろうか。

またどきりとして、ティースは慌てて言葉を続けた。

「ああ。その、単刀直入に聞くけど……お前、学園を卒業した後のことつて考えているのか？ どうするつもりなんだ？」

真剣に尋ねたつもりだった。

が、予想に反し、シーラはふっと口元を緩めて微笑する。

「もちろんずっと前から考えているわ。……今まで聞かれなかったから興味がないものとはかり思つてたけれど、違ったのね」

痛いところを突かれた。

「うっ……い、いや、俺もだいぶ前から気にはしてたんだけど、ほら、なんとなく聞ける機会がなくて……」

「そう」

信じたのか信じてないのか何とも言えない微笑を浮かべたまま、シーラは少しだけワイングラスに口付けた。

「……」

また少し、動悸が早くなる。

「そ、それで、どうするんだ？」

「どうすると思う？」

「え……」

珍しく悪戯っぽい口調に戸惑いながら、ティースは彼女の手元に視線を移した。

（……結構、飲んでるのかな）

ワインのビンに残った量を見ると、どうやらそれが最初の一杯ではない。ワイングラスにして三杯目ぐらいか。無茶な量ではないが、何しろ初めて口にするアルコールなのだろうし、それなりに酔いが回っているのかもしれない。

そしてどうしようか、と、迷う。

こんな大事な話をこんな状態で続けるのは良くないが、今日を逃せば次に話ができるのは二ヶ月後だ。

少し迷った後、

（……結論は前から決まってるみたいだし、いいのかな……）

それに、と、ティースは思う。

ほんの少しだけ、楽しい。

アルコールのせいだけじゃない、少し浮かれた気分。

会話もいつもよりスムーズだ。最近ではあまりないことで、そんな状況がもう少し続くならそれも悪くはないと、そう思ったのだ。

「飲まない？」

「え？」

シーラが空のワイングラスをティースに差し出した。

「え？ あれ、なんでグラスが二個……」

「だから言ったでしょう。なんとなくお前が来る気がしてたのよ」

「……ああ、そっか。でも俺は下で結構飲んだから――」

「そう。だったら、私が全部飲んでもいいかしら？」

「え、全部って……それ全部か？」

ワインのビンにはまだ七割以上残っている。初心者の彼女にはいくらなんでも無茶な量だ。

「じゃあ……もううよ」

仕方なく、ティースは差し出されたワイングラスを手を取った。

「そう。じゃあ……」

頷いた彼女は少し嬉しそうに見えた。

「……」

ワイングラスに注がれる紫水晶の液体を無言で見つめ、ティースはそれに口を付け、喉に流した。

二口、三口。

ワイングラスはアツという間に空になる。

シーラは目を丸くして、

「……意外ね。お前のことだからお酒も弱いと思ってたわ」

「よく言われるよ。でもこれでも案外、普通の人ぐらいには飲めるんだ」

苦笑し、二杯目を受ける。

悪い気分ではない。いや、むしろ楽しい。彼女とお酒を飲む機会が訪れるなんて今まで想像したこともなかったが、決して悪いものではなかった。

そしてティースは先ほどの問いかけに答える。

「たぶん……この近くで店を出すとか、弟子入りするとか……そういうこと考えてるのかなって思ってたけど……」

少し言葉を切って、それから少し躊躇いがちに加える。

「あとはカザロスに戻る……とか」

「カザロスに？」

まったく考えてなかったのか、意外そうな顔だった。

ティースは視線を落とし、ワイングラスを両手で包みながら、

「ああ。いや。誕生日だからってことじゃないけどさ……でもお前にはまだ親がいるんだし、そういうことも考えてるのかなって」

「……」

シーラは少し黙って、窓の外に視線を移した。

そしてポツリと、

「そうね。来年の今頃なら、どうしてもここにいなきゃならない理

由もなくなってるだろうし」

「……」

何も言葉が思い浮かばず、ティースは黙ったまま手持ちぶさたに三杯目のワインに口を付けた。

「お前は、どう思うの？」

シーラはそう言っただけを見つめる。

「それも悪くないんじゃないか……とは思うよ」

ティースは手元に視線を落とした。

……勢い良く飲みすぎたのだろうか。少し頭の回転が鈍くなっていた。

そのせいだろうか。

普段はあまり口にしないようにしている話題。

この日は自然と口について出てきた。

「……ちょうど三年だよな。あれは確か、お前の十三歳の誕生日だったから……」

思い出す、故郷の情景。

このネービスより少し南東の方角、大陸全体から見ると東の端に位置するジェニス領のカザロスという街。自然が多く雨の多い、少し山側の農業の盛んな街。

——目を閉じると今でも鮮明に思い浮かぶ。

黄土色の緩やかな坂を上ったところに見える、赤い屋根と白い壁、その左右には綺麗な花畑があり、背中には緑の森を背負って、玄関の前には飾り気のない大きな馬車。

坂を上りきって振り返ると、ポツポツと見える家々と黄金色に輝く広大な穀物畑があって、小さくなった人々が一生懸命に動いている。

呼びかける声に再び振り返ると——そこには赤と白でできたカザロスでもっとも大きな建物。玄関の前には姉代わりだった面倒見のよい使用人の女性と、両親を亡くした彼を長い間可愛がってくれた好々爺然とした執事の男性。

そして――

ティースは呟くように言った。

「……俺、お前をここに連れてきたことは後悔してないよ。いつも遊び回ってるようなことを言ってたから不安に思ったこともあるけど……でも実際は学園でもトップクラスの成績だっていうし、ディアナさんもお前のこと、浮ついたところなんてちっともないって言うってた。だから」

シーラはじつと彼を見つめていた。

「でも……」

ティースは視線を上げないまま、続けた。

「同時に悪いことしたなってことはいつも思ってる。だって、そうだろ？ ……あなたは――ああ、いや」

首を振る。

「お前は、旦那様にとってたった一人の娘で……優しかった奥様の忘れ形見で……それを俺なんかが連れ出しちゃって。旦那様が、親切にしてくれた他のみんなが、今どんな思いでいるんだろうって。たまに想像して夢に見るんだ」

一瞬だけ、沈黙。

シーラは再び視線を窓の外に移して、

「……お前が気にすることではないわ。私が命令してお前はそれに従っただけなもの」

だが、ティースは少し笑って言った。

「違うよ。だって俺はあの前の日の夜、眠れずに一晩中悩んだんだ。悩んで、悩んで、それで決めたんだ。俺は……どうしてもあなたに幸せになって欲しくて……」

「……」

美しい睫毛が微かに震えて、シーラはそれを抑えるように眉をひそめた。

なにか言いかけて、やめる。

「だから……ああ、いや、でも、もし戻ったりしたら、きっとリィ

ナもエルも淋しがるな……」

「そうね。……それにお前はもう戻れないわ。私が戻ったらもう――」

「……」

「……」

長い、長い沈黙だった。

「……ティース？」

彼女が寝息の音に気付いたのは、それから五分近くも経ってからのことだ。見ると、彼はいつの間にかテーブルに頭を乗せてすやすやと眠っていた。

無理をしたのだろう。彼が飲んでいたのはここに来てから五杯目。ワインのビンはほとんどカラになっている。

「……」

シーラは少しそんな彼を眺めた後、小さく口を開いてため息をこぼすと窓の外に目を向けた。

「……本当に人がいいんだから」

残ったワインをグラスに注ぎ、ゆっくりと飲み干す。

アルコールを口にするのは正真正銘、初めてのこと。だが、しかし、両親のどちらから受け継いだものか、彼女は滅法強い体質のようだった。頭が少しぼんやりしてはいるものの、思考は完全にいつもどおりだ。

「お前がそうでも、私はとても後悔してるのよ、ティース……そう、とてもね」

きしっと椅子が鳴る。

美しい紅月夜。ワインと同じ色の月が彼女を見下ろしている。

もう一つ、深いため息。

「でも……」

シーラは視線を落とし、ティースの寝顔を見つめた。

静かに微笑が浮かぶ。

「最近のお前を見てたら……結果的にはこれでよかったのかもしれないわね。……お前はもっとたくさんの人に必要とされているようなもの……」

背もたれに体重を預け目を閉じる。

そしてシーラは、少し火照った体を冷ますようにしばしの間、ゆっくりと流れる時間に身を任せたのだった。

その翌朝。

小鳥の囀りが意識を運んでくる。

「ん……んん……？」

まだ少しどろどろとした意識の中、ゆっくりと身を起こしたティースは自分の体に起きていた異変にすぐ気付く。

「い、いてて……」

関節が痛い。

それもそのはず。彼が目を覚ましたのはいつもの体に馴染んだベツドの上ではなくソファの上、それも体を前に折り畳んで突っ伏した形だったのだから。

「んー……あ、えっと昨日は……？」

頭も痛い。

そこで彼はようやく、昨日酒を飲んだことを思い出し、

「あ、そ、そうか、昨日は確か壮行会があったんだっけ――」

二日酔いのようだがそれほど酷くはない。

「あれ、でもその後確か……あれ？」

肩に毛布がかかっているようだ。

が、彼はそれを視認できなかった。

「……へ？」

目の前が暗い。……いや、外から射し込む光は認識できたから失

明したわけではないが――どうやら目の前に何か布きれ……目隠しのようなものが巻かれているためだ。

「なんだ、これ……いったい誰がこんなこと――」

呟いて、ほどこうとして……そしてハッとする。

「あれ……昨日って確か――」

昨日、最後に意識を失った場所。そしてぼんやりとしていた鼻の粘膜に、特徴ある清らかな香水の匂い。それはこの屋敷でおそらく一人しかつけていないものだ。

「……あ」

思い出した。

と同時に急激に冷や汗が浮かんだ。

目隠しをほどこうとした手をそっと下ろす。

彼自身は昨日と同じ体勢のまま。あれから移動した形跡はない。

遠慮がちに、口を開いた。

「シ……シーラ……？」

間違いない。ここは彼女の部屋だ。昨日酔いつぶれたまま、彼女の部屋で一晩を明かしてしまったのだ。

「シーラ……？」

さらに遠慮がちにもう一度。

今は何時だろうか。まだ寝ているのかもしれない。だとすると起こすのはまずい。といって目隠しを外すと、彼女の寝顔を見ることになってしまう。……それもちよつとまずい。バレたら恐ろしいし、それはものすごく悪いことのような気がする。

とすると――

（目隠ししたまま……出るしかないか……）

室内で人が動いている気配はない。とすると、彼女は寝ているか部屋の外にいるかのどちらかだろう。

幸い、部屋の状況は昨日の記憶がある。薄暗かったが、鮮明に記憶していた。

（よ、よし……）

肩に置かれた毛布を畳んでソファの上に置き、ティースはゆつくりと動き出した。

ゆっくり。

ゆっくり。

と。

(……あれ?)

ティースは気付いた。

部屋の右手から微かな水音がする。

(えっと、あっちは確か……)

部屋の入り口ではない。

だが、そこにもう一つ部屋があることは知っている。

「!」

そしてティースは、この目隠しの本当の意味を理解する。

……そこは一階の大きな浴場とは別に、客間に備え付けてある小さな湯浴場だった。

それを理解すると同時に、

「うわああああああっ! すっ、すまんっつっ!!!!!!」

ティースは目隠しを投げ捨て、勢いよく駆けて部屋から飛び出した。

ボタン!!

「……はあっ、はあっ……」

壁に背を預け、ズルズルとそこにしゃがみ込む。

心臓がバクバクいって、二日酔いなど一瞬で吹っ飛んだようだった。顔が火照って、なんだかとてもない罪悪感が芽生えてくる。

(ま、待て、落ち着け! 俺は何も見えてないし、何も聞いちゃ——いや音は聞こえたけど、そ、そうだよ。ただ顔を洗ってただけかもしれないじゃ——)

「どしたの、ティース?」

「おわああああああっ!!」

急に声をかけられてティースは文字通り飛び上がった。今度こそ

本当に心臓麻痺を起こしそうだった。

動悸を抑えながら振り返った視線の先――

「な、なんだ、エルか……お、驚かさないでくれよ！」

そこにいたのはティースやシーラと幼なじみの少女、エルレーン
Ⅱファビアスだった。

「お、驚いたのはこっちだよ、もう」

もともと愛らしく大きな瞳をさらに見開いたエルレーンはそう言
って、大きく深呼吸。妖精のように小柄で可憐な少女は胸をなで下
ろす仕草をした。

「それよりどうしたの？　そこシーラの部屋だよね？」

いきなり答えにくい質問だった。

「へ？　あ、いや。その……えっと、いや、その、実はほら、今、
あいつにいつもみたいに怒られちゃってさ。そ、それで慌てて出て
きたんだ」

「怒られた？」

エルレーンは不思議そうな顔で小首を傾げる。

「でもシーラ、今は湯浴中でしょ？　だって、ほら。ボク、さっき
シーラに頼まれて、洗濯終わった着替え持ってきたんだよ？」

「え……あ、い、いや……」

ティースの顔は真っ赤になってどこからどう見ても怪しい態度だ
が、見つけたのが彼女だったことが幸いだった。

「あ、言いにくいことがあったならいいよ。キミがシーラに悪さす
るなんてことあるわけないもんね」

「……」

事実そのとおりだし信頼されていることは嬉しく思うが、何故か
ほんの少しだけ後ろめたい。

「……あ。そうだ、エル」

「うん？」

ドアノブに手をかけた体勢でエルレーンが振り返る。

ティースは言った。

「ちょっと前に言ったと思うけど、俺、今日から二ヶ月ぐらいなくなるからさ」

「あ、うん。最近、みんなの間でもその話で持ちきりみたい。……大丈夫。難しいっていうのは聞いてるけど、キミならきつと受かると思う。応援してるよ」

「サンキュ」

彼女の言葉はいつも真っ直ぐで、聞くだけでホッとする。仕事場ではマスコットののような存在だと聞くんが、それも頷ける話だとティースは思った。

ティースは続けて、

「えっとリイナはもう仕事だよな？ 今、いったい何時なんだ？」

「六時半。さっき丁度朝ご飯の準備が終わったとこだから、顔洗って、食堂に行った方がいいよ。リイナは今、ちょうど忙しい時間じゃないかな？ 見送りに行くって言ってたけど……」

「あ、そうか……」

若干遅いがそれでも大寝坊したというわけではないらしい。

「んじゃ、会えるかどうかかわからないし、リイナによろしくな。それとシーラにも。あいつ、いつ出てくるかわからないし……」

「え？」

だが、エルレーンは怪訝そうに首をかしげた。

「よろしくって、どういう意味？」

「え？」

そんなにわかりにくい言葉だっただろうか、と、ティースの方も少々怪訝に思いながら、

「だから、ほら。一応あの二人にも言ってあるけど、二ヶ月って結構長いし、まあ、俺がいなくても特に困ることはないと思うけど……」

「……あれ？」

エルレーンは不思議そうにシーラの部屋のドアを見つめ、それから再びティースを振り返ると、突如驚愕の言葉を口にした。

「だってシーラも一緒に行くんだよね？」

「……へ？」

ティースはびっくりして、

「いや、そんな馬鹿な。そんなわけないだろ、だってあいつには学園の講義があるじゃないか」

「え？　でもボクはそう聞いてたけど……」

「どうしたんですか？」

そこへちやうど、リイナが山のような洗濯物を抱えて通りかかった。

「ねえ、リイナ。今日だけど、シーラも一緒に行くって言ってたよね？」

「？」

抱えた洗濯物の奥でリイナは少し首をかしげて、

「ティース様の試験の話ですか？」

「うん、そう」

リイナは不思議そうにティースの顔を見て、

「ええ。そう言ってましたけど……それがどうかしたんですか？」

「い、言ってたって、誰が？」

狼狽えるティースにリイナは答える。

「シーラ様ですよ。一昨日、確かエルさんと一緒にいるときに。ですよね？」

「うん。講義は去年のうちにほとんど終わってるから本当は試験以外行かなくても大丈夫なんだって。……ティース、聞いてないの？」

「き、聞いてないも何も……昨日の夜だってそんなこと一言も……」

それは彼にとって想像外の、まさに晴天の霹靂の出来事であった

幕間『美しき紅月夜の下で』

さあつと春風が緑の芝生に波を立て、桜色の花がはらはらと舞う
雅やかな月夜の晩。

静かに流れる丑三つの夜、そびえ立つ一本の大木の下に一つの影
があった。

「今宵はいい月だな……」

大木の根元に背を預け、見上げる。

「こんな夜は心が震える。ついつい声を張り上げたくなる」
どこか遠くで犬の遠吠えが聞こえた。

そこへもう一つの声。

「確かに。いい風だ」

姿は見えない。声の方向は彼の頭上……木の葉の生い茂る枝の上
にいるようだった。

「翼を広げればあの月にさえ手が届きそうな気がするよ。たとえそ
れが叶わぬ幻想だとわかってはいても、そう思えて仕方ない」

男は意外そうに頭上の女を見上げる。

「あんたでもそんな途方もないことを考えたりするののか？」

女は答えた。

「私にとって夜の闇はあまりにも深すぎる。だからこそ夜空に輝く
あの月は、私の永遠の憧れだ」

「なるほど。わかる気もする」

男はゆっくりと目を閉じた。耳を立てて風の薫りを感じ取る。

女は首を斜め上に向け、夜空に浮かぶ月を見つめた。

今宵の月は赤みがかっている。

まるで幻想世界のような、神秘の夜。

「ところでセレス。つかぬ事を探ねるが……」

そして、男は言った。

“ダイエツト”というのは、いったいどういう意味なんだ？」

「……ダイエット？」

「決めたよ、マルス。私、今日からダイエットするから」

目が醒めた。耳をピクピクと動かして現状を確認する。

いつの間にかウトウトしていたらしい。昨日、悩みすぎて夜更かしをしたせいだろうか。

『ダイエット？』

顔を上げて頭上を見ると、彼の主が何やら決意に満ちた表情をしていた。

そう。それだ。

マルスはその意味がわからずに昨晚中悩んでいたのだ。

『しかしダイエットとやらは確か昨日からだっただけでは……』

「あ、今からじゃなくて、今日の午後から、ね。今朝はね。シューさんからとってもおいしいマドレーヌをいただいたの。だから今日の午後からね」

嬉しそうな主の笑顔は、まるで薄紅の花弁を優しく運ぶ春の風のような。

同時に鼻の奥をくすぐる甘い香り。

『はあ』

これまでの主の発言とそのときの状況から推察するに、ダイエットというのはこの甘いお菓子と関係があり、どうもこのお菓子を食べるのはそのダイエットという行動に反することのようだ、と、そこまでは理解していた。

そして今、主は自分の決意に反する行動を取ろうとしている。

主は決して意志の弱い人間ではない。しかし甘いお菓子のこととなると話が別だった。

ここは自分が止めるべきなのだろうか。

しかしそこまで口を挟んでいいものか。

などと、マルスが真剣に悩んでいると、

「おー、セシルちゃん。ちわーっす」

やってきたのは一人の少女。その出で立ちから、この屋敷の使用人であることはすぐにわかる。

「あ、こんにちは、ヴァレンシアさん。休憩時間ですか？」

ヴァレンシア「キッチンというその少女はマルスもよく知っていた。もちろん主——セシリアの敵ではない。」

「そそ。つかセシルちゃん、随分とおいしそうな持ってんじゃん？ それ、どしたの？」

「あ、これは先ほどシューさんにいただきました。シューさんの作るお菓子はいつもおいしくて百点満点なのです。ヴァレンシアさんもお一ついかがですか？」

「……またか。あのロリコンめ」

「？」

「あ、なんでもないなんでもないよーっつか純真無垢なセシルちゃんはあんまあの男に近付かない方がいいよー変な病気移されるからねー」

「え？ 病気？ シューさん病気なんですか？」

「そもそも。病気っつーかあいつ自身が病原体。バイ菌そのもの」

「あ。えっとー……」

苦笑するセシリア。

マルスは表面上は興味なさそうに、ただ耳だけをそばだてて二人の会話を聞いていた。

話の中身はだいたい理解できる。シューというのは今朝方セシリアと話していた若い屋敷の使用人のことで、彼女の手にしている甘いお菓子を作る人間のことだ。

と、そこへ、

「あ、いた！ ヴァレンシア！」

もう一人やってきた使用人の少女。やはり敵ではない。

「おいっす、パメラー。どーしたのさ、そんなに慌てて」

「どーしたじゃないよ、もう。……あ、セシル様。すみません、騒がせてしまつて」

パメラという少女がペコリと頭を下げる。

「いえいえ。それよりなにかあったんでしょうか？」

「あ、いえ、そんな大したことでは——ちよつとヴァレンシア！あなた、またエレンに何かイタズラしたでしょ！」

腰に手を当てたパメラがヴァレンシアに詰め寄つた。

「えええ、身に覚えがないなあ。うーん、あれかあ。それともあつちかなあ……」

「覚えあるんじゃない！　もう！」

「……ありやしまった。このヴァレンシアさんともあろう者が」

「わざとらしいんだつてば、もうっ！　ほら！　さっさと行つて謝つてくる！」

「えええ」

「えええ、じゃない！」

ヴァレンシアは渋つて、

「でも何から謝ればいいのかわかんないしー」

「全部謝んなさいっ！」

ズルズルとパメラに引つ張られていくヴァレンシア。

去り際、ペコツともう一度頭を下げるパメラ。

なんとも騒々しい。

だが、セシリアはそんな二人のやり取りを楽しそうに眺めていた。

「じゃーまたねー、セシルちゃん」

「はい。またよろしくです」

ニッコリと見送るセシリア。

マルスはそれを見上げて気持ちが悪くなる。

……主の幸せは自分の幸せでもある。だからマルスは、彼女を幸せにしてくれるあの二人のことが嫌いではない。いや、この屋敷の人間はほとんど嫌いではない。

つまりマルスの主である少女は、屋敷の人間にとっても大事にされ

ているのだ。

「笑ったらエレンさんに悪いかな。でも本当はすごく仲がいいんだよ。ね、マルスもわかるでしょ？」

『イオタとガンマのようなものでしょうか』

いつもセシリアの気を引こうと喧嘩している二匹のことを思い浮かべてみると、なるほど、その言葉は正しいような気がした。ただ、あの二匹はたまに度が過ぎて本気になることがあるのが困りものである。今度、よく言って聞かせなければならぬ。

「うんうん。パメラさんも大変だよ、きっと」

最後のマドレーヌが彼女の口の中に消える。と、その口から突然ため息が漏れた。

「……うう。半分は明日にしようと思ったのに」

『明日、ですか？　しかし、明日からは確かダイエットとやらをするはずでは？』

それともダイエットと甘いお菓子には何の関係もないのだろうか、と、マルスが微妙に混乱していると、セシリアはさらに呟いた。

「でも大丈夫だよ。うん。ティースさんも前に全然太ってないって言ってくれたし、今食べた分は全部胸の成長に回るはずだもん」

主は決して妄想癖があるわけではない。しかし、胸の話になると何故か現実逃避してしまうようだった。

『しかしセシリア様はもともと戦闘向きではありませんし、胸筋はそれほど必要ないかと思いますが……』

「うう、でも私、やっぱり半年前から何も変わってない気がするよ。ううん、絶対成長してない」

『胸筋が、ですか？』

「あ、そうだ。リディアちゃんなら色々知ってるかも。今度聞いてみようかな」

『はあ』

「――なあ、セレス」

今宵も紅い月が美しい。

「胸が発達しているかどうかということは、雌——女性にとってそれほどに大切なことなのか？」

「胸？」

相変わらず枝の上にいるセレスの姿は見えない。

「胸というのは胸筋のことか？ それとも乳房のことか？」

「ん？」

マルスは少し考えて、

「ああ、いや、よくわからない。だが、セシリア様がそのことをしきりに気になさっているのだ」

「なるほど」

納得したような声だけが頭上から聞こえてくる。

「人間の世界ではそれが女性としての魅力の一つの要素になり得ると聞いたことがある。おそらくはそういうことだろう」

「そうなのか。であれば、セシリア様の悩みは相当深刻だな」

マルスは真顔で、本人が耳にすれば間違いなくヘコみそうなことを呟いた。

セレスはそんな彼を見下ろして、

「あくまでいくつもの要素のうちの一つということだ。人間たちの価値観は我々と違って多種多様だからな」

「そうか。難しい」

夜空を見上げる。

「ああ、見ろ、セレス。今日も綺麗な月だ」

「私はこの月が好きだよ。光が柔らかい」

「柔らかい？ ……なるほど、そんな気もするな」

マルスは少し間をおいて続けた。

「だが、きっとセシリア様の手の方が柔らかい。俺はセシリア様の手があの月よりも好きだ」

頭上の枝葉が微笑するかのように揺れた。

「お前らしい発想だよ、マルス」

白い蛾が月に向かって飛ぶ。
りい……ん、という虫の鳴き声が聞こえて。
そして夜はさらに更けていった。

マルスの目の前には今、主であるセシリアの他にもう一人の少女がいる。

「え、マルスにですか？」

「ええ。この前暴漢から助けてくれたお礼。彼の口に合うかどうか分からないけれど」

シーラスノーフォールというその少女は、セシリア曰く、すごい人物らしい。昨日まではどこがどうすごいのかマルスにはわからなかったのだが、改めて見てみると、なるほど、確かに胸は主より発達しているようだ。

『しかしそういう意味で言うと、ジョエッタ殿の方がすごいのでは』
マルスの頭に浮かんだのは恰幅と切符のいい年輩の女性使用人の姿だったが、どうやらそういう単純なことでもないらしく。

難しい。
と。

まあ、そんなことに散々悩みつつも、マルスはシーラの持つてきたお礼——鳥の筋胃部を茹でたもの——を口にしてご満悦だった。

「ありがとうございます」

「そう。喜んでもらえたのなら嬉しいわ」
チラッと見上げると、シーラは優しい微笑みでマルスを眺めていた。

「よかったね、マルス」

皿はアツという間に空っぽになった。物足りない気はしたが、それを言うのは贅沢というものだろう。

「まだあるわ。食べていいわよ」

『……!』

至福の時が訪れた。

「ところでシーラさん。あの私、少し悩みがあるのですが、聞いていただいてもよろしいでしょうか」

「悩み? どうしたの?」

ピク、と耳が動く。

いくら目の前に大好物があっても主の言葉は聞き逃さない。
悩み。

ダイエットのことだろうか。

あるいは昨日言ってた胸の話だろうか。

「実はその、最近、あのお化粧というものが気になって気になって仕方がないのです」

『……おけしょう?』

どうやらまた新たな悩みのようだ。

「気になるって? お化粧を試してみたいってこと?」

「はい」

真顔で頷くセシリアに対し、シーラは少し考えるような顔をして、

「何か理由があるの?」

「シーラさんもたまーにお化粧なさってますよね? たまーにですけども」

「え? ああ、そうね」

一瞬だけ視線が泳いだ。

人間がああいう仕草をするのは何か隠したいことがあるときだと知っていたが、セシリアは気付かなかったようだ。

「ぶっちゃけた話をしますと、ですね」

セシリアは改まってそう言うと、少し不満そうに頬を膨らませる。
「私がお兄ちゃんと並んで外を歩いているときなのですが、何故か道行く男の人がみんなお兄ちゃんの方を見るのです。それはまあいいのですが、でも誰一人として私の方は見ないのです。うわ、すげえ美人——あの背の高い方な、とか、それはもうサクサクツと言わ

れてしまうのです」

「ああ、アルファさんね……確かに、あの人は——ええ、とても男性とは思えない姿をしているわね」

その言葉にセシリアはますます不満そうな顔になって、

「確かにお兄ちゃんが綺麗な顔をしているのはホントのことですし、妹としてそんな兄がちょっとだけ傲慢だったりするのも確かなのですが、しかしこれは女としてあまりに屈辱的な話であります！」

主が珍しくヒートアップだ。

眉間に皺を寄せ、口元を引き締め、右拳を握りしめて空を見上げる。

「だから次回のお出掛けのときにはお化粧でもして見返したいのです！　せめて、ああ、でも隣にいるのもなんか女の子みたいだぜ——ぐらいにはっ！」

「……ささやかね」

シーラの苦笑に、マルスもまた同感であった。

「——なあ、セレス」

「どうした？　また彼女のことか？」

三日連続で綺麗な月夜だった。

「ああ。俺は、セシリア様以上に素晴らしい人間は——シルヴァーナ様を除いてはいないと思っているのだが、どうやら人間の世界ではそうでもないようだ」

「人間と私たちでは価値観が違う。当然のことさ。……しかし」

セレスは顎を上げて中空に浮かぶ月を見つめた。

「お前はまた少し人間じみてきたな、マルス」

「？　なんの話だ？」

意味がわからず問いかけると、セレスは枝の上から彼を見下ろして、

「お前は今、彼女とシルヴァーナ様を天秤に架けた。本来、私たちはそういうことをしないものだ」

「なんのことだ？」

わからない顔のマルスに対し、セレスは短く問いかけた。

「マルス。お前の主は誰だ？」

マルスは即答する。

「それはもちろんシルヴァーナ様だ。だが、シルヴァーナ様からセシリア様のことを任されているのだから、セシリア様も私の主だ。そうじゃないのか？」

少し間を置いてセレスが答えた。

「それだよ、マルス。私たちの世界に“二人の主”などという考え方はない。自分の体が一つしかない以上、必ずどちらかを裏切らなくてはならない事態も起こりうるだろう？ 私たちにとって主を裏切ることは死を意味する。生命ではなく、存在の死だ。存在意義の消滅だ。だから本来そういうことは有り得ない」

「……」

マルスは神妙な顔で視線を落とした。彼女の言いたいことは理解できた。

「だから人間じみてきたと言ったのだよ、マルス。それは人間には珍しくない感情だ」

枝葉が微かに揺れる。

セレスは続けた。

「私だって何かあれば彼女を護るように言われている。しかし、ただそれだけだ。お前のようにそれ以外のこと——彼女の悩みをどうこうしようなんてことは考えもしない」

「……」

マルスは神妙な様子で、やはり夜空の月を見上げた。見上げながら、そういうことを諭す彼女もまた、少し人間じみてきているんじゃないかと漠然と思った。

「……二人の主、か」

月は素知らぬ振りで、ただ柔らかな光を二人に注ぎ続けていた。

「帝都はやはり人がたくさんいますか？ 休日の中央市場よりたくさんですか？」

「ん、ああ、そうだね。特に前回行ったときはちょうどクライン教の神祭の時期だったからものすごい混雑ぶりだったな。ちよつと油断すると隣の人とすぐはぐれるぐらいだったよ。今は――どうだろう。大きなイベントといえばデビルバスター試験ぐらいだし、こことそう変わらないんじゃないかな」

「へええ……」

通常、秩序に守られたこのネービスの街を、体の大きな狼が人間の付き添いもなく歩いているということは考えられない。犬であってもそれが飼い犬ならば飼い主が付き添うし、野良犬なら運が悪いと捕まって殺処分されてしまう。

しかしマルスは特別だった。

首飾りに目立つよう刻まれたミューティレイクの紋章。

人間はそれを見て安心する。その狼が特別に訓練され、決して人に害を加えることはないものだとして理解するからだ。

セレスと違って翼を持たない彼にとって、これは非常に有り難いことだった。

朝、主であるセシリアを学園まで送った後、彼はだいたい一匹で屋敷まで戻り、夕方になると再び学園まで主を迎えに行く。主や主の周りに迷惑をかけないように寄り道などは一切しないし、できる限り道行く人々を怖がらせないように気も遣う。

そんな彼の日課。

この日の朝もマルスは、セシリアを学園まで送っていくところだった。

「じゃ、俺はこの辺で。早く帰って姉さんの出発の手伝いしなきゃならないから」

「はい。気を付けてくださいね」

去っていったのはセシリアと同じ学園に通う少し年上の少年だ。友人というよりは顔見知りという程度だが、通学する時間帯が近いめかたまたまこうして会話を交わすことがあった。

「聞いた？　すごいね。私も一度ぐらいは帝都に行ってみたいな……ね、マルス。マルスは——」

下りてきた視線が少し不思議そうになった。

「——どうしたの、マルス？　変な顔してるよ。何か悩み事？」
『……？』

我に返ってマルスは主の顔を見上げた。

太陽は少しずつ南へ向かって上り始めている。

少年が去って今はセシリアと二人きりだ。

『変な顔？』

人間と違って彼らの表情の変化はそう大きくない。もちろんそれに気付く人間も稀にはいるし、彼女がその中の一人であることも知ってはいたが、それでもマルスは虚を突かれた思いだった。

『悩み事？　俺が、ですか？』

悩んでいるという自覚はなかった。

彼らは人間と比べると単純な世界に生きているため、悩むこと自体がそんなに多くない。しかし言われてみればなるほど、昨日とい一昨日といい、彼は悩んでいるようだった。

昨日と一昨日は主の悩みに対して。

そして今日は、昨晚セレスに言われたことで。

「マルスはどんなことを悩むの？　御飯がおいしくないとか？　あ、それともそろそろ恋人が欲しいなとか？」

セシリアは歩きながらそう言った。

『いえ、そんなことは』

「……？　違う？」

『違います、セシリア様』

「……」

セシリアは少しの間マルスの顔を見つめて、

「違うんだ？　じゃあ、うーん……」

『……』

言葉が通じていないことをマルスは理解している。主は彼の言葉を理解できない。それは当たり前のことだ。

しかしながら、だいたいの場合において意志は通じる。

マルスは空を見上げた。

朝の陽光の中に、彼の良く知る“戦友”の影がチラリと見える。

「あ」

セシリアは足を止め、やはり空を見上げて言った。

「セレス？　お散歩かな？」

『……そのとおりです、セシリア様』

とても人間の視力で見える距離ではない。

「手振ったら見えるかなあ」

おそらく空を舞う彼女からは簡単に見えるだろう。

セシリアが空に向かって大きく手を振ると、周りの人々が少し不思議そうな視線を彼女に向けた。

マルスは確認しなかったが、空からの反応はなかったようだ。

何事もなかったかのように再び歩き出す。

「……セレスっていつも忙しそうだね。でもそうだね。余所見したら危ないもんね。落ちちゃったらタイヘン」

マルスは何事か考えて。

『セシリア様は——』

言い切る前にセシリアの方が口を開いた。

「ねえマルス。今日の帰り、寄り道に付き合ってね」

『え、あ、はい。それはもちろん』

「香草を買っていくの。でもお料理じゃないよ。この前のお守りをティースさんがとても気に入ってくれたみたいだから、また作ってみようかなって」

『それは良い考えです。帝都までは長い旅になりますから』

「ねえマルス。喜んでくれると思う？」

『そう思います』

セシリアは本当に言葉が通じたように、嬉しそうに微笑んだ。
春風が吹いて。

やはり温かくなる。

そうこうしているうちに、

「おおい、セシルー」

「あ、コレット。シリウスくんも、おはよー」

主の学友たちがやってきた。

別にマルスたちだけではない。学園でも屋敷でも、彼女は基本的にいつも人に囲まれている。彼女が与えてくれる安らぎは、おそらく彼だけが感じているものではない。

『……』

学友たちが横に並んだのを見て、マルスは無言のまま一步後ろに下がった。

「……セレス。やはりセシリア様も俺の主人だ。俺にとって特別だ。シルヴァーナ様と同じように。考えたが、そう思う」

欠けた月明かりの一部を遮って、枝の上から視線が下りてくる。

セレスは一呼吸置いて特に驚いた様子もなく言った。

「そう思うことを咎める者はここにはいない。しかし難解な生き方だよ、マルス」

「それは構わない。俺が恐れるのはあの方の笑顔が永遠に曇ってしまふことだ」

マルスは月を見上げた。

「きっとあの月が厚い雲に覆われて二度と見られなくなってしまうような、そんな苦しさに違いない」

「ズルいな。そう例えられてしまえば、私もお前の気持ちを理解せざるを得ない」

セレスの視線も月を追う。

「……ここは一見平穏な場所だ。我々がここに来たのが三年前の夏。

それ以降、少なくともこの敷地内では危険なことは何一つ起きていない。しかし……」

セレスはゆっくりと視線を正面に向け、遠い地平線を見つめた。

「この平穏が永遠に続くことはないだろう。いずれこの場所にも、彼女の身にも危険が降りかかってくる」

「何故そう思う？」

「直感だよ。……少し冷えてきたな」

背の黒い翼がゆっくりと華奢な彼女の体を包み込む。

「そうか？ 俺は少し鈍感みたいだ」

「いや。私が敏感すぎるだけだよ」

確かに昨日までよりは少し冷えているようだ。

風が吹いてマルスは無意識に首を竦める。そうするほど寒かったわけではないが、どうやら彼女の言葉に影響されたいらしい。

セレスは言った。

「人間の持つ曖昧さは時に致命的となる。お前のそれも。だから難解だし、困難なのだ、マルス」

「……」

叢雲が月を覆った。

マルスは視線を地上へと降ろした。

少し考えて、

「危険というのはやはりシルヴァーナ様の――か？」

「とも限らない。ここの人間たちは危険な過去を背負ってきている者が多いのだろう」

「？ それも直感か？」

「直感だよ。お前と違って盗み聞きできるほど耳はよくないんだ」

そこまで言っていてセレスは言葉を止め、視線を横に向けると居住まいを正した。マルスはそれを不思議に思ったが、その理由はすぐにはわかった。

気配が彼らの元へと近付いてくる。日が変わってすぐのこの時間に動いている人間はそう多くない。

マルスも姿勢を正した。

近付いた影が言った。

「マルス、セレス」

「はい、我が主」

ざあつと春の風が吹いて夜に照らされた薄紅色の花弁が無数に舞い上がる。さざめく薄緑色の芝生の海の中、夜空を支配する月のごとき冷厳かつ清廉な――彼らの主、シルヴァーナイスラフェルは僅かに桜色に染まった姿でそこに現れた。

身が引き締まる。

セシリアに接するときとはまったく別の感覚。しかしよくよく思い出してみれば、それこそが正しい――“主”と接するときの正しい感覚だったような気がする。

（とすると、セシリア様はやはり“主”とは違うのだろうか……）
また少し混乱する。

しかし彼が深く思い悩む前にセレスが枝の上から問いかけた。

「主。また、ここを離れるのですか？」

シルヴァーナは無言のまま頷いた。

セレスが言った。

「お供します」

「必要ない。それより、またやってもらいたいことがある」

「はい。何なりと」

彼女はセシリアに貼り付いているマルスと違い、主のために何かと飛び回っている。時には何十キロも離れた土地に向かうこともあったが、聡明で冷静な彼女は顔色一つ変えずにそれをやってのけるのだ。

唯一の主。その主の言葉は絶対。それがどんなに難解なことであろうとも。

そんな彼女の姿こそが本来の彼らの姿である。

「マルス」

「はい」

「彼女の様子は？」

「特に変わりありません」

「そうか」

シルヴァーナはなんの感慨もなく頷いた。

実のところ、その主の真意がマルスにはまだわからない。出来る限り彼女のそばを離れぬように、と言われてはいるものの、それが護衛なのか監視なのかすら定かではない。主の真意について何一つ聞かされていないのだ。

全ては推測の類。

ただマルス自身は勝手に護衛であると思いこもうとしている。でなければ、彼女が“もう一人の主”たり得る要因が何一つなくなってしまうのだ。

（二人の主……自分の体は一つか……）

セレスのその言葉が胸に重石を残していた。

——有り得る。それは充分に有り得ることだ。

たとえば今は平穏なこの場所が危険に晒されたならば。

セレスはきつと迷うことなくこの主を守ろうとするだろう。

ならば自分は？ 自分はどうする？ どちらを守る？

きつとそのとき、自分はセレスの言うとおりに苦しみ迷うことになるだろう。

守れ、と明確に命令されていたならば、そういう主の真意が確認できていたならば、それが主の意志であり、それがもう一人の主を守ることに繋がるのだから問題ない。しかし今のところはそれが確認できない。主の“もう一人の主”に対する感情も、マルスにはまったく読めない。

判断のしようがない。

シルヴァーナがゆっくりと彼らに背を向ける。

そして、

「マルス」

「はい、我が主」

視線がゆつくりと振り返る。

マルスはその瞳に夜空に浮かんでいるはずの紅い月を見た。
息が詰まる。

ああ、やはり自分の主は――

そう思つて背筋が緊張で固まる。

あるいは、セレスがあればどこに月を奉拝するのも、この主の中に月を見ているからなのではないか、と、そんな風にさえ思える。

絶対なる月の主が、ゆつくりと口を開く。

そこから放たれた言葉はやはり、冷厳で、清廉で――

「……ダイエット、というのは、どういう意味なんだ？」

「お兄さん、お兄様、お兄ちゃん、兄上、兄者、兄貴――」

「……」

『……』

淡い栗色の髪の少女は二人――いや一人と一匹の視線を受けながら、鼻歌を交え、ユラユラと体で怪しげなリズムを取りながら何やら呪文のような言葉を口にしている。よほど機嫌が良いのか――彼女の機嫌が悪いことなどそうそうないのだが――搦り鉢を操る手も何やら浮き浮きしている。

部屋中に漂うのは爽やかな香草の香り。

マルスはくしゃみを堪えた。

「たまには、アルファさん、なんてのもいいと思わない？　ね、お兄ちゃん？」

「……何の話？」

抑揚のない声が流れる。

対するは、あどけない少女の明るい声。

「もちろん、今日のお出掛けの話。ちょっと雰囲気変えて呼んでみたらどうかなんて」

「ああ」

『……』

もちろんマルスには彼女――セシリアの意図はわからなかった。ベッドの上に座っているアルファの返答も完全に生返事だ。

そんな彼女を見つめて。

セシリアはやおら口を開くと、言った。

「四・十・点！」

マルスはちよつとビクツとしたが、どうやら劣等生のレッテルは彼ではなくアルファに向けられたものらしい。

「？」

不思議そうなアルファに対し、セシリアはまるで教師のような口調で言った。

「いくら妹でも女の子なのです。一緒にお出掛けするのですから、もっと楽しそうにして欲しいのです。そんなだからお兄ちゃんはお女の子より男の子にモテてしまうのですよ」

「……」

それとこれとはたぶん話が別だ、と、マルスは思った。

「ね、マルス。マルスもそう思うよね？ マルスは女の子に優しい男の子だもんね」

『はあ』

マルスはチラッとアルファの顔を見てから困って視線を逸らしてしまった。もちろんそんな問いかけに答えられるはずもないのだ。

「……」

アルファもまた何も答えられず――答える気がないのか――セシリアから視線を逸らし、そしてつい先ほど彼女からプレゼントされたばかりの花の刺繍が入ったお守り袋を見つめる。

セシリアはそれに気付くと、聞かれてもいないのに得意そうに解

説を始めた。

「あ、お兄ちゃんのはこの前のを改良してみたの。明日からお仕事でしょ？ シーラさんに色々教えてもらって、ちょっとした自信作なのです。兄を想う妹の気持ちが袋いっぱい詰まっているのです」
「……」

アルファは何も反応しなかったのだが、セシリアは勝手に続けた。
「あ、今作っているのはティースさんのだよ。お兄ちゃんも私もたくさんお世話になってるし、とにかく無事になって神様をお願いしておかなきゃ」

ようやく視線が動く。

「ティース？ 私は別に何も――」

「三・十・点！ お世話になった人には感謝のキモチを忘れちゃダメです！ そんなだからお兄ちゃんはいつまで経ってもおヒゲが生えてこないのです！」

「……」

そこに何の因果関係もないであろうことはいくらマルスでもわかる。

「あ、これじゃ香りが長く保たないかも……うーん、二ヶ月だもんね。何かいい方法ないのかなあ。シーラさんなら知ってるかな。知ってるよね、きっと。ね、マルス？」

『は、はあ』

もちろんマルスに答えられるはずもなく。

アルファはまた手元のお守りに視線を落とした。遮られた言葉の続きを言うつもりはないようだ。

そんな兄妹の会話――ほぼ一方的に喋っているだけだが――に、マルスはホッと一息を吐いて、そして決して心地よいとはいえない剥き出しの床の上に丸まった。

そうしながら、あるいは無用な心配なのかもしれない、と思った。
「ねえ、お兄ちゃん。ここ、そろそろ何か敷いた方がいいと思うよ。だってほら、マルスだって冷たそうだし……」

「でも邪魔——」

「二十点。そんなだからお兄ちゃんは私より男の子の視線を集めてしまうのですよ——くすん……」

「……」

どうあれ今の屋敷は平和そのものだし、しばらくはセレスの直感が現実になることもなさそうなのだ。

マルスはそんなことを思いつつ、東日を銀色の体に浴びながら少しウトウトし始めたのだった。

幕間『無秩序な景色』

「ネービスへ――」

そこは真昼にも関わらず薄暗い。しかもカビ臭い。屋内であることは確かだろう。頭上を覆う屋根の隙間らしきところから微かに陽光が漏れている。

しかし少なくとも一般に使われる住宅ではない。なにしろ窓がない。塞いだというわけでもなさそうでどうやら最初から存在していないのだから、当然人が快適に住むことを前提として作られた場所ではない。

あるいは死刑囚などの凶悪犯罪者を閉じこめておく特殊な牢獄だったのだろうか。

しかし……何にせよ。

そこは今現在、本来の目的としては使用されていない、廃屋のようなものであり、当然そこにいるのも死刑囚などではなかった。

――それよりも、凶悪な者たちだ。

「行ってこようかと思っています」

青年だった。静かで紳士的、しかしどこか得体の知れなさを感じさせる青年の声。その場の雰囲気になぐわれない、まるでちよつとそこまで買い物に行ってくるかのような、何気ない言葉。

「構いませんよね？」

薄暗闇の中、壁や天井、その辺に散らばる瓦礫に反響して微かに不気味さを増したその声は、もちろん独り言などではない。

そこには青年の他、さらに複数の気配があった。

「んー……これ、むつつかしいなあ……ああ、もうやんなっちゃうナー」

聞こえたのはまるで子供のような言動、だがその姿を見れば、それが充分に成長した女性のものであることがわかる。

女は手にパズルのようなオモチャを持っていた。

「ねえねえリユーちゃん。これ、やってー」

「……」

女性の声が向けられた先に、寡黙そうな男の気配。

「ねえ、リユーちゃんってばあ——」

低く精悍な男の声がした。

「ネービスへ？ どういった風の吹き回しだ。貴様のことだ、あの男——クロイライナを助けに行くというわけではないのだろうか」

「ええ、リユーゼットさん。もちろん、そんな気はこれっぽっちもありません」

青年は答える。薄い氷のような笑みを口元に貼り付かせ、ゆつくりと壁から離れて歩み出す。

そしてまるで詩をそらんじるような口調で続けた。

「それにそもそも助けなど必要もないでしょう。彼のことだ。今回のことぐらい想定範囲内で、もちろん集めた金を持ってネービスから脱出する方法——プラスアルファぐらいのことは考えてあるに違いない。……そうですね、ニューバルド」

——ちりん。

微かに、澄んだ音がした。

ニューバルド——“報恩”と“復讐”を司る古の女神の名で呼ばれた女性——マリアヴェルⅡフューレⅡソーヴレーは短く口を開いた。

「そうだ、ね」

途端、換気口のない部屋に冷風が満ちる——そんな錯覚に襲われる。悪寒とは違う。威圧によってムリやり引きずり出されるものではなく、あまりの神々しさに自ら自主的に頭を垂れそうになる、そんな感覚。

彼女は神秘的だった。大陸でも珍しい振り袖型の装いと、九つに分けた髪にくくりつけられた鈴の音もまた、その雰囲気と輪を掛ける。

——ちりん。

澄んだ音が薄汚れた瓦礫の山に反響する。
マリアヴェルは続けて言った。

「どうしたの？ 楽しそうだね、ザヴィア」

そんな彼女を見つめ、ザヴィアⅡフェレイラⅡレスターの口元がさらに歪んでいた。

「ええ……」

白いターバンに添えた左腕が目線を隠す。その手の甲には涙型の入れ墨が三つ。黙っていたら優しげな好青年だが、その笑顔は確実に歪んでいた。

彼は夢想してしまったのだ。

目の前にいる神々しい彼女の未来を。彼女の道の先にある破滅を。そのとき訪れるであろう極上の愉悦を。

「……ニューバルド。あなたという女性は、いつでもこの私を幸せにしてくれます」

「そう」

見つめるマリアヴェルの瞳は確実にその内なる欲望を見抜いている。しかし彼女はそれを咎めることはない。彼女にとってそれは些細なことであり、興味もないことなのだ。

と、そこへ。

さっきまでオモチャで遊んでいた女性が口を開いた。

「クロちゃん帰ってくるの？」

「そうみたいだよ、ネイル」

「そっかーじゃーあのマズくて固いパンともお別れだねー」

ネイルⅡメドラⅡクルティウスはやはり子供のようにはしゃいでピョンと立ち上がった。裾のギザギザになったスカートがふわりと揺れて、それに合わせるように外側に跳ねたクセのあるロングヘアが踊る。

そして不思議そうにザヴィアを見つめた。

「あれ？ ザッピール、どっか行くの？」

ザヴィアは苦笑して、

「ええ。今さっきまで、その話をしていたのですがね」

「ほえ？」

「無駄だ、ザヴィア。その阿呆が聞いているはずもない」

「あゝゝ！ リューちゃん、また私のこと阿呆って言ったゝゝゝ！」

「阿呆を阿呆と言ったまでだ」

リューゼットⅡカサードウギラスは戦闘時と変わらぬ騎士のような甲冑に身を包み、瓦礫に腰を下ろして鋭い視線を正面に向けている。隙のない、威圧感漂うその姿は、並の人間ならば出会っただけで腰を抜かしてしまうだろう。しかし粗暴な雰囲気は微塵もなく、そこには隠しようもない知性の色も浮かんでいる。

「阿呆！ リューちゃんも阿呆！」

——タナトス。人々は彼らのことをそう呼ぶ。

神出鬼没、残虐非道。ただ獐猛な快楽殺人集団で、金品には目もくれずに殺戮を繰り返したかと思えば、襲った行商人やその家族には目もくれず、子供のオモチャを二、三個強奪していくだけだったりと、彼らがこの大陸で起こす事件はあまりにも無秩序で予測できない。中には彼らに命を救われたと——真偽のほどはわからないが——主張する者もいる。それほどに彼らの正体は一般の人々にとってあやふやなものだった。

また彼らは強大な力の持ち主ではあるものの規模が小さく、国家レベルでは脅威と認識されていないため本腰を入れて討伐しようとする国もない。稀に正義感に燃える者や被害にあった者たちが彼らを討伐しようとしても、ことごとく失敗に終わっていた。

そんなタナトスの中核を為すのが、今、ここにいる四人に、クロイライナという青年を含めた五人、なのである。

「……おや」

微かな気配。

ザヴィアが視線を横に動かした。

「誰か来たようですね」

空気が微かに動く。

「ザッピーも阿呆！　ヌーボーも阿——」
ゴン！！

「いった~~~~っ！！」

「少し黙れ」

立ち上がったリューゼットがゆっくりと音もなく歩き出す。

ちらり、と、マリアヴェルの方を窺った。

ネイル以外は、近付いてくる気配に気付いているようだった。

「……」

気配は二つ。ここは人里から遠く離れた廃屋だ。何の目的もなく人が訪れるような場所ではなく、迷子にしては足取りがしっかりしすぎている。足音そのものに闘気がある。

人間の雇った刺客——デビルバスターか。

——いや。

リューゼットが入り口の前に立つ。

気配が無造作に近付いてくる。

緊張が高まる。

と。

ゴォッ……

「！」

突如、辺りが明るくなった。

オレンジ色に。

——敵の攻撃？

いや、違う。

「バルちゃん——」

「なっ……」

“味方”の攻撃だった。

ゆらりと立ち上がったネイル。後頭部を押さえる彼女の背後に、大柄な炎の狩人がその姿を現していた。

「リューちゃんにもたんこぶ作ってあげてっ！　私とお揃いのっ！」

「ネイル、貴様——！」

リユーゼットが振り返る間もなく、炎の狩人は——明らかにたんこぶ程度では済まないであろう——幾本もの炎の矢を放った。

ザヴィアはいつの間にか軌道上から横に避けている。

マリアヴェルは少々驚いたような顔でそれを見ていた。

轟音。

鋼鉄で出来た扉が外側に吹き飛んだ。

「あはははは。リユーちゃん、吹っ飛んじやった——あれ？ あれ？ 避けた？」

「貴様……」

リユーゼットは避けていた。が、それでも僅かに爆風を浴びたらしく、髪のが少し焦げ、頬には黒い炭と微かに血が滲んでいる。

「なあんだあ、避けたのかあ……つまんないの」

「……」

拗ねるネイルの姿を映したリユーゼットの瞳には明らかな殺意が浮かんでいたが、残念ながら彼の希望は果たされなかった。

「——ああ、やはりそうだ」

声。

マリアヴェル、ザヴィア、リユーゼット、ネイル——そのどれでもない。四人の視線を集めた者は建物の外にいた。

「タナトスの——方々ですね」

逆光を浴びて、二つの影が浮かぶ。外まで及んだネイルの“暴挙”の影響を受けた様子はなく、平然と立つ二つの者。

ただ者ではない——とわざわざ言う必要もないだろう。

男と女だった。

片方は漆黒の正装に漆黒のマント、漆黒の髪、漆黒の瞳——黒ずくめの男。物腰は高貴な者のそれで、一礼するとまるでそこが宮廷のパーティホールであるかのような錯覚に襲われそうになる。

耳は尖っている。

人間ではない。

人魔だ。

一方。

女の方は銀髪で男と対照的な白色の正装。白色のマント。美しくどこか儚げな少女……いや、女性というべきか。

こちらは耳が尖っていない。

人間か。

あるいは人に化けているだけか。

「ほえ？」

ネイルは惚けたように闖入者を見つめていた。彼女は誰かが近付いていたことすら知らなかった（聞いてなかった）らしい。

「おや、久々に客人が来たかと思ったら、まるでオセロのような方々ですね」

ザヴィアが楽しそうに呟く。

「……」

リューゼットは無言で目を細めた。

そんなタナトスの面々を見回し、黒い男が口を開く。

「まずは誤解のなきよう。我々は敵ではありません。今日はあなた方にお話があつて参上いたしました」

隣の白い女は黙って静かに微笑んでいる。

「話？ ……面白そうですね、ニューバルド」

ザヴィアがそう言つて振り返る。

「……」

マリアヴェルは最初の位置から微動だにせず、二人の侵入者をただ見つめていた。

——ちりん。

「あなたがタナトスのリーダー、ニューバルド様ですね」

黒い男が畏まる。

白い女も畏まる。

「お噂はかねがね。途方もない実力の持ち主であることも、もちろん——」

「サーヴァインⅡジーンⅡベルリオーズ」

「……」

マリアヴェルの言葉に、全員の視線が集中した。

「隣の子はフレア。フレアⅡベルリオーズだね」

黒い男は少し虚を突かれた顔をしたが、すぐに元に戻って、

「ご存じでしたか」

「ベルリオーズというところ——」

ザヴィアが少し意外そうな顔でマリアヴェルに問いかける。

「こちらの世界では最大の人魔の組織“ベルリオーズ”のこと、でしようね」

「そう。この二人はそのベルリオーズの王子と王女。そうだよ、ね？」

「……いかにも、私の父はベルリオーズの王です」

やはり礼儀正しく、サーヴァインは改めて畏まる。

「私はその長男で、闇の王魔ジーン族の血を引く者、サーヴァインⅡベルリオーズ。こちらは妹の——」

「フレア、と申します」

静々と女は礼をした。やはりどこか儂げで、とてつもなく大雑把な括り方をすればマリアヴェルと雰囲気似てなくもない。

「ほう」

ザヴィアは薄い笑みで二人を見やった。

「ベルリオーズの頭は王魔でしたか。なるほど、人間たちが戦々恐々とするわけですね」

「それで？」

問いかけたのはリユーゼットだった。

「そのベルリオーズの者が何の用だ？」

サーヴァインがすぐに答える。

「ええ、それはとても簡単な話です。実は——」

その言葉を言い終わる前に。

「バツカだなあ、リユーちゃん」

浮き浮きした表情で、ネイルが言った。

「遊びに來たに決まってるじゃない。ねえ？」

ゆらりと。

ネイルの背後で陽炎が揺れる。

「……」

無言で顎を動かしたサーヴァインと、ネイルの視線が重なった。
ネイルは言った。

「おーま、って、こないだの風の子と同じだね。もっかい、試してみたいと思ってたんだ。ねえ、ヌーボー。やってもいいよね？」
向いた視線の先。どうやらマリアヴェルに向けて言ったようだ。

マリアヴェルは答えた。

「好きにしたらいいよ」

サーヴァインが少しだけ驚いた顔をする。

「ニューバルド様。我々は別に戦いに來たわけではなく——」

「話は聞くよ、サーヴァインさん」

「ルルー」

会話を続けている間にも、辺りに急速に魔力が満ちていく。

炎の天使が産まれる。

「でも、私は別にこの人たちを支配しているわけじゃないから、ね」
ザヴィアは苦笑してその状況を見つめている。

リューゼットは腕を組んだまま微動だにしない。

マリアヴェルは——微笑んだまま。

建物が震える。

地の底から震えが迫る。

サーヴァインが眉をひそめた。

ようやく彼ら——タナトスが“通常の組織ではない”ことを理解したようだ。

漆黒のマントが熱風に揺れる。

「では……ニューバルド様。私が自らの身を守り、仮に彼女の身を害したとしても、あなたは私に敵意を抱かない……そう判断しても

よいのでしょうか」

マリアヴェルは絹糸のような声で答えた。

「さあ」

「……わかりました」

仕方ない、といった様子でサーヴァインは隣を見た。

「フレア。私の後ろに」

「はい。お兄様」

白い女が黒い男の後ろに隠れる。

途端。

男の雰囲気が変わる。

満ちる。いや、溢れ出す。

それは強大な――いや、王魔であることを考えればむしろ当然と
いふべきか。強大な、あまりにも強大な魔力。

「……」

ザヴィアの顔から笑みが消えた。

リューゼットの目つきが厳しくなる。

マリアヴェルは――やはり微笑んでいた。

「いけ～～ルル～～～～っ!!」

炎の天使が手にした球体をサーヴァインに向けた。

そしてその手から球体が波動となって放たれ――いや。

放たれようとしたその刹那。

「!」

サーヴァインの背後から白い影が飛んだ。

一瞬。

天使が準備を整え、そして放つまでのその一瞬。

その瞬間、ネイルは完全に無防備だった。

それはほんの僅かな隙間だ。

にも関わらず。

白い衣の女は神速で翔んで間合いに踏み込んだ。

「兄様を傷付けようとする人は、許しません――」

「――」

ネイルが目を見開く。

フレアの体が懐に入った。その手には接近戦に特化した短いスピ
アが握られている。

「っ……」

ネイルが何事が咄くと、炎の天使が揺らいで、炎の騎士へと姿を
変える。――変えようとする。が、遅い。とても間に合わない。フ
レアの一撃の方が圧倒的に速い。

一閃。

しかし――

ネイルを切り裂こうとした斬撃に対し、ぼんやりとした炎の騎士
の中から突如、もう一人の騎士が姿を現した。

「……リユーちゃん!!」

「……」

火花と、衝撃。

いつの間にかネイルのそばに移動していたリユーゼットが、その
一撃を防ぐ。

「……」

フレアが驚いた顔をする。その細い眉に微かな憂いを浮かべ――
すぐさま標的をリユーゼットへと変えた。

一方のリユーゼットは、自らの腕を襲った衝撃に驚愕するととも
に、

――好敵手。

咄嗟にそう判断し、その口元に愉悦の笑みを浮かべる。

「下がっている、ネイル」

短くそう言い放って剣を払う。

ぎいんっ!!

「っ……」

フレアとの間合いが広がった。

仕切り直し。その間は一秒の半分ほどだろうか。

二人が動く。

そして二撃目――は、なかった。

「フレア！　そこまでだ！」

「！」

ハッとして、白い衣の女が飛び退く。

――速い。

リューゼットは一瞬躊躇したが、結局追わなかった。

「申し訳ありません、兄様……つい……」

サーヴァインの後ろまで下がったフレアが申し訳なさそうに視線を落とす。

「いや。……気が済みましたか？」

サーヴァインはそう言って視線をネイルに言葉を向けた。

「……むゝゝ」

不満そうだった。黙っていればもう一撃、放っていたかもしれない。

が、それを制止したのは、それまで黙ってそのやり取りを見守っていたザヴィアだった。

「もういいでしょう、ネイルさん。私はこの方々のお話に興味があるのです」

ザヴィアがそう言うと、ネイルは渋々――口をいっぱいに尖らせて、

「……つまんないのっ」

奥の方に歩いていくと背中を向けてペタンと座り込んでしまった。ガサゴソと辺りを探って先ほどのオモチャを見つけだすと、不満をぶつけるようにガチャガチャと乱暴に遊び始める。

リューゼットがそんなネイルを一瞥して、小さく息を吐く。

手にしていた剣が光の形になって四散した。

「……」

その右手に残った痺れ。

儚げで細い体軀からは想像もできない身体能力だった。

……好敵手ではある。そんな強い敵と戦うことは彼の生き甲斐でもあったが、それはあくまで一対一のという状況が前提だ。この場でその望みは叶いそうにない。

だから、体の奥底に沸いていた熱はすぐに静まった。

ザヴィアが言った。

「それで？ お話というのはどのようなことでしょうか？」

「……」

サーヴァインはネイルをチラリと見て、それからマリアヴェル、最後にザヴィアへと視線を移すと、

「簡単なことです。あなた方には、我々の仲間になってもらいたい。その交渉をするために参上いたしました」

と、言った。

「……確かに。簡単なことですな」

予測していたのか、ザヴィアはクスクスと笑った。

「簡単なことですが……賢い提案とはお世辞にも言えませんね。いえ、失礼を承知の上で言わせてもらえば、とてつもなく馬鹿馬鹿しい提案だ」

サーヴァインは怯むことなく生真面目に答えた。

「もちろんそれなりの見返りはご用意いたします。なんでも、というわけではありませんが、あなた方の望みも大抵は叶えられると思います」

それを受けて、ザヴィアはますます愉快そうだ。

「だ、そうですよ、リューゼットさん、ネイルさん。お願いを聞いてくれるそうですから試しに言ってみたらどうですか？」

刹那。

「その二人と、リューちゃんを丸焼きにしたい……！」

背を向けたまま、ネイルが即答する。

リューゼットはそんな彼女を見下したように一瞥すると、腕を組んで目を閉じた。

「そうだな。その後ろの女――その女と、どちらかが死ぬまで一対

一で闘わせてもらえるなら考えないでもない。もちろん“前払い”で、だ」

「……」

サーヴァインが眉をひそめるのがわかった。からかっているようにも見えるが、おそらくどちらも本気だ。

「ね、馬鹿馬鹿しいでしょう？」

ザヴィアがクククと喉を鳴らして笑う。そしてチラリと一番奥に視線を向けた。

「ニューバルド。あなたはどうです？」

「ない、よ」

——ちりん。

マリアヴェルは至極簡潔に答えた。

「あなた方に叶えられる私の望みは、一つもない。今も、この先も、ずっと、ね」

「あなたはネービスの——ディバーナ・ロウとかいうデビルバスターの集団を敵対視していると聞きましたが……我々が代わりにそれを徹底的に、二度と復活できないように叩き潰してさしあげる……と言ったら、どうでしょう？ それでもいけませんか？」

サーヴァインがそう言うと、マリアヴェルは少し意外そうな顔をした。

どこからそんな情報を手に入れたのか。——いや、この大陸の各地に勢力を持つ組織だ。その程度の情報収集能力はあっておかしくないだろう。

「ふふ」

マリアヴェルは喉の奥で琴のような美しい音色を奏でると、それからゆっくりと視線を持ち上げた。

ザヴィアが目を細める。

ネイルの手の動きが止まる。

リューゼットのこめかみがピクリと動いた。

彼ら三人が同時に動きを見せたのは、決して偶然ではない。

——彼らのごとき無法者でさえ——従う、従わざるを得ない——それは。

「生きてここを出たいのなら——ね……」

「！」

その瞬間、サーヴァインは世界が全ての動きを止めたような錯覚に襲われていた。

——ちりん。

——ちりん。

————ちりん。

微かな鈴の音が何度も耳の奥で反響する。

切り取られて網膜に焼き付いた視界の中、ただ一人、その中心にいる神のごとき女性の視線だけがゆっくりと動き、それが網膜を突き破り、脳を中心を焼いた。

脳髓を満たす、痺れ。

「言わない方がいい。言わない方がいいと思う、よ。ましてや、それを実行しようだなんて——ふふ……」

その言葉に戦意はない。

ないように見える。

今は。

しかし。

「——」

サーヴァインは絶句した。

彼は王魔。そして目の前にいる女性は——情報が間違いでなければ——将魔である。

“王”と“将”の差は“上位”と“下位”のそれより遙かに大きい。“王”は戦う技術に長けていないと言われる場合も多く、それはある意味真実でもあったが、彼は違う。

戦うことに長けた、本当の意味での王魔である。

だから通常、考えられない。とても考えにくいことだ。

将魔である彼女の視線だけで、王魔である彼の背筋が緊張に震え、

冷や汗が浮かぶなどということは――。

しかし。

サーヴァインはすぐに認識する。

それは現実だ。

ザヴィア、リューゼット、ネイル――視界に在る彼らと戦ったところで、まともであれば決して負けないだろうという自信が彼にはあった。二人、いや、三人を同時にしたとしてもそれは同じだろう、と思っている。だからこそ彼は堂々とたった二人でこの場にやってくる事ができたのだ。

そしてマリアヴェルに対しても、つい先ほどまでそうだと思っていた。

しかし。

認識は改められた。

彼女と闘ったならば――あるいは一対一で負けることも――あるかもしれない。

それは彼が矜持を持たないからではなく、聡明な人物であったが故の正常な分析だ。

それほどに――彼女の身に纏うものは“異質”なのだ。

「サーヴァインさん」

その“異質”を表情に纏ったまま、マリアヴェルは続けた。

「それはとても無駄なこと。ただ気付いてくれるだけでいい。それだけで誰も死ななくて済むし、誰も悲しまなくて済む」

マリアヴェルの声はどこか悲しげで、しかし優しく微笑んだまま。まるで声と表情が別の生き物のようだ。

――おそらく、彼女は異端なのだ。下位魔、上位魔、そして将魔――そんな括りを与えることが間違いなのだ。

それはその強さだけでなく、性質も然り。強さは同じ境地であったとしても、決して――相容れない。

「……残念です、ニユーバルド様。今回のお話は諦めます」

サーヴァインは礼儀正しくそう言った。

周りから見れば呆気ないように思えるほどだが、決して相容れない――これ以上が無駄であることを悟った今、彼にしてみれば当然の決断だった。

「ですが」

そう言って毅然と、まっすぐに、墮天の女神を射抜く。

「我々は近いうちにネービス領にも進出いたします。その邪魔だけは決してなさいませんよう」

「邪魔？」

「あなたのおっしゃる“無駄なこと”が起らないことを祈っております。……では」

そうしてサーヴァインとフレアは去っていった。

ほんの五分ほどの交渉だった。

からん、と、瓦礫が音を立てる。

開けっ放しになった入り口から風が吹き込んで粉塵を空気中にはらまいた。

ザヴィアは貼り付いた笑みで入り口を見つめたまま、リユーゼットは腕を組んだまま微動だにせず。そしてネイルは思い出したように再びオモチャを弄りだした。

一瞬の沈黙。

「――けほ、けほっ」

マリアヴェルが小さく咳き込んで、全員の視線が彼女に集まった。袖で口元を覆ったマリアヴェルは少し困ったように辺りを見て、
「ん。ああ……風が入ってくるからかな。すごい埃。ザヴィア。あなたの力でどうにかならない？」

まるで来客などなかったかのような、平然とした振る舞いだった。おそらく。真実、彼女にとって、ベルリオーズの来訪など気に留める必要のない出来事だったのだろう。

ザヴィアはそんな彼女を見て、あらためて薄い笑みを浮かべる。

「残念ですが、そういう使い方はしたことがないですね」

「そう。それじゃあ仕方ない、ね。じゃあ……そろそろクロイライナとの待ち合わせ場所に移動しようか。……ザヴィア。あなたはネービスへ行くんだったよ、ね？」

「ええ。そのつもりです」

「リユーゼット。ネイル。あなた方は？」

「私はお前についていく。特に用もない」

「んじゃ私も……ん……むつかしいよおお……」

ガチャガチャ、ガチャガチャ。

「そう」

マリアヴェルは微笑んで頷く。

そして、

「あ」

と、ちよつとだけ驚いたような顔をする。

途端。

くるるるる……という奇妙な音が鳴った。

「？」

リユーゼットとザヴィアが不思議な顔で見ると、マリアヴェルはほんの少しだけ頬を染め、視線を泳がせて小さな声で呟いた。

「……お腹減った、ね」

「お腹減った……！」

ポーン、と、ネイルがオモチャを放り投げる。

「固いパンも飽きた……！」

マリアヴェルはゆっくりと頷いて、

「ふふ、私も飽きたよ。……そうだ、ザヴィア。出掛ける前にみんなで食事でも行ってこようか」

ザヴィアは一瞬考えて、

「ネイルさんが恥ずかしい真似をしないと約束してくれるのであれば」

「え、私？ ザッピー、恥ずかしい真似って何のこと？」

「行儀悪く食い散らかした挙げ句、下に落ちた肉を拾って食べたりする――あなたの食事マナー全般のことですよ、ネイルさん」

「マリアヴェルは真顔で頷いて、

「ああ。それは良くないよ、ネイル。お腹壊すから、ね」

「大丈夫だろう。犬猫が喰って大丈夫なものを、こいつが喰って腹を壊すはずがない」

「ん？ リューちゃん、それって、どういう意味なの？」

「要するに貴様が犬畜生と一緒にということだ」

「犬？ なあんだ、そっかあ」

何故かネイルは機嫌をよくしたようだ。

「マリアヴェルもザヴィアも彼女にその言葉の意味を教えてやるつもりはないらしい。」

「五月だ、ね」

外に出ると生い茂った枝の隙間から眩しい陽光が射し込んでくる。

「デビルバスター試験……か」

「風の噂では、ディバーナ・ロウからも受験するそうですよ」
後ろからついてきたザヴィアが言った。

「ティースさんも、受けるかもしれませんね」

「マリアヴェルは振り返って、

「受かる、かな？」

「さあ、どうでしょうか」

後方で爆音が上がる。

「どうやらネイルとリューゼットがまた諍いを起こしているらしい。」

「そう」

「受かって欲しいですか？」

「どちらでも」

小鳥の囀りが耳に心地よい。

「そうですね。どちらでも――」

ザヴィアの笑みが悪辣に歪む。

「どちらでも、あなたにとっては同じだ。デビルバスターであろう

となかろうと。ディバーナ・ロウである以上、全て同じ。ただ――殺すときに涙を流すか流さないか。それだけの違い。でしょう？」

「ふふ……涙は出ないよ。出し方がわからないから、ね」

「だから、あなたは彼らを殺すのですか？」

「さあ」

――ちりん。

澄んだ音。

水色の小鳥が飛んできて――

「あ」

肩に止まる。

マリアヴェルは小さく微笑んで、腰の袋から細かくちぎったパンくずを手の平に乗せ、差し出した。

「平和だね。ザヴィア」

「平和、ですか。……あなたの口からそんな言葉が出てくるのが、不思議です。あなたの感覚にはさすがの私もついていきません、ニユーバルド」

ザヴィアは未だ爆音の止まない後方の“戦場”を見やり――それから手にした管楽器を口にする。

「ふふ……そう、かな？」

――ちりん。

鈴の音に合わせて、不思議な音色が流れ出した。ちちちちち、と、小鳥が飛んだ。

爆音。

長閑な陽気。

剣戟の音。

微笑む女神と、悪辣な奏者。

――それは、とてつもなく無秩序な景色だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4042w/>

デビルバスター日記

2011年10月12日00時30分発行